千葉県教育振興財団調査報告第685集

千葉ニュータウン
埋蔵文化財調査報告書 XXVI

－印西市角田台遺跡（旧石器・縄文時代編）－

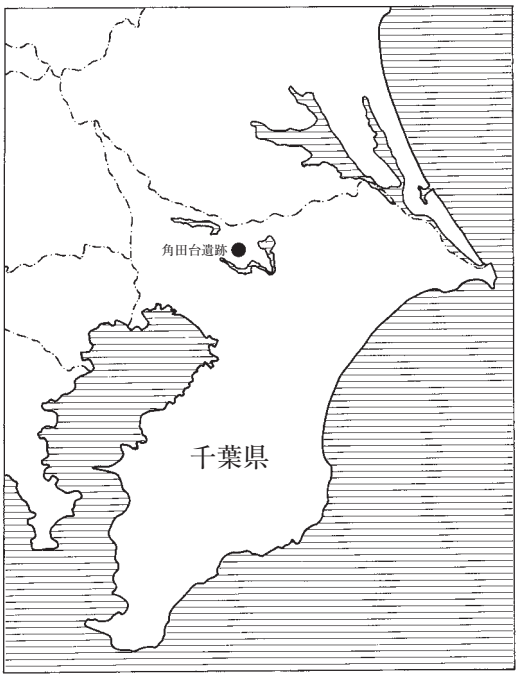
平成24年12月

独立行政法人　都 市 再 生 機 構

公益財団法人　千葉県教育振興財団

千葉ニュータウン
埋蔵文化財調査報告書 XXVI

―印西市角田台遺跡（旧石器・縄文時代編）―



第１地点出土（第Ⅲ層）石器群

第11地点出土（第Ⅶ～Ⅸ層）石器群

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第685集として、独立行政法人都市再生機構の千葉北部地区新住宅市街地開発事業関連に伴って実施した印西市（旧本埜村）角田台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、既に弥生時代以降を千葉県教育振興財団調査報告第530集として刊行しているところですが、その続編として旧石器時代及び縄文時代の成果を所収しました。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年12月

公益財団法人　千葉県教育振興財団

理　事　長　渡　邉　　清　秋

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による千葉北部地区新市街地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県印西市に所在する角田台遺跡（遺跡コードCN708）である。

3　発掘から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構（住宅・都市整備公団、さらに都市基盤整備公団から名称変更）の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団（旧財団法人千葉県文化財センター）が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は古内茂が担当した。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部及び印西市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第１章第１図　国土地理院発行　１/25,000地形図「小林」（NI-54-19-14-1）

第２章第２図　千葉県企業庁千葉ニュータウン事業部（当時）１/1,000千葉ニュータウン平面図を縮尺して使用。

8　周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年３月に撮影したものを使用した。

9　本書で使用した座標値は、旧日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

本 文 目 次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の経緯と経過…… 1
　第２節　遺跡の位置と環境…… 2
第２章　調査の方法と概要…… 4
　第１節　調査の方法…… 4
　第２節　調査の概要…… 4
　第３節　基本層序…… 4
第３章　旧石器時代…… 6
　第１節　概要…… 6
　第２節　第１地点…… 6
　第３節　第２地点…… 126
　第４節　第３地点…… 133
　第５節　第４地点…… 134
　第６節　第５地点…… 136
　第７節　第６地点…… 138
　第８節　第７地点…… 140
　第９節　第８地点…… 148
　第10節　第９地点…… 151
　第11節　第10地点…… 208
　第12節　第11地点…… 217
　第13節　第12地点…… 259
　第14節　第13地点…… 266
　第15節　第14地点…… 274
　第16節　第15地点…… 293
　第17節　第16地点…… 297
　第18節　第17地点…… 300
　第19節　第18地点…… 303
　第20節　第19地点…… 305
　第21節　第20地点…… 307
　第22節　第21地点…… 309
　第23節　第22地点…… 311
　第24節　第23地点…… 312
　第25節　単独出土の石器群…… 314
　第26節　縄文草創期の石器群…… 318
　第27節　小結…… 319

第４章　縄文時代…… 332
第１節　概要…… 332
第２節　遺構…… 332
１　住居跡…… 332
２　炉穴・焼土遺構…… 342
３　陥穴…… 350
４　土抗…… 376
５　ピット群…… 378
第３節　遺構外出土の遺物…… 382
１　土器…… 382
２　土製品…… 407
３　石器…… 407
第４節　小結…… 423
第５章　結語…… 429

挿 図 目 次

第１図　周辺の地形と遺跡
第２図　遺跡地形図
第３図　基本土層柱状図
第４図　石器集中地点分布図
第５図　第１－１地点石器分布図
第６図　第１－１地点出土石器
第７図　第１－２地点石器分布図・出土石器
第８－１図　第１－３Ａ・３Ｂ・４・５地点出土石器分布図
第８－２図　第１－３Ａ・３Ｂ・４・５地点出土石器分布図
第９図　第１－３Ａ地点出土石器（１）
第10図　第１－３Ａ地点出土石器（２）
第11図　第１－３Ｂ地点出土石器
第12図　第１－４地点出土石器（１）
第13図　第１－４地点出土石器（２）
第14図　第１－４地点出土石器（３）
第15図　第１－４地点出土石器（４）
第16図　第１－４地点出土石器（５）
第17図　第１－５地点出土石器（１）
第18図　第１－５地点出土石器（２）
第19図　第１－５地点出土石器（３）
第20図　第１－５地点出土石器（４）
第21－１図　第１－６Ａ・６Ｂ・７Ａ・８地点出土石器分布図
第21－２図　第１－６Ａ・６Ｂ・７Ａ・８地点出土石器分布図
第22図　第１－６Ａ地点出土石器（１）
第23図　第１－６Ａ地点出土石器（２）
第24図　第１－６Ａ地点出土石器（３）
第25図　第１－６Ｂ地点出土石器分布図
第26図　第１－６Ｂ地点出土石器（１）
第27図　第１－６Ｂ地点出土石器（２）
第28図　第１－７Ａ地点出土石器（１）
第29図　第１－７Ａ地点出土石器（２）
第30図　第１－７Ｂ地点出土石器分布図
第31図　第１－７Ｂ地点出土石器（１）
第32図　第１－７Ｂ地点出土石器（２）
第33図　第１－８地点出土石器（１）
第34図　第１－８地点出土石器（２）
第35図　第１－８地点出土石器（３）
第36図　第１－９Ａ・９Ｂ・10地点出土石器分布

図
第37図　第１－９Ａ地点出土石器（１）
第38図　第１－９Ａ地点出土石器（２）
第39図　第１－９Ｂ地点出土石器
第40図　第１－10地点出土石器
第41－１図　第１－11Ａ・11Ｂ・12・14Ａ・14Ｂ・14Ｃ・16地点出土石器分布図
第41－２図　第１－11Ａ・11Ｂ・12・14Ａ・14Ｂ・14Ｃ・16地点出土石器分布図
第42図　第１－11Ａ地点出土石器（１）
第43図　第１－11Ａ地点出土石器（２）
第44図　第１－11Ｂ地点出土石器（１）
第45図　第１－11Ｂ地点出土石器（２）
第46図　第１－11Ｂ地点出土石器（３）
第47図　第１－11Ｂ地点出土石器（４）
第48図　第１－11Ｂ地点出土石器（５）
第49図　第１－12地点出土石器（１）
第50図　第１－12地点出土石器（２）
第51図　第１－13地点出土石器分布図
第52図　第１－13地点出土石器
第53図　第１－14Ａ地点出土石器（１）
第54図　第１－14Ａ地点出土石器（２）
第55図　第１－14Ａ地点出土石器（３）
第56図　第１－14Ａ地点出土石器（４）
第57図　第１－14Ａ地点出土石器（５）
第58図　第１－14Ｂ地点出土石器（１）
第59図　第１－14Ｂ地点出土石器（２）
第60図　第１－14Ｂ地点出土石器（３）
第61図　第１－14Ｂ地点出土石器（４）
第62図　第１－14Ｂ地点出土石器（５）
第63図　第１－14Ｂ地点出土石器（６）
第64図　第１－14Ｂ地点出土石器（７）
第65図　第１－14Ｂ地点出土石器（８）
第66図　第１－14Ｃ地点出土石器（１）
第67図　第１－14Ｃ地点出土石器（２）
第68図　第１－14Ｄ地点出土石器分布図
第69図　第１－14Ｄ地点出土石器（１）
第70図　第１－14Ｄ地点出土石器（２）
第71図　第１－15地点出土石器分布図
第72図　第１－15地点出土石器（１）
第73図　第１－15地点出土石器（２）
第74図　第１－16地点出土石器
第75図　第１－17地点出土石器分布図
第76図　第１－17地点出土石器
第77図　第２－１地点出土石器分布図
第78図　第２－１地点出土石器
第79図　第２－２地点出土石器分布図
第80図　第２－２地点出土石器
第81図　第４地点出土石器分布図
第82図　第４地点出土石器
第83図　第５地点出土石器分布図
第84図　第５地点出土石器
第85図　第６地点出土石器分布図
第86図　第６地点出土石器
第87図　第７－１～３地点出土石器分布図
第88図　第７－１地点出土石器
第89図　第７－２地点出土石器
第90図　第７－３地点出土石器
第91図　第８地点出土石器分布図
第92図　第８地点出土石器
第93図　第９－１地点出土石器分布図
第94図　第９－１地点出土石器
第95図　第９－２・６地点出土石器分布図
第96図　第９－２地点出土石器（１）
第97図　第９－２地点出土石器（２）
第98図　第９－３・４Ｂ地点出土石器分布図
第99図　第９－３地点出土石器
第100図　第９－４Ａ地点出土石器分布図
第101図　第９－４Ａ地点出土石器
第102図　第９－４Ｂ地点出土石器（１）
第103図　第９－４Ｂ地点出土石器（２）
第104図　第９－４Ｂ地点出土石器（３）
第105図　第９－５Ａ・５Ｂ・９地点出土石器分布図

第106図　第９－５Ａ地点出土石器
第107図　第９－５Ｂ地点出土石器（１）
第108図　第９－５Ｂ地点出土石器（２）
第109図　第９－５Ｂ地点出土石器（３）
第110図　第９－６地点出土石器（１）
第111図　第９－６地点出土石器（２）
第112図　第９－６地点出土石器（３）
第113図　第９－７・８Ｂ地点出土石器分布図
第114図　第９－７地点出土石器（１）
第115図　第９－７地点出土石器（２）
第116図　第９－７地点出土石器（３）
第117図　第９－８Ａ地点出土石器分布図
第118図　第９－８Ａ地点出土石器（１）
第119図　第９－８Ａ地点出土石器（２）
第120図　第９－８Ｂ地点出土石器（１）
第121図　第９－８Ｂ地点出土石器（２）
第122図　第９－８Ｂ地点出土石器（３）
第123図　第９－８Ｂ地点出土石器（４）
第124図　第９－９地点出土石器（１）
第125図　第９－９地点出土石器（２）
第126図　第９－９地点出土石器（３）
第127図　第９－10Ａ地点出土石器分布図
第128図　第９－10Ａ地点出土石器
第129図　第９－10Ｂ地点出土石器分布図
第130図　第９－10Ｂ地点出土石器
第131図　第10－１～４地点出土石器分布図
第132図　第10－１地点出土石器
第133図　第10－２地点出土石器
第134図　第10－３地点出土石器
第135図　第10－４地点出土石器
第136－１図　第11－１～11地点出土石器分布図
第136－２図　第11－１～11地点出土石器分布図
第137図　第11－１地点出土石器（１）
第138図　第11－１地点出土石器（２）
第139図　第11－１地点出土石器（３）
第140図　第11－１地点出土石器（４）
第141図　第11－１地点出土石器（５）
第142図　第11－１地点出土石器（６）
第143図　第11－２地点出土石器
第144図　第11－３地点出土石器（１）
第145図　第11－３地点出土石器（２）
第146図　第11－３地点出土石器（３）
第147図　第11－４地点出土石器（１）
第148図　第11－４地点出土石器（２）
第149図　第11－５地点出土石器（１）
第150図　第11－５地点出土石器（２）
第151図　第11－６地点出土石器（１）
第152図　第11－６地点出土石器（２）
第153図　第11－７地点出土石器（１）
第154図　第11－７地点出土石器（２）
第155図　第11－８地点出土石器（１）
第156図　第11－８地点出土石器（２）
第157図　第11－９地点出土石器
第158図　第11－10地点出土石器（１）
第159図　第11－10地点出土石器（２）
第160図　第11－11地点出土石器
第161図　第12地点出土石器分布図
第162図　第12地点出土石器接合図
第163図　第12地点出土石器（１）
第164図　第12地点出土石器（２）
第165図　第12地点出土石器（３）
第166図　第13－１・２地点出土石器分布図
第167図　第13－１地点出土石器（１）
第168図　第13－１地点出土石器（２）
第169図　第13－１地点出土石器（３）
第170図　第13－２地点出土石器
第171－１図　第14－１～４地点出土石器分布図
第171－２図　第14－１～４地点出土石器分布図
第172図　第14－１地点出土石器（１）
第173図　第14－１地点出土石器（２）
第174図　第14－２地点出土石器（１）
第175図　第14－２地点出土石器（２）
第176図　第14－３地点出土石器（１）
第177図　第14－３地点出土石器（２）

第178図　第14－３地点出土石器（３）
第179図　第14－３地点出土石器（４）
第180図　第14－３地点出土石器（５）
第181図　第14－４地点出土石器
第182図　第15地点出土石器分布図
第183図　第15地点出土石器（１）
第184図　第15地点出土石器（２）
第185図　第16地点出土石器分布図
第186図　第16地点出土石器
第187図　第17地点出土石器分布図
第188図　第17地点出土石器
第189図　第18地点出土石器分布図
第190図　第18地点出土石器
第191図　第19地点出土石器分布図
第192図　第19地点出土石器
第193図　第20地点出土石器分布図
第194図　第20地点出土石器
第195図　第21地点出土石器分布図
第196図　第21地点出土石器
第197図　第23地点出土石器分布図
第198図　第22・23地点出土石器
第199図　単独出土の石器群（１）
第200図　単独出土の石器群（２）
第201図　縄文草創期の石器群
第202図　石器群変遷図
第203図　第Ⅸ層出土石器群
第204図　石斧片・石斧材集成図
第205図　第Ⅲ層出土石器群（１）
第206図　第Ⅲ層出土石器群（２）
第207図　有樋尖頭器の製作略図
第208図　縄文時代遺構分布図
第209図　SI113号住居跡・出土遺物
第210図　SI205－Ｂ号住居跡・出土遺物（１）
第211図　SI205－Ｂ号住居跡出土遺物（２）
第212図　SI373号住居跡・出土遺物
第213図　SI328号住居跡・出土遺物（１）
第214図　SI328号住居跡出土遺物（２）
第215図　炉穴（１）
第216図　炉穴（２）
第217図　炉穴（３）
第218図　炉穴出土遺物（１）
第219図　炉穴出土遺物（２）
第220図　陥穴・土坑（１）
第221図　陥穴・土坑（２）
第222図　陥穴・土坑（３）
第223図　陥穴・土坑（４）
第224図　陥穴・土坑（５）
第225図　陥穴・土坑（６）
第226図　陥穴・土坑（７）
第227図　陥穴・土坑（８）
第228図　陥穴・土坑（９）
第229図　陥穴・土坑（10）
第230図　陥穴・土坑（11）
第231図　陥穴・土坑（12）
第232図　陥穴・土坑（13）
第233図　陥穴・土坑（14）
第234図　陥穴・土坑（15）
第235図　陥穴・土坑（16）
第236図　陥穴・土坑（17）
第237図　陥穴・土坑（18）
第238図　陥穴・土坑（19）
第239図　陥穴・土坑（20）
第240図　陥穴・土坑（21）
第241図　陥穴・土坑出土遺物（１）
第242図　陥穴・土坑出土遺物（２）
第243図　ピット群（１）
第244図　ピット群（２）
第245図　ピット群（３）
第246図　遺構外出土土器（１）
第247図　遺構外出土土器（２）
第248図　遺構外出土土器（３）
第249図　遺構外出土土器（４）
第250図　遺構外出土土器（５）
第251図　遺構外出土土器（６）

第252図　遺構外出土土器（７）
第253図　遺構外出土土器（８）
第254図　遺構外出土土器（９）
第255図　遺構外出土土器（10）
第256図　遺構外出土土器（11）
第257図　遺構外出土土器（12）
第258図　遺構外出土土器（13）
第259図　遺構外出土土器（14）
第260図　遺構外出土土器（15）
第261図　遺構外出土土器（16）・土製品
第262図　遺構外出土石器（１）
第263図　遺構外出土石器（２）
第264図　遺構外出土石器（３）
第265図　遺構外出土石器（４）
第266図　遺構外出土石器（５）
第267図　遺構外出土石器（６）
第268図　遺構外出土石器（７）
第269図　遺構外出土石器（８）
第270図　遺構外出土石器（９）
第271図　遺構外出土石器（10）
第272図　銭貨拓影図

表　目　次

第１表　角田台遺跡発掘調査・整理作業概要
第２表　第１－１地点実測石器属性表
第３表　第１－３Ａ地点実測石器属性表
第４表　第１－３Ｂ地点実測石器属性表
第５表　第１－４地点実測石器属性表
第６表　第１－５地点実測石器属性表
第７表　第１－６Ａ地点実測石器属性表
第８表　第１－６Ｂ地点実測石器属性表
第９表　第１－７Ａ地点実測石器属性表
第10表　第１－７Ｂ地点実測石器属性表
第11表　第１－８地点実測石器属性表
第12表　第１－９Ａ地点実測石器属性表
第13表　第１－９Ｂ地点実測石器属性表
第14表　第１－10地点実測石器属性表
第15表　第１－11Ａ地点実測石器属性表
第16表　第１－11Ｂ地点実測石器属性表
第17表　第１－12地点実測石器属性表
第18表　第１－13地点実測石器属性表
第19表　第１－14Ａ地点実測石器属性表
第20表　第１－14Ｂ地点実測石器属性表
第21表　第１－14Ｃ地点実測石器属性表
第22表　第１－14Ｄ地点実測石器属性表
第23表　第１－15地点実測石器属性表
第24表　第１－16地点実測石器属性表
第25表　第１－17地点実測石器属性表
第26表　第２－１地点実測石器属性表
第27表　第２－２地点実測石器属性表
第28表　第４地点実測石器属性表
第29表　第５地点実測石器属性表
第30表　第６地点実測石器属性表
第31表　第７－１地点実測石器属性表
第32表　第７－２地点実測石器属性表
第33表　第７－３地点実測石器属性表
第34表　第８地点実測石器属性表
第35表　第９－１地点実測石器属性表
第36表　第９－２地点実測石器属性表
第37表　第９－３地点実測石器属性表
第38表　第９－４Ａ地点実測石器属性表
第39表　第９－４Ｂ地点実測石器属性表
第40表　第９－５Ａ地点実測石器属性表
第41表　第９－５Ｂ地点実測石器属性表
第42表　第９－６地点実測石器属性表
第43表　第９－７地点実測石器属性表
第44表　第９－８Ａ地点実測石器属性表
第45表　第９－８Ｂ地点実測石器属性表
第46表　第９－９地点実測石器属性表
第47表　第９－10Ａ地点実測石器属性表
第48表　第９－10Ｂ地点実測石器属性表

第49表　第10－１地点実測石器属性表
第50表　第10－２地点実測石器属性表
第51表　第10－３地点実測石器属性表
第52表　第10－４地点実測石器属性表
第53表　第11－１地点実測石器属性表
第54表　第11－２地点実測石器属性表
第55表　第11－３地点実測石器属性表
第56表　第11－４地点実測石器属性表
第57表　第11－５地点実測石器属性表
第58表　第11－６地点実測石器属性表
第59表　第11－７地点実測石器属性表
第60表　第11－８地点実測石器属性表
第61表　第11－９地点実測石器属性表
第62表　第11－10地点実測石器属性表
第63表　第11－11地点実測石器属性表
第64表　第11地点出土石器一覧（未掲載分）
第65表　第12地点実測石器属性表
第66表　第13－１地点実測石器属性表
第67表　第13－２地点実測石器属性表
第68表　第14－１地点実測石器属性表
第69表　第14－２地点実測石器属性表
第70表　第14－３地点実測石器属性表
第71表　第14－４地点実測石器属性表
第72表　第15地点実測石器属性表
第73表　第16地点実測石器属性表
第74表　第17地点実測石器属性表
第75表　第18地点実測石器属性表
第76表　第19地点実測石器属性表
第77表　第20地点実測石器属性表
第78表　第21地点実測石器属性表
第79表　第22地点実測石器属性表
第80表　第23地点実測石器属性表
第81表　単独出土の石器群属性表
第82表　縄文草創期の石器群属性表
第83表　陥穴一覧表
第84表　土抗一覧表
第85表　ピット群計測表
第86表　出土石器一覧表
第87表　既調査分住居跡一覧表

図 版 目 次

巻頭カラー　１　第１地点出土（第Ⅲ層）石器群
巻頭カラー　２　第11地点出土（第Ⅶ～Ⅸ層）石器群
図版１　角田台遺跡周辺航空写真
図版２　航空写真１（遺跡北東より）　航空写真２（遺跡南より）
図版３　航空写真３（Ｎ２区周辺）　調査風景（遺跡南西より）
図版４　１、第１地点土層断面（Ｏ11－87・88）と出土の石器
２、第１－８地点土層断面（Ｏ10－46）と出土石器
３、第６地点堆積土（白色部分はＡＴ）
４、第１－１地点（Ｐ10－22・23）石器出土状況
５、第１－４地点（Ｐ10－66）石器出土状況
６、第１－５地点（Ｐ10－68・69）石器出土状況
図版５　１、第１－６Ａ地点礫群出土状況
２、第１－８地点（Ｏ10－44～46）石器出土状況
３、第１－10地点（Ｏ９－24・34）石器出土状況
４、第１－11Ｂ地点（Ｏ10－07）石器出土状況
５、第１－12地点（Ｏ11－88）石器出土状況
６、第１－14Ｂ地点（Ｎ11－81）石器出土状況

図版６　１、第１－14Ｃ地点（N11－82・83）石器出土状況
２、第１－14Ｃ地点（N11－83）石器出土状況
３、第１－15地点（N10－55・65）石器出土状況
４、第４地点（Ｌ９－65・75）石器出土状況
５、第５地点（Ｌ８－08）石器出土状況
６、第５地点（Ｌ８－08・Ｌ９－98）石器・炭化物出土状況
図版７　１、第７－１地点（Ｊ10－54・55）石器出土状況
２、第７－２地点（Ｊ10－86）石器出土状況
３、第９－４Ｂ地点（Ｌ５－43・53）石器出土状況
４、第９－７地点（Ｋ５－40）石器出土状況
５、第９－10Ａ地点（Ｋ４－21・31）石器出土状況
６、第12地点（Ｊ４－84・85）石器出土状況
図版８　１、第11－２地点（Ｄ４－95・96）石器出土状況
２、第11－３・４・５地点（Ｄ４－56～58・76～78）石器出土状況
３、第11－６・７・10・11地点（Ｄ４－53～55）石器出土状況
４、第13地点（Ｊ３－87）石器出土状況
５、第15地点（Ｇ２－20）石器出土状況
６、第17地点（Ｅ３－55）石器出土状況
７、第20地点（Ｇ３－35）石器出土状況
図版９　第１－１地点出土石器
図版10　第１－３Ａ地点出土石器（１）
図版11　第１－３Ａ地点出土石器（２）
図版12　第１－３Ｂ地点出土石器
図版13　第１－４地点出土石器（１）
図版14　第１－４地点出土石器（２）
図版15　第１－４地点出土石器（３）
図版16　第１－５地点出土石器（１）
図版17　第１－５地点出土石器（２）
図版18　第１－５地点出土石器（３）
図版19　第１－６Ａ地点出土石器（１）
図版20　第１－６Ａ地点出土石器（２）
図版21　第１－６Ｂ地点（上）、第１－７Ｂ地点（下）出土石器
図版22　第１－７Ａ地点出土石器（１）
図版23　第１－８地点出土石器（１）
図版24　第１－７Ａ地点（２）（上）、第１－８地点（２）（下）出土石器
図版25　第１－９Ａ地点出土石器（１）
図版26　第１－９Ａ地点出土石器（２）
図版27　第１－10地点出土石器
図版28　第１－９Ｂ地点（上）、第１－11Ｂ地点（下）出土石器
図版29　第１－11Ａ地点（上）、第１－12地点（下）出土石器
図版30　第１－13地点（上）、第１－14Ｄ地点（下）出土石器
図版31　第１－14Ａ地点出土石器（１）
図版32　第１－14Ａ地点出土石器（２）
図版33　第１－14Ａ地点出土石器（３）
図版34　第１－14Ｂ地点出土石器（１）
図版35　第１－14Ｂ地点出土石器（２）
図版36　第１－14Ｂ地点（３）（上）、第１－14Ｃ地点（下）出土石器
図版37　第１－15地点出土石器
図版38　第１－16地点（上）、第１－17地点（下）出土石器
図版39　第２－１地点（上）、第２－２地点（中）、第４地点（下）出土石器
図版40　第５地点（上）、第６地点（中）、７－１地点（下）出土石器

図版41　第７－２地点（上）、第７－３地点（中）、第８地点（下）出土石器
図版42　第９－１地点（上）、第９－２地点（中）、第９－３地点（下）出土石器
図版43　第９－４Ａ地点（上）、第９－４Ｂ地点（下）出土石器
図版44　第９－５Ａ地点（上）、第９－５Ｂ地点（下）出土石器
図版45　第９－６地点出土石器（１）
図版46　第９－６地点出土石器（２）
図版47　第９－７地点出土石器
図版48　第９－８Ａ地点（上）、第９－８Ｂ地点（１）（下）出土石器
図版49　第９－８Ｂ地点（２）（上）、第９－９地点（１）（下）出土石器
図版50　第９－９地点（２）（上）、第９－10Ａ地点（下）出土石器
図版51　第９－10Ｂ地点出土石器
図版52　第10－１地点出土石器
図版53　第10－２地点（上）、第10－３地点（中）、第10－４地点（下）出土石器
図版54　第11－１地点出土石器
図版55　第11－２地点（上）、第11－３地点（下）出土石器
図版56　第11－４地点（上）、第11－５地点（中）、第11－６地点（１）（下）出土石器
図版57　第11－６地点（２）（上）、第11－７地点（中）、第11－８地点（下）出土石器
図版58　第11－９地点（上）、第11－10地点（下）出土石器
図版59　第11－11地点（上）、第12地点（下）出土石器
図版60　第13－１地点（上）、第13－２地点（下）出土石器
図版61　第14－１地点（上）、第14－２地点（下）出土石器
図版62　第14－３地点出土石器
図版63　第14－４地点（上）、第15地点（中）、第16地点（下）出土石器
図版64　第17地点（上）、第18地点（中）、第19地点（下）、第20地点（最下）出土石器
図版65　第21地点（上）、第22地点（中）、第23地点（下）出土石器
図版66　単独出土の石器群（上）、縄文草創期の石器群（下）
図版67　１、縄文土器包含層（M10区周辺）、２、縄文土器包含層（Ｅ３区周辺）、３、ピット群近景、４、SI113全景、５、SI205－Ｂ全景、６、SI328全景
図版68　１、ＳＩ373全景、２、ＳＫ056全景、３、ＳＫ058全景、４、ＳＫ059全景、５、ＳＫ065全景、６、ＳＫ066全景、７、SK067・068全景、８、SK069全景
図版69　１、ＳＫ080全景、２、ＳＫ081全景、３、ＳＫ168全景、４、ＳＫ174全景、５、SK189全景、６、SK189遺物出土状況、７、SK195全景、８、SK197・198全景
図版70　１、SK206・222全景、２、SK223全景、３、ＳＫ002全景、４、ＳＫ031全景、５、ＳＫ032全景、６、ＳＫ033全景、７、SK034全景、８、SK035全景
図版71　１、ＳＫ038全景、２、ＳＫ039全景、３、ＳＫ040全景、４、ＳＫ041全景、５、ＳＫ042全景、６、ＳＫ044全景、７、SK045全景
図版72　１、ＳＫ046全景、２、ＳＫ047全景、３、ＳＫ048全景、４、ＳＫ057全景、５、ＳＫ060全景、６、ＳＫ062全景、７、SK063全景、８、SK070全景
図版73　１、ＳＫ071全景、２、ＳＫ074全景、３、ＳＫ075全景、４、ＳＫ079全景、５、ＳＫ082全景、６、ＳＫ101全景、７、SK102全景、８、SK103全景
図版74　１、ＳＫ104全景、２、ＳＫ105全景、３、

ＳＫ106全景、４、ＳＫ107全景、５、
ＳＫ108全景、６、ＳＫ109全景、７、
SK110全景、８、SK117全景
図版75　１、ＳＫ120全景、２、ＳＫ129全景、３、
ＳＫ130全景、４、ＳＫ131全景、５、
ＳＫ147全景、６、ＳＫ148全景、７、
SK149全景、８、SK151全景
図版76　１、ＳＫ175全景、２、ＳＫ176全景、３、
ＳＫ177全景、４、ＳＫ180全景、５、
ＳＫ181全景、６、ＳＫ182全景、７、
SK183全景、８、SK184全景
図版77　１、ＳＫ188全景、２、ＳＫ192全景、３、
ＳＫ193全景、４、ＳＫ271全景、５、
ＳＫ280全景、６、ＳＫ331全景、７、
SK332全景、８、SK333全景
図版78　１、ＳＫ334全景、２、ＳＫ335全景、３、
ＳＫ336全景、４、ＳＫ337全景、５、
ＳＫ339全景、６、ＳＫ342全景、７、
SK343全景、８、SK346全景
図版79　１、ＳＫ347全景、２、ＳＫ353全景、３、
ＳＫ357全景、４、ＳＫ358全景、５、
ＳＫ359全景、６、ＳＫ360全景、７、
SK361全景、８、SK362全景
図版80　１、ＳＫ364全景、２、ＳＫ368全景、３、
ＳＫ370全景、４、ＳＫ372全景、５、
ＳＫ394全景、６、ＳＫ397全景、７、
SK398全景、８、SK400全景
図版81　１、ＳＫ401全景、２、ＳＫ402全景、３、
ＳＫ403全景、４、ＳＫ406全景、５、
ＳＫ408Ａ全景、６、ＳＫ411全景、７、
SK412全景、８、SK413全景
図版82　１、ＳＫ415全景、２、ＳＫ043全景、３、
ＳＫ049全景、４、ＳＫ078全景、５、
ＳＫ194全景、６、ＳＫ341全景、７、
SK338全景、８、SK348全景
図版83　１、ＳＫ351全景、２、ＳＫ352全景、３、
ＳＫ369全景、４、ＳＫ363全景、５、
ＳＫ371全景、６、ＳＫ382全景、７、
SK383全景、８、SK393全景
図版84　１、ＳＫ395全景、２、ＳＫ396全景、３、
ＳＫ399全景、４、ＳＫ404全景、５、
ＳＫ405全景、６、ＳＫ410全景、７、
SK414全景
図版85　遺構出土土器（１）
図版86　遺構出土土器（２）
図版87　遺構出土土器（３）
図版88　遺構出土土器（４）
図版89　遺構出土土器（５）
図版90　遺構外出土土器（１）
図版91　遺構外出土土器（２）
図版92　遺構外出土土器（３）
図版93　遺構外出土土器（４）
図版94　遺構外出土土器（５）
図版95　遺構外出土土器（６）
図版96　遺構外出土土器（７）
図版97　遺構外出土土器（８）
図版98　遺構外出土土器（９）
図版99　遺構外出土土器（10）
図版100　遺構外出土土器（11）
図版101　遺構外出土土器（12）
図版102　遺構外出土土器（13）
図版103　遺構外出土土器（14）
図版104　遺構外出土土器（15）
図版105　遺構外出土土器（16）・土製品
図版106　遺構外出土土器（17）
図版107　遺構外出土石器（１）
図版108　遺構外出土石器（２）
図版109　遺構外出土石器（３）
図版110　遺構外出土石器（４）
図版111　遺構外出土石器（５）

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯と経過

公益財団法人千葉県教育振興財団は千葉北部地区新住宅市街地開発事業関連に伴う埋蔵文化財調査として、当初は千葉県企業庁の委託を受けて調査を開始した。その後、事業主体が日本住宅公団（住宅・都市整備公団、都市機盤整備公団、独立行政法人都市再生機構）に引き継がれた中で業務委託を受け継続して発掘調査を実施してきた。このたび報告する遺跡は印西市新堤台に所在する角田台遺跡である。本遺跡は昭和52年度から調査が開始され、平成７年度までの間、15次にわたり調査されてきた。その後、平成17年度には中間報告として弥生時代以降の報告が「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅧ」として刊行されている。そのため本報告は、既刊で報告できなかった旧石器時代から縄文時代にわたる報告となる。

なお、発掘調査の開始から本報告書刊行に至るまでの経緯及び各年度の調査担当者等については以下の表に記載したとおりとなる。

第１表　角田台遺跡発掘調査・整理作業概要　　**（発掘調査）**

調査年度	遺跡名・所在地（当時）	発掘調査内容	期　間	調査（研究）部長	所長（班長）	調査担当者
昭和52年（企業庁）	角田台遺跡 本埜村角田467ほか	確認調査　上層　140,000㎡	8/16～12/15	西野　元	鈴木道之助	堀部　昭夫
昭和55年（企業庁）	角田台遺跡 本埜村角田467ほか	本調査　上層　21,300㎡	4/1～3/31	白石　竹雄	古内　茂	古内　茂 小宮　孟 岡田　誠造
昭和58年（企業庁）	角田台大塚遺跡 本埜村角田467ほか	本調査　上層　1,200㎡	7/1～7/31	白石　竹雄	清藤　一順	清藤　一順
昭和59年（企業庁）	角田台大塚遺跡 本埜村角田467ほか	本調査　上層　8,500㎡ 確認調査　下層　850/8,500㎡	10/15～3/30	鈴木道之助	鈴木　定明	鈴木　定明 及川　淳一
昭和60年（企業庁）	角田台大塚遺跡 本埜村角田467ほか	本調査　上層　7,600㎡ （A：3,000㎡、B：4,600㎡） 確認調査　下層　850/8,500㎡ 本調査　下層　1,100㎡	4/1～3/31	鈴木道之助	矢戸　三男	及川　淳一 郷堀　英司
昭和61年（企業庁）	角田台大塚遺跡 本埜村角田467ほか	本調査　上層　8,400㎡ 確認調査　下層　336/8,400㎡ 本調査　下層　468㎡	4/1～6/30	鈴木道之助	矢戸　三男	矢戸　三男 郷堀　英司 田島　新
昭和62年（公　団）	角田台大塚遺跡 本埜村角田台雨古瀬470ほか	本調査　上層　4,000㎡ 確認調査　下層　240/4,000㎡	7/1～12/11	堀部　昭夫	小宮　孟	小宮　孟 田島　新
昭和63年（公　団）	角田台大塚遺跡 本埜村角田字新堤台434ほか	本調査　上層　5,000㎡ 確認調査　下層　456/5,000㎡	9/1～1/31	堀部　昭夫	大原　正義	大原　正義 奥田　正彦 岡田　誠造 糸川　道行 上守　秀明 矢本　節朗
平成元年（公　団）	角田台遺跡 本埜村角田字新堤台470ほか	確認調査　上層　1,100/11,000㎡ 下層　440/11,000㎡ 本調査　上層　2,100㎡	1/8～3/20	堀部　昭夫	上野　純司	井上　哲朗
平成２年（公　団）	角田台遺跡Ⅰ 本埜村角田字新堤台470ほか	本調査　下層　200㎡	4/5～5/9	堀部　昭夫	上野　純司	高橋　博文 井上　哲朗
平成２年（公　団）	角田台遺跡Ⅱ 本埜村角田469ほか	確認調査　上層　2,000/20,000㎡ 下層　800/20,000㎡ 本調査　上層　13,000㎡ 下層　3,300㎡	5/10～1/31	堀部　昭夫	上野　純司	高橋　博文 井上　哲朗 安井　健一
平成３年（公　団）	角田台遺跡 本埜村角田字関所466ほか	確認調査　上層　2,000/20,000㎡ 下層　780/20,000㎡ 本調査　上層　8,100㎡ 下層　3,428㎡	4/4～3/30	天野　努	上野　純司	高橋　博文

平成５年 （公　団）	角田台遺跡 本埜村角田字関所465ほか	確認調査　上層　4,600/46,000㎡ 下層　460/11,500㎡	2/1～3/24	高木　博彦	田坂　浩	岡田　光広 井上　哲朗
平成６年 （公　団）	角田台遺跡 本埜村角田字関所465ほか	本調査　上層　6,600㎡	3/1～3/24	西山　太郎	谷　旬	田形　孝一 糸川　道行
平成７年 （公　団）	角田台遺跡 本埜村角田字関所465ほか	確認調査　下層　1,387/34,500㎡ 本調査　上層　23,400㎡ 下層　2,200㎡	4/5～12/26	西山　太郎	谷　旬	猪俣　昭喜 立和名明美 佐藤　隆

（整理作業）

調査年度	遺　跡　名	整 理 作 業 内 容	期　間	調査（研究）部長	所長（課長）	調査担当者
平成８年	角田台遺跡（上層） 角田台遺跡（下層）	水洗・注記から図面・写真整理まで 水洗・注記から記録整理の一部まで	6/1～3/31	西山　太郎	谷　旬	香取　正彦
平成９年	角田台遺跡（上層）	図面修正の一部から実測の一部まで	4/1～3/31	西山　太郎	折原　繁	香取　正彦
平成11年	角田台遺跡（下層）	水洗・注記の一部まで	4/1～3/31	沼澤　豊	折原　繁	
平成13年	角田台遺跡（上層） 角田台遺跡（下層）	実測の一部から原稿執筆の一部まで 記録整理の一部から分類・選別の一部まで	4/1～3/31	佐久間　豊	石田　廣美	池田　大助 金丸　誠 川端　保夫 田島　新 小笠原永隆
平成14年	角田台遺跡（上層）	原稿執筆の一部	4/1～3/31	斎木　勝	古内　茂	糸川　道行
平成16年	角田台遺跡（弥生時代以降）	原稿執筆の一部	4/1～3/31	矢戸　三男	古内　茂	香取　正彦
平成17年	角田台遺跡（弥生時代以降）	原稿執筆の一部から編集・報告書刊行	4/1～3/31	矢戸　三男	古内　茂	香取　正彦
平成18年	角田台遺跡 （旧石器・縄文時代）	記録整理の一部から接合・復原の一部	4/1～3/31	矢戸　三男	古内　茂	香取　正彦
平成19年	角田台遺跡 （旧石器・縄文時代）	分類・選別の一部から実測の一部、トレースの一部	4/1～3/31	矢戸　三男	豊田　佳伸	香取　正彦
平成20年	角田台遺跡 （旧石器・縄文時代）	実測の一部、挿図・図版作成の一部、原稿執筆の一部	4/1～3/31	大原　正義	豊田　佳伸	香取　正彦
平成21年	角田台遺跡 （旧石器・縄文時代）	挿図・図版作成の一部、原稿執筆の一部	4/1～3/31	及川　淳一	野口　行雄	古内　茂
平成22年	角田台遺跡 （旧石器・縄文時代）	原稿執筆の一部	4/1～3/31	及川　淳一	白井久美子	古内　茂
平成23年	角田台遺跡 （旧石器・縄文時代）	原稿執筆の一部から編集	4/1～8/31 11/1～2/29	及川　淳一	白井久美子	古内　茂
平成24年	角田台遺跡 （旧石器・縄文時代）	報告書印刷・刊行	7/1～12/28	関口　達彦	高田　博	古内　茂

第２節　遺跡の位置と環境

角田台遺跡は、図示（第１図）したように印旛沼の北方に位置し、南西に流れる師戸川によって開析された支谷により三方が囲まれた台地上に展開していた。つまり水系としては、印旛沼に注ぐ師戸川に求めることができる。現在では遺跡の中央部に鉄道（北総線）が敷設され、その両側面には国道464号線が新たに整備されたため車両の交通量は増加の一途をたどっている。

本遺跡は印旛沼から約３kmほど離れており、遺跡の分布は比較的に薄い地域である。遺跡が形成された台地では標高28m前後の平坦な面が広がり、周辺低地との比高差は17m～18mを計測する。このような好環境に育まれた地であるため原始・古代の人びとにとって良好な狩猟地あるいは居住地として利用しやすい条件を備えていたものと思われる。ただ本遺跡や周辺に位置する遺跡を展観すると、大規模な集落を形成することはなく比較的規模の小さな集落が散在しているような状況である。隣接する弐ト込遺跡（香取ほか2008）では約24,000㎡の調査で、縄文時代早期に炉穴20基と弥生時代から奈良・平安時代にかけての住居跡19軒が検出されたが、重複するような住居跡は存在していない。さらに北方約１kmに所在する天王台西遺跡でも弥生時代から古墳時代の集落の一部が検出されているが、10軒前後とその数は少ない。このことは印旛沼に面する遺跡との比較において集落構成という点で明らかに異なる様相として指摘できるものといえよう。

第１図　周辺の地形と遺跡（1/25,000）

第２章　調査の方法と概要

第１節　調査の方法

本遺跡の調査は、前記（第１表）のように昭和52年度に実施された確認調査の結果に基づき、遺構・遺物等が包含されていると予想できる地点について実施していくこととなった。そこで調査対象区域を公共座標に合わせて40m×40mの大グリッド（区）を設定し、遺跡の東側から西に向かってA・B・C、南側から北に１・２・３と記号を付していくこととした。大グリッドは、さらに小グリッドに分割して北西隅を起点に00・01、・・・98・99としてアルファベットと数字を組み合わせることにより出土位置を特定できるようにした。前出の第１表に記載したように、調査は継続的に実施され、ほぼ遺跡全体を調査するに至った。

第２節　調査の概要

調査の結果、既刊で詳細を報告したように遺跡の南西部から弥生時代後期の小規模な集落が検出され、また南側台地縁辺部に奈良・平安時代の集落が掘立柱建物跡を含めて広範囲に分布していることが確認できた。この時期では「匝瑳郡・・・」と墨書された甕形土器の出土が注目された。さらに南側台地の東よりの地点（Ｆ４区）では中世から近世にかけての土坑群が集中的に検出されている。

一方、本書に関わる旧石器・縄文時代についてみると、旧石器時代では多数の石器集中地点が確認された。詳細については次章に記載するが、最大の集中地点は第１地点（P10区・O10区）と命名した部分で、数枚の文化層が重複したものであり、その分布域は広大な範囲となる。また第９・11地点での出土石器は概ね環状を呈し、第11地点出土の石器が第１地点の石器と接合するといった貴重な類例にも恵まれた。

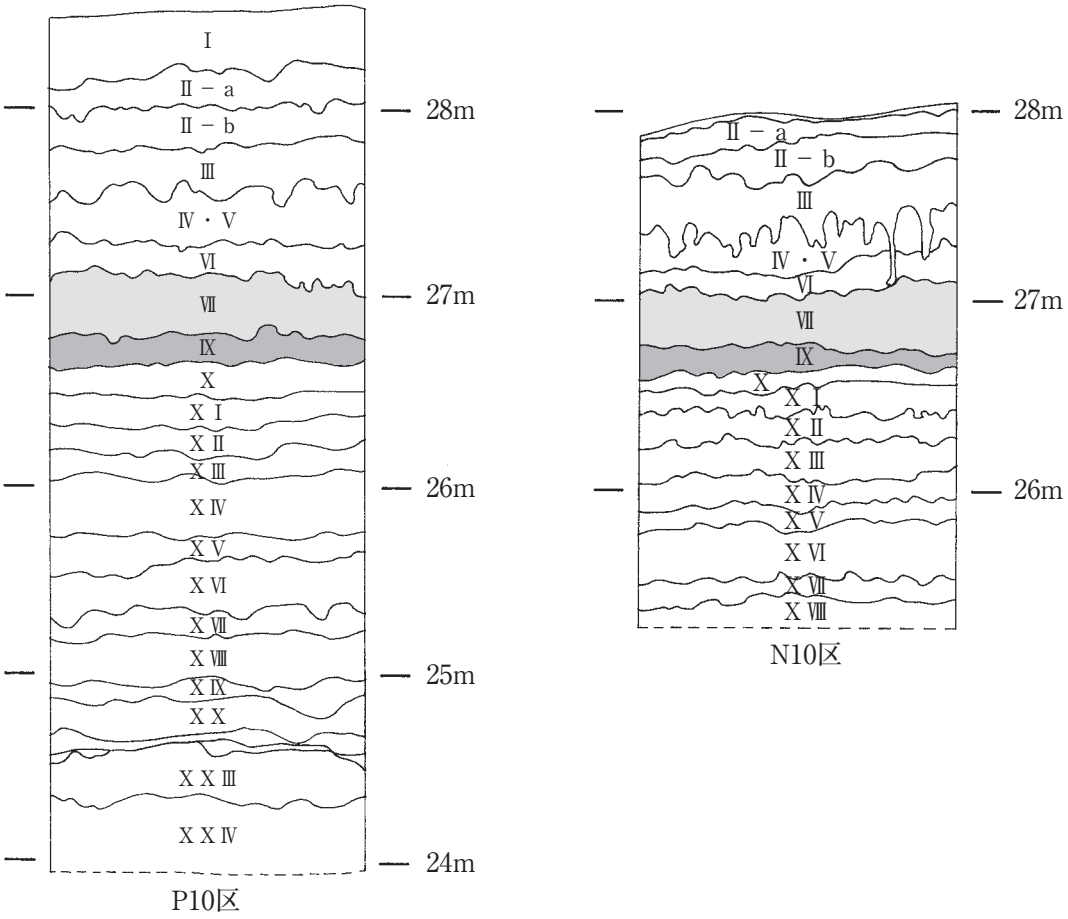
縄文時代についてみると、住居跡は早期・前期・中期で合計４軒を検出し、他に炉穴、陥穴、土坑等が発見されている。特に炉穴は数基単位で纏まって検出されている。いずれも台地の縁に沿った場所で、その内の１か所であるＥ３区では同時期の住居跡も発見されている。また出土土器については後述するように早期の撚糸文系土器群から始まり、後期の安行式土器群にまでおよぶ。これらの土器群を形式的にみると、一部は欠如しているものの大きな空白部はなくほぼ継続的に出土している。

第３節　基本層序

本遺跡の基本層序としては、石器群の出土量が最大となった第１地点のほぼ平坦面となるP10区の58・59グリッド断面を採用した。そこでの堆積状況は、第３図として図示したとおりである。

第Ⅰ層　表土。
第Ⅱ－ａ層　暗褐色土。
第Ⅱ－ｂ層　同上、色彩的にはa層よりも明るい。
第Ⅲ層　黄褐色土、いわゆるソフトローム層。
第Ⅳ・Ⅴ層　褐色土（ハードローム層）。
第Ⅵ層　同上、AT含有層。上層よりも明るい。
第Ⅶ層　暗褐色土、暗色帯の漸移層。
第Ⅸ層　同上、上層よりも黒色味を増す。
第Ⅹ層　明褐色土、立川ローム層最下部。
第ⅩⅠ層　暗褐色土、粘性を有し上層との境界は明瞭。
以下、第ⅩⅩⅡ層まで武蔵野ローム層となる。
第ⅩⅩⅠ層　東京パミス。
第ⅩⅩⅢ層　下末吉ローム層、チョコレート色粘土。
第ⅩⅩⅣ層　同上、青灰色粘土。

第２図　遺跡地形図（1/5,000）



第３図　基本土層柱状図

第３章　旧石器時代

第１節　概要

本遺跡の調査は昭和52年に遺跡全体の確認調査が実施され、その後、同55年度から縄文時代以降であるいわゆる上層調査に引き続き下層部分の調査へと移行するような順序ですすめられた（第１表）。そして平成７年度をもって約140,000㎡にわたるほぼ台地全体の調査を終了した。

最初に石器群が出土した地点は、本書で第１地点として取り扱った遺跡の北西部にあたり、大グリッドでいうところのＯ10区及びその周辺となる。この地点では、第Ⅲ層から樋状剥離によって鋭利な先端部を形成する有樋尖頭器が出土し注目を集めた。同時に石器群とともに被熱した礫が多数検出されており長期にわたっての居住を思わせるような状況が想定された。さらに周辺を拡張しつつ調査を進めていくと、いわゆる暗色帯と呼称される第Ⅶ層から第Ⅸ層にかけて局部磨製石斧を伴う一群の石器が出土した。その後、昭和60年度の調査では遺跡の南東部（第11地点）で第Ⅶ層から第Ⅸ層にかけて10か所以上の石器群が環状に配置されたような形で集中的に出土し、さらに平成３年度の調査（第９地点）でもきれいな円形を描くように石器群が検出され、いわゆる環状石器群と呼称される石器集中地点を確認することができた。

また整理作業の進捗に伴い、第11地点から出土した石器群の一部は第１地点下層出土の石器（第１－11・12・14地点）と接合し貴重な類例を提供した。両地点はほぼ500ｍ離れている（第４図）が同時期に形成された石器群であることが判明した。こうした接合例は第９地点内でも確認されており、石器群が広範な分布状況を示していることも確認できた。

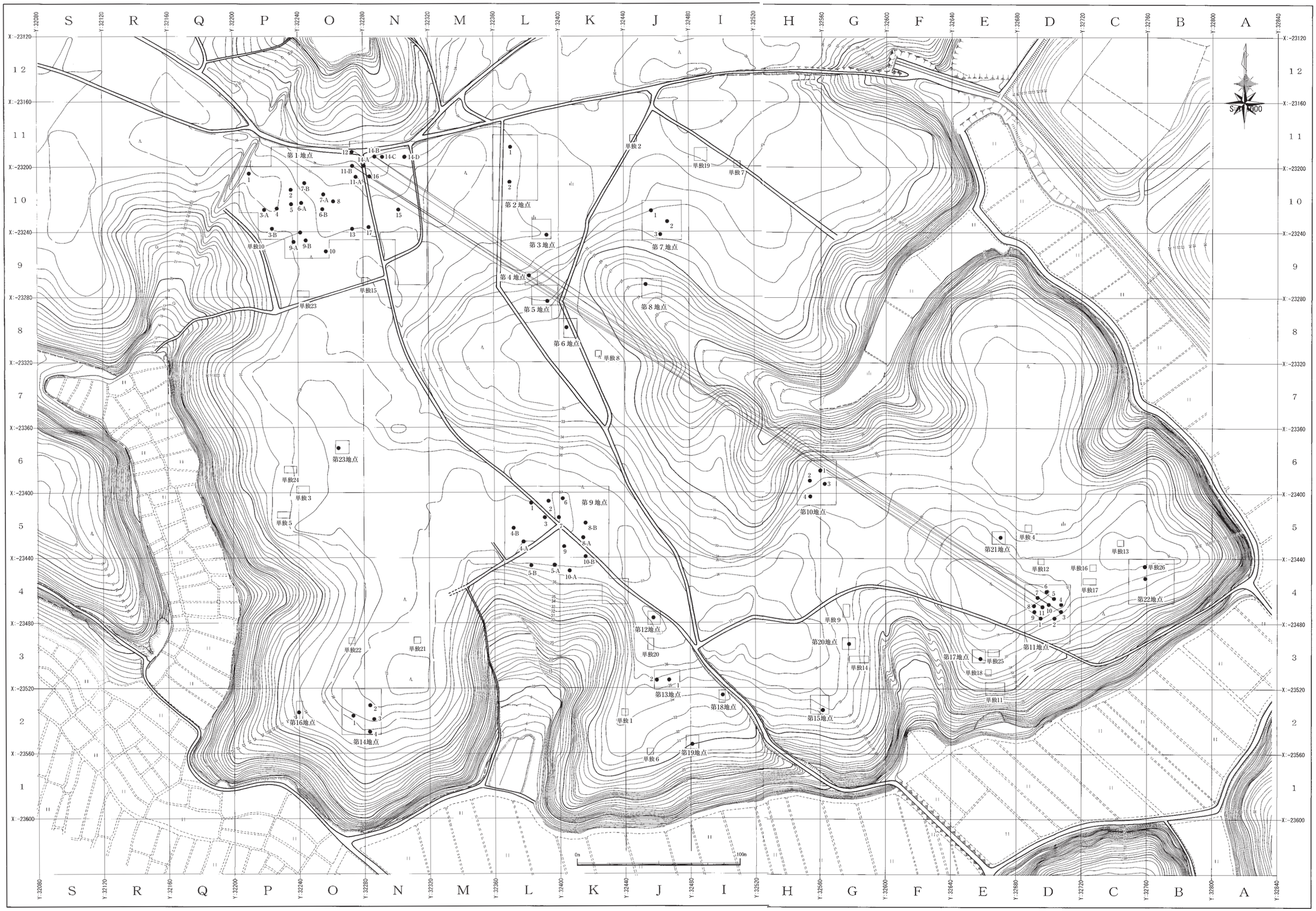
以上のように、本遺跡で出土した石器群は23地点にわたり、石器集中地点と認定できた場所は80か所を数えた。その結果、被熱礫や単独出土として取り扱った石器群を除外した出土総数は6400余点を超える膨大な量となった。

第２節　第１地点

第１地点とした調査区は南北から浸食された台地のくびれ部にあたる。標高は約28ｍ前後を測り、上層では縄文時代の早期の炉穴や陥穴などが検出されている。石器群はＯ10区・Ｐ10区の第Ⅲ層中から出土し、次第にその分布は広がる傾向をみせたため周辺に拡張区を設定して調査を継続していった。その結果、石器包含層は第Ⅸ層にも及ぶことが確認され、本地点における石器群の分布は予想以上の広がりをみせ南北に60ｍ、東西に120ｍ弱の広範囲を調査することとなった。

遺物の取り上げについては、各グリッドを基本としたために出土層位にかかわらず順次遺物番号を付していった。そのため文化層の把握は整理時に持ち越されることとなった。整理作業では数枚の文化層と大量の遺物という状況の中で出土層位・集中状況・採用石材・剥離技術といった点に注意しながらそれぞれをグループ化していった。その結果、一定程度の纏まりを保つ石器群が19地点、疎らに散るように散布していた石器群が５地点で認識できた。

以上のように、本地点での整理作業は困難の連続であったため、石器集中地点に付した番号は北、あるいは西方から機械的に命名していったものである。また、第１地点に限っては複数の文化層が存在してい



第４図　石器集中地点分布図

るため、石器の分布が疎らな場合や関連性の高いものについては、さらに枝番としてアルファベッドを付して本報告に記載することとした。

（1）第1－1地点（第5図・第6図、図版4・9）

概要　本地点の石器群は調査区の北西部隅において出土したものである。出土層位は第Ⅵ層下半部にあり、P10－12グリッドを中心として径7mの範囲で同心円状に石器群の分布が認められた。使用石材についてみると、黒曜石が圧倒的に多く硬質頁岩、石英、チャートが各1点づつの石材構成となっている。黒曜石の質は良好で半透明なものやその中に縞状の黒色帯を内包したきれいなもので、気泡や異物等の混入は少なかった。そのため大半は同一母岩から剥離されたものと推測できる。明確に判別できる石器について挿図中では破線によって結んでみた。また、P10－12グリッドでは縄文期の遺構（SK342）が検出（第5図下部）されており、その覆土中から黒曜石の剥片8点、砕片86点が出土した。遺構の位置は分布する石器群の中心部にあたるため覆土中から出土した石器片は、すべて本地点の石器群と見做され数量に加えた。

出土石器群　石器には、尖頭器、掻器、削器、二次加工剥片の他に微細な調整痕が加えられた剥片が存在している。本地点で出土した石器群の大半は石器製作に伴う砕片の類で、その長さは5mm前後の大きさの砕片が主体を占めていた。極小さなものでは2mm程度の砕片までも発見されている。こうした砕片中には尖頭器などの成品を製作する際、側縁部に加撃したときに剥離された剥片・砕片類が若干認められた。極小の砕片を含めて考えると、本地点では黒曜石を素材とした石器の製作場所と考えられた。なお、図示した石器群に使用されている石材はすべて黒曜石である。

礫群　ここでは小規模であったが被熱した礫群が検出されている。P10－12グリッドから数点が1か所に集中して出土した。また原形をとどめる礫が5点みられた。

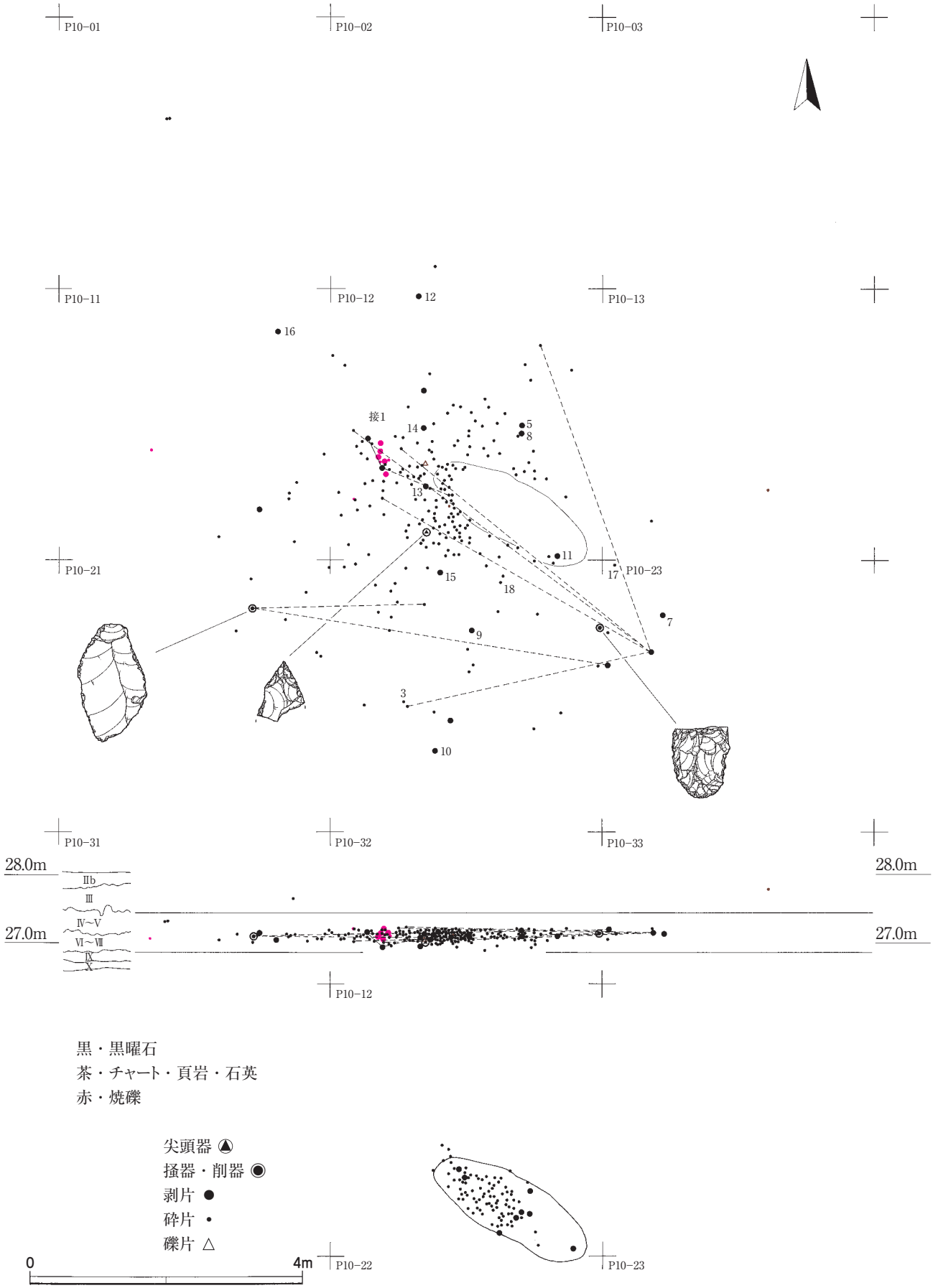
尖頭器（2）　先端部のみが遺存した尖頭器で表面の剥離を観察すると、大きな剥離によって整形し、次に凹凸の生じている部分には調整のための微細な剥離を施している。裏面での加工は、遺存部に限り皆無である。製作途中に廃棄されたものであろう。

掻器（1）　下端の刃部がU字状に整形された典型的な掻器である。表面の整形や側縁の調整剥離は細かく丁寧に施されている。裏面には異物である小石が残されており、その部分にだけ小さな整形剥離の痕跡を残す。また製作時の形状は、より縦長であったものと思われる。おそらく付着していた小石のため使用時か、製作時に破損したものであろう。上部の破損面を観察すると、周囲に微調整を施しているため破損後も掻器として使用されたものと推測できる。

削器（4）　石器の内部に若干異物が含有されており、全体として乳白色を呈した黒曜石となる。縦長剥片の打点部を整形した後、側縁部を全周するように小さな剥離で形状を整え石器として使用している。整形は裏面片側にも及ぶ。

二次加工剥片（3・5・9）　3は打点部付近が遺存した剥片で表裏面に整形のための剥離痕が明確に認められる。5は縦長で長方形に近い形状を呈した剥片で残された打面部には打面調整の痕跡を残す。加工は左の側縁全体に施されている。右側縁の裏面には使用による刃こぼれ痕も認められる。おそらく削器として使用されたものであろう。9は透明で不純物のみられない良質の石材を用いており、打面部を削除した後、左側縁に整形を兼ねた微調整を施している。これも削器様の石器として使用したものであろう。

剥片（6～8、10～21）　6は接合資料で、表面には自然面を残す。7は折断された縦長の剥片であり、



第５図　第１－１地点石器分布図

第６図　第１－１地点出土石器

側面には自然面を残す。また右側縁下部には微調整が施されており、裏面では使用痕が観察できる。10は、４と同質の石材を用いており、これも上部に小石が付着するように含有しており、その部分から折れている。13～15は薄く弯曲した剥片で、成品製作途中で剥離されたものであろう。19～21は側縁部に調整痕が認められるところから石器として使用されたものであろう。

なお、本報告では、概ね長さ２cm、幅１cm以下のもの砕片として分類したことを付記しておく。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石317点　硬質頁岩１点　チャート１点　石英１点

器種　尖頭器１点　掻器１点　削器１点　二次加工剥片３点　剥片30点　砕片284点　合計320点

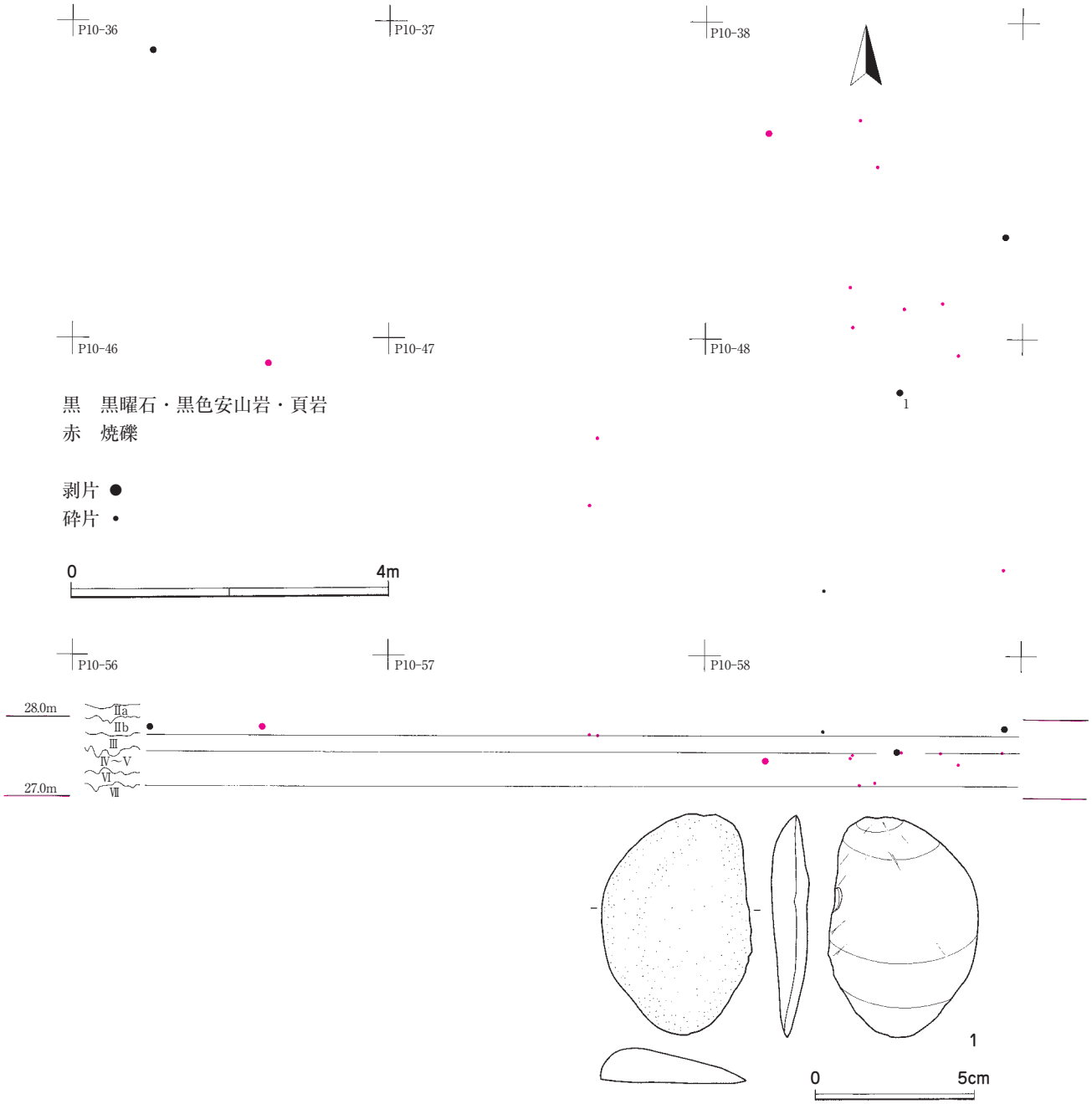
第２表　第１－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	P10－22	24	27.140	掻器	黒曜石	2.54	2.16	0.85	4.12		
2	P10－12	165	27.014	尖頭器	黒曜石	2.17	1.69	0.57	1.04		基部欠
3	P10－22	5	27.135	二次加工	黒曜石	1.53	1.52	0.77	1.00		
4	P10－21	6	27.055	削器	黒曜石	4.35	2.65	0.66	4.63		
5	P10－12	64	27.120	二次加工	黒曜石	3.90	1.60	0.65	4.25		半欠・右左側縁U
6	P10－12	90	27.138	剥片	黒曜石	3.23	2.63	0.81	3.84	接１	
		171	26.946								
7	P10－23	1	27.144	剥片	黒曜石	3.25	2.65	1.10	10.41		
8	P10－12	65	27.195	剥片	黒曜石	3.90	3.60	0.85	7.20		
9	P10－22	10	27.095	二次加工	黒曜石	3.27	2.41	0.93	3.75		周縁U
10	P10－22	1	27.144	剥片	黒曜石	2.60	1.85	0.40	2.48		
11	P10－12	88	27.096	剥片	黒曜石	3.10	1.70	0.55	2.15		半欠
12	P10－12	81	27.144	剥片	黒曜石	2.40	1.20	0.40	0.98		
13	P10－12	158	27.027	剥片	黒曜石	2.20	1.40	0.50	0.58		
14	P10－12	46	27.150	剥片	黒曜石	1.80	2.05	0.35	0.02		
15	P10－22	20	27.145	剥片	黒曜石	2.00	1.95	0.50	0.82		下端欠
16	P10－11	10	27.027	剥片	黒曜石	1.80	1.55	0.30	0.59		
17	P10－23	2	27.155	剥片	黒曜石	1.60	1.65	0.45	0.76		
18	P10－22	21	27.158	剥片	黒曜石	1.90	2.10	0.30	0.33		
19	SK342	10	陥穴覆土中	剥片	黒曜石	3.59	1.95	0.62	1.92		
20	SK342	7	陥穴覆土中	剥片	黒曜石	2.56	2.24	0.40	1.39		
21	SK342	9	陥穴覆土中	剥片	黒曜石	1.79	1.71	0.44	0.68		

（２）第１－２地点（第７図）

概要　本地点の石器群は、P10－38・48グリッドで３点と北西に約10m離れたP10－36グリッドで１点出土している。これらを合わせて本地点として図化したものであり、いずれも第Ⅱ層下部から第Ⅳ・Ⅴ層にかけて出土したものであり高低差がみとめられた。しかも纏まりをもった出土状況とはいえない。単独出土として取り扱えるような貧弱な内容であった。

出土石器群　ここで出土した石器群は４点と少ない。１点のみ大型の剥片が第Ⅲ層から出土しており、本資料のみを図示した。石材は黒色安山岩である。大きさは長さ70mm、幅46mm、厚さ11mmを計測する。表皮部分の剥片で裏面が平坦なため打面部を作出するために剥離された剥片と思われる。石器の素材としては十分な形状を呈しているが、石器として使用した痕跡や二次剥離等は認められない。重量は41.9gで



第７図　第１－２地点石器分布図・出土石器

ある。

礫群　焼礫がＰ10－38グリッドとその周辺から10点余が第Ⅲ層から第Ⅳ・Ⅴ層にかけて出土している。本地点の礫群は小規模で特に集中することなく散乱するような状況を呈していた。また原形をとどめる礫は少なく破砕したものが多かった。

石材・器種別の構成は以下のとおりであった。

石材　黒曜石１点　珪質頁岩２点　黒色安山岩１点

器種　剥片３　砕片１　合計４点

（3）第１－３Ａ地点（第８図～第10図、図版10・11）

概要　本地点の石器群は、第１地点調査区東端の中央部で第８図に示したように１－４地点・１－５地点と西から東に連続するような並びで検出されている。その中心はＰ10－65・75グリッドとなり、石器群は径11mほどの広がりをみせている。ここで使用されている石材は珪質頁岩・硬質頁岩が主体となり、黒曜石・黒色安山岩などで構成されている。その他に多量の礫群も石器群と重複しつつ出土している。これらの出土層位は第Ⅲ層の中～下層となる。

出土石器群　出土した石器には、尖頭器、掻器、削器、二次加工剥片や削片などがみられた。ここでは特筆できる遺物として削片をあげることができる。この削片は有樋尖頭器の製作に伴い、鋭い先端部を作出するために石器製作工程の最終段階で剥離される剥片である。ただ本地点では成品としての有樋尖頭器は出土していない。一方、尖頭器や掻器等の製作途上で剥離されたトゥールチップス（注）も出土している。いずれにせよ本地点での石材組成と石材の観察から頁岩系による石器製作がおこなわれていたものといえる。

礫群　Ｐ10－75グリッド周辺で集中的に焼礫が出土した。その分布範囲は５ｍ×４ｍ程度となり、大半は破砕しており原形をとどめる礫は少なかった。明らかに本地点で出土した石器群に伴うものである。

尖頭器（１）　基部が僅かに欠損している。表面中央は剥離を忘れたかのように一段と高く残り、全体としては粗雑な作りである。裏面は比較的平坦で中央部まできれいに剥離されている。

掻器（７・12）　７は先端に打点部を一部残すが、周囲は入念に調整剥離が施される。さらに刃部では微細な剥離を観察できる。裏面での加工は認められないが精緻な作りといえよう。12は薄い石刃状の剥片を用い、打面部をきれいに削除した後、さらに整形剥離を加えて成品としている。掻器としてよいであろう。

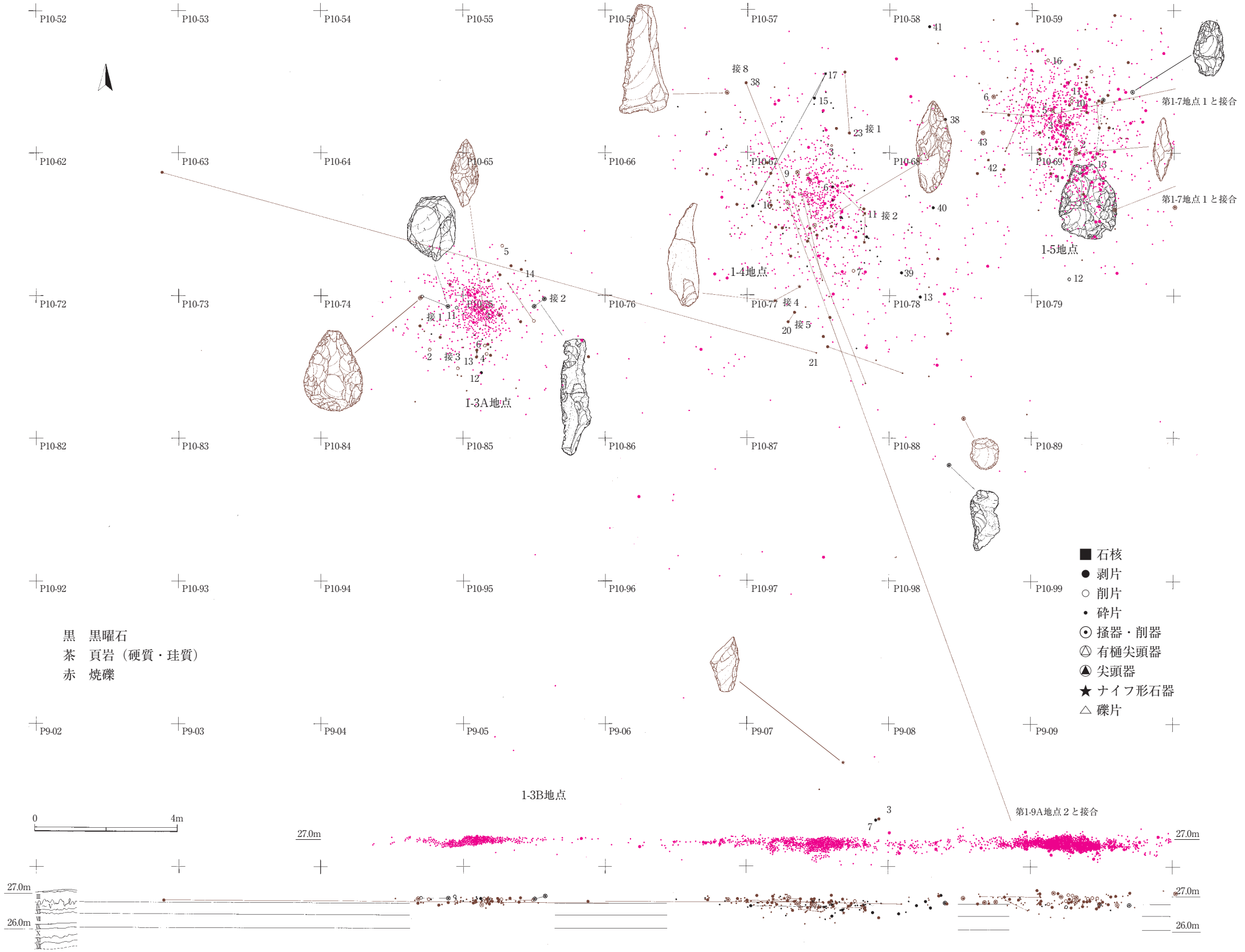
削器（９）　礫の表皮部分から作出した削器である。剥離面の観察からは半透明の良質な黒曜石を用いている。右側縁部は凹凸が著しいため刃部を左側縁としたようであり、整形を兼ねた簡単な剥離で成品に仕上げている。折断部をみると、背面から深く抉るような剥離が折れの原因とも考えられる。

彫器（10）　黒曜石製の彫器で小石等の異物が若干含まれる。基部では打面調整の痕跡が認められる。接合した剥片は、丁寧に整形された後に樋状剥離によって剥離されたものである。表面観察から１回目の剥離では刃部に小石が残ったため再度樋状剥離を施している。整形加工された右側縁部は掻器としての機能を有していたものであろう。なお裏面でも小石が付着していたらしく削除した痕跡が認められる。

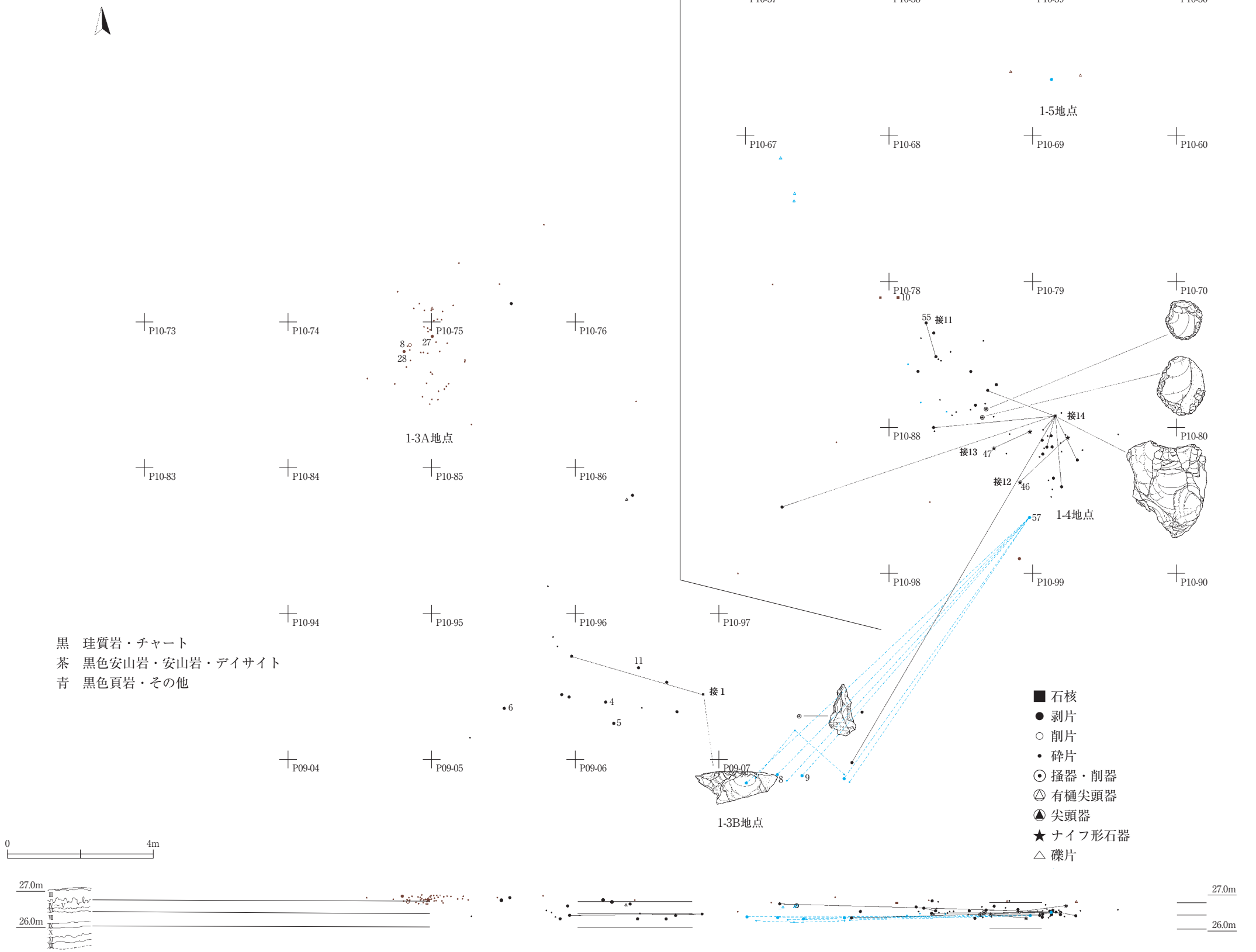
二次加工剥片（13～15）　13は接合資料であり、一部欠失した面を観察すると節理面が認められるため使用中に破損したものかもしれない。打面部の整形は省かれ、左側縁を表裏から微細な剥離を施し削器様の石器として使用されたことは確実である。14も縦長剥片を用いたもので両側縁には微細な剥離を施し、表面右下部分ではやや大きめな整形を兼ねた剥離がみられる。打面部は整形されておらず打面調整による剥離痕を残す。15は上半部が失われており、左側縁の表裏に調整痕が認められる。また下端部では２回以上の加撃が認められるところから彫器としての用途も想定できる。

削片（２～６・８・11）　ここでは削片が８点出土しており、７点を図示した。これらは石器として使用していない限り剥片に含められようが、この時期にみられる特徴的な剥片のため区別することとした。２

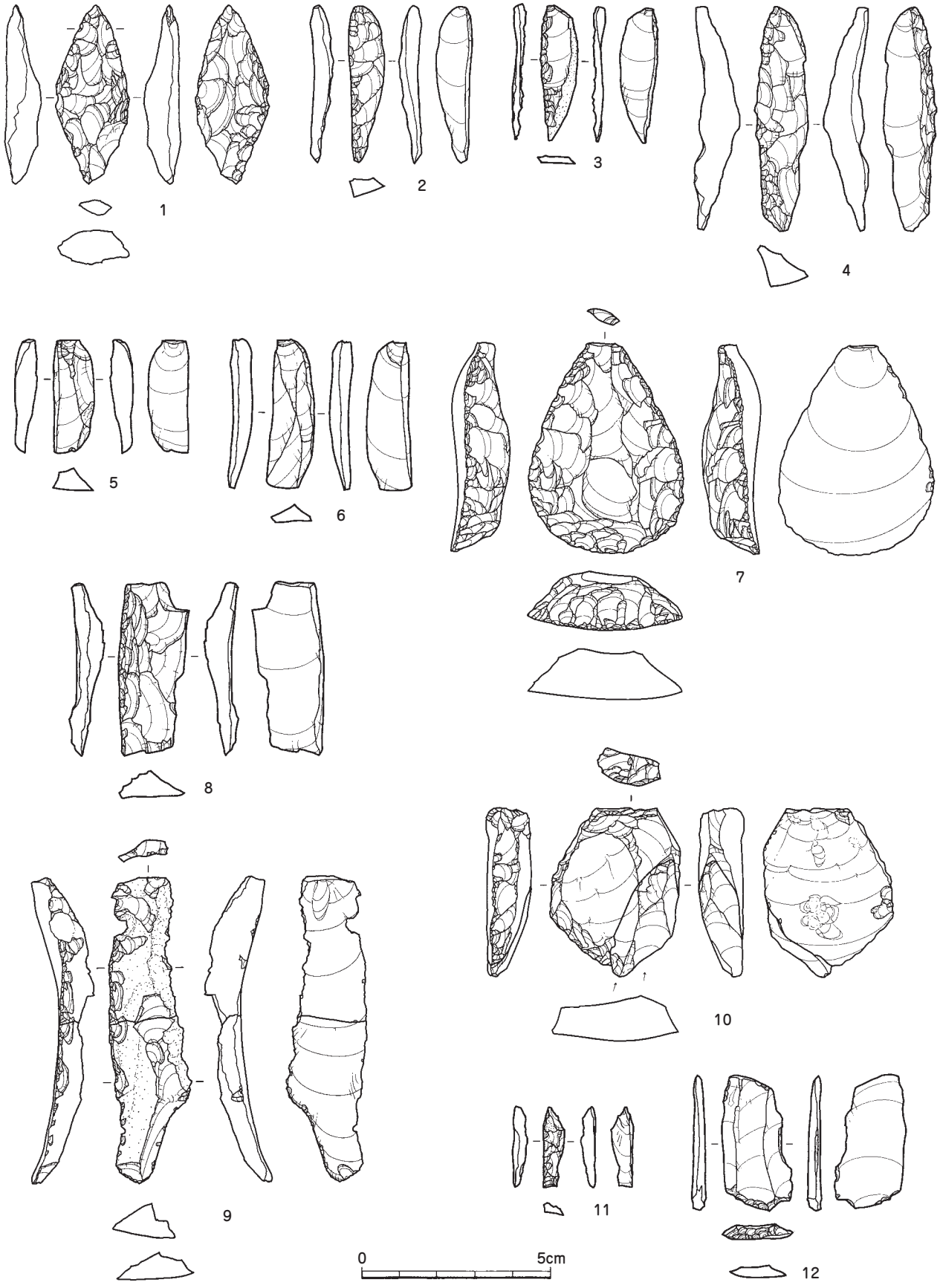
注　特に第Ⅲ層中から出土した剥片・砕片類では明らかに石器製作の最終段階で剥離された翼状剥片（以下、トゥールチップスと記載）がしばしばみられた。このため本報告ではこの種の剥片・砕片類もできるだけ図化するようした。また、その大部分は有樋尖頭器の製作時に剥離されたものと思われるが、他器種の製作もおこなわれているため「トゥールチップス」と呼称することとした。



第８－１図　第１－３Ａ・３Ｂ・４・５地点出土石器分布図



第８－２図　第１－３Ａ・３Ｂ・４・５地点出土石器分布図



第９図　第１－３Ａ地点出土石器（１）

第10図　第１－３Ａ地点出土石器（２）

は片面加工の段階で剥離されたもので、表面の剥離は丁寧に施されている。打点部での平坦面はほとんどみられない。３は薄い剥片で表面には節理面を残す。本資料も片面のみ加工がみられる。打点部での厚みは１mm程度となっている。４は既に両面加工品となっており、尖頭器状の形態を備えていたものを剥離したと考えられる。また､先端部ではさらに小さな剥離が認められるため彫器としての機能も考えたい。５・６も削片としてが、二次的な剥離は認められない。８は黒色安山岩で、先端は折断されている。表面は粗雑な剥離で整形されているが裏面には及ばない。11は小型品であったらしく表面にみられる剥離痕も小さい。先端には異物が混入し、裏面での加工は認められない。

剥片（16～28）　16･18･19は側縁に微細な調整痕が認められる。20には下部側縁に刃こぼれ痕が認められる。いずれも石器として使用された可能性が強い。21～28は薄い剥片で緩やかに弯曲している。この形状から18も含めてトゥールチップスといえよう。18・25の打面部には裏面部でも僅かに剥離痕が認められる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石14点　珪質頁岩49点　硬質頁岩７点　黒色安山岩50点　チャート１点　デイサイト１点

器種　尖頭器１点　掻器１点　削器１点　彫器１　二次加工剥片４点　削片８点　剥片23点　砕片83点　合計122点

第３表　第１－３A地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	P10－75	235	26.820	尖頭器	珪質頁岩	4.84	2.00	0.96	6.53		
2	P10－74	28	26.895	削片	珪質頁岩	4.18	0.94	0.62	1.59		
3	P10－75	118	26.898	削片	珪質頁岩	3.62	1.02	0.32	0.65		
4	P10－75	68	26.893	削片	珪質頁岩	5.98	1.40	1.18	5.37		
5	P10－65	40	26.923	削片	珪質頁岩	3.02	1.12	0.58	1.95		
6	P10－75	64	26.918	削片	珪質頁岩	3.97	1.23	0.59	1.96		
7	P10－74	15	26.887	掻器	珪質頁岩	5.60	4.61	1.50	34.81		
8	P10－74	89	26.780	削片	黒色安山岩	4.59	1.85	0.90	5.29		
9	P10－75	1	26.950	削器	黒曜岩	8.15	2.17	1.69	11.98	接２	使用痕
		245	26.880		黒曜岩						
10	P10－74	14	26.885	彫器	黒曜岩	5.50	3.46	1.20	19.25	接１	
		37	26.886	削片							
11	P10－74	4	26.933	削片	黒曜岩	2.18	0.63	0.41	0.27		
12	P10－75	80	26.913	掻器	黒曜岩	3.59	1.88	0.41	2.25		使用痕
13	P10－75	69	26.896	二次加工	珪質頁岩	8.18	3.86	1.23	21.54	接３	使用痕
		71	26.886	二次加工							
14	P10－65	38	26.944	二次加工	珪質頁岩	7.71	3.61	1.45	25.22		
15	P10－75	233	26.855	二次加工	珪質頁岩	3.97	2.63	1.22	7.55		
16	P10－75	20	26.927	剥片	珪質頁岩	5.23	1.71	0.93	2.45		
17	P10－75	176	26.860	剥片	珪質頁岩	2.35	2.70	0.77	3.95		
18	P10－65	88	26.857	剥片	珪質頁岩	3.23	2.73	0.62	2.22		
19	P10－65	131	26.790	剥片	珪質頁岩	3.36	2.24	0.58	1.59		
20	P10－65	37	26.932	剥片	硬質頁岩	3.17	2.63	0.72	3.89		下端欠
21	P10－75	8	26.905	剥片	硬質頁岩	2.46	1.96	0.30	0.86		
22	P10－74	116	26.726	剥片	珪質頁岩	2.07	2.75	0.46	0.84		
23	P10－64	30	26.848	剥片	珪質頁岩	2.00	2.18	0.69	2.20		
24	P10－74	113	26.788	剥片	珪質頁岩	1.65	2.20	0.23	0.49		
25	P10－75	141	26.893	剥片	珪質頁岩	1.80	1.99	0.41	0.58		
26	P10－75	146	26.818	剥片	珪質頁岩	1.54	1.92	0.30	0.49		
27	P10－75	257	26.758	剥片	黒色安山岩	2.27	2.51	0.31	0.91		
28	P10－74	59	26.900	剥片	黒色安山岩	1.82	2.70	0.69	2.33		

（４）第１－３Ｂ地点（第８図・第11図、図版12）

概要　本地点で出土した石器群は量的には少ないものの稀薄な分布が東西に約10mにわたってみられ、特に石器群が集中して出土しているわけではない。グリッドでいえばＰ９－07・97、Ｐ10－95・96・97となる。ここで出土した石器群の主要石材は珪質岩や黒色頁岩であり、周辺でみられる頁岩系の石器群とは明らかに異なる様相を呈していた。ただ出土層位は前者とほぼ同様であったため一連の石器群として捉えることができるものと考えられる。

出土石器群　石器としてはナイフ形石器と角錐状石器の出土をみただけで、他に注目できるような成品は出土してはいない。

ナイフ形石器（１）　いわゆる切出タイプのナイフ形石器で、横長の剥片を素材としている。両側縁では刃部に至るまで丁寧に整形されている。基部及び裏面での加工はみられない。

角錐状石器（２）　側縁の剥離は整形を兼ねたもので大きく剥離し簡単に仕上げている。他の尖頭器類と比較するとはなはだ粗雑な加工といえる。断面は三角形を呈し、裏面は平坦で整形は認められない。この種の成品は簡単な加工で成品に仕上げていることが特徴となろう。

剥片（３～９・11）　本地点では出土量が少ないため大きめの剥片はすべて図化した。４は石器の素材としては十分であろうが加工の痕跡は認められない。５は弯曲した形状から石器製作途上で剥離された剥片となろう。６は、その形状から２のような石器の素材あるいは未成品とも考えられる剥片である。７は左側縁に微細な剥離が若干認められる。

石核（10）　隣接するグリッド出土品が接合したものである。平坦な打面から数回加撃されているため残核とした。剥離部分を観察すると意識的に抉るような剥離であり、この部分を石器として使用していた可能性が強く感じられる。

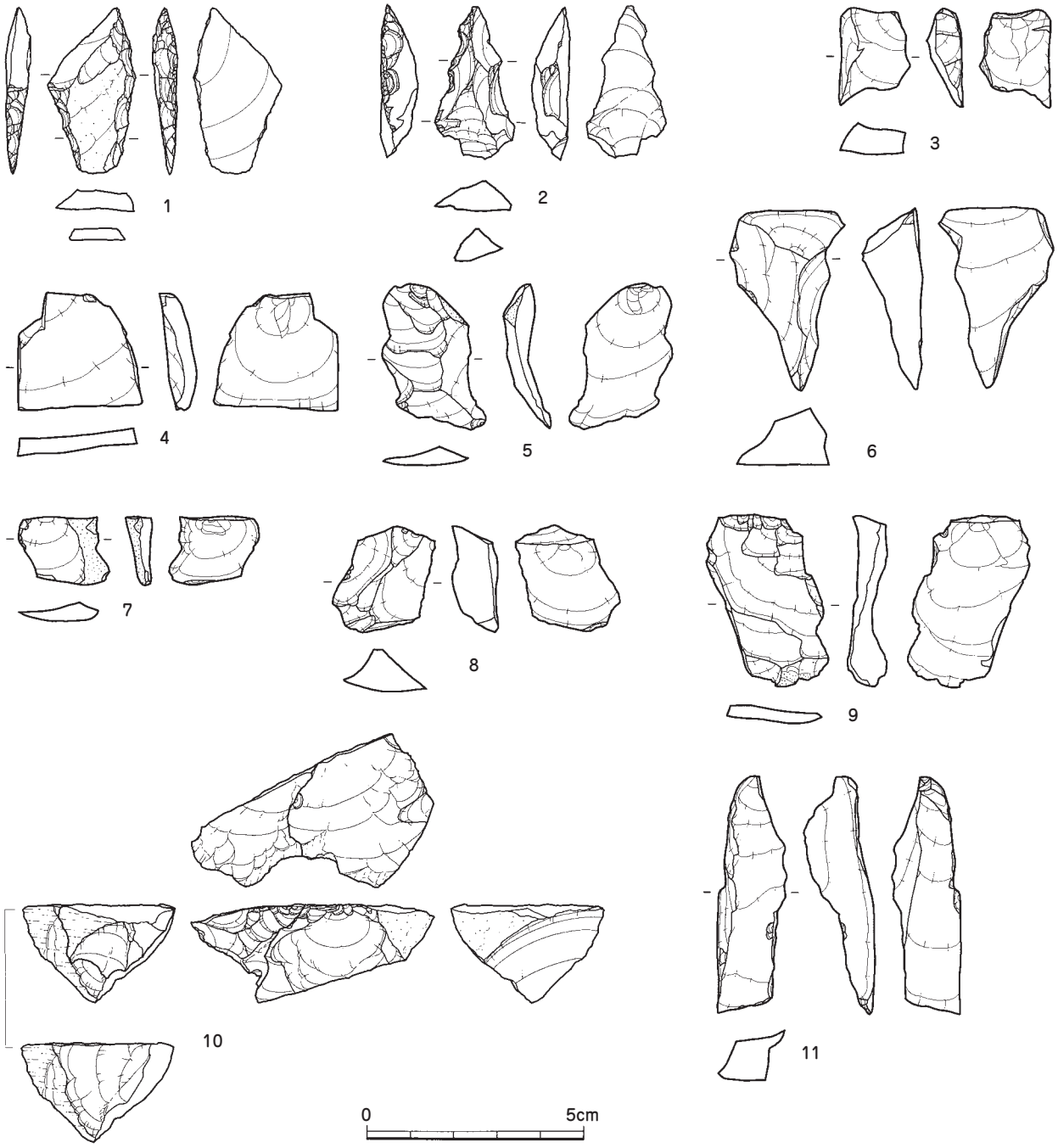
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石２点　頁岩２点　黒色安山岩１点　黒色頁岩９点　珪質岩14点

器種　角錐状石器１点　ナイフ形石器１点　剥片11点　砕片14点　石核１点　合計28点

第４表　第１－３Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｐ９－07	2	26.530	ナイフ形石器	頁岩	3.90	1.90	0.50	3.45		
2	Ｐ９－97	2	26.540	角錐状石器	珪質岩	3.40	1.70	0.80	3.80		右側縁Ｒ
3	Ｐ９－07	8	26.423	剥片	頁岩	2.30	1.65	0.80	2.79		
4	Ｐ10－96	6	26.380	剥片	珪質岩	2.80	2.90	0.55	5.21		
5	Ｐ10－96	3	26.459	剥片	珪質岩	3.35	2.10	0.40	3.39		
6	Ｐ10－95	1	26.695	剥片	珪質岩	4.20	2.40	1.30	8.68		
7	Ｐ９－07	15	26.355	剥片	黒曜石	1.70	1.80	0.50	1.34		
8	Ｐ９－07	11	26.471	剥片	黒色頁岩	2.60	2.05	1.00	470		
9	Ｐ９－07	12	26.485	剥片	黒色頁岩	4.20	2.30	0.60	6.29		
10	Ｐ10－95	3	26.402	石核	珪質岩	3.70	3.30	1.80	23.48	接１	
	Ｐ10－96	2	26.427	石核片	珪質岩	1.80	3.20	1.30	6.10		
11	Ｐ10－96	8	26.345	剥片	珪質岩	5.65	1.50	1.00	9.05		



第11図　第１－３Ｂ地点出土石器

（５）第１－４地点（第８図・第12図～第16図、図版４・13～15）

概要　本地点は、前述した第１－３Ａ地点と同１－５地点に挟まれるような位置に形成されたものであり、石器群出土の中心はＰ10－67・78・88グリッドとなる。その分布範囲は東西に５ｍ幅を持ち、南北に13mの長さで帯状に形成されていた。ここで使用されている石材をみると、珪質頁岩・硬質頁岩が主体となる。次いで黒曜石・珪質岩となり、黒色安山岩以下は10点に満たない。出土層位は、第１－３地点と変わらず第Ⅲ層の中～下層となる。主要石材の構成も類似しており時期的にも近いものといえよう。

出土石器群　出土した石器には、ナイフ形石器、尖頭器、掻器、削器、二次加工剥片、削片などがみられた。尖頭器は樋状剥離により鋭利な先端部を作出するタイプである。このため削片との関連を捉えることができた。さらに本地点でも石器製作に伴うトゥールチップスが多数出土しており、この点でも第１－３Ａ地点と共通する性格をもつ石器群といえよう。

礫群　Ｐ10－57・67グリッドを中心として径７ｍの範囲でほぼ円形に分布していた。第１－３Ａ地点同様砕けた礫片が多く、原形をとどめるものは少なかった。

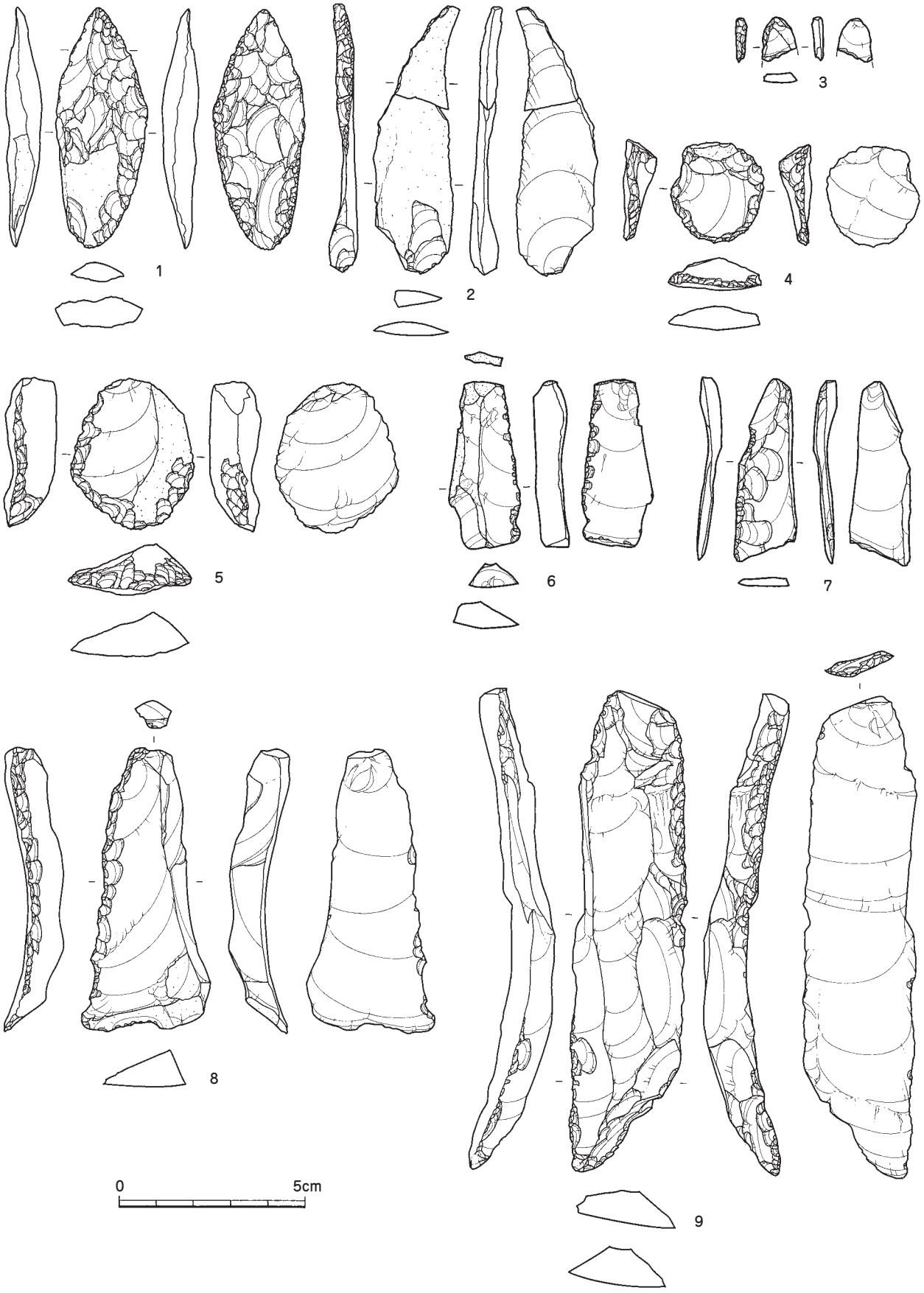
尖頭器（１）　粗雑な作りであるが、有樋尖頭器としてよいであろう。表面では基部周辺に節理面を残す。右側縁の加工は全面にわたって施されているが、左側縁では基部周辺の整形にまでは至っていない。３cm程の刃部では刃こぼれ痕が認められる。なお本地点ではもう１点尖頭器の一部が出土しているが、第１－９地点の尖頭器と接合したため後述することにする。

ナイフ形石器（２・46・47）　２は隣接するグリッドから出土した２点が接合した資料である。接合部の欠損は破損したときに生じたものであろう。先端部も僅かに欠損する。基部は２回の剥離により整形されている。左側面での剥離痕は加撃によるものである。おそらく打面再生により得られた縦長の剥片を利用し、細部を調整してナイフ形石器として使用したものであろう。右側縁部には刃こぼれ痕が観察できる。46は隣接するグリッドで接合した剥片である。左側面の中央部には数回の粗い二次剥離がみられる。基部での調整は認められない。47は同一グリッドから出土した剥片が接合したものであり、左側面に数回の剥離が施されている。おそらく大きく剥離した時に破損したものであろう。ここでも基部の加工はみられない。粗雑な作りであるが、背面加工という点からナイフ形石器とした。

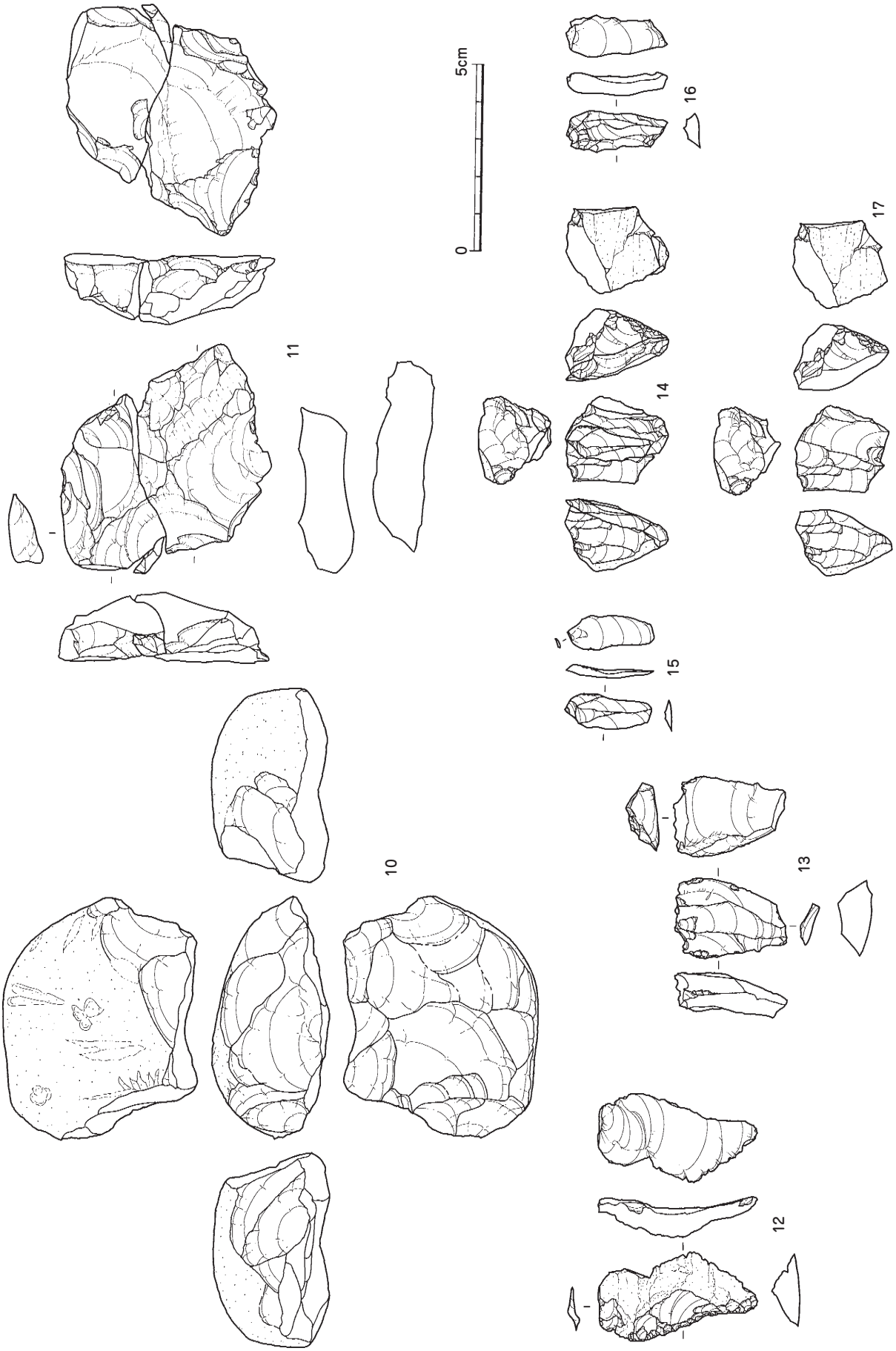
掻器（４・５）　４は、掻器としては小型の部類となろう。上部では表皮部分がみられ、平坦ながらも若干の整形が加えられている。周囲は半円状に整形した後、丁寧に調整剥離を施して仕上げている。石材は珪質岩としたが、いわゆる白滝頁岩と称されているものに近い。５は粗い作りの掻器であり、表面には大きな剥離痕と自然面を残す。打点部周辺での整形は認められない。周囲も粗い整形に終始している。石材はチャートとしたが、乳白色を呈し器面はザラついており石英的な石質を有したものである。

削器（８・９・12）　８は断面三角形の縦長剥片を素材としたもので左側縁をきれいに整形し刃部としている。さらに下端部にも微細な調整痕が認められる。一方、右の側縁は無加工で若干の使用痕がみられる程度である。９は緩やかに弯曲する石刃状の縦長剥片を素材とし、打面部にも整形を加えている。特に下端部周辺では入念に刃部としての加工が施されている。12は表皮部分を素材としたもので、右側縁部のみを刃部として加工している。石材とした黒曜石は異物の混入により一部乳白色を呈しており、第６図４の成品と近似する。

二次加工剥片（６）　半透明の黒曜石だが小石を含有している。折断した石刃状剥片を素材としたもので、右側縁の表裏両面に刃潰し状の小さな剥離を加えており、削器のような石器として使用したものであろう。

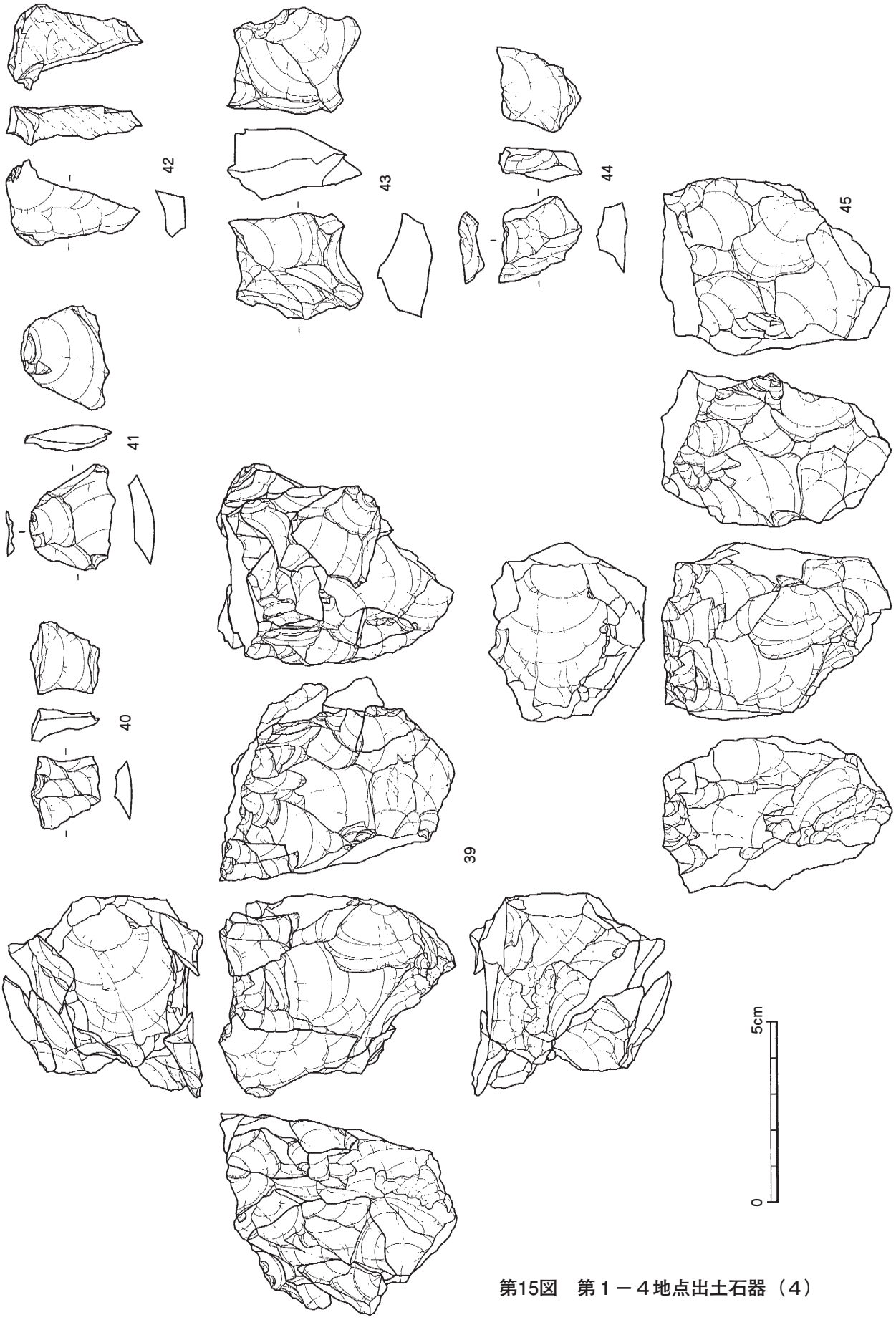


第12図　第１－４地点出土石器（１）

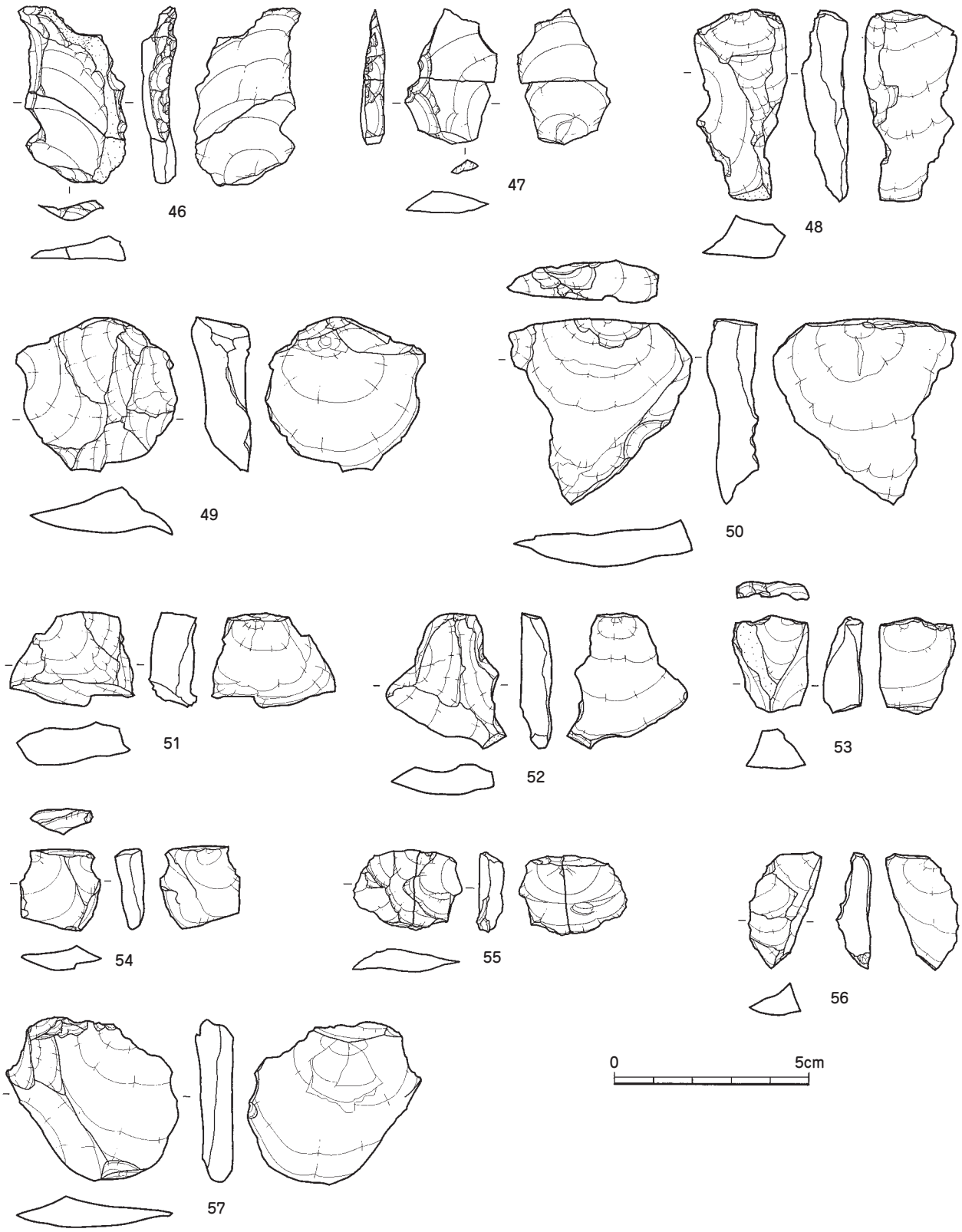


第13図　第１－４地点出土石器（２）

第14図　第１－４地点出土石器（３）



第15図　第１－４地点出土石器（４）



第16図　第１－４地点出土石器（５）

削片（３・７） ３は折断により上部だけが遺存したものである。７は明確な削片であり、左の側縁には鱗状のきれいな押圧剥離が認められる。その後、さらに小さな調整剥離が加えられている。また、その上部にはノッチ状の剥離が認められるため石器としても使用していたとも思われる。

剥片（11・14～16・18～44・48～57） 剥片類については43点を図示した。15・16は小石刃で石核に接合した。18～38は薄くかつ緩やかに弯曲している剥片で、石器製作過程の途上で廃棄されるトゥールチップスとであろう。これらの剥片の中には、さらに微細な調整痕・使用痕（18・19・22・28・30）を確認できるところから何らかの用途に供したものと思われる。49・57は石器素材としては十分な形状を維持しているが、二次的な剥離は認められない。

石核（10・13・17・45） ここでの石核は二種に分類できる。13・17は小型の石刃核となる。13は表面中央にきれいな剥離痕がみられる。打面調整も痕跡を残す程度となっている。17は剥離された剥片（15・16）が隣接するグリッドから出土し接合したものである。接合した剥片は上下方向から剥離されている。これらは小石刃の剥離を目的としたものであろう。いずれも細石刃核を大型化したような石核であり、この時期に伴うものと考えられる。10は十分に剥片剥取された残核といえよう。打面には粗雑な打面調整の剥離が周囲にみられる。しかし、この種の剥片は出土していない。表面は風化が著しい。45は珪質岩で内部に異物の混入等がみられる。８点の剥片が接合したが、質的に劣悪のため剥離途中で放棄された残核と思われる。46～50、52～54の剥片も本残核から剥取された可能性が高い。他にデイサイトの残核が１点存在した。剥片も数点みられたが、トロトロ石と称されるだけに風化が著しいため作図は省略した。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材 黒曜石45点 珪質頁岩55点 硬質頁岩68点 珪質岩43点 頁岩１点 黒色安山岩７点 安山岩１点 黒色頁岩１点 ホルンフェルス４点 チャート８点 デイサイト６点 石英４点

器種 尖頭器１点 ナイフ形石器３点 掻器２点 削器３点 二次加工剥片１点 削片２点 剥片77点 砕片149点 石核４点 円礫１点 計243点

第５表 第１－４地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	P10－67	216	26.771	有樋尖頭器	珪質頁岩	6.46	2.50	1.38	13.43		
2	P10－67	112	26.916	ナイフ形石器	珪質頁岩	7.17	2.23	0.75	6.83	接４	
	77	15	26.919								
3	P10－57	34	26.988	削片	硬質頁岩	1.17	0.93	0.33	0.30		
4	P10－78	29	26.540	掻器	珪質岩	2.71	2.49	0.88	5.02		
5	P10－78	28	26.533	掻器	チャート	4.02	3.31	1.38	15.49		
6	P10－67	384	26.792	二次加工	黒曜石	4.52	1.88	0.89	6.65		下端欠・右側U
7	P10－67	97	26.865	削片	珪質頁岩	1.95	1.65	0.61	2.70		
8	P10－56	26	26.865	削器	珪質頁岩	7.62	3.45	1.62	22.39		
9	P10－67	241	26.785	削器	珪質頁岩	12.94	3.01	2.21	48.84		
10	P10－78	1	26.805	石核	安山岩	3.10	6.40	5.15	120.12		円礫素材
11	P10－67	286	26.701	剥片	珪質頁岩	5.60	6.16	1.83	51.77	接２	厚手剥片素材
		372	26.690	剥片	珪質頁岩						
		510	26.697	砕片	珪質頁岩	0.55	1.60	0.36	0.19		
12	P10－88	14	26.926	削器	黒曜石	4.23	2.35	1.06	4.98		
13	P10－78	11	26.782	石核	黒曜石	3.0	2.16	1.22	5.27		石核片
14	P10－57	10	26.925	石核	黒曜石	2.82	2.40	1.98	9.75	接10	3点の接合
	P10－57	84	26.777								
	P10－67	257	26.779								

15	P10－57	10	26.925	剥片(小石刃)	黒曜石						
16	P10－67	257	26.779	剥片(　〃　)	黒曜石						
17	P10－57	84	26.777	石核	黒曜石						
18	P10－66	27	26.880	剥片	珪質頁岩	3.85	4.89	0.90	10.08		上端欠
19	P10－67	529	26.637	剥片	硬質頁岩	3.66	4.28	0.71	5.97		
20	P10－77	13	26.877	剥片	珪質頁岩	3.14	3.70	0.62	3.86	接5	
	P10－77	14	26.877	剥片	珪質頁岩						
21	P10－62	1	26.945	剥片	硬質頁岩	2.80	2.83	0.45	1.55	接6	
	77	1	26.860	砕片	硬質頁岩						
22	P10－67	467	26.701	剥片	硬質頁岩	2.20	2.70	0.51	1.39		
23	P10－57	4	26.919	剥片	珪質頁岩	2.54	3.93	0.52	2.52	接1	
		66	26.776		珪質頁岩						
24	P10－67	24	26.988	剥片	硬質頁岩	2.01	3.22	0.42	1.38		
25	P10－67	587	26.600	剥片	硬質頁岩	2.17	2.19	0.28	0.68		
26	P10－77	6	26.837	剥片	硬質頁岩	1.97	2.63	0.34	1.43		
27	P10－67	406	26.667	剥片	硬質頁岩	2.15	1.88	0.53	1.54		
28	P10－67	31	26.907	剥片	硬質頁岩	3.45	2.19	0.48	2.49		
29	P10－67	51	26.915	剥片	硬質頁岩	2.81	1.56	0.34	0.93		上端欠
30	P10－67	137	26.786	剥片	珪質頁岩	3.19	2.05	0.69	2.28		
31	P10－67	228	26.815	剥片	硬質頁岩	1.44	1.79	0.34	0.44		
32	P10－66	41	26.765	剥片	珪質頁岩	2.0	1.63	0.32	0.50		
33	P10－67	300	26.711	剥片	珪質頁岩	1.86	1.48	0.30	0.41		
34	P10－67	72	26.818	剥片	硬質頁岩	2.46	1.91	0.74	1.94		
35	P10－67	299	26.705	剥片	硬質頁岩	2.0	1.24	0.39	0.40		
36	P10－67	483	26.625	剥片	硬質頁岩	1.54	1.98	0.34	0.64		
37	P10－67	23	26.867	剥片	硬質頁岩	1.12	1.78	0.20	0.19		
38	P10－56	27	26.868	剥片	硬質頁岩	3.01	1.83	0.80	1.80	接8	
	77	33	26.814	剥片	硬質頁岩						
39						6.49	5.8	5.5	179.10	接14	9点の接合
45	P10－78	24	26.542	石核	珪質岩	6.31	4.94	4.34			
41		33	26.670	剥片	珪質岩	2.43	2.90	0.74			
42		50	26.514	剥片	珪質岩	3.70	2.40	1.09			
	87	3	26.763	剥片	珪質岩						
	88	1	26.522	剥片	珪質岩						
		20	26.521	剥片	珪質岩						
		22	26.529	剥片	珪質岩	2.33	2.40	0.95			
40	89	4	26.470	剥片	珪質岩	1.90	2.02	0.94			
43	P 9 －07	13	26.390	剥片	珪質岩	3.70	3.0	1.94			
46	P10－88	3	26.567	ナイフ形石器	珪質岩	4.54	2.55	0.89	8.17	接12	
	89	2	26.745								
47	P10－88	23	26.405	ナイフ形石器	珪質岩	3.48	2.08	0.60	4.24	接13	
		25	26.484								
48	P10－88	27	26.487	剥片	珪質岩	4.89	2.28	0.97	10.06		
49	P10－88	9	26.582	剥片	珪質岩	3.88	3.72	1.37	18.50		
50	P10－88	21	26.487	剥片	珪質岩	4.69	4.62	0.98	18.74		
51	P10－78	38	26.611	剥片	珪質岩	2.35	3.21	1.05	8.53		
52	P10－88	19	26.590	剥片	珪質岩	3.34	3.14	0.76	7.05		
53	P10－88	18	26.610	剥片	珪質岩	2.41	1.95	0.98	4.72		
54	P10－78	34	26.723	剥片	珪質岩	2.01	2.01	0.63	2.52		
55	P10－78	41	26.594	剥片	チャート	2.05	2.79	0.60	3.32	接11	
		44	26.651								
56	P10－78	42	26.697	剥片	チャート	2.86	1.33	0.82	2.99		
57	P10－89	6	26.512	剥片	黒色頁岩	4.50	4.21	0.74	13.53		

（６）第１－５地点（第８図・第17図～第20図、図版４・16～18）

概要　本地点は前述した第１－４地点の東に位置し、石器群はほぼ円形に纏まり径６ｍから７ｍの範囲に散布していた。その中心はＰ10－59・69グリッドとなる。特にＰ10－59グリッドでは濃密に分布していた。出土層位は、第１－３・４地点とほぼ同様で第Ⅲ層の中～下層となる。出土した石器群の石材についてみると珪質頁岩が主体となり、次いで硬質頁岩・黒曜石となる。いわば頁岩系で80％以上を占めるような構成となっていた。このため出土層位・採用石材といった点からも時期的に第１－３・４地点の石器群と同時期に営まれたものと思われる。

出土石器群　出土した石器には、尖頭器、ナイフ形石器、掻器、削器、彫器、錐、二次加工剥片、削片など多彩な器種がみられた。ここで特筆できることは、彫器とした３点はすべて彫器以外の機能も有しているものである。こうした器種は他の地点でも出土しており、この時期には取り立てて珍しい事例といえないようである。また石刃状のきれいな縦長剥片も特徴的である。こうした縦長の剥片では18のように折断し、複数の石器に加工していたようである。

礫群　Ｐ10－59グリッドを中心として南北に７ｍ、東西の５ｍの範囲に礫群がみられた。ここでは破砕している礫も多かったが、原形をとどめる礫も少なくなかった。また礫群とともに炭化物も広範囲に認められた。

ナイフ形石器（１）　左斜め方向からの剥離により刃部を作出している。表面下半の一部には自然面がみられる。刃部を除く側縁は入念な調整加工が施されている。裏面での加工は認められないためナイフ形石器とした。石材は珪質頁岩としたが、本資料以外の珪質頁岩の剥離面は滑らかで灰白色を呈しているのに対し、本資料のみ灰褐色で剥離面は滑らかではなくザラつきが感じられる。

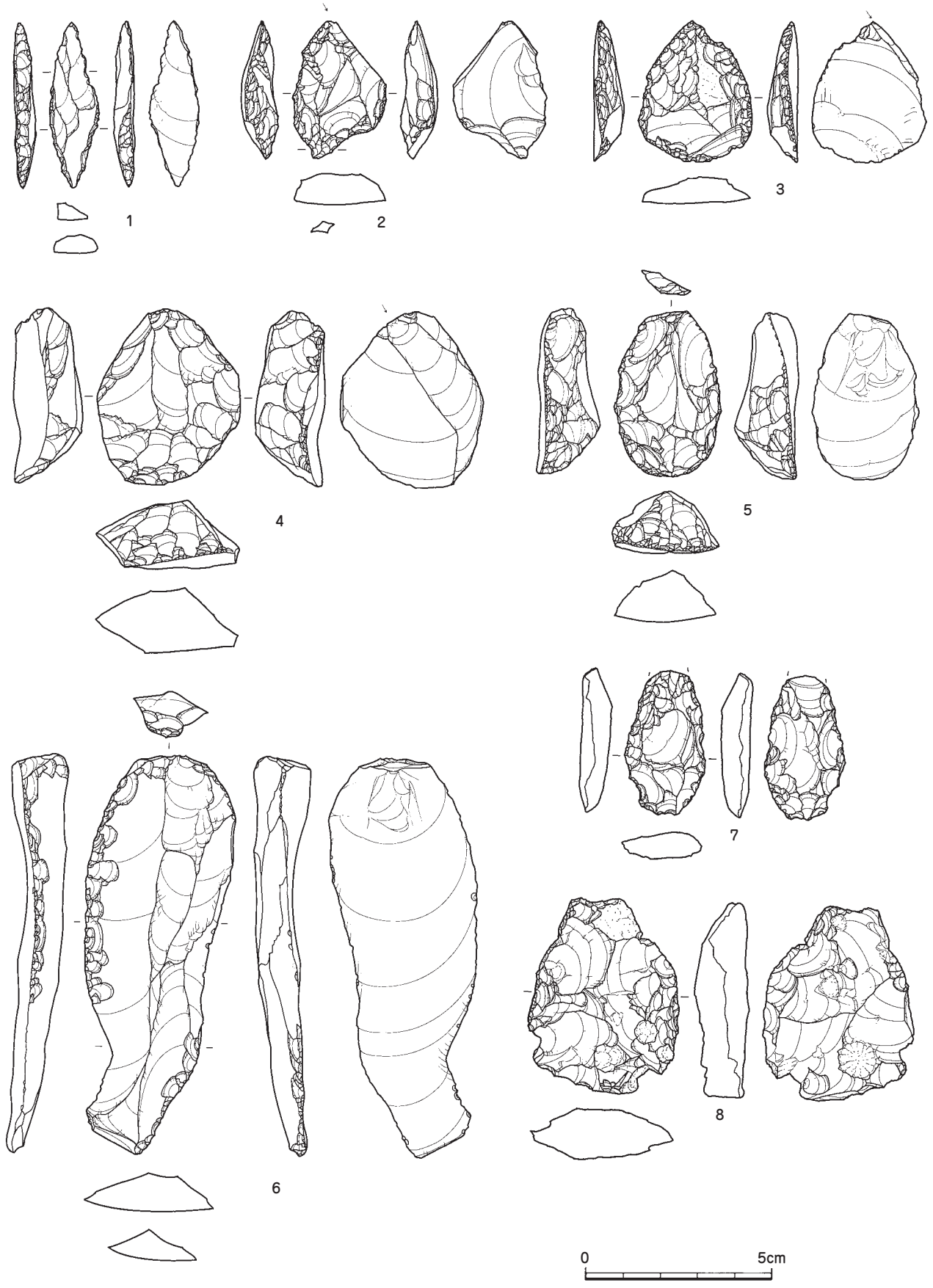
尖頭器（７）　両面加工品で先端を欠失している。側縁の加工は全面にわたっているが均整のとれた加工とはいえない。基部では微細な剥離により掻器状の刃部を作出している。これは先端部に欠損が生じたため基部を再加工し器種変更した可能性も考えられる。

掻器（５）　打面部は未加工ながらも頂点を中央やや下部におき均整のとれた典型的な掻器である。刃部はほぼ半円形に整形され、緻密な剥離によって整えられている。

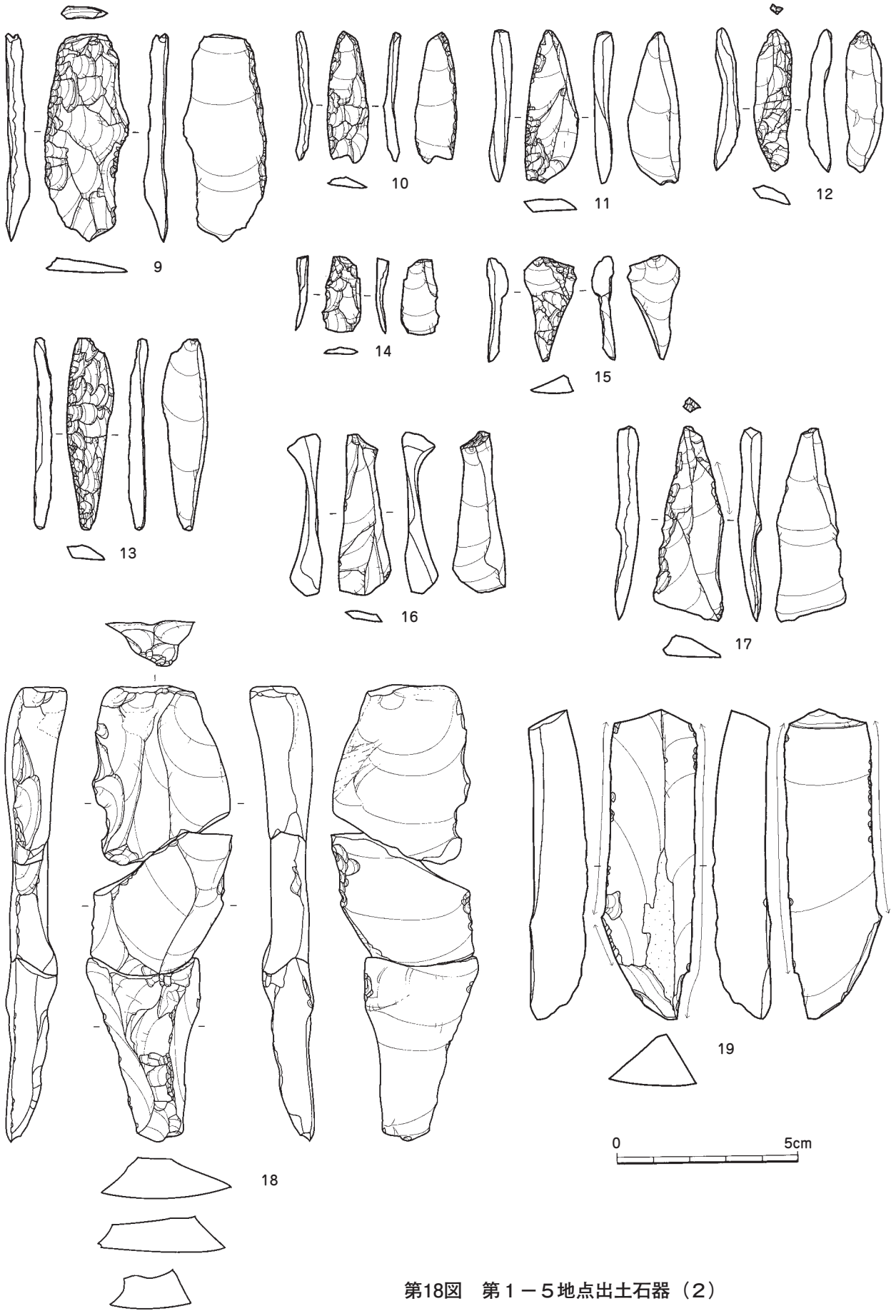
削器（６・８）　６は石刃状の縦長剥片を素材とし、張り出した部分を削除しつつ刃部を作出している。裏面での剥離は認められないが、使用時にできたと思われる刃こぼれ痕が若干みられる。８は径数mmの小石を含有する黒曜石を用いており、小石を含まない右側縁の両面から剥離を施し刃部作り出している。また上部の弯曲した部分でも調整剥離が施されており、この部分も使用していたものと考えられる。

彫器（２～４）　３点出土しており、いずれも彫器以外の機能を有する石器と考えられる。２は上下両端に意識的な剥離が認められ、側縁でも整形後に微細な剥離が施されている。さらに弯曲部の整形と突出した部分から錐としての機能も兼ねていたように思われる。３は尖頭器状に整形された石器で、裏面に1.5mm幅の樋状剥離が認められるため彫器とした。側縁部は削器として十分使用できるような剥離が施されている。４の形状は明確な掻器を想起させるものである。刃部となる右側縁部では調整剥離まで緻密に施しているが、裏面にみられる上部からの大きな剥離は最後に施されたものである。この点からも主目的は彫器の製作にあったものと思われる。

錐（43）　周囲を整形した後、下端部を数回の剥離で抉り断面三角の尖った部分を作出し錐としての機能を持たせたものと思われる。一方、裏面上部では斜方向から加撃しているところをみると彫器としての機

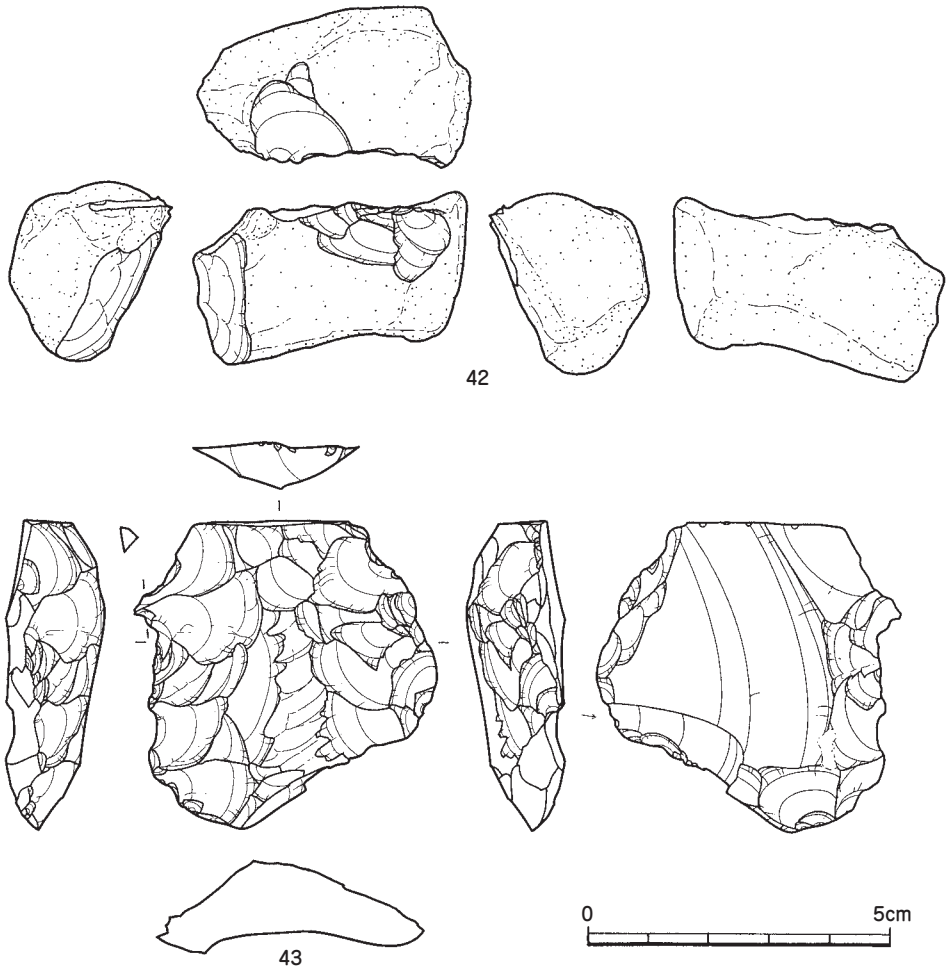


第17図　第１－５地点出土石器（１）



第18図　第１－５地点出土石器（２）

第19図　第１－５地点出土石器（３）



第20図　第１－５地点出土石器（４）

能も保持していたようである。

二次加工剥片（18～20・28）　18は分割された３点が接合した例である。中央の右側縁では表裏面に整形のための剥離が施されている。また左の側縁では上部が整形され、下部には刃こぼれ痕が認められる。19は左の側面を小さな剥離で整形し、両側縁では顕著な刃こぼれ痕が認められる。20は縦長の石刃状の剥片であるが、弯曲しており削片として剥離された可能性も否定できない。形状の整った剥片であったため剥離された後、右側縁部を再度剥離し削器様石器として使用していたものであろう。28は下端部に数回の剥離が施されている。

削片（９～17）　１－３地点同様削片の出土数が目立つ。９・10は両面加工品から剥離したものである。９の下端部には使用痕が残る。11～15・17は片面加工品から剥取されたもので、12は唯一黒曜石製であり、異物の混入も若干認められるが、右側縁ではさらに調整が加えられている。石器として使用された可能性が強い。17でも使用の痕跡を残す。16での整形剥離は認められない。先端部の剥離状況から彫器の刃部再生剥片と見做される。

剥片（21～27・29～41）　21は削片とも思われるが、側縁に微細な剥離が施されているためにここに含めた。このような微細な剥離や使用痕らしき痕跡が認められるものに21・22・23・29・36・38・39・40がある。また26・27などはトゥールチップスとなろう。なお33は、その形状から小石刃とも考えられる。

石核（42） 小型の方形礫から剥片の剥取を試みたものの良好な剥片が得られず廃棄されたものであろう。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材 黒曜石14点 珪質頁岩65点 硬質頁岩20点 デイサイト２点 砂岩１点

器種 尖頭器１点 ナイフ形石器１点 掻器１点 削器２点 彫器３点 錐１点 二次加工剥片４点 削片９点 剥片28点 砕片51点 石核１点 計102点

第６表 第１－５地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	P10－69	144	27.793	ナイフ形石器	珪質頁岩	4.40	1.35	0.50	2.98		
2	P10－69	280	28.003	彫器	硬質頁岩	2.40	3.70	0.70	8.41		
3	P10－59	63	27.913	彫器	硬質頁岩	2.45	3.00	0.80	7.87		
4	P10－69	144	27.793	彫器	珪質頁岩	4.70	3.80	1.80	30.24		(掻器)
5	P10－59	47	28.013	掻器	珪質頁岩	4.50	2.80	1.65	18.96		
6	P10－58	134	27.773	削器	珪質頁岩	10.80	3.80	1.30	46.71		
7	P10－59	253	27.778	尖頭器	黒曜石	3.90	2.15	0.70	6.63		先端欠
8	P10－59	121	27.803	削器	黒曜石	5.25	4.00	1.40	27.37		
9	P10－59	336	27.788	削片	珪質頁岩	5.65	2.30	0.50	6.22		(削器)
10	P10－59	90	27.938	削片	珪質頁岩	3.60	1.10	0.30	1.23		
11	P10－59	480	27.778	削片	珪質頁岩	4.20	1.40	0.35	2.59		
12	P10－69	133	27.743	削片	黒曜石	3.85	1.00	0.40	1.69		
13	P10－69	208	27.828	削片	珪質頁岩	1.25	1.30	0.30	2.25		
14	P10－59	729	27.903	削片	珪質頁岩	2.00	1.10	0.20	0.49		
15	P10－59	553	27.663	削片	珪質頁岩	2.70	1.40	0.50	1.15		
16	P10－59	451	27.713	削片	珪質頁岩	4.40	1.40	0.65	3.06		
17	P10－59	72	27.795	削片	珪質頁岩	5.20	1.95	0.50	4.19		
18	P10－59	407	27.913	二次加工	珪質頁岩	4.90	3.60	1.40	19.11	接１	
	P10－69	82	27.788	二次加工	珪質頁岩	8.40	3.50	1.30	23.41		右側U
19	P10－68	63	27.778	二次加工	珪質頁岩	8.40	2.50	1.40	28.60		両側U
20	P10－59	120	27.778	二次加工	珪質頁岩	6.30	2.10	0.70	8.18		両側U
21	P10－59	243	27.853	剥片	珪質頁岩	6.30	1.40	0.80	5.17		
22	P10－59	164	28.058	剥片	硬質頁岩	4.75	3.40	0.70	9.67		
23	P10－59	249	27.838	剥片	硬質頁岩	2.30	3.10	0.45	2.26		
24	P10－69	162	27.638	剥片	珪質頁岩	2.00	2.20	0.35	1.73		
25	P10－58	95	27.833	剥片	硬質頁岩	1.60	2.20	0.60	2.40		
26	P10－59	171	28.138	剥片	珪質頁岩	2.10	2.10	0.30	0.76		
27	P10－59	395	27.803	剥片	珪質頁岩	1.70	2.40	0.35	0.91		
28	P10－59	681	27.708	二次加工	珪質頁岩	2.20	1.65	0.40	1.34		
29	P10－59	689	27.818	剥片	珪質頁岩	2.40	1.70	0.60	1.98		
30	P10－59	130	27.923	剥片	珪質頁岩	2.80	1.60	0.30	1.01		
31	P10－59	536	27.718	剥片	珪質頁岩	2.74	1.55	0.65	2.17		
32	P10－69	213	27.738	剥片	珪質頁岩	2.70	1.20	0.50	1.16		
33	P10－59	284	27.778	剥片	珪質頁岩	2.85	1.00	0.20	0.41		小石刃
34	P10－59	118	27.838	剥片	珪質頁岩	1.80	1.10	0.20	0.34	接４	
		390	27.678	剥片	珪質頁岩	1.65	1.45	0.35	0.68		
35	P10－59	74	28.033	剥片	硬質頁岩	1.90	1.60	0.25	0.55		
36	P10－58	24	27.883	砕片	珪質頁岩	1.60	1.40	0.30	0.66		
37	P10－59	592	27.618	剥片	珪質頁岩	1.70	1.50	0.20	0.32		
38	P10－58	55	27.942	剥片	黒曜石	4.05	1.60	0.55	3.26		
39	P10－68	94	27.638	剥片	黒曜石	2.82	3.30	0.64	4.70		
40	P10－68	74	27.778	剥片	黒曜石	2.02	1.21	0.54	1.39		
41	P10－58	65	28.118	剥片	黒曜石	1.50	1.90	0.40	0.69		
42	P10－68	61	27.788	石核	珪質頁岩	8.40	2.50	1.40	28.60		
43	P10－58	131	27.753	錐	珪質頁岩	5.10	4.95	1.30	30.94		(彫器)

（7）第１－６A地点（第21図～第24図、図版５・19・20）

概要　本地点は前述した第１－２地点、同１－５地点の東に位置し、石器群は径８ｍないし９ｍの範囲で略円形に分布していた。その中心はO10－50グリッドとなり、同40・41・51グリッドにも広がりをみせる。出土層位は第１－３A地点や同１－４・５地点と同様に第Ⅲ層の中層～下層と捉えることができた。出土した石器群の石材についてみるとやはり頁岩系が主体となり、黒曜石が若干混在する程度となっている。このように頁岩系が中心となるところは隣接する第１－５地点と共通するところである。

出土石器群　出土した石器には、尖頭器、掻器、削器、彫器、錐、二次加工剥片、削片など一応の器種がそろっている。しかし、削片に伴うような有樋尖頭器は検出されていない。また彫器についてみると、3点出土しており、うち２点は第１－５地点出土のタイプと同様な形態を示している。この点からも両地点は密接に関連しているともいえよう。

礫群　本地点の石器群と重複するような位置で被熱した礫群がみられた。とりわけO10－41グリッドと同51グリッドを中心として径６ｍほどの範囲では濃密な分布が認められた。

尖頭器（１）　１は約６ｍの距離をもって４点が接合した尖頭器である。両面加工を施した尖頭器で整った形状を呈しているにも拘わらず、さらに中央部で剥離を試みたものである。その結果、大きすぎた剥離により深く抉れたため中央部から破損してしまったものであろう。先端部にみられる剥離からは、尖頭器製作時に剥離されるトゥールチップスの形がよく理解できる。

掻器（３）　表面中央のやや下部が高く盛りあがるタイプで、打面部も丁寧に削除されている。刃部は半円状に整形された後に緻密な調整剥離を施しきれいな掻器に仕上げている。

削器（４）　掻器状の形態を呈しているが、下端刃部の加工が稀薄なため削器とした。薄手の大型剥片を素材とし両側縁では丁寧な加工が施され、右側縁部は打面近くにまで及ぶ。

彫器（２・５・34～36）　２は片面加工尖頭器のような形態で先端部の加工には細部の調整も認められる。裏面に施された細い樋状剥離痕が特徴といえる。５は薄く小型の剥片を素材としたもので、両側縁および上部にも剥離が加えられている。形態的には掻器のようにも思える。ただ、図示したように上部では右方向からの加撃によって形成された細い剥離面がみられる。これは２や第１－５地点出土の彫器と同様な作りと見做される。35は折断された大型剥片を素材として製作された彫器である。３点の接合であり、34は35の表面に、36の剥片が接合したものである。35の左上方からの剥離が認められるため彫器とした。２点の剥片は形状を整えるために剥離されたものであろう。裏面にも整形のための二次剥離が施される。

二次加工剥片（９～12）　４点が出土しており、いずれも大型剥片の側縁部を加工し削器としての機能をもたせたものと思われる。９は整形を兼ねた剥離が両側縁の上半部に施される。10でも側縁中央部に剥離を施している。11は上端に若干の剥離が認められ、左側縁では著しい使用痕が観察できる。12は薄く長い剥片を折断したもので、左右の側縁部には微細な調整痕が密に認められる。

削片（６～８）　６は同一グリッド出土の２点が接合したものである。左側面でも剥離の痕跡を残すことから両面加工の尖頭器から剥離されたものであろう。本削片の右側縁では微細な調整痕が認められるところから石器として使用する目的で上部を折断したものと思われる。石材は黒曜石で半透明の良質品である。７の削片は、裏面では平坦な主剥離面を若干残す。その形状から彫器面を作出するために剥離された削片とも考えられる。８はきれいに樋状剥離された削片で、裏面でも僅かな調整痕が認められる。

剥片（13～28・30～33・37～39）　13～28はトゥールチップスと考えられる剥片を図化した。17では打面

010-40
010-41
010-42
010-43
010-44
010-45
010-46
010-50
010-51
010-52
010-53
010-54
010-55
010-56
010-60
010-61
010-62
010-63
010-64
010-65
010-66
010-70
010-71
010-72
010-73
010-74
010-75
010-76
010-80
010-81
010-82
010-83
010-84
010-85
010-86

接2
34
37
38
接4
19
1-6A地点

接1
18
16
15
2
17
19
1-7A地点
20
18
21

第1-7B地点10と接合
21
接4
22
接1
1-8地点

17
1-6B地点

黒　黒曜石
青　ホルンフェルス・流紋岩
赤　焼礫

■ 石核
○ 削片
● 剥片
• 砕片
△ 礫片
▲ 尖頭器
△ 樋状尖頭器
⊙ 掻器・削器・彫器
◫ 楔形石器

0　4m

28.0m
27.0m
Ⅱa
Ⅱb
Ⅲ
Ⅳ～Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
28.0m
27.0m

第21－１図　第１－６Ａ・６Ｂ・７Ａ・８地点出土石器分布図

O10-41
O10-43
O10-44
O10-45
O10-46
O10-52
O10-53
O10-62
O10-64
O10-65
O10-66
O10-71
O10-72
O10-73
O10-74
O10-75
接2
接4
接5
接6
接7
接8
1-7A地点
1-8地点
1-6A地点
1-6B地点
第1-5地点
第1-5地点

黒　頁岩（硬質・珪質）
青　デイサイト・砂岩・頁岩（1-8地点）

0　4m

■ 石核
○ 削片
● 剥片
• 砕片
△ 礫片
▲ 尖頭器
△ 樋状尖頭器
⊙ 掻器・削器・彫器
⏀ 楔形石器

28.0m
27.0m
Ⅰa
Ⅱb
Ⅲ
Ⅳ～Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ

第21－２図　第１－６Ａ・６Ｂ・７Ａ・８地点出土石器分布図

第22図　第１－６Ａ地点出土石器（１）

第23図　第１－６Ａ地点出土石器（２）

第24図　第１－６Ａ地点出土石器（３）

部に明確な押圧剥離痕が残されている。27の下端部は半円状に抉られており石器として使用されたものであろう。30は３点が接合したもので、これらも剥片の形状から石器製作時に剥取されたものである。37～39は黒曜石製の剥片で、これらも石器製作時の剥片となろう。39の表面には上方から剥離された平坦な面が特徴的である。37も同様な剥片となろうが、両側縁では刃こぼれ状の使用痕が認められた。

石核（29） 残核と考えられる資料が１点のみ出土した。第Ⅲ層出土の石刃状剥片は９や12でみられるように大型の剥片がしばしばみられる。それに対し本資料は5.0cm程度の遺存であり、このことから石核としては最後まで打面調整を施しながら剥片を剥取したようである。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材 黒曜石14点 珪質頁岩61点 硬質頁岩24点 頁岩６点 デイサイト１点

器種 尖頭器１点 掻器１点 削器１点 彫器３点 二次加工剥片４点 削片３点 剥片38点 砕片54点 石核１点 計106点

第７表 第１－６Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O10－41	105	27.758	尖頭器	珪質頁岩	9.90	3.40	1.40	27.08	接４	半欠・加工片2点接合
		188	27.818	尖頭器	珪質頁岩						
		391	27.431	剥片	珪質頁岩						
	O10－50	31	27.923	剥片	珪質頁岩						
2	O10－51	11	27.983	彫器	硬質頁岩	4.40	2.40	0.80	8.02		
3	O10－51	250	27.603	掻器	硬質頁岩	3.80	3.00	1.30	17.48		
4	O10－51	286	27.688	削器	硬質頁岩	7.50	4.00	0.70	23.10		
5	O10－51	166	27.703	彫器	硬質頁岩	2.60	2.20	0.50	4.97		
6	O10－51	14	27.923	削片	黒曜石	3.40	1.70	0.40	2.86	接１	
		197	27.678	削片	黒曜石						
7	O10－51	278	27.703	削片	珪質頁岩	3.40	1.50	0.60	2.16		
8	O10－41	301	27.698	削片	硬質頁岩	4.25	1.60	0.30	2.44		
9	O10－51	243	27.673	二次加工	珪質頁岩	8.70	3.00	1.15	25.98		
10	O10－51	54	27.823	二次加工	硬質頁岩	7.70	4.01	0.99	32.92		
11	O10－51	235	27.703	二次加工	硬質頁岩	5.20	2.75	0.60	8.15		右側U
12	O10－41	289	27.648	二次加工	硬質頁岩	5.62	2.52	0.44	5.15		
13	O10－51	80	27.723	剥片	珪質頁岩	1.50	2.05	0.25	0.56		
14	O10－50	62	27.703	剥片	珪質頁岩	1.60	2.00	0.45	0.76		
15	O10－50	59	27.633	剥片	珪質頁岩	3.30	3.30	0.35	2.67		
16	O10－50	32	27.878	剥片	珪質頁岩	2.80	3.10	1.00	4.02		
17	O10－51	23	27.938	剥片	珪質頁岩	2.55	2.50	0.50	2.04		
18	O10－51	307	27.639	剥片	硬質頁岩	2.00	2.30	0.25	0.99		
19	O10－51	132	27.833	剥片	頁岩	2.70	1.60	0.30	1.49		
20	O10－50	21	27.888	剥片	珪質頁岩	2.10	1.90	0.40	0.91		
21	O10－51	185	27.688	剥片	珪質頁岩	2.25	1.40	0.25	0.53		
22	O10－50	84	27.663	砕片	珪質頁岩	2.20	1.20	0.20	0.52		
23	O10－41	182	27.688	砕片	珪質頁岩	1.30	1.70	0.35	0.54		
24	O10－40	15	27.993	砕片	珪質頁岩	1.50	1.40	0.50	0.46		
25	O10－41	181	27.658	砕片	珪質頁岩	1.25	1.30	0.25	0.31		
26	O10－41	174	27.718	砕片	珪質頁岩	1.85	8.20	0.30	1.33		
27	O10－40	28	27.913	砕片	珪質頁岩	2.85	2.00	0.30	1.14		
28	O10－50	66	27.768	砕片	珪質頁岩	1.40	2.30	0.25	0.65	接５	
	O10－51	186	27.763	砕片	珪質頁岩	2.15	1.30	0.30	0.83		
29	O10－51	193	27.683	石核	硬質頁岩	5.25	2.50	1.70	23.26		
30											31～33
(31)	O10－50	80	27.793	剥片	珪質頁岩	2.43	3.53	0.80	3.13		

(32)	O10－51	279	27.678	剥片	珪質頁岩	2.90	3.80	0.60	5.19		
(33)	O10－50	51	27.828	剥片	珪質頁岩	3.75	1.72	0.60	2.07		
34										接２	35・36
(35)	O10－41	18	28.043	彫器	黒曜石	3.50	3.90	0.80	12.47		
(36)	O10－41	195	27.573	剥片	黒曜石	2.05	1.70	0.35	0.93		
	O10－51	318	27.698	剥片	黒曜石	1.40	1.55	0.30	0.59		
37	O10－51	337	27.563	剥片	黒曜石	5.30	1.70	0.50			
38	O10－51	203	27.708	剥片	黒曜石	2.10	1.80	0.30	0.88		
39	O10－41	183	27.638	剥片	黒曜石	1.90	2.25	0.40	1.04		

（８）第１－６Ｂ地点（第21図・第25図～第27図、図版21）

概要　本地点は、第１－６Ａ・第１－７Ａ・第１－８の各地点の南側に疎らな形で広範囲に分布する一連の石器群を図化したものであり、特に石器群が集中して出土しているわけではない。いずれにせよこれらの多くは第Ⅲ層出土の石器群と関連するものであることは間違いない。出土石器群の器種・石材構成からみれば有樋尖頭器や樋状剥離の加えられた掻器、石刃状剥片の出土が所属時期を示している。しかし、あまりにも分布が広範に及ぶため便宜的に一括して命名した地点である。

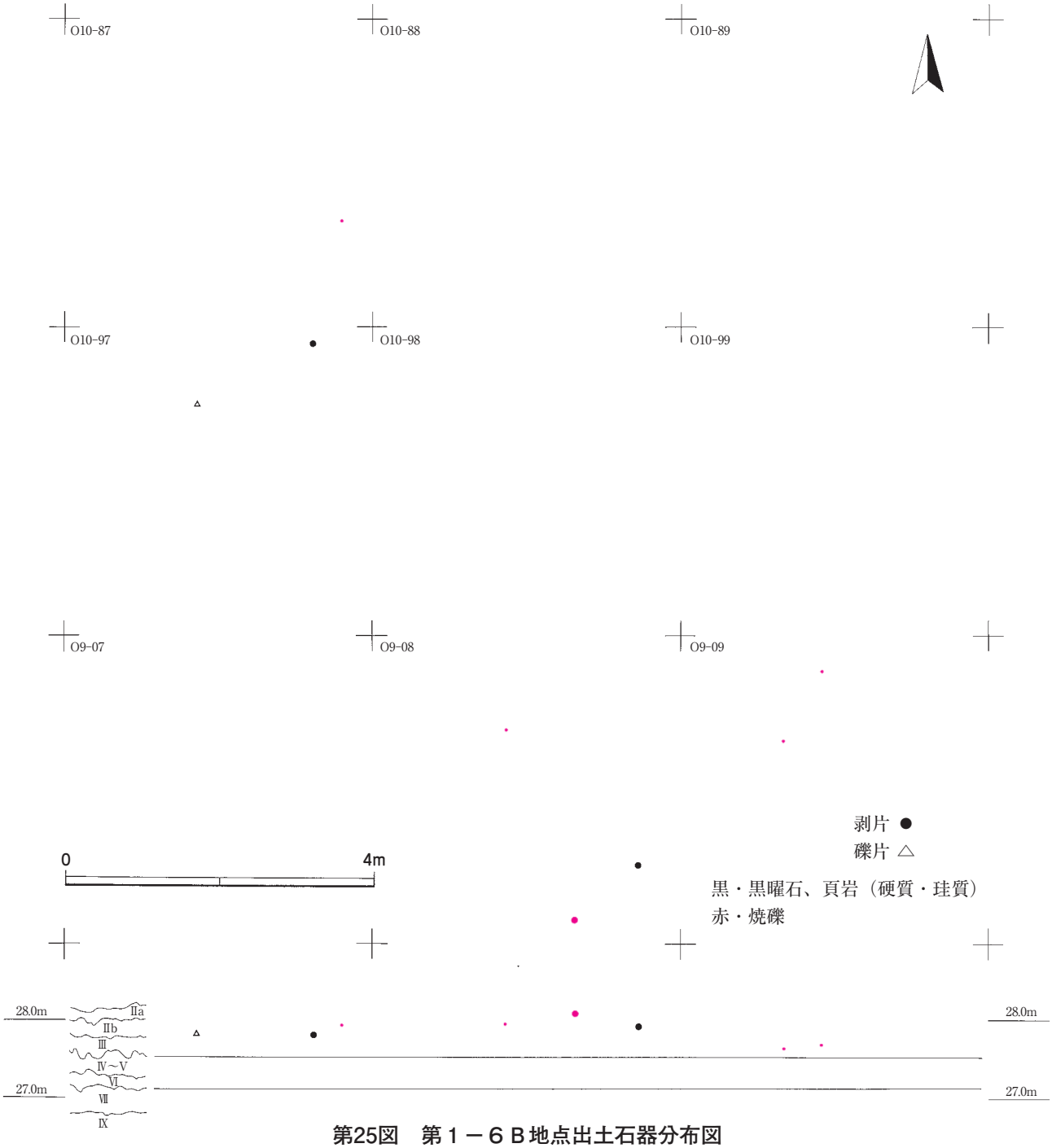
出土石器群　出土した石器群は尖頭器、掻器、彫器、二次加工剥片などであり、大型の削片には使用の痕跡もみられた。また樋状剥離は、尖頭器の製作のみならず掻器として完成している成品にもみられることから限定された特定の石器に限られていたものではないようである。

尖頭器（１・16）　１には２回以上の樋状剥離痕が観察できる。しかも先端部はあまり鋭利とはいえない。表面には節理面が認められ、整形のための剥離も大きく粗雑な仕上げとなっている。16は横長の剥片を素材としており先端部を欠損する。基部での整形も十分なものとはいえない。裏面も同様である。加工は右側縁に顕著に認められる。鋸歯状に大きく抉るような痕跡を重視すれば截断具のような道具として用いられたものとも考えられる。ここでは一応尖頭器製作の途中で破損したものと考えておきたい。

掻器（２・３・９）　２は、大型剥片の打面部をきれいに整形し申し分のない掻器に仕上げている。だが、さらに上部斜方向から二度の樋状剥離をおこなっており、最初の削片は表裏面に加工がみられるところから石器として使用されたものである。このため先端部は彫器としての機能を保有していたものか、あるいはナイフのような使用を目的とした石器として製作されたものと考えたい。このような異種の機能を有する石器は、本地点以外でも出土している。３は高い背面部が特徴的な掻器であり、表面の右部分では３回の大きな剥離痕がみられるところから打面調整のために剥離された剥片を素材として用いたものと思われる。刃部は半円形に整形され調整剥離も加えられている。しかし右側縁部での整形はほとんど認められない。９はみるからに石刃らしい剥片を素材として使用したものである。表面の剥離もきれいに下部まで稜線が認められる。刃部は数回の剥離によって形成され、その後に微細な調整を施している。

彫器（５）　打面部が「く」の字を描くような不整形の剥片を素材にし、若干整形した後の端部に少なくとも２回以上加撃し彫器面を作出している。

二次加工剥片（６・18・19）　６は石刃状剥片の両側縁下部に数回の剥離痕が認められる。さらに右側縁では微細な使用痕がほぼ全面にわたって認められるため使用頻度は高かったものと考えられる。18は右側縁に小さな剥離が密に施されている。また下端部は錐状に尖っており使用痕も認められるため、錐としての使用も考えられるが加工痕は施されていない。19は分厚い剥片で一部に整形のための剥離と弯曲に抉るような小さな剥離がみられる。



第25図　第１－６Ｂ地点出土石器分布図

削片（４）　４は幅広の削片で、裏面上部では２～３回の剥離が認められる。表面での平坦な剥離を観察すると、薄い剥片が何枚も剥離されていることが理解できる。右側縁には使用痕が認められるため道具としても使われていたようである。

剥片（７・８・10～15・17・20・21）　７は大きいわりには薄い剥片で、下端部の観察から剥離時の力が抜け切れていない。両側縁では顕著な使用痕が認められる。８は第Ⅸ層の暗色帯から出土したものである。単独出土として取り扱うべきであろうが、煩雑さを考えてここに加えた。周縁には使用痕が認められ、石材もチャートに近い碧玉である。10～15は頁岩系の薄い剥片である。12の上部では打点部が剥離により削除されている。下端には若干刃こぼれ状の使用痕がみられるため石器として使用したものであろう。13～15は打面部の観察から両面加工品の製作途上で剥離された剥片や砕片である。17・20・21は黒曜石製で、

第26図　第１－６Ｂ地点出土石器（１）

第27図　第１－６Ｂ地点出土石器（２）

17は縦長の剥片で緩やかに弯曲する。側縁には微細な剥離が密にみられる。道具として使用したものであろう。打面部での剥離は使用しやすいように整形したものであろう。20も同様に使用痕が認められる。21は13～15同様に両面加工品から剥離された剥片である。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石10点　珪質頁岩７点　硬質頁岩12点　安山岩１点　チャート１点　メノウ１点　砂岩１点　碧玉１点　礫（角閃石３点　褐鉄鉱石１点）

器種　尖頭器２点　掻器４点　彫器１点　二次加工剥片３点　削片３点　剥片13点　砕片８点　礫・礫片４点　計38点

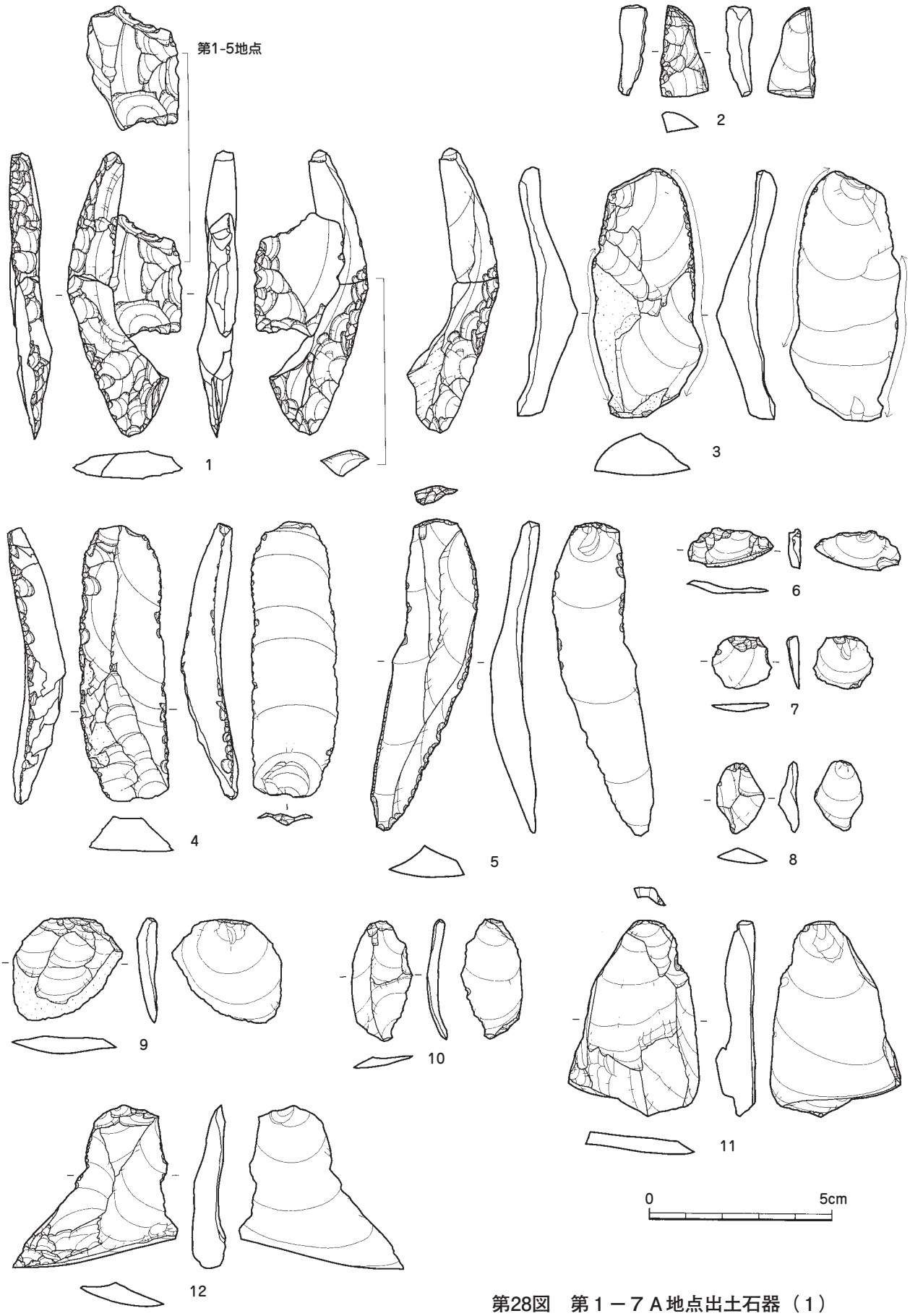
第８表　第１－６Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O10－65	2	27.708	有樋尖頭器	珪質頁岩	9.55	3.50	1.30	32.78		
2	O10－84	16	27.858	削片	珪質頁岩	3.80	1.81	0.46	2.44		
	O10－84	24	27.828	掻器	珪質頁岩	8.45	3.60	1.30	37.81	接２	(彫器・削器)
	O10－75	1	27.860	削片	珪質頁岩	4.67	2.03	1.01	6.30		
3	O10－53	48	27.588	掻器	硬質頁岩	8.20	4.30	2.30	67.24		
4	O10－61	2	27.813	削片	硬質頁岩	4.60	2.40	0.60	5.99		
5	O10－53	58	27.838	彫器	硬質頁岩	2.70	3.00	0.80	7.72		
6	O10－85	8	27.840	二次加工	硬質頁岩	8.50	3.10	1.00	33.73		
7	O10－64	4	27.743	剥片	硬質頁岩	5.20	2.85	0.50	7.13		右側U
8	O10－87	18	25.832	剥片	碧玉	2.60	3.30	0.60	5.85		第Ⅸ層出土
9	O10－87	2	27.763	掻器	硬質頁岩	7.25	2.25	0.70	11.75		
10	O10－62	33	27.593	砕片	硬質頁岩	1.80	2.00	0.20	0.58		
11	O10－63	16	27.803	剥片	硬質頁岩	1.80	1.50	0.15	0.54		
12	O10－84	20	27.778	剥片	硬質頁岩	2.80	1.60	0.35	1.40		
13	O10－53	24	27.828	砕片	硬質頁岩	1.65	1.10	0.25	0.34		
14	O10－53	46	27.793	砕片	硬質頁岩	1.40	1.30	0.30	0.44		
15	O10－64	27	27.578	剥片	硬質頁岩	1.75	1.70	0.05	1.07		
16	O10－52	23	27.733	尖頭器	黒曜石	5.10	2.40	0.90	10.81		
17	O10－71	1	27.713	剥片	黒曜石	5.30	2.10	0.40	4.55		
18	O10－63	15	27.548	二次加工	黒曜石	2.95	1.40	0.80	2.66		
19	O10－62	26	27.858	二次加工	黒曜石	3.60	3.50	1.05	12.72		両側U・上端欠
20	O10－52	24	27.698	剥片	黒曜石	3.50	1.40	0.35	1.51		
21	O10－64	12	27.798	剥片	黒曜石	1.80	2.20	0.55	1.45		

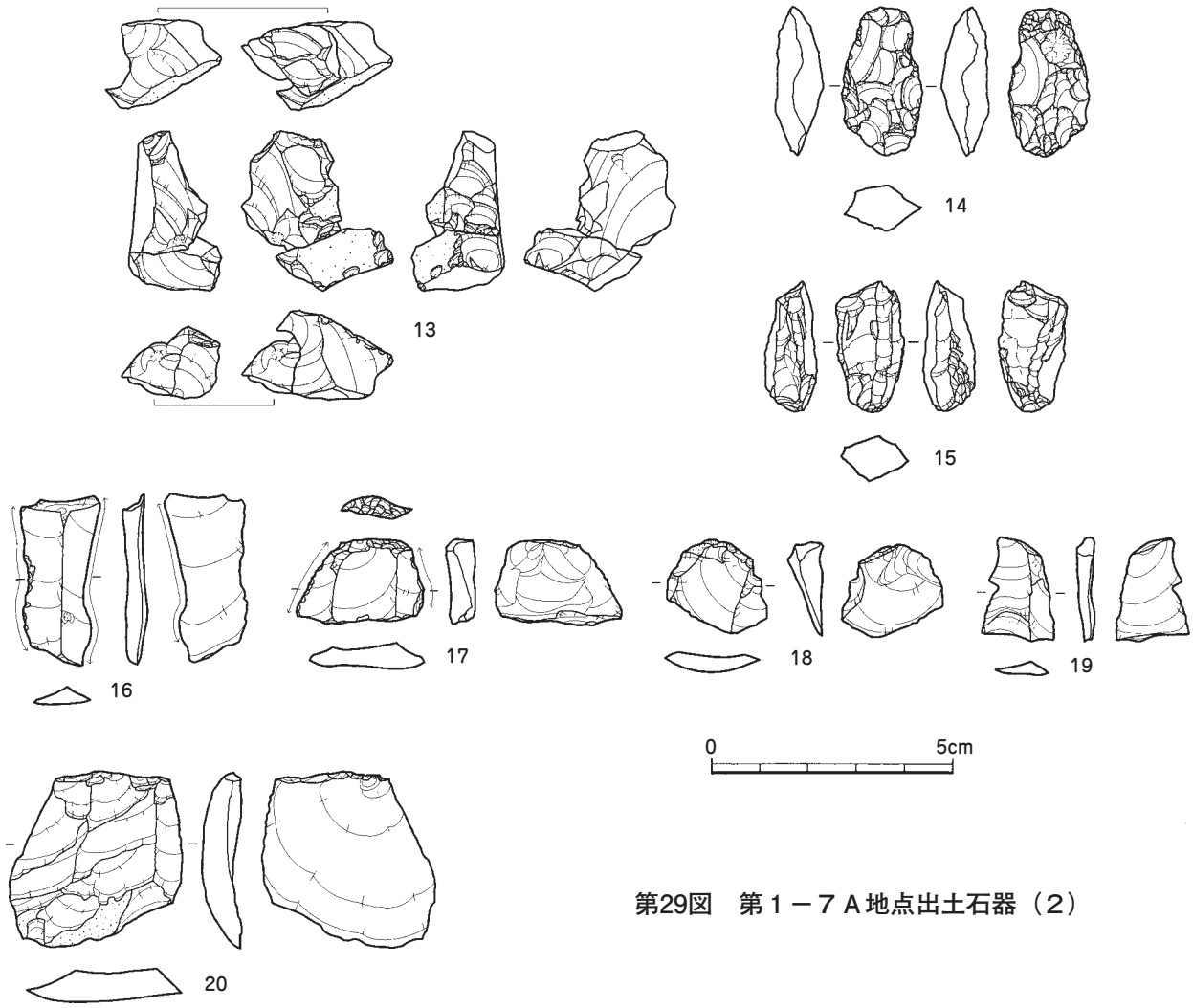
（９）第１－７Ａ地点（第21図・第28図・第29図、図版22・24）

概要　本地点は第１－６地点と第１－８地点のほぼ中間に位置し、石器群はO10－43グリッドを中心として径４ｍ～５ｍの範囲にその分布が認められた。出土層位についてみると、第１－３地点同様第Ⅲ層に包含されていた。このことから第１－３地点から北東方向にむかい連続的に同時期の石器群が分布していることが認められた。使用している石材についてみると、やはり本地点でも頁岩系が多く、次いで黒曜石となる。安山岩・ホルンフェルス・デイサイト等は拳大以下の礫で被熱・破砕しているものがみられた。ここで注目できる事例として、破損した尖頭器（１）に第１－５地点から出土した二次加工剥片が接合している。この事例から本地点と第１－５地点は並立して存在していたと考えて間違いあるまい。

出土石器群　定型石器の器種としては尖頭器、削器、楔形石器などで、種類としては少ないといえよう。他には二次加工剥片、削片、使用された剥片等で構成されている。



第28図　第１－７Ａ地点出土石器（１）



第29図　第１－７Ａ地点出土石器（２）

礫群　ここでも石器群の出土と重複するようにO10－43グリッドを中心に径５ｍの範囲で礫群が検出されている。その中心部では比較的大きな礫がみられ、周囲には破砕した小礫が散っていた。

尖頭器（１・14）　１は有樋尖頭器の製作時において樋状剥離に失敗した例といえよう。本地点では左側縁部が遺存したものである。また中央部で接合した断片は第１－５地点で検出されたものである。上部では調整剥離が施され、下部では弯曲するような形状に加工されている。加工された場所を特定することはできなかったが、掻器あるいは削器のような石器として使用されたことは明らかである。14は尖頭器と考えると、その形状から未成品に近い。上下両端ともに丸味を帯びた状態であり、表裏両面から剥離されている。楔形石器とも考えられる。黒曜石製で裏面には径８mm程の小石が含有されている。そのため製作途中で廃棄されたとも考えられる。

削器（４・５）　２点とも石刃状の縦長剥片を素材としており側面に加工を施し削器としている。裏面での加工はほとんど認められない。また４の打点部は削除され、上部は若干折断されている。５は右側縁に顕著な調整痕が施されている。

二次加工剥片（３）　幅広の縦長剥片を素材としており、表面には自然面を残す。整形のための剥離が左側縁上部に認められる。右側縁では微細な刃潰し状の痕跡がみられ、下端部でも同様な調整痕が施されて

おり掻器のように使用されたものであろう。

削片（２） 幅広で背高のある尖頭器の先端部から樋状剥離されたものである。下半部は折断されたような痕跡を残す。また裏面の一部にも小さな剥離痕がみられる。

剥片（６～12・16～21） ６～10はトゥールチップスの類である。７は平坦な面が表面となっているところから主剥離面を整形するために剥離されたものであろう。11・12は大型の剥片で、11は右側面、12は幅広の下端にそれぞれ使用痕が観察できる。９・10・20は珪質頁岩でも器面はざらつき、色調は灰褐色を呈しており同一母岩から剥離された可能性が強い。さらに３点とも打面部には両面加工の痕跡がみられるため大型の両面加工石器から剥離されたことを暗示させる。16～19は黒曜石製の使用剥片であり、いずれも側縁部等に刃こぼれ状の使用痕がみられる。なお、17の剥片はやや褐色部分を含む石質である。

石核（13・15） 13はO10－43グリッドから出土した２点が接合したものである。表面では２回の剥片剥離が観察できる。下部での接合剥片は打面再生を意図したものとなろう。いずれにせよ可能なまで剥片を剥離し廃棄されたものと思われる。本資料にも若干異物の混入が認められる。15の表面では細石刃核を思わせるような剥離痕が観察できる。本小石刃核から剥離された剥片は検出できなかったが、第１－８地点出土の小石刃（30）は石材は異なるものの関連資料といえよう。なお、前述した第１－４地点では石核に接合した小石刃が出土している。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材 黒曜石19点 珪質頁岩27点 硬質頁岩６点 安山岩４点 流紋岩１点 ホルンフェルス５点 デイサイト２点

器種 尖頭器２点 削器２点 二次加工剥片１点 削片１点 剥片29点 砕片27点 石核２点 64点

第９表 第１－７Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O10－43	259	27.778	有樋尖頭器	珪質頁岩	7.75	1.90	0.92	7.98	接２	胴部片（再加工）
	O10－44	117	27.618	同上	珪質頁岩						
	P10－69	118	27.723	同上	珪質頁岩	3.49	2.47	0.79	6.56		第１－５地点
2	O10－43	411	27.838	削片	珪質頁岩	2.37	1.24	0.71	1.70		尖頭器先端部
3	O10－43	301	27.683	二次加工	硬質頁岩	7.70	2.80	1.00	19.09		両側上端にU
4	O10－43	85	27.613	削器	珪質頁岩	7.50	2.30	1.15	18.35		
5	O10－43	99	27.658	削器	硬質頁岩	8.50	2.20	0.90	14.18		
6	O10－44	85	27.613	剥片	珪質頁岩	7.50	2.30	1.15	18.35		
7	O10－43	247	27.693	剥片	珪質頁岩	1.35	1.55	0.25	0.37		
8	O10－43	341	27.628	剥片	珪質頁岩	1.85	1.35	0.40	0.70		
9	O10－43	63	27.568	剥片	珪質頁岩	2.75	3.10	0.45	2.93		
10	O10－43	409	27.638	剥片	珪質頁岩	3.20	1.70	0.30	1.32		
11	O10－43	305	27.633	剥片	硬質頁岩	5.20	3.50	0.90	13.94		
12	O10－44	88	27.588	剥片	珪質頁岩	4.36	4.56	0.45	6.77		
13	O10－43	154	27.793	石核	黒曜石	2.40	3.40	1.75	9.91	接1	
		486	27.533	石核	黒曜石						
14	O10－43	257	27.773	尖頭器	黒曜石	3.00	1.60	0.90	4.04		
15	O10－43	175	27.718	石核	黒曜石	2.70	1.20	0.90	3.51		小石刃核
16	O10－44	47	27.798	剥片	黒曜石	3.45	1.70	0.40	1.85		両端U、上下端欠
17	O10－43	242	27.618	剥片	黒曜石	1.70	2.50	0.40	2.41		下端欠
18	O10－43	125	27.633	剥片	黒曜石	1.80	2.10	0.40	1.36		
19	O10－44	34	27.633	剥片	黒曜石	2.06	1.49	0.28	0.69		
20	O10－43	102	27.673	剥片	珪質頁岩	3.70	3.50	0.70	8.18		

（10）第１－７Ｂ地点（第21図・第30図～第32図、図版21）

概要　本地点は１－６Ａ地点と１－７Ａ地点の北側に稀薄な石器の分布が認められ、石材は異なるが前者に近い時期の石器群として認識した。出土したグリッドについてみると、O10－16・20・21グリッド等で２～３点が出土しているにすぎず、一定の纏まりを示している状況ではなかった。出土層位は第Ⅲ層～第Ⅳ・Ⅴ層であり、周辺で出土している石器群と大きな差は認められない。だが、石材という点では珪質岩が中心で黒曜石や黒色安山岩などがみられた。この点では１－３Ｂ地点との関連性が見出せる。周辺でみられる頁岩系の石材が主体をなす石器群とは石材という点で若干異なるように思われる。なお、図示した南側の礫群は第１－７Ａ地点に属する焼礫群である。

出土石器群　石器としては彫器を兼用した掻器や二次加工剥片がみられる。その他には石核類が５点出土しているものの剥片剥離作業の痕跡は希薄であった。また石核の石材はすべて珪質岩であり、これらに伴う剥片類は僅少であった。

掻器（３）　本地点で定型石器といえるものは本資料だけであるが、正確な出土地点は注記剥落のため記載できなかった。幅広の剥片から掻器の製作を目的としたものと推測できる。その後、ほぼ中央から折断・整形して下端部にきれいな調整剥離を施している。さらに左右の端部を２～３回上方から剥離しており、彫器兼用の掻器として使用したものであろう。

二次加工剥片（４）　本資料は尖頭器あるいは掻器の一部とも考えられるが、断片的であるため二次加工剥片とした。左側縁は平坦な剥離が施され、裏面でも２～３回の小さな剥離が認められる。石器として機能していたものと思われる。

剥片（２・５・６）　２は幅広な剥片で打面部を除く周囲に微細な剥離痕や使用痕を残す。５は三角形を呈した剥片で、左側縁の表裏に顕著な使用痕が認められる。削器のような石器として使用したものであろう。石材は黒曜石で小石等の異物が多く混入している。６は大型の剥片だが石器として使用された痕跡はみあたらない。石質が軟質という点でも刺突具のような石器製作には不向きな石材といえる。

石核（１・７～10）　１は不規則な方向から剥離しているが、数条の節理面が観察できるためきれいな剥片は得られていないようである。裏面とした右側縁では微細な刃こぼれ痕が認められるため石器としても使用されていたようである。７は平坦な剥離面を打面として活用し、４方向からの剥片剥離が認められる。ここでも数枚の節理面が認められる。良質な剥片が得られたとは思えない。８は一部に自然面を残す。本資料も多方向から剥離された残核である。９も剥離することによって得られた平坦面を利用し多方向から剥離されている。10は周囲を剥離し縦長に残った残核をさらに分割し剥片を剥離している。左側縁には刃こぼれ状の痕跡が認められるため、分割は下半部での剥片を得るためのものとも考えられる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石４点　珪質岩７点　黒色安山岩２点　安山岩１点　チャート１点

器種　尖頭器１点　掻器１点　二次加工剥片１点　剥片３点　砕片３点　石核６点　計15点

第10表　第１－７Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O10－30	2	27.829	石核	珪質岩	2.65	4.40	2.40	15.84		
2	O10－02	2	27.413	剥片	珪質岩	3.90	4.60	1.20	17.16		
3	O10－不明	－	－	掻器	黒曜石	7.50	6.40	1.55	18.91		彫器、接合２点
4	O10－21	3	27.778	二次加工	黒曜石	2.20	1.30	0.50	1.73		
5	O10－33	11	27.828	剥片	黒曜石	2.89	3.35	1.10	6.07		
6	O10－21	1	27.843	剥片	安山岩	5.50	7.50	1.50	57.16		
7	O10－20	2	27.849	石核	珪質岩	4.40	6.00	3.80	80.85		
8	O10－16	4	27.673	石核	珪質岩	3.50	5.00	4.00	53.64		
9	O10－24	5	27.648	石核	珪質岩	2.40	3.20	2.70	18.80		
10	O10－16	6	27.618	石核	珪質岩	5.90	3.50	1.40	29.94	接１	
	O10－84	2	28.013	石核	珪質岩						

(11) 第１－８地点（第21図・第33図～第35図、図版４・５・23・24）

概要　本地点は第１－７地点の東に位置し、第１地点とした調査区のほぼ中央にあたる。石器群はO10－55グリッド内において径３ｍ程度の狭い範囲に集中していたが、その一部は図示したように13m南のO10－84グリッドで出土したもの（第35図26）と接合した。石器群の出土層位も第Ⅲ層中であり、前述してきた一連の石器群との差異は認められなかった。使用された石材でも頁岩系が主体を占めており、黒曜石は頁岩系を補完する程度の割合であった。なお、安山岩・ホルンフェルスは同一母岩から剥離されたものであり、出土割合の比較には適していない。

出土石器群　石器群についてみると成品の数は決して多くはないが、尖頭器、掻器、礫器といった器種が存在し一定の組成を示している。複数出土した石器は掻器のみであった。

礫群　ここでの礫群も第１－６Ａ地点や第１－７Ａ地点にみられるように石器群とともにO10－55グリッドを中心として分布していた。これらの事例から石器群と礫群は一体をなすものであることはいうまでもなく、当時の人びとの居住地であったことを示す証左ともいえる場所である。しかし、礫群周辺から焼土等のはっきりした痕跡が検出されることはなかった。

尖頭器（１）　本資料はきれいな樋状剥離によって刃部が作出された数少ない完形の尖頭器である。だが、周縁部の剥離は粗雑感を否めない。基部にみられる僅かな弯曲は固定のための整形とも思われる。裏面は軽く整形したのみで平坦な面を保っている。

削片（２）　その形状から台形様石器とも考えられるが、積極的な根拠は見出せない。背面での剥離は主剥離以前に施されたものである。なお、出土は本地点に相違ないが、注記の剥落により具体的な位置を特定することはできなかった。

掻器（４・５）　４は形状の整った掻器で、刃部は微細な剥離で丁寧に仕上げられている。本資料も中央部よりやや下に最大器高を有している。平坦な打面はそのまま保持し、盛りあがったバルブ部分を１回の剥離できれいに削除している。石材は黒曜石で異物の混入もなく良質といえる。５は石刃状剥片を折断し、その下半部を素材としたものである。剥離は下端部に限られ２～３回の整形剥離後、さらに精緻な剥離で刃部を作出している。側面では使用の痕跡も認められる。

礫器（20）　形状が５cmほどの扁平な小礫であり、左下部には打痕らしき痕跡を残す。片面を２～３回剥離し刃部を作出したものと考えて礫器としたが、礫器の製作を意図したものかどうかは疑問である。むしろ敲石とも考えられる。

O11−97−8と接合

O10−84−2と接合

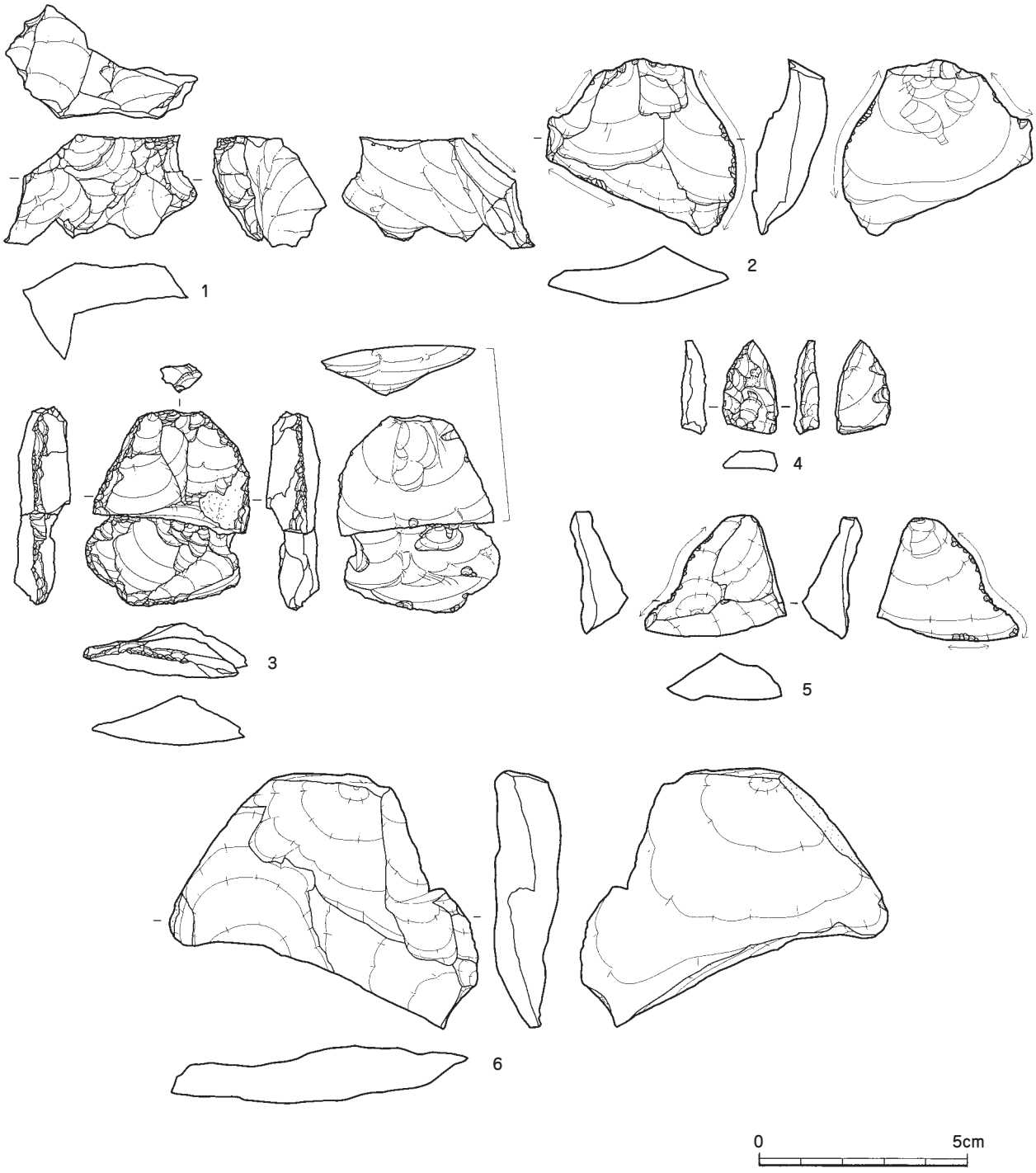
■ 石核
● 剥片
• 砕片
黒　黒曜石・珪質岩他
赤　焼礫

0　4m

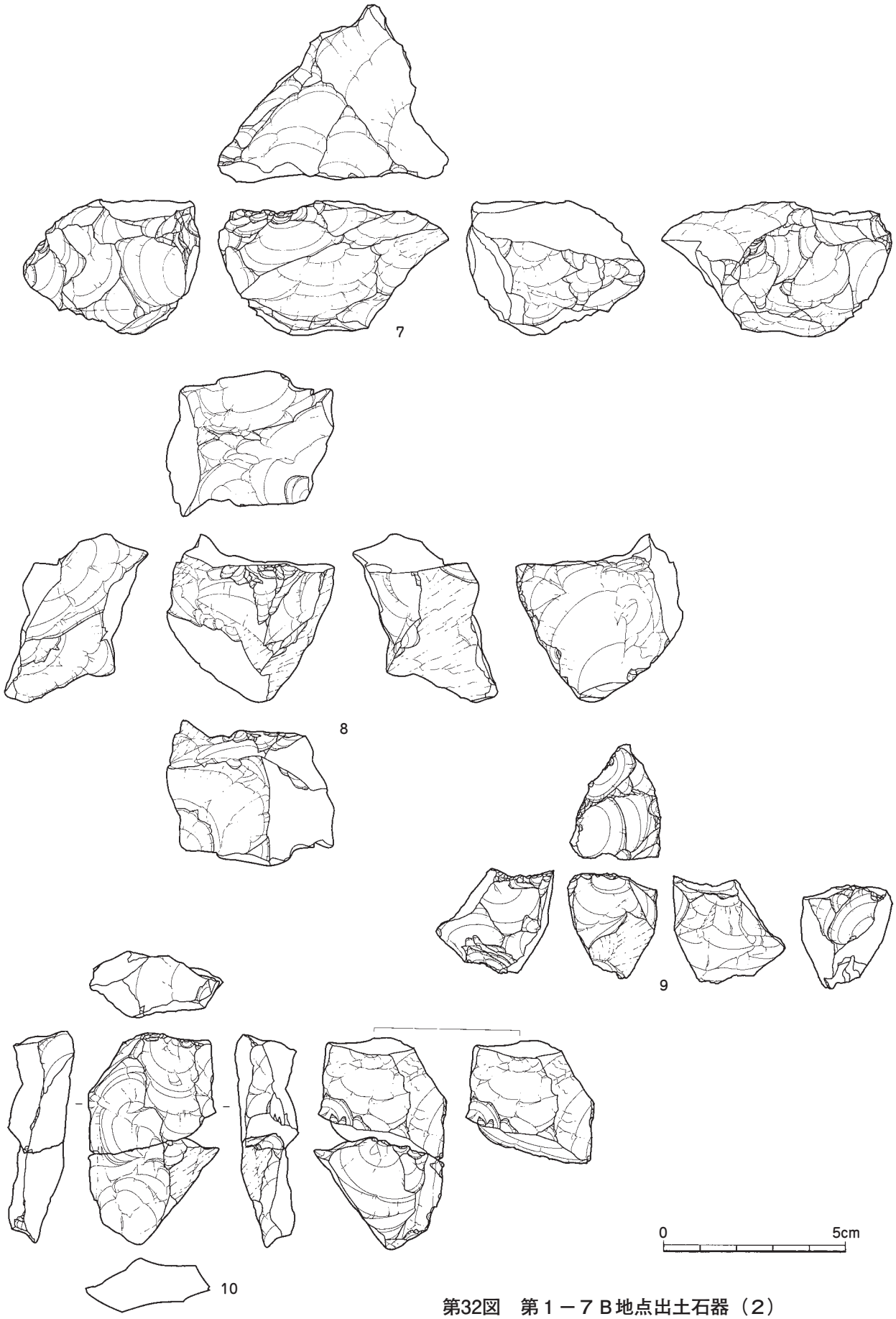
1−7A地点

28.0m
27.0m
IIa
IIb
III
IV〜V
VI
VII
IX

第30図　第１－７Ｂ地点出土石器分布図



第31図　第１－７Ｂ地点出土石器（１）



第32図　第１－７Ｂ地点出土石器（２）

二次加工剥片（３・６）　３は左側縁に明確な二次剥離が施されている。縦長の剥片を折断したものであろう。６は平坦に残された打面から計測すると、ほぼ70°の角度で剥離された石刃状剥片で整った形状を呈している。左側縁では３cmほど押圧剥離を施したような痕跡がみられるが、剥離面は新しいものである。調査の際に生じたものと考えられる。右側縁では小さな剥離痕とともに使用痕も観察できるため削器様の石器として使用されていたものであろう。

剥片（７～19・21～30）　剥片類については接合資料とトゥールチップスを中心に図示した。９～11・13～19は石器製作時に廃棄されたもので、８の打面にはその痕跡をみることができる。また９・18では石器としても使用されている。21・22はともに石刃状剥片が折断されたもので両側縁に微細な刃潰し状の痕跡を残す。23は砂岩製の剥片が接合したものであり石器としても十分な形状を有する。24は５点の横長に剥離された剥片（25～29）が接合したものである。剥離の順序が示される好資料といえる。また26は下端部の微細な剥離から石器としても使用されている。29の自然面は滑らかであり、剥離前には礫そのものを使用していた可能性がある。30は石刃状に剥離された剥片である。明確な細石刃核は出土していないため小石刃とするのが妥当であろう。

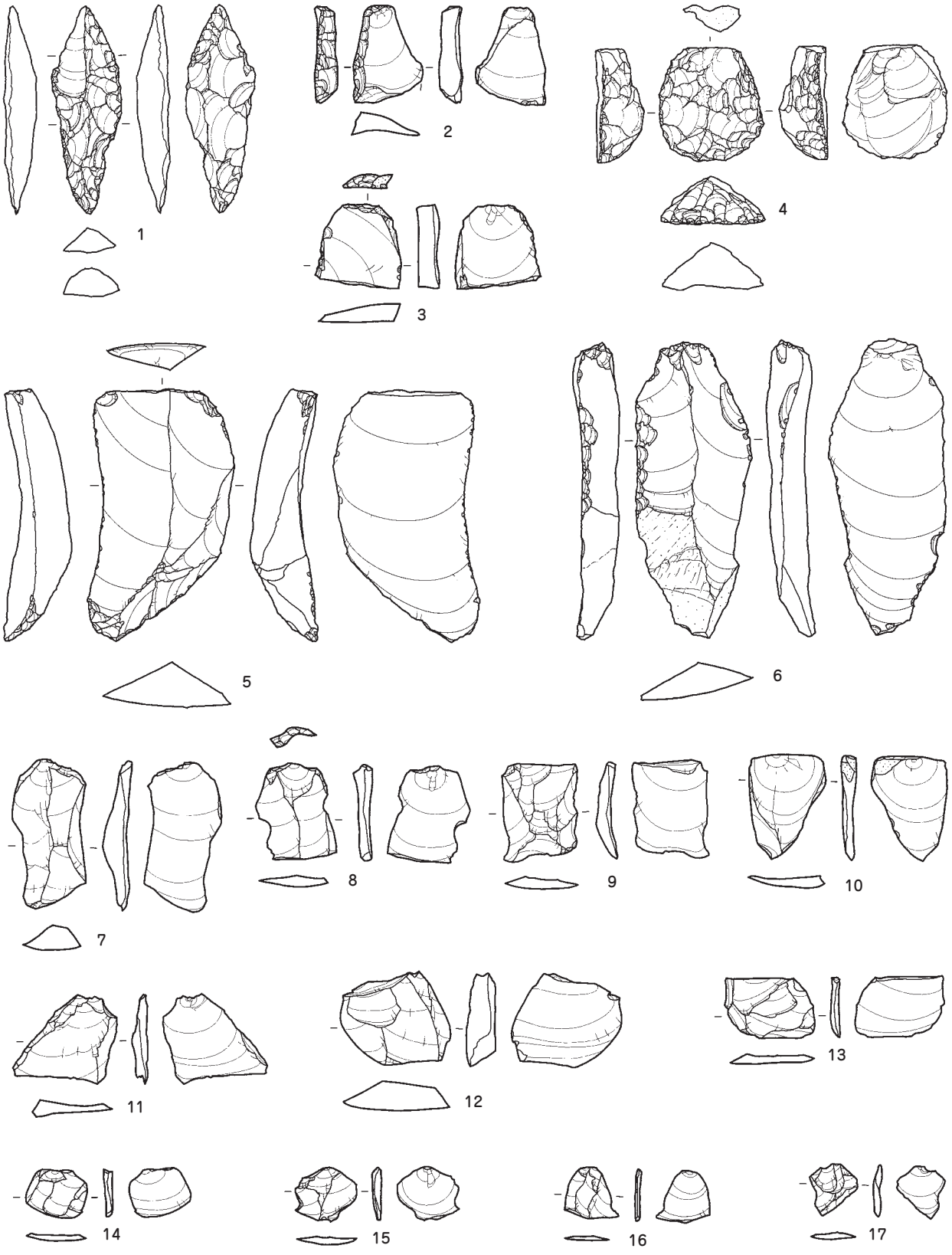
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石10点　珪質頁岩21点　硬質頁岩32点　頁岩２点　安山岩７点　ホルンフェルス５点　砂岩４点

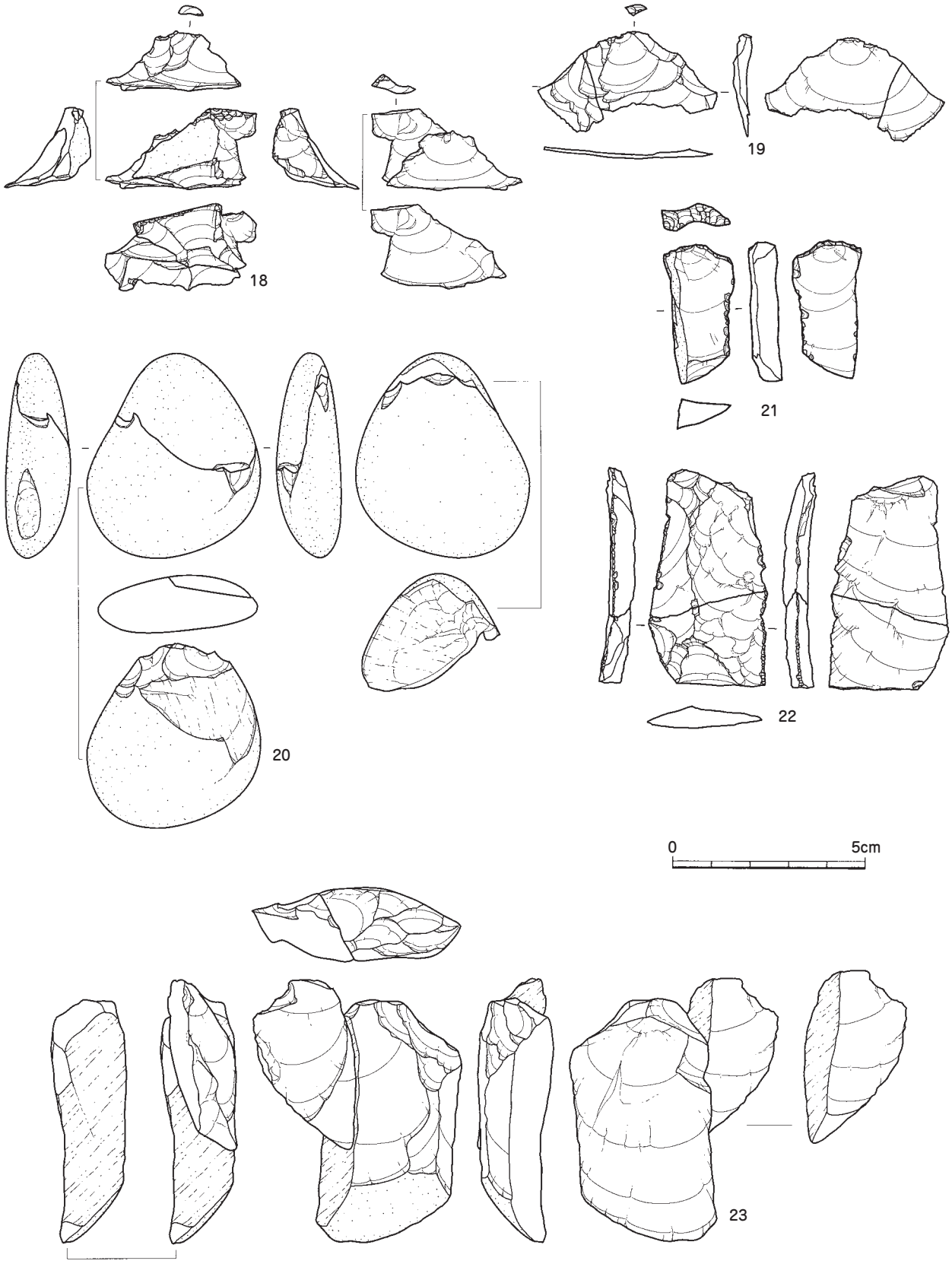
器種　尖頭器１点　掻器２点　礫器１点　二次加工剥片１点　削片１点　剥片47点　砕片28点　計81点

第11表　第１－８地点実測石器属性表

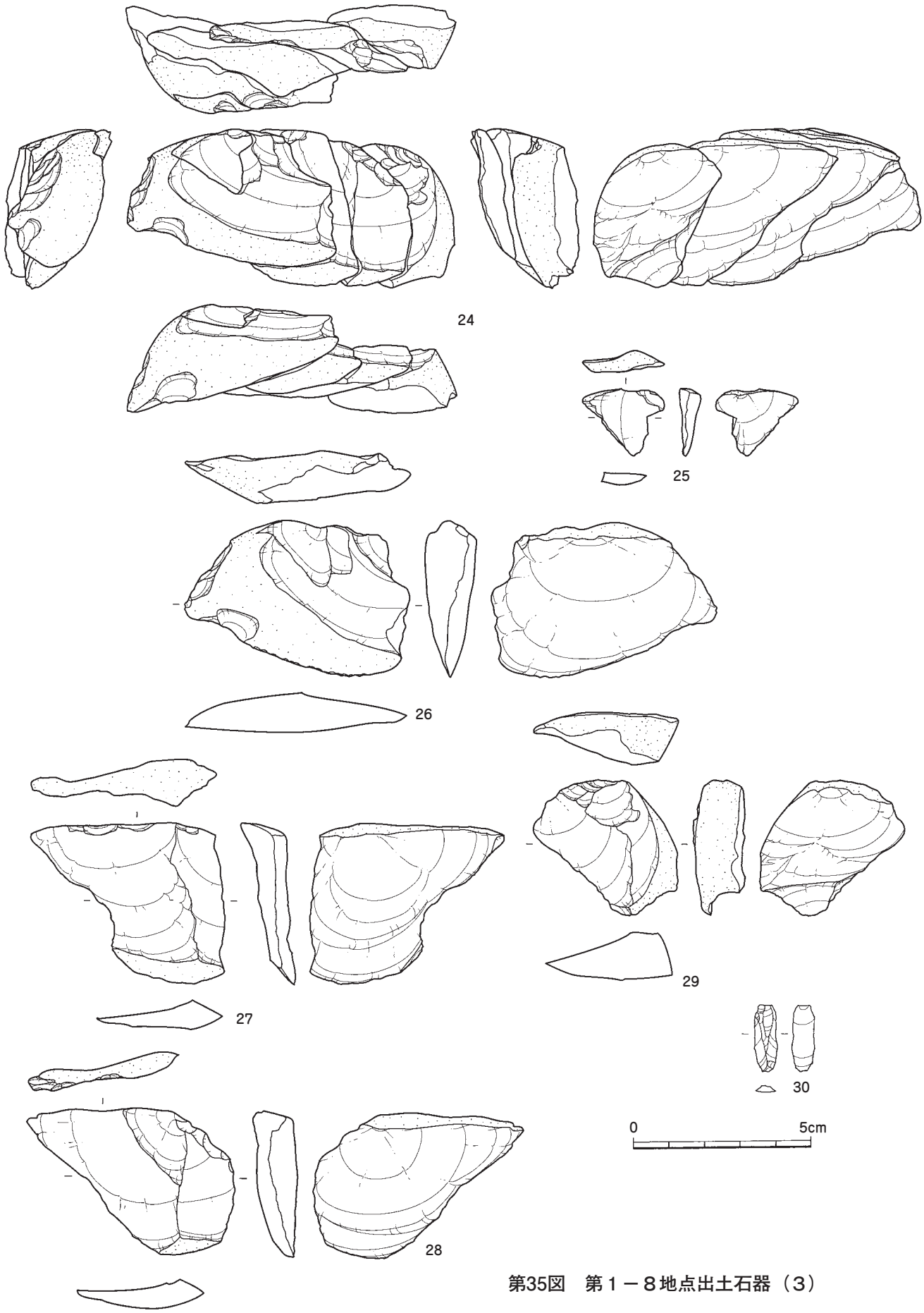
挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O10－55	365	27.623	有樋尖頭器	硬質頁岩	5.30	1.70	0.80	6.20		
2	O10－不明	－	－	削片	硬質頁岩	2.40	1.80	0.65	1.79		
3	O10－55	41	27.916	二次加工	硬質頁岩	2.00	2.15	0.60	3.48		下端欠・左側R
4	O10－55	9	28.030	掻器	黒曜石	2.90	2.65	1.10	9.10		
5	O10－55	194	27.620	掻器	珪質頁岩	6.40	3.40	1.30	26.71		
6	O10－55	220	27.635	二次加工	硬質頁岩	7.60	3.00	0.90	18.19		
7	O10－35	77	27.958	剥片	硬質頁岩	3.80	1.70	0.65	3.01		
8	O10－55	182	27.650	剥片	硬質頁岩	2.40	1.70	0.25	1.57		
9	O10－55	329	27.585	剥片	珪質頁岩	2.50	1.90	0.30	1.73		
10	O10－55	265	27.610	剥片	硬質頁岩	2.60	1.90	0.25	1.37		
11	O10－56	13	27.723	剥片	珪質頁岩	2.70	2.10	0.30	1.06		
12	O10－55	42	27.785	剥片	硬質頁岩	2.40	2.55	0.80	5.19		
13	O10－56	15	27.398	剥片	硬質頁岩	1.60	2.20	0.25	0.84		上端欠
14	O10－55	179	27.656	剥片	硬質頁岩	1.20	1.50	0.25	0.39		
15	O10－55	111	27.705	剥片	硬質頁岩	1.30	1.55	0.25	0.43		
16	O10－55	243	27.634	剥片	硬質頁岩	1.30	1.35	0.15	0.27		下端欠
17	O10－55	332	27.598	剥片	硬質頁岩	1.00	1.20	0.15	0.16		
18	O10－55	10	27.705	剥片	硬質頁岩	2.80	2.80	1.00	4.91	接８	
		106	27.875	剥片	硬質頁岩	2.30	3.40	0.45	2.51		
19	O10－55	113	27.818	剥片	硬質頁岩	1.60	1.50	0.10	0.32	接7	
		140			硬質頁岩						
20	O10－55	1	27.680	礫片	頁岩	5.30	4.50	1.60	53.10	接５	
	O10－61	10	27.653	礫器	頁岩						
21	O10－55	258	27.620	剥片	黒曜石	3.50	1.80	0.60	4.19		
22	O10－55	18	27.761	剥片	黒曜石	5.60	2.90	0.60	11.29	接１	両側U
		257	27.646	剥片	黒曜石						
23	O10－55	19	27.825	剥片	砂岩					接６	
		212	27.647	剥片	砂岩	6.80	5.50	1.90	67.43		



第33図　第１－８地点出土石器（１）



第34図　第１－８地点出土石器（２）



第35図　第１－８地点出土石器（３）

24（29）	O10－55	121	27.700	剥片	ホルンフェルス	4.40	9.50	2.10	95.42		
（27）	O10－55	169	27.630	剥片	ホルンフェルス					接４	
（28）	O10－55	189	27.646	剥片	ホルンフェルス						
（25）	O10－55	363	27.573	剥片	ホルンフェルス	（1.85）	（2.20）	（0.40）	（1.60）		
（26）	O10－84	11	27.843	剥片	ホルンフェルス						
30	O10－55	451	27.233	剥片	硬質頁岩	1.85	0.60	0.17	015		小石刃

（12）第１－９Ａ地点（第36図～第38図、図版25・26）

概要　本地点は第１地点とした調査区の南西部にあたり、第１－５地点から南に約20m離れて発見された石器集中地点である。石器群はＰ９－19グリッドを中心として南北に６m、東西に５mの範囲で濃密に分布していた。石器の出土層位は、前述した一連の尖頭器を出土した層序で第Ⅲ層の中～下層となる。石材についてみると、種類は少なく黒曜石、珪質頁岩、硬質頁岩、黒色安山岩、碧玉であり、ここでも頁岩系の石材が主体を占めていた。また出土石器についてみると、接合した尖頭器（第30図２）の色調を裏面でみると基部は淡い褐色を帯びた乳白色に対し、接合した先端部では灰褐色を呈したものであった。なお破損部では双方とも本来の黒みを帯びた赤褐色を呈していた。この色調の相違は風化による変化か、あるいは被熱によるものであろう。

出土石器群　出土した石器群についてみると、器種は少なく尖頭器が４点と掻器、彫器となる。なかでも彫器は第１－５地点出土品と共通した樋状剥離がみられた。また削片の出土も多く特徴的な９点を図示したが、小さな削片については省略した。一方、剥片や砕片といった類はそのほとんどがトゥールチップスで石器製作が盛んにおこなわれていたことが想定できる。

尖頭器（１～３・27）　４点の尖頭器にはすべて樋状剥離が施されている。１は側縁の加工がきれいに施されており、ほぼ左右対称に整形された尖頭器といえる。先端部は大きく樋状剥離により加撃した後、さらに小さな剥離が追加されている。基部の整形も丁寧ではあるが、打面部の一部が残存する。２の主要部は第１－４地点から出土し、本地点出土の剥離された部分と接合した。樋状剥離時の失敗例といえよう。有樋尖頭器の製作を意図していることは明白である。ここでは基部を若干整形した後に、半円形に整形された先端部から加撃している。樋状剥離を加える前段階の資料として、先端部の形状が理解できる貴重な資料といえよう。破損後の整形は認められないため廃棄されたものであろう。３は破損しているが、同一地点から出土したものである。先端部は欠損している。裏面では破損後に上方から小さな剥離が観察できる。また破損部では微細な調整が加えられており、あるいは彫器として使用していた可能性も否定できない。また基部周辺の作りをみると整然とした整形が施されており、２の基部をさらに整形したような丁寧な作りといえる。27は異物を含有するが、半透明な黒曜石を用いた尖頭器である。周囲の整形は粗雑でも一応表裏に加工痕を認めることができる。また、樋状剥離もきれいに施されている。

掻器（５）　分厚い剥片を素材とし、刃部は小さな剥離で入念に形成されている。両側面にも若干の使用痕がみられる。整形は打面部までには及んでいない。刃部を除けば、作りは比較的簡単といえよう。

彫器（４）　独特な彫器で第１－５地点の出土品と近似する。本石器の場合には左右からの剥離が確認できる。左斜めからの剥離痕は小さく、右方向からの剥離は細く長い痕跡を残す。また左右側縁の加工も緻密に施されているが、裏面での加工はみられない。こうした作りも第１－５地点出土品と共通している。

削片（６～11・28・29・34）　削片の出土は確認できるものだけで17点存在した。そのうち主要な削片９

点を図示した。６～11は頁岩系の削片で10・11は下半部が失われている。７・８の側縁には刃こぼれ状の使用痕が認められる。28・29・34は半透明の良質な黒曜石を使用しており、いずれも一部が折断されている。また３点とも側面観察から両面加工の石器から剥離されていることが理解できる。いずれにせよ樋状剥離を伴う尖頭器の製作が盛んにおこなわれていた証左となろう。

剥片（12～26・30～33） 12は幅広の剥片で打面部には調整剥離の痕跡がみられる。右側縁には明確な使用痕が刃こぼれ状に連続してみられる。13でも下半部が鋸歯状に破損しており、いずれも石器として何らかの形で使用されていたものと考えられる。その他の剥片は、いわゆるトゥールチップスと見做すことができる。19・31は両面加工品から剥離されたものである。

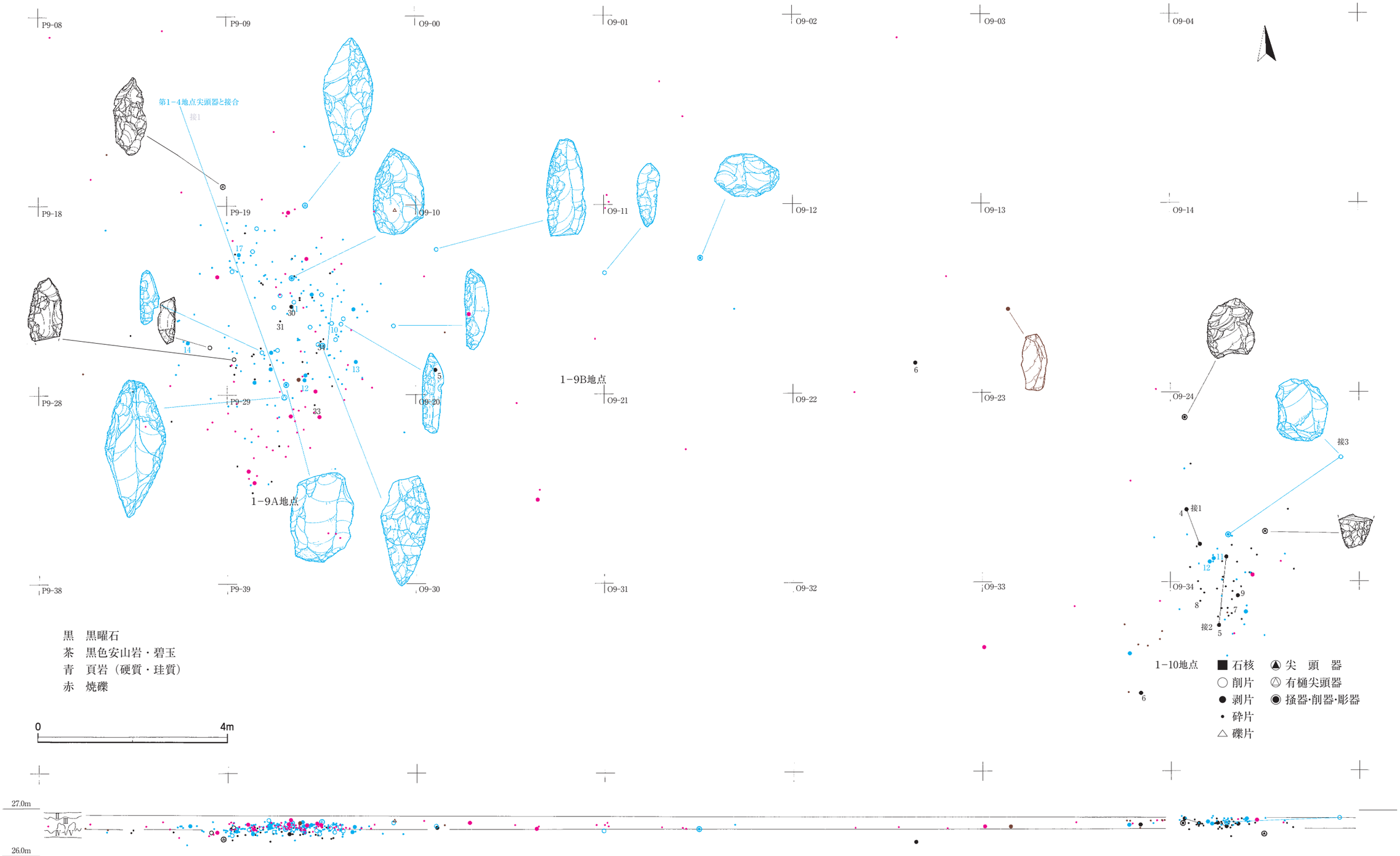
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石39点　珪質頁岩72点　硬質頁岩56点　黒色安山岩２点　碧玉３点

器種　尖頭器４点　掻器１点　彫器１点　削片17点　剥片24点　砕片125点　計172点

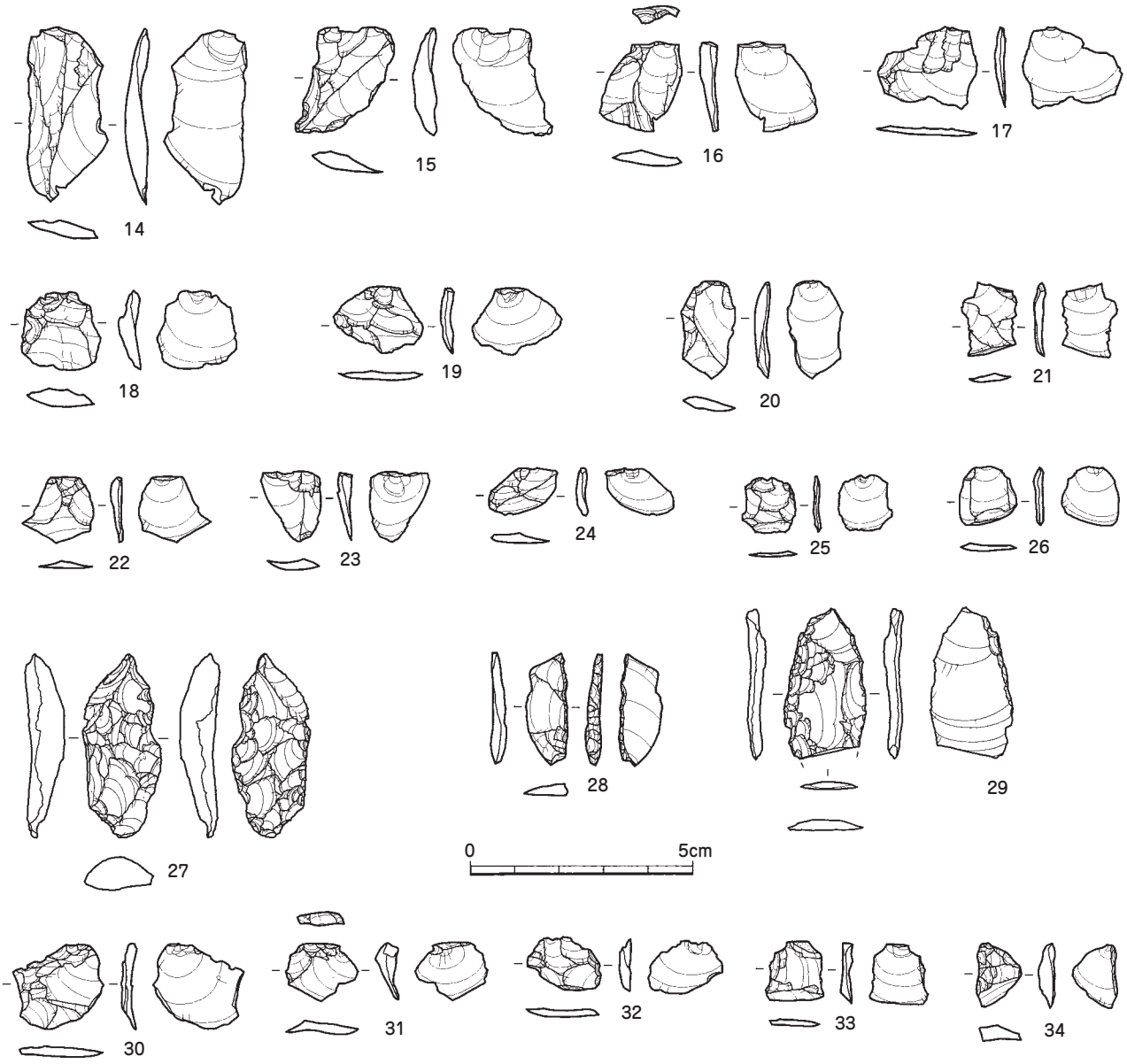
第12表　第１－９Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｐ９－19	92	26.477	有樋尖頭器	硬質頁岩	6.20	2.65	1.10	14.65		
2	Ｐ10－67	47	26.590	尖頭器	硬質頁岩	0.70	0.85	0.20	0.11	接１	第１－４地点
	Ｐ９－29	26	26.545	尖頭器	硬質頁岩	1.10	0.75	0.15	0.12		
3	Ｐ９－19	32	26.563	有樋尖頭器	硬質頁岩	5.80	2.50	1.05	12.60		先端欠
4	Ｐ９－19	15	26.598	彫器	硬質頁岩	4.65	2.70	0.80	11.48		
5	Ｐ９－19	106	26.538	掻器	硬質頁岩	4.70	3.30	0.90	18.05		
6	Ｐ９－19	61	26.658	削片	硬質頁岩	4.15	1.25	0.50	1.70		
7	Ｐ９－19	123	26.530	削片	硬質頁岩	4.15	0.90	0.55	2.01		
8	Ｐ９－19	118	26.484	削片	硬質頁岩	3.15	1.15	0.40	1.08		
9	Ｐ９－19	103	26.492	削片	硬質頁岩	2.75	1.00	0.25	0.63		
10	Ｐ９－19	127	26.530	削片	硬質頁岩	1.80	1.05	0.30	0.63		
11	Ｐ９－19	54	26.615	削片	硬質頁岩	1.90	0.50	0.30	0.32		
12	Ｐ９－19	43	26.608	剥片	硬質頁岩	4.70	3.10	0.60	8.66		
13	Ｐ９－19	62	26.573	剥片	硬質頁岩	7.10	2.90	0.70	11.59		
14	Ｐ９－18	6	26.519	剥片	硬質頁岩	1.00	1.45	0.35	0.44		
15	Ｐ９－19	34	26.620	剥片	硬質頁岩	2.70	1.75	0.40	1.26		
16	Ｐ９－19	35	26.576	剥片	硬質頁岩	2.02	1.45	0.30	0.82		
17	Ｐ９－19	78	26.462	剥片	硬質頁岩	1.80	2.00	0.20	0.44		
18	Ｐ９－19	9	26.637	剥片	硬質頁岩	1.65	1.70	0.40	0.82		
19	Ｐ９－19	146	26.398	剥片	硬質頁岩	1.40	1.90	0.25	0.47		
20	Ｐ９－19	159	26.413	剥片	硬質頁岩	2.15	1.20	0.25	0.63		
21	Ｐ９－19	18	26.655	剥片	硬質頁岩	1.60	1.20	0.15	0.27		
22	Ｐ９－19	28	26.637	剥片	硬質頁岩	1.40	1.50	0.25	0.36		
23	Ｐ９－19	36	26.590	剥片	硬質頁岩	0.70	1.15	0.30	0.22		
24	Ｐ９－19	90	26.450	剥片	硬質頁岩	1.00	1.30	0.20	0.23		
25	Ｐ９－19	25	26.622	剥片	硬質頁岩	1.20	1.10	0.10	0.18		
26	Ｐ９－19	50	26.593	剥片	硬質頁岩	1.20	1.20	0.20	0.27		
27	Ｐ９－08	10	26.320	有樋尖頭器	黒曜石	4.08	1.70	0.82	4.78		
28	Ｐ９－18	7	26.630	削片	黒曜石	2.40	0.90	0.30	0.56		
29	Ｐ９－19	40	26.633	削片	黒曜石	3.35	1.85	0.35	2.04		
30	Ｐ９－19	85	26.492	剥片	黒曜石	2.15	1.80	0.30	0.75		
31	Ｐ９－19	71	26.579	剥片	黒曜石	1.25	1.60	0.50	0.51		
32	Ｐ９－18	3	26.578	剥片	黒曜石	1.10	1.50	0.20	0.33		
33	Ｐ９－29	43	26.462	剥片	黒曜石	1.25	1.20	0.20	0.31		
34	Ｐ９－19	147	26.388	削片	黒曜石	1.30	1.00	0.30	0.34		



第36図　第１－９Ａ・９Ｂ・10地点出土石器分布図

第37図　第１－９Ａ地点出土石器（１）



第38図　第１－９Ａ地点出土石器（２）

(13) 第１－９Ｂ地点（第36図・第39図、図版28）

概要　本地点は第１－９Ａ地点とした調査区の東側に位置し、Ｏ９－10・11グリッド及びその周辺で数点出土した石器群を纏めたものである。集中して出土することはなく東西に稀薄な分布を示していた。出土層位もほぼ一致しており、第１－９Ａ地点と関連づけられる石器群と考えられた。石材についてみると、種類は僅少で黒曜石、珪質頁岩、硬質頁岩、黒色安山岩で構成される。

出土石器群　出土した石器群についてみると、成品としての石器は掻器のみで、他に二次加工が施された石刃状剥片が出土している。また頁岩系の削片が２点出土しており、この点からも第１－９Ａ地点等の一連の石器群と一体をなすものと思われる。

掻器（１）　折断された剥片の下半部を素材にしたもので周囲を粗く加工し、次いで刃部は小さな剥離で丁寧に作出している。この時期にみられる掻器のように形状は整っているとはいえない。

二次加工剥片（４）　断面三角の石刃状を呈した剥片で、左側縁に整形を兼ねた剥離がみられる。右側縁では使用による微細な剥離が顕著にみられる。打面部は整形されておらず、打面調整のための剥離が残る。いずれにしろ削器様の石器として使用されていたものであろう。下部の欠損は節理面に沿っており使用中に生じたものであろう。

削片（２・３）　２の左側縁下半ではきれいな押圧剥離が残されており、その上部は樋状剥離による痕跡が認められる。３も同様に左側縁には押圧剥離が隈無く施されている。肥厚した打点部は整形のための剥離によって削除されている。右側縁に微細な使用痕らしき痕跡が残っているため石器として使用されていたものと思われる。

剥片（５～７）　５は半透明で良質の黒曜石であり、右側縁では著しい使用痕が認められる。右側面には整形剥離も認められるため石器として使用されていたことは確実であろう。６の剥離は新しく調査時に生じたものである。７は唯一出土した黒色安山岩の剥片であるが、加工痕は認められない。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石３点　珪質頁岩１点　硬質頁岩４点　黒色安山岩１点

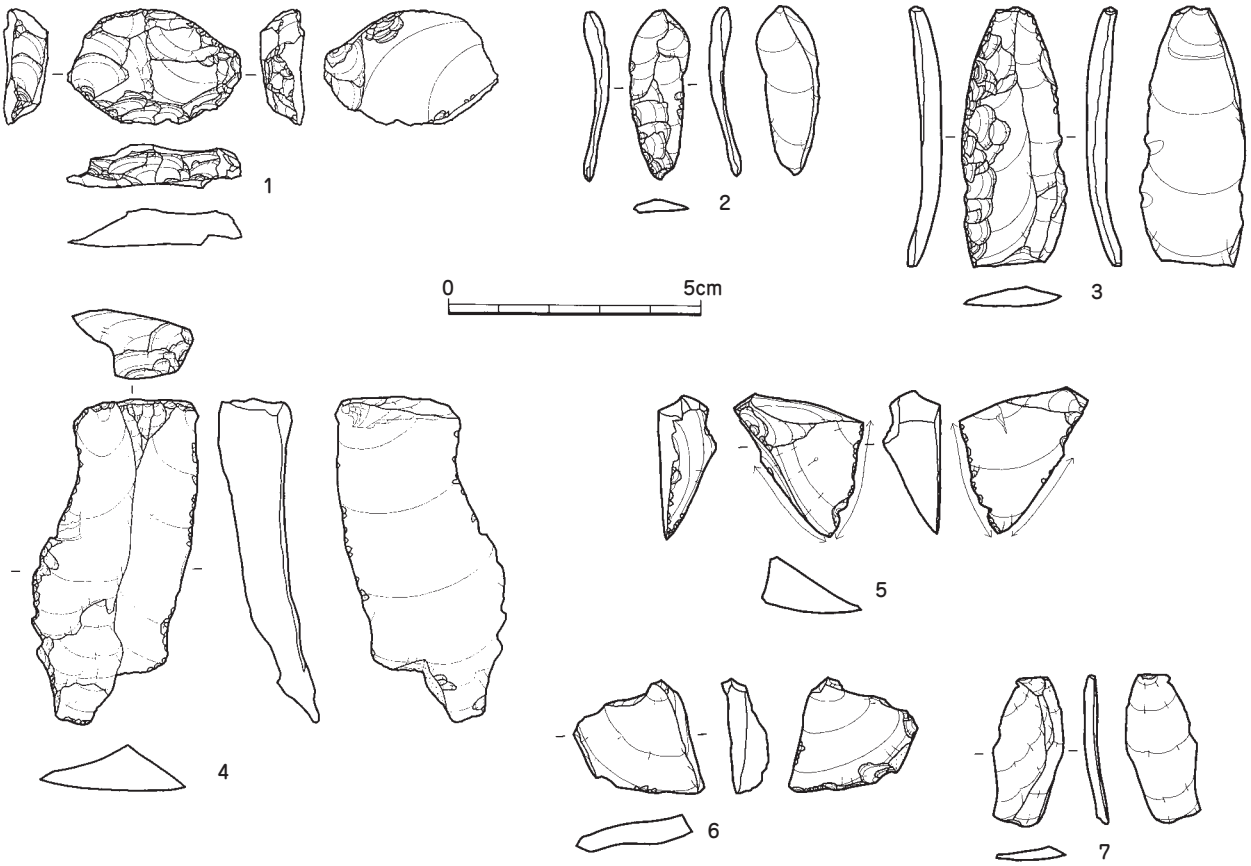
器種　掻器１点　二次加工剥片１点　削片２点　剥片３点　砕片２点　計９点

第13表　第１－９Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｏ９－11	4	26.510	掻器	硬質頁岩	3.40	2.20	0.75	6.34		
2	Ｏ９－11	2	26.486	削片	硬質頁岩	3.30	1.15	0.30	1.03		
3	Ｏ９－10	1	26.570	削片	硬質頁岩	5.05	2.00	0.35	4.02		
4	Ｏ９－08	2	26.928	二次加工	黒曜石	6.75	2.80	1.30	16.97		
5	Ｏ９－10	5	26.609	剥片	黒曜石	2.90	2.20	0.90	4.21		半欠
6	Ｏ９－12	2	26.320	剥片	黒曜石	2.20	2.40	0.40	2.40		
7	Ｏ９－13	2	26.580	剥片	黒色安山岩	2.90	1.30	0.30	1.03		

(14) 第１－10地点（第36図・第40図、図版５・27）

概要　本地点は調査区（第１地点）の最も南に位置し、石器群の分布はＯ９－24・34グリッドを中心に径６ｍの範囲に広がっていた。だが出土数は少なく、その中心は径2.5ｍ程度の範囲に収まっている。出土層位についても前述した地点と変わらず第Ⅲ層中であった。ここでの石材は黒曜石が多く、次いで頁岩系



第39図　第１－９Ｂ地点出土石器

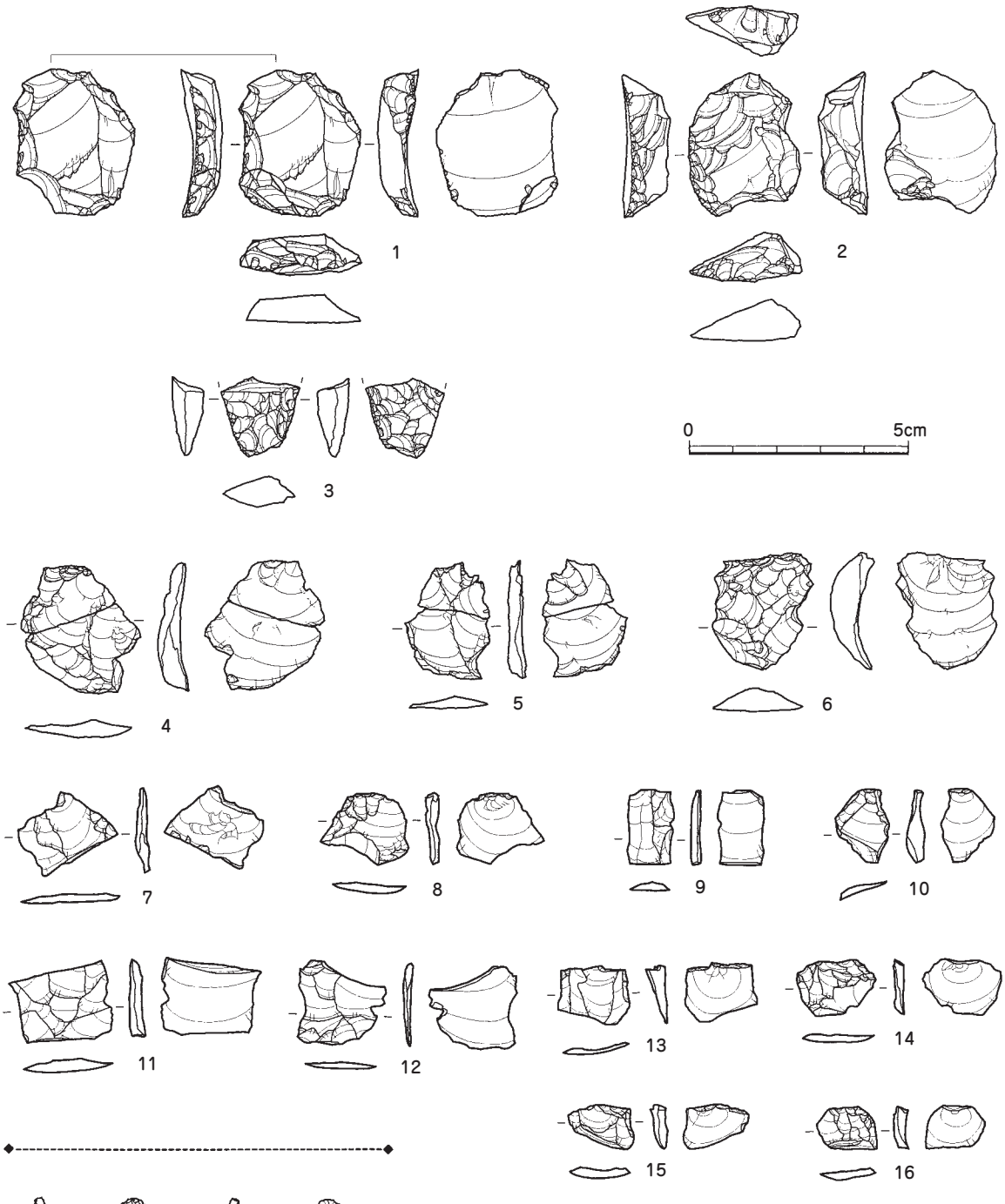
が占める。若干出土した黒色安山岩はすべて１cm前後の剥片・砕片であった。

出土石器群　石器の器種として認識できるものは尖頭器、掻器の２種にすぎない。17とした有樋尖頭器は注記が剥落していたため出土状況図に反映させることはできなかった。尖頭器の形態や石材の類似性から参考品として本地点に掲載した。

尖頭器（３・17）　３は基部が１/３程度遺存した尖頭器である。ただ、基部のため樋状剥離までは確認できない。破損面には異物の混入が認められ、脆弱な部分になっていたものと思われる。17は有樋尖頭器で均整のとれた成品に仕上げられている。先端部が僅かに欠損するのみでほぼ完形品といえる。樋状剥離後に若干の調整剥離が刃部面側から施されている。石質は不純物を含まず良質な黒曜石を用いている。なお、本資料は注記部分が失われていたため便宜的に本地点に加えたものである。

掻器（１・２）　１は打面部まできれいに削除して掻器としている。接合した刃部の一部は同一グリッドから出土したものである。ただ、この部分が意識的な剥離によるものか、使用中に破損したものかは判別しがたい。２は１ほど整った形状とはいい難いが、その一部には類似点を見出せる。緩やかにカーブする刃部と抉られるように整形された刃部が両者にみられる。このことから同じように使用された掻器といえよう。石材は黒曜石で内部には鱗状のヒビが認められる。

剥片（４～16）　ここに掲載した剥片のほとんどはトゥールチップスである。４・６の剥片は主剥離面の弯曲がそのことをよく物語っている。特に６では両側縁から剥離されており掻器を想起させるような剥片である。また８・15は打面部の剥離方向の観察により両面加工品から剥離されたものと理解できる。



第40図　第１－10地点出土石器

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石37点　珪質頁岩13点　硬質頁岩14点　黒色安山岩７点

器種　尖頭器２点　掻器２点　剥片17点　砕片50点　計71点

第14表　第１－10地点実測石器属性表

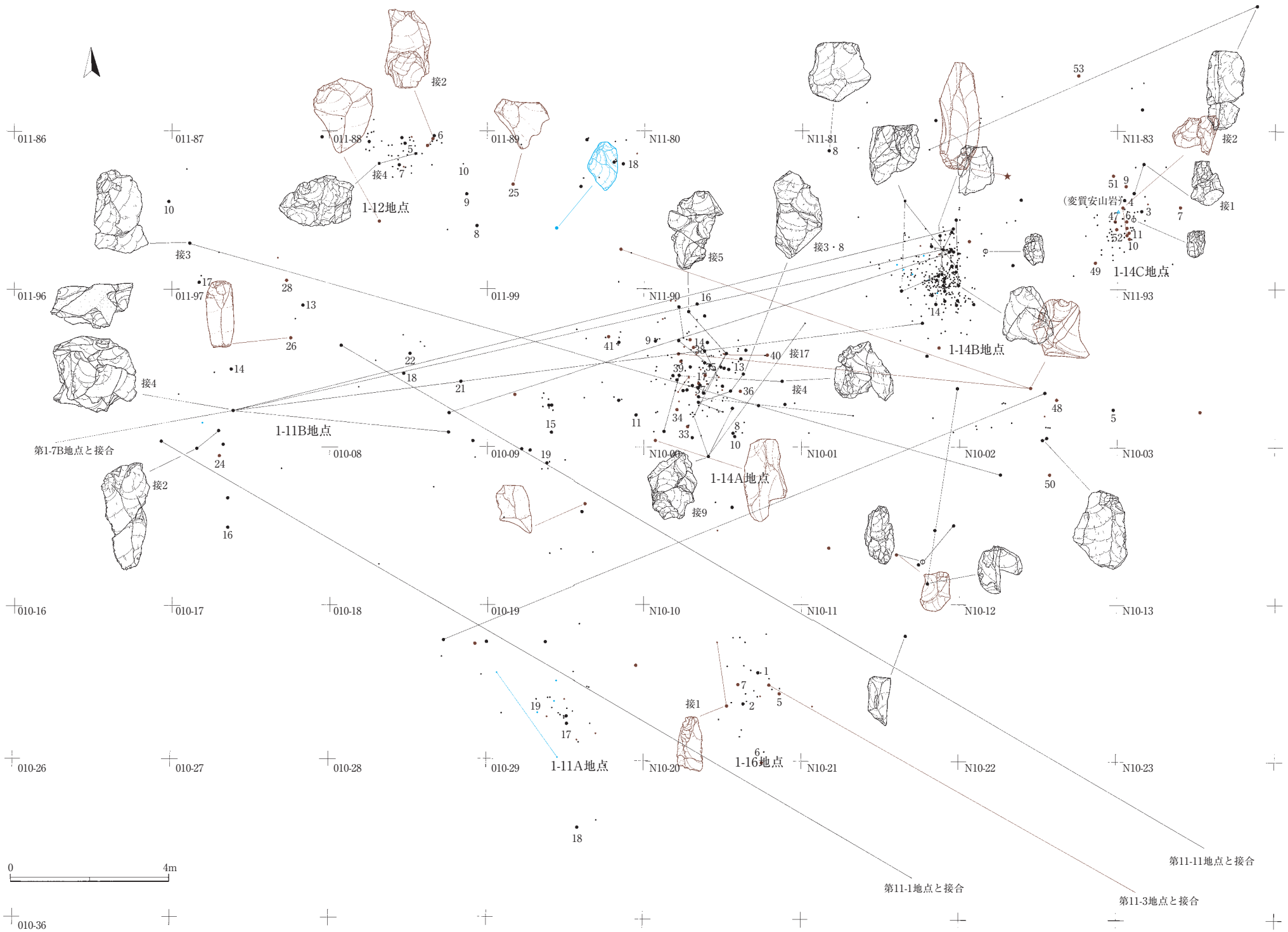
挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O９－24	16	26.716	掻器	硬質頁岩	3.40	2.70	0.75	7.94	接３	
		26	26.788	剥片	硬質頁岩	1.50	0.95	0.30	0.42		
2	O９－24	24	26.732	掻器	黒曜石	3.15	2.50	0.90	7.41		
3	O９－24	36	26.500	尖頭器	黒曜石	1.80	1.75	0.60	1.52		半欠
4	O９－24	21	26.800	剥片	黒曜石	1.90	2.50	0.50	2.08	接１	上端欠
		29	26.743	剥片	黒曜石	1.40	2.10	0.30	0.77		下端欠
5	O９－24	18	26.685	剥片	黒曜石	1.11	1.60	0.29	0.36	接２	下端欠
	O９－34	10	26.748	剥片	黒曜石	1.55	1.90	0.30	0.82		
6	O９－33	6	26.709	剥片	黒曜石	2.70	2.20	0.70	3.56		
7	O９－34	16	26.704	剥片	黒曜石	1.40	1.90	0.30	0.62		上下端欠
8	O９－34	20	26.674	剥片	黒曜石	1.60	1.90	0.25	0.50		
9	O９－34	7	26.832	剥片	黒曜石	1.70	1.00	0.20	0.37		
10	O９－34	18	26.766	剥片	黒曜石	1.55	1.20	0.15	0.30		
11	O９－24	33	26.610	剥片	硬質頁岩	1.65	2.10	0.30	1.31		上下端欠
12	O９－24	28	26.685	剥片	硬質頁岩	1.80	2.00	0.20	0.50		上端欠
13	O９－34	5	26.704	剥片	硬質頁岩	1.25	1.60	0.20	0.33		
14	O９－34	3	26.749	剥片	硬質頁岩	1.20	1.70	0.20	0.34		
15	O９－34	25	26.728	剥片	硬質頁岩	0.95	1.30	0.20	0.23		
16	O９－34	1	26.752	剥片	硬質頁岩	0.80	1.50	0.25	0.29		
17	出土地点不明	－	－	有樋尖頭器	黒曜石	5.25	2.30	1.05	9.41		

(15) 第１－11Ａ地点（第41図～第43図、図版29）

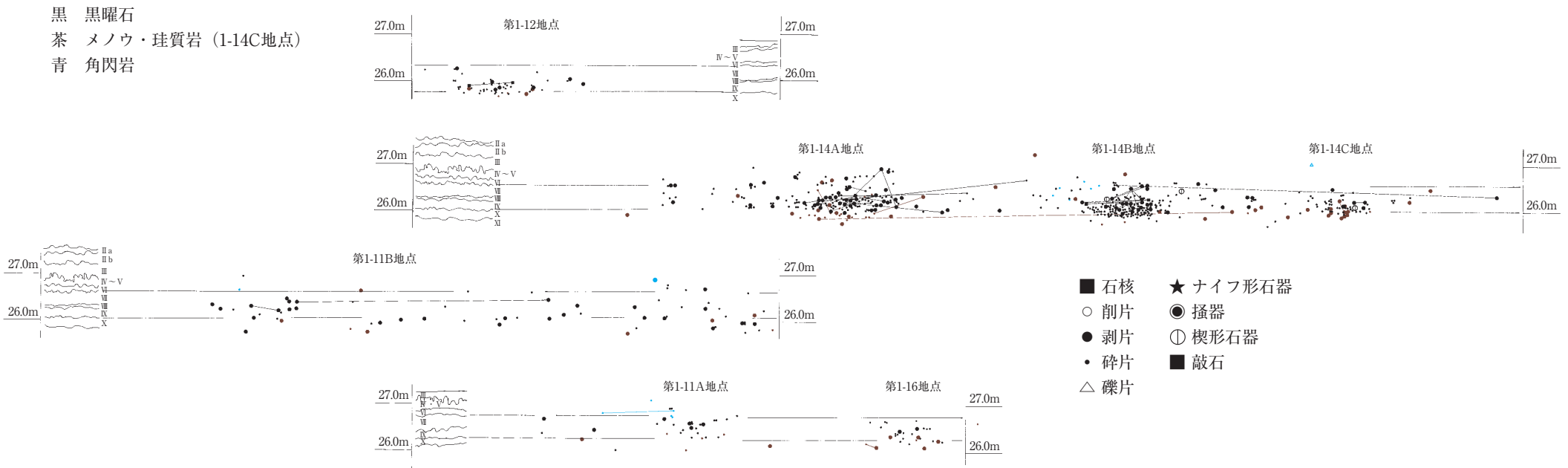
概要　本地点は調査区のほぼ中央に位置し、O10－19グリッドを中心に径４ｍ～５ｍの範囲で石器群が出土している。石器群の規模としては小さく、総数でも100点に満たないものであった。出土層位をみると第Ⅶ層から第Ⅸ層上部となり、これまでみてきた頁岩系の石器群で構成されていたものとは明確な時間差が認められた。石材についてみると、緑色硬質頁岩と黒曜石が主体を占め、次いで硬質頁岩、角閃岩、メノウなどで構成される。なお、砕片のみが出土した角閃岩は第11地点で出土している局部磨製石斧と同材であり、地点間の間接的な結びつきを示唆するものと思われる。さらに接合例として図示した１でも第11地点出土の剥片が接合している。

出土石器群　出土した石器群についてみると、成品は存在せず剥片のみで構成されていた。なかでも緑色硬質頁岩では図示した接合資料と剥片の他に砕片が13点出土しており、本地点で石器製作がおこなわれていたことが確認できた。

剥片（１～23）　１～６と７～10は接合関係を図示したものである。いずれも成品と認定できるものは認められなかった。ただ、６の上部両面では上方からの剥離が施されており楔形石器としての使用も考えられる。11は幅広の剥片で石器製作の素材としては十分な形状を有する。左側縁下半に使用痕が認められため一応石器としても使用していたようである。12～14も同材であり、おそらく同一の原石から剥離されたものであろう。16～19は黒曜石で表面には小石等の異物がみられた。16・17には使用痕らしき痕跡もみられた。19の表面には数回の押圧剥離が認められるところからトゥールチップスとなろう。21はメノウ製の

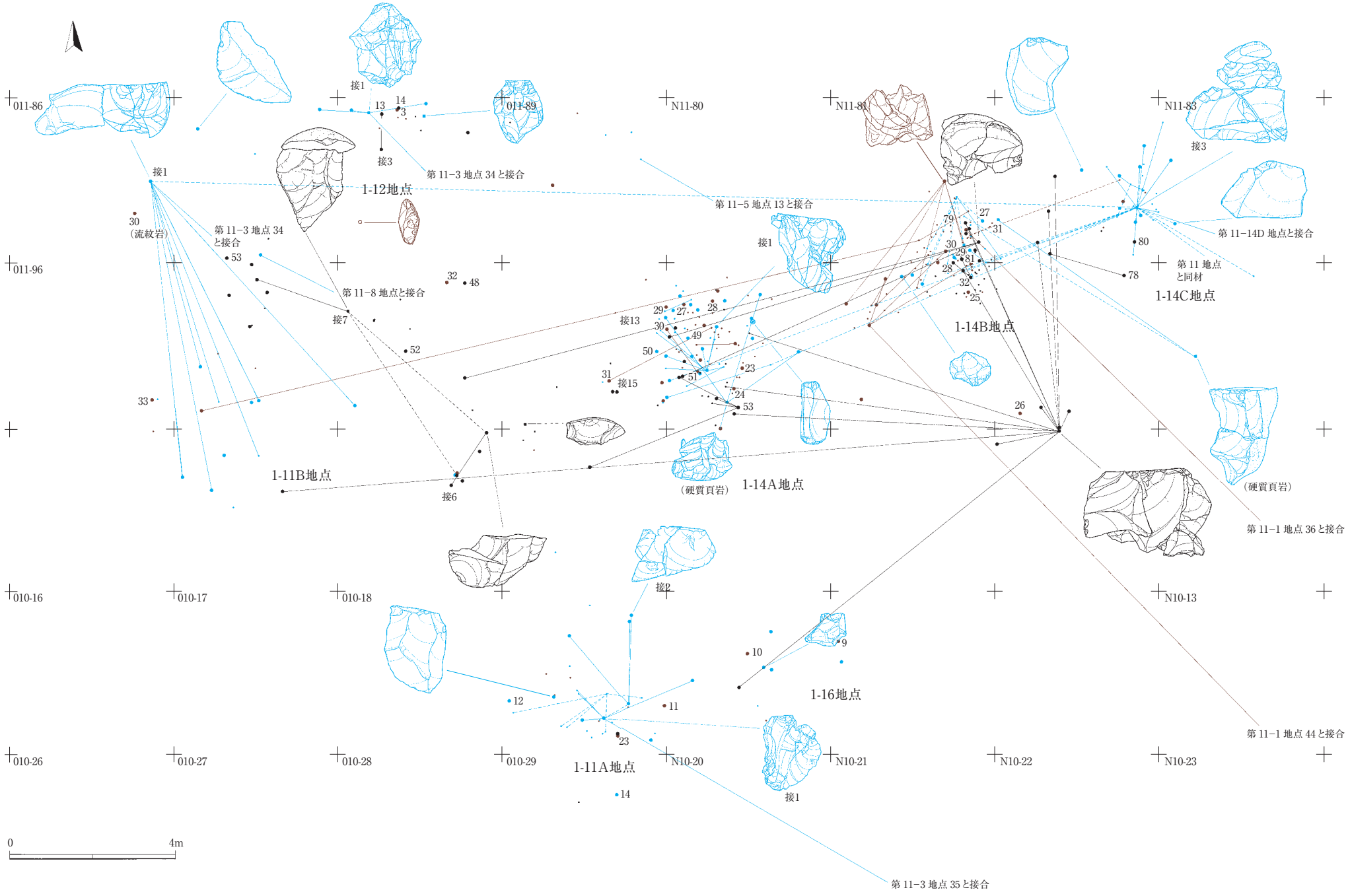


黒　黒曜石
茶　メノウ・珪質岩（1-14C地点）
青　角閃岩



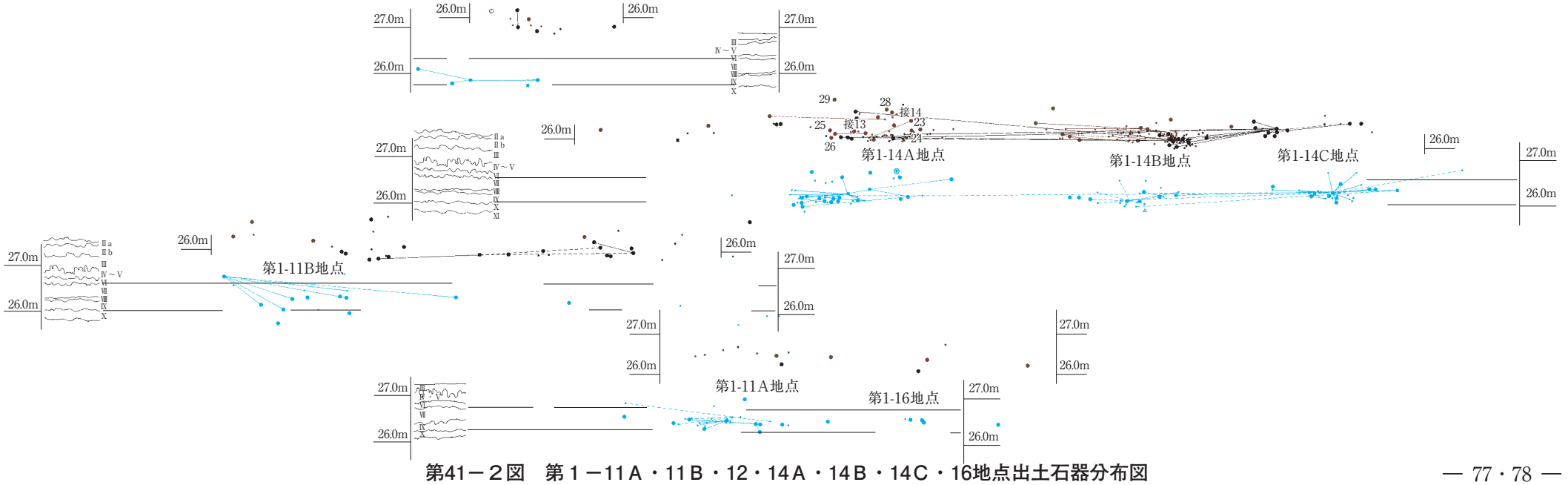
■ 石核　★ ナイフ形石器
○ 削片　◉ 掻器
● 剥片　◫ 楔形石器
• 砕片　■ 敲石
△ 礫片

第41－１図　第１－11Ａ・11Ｂ・12・14Ａ・14Ｂ・14Ｃ・16地点出土石器分布図

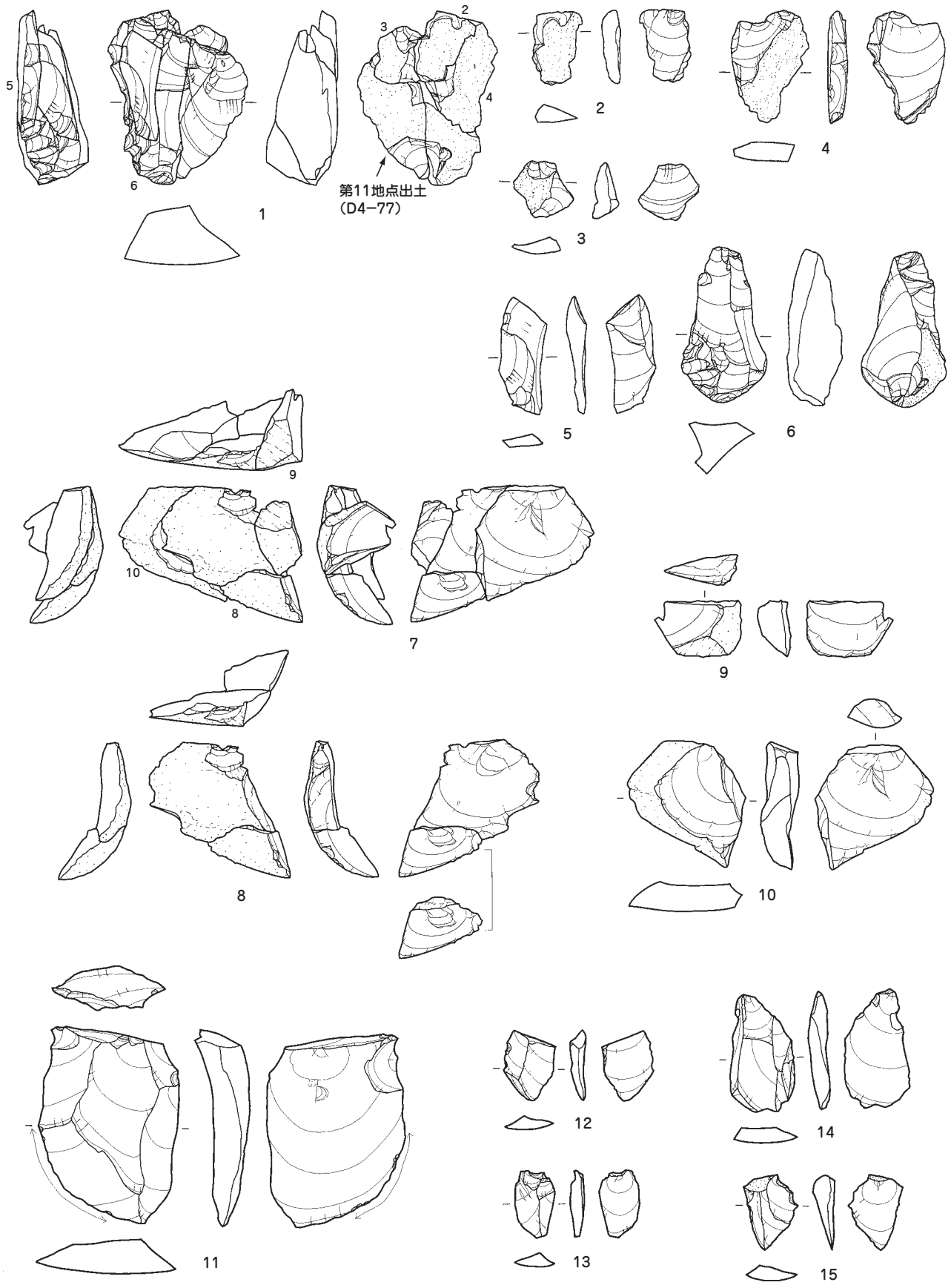


黒　黒色安山岩
茶　頁岩（硬質・珪質）
青　緑色硬質頁岩・珪質岩・その他

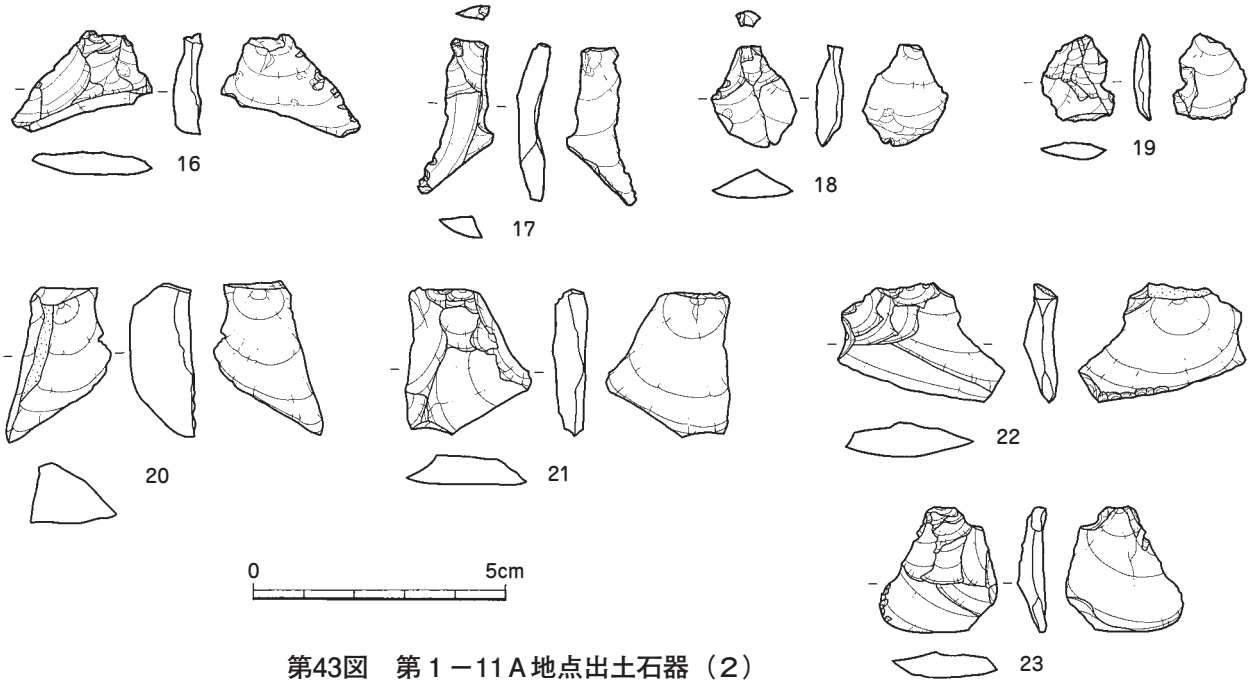
第1-12地点



第41－2図　第１－11A・11B・12・14A・14B・14C・16地点出土石器分布図



第42図　第１−11Ａ地点出土石器（１）



第43図　第１－11Ａ地点出土石器（２）

良好な剥片であるが使用の痕跡は認められない。22・23では微細な剥離が若干施されている。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石23点　硬質頁岩７点　緑色硬質頁岩27点　黒色安山岩２点　角閃岩６点　メノウ６点

器種　剥片28点　砕片43点　計71点

第15表　第１－11Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
１（２）	O10－19	35	26.426	剥片	緑色硬質頁岩	1.30	1.90	0.50	1.06	接１	
（６）	O10－19	54	26.476	剥片	緑色硬質頁岩	4.10	2.27	1.43	9.63		（楔形石器）
（３）	O10－19	61	26.380	剥片	緑色硬質頁岩	1.70	1.40	0.55	1.11		
（４）	O10－19	63	26.308	剥片	緑色硬質頁岩	2.80	2.10	0.50	3.40		
（５）	N10－10	25	26.447	剥片	緑色硬質頁岩	1.65	3.00	0.45	1.40		第１－16地点
	D４－77	4	26.140	剥片	緑色硬質頁岩	3.65	2.05	1.20	7.47		第11－３地点
７（８）	O10－19	2	26.254	剥片	緑色硬質頁岩	2.60	1.70	0.80	3.32	接２	
		3	26.404	剥片	緑色硬質頁岩	2.60	3.25	0.85	6.77		
（９）	O10－19	8	26.515	剥片	緑色硬質頁岩	2.35	1.50	0.90	3.26		
(10)	O10－19	17	26.421	剥片	緑色硬質頁岩	2.95	3.20	0.70	9.35		
11	O10－19	60	26.434	剥片	緑色硬質頁岩	4.80	3.75	1.00	20.94		
12	O10－19	46	26.565	剥片	緑色硬質頁岩	1.60	1.30	1.35	0.72		
13	O10－19	23	26.479	剥片	緑色硬質頁岩	1.70	1.00	0.35	0.49		
14	O10－29	5	26.940	剥片	緑色硬質頁岩	3.10	1.70	0.40	2.62		
15	O10－19	53	26.630	剥片	硬質頁岩	1.80	1.30	0.50	0.85		
16	O10－29	8	26.495	剥片	黒曜石	1.50	2.80	0.55	0.86		
17	O10－19	58	26.503	剥片	黒曜石	3.05	1.00	0.40	1.30		
18	O10－29	1	26.603	剥片	黒曜石	2.05	1.50	0.50	1.20		
19	O10－19	41	26.909	剥片	黒曜石	1.60	1.40	0.30	0.56		
20	O10－19	51	26.356	剥片	メノウ	3.20	1.70	1.20	6.07		
21	O10－18	5	26.509	剥片	メノウ	2.90	2.50	0.70	4.45		
22	O10－19	21	26.485	剥片	黒色安山岩	2.40	2.80	0.60	3.98		
23	O10－19	22	26.542	剥片	硬質頁岩	2.55	2.00	0.50	2.37		

（16）第１－11Ｂ地点（第41図・第44図～第48図、図版５・28）

概要　本地点の石器群は、Ｏ10－07グリッドとＯ11－97・98グリッドを中心として径15m～16mの広範囲の中で出土している石器群を一括した。ここでは石器群が特に集中するということはなく疎らに分布しているといった感を呈する場所であった。また隣接するような形で南に１－11Ａ地点、北に１－12地点、東に１－14Ａ地点とした石器群が確認されている。さらに、分布図で示したように接合関係では１－14Ｂ地点や第11地点との結びつきを認めることができた。これらの地点で採用されている石材は、黒曜石・メノウ・黒色安山岩などで構成されており共通点として捉えることができた。出土層位についてみると概ね第Ⅶ層から第Ⅸ層とみられるが、広範囲を分布域として捉えたため１m近い高低差も生じている。このため時期的に異なる第Ⅲ層に包含される石器群の混入も否定できない。

出土石器群　本地点から出土した石器群は、接合資料としては有効なものであったが定型的な石器として製作されているものは存在しなかった。１・35の接合資料からみると、母岩となった原石は拳大よりも大きなものと思われる。また剥片についてみると数点に使用痕が認められた。

剥片（１～42、44・45、47～53）　１は10点の剥片が接合した例である。２～９は個別の剥片を図化したものである。ここでの剥離の順序は、２・４を剥離し、次いで９を剥離して平坦な打面を設定し順序よく剥離作業をすすめている。石材は黒曜石で表皮部には軽石状の異物が付着し、内部には小石が多々みられる。10～22の剥片にも同様の遺物が認められるところから同一母岩から剥離された可能性が強い。10～12・14・15・17では微細な剥離や刃こぼれ状の痕跡が認められるため道具として使用されていたものと思われる。なお、17は打面調整された剥片である。23は緑色硬質頁岩で１－11Ａ地点で多数出土しており色調も近似している。断面三角を呈した大型剥片で左側縁には明確な使用痕が残る。24～28はメノウ製で25～27の一部に使用の痕跡が認められた。29は角閃岩で１－11Ａ地点でも出土している。これも同一母岩から剥離された石斧材であろう。あるいは破損した石斧から剥離されたとも思われる。35～43は残核を中心として接合した例である。剥片は36～39を剥離後、40の剥離により打面を整えて、さらに小さな剥片を剥取している。42は大型の剥片で右側縁裏面に微細な調整痕が認められる。これらは接合した長さが９cmほどにもなるため、原石はかなり大きなものであったと思われる。44～53は黒色安山岩で、使用を思わせる剥片はみあたらない。表皮部分の自然面から観察すると44・47・49には共通した凹凸面と節理痕がみられた。45は打面部設定のために剥離されたもので、46の残核ではきれいな平坦面が作出されている。

石核（43・46）　43を中心とした接合資料は出土したすべての剥片が接合しており、砕片の存在は認められなかった。このため成品の製作は異なった場所でおこなわれていたものと推測できる。46の剥離面観察では、ほぼ一定方向から剥片剥取がおこなわれていたようである。

いずれにしても本地点の石器群は剥片のみの出土であったが、接合関係により各地点間との結びつきという点では示唆的な一面を有した一群といえよう。

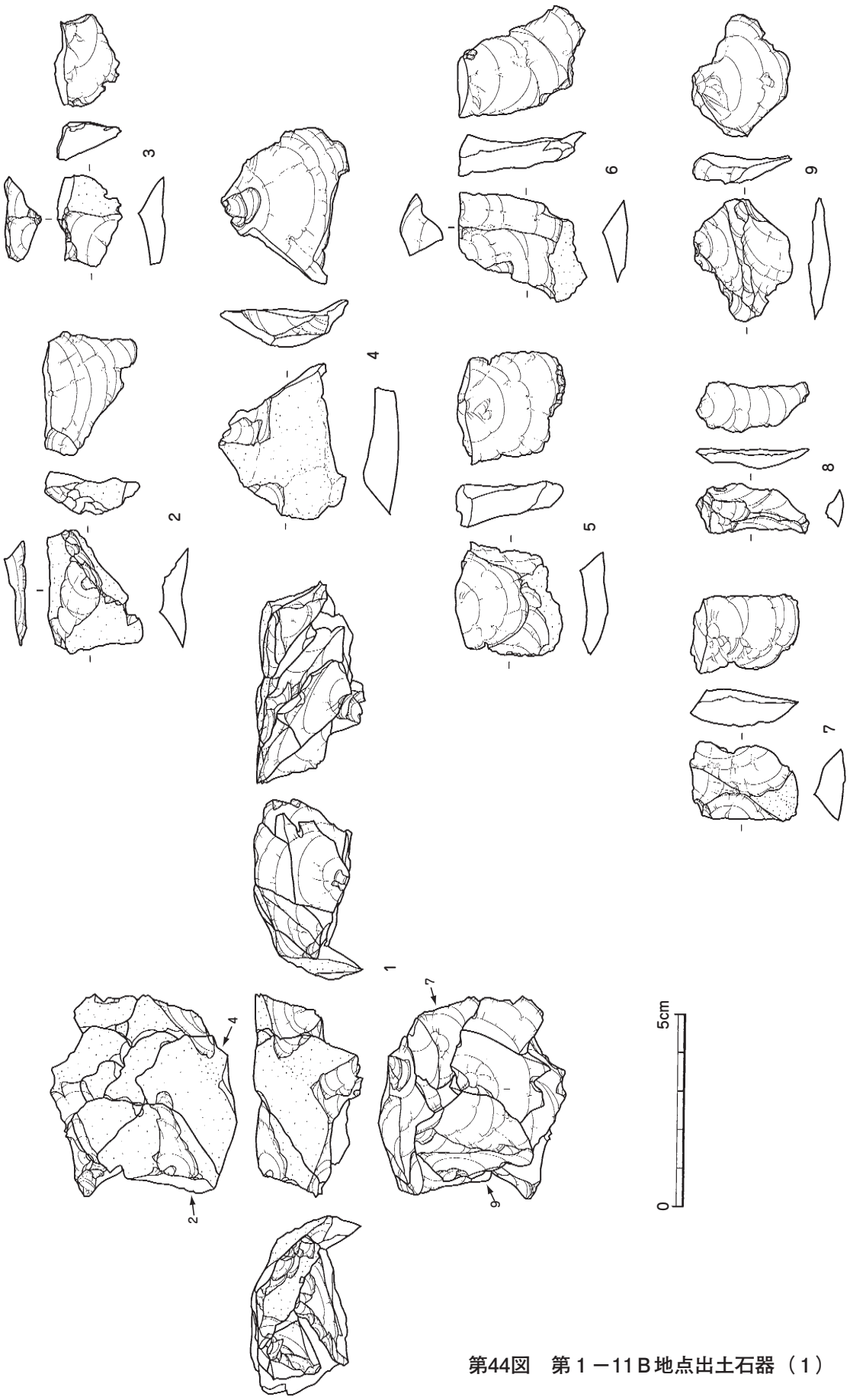
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石71点　珪質頁岩６点　硬質頁岩14点　緑色硬質頁岩１点　珪質岩６点　黒色安山岩23点　流紋岩３点　角閃岩１点　メノウ７点　碧玉１点

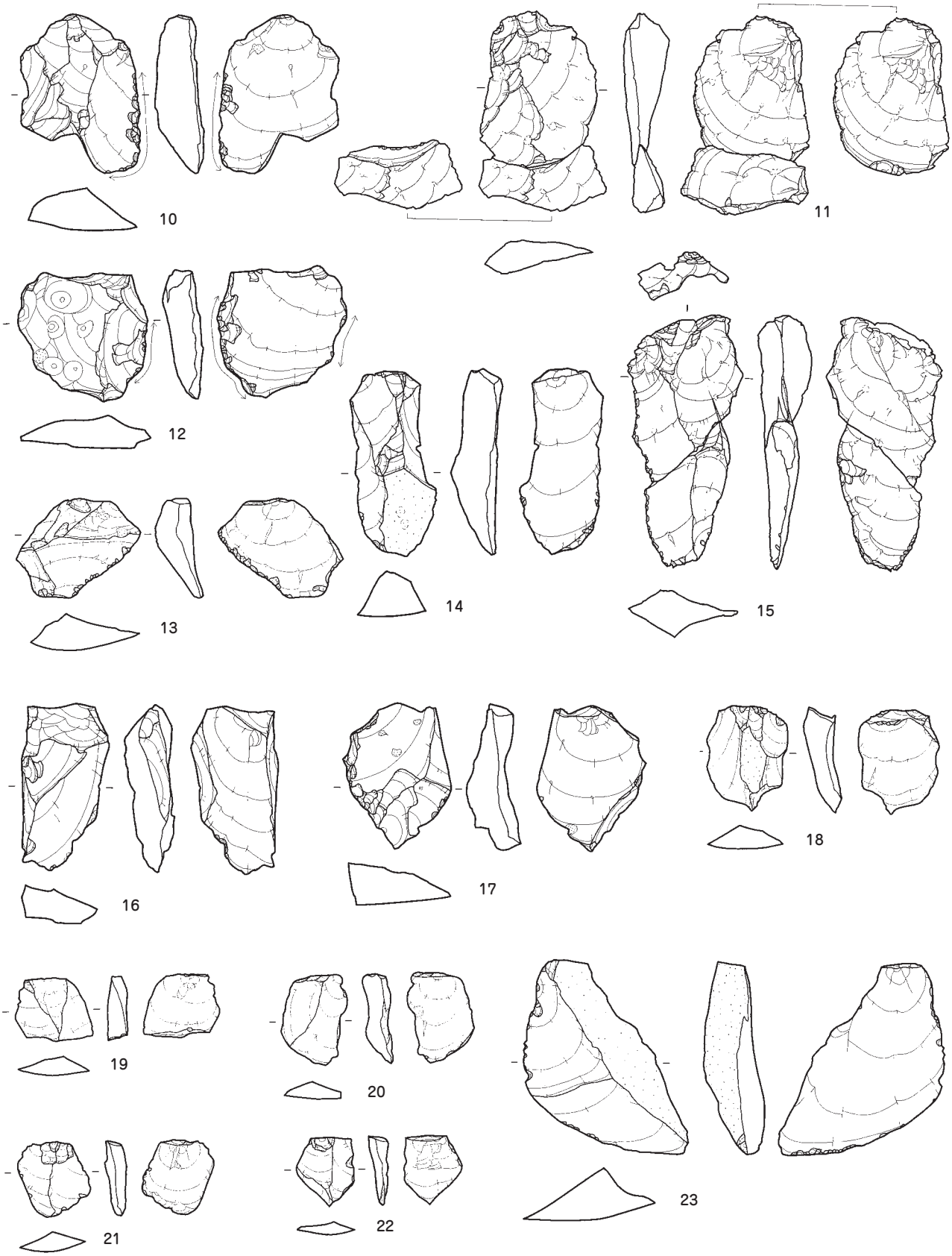
器種　剥片78点　砕片53点　石核２点　計133点

第16表　第１－11Ｂ地点実測石器属性表

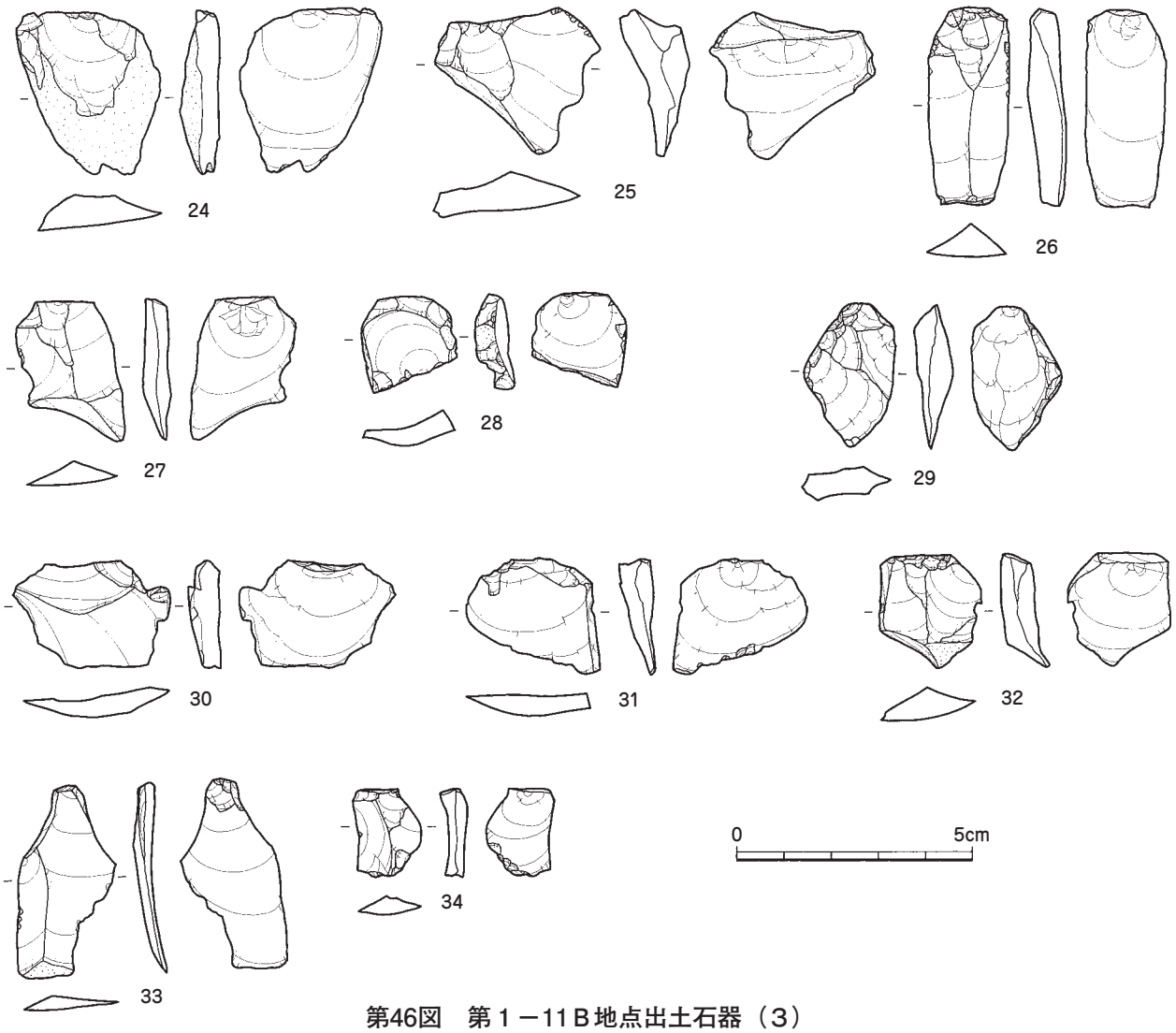
挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O11－97	8	26.399	剥片	黒曜石	4.10	4.60	2.00	24.29	接４	
	O11－98	7	26.449	剥片	黒曜石						
(８)	N11－91	5	26.374	剥片	黒曜石						
(９)	N11－91	51	26.204	剥片	黒曜石	2.50	3.20	0.70	3.76		
	N11－81	2	26.529	剥片	黒曜石	2.80	2.10	0.80	9.23		
(２)	N11－81	28	26.284	剥片	黒曜石	3.40	2.00	0.80	4.96		
	N11－81	31	26.229	剥片	黒曜石						
(４)	N11－81	155	26.084	剥片	黒曜石	3.50	3.85	0.90	8.71		
	O10－01	1	27.643	剥片	黒曜石						
	不明	２点		剥片	黒曜石						
10	O11－86	1	26.224	剥片	黒曜石	4.25	3.10	1.20	12.55		週縁U
11	N10－02	1	27.413	剥片	黒曜石	3.90	4.60	1.20	17.16	接３	
	O11－87	17	25.754	剥片	黒曜石	4.20	3.00	0.90	9.13		
12	O10－09	8	26.274	剥片	黒曜石	3.35	3.30	0.80	9.62		
13	O11－97	33	25.949	剥片	黒曜石	2.50	3.10	0.90	5.61		
14	O11－97	14	26.239	剥片	黒曜石	4.80	2.15	1.20	9.92		
15	O10－07	8	26.294	剥片	黒曜石	6.80	3.02	1.10	14.49	接２	両側U
	O11－97	4	26.224	剥片	黒曜石						
16	O10－07	17	26.369	剥片	黒曜石	4.45	2.20	1.30	10.46		
17	O11－87	6	26.110	砕片	黒曜石	1.10	1.20	0.50	0.42		
18	O11－89	9	25.950	剥片	黒曜石	2.80	2.10	0.80	4.08		
19	O10－09	15	26.065	剥片	黒曜石	1.70	2.00	0.50	1.58		
20	O11－98	9	26.914	剥片	黒曜石	2.40	1.60	0.60	2.22		
21	O11－98	20	26.129	剥片	黒曜石	1.90	1.60	0.50	1.39		
22	O11－98	14	26.059	剥片	黒曜石	1.80	1.55	0.40	0.89		
23	O11－87	14	25.809	剥片	緑色硬質頁岩	5.00	3.80	1.30	18.70		
24	O10－07	9	26.249	剥片	メノウ	3.40	2.90	0.75	7.37		
25	O11－89	19	25.592	剥片	メノウ	3.26	3.18	1.06	7.29		
26	O11－97	30	26.029	剥片	メノウ	4.20	1.70	0.70	4.87		
27	O10－09	13	26.280	剥片	メノウ	2.10	2.00	0.50	2.02		
28	O11－87	10	26.914	剥片	メノウ	3.00	2.10	0.50	3.02		
29	O11－89	3	26.800	剥片	角閃岩	1.90	2.40	0.60	3.90		石斧材
30	O11－86	2	26.269	剥片	流紋岩	2.20	3.10	0.40	2.39		
31	O10－08	2	26.234	剥片	流紋岩	2.30	2.70	0.60	3.13		
32	O11－98	19	26.269	剥片	硬質頁岩	2.50	2.20	0.70	3.24		
33	O11－97	2	26.594	剥片	硬質頁岩	1.85	1.40	0.40	0.96		
34	O11－97	2	26.594	剥片	硬質頁岩	4.20	1.90	0.40	1.98		
35					珪質岩				76.00	接１	９点の接合
(36)	O11－97	28	26.099	剥片	珪質岩	3.75	2.20	1.30	8.54		
(37)	O11－98	6	26.364	剥片	珪質岩	2.80	2.65	0.60	4.73		
(38)	O11－97	7	26.509	砕片	珪質岩	0.80	0.80	0.40	0.17		
	O10－07	3	26.524	剥片	珪質岩	1.60	0.80	0.50	0.54		
(39)	O10－07	6	26.339	剥片	珪質岩	2.95	2.56	0.70	4.18		
(40)	O10－07	7	26.199	剥片	珪質岩	3.00	1.90	0.70	5.06		
(41)	O11－97	12	26.364	剥片	珪質岩	2.00	1.50	0.60	1.90		
(42)	O11－86	3	26.809	剥片	珪質岩	4.70	4.20	1.40	24.81		
(43)	Ｄ４－66	7	26.375	石核	珪質岩	2.60	3.80	4.30	26.07		第11－５地点
44										接７	
(45)	O11－97	36	25.974	剥片	黒色安山岩	2.88	4.52	1.55	21.09		
(46)	O11－98	5	26.054	石核	黒色安山岩	5.10	4.05	1.72	40.17		
47	O11－98	24	26.084	剥片	黒色安山岩	3.50	5.50	1.60	29.06	接６	
	O10－08	3	26.304	剥片	黒色安山岩						
48	O11－98	18	26.004	剥片	黒色安山岩	3.45	2.30	1.30	8.73		
49	O10－08	1	26.304	剥片	黒色安山岩	3.20	1.60	1.30	6.84		
50	O11－87	13	26.834	剥片	黒色安山岩	2.00	3.10	0.50	3.31		
51	O10－08	7	26.184	剥片	黒色安山岩	2.55	1.50	0.50	2.06		
52	O11－98	10	26.129	剥片	黒色安山岩	2.20	1.50	0.70	1.90		
53	O11－87	7	26.119	剥片	黒色安山岩	2.50	1.90	0.30	1.44		



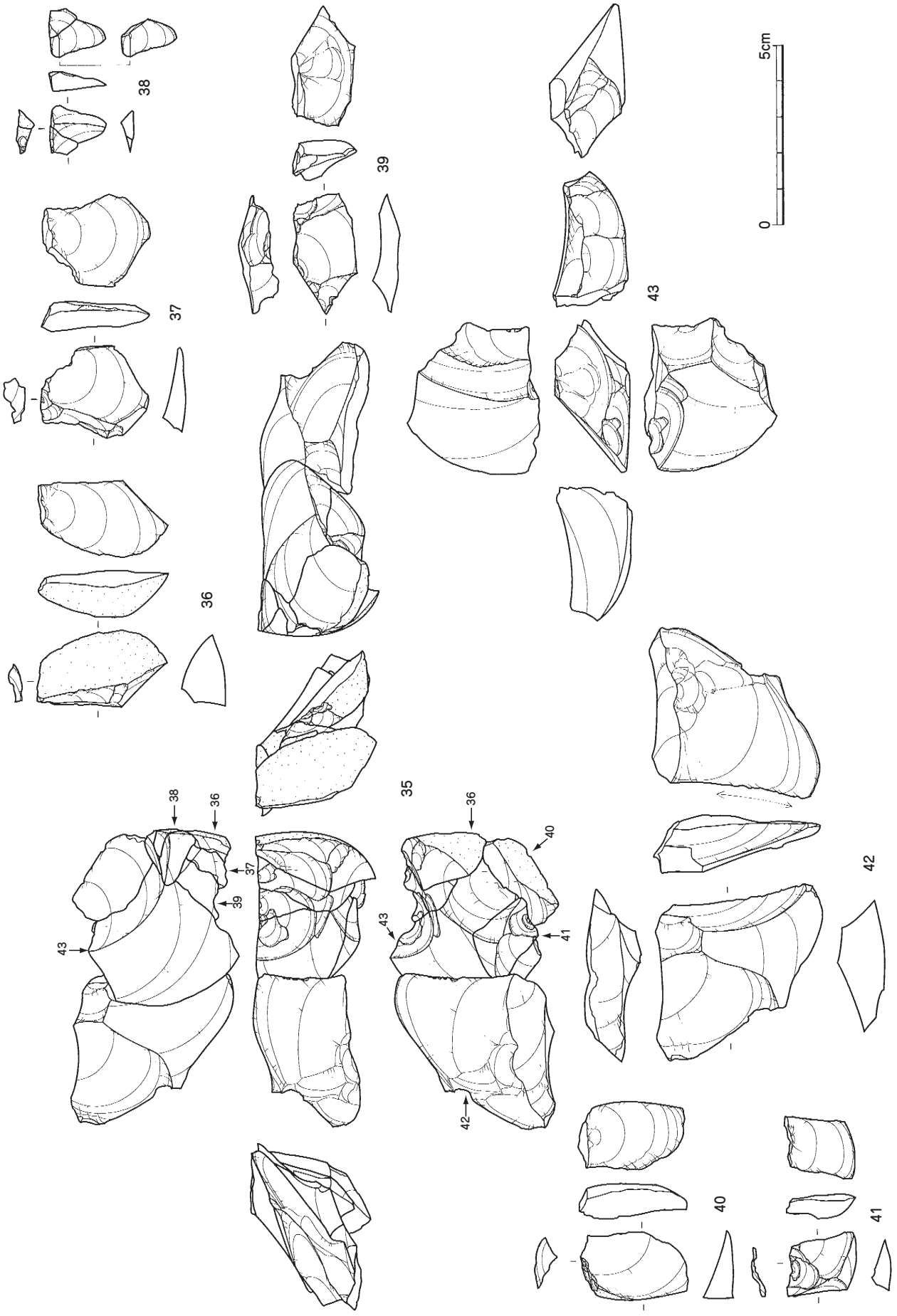
第44図　第１－11Ｂ地点出土石器（１）



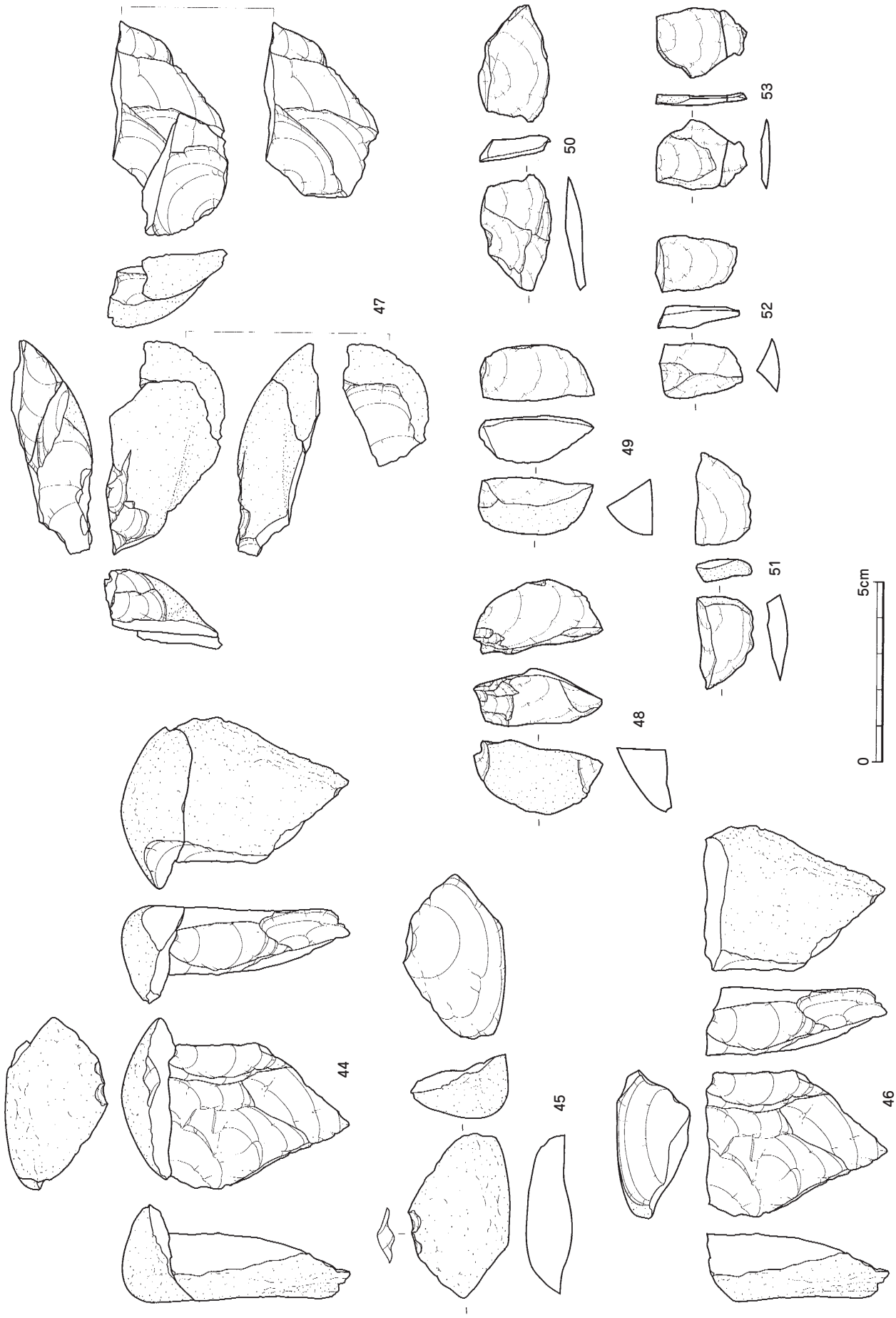
第45図　第１－11Ｂ地点出土石器（２）



第46図　第１－11Ｂ地点出土石器（３）



第47図　第１－11Ｂ地点出土石器（４）



第48図　第１－11Ｂ地点出土石器（５）

（17）第１－12地点（第41図・第49図・第50図、図版５・29）

概要　本地点の石器群は、O11－88グリッドを中心に、一部が隣接するO11－87グリッドに及ぶものの小範囲な出土であった。出土遺物の総数も69点と少なく集中地点としては小規模となろう。また本地点でも約500m東南に位置する第11地点との接合関係が認められた。ここで採用されている石材は黒曜石が70％弱となり、他には頁岩系やチャート系・メノウ・黒色安山岩などで構成されている。ここでの黒曜石も小石などの異物を含有し質的には劣るものであった。なお、出土層位は第Ⅶ層～第Ⅸ層として捉えることができ周辺の石器群と変わらないものとなっている。

出土石器群　本地点から出土した石器群についてみると、定型的な石器は僅かしか認められず内容的には貧弱といる。残核はそれぞれ異なる石材であった。特に黒曜石では砕片が多く、辛うじて石器と認められるものは楔形石器のみであった。

楔形石器（５）　左右に粗雑な剥離を施し、裏面にも剥離が及ぶ。また左側縁では使用の痕跡もみられたため楔形石器とした。表面には径５mmの小石がみられる。

二次加工剥片（20）　19に接合した剥片で下端部右に数回小さな剥離が施されている。掻器のように使用したものであろう。

削片（２）　右側縁上部が小さな刃潰し痕で緻密に調整されている。基部周辺での加工は認められないがナイフのような石器として使用された可能性も考えられる。出土層位は本石器群のなかでも上部であったため第Ⅲ層で出土する一群の石器と考えたい。

剥片（３・６～14・16～18）　剥片類については13点を図示した。このうち６・７・12には側縁に微細な剥離や刃こぼれ痕が認められた。10の剥片は薄く多方向からの剥離で表面が覆われる。11は同一グリッド内から出土した剥片が接合したもので、石器素材となる形状を呈しているが使用の痕跡はみられない。

石核（１・４・19）　１は、本遺跡では珍しい赤色チャートの残核である。しかし同石材の剥片は出土してはいない。加撃は上下方向から加えられており、打面調整は認められない。しかも自然面が多くみられるところからやや小さめな原石と思われる。４は黒曜石で同一グリッドから出土した剥片が１点接合している。表面には小石や軽石状の異物が多くみられ、良好な剥片は得られないような石質である。本地点出土の黒曜石はほぼ全点がこのような石質であった。15は珪質岩の接合資料で、16～20が接合したものである。なお16は第11－３地点から出土している。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石46点　硬質頁岩５点　珪質岩５点　頁岩１点　黒色安山岩６点　赤色チャート１点　メノウ５点

器種　楔形石器１点　二次加工剥片１点　削片１点　剥片20点　砕片43点　石核３点　計69点

第17表　第１－12地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O11－88	53	25.789	石核	赤色チャート	3.80	2.90	2.60	35.93		小円礫素材
2	O10－88	1	26.100	削片	硬質頁岩	2.76	1.15	0.25	1.03		
3	O11－88	35	25.889	剥片	硬質頁岩	3.10	1.80	0.98	4.88		
4	O11－88	10	25.854	石核	黒曜石	3.00	4.90	2.00	31.01	接４	
	O11－88	24	25.909	剥片	黒曜石						
5	O11－88	37	25.814	楔形石器	黒曜石	2.50	1.90	0.90	3.55		

第49図　第１－12地点出土石器（１）

第50図　第１－12地点出土石器（２）

6	O11－88	66	25.819	剥片	黒曜石	2.70	2.10	1.40	6.89		
7	O11－88	28	25.924	剥片	黒曜石	2.40	2.70	1.20	7.12		
8	O11－88	13	25.864	剥片	黒曜石	1.65	2.40	0.90	3.54		
9	O11－88	14	26.089	剥片	黒曜石	2.00	1.40	0.40	0.91		
10	O11－88	15	25.989	剥片	黒曜石	1.65	1.80	0.40	0.80		
11	O11－88	18	25.924	剥片	メノウ	2.40	2.40	0.65	16.55	接２	
	O11－88	20	25.809	剥片	メノウ	4.15	2.70	1.10			
12	O11－88	2	25.934	剥片	メノウ	4.25	3.80	1.10	12.87		
13	O11－88	7	26.182	剥片	黒色安山岩	1.90	1.60	0.48		接３	
	O11－88	39	25.814	剥片	黒色安山岩	4.20	2.10	1.20	12.39		
14	O11－88	67	25.744	剥片	黒色安山岩	3.05	2.50	1.00	6.42		
15										接１	
(16)	D４－87	18	25.910	剥片	珪質岩	2.65	2.60	1.00	7.83		第11－３地点出土
(17)	O11－88	50	26.079	剥片	珪質岩						
(18)	O11－88	69	25.839	剥片	珪質岩						
(19)	O11－88	43	25.809	石核	珪質岩	2.40	3.80	2.50	37.09		
(20)	O11－88	49	25.744	二次加工	珪質岩						

(18) 第１－13地点（第51図・第52図、図版30）

概要　本地点の石器群は第１地点のなかでも最も東に位置しており、O10－97グリッドの試掘により４の石器が検出されたため周辺を拡張して調査したものである。その結果、O10－97・98・99の連続したグリッドから石器等が出土し、15点の石器群で構成されていた。石器集中地点としては極めて小規模なものといえる。出土層位は第Ⅱ層下部から第Ⅲ層で20cmほどの高低差が認められた。石材は黒色安山岩・デイサイトが主体となり、ホルンフェルス・頁岩等がみられた。

出土石器群　成品としては錐が１点、少し離れたO10－97グリッドから出土したのみで、他は剥片類だけとなっている。

礫群　本地点でも石器群とともに礫群が検出されている。石器群と同様に小規模なものであった。

錐（４）　打面を形成するために剥離された剥片の右側縁上部を抉るように２～３回加撃し突起部を作出している。明確ではないが、側縁一部を微細な剥離で整形している。

剥片（１～３・５・６）　剥片類についてみると、石器素材となり得るものは少なく６のみに小さな剥離痕が一部に認められた。

なお、デイサイト３点は円礫の破砕品が接合したものである。

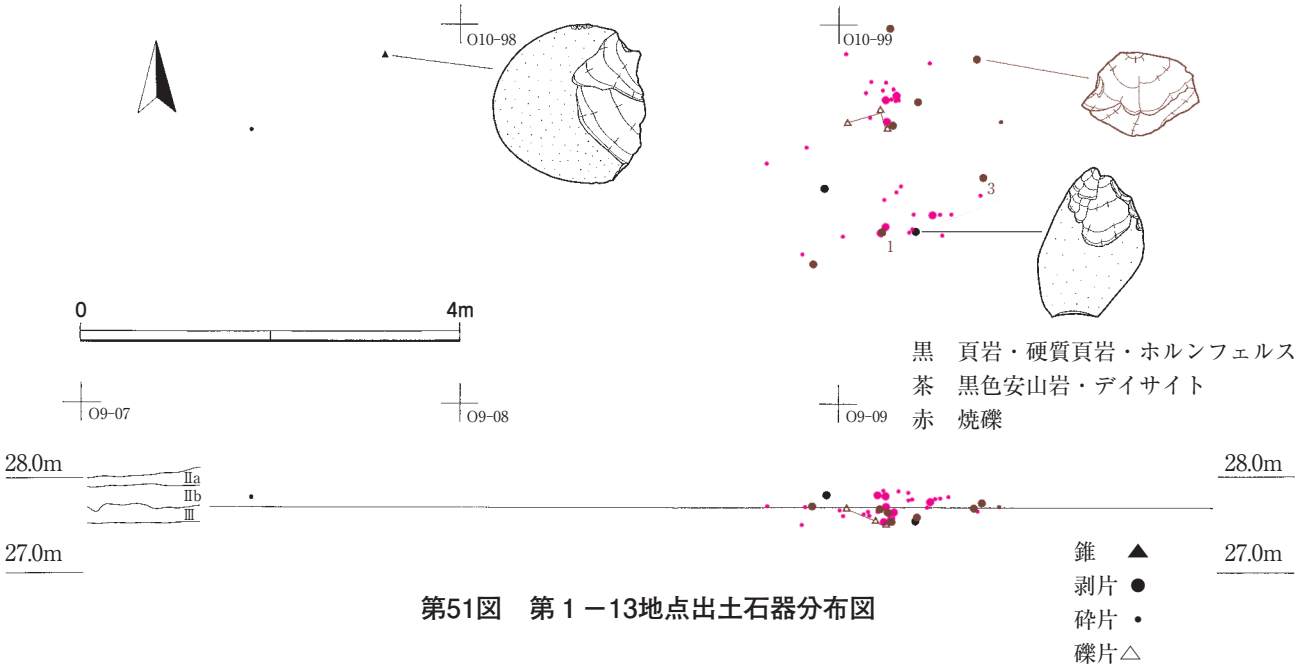
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　硬質頁岩１点　頁岩１点　黒色安山岩８点　ホルンフェルス２点　デイサイト３点

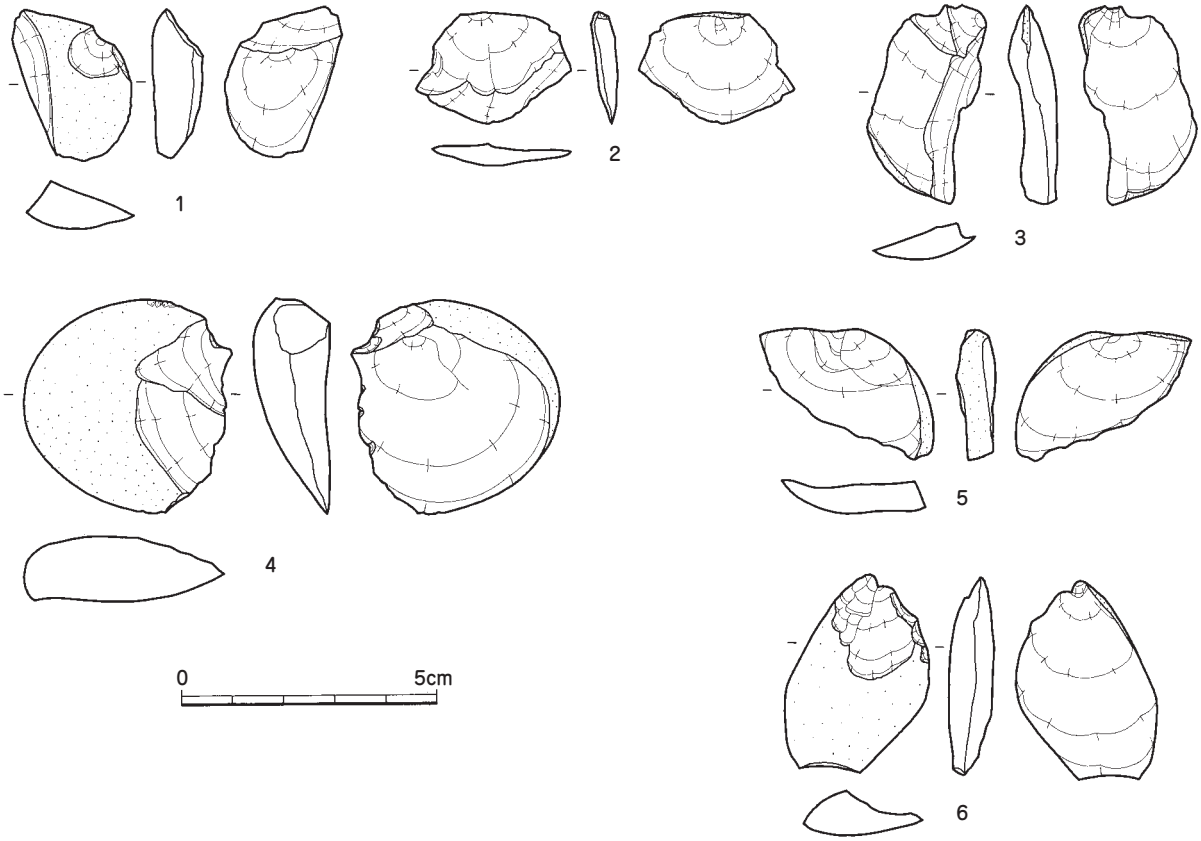
器種　錐１点　剥片７点　砕片４点　円礫３点　計15点

第18表　第１－13地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O10－99	23	27.685	剥片	黒色安山岩	3.20	2.92	0.88	5.58		
2	O10－99	33	27.568	剥片	黒色安山岩	2.20	2.70	0.40	2.36		
3	O10－99	8	27.753	剥片	黒色安山岩	3.90	1.70	0.60	5.49		
4	O10－97	1	－	錐	硬質頁岩	4.30	4.15	1.48	24.43		
5	O10－98	3	27.838	剥片	ホルンフェルス	2.50	2.70	0.55	4.40		
6	O10－99	38	27.568	剥片	ホルンフェルス	3.90	2.60	0.90	9.42		



第51図　第１－13地点出土石器分布図



第52図　第１－13地点出土石器

（19）第１－14Ａ地点（第41図・第53図～第57図、図版31～33）

概要　本地点の石器群は、Ｎ11－90グリッドを中心として径６ｍほどの範囲で集中的な分布が認められた。また、その一部は隣接するＯ11－99グリッドにまで拡散しており広い分布域を示していた。他地点との関連についてみると、東に位置する第１－14Ｂ地点、同Ｃ地点出土の石器群と接合関係が確認できた。このため東西に並ぶように存在する３地点は同時期か、あるいは近い時期に形成されたことを示唆しているものと考えられた。石器群の出土層位も概ね第Ⅸ層の暗色帯となり、本遺跡としては最も古い時期に属する石器群となる。石材についてみると、黒曜石が50％以上を占めており、次いで硬質頁岩や珪質岩といった頁岩系となる。ここで珪質岩とした石材は特徴的な色彩のもので、岩石の形成過程によるものか表皮部では乳白色を呈し、内部は灰色となる。また緑色硬質頁岩も区別しやすい石材で石器群間の関連を容易に把握できる石材として有効であった。

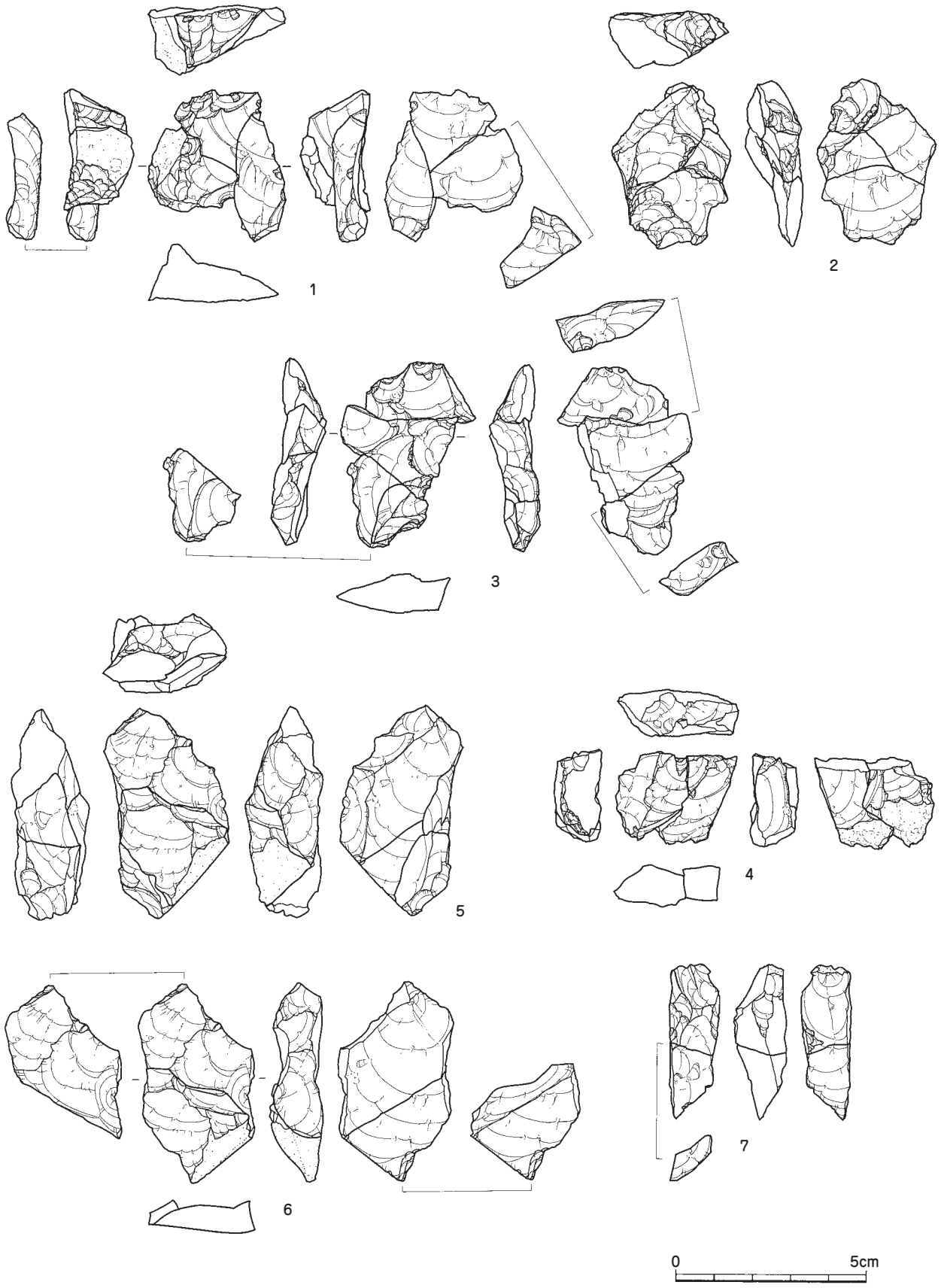
出土石器群　石器群についてみると、出土総数は282点を数え量的にもかなり多いものといえる。しかし定型石器と見做されるものは掻器のみで、他は剥片・砕片の類となっている。特に黒曜石はすべて剥片や砕片で明確な残核といえるものはみられなかった。しかし、剥片間での接合が確認されているため石器製作がおこなわれていたことは間違いあるまい。しかも本地点の黒曜石は異物の混入が著しく石器素材となり得る剥片はそれほど多くは取得できなかったように思われる。言い換えれば良好な剥片はすべて石器製作に結びついたものであろう。

掻器（42）　厚手の縦長剥片を素材としたものである。打点部や周縁での整形は認められず比較的簡単な作りで仕上げている。下端の刃部は数回の整形を兼ねた小さな剥離によって半円形に均整のとれた形に作り出されている。石材にはオリーブ色を呈した緑色硬質頁岩を用いた一例である。下端部の整形と調整から掻器としてよいであろう。

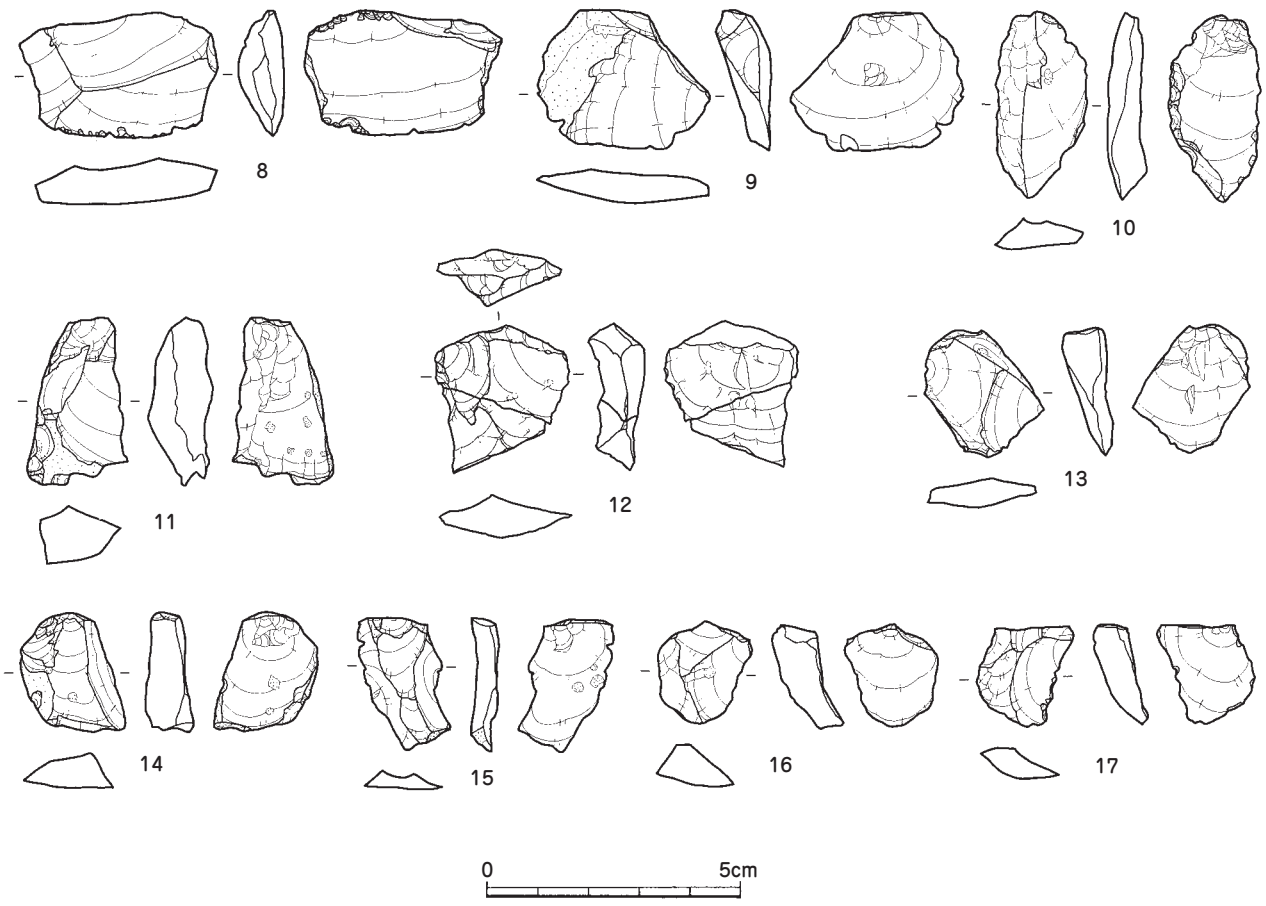
二次加工剥片（２・10）　接合資料である２の裏面上部に接合した剥片の側縁の一部に小さな二次剥離が認められる。10も打点部を整形するとともに、右側縁の中央部分に裏面から剥離を施している。この剥離は整形とともに左右を対称に整えたとも思われる。いずれにしても削器のような石器として使用したことは間違いあるまい。

剥片（３～17・19～21・23～41・44～46・48～55）　１～５は残核を含む剥片類の接合資料である。本地点では単体で残核として存在する資料は少ない。黒曜石の場合、石材も良質ではないため大型の剥片等は、さらに剥離や折断が繰り返されている。４は残核ともいえる。平坦部を打面としてさらに分割したようである。８～17は黒曜石製の剥片である。８の周囲には微細な剥離や刃こぼれ痕がみられる。石器として使用されたものであろう。他に同様な使用痕を観察できるものとして23・24・25・32・41をあげることができる。23は素材が薄い剥片であるため側縁部に刃こぼれ痕が顕著に認められる。24は石刃状の剥片で整形されてはいないが右側縁中央に僅かな刃こぼれが観察できる。25も同様で、右側面を意識的に削除して石器として使い易くしているようである。32は左側縁下半部に凹凸が著しく削器様の石器として使用されていたものであろう。41は薄い小型剥片で、裏面の側縁に微細な調整痕が施されている。その他の剥片は、34・35のように石器素材としては十分な形状を有しているが、石器として使用された痕跡は認められなかった。なお、28・29は赤褐色を呈しており被熱の結果（注）とのことであった。この変化は、接合資料の

注　石材を鑑定していただいた柴田徹氏のご教示による。



第53図　第１－14Ａ地点出土石器（１）



第54図　第１－14Ａ地点出土石器（２）

43で一層明白となっている。30・31も表面は被熱により若干淡い赤褐色を呈している。

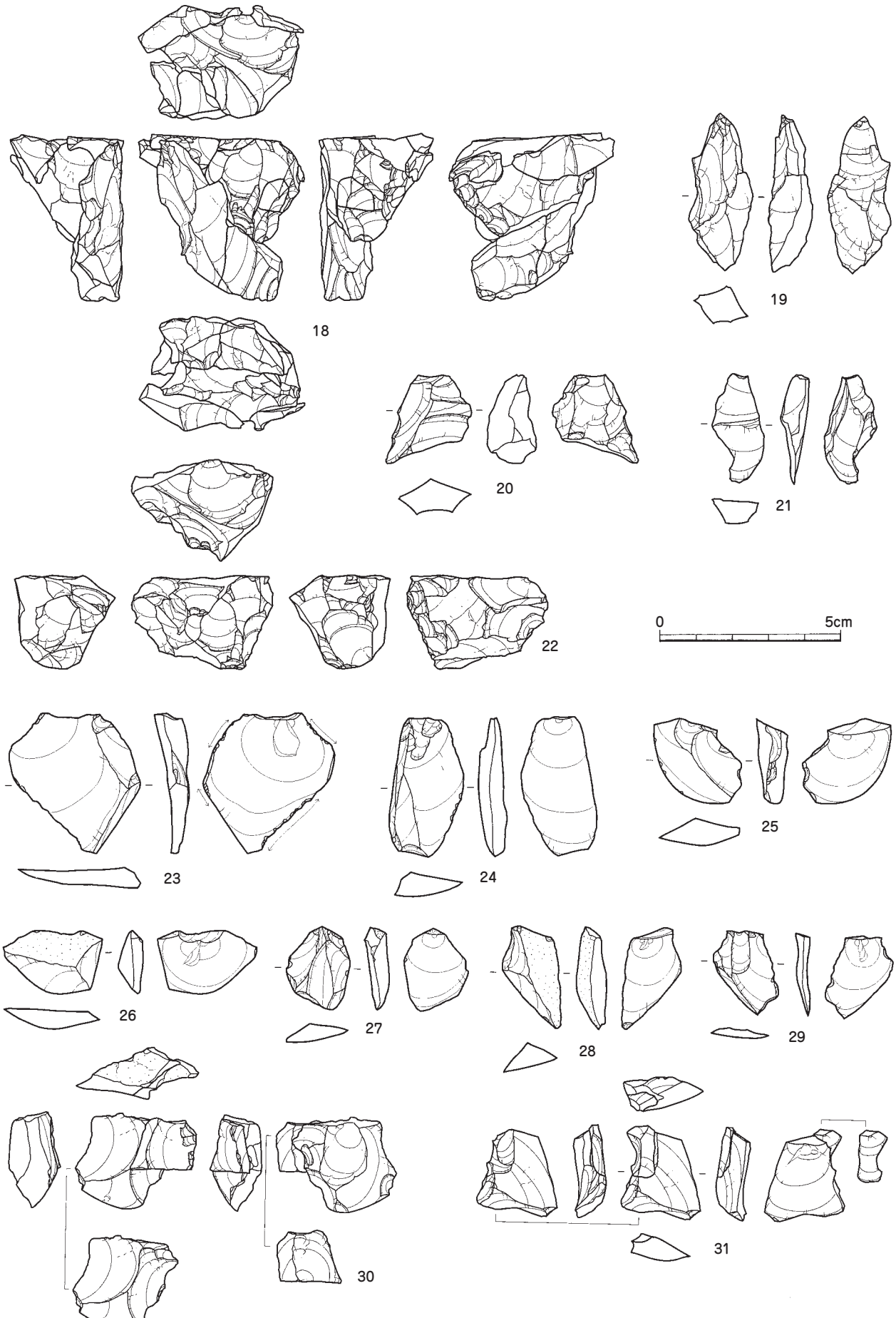
石核（１・22・47）　１は平坦面を打面とし順次周囲からの剥片剥離が認められる。22には７点が接合して18のような形に変化した。このことから平坦な打面から順次剥離されていったようである。石材の色調は、打面部が乳白色となる。さらに剥片19で観察すると、上部が僅かに乳白色となり、これに接合する剥片20は灰白色（注）へと変化する（巻頭図版参照）。47は剥片が３点接合し43となった接合例である。この資料から剥片は剥離によって形成された平坦部を移動しつつ剥取されていることが理解できる。接合した３点の剥片は黄褐色で、残核部分は表皮部分が黒褐色、打面部が赤褐色に変化しており被熱によるものと思われる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

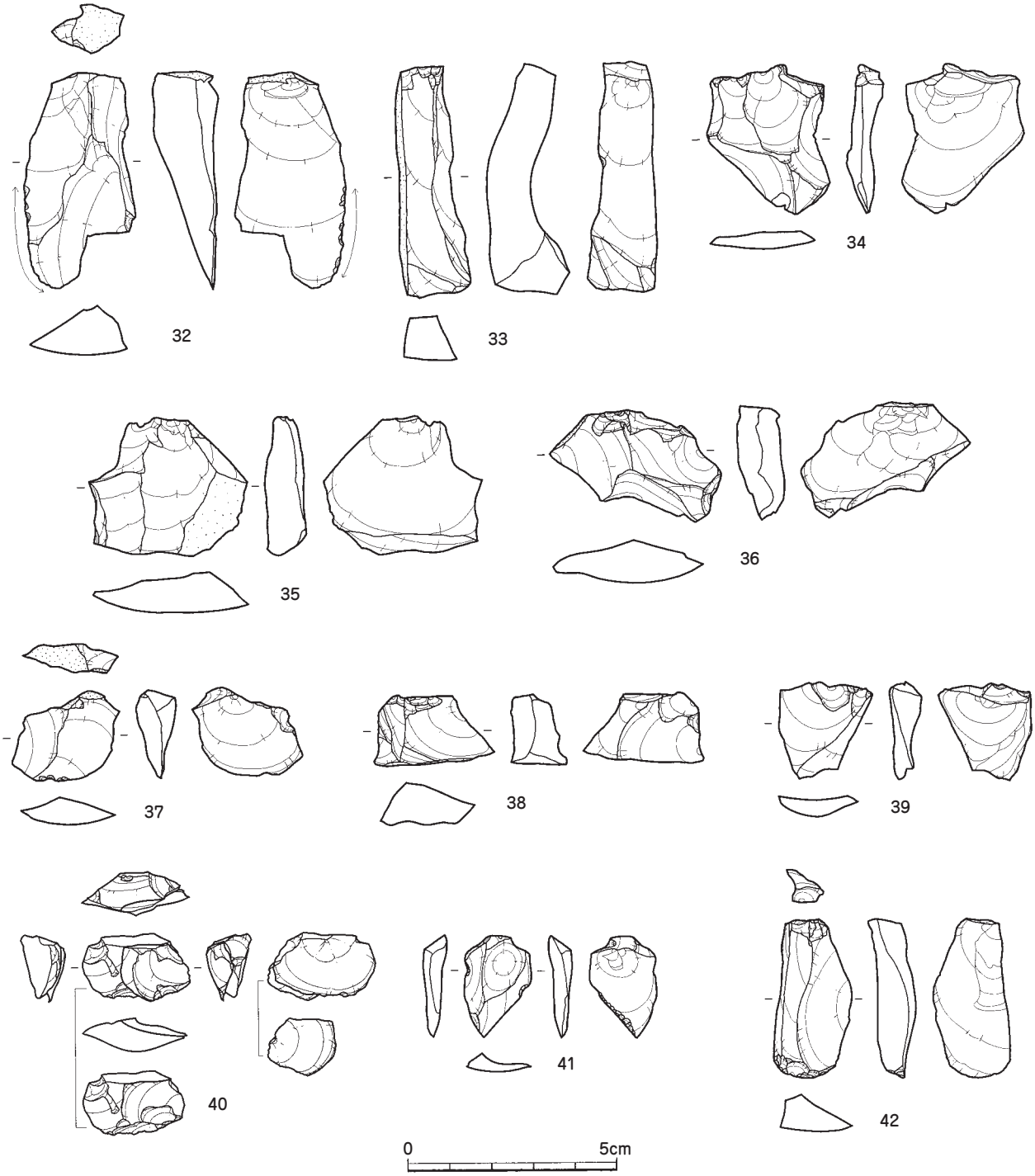
石材　黒曜石156点　珪質頁岩22点　硬質頁岩22点　珪質岩28点　頁岩４点　緑色硬質頁岩２点　黒色安山岩21点　メノウ26点　凝灰岩１点

器種　掻器１点　二次加工剥片２点　剥片100点　砕片176点　石核３点　　計282点

注　こうした例は希であるが、表皮部分のみの剥片では珪質頁岩と色彩的には区別しにくい点であった。



第55図　第１－14Ａ地点出土石器（３）



第56図　第１－14Ａ地点出土石器（４）

第57図　第１－14Ａ地点出土石器（５）

第19表　第１－14Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	N11－90	78	26.262	石核	黒曜石	2.30	2.25	1.30	5.30	接４	核部片
	N11－90	179	26.004	剥片	黒曜石	3.25	1.40	0.70	2.89		
	N11－90	262	26.214	石核	黒曜石	2.20	2.50	1.60	7.35		
2	N10－00	1	26.336	剥片	黒曜石	3.30	1.40	1.30	6.30	接９	
	N11－90	118	26.275	剥片	黒曜石	1.60	1.70	0.75	1.67		
	N11－90	125	26.250	剥片	黒曜石	2.10	2.60	0.60	3.13		
	N11－91	21	26.564	二次加工	黒曜石	1.10	1.55	0.50	0.14		
3	N11－90	52	26.364	剥片	黒曜石	2.40	2.80	0.80	6.33	接５	
	N11－90	117	26.260	剥片	黒曜石	1.60	2.60	0.80	3.33		
	N11－90	119	26.243	砕片	黒曜石	1.30	1.70	0.30	0.54		
	N11－90	241	26.023	剥片	黒曜石	1.90	2.30	0.80	3.19		
4	N11－90	23	26.099	剥片	黒曜石	1.60	1.00	0.50	0.61	接10	
	N11－90	50	26.450	剥片	黒曜石	0.90	1.50	0.60	0.66		
5（6）	N11－90	(31) 10	26.551	剥片	黒曜石	2.70	1.50	0.40	1.63	接3+8	
	N11－90	131	26.140	剥片	黒曜石	3.30	2.20	1.20	7.73		
	N11－90	188	26.180	剥片	黒曜石	1.50	2.20	1.00	4.14		
（7）	N11－90	(88) 122	26.222	剥片	黒曜石	1.50	2.10	0.80	1.76		
8	N11－90	98	26.238	剥片	黒曜石	2.55	3.65	0.80	8.17		
9	N11－90	49	26.530	剥片	黒曜石	2.85	3.30	0.80	6.76		
10	N11－90	56	26.898	二次加工	黒曜石	4.70	1.80	0.65	4.22		
11	O11－99	30	26.155	剥片	黒曜石	3.40	1.95	1.30	6.56		
12	N11－90	84	26.320	剥片	黒曜石	3.30	2.50	0.90	5.13	接６	
13	N11－90	130	26.163	剥片	黒曜石	2.40	1.80	0.70	3.28		
14	N11－90	148	26.120	剥片	黒曜石	2.40	1.70	0.70	3.68		
15	N11－99	10	26.551	剥片	黒曜石	2.70	1.50	0.40	1.63		
16	N11－90	210	26.005	剥片	黒曜石	2.20	1.70	0.70	2.56		
17	N11－90	75	26.324	剥片	黒曜石	2.05	1.60	0.70	1.88		
18	N11－90	19	26.643	剥片	珪質岩	3.30	2.00	1.10	5.26	接１	核部片
	N11－90	69	26.240	砕片	珪質岩	0.90	1.20	0.20	0.19		
	N11－90	79	26.361	砕片	珪質岩	1.30	1.20	0.25	0.36		
	N11－90	81	26.210	剥片	珪質岩	2.95	1.30	0.70	2.16		
	N11－90	110	26.270	砕片	珪質岩	1.70	0.90	0.50	0.39		
	N11－90	116	26.290	石核	珪質岩	2.90	3.60	2.50	24.74		
	N11－90	149	26.141	剥片	珪質岩	4.20	1.50	1.00	7.48		
	N11－90	156	26.221	砕片	珪質岩	1.00	1.50	0.20	0.30		
(19)	N11－90	149	26.141	剥片	珪質岩	4.20	1.50	1.00	7.48		
(20)	N11－90	19	26.643	剥片	珪質岩	2.30	2.00	1.10	5.26		
(21)	N11－90	81	26.210	剥片	珪質岩	2.95	1.30	0.70	2.16		
(22)	N11－90	116	26.290	石核	珪質岩	2.90	3.60	2.50	24.74		
23	N11－90	132	26.210	剥片	硬質頁岩	3.80	3.30	0.60	6.98		
24	N11－90	168	26.230	剥片	硬質頁岩	3.80	2.00	0.70	4.94		
25	N11－90	197	26.210	剥片	硬質頁岩	2.55	2.15	0.70	3.77		
26	N11－90	244	26.030	剥片	硬質頁岩	1.80	2.50	0.70	2.76		
27	N11－90	141	26.180	剥片	硬質頁岩	2.00	1.85	0.50	1.97		
28	N11－90	29	26.689	剥片	硬質頁岩	3.05	1.65	0.70	2.50		
29	N11－90	37	26.827	剥片	硬質頁岩	2.25	1.60	0.30	1.01		
30	N11－90	139	26.188	剥片	頁岩	1.40	1.80	0.30	1.05	接13	
	N11－90	194	26.210	剥片	頁岩	2.50	2.20	0.80	5.43		
31	O11－99	4	26.574	剥片	頁岩	1.40	2.40	0.70	2.67	接15	
	O11－90	25	26.510	砕片	頁岩	1.40	0.70	0.40	0.30		
32	N10－00	7	26.235	剥片	メノウ	5.10	2.70	1.45	15.18		
33	N11－90	92	26.398	剥片	メノウ	5.40	2.00	1.40	14.37		
34	N11－90	260	26.310	剥片	メノウ	3.65	2.20	0.50	6.03		

35	N11－90	192	26.181	剥片	メノウ	3.30	3.60	0.80	12.02		
36	N11－90	126	26.175	剥片	メノウ	2.30	3.00	1.00	9.68		
37	N11－90	245	26.023	剥片	メノウ	1.95		2.40	0.90	3.54	
38	N11－90	72	26.270	剥片	メノウ	2.90	1.70	1.00	5.42		
39	N11－90	40	26.903	剥片	メノウ	2.25	2.20	0.50	2.46		
40	N11－90	4	26.574	剥片	メノウ	1.40	2.40	0.70	2.67	接17	
	N11－90	105	26.215	剥片	メノウ	1.65	1.40	0.25	0.64		
41	N11－99	7	26.604	剥片	メノウ	2.45	1.65	0.35	1.40		
42	N11－90	5	26.672	掻器	緑色硬質頁岩	3.90	1.75	0.90	6.08		
43				石核	硬質頁岩				24.55	接16	
(44)	N11－90	63	26.250	剥片	硬質頁岩	2.36	1.81	0.60			
(45)	N11－90	223	26.090	剥片	硬質頁岩	2.40	0.96	0.50	0.95		
(46)	N11－90	3	26.603	剥片	硬質頁岩	1.93	2.45	0.79			
(47)	N11－90	55	26.410	石核	硬質頁岩						
48	N11－90	155	26.200	剥片	珪質岩	1.92	0.85	0.22	1.30	接18	
	N11－90	209	26.115	剥片	珪質岩	1.98	0.91	0.49			
49	N11－90	152	26.178	剥片	珪質岩	2.05	1.62	0.70	1.98		
50	N11－90	237	26.095	剥片	珪質岩	2.32	1.74	0.45	1.95		
51	N11－90	161	26.235	剥片	頁岩	1.46	2.35	0.37	1.22		
52	O11－99	27	26.784	剥片	黒色安山岩	2.12	3.49	1.52	11.16		
53				剥片	黒色安山岩				25.25	接19	54＋55
(54)	N11－90	124	26.256	剥片	黒色安山岩	3.44	2.39	0.56			
	N11－90	198	26.175	剥片	黒色安山岩	2.43	1.79	0.70			
(55)	O10－09	7	26.887	剥片	黒色安山岩	4.39	3.78	1.07			
	N11－90	123	26.182	剥片	黒色安山岩	1.24	1.90	0.72			
	N11－90	177	26.134	剥片	黒色安山岩	2.05	0.94	0.66			

(20) 第１－14Ｂ地点（第41図・第58図～第65図、図版５・34～36）

概要　本地点の石器群はN11－81グリッドの南東部において集中的に出土し、N11－82・91・92グリッドにまで拡散していた。濃密な分布域は径６ｍほどの範囲となり、西に隣接して１－14Ａ地点、東に１－14Ｃ地点が位置している。前述したように、これらの石器集中地点は１－11Ｂ地点も含めて接合関係・使用石材から有機的に結びつくことが確認できた。石材についてみると出土総数473点のうち黒曜石が329点と多く約70％を占めていた。次いで黒色安山岩・頁岩系・メノウと続く。このように黒曜石が主体となり、多様な石材を採用している点も周辺にみられる石器群と共通している。また出土品には定型石器が少なく剥片・砕片が多量に出土している点から、本地点を含めた周辺は石器製作跡としての性格を強く残した場所といえよう。

出土石器群　石器群についてみると成品の種類は少なく、それらの多くは剥片・砕片類であった。特に黒曜石は280点ほどの砕片が出土している。反面、メノウや黒色安山岩では形の整った大きな剥片が出土しており対照的な剥片類のあり方を示していた。

ナイフ形石器（46）　形状の整った石刃状の剥片を素材としたもので先端の一部が欠損している。加工は簡素で基部の両側縁と先端部右にのみ認められる。使用の痕跡を示す刃こぼれが刃部と右側縁の全面で観察できる。このようなタイプのナイフ形石器は、第21地点でもみられ、第Ⅶ層から第Ⅸ層にかけてしばしば出土するようである。

楔形石器（１～４・34・79）　１～３は接合資料で上下方向から粗雑な剥離を加えており、２では薄く鋭利な刃部を作出する。３の左側縁では微細な剥離が表裏に１cmほど認められる。接合したものであるが、２点の楔形石器と考えてよいであろう。４も同様な剥離法で小型の楔に仕上げている。34は３点が接合し

たもので上下に剥離が施されている。ここでの楔形石器は分割により作り出されている点が特徴的といえる。79は中央部が高く盛り上がり、裏面は平坦な主剥離面を残す。加工は主に先端部に認められ、ファッシト状の剥離を３～４回加えて刃部を作り出している。

二次加工剥片（８・12・17）　８は左側縁部の整形とともに裏面でも微細な剥離が認められる。特に自然面に沿った下端部に著しい。掻器様の石器として使用したものであろう。12は隣接するグリッドで約５ｍ離れて出土した２点が接合したものである。左側縁の両面に剥離を施している。17は、14の接合資料に含まれるもので主剥離面の右側縁部が半円状に整形されている。これも掻器様の石器として使用したものと考えられる。

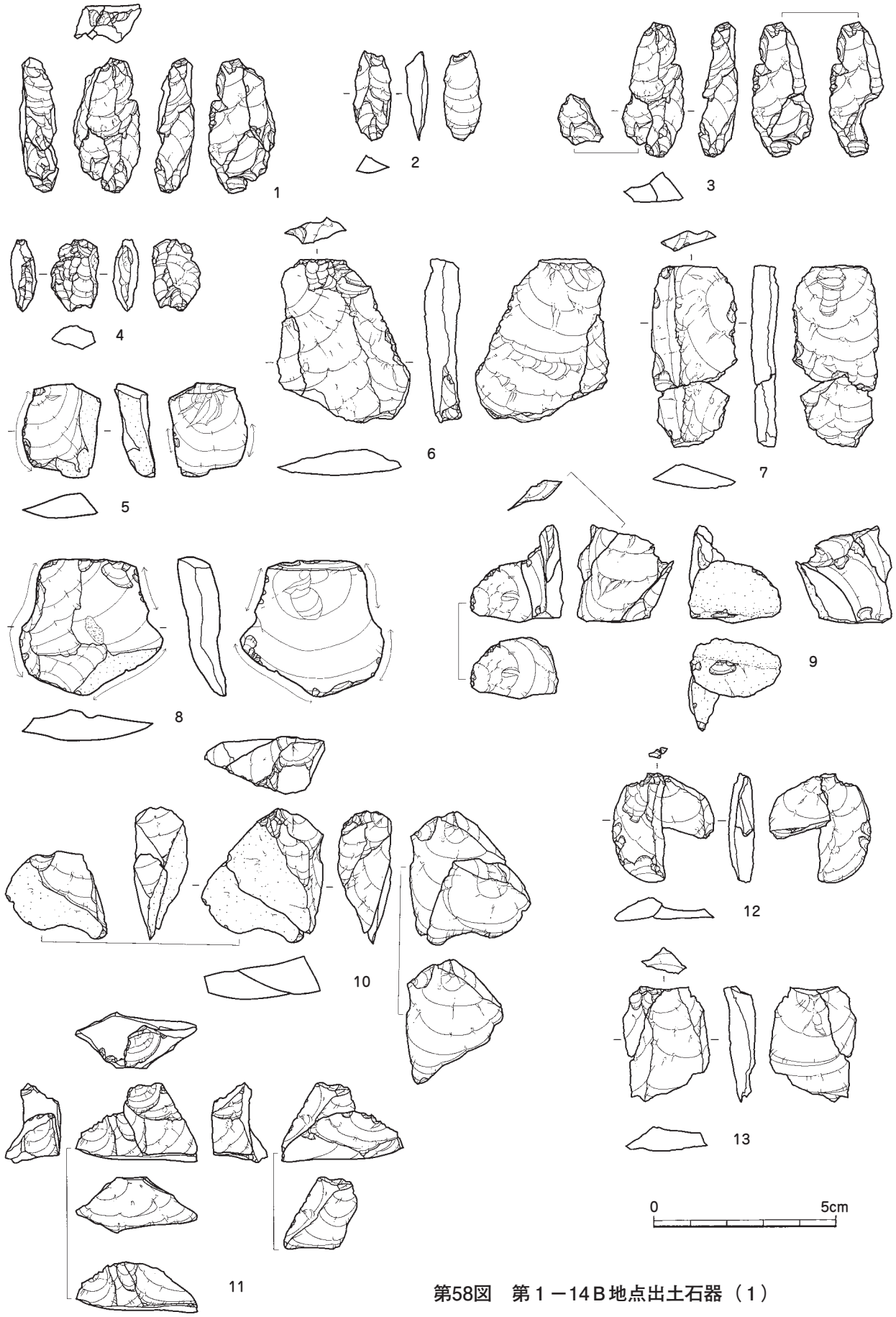
剥片（５～７・９～11・13・15・16・18・20～22・25・33・35～40・42～45・47～78・80・81）　剥片類については、接合資料が多かったため関連資料としてできる限り図示した。これらの中には道具として使用された痕跡の認められるものも少なくなかった。５は左側縁に調整痕が認められる。６は接合したもので両側縁と下端部に微細な剥離が認められる。７は９ｍほど離れた地点から出土した２点が接合したものである。きれいな石刃状の剥片で左側面に使用痕が認められる。接合部には径５mmほどの小石が含有されているため簡単に折れてしまったものであろう。30は隣接するグリッドから出土した２点が接合したもので両側縁に刃こぼれ状の使用痕が認められる。47は幅広な薄い剥片で、右側縁では微細な剥離とともに刃こぼれ痕が顕著に認められる。49～53でも使用痕らしき痕跡が認められるがはっきりしない。その他の剥片として54の接合例をあげることができる。石材は黒色安山岩で17点が接合し、整然と順序よく剥離されており剥片剥離工程を示す好例となろう。石質はきめ細かくきれいな剥片が剥取されている。だが、良好な形状を呈した剥片にも拘わらず石器としては楔形石器１点認められたのみであった。出土地点についてみると、N11－82・92グリッド中心としつつも広範囲に散っており、遠くは19m西のO10－07グリッドから出土したものと接合している。また、32は楔形石器を含む３点が接合したものであり、小さいながらも石刃状の剥片が剥離されている。これらの剥片を観察すると、メノウと黒色安山岩の２種については石器素材に適した剥片が多くみられた。

石核（23・24・41）　残核と認められるものは３点であった。19は20～23の接合図である。23は剥離によって生じた平坦面を打面に転用しながら剥離をかさねている。接合資料を観察すると、20・21では光沢が失われているため熱を被ったものと考えられる。24も打面を転移しながら剥離を繰り返したものである。表面には多くの亀裂がみられるため、本資料も熱を受けたものであろう。41は隣接するグリッドから出土した２点が接合したものである。左側面では破損部の上下に明確な使用痕が認められる。このため折断した後は道具として用いられたものであろう。破損部の小さな剥離は、整形のために加えられたものである。その後、平坦面を打面として剥離作業がおこなわれているため石核として扱った。

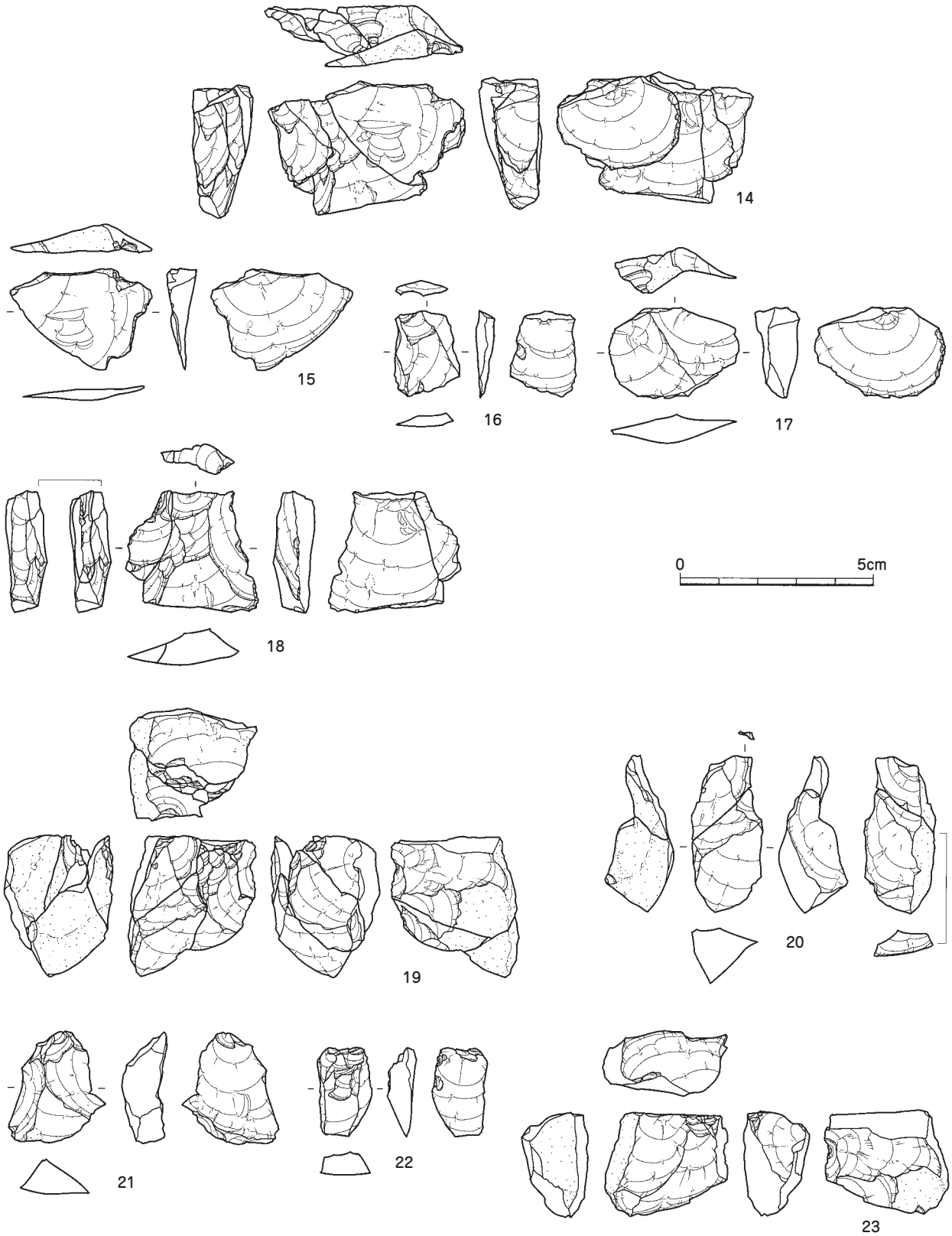
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石329点　メノウ17点　珪質頁岩32点　硬質頁岩16点　珪質岩７点　凝灰岩10点　黒色安山岩56点　緑色硬質頁岩１点　チャート１点　角閃岩４点

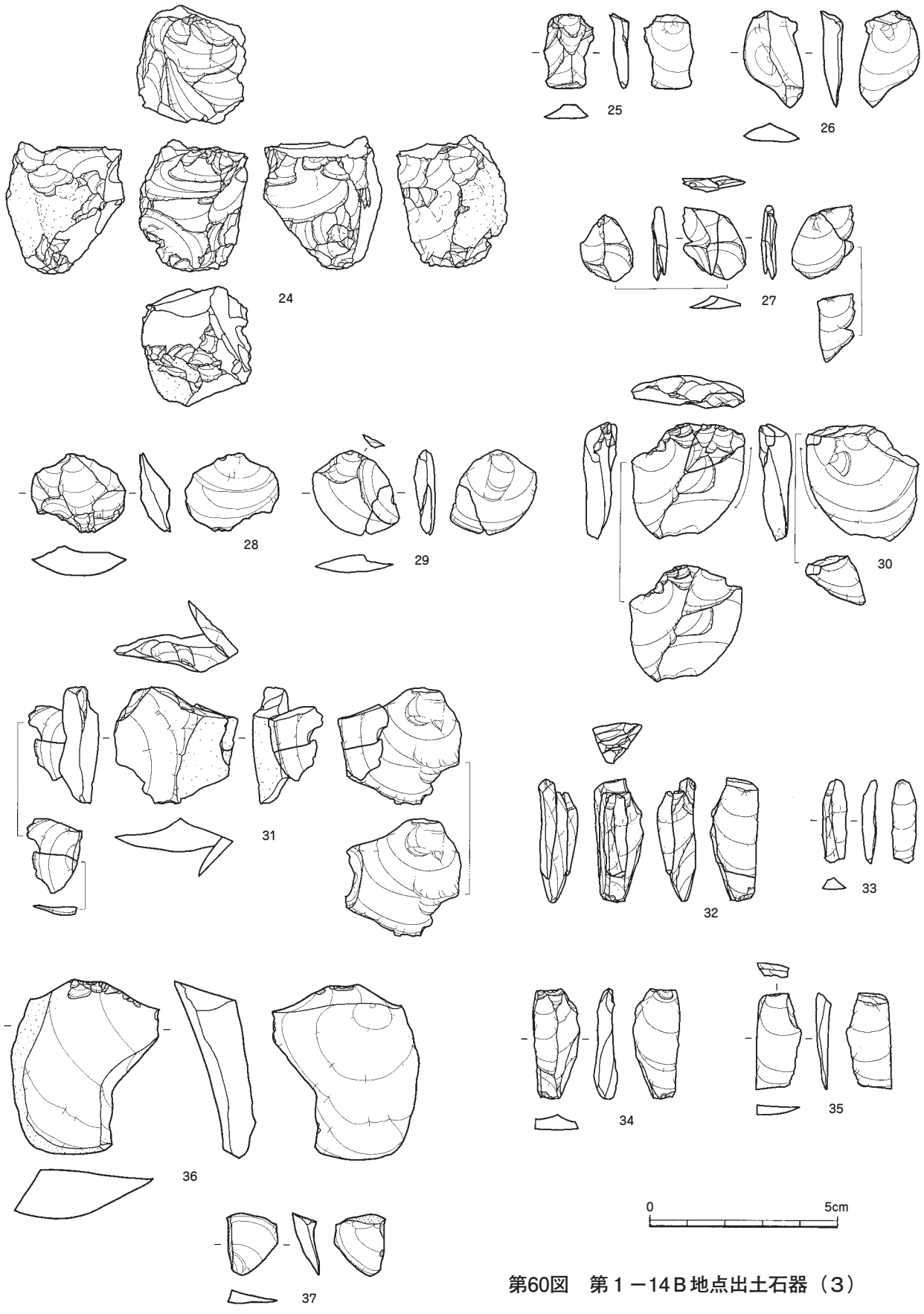
器種　楔形石器３点　二次加工剥片４点　剥片109点　砕片355点　石核３点　計473点



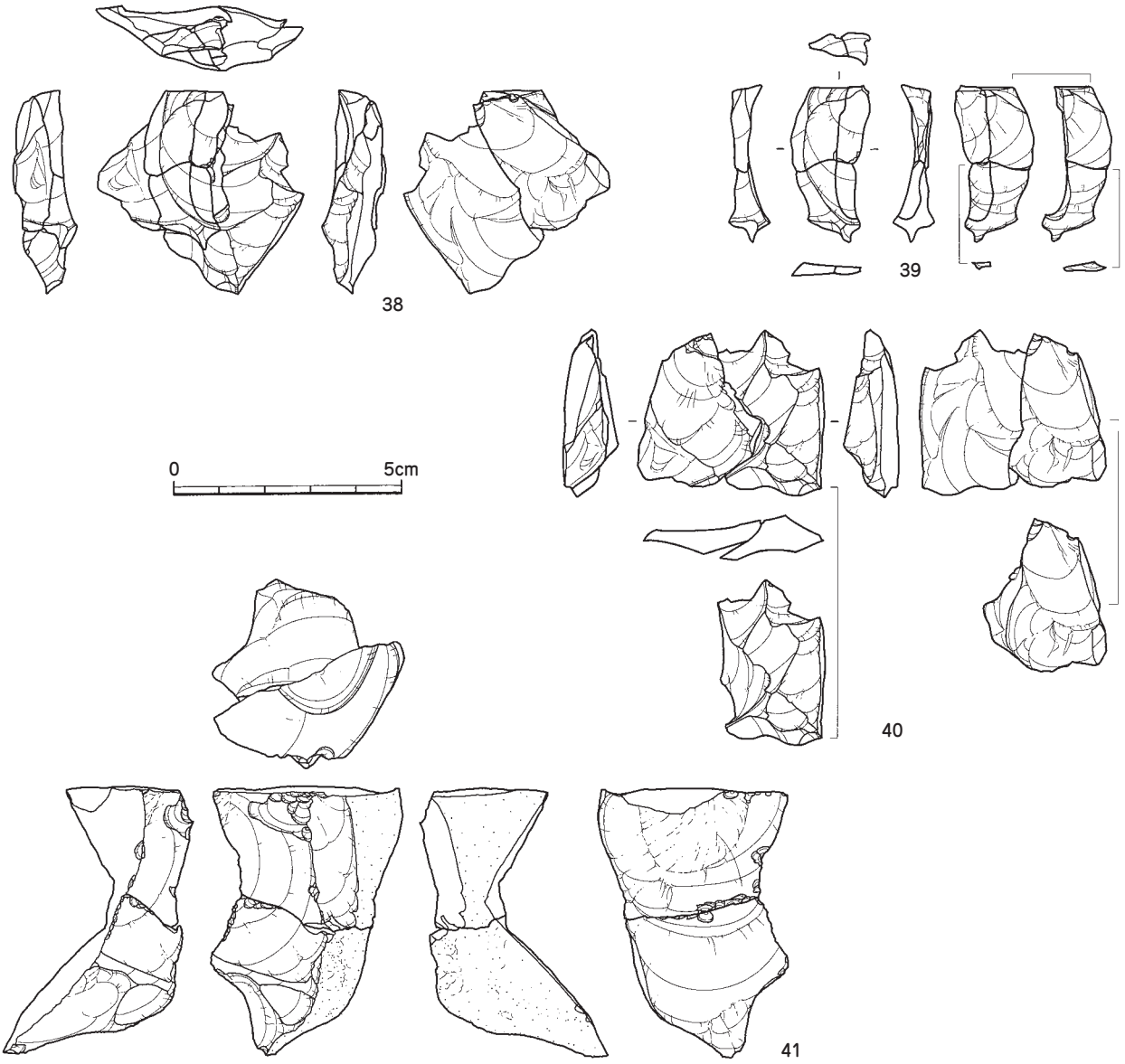
第58図　第１－14Ｂ地点出土石器（１）



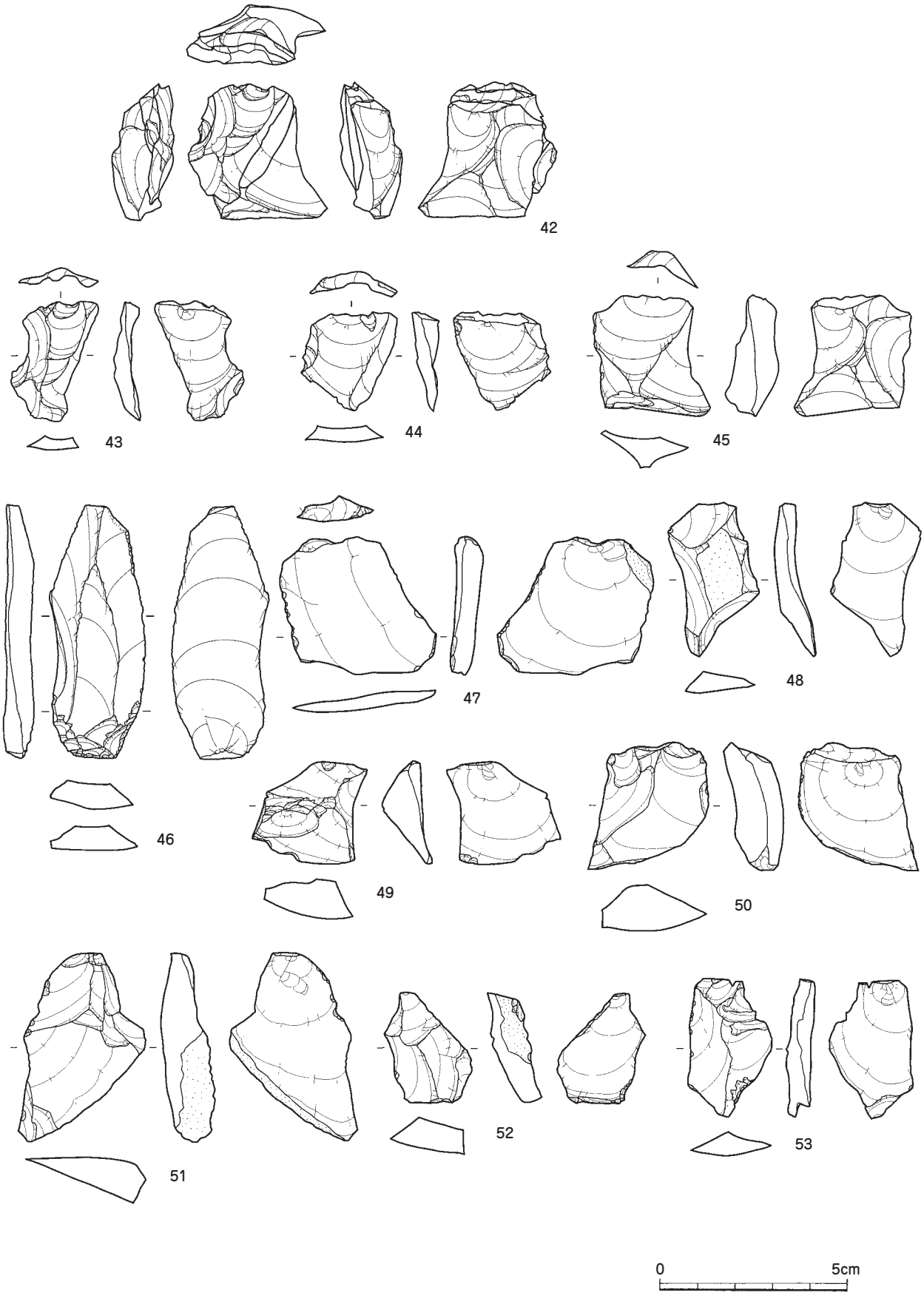
第59図　第１－14Ｂ地点出土石器（２）



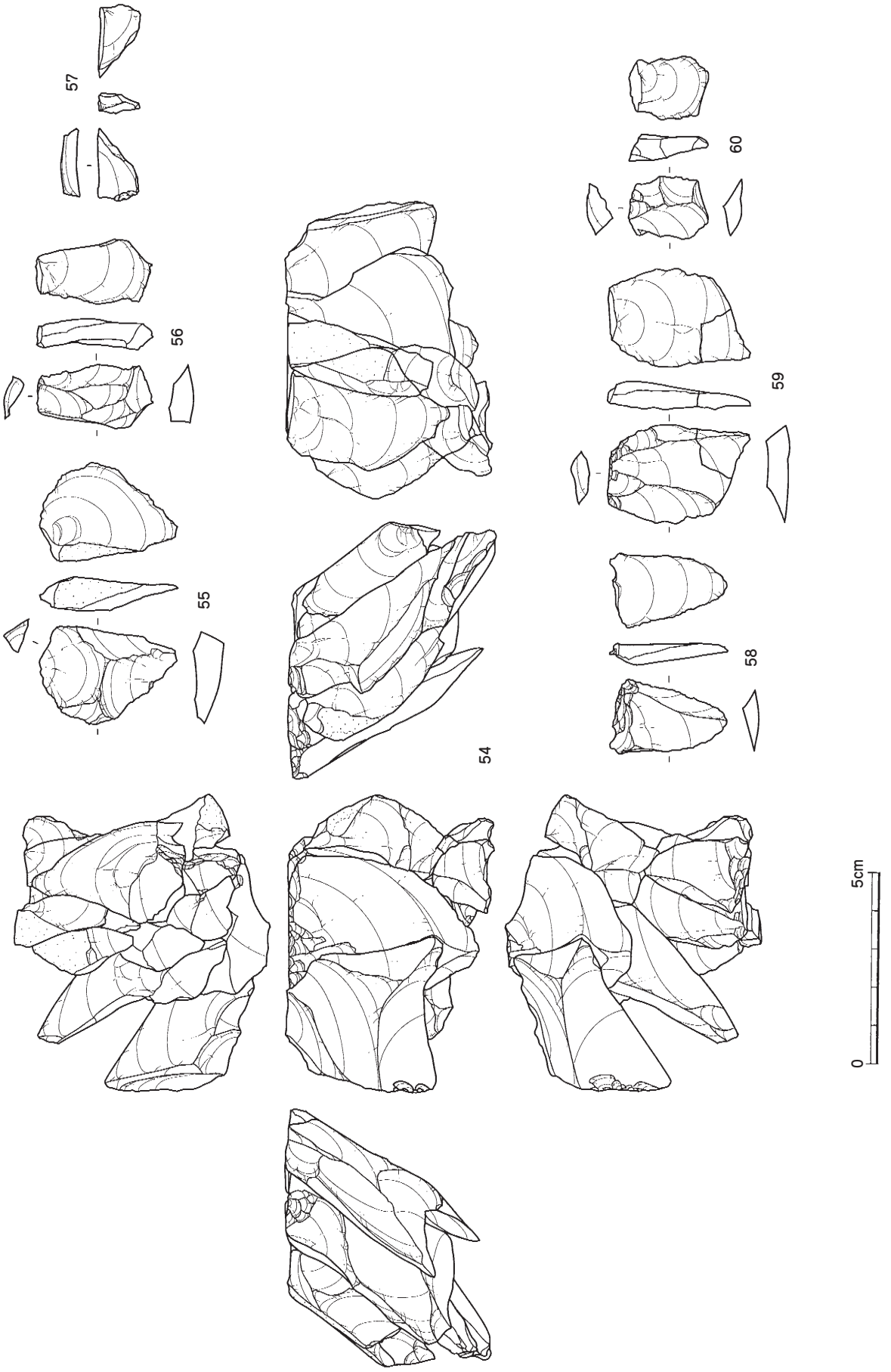
第60図　第１－14Ｂ地点出土石器（３）



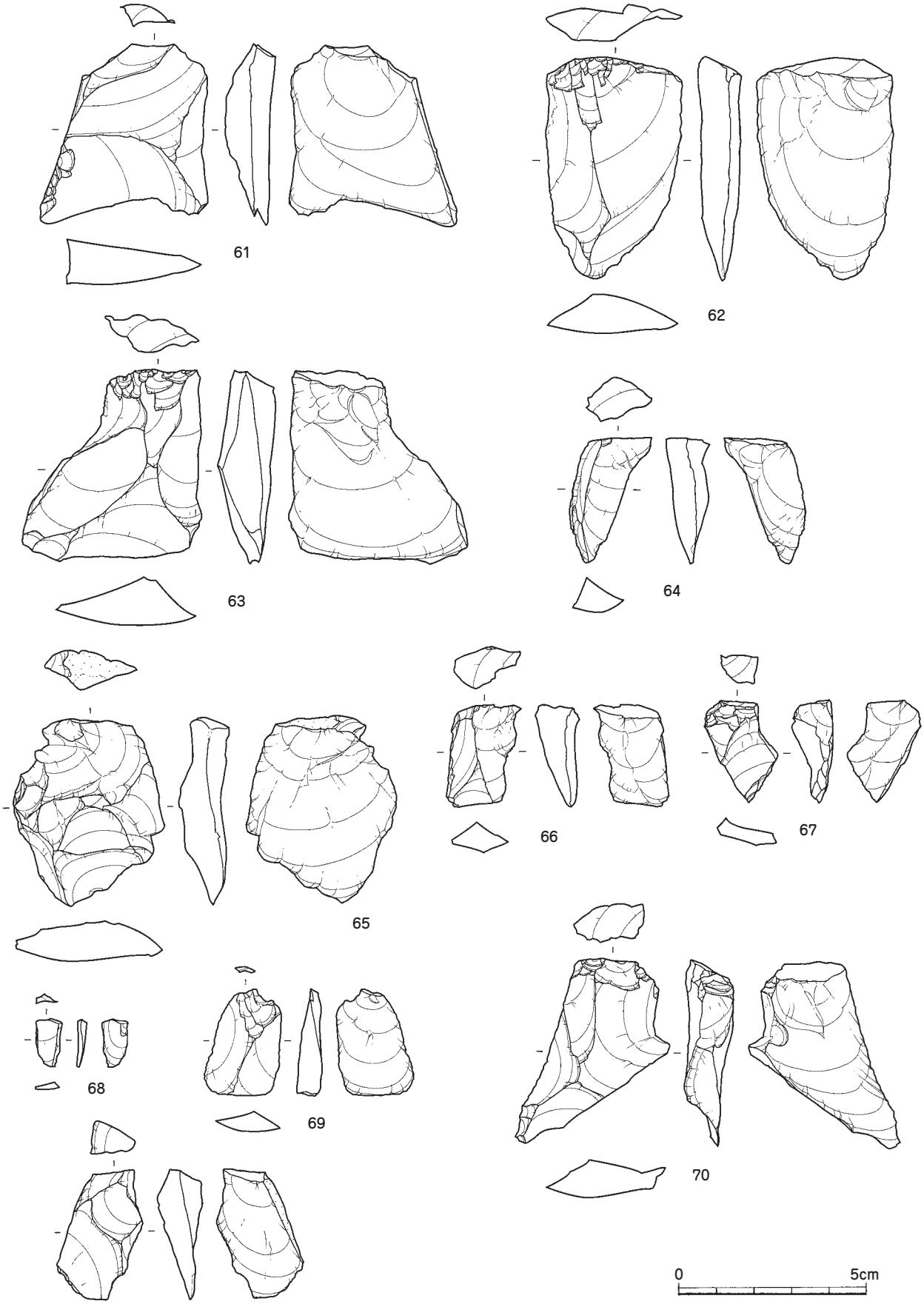
第61図　第１－14Ｂ地点出土石器（４）



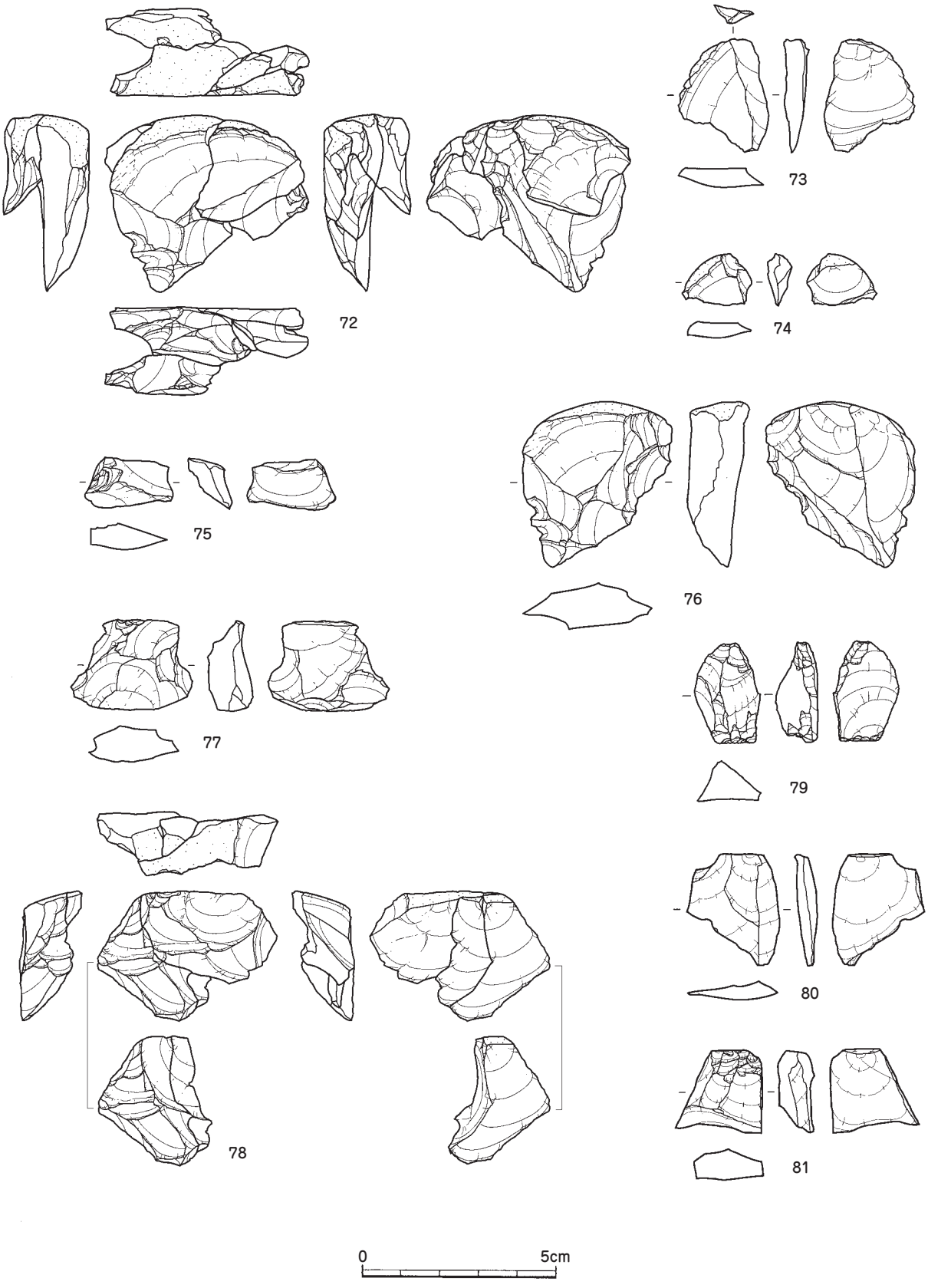
第62図　第１－14Ｂ地点出土石器（５）



第63図　第１－14Ｂ地点出土石器（６）



第64図　第１－14Ｂ地点出土石器（７）



第65図　第１－14Ｂ地点出土石器（８）

第20表　第１－14Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1										接１	２＋３
（２）	Ｎ10－01	4	26.564	剥片	黒曜石	2.35	1.00	0.50	0.95		
（３）	Ｎ10－01	1	26.284	楔形石器	黒曜石	3.60	1.70	0.80	4.82		
4	Ｎ11－82	3	26.509	楔形石器	黒曜石	2.00	1.20	0.70	1.45		
5	Ｎ11－92	27	26.549	剥片	黒曜石	2.15	1.85	0.60	2.17		
6	Ｎ11－92	3	26.349	剥片	黒曜石	5.05	3.34	0.76	12.52	接６	
	Ｎ11－92	31	26.334	剥片	黒曜石						
7	Ｎ11－73	4	26.334	剥片	黒曜石	4.90	2.25	0.60	7.31	接７	
	Ｎ11－81	297	26.584	剥片	黒曜石						
8	Ｎ11－81	299	26.084	二次加工	黒曜石	3.90	3.85	1.00	12.47		
9	Ｎ11－91	94	26.039	剥片	黒曜石	1.60	2.60	0.80	4.22	接11	
	Ｎ11－91	76	26.044	剥片	黒曜石	0.70	1.50	0.60	0.41		
	Ｎ11－81	35	26.204	剥片	黒曜石	2.50	2.30	0.80	4.08		
10	Ｎ11－81	30	26.174	剥片	黒曜石	3.10	2.50	0.70	12.09	接３	
	Ｎ11－81	137	26.054	剥片	黒曜石	3.50	2.80	1.20			
11	Ｎ11－92	24	26.159	剥片	黒曜石	1.60	3.20	1.20	4.29	接23	
	Ｏ10－18	1	26.699	剥片	黒曜石	2.40	1.70	0.50	1.72		
12	Ｎ10－01	6	26.339	二次加工	黒曜石					接２	
	Ｎ11－91	27	26.589	剥片	黒曜石	2.90	2.80	0.55	3.10		
13	Ｎ11－81	143	26.084	剥片	黒曜石	3.20	2.40	0.70	4.70	接24	
	Ｎ11－81	149	26.094	剥片	黒曜石	0.50	0.25	0.07	0.01		
14										接８	５点の接合
(17)	Ｎ11－81	25	26.274	二次加工	黒曜石	2.53	3.39	0.97	6.42		
(16)	Ｎ11－81	170	26.084	剥片	黒曜石	2.21	1.67	0.40	1.29		
(18)	Ｏ11－98	8	26.044	剥片	黒曜石	2.43	0.82	0.52	0.77		
(18)	Ｎ11－？	?	－	剥片	黒曜石	3.16	2.00	0.97	8.56		
(15)	Ｎ11－？	?	－	剥片	黒曜石	2.56	3.45	0.73	3.66		
19									29.38		
(20)	Ｎ11－81	10	26.284	剥片	黒曜石	4.00	1.70	1.50	8.37	接5+9	
(20)	Ｎ11－81	300	26.174	剥片	黒曜石	0.65	1.10	0.15	0.09		
(21)	Ｎ11－81	50	26.229	剥片	黒曜石						
(22)	Ｎ11－91	64	26.214	剥片	黒曜石						
(23)	不明１点			石核							
24	Ｎ11－82	24	26.254	石核	珪質岩	3.35	3.00	2.55	29.58		
25	Ｎ11－81	237	26.009	剥片	珪質頁岩	1.90	1.25	0.40	0.81		
26	Ｎ11－92	22	26.274	剥片	珪質頁岩	2.50	1.60	0.45	1.27		
27	Ｎ11－81	165	26.109	剥片	珪質岩	1.70	1.50	0.25	0.55	接17	
	Ｎ11－82	76	26.274	剥片	珪質岩	1.70	1.00	0.25	0.40		
28	Ｎ11－91	61	26.139	剥片	珪質岩	2.10	2.43	0.76	2.34		
29	Ｎ11－81	45	26.264	剥片	硬質頁岩	2.26	2.02	0.54	2.09	接21	
	Ｎ11－82	75	26.184	砕片	硬質頁岩						
30	Ｎ11－91	65	26.114	剥片	硬質頁岩	3.09	2.98	0.75	6.29	接22	
	Ｎ11－81	242	26.009	砕片	硬質頁岩						
31	Ｎ11－81	59	26.209	砕片	珪質頁岩	0.90	1.70	0.30	0.94	接15	
	Ｎ11－81	214	26.004	砕片	珪質頁岩	1.80	0.95	0.25			
	Ｏ11－97	41	26.254	剥片	珪質頁岩	3.10	2.75	0.65	5.77		
32						3.30	1.30	0.90	4.07	接19	
(33)	Ｎ11－81	52	26.254	剥片	黒色安山岩						
(34)	Ｎ11－81	12	26.269	楔形石器	黒色安山岩						
(35)	Ｎ11－91	82	26.194	剥片	黒色安山岩						
36	Ｎ11－82	49	26.204	剥片	珪質岩	4.75	3.70	1.30	22.10		
37	Ｎ11－82	9	26.414	剥片	緑色硬質頁岩	1.70	1.30	0.50	0.81		
38（39）	Ｎ11－81	113	26.144	剥片	珪質頁岩	1.30	0.60	0.25	0.16	接16	
	Ｎ11－81	298	26.279	剥片	珪質頁岩	2.30	3.50	0.80	6.37		
	Ｎ11－91	16	26.274	剥片	珪質頁岩	1.60	0.70	0.60	0.55		

(40)	N11－91	17	26.414	剥片	珪質頁岩	3.30	2.70	0.70	4.91		
	N11－91	62	26.034	剥片	珪質頁岩	1.90	1.05	0.40	0.90		
	N11－91	95	26.174	剥片	珪質頁岩	1.90	0.90	0.30	0.54		
41	N11－93	4	26.314	石核（片）	硬質頁岩	6.70	4.25	2.10	48.32	接20	
	N11－82	37	26.229	石核（片）	硬質頁岩						
42	N11－92	23	26.229	剥片	メノウ	3.15	2.80	1.10	9.17	接18	
(43)	N11－90	222	26.096	剥片	メノウ	3.40	1.70	0.40	2.51		
(44)	O11－89	2	26.380	剥片	メノウ	2.70	2.20	0.50	3.25		
45	N11－92	23	26.229	剥片	メノウ	3.15	2.80	1.10	9.17		
46	N11－82	39	26.114	ナイフ形石器	メノウ	6.70	2.40	0.70	14.73		
47	N11－82	32	26.314	剥片	メノウ	3.90	3.80	0.65	8.84		
48	N11－92	7	26.349	剥片	メノウ	4.10	1.90	0.60	4.83		
49	N11－82	14	26.319	剥片	メノウ	2.90	2.75	1.00	5.95		
50	N10－02	3	26.299	剥片	メノウ	3.70	2.85	1.30	14.43		
51	N11－82	47	26.174	剥片	メノウ	5.15	3.30	0.90	14.97		
52	N11－82	65	26.224	剥片	メノウ	0.20	3.10	0.70	5.18		
53	N11－72	5	26.144	剥片	メノウ	3.70	2.20	0.65	4.38		
54									157.43	接14	17点の接合
(55)	N11－92	9	26.394	剥片	黒色安山岩					接14	
(56)	N11－82	8	26.249	剥片	黒色安山岩						
(57)	N11－90	65	26.288	剥片	黒色安山岩	1.90	1.10	0.50	0.90		
(58)	N11－82	2	26.524	剥片	黒色安山岩	2.20	1.00	0.60	1.10		
(59)	N11－92	2	26.369	剥片	黒色安山岩						
(60)	N10－02	2	26.184	剥片	黒色安山岩						
(61)	N11－81	106	26.129	剥片	黒色安山岩	5.20	4.20	1.10	21.72		
(62)	N10－10	24	26.350	剥片	黒色安山岩	5.90	3.60	1.00	24.49		
(63)	N11－90	121	26.216	剥片	黒色安山岩	5.05	4.90	1.40	28.34		
(64)	N11－91	98	26.029	剥片	黒色安山岩	3.60	1.60	0.90	4.78		
(65)	N11－92	1	26.394	剥片	黒色安山岩	6.60	4.00	1.15	29.89		
(66)	N11－81	211	25.994	剥片	黒色安山岩	2.80	1.70	0.80	4.46		
(67)	N11－90	10	－	剥片	黒色安山岩						
(68)	N11－90	93	26.263	剥片	黒色安山岩	1.25	0.70	0.20	0.17		
(69)	N11－82	6	26.244	剥片	黒色安山岩	5.70	5.30	1.10	38.43		
(70)	O10－07	16	26.219	剥片	黒色安山岩						
(71)	N11－92	5	26.359	剥片	黒色安山岩						
72										接13	5点の接合
(73)	N11－90	42	26.771	剥片	黒色安山岩	2.90	2.35	0.50	3.22		
(74)	N11－90	144	26.166	剥片	黒色安山岩	1.55	1.60	0.55	1.23		
(75)	N11－90	200	26.210	剥片	黒色安山岩	1.50	2.20	0.60	2.37		
(76)	N11－81	61	26.129	剥片	黒色安山岩	4.20	3.60	1.30	30.79		
(77)	N11－98	21	26.019	剥片	黒色安山岩						
78	N11－82	1	26.298	剥片	黒色安山岩	2.60	3.30	1.00	18.80	接12	
	N11－92	14	26.494	剥片	黒色安山岩	3.50	2.50	1.10			
79	N11－81	63	26.179	楔形石器	黒色安山岩	2.60	1.60	1.10	4.19		
80	N11－82	16	26.479	剥片	黒色安山岩	2.80	2.30	0.50	2.70		
81	N11－81	154	26.124	剥片	黒色安山岩	2.20	2.10	0.80	4.20		

(21) 第１－14Ｃ地点（第41図・第66図・第67図、図版６・36）

概要　本地点の石器群はＮ11－82・83グリッドにかけて南北方向に広がるような形で展開していた。出土層位については１－14Ａ・Ｂ地点と同様であった。石材についてみると、前述したＢ地点と比較して71点と少なかったが、ここでも黒曜石が主体を占めていた。また器種の貧弱な点も１－14Ａ・Ｂ地点と共通したものといえよう。

出土石器群　石器群についてみると、道具として使用された剥片が若干確認されただけで、成果として特筆できるような事例は見当たらなかった。ただ、石核に多数の砕片と２点の剥片が接合した資料は、１－14Ｂ地点出土の剥片（36）と同材の珪質岩で地点間での強い結びつきが想定できた。

楔形石器（１）　楔としての形状は整っていないが、上下からの剥離とやや鋭角に整形された頭部から楔形石器の製作を意図したものと思われる。

剥片（２～13・17）　２は２点が接合したもので、折断後上部片では右側縁の表裏に小さな剥離が施されている。６では刃こぼれ痕が認められる。８は石刃状の剥片で、下半部では微細な調整痕が観察できる。下端の折れは整形のためのものであろう。９も使用されていた可能性が高い。10は打面調整剥片で側面には小さな剥離痕が多々みられる。11も微細な剥離が若干観察できる。12は同一グリッドから出土した２点が接合したものであるが、使用痕等はみられない。13は幅広な大型剥片で石器の素材としては良好な剥片といえよう。左側縁部では顕著な刃こぼれ痕が認められ、石器として使用していたものと思われる。

接合資料（14）　Ｎ82・83・84の各グリッドから出土した剥片類10点が21・22・26に接合し、結果的に14の接合資料となった。接合資料の出土レベルを比較すると、そこでの高低差は60cmほどとなり上下にかなり動いていることが認識できた。接合した14をみると、裏面は平坦となり打面を設定するために剥離されたもので、この大きな剥片をさらに分割剥離していったものである。その後、大きく分割された剥片を核（21・22・26）として17～20や23～25の砕片類が剥離されていったものである。14の接合資料から原石を想定すると、拳大以上の大きさを有していたことは確実であろう。

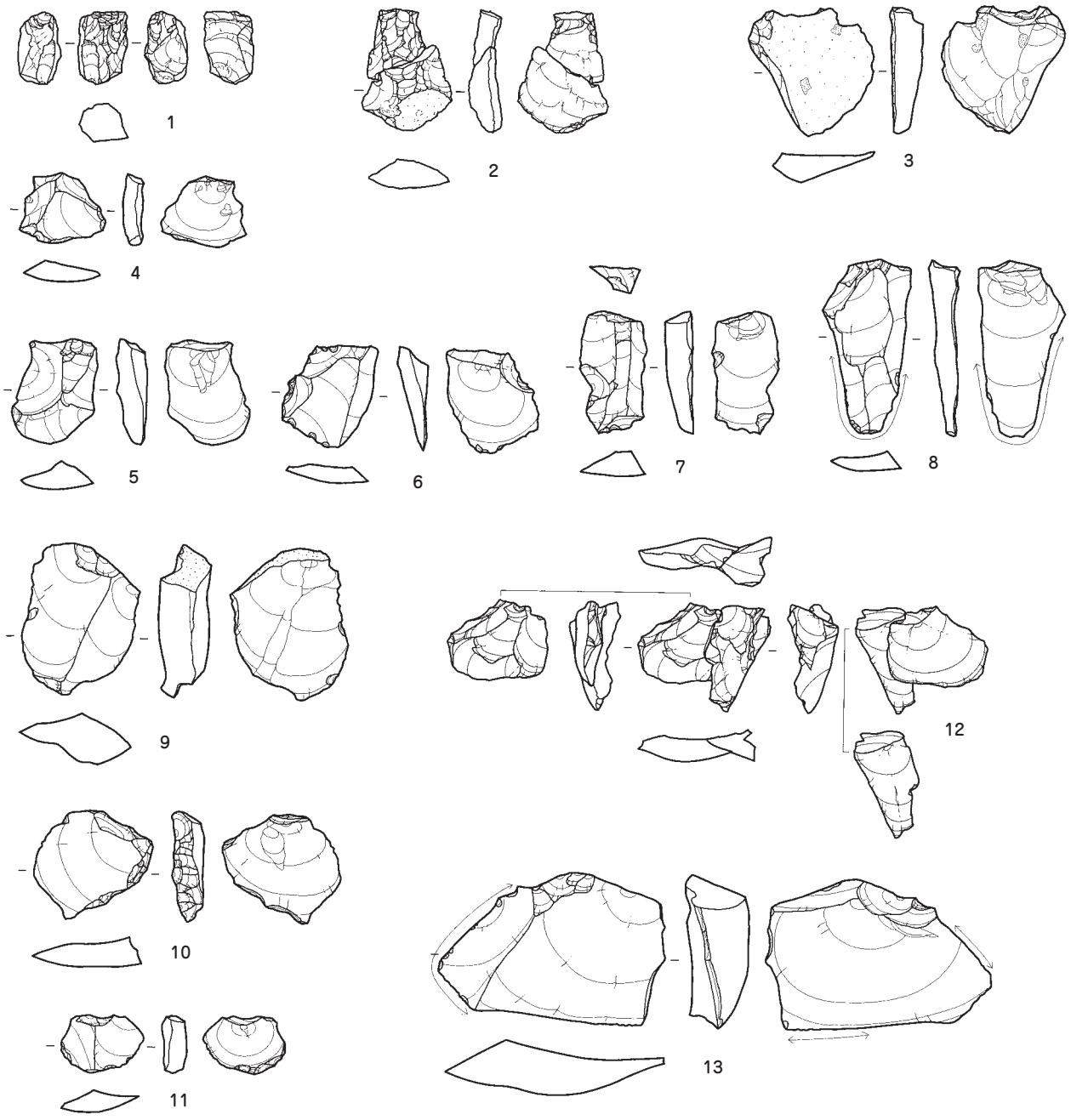
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石34点　硬質頁岩４点　珪質岩20点　メノウ13点　その他２点(凝灰岩１点　変質安山岩１点)

器種　楔形石器１点　剥片17点　砕片50点　石核３点　礫２点　計73点

第21表　第１－14Ｃ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｎ11－83	29	26.159	楔形石器	黒曜石	1.70	1.10	0.90	2.02		
2	Ｎ11－83	18	26.249	剥片	黒曜石	2.80	2.00	0.70	3.18	接１	
	Ｎ11－83	23	26.254	剥片	黒曜石						
3	Ｎ11－83	65	26.164	剥片	黒曜石	2.90	2.40	0.70	4.00		
4	Ｎ11－83	51	26.174	剥片	黒曜石	1.60	1.90	0.40	1.15		
5	Ｎ10－01	2	26.544	剥片	メノウ	2.50	1.85	0.60	2.62		
6	Ｎ11－83	28	26.149	剥片	メノウ	2.62	1.96	0.63	2.67		
7	Ｎ11－83	4	26.454	剥片	メノウ	2.77	1.50	0.63	2.76		
8	Ｎ11－93	6	26.709	剥片	メノウ	4.10	1.90	0.50	3.30		
9	Ｎ11－83	55	26.124	剥片	メノウ	3.13	2.77	1.17	9.13		
10	Ｎ11－83	40	26.224	剥片	メノウ	2.50	2.85	0.58	4.15		
11	Ｎ11－83	10	26.364	剥片	メノウ	1.31	1.94	0.54	1.39		
12	Ｎ11－83	15	26.444	剥片	メノウ	2.53	1.45	0.85	2.32	接２	
	Ｎ11－83	39	26.324	剥片	メノウ	2.15	2.31	0.62	2.70		



第66図　第１－14Ｃ地点出土石器（１）

第67図　第１－14Ｃ地点出土石器（２）

13	N11－83	36	26.324	剥片	珪質岩	3.70	5.00	1.15	17.58		
14										接３	13点の接合
(15)	N11－82	15	26.679	砕片	珪質岩	1.40	1.90	0.42	3.10		
(16)	N11－83	63	26.139	剥片	珪質岩	1.42	2.86	0.73			
(17)	N11－84	1	26.229	砕片	珪質岩	1.24	0.82	0.19	0.21		
(18)	N11－83	8	26.659	剥片	珪質岩	1.66	1.23	0.74	1.68		
(19)	N11－83	22	26.419	砕片	珪質岩	1.44	0.47	0.26			
(20)	N11－82	28	26.149	剥片	珪質岩	1.28	1.83	0.48	1.15		
(21)	N11－83	20	26.434	石核	珪質岩	1.64	3.33	1.85	12.29		
(22)	N11－83	33	26.064	石核	珪質岩	3.84	2.14	1.91	18.10 (22+25)		
(23)	N11－82	23	26.254	剥片	珪質岩	0.98	1.92	0.49	1.21		
(24)	N11－82	11	26.334	砕片	珪質岩	0.97	1.04	0.40			
(25)	N11－83	6	26.294	砕片	珪質岩	1.81	1.12	0.43			
(26)	N11－82	61	26.269	石核	珪質岩	1.84	3.21	2.80	19.60		
(27)	N11－83	19	26.324	剥片	珪質岩	4.67	2.30	1.04	11.24		

(22) 第１－14Ｄ地点（第68図～第70図、図版30）

概要　本地点の石器群は、前述した第１－14Ｃ地点から15mほど東において集中することなく疎らに分布するような形で出土している。このため出土層位には高低差はみられたものの概ね第Ⅲ層中として捉えることができた。このため第１－６Ｂ・７Ｂ地点と同様な石器分布として捉えることができよう。なお出土分布図の西にみられる石器は第１－14Ｃ地点と同時期のものである。

ここでは成品として加工された石器はみられず、剥片類の出土も少ない。使用石材という点ではチャートが多いものの出土総数が少ないため多くは語れない。一方、間接的な生産具である敲石が１点出土しており他地点とは異なる趣を呈している。しかも数十mほど離れたM11－70・80グリッド出土の剥片と接合した。敲石の剥片は敲打することによって生じたものである。このことにより異なる地点間で使用されていたことが理解できよう。最終的な使用場所を裏付けるものとなり、生活臭の感じられる場所ということができる。また11（M10－31）・13（Ｍ８－17）も本地点から離れた場所で単独的に出土したものであったが、石材が同一であったためここに掲載した。

出土石器群　出土した石器群についてみると、剥片・石核・敲石となり、石核と同材の剥片類は皆無であった。類似の石材は１－４・１－７Ｂ地点で出土している。１－４地点ではきれいな掻器が出土している。また、敲石は数少ない出土地点として興味深い。

礫群　ここでは数点の焼礫が第Ⅲ層から出土しているが図化は省略した。

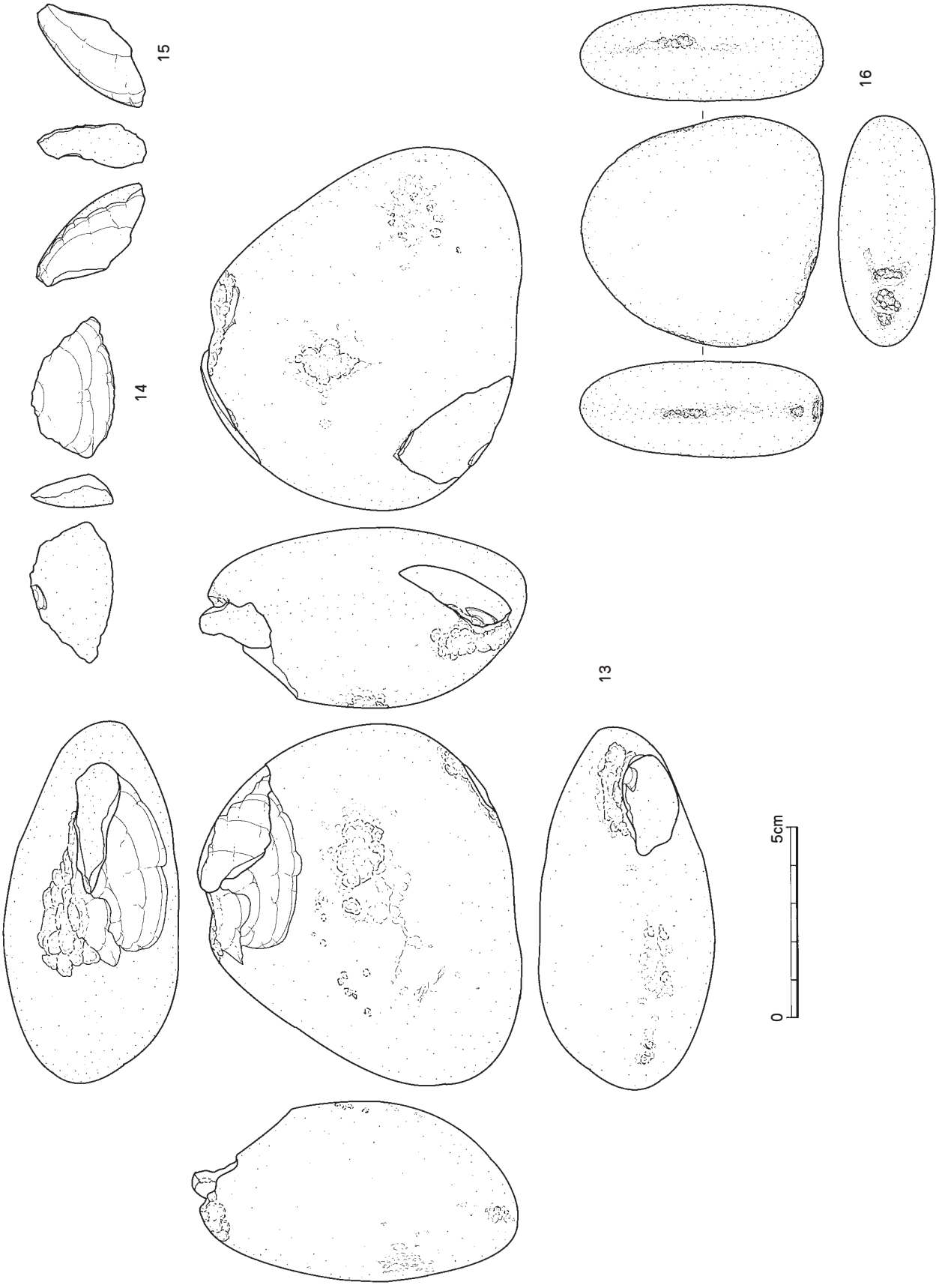
敲石（11・13・16）　11は大型の剥片ともいえる。しかし右隅に顕著な打痕が認められたため敲石とした。打点部での使用痕は認められないが使用中に破損したものと考えらる。ただ側縁は鋭利なため削器様の石器として使用されたということは十分考えられる。13は表裏面と破片接合部に著しい使用痕がみられる。このため２点の破片は石器製作を目的として剥離されたものではなく敲打の結果破損したものであろう。16は周囲にのみ打痕が認められる。中央部での使用は認められない。

剥片（２～９・10・12・14・15）　剥片類では比較的形状の整ったもの（２・３・５・８）がみられるが、明確な使用痕等は認められない。６は一部に調査時での損傷が残る。９の表裏面では上下方向からの剥離が認められ、石器製作を意識した剥片と考えられる。10は表裏面ともに多方向からの剥離がみられる。

石核（１）　略円錐形となるものの打面では起伏が著しい。また節理等も認められ良質な石材とはいえない。

第68図　第１－14Ｄ地点出土石器分布図

第69図　第１－14Ｄ地点出土石器（１）



第70図　第１－14Ｄ地点出土石器（２）

剥離された剥片が皆無であるため残核自身を道具として使用した可能性も考えられる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石２点　硬質頁岩１点　珪質岩１点　黒色安山岩１点　チャート５点　赤色チャート１点　メノウ１点　デイサイト２点　石英４（６）点　砂岩１点

器種　剥片15点　砕片２点　石核１点　敲石１（３）点　計21点

第22表　第１－14Ｄ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	N10－46	1	27.546	石核	珪質岩	3.90	4.50	4.80	55.97		
2	N10－65	17	27.564	剥片	硬質頁岩	4.15	2.70	1.50	11.93		
3	N11－97	13	27.949	剥片	黒色安山岩	3.22	1.51	0.54	3.13		
4	N10－14	1	27.844	剥片	黒曜石	2.30	1.30	0.55	1.34		半欠
5	N11－67	1	27.789	剥片	チャート	3.40	3.00	0.90	8.52		
6	N11－84	2	26.249	剥片	メノウ	2.40	3.10	0.95	6.84		第Ⅳ層出土
7	N11－87	20	27.794	剥片	チャート	1.90	1.90	1.15	5.24		
8	N10－07	11	28.029	剥片	チャート	2.40	2.80	0.15	8.07		
9	N11－87	40	27.999	剥片	チャート	2.60	2.50	0.80	6.91		赤色チャート
10	N11－86	16	27.959	剥片	チャート	2.40	2.70	1.10	7.82		
11	M10－31	1	28.219	敲石	石英	5.00	5.20	1.30	37.57		
12	M11－59	5	27.994	剥片	石英	2.40	1.90	0.40	1.95		
13										接1	３点の接合
(13)	N11－98	64	27.909	敲石	石英	9.90	8.20	4.80	465.26		
(14)	M11－70	16	27.879	剥片	石英	2.15	3.70	0.84	6.32		
(15)	M11－80	12	27.963	剥片	石英	3.70	1.50	0.80	5.92		
16	M８－17	1	26.491	敲石	石英	6.30	6.15	2.50	145.17		

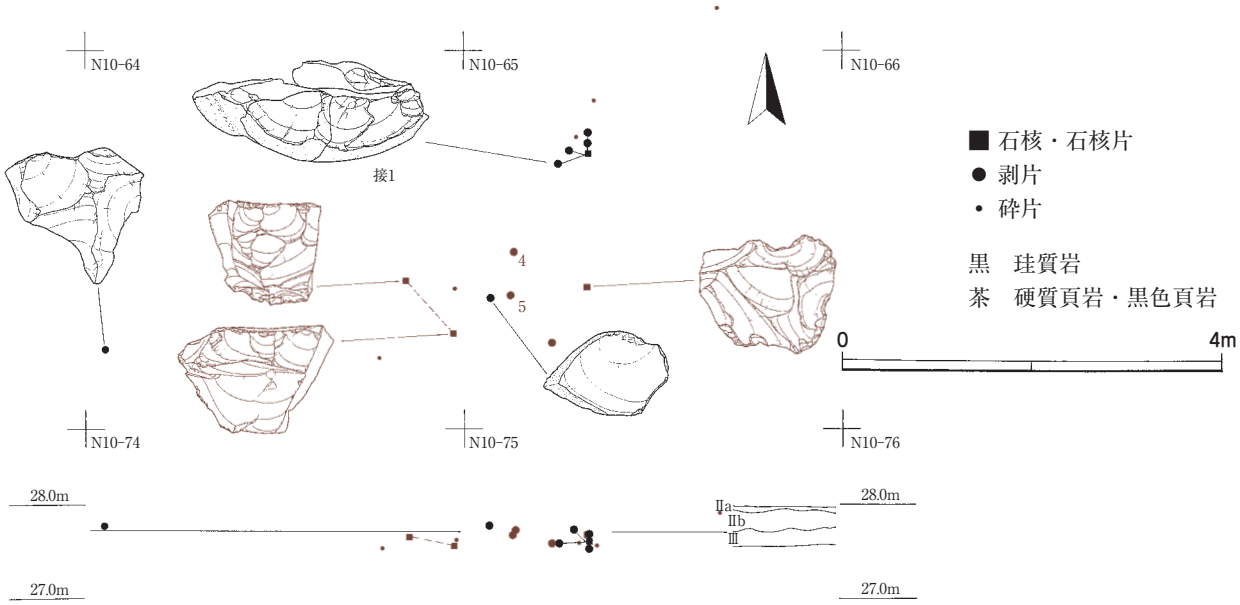
(23) 第１－15地点（第71図～第73図、図版６・37）

概要　本地点は、第１地点の中央から東よりのN10－65グリッドを中心に隣接するグリッドから若干出土したものである。出土層位は第Ⅱ層下部から第Ⅲ層となり約15cmほどの高低差をもって出土している。石材は頁岩系と珪質岩とで構成されていた。

出土石器群　ここでは成品といえるような石器は出土しておらず石核や剥片等で占められていた。残核の類は４点出土しているが、それに伴うような剥片は少ない。

剥片（４～７・９～11）　出土点数が少ないため剥片は小型品も含めて図示した。６は薄くきれいに剥離されたもので刃こぼれ状の使用痕が観察できた。７は大型の剥片であり、上部にみられる剥離痕から打面調整剥片となろう。石器製作の素材としては十分な形状といえようが加工の痕跡はみられない。10は打面再生のための剥片で横からきれいに剥離されてはいるが、その後、剥片が２枚ほど剥離されている。

石核（１～３・12）　１・２の石核は被熱によるためか表面の色調はオリーブ色を呈している。この類の石材は僅少であるため同一の原石から得られた可能性が強い。２点に自然面がみられるが接合はしない。１は上下から剥離されている。２は平坦な面からの剥離がみられるため一応石核として扱った。３は平坦な面を利用して周囲から剥離している。そのため石核としたが、図示したように整形を兼ねた小さな剥離が顕著にみられるため最終的には掻器様の石器として使用されていたものと思われる。12は残された最後の部分となろうが、本石核には節理が何層にもわたって入り込み剥離面では凹凸が著しい。石材は別称白滝頁岩と称される石材で本遺跡でもしばしばみられる石材である。



第71図　第１－15地点出土石器分布図

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

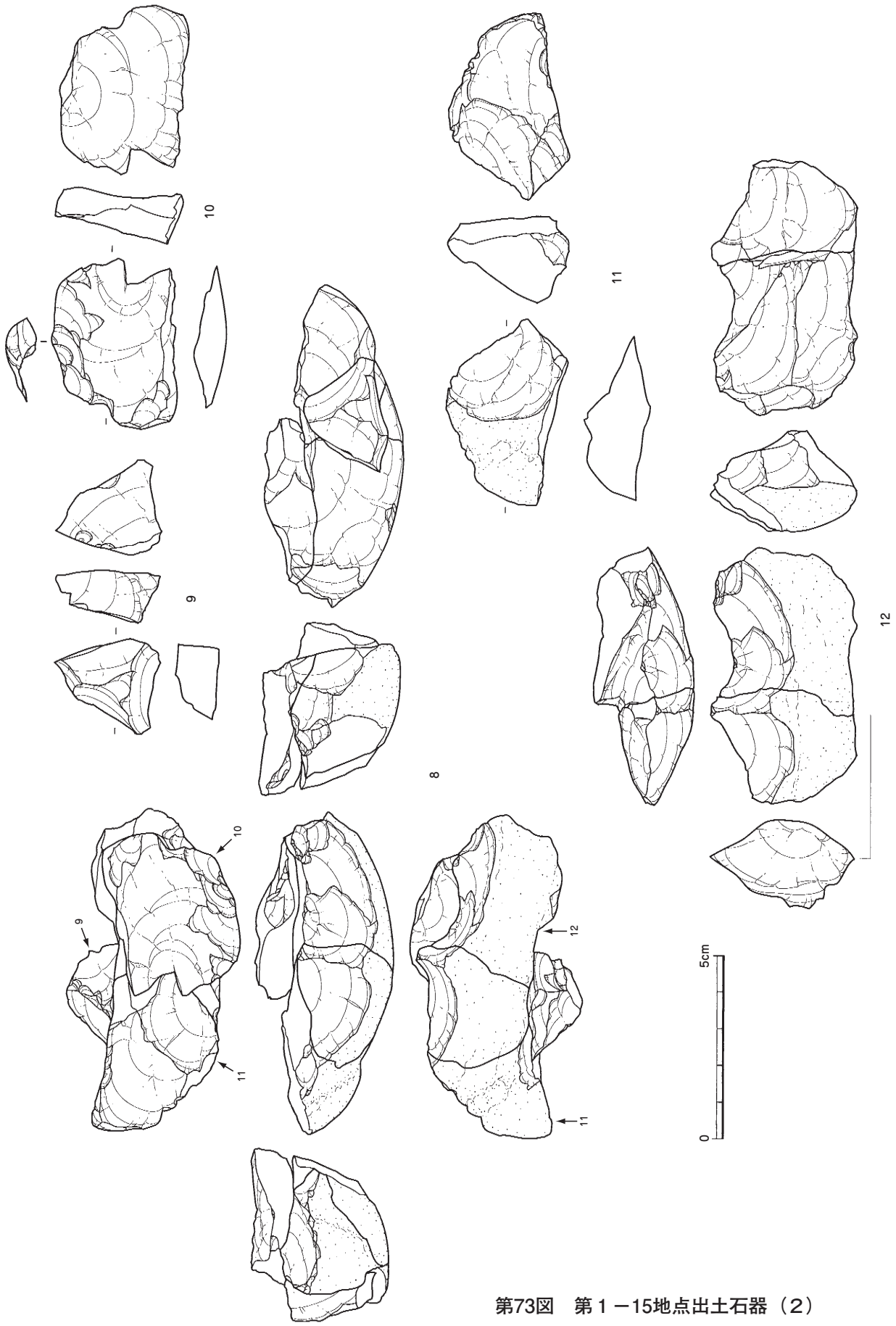
石材　硬質頁岩10点　珪質岩７点　黒色頁岩１点

器種　剥片９点　砕片５点　石核４点　計18点

第23表　第１－15地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	N10－64	5	27.644	石核	硬質頁岩	4.00	4.20	2.60	45.35		
2	N10－64	7	27.559	石核	硬質頁岩	5.70	5.10	3.10	59.01		
3	N10－65	18	27.639	石核	黒色頁岩	4.70	5.00	1.70	34.75		厚手剥片素材
4	N10－65	14	27.709	剥片	硬質頁岩	1.30	2.10	0.25	0.91		
5	N10－65	16	27.649	剥片	硬質頁岩	1.50	2.65	0.60	2.31		
6	N10－65	15	27.664	剥片	珪質岩	3.10	3.90	0.50	8.34		
7	N10－64	8	27.729	剥片	珪質岩	5.06	5.10	1.10	17.35		
8									118.85	接１	
(12)	N10－65	8	27.589	石核片	珪質岩						
	N10－65	9	27.639	石核片	珪質岩	4.37	6.97	2.84	66.57		
(９)	N10－65	13	27.579	剥片	珪質岩	3.15	2.29	1.35	8.80		
(10)	N10－65	11	27.729	剥片	珪質岩	3.50	4.74	1.30	17.28		
(11)	N10－65	10	27.609	石核片	珪質岩	3.06	5.10	2.38	26.20		

第72図　第１－15地点出土石器（１）



第73図　第１－15地点出土石器（２）

第74図　第１－16地点出土石器

(24) 第１－16地点（第41図・第74図、図版38）

概要　本地点は、１－11Ａ地点の５ｍほど東において確認された小規模の石器群である。出土地点はＮ10－10グリッドを中心に径４ｍほどの狭い範囲となる。石器の出土層位は第Ⅶ層から第Ⅸ層となり、約20cm程度の高低差が認められた。ここでも成品はみられず剥片類のみである。石材は黒曜石が主体となるが、異物等を含み良質なものではない。

出土石器群　定型的な石器はみられず、小型の剥片に加工を加えた石器が若干出土している。また砕片のような極小破片は大半が黒曜石であり、本地点では成品の仕上げの場所であったものと推測できる。

二次加工剥片（４）　断面三角形を呈した石刃状の剥片で、同一グリッドから出土した２点が接合したものである。右側縁の裏面では小さな剥離が顕著に施されている。下部は切断されたものであろう。

剥片（１～３・５～13）　１～３では使用痕等は認められない。５は薄い剥片で上下からの剥離を観察することができる。周囲には刃こぼれ状の使用痕が認められる。８は珪質岩で、下部は乳白色で上部は灰白色を呈している。下部に微細な剥離痕がみられる。12では左の側縁中央に僅かな剥離痕が観察できる。何らかのかたちで使用に供したものであろう。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石23点　硬質頁岩６点　珪質岩１点　緑色硬質頁岩２点　メノウ６点

器種　二次加工剥片１点　剥片12点　砕片25点　計38点

第24表　第１－16地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	N10－10	10	26.534	剥片	黒曜石	2.10	1.40	0.40	1.25		
2	N10－10	16	26.463	剥片	黒曜石	1.60	1.65	0.50	1.45		
3	N10－11	3	26.440	剥片	黒曜石	3.00	2.20	0.50	3.27		
4	N10－10	5	26.412	二次加工	メノウ	0.58	1.70	0.70	0.93	接１	
	N10－10	23	26.343	剥片	メノウ	2.70	1.60	0.80	3.76		
5	N10－10	11	26.450	剥片	メノウ	3.15	1.90	0.50	2.03		
6	N10－10	38	26.562	剥片	メノウ	2.60	1.30	0.70	1.69		
7	N10－10	8	26.550	剥片	メノウ	1.85	1.80	0.60	2.48		
8	N10－10	9	26.499	剥片	珪質岩	1.90	2.40	0.30	1.72		
9	N10－11	2	26.359	剥片	硬質頁岩	3.00	1.50	0.45	2.08		
10	N10－10	3	26.440	剥片	硬質頁岩	3.00	2.20	0.50	3.27		
11	N10－10	26	26.500	剥片	硬質頁岩	2.50	2.20	0.70	3.38		
12	N10－10	34	26.380	剥片	緑色硬質頁岩	2.60	1.90	0.50	2.17		
13	N10－10	2	26.475	剥片	緑色硬質頁岩	2.00	1.30	0.50	1.18		

(25) 第１－17地点（第75図・第76図、図版38）

概要　本地点は第１地点の南側中央部に所在し、N10－90・91グリッドにかけて径2.5mほどの小範囲から出土したものである。出土層位は第Ⅲ層中といえよう。石材は硬質砂岩と黒色安山岩によって構成されており、石材という点では周囲の石器群とは若干異なる。硬質砂岩の採用はその好例であろう。

出土石器群　１点のみ使用されている剥片が出土しているが、他は廃棄された剥片と砕片であった。

剥片（１～４）　１は接合した黒色安山岩で、表皮の観察から３とともに同一母岩から得られたものと思われた。２・４は硬質砂岩で、２は同一グリッドから出土した２点が接合したものである。２の両側縁には刃潰し加工が施されているため石器として使用したものと考えられる。接合した剥片は整形のために剥離されたものであろう。４は横長の小破片で使用の痕跡等は認められない。２・４の剥離面を観察すると粒子・色調に共通点がみられるため同一母岩となろう。

礫群　石器群の出土した西側には、破砕した５個体の焼礫が十数点に散って出土した。出土層位も同レベルであり、石器群に伴うものであろう。

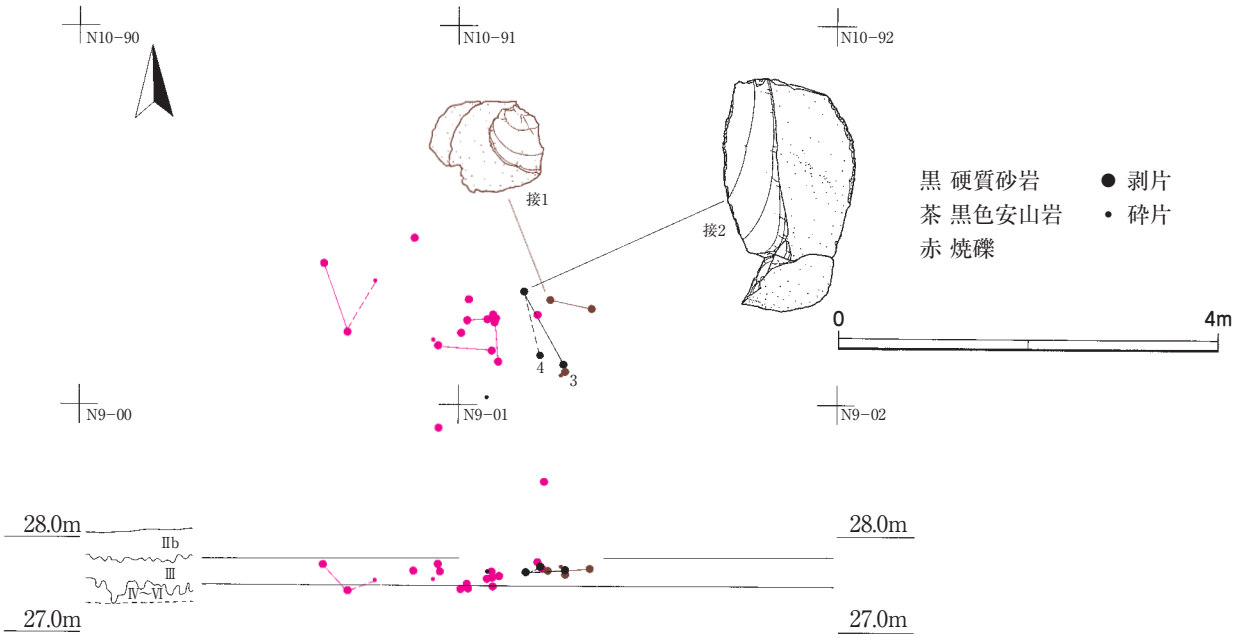
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩４点　硬質砂岩４点

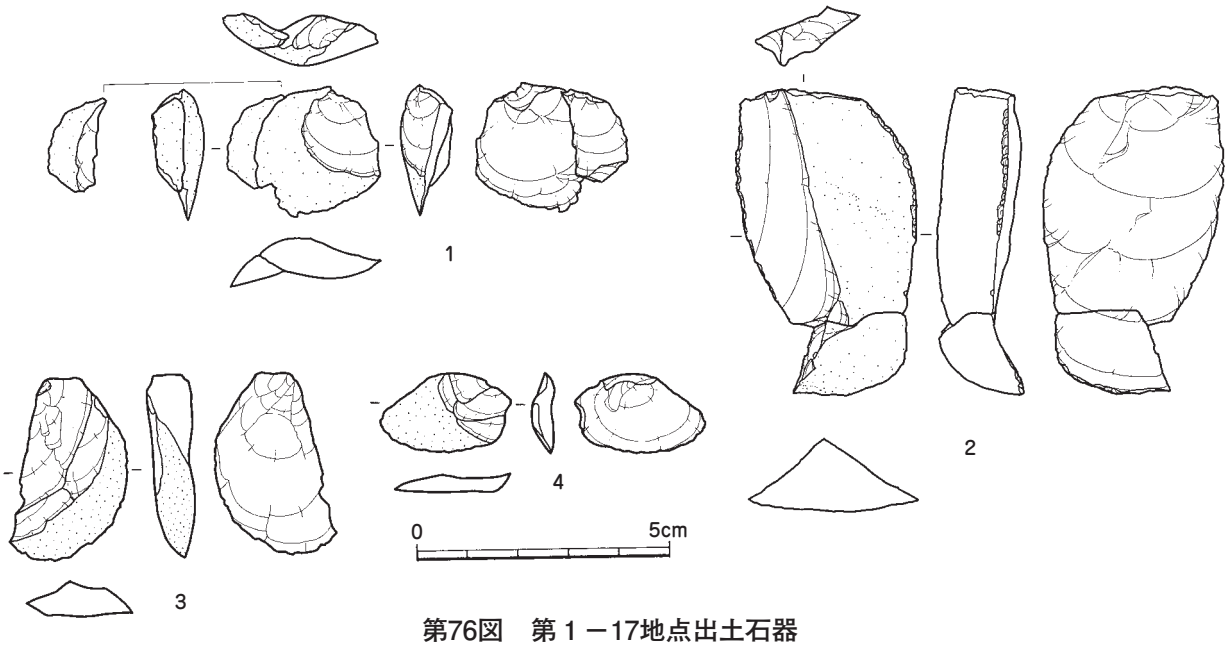
器種　剥片６点　砕片２点　計８点　その他：礫群（砂岩２・石英斑岩２・安山岩１）

第25表　第１－17地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	N10－91	9	27.638	剥片	黒色安山岩	2.60	3.10	0.80	5.57	接１	
	N10－91	10	27.658	剥片	黒色安山岩						
2	N10－91	2	27.628	剥片	硬質砂岩	2.00	1.90	1.00	4.33	接２	
	N10－91	8	27.613	剥片	硬質砂岩	4.80	3.40	1.55	25.83		
3	N10－91	17	27.588	剥片	黒色安山岩	3.65	2.10	0.70	5.99		
4	N10－91	3	27.658	剥片	硬質砂岩	1.85	1.75	0.40	1.32		



第75図　第１－17地点出土石器分布図



第76図　第１－17地点出土石器

第３節　第２地点

第２地点とした調査区は第１地点の東に位置し、大グリッドでいうL10・11区にあたる。ここでの石器集中地点は小規模でL11－62グリッドから９点の黒色安山岩が纏まって出土しただけであった。他のグリッドでは散発的な出土であったため順次発掘区を拡張しながら調査を続行した。しかし広範囲に調査したものの集中的に遺物が出土することはなかった。その結果、調査区は広域となったものの石器群は疎らに散布しているような状況となった。一方、第２－２地点も調査区は広げたものの集中地点と認定できるような石器群は確認できなかった。そのため出土状況の図面作成は南北に分割して、北側を第２－１地点、南側を第２－２地点として掲載することとした。

本地点における石器群の出土層位は、概ね第Ⅲ層下部から第Ⅳ・Ⅴ層の上部と捉えることができるようである。ただ、調査が広域になったために出土層位には若干の高低差が生じている。しかも主体となる石材が黒色安山岩と黒曜石であり、石材構成といった点でも石器群の形成時期を同時期として捉えるには躊躇するところである。しかし、第１地点で検出された頁岩系を中心とした石器群よりも古く位置づけられることは確実である。

（１）第２－１地点（第77図・第78図、図版39）

概要　本地点は、黒色安山岩が集中して出土したL11－62グリッドを中心として作図した。L11－81・91グリッドでも数点が出土しているが、他のグリッドでは石器群が集中して出土するということはなかった。そのため石器集中地点としては小規模なものとして捉えることが妥当となろう。石材は黒色安山岩が主体となり、次いで黒曜石やチャート・デイサイト・流紋岩・砂岩などであった。流紋岩は石核の一部とみられるが、ここから剥離された剥片等は出土していない。

出土石器群　出土した石器群についてみると、加工品としてはナイフ形石器と考えられる石器が１点出土したのみであった。他には、石核が１点と剥片・砕片等となる。ここでは石器として使用されている剥片は認められなかった。

ナイフ形石器（11）　まだ整形の段階で止まっているような作りであるが、右側縁下部と背面での剥離が若干認められるためナイフ形石器として分類した。基部も欠損しているところから製作途中で廃棄された可能性も否定できない。

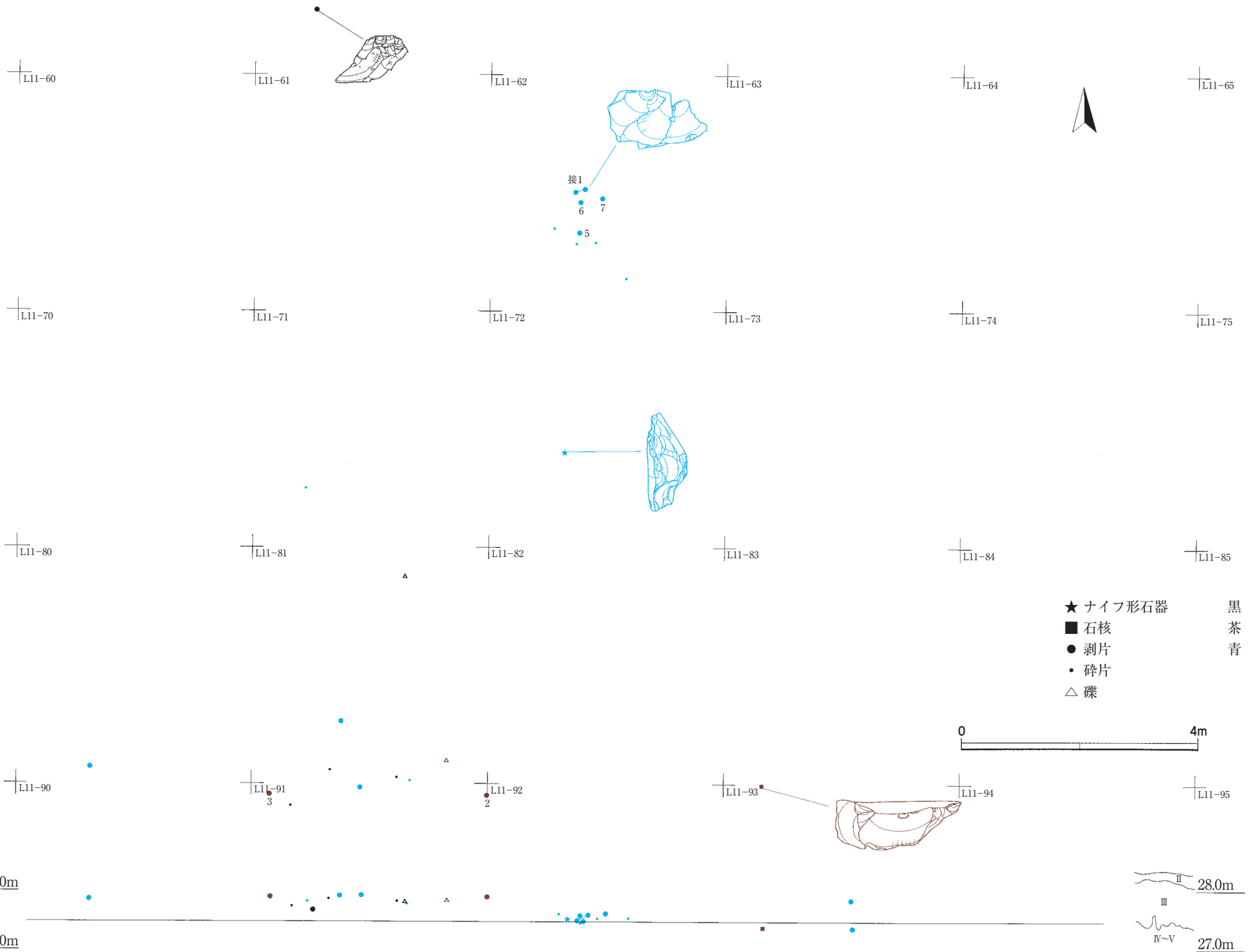
剥片（２～10）　２・３の剥片の出土層位はやや上層であり後出のものとも考えられた。４～８は黒色安山岩である。４や５などは素材としても良好な形状を呈しているが、使用痕等は認められない。８は同一のグリッドから出土した接合例である。このグリッドでは小範囲から纏まって黒色安山岩の剥片等が出土している。10は形状だけをみるとナイフのようでもあるが、基部や背面等に明確な加工痕は認められないため剥片となろう。

石核（１）　自然面を多く残しており、平坦な面を利用して数回の剥離をおこなっているため石核とした。だが、表面上部に僅かではあるが刃こぼれ状の使用痕が観察できたため石器として使用されていたものであろう。

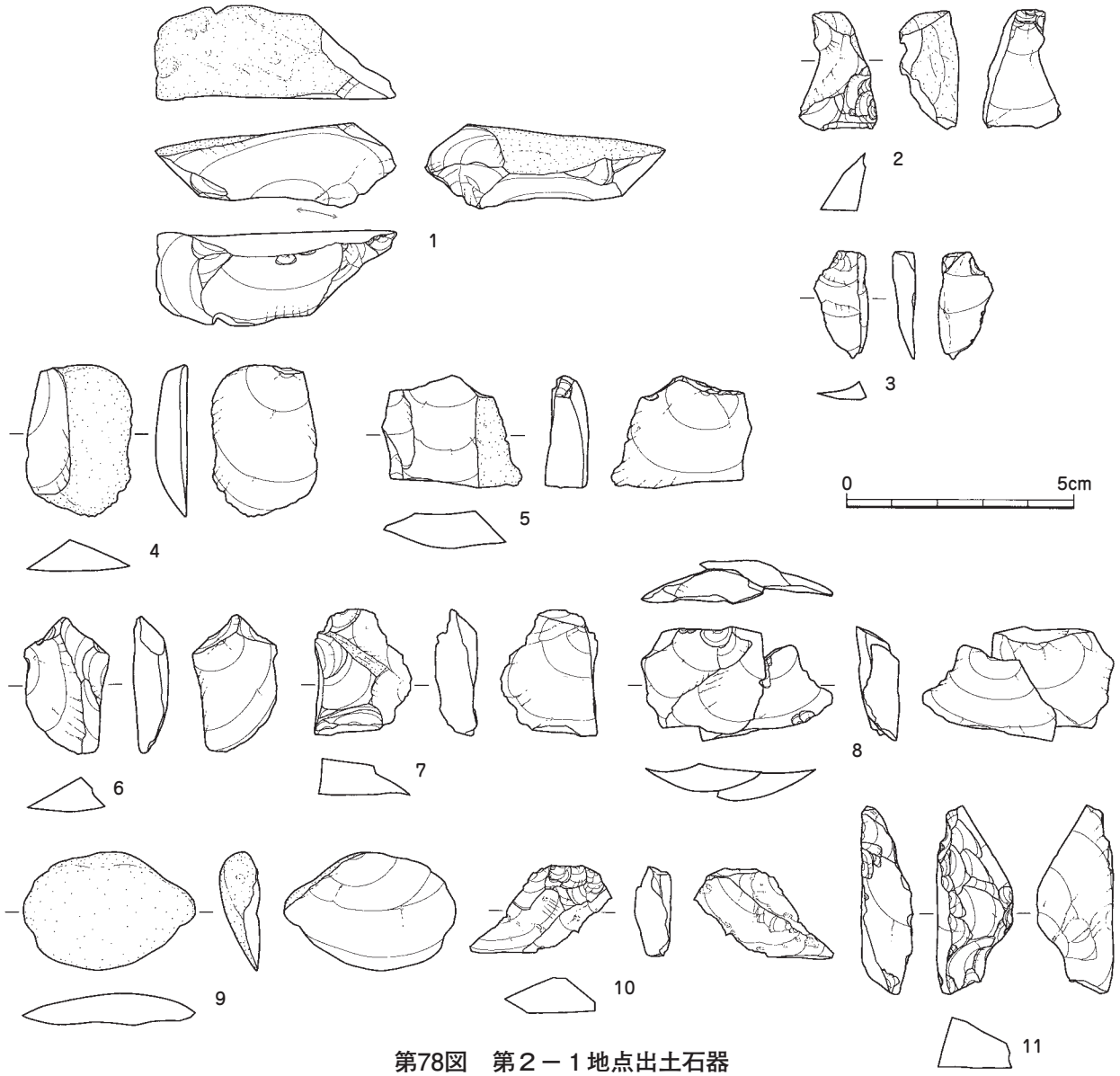
石材・機種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石４点　黒色安山岩14点　チャート３点　デイサイト２点　流紋岩１点　砂岩１点

器種　ナイフ形石器１点　剥片12点　砕片９点　石核１点　礫片２点　計25点



第77図　第２－１地点出土石器分布図



第78図　第２－１地点出土石器

第26表　第２－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	L11－93	2	27.415	石核	流紋岩	2.20	5.35	1.70	16.20		表面上部にU
2	L11－91	5	27.920	剥片	チャート	2.65	1.70	1.30	4.66		
3	L11－91	2	27.955	剥片	チャート	2.45	1.10	0.40	1.00		
4	L11－93	3	27.365	剥片	黒色安山岩	3.40	2.30	0.77	5.68		
5	L11－62	10	27.500	剥片	黒色安山岩	2.70	2.70	0.85	7.58		下半欠
6	L11－62	11	27.548	剥片	黒色安山岩	3.05	1.85	0.80	3.87		
7	L11－62	6	27.620	剥片	黒色安山岩	2.70	2.10	0.93	4.97		
8	L11－62	5	27.595	剥片	黒色安山岩	1.70	3.02	0.43	6.81	接1	
	L11－62	12	27.485	剥片	黒色安山岩	2.90	2.70	0.67	6.81		
9	L11－63	3	27.440	剥片	デイサイト	2.70	3.25	0.90	7.99		
10	L11－51	2	27.705	剥片	黒曜石	3.15	1.52	0.85	3.21		
11	L11－72	4	27.544	ナイフ形石器	黒色安山岩	1.80	3.20	1.10	7.89		

（２）第２－２地点（第79図・第80図、図版39）

概要　前述したように、本地点では石器群の集中的な出土は確認されず、それぞれ各グリッドから１～２点が出土したのみで合計数も13点と僅かなものとなった。しかし成品という点でみると、それほど多いとはいえないが、第２－１地点を凌ぐものであった。

石材では、異物の混入の少ない良質な黒曜石が主体となっており、他に若干のチャートや硬質頁岩によって構成されていた。石器の出土層位は、前述したようにほぼ第Ⅲ層下部から第Ⅳ・Ⅴ層として捉えることができた。

出土石器群　成品としてはナイフ形石器・楔形石器があり、他に二次加工を施した剥片もみられた。特にナイフ形石器は欠損品を含めて３点出土している。しかし、本地点周辺では砕片等の出土もみられないため石器製作の場所とは考えられず、むしろ生活の一端を示す場所であったものと考えられる。

ナイフ形石器（１・２・10）　１は先端部を失っている。背面での加工は遺存部全面にわたって施されており、基部での整形は粗雑なものとなっている。また、ナイフ形石器とみた場合には整形に不十分さが感じられ、形状からは台形様石器に近い。２は1/3程度の遺存となろう。両側面での剥離も丁寧に施されている。裏面でも２・３回の剥離によって打点部の凸部が削除されている。１・２はいずれも黒曜石で僅かに異物の混入が認められる点が共通している。10の加工も粗雑で背面では先端と基部に剥離が加えられるが、中央部は緩やかに弯曲した自然面をそのまま活用している。基部は欠損しているようでもあるが、意識的な整形とも考えられる。なお、その器厚からみて脆弱さは否めない。他に硬質頁岩を使用した石器等は出土していないため制作中の破損ではなかろう。

楔形石器（８）　表面には自然面を残し、楕円形に整形された楔形石器である。上下両端からの剥離が認められるため楔とした。ただ、剥離痕の観察から小型の掻器とも考えられる。下端は段状に肥厚していたもので、その部分をきれいに整形・削除している。

二次加工剥片（３・５）　３は半透明な良質の黒曜石を素材としており、右基部と左先端に丁寧な剥離が施されている。この点からナイフ形石器、あるいはその未成品とも考えられる。なお、先端部の破損は接合ではなく調査時に生じたものである。５は右側面や裏面でも刃潰し状の微細な調整痕を観察できる。下端部の整形などから石器として使用したものか、製作途上での廃棄品であろう。石材も３と同様に半透明の良質な黒曜石である。

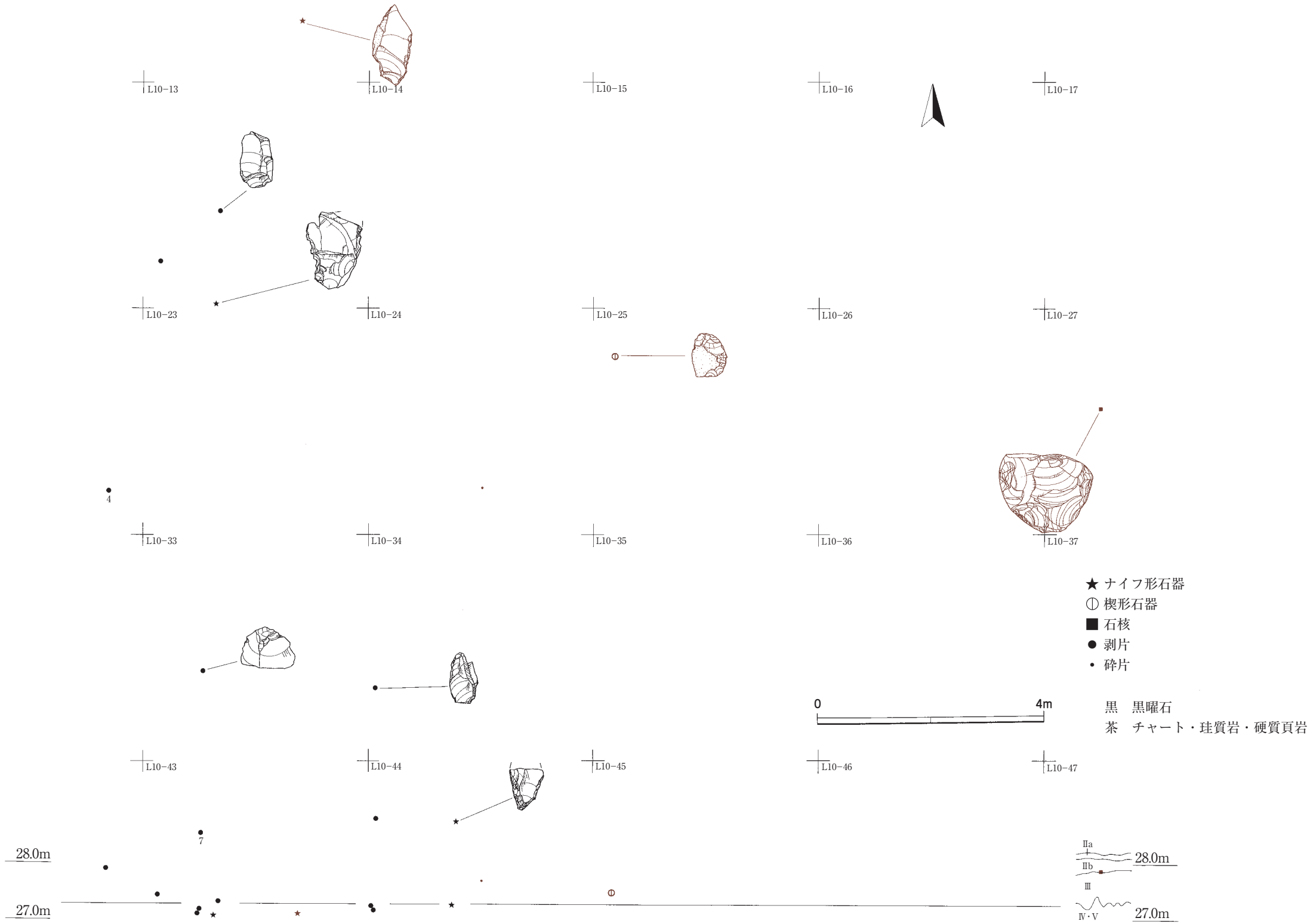
剥片（４・６・７）　４は薄手の剥片で、表面には多方向からの剥離痕がみられる。６は縦長剥片の左側縁下部が折れたもので、折断部には径２ｍｍほどの小石が含有されていた。また、左側縁の一部には刃こぼれ痕らしき痕跡が認められるため石器としても使用されていたものであろう。７は断面三角の比較的厚い剥片で、左側縁上部と下部には微細な使用痕らしき痕跡が観察できる。道具として使用されていたことは確実となろう。

石核（９）　小型の石核で、径５cmにも満たない河床礫を用いたものである。打面となる平坦面を作出し、周囲から次々と剥片を剥取している。裏面には打痕が認められるため、最初は敲石として使用されていたものである。

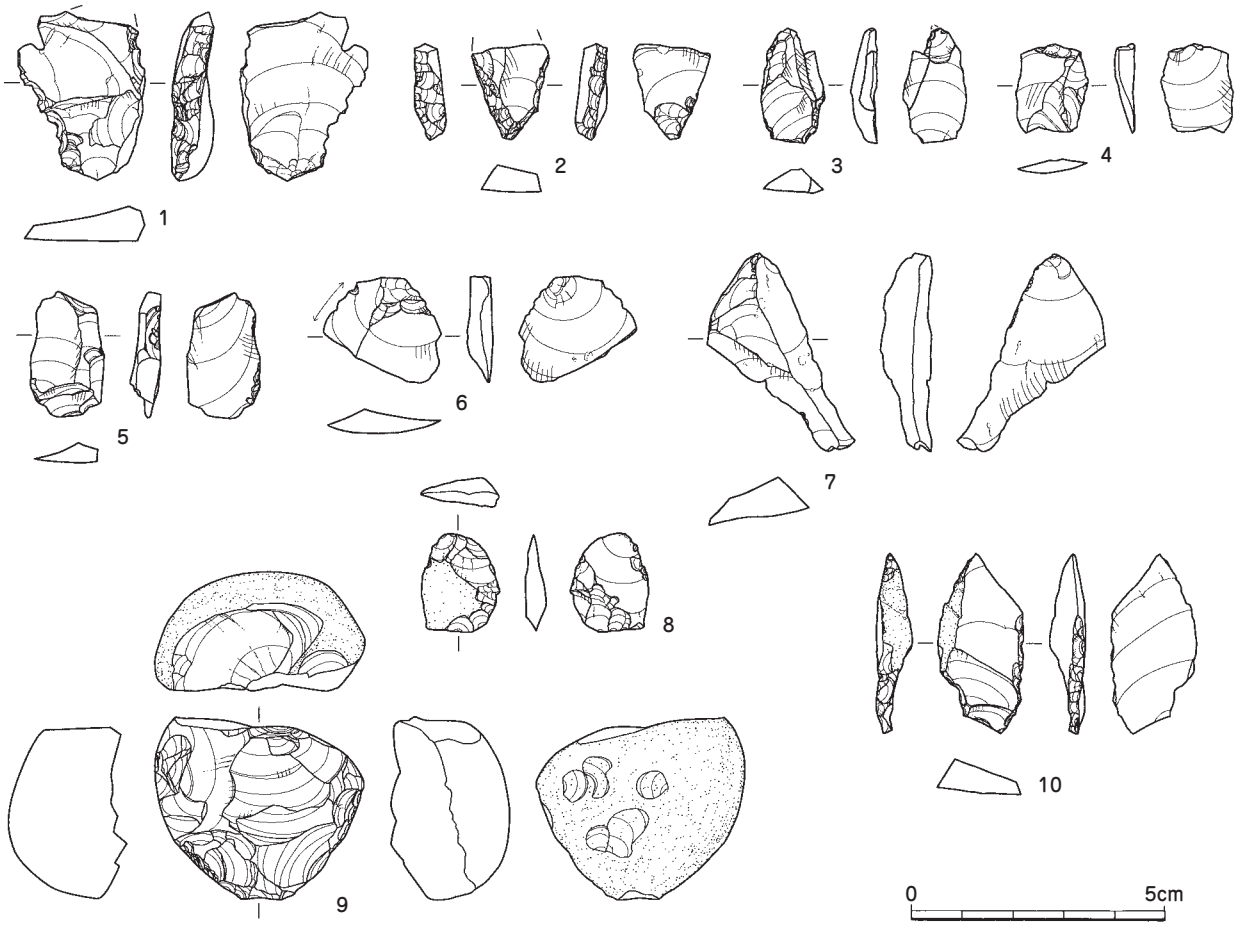
石材・機種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石９点　硬質頁岩１点　珪質岩１点　チャート２点

器種　ナイフ形石器３点　楔形石器１点　二次加工剥片２点　剥片５点　砕片１点　石核１点　計13点



第79図　第２－２地点出土石器分布図



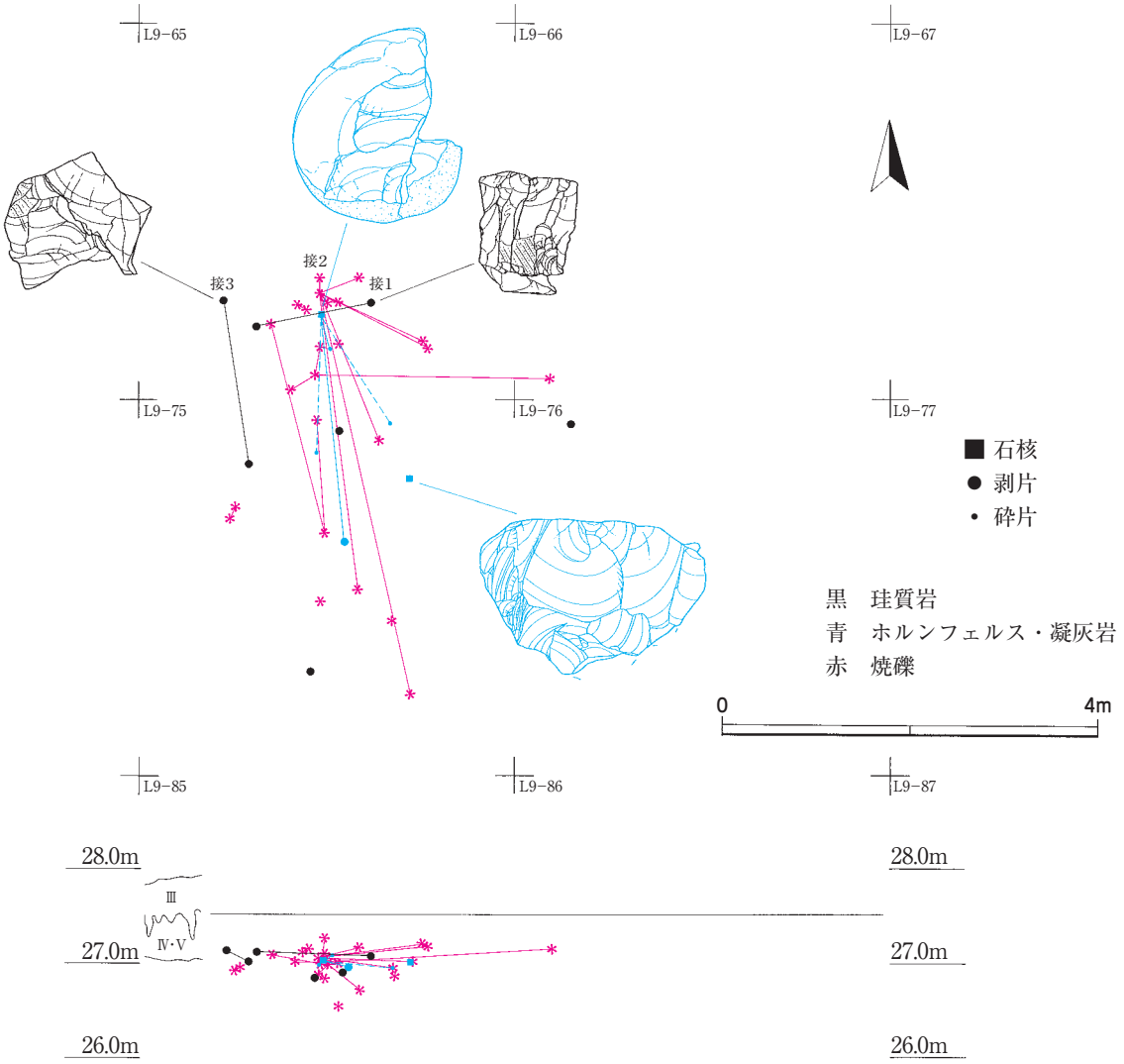
第80図　第２－２地点出土石器

第27表　第２－２地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	L10－13	3	27.385	ナイフ形石器	黒曜石	3.44	2.52	0.59	5.20		先端欠
2	L10－44	2	27.228	ナイフ形石器	黒曜石	1.85	1.53	0.60	1.50		上半欠
3	L10－34	5	27.255	二次加工	黒曜石	2.30	1.25	0.40	1.08		ナイフ形石器(未成品)
4	L10－22	22	27.895	剥片	黒曜石	1.70	1.31	0.30	0.73		
5	L10－13	4	27.315	二次加工	黒曜石	2.55	1.45	0.60	1.83		ナイフ形石器(未成品)、先端欠
6	L10－33	4	27.195	剥片	黒曜石	2.15	2.30	0.50	1.76		
7	L10－43	1	27.155	剥片	黒曜石	4.30	1.90	0.90	4.62		
8	L10－25	5	27.415	楔形石器	チャート	1.95	1.48	0.52	1.23		
9	L10－27	5	27.805	石核	珪質岩	3.60	4.75	2.35	43.41		
10	L10－03	1	27.080	ナイフ形石器	硬質頁岩	3.65	1.80	0.63	3.08		

第４節　第３地点

概要　本地点は、試掘調査時（L9－08グリッド）に第Ⅳ・Ⅴ層となるハードローム層中から黒曜石の剥片が１点出土した。その後、調査区を拡張しつつ調査を継続していったが、遺物の出土は確認できなかった。そのため作図等は省略した。因みに黒曜石片は、長さ2.1cm、幅1.03cm、重さ0.53ｇを計測し、半透明のきれいな石材を用いていた。



第81図　第４地点出土石器分布図

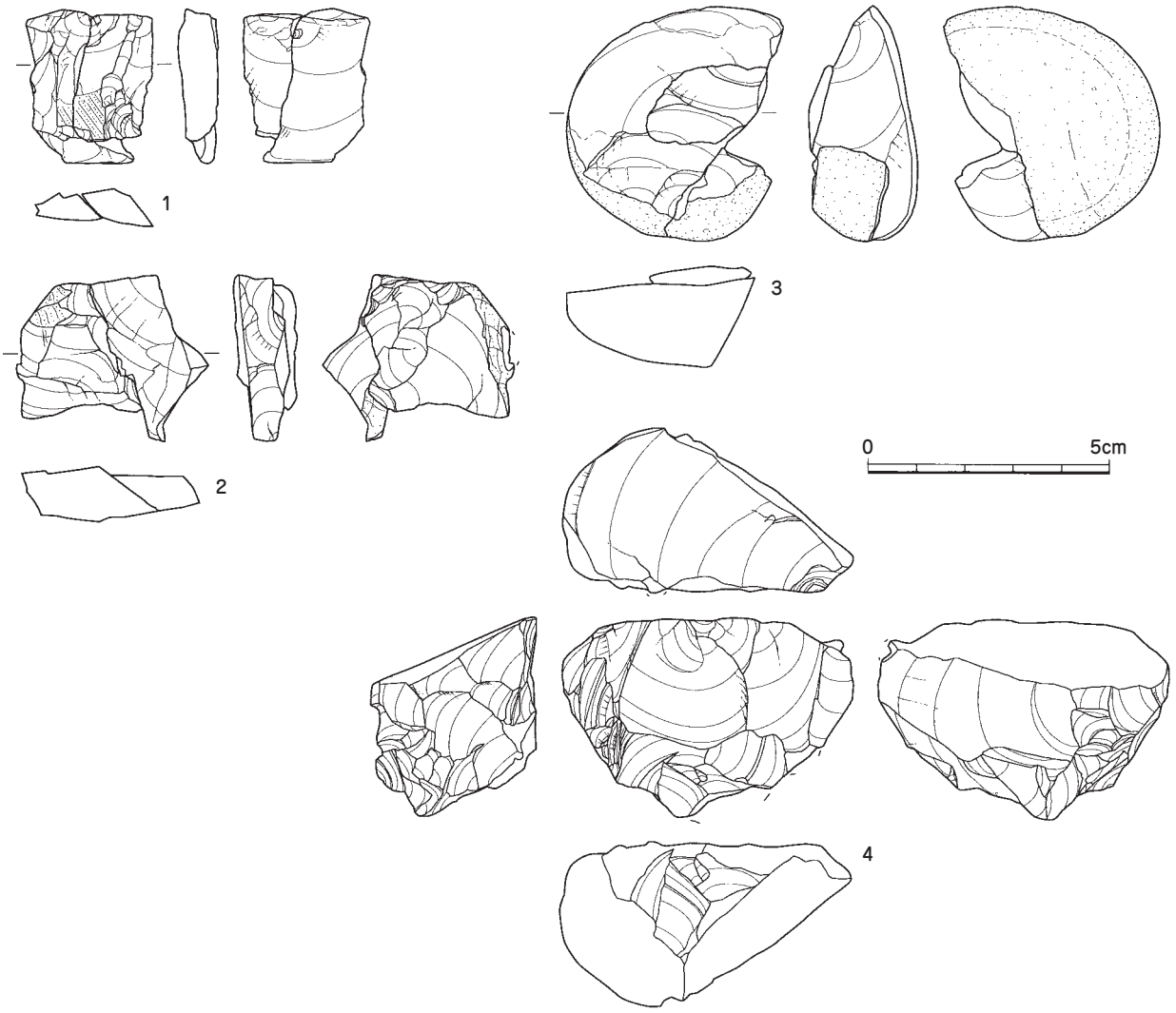
第５節　第４地点（第81図・第82図、図版６・39）

概要　本地点は第２・３地点の南に位置し、Ｌ９－65・75グリッドを中心に石器群が出土したものである。石器群の規模は小さく、石核・剥片類が12点と礫が８個体分出土したにすぎない。剥片・石核の出土層位は第Ⅳ・Ⅴ層中となる。その高低差は礫の一部を除き20cm未満の中に収まるものであった。剥片類の石材は珪質岩が多く、次にホルンフェルスとなる。珪質岩はおそらく同一母岩から剥離されたものとなろう。

出土石器群　成品の出土は皆無で剥片と石核から構成される。石核が２点出土したが、４の石核から剥離された剥片は確認できなかった。

礫群　Ｌ９－65・75グリッドにおいて被熱・破砕した８個体分の礫片が散乱するような形で出土した。原石の大きさは径６cm～７cm程度であり、出土した礫片のほとんどが接合した。また礫片の出土状況についてみると、石器群と混在するようにほぼ同一レベルから出土しており石器群と一体をなすものと考えられた。

剥片（１・２）　１・２は、ともに接合したもので石質も近似している。１は縦長に剥離され石器の素材としては十分といえようが加工の痕跡は認められない。２の表裏面には節理が入っており剥離面でも凹凸



第82図　第４地点出土石器

が著しい。石器の素材として良質とはいえない。

石核（３・４）　３は径５cm～６cmの小礫を半割し、剥片を剥取しているため石核とした。いずれにしても良好な剥片が得られるような大きさではない。４は平坦な面を打面としつつ、３方向から剥片を剥離している。そのうちの一面では打面調整がみられる。表面は風化のためか淡い緑白色で、内部は黒みがかった石材である。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　珪質岩６点　ホルンフェルス５点　凝灰岩１点　礫（砂岩２・チャート２・石英斑岩２・凝灰岩・珪化木）

器種　剥片７点　砕片３点　石核２点　円礫24点（８個体）　計36点

第28表　第４地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｌ９－65	2	27.125	剥片	珪質岩	2.65	1.60	0.75	7.35	接１	
	Ｌ９－65	13	27.153	剥片	珪質岩	3.30	1.77	0.60	7.35		
2	Ｌ９－65	1	27.163	剥片	珪質岩	2.90	2.90	1.20	11.80	接３	
	Ｌ９－75	1	27.001	剥片	珪質岩	1.75	3.70	1.00	5.45		
3	Ｌ９－65	7	27.000	石核	ホルンフェルス	3.80	5.10	2.10	40.26	接２	
	Ｌ９－65	12	27.163	剥片	ホルンフェルス						
	Ｌ９－65	14	27.108	剥片	ホルンフェルス						
4	Ｌ９－75	7	27.001	石核	凝灰岩	1.75	3.70	1.00	5.45		

第６節　第５地点（第83図・第84図、図版６・40）

概要　本地点の石器群は第４地点から南東に約20m離れて発見され、石器群の大半は隣接するＬ８－08グリッドとＬ９－98グリッドより出土したものである。ここでは小規模ながらも石器群は集中して検出されている。また、石器群の周辺では径１～２ｍｍ程度の炭化物の分布が観察できたが、焼土や炭化材といったような痕跡は認められなかった。石器群の出土層位は、前述した第４地点とほぼ同様で石器間では約30ｃｍの高低差が認められた。石器群の石材についてみると、珪質岩が多用され、黒色安山岩や黒曜石は少ない。主体を占める珪質岩という点では前者と共通といえよう。

出土石器群　成品としての石器は認められず、形の整った剥片と石核が出土したのみであった。

礫群　Ｌ８－８・Ｌ９－98グリッドにおいて、珪質岩と混在して２点の被熱礫が数点に散って出土している。安山岩製の礫ではタール状の物質が付着していた。

剥片（１～４・６）　１は剥片が接合したもので、幅広の良好な剥片といえよう。平坦な自然面を打点として順序よく剥離したようである。これらには明確な使用痕等は認められない。２は小片で縦方向に折られたものである。上部には小さな剥離がみられ、楔のような石器製作を意識したものとも考えられる。３は粗雑な剥離が周囲にみられる。その多くは主剥離される以前のものである。４は断面三角のきれいに剥離された剥片である。裏面下端の剥離は調査時のものである。６は唯一の黒曜石で７ｍほど離れて出土した。表面は風化により若干光沢が失われている。使用の痕跡は認められないが、側縁では両面からの剥離が施されている。

石核（５）　平坦な自然面を打面とし、回転させながら順序よく剥片を剥離していったようである。４と比較すると表皮に違いが認められるため、原石は同一ではない。

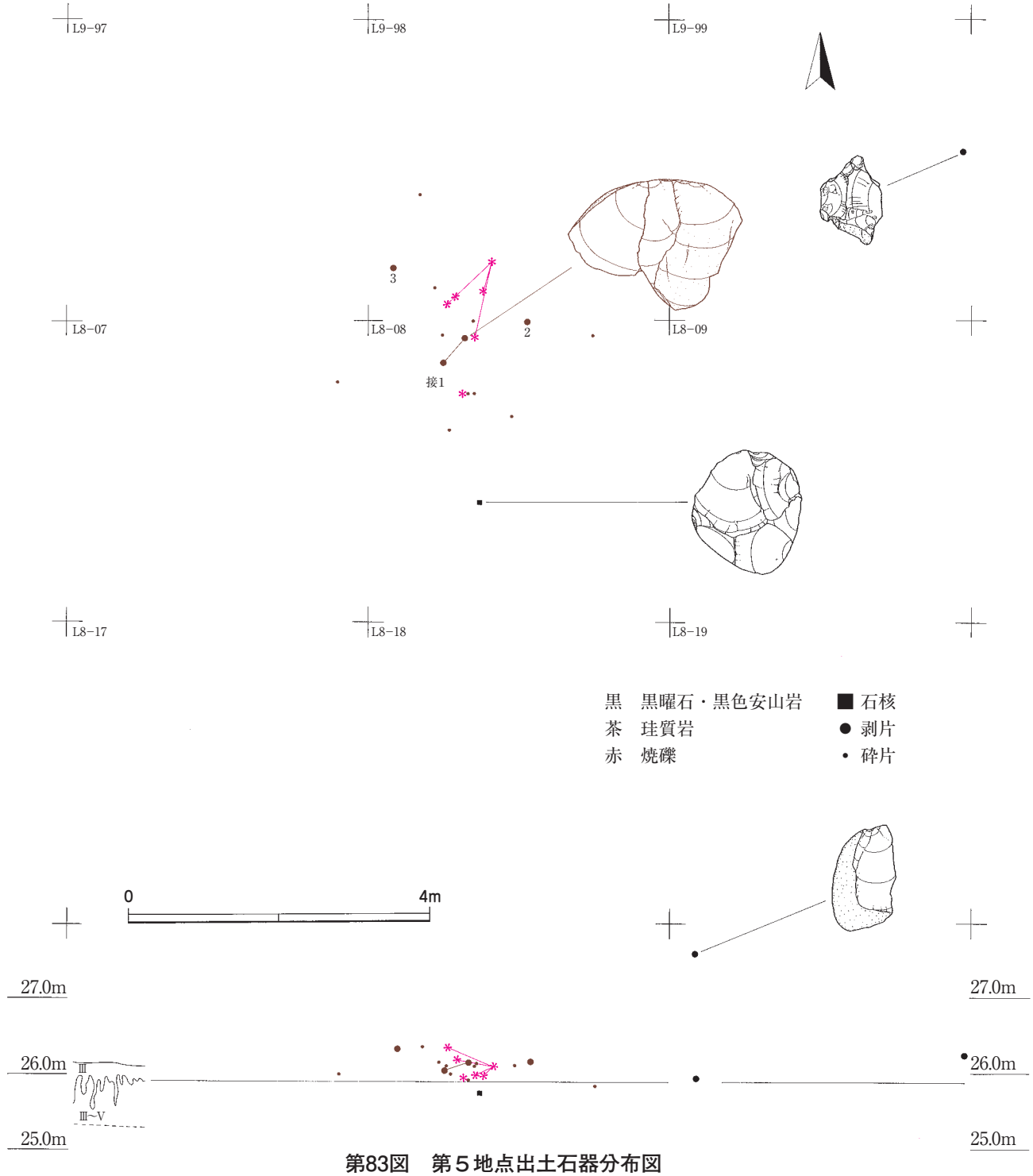
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石１点　珪質岩14点　黒色安山岩２点　礫（安山岩・石英斑岩）

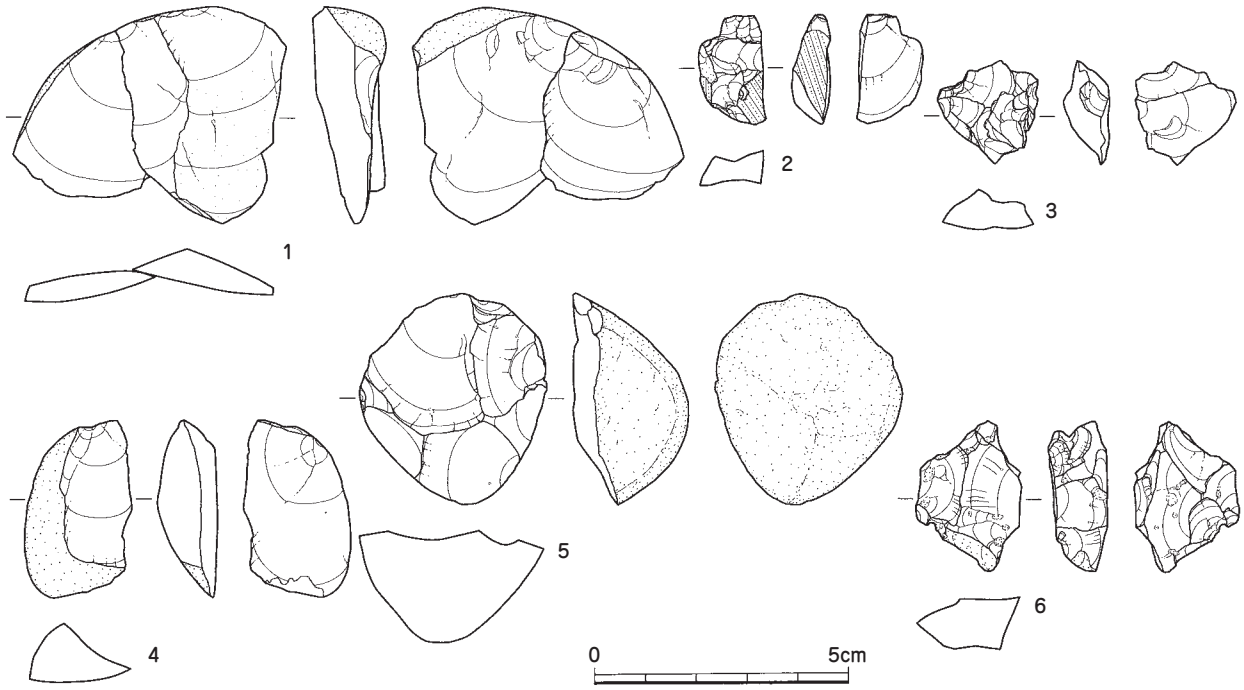
器種　剥片６点　砕片10点　石核１点　礫６点（２個体）　計23点

第29表　第５地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｌ８－08	6	25.855	剥片	珪質岩	3.05	3.10	0.70	5.45	接１	
	Ｌ８－08	7	25.962	剥片	珪質岩	4.30	3.37	0.95	13.69		
2	Ｌ８－08	11	25.960	剥片	珪質岩	2.20	1.20	0.70	2.07		半欠
3	Ｌ９－98	6	26.125	剥片	珪質岩	2.00	1.90	0.95	2.80		
4	Ｌ８－29	1	25.930	剥片	黒色安山岩	3.25	2.20	1.20	7.95		
5	Ｌ８－08	1	25.740	石核	黒色安山岩	3.60	4.00	2.30	33.40		
6	Ｌ９－99	1	26.203	剥片	黒曜石	2.05	2.90	1.20	6.23		



第83図　第５地点出土石器分布図



第84図　第５地点出土石器

第７節　第６地点（第85図・第86図、図版40）

概要　本地点の石器群は、第５地点の南にあたるＫ８－31・41グリッドで計９点の黒色安山岩・硬質頁岩の疎らな分布によって構成された小規模なものである。石器群の出土層位は第Ⅲ層から第Ⅳ・Ⅴ層上部となる。前二者よりもやや上層で出土している。石器間の高低差は30cmほどであった。石材についてみると、黒色安山岩と硬質頁岩の二種によって構成されている。また、Ｋ８－10グリッドでは焼礫が４点出土している。

出土石器群　石器として加工された剥片が出土したものの、出土量数も少なく特に注目できるような点は見出せなかった。

二次加工剥片（１）　幅広に薄く剥離された剥片で打点部には自然面を残す。左側縁に数回の剥離を加え石器としたものである。削器様の道具として使用されたものであろう。下部にも微細な調整が認められる。

剥片（２～７）　２の左側縁にみられる剥離は、主剥離以前のものである。４は断面三角で形状の整った剥片となるも使用の痕跡は認められない。５は隣接したグリッドから出土し接合したものである。側縁部には微細な剥離が認められ、ともに石器として使用されたものであろう。

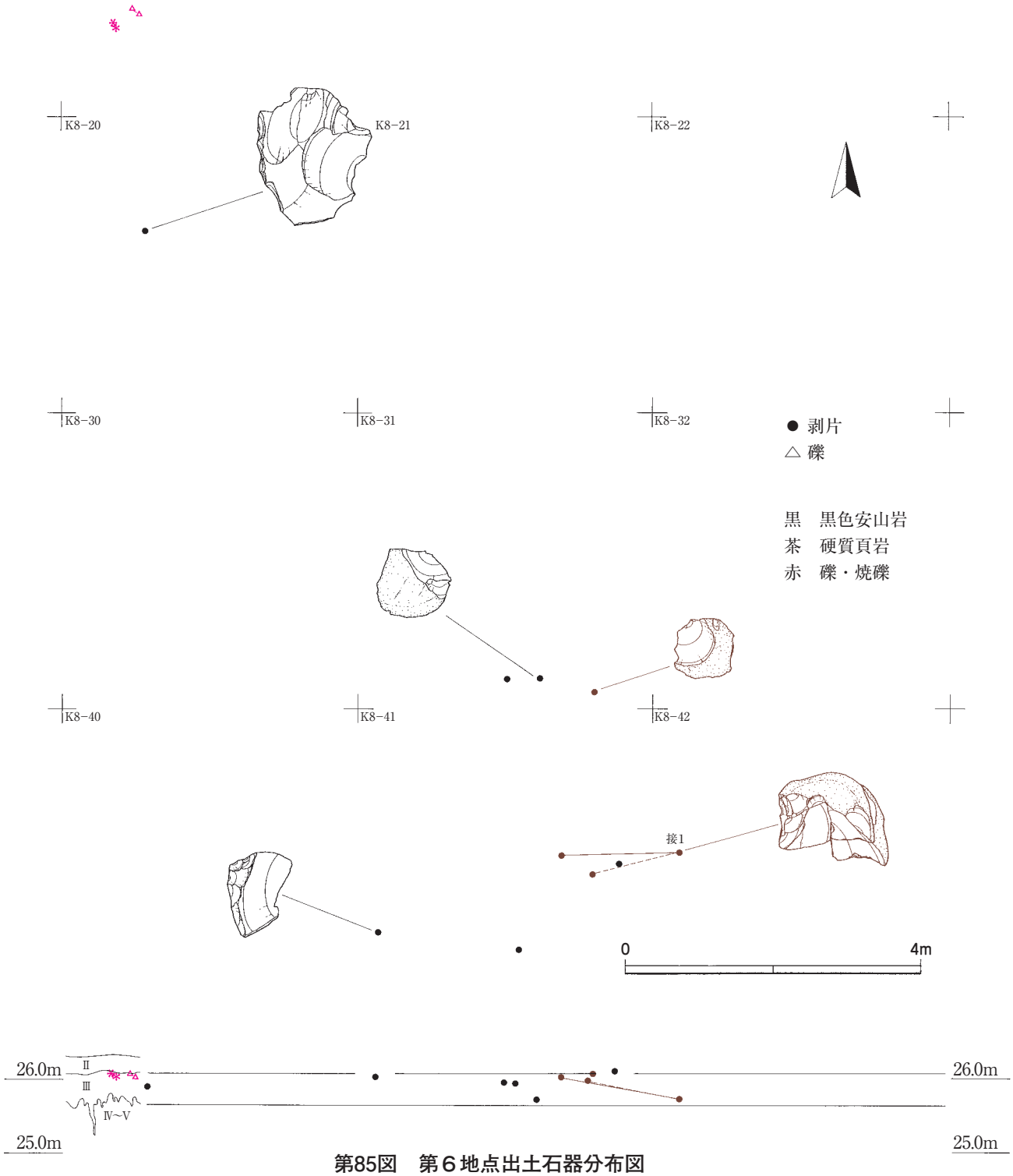
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　硬質頁岩４点　黒色安山岩７点　砂岩４点

器種　二次加工剥片１点　剥片10点　礫４点　計15点

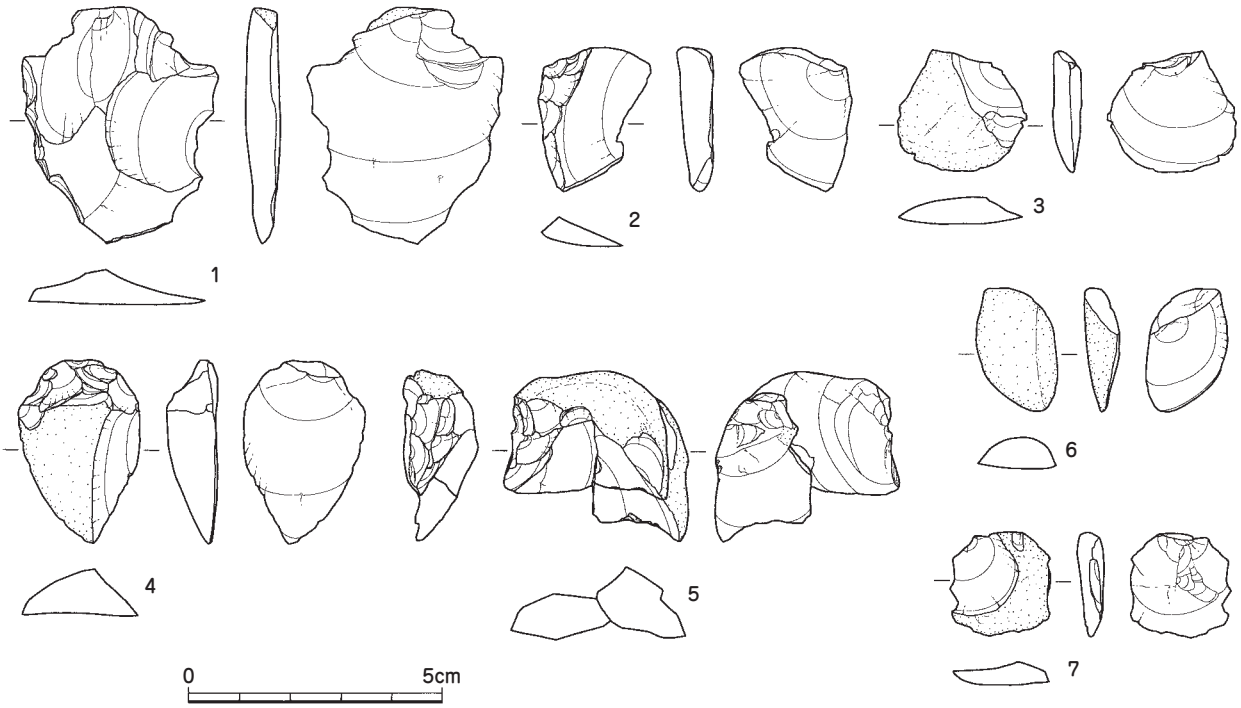
第30表　第６地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ８－20	2	25.925	二次加工	黒色安山岩	4.20	3.85	0.70	10.64		
2	Ｋ８－41	36	26.024	剥片	黒色安山岩	2.70	2.25	0.50	3.28		



第85図　第６地点出土石器分布図

3	K８−31	3	25.715	剥片	黒色安山岩	2.30	2.35	0.55	3.42		
4	K８−32	1	−	剥片	黒色安山岩	3.70	2.37	1.00	7.21		
5	K８−41	42	25.994	剥片	硬質頁岩	3.30	2.50	1.20	14.45	接１	
	K８−42	4	−	剥片	硬質頁岩	2.64	1.89	0.62			
6	K８−31	1	26.054	剥片	硬質頁岩	2.00	1.70	0.60	2.27		
7	K８−41	40	25.954	剥片	硬質頁岩	2.10	1.90	0.55	2.02		



第86図　第６地点出土石器

第８節　第７地点

本地点は地形からみると、東から入り込む谷が「U」字状に台地を抉りつつ北へと向かう谷頭部分にあたる。そのため地層的には不安定な場所でもあった。確認調査時にJ10－65グリッドから剥片が検出されたため随時グリッドを拡張して調査を継続していった。その結果、２か所（J10－64グリッド、J－76・86グリッド）において小規模ではあるが石器群の集中を確認することができた。

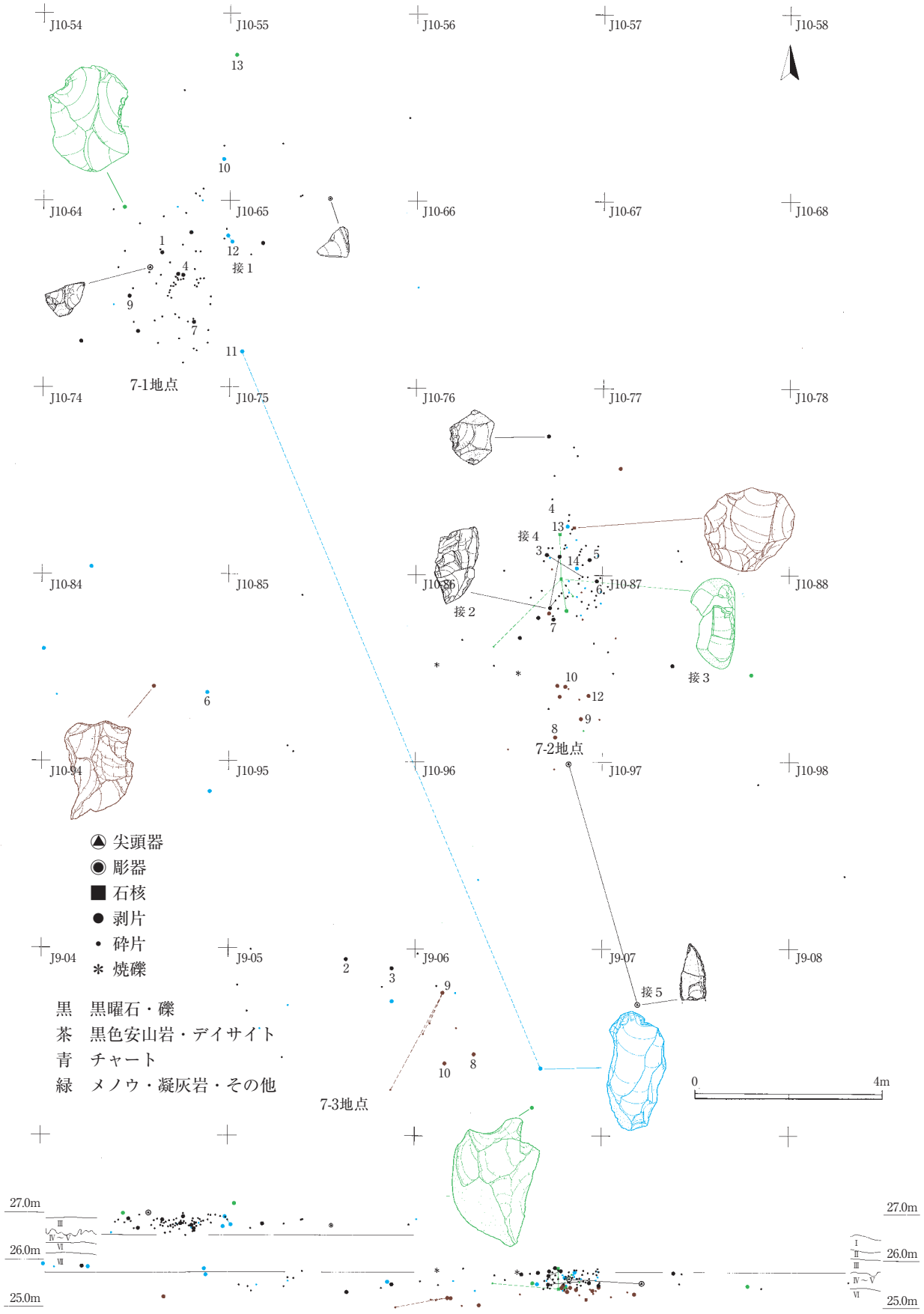
その後、整理作業の段階でJ９－05グリッドにおいても散布するような状況で遺物が出土しているため煩雑さを避ける目的で出土地点を３か所とし、北から南下するように第７－１・２・３地点と命名し整理作業を進捗させていった。

ここでの出土層位をみると、第７－２地点から同３地点にかけては斜面部にあたるため出土レベルでは大きな差異を生じているが、層序的にはほぼ第Ⅳ・Ⅴ層中として把握することができた。ただ、第７－１地点では第Ⅲ層中から両面加工の尖頭器の一部が出土しており、より後出の石器群が存在していることも想定された。

使用石材についてみると、主体となっている石材は黒曜石で、次いでチャート、ホルンフェルス・黒色安山岩・デイサイト・メノウ・凝灰岩・砂岩といった多彩な石材で構成されている。なお、本地点出土の黒曜石は半透明で異物を含まず石器石材としては良質品といえる。

（１）第７－１地点（第87図・第88図、図版７・40）

概要　本地点はJ10－64グリッドを中心として、長径約６ｍ、短径約３ｍの楕円形状に石器群の分布が認められた。使用石材は90％弱が黒曜石で占められており、それを補完するようにチャート・メノウで構成されていた。また、11のチャート製の剥片は第７－３地点出土の二次加工剥片（５）と同質で地点間の関連性を示唆するものと考えられた。



第87図　第７－１～３地点出土石器分布図

出土石器群　成品としての石器は尖頭器と彫器だけであり、他に二次加工を施した剥片が加わる。一方、剥片・砕片類についてみると、出土総数84点のうち長さ１ｃｍにも満たない砕片が69点と大きな割合を占めている。さらに剥片では石器製作途中に剥離されたと考えられるものが数点みられた。このことから砕片の大半は石器製作の最終段階で剥離されたものであろう。つまり本地点は、剥片・砕片類の出土量から尖頭器等の石器製作をおこなっていたということがよく理解できる場所といえる。

尖頭器（８）　尖頭器の下部が約1/4程度遺存したものである。おそらく製作途中で破損し廃棄されたものであろう。表面では下部に若干の自然面が認められるが、側縁から中心部に向かってきれいな剥離を施している。このことも制作中であったことを示しているように考えられる。また裏面の打点部では整形のための剥離により基部の形がほぼ整えられている。

彫器（３）　横長剥片の打点部から下方向に折断して石器素材としたものである。表面の一部には自然面を残す。刃部は上方から２回以上加撃して彫器面を作出している。周囲での整形は認められず、比較的簡素な作りといえよう。

二次加工剥片（14）　断面三角の大型剥片を素材としたものである。表面中央部が一段と盛り上がった頑強な剥片で表裏面の一部に小さな剥離が施されている。また、使用を物語る刃こぼれ痕も観察できるため削器様の石器として使用していたものと考えられる。なお、左側の突出した部分は錐としての使用も可能と思われるが、明確な加工は認められない。

剥片（１・２・４～７・９～13）　１は縦長剥片で表面には自然面を残す。左下端には断面三角の錐状の加工とも思える痕跡を認めるが、剥離面は新しいため調査時に付されたものと判断した。２は折れた剥片の下半部で自然面を多く残す。４～７は、いわゆるトゥールチップスであり、いずれも表面には押圧剥離が施されている。裏面での剥離は認められないため整形時の剥片となろう。また５・７には明確な調整痕がみられるため石器として使用されていた可能性も否定できない。９～11は折断された剥片であるが、特に使用の痕跡は認められない。12は大きな剥片を数点に分割したものであろう。２点の接合例で意識的に折断していることがよく理解できる。表面は節理面となっており凹凸が著しく鉄分を含有する層で覆われている。上部面は右から左へ剥離されており、彫器の可能性も考えられる。13の色調は乳白色を呈しており、表面の一部には石英の微粒子が認められる。下部は折断されており、右側縁に小さな剥離を認めることができるが使用の痕跡はみられない。この他に砕片と分類した黒曜石にはトゥールチップスが多数みられた。ほとんどが５ｍｍから１ｃｍ程度の大きさであったため両面加工の尖頭器から剥離されたものと断定することはできなかった。

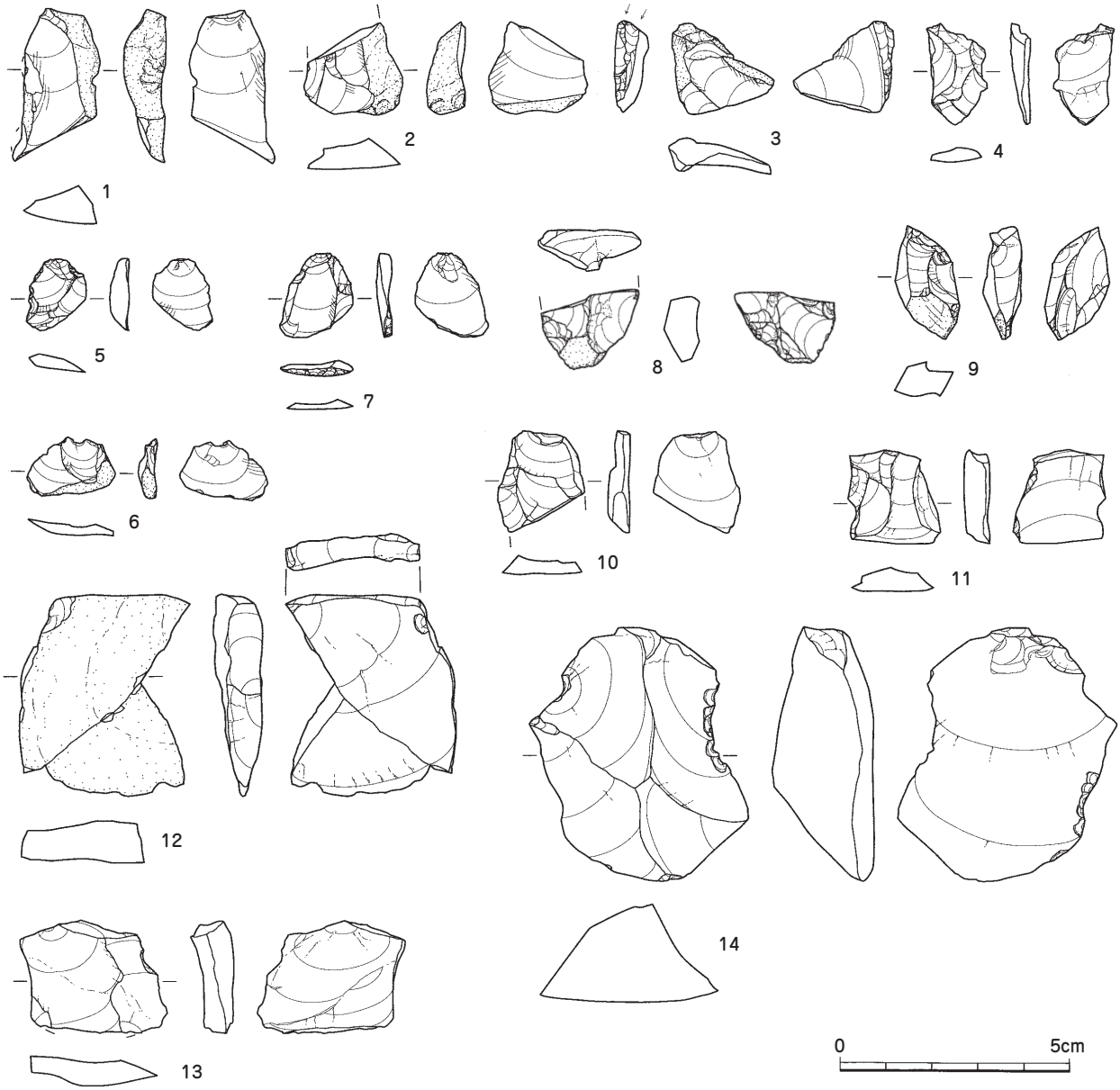
石材・機種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石74点　チャート８点　メノウ２点

器種　尖頭器１点　彫器１点　二次加工剥片１点　剥片12点　砕片69点　計84点

第31表　第７－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	J10－64	37	26.912	剥片	黒曜石	3.48	1.68	0.80	3.78		
2	J10－65	4	26.787	剥片	黒曜石	2.00	2.15	0.80	3.08		
3	J10－55	5	26.712	彫器	黒曜石	2.30	2.02	0.60	1.89		
4	J10－64	23	26.987	剥片	黒曜石	2.20	1.30	0.40	1.15		
5	J10－64	21	26.822	剥片	黒曜石	1.70	1.25	0.30	0.47		
6	J10－64	70	25.695	剥片	黒曜石	1.25	1.90	0.30	0.62		



第88図　第７－１地点出土石器

7	J 10－64	10	26.707	剥片	黒曜石	1.90	1.50	0.28	0.71		
8	J 10－64	35	27.010	尖頭器	黒曜石	1.60	2.20	0.90	2.37		上部欠失
9	J 10－64	32	26.880	剥片	黒曜石	1.62	1.70	0.75	2.38		
10	J 10－54	4	26.928	剥片	チャート	2.30	1.90	0.50	1.58		
11	J 10－65	6	26.672	剥片	チャート	2.10	2.00	0.53	2.93		
12	J 10－64	41	26.777	剥片	チャート	5.10	3.90	0.80	18.23	接１	
	J 10－64	43	26.928	剥片	チャート						
13	J 10－55	8	27.242	剥片	メノウ	2.60	3.00	0.70	6.32		
14	J 10－64	51	27.027	二次加工	メノウ	5.75	4.20	2.30	43.91		

（２）第７－２地点（第87図・第89図、図版７・41）

概要　本地点で出土した石器群は、Ｊ10－76・86グリッドに集中し、その分布範囲は南北に６ｍ、東西に４ｍとなり概ね楕円形を呈していた。石材についてみると、前述地点と同様に透明度の高い黒曜石を中心とし、それを黒色安山岩・チャートで補完するような構成となっていた。

出土石器群　石器群についてみると、定型石器といえるものの出土は皆無で石器製作に伴い廃棄された剥片・砕片類が圧倒的に多い。いわゆるトゥールチップスといえる廃棄片であり、この点も共通した性格の地点として捉えることができよう。

礫群　礫は若干出土したが、礫群を構成しているといったほどのものではなかった。

二次加工剥片（１・２）　１は３点が接合したもので隣接するグリッドから出土した。整形剥離によって剥離された砕片が表面に接合した例である。おそらく砕片を剥離した後に折断し、上半部の剥片に再度小さな剥離で二次加工を施している。削器様の石器として使用されたものであろう。また本剥片の形状からは尖頭器の製作を意識したようにも思われる。２は打面調整による剥片と考えられるが、裏面左側縁には整形のための若干の剥離と使用による微細な刃こぼれ痕がみられる。

剥片（３～10・12～16）　３は隣接したグリッドから出土したもので、左側面に小石の付着がみられる唯一の例である。石材の黒曜石は半透明で良質といえる。４・５はともに使用の痕跡を残す。６は、表面に下方向からの押圧剥離面がきれいに並ぶ。一方、上からの剥離もみられるため尖頭器の製作途上で剥離された剥片と見做される。７は平坦面から剥片が剥離されており、残核の一部とも考えられる。８・13・14・15は表面の剥離痕及び僅かに内弯した裏面からトゥールチップスといえよう。この他にも小さな砕片類の中にはこの種の廃棄片が多数存在していた。このことから本地点では、黒曜石等を使用した石器製作が行われていたことは確実となろう。

石核（11・17）　11は、通称トロトロ石と呼称されるデイサイトの残核で、打面の調整とともに周囲から剥片の剥取がおこなわれている。この石材の剥片は本地点の他に７－３地点でも出土している。17は拳大よりもやや小さめな礫を母岩として採用したもので、半割した後に剥片を剥ぎ取っている。このため、ここでは２点の石核と数えた。なお、15・16は17から剥取された剥片である。

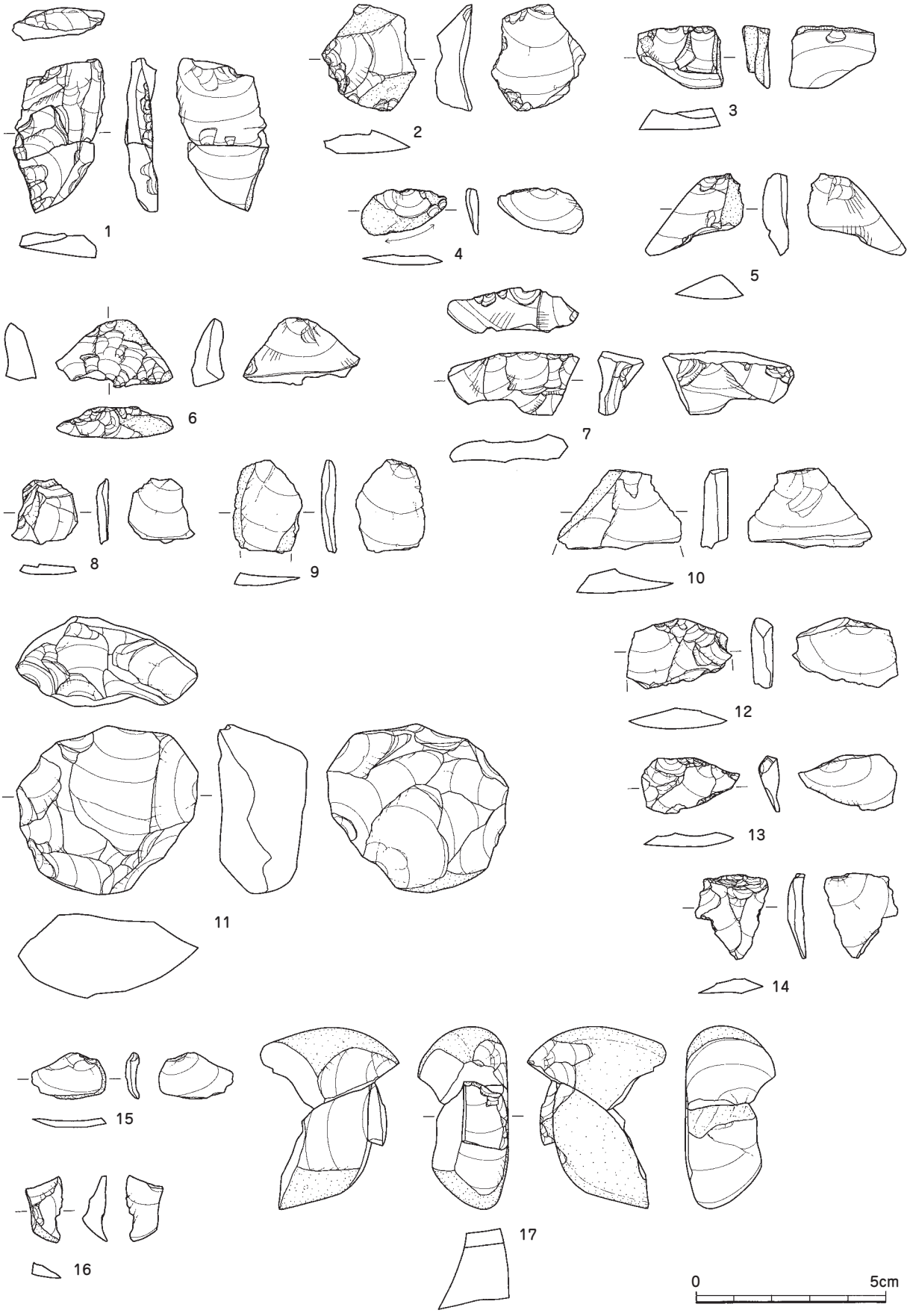
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石63点　黒色安山岩14点　ホルンフェルス２点　チャート13点　デイサイト４点　凝灰岩７点　焼礫２点

器種　二次加工剥片２点　剥片20点　砕片78点　石核３点　礫２点　計105点

第32表　第７－２地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	J10－76	17	25.755	二次加工	黒曜石	3.90	2.40	0.63	6.00	接２	尖頭器未成品
	J10－86	29	25.660	二次加工	黒曜石						
	J10－86	38	25.417	砕片	黒曜石	1.60	1.15	0.30	0.42		
2	J10－76	1	25.785	二次加工	黒曜石	2.90	2.25	0.72	5.14		
3	J10－76	29	25.470	剥片	黒曜石	1.70	2.20	0.60	2.19	接４	上端欠
	J10－86	55	25.559	砕片	黒曜石	1.27	1.10	0.42	0.45		
4	J10－76	6	25.595	砕片	黒曜石	0.70	1.30	0.30	0.22		
5	J10－76	34	25.512	剥片	黒曜石	1.85	2.30	0.62	1.97		
6	J10－86	57	25.464	剥片	黒曜石	1.83	2.90	0.80	3.24		
7	J10－86	6	26.765	剥片	黒曜石	1.80	3.40	1.05	4.47		
8	J10－86	18	25.700	剥片	黒色安山岩	1.65	1.70	0.32	0.85		
9	J10－86	21	25.660	剥片	黒色安山岩	2.55	1.80	0.37	1.75		
10	J10－86	25	25.650	剥片	黒色安山岩	2.20	3.30	0.63	4.13		
11	J10－76	19	25.615	石核	デイサイト	4.56	4.71	2.34	51.16		
12	J10－86	22	25.690	剥片	黒色安山岩	1.85	2.75	0.53	3.04		



第89図　第７－２地点出土石器

13	J10－76	10	25.610	剥片	チャート	1.63	2.30	0.50	1.49		
14	J10－76	16	25.765	剥片	チャート	2.30	1.75	0.40	1.21		
15	J10－86	13	25.758	剥片	凝灰岩	1.30	1.80	0.20	0.39		
16	J10－86	33	25.662	剥片	凝灰岩	1.70	1.00	0.40	0.47		
17	J10－76	12	25.780	石核	凝灰岩	3.90	4.50	2.35	34.46	接３	
	J10－86	51	25.347	石核片	凝灰岩	4.06	2.00	1.87			
	J10－86	37	25.412	剥片	凝灰岩	1.70	1.30	0.40			

（３）第７－３地点（第87図・第90図、図版41）

概要　本地点はＪ９－05・06グリッドにおいて、集中ではなく散布するといったような形で石器が出土したため７－１・２地点との関連で整理作業の手順として設定したものである。また使用されている石材も７－１・２地点と共通点が認められるため、これらは一連の石器群として捉えることができるものと考えられる。

出土石器群　合計35点と出土数は少なく、定型石器では片面加工の尖頭器が１点出土し、他には二次加工剥片と使用痕の認められる剥片などが出土している。

尖頭器（１）　欠損品であるが、下半部は５ｍほど離れた７－２地点から出土している。表面には自然面がみられる。石刃状の薄い剥片を素材にしており、表面の側縁にのみ刃潰し状の加工を加えている。下部の折れ面では僅かに風化が認められるため使用時に生じたものと思われる。

二次加工剥片（５）　分厚い縦長の剥片で、裏面には数回の整形剥離が施されている。下部右側縁には使用の痕跡が認められる。

剥片（２～４・６～11）　２は下端に使用の痕跡があり、３・４・６はトゥールチップスとなろう。７～10は風化しやすい石材で使用の痕跡等は観察できない。11は砂岩製の大型剥片で下端周辺に刃こぼれ状の僅かな凹凸が認められるところから削器のように使用されていたようである。

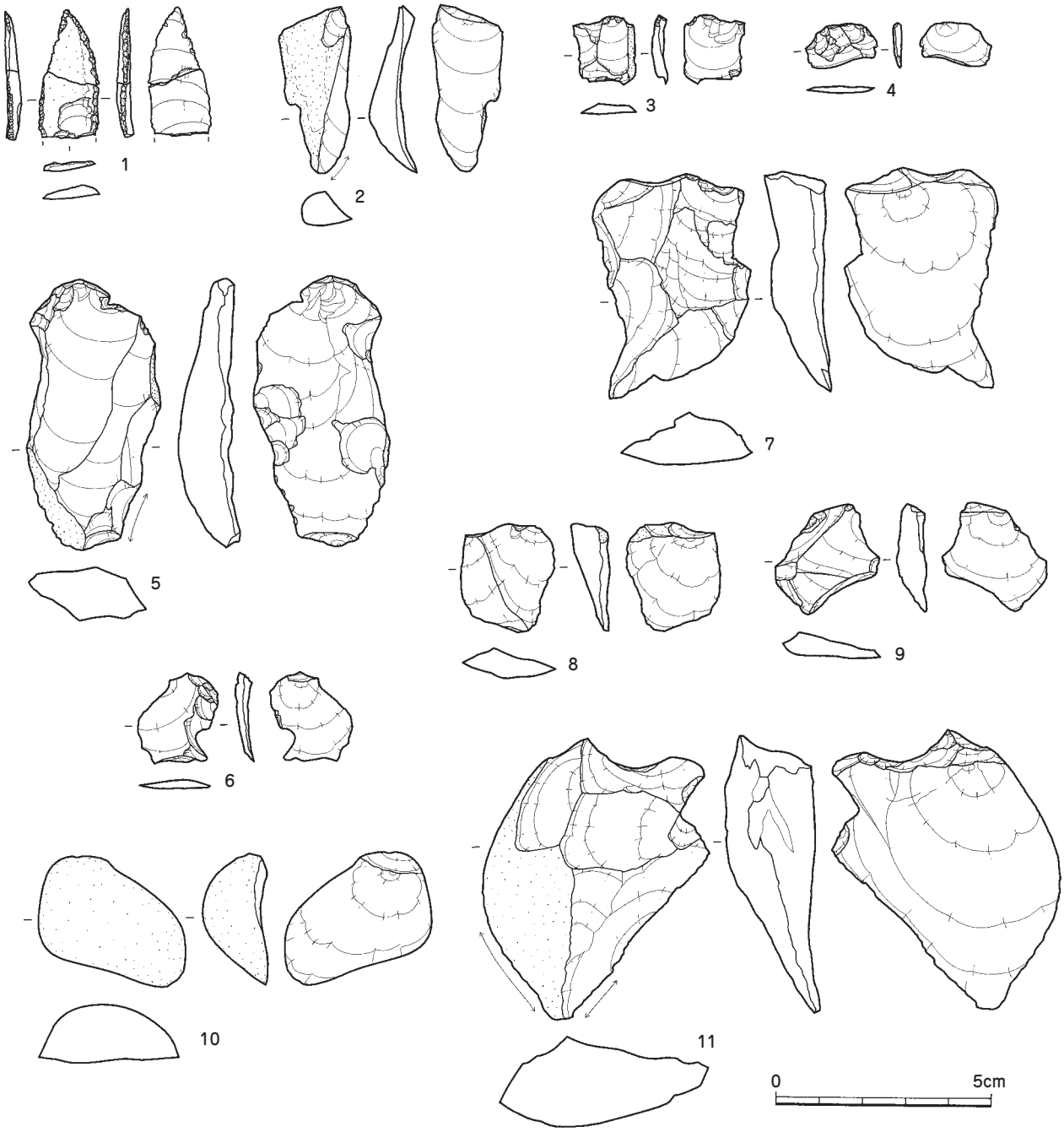
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石15点　黒色安山岩２点　チャート11点　デイサイト６点　砂岩１点

器種　尖頭器２（１）点　二次加工剥片１点　剥片11点　砕片21点　計35点

第33表　第７－３地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｊ９－07	1	25.480	尖頭器	黒曜石	3.05	1.25	0.25	1.13	接５	
	J10－96	1	25.614	尖頭器	黒曜石						
2	Ｊ９－05	10	25.335	剥片	黒曜石	3.80	1.60	0.73	3.29		
3	Ｊ９－05	12	25.515	剥片	黒曜石	1.62	1.30	0.27	0.52		下端欠
4	Ｊ９－05	1	25.337	砕片	黒曜石	0.95	1.60	0.23	0.26		
5	Ｊ９－06	6	25.413	二次加工	チャート	6.30	3.00	1.20	24.75		
6	J10－84	4	25.801	剥片	チャート	2.25	1.70	0.33	0.92		
7	J10－84	2	25.623	剥片	黒色安山岩	5.40	3.25	1.30	20.91		
8	Ｊ９－06	8	25.374	剥片	黒色安山岩	2.52	2.15	0.70	3.56		
9	Ｊ９－06	3	25.505	剥片	デイサイト	2.33	2.40	0.50	1.90		
10	Ｊ９－06	9	25.505	剥片	デイサイト	3.00	3.40	1.40	13.73		
11	Ｊ９－06	10	25.455	剥片	砂岩	6.70	4.70	2.20	51.34		



第90図　第７－３地点出土石器

第９節　第８地点（第91図・第92図、図版41）

概要　本地点は第７地点の南に位置し、Ｊ９－73・83グリッドを中心として石器群が出土したものである。Ｊ９区は東から入り込む谷津の谷頭にあたり、石器の出土層位は第７地点とほぼ同様であったが、標高は約22mで一段と低くなっている。しかも低地部分に土砂を移動させており撹乱部分が多くみられた。そのためＪ９－82グリッドでは正常な堆積土が一部で観察できたが、他のグリッドでは層序の記録ができなかったため図面での層序は省略した。また出土遺物間の高低差も最大80cm差を計測するのも土砂の移動に起因するものである。出土した石器の石材は安山岩系と凝灰岩を主体としており、黒曜石はみられなかった。このため第７地点と同時存在していたとは考えにくい。

出土石器群　ここでは定型的な石器は認められず、石核２点の他はすべて剥片・砕片類であった。また使用の痕跡を残す剥片もみられなかった。砕片類についても特定石器と結びつくような砕片の類はみられなかった。

剥片（１～３・６～13）　１は２と３が接合したもので隣接するグリッドから出土した。上下方向からの剥離が認められる。その形状から残核片とも考えられる。６・７は５と同様の石材であるが、色調が僅かに異なるため同一母岩と断定するには躊躇する。11～13はデイサイトの剥片で風化が著しい。これらも自然面が多く、比較的小さな礫を採用したものと思われる。ただ、11は側縁部に数回の剥離が認められるためナイフ形石器としての可能性も捨てきれない。

石核（４・５）　４は左右に自然面を残すところから小型の礫を石核としたものである。上下方向から剥離されており残核と考えてよいであろう。５も自然面の残存部から数cm程度の小礫を採用したものであろう。上下に平坦な打面部を設定し小剥片を剥離している。なお、周辺からは同質の砕片が数点みられた。

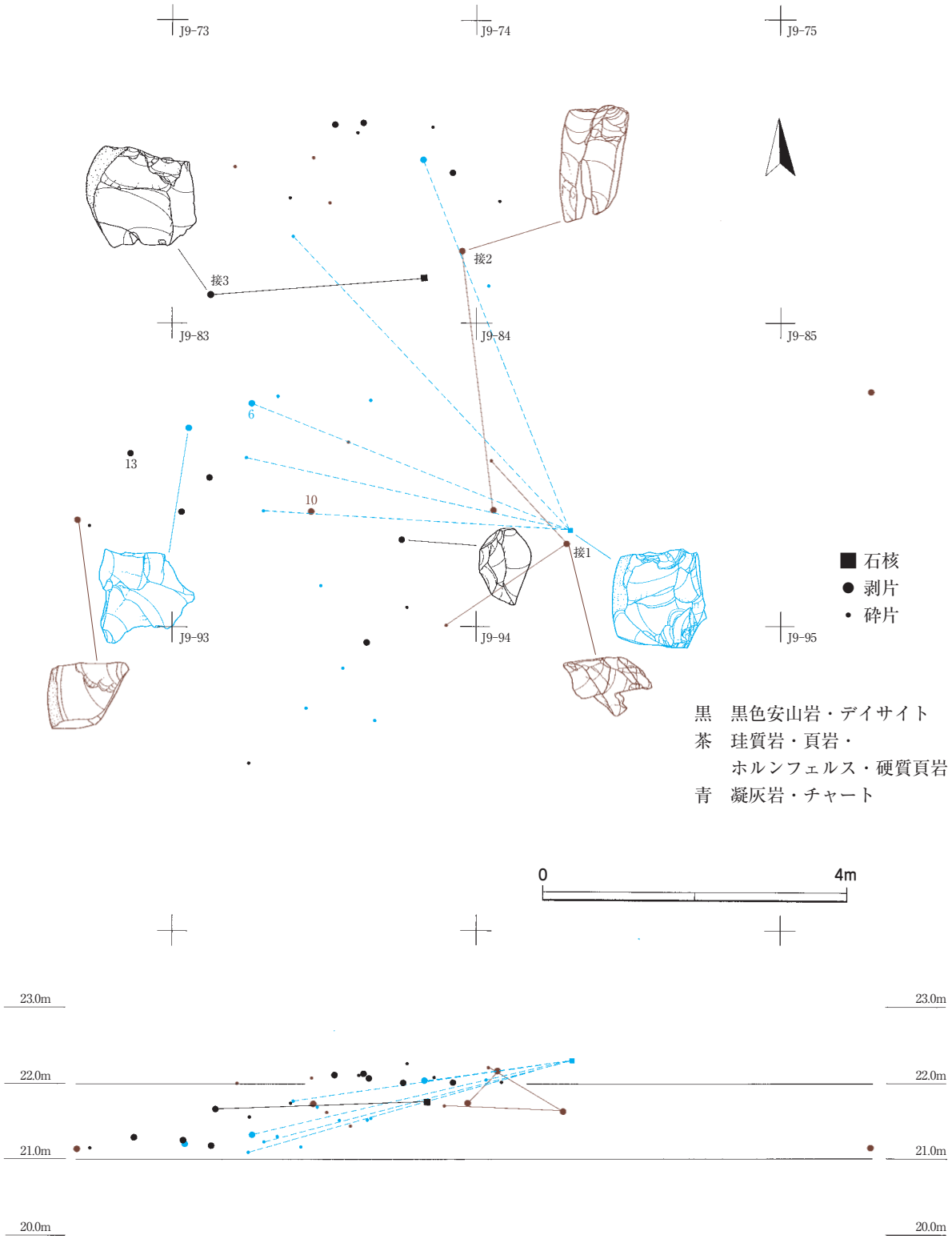
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　硬質頁岩２点　珪質岩６点　頁岩２点　黒色安山岩６点　デイサイト10点　凝灰岩14点　ホルンフェルス２点　チャート１点

器種　剥片19点　砕片22点　石核２点　計43点

第34表　第８地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1											被熱
（2）	Ｊ９－73	10	21.751	剥片	ホルンフェルス	3.80	1.90	0.94	5.75	接２	
（3）	Ｊ９－84	1	22.198	剥片	ホルンフェルス	3.62	2.13	1.36	13.64		
4	Ｊ９－73	11	21.711	石核	黒色安山岩	3.80	3.60	1.40	24.20	接３	
	Ｊ９－73	15	22.071	剥片	黒色安山岩	2.25	2.03	0.55	1.77		
5	Ｊ９－84	4	22.291	石核	凝灰岩	3.20	3.30	3.32	43.71		円礫素材
6	Ｊ９－83	4	21.361	剥片	凝灰岩	3.70	2.40	0.70	4.99		
7	Ｊ９－83	8	21.461	剥片	凝灰岩	3.12	2.80	1.07	7.09		
8	Ｊ９－82	1	21.196	剥片	硬質頁岩	2.30	2.20	0.80	6.32		
9	Ｊ９－83	13	21.796	砕片	珪質岩	2.10	1.50	0.40	0.95	接１	
	Ｊ９－84	2	22.286	砕片	珪質岩	1.30	1.55	0.55	1.01		
	Ｊ９－84	5	21.730	剥片	珪質岩	1.25	2.10	0.60	1.77		下端欠
10	Ｊ９－83	10	21.754	剥片	頁岩	2.23	1.70	0.40	1.94		
11	Ｊ９－83	11	21.951	剥片	デイサイト	2.60	1.80	0.80	2.84		ナイフの可能性あり
12	Ｊ９－83	9	21.196	剥片	デイサイト	3.10	2.07	1.00	6.62		
13	Ｊ９－82	3	21.216	剥片	デイサイト	2.45	3.40	0.70	4.31		



第91図　第８地点出土石器分布図

第92図　第８地点出土石器

第10節　第９地点

本地点は、Ｋ５区において確認調査を実施したところ、第Ⅶ層から第Ⅸ層にかけて数か所で石器群の出土が確認された。その後、出土グリッド周辺を随時拡張しつつ調査を継続した結果、出土範囲はＫ４区、Ｌ４・５区にまで及び、その広さは東西65m、南北60mに達することとなった。石器の集中地点は10か所で認められ、その中心的位置を占める９－７地点と９－９地点に付随するかのごとく相次いで各所に石器が発見された。そして、これらの石器群は整理作業が進捗するにつれ各地点間での接合関係が確認できるようになり、ほぼ同時期に当時の人びとの活動によって残されたものと判明した。結果的には図示（第４図）したように石器群の分布は円形となり、この時期にしばしばみられる環状石器群を構成していた。以下、地点別に記述していくこととする。

（１）第９－１地点（第93図・第94図、図版42）

概要　本石器群はＬ５－16・25グリッドで17点が出土したものである。その規模は小さく、石材も黒色安山岩のみによって構成されていた。なお、散発的に隣接グリッドで出土している黒曜石は第９－４Ｂ地点として記述した。

出土石器群　石器についてみると、剥片主体となり石核が１点みられた。成品は皆無で、使用の痕跡を示す剥片すらみられなかった。なお剥片は７を除き、すべてに自然面がみられるため母岩となった礫は比較的小さなものと思われた。

剥片（２～７）　２～４は小型の剥片で、剥離の方向は一定していない。５の表面は自然面で、裏面は平坦な主剥離面となる。打面設定を目的に剥離されたものとなろう。６は縦長の分厚い剥片であり、石器素材としては十分と思われるが、なんら加工の痕跡は認められない。７も十分素材としての形状を保つものである。

石核（１）　残核に２点が接合したものである。図示した表面も打面となっており、周囲から打面調整を施しつつ剥片を剥取したようである。表皮部分が多くみられるため母岩は小さく、良好な剥片は得られていないであろう。

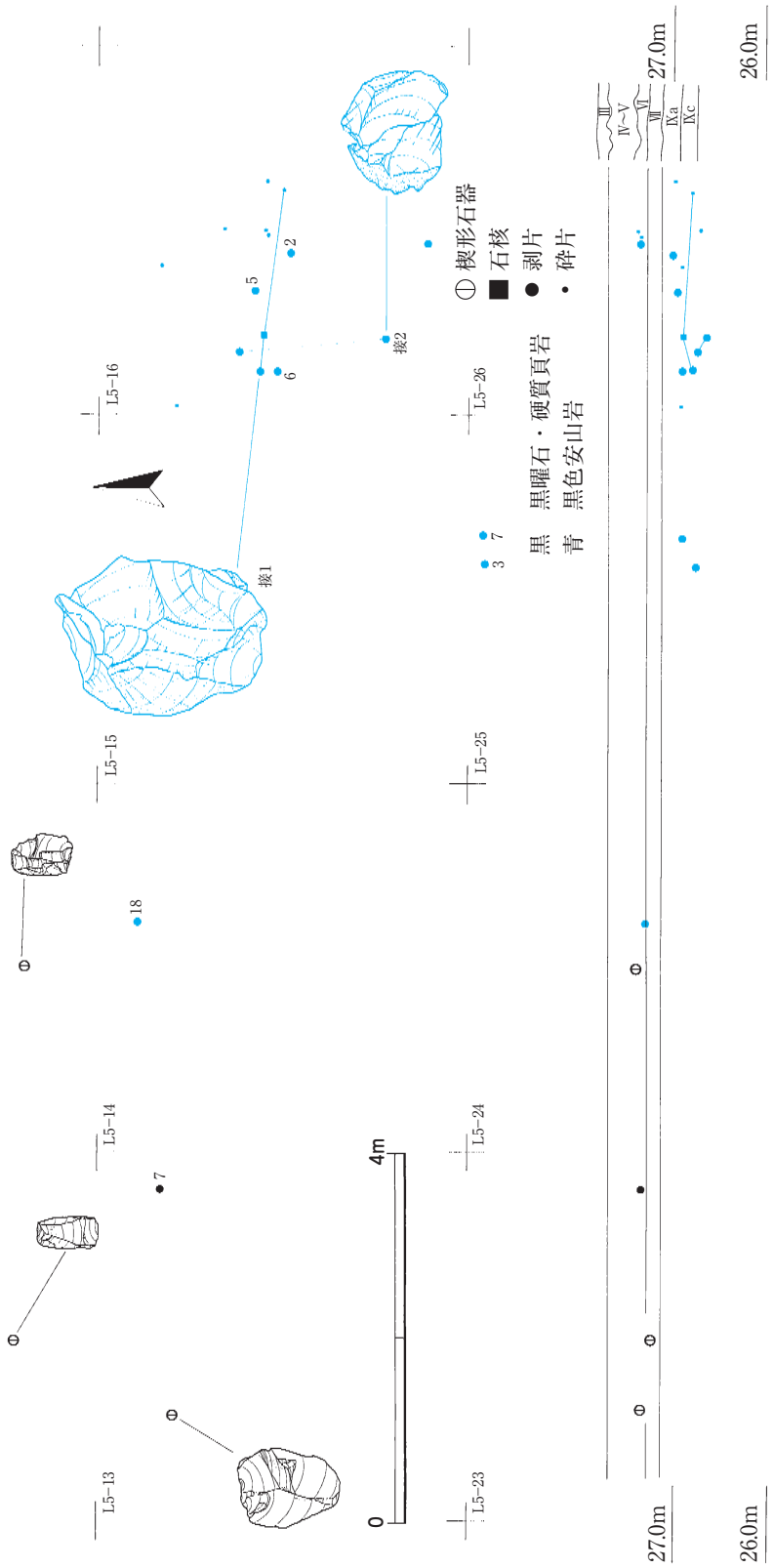
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩17点

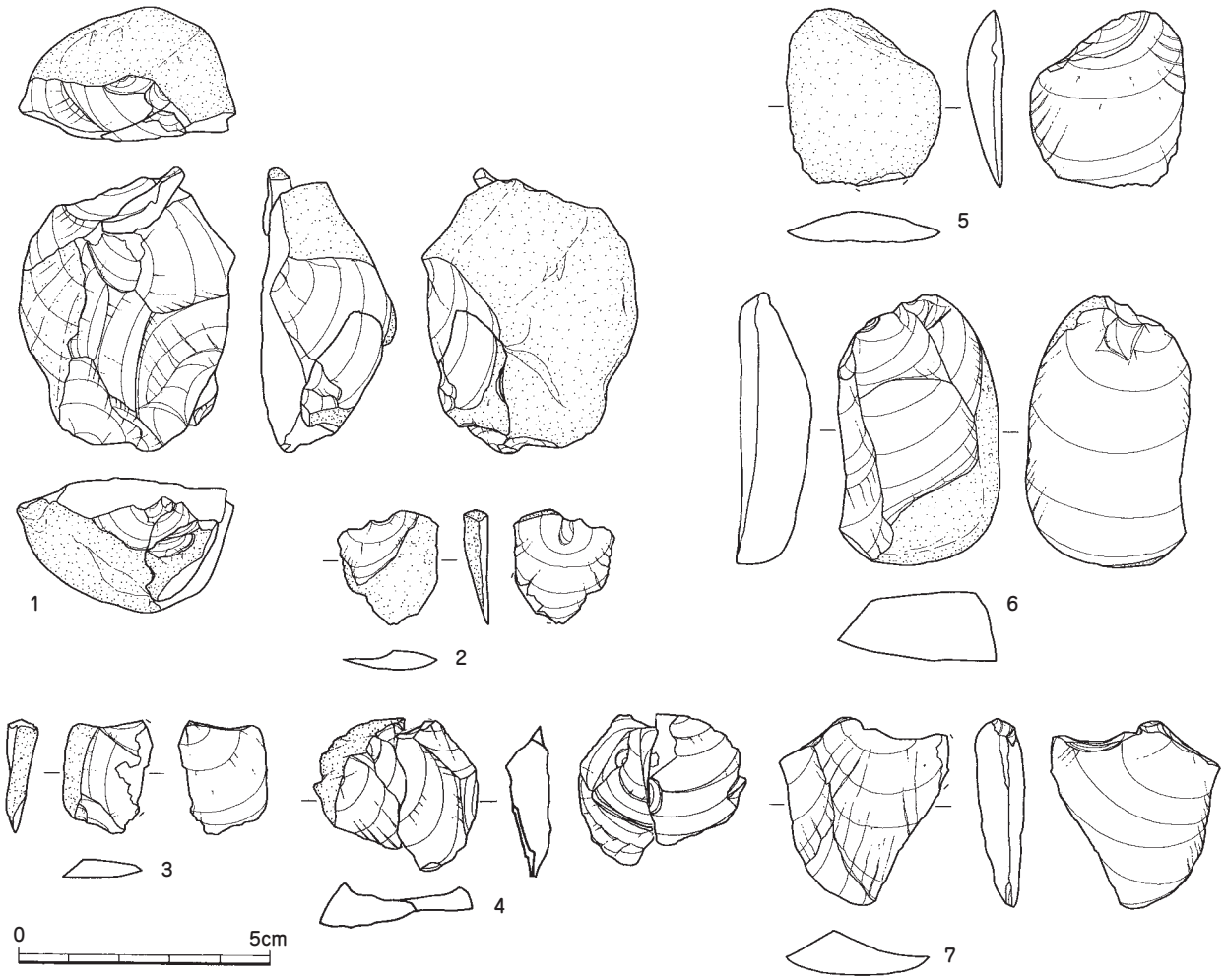
器種　剥片９点　砕片７点　石核１点　計17点

第35表　第９－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｌ５－16	10	26.919	石核	黒色安山岩	2.80	5.20	2.60	66.02	接１	円礫素材
	Ｌ５－16	12	26.823	砕片	黒色安山岩	1.93	0.70	0.40	0.45		
	Ｌ５－16	16	26.789	剥片	黒色安山岩	2.62	1.70	0.57	2.53		
2	Ｌ５－16	4	27.011	剥片	黒色安山岩	2.25	2.05	0.50	1.78		
3	Ｌ５－25	2	26.798	剥片	黒色安山岩	2.30	1.70	0.55	2.21		
4	Ｌ５－16	6	26.980	剥片	黒色安山岩	3.25	2.60	0.73	8.34	接２	
	Ｌ５－16	15	26.696	剥片	黒色安山岩	2.90	1.65	0.80	3.46		
5	Ｌ５－16	5	26.980	剥片	黒色安山岩	3.25	2.60	0.73	8.34		
6	Ｌ５－16	7	26.924	剥片	黒色安山岩	5.40	3.20	1.40	33.60		
7	Ｌ５－25	1	26.930	剥片	黒色安山岩	3.50	3.65	0.90	9.93		



第93図　第９－１地点出土石器分布図



第94図　第９－１地点出土石器

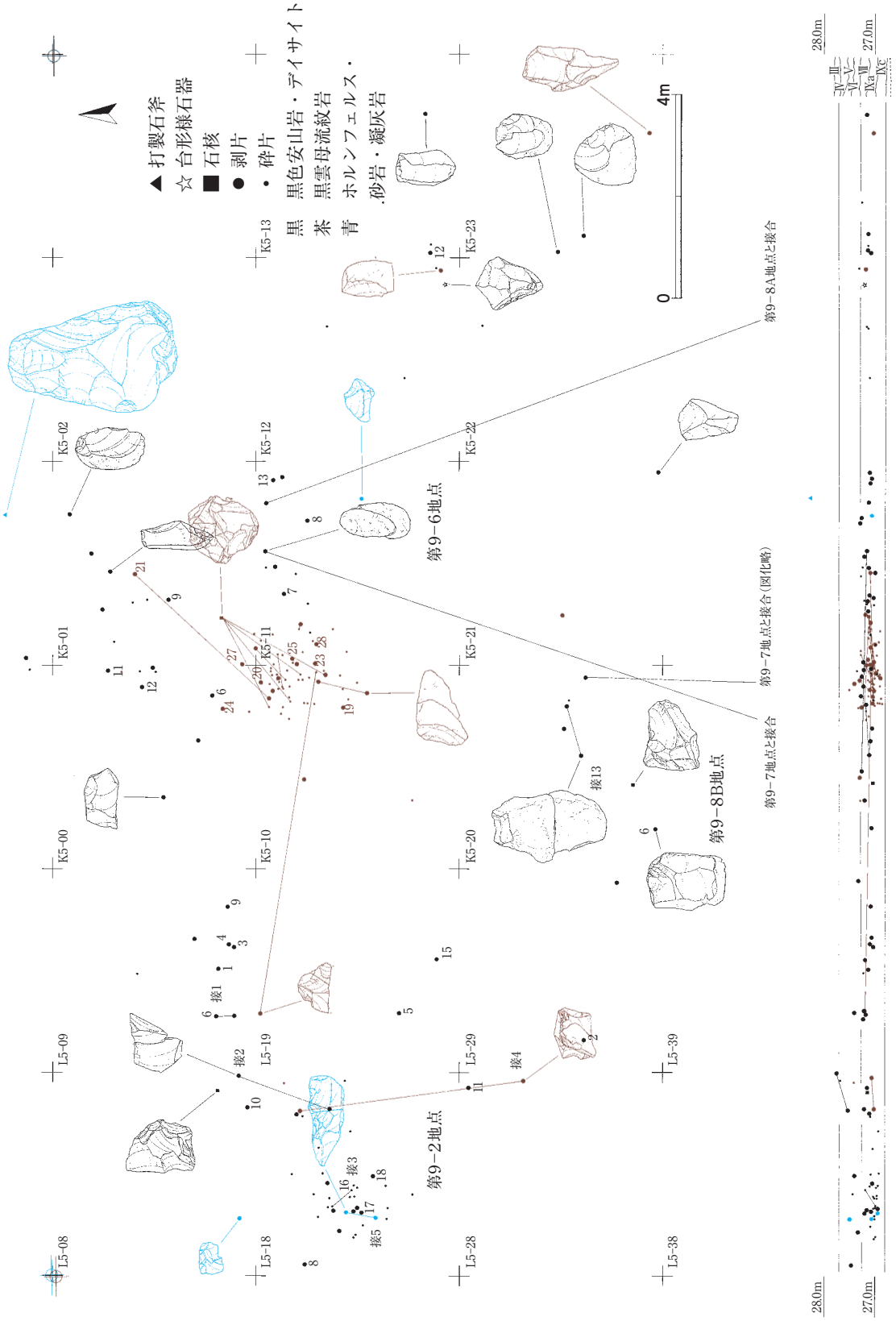
（２）第９－２地点（第95図～第97図、図版42）

概要　本地点はＬ５－18グリッドを中心として、隣接する同08・19・28・29の各グリッドおいて出土した石器群を一括した。しかし隣接するグリッドでの石器は希薄な分布であった。接合資料についてみると、約10m東の第９－６地点との接合関係が確認されている。ここで採用されている石材の主体は黒色安山岩となり、これにホルンフェルスと黒雲母流紋岩・デイサイトが若干加わる。後述するようにホルンフェルスは石斧製作の材料であったものと考えられる。この点、第９－６地点では砂岩製の打製石斧が出土し、黒雲母流紋岩が出土した石器の主体を占めていた。

出土石器群　ここでは定型石器の出土は皆無であった。しかし、剥片の中には大型品や形の整ったもの、接合した剥片が認められた。このため、本地点は石器の製作というよりも素材との結び付きが強いように思われる。また石斧材の出土についても興味の惹かれる点である。

石核（14）　その形状から石核の一部と思われる。右側面では剥片剥離の痕跡とも考えられる大きな剥離面が残る。微細な剥離も加えているところから石器製作の意図も読みとれる。おそらく掻器のような石器としても使用されたであろう。

剥片（１～13・15～19）　１の主剥離面は平坦できれいに打割されている。打面設定時の剥片となろう。



第95図　第９－２・６・8B地点出土石器分布図

２は縦長の剥片で斜方向からの剥離痕もみられる。素材としては十分な形状を保持しているが、加工は認められない。６は意図的に折断されたものであり、10・11とともに石器素材となりうる剥片と思われるが、使用の痕跡等はみられない。12は同一グリッドから出土した２点が接合した例で、表面では整形剥離が整然と施されている状態が観察できる。裏面は主剥離面のみで整形の痕跡は認められない。表面の剥離からみると、いわゆるトゥールチップスの類となろうが、石材から推測すれば石斧の製作途上で剥離された剥片か、あるいは破損品の再加工剥片とも思われる。13も前者と同様の石材であり、ここでも表面に平坦な剥離が数回施されている。これも石斧類に関わる剥片といえよう。19は隣接するグリッドから出土した剥片２点が接合したもので、石材は黒雲母流紋岩である。産地は磐城とされる（注）。この種の石材は第９地点の各所で数点ずつ出土している。後述する第９－６・７地点での出土量は多く、他の石材を凌ぐ量が出している。色調は淡い褐色味を帯びた白色で雲母の他に石英が混入している。こうした特徴的な石材は各地点間での関わりを示す好資料ともいえよう。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩47点　デイサイト１点　ホルンフェルス３点　黒雲母流紋岩３点

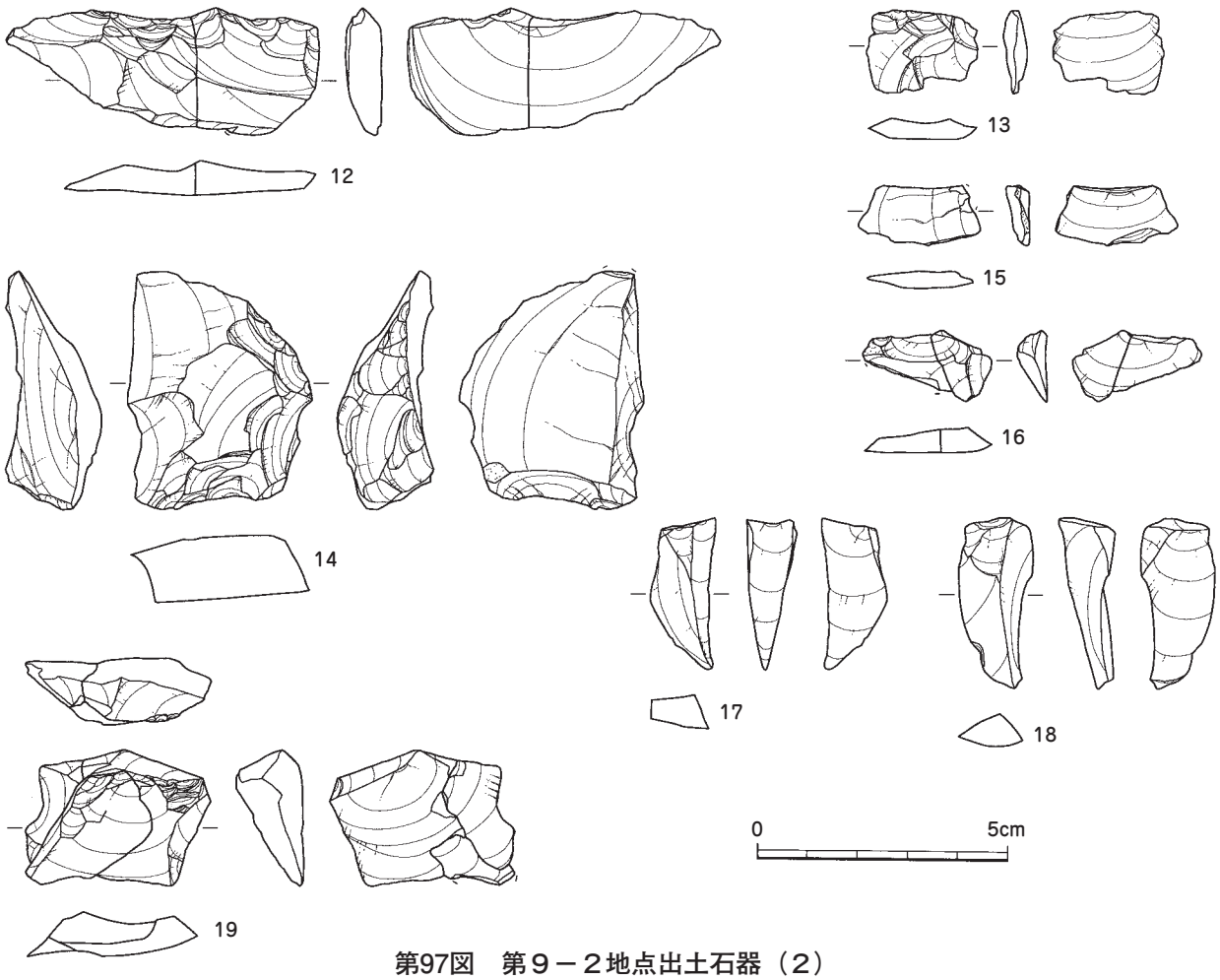
器種　石核１点　剥片30点　砕片23点　計54点

第36表　第９－２地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	L５－09	1	27.046	剥片	黒色安山岩	6.80	4.85	2.20	85.71		
2	L５－29	2	27.167	剥片	黒色安山岩	6.20	3.25	1.40	29.27		
3	L５－09	8	26.978	剥片	黒色安山岩	1.60	2.55	0.25	1.12		
4	L５－09	6	27.006	剥片	黒色安山岩	2.65	3.47	0.80	6.12		
5	L５－19	2	27.351	剥片	黒色安山岩	2.40	3.50	0.53	4.91		
6	L５－09	2	27.120	剥片	黒色安山岩	5.52	4.70	0.80	15.64	接１	
	L５－09	3	27.158		黒色安山岩						
7	L５－08	4	27.709	剥片	黒色安山岩	2.62	1.90	0.90	4.35	接２	
	L５－18	2	27.523	剥片	黒色安山岩	3.30	2.40	0.75	6.59		
8	L５－18	5	27.425	剥片	黒色安山岩	2.87	2.40	0.81	5.20		
9	L５－09	5	27.006	剥片	黒色安山岩	3.25	2.00	0.40	4.46		
10	L５－08	3	27.187	剥片	黒色安山岩	5.10	2.60	1.10	16.64		
11	L５－28	2	27.112	剥片	黒色安山岩	4.70	4.00	0.95	19.20		
12	L５－18	15	27.099	剥片	ホルンフェルス	6.35	2.40	0.70	10.22	接５	石斧材
	L５－18	18	26.935	剥片	ホルンフェルス						
13	L５－08	2	27.490	剥片	ホルンフェルス	1.70	2.20	0.40	1.63		石斧材
14	L５－08	1	27.111	石核(片)	黒色安山岩	5.70	4.70	1.75	34.18		二次加工
15	L５－19	1	27.136	剥片	黒色安山岩	1.23	2.40	0.33	1.08		
16	L５－18	9	27.130	砕片	黒色安山岩	1.70	1.10	0.47	0.72	接３	
	L５－18	37	26.910	砕片	黒色安山岩	1.60	0.90	0.45	0.67		
17	L５－18	8	27.146	剥片	黒色安山岩	3.10	1.20	0.85	3.13		半欠
18	L５－18	10	27.377	剥片	黒色安山岩	3.45	1.50	0.80	3.68		半欠
19	L５－28	1	27.140	剥片	黒雲母流紋岩	2.80	3.50	1.20	6.91	接４	
	L５－18	4	27.081	剥片	黒雲母流紋岩	2.90	1.77	0.41	2.04		

注　黒雲母流紋岩については、柴田徹氏、森嶋秀一氏の御教示による。

第96図　第９－２地点出土石器（１）



第97図　第９－２地点出土石器（２）

（３）第９－３地点（第98図・第99図、図版42）

概要　本地点での石器群の分布は小規模なものであった。Ｌ５－38・48グリッドが中心となり、出土点数も33点と少ない。出土石器間での高低差も40cm未満となる。石材も前述した地点と同様に黒色安山岩が主体を占めている。また、ここでも黒雲母流紋岩が１点みられた。

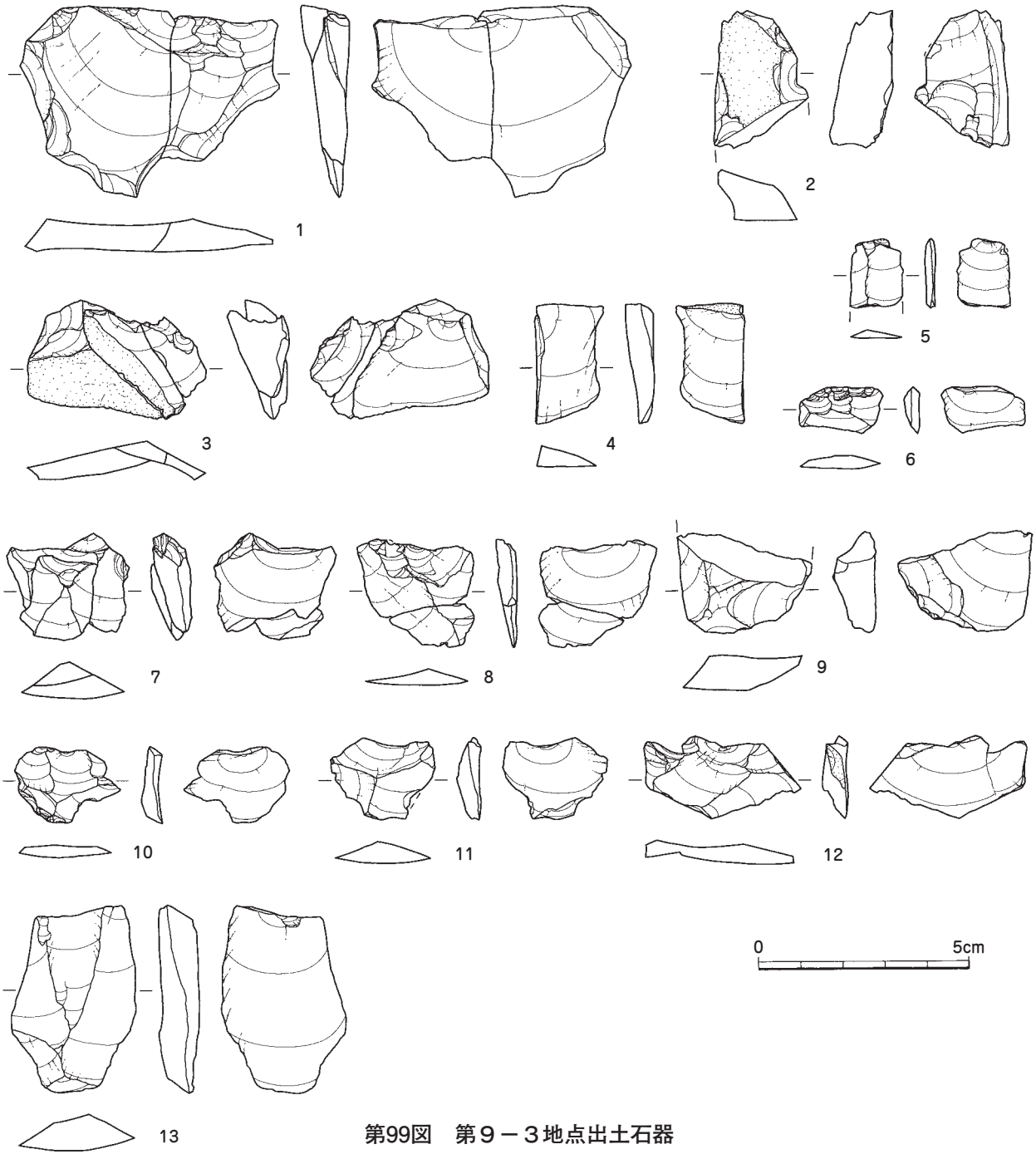
出土石器群　石器に加工されたものは存在せず、すべて剥片・砕片類で構成されていた。

剥片（１～13）　１は大型幅広の剥片で縦方向に折断されたものである。左側縁では２回の剥離がみられるが使用の痕跡は認められない。２も折断後、一部に剥離がみられるものの明確な加工は認められない。３は隣接するグリッドから出土した３点が接合したものである。６は横長の砕片で表面には小さな剥離痕が多数残されている。やや弯曲した形状からトゥールチップスとなろう。８・10の剥片も表面にみられる剥離痕から石器製作過程で剥離された剥片といえる。13は縦長の剥片で右側縁に若干使用痕らしき痕跡がみられるが判然としない。以上のように本地点では石器素材となるような剥片や整形剥離に伴う砕片の出土から本地点では石器製作の最終段階の工程が垣間みられる。

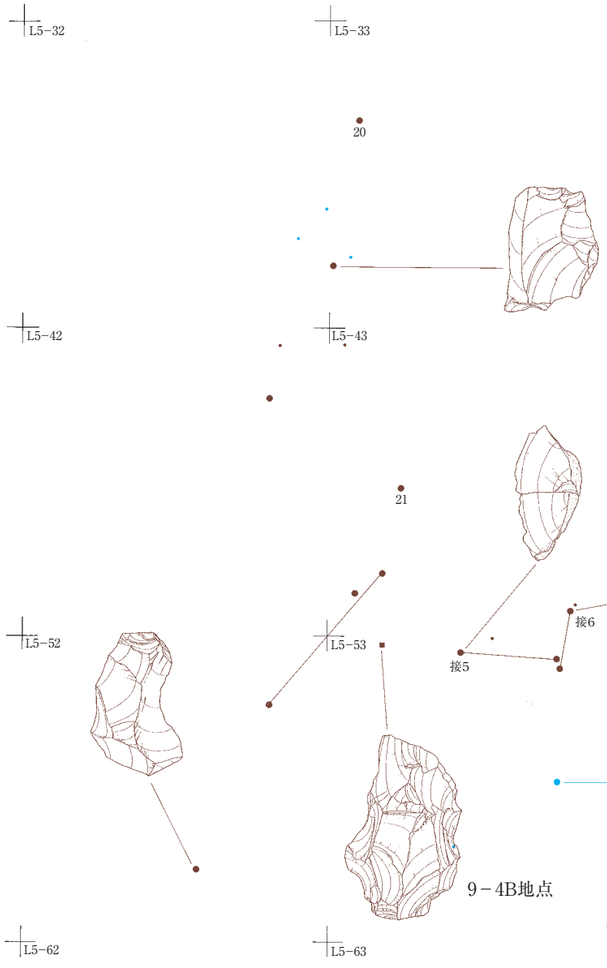
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

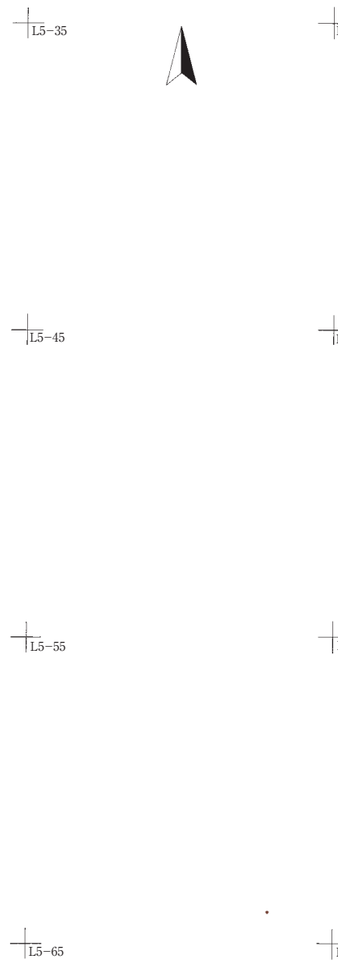
石材　黒色安山岩32点　黒雲母流紋岩１点

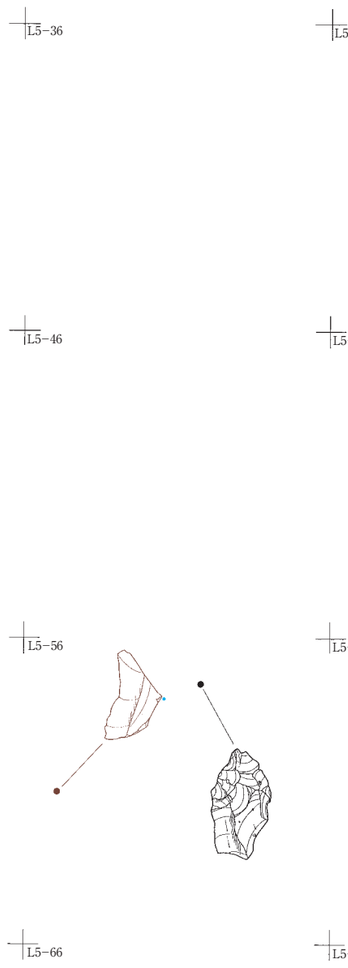
器種　剥片16点　砕片17点　計33点

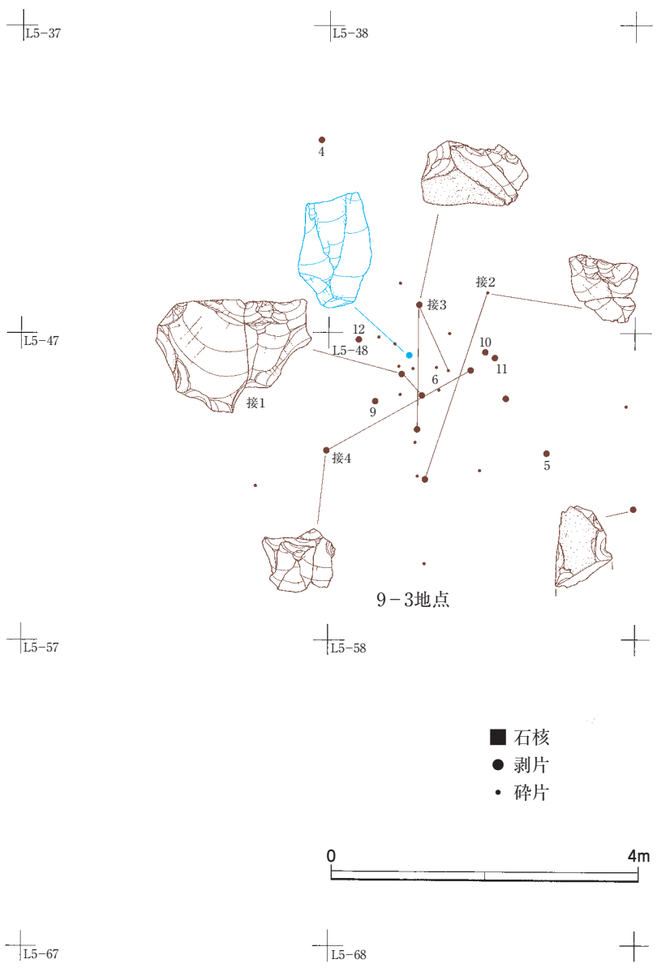


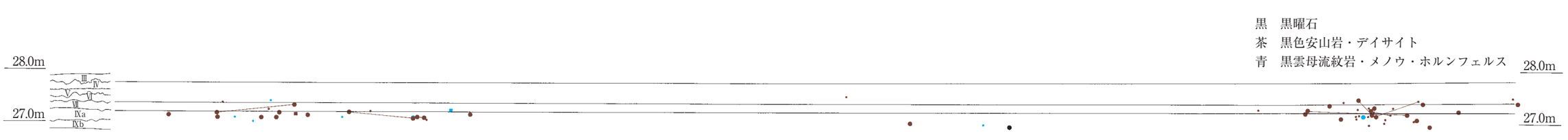
第99図　第９－３地点出土石器











第98図　第９－３・４Ｂ地点出土石器分布図

第37表　第９－３地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｌ５－48	6	27.373	剥片	黒色安山岩	4.53	6.00	0.87	22.54	接１	
	Ｌ５－48	22	27.083	剥片	黒色安山岩						
2	Ｌ５－48	16	27.312	剥片	黒色安山岩	3.35	2.25	1.15	8.45		側・下端欠
3	Ｌ５－38	2	27.132	剥片	黒色安山岩	2.85	3.30	0.70	5.62	接３	半欠
	Ｌ５－48	3	27.127	砕片	黒色安山岩	1.15	2.05	0.40	0.93		
	Ｌ５－48	10	27.176	剥片	黒色安山岩	1.30	3.05	0.45	1.55		上端欠
4	Ｌ５－37	1	27.199	剥片	黒色安山岩	2.90	1.67	0.60	3.19		半欠
5	Ｌ５－48	15	27.146	剥片	黒色安山岩	1.65	1.30	0.23	0.57		下端欠
6	Ｌ５－48	27	26.953	砕片	黒色安山岩	1.15	1.90	0.40	0.78		
7	Ｌ５－47	1	27.251	剥片	黒色安山岩	2.40	2.95	0.73	4.39	接４	
	Ｌ５－48	2	27.118	剥片	黒色安山岩	2.00	1.60	0.47	1.65		下端欠
8	Ｌ５－38	1	27.211	砕片	黒色安山岩	1.15	1.70	0.30	0.49	接２	
	Ｌ５－48	12	27.050	剥片	黒色安山岩	1.95	2.60	0.40	1.95		下端欠
9	Ｌ５－48	9	27.023	剥片	黒色安山岩	3.30	2.30	1.00	6.56		半欠
10	Ｌ５－48	18	26.990	剥片	黒色安山岩	1.80	1.40	0.47	1.70		
11	Ｌ５－48	1	27.312	剥片	黒色安山岩	2.00	2.52	0.55	2.22		
12	Ｌ５－48	8	27.285	剥片	黒色安山岩	2.00	3.70	0.53	3.68		
13	Ｌ５－48	19	27.118	剥片	黒雲母流紋岩	4.30	3.00	1.00	10.41		

（４）第９－４Ａ地点（第100図～第101図、図版43）

概要　本地点の石器群はＬ４－74・75・85グリッド等で出土したもの一括した。出土総数も34点と少ない。ここでも石材の中心は黒色安山岩主体の構成となっていた。なお、図化した一部（Ｌ５－82グリッド）は第９－４Ｂ地点としたものである。

出土石器群　定型石器としてはナイフ形石器が１点出土したが、他は剥片・砕片類で占められていた。とりわけ剥片類は石器素材に適する剥片が数点みられるもののほとんど使用された痕跡はみられない。

ナイフ形石器（１）　縦長剥片の基部に整形を兼ねた加工を施してナイフ形石器に仕上げている。裏面にも２・３回の剥離により一応の整形は施している。先端部だけから判別すると刺突具としては甚だ心許ない形状であり一見未成品のような感を呈する。

剥片（２～12）　２は石刃状剥片の下半部が折断されたものである。３・４も石器素材となり得る剥片であるが使用の痕跡はみられない。５は分厚い大型の剥片で右側縁上部に小さな剥離痕を残す。石器として使用されたものであろう。６は隣接するグリッドから出土した３点が接合したものである。石器素材としては良好な剥片といえるが使用の痕跡はみられない。10や12でも同様に使用の痕跡は認められない。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

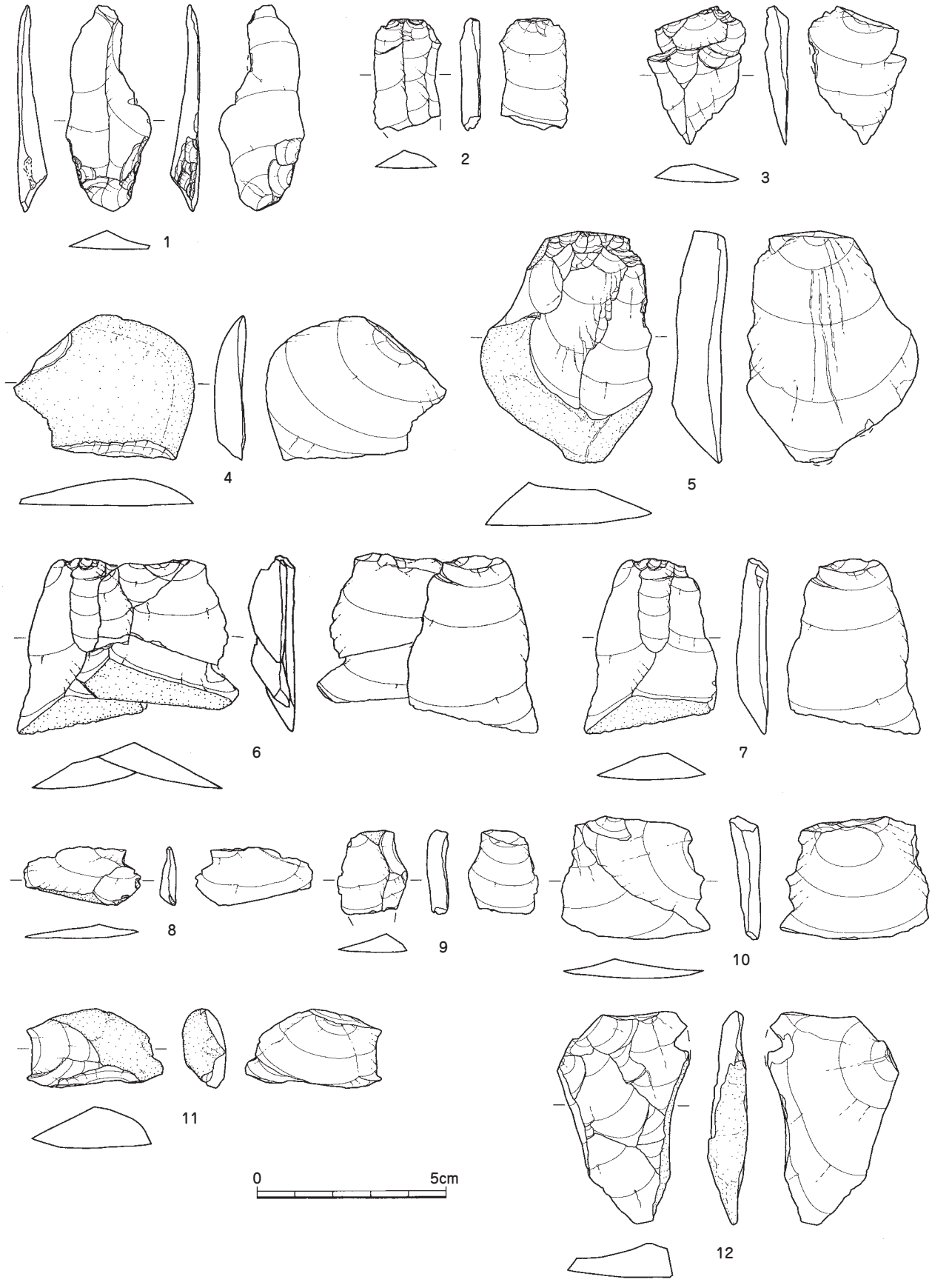
石材　チャート１点　黒色安山岩32点　黒雲母流紋岩１点

器種　ナイフ形石器１点　剥片14点　砕片19点　計34点

第38表　第９－４Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｌ５－75	11	26.850	ナイフ形石器	黒色安山岩	5.63	2.25	0.70	6.23		
2	Ｌ５－75	6	26.940	剥片	黒色安山岩	3.05	1.78	0.53	3.29		
3	Ｌ５－75	9	26.886	剥片	黒色安山岩	3.30	2.75	0.60	4.48		
4	Ｌ５－74	6	26.813	剥片	黒色安山岩	4.40	4.40	0.80	15.64		
5	Ｌ５－74	2	26.884	剥片	黒色安山岩	6.25	4.50	1.20	37.23		

第100図　第９－４Ａ地点出土石器分布図



第101図　第９－４Ａ地点出土石器

6	（7）	Ｌ５－74	7	26.804	剥片	黒色安山岩	4.75	3.30	0.85	12.87	接１	
		Ｌ５－75	8	26.886	剥片	黒色安山岩	4.10	4.00	0.80	14.87		
	（9）	Ｌ５－75	13	26.740	剥片	黒色安山岩	2.25	1.70	0.50	2.24		下端欠
8		Ｌ５－74	4	26.830	剥片	黒色安山岩	1.63	3.10	0.45	1.78		
10		Ｌ５－74	3	26.848	剥片	黒色安山岩	2.40	3.45	1.20	9.23		
11		Ｌ５－85	1	26.655	剥片	黒色安山岩	3.23	3.80	0.70	8.35		
12		Ｌ５－75	7	26.874	剥片	黒色安山岩	3.90	5.35	0.93	17.23		

（５）第９－４Ｂ地点（第98図・第102図～第104図、図版７・43）

概要　本地点の石器群は第９－４Ａ地点の北西に位置し、Ｌ５－43・53グリッドを中心として分布していたものであるが、その分布状況は集中地点としては捉えきれずＬ５－03・04グリッド、同79・89グリッドまで含めて一括したものである。このため分布域としては広大な範囲となっている。石材は黒色安山岩を主体に構成されており、他に黒曜石やメノウ・砂岩等などがみられた。ここでも主体となっている黒色安山岩を用いた成品は出土しておらず、剥片の大きさから石器素材として剥離された剥片が散乱しているような内容の地点と理解できた。一方、黒曜石や硬質頁岩は成品として存在するものの出土地点が大きく離れているため、黒色安山岩との関連を積極的に肯定するまでには至らない。つまり、単独的な出土を示しているように思われた。

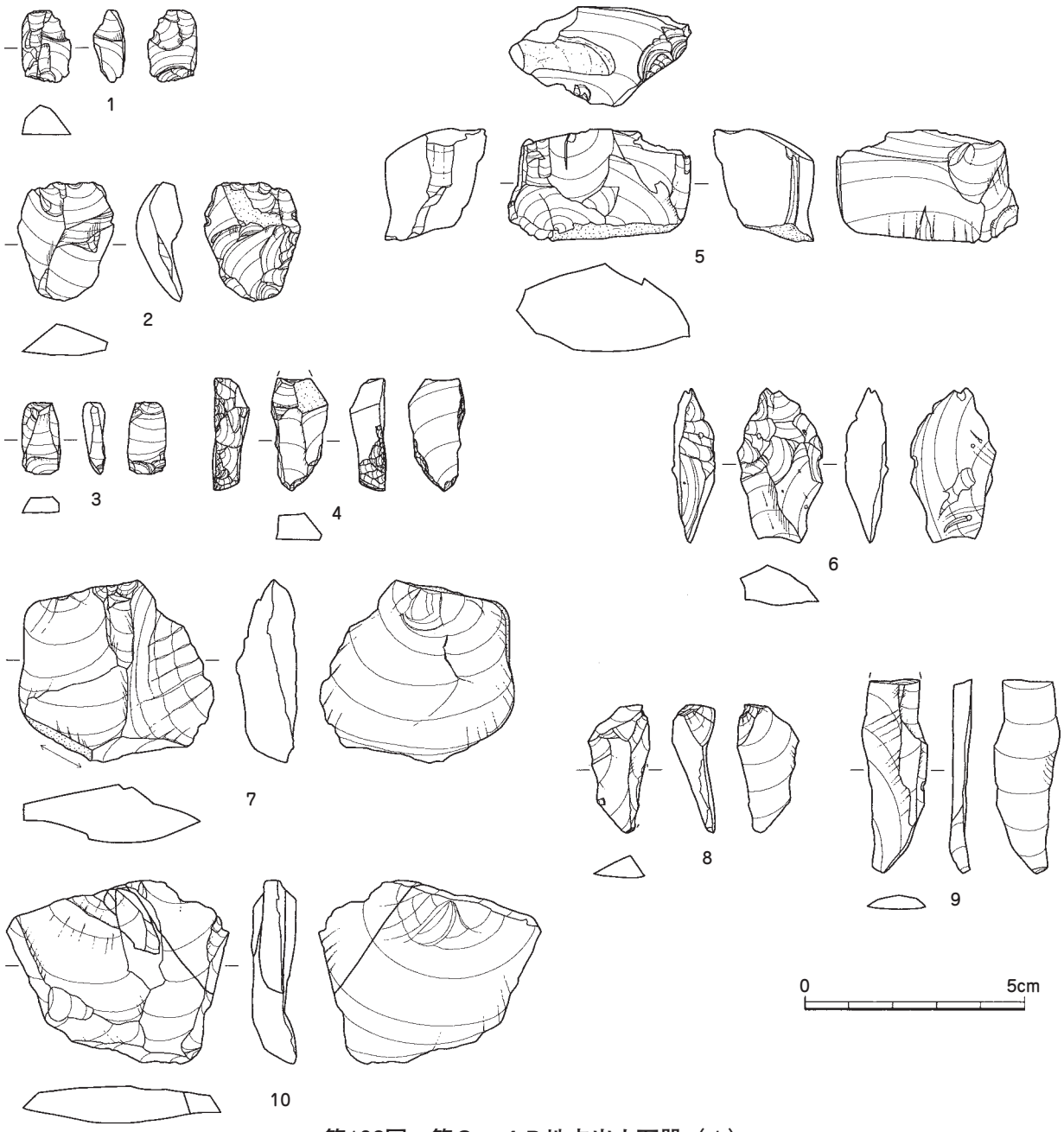
出土石器群　成品としての石器にはナイフ形石器や楔形石器があり、他は黒色安山岩の剥片が圧倒的多数を占めていた。また数点ではあるが、石斧製作に使用される砂岩やホルンフェルスの剥片・砕片が出土している。

ナイフ形石器（４）　小型品にも拘わらず背面を分厚くしたナイフ（第100図参照）で、先端部が欠失している。刃部を右側に設定し、基部周辺の加工は丁寧な剥離によって整形されている。

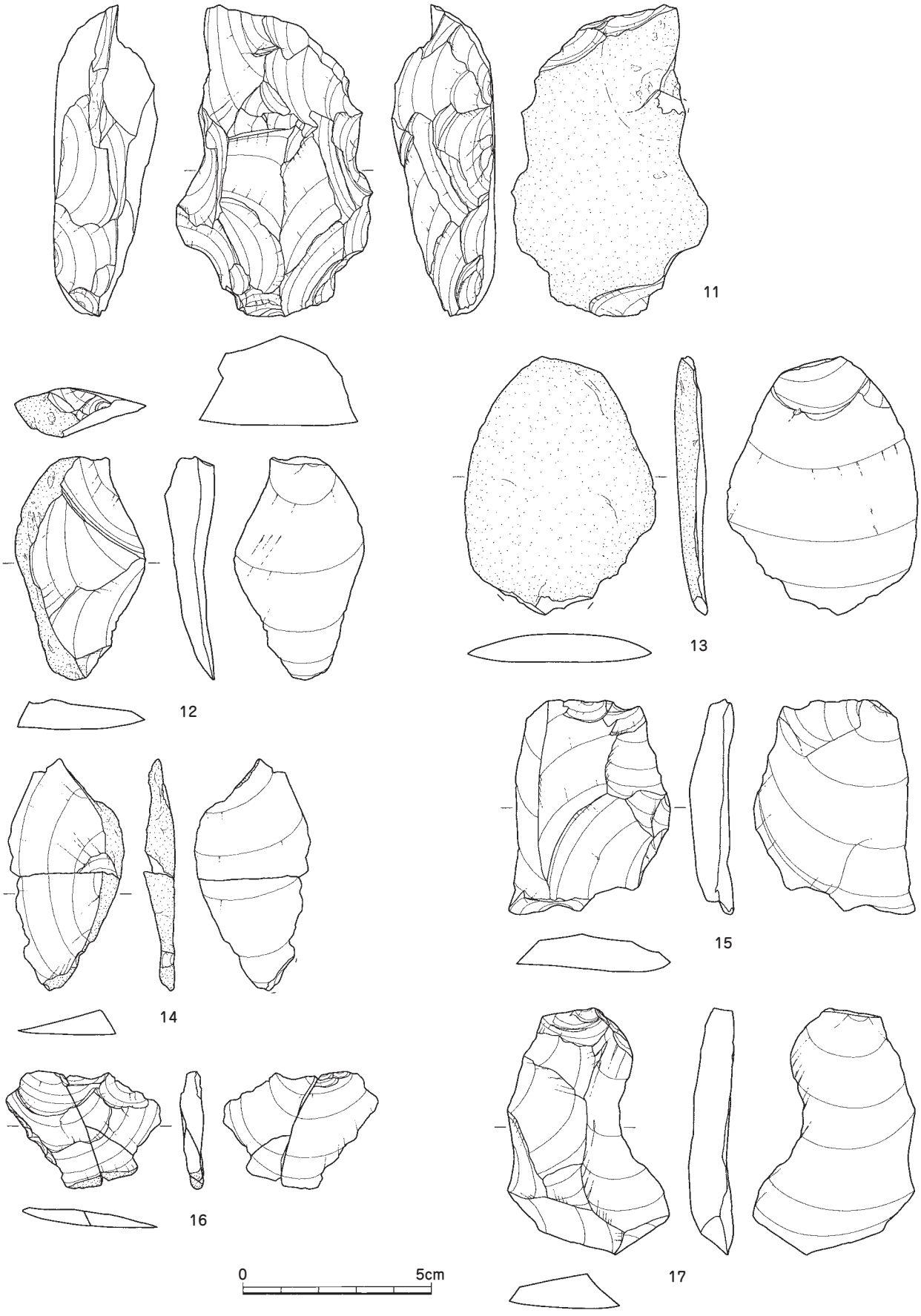
楔形石器（１～３）　３点は、いずれも離れた場所で出土（第93図）したものである。１は小型で断面が三角となる。表裏面には上下方向からの剥離がみられる。２は半透明の黒曜石を素材とし、表面は上からの剥離により形を整え、裏面下半部では大きな整形剥離により薄く仕上げている。３も小型品で、表面は上端を小さな剥離により、裏面は下端を粗雑な剥離により刃部を作出している。

剥片（６～10・12～25）　６～10は黒色安山岩以外の剥片となる。６は横長の剥片で折断されている。石材は黒曜石で異物の含有がみられるため１・２とは異なる産地と思われる。７は形状の整った剥片で左側面では自然面を残す。その下端には刃こぼれ状の剥離が認められるため石器として使用されたものであろう。８はホルンフェルスの剥片で、第９地点ではしばしば石斧の素材として用いられている石材である。９は石刃状の剥片で上半部を失っている。使用痕等は認められない。12～25は安山岩系の剥片で14・16・24では折断された剥片が接合している。16は折断後の小さな整形剥離を認めることができる。12・13・15・17などは石器に加工できるような剥片であるが、取り立てて加工は認められない。13は、おそらく打面設定時に剥離されたものであろう。下端部の欠損は調査時のものである。

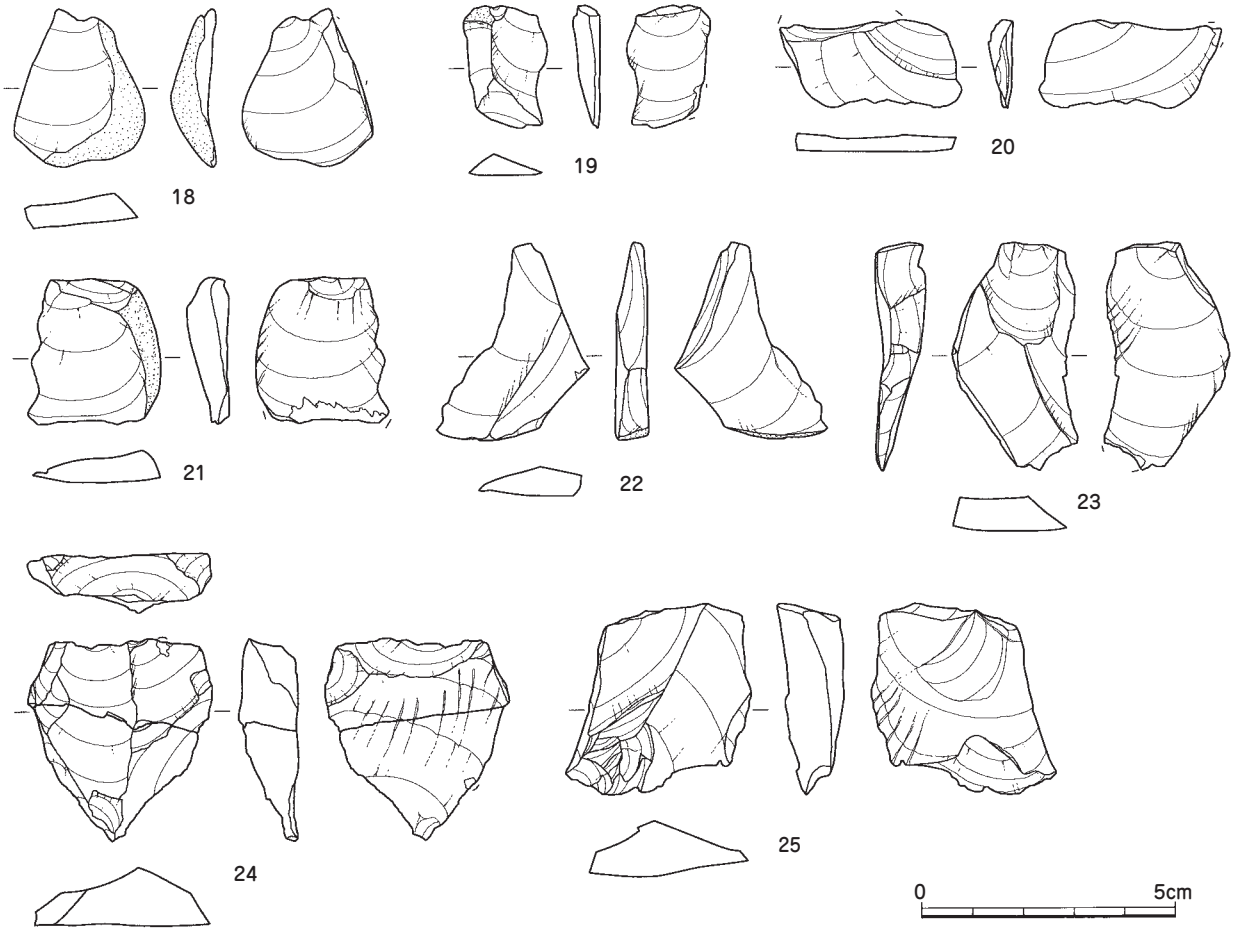
石核（５・11）　５はメノウ製の残核で、一部に自然面を残す。剥片は平坦面を打面とし上下方向から剥離されている。明らかに残核といえようが、周辺にメノウの剥片類は出土していない。11は平たい自然面を打面にして左右から剥片を剥ぎ、上下では小さな打面調整を施しつつ縦長の剥片を剥取していたようである。下部左側や右側縁中央の弯曲部などは意識的に加工されているように思えるところから石器として使用された可能性も否定しきれない。



第102図　第９－４Ｂ地点出土石器（１）



第103図　第９－４Ｂ地点出土石器（２）



第104図　第９－４Ｂ地点出土石器（３）

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石３点　硬質頁岩３点　チャート１点　黒色安山岩27点　デイサイト１点　黒雲母流紋岩３点　メノウ１点　砂岩２点　ホルンフェルス２点

器種　ナイフ形石器１点　楔形石器３点　剥片27点　砕片10点　石核２点　計43点

第39表　第９－４Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｌ５－04	1	27.409	楔形石器	黒曜石	1.70	1.20	0.70	1.06		
2	Ｌ５－13	2	27.368	楔形石器	黒曜石	2.80	2.10	1.05	4.22		
3	Ｌ５－03	1	27.230	楔形石器	硬質頁岩	1.65	0.90	0.40	0.84		
4	Ｌ５－82	1	27.295	ナイフ形石器	硬質頁岩	2.58	1.33	0.84	3.00		先端欠
5	Ｌ５－53	8	27.206	石核	メノウ	2.55	3.10	2.50	25.26		
6	Ｌ５－56	3	26.957	剥片	黒曜石	2.10	3.65	0.80	4.98		上端欠
7	Ｌ５－13	1	27.419	剥片	砂岩	4.05	4.70	1.20	22.70		石斧材
8	Ｌ５－53	6	27.162	剥片	ホルンフェルス	3.00	1.40	0.85	2.61		
9	Ｌ５－78	2	27.284	剥片	硬質頁岩	4.45	1.50	0.40	2.44		上端欠
10	Ｌ５－94	1	27.073	剥片	黒雲母流紋岩	4.35	4.70	0.85	16.18		
11	Ｌ５－53	1	27.096	石核	黒色安山岩	2.90	8.00	2.70	109.08		厚手剥片素材
12	Ｌ５－63	1	27.073	剥片	黒色安山岩	6.00	3.85	1.15	20.04		
13	Ｌ５－54	1	27.089	剥片	黒色安山岩	6.80	5.15	0.80	29.82		

14	Ｌ５－53	2	27.143	剥片	黒色安山岩	3.25	2.80	0.65	4.40	接５	上端欠
	Ｌ５－53	4	27.032	剥片	黒色安山岩	3.10	3.25	0.70	6.52		半欠
15	Ｌ５－33	2	27.037	剥片	黒色安山岩	5.75	4.15	0.90	24.81		
16	Ｌ５－79	1	27.280	剥片	黒色安山岩	3.63	1.70	0.50	3.09	接20	半欠
	Ｌ５－79	2	27.092	剥片	黒色安山岩	3.15	2.10	0.45	2.28		半欠
17	Ｌ５－52	1	27.080	剥片	黒色安山岩	6.70	3.80	1.05	27.36		
18	Ｌ５－14	1	27.375	剥片	デイサイト	3.15	2.50	0.65	4.01		
19	Ｌ５－89	2	27.010	剥片	黒色安山岩	2.40	1.60	0.50	1.81		
20	Ｌ５－33	3	27.139	剥片	黒色安山岩	3.40	1.75	0.45	2.89		半欠
21	Ｌ５－43	3	27.094	剥片	黒色安山岩	2.95	2.40	0.73	5.96		
22	Ｌ５－56	1	26.918	剥片	黒色安山岩	4.15	2.00	0.60	5.49		
23	Ｌ５－78	1	27.140	剥片	黒色安山岩	2.80	3.50	1.20	6.91		
24	Ｌ５－53	5	27.048	剥片	黒色安山岩	1.75	3.60	1.10	7.94	接６	上下端欠
	Ｌ５－43	4	27.062	剥片	黒色安山岩	2.60	3.20	0.95	6.02		上端欠
25	Ｌ５－89	1	27.141	剥片	黒色安山岩	4.10	3.20	1.15	13.63		

（６）第９－５Ａ地点（第105図・第106図、図版44）

概要　本地点の規模は小さく遺物の出土数も18点と少ない。出土地点はＬ４－09・19グリッドを中心に径２ｍほどの狭い範囲で石器群が出土し、定型的な成品はみられなかった。ただ接合関係についてみると、多量の石器群が出土した第９－９地点（Ｌ５－80・81グリッド）との間で剥片（黒色安山岩）の接合が確認されている。石材も前述した地点と同様に黒色安山岩が主体を占めており、他には黒雲母流紋岩や石英斑岩が若干数出土している。

出土石器群　石材の主体となる黒色安山岩では成品にまで加工された石器は存在せず、剥片・砕片で占められていた。反面、他の石材が石器として使用されていた。黒雲母流紋岩には二次剥片がみとめられ、石英斑岩は敲石として使用されている。

二次加工剥片（８）　縦長の剥片を素材としたもので、表面には多方向からの剥離が認められる。特に右側縁下部では３～４回の剥離により側縁の整形がなされている。裏面での剥離はみられない。また、石材が白色を呈している黒雲母流紋岩ということもあり剥離順序の識別がしにくいところである。形状から削器のように使われたものであろう。

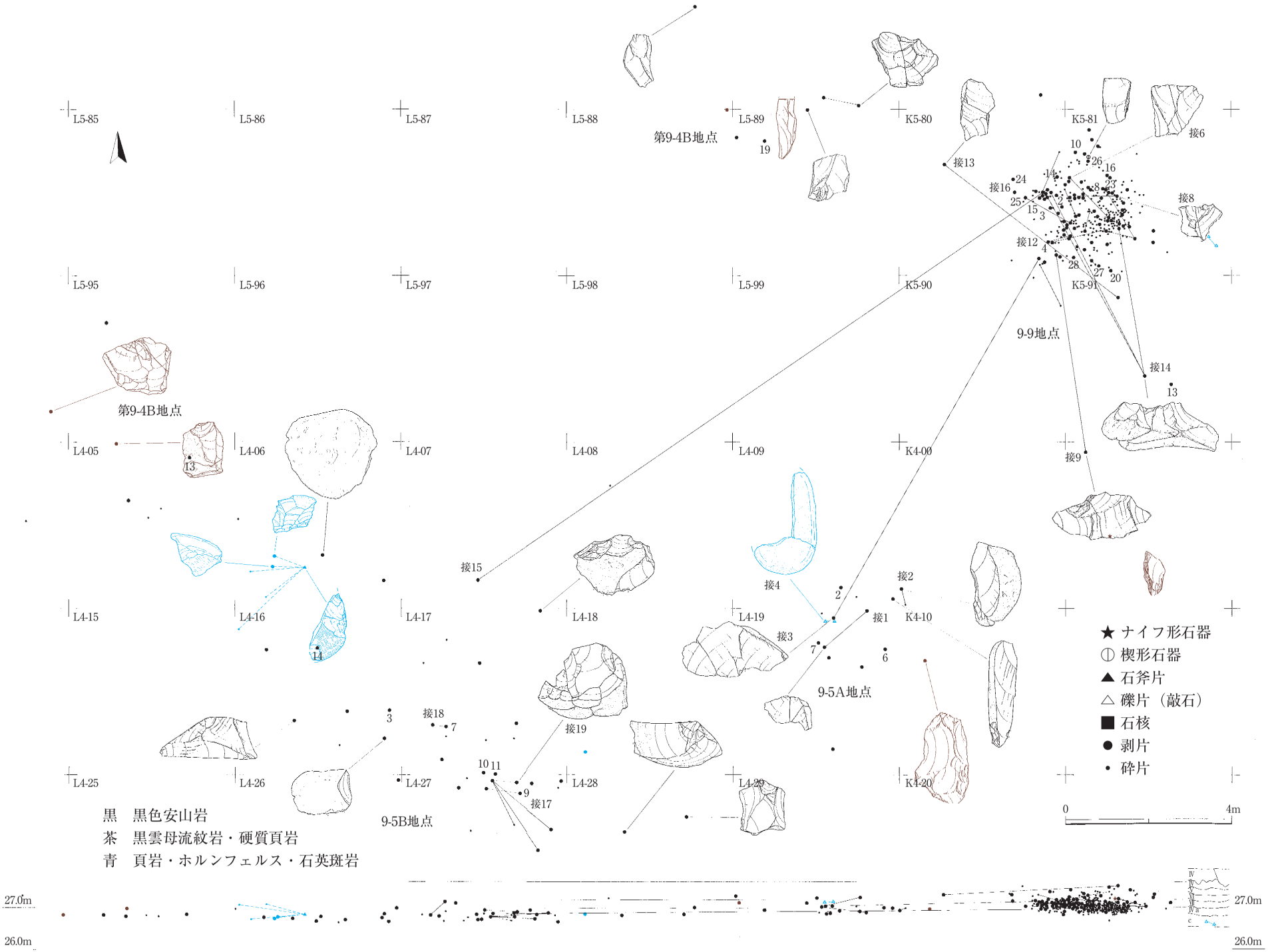
剥片（１～７）　１は大型剥片に砕片が接合した例である。意識的な剥離ではなく、剥片剥離と同時に割れたものと思われる。石器製作には十分な大きさとなるが使用の痕跡等は認められない。３も三分割された剥片の一例である。４は石刃状に剥離された断面三角の剥片で、左側縁では自然面を残す。下部では剥離痕がみられるものの使用された痕跡は観察できない。５は横長の剥片で薄く平坦に剥離されたものであり、十分石器の素材となり得るものであろう。打面部に剥離痕が認められるため打面再生のために剥離されたものであろう。左部分は折られている。６の裏面は平坦であるが、表面は凹凸が著しく、石器製作には向かない剥片となろう。

敲石（９）　同一のグリッドから出土した２点が接合した敲石である。1/2程度が遺存している。大きさは推定で９cmほどの河床礫となろう。被熱しており、破砕が意識的なものかはどうかは判別できないが、下端部では著しい打痕が認められる。

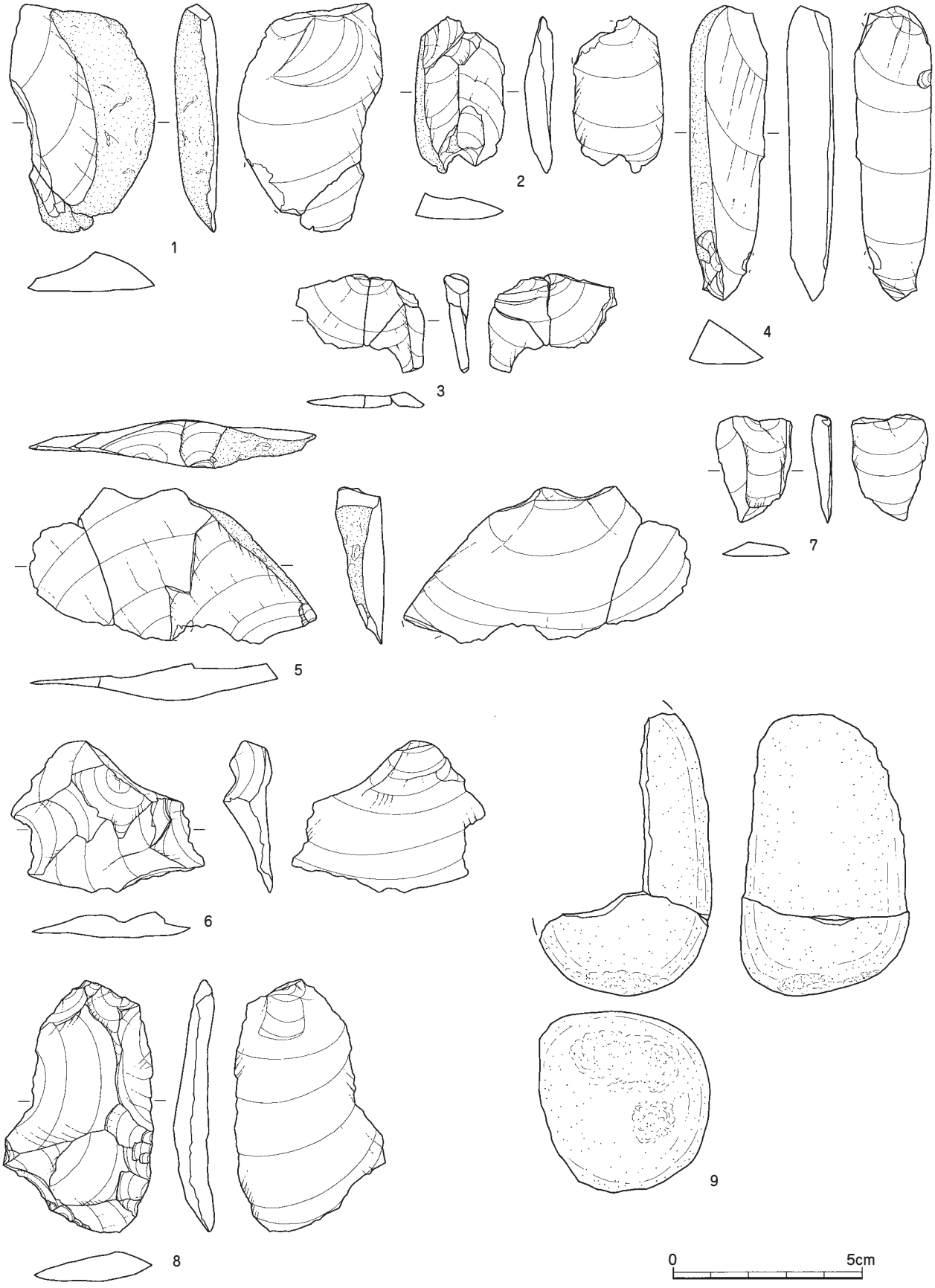
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩15点　黒雲母流紋岩１点　石英斑岩２点

器種　二次加工剥片１点　剥片10点　砕片５点　敲石１（２）　計18点



第105図　第９－５Ａ・５Ｂ・９地点出土石器分布図



第106図　第９－５Ａ地点出土石器

第40表　第９－５Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ４－00	1	26.993	剥片	黒色安山岩	5.40	3.80	1.10	23.74	接２	
	Ｋ４－00	2	27.000	砕片	黒色安山岩	2.27	1.10	0.60	1.02		
2	Ｌ４－09	1	26.985	剥片	黒色安山岩	4.20	2.40	0.70	6.98		
3	Ｌ４－19	5	27.055	剥片	黒色安山岩	2.60	1.67	0.60	1.93	接１	
	Ｌ４－19	11	26.970	剥片	黒色安山岩	2.10	1.90	0.60	1.71		半欠
4	Ｌ４－09	3	27.012	剥片	黒色安山岩	7.90	2.05	1.20	21.11		
5	Ｌ４－19	10	27.005	剥片	黒色安山岩	4.10	5.80	1.10	21.86	接３	
	Ｋ５－80	26	27.145	剥片	黒色安山岩	3.10	1.80	0.35	2.07		半欠
6	Ｌ４－19	2	27.057	剥片	黒色安山岩	4.12	4.75	1.10	13.58		
7	Ｌ４－19	6	27.310	剥片	黒色安山岩	2.85	2.00	0.57	2.71		
8	Ｋ４－10	1	26.971	二次加工	黒雲母流紋岩	6.15	3.90	0.90	16.39		
9	Ｌ４－19	7	26.960	敲石	石英斑岩	7.63	4.79	4.22	118.33	接４	一部被熱
	Ｌ４－19	8	26.940	敲石	石英斑岩						

（７）第９－５Ｂ地点（第105図・第107図～第109図、図版44）

概要　本地点は９－５Ａ地点の西に位置し、その分布域はＬ４－05グリッドから南東方向の同28グリッドにかけて長楕円形となる。石器群の集中する場所はＬ４－17・27グリッドであり、ここでの石材は黒色安山岩で占められていた。一方、Ｌ４－06グリッドでは頁岩を素材とした局部磨製石斧の一部が出土しており、刃部が研ぎすまされたものや刃こぼれ状の使用痕が付された剥片がみられた。こうした剥片類の出土事例から破損した石斧類の再生か、あるいは石斧を石核とみたてて剥片剥離をおこなっていたようである。いずれにせよ本地点は磨製石斧との関連性が強い場所と考えられる。

出土石器群　成品としては局部磨製石斧をあげることができる。これは石斧として使用されたものの破損したため再利用すべく石斧本体に対し剥片剥離をおこなったものと考えられる。また黒色安山岩は、ここでも大型の剥片が多くみられ、図示した他にも数点の良好な剥片が存在している。しかし定型石器にまで加工されたものは存在していない。

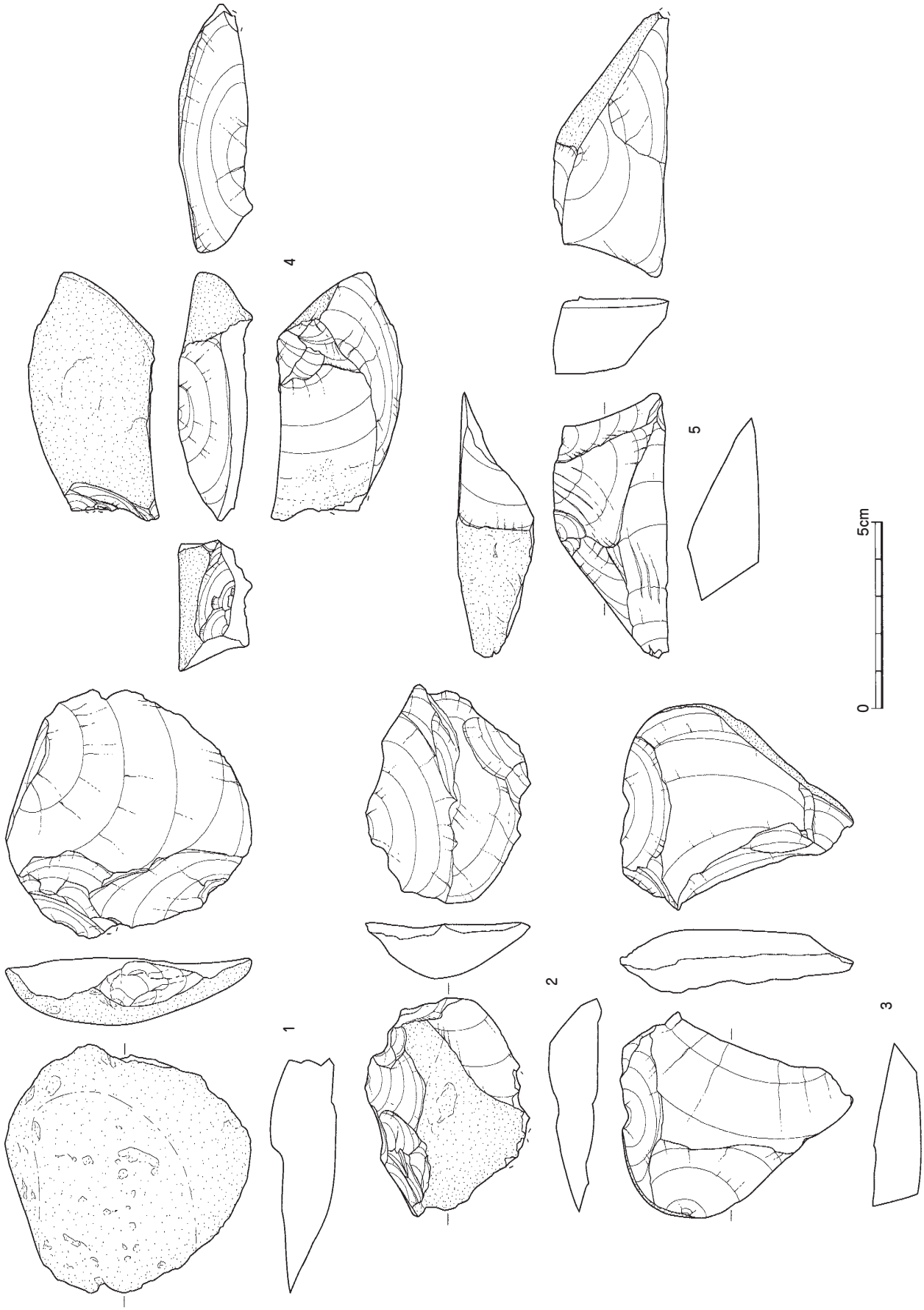
局部磨製石斧（16～18）　16～18は、すべてＬ４－06グリッドから出土した局部磨製石斧の破損品である。石材が同一であるため破損した１点の石斧から分割されたものであろう。他に砕片が３点出土しているが接合関係は認められなかった。いずれも両面の一部にきれいに研磨された面が認められる。16では研磨部の鋭利な破損面で刃こぼれ状の痕跡がみられた。17は、裏面右下部が弯曲に整形されており、削器様の石器として用いた可能性が強い。18は刃部が約1/3程度遺存しており、遺存部に残された鋭利な刃部は研磨が終了した製作直後を思わせるほどである。

剥片（１～15）　１・７は平坦な主剥離面と自然面から打面作出時の剥片となろう。また７の裏面下部では若干の整形がみられるため使用された可能性もある。６は５点が接合したもので、すべてＬ４－27グリッドから出土している。おそらくこの地点で剥離作業がおこなわれていたものであろう。９も折断はされているものの加工の痕跡はみられない。こうした大型の剥片が出土しているにも拘わらず成品の出土がみられない点は９－４Ｂ地点と共通しているようである。

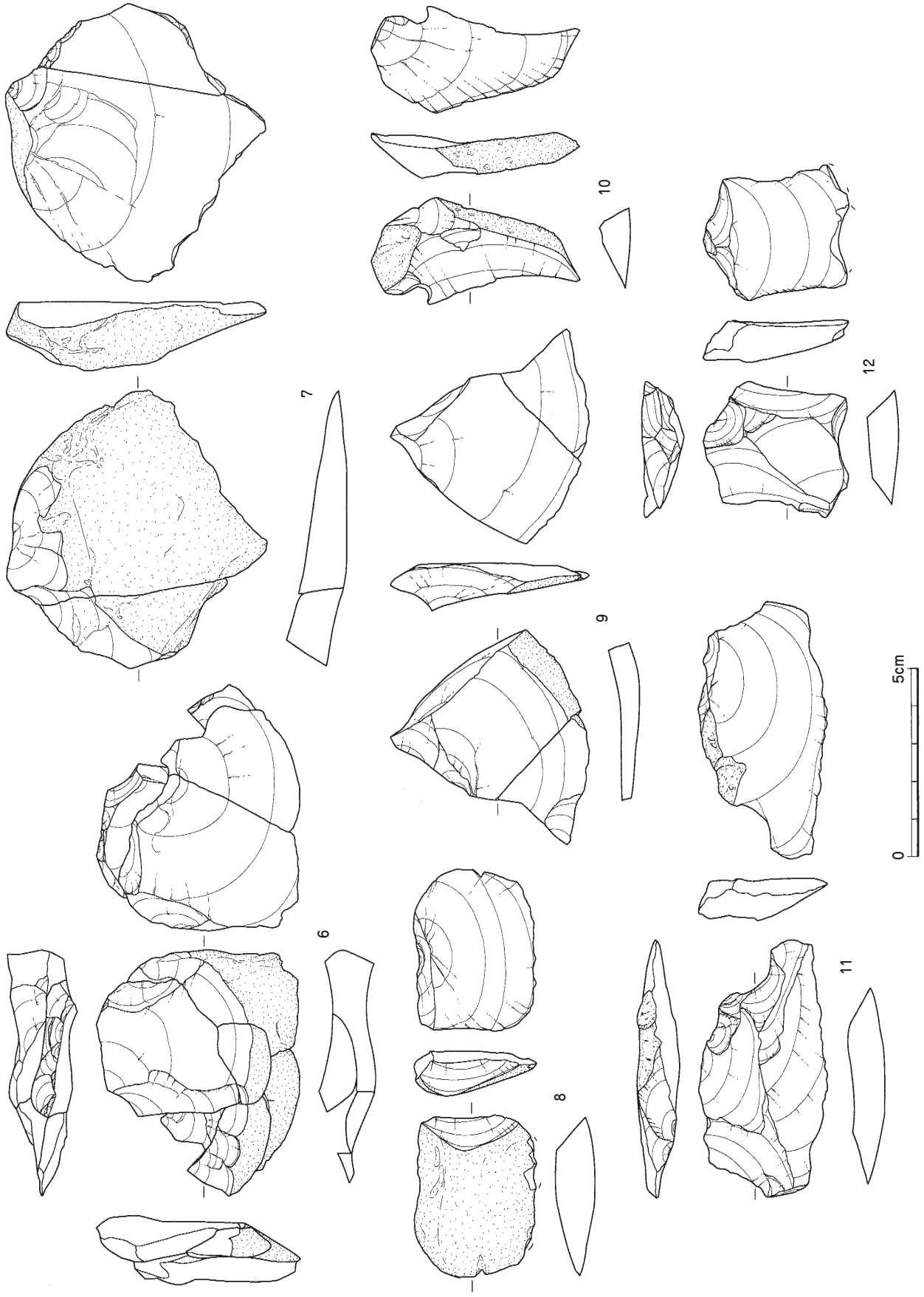
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩47点　頁岩６点　ホルンフェルス１点　黒雲母流紋岩１点

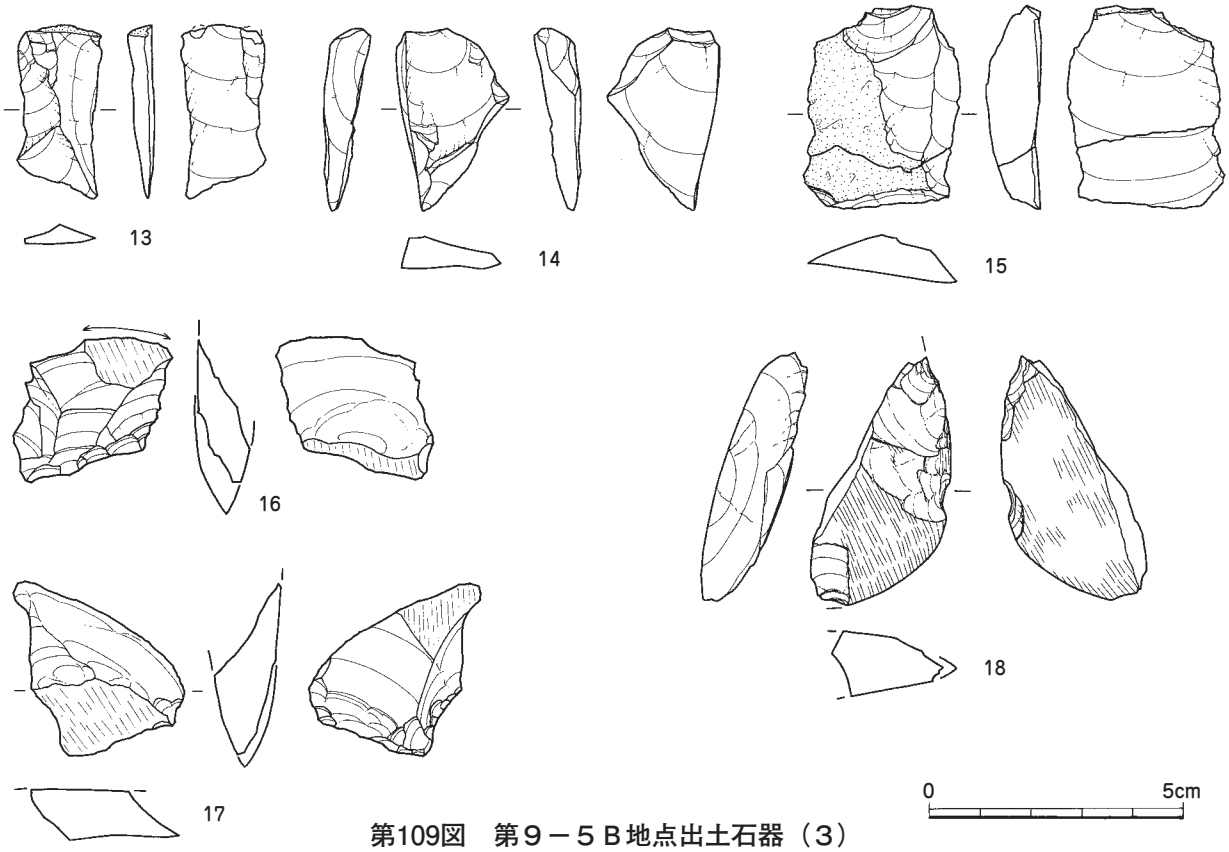
器種　局部磨製石斧１（３）点　剥片40点　砕片12点　計55点



第107図　第９－５Ｂ地点出土石器（１）



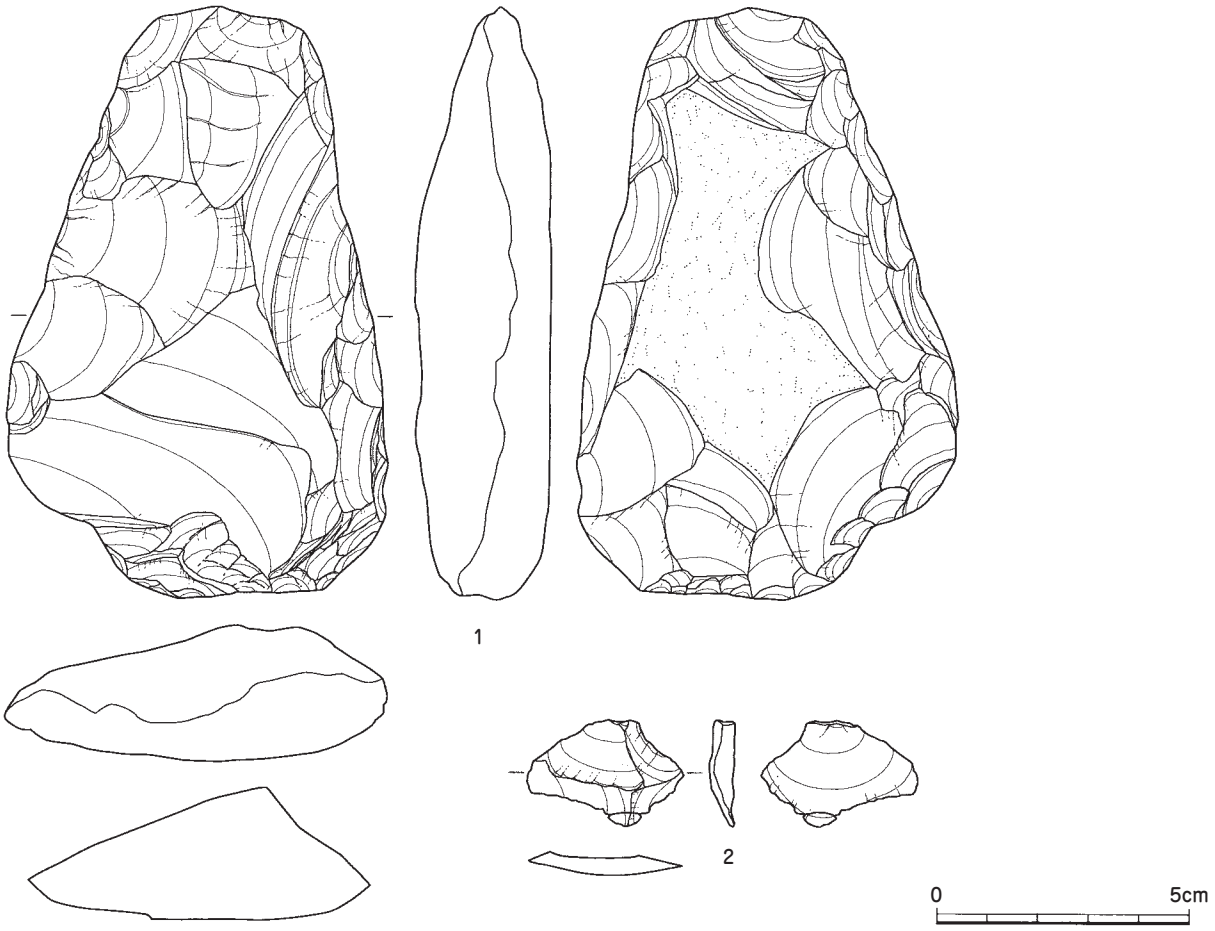
第108図　第９－５Ｂ地点出土石器（２）



第109図　第９－５Ｂ地点出土石器（３）

第41表　第９－５Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｌ４－06	5	26.832	剥片	黒色安山岩	6.95	6.50	1.75	81.92		
2	Ｌ４－17	1	26.911	剥片	黒色安山岩	6.00	4.20	1.40	35.88		
3	Ｌ４－16	4	26.737	剥片	黒色安山岩	5.20	6.10	1.40	51.28		
4	Ｌ４－28	1	26.890	剥片	黒色安山岩	6.75	3.50	1.90	54.39		両側欠
5	Ｌ４－16	1	26.790	剥片	黒色安山岩	3.15	7.00	1.80	34.85		
6	Ｌ４－27	9	26.735	砕片	黒色安山岩	1.40	2.20	0.45	1.62	接19	
	Ｌ４－27	10	26.902	剥片	黒色安山岩	1.75	2.80	0.65	3.11		上端欠
	Ｌ４－27	11	26.788	剥片	黒色安山岩	3.80	3.20	0.85	13.92		下端欠
	Ｌ４－27	12	26.836	剥片	黒色安山岩	4.00	2.60	0.85	7.61		半欠
	Ｌ４－27	13	26.847	剥片	黒色安山岩	4.80	4.00	1.45	28.05		半欠
7	Ｌ４－17	8	27.177	剥片	黒色安山岩	5.15	2.10	1.15	14.54	接18	半欠
	Ｌ４－17	9	26.806	剥片	黒色安山岩	2.50	4.15	0.70	7.79		上端欠
8	Ｌ４－16	5	26.901	剥片	黒色安山岩	3.30	4.25	1.20	19.70		
9	Ｌ４－27	4	26.938	剥片	黒色安山岩	4.70	3.20	1.10	18.92	接17	半欠
	Ｌ４－27	5	26.996	剥片	黒色安山岩	3.05	2.20	0.55	3.23		上端欠
10	Ｌ４－17	11	26.785	剥片	黒色安山岩	5.50	2.70	0.85	11.48		
11	Ｌ４－17	12	26.870	剥片	黒色安山岩	3.50	6.70	1.10	24.49		
12	Ｌ４－28	2	26.895	剥片	黒色安山岩	4.05	3.40	1.10	15.25		下端欠
13	Ｌ４－05	2	26.892	剥片	黒色安山岩	3.40	1.65	0.45	2.67		
14	Ｌ４－16	8	26.742	剥片	黒色安山岩	3.60	2.15	0.75	5.41		半欠
15	Ｌ４－05	3	26.948	剥片	黒雲母流紋岩	4.14	3.08	1.01	11.33		
16	Ｌ４－06	7	26.768	石斧片	頁岩	2.80	2.80	0.80	6.81		研磨面あり
17	Ｌ４－06	6	26.766	石斧片	頁岩	2.70	3.55	1.10	8.53		研磨面・使用痕あり
18	Ｌ４－06	4	26.830	局部磨製石器	頁岩	4.20	2.90	1.30	15.30		刃部のみ



第110図　第９－６地点出土石器（１）

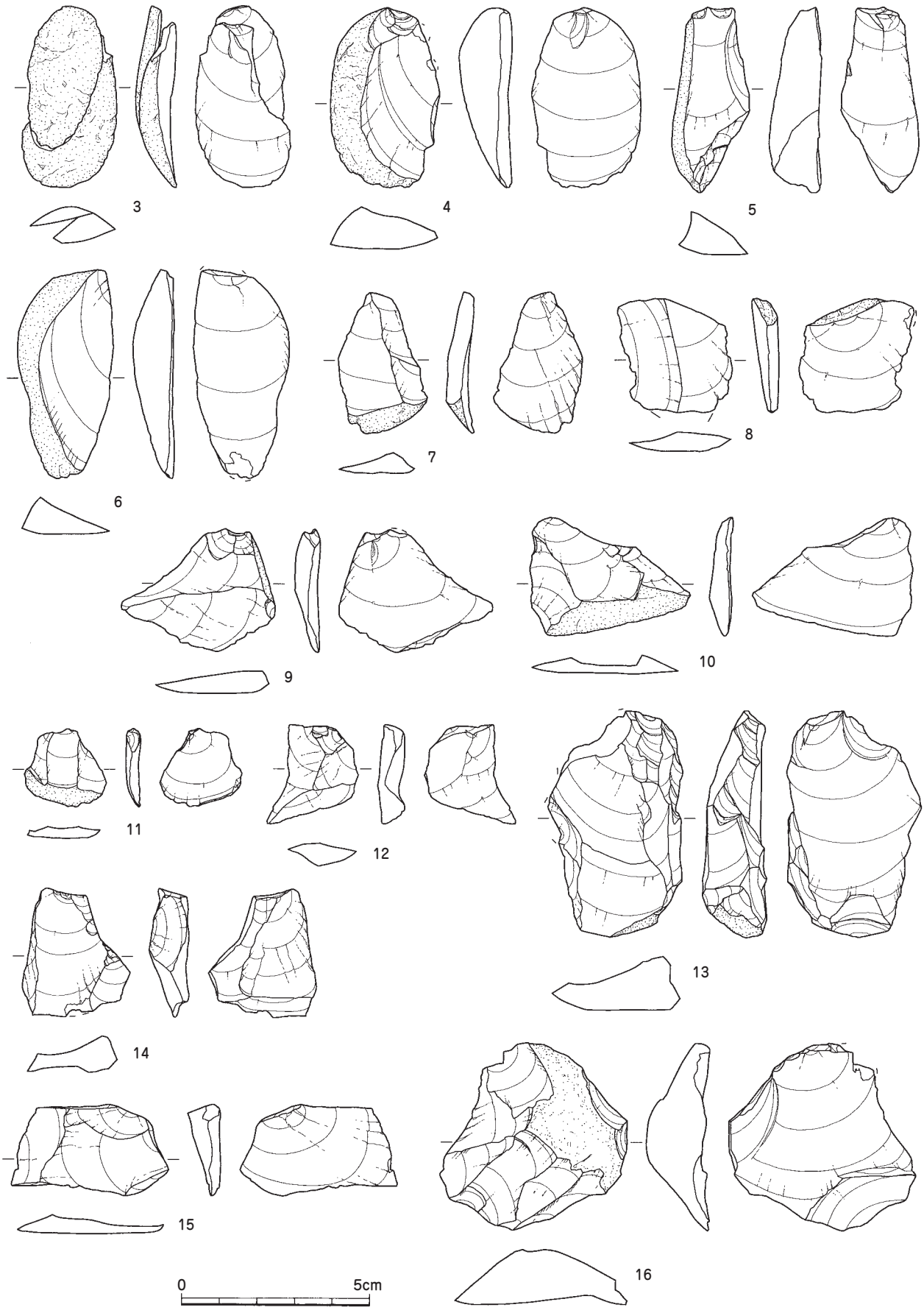
（８）第９－６地点（第95図・第110図～第112図、図版45・46）

概要　本地点は環状に巡る石器群の中でも北側に位置し、その分布範囲はＫ５－00・01・10・11の各グリッドに及んでいた。特に遺物が集中的に分布するＫ５－10グリッドでは黒雲母流紋岩の剥片が多数出土しており、剥片の剥離作業がおこなわれていたものであろう。また第95図に示したようにＫ６－91グリッドから砂岩製の打製石斧が出土している。なお、石材は異なるが石斧製作時の剥片もみられた。この種の剥片は、前述した地点や西に隣接する第９－２地点でも出土している。これらを考え合わせると第９地点では、場所は特定できないものの石斧の製作がおこなわれていたことは容易に想定できよう。また本地点では出土総数の約2/3が黒雲母流紋岩で占められていたことも特筆できる。

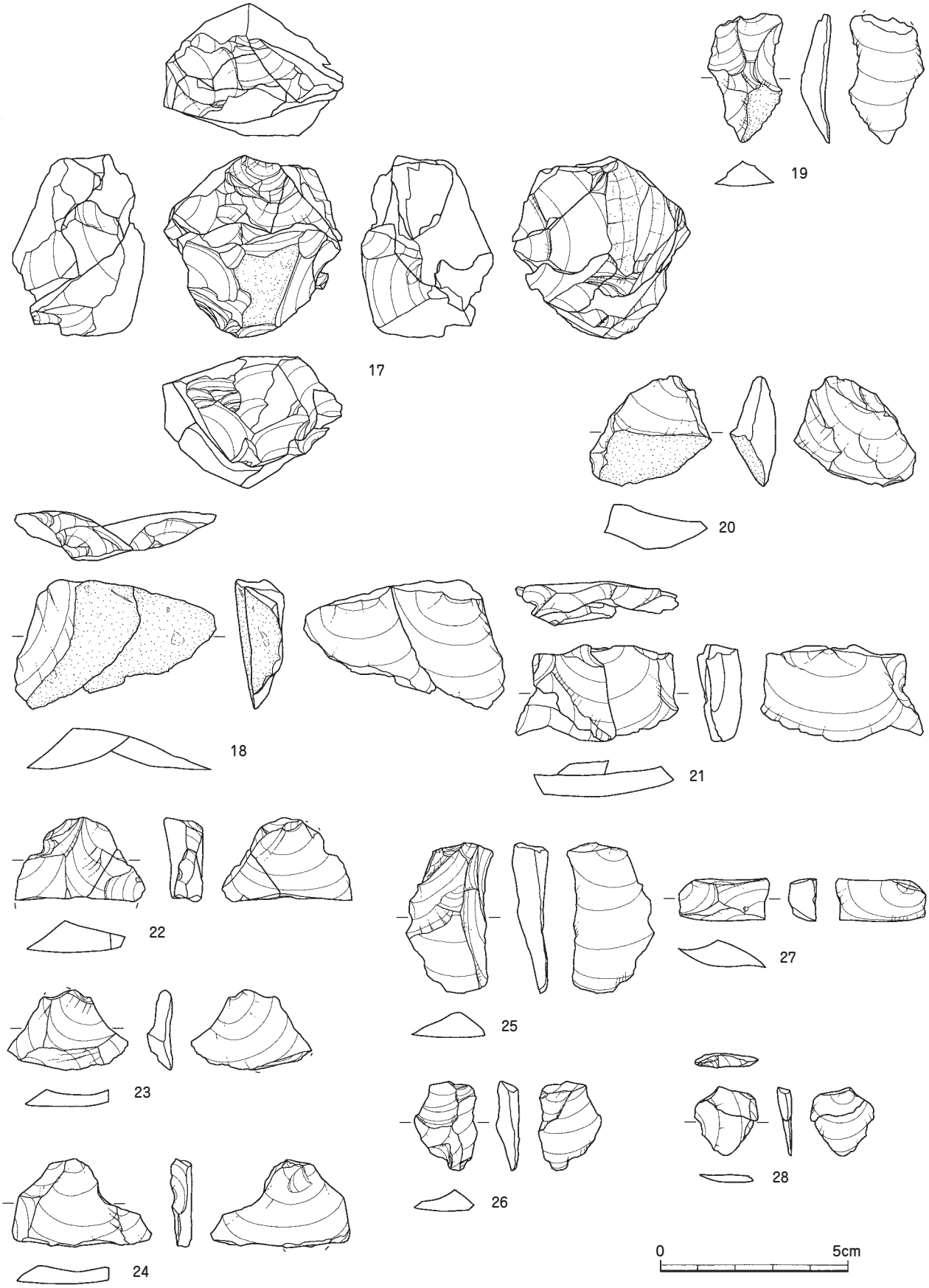
出土石器群　定型石器としては打製石斧のみで、他は石核と剥片・砕片類で構成される。とりわけ黒雲母流紋岩の剥片についてみると、石器素材に適するような剥片が得られてはいるが成品として残された石器は認められなかった。

打製石斧（１）　薄く扁平な川原石を素材とし、下半部がやや幅広に作られている。刃部は長期の使用によるためか磨耗が著しい。周囲の加工は粗く整形した後に側縁を小さな剥離で整えているが、概して粗雑な作りとなっている。刃部の観察から土掘具のような用途であったものと考えられる。

剥片（２～16・18～28）　２は石材が異なるものの僅かに弯曲した薄い剥片であり、石斧製作に伴う剥片と見做される。３～16は黒色安山岩の剥片で石器に加工できるようなものもあるが、成品としては存在し



第111図　第９－６地点出土石器（２）



第112図　第９－６地点出土石器（３）

ていない。特に11・12などは石器製作過程で剥離された剥片と考えられる。18～28は黒雲母流紋岩の剥片類である。何点かは石器素材とすることのできる剥片もみられるが使用の痕跡は認められない。

石核（17）　Ｋ５－01グリッドから出土した石核であり、隣接するＫ５－10グリッドから出土した剥片類４点と接合した。表皮部分を一部に認めることはできるが、剥片類の多さから原石は拳大よりも大きかったものと推定できる。剥片剥離の方向は一方向ではなく、平坦面を打面とし転位を繰り返しながら剥離していったようである。

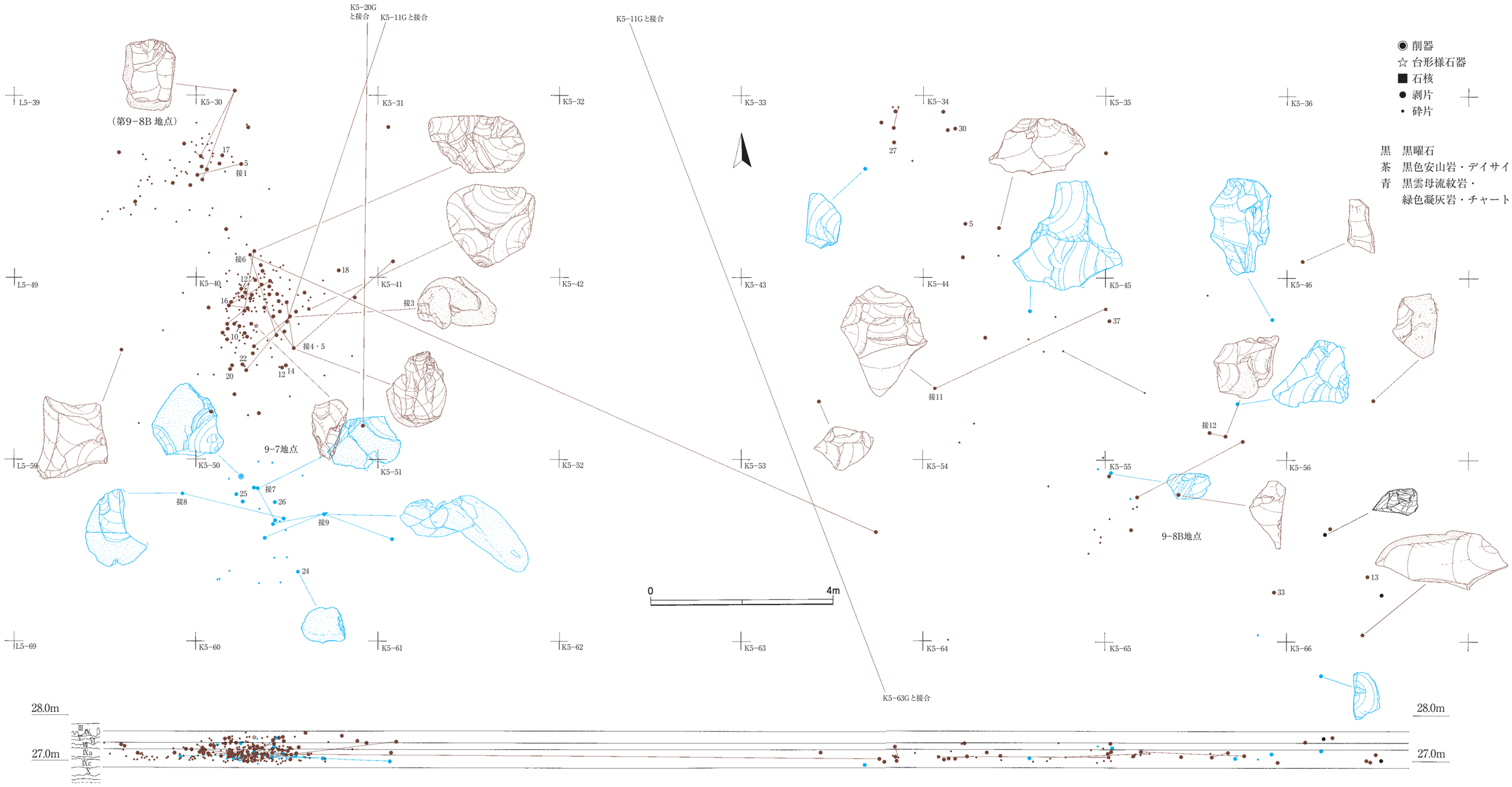
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩28点　黒雲母流紋岩67点　砂岩１点　中粒緑色凝灰岩１点

器種　打製石斧１点　剥片43点　砕片52点　石核１点　計97点

第42表　第９－６地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ５－91	2	27.085	打製石斧	砂岩	11.85	7.70	2.80	265.18		
2	Ｋ５－11	19	27.171	剥片	中粒緑色凝灰岩	2.20	3.10	0.30	1.70		
3	Ｋ５－11	15	27.167	剥片	黒色安山岩	4.40	2.50	0.80	7.93	接６	
	Ｋ５－40	14	27.225	剥片	黒色安山岩	3.90	1.83	0.45	3.39		
4	Ｋ５－01	11	27.261	剥片	黒色安山岩	4.90	2.92	1.50	19.36		
5	Ｋ５－01	14	26.988	剥片	黒色安山岩	5.05	2.05	1.10	11.59		
6	Ｋ５－00	5	27.244	剥片	黒色安山岩	5.52	2.60	1.05	13.48		
7	Ｋ５－11	11	27.035	剥片	黒色安山岩	3.80	2.23	0.60	4.08		
8	Ｋ５－11	16	27.279	剥片	黒色安山岩	3.05	2.90	0.65	5.27		
9	Ｋ５－01	5	27.139	剥片	黒色安山岩	3.35	3.75	0.55	6.75		下端欠
10	Ｋ５－11	13	27.129	剥片	黒色安山岩	3.30	3.90	0.55	5.79		
11	Ｋ５－00	10	27.221	剥片	黒色安山岩	2.02	2.10	0.35	1.73		
12	Ｋ５－00	2	27.216	剥片	黒色安山岩	2.60	2.15	0.70	3.25		
13	Ｋ５－11	18	27.091	剥片	黒色安山岩	6.20	3.65	1.35	33.50		
14	Ｋ６－91	1	27.224	剥片	黒色安山岩	3.52	2.70	0.80	7.33		
15	Ｋ５－00	1	27.148	剥片	黒色安山岩	2.58	3.20	0.60	6.28		
16	Ｋ５－11	10	27.087	剥片	黒色安山岩	5.13	4.87	1.40	30.30		
17	Ｋ５－01	4	27.137	石核	黒雲母流紋岩	3.80	4.10	4.80	50.94	接10	
	Ｋ５－10	14	27.231	剥片	黒雲母流紋岩						
	Ｋ５－10	9	27.124	砕片	黒雲母流紋岩	2.20	2.50	0.80	2.21		
	Ｋ５－10	18	27.055	砕片	黒雲母流紋岩	2.10	1.80	0.70	1.14		
	Ｋ５－10	35	26.978	砕片	黒雲母流紋岩	1.85	1.65	0.20	0.48		
18	Ｋ５－10	3	27.149	剥片	黒雲母流紋岩	3.65	3.00	1.10	8.10	接７	
	Ｋ５－10	8	27.316	剥片	黒雲母流紋岩	3.20	2.65	0.70	3.71		
19	Ｋ５－10	4	27.836	剥片	黒雲母流紋岩	3.30	1.90	0.70	2.84		
20	Ｋ５－10	16	27.485	剥片	黒雲母流紋岩	2.60	3.20	1.00	5.90		
21	Ｋ５－01	8	27.125	剥片	黒雲母流紋岩	1.90	2.80	0.45	1.72	接７	
	Ｋ５－10	27	27.076	剥片	黒雲母流紋岩	2.60	4.20	0.65	7.42		
22	Ｋ５－10	25	27.128	砕片	黒雲母流紋岩	1.50	1.35	0.60	0.92	接11	
	Ｌ５－19	3	27.279	剥片	黒雲母流紋岩	2.60	2.10	1.00	2.03		
23	Ｋ５－11	6	27.075	剥片	黒雲母流紋岩	2.20	3.10	0.55	2.40		
24	Ｋ５－00	4	27.327	剥片	黒雲母流紋岩	2.40	3.70	0.43	3.10		下端欠
25	Ｋ５－11	4	27.184	剥片	黒雲母流紋岩	4.05	2.13	0.73	5.26		
26	Ｋ５－10	41	26.953	剥片	黒雲母流紋岩	2.40	1.60	0.60	1.55		
27	Ｋ５－01	1	27.090	剥片	黒雲母流紋岩	1.20	2.35	0.70	1.52		
28	Ｋ５－11	27	26.933	剥片	黒雲母流紋岩	1.90	1.70	0.33	0.61		



第113図　第９－７・８Ｂ地点出土石器分布図

（９）第９－７地点（第113図～第116図、図版７・47）

概要　本地点は環状に構成された石器集中地点の中央北側に位置するものである。集中地点を厳密に区分するならば３地点に分離することも可能な出土状況を示していた。しかし隣接するグリッド間が接近しており、接合関係などの点から一括して図面製作を進捗させたため１か所の石器群として記載することとした。本地点での特徴としては、Ｋ５－30・40グリッドにおける集中的に出土地点では黒色安山岩一色の構成となっていた。一方、Ｋ５－50グリッドでは黒雲母流紋岩が主体を占めていたことに使用石材の相違という点を指摘できる。なお、黒雲母流紋岩は図示した接合例（23）から推定復原するとかなり大きな原石を持ち込んで石器を製作していたものと思われる。

出土石器群　本地点で出土した成品についてみると、台形様石器と削器が存在するものの総点数250点余の出土に対しては少なすぎるような器種構成となっている。そこで多量に出土した剥片・砕片類を観察すると、薄手の小剥片や砕片といったトゥールチップスと思われる小片も出土しており、剥片剥離と同時に成品へと加工するような作業が主におこなわれていたようである。このことは大型剥片同士の接合や形の整った剥片が多く残されていたことからも理解できよう。この点、前述した９－４Ｂ地点・９－５Ｂ地点では大型の剥片が多くみられ砕片類が少ない場所とは内容的に異なる点として指摘できる。また後述する９－９地点でも本地点と同様に剥片・砕片類が多いことを考えると石器の最終的な製作は環状の中心部で作業がおこなわれていたとも推測できる。こうした点を踏まえれば、製作の終了した成品は当然のことながら持ち去られていたことであろう。

台形様石器（９）　横長の剥片を素材としたもので基部の一部は折断されている。右側縁の加工は小さく剥離しつつ丁寧に先端付近にまで及ぶ。一方、左側縁は打点部にあたるため大きな剥離により形が整えられているが、細部調整のための剥離は施されていない。裏面ほぼ平坦に剥離された面となっており、特に整形等の加工は認められない。

削器（28）　厚手の剥片を素材として使用したもので、表面には自然面が多くみられる。打点部にあたる分厚い部分を大きく削除し、使用し易いように整形したものと思われる。加工は右側面に限られ、表面は上半部を小さな剥離によって整形し、裏面では側面を抉るように整形剥離を施し刃部を作出している。概して粗雑な作りといえる。

剥片（３～８・10～27・29）　３は４点が接合した資料で、表面の折断された大型剥片は整形し易い縦長の剥片となっている。石器に加工できる十分な形状を有しているが、その痕跡は認められない。４は同一グリッドから出土した３点で薄くきれいに剥離されている点が特徴的といえる。裏面での接合状態から打点の転位を窺い知ることができる資料といえよう。６～８・13～16などは石器製作の素材としては十分な形状を呈しているが使用痕等の痕跡は確認できない。21は厚手の剥片で、打点部分は加撃により削除されている。十分な石器素材と考えられる。22の石材はデイサイトで、表裏面は風化による磨耗が著しいため使用痕等の有無は視認できない。石器素材としては十分な剥片で１点のみということを考慮すると石器としての加工を目的としたものか、あるいは道具として使用されていた可能性も否定できない。23は表皮部分の４点が接合したものである。１点だけではあるが縦長のきれいな剥片が得られている。しかし使用を裏付けるような痕跡はみられない。24は小型の剥片で右側縁全体に調整痕が施されている。道具として使用されていたものであろう。27は三分割された２点である。29も折断された剥片が接合したもので、おそらく上部も折られたものであろう。

石核（1・2） ここで石核としたものは、厚手の剥片を利用して、さらに剥片剥離が試みられたものである。1は打面作出のために剥離されたものであろう。さらに4枚以上の剥片を剥取している。2は3点が接合したもので、このうちの1点は第9－8B地点から出土したものである。剥離面をみると、剥離によって生じた平坦な面を打面とし多方向から剥離されており、最後に残された表皮部分といえる。

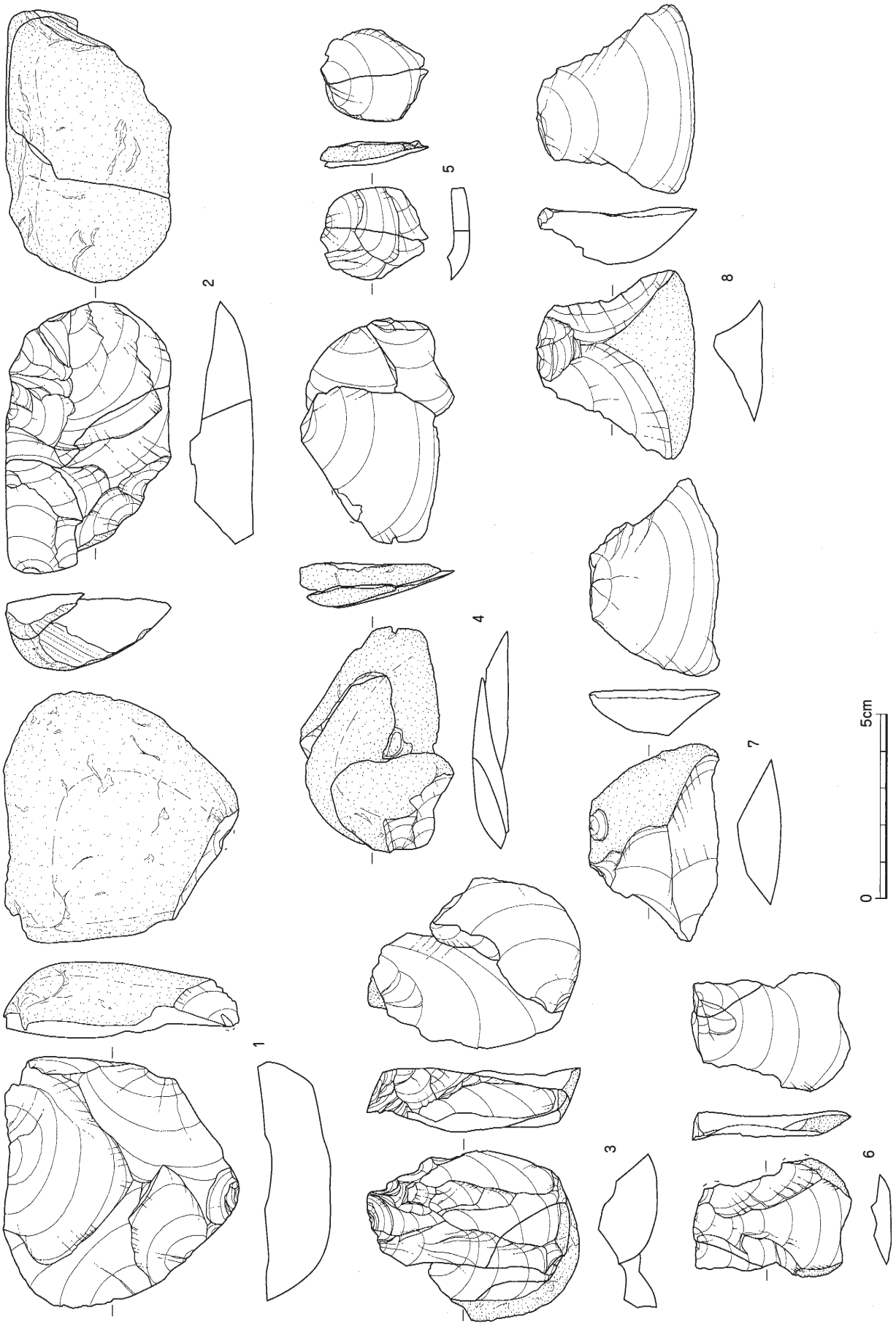
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材 黒色安山岩223点 デイサイト1点 黒雲母流紋岩29点

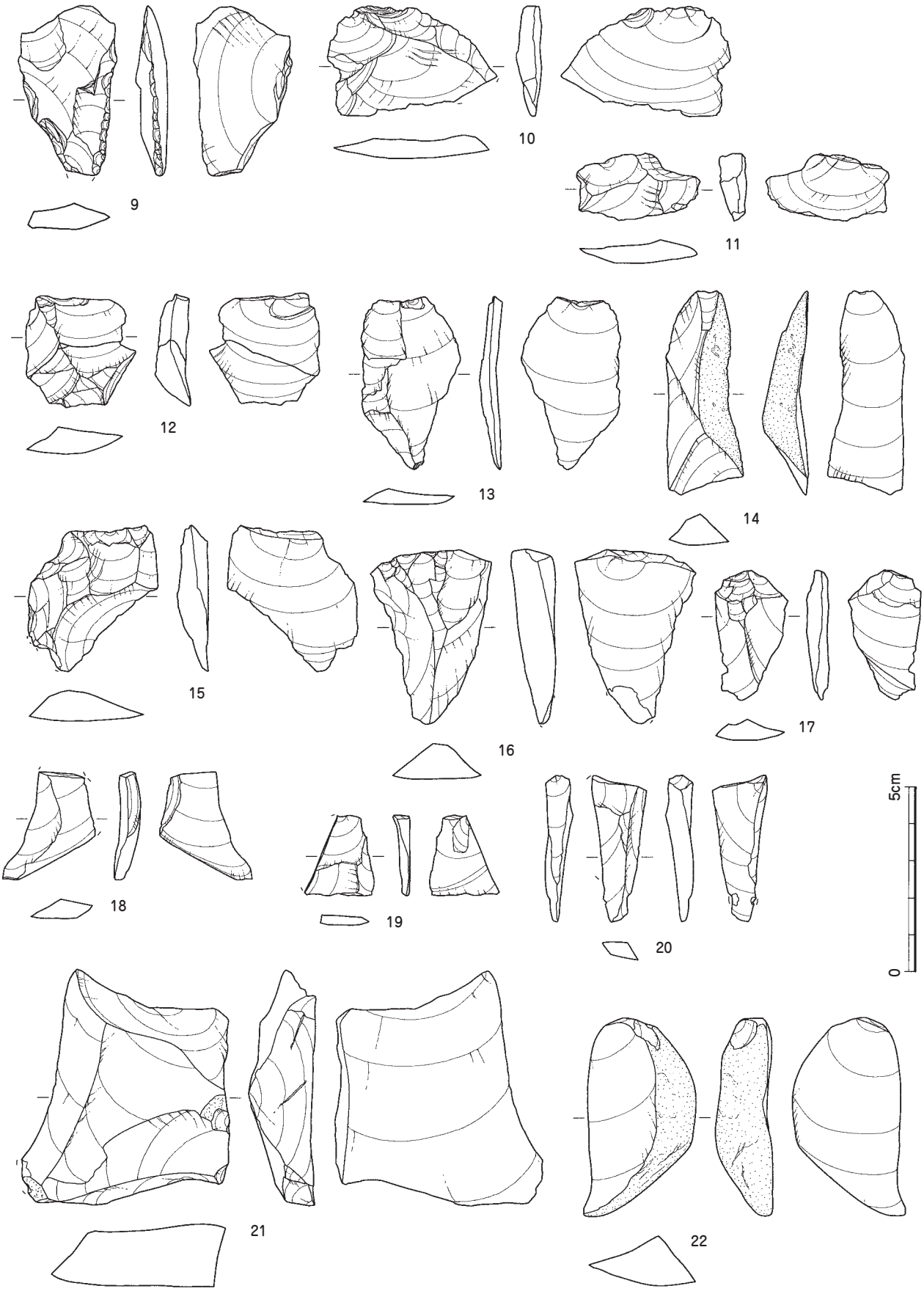
器種 台形様石器1点 削器1点 剥片87点 砕片162点 石核2点 計253点

第43表 第9－7地点実測石器属性表

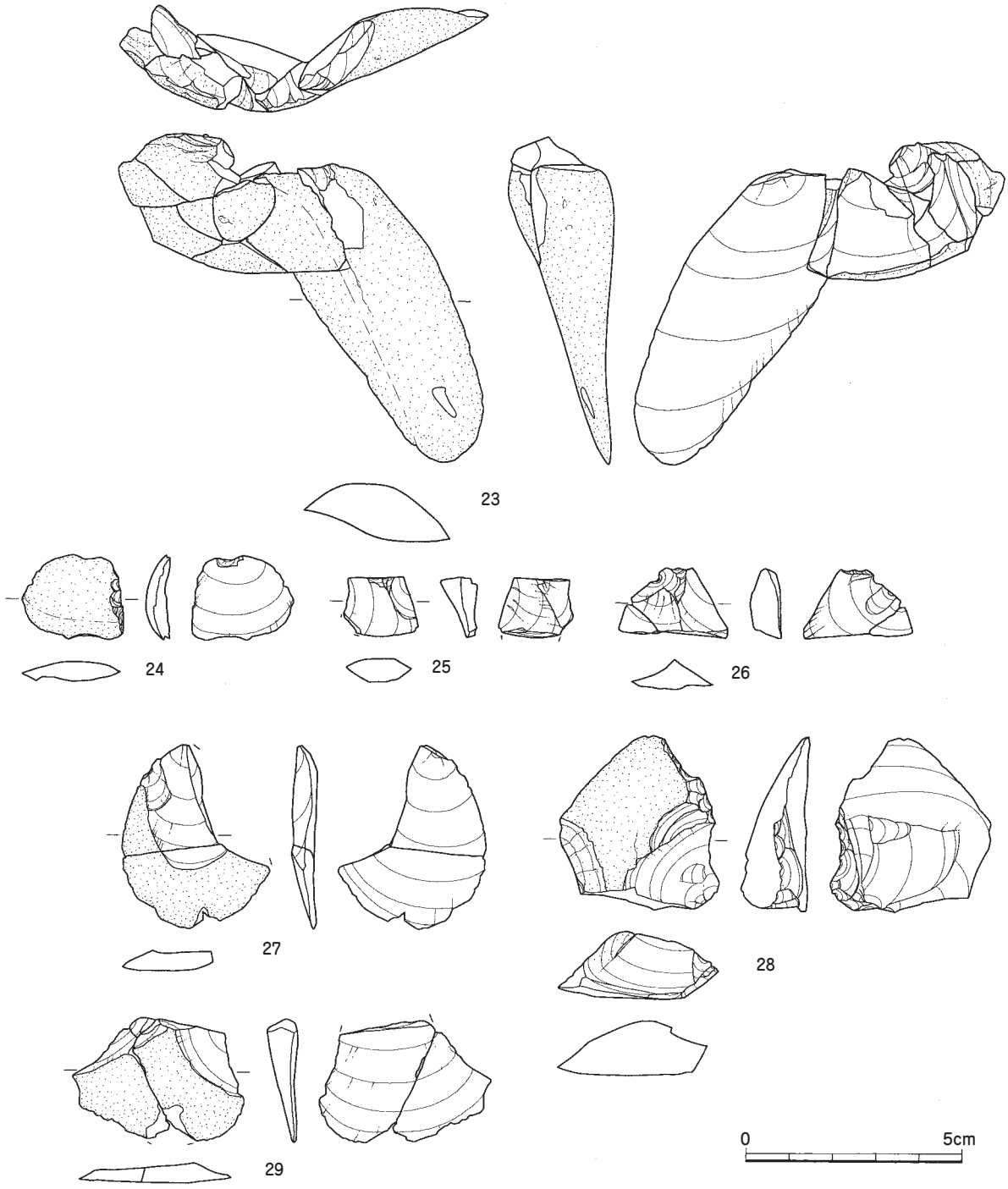
挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	K5－40	70	27.055	石核	黒色安山岩	6.95	7.00	1.80	98.68		厚手剥片素材
2	K5－30	22	27.030	石核	黒色安山岩	4.50	4.41	1.53	34.96	接6	
	K5－40	15	27.454	剥片	黒色安山岩	2.21	3.24	0.75	5.58		
	K5－53	1	27.020	剥片	黒色安山岩	4.39	3.11	1.34	22.95		
3	K5－31	1	27.320	砕片	黒色安山岩	1.40	1.15	0.53	0.52	接4+5	
	K5－40	73	27.052	剥片	黒色安山岩	4.30	2.40	0.83	9.90		
	K5－40	79	27.093	剥片	黒色安山岩	5.30	3.35	1.40	22.05		
	K5－40	114	26.985	剥片	黒色安山岩	3.80	1.70	0.35	1.39		
4	K5－40	60	27.122	剥片	黒色安山岩	4.45	2.15	0.50	5.26	接3	
	K5－40	71	27.055	剥片	黒色安山岩	4.30	3.80	0.65	10.17		
	K5－40	138	26.943	剥片	黒色安山岩	2.60	3.40	0.45	3.93		
5	L5－30	18	27.196	剥片	黒色安山岩	2.85	1.40	0.50	2.49	接1	半欠
	L5－39	18	27.146	剥片	黒色安山岩	2.85	1.30	0.60	1.72		半欠
6	K5－40	87	27.080	剥片	黒色安山岩	4.85	3.20	0.55	7.91		
7	K5－31	3	27.122	剥片	黒色安山岩	3.65	5.30	1.30	19.81		
8	K5－40	63	27.090	剥片	黒色安山岩	4.40	5.00	1.40	23.25		
9	K5－40	16	27.476	台形様石器	黒色安山岩	2.70	4.55	0.80	9.70		
10	K5－40	59	27.112	剥片	黒色安山岩	3.15	4.40	0.60	7.91		
11	K5－40	9	27.442	剥片	黒色安山岩	2.80	3.25	0.70	3.76		
12	K5－40	67	27.163	剥片	黒色安山岩	3.02	3.00	0.80	7.27		
13	K5－40	80	27.060	剥片	黒色安山岩	4.75	2.60	0.50	4.55		
14	K5－40	74	27.130	剥片	黒色安山岩	5.60	1.95	1.15	9.20		
15	K5－40	47	27.106	剥片	黒色安山岩	3.80	3.40	0.90	10.52		
16	K5－40	83	27.073	剥片	黒色安山岩	4.70	3.35	1.10	14.10		
17	K5－30	5	27.305	剥片	黒色安山岩	3.40	2.10	0.60	3.62		
18	K5－30	14	27.490	剥片	黒色安山岩	2.90	2.00	0.55	3.22		
19	K5－40	32	27.366	剥片	黒色安山岩	2.20	1.80	0.25	1.15		半欠
20	K5－40	62	27.115	剥片	黒色安山岩	4.95	1.45	0.65	3.37		
21	K5－49	3	27.027	剥片	黒色安山岩	6.40	5.50	1.60	60.36		厚手剥片素材
22	K5－40	64	27.089	剥片	デイサイト	5.00	3.10	1.30	19.49		
23	K5－50	14	27.060	剥片	黒雲母流紋岩	3.70	2.90	1.25	9.26	接9	
	K5－50	15	27.085	剥片	黒雲母流紋岩	5.90	4.35	1.15	21.10		
	K5－50	19	27.005	剥片	黒雲母流紋岩	2.60	2.65	0.70	3.77		
	K5－51	1	26.908	剥片	黒雲母流紋岩	2.85	1.85	0.90	3.45		
24	K5－50	22	27.050	剥片	黒雲母流紋岩	2.05	2.40	0.40	1.86		
25	K5－50	12	27.030	剥片（小）	黒雲母流紋岩	2.55	1.65	0.75	1.23		下端欠
26	K5－50	5	27.260	剥片（小）	黒雲母流紋岩	1.65	2.60	0.70	1.78		下端欠
27	K5－50	9	27.125	剥片（小）	黒雲母流紋岩	2.60	2.25	0.60	2.73	接8	半欠
	K5－59	2	27.257	剥片（小）	黒雲母流紋岩	1.90	3.50	0.25	1.94		
28	K5－50	11	27.005	削器	黒雲母流紋岩	4.20	3.70	1.33	15.47		
29	K5－50	4	27.496	剥片	黒雲母流紋岩	2.85	3.10	0.70	4.41	接7	上端欠
	K5－50	6	27.075	剥片	黒雲母流紋岩	1.55	2.20	0.50	1.27		下端欠



第114図　第９－７地点出土石器（１）



第115図　第９－７地点出土石器（２）



第116図　第９－７地点出土石器（３）

（10）第９－８A地点（第117図～第119図、図版48）

概要　本地点は環状に分布する集中地点のうちで東に位置しており、石器群はK５－63・64・73・74の４グリッド内において径４mほどの範囲で集中的に出土したものである。接合資料についてみると第９－６地点(K５－11）出土の剥片との接合が確認できた。使用されている石材の主体は黒色安山岩であり、他の地点と共通している。次に多い石材は、石斧材として位置づけられる緑色凝灰岩となり24点出土しており、そのうちの４点（中粒緑色凝灰岩）は接合できた。他はメノウと黒雲母流紋岩が各１点づつみられた。

出土石器群　本石器群でも定型石器は少なく、かろうじて粗雑な作りの掻器が１点出土したのみである。また成品とはいえないが、研磨面の残存する剥片類が多く出土している。これらを観察すると類似するような二種の石材と見做されるため少なくとも２点以上の破損した局部磨製石斧の再利用を試みたものと考えられる。接合資料の観察から推測すると、これらの剥片類は損傷した磨製石斧を母岩に見立てて剥片を剥離したものであろう。前述した第９－５B地点の例と同様と考えられる。ただ本地点の場合、砕片類が15点ほどみられたため新たな器種に作り替えている可能性も否定できない。こうした破損品の再利用をみると、石材の乏しい房総北部ならではの地域性ともいえよう。

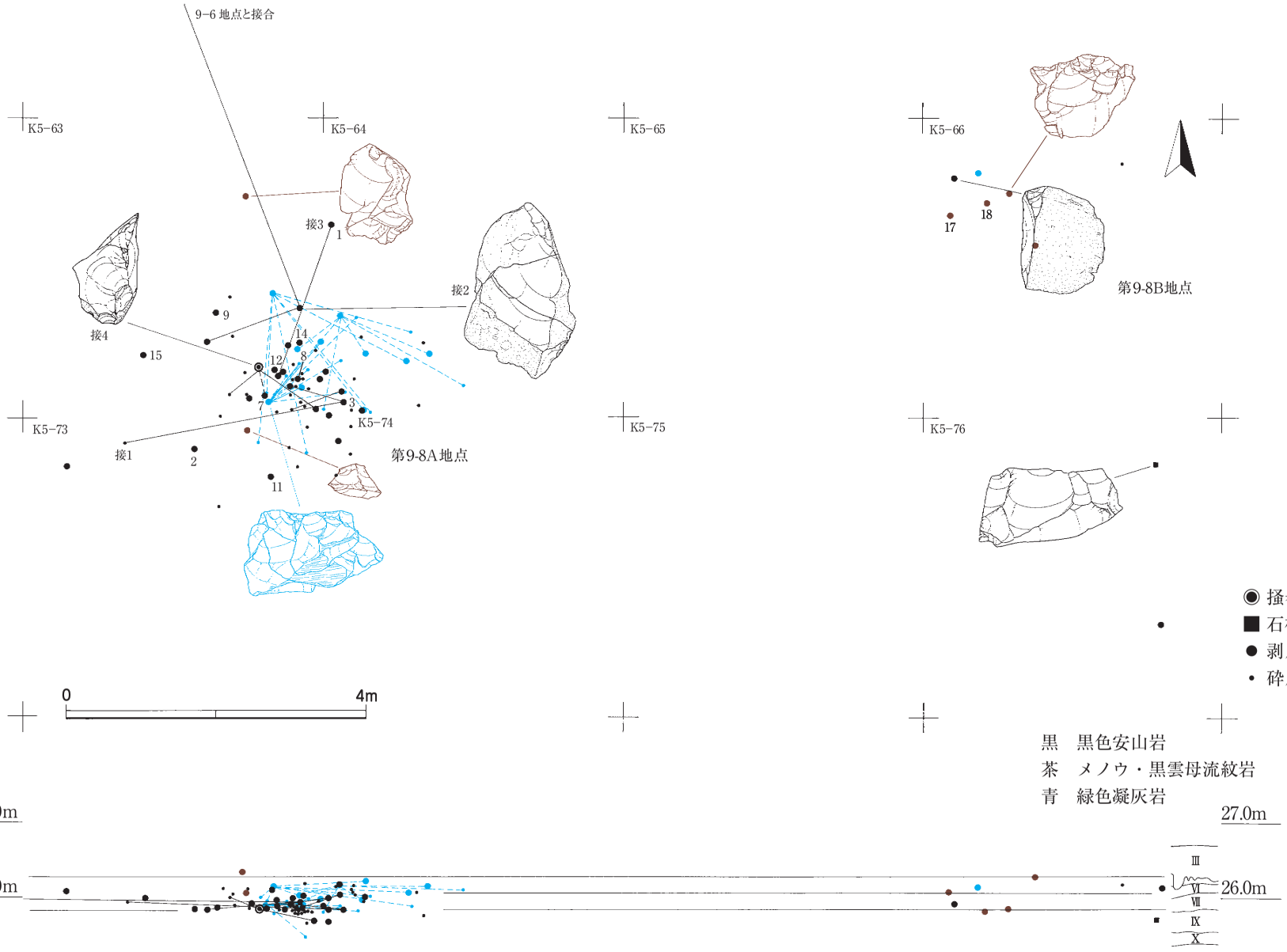
掻器（６）　図示はしていないが５の裏面と６の表面が接合した石器である。６の裏面でも打点部の整形のため剥離された砕片が接合している。いずれも同一グリッドから出土している。刃部は２回の剥離で整形し、その後、微細な調整剥離を若干加えて作り出している。ただ左側縁の未整形部分や全体での粗雑さは否めず、製作途上で廃棄されたとも考えられる。

剥片（１～５・７～24）　１の表面は全面が自然面で弯曲部を折断したものである。この形状から原石の大きさは拳大以上の大きさを有していたものと思われる。２は幅広のきれいに形の整った剥片となるが、使用の痕跡はみられない。３は薄い剥片３点が重複するような形で接合した例である。４も３点が接合しており、下半部片は第９－６地点から出土している。横長剥片をきれいに分割・折断しているものの、その後の加工は認められない。７も折断された下半部の剥片である。これらの大型剥片は折断後、石器素材として利用できなかった剥片が廃棄されたもの考えられる。しかも、本地点に限らずこうした大型剥片は表皮部分を残していることが多い。こうした傾向から推察すると、僅かながらも凹凸のみられる表皮部分は加工に不向きな部位であったとも考えられる。８～15の剥片も使用の痕跡はみられないが、11・12・14などはその形状や剥離の方向から石器製作の進行段階で剥離された剥片といえよう。16は同一グリッドから出土した４点の剥片が接合したもので、表面の下部には明確な研磨痕が認められる。17・18も同様な石材であり、他に11点の砕片が出土している。これらもおそらく磨製石斧から剥離された剥片となろう。19～22は16と比較しやや灰色味（粗粒緑色凝灰岩）をおびる。ここでも４点の剥片には研磨痕が認められる。他に砕片が３点出土しており、磨製石斧から剥取した剥片であることは明白である。前述したように、これらの剥片から本地点では、少なくとも２点以上の磨製石斧が再利用を目的とした母岩となっていたことが理解できる。23は下端の一部に微細な剥離痕が認められる。24は黒雲母流紋岩で右側縁を使用しているようであるが、加工の痕跡は判然としない。

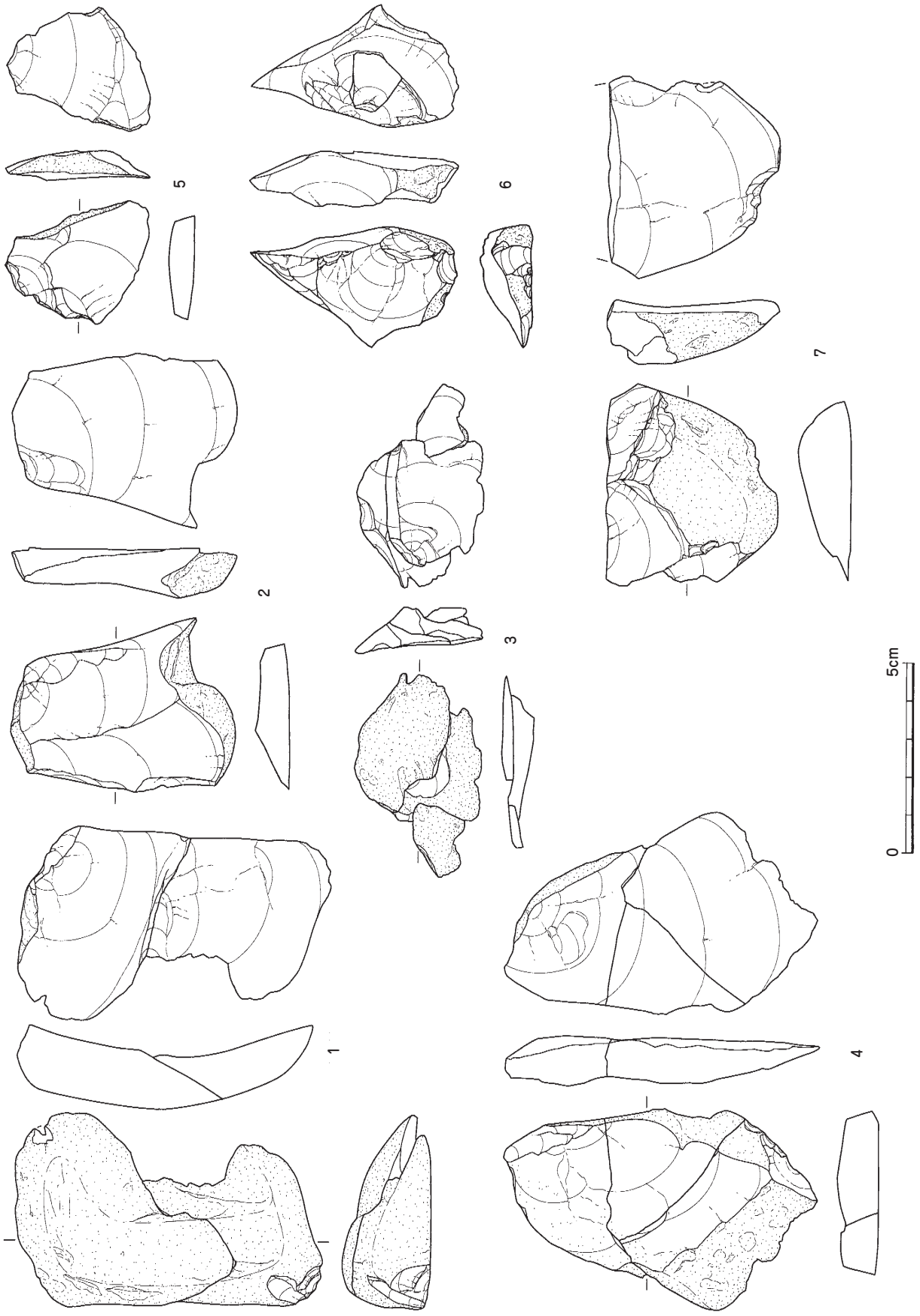
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩58点　中粒緑色凝灰岩17点　粗粒緑色凝灰岩７点　メノウ１点　黒雲母流紋岩１点

器種　掻器１点　剥片38点（石斧片10）　砕片45点　計84点



第117図　第９－８Ａ地点出土石器分布図



第118図　第９－８Ａ地点出土石器（１）

第119図　第９－８Ａ地点出土石器（２）

第44表　第９－８Ａ地点実測石器属性表

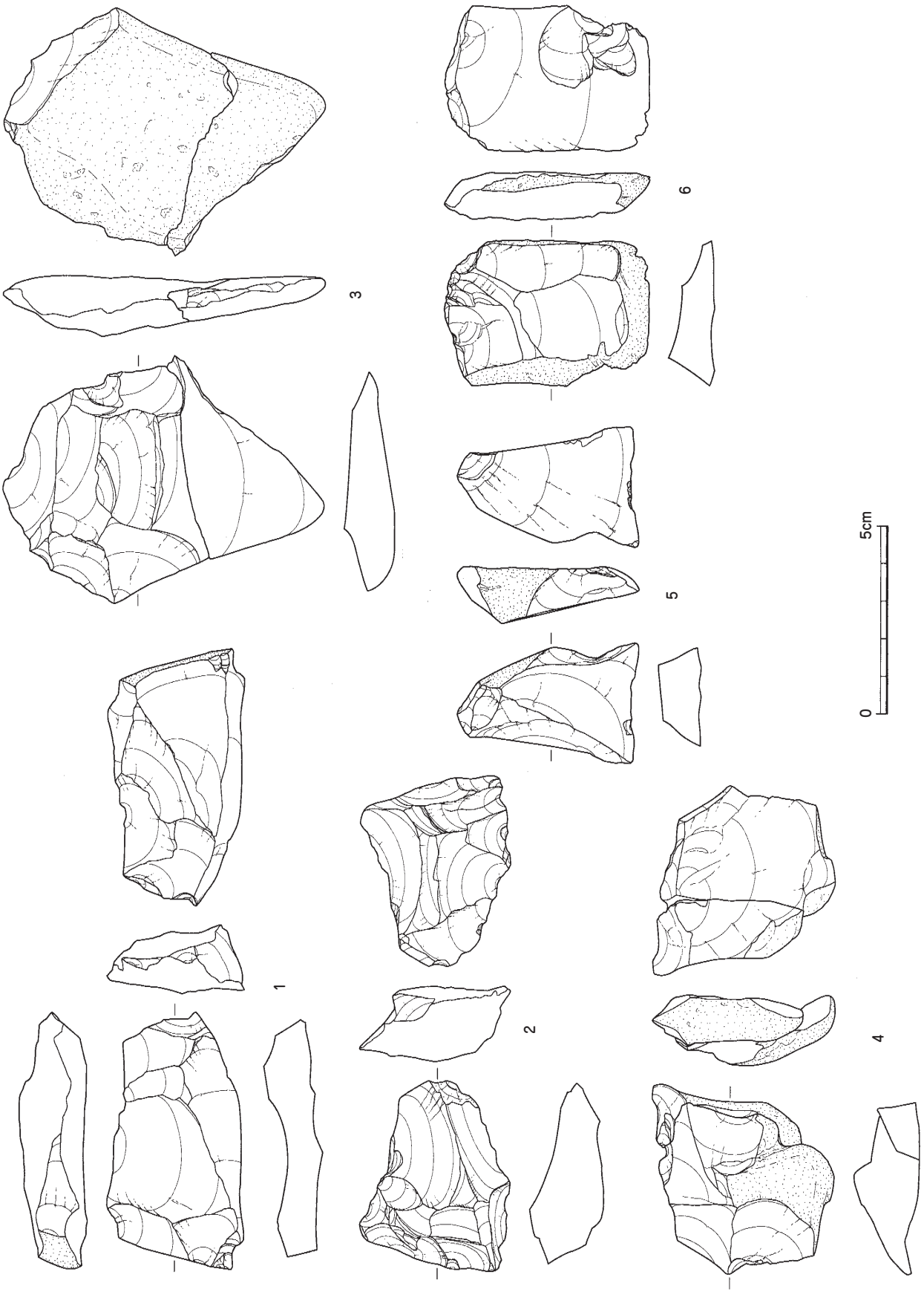
挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ５－63	21	26.980	剥片	黒色安山岩	4.30	4.40	1.30	26.32	接３	
	Ｋ５－64	1	27.047	剥片	黒色安山岩	4.75	6.30	1.70	48.01		
2	Ｋ５－73	3	26.936	剥片	黒色安山岩	6.90	4.45	1.25	32.00		
3	Ｋ５－63	38	26.924	剥片	黒色安山岩	2.30	1.65	0.60	4.93	接１	
	Ｋ５－64	18	26.916	剥片	黒色安山岩	3.60	2.80	0.40	4.29		
	Ｋ５－73	2	27.025	砕片	黒色安山岩	1.40	2.10	0.50	1.56		
4	Ｋ５－11	17	27.125	剥片	黒色安山岩	4.90	3.30	1.10	21.53	接２	半欠
	Ｋ５－63	1	27.006	剥片	黒色安山岩	2.85	4.30	1.65	19.55		下端欠
	Ｋ５－63	18	26.190	剥片	黒色安山岩	4.70	2.95	1.00	14.00		半欠
5	Ｋ５－63	44	26.770	剥片	黒色安山岩	4.10	2.75	0.75	8.92	接４	
6	Ｋ５－63	10	27.062	砕片	黒色安山岩	1.60	1.30	0.30	0.62		
	Ｋ５－63	19	26.938	掻器	黒色安山岩	5.30	2.90	1.40	18.66		
7	Ｋ５－63	33	26.944	剥片	黒色安山岩	4.60	5.20	1.50	38.43		上端欠
8	Ｋ５－63	31	26.900	剥片	黒色安山岩	2.80	4.50	0.80	9.21		
9	Ｋ５－63	14	26.970	剥片	黒色安山岩	2.90	3.80	0.90	12.13		
10	Ｋ５－63	16	26.975	剥片	黒色安山岩	2.75	3.15	0.65	4.18		
11	Ｋ５－73	9	27.245	剥片	黒色安山岩	2.50	2.70	0.40	2.89		
12	Ｋ５－63	8	27.005	剥片	黒色安山岩	2.05	2.60	0.60	3.46		
13	Ｋ５－63	32	26.910	剥片	黒色安山岩	3.05	2.50	0.55	4.01		
14	Ｋ５－63	13	27.095	剥片	黒色安山岩	2.30	2.75	0.70	4.01		下端欠
15	Ｋ５－63	12	27.090	剥片	黒色安山岩	3.75	1.80	0.50	3.99		半欠
16	Ｋ５－63	24	26.968	砕片	緑色凝灰岩	1.05	2.10	0.40	0.61		磨製石斧片
	Ｋ５－63	25	26.984	剥片	緑色凝灰岩	3.20	5.50	0.90	16.53		磨製石斧片研磨面あり
	Ｋ５－63	30	26.918	剥片	緑色凝灰岩	2.90	3.00	0.70	5.28		磨製石斧片研磨面あり
	Ｋ５－63	35	26.910	剥片	緑色凝灰岩	3.90	3.30	0.65	8.69		磨製石斧片研磨面あり
17	Ｋ５－64	9	27.180	剥片	緑色凝灰岩	2.80	1.90	0.45	2.11		磨製石斧片
18	Ｋ５－63	7	27.154	剥片	緑色凝灰岩	1.77	2.40	0.40	1.57		磨製石斧片
19	Ｋ５－64	15	26.945	剥片	緑色凝灰岩	2.15	3.30	0.70	4.54		磨製石斧片研磨面あり
20	Ｋ５－64	11	27.160	剥片	緑色凝灰岩	2.55	2.63	0.45	1.65		磨製石斧片研磨面あり
21	Ｋ５－64	7	27.066	剥片	緑色凝灰岩	2.30	2.35	0.40	1.99		磨製石斧片研磨面あり
22	Ｋ５－63	3	27.035	剥片	緑色凝灰岩	1.70	3.30	0.40	2.47		磨製石斧片研磨面あり
23	Ｋ５－73	1	27.085	剥片	メノウ	1.70	1.90	0.45	1.55		
24	Ｋ５－63	5	27.180	剥片	黒雲母流紋岩	3.50	4.80	0.90	11.08		

(11) 第９－８B地点（第95・113図・第120図～第123図、図版48・49）

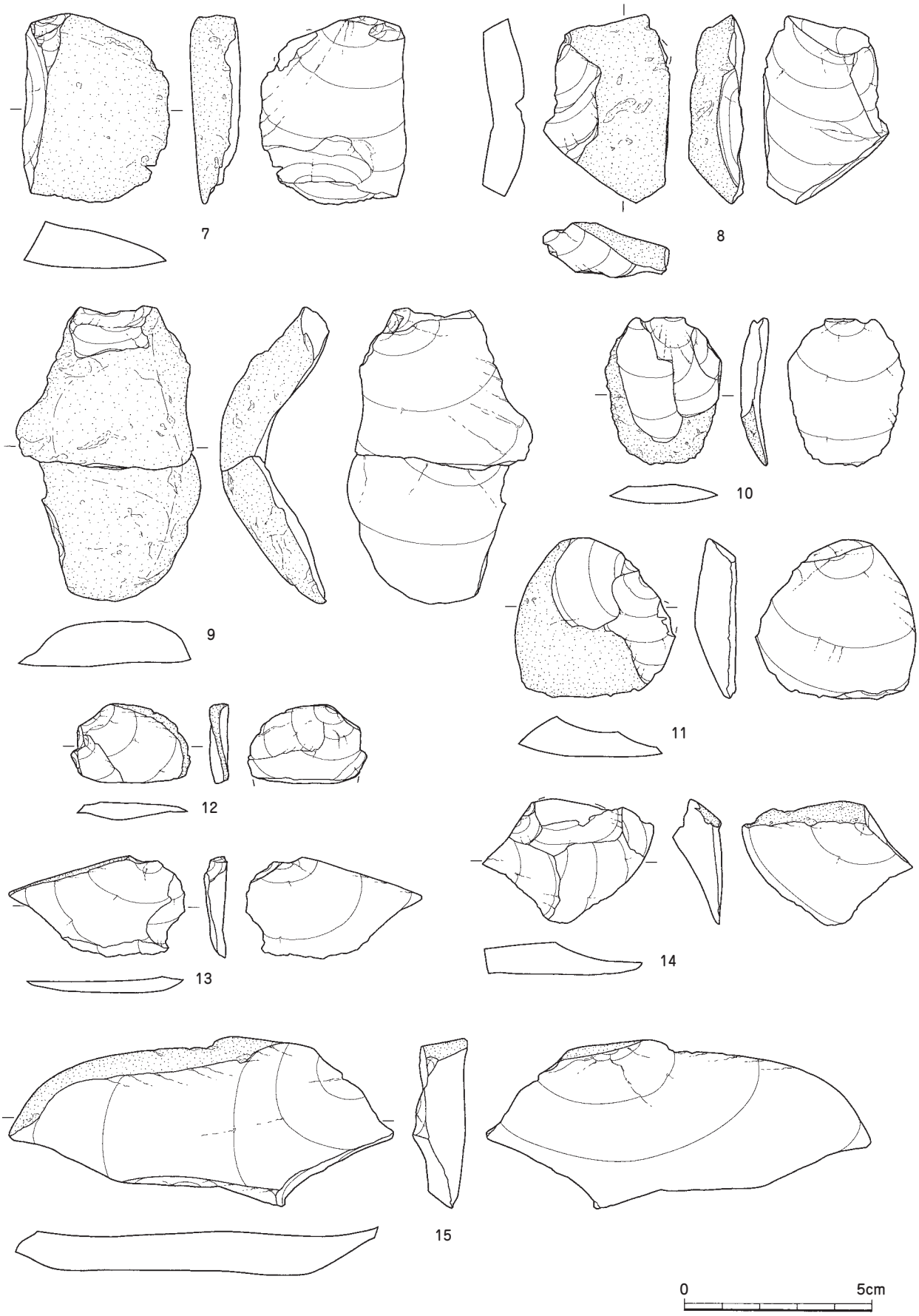
概要　本地点は第９－８A地点北側に位置し、石器群は第９－６地点に向かうような形で帯状に散布しており、特に集中地点を形成するような場所はみられなかった。どちらかといえば環状の外縁を形成するような分布状況を示していた。このため本地点の括りは第９地点の中でも最も広範囲となっている。石材の主体は黒色安山岩で、次いで黒雲母流紋岩・メノウとなり、石斧材でもある緑色凝灰岩も６点出土しており、他の地点とも共通するような石材組成となっている。さらに石斧材としての中粒緑色凝灰岩や粗粒緑色凝灰岩は、前述したA地点と同様に色彩の若干異なる石材であり相互の関連性を示唆する資料と考えられた。

出土石器群　出土した石器群の内容についてみると、広い分布域を一括してまとめたにもかかわらず、ここでも成品の出土は極端に少なく比較的大型の剥片が多く出土している。その点でも９－４B・９－５Bといった地点との類似性を指摘できる。いずれも石器群は疎らな分布状況を示しており、石器製作よりも石器素材が広く散らばっているような感じを呈する場所といえよう。

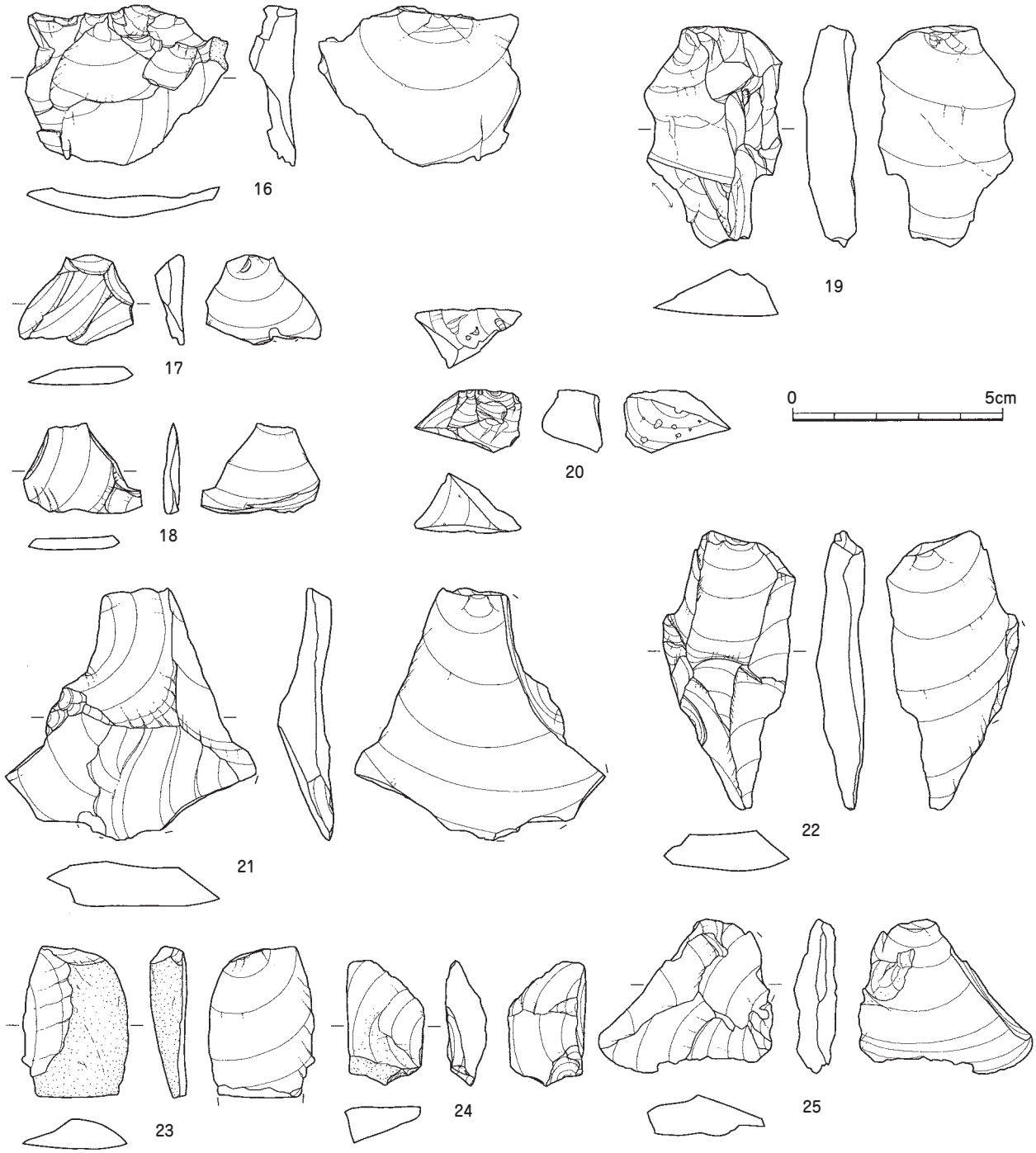
台形様石器（26）　刃部が緩やかな山形を呈したもので、表面の一部には自然面を残す。両側面の加工は精緻とはいえないが、裏面では２回の大きな剥離により基部を整形し若干の調整剥離を加えている。この



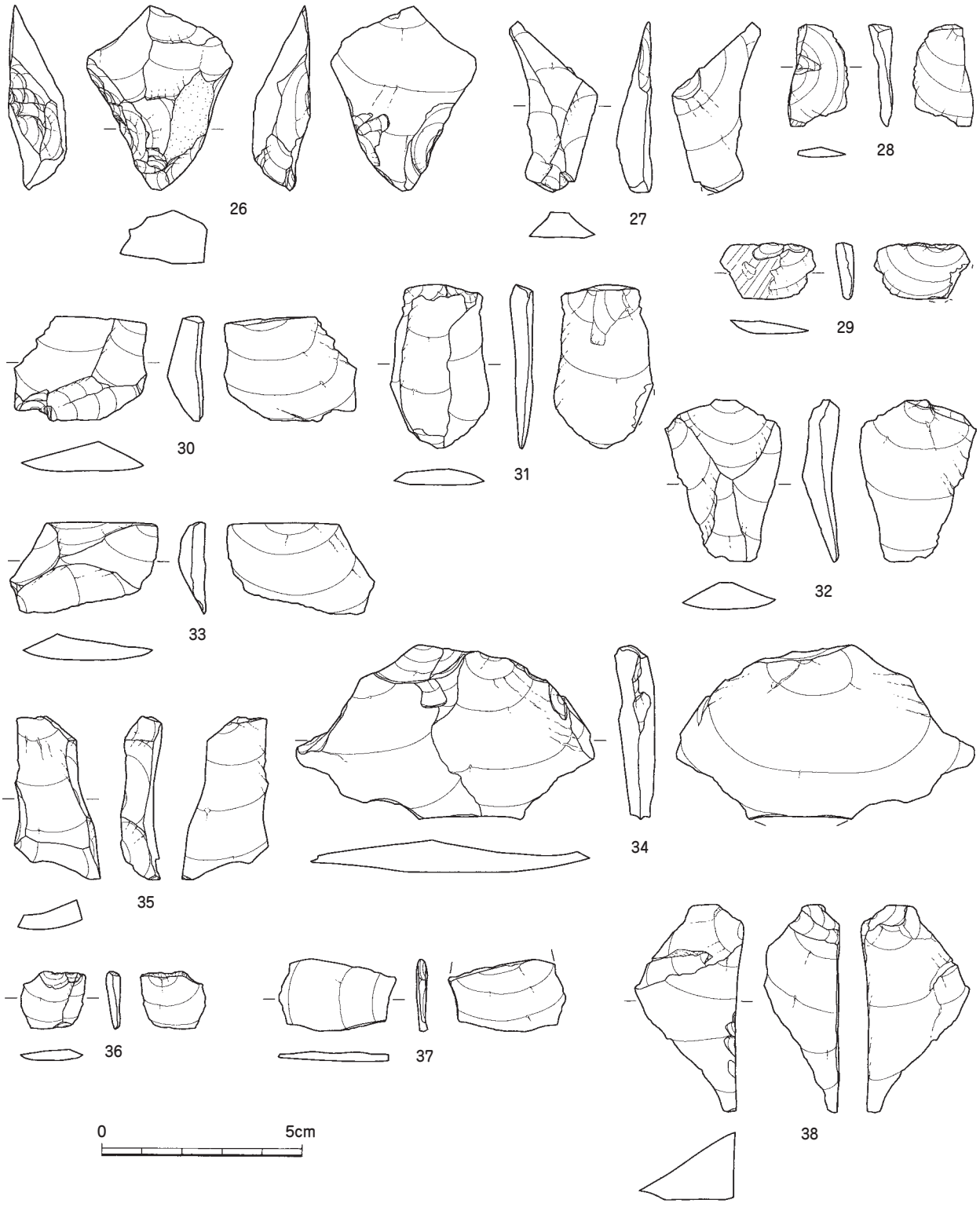
第120図　第９－８Ｂ地点出土石器（１）



第121図　第９－８Ｂ地点出土石器（２）



第122図　第９－８Ｂ地点出土石器（３）



第123図　第９－８Ｂ地点出土石器（４）

ため成品としての粗雑さは否めないが台形様石器としてよいであろう。

剥片（４～25・27～38）　４～15は黒色安山岩で表面の一部に自然面を残している。なお、４・６・９は同一グリッドあるいは隣接グリッドから出土した剥片が接合したものである。６の図示は単体となっているが２点の剥片と砕片１点が接合する。これらはいずれも石器素材と成り得る十分な形状を有しているが使用等の痕跡は認められない。19は本地点として稀少な赤色チャートである。下端の一部は折断されている。左下部側縁には微細な刃こぼれ痕が認められるところから石器として使用されたようである。20は平坦な面を打面とした数回の剥離痕を観察できる。楔形石器を意識した可能性も否定できない。21～25は黒雲母流紋岩で、22の右側縁には小さな剥離を施しているようであるが明確ではない。28・29は破損した石斧から剥離された剥片と見做される。29の表面には明確な研磨面が認められ、28の下部にもその痕跡がみられる。２点は色彩が異なるため同一の石斧から剥離されたものではない。27・30～38は自然面の認められない黒色安山岩で、34は幅広で大形の剥片である。ここでも多数の剥片が出土しているが使用の痕跡を残すものはほとんどみられない。

石核（１～３）　１は厚手の剥片を分割した後に、表裏面から数枚の剥片を剥離している。自然面もみられないところから、原石はかなり大きな礫と思われる。２は剥離により形成された平坦面を打点部として少なくとも三方向から剥片剥取を試みている。剥離面からみると横長剥片の剥取を意識したものであろう。３には自然面が多く残されている。しかも下部の剥離面は平坦であるところから打面作出のために剥離されたものであろう。剥片の上部が厚手であったため、厚手部分から数枚の剥片を剥離したようである。なお、剥片剥離は分割後のものである。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石２点　チャート１点　赤色チャート１点　黒色安山岩79点　デイサイト１点　中粒緑色凝灰岩１点　粗粒緑色凝灰岩５点　メノウ４点　黒雲母流紋岩７点

器種　台形石器１点　剥片65点（石斧片２）　砕片32点　石核３点　計101点

第45表　第９－８Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ５－76	1	26.700	石核	黒色安山岩	3.80	6.60	1.70	47.40		
2	Ｋ５－20	1	27.063	石核	黒色安山岩	4.03	5.15	1.90	35.03		
3	Ｋ５－44	10	27.043	石核	黒色安山岩	7.00	5.70	1.62	72.68	接11	
	Ｋ５－45	9	27.045	剥片	黒色安山岩						厚手剥片素材
4	Ｋ５－45	4	27.062	剥片	黒色安山岩	1.90	4.00	1.20	10.62	接12	下端欠
	Ｋ５－45	5	27.105	剥片	黒色安山岩	4.70	4.30	1.65	30.43		
5	Ｋ５－34	4	27.068	剥片	黒色安山岩	4.85	3.20	1.20	20.34		半欠
6	Ｋ５－20	7	27.376	剥片	黒色安山岩	5.60	4.00	1.25	33.21		
	Ｋ５－30	28	27.112	剥片	黒色安山岩	1.78	2.40	0.36	1.39		
	Ｋ５－30	4	27.286	剥片	黒色安山岩	3.00	1.38	0.62	2.69		
	Ｌ５－39	8	27.422	砕片	黒色安山岩	1.32	0.94	0.44	0.49		
7	Ｋ５－66	5	26.903	剥片	黒色安山岩	5.10	4.00	1.35	31.48		半欠
8	Ｋ５－46	1	27.095	剥片	黒色安山岩	4.95	3.30	1.20	24.06		両側欠
9	Ｋ５－20	2	27.077	剥片	黒色安山岩	4.20	4.40	1.30	28.72	接13	
	Ｋ５－20	4	27.153	剥片	黒色安山岩	5.00	4.70	1.40	37.06		
10	Ｋ５－23	1	27.083	剥片	黒色安山岩	4.05	3.15	0.55	7.86		
11	Ｋ５－23	2	27.115	剥片	黒色安山岩	4.30	4.35	1.05	19.93		
12	Ｋ５－13	5	27.046	剥片	黒色安山岩	2.20	3.20	0.50	3.97		下端欠

13	K５－56	4	26.960	剥片	黒色安山岩	3.80	3.10	0.50	5.55		
14	K５－43	1	27.125	剥片	黒色安山岩	3.25	3.70	0.95	11.45		
15	K５－56	5	26.962	剥片	黒色安山岩	4.40	9.60	1.10	56.96		
16	K５－66	8	26.870	剥片	メノウ	3.90	4.50	0.65	12.35		
17	K５－66	4	27.106	剥片	メノウ	2.20	2.70	0.60	2.52		
18	K５－66	7	26.859	剥片	メノウ	2.30	2.35	0.35	2.19		
19	K５－45	1	27.148	剥片	赤色チャート	5.40	3.15	0.95	18.19		
20	K５－56	1	27.460	剥片	黒曜石	2.35	1.40	1.15	3.25		
21	K５－44	2	27.028	剥片	黒雲母流紋岩	6.10	6.00	1.10	24.03		側欠
22	K５－23	3	27.047	剥片	黒雲母流紋岩	6.30	3.10	0.95	17.32		
23	K５－12	2	27.236	剥片	黒雲母流紋岩	3.70	2.60	0.90	7.07		下端欠
24	K５－33	8	26.876	剥片	黒雲母流紋岩	3.10	1.85	0.80	4.21		半欠
25	K５－45	3	27.062	剥片	黒雲母流紋岩	3.80	4.10	0.80	9.69		半欠
26	K５－12	3	27.197	台形様石器	黒色安山岩	3.65	3.90	1.30	19.24		
27	K５－33	3	27.058	剥片	黒色安山岩	3.70	2.10	0.80	5.38		下端欠
28	K５－66	3	27.080	剥片	緑色凝灰岩	2.60	1.40	0.50	1.55		石斧材、一部に研磨
29	K５－55	1	27.258	剥片	緑色凝灰岩	1.90	2.30	0.40	1.32		石斧材、研磨面あり
30	K５－34	1	27.020	剥片	黒色安山岩	2.75	3.30	0.80	7.71		上端欠
31	K５－13	2	27.148	剥片	黒色安山岩	4.20	2.50	0.50	5.95		
32	K５－21	2	27.124	剥片	黒色安山岩	4.15	2.90	0.80	7.91		
33	K５－55	8	26.907	剥片	黒色安山岩	2.35	3.50	0.70	5.19		上端欠
34	K５－34	5	27.080	剥片	黒色安山岩	4.40	6.50	0.90	24.47		
35	K５－36	1	27.365	剥片	黒色安山岩	4.35	2.05	0.65	6.75		
36	K５－54	37	27.321	剥片	黒色安山岩	3.00	1.80	0.30	1.66		
37	K５－45	8	27.321	剥片	黒色安山岩	3.00	1.80	0.30	1.66		下端欠
38	K５－55	7	27.038	剥片	黒色安山岩	5.23	2.60	1.80	17.56		半欠

（12）第９－９地点（第105図・第124図～第126図、図版49・50）

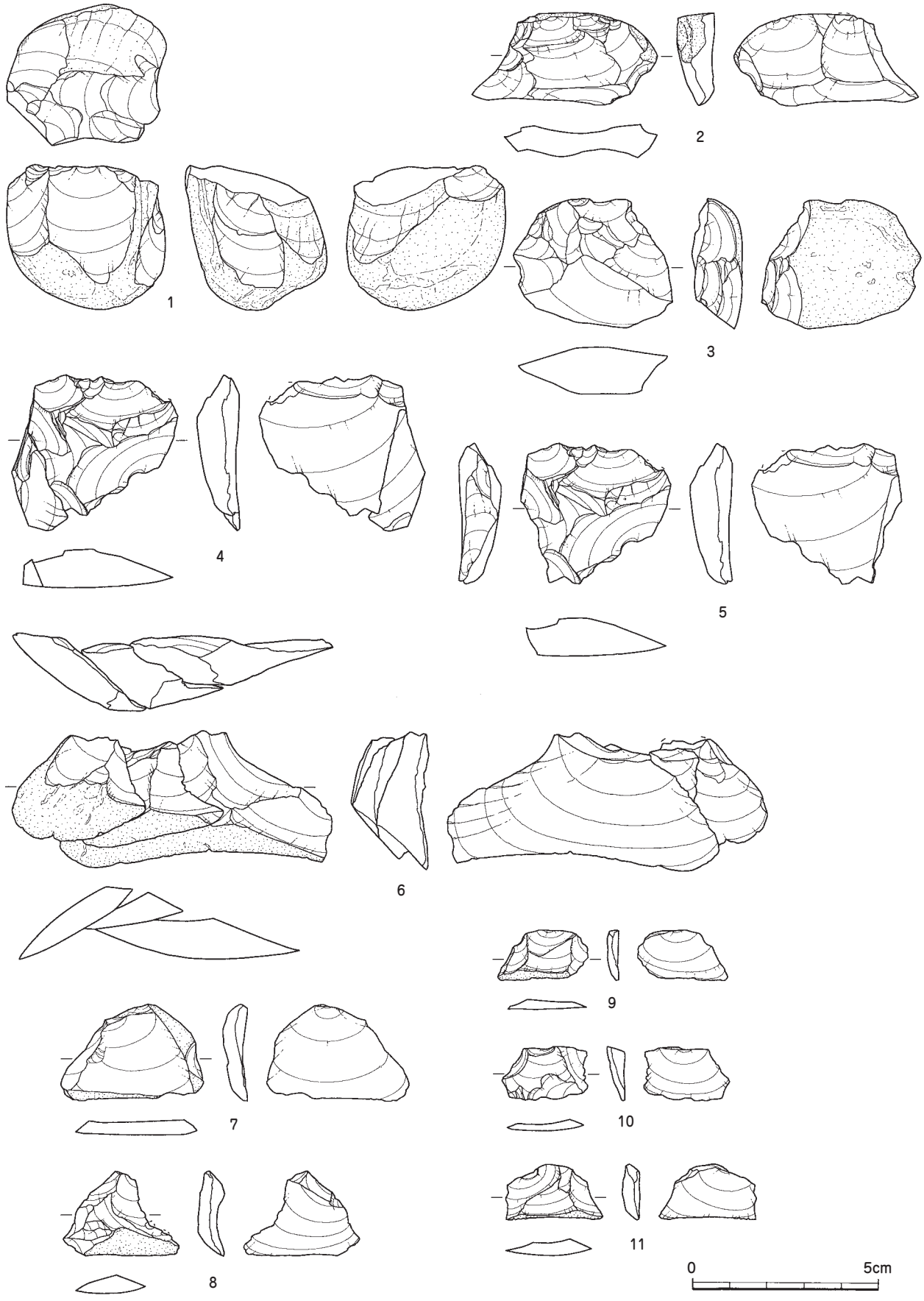
概要　本地点は、出土遺物が環状に分布する中で第９－７地点の南に位置し、遺物の分布密度が最も濃い地点となっている。特にK５－81グリッドでの出土総数は230点余を数えた。その大部分は、石器製作過程における整形段階で剥離された剥片類と考えられる薄い剥片や調整剥離による数mmの砕片であった。こうした剥片・砕片の排出は、本地点が成品細部の仕上げを物語る場所であったことの証左となろう。ここで採用されている石材は黒色安山岩が圧倒しており、石材という点でも第９地点の特色をよくあらわしている石器集中地点といえる。

出土石器群　出土した石器群についてみると、ここでも成品は少なくナイフ形石器と楔形石器が各１点づつ出土したのみであった。しかしナイフ形石器の石材は硬質頁岩製で集中地点から少し離れた場所（K４－01）となる。つまり主体を占める黒色安山岩を用いた定型石器の出土は楔形石器のみとなる。

ナイフ形石器（35）　断面三角を呈した切出形に近い形態のナイフ形石器である。背面が分厚いため整形は打点部を中心に大きな剥離を施してナイフ形石器としての形態を整えている。また、刃部先端にみられる約１cmほどの剥離は調査時のものである。本地点の中心部から離れて出土したものであるが、出土層位もほぼ同様の高さを示しているため同時期の石器と考えたい。

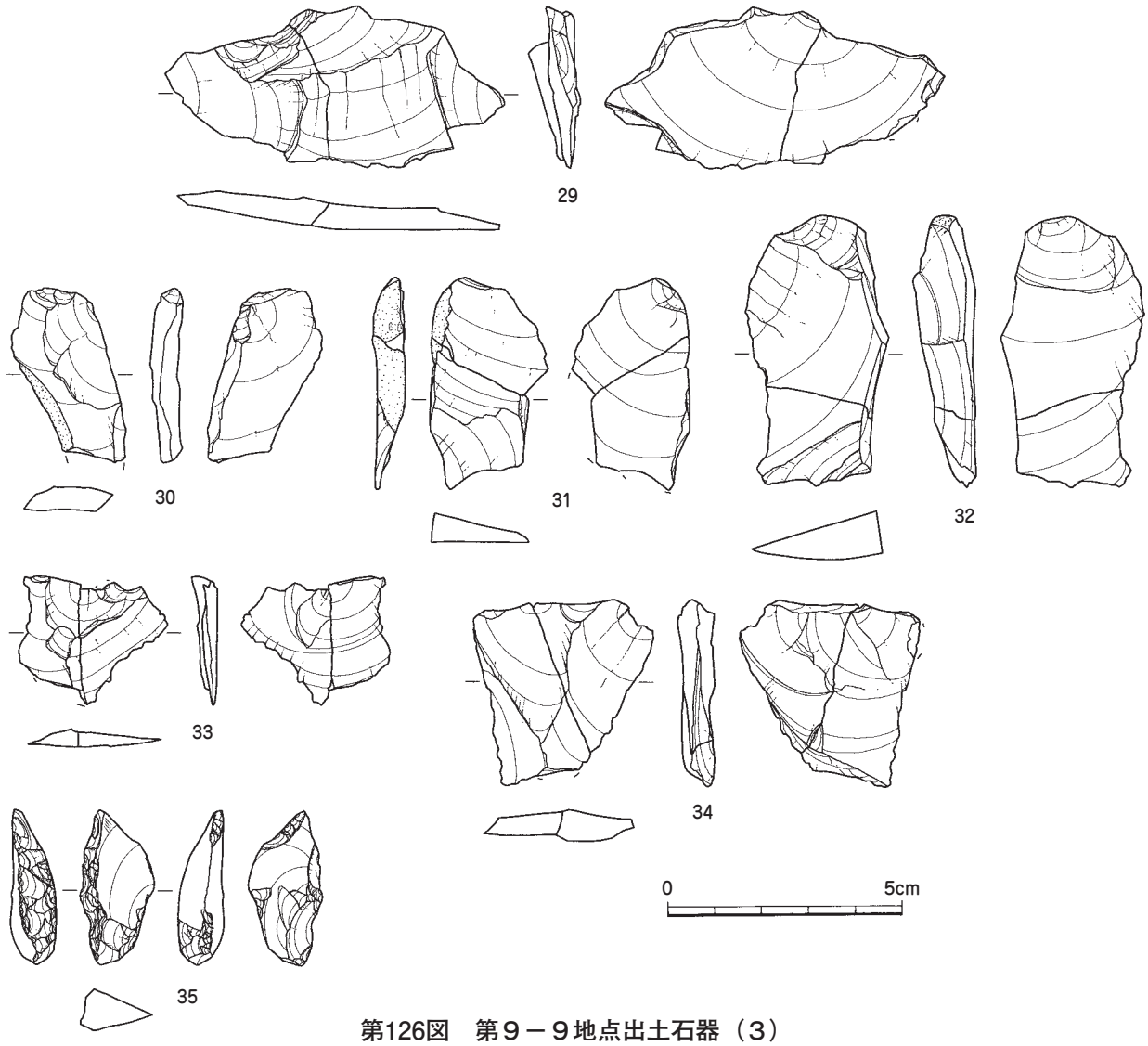
楔形石器（12）　折断した剥片の右側面と上部に整形の痕跡が認められる。その形状から台形様石器とも考えられるが、刃部にあたる先端部が小さな剥離によって加工されているため楔形石器とした。下部は剥離された状態で加工はみられない。一方、右側面は数回の剥離によって平坦に仕上げられている。他地点出土の楔形石器とは下端部の作りが異なるが同種の石器として使用されたものと思われる。

二次加工剥片（５）　隣接したグリッドから出土した剥片が接合したもの（４）で、主剥離面から推定す



第124図　第９－９地点出土石器（１）

第125図　第９－９地点出土石器（２）



第126図　第９－９地点出土石器（３）

ると剥離された時点の大きさは二倍近くあったものと考えられる。表面上部は粗く剥離される。折断後に左側面での剥離が認められるため二次加工剥片として取り扱った。しかし使用の痕跡は明確でなく、多方向からの剥離も粗雑なため石核とも考えられる。

剥片（２・３・６～11・13～34）　２は比較的厚手の剥片で周囲にも小さな剥離が加えられている。だが石器として認定できるまでには至っていない。３は自然面を多く残す分厚い剥片となる。上部での剥離は整形のためか、剥片剥取によるものか識別できないため剥片とした。なお、自然面の右側にみられる剥離は主剥離以前のものである。６は４点の剥片が接合したもの（図示は３点）で、剥離順序がよく理解できる接合資料である。７～11は小型で薄い剥片となり、縦方向の断面は緩やかに弯曲する。石器製作時の剥片といえよう。19～23も同様な剥片である。17・29～34は折断の認められる大きめの剥片であるが、使用痕等は認められない。

石核（１）　自然面が多く存在しているため小型の礫であったものと思われる。打面部では２～３回の剥離によって打面が設定されている。表面と右側面からの剥離痕が認められるが数枚の剥片を剥取して廃棄されたものであろう。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩299点　硬質頁岩１点　安山岩２点

器種　ナイフ形石器１点　楔形石器１点　二次加工剥片１点　剥片66点　砕片232点　石核１点　計302点

第46表　第９－９地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ５－81	83	27.073	石核	黒色安山岩						
2	Ｋ５－80	32	27.068	剥片	黒色安山岩	2.95	3.85	0.80	12.06		下端欠
3	Ｋ５－80	39	27.070	剥片	黒色安山岩	3.40	4.35	1.40	19.94		
(4)	Ｋ５－80	23	27.153	剥片	黒色安山岩	3.30	1.15	0.70	2.72	接12	半欠　接合部剥片
5	Ｋ５－81	97	27.076	二次加工	黒色安山岩	3.85	3.90	1.10	16.42		
6	Ｋ５－80	18	27.134	剥片	黒色安山岩	2.80	3.80	0.80	7.54	接14	
	Ｋ５－80	36	27.120	剥片	黒色安山岩	3.30	3.40	0.70	7.98		
	Ｋ５－91	2	27.038	剥片	黒色安山岩	3.70	7.40	1.10	24.43		
	Ｋ５－81	28	27.270	剥片	黒色安山岩	2.35	2.58	0.55	3.41		
7	Ｋ５－81	82	27.100	剥片	黒色安山岩	2.60	3.80	0.45	4.23		
8	Ｋ５－81	67	27.146	剥片	黒色安山岩	2.30	2.75	0.50	3.15		
9	Ｋ５－81	57	27.116	剥片	黒色安山岩	1.40	2.20	0.30	0.89		
10	Ｋ５－81	187	26.990	剥片	黒色安山岩	1.55	2.20	0.30	1.15		
11	Ｋ５－81	11	27.500	剥片	黒色安山岩	1.60	2.05	0.50	1.74		上端欠
12	Ｋ５－81	68	27.120	楔形石器	黒色安山岩	2.00	3.30	0.60	6.36		右側面に整形痕
13	Ｋ５－91	3	27.145	剥片	黒色安山岩	3.45	5.50	0.92	12.44		
14	Ｋ５－80	34	27.030	剥片	黒色安山岩	5.60	3.95	1.60	34.95		
15	Ｋ５－80	16	27.120	剥片	黒色安山岩	2.10	4.30	0.80	8.09		
16	Ｋ５－81	146	27.030	剥片	黒色安山岩	2.03	2.80	0.53	3.19		
17	Ｋ５－81	101	27.046	剥片	黒色安山岩	3.30	4.35	0.80	10.18		下端欠
18	Ｋ５－80	28	27.118	剥片	黒色安山岩	2.70	3.80	0.55	6.24		
19	Ｋ５－81	228	26.880	剥片	黒色安山岩	3.15	2.38	0.55	3.06		
20	Ｋ５－81	202	27.002	剥片	黒色安山岩	2.60	2.45	0.43	2.17		
21	Ｋ５－80	12	27.200	剥片	黒色安山岩	2.30	2.50	0.60	3.38		
22	Ｋ５－81	159	26.993	剥片	黒色安山岩	2.70	1.50	0.30	1.28	接７	側欠
	Ｋ５－81	163	27.000	砕片	黒色安山岩	2.60	0.80	0.25	0.52		
23	Ｋ５－81	76	27.078	剥片	黒色安山岩	2.03	2.25	0.50	2.26		
24	Ｋ５－80	7	27.340	剥片	黒色安山岩	1.65	2.20	0.50	1.71		
25	Ｋ５－80	14	27.078	剥片	黒色安山岩	3.20	2.55	0.65	5.93	接16	
	Ｋ５－81	96	27.064	剥片	黒色安山岩	2.40	1.40	0.40	1.52		下端欠
26	Ｋ５－81	103	27.047	剥片	黒色安山岩	3.35	1.10	0.50	1.78		
27	Ｋ５－81	33	27.260	剥片	黒色安山岩	1.80	2.10	0.45	1.45		上下欠
28	Ｋ５－81	111	27.045	剥片	黒色安山岩	1.65	1.80	0.50	1.52		下端欠
29	Ｋ４－01	1	27.082	剥片	黒色安山岩	4.93	3.25	0.60	7.98	接９	
	Ｋ５－80	43	27.045	剥片	黒色安山岩	3.15	2.90	0.63	4.72		半欠
30	Ｋ５－80	33	27.106	剥片	黒色安山岩	3.25	0.20	0.55	4.90		
31	Ｋ５－80	1	27.338	剥片	黒色安山岩	3.30	2.15	0.60	3.56	接13	上端欠
	Ｋ５－91	1	27.550	剥片	黒色安山岩	2.85	1.75	0.50	2.52		半欠
32	Ｋ５－80	50	27.000	剥片	黒色安山岩	2.15	2.50	0.80	3.83	接15	上端欠
	Ｌ４－07	2	26.885	剥片	黒色安山岩	4.25	2.85	1.10	16.92		下端欠
33	Ｋ５－81	41	27.160	剥片	黒色安山岩	2.45	1.30	0.40	1.28	接８	半欠
	Ｋ５－80	37	27.050	剥片	黒色安山岩	2.70	2.00	0.35	1.14		
34	Ｋ５－81	21	27.280	剥片	黒色安山岩	3.80	2.85	0.70	5.72	接６	下端欠
	Ｋ５－81	132	27.045	剥片	黒色安山岩	3.30	2.25	0.77	4.67		半欠
35	Ｋ４－01	2	27.130	ナイフ形石器	硬質頁岩	3.35	1.55	0.95	3.85		

(13) ９－10A地点（第127図・第128図、図版７・50）

概要　本地点は、第９地点とした環状石器群の南端に位置する。前述した第９－９地点が北に、第９－５地点が西に存在している。地形的にみれば南から台地を抉るような形で谷頭が接近しており、遺物出土範囲の一部は斜面部にかかる。ここでの石器群はＫ４－11グリッドから同31グリッドへと南北に約８ｍの長さで楕円形状に分布する。石材についてみると、Ｋ４－11グリッド周辺では黒色安山岩、Ｋ４－21・31・32グリッドでは黒曜石が主体となっていた。このためより厳密に考えるならば、石材によって石器集中地点を二分することも可能である。また、出土した黒曜石は特徴的な色彩を帯びており、黒色部分と不純物を含む黒褐色部分が層状にみられるものであった。これまでにみられた第１地点・第７地点などの黒曜石とは産地が異なるようである。

出土石器群　成品として加工された石器は存在せず、すべて剥片・砕片類で構成されていた。砕片の大半は黒曜石であり、これらは石質の観察から同一母岩から剥離されているようであった。また、Ｋ４－11グリッドから石斧片が１点出土している。この石斧片は、おそらく局部磨製石斧の破損品から剥離されたものであろう。前述したように、この種の剥片は第９地点の中でも第９－１・同４Ｂ・同５Ｂ・同６・同８Ａ・同８Ｂの各地点から少数ではあるが出土している。このように各地点から出土しているということは地点間相互の関連を有機的に結びつけるものであり、同時期に居住していた人びとの行動の結果として捉えることができよう。

剥片（１～６）　１の下半部は折断され三角形を呈した剥片となり、左側縁には抉るような剥離が加えられている。２は薄手の小型剥片で、上部は折断されている。加工の痕跡はみられない。３・４も小型の剥片となり使用痕等は認められない。５は小さな剥片であるが、局部磨製あるいは打製石斧の一部であったものと考えられる。これは側面が丸味を帯びている点と、この側面には僅かながら磨耗の痕跡が認められることである。

この丸味を帯びた側縁部は打点部ともなり得る場所で、ここから加撃された剥片となろう。形状だけをみればナイフ形石器のようにみえるが、調整痕等は認められないため石器として使用されたかどうかは定かでない。８は縦長の大きな剥片で表面には段上に剥離痕が残されている。他は自然面で側縁部分では凹凸が著しい。その形状から石器素材としては十分な大きさといえようが裏面を含めて加工の痕跡は認められない。

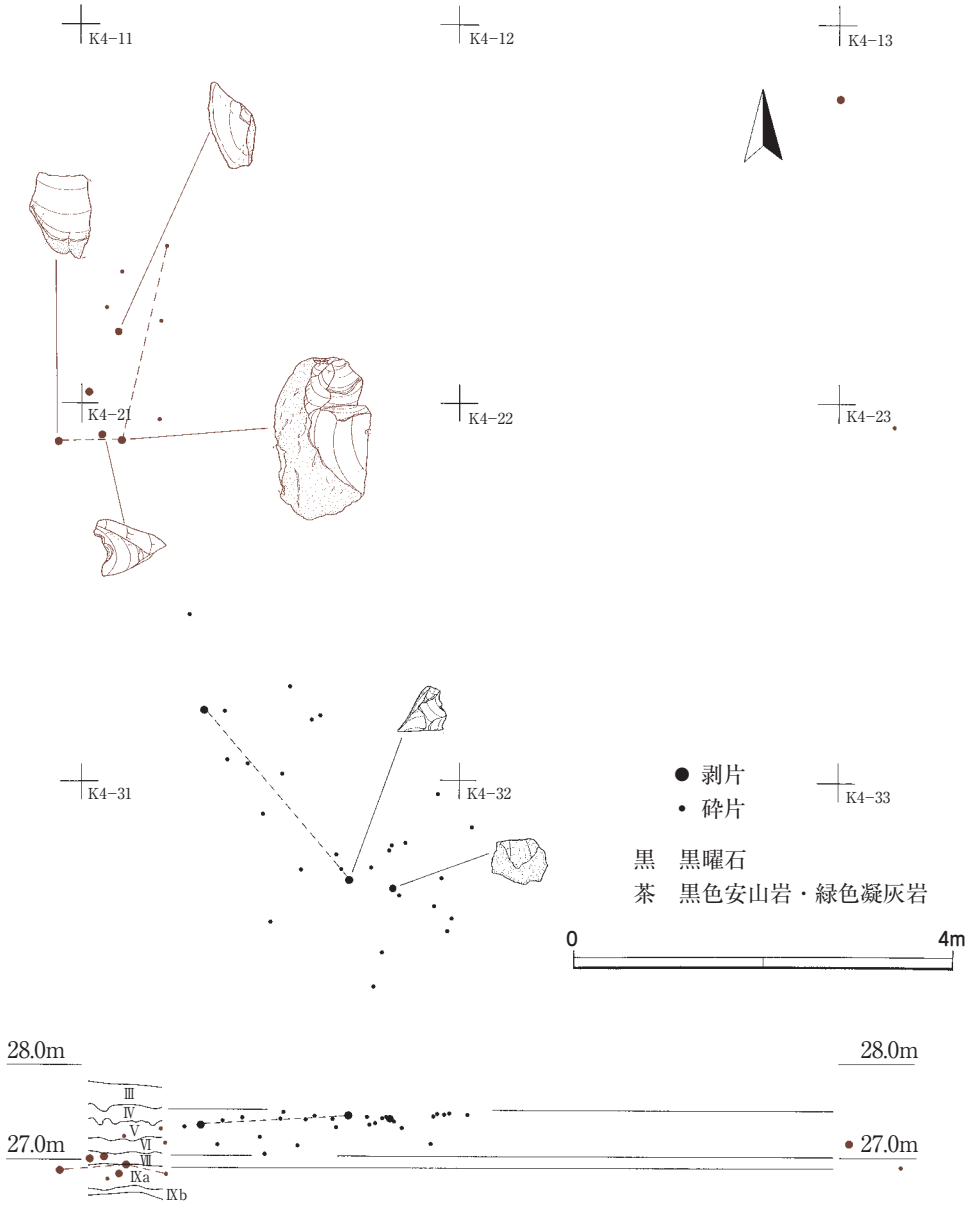
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石30点　黒色安山岩９点　緑色凝灰岩１点

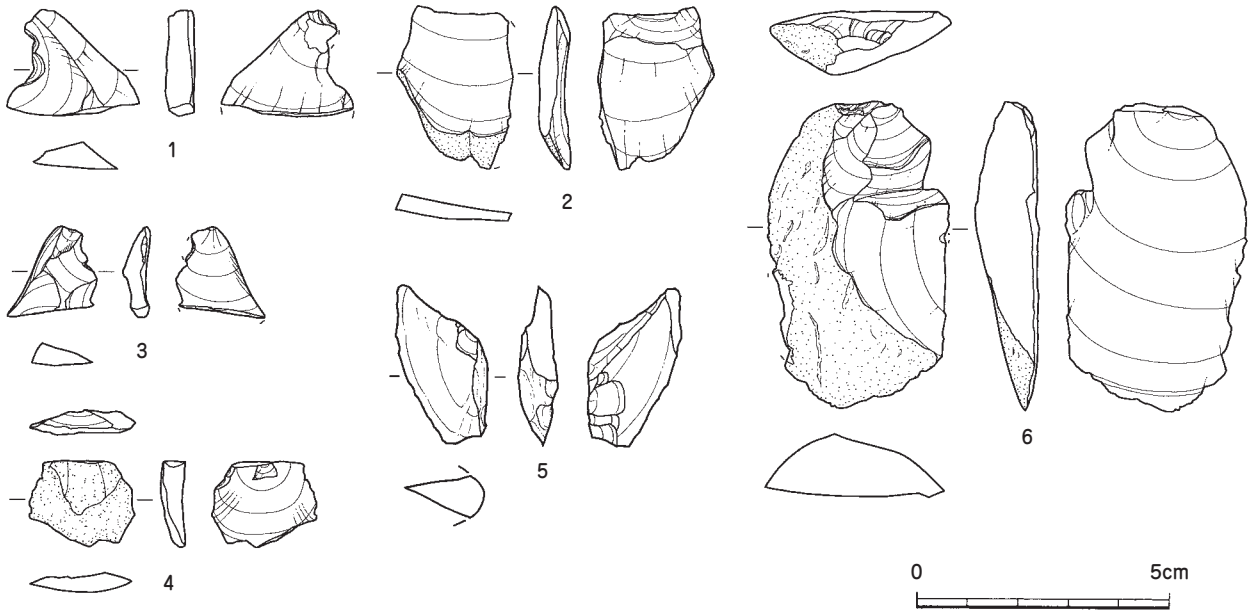
器種　剥片７点（石斧片１）　砕片33点　計40点

第47表　第９－10Ａ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ４－21	12	27.063	剥片	黒色安山岩	2.75	2.10	0.60	2.34		半欠
2	Ｋ４－20	1	26.908	剥片	黒色安山岩	2.35	3.10	0.40	3.13		下端欠
3	Ｋ４－31	5	27.445	剥片	黒曜石	1.75	2.05	0.35	1.45		
4	Ｋ４－31	4	27.425	剥片	黒曜石	1.90	1.50	0.40	0.84		
5	Ｋ４－11	5	26.852	剥片	緑色凝灰岩	1.64	3.34	0.80	3.01		石斧片
6	Ｋ４－21	13	26.986	剥片	黒色安山岩	6.20	3.65	1.20	25.84		



第127図　第９－10Ａ地点出土石器分布図



第128図　第９－10Ａ地点出土石器

（14）第９－10B地点（第129図・第130図、図版51）

概要　本地点は第９－９地点と第９－10A地点の東に位置する。遺物の分布状況についてみると、集中的に出土する場所はみられず薄く拡散したような状況を呈していた。このため整理作業の段階で西はK４－13・23グリッド、北はK５－94・95グリッド、東はJ４－40・50グリッドにまで分布域を拡張することにより一括して本地点とした。使用石材は黒色安山岩が主体となり、次いで黒曜石・珪質岩等の８種の石材で構成されていた。第９地点の中ではバラエティーに富んだ石材構成といえようが、出土量は範囲の広さに対して41点と少ない。

出土石器群　出土した成品にはナイフ形石器が４点を数えたのみで器種としては少ない。その内の２点は黒色安山岩を石材として採用していた。これまで触れてきたように第９地点での使用石材は黒色安山岩が他を圧倒しているにもかかわらず成品は僅少であった。広範域を対象とした本地点を基準とすることはできないが、集中的ではないにしろナイフ形石器４点の出土は石器製作の場所とは異なるという点で興味深い。反面、剥片・砕片類は少なく、広範囲に遺物が散っていた点から本地点では明らかに石器製作の場所ではなかったといえよう。

ナイフ形石器（１～４）　１は完形品で横長の剥片を用いて製作したものである。分厚い打点部を背面として、裏面方向から整形を兼ねた調整剥離を施して成品に仕上げている。右側縁部の整形はやや厚めの部分を削除するような形で剥離を施している。色調は風化により灰白色を呈しているが、調査時に破損した部分の観察では黒色を呈している。２の素材も横長の剥片であり、前者と比較すると約1/3程度の小型品となる。打点部は背面として大きく整形され基部へと変化する。刃部を除く表面でも丁寧な調整が施されている。裏面での加工は認められない。３は石刃状の剥片を素材として製作したものであろう。上半部が欠損する。遺存した基部周辺の左右側縁はきれいに調整し仕上げられている。４は基部が欠損したもので薄い縦長剥片を素材としている。左側に刃部が設定され、右側縁と左の下半部には刃潰し加工が密に施されている。

二次加工剥片（９・11・16）　９は表皮部分の剥片で、剥離後、さらに上部を２回の剥離により弯曲部を作出し、微細な調整剥離を加えている。石器として使用してたことは確実であろう。11は表皮部分から得られた縦長の剥片で上部が折断されている。右側縁下半部に数回剥離を施している。左の側縁にも使用の痕跡が残る。16は左の側面に小さな剥離痕が認められる。その形状から台形様石器の製作を意図したものかもしれない。

剥片（５～８・12～15・17・18）　５～８の石材は黒色安山岩で石器素材といえるような形状を呈しているために図示した。小型品製作の素材としては十分な大きさといえよう。７は台形様石器のような形を呈しているが、側面の加工が鮮明ではないため剥片とした。12は幅広の大きな剥片で左側縁に刃こぼれ状の痕跡が認められる。石材は９と同様の珪質岩であり、おそらく同一母岩から剥離されたものであろう。13・15は小剥片で、15には上部に１回のみ二次剥離痕がみられる。14は折断された上半部の剥片で、打点部には整形を兼ねた２回の剥離がみられる。石器製作を意図した剥片と推測できる。17は側面の先端部に加撃痕が認められるため彫器とも考えられるが、その他での整形はみられないため剥片とした。18にも上方から打ち下ろしたような剥離がみられる。

石核（10）　石英の小礫から剥片剥離をおこなっており、隣接するグリッドから出土した剥片と接合したものである。４回以上の剥片剥離が上下から試みられているため楔形石器の製作を目的としたものとも考えられる。

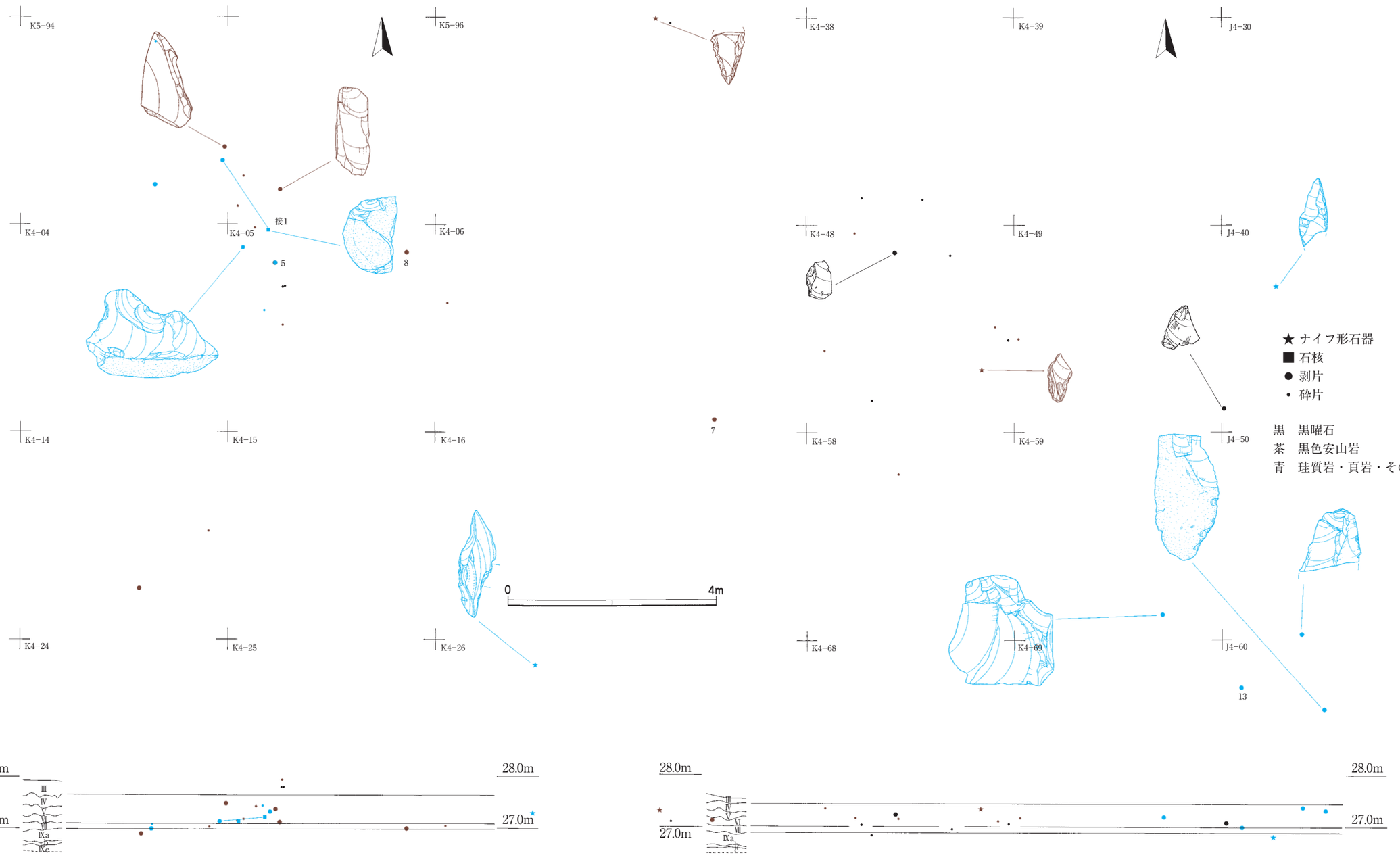
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石10点　硬質頁岩１点　頁岩１点　珪質岩５点　チャート１点　黒色安山岩20点　メノウ１点　石英２点

器種　ナイフ形石器４点　二次加工剥片３点　剥片20点　砕片13点　石核１点　計41点

第48表　第９－10Ｂ地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｋ４－26	1	27.255	ナイフ形石器	黒色頁岩	5.20	1.65	1.30	7.91		
2	Ｋ４－48	7	27.283	ナイフ形石器	黒色安山岩	2.40	1.20	0.45	1.05		
3	Ｋ４－27	1	27.242	ナイフ形石器	黒色安山岩	2.60	1.60	0.50	1.93		上半部欠
4	Ｊ４－40	2	26.825	ナイフ形石器	硬質頁岩	3.40	1.40	0.35	1.18		基部欠
5	Ｋ４－05	2	27.832	剥片	黒色安山岩	1.10	2.50	0.60	1.86		
6	Ｋ４－13	2	27.206	剥片	黒色安山岩	2.90	1.80	0.50	2.56		
7	Ｋ４－47	1	27.040	剥片	黒色安山岩	2.25	3.40	0.70	4.79		
8	Ｋ４－05	7	26.899	剥片	黒色安山岩	2.75	2.65	0.50	3.69		半欠
9	Ｋ４－05	3	27.100	二次加工	珪質岩	4.30	6.30	2.90	46.70		
10	Ｋ４－05	5	27.158	石核	石英	2.50	3.70	1.35	15.73	接１	円礫素材
	Ｋ５－94	2	27.086	剥片	石英	2.10	2.70	0.50	3.09		
11	Ｊ４－60	2	27.025	二次加工	珪質岩	6.20	3.00	0.65	12.50		上端欠
12	Ｋ４－59	1	27.210	剥片	珪質岩	5.40	5.00	1.30	38.01		
13	Ｊ４－60	3	27.025	剥片	チャート	6.20	3.00	0.65	12.50		上端欠
14	Ｊ４－50	1	27.410	剥片	珪質岩	3.00	2.70	0.65	5.15		
15	Ｋ４－48	4	27.203	剥片	黒曜石	1.80	1.20	0.50	0.76		
16	Ｊ４－40	1	27.070	二次加工	黒曜石	1.90	1.80	0.70	1.61		半欠
17	Ｋ５－94	3	27.392	剥片	黒色安山岩	3.85	2.65	0.95	12.50		両側欠
18	Ｋ５－95	2	27.230	剥片	黒色安山岩	1.55	4.30	1.20	9.20		下端欠



第129図　第９－10Ｂ地点出土石器分布図

第130図　第９－10Ｂ地点出土石器

第11節　第10地点

本地点は、確認調査時にG６－51グリッドにおいて第Ⅶ層中から剥片（第132図９）の出土が確認されたため調査区を拡張し周辺部を精査したところ、後述するように石器集中地点が３か所と広範囲にわたって石器群が分布する地点（H５－08・09グリッド）が認められた。そこで後者の分布域については、出土層位・石材という点で関連性が認められるため便宜的に１か所の集中地点（第10－４地点）と見立てて記述することにした。このため本地点での調査面積も広範囲なものとなり約670㎡に達している。石材についてみると、G６－60グリッドではトロトロ石と称されるデイサイトの剥片・砕片類が集中的に出土している。その数は150点余を数えたが、反面、黒曜石の使用頻度は低下し、第10－１地点・同４地点で１点づつ出土したのみであった。接合関係についてみると特筆できるような事例はみられなかったが、特徴的な石材であるデイサイトや流紋岩が各地点で出土していることにより、使用石材という点から互いに関連づけられることが認識できた。

（１）第10－１地点（第131図・第132図、図版52）

概要　本地点は、石器群の集中的な分布域は小範囲ながらも第10地点内においては出土量という点で主体的な位置を占める地点となっている。G６－60グリッド内における遺物の出土は図示したように濃密であり、ここでは石器製作時にでる極小砕片が100点以上も検出されている。しかも石材のほとんどはデイサイトで構成されていた。しかし、残されていた成品という点ではナイフ形石器が１点のみであるところから破損による廃棄品は少なかったともいえよう。

出土石器群　出土石器の大半は砕片であったが、成品としては欠損した打製石斧とナイフ形石器、楔形石器が出土している。なお、ナイフ形石器の石材はデイサイトであったため器面の風化が顕著であった。こうした石材を使用した石器は器種の判別に苦慮するところでもある。

打製石斧（１）　刃部を含めた下半部が遺存したもので、刃部周辺での研磨は確認できなかった。表面の一部には自然面らしき痕跡を残す。使用中に破損したものであろう。使用痕跡についてみると、丸味を帯びた下端部のみ著しく摩耗しており、破損後も敲打器等の石器として使用された可能性も否定できない。表面上部の剥離は破損後に加えられたものである。

ナイフ形石器（２）　完形品であるが表裏面の風化が激しく鋭利さは失われている。右側面に２・３回の剥離を施しナイフ形石器としたようである。

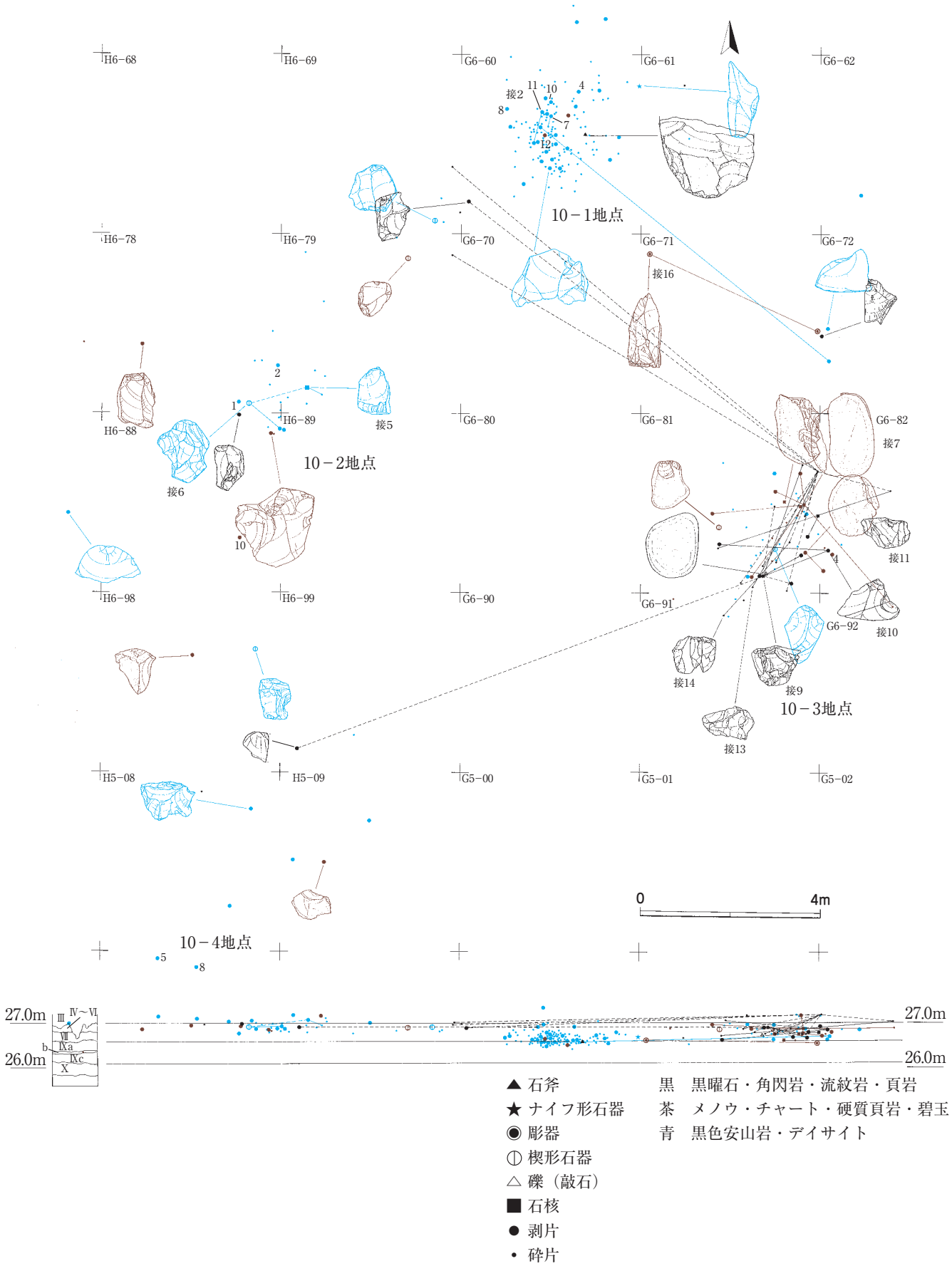
楔形石器（３）　下方から表裏面に剥離を施し、下端部のみを刃部として用いたようである。刃部での両面は小さな剥離によりさらに調整されている。

剥片（４～13）　４～11はデイサイト製の剥片で、９～11は接合したものである。これらも風化が著しく使用痕等の観察は困難であった。11は大型の剥片で、裏面は平坦な面を呈している。側面には数条の剥離痕が認められるため打面調整時に剥離されたものであろう。13は右側縁に小さな剥離が認められ突起部を形成する。錐とも思えるが突起部周辺での加工痕は認められない。色調は明るく淡い赤灰色を呈した特徴的な流紋岩であり、後述する10－３地点でも出土している。この点からも石器集中地点との関連が認められよう。

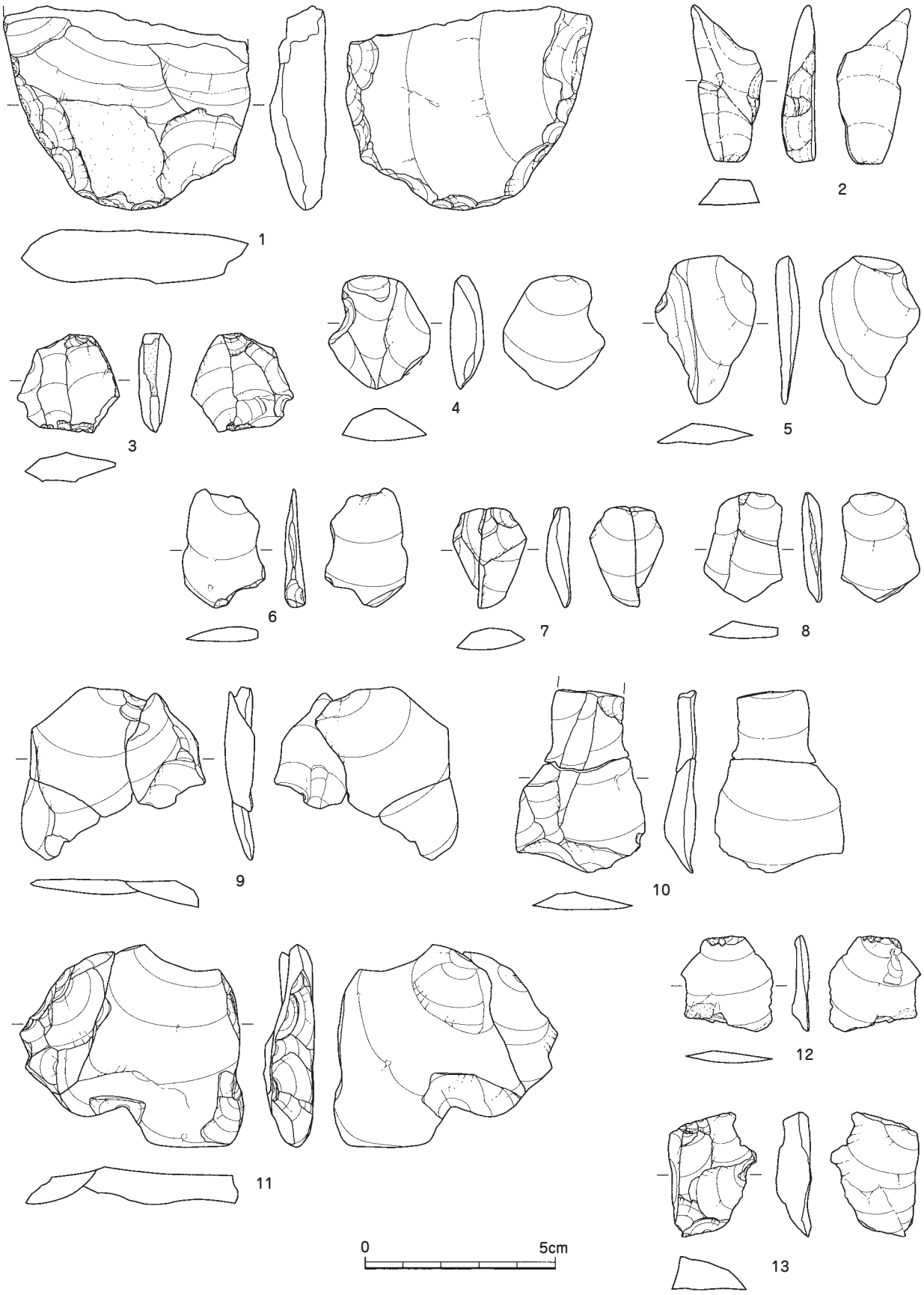
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石１点　黒色安山岩３点　デイサイト153点　メノウ３点　流紋岩２点

器種　打製石斧１点　ナイフ形石器１点　楔形石器１点　剥片26点　砕片133点　計162点



第131図　第10－１～４地点出土石器分布図



第132図　第10－１地点出土石器

第49表　第10－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｇ６－60	27	25.560	打製石斧	角閃岩	5.50	6.30	1.30	62.62		刃部のみ
2	Ｇ６－60	9	25.671	ナイフ形石器	デイサイト	4.25	1.80	0.80	5.91		
3	Ｈ６－69	2	25.897	楔形石器	黒色安山岩	2.65	2.70	0.80	5.71		
4	Ｇ６－60	11	25.630	剥片	デイサイト	3.05	2.65	0.90	5.97		
5	Ｇ６－60	32	25.595	剥片	デイサイト	3.85	2.70	0.55	4.06		
6	Ｇ６－60	171	25.403	剥片	デイサイト	3.15	2.15	0.55	2.94		
7	Ｇ６－60	77	25.711	砕片	デイサイト	0.70	1.00	0.25	0.12	接３	小剥片
	Ｇ６－60	130	25.603	砕片	デイサイト	2.15	0.80	0.50	0.64		
8	Ｇ６－60	49	25.695	剥片	デイサイト	2.90	2.10	0.55	2.36		
9	Ｇ６－51	1	－	剥片	デイサイト	4.92	3.15	0.66	6.55	接４	
	Ｇ６－60	54	25.713	剥片	デイサイト	3.07	2.25	0.70	2.79		
10	Ｇ６－60	90	25.571	砕片	デイサイト	0.55	0.70	0.25	0.09	接１	
	Ｇ６－60	114	25.570	剥片	デイサイト	2.20	2.20	0.40	1.89		上下端欠
11	Ｇ６－60	129	25.577	剥片	デイサイト	5.85	5.50	1.10	27.41	接２	
	Ｇ６－72	4	25.760	剥片	デイサイト	2.35	3.80	0.60	4.62		
12	Ｇ６－60	107	25.624	剥片	メノウ	2.60	2.30	0.35	2.10		
13	Ｇ６－60	42	25.943	剥片	流紋岩	3.00	2.30	0.83	4.91		

（２）第10－２地点（第131図・第133図、図版53）

概要　本地点は第10－１地点の南西８ｍに位置し、Ｈ６－78・79グリッドを中心に径２ｍほどの狭い範囲で石器群が出土したものである。集中地点としての規模は小さく、総出土点数は25点と少ない。ここでも石材の主体はデイサイトであった。次いで黒色安山岩となっており、いわゆる安山岩系によって占められていた。

出土石器群　成品としては楔形石器が存在するものの、他の器種は認められなかった。また砕片のほとんどがデイサイトであり、この点も10－１地点と共通している。

楔形石器（４・６）　４は２点の接合資料である。上下方向からの剥離が認められるため楔を分割したものか、あるいは整形したものであろう。とりわけ上端部では上方から小さく数回剥離し形状を整えている。６は打面部周辺を整形するとともに、左の側縁及び下端の分厚い部分に整形剥離を施し楔形石器としての形態を整えている。

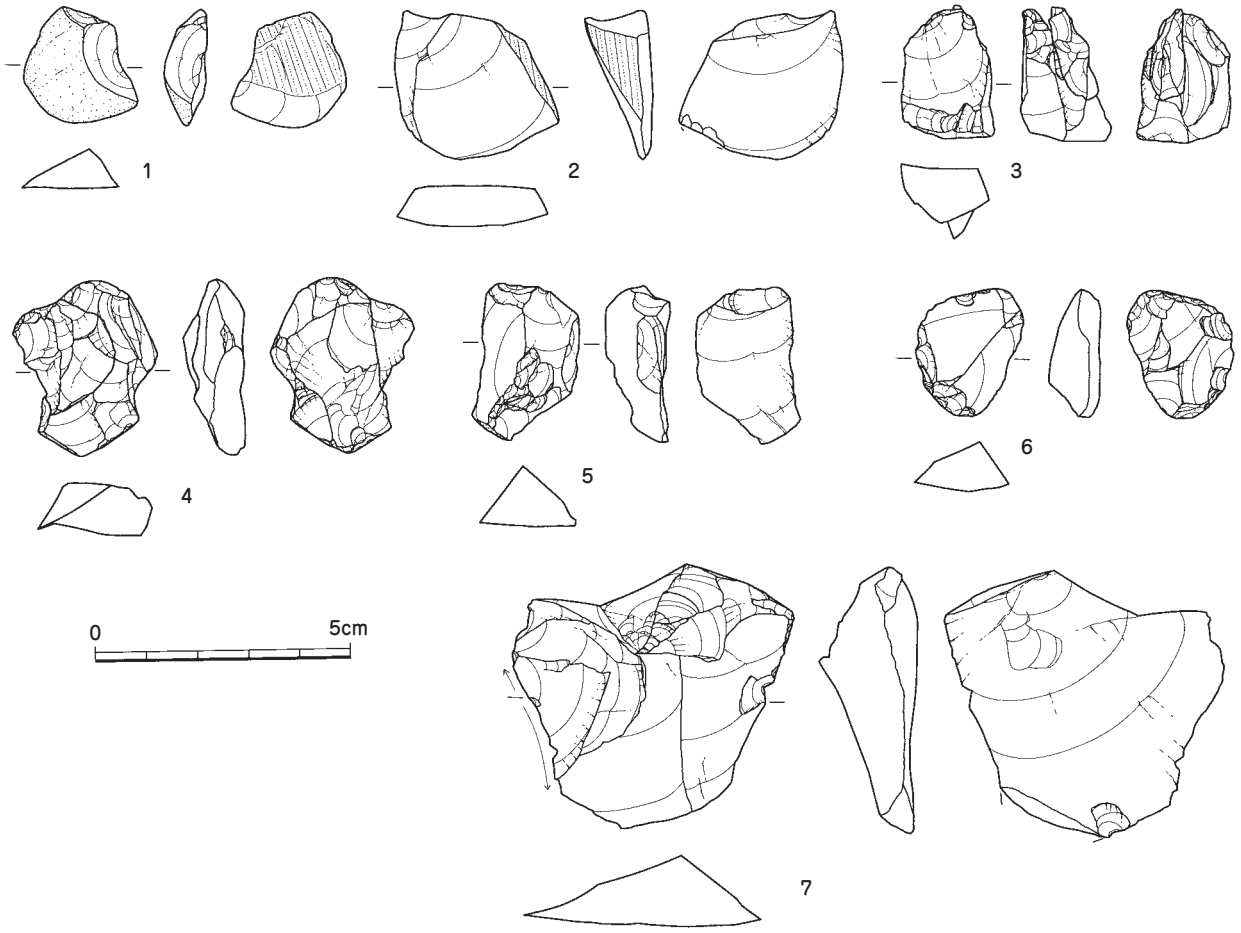
剥片（１・２・５・７）　１・２は風化が著しく、使用痕等は確認できない。なお、図示斜線部分は節理面である。５は下端に自然面を残し、表面が若干整形されている。裏面上部には横からの剥離がみられる。石材は流紋岩であり、色調は青灰色を呈している。同様の石材は第10－３地点でも出土している。また第10－１地点の石材とは明らかに異なるものである。７は碧玉製の大きな剥片で素材としては十分な大きさである。左側縁では刃こぼれ痕がみられるため石器として使用していたことは間違いあるまい。下部は使用しやすいように折断したものであろう。

石核（３）　砕片の接合例であり、ここでは残核として捉えた。だが上部から打ち下ろすように剥離されているため、残核を利用して楔形石器の製作を意識したものと考えられる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒色安山岩５点　デイサイト16点　メノウ１点　流紋岩１点　碧玉２点

器種　楔形石器２点　剥片９点　砕片13点　石核１点　計25点



第133図　第10－２地点出土石器

第50表　第10－２地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｈ６－78	7	25.735	剥片	デイサイト	2.20	2.35	0.80	3.19		
2	Ｈ６－78	3	25.840	剥片	デイサイト	2.95	3.10	1.10	9.31		
3	Ｈ６－79	7	26.063	石核	黒色安山岩	2.60	1.80	1.50	7.43	接５	
	Ｈ６－79	9	25.950	砕片	黒色安山岩	1.90	0.70	0.65	0.75		
4	Ｈ６－78	6	25.880	楔形石器	黒色安山岩	3.40	2.20	1.05	7.29	接６	
	Ｈ６－88	2	25.934	剥片	黒色安山岩	2.13	1.90	0.60	2.36		
5	Ｈ６－88	5	25.980	剥片	流紋岩	3.10	1.90	1.20	6.95		
6	Ｈ６－79	2	25.872	楔形石器	メノウ	2.70	2.00	1.00	4.61		
7	Ｈ６－88	3	25.870	剥片	碧玉	5.40	5.00	2.00	34.04		

（３）第10－３地点（第131図・第134図、図版53）

概要　本地点は第10－２地点の東約10mに位置し、G６－81グリッドを中心とし長径４m、短径３mの範囲にわたり石器群の分布が認められた。出土総数は66点と少ないものの、使用されている石材は豊富で流紋岩と黒色安山岩を主体としてデイサイト・メノウなど７種の石材によって構成されていた。とりわけ流紋岩は前述した色調の変化が認められる２種と石核が出土しており、個体数として最多の出土量となっている。

出土石器群　出土した石器群についてみると、前述した２地点では少なかった石核が４点出土している。しかし、石核数に対し剥片・砕片は少量で、図示した２・８から剥離されたと考えられる剥片類はほとんどみられなかった。一方、黒色安山岩は図示できた１点以外は砕片であり、石核は出土していない。こうした点から本地点の性格については捉えがたい一面を内包しているようにも思われた。いずれにしても敲石や砕片等の出土から石器製作をしていたことは間違いあるまい。なお、道具としての石器には楔形石器と敲石が存在するものの他の器種は認められない。

楔形石器（１・12）　１はメノウの小礫で上部には表裏から３回以上の敲打を加えている。これは楔形石器にみられる加撃方法であり、楔形石器を製作する意図が窺われるためここに分類した。その形状からは楔としては使用されていないとも考えられる。12は上部の表裏面が小さく剥離され刃部を作り出している。下部での剥離は認められない。

敲石（14）　小礫を利用したもので下端部に僅かではあるが打痕が認められる。表裏面も滑らかで使用を思わせる。

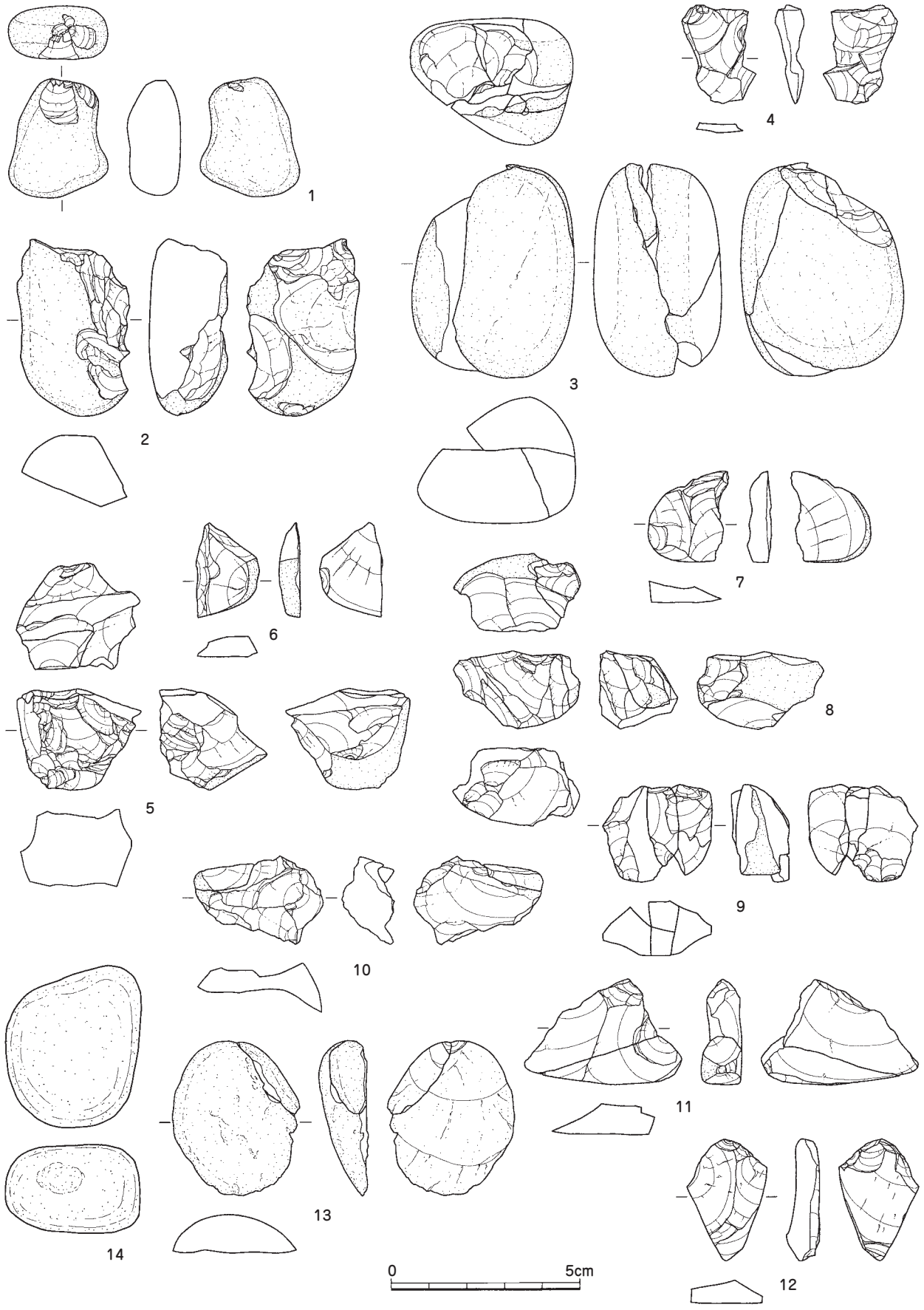
剥片（４・６・７・９～11・13）　４はメノウ製の剥片で表裏面では凹凸が著しい。６は５の石核と接合したもので同一のグリッドから出土している。９・10は同一の母岩から剥離されたもので、いずれも隣接するグリッドから出土している。接合した資料９は上下方向及び左右からの剥離を考えると楔形石器の製作を意図したように思われる。13の裏面は平坦であり、打面の作出を目的として剥離されたものと思われる。しかし、節理が多くみられるため良好な素材が得られたとは考えにくい。

石核（２・３・５・８）　２は礫面の一部を剥離し、それを打面として剥片を剥離しているようであるが、節理が縦横にみられ良好な剥片が得られたとは思えない石材である。下部にも剥離痕が認められるため剥離される前には敲打具として使用していたものと思われる。３はG６－81グリッドから出土した残核に５点の剥片が接合したものである。ほぼ原形といえるまで接合できたが、ここからは石器素材が得られたとは思えない。剥離作業の途中で放棄したものであろう。ただ上下両端には僅かに打痕の痕跡が認められるため剥離される以前は敲石として使用していたものであろう。５は打面調整を施しつつ平坦な面から剥片を剥取したもので、その形状から最終段階まで剥離作業が試みられたような残核である。また褐色の表皮と剥離面の色調から７・11の剥片も５から得られたものと思われる。８も小剥片が接合した残核である。平坦に作出された打面からは相当数の剥片が剥離されていると思われるが、接合した剥片以外に同質の石材は検出されていない。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　硬質頁岩１点　頁岩２点　チャート16点　黒色安山岩16点　デイサイト５点　メノウ３点　流紋岩23点

器種　楔形石器２点　敲石１点　剥片17点　砕片42点　石核４点　計66点



第134図　第10－３地点出土石器

第51表　第10－３地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	G６－81	32	25.865	楔形石器	メノウ	3.25	2.60	1.50	17.67		未成品
2	G６－81	11	25.755	石核	チャート	3.15	3.50	2.25	32.39		
3	G６－81	2	26.188	剥片	チャート	1.90	1.70	0.50	1.90	接７	上下端部に打痕あり
	G６－81	9	25.730	剥片	チャート	2.20	1.40	0.30	1.13		
	G６－81	31	25.925	剥片	チャート	4.10	2.20	1.50	14.68		
	G６－81	37	25.865	石核	チャート	4.60	4.00	2.25	57.54		
	G６－81	45	25.860	剥片	チャート	5.70	3.10	1.70	36.65		
	G６－92	1	25.865	砕片	チャート	2.30	1.05	0.40	1.12		
4	G６－82	4	25.807	剥片	メノウ	2.70	1.80	0.50	2.36		
5	G６－81	24	25.955	石核	流紋岩	2.35	3.15	2.80	22.23	接９	円礫素材
	G６－81	34	25.761	砕片	流紋岩	0.90	1.70	0.25	0.49		
6	G６－81	47	25.760	剥片	流紋岩	1.70	2.50	0.60	2.64		
7	G６－81	22	25.770	剥片	流紋岩	2.40	2.35	0.60	3.31		
8	G６－81	6	25.850	石核	頁岩	2.30	2.60	1.60	13.06	接11	円礫素材
	G６－81	13	25.822	剥片（小）	頁岩	1.80	1.30	0.60	1.36		
9	G６－81	5	26.217	砕片	流紋岩	2.15	1.10	0.75	2.12	接14	
	G６－81	14	25.942	砕片	流紋岩	1.80	0.60	0.60	0.55		
	G６－81	17	25.833	砕片	流紋岩	2.40	1.40	1.10	3.58		
	G６－91	2	26.073	砕片	流紋岩	2.75	1.30	1.00	3.19		
10	G６－81	24	25.955	剥片	流紋岩	3.40	2.30	0.90	5.18	接13	
	G６－81	40	25.848	砕片	流紋岩	1.70	1.00	0.60	0.81		
11	G６－81	30	25.667	剥片	流紋岩	3.75	1.25	0.85	4.12	接10	
	G６－82	3	25.915	剥片	流紋岩	3.70	2.00	0.75	5.68		半欠
12	G６－81	16	25.920	楔形石器	黒色安山岩	2.80	2.25	0.70	5.44		
13	G６－81	15	25.885	剥片	チャート	4.20	3.00	1.40	16.81		
	G６－82	5	25.882	剥片	チャート	2.60	1.00	0.90	2.06		
14	G６－81	52	25.759	敲石	流紋岩	4.35	3.60	2.40	54.38		

（４）第10－４地点（第131図・第135図、図版53）

概要　本地点は石器集中地点とはいえないが、出土層位や石材といった点から前述した石器群と一体をなすものと考え、H５－08・09グリッド周辺やG６－62・72グリッド出土の石器を一括して掲載した。

出土石器群　成品としては彫器、楔形石器が存在する。その他は剥片や砕片類であった。

彫器（１）　同一グリッドから出土した２点が接合したもので自然面が若干みられる。打点部は折断により削除されている。先端部には小さいながらも斜め上方から２回の剥離が加えられている。下端部は数回の剥離によって整形されている。接合した剥片から推測すると、使い易くするために剥離したものであろう。なお、裏面にも小さな剥離が認められるため削器としても使用したようである。

楔形石器（６）　上部は粗雑な剥離で整形し、下部は多少調整を加えきれいな刃部を作出している。

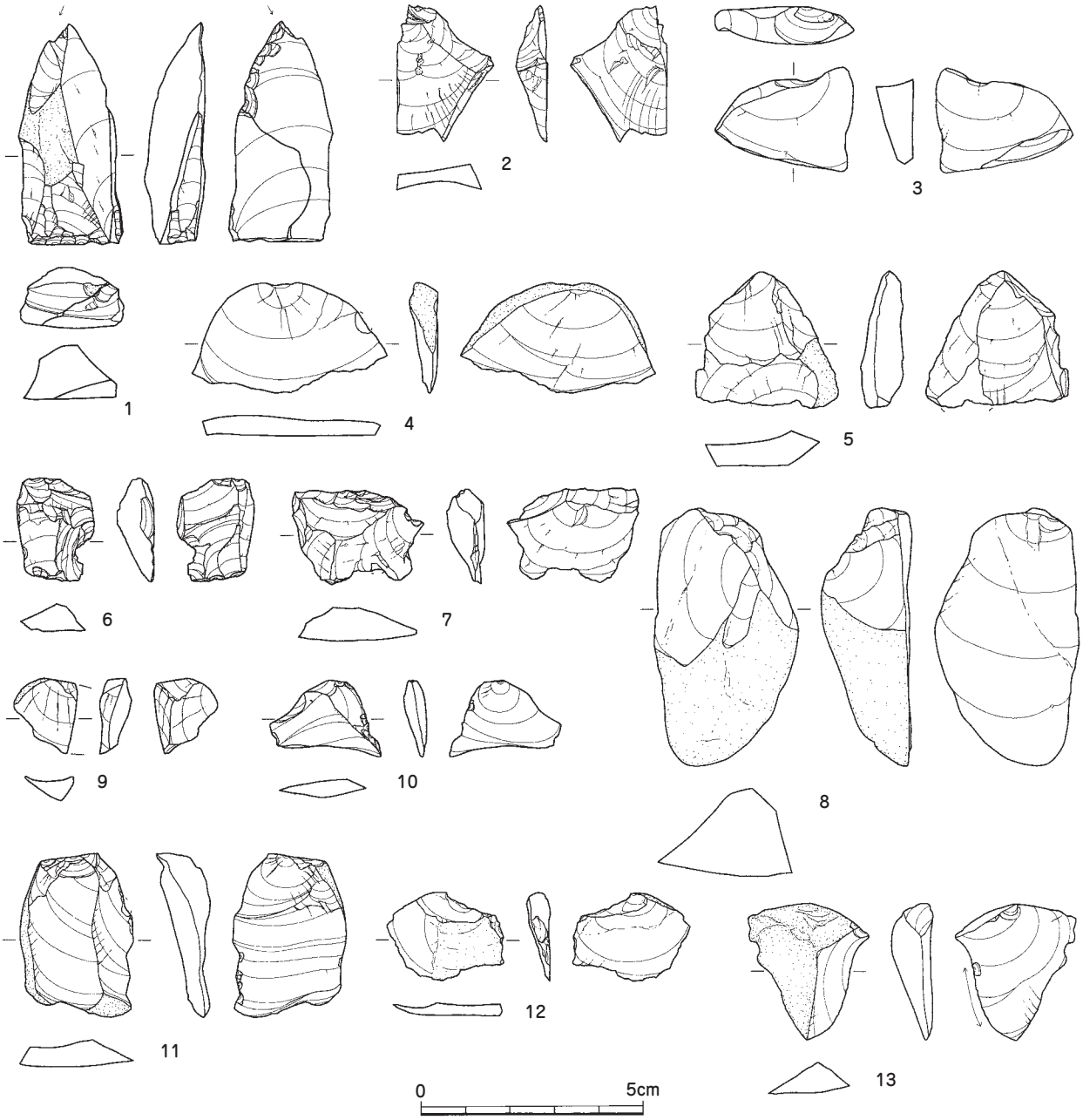
二次加工剥片（７）　表面上部では数回の剥離がみられる。楔形石器の製作を意図したものであろう。

剥片（２～５・８～13）　２は数少ない黒曜石で若干異物の混入が認められる。８は自然面を大きく残す大型片で石器素材としては十分といえよう。風化が著しいため使用の痕跡は認められない。11と13では側縁に刃こぼれ状の使用痕が観察できる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石１点　硬質頁岩５点　チャート１点　黒色安山岩９点　デイサイト３点　メノウ１点　流紋岩２点

器種　彫器１（２）点　楔形石器１点　剥片16点　砕片３点　計22点



第135図　第10－４地点出土石器

第52表　第10－４地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	G６－71	1	25.751	彫器	硬質頁岩	3.15	1.70	0.65	3.30	接16	
	G６－71	2	25.736	彫器	硬質頁岩	5.15	2.15	1.05	13.17		
2	G６－72	3	25.910	剥片	黒曜石	3.15	2.25	0.60	2.69		半欠
3	G６－72	2	25.661	剥片	デイサイト	2.40	3.15	0.80	5.41		
4	H６－87	1	25.905	剥片	黒色安山岩	2.60	4.40	0.50	6.23		
5	H５－18	2	26.074	剥片	黒色安山岩	3.25	3.20	0.70	7.76		
6	H６－98	1	25.888	楔形石器	黒色安山岩	1.80	2.30	0.80	3.24		
7	H５－08	2	26.050	二次加工	黒色安山岩	2.20	2.80	0.80	5.06		
8	H５－18	1	26.055	剥片	デイサイト	5.90	3.30	2.00	35.20		
9	H６－99	2	25.968	剥片	流紋岩	1.65	1.45	0.60	1.32		
10	H６－88	6	25.928	剥片	メノウ	1.70	2.10	0.50	1.35		
11	H６－78	10	25.847	剥片	硬質頁岩	3.70	2.60	0.80	8.06		
12	H５－09	2	26.223	剥片	チャート	2.30	2.30	0.50	2.08		
13	H６－98	2	25.964	剥片	硬質頁岩	3.00	2.60	0.90	5.12		

第12節　第11地点

本地点は調査区の東南に位置し、石器群はＤ４区を中心にＤ３区にまでおよぶ広範な分布域を形成していた。調査はＤ４－75グリッドにおいて石器群の一部が確認され、順次拡張区を設定し調査を続行していった結果、南北に32m、東西に28mの範囲となり約900㎡にわたる広域を調査することとなった。石器群の分布する状況は、後述する第11－10地点を中心に径20mの円形を呈した典型的な環状石器群と呼称できるものであった。しかも、出土した石器の中には分布図（第４図）に示したように第１地点出土の石器と数点が接合するに至り、両地点における人びとの活動が同時期に営まれれていたという痕跡を残したものであることが判明した。この点は大きな成果といえよう。

一方、整理の段階では各石器集中地点が相互に接近していたため便宜的に最多出土地点のＤ４－94グリッドに集中していた一群を第11－１地点として逆時計回りに第11－２、第11－３・・地点と命名して整理作業を進捗させていった。また剥片・砕片類については明確にその所属地点を把握するという作業が困難となる地点も存在したため本地点出土の石器群に限り、未掲載資料については最後に一括して表掲載することとした。このため本地点出土石器の総数は図示した278点と未掲載分649点を合わせて927点となった。その結果、出土石器の石材についてみると、ここでは明らかに黒曜石が主体となり、次いでメノウの順となる。この両者は図示したように11－10地点としたＤ４－75グリッドを中心としてきれいな円を描いて分布しており、その分布状況は本地点の特徴をよく表現しているものといえる。他に石材という点では、石斧製作に使用された角閃岩等の出土にも注目してみたい。未掲載分としては23点の小片が９か所から出土している。いずれも微細な砕片であるため石斧製作が多数の地点でおこなわれていたものであろう。このような砕片の出土からも石斧類が石器組成の一翼を担っていたことが理解できる。

以下、黒曜石とメノウの出土を中心として11か所に分割した石器群について、その概要を記載していくことにする。

（１）第11－１地点（第136図～第142図、図版54）

概要　本地点は環状石器群の南西部に位置し、出土遺物はＤ４－94グリッド中心に一部はＤ４－84・93・95グリッドに及ぶ。出土層位は第Ⅶ層の下部から第Ⅸ層となり、本遺跡における最古の石器群の一角を形成する。出土した遺物も最多で合計294点を数えた。石材についてみると、黒曜石が卓越し73％を占めており、次いで珪質頁岩や石斧材となった角閃岩となる。また黒曜石は、砕片がその大半を占めているところから成品の仕上げ場所でもあったと考えられる。質的にみると、色調は黒色を呈し小石等の異物を含有しているため良質とは言いがたいものであった。産地としては栃木県の高原山が想定される。

出土石器群　成品としては局部磨製石斧やナイフ形石器、楔形石器などが出土している。ここで出土した石斧類は２点でいずれも破損品である。また大量に出土した黒曜石の砕片からは当然成品が得られたものと思われるが、直接的な生産具はみられず楔形石器だけにとどまった。

局部磨製石斧（１）　隣接するグリッドから出土した３点が接合した資料で刃部での破損が著しい。出土状況では３点に約60cmの高低差が認められた。表面は軽く研磨されたのみで滑らかな痕跡は認められず、裏面の刃部周辺だけが顕著に研磨されている。また上部の縦長破片の周囲には小さな整形痕が認められる。こうした加工の手順から磨製石斧として使用されてきた本石器は刃部が消耗したか、あるいは破損したため、その役割を果たしたものと思われる。その後、再利用を目的とし頭部方向から加撃・分割されたもの

であろう。石斧以外の石器を製作する意図が存在したものと考えられる。

打製石斧（２） 石材は１と同一であるが、色調は濃緑色を呈する。遺存した小破片から石斧の頭部片にあたるものと見做される。本資料も破損した石斧を分割し、失われている部分を再利用したものと考えられる。刃部が欠失しているため打製石斧としておきたい。

ナイフ形石器（４） 石刃状の縦長剥片を素材としたもので先端部が欠損している。基部の周辺はきれいな半円形に調整剥離が施されている。打点部での整形はみられない。刃部となる側縁では突起部が意識的に残されているかのようである。

楔形石器（８・９） ８は隣接するグリッドから出土した４点が接合したもので、その形状から一旦成品として仕上げている楔をさらに分割剥離しているようでもある。剥離は上下左右の方向から全面にわたって施されている。９は同一グリッドから出土した３点（10～12）が接合したもので、12が最終的に得られた楔形石器となる。下端部での調整は両面から施されきれいな刃部を作出している。また、このような分割は後述する第11－４地点でも確認されている。

二次加工剥片（５・14・17） ５は縦長の幅広剥片を素材としており、裏面には小さな剥離痕が認められる。削器のように使用したものであろう。14は縦長の剥片を素材としたもので左側面の一部と右側縁上部に剥離痕が認められる。加工の部位からみると、ナイフ形石器の製作を意図したものであろう。下部の剥離は調査時のものである。17は右の下端から２回の小さな剥離が加えられている。その裏面でも調整剥離が施されており彫器とも思われる。

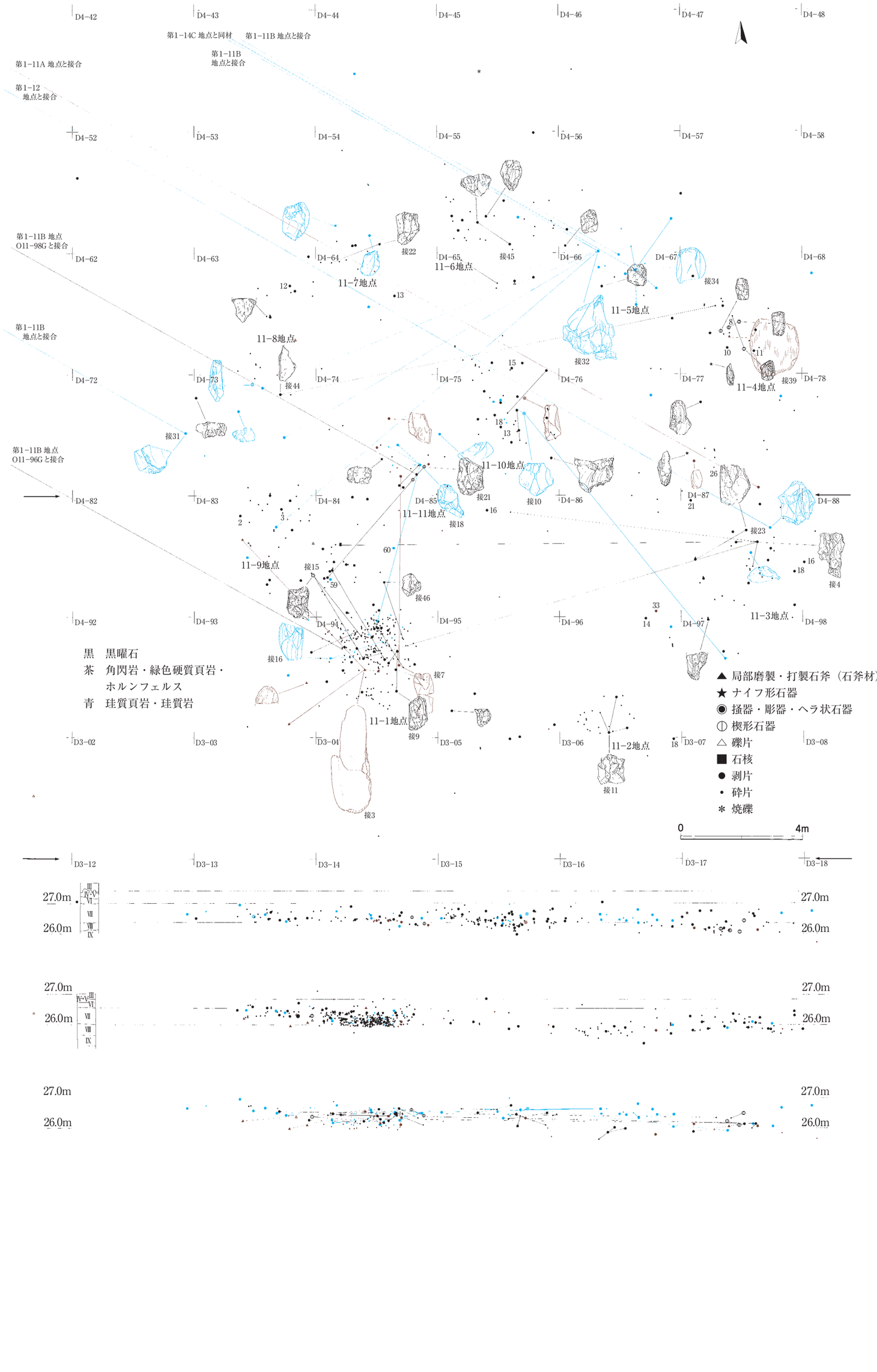
剥片（３・６・７・13・15・16・18～29・32～43・45～49・51・52・54・56・57・59～61） ３はＤ４－74・94グリッド出土の剥片が接合したもので、緑色硬質頁岩を素材としているため比較的見わけ易い石材といえる。下部の剥片には調整痕が付されており石器として使用されたものであろう。その後、使用中に折れたものと思われる。20は左側縁に刃こぼれ状の痕跡がみられる。折断された剥片23でも使用による微細な刃こぼれ状の痕跡が認められる。33は34・35の接合剥片で、34の下部には小さな剥離が認められるが、接合の状況から剥片とした。39は40・41が接合したもので41の下部には微細な剥離が残る。42は縦長の形の整った剥片で両側縁と下部に微細な剥離が顕著に施されている。削器のように使用されたものであろう。43は隣接するグリッドから出土したもので、折断後に上部剥片の側縁を小さく剥離している。60は珪質岩の数少ない剥片であるが、使用の痕跡は認められない。

石核（31・50・53・58） 31は上下方向からの剥離が認められるため残核となろう。32の砕片が接合したものが30である。50は53とともに接合資料（44）の残核といえるもので、45～49・51・52・54の計10点がＤ４－84・85グリッド及びＮ11－81・91グリッド（第１－14Ｂ地点）から出土し接合したものである。最終的な残核は50となろう。また45・47の剥片や50では若干の二次剥離痕が認められる。58は二方向から剥離されており、同一グリッドから出土した小剥片２点（56・57）が接合した。59の剥片も色調が極めて似ており58と同材となろう。

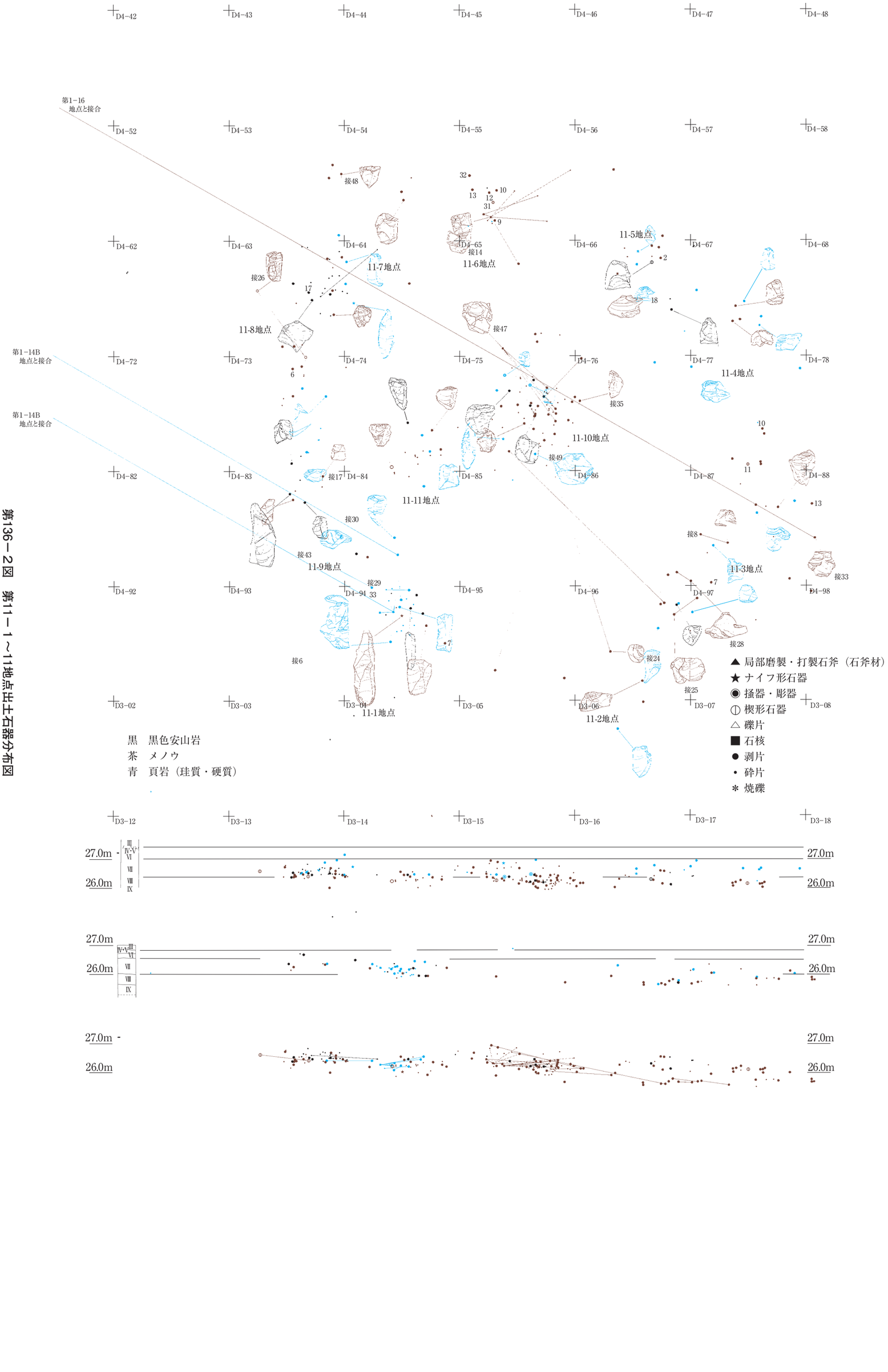
図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材 黒曜石26点　珪質頁岩23点　緑色硬質頁岩２点　メノウ４点　珪質岩１点　黒色安山岩１点　角閃岩４点

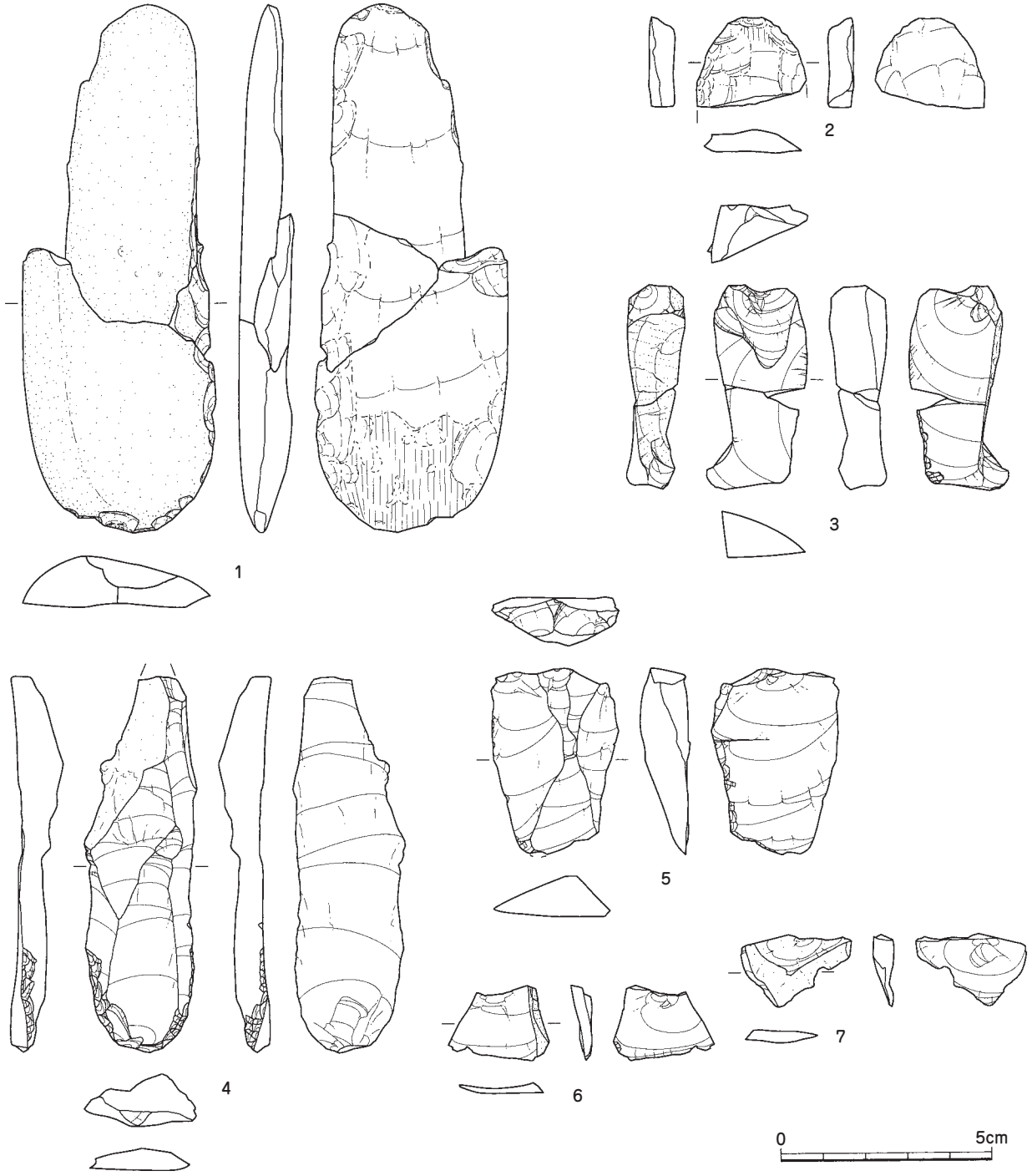
器種 磨製石斧２（４）点　ナイフ形石器１点　楔形石器２（８）点　二次加工剥片３点　剥片31点　砕片10点　石核４点　計61点



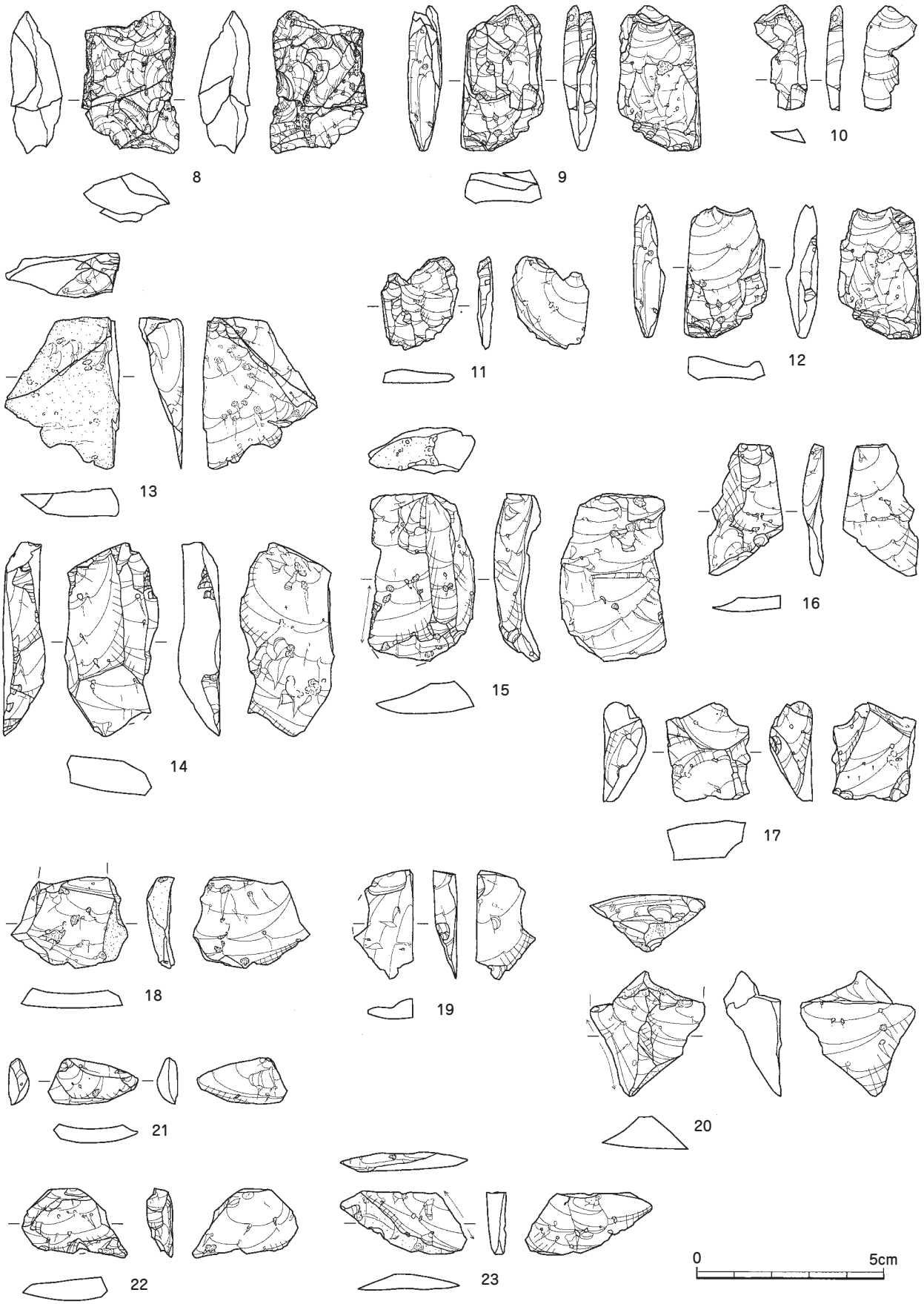
第136−1図　第11−1〜11地点出土石器分布図



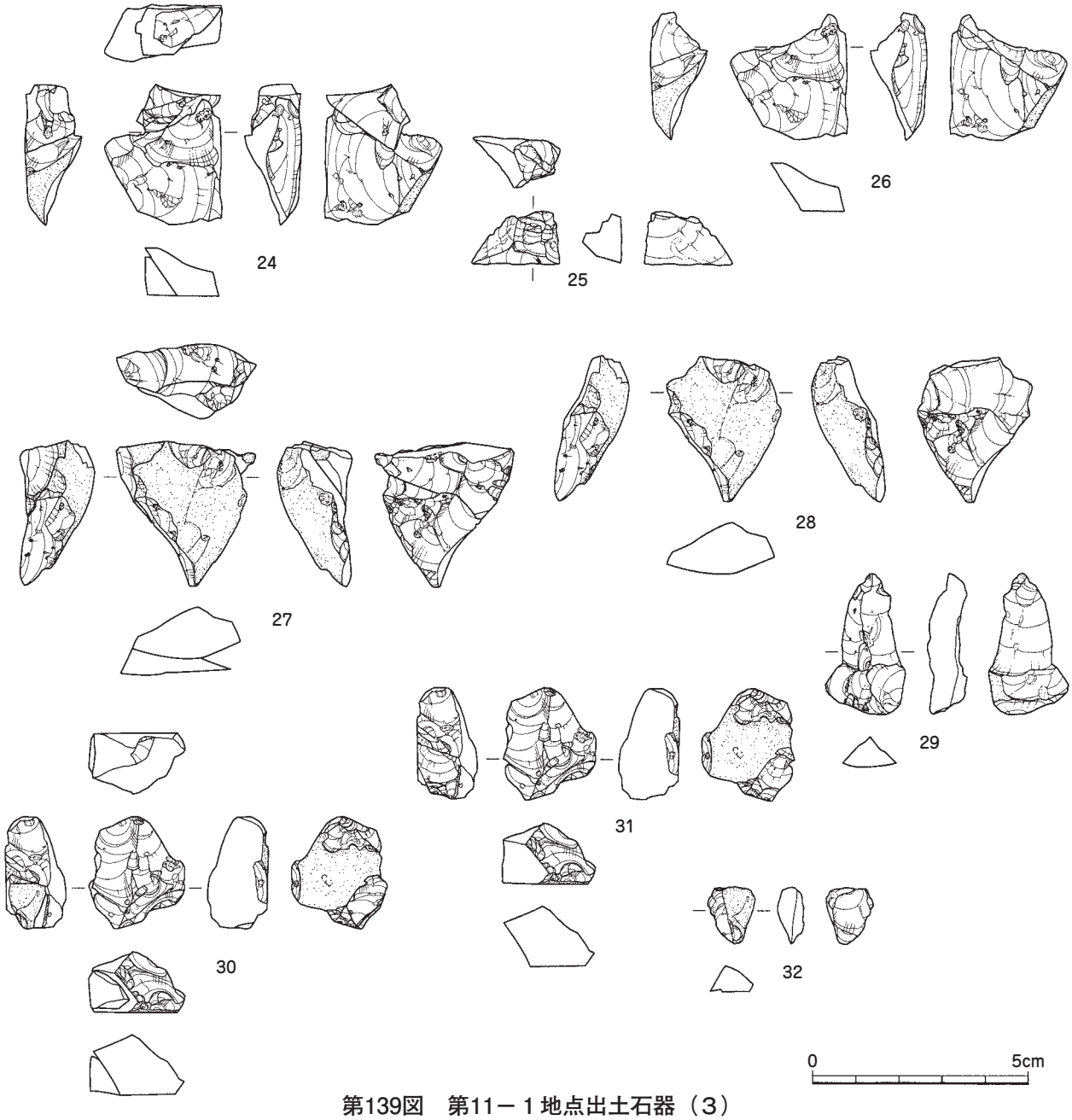
第136−2図　第11−1〜11地点出土石器分布図



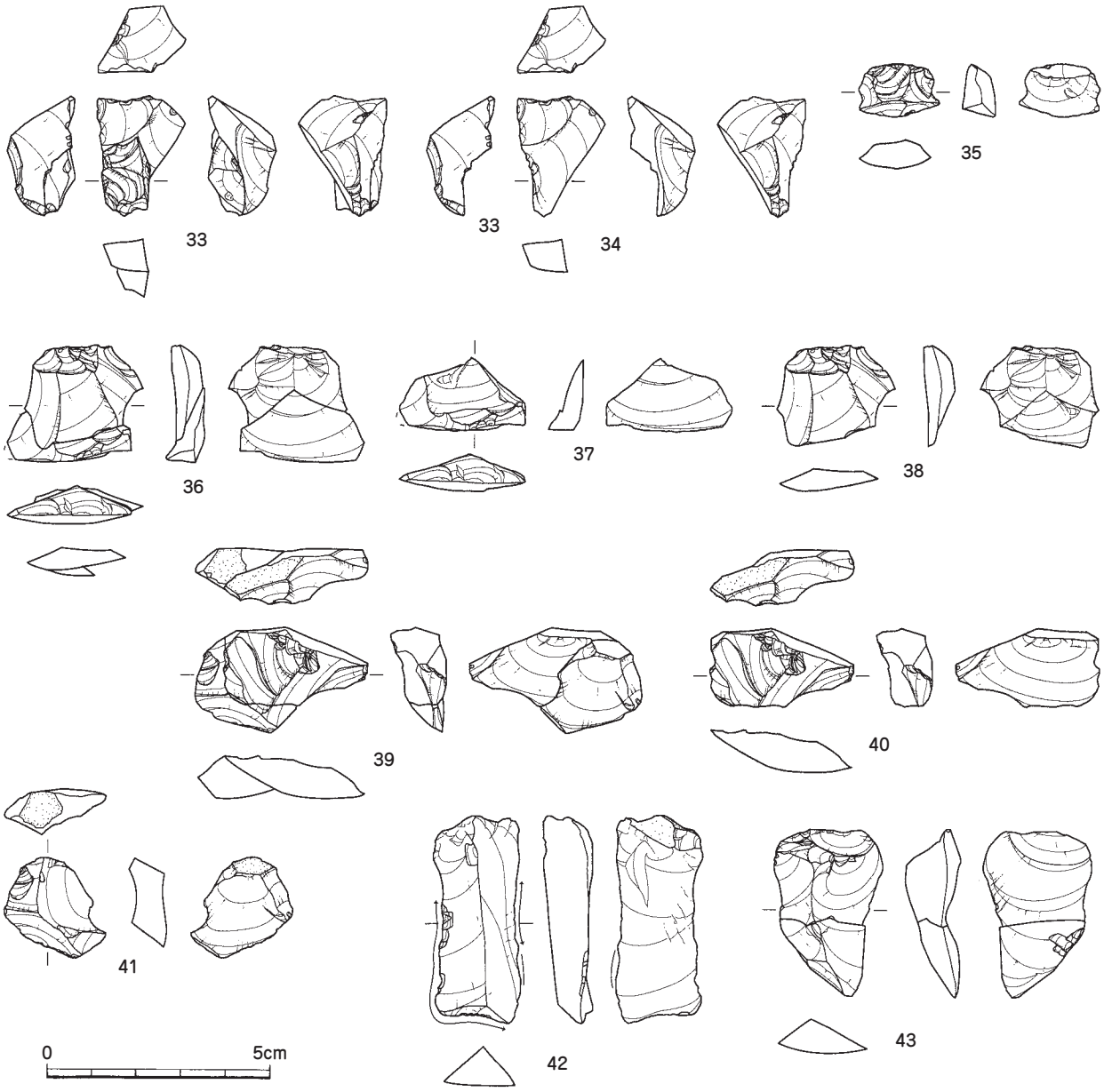
第137図　第11－１地点出土石器（１）



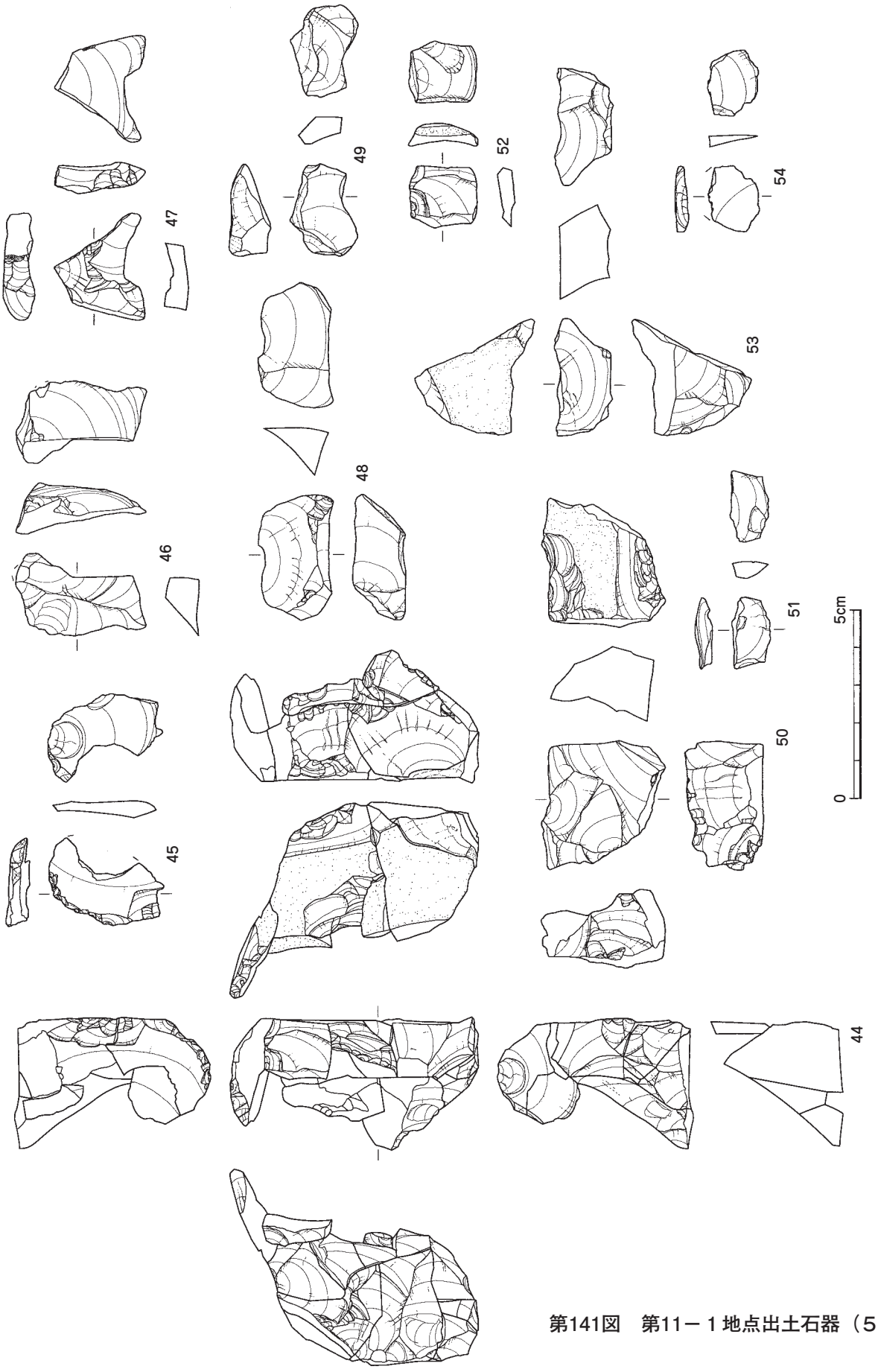
第138図　第11－１地点出土石器（２）



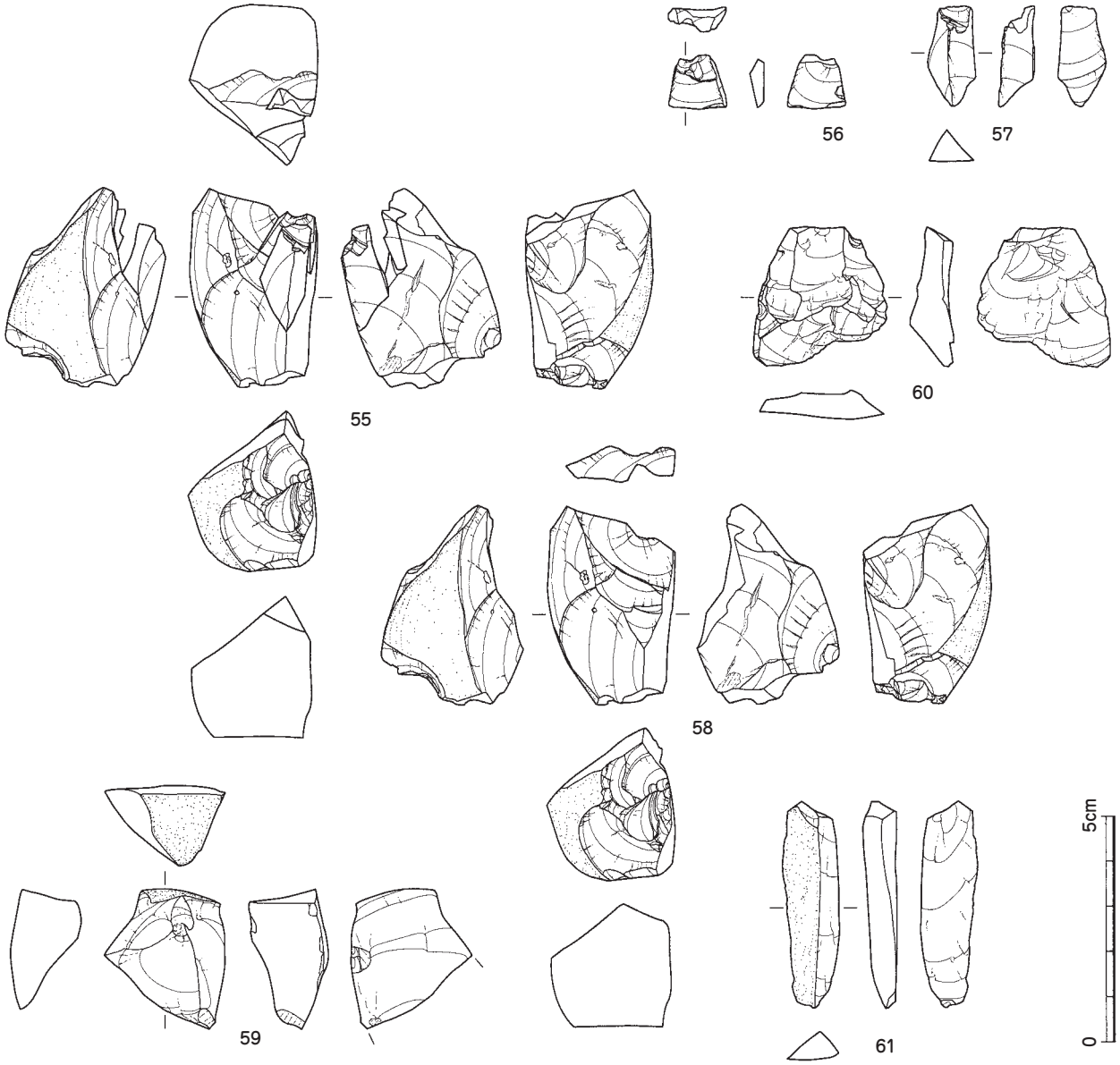
第139図　第11－１地点出土石器（３）



第140図　第11－１地点出土石器（４）



第141図　第11－１地点出土石器（５）



第142図　第11－１地点出土石器（６）

第53表　第11－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	D４－83	12	26.317	局部磨製石斧	角閃岩	12.52	4.62	1.34	78.57	接３	
	D４－93	5	26.068								
	D４－94	87	26.668								
2	D４－93	2	26.158	打製石斧	角閃岩	2.15	2.61	0.63	4.75		頭部片
3	D４－74	36	26.400	剥片	緑色硬質頁岩	4.86	2.39	1.39	11.14	接７	
	D４－94	72	26.198								
4	D４－94	206	26.165	ナイフ形石器	メノウ	8.9	2.67	1.26	21.02		先端欠
5	D４－94	141	26.054	二次加工	メノウ	4.43	3.03	1.19	12.95		
6	D４－95	3	25.818	剥片	メノウ	1.79	2.39	0.51	0.96		
7	D４－94	16	26.365	剥片	メノウ	1.72	2.63	0.52	1.16		
8	D４－83	35	26.340	楔形石器	黒曜石	3.81	2.63	1.39	17.21	接15	
	D４－94	88	26.190								
	D４－94	248	26.102								
	D４－95	1	25.950								

9					黒曜石	3.88	2.24	0.93	8.49	接９	
(10)	Ｄ４－94	25	26.375	剥片	黒曜石	2.8	1.3	0.4	1.09		
(11)	Ｄ４－94	65	26.183	剥片	黒曜石	2.49	2.08	0.43	1.93		
(12)	Ｄ４－94	13	26.408	楔形石器	黒曜石	3.5	2.21	0.85	5.47		
13	Ｄ４－84	30	26.445	剥片	黒曜石	4.06	3.07	1.2	8.21	接５	
	Ｄ４－94	20	26.158								
	Ｄ４－94	80	26.166								
14	Ｄ４－94	40	26.376	二次加工	黒曜石	5.18	2.55	1.13	14.43		両側Ｕ
15	Ｄ４－94	129	26.219	剥片	黒曜石	4.5	2.86	1.25	12.09		
16	Ｄ４－94	63	26.240	剥片	黒曜石	3.53	2.04	0.57	0.19		
17	Ｄ４－95	1	25.950	二次加工	黒曜石	2.66	2.26	1.17	6.09		
18	Ｄ４－94	113	26.190	剥片	黒曜石	2.46	3.12	0.75	4.38		
19	Ｄ４－94	44	26.541	剥片	黒曜石	2.92	1.6	0.67	2.13		半欠
20	Ｄ４－94	246	26.117	剥片	黒曜石	3.35	3.1	1.53	1.59		上端欠
21	Ｄ４－84	40	26.160	剥片	黒曜石	1.25	2.42	0.56	1.24		
22	Ｄ４－84	39	26.280	剥片	黒曜石	1.86	2.83	0.73	2.29		
23	Ｄ４－95	8	26.096	剥片	黒曜石	1.7	3.4	0.54	2.17		
24						3.29	2.75	1.34	8.97	接42	
(25)	Ｄ４－94	17	26.030	剥片	黒曜石	1.26	2.06	1.21	2.15		
(26)	Ｄ４－94	19	26.370	剥片	黒曜石	2.9	2.72	1.31	6.82		半欠
27						3.37	3.23	1.75	12.05	接38	
(28)	Ｄ４－94	95	26.335	剥片	黒曜石	3.35	2.66	1.72	9.19		
(29)	Ｄ４－94	127	26.244	剥片	黒曜石	3.27	1.87	0.93	2.29		
30						2.61	2.25	1.44	7.38	接46	
(31)	Ｄ４－84	15	26.435	石核	黒曜石	2.59	2.15	1.39	6.72		
(32)	Ｄ４－94	12	26.446	砕片	黒曜石	1.32	1.12	0.62	0.66		
33						2.69	1.97	1.5	4.37	接29	残核
(34)	Ｄ４－94	81	26.153	剥片	珪質頁岩	2.68	1.96	1.51	3.22		
(35)	Ｄ４－94	188	26.130	砕片	珪質頁岩	1.19	1.81	0.75	1.15		
36						2.63	3.03	0.88	4.78	接36	
(37)	Ｄ４－84	16	26.310	砕片	珪質頁岩	1.65	2.82	0.85	1.94		下端欠
(38)	Ｎ11－81	3	26.444	砕片	珪質頁岩	2.24	2.64	0.7	2.84		第１－14B地点
39						2.35	3.86	1.24	7.38	接43	
(40)	Ｄ４－83	34	26.390	砕片	珪質頁岩	2.25	2.29	1.03	2.99		
(41)	Ｄ４－94	39	26.347	砕片	珪質頁岩	1.75	3.2	1.24	4.39		
42	Ｄ４－94	126	26.200	砕片	珪質頁岩	4.64	1.95	1.1	6.98		下端、左側にＵ
43	Ｄ４－84	41	26.045	砕片	珪質頁岩	3.73	2.42	1.24	5.73	接30	
	Ｄ４－94	220	26.160								
44						6.6	3.52	5.22	50.88	接６	
(49)	Ｄ４－74	11	26.350	剥片	珪質頁岩	1.81	2.48	1.1	2.81		
(46)	Ｄ４－84	37	26.470	剥片	珪質頁岩	3.45	2.21	1.38	5.30		半欠
(48)	Ｄ４－94	31	26.180	剥片	珪質頁岩	2.0	3.37	1.42	6.84		
(53)	Ｄ４－94	36	26.214	石核片	珪質頁岩	1.55	3.14	3.19	9.52		
(50)	Ｄ４－94	92	26.276	石核片	珪質頁岩	3.29	3.45	2.11	17.90		
(51)	Ｄ４－94	98	26.196	砕片	珪質頁岩	1.04	1.92	0.47	0.69		
(45)	Ｎ11－81	5	26.454	剥片	珪質頁岩	3.06	2.36	0.65	2.45		第１－14B地点
(47)	Ｎ11－81	137	26.054	剥片	珪質頁岩	2.41	2.87	0.86	3.05		第１－14B地点
(52)	Ｎ11－91	19	26.154	砕片	珪質頁岩	1.85	1.7	0.62	1.70		第１－14B地点
(54)	Ｎ11－91	24	26.024	剥片	珪質頁岩	1.37	1.76	0.37	0.62		第１－14B地点
55					珪質頁岩	4.43	2.86	3.56	34.93	接16	
(56)	Ｄ４－94	11	26.174	剥片	珪質頁岩	2.24	1.08	0.81	1.29		
(57)	Ｄ４－94	88	26.190	剥片	珪質頁岩	1.21	1.3	0.56	0.64		
(58)	Ｄ４－94	42	26.116	石核	珪質頁岩	4.39	2.28	3.14	33.0		
59	Ｄ４－84	10	26.170	剥片	珪質頁岩	2.68	3.11	1.79	11.06		
60	Ｄ４－84	20	26.430	剥片	珪質岩	3.11	2.96	0.97	5.84		
61	Ｄ４－94	8	26.210	剥片	黒色安山岩	4.58	1.28	0.77	4.00		

（２）第11－２地点（第136図・第143図、図版８・55）

概要　本地点は第11－１地点の東に位置し、Ｄ４－96グリッドにおいて径２ｍほどの範囲に石器群が集中して出土したものである。しかし出土総数は約50点と少なく、第11地点のうちでも規模的にみれば小さなものであった。使用されている石材は黒曜石、次いでメノウ、硬質頁岩等で構成されており黒色安山岩は少なかった。ここで出土した黒曜石は、前述した地点同様に小石などの異物を含んだものであり同一の原産地から持ち込まれたことは疑いない。

出土石器群　出土点数も少なく成品は認めらず、剥片・砕片のみで構成されていた。接合関係でみると２と３は、本地点と第11－10地点の剥片（メノウ）が接合したものである。他にも2例が認められているが地点内での接合がみられた。

剥片（１～19）　２は約７ｍ離れた場所（第11－10地点）で出土した３と接合したものである。薄くきれいに剥離されているが石器素材としては小さいようである。４は隣接したグリッドから出土した５・６が接合したもので、６の側縁に使用痕らしき痕跡が認められる。７の打面部は自然面で横長の剥片となる。素材としては十分な形状を有するが使用の痕跡はみられない。８は同一グリッドから出土した４点が接合したもので、裏面部分の９・10は縦方向に折断されたものである。13は両側縁に微細な剥離痕と刃こぼれ痕が認められる。石器として使用されたものであろう。また折断された上面右端に小さく施された２回の剥離が認められるため、彫器としての使用も否定できない。14～17・19には何ら加工の痕跡はみられない。18はやや厚手の剥片で素材としては十分といえよう。裏面の一部には８mmほどの長さで微細な剥離痕がみられる。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石７点　硬質頁岩３点　メノウ４点　黒色安山岩１点

器種　剥片14点　砕片１点　計15点

第54表　第11－２地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1					メノウ	2.27	1.97	0.75	2.71	接24	
（2）	Ｄ４－96	21	26.065	剥片	メノウ	2.39	1.57	0.65	1.72		
（3）	Ｄ４－75	13	26.197	剥片	メノウ	1.73	1.51	0.54	0.99		
4					メノウ	3.27	4.27	1.31	11.57	接25	
（5）	Ｄ４－97	10	25.860	剥片	メノウ	2.84	3.25	0.86	6.98		
（6）	Ｄ４－96	32	25.957	剥片	メノウ	3.22	2.26	0.8	4.59		
7	Ｄ４－96	16	25.790	剥片	メノウ	2.55	3.69	0.98	7.36		
8					黒曜石	3.51	3.19	1.25	8.34	接11	
（9）	Ｄ４－96	14	25.939	剥片	黒曜石	2.76	1.89	0.88	3.13		
(10)	Ｄ４－96	11	25.772	剥片	黒曜石	3.03	1.64	0.94	2.79		
(11)	Ｄ４－96	24	25.566	砕片	黒曜石	1.18	1.52	0.52	0.34		
(12)	Ｄ４－96	19	25.945	剥片	黒曜石	2.33	1.88	0.61	2.08		
13	Ｄ４－97	6	25.890	剥片	黒曜石	3.35	2.4	1.2	6.38		使用痕
14	Ｄ４－96	5	25.736	剥片	黒曜石	1.71	1.79	0.65	0.96		
15	Ｄ４－95	9	26.076	剥片	黒曜石	2.08	1.87	0.51	1.43		
16	Ｄ４－97	8	26.185	剥片	硬質頁岩	2.2	2.39	0.67	2.21		
17	Ｄ４－96	36	25.650	剥片	硬質頁岩	4.11	2.16	0.94	5.98		
18	Ｄ３－06	1	26.033	剥片	硬質頁岩	3.85	2.3	0.91	6.26		
19	Ｄ４－96	33	25.755	剥片	黒色安山岩	2.46	2.38	0.49	2.62		

第143図　第11－２地点出土石器

（３）第11－３地点（第136図・第144図～第146図、図版55）

概要　本地点はＤ４－87グリッドを中心とし径６ｍの範囲で遺物の集中が確認でき、Ｄ４－76・77・86・88・96・97・98の各グリッドまで散布しているような状況を呈していた。また疎らに散った石器群の一部は11－２地点と11－４地点の石器群との重複が認められた。一方、接合関係についてみると、本地点出土の剥片が第１－11Ａ地点と第１－12地点出土の石核から剥離されたものであった。こうした事例により第１地点の下層（第Ⅶ層～第Ⅸ層）出土の石器群と本地点を含めた第11地点全体が有機的に結びつくものであることが理解できた。いわば双方の石器群はほぼ同時期に形成されたものと捉えられることができる。石材についてみると、特に黒曜石では異物を含まない半透明のタイプと黒色を呈し微細な小石等の異物を含むタイプとがみられた。

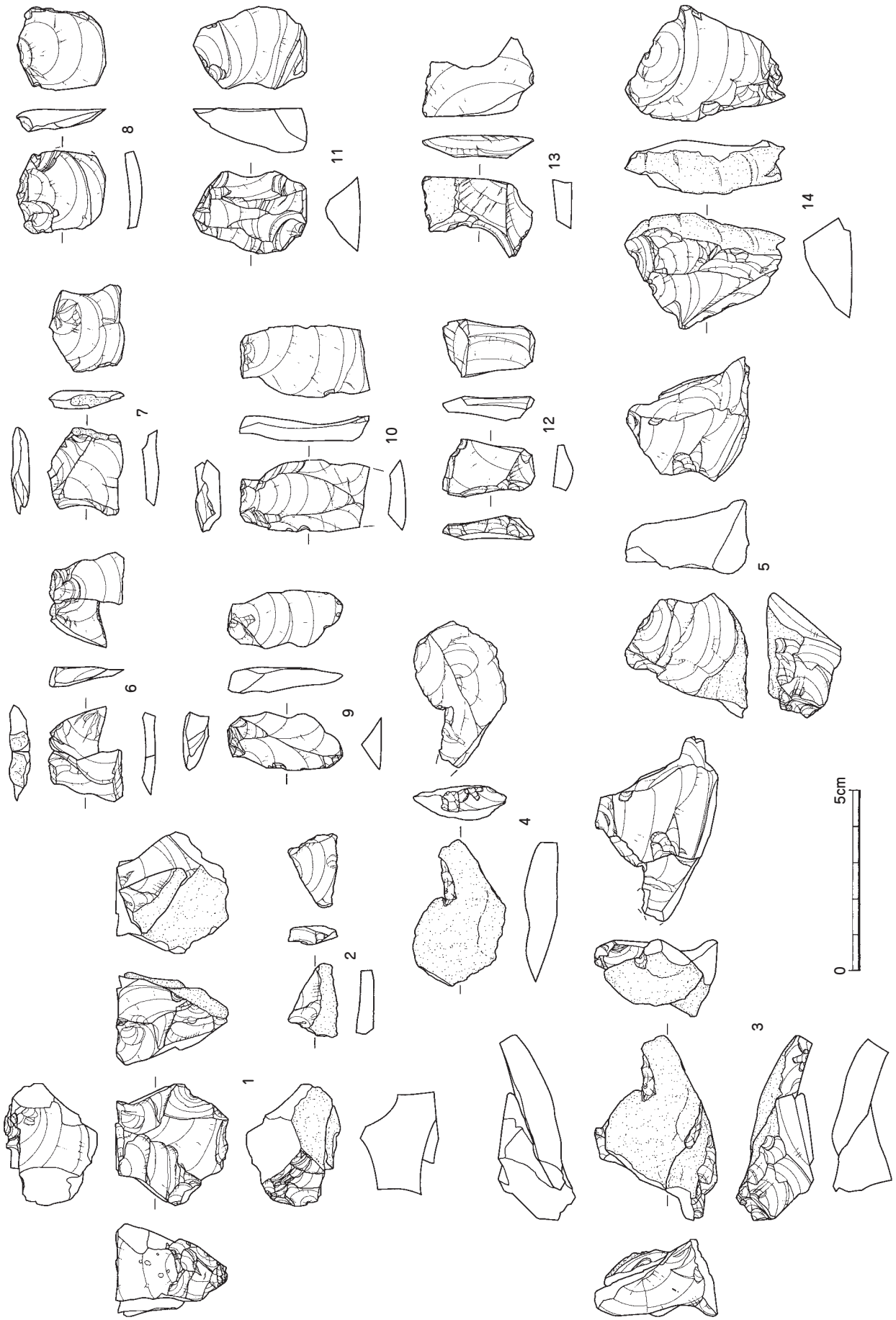
出土石器群　成品ではナイフ形石器と楔形石器が出土している。他に二次加工剥片や石器として使用された剥片が多く出土してことが特徴といえる。

ナイフ形石器（15）　同一グリッドから出土した砕片２点が接合したものである。ただ２点は未注記のため、図化は接合図とした。この砕片は裏面基部で接合しているため整形時に剥離されたものとなろう。このことからナイフ形石器は、この周辺において製作されたものと考えられる。基部や背面の加工は丁寧とはいえない。先端部は、その形状から折断した部分に加工を施したようである。刃部には刃こぼれ痕がみられる。石材の黒曜石は半透明の良質品で接合した砕片には径１mmの小石がみられた。

楔形石器（11）　上方からの剥離により打点部を整形して楔としたものである。裏面は小さな剥離で簡単に整え刃部を作出している。

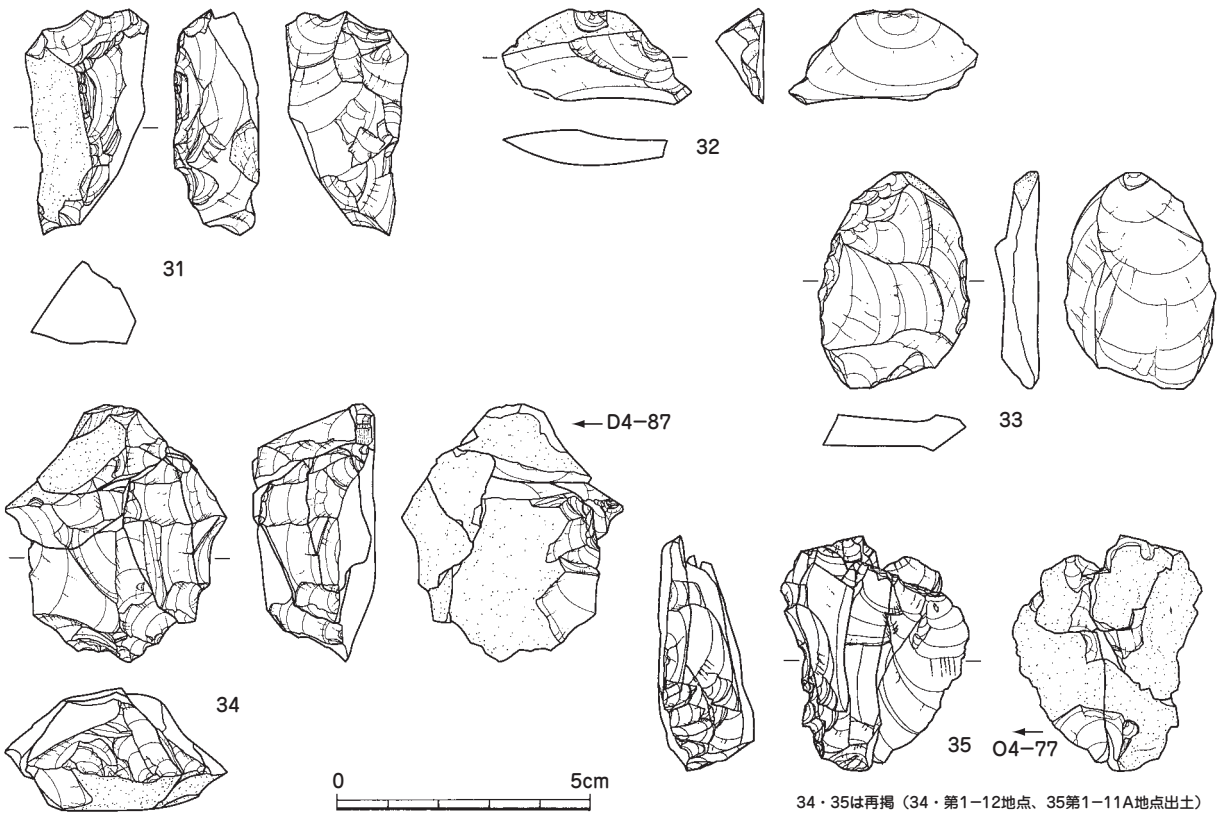
二次加工剥片（12・23・33）　12は左側面に数回の小さな剥離が認められ、その形状から台形様石器、あるいは楔形石器の可能性も否定できない。23は同一グリッドから出土した24が接合したものである。大型の剥片を折断後に剥離されたものである。右側縁では上部に小さな剥離を施し、下部では刃こぼれ痕がみられる。削器として使用したものと思われる。33は楕円状に整形された剥片で、右側縁では明らかに整形を兼ねた剥離が施されている。これも削器のように使用されたものであろう。なお、上部には研磨したような滑らかな面が認められる。石斧として使用された一部とも考えられる。

剥片（２～10・13・14・16～22・24～30・32・34・35）　３は同一グリッドから出土した４・５が接合したもので表皮部分が多くみられるところから打面作出を目的に剥離されたものであろう。６～８は小型の剥片でいずれもその一部に表皮部分がみられる。これらは色調等から１の石核から剥離されたものと思われる。９も小型の縦長剥片で左側面では微細な剥離痕が認められる。10は下端が折断されたものであり、左側縁に２回の小さな剥離を施している。13は折断された剥片で上下部分に微細な調整痕が認められる。14も左側縁の一部に使用痕らしき痕跡を残す。16は幅広な剥片の打点部を整形しており、周囲の側縁では著しい刃こぼれ痕が観察できる。その形状から掻器のように使用したものであろう。19は打面調整剥片となろう。左側面は平坦な自然面で、３枚の大型剥片を剥離した痕跡を残す。右側縁には微細な調整痕が認められるため石器としても使用されていたものであろう。石材は１のナイフ形石器同様異物の混入はなく透明に近い色調であった。22は近接するグリッドから出土した４点が接合したもので、縦方向に分割後、さらに横に折っている。分割剥片の好資料といえよう。25・26は緑色を呈した特徴的な頁岩で同一の母岩から剥離されたものであろう。こうした特徴的な石材は地点間での関連を考えるうえで有効な手掛かりを与えてくれる。28～30の一部にも刃こぼれ状の痕跡がみられるがはっきりしない。



第144図　第11－３地点出土石器（１）

第145図　第11－３地点出土石器（２）



第146図　第11－３地点出土石器（３）

なお、34・35は本地点で出土した剥片が第１－12地点と第１－11Ａ地点の石核資料と接合した例で、既に掲載したものであるが参考までに再掲した。

石核（１・31）　１の石核は、ほぼ剥片を取り尽くした残核といえよう。接合した２の小剥片は折断されており、打面調整のために剥離されたものであろう。31には自然面とともに２か所で剥離面を観察できるため残核とした。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石13点　珪質頁岩１点　硬質頁岩４点　緑色硬質頁岩３点　珪質岩２点　メノウ14点　ホルンフェルス１点

器種　ナイフ形石器１点　楔形石器１点　二次加工剥片３点　剥片31点　石核２点　計38点

第55表　第11－３地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1					メノウ	3.08	3.37	2.57	22.14	接33	
（1）	Ｄ４－88	3	25.885	石核	メノウ	3.08	3.34	2.44	20.96		
（2）	Ｎ10－10	31	26.335	剥片	メノウ	1.36	2.05	0.54	1.18		第１－16地点と接合
3					メノウ	3.39	5.1	2.13	22.76	接28	
（4）	Ｄ４－86	1	25.840	剥片	メノウ	2.55	4.06	0.98	7.87		
（5）	Ｄ４－86	2	25.870	剥片	メノウ	3.38	3.43	2.05	14.89		
6	Ｄ４－87	34	25.775	剥片	メノウ	2.06	2.64	0.57	1.9	接８	
		35	25.890		メノウ						
7	Ｄ４－87	1	26.130	剥片	メノウ	2.06	2.4	0.52	2.09		
8	Ｄ４－77	1	26.255	剥片	メノウ	2.45	2.3	0.65	3.2		

9	Ｄ４－77	6	26.290	剥片	メノウ	3.15	1.62	0.73	2.79		
10	Ｄ４－77	22	26.125	剥片	メノウ	3.56	2.0	0.72	5.12		下端欠
11	Ｄ４－77	2	26.240	楔形石器	メノウ	3.13	2.3	1.23	7.27		
12	Ｄ４－87	45	25.950	二次加工	メノウ	2.53	1.62	0.67	2.33		
13	Ｄ４－88	2	25.978	剥片	メノウ	3.06	2.22	0.64	3.62		
14	Ｄ４－87	19	25.910	剥片	メノウ	4.4	3.21	1.51	15.73		
15	Ｄ４－77	13	26.700	ナイフ形石器	黒曜石	4.11	1.66	0.87	4.18		基部整形砕片２点
16	Ｄ４－88	4	25.882	剥片	黒曜石	3.74	2.78	1.15	9.47		両側Ｕ
17	Ｄ４－87	9	25.935	剥片	黒曜石	4.43	2.48	1.34	9.72		半欠
18	Ｄ４－87	24	26.470	剥片	黒曜石	3.09	2.57	1.26	7.25		
19	Ｄ４－77	15	26.740	剥片	黒曜石	4.01	2.56	0.82	5.37		石核調整剥片
20	Ｄ４－87	11	26.135	剥片	黒曜石	2.25	1.77	0.57	1.73		
21	Ｄ４－87	30	26.290	剥片	黒曜石	2.09	2.54	0.55	1.78		
22	Ｄ４－85	10	26.400	剥片	黒曜石	5.25	3.16	0.99	10.34	接４	
	Ｄ４－87	16	26.070	剥片	黒曜石						
	Ｄ４－87	38	25.935	剥片	黒曜石						
	Ｄ４－94	89	26.257	剥片	黒曜石						
23	Ｄ４－87	21	26.075	二次加工	黒曜石	4.68	3.55	1.07	13.12	接23	
24	Ｄ４－87	31	25.810	剥片	黒曜石						
25	Ｄ４－77	10	26.210	剥片	緑色硬質頁岩	2.18	1.32	0.71	1.74		
26	Ｄ４－77	21	26.030	剥片	緑色硬質頁岩	1.34	1.79	0.5	0.85		
27	Ｄ４－77	16	26.290	剥片	硬質頁岩	2.84	3.49	1.18	9.06		
28	Ｄ４－87	33	26.025	剥片	珪質頁岩	3.03	2.04	1.09	4.7		
29	Ｄ４－87	25	26.020	剥片	硬質頁岩	2.58	1.52	0.68	1.94		半欠
30	Ｄ４－87	44	25.905	剥片	硬質頁岩	2.84	3.01	0.81	4.31		
31	Ｄ４－77	18	26.595	石核	硬質頁岩	4.46	2.45	1.69	16.49		
32	Ｄ４－87	15	25.980	剥片	珪質岩	1.89	3.74	0.94	4.35		
33	Ｄ４－86	3	25.880	二次加工	ホルンフェルス	4.3	3.01	0.88	11.69		石斧材
34	Ｄ４－87	18	25.910	剥片	珪質岩	2.65	2.60	1.00	7.83		第1−12地点と接合
35	Ｄ４－77	4	26.140	剥片	緑色硬質頁岩	3.65	2.05	1.20	7.47		第1−11A地点と接合

（４）第11－４地点（第136図・第147図・第148図、図版56）

概要　本地点はＤ４－67グリッドにおいて黒曜石を主体とした小規模な石器集中地点を構成していた。石器群の一部はＤ４－57・66・77グリッドにまで広がりをみせ、第11－５地点と重複する部分もみられた。石材構成は黒曜石、次いで硬質頁岩やメノウ等となっている。

出土石器群　成品としては比較的纏まっている。磨製石斧やナイフ形石器の他に楔形石器が多く出土したことが特徴といえよう。石器の器種と出土量からみると他の地点とは明らかに異なる内容であり、楔形石器を多用するような作業をしていた場所であったものと思われる。

局部磨製石斧（１）　頭部が欠損しており、その形状から約3/4程度が遺存しているものと思われる。表面では研磨が全体におよび、刃部が遺存する部分では面取したように著しい研磨が認められる。裏面でも破損部を除外すれば研磨は入念におこなわれていたようである。いずれにせよ頭部が大きく破損したために廃棄されたものであろう。

ナイフ形石器（２・３）　小型品が２点出土している。３は半透明で良質の黒曜石を素材とし、左右の縁辺部を簡単に整形しナイフ形石器に仕上げている。３は薄く剥離した横長の剥片を素材とし、打点部に整形を兼ねた調整を加えることにより成品としている。作りとしては双方簡単なものといえよう。

楔形石器（６～９・21）　４は５の砕片が接合したもので、６が成品となる。表面は上下方向から剥離され、裏面では最後に横方向から大きな剥離で刃部を作出している。７は、楔としては薄い剥片を採用している。

表裏面を上下からの剥離により刃部が作り出されている。８は上下に整形のための剥離がみられるが刃部の作出までには至らない。成品とはいえないまでも楔を意識した剥片となろう。９は打点部を整形し楔形石器としている。なお、８・９には灰色を呈した小石を含有しており、同一母岩から得られた剥片を加工したものと思われる。以上は黒曜石を素材としたものであり、石質についてみると良質とはいえず黒色で異物を含んだものである。21はＤ４－66グリッドから出土しており、20とともに次の11－５地点に所属する可能性もある。打点部を表裏から削除するように剥離し刃部を作出している。

二次加工剥片（10） 折断された剥片で、左の側面部に整形剥離を施し先端には若干調整を加えている。ナイフ形石器の製作を目的としたものであろう。また、右側縁には刃こぼれ痕が観察でき石器としても使用されていたようである。

剥片（11～16・18～20） 11は異物の混入がみられない半透明の黒曜石で左右の側縁で使用の痕跡を認めることができる。裏面の剥離は調査時のものである。12・13は一部に剥離痕も認められるが、石器として使用されたものではなかろう。14・15も同様である。16は打面を再生するために剥離されたものである。打点部は削除されており、下端部に微細な刃こぼれ痕が観察できる。石器として使用されたものであろう。18は縦長の小剥片で下端は折断されている。19は折断されたものであるが使用の痕跡はみあたらない。20も下半部が折断されたもので使用の痕跡はない。

石核（17） 打面調整が施されており、剥離痕も残るため石核の一部といえよう。３のナイフ形石器や18・19の剥片と同一の石材である。

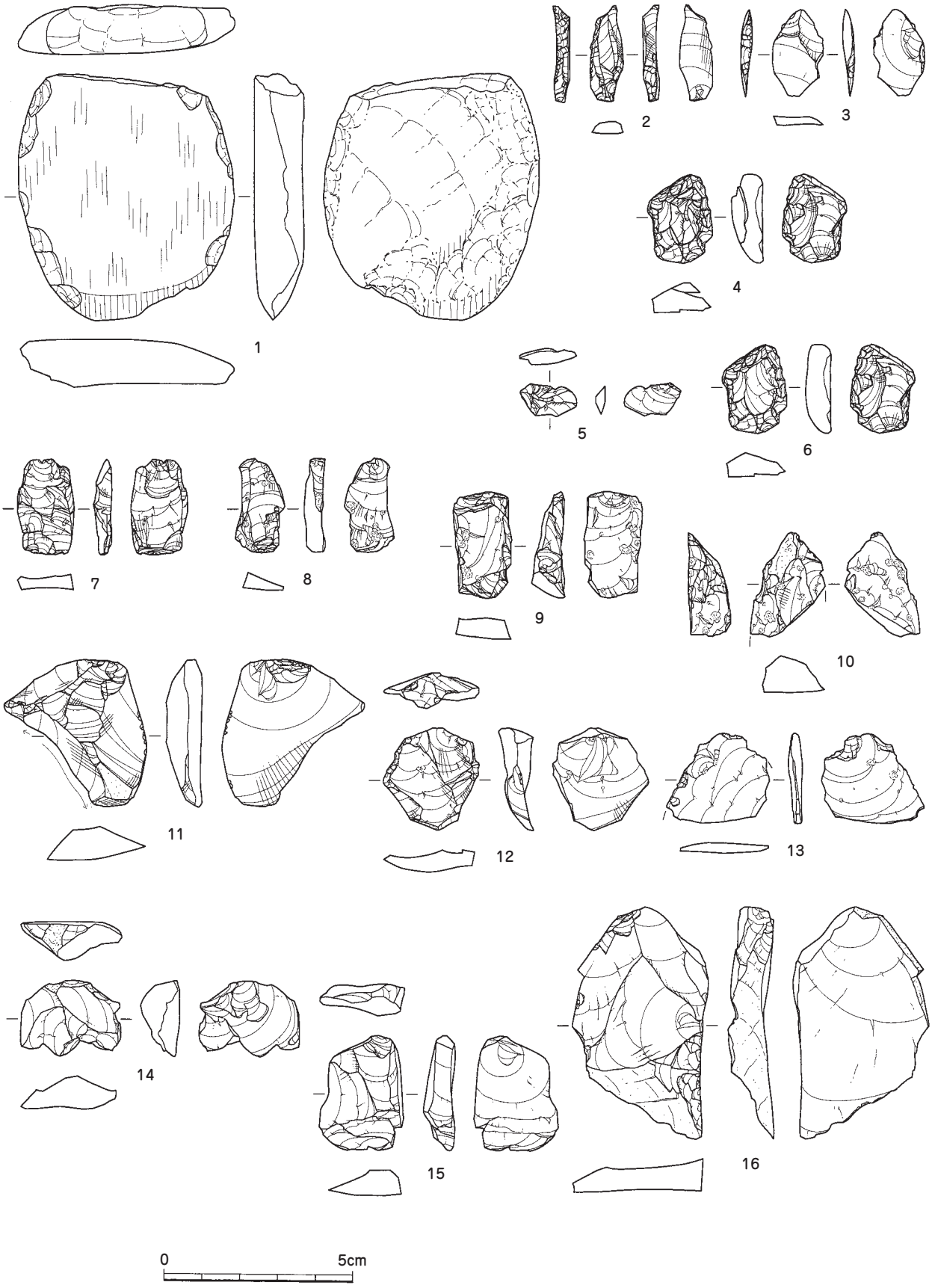
図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材 角閃岩１点 黒曜石10点 硬質頁岩４点 珪質岩１点 黒色安山岩２点 メノウ２点

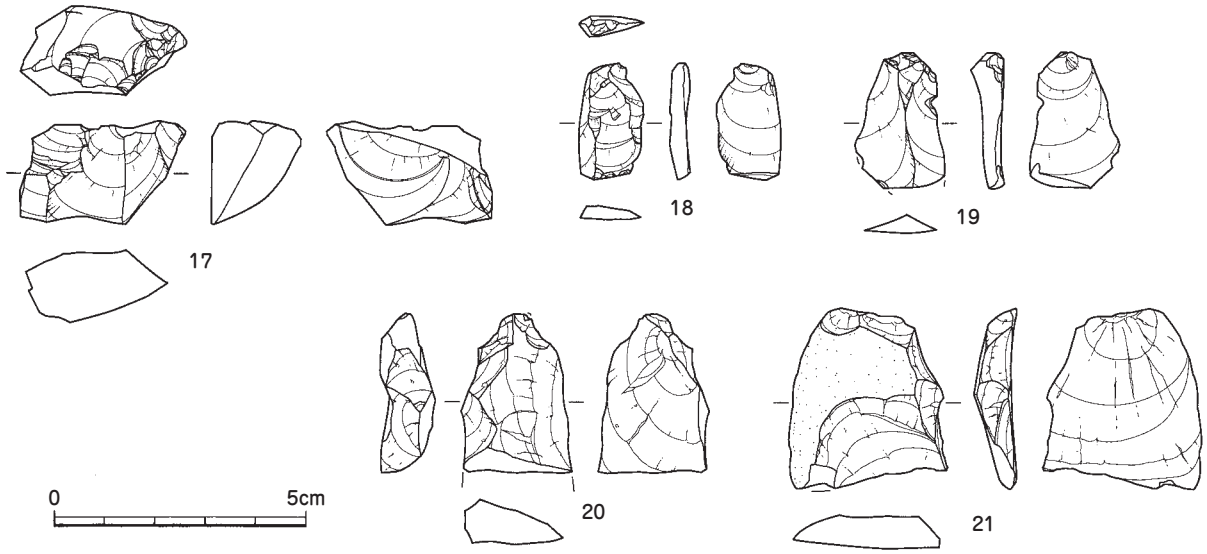
器種 局部磨製石斧１点 ナイフ形石器２点 楔形石器５点 二次加工剥片１点 剥片９点 砕片１点 石核１点 計20点

第56表 第11－４地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｄ４－67	17	26.145	局部磨製石斧	角閃岩	6.54	5.75	1.34	81.38		頭部欠損
2	Ｄ４－67	25	26.770	ナイフ形石器	黒曜石	2.57	0.91	0.45	0.94		
3	Ｄ４－66	9	26.460	ナイフ形石器	硬質頁岩	2.32	1.37	0.32	0.76		
4					黒曜石	2.35	1.71	0.80	2.91	接39	
（５）	Ｄ４－67	7	26.270	砕片	黒曜石	0.87	1.49	0.14	0.31		
（６）	Ｄ４－67	15	26.420	楔形石器	黒曜石	2.35	1.71	0.66	2.60		
7	Ｄ４－67	20	26.180	楔形石器	黒曜石	2.55	1.51	0.50	1.89		
8	Ｄ４－67	24	26.163	楔形石器	黒曜石	2.51	1.33	0.58	1.48		未成品
9	Ｄ４－67	30	26.082	楔形石器	黒曜石	2.84	1.56	0.90	3.63		
10	Ｄ４－67	16	26.410	二次加工剥片	黒曜石	2.77	2.0	1.15	4.29		下半欠
11	Ｄ４－67	13	26.675	剥片	黒曜石	3.92	3.8	0.97	10.09		
12	Ｄ４－66	1	27.060	剥片	黒曜石	2.74	2.55	0.95	3.90		
13	Ｄ４－67	－	－	剥片	黒曜石	2.4	2.72	0.38	2.11		注記消滅
14	Ｄ４－67	22	26.170	剥片	メノウ	2.03	2.68	1.05	4.13		
15	Ｄ４－67	6	26.280	剥片	メノウ	3.07	2.25	0.85	5.56		
16	Ｄ４－68	1	26.643	剥片	珪質岩	6.17	3.61	1.23	22.22		
17	Ｄ４－67	11	26.805	石核	硬質頁岩	2.05	3.29	1.77	10.53		
18	Ｄ４－67	2	26.935	剥片	硬質頁岩	2.32	1.3	0.41	1.07		下端欠
19	Ｄ４－67	8	26.675	剥片	硬質頁岩	2.69	1.79	0.67	1.90		下端欠
20	Ｄ４－66	23	26.180	剥片	黒色安山岩	3.16	2.21	1.11	6.37		
21	Ｄ４－66	30	26.394	楔形石器	黒色安山岩	3.59	3.16	0.86	8.54		



第147図　第11－４地点出土石器（１）



第148図　第11－４地点出土石器（２）

（５）第11－５地点（第136図・第149図・第150図、図版56）

概要　本地点は、第11地点の中心となる第11－10地点の北東に位置し、Ｄ４－66グリッドを中心として石器群が出土している。その一部は同56グリッドでもみられたが規模としては小さなものであった。ただ図示したように石核を含む数点が接合した。出土地点はＤ４－64・73・83グリッドと第１－11Ｂ地点（Ｏ11－89グリッド）となっているため、これらも含めて本地点の石器群とした。

出土石器群　ここでは成品の出土はみられず、石器群は石核とそれに伴う剥片等によって構成されていた。特に第150図12の接合資料は、表皮部分が白色となり、内部は灰色という特別な色調を有したもので各地点から少数出土している。そのため本資料は石核が大きく色彩の相違が認識できたため比較的接合作業が簡単ともいえる石材であった。

二次加工剥片（４）　３点が接合した資料（３）の１点で、左上部の稜線部分に整形のための剥離が認められる。掻器のような使用が考えられる。

剥片（２・５～８・10・11・14～18）　２は幅広の薄い剥片で、１の石核から剥離された可能性が高い。５・６は４と接合し３のようになる。７・８・10も類似した石質で同一の母岩から剥離された可能性が強い。11は上部が遺存した折断片で珪質頁岩としたが、石核９の表面も同系の色調を呈しており、識別が難しい石材といえる。13～17は石核18に接合したものである。14の上部に僅かな調整痕を認めることができる。

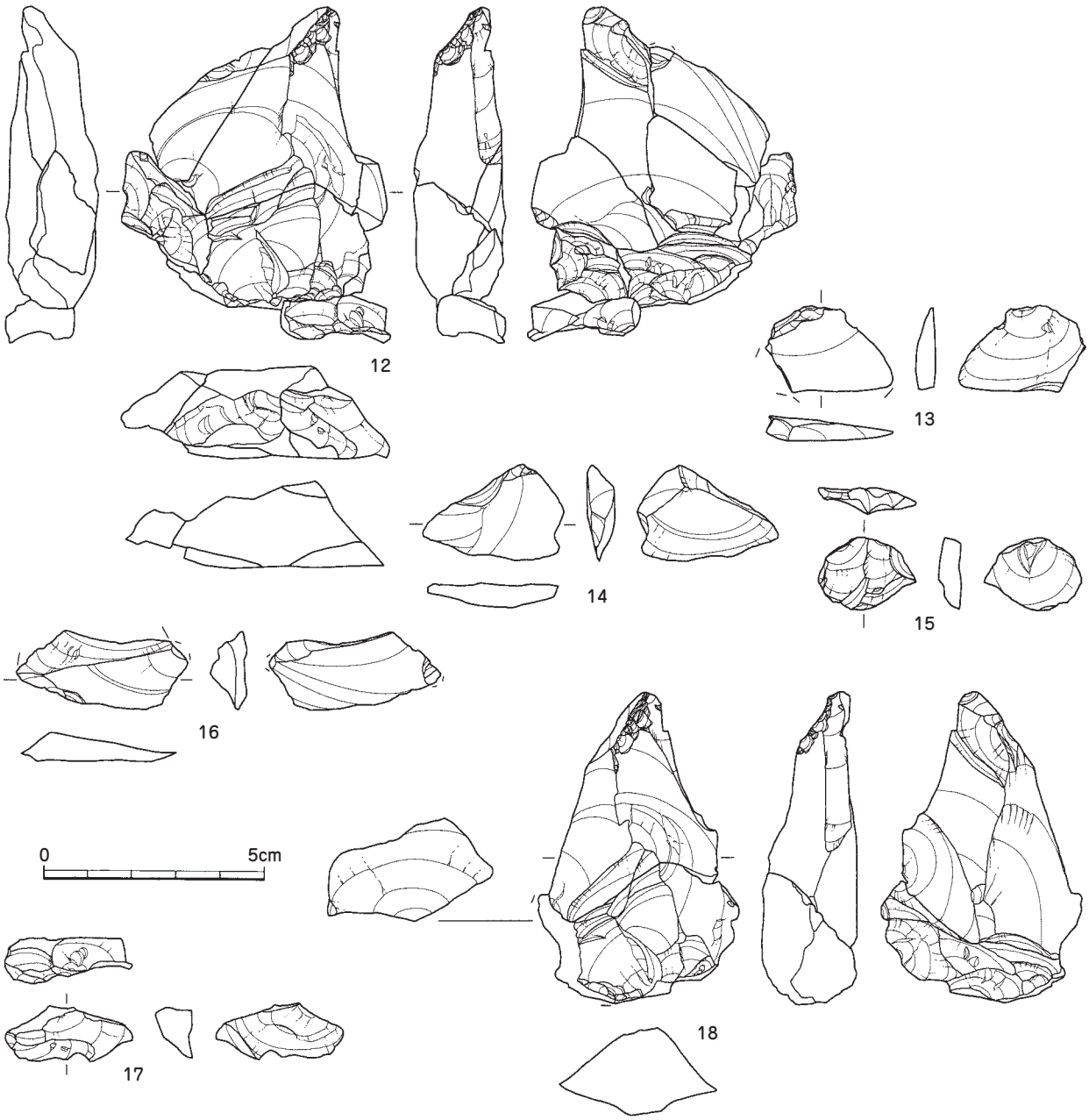
石核（１・９・18）　１はメノウの残核で二方向から剥片が剥離されている。９は表皮部分を多く残した石核で平坦面を利用し多方向からの剥離をおこなっている。18は８点が接合したものである。剥片類は広範囲に散っていた。出土品をみると、原石の中心部が残存した残骸といえよう。前述したように表皮部には白濁化した部分が鮮明に残る（写真図版参照）。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　珪質頁岩１点　硬質頁岩１点　珪質岩14点　メノウ２点

器種　砕片14点　砕片１点　石核３点　計18点

第149図　第11－５地点出土石器（１）



第150図　第11－５地点出土石器（２）

第57表　第11－５地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｄ４－66	3	26.418	石核	メノウ	2.84	4.37	1.53	13.63		
2	Ｄ４－66	16	26.250	剥片	メノウ	1.63	2.10	0.25	1.11		
3						4.36	3.43	1.65	17.09	接34	
（４）	Ｄ４－57	2		二次加工	珪質岩	4.36	3.39	1.52	12.44		
（５）	Ｄ４－56	6		砕片	珪質岩	2.19	0.74	0.27	0.30		第1-14C地点と同材
（６）	Ｄ４－66	15	26.245	剥片	珪質岩	3.14	1.67	0.89	4.35		
7	Ｄ４－66	18	26.340	剥片	珪質岩	3.33	2.59	0.67	3.43		接34同材
8	Ｄ４－66	14	26.330	剥片	珪質岩	2.42	1.79	0.44	1.24		接34同材
9	Ｄ４－66	11	26.355	石核	珪質岩	2.93	4.58	1.75	22.05		
10	Ｄ４－66	20	26.685	剥片	珪質岩	2.85	1.84	0.54	2.00		接34同材
11	Ｄ４－66	13	26.640	剥片	珪質頁岩	1.79	2.6	0.94	3.27		下端欠
12						7.58	6.07	2.11	69.37	接32	
(13)	Ｄ４－64	13	26.522	剥片	珪質岩	1.97	2.87	0.58	2.99		下端欠
(14)	Ｄ４－83	6	26.430	剥片	珪質岩	2.17	3.2	0.64	3.56		
(15)	Ｄ４－73	8	26.360	剥片	珪質岩	1.65	2.21	0.62	1.67		下端欠
(16)	Ｄ４－73	27	26.655	剥片	珪質岩	1.77	3.88	0.83	4.12		上端欠
(17)	O11－89	12	25.940	剥片	珪質岩	1.27	2.9	1.05	2.90		1－11B地点
(18)	Ｄ４－66	5	26.542	石核片	珪質岩	6.76	5.52	2.00	54.13		３点接合 ２点は注記消滅

（６）第11－６地点（第136図・第151図・第152図、図版56・57）

概要　本地点は環状石器群の北側部分を構成する位置にあり、石器群はＤ４－55グリッドを中心に同54・65グリッドなどに分布していた。石材構成は、ここでも黒曜石やメノウが主体となっている。

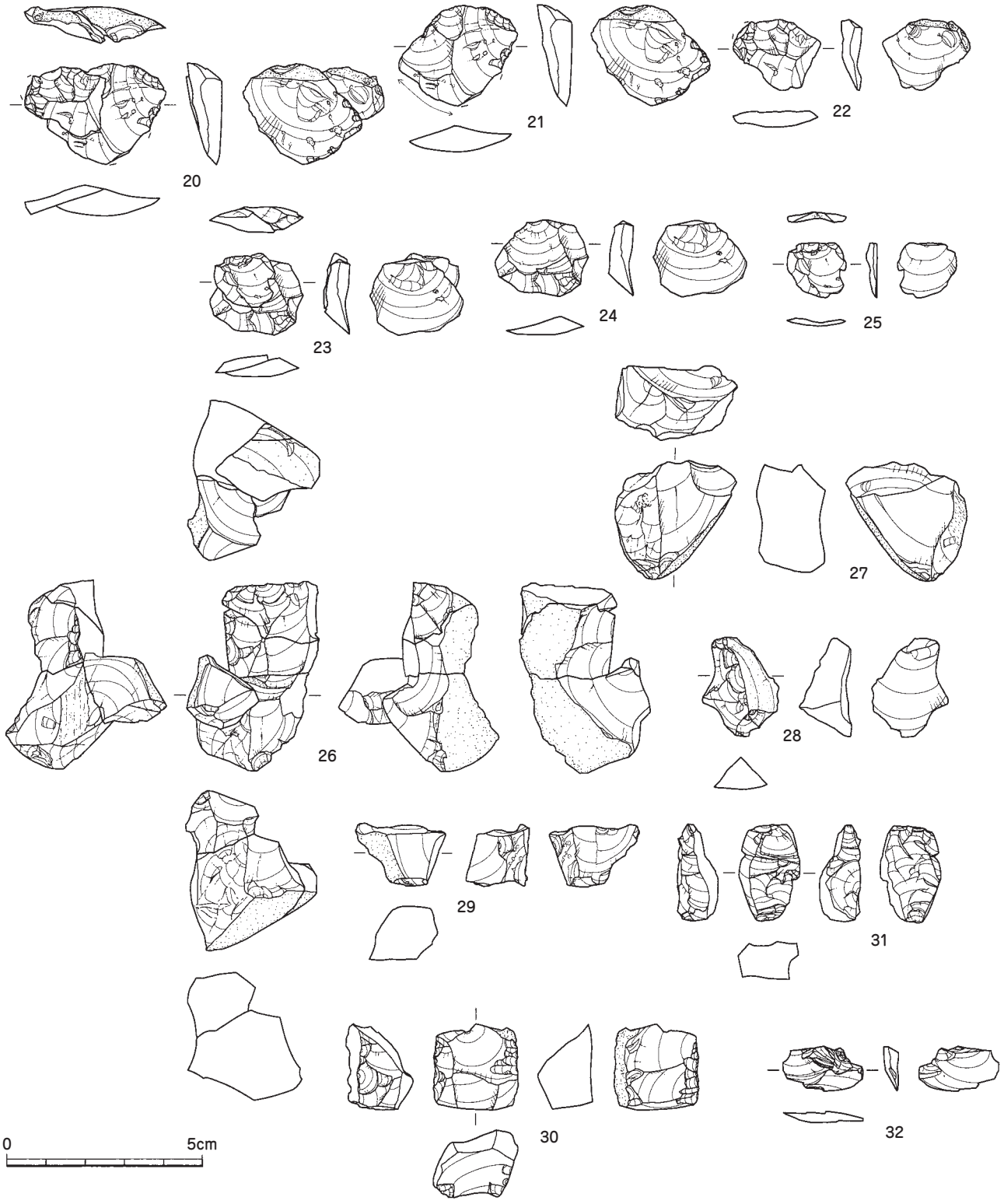
出土石器群　成品は少なく楔形石器が２点みられただけである。他に石器として使用された剥片が数点出土している。接合資料についてみると、石核に接合した資料が２点出土している。メノウ製の石核は隣接グリッドから出土したもので、接合した剥片はすべて第11－10地点から出土したものであった。ただ石核が隣接するグリッドから出土しているため便宜的に本地点の石器群として図示した。

楔形石器（30・31）　30は接合資料の一部であり石核片ともいえよう。左側縁に表裏から剥離が施され刃部となっている。31は26の一部を構成していたものと思われるが接合には至らなかった。下端には楔特有の表裏面からの剥離が加えられている。

剥片（３～19・21・22・24・25・28・29・32）　３～７では特に使用の痕跡は認められない。９から13も同様である。８の表面はほとんど自然面で両側縁の一部に微細な剥離痕がみられる。14は上部に楔製作に用いる剥離が施されているが、小石を含有していたため放棄されたものか。15・16は両側縁部に若干の剥離と刃こぼれ状の使用痕が認められる。削器のように使用したものであろう。17にも僅かながら使用の痕跡がみられた。19の裏面にみられる剥離は調査時のものである。20は同一グリッドから出土した21・22が接合したもので、21の側縁には明確な刃こぼれが観察できた。23は隣接するグリッドで出土した24・25の剥片が接合したものであり、使用痕等は認められない。32は薄い砕片で押圧剥離の痕跡も認められるため石器製作の段階で剥離されたものとなろう。

石核（２・27）　２の石核には３～７の剥片が接合した。接合資料（1）から色調をみると、表皮部分は白色に濁り、次いで褐色へと変化し中心部では半透明の淡褐色となる。そのため８～13の剥片も本石核から剥離されたものと思われる。27はメノウ製で、28～30と接合し26（接合図）となる。表皮部分が褐色で、内部は淡い灰赤色を呈した珍しい色調の石材である。

第151図　第11－６地点出土石器（１）



第152図　第11－６地点出土石器（２）

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石11点　珪質頁岩１点　メノウ17点

器種　楔形石器２点　剥片21点　砕片４点　石核２点　計29点

第58表　第11－６地点実測石器属性表

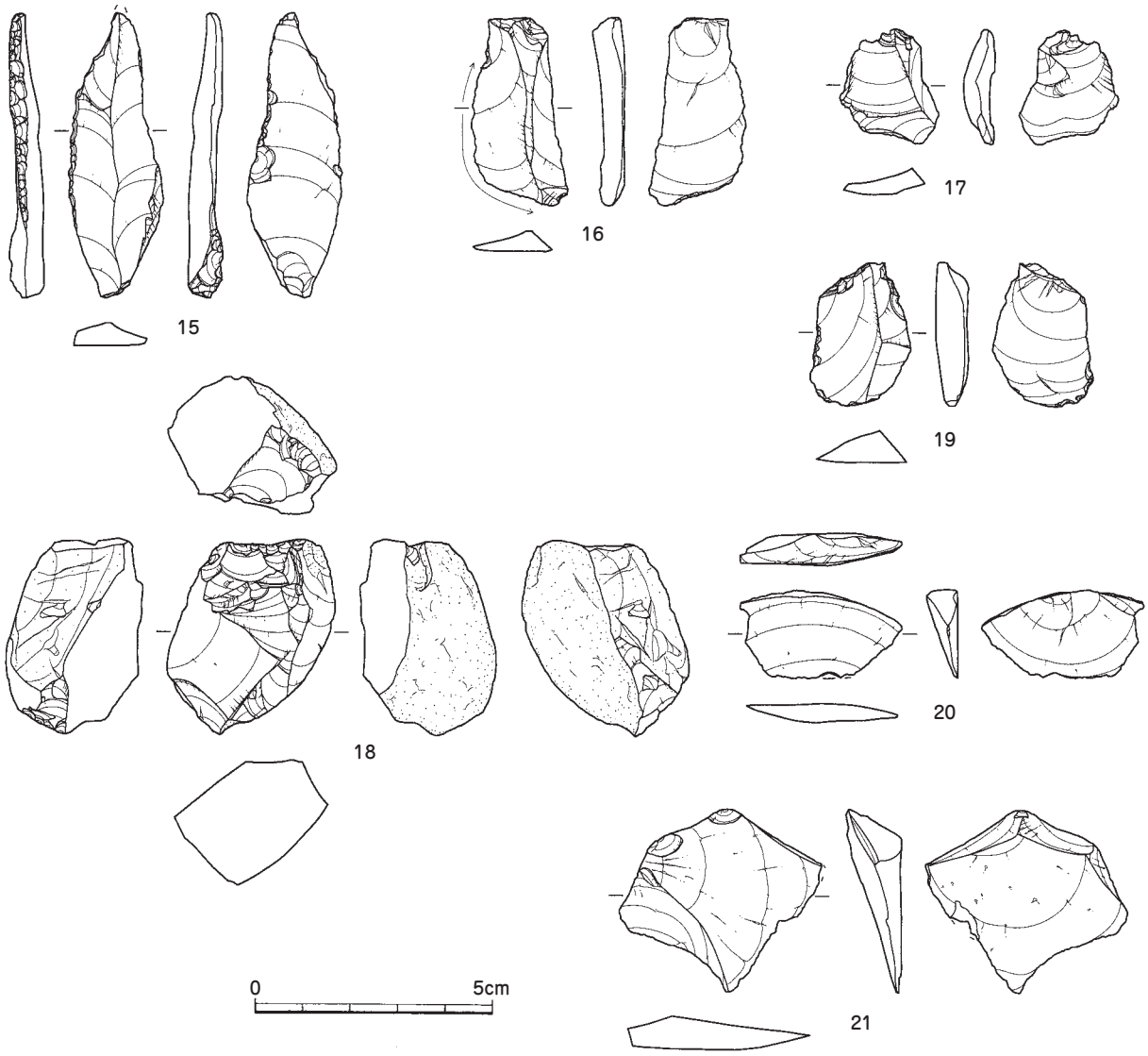
挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1					メノウ	3.98	3.61	2.17	27.58	接47	
(2)	D４－65	20	26.340	石核	メノウ	2.88	3.51	1.99	17.72		
(3)	D４－75	42	26.456	剥片	メノウ	2.12	1.64	0.60	1.65		
(4)	D４－75	86	26.277	剥片	メノウ	1.98	1.10	0.49	0.90		
(5)	D４－75	27	26.516	剥片	メノウ	2.79	1.54	0.71	1.66		
(6)	D４－75	16	26.393	剥片	メノウ	2.12	2.18	1.04	2.10		
(7)	D４－75	33	26.445	剥片	メノウ	2.33	1.83	0.99	3.55		
8	D４－55	11	26.985	剥片	メノウ	2.44	2.07	0.70	2.18		
9	D４－55	44	26.345	剥片	メノウ	1.87	2.28	0.66	1.70		
10	D４－56	8	26.695	剥片	メノウ	1.63	2.77	0.83	2.35		半欠
11	D４－56	7	26.120	剥片	メノウ	1.65	1.97	0.44	1.05		
12	D４－55	10	27.050	剥片	メノウ	1.59	1.44	0.72	1.25		
13	D４－55	9	26.795	剥片	メノウ	1.73	1.60	0.70	0.98		
14	D４－56	3	26.520	剥片	黒曜石	2.69	2.01	1.47	7.26		
15	D４－55	21	26.730	剥片	黒曜石	3.56	2.53	1.01	7.26		周縁U
16	D４－55	49	26.480	剥片	黒曜石	3.00	2.13	0.73	3.61		
17	D４－55	13	26.555	剥片	黒曜石	2.05	1.91	0.61	2.06		上下端欠
18	D４－54	15	26.475	剥片	黒曜石	2.26	2.65	0.55	2.39		
19	D４－65	17	26.420	剥片	黒曜石	3.06	2.07	0.63	2.03		右側U
20					黒曜石	2.58	3.61	0.93	5.44	接45	
(21)	D４－55	39	26.430	剥片	黒曜石	2.56	3.00	0.83	4.01		周縁U
(22)	D４－55	33	26.665	剥片	黒曜石	1.80	2.23	0.53	1.43		
23					黒曜石	2.08	2.39	0.68	2.51	接20	
(24)	D４－65	24	26.420	剥片	黒曜石	1.95	2.37	0.63	2.15		
(25)	D４－75	35	26.266	砕片	黒曜石	1.39	1.50	0.28	0.36		
26					メノウ	4.83	3.37	4.09	35.79	接14	
(27)	D４－55	46	26.440	石核	メノウ	3.02	3.07	1.90	18.29		
(28)	D４－55	19	26.445	砕片	メノウ	2.52	1.94	1.32	3.44		
(29)	D４－55	14	26.365	砕片	メノウ	1.60	2.30	1.40	5.35		
(30)	D４－55	41	26.590	楔形石器	メノウ	2.19	2.15	1.70	8.71		
31	D４－55	28	26.960	楔形石器	メノウ	2.47	1.55	1.05	4.21		接14と同材
32	D４－55	26	26.500	砕片	珪質頁岩	1.15	2.05	0.38	0.56		加工片

（７）第11－７地点（第136図・第153図・第154図、図版57）

概要　本地点は前述した第11－６地点と後述する第11－８地点の間に位置し、環状石器群の北西部の一端を担っている。また、これらの石器群の分布を巨視的にみると、各地点は斜方向に帯状をなすような形の広がりをみせる。なお、第11－８地点の一部とは重複した部分も存在したため、地点間の分離もそれほど厳密ではないことを付記しておく。

本地点における石器群の広がりをみると、D４－64グリッドを中心に同53・54・63・65グリッドにまで及んでいるが、遺物総量としては多いものとはいえず、分布の状況も特に集中するということはなかった。石材についてみると、ここでも黒曜石・メノウが主体を占めており、黒色安山岩や硬質頁岩・珪質岩等はそれを補完する程度といったものである。

第153図　第11－７地点出土石器（１）



第154図　第11－７地点出土石器（２）

出土石器群　成品としては完形に近いナイフ形石器が出土しているのみで、他に定型的な石器といえるものはみられず、二次加工の施された剥片が２点存在しているにすぎない。

ナイフ形石器（15）　Ｄ４－64グリッドから出土しており、先端部が僅かに欠損する。背面や基部は丁寧に加工され、裏面の打点部も２回の剥離によって削除されている。石材には硬質頁岩を採用している。しかし、この種の石材についてみると、剥片は若干みられるものの砕片は出土していない。このため製作は他の地点でおこなわれたものと考えられる。

二次加工剥片（12・16・19）　12は幅広の剥片を数点に分割したものの１片である。右下の側面を小さな剥離で整形しているため石器として使用されていたものと思われる。16はナイフ形石器と同様に硬質頁岩を使用したもので、きれいな石刃状に剥離された剥片の下部に簡単な整形を施し石器として使用したものである。左側縁部では著しい刃こぼれ痕が認められる。19は打点部を整形し、左側縁には微細な調整を表裏面から施している。その形状から掻器や削器のような石器として使用されていたものと考えられる。

剥片（１～４・６・７・10・11・13・14・17・20・21）　１は意識的に鋭利な先端を作出するような剥離

が周囲にみられる。錐などのような刺突具としての機能を備えていたとも考えられるような剥片である。２・３は石器に加工できる十分な形状を有しているが特に使用の痕跡等はみられない。４は下端に数回の剥離痕を認めることができる。特に左側では表裏面から剥離が加えられており、彫器や楔の製作を意図したものとも思われる。５は隣接するグリッドから出土した２点（６・７）が接合したもので小さな剥離痕は認められるが使用という点では疑問も残る。11の上部では楔の刃部を作出するときにみられるような剥離を施している。下部は折断されており楔の製作を意図した剥片とも考えられる。13・14も折断された剥片で、14には下端部左に使用の痕跡を認めることができる。17・20・21では特に使用等の痕跡は認められない。

石核（９・18）　９は10と接合したもの（８）で隣接するグリッドから出土した。表面では石刃状の剥片が３枚以上剥取されており、その後に10を分割している。10では下端にも剥離が施されているため石器製作を目的として分割されたものと思われる。18は残された剥離面からみると、良好な剥片は得られなかったようである。左の側面は平坦で節理面となっているが、打面としては利用されてはいない。表皮部分から推定すると原石の大きさは拳大ほどになろう。なお、19はその色調（淡い褐色を呈し、表皮直下に帯状の褐色層）等から明らかにこの石核（珪質岩）から剥離されたものである。出土地点も同一グリッドとなっている。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石６点　珪質頁岩１点　硬質頁岩２点　珪質岩２点　黒色安山岩２点　メノウ６点

器種　ナイフ形石器１点　二次加工剥片３点　剥片13点　石核２点　計19点

第59表　第11－７地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｄ４－63	29	26.838	剥片	メノウ	2.29	2.5	1.11	4.86		
2	Ｄ４－63	43	26.476	剥片	メノウ	4.11	2.53	1.7	10.95		
3	Ｄ４－54	7	26.538	剥片	メノウ	3.8	2.91	1.07	10.17		
4	Ｄ４－63	24	26.702	剥片	メノウ	2.71	2.21	0.8	4.12		
5					メノウ	2.84	2.5	1.18	4.75	接48	
（6）	Ｄ４－53	3	26.535	剥片	メノウ	1.49	1.26	0.52	0.69		
（7）	Ｄ４－63	40	26.500	剥片	メノウ	2.83	2.15	1.18	4.06		
8					黒曜石	3.82	2.77	1.6	15.59	接22	
（9）	Ｄ４－54	12	26.552	石核	黒曜石	2.82	3.66	1.33	9.95		
(10)	Ｄ４－64	3	26.433	剥片	黒曜石	2.25	2.47	1.59	4.64		
11	Ｄ４－63	41	26.510	剥片	黒曜石	1.92	1.62	0.65	1.68		下端欠
12	Ｄ４－63	14	26.477	二次加工剥片	黒曜石	2.54	1.55	0.55	2.02		
13	Ｄ４－64	12	26.450	剥片	黒曜石	2.82	3.66	1.33	9.95		下端欠
14	Ｄ４－63	22	26.700	剥片	黒曜石	2.92	2.81	0.94	4.8		半欠
15	Ｄ４－64	18	26.718	ナイフ形石器	硬質頁岩	5.99	2.0	0.74	6.1		
16	Ｄ４－64	1	27.122	二次加工剥片	硬質頁岩	3.96	2.05	0.69	3.64		下端欠
17	Ｄ４－64	16	26.430	剥片	珪質頁岩	2.42	2.09	0.66	1.61		
18	Ｄ４－54	8	26.663	石核	珪質岩	4.11	3.55	2.88	34.74		円礫素材
19	Ｄ４－54	11	26.417	二次加工剥片	珪質岩	3.03	2.12	0.7	4.04		左側Ｕ
20	Ｄ４－63	45	26.530	剥片	黒色安山岩	1.87	3.41	0.67	3.28		
21	Ｄ４－63	17	26.478	剥片	黒色安山岩	3.85	4.25	1.18	10.35		

（８）第11－８地点（第136図・第155図・第156図、図版57）

概要　前述したように本地点は第11－７地点と重複しており、Ｄ４－63・73グリッドで出土した石器群を中心としたものである。石材は黒曜石・メノウ・珪質頁岩・珪質岩などとなる。特にＤ４－63グリッドでは黒色安山岩と黒曜石の剥片・砕片（第64表）が集中して出土している。しかし成品といえる石器はここでも少なかった。

出土石器群　成品としては楔形石器が３点出土したのみであるが、整形加工を施した剥片も２点みられた。石器組成という点での特徴は見出せない。

楔形石器（２・３・18）　２～５は接合資料（１）で、本地点の中心を形成するグリッドから出土している。その接合資料をみると、上下方向から剥離されており、いかにも楔形石器の製作を目的としたような剥離方法といえよう。２・３では剥離後に刃部形成のため、さらに打点部を剥離により除去している。刃部には磨耗痕が存在しないため使用に供したかどうかは疑問である。18は縦長の剥片を素材とし、打点部を加撃し刃部を作出している。裏面ではバルブ部分を１回の小さな剥離で削除しており楔として用いたものであろう。左側縁にも二次的な剥離が認められる。接合部分をみると異物を含んでいたらしく空洞化しており、使用のさいに破損したものと思われる。

二次加工剥片（14・15）　13は14・15の接合を図化したものであり、２点とも側縁部がきれいな調整剥離によって加工されている。いずれも削器のように使用されたものと思われる。なお、15は第１－11B地点で出土したものである。前述したように石材が珪質岩であったため、色調に特徴がみられ接合作業では選択しやすい石材である。

剥片（４～６・８～12・16・17・19）　６の形状は、前出の剥片（第153図１）と類似しており、断面三角の鋭利な突起部がみられる。８・９は若干離れた地点から出土し接合したものである。８には使用痕が観察できる。10は分厚い剥片で、裏面方向からさらに剥離が加えられており、６と同様に鋭利な尖頭部を作り出している。抉るような剥離方法から錐としての可能性も考えられる。11・12に加工等はみられない。16・17・19については特に使用の痕跡等はみられない。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

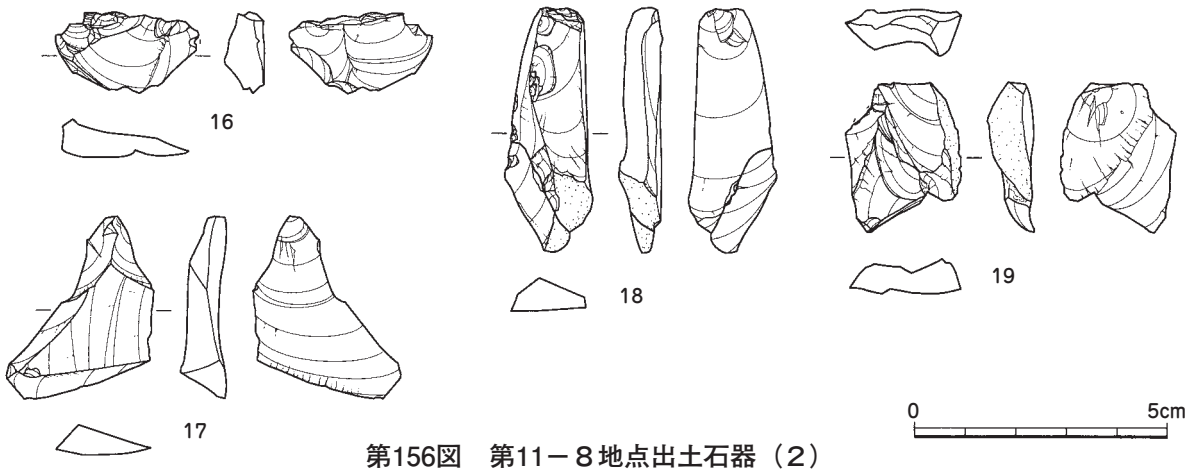
石材　黒曜石３点　珪質頁岩３点　珪質岩４点　黒色安山岩１点　メノウ５点

器種　楔形石器３点　二次加工剥片２点　剥片９点　砕片２点　計16点

第60表　第11－８地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1						3.63	2.05	1.61	14.49	接26	
（2）	Ｄ４－63	34	26.490	楔形石器	メノウ	3.62	2.05	1.33	8.42		
（3）	Ｄ４－63	27	26.680	楔形石器	メノウ	3.59	1.90	0.73	5.07		
（4）	Ｄ４－63	32	26.450	砕片	メノウ	1.84	1.07	0.45	0.64		
（5）	Ｄ４－73	15	26.730	砕片	メノウ	1.38	1.15	0.31	0.36		
6	Ｄ４－73	19	26.505	剥片	メノウ	2.26	2.29	1.23	6.15		
7						4.03	2.20	0.57	3.43	接44	
（8）	Ｄ４－73	17	26.490	剥片	黒曜石	4.00	2.05	0.56	2.90		半欠
（9）	Ｄ４－67	4	26.285	剥片	黒曜石	1.91	1.91	0.29	0.53		
10	Ｄ４－73	24	26.500	剥片	黒曜石	1.94	3.55	1.21	5.43		
11	Ｄ４－73	13	26.860	剥片	珪質岩	1.67	2.66	0.52	7.85		接31同材
12	Ｄ４－93	3	26.310	剥片	珪質岩	3.32	1.56	0.44	1.44		接31同材

第155図　第11－８地点出土石器（１）



第156図　第11－８地点出土石器（２）

13						3.68	2.58	1.09	14.79	接31	
(14)	D４－73	23	26.675	二次加工剥片	珪質岩	3.16	3.73	1.11	9.43		下端欠
(15)	O11－87	9	26.014	二次加工剥片	珪質岩	3.37	4.3	1.87	5.36		第1－11B地点
16	D４－73	5	26.500	剥片	珪質頁岩	1.62	2.84	0.8	1.99		
17	D４－73	10	26.855	剥片	珪質頁岩	3.61	2.94	0.92	4.15		
18	D４－73	20	26.500	楔形石器	珪質頁岩	4.84	1.76	0.87	5.37		整理中に破損
19	D４－73	2	26.435	剥片	黒色安山岩	2.98	2.31	0.94	5.04		下端欠

（９）第11－９地点（第136図・第157図、図版58）

概要　本地点は環状石器群の北西部分に位置し、第11－１地点・第11－11地点の双方と石器群の分布範囲が一部重複している。このため３地点間では接合関係が認められている。石材についてみると、遺物の出土が集中していたD４－83グリッドでは約70％を黒曜石が占めており、次いで黒色安山岩となり、メノウは概して少なかった。

出土石器群　成品は皆無で図示できるような剥片類も少なかった。そのほとんどはD４－83グリッドで出土しており、ここでは図示できなかった剥片・砕片類が他に27点検出されている。

剥片（１～８）　図示した剥片類は６を除いてすべてD４－83グリッドから出土したものである。１は打面部の一部が削除されている。２の打面では調整痕が観察できる。形状の整った剥片であるが使用の痕跡は認められない。４は右側縁に微細な剥離痕が顕著に認められる。石器として使用されたものであろう。左側縁の抉られたような剥離痕は調査時のものである。８は断面三角を呈した大型の縦長剥片で下端部には自然面がみられる。この大きさであれば小剥片の剥離も可能となろうが、剥離や側縁での加工等は認められない。裏面右の欠損は調査時のものである。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石４点　黒色安山岩３点　メノウ１点

器種　剥片８点　計８点

第61表　第11－９地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	D４－83	9	26.395	剥片	メノウ	3.16	1.73	0.79	4.01		

第157図　第11－９地点出土石器

2	Ｄ４－83	15	26.600	剥片	黒曜石	2.84	2.76	1.05	5.44		
3	Ｄ４－83	40	26.390	剥片	黒曜石	2.34	2.3	1.24	4.63		
4	Ｄ４－83	14	26.540	剥片	黒曜石	2.10	1.87	0.71	2.11		
5	Ｄ４－83	5	26.340	剥片	黒曜石	1.73	2.68	0.78	2.58		
6	Ｄ４－82	1	－	剥片	黒色安山岩	3.69	2.76	1.26	10.4		
7	Ｄ４－83	8	26.690	剥片	黒色安山岩	2.69	2.02	0.59	2.82		
8	Ｄ４－83	10	26.393	剥片	黒色安山岩	7.88	3.42	2.40	45.87		

（10）第11－10地点（第136図・第158図・第159図、図版58）

概要　本地点は環状石器群の中央に位置し、環状の核を構成するような地点と推測できる。Ｄ４－75グリッドでは集中的に石器群が出土し、その一部は北側に隣接するＤ４－65グリッドにおよぶ。また西に隣接するＤ４－74グリッドでも小範囲ながら石器群が独立するような形で分布（第11－11地点）しており、接合資料は認められなかったが石材的には共通していた。接合についてみると、メノウと珪質岩が第11－３地点出土の剥片と接合している。いずれにしても各種成品の出土や石材から環状石器群の中心的存在であることは疑いない。石材の種類も豊富で黒曜石とメノウを中心に硬質頁岩・珪質岩・黒色安山岩・緑色硬質頁岩などで構成され、石斧材を除けばほぼ全種の石材が出土している。また黒曜石とメノウの二種は本地点を中心として各地点に散布し同心円状にきれいな形で分布している。

出土石器群　定型石器ではナイフ形石器・掻器・彫器などが出土し、それを補完するかの如く整形を兼ねた調整により石器として活用している剥片が多くみられた。こうした石器群の組成が本地点の特徴ともいえよう。

ナイフ形石器（20）　完形品であり背面及び基部は整形後、丁寧に調整されている。裏面基部にも整形痕がみられる。石材には硬質頁岩を採用しており、器面では白色の鉱物や縞状の結晶がみられ第11－７地点出土のナイフ形石器と酷似している。同一母岩から剥離された剥片を素材としたものと考えられる。

掻器（22・23）　２点とも小剥片の下端を折断し、調整剥離を加えることにより刃部を作出している。23の右側縁では刃こぼれ状の痕跡が認められる。

彫器（26）　３点が接合したもので、うち１点は第11－３地点（Ｄ４－97グリッド）から出土した剥片である。彫器として加工された剥片は中央の剥片で、縦方向の折断と右側縁を折ることにより使い易くしたものであろう。折断した側面を１cmほど調整し、横方向から小さな剥離を施している。さらに左の剥片でも下端に微細な使用痕がみられることからこの剥片も石器として使用されたものと思われる。

ヘラ状石器（21）　縦長剥片の上下を折断し、裏面下部を小さな剥離で整形することにより刃部としたものである。刃部形成の剥離が主剥離面でみられるため、前述した掻器とは刃部の製作が異なっている。その形状からヘラ状石器として区別した。

二次加工剥片（２～４・19・25）　２は上部に粗雑な剥離が加えられている。楔形石器の刃部を意識した剥離とも思われる。３は右側縁と裏面に剥離痕がみられる。また下端部には横方向からの剥離が施されており彫器の可能性も否定しきれない。いずれにせよ石器として使用されたことは間違いなかろう。４は裏面に３回ほど剥離を加えている。19は幅広で大型の剥片を折断したもので左側縁に小さな剥離とともに顕著な使用痕を観察できる。この１点のみ半透明な黒曜石である。25は表裏面に整形のための剥離がみられる。おそらく鋭利な側縁を刃部として使用したものであろう。

剥片（１・５～７・９・10・18・24・28・29・31・32）　１は数方向からの剥離が認められる。このことから石核の一部とも考えられる。８は９・10が接合したものでやや離れたグリッドから出土している。16は折断された剥片で左側縁には微細な刃こぼれ痕が認められる。打点部にも整形が施されているため削器のように使用したものであろう。30は同一グリッドから出土した31・32が接合したものである。形状の整った剥片であるが使用の痕跡は認められない。

石核（27）　平坦な自然面を打面として多方向から剥片を剥離している。自然面の一部では敲打による痕跡を残す。原石の段階では石器製作時の敲石として使用したものであろう。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

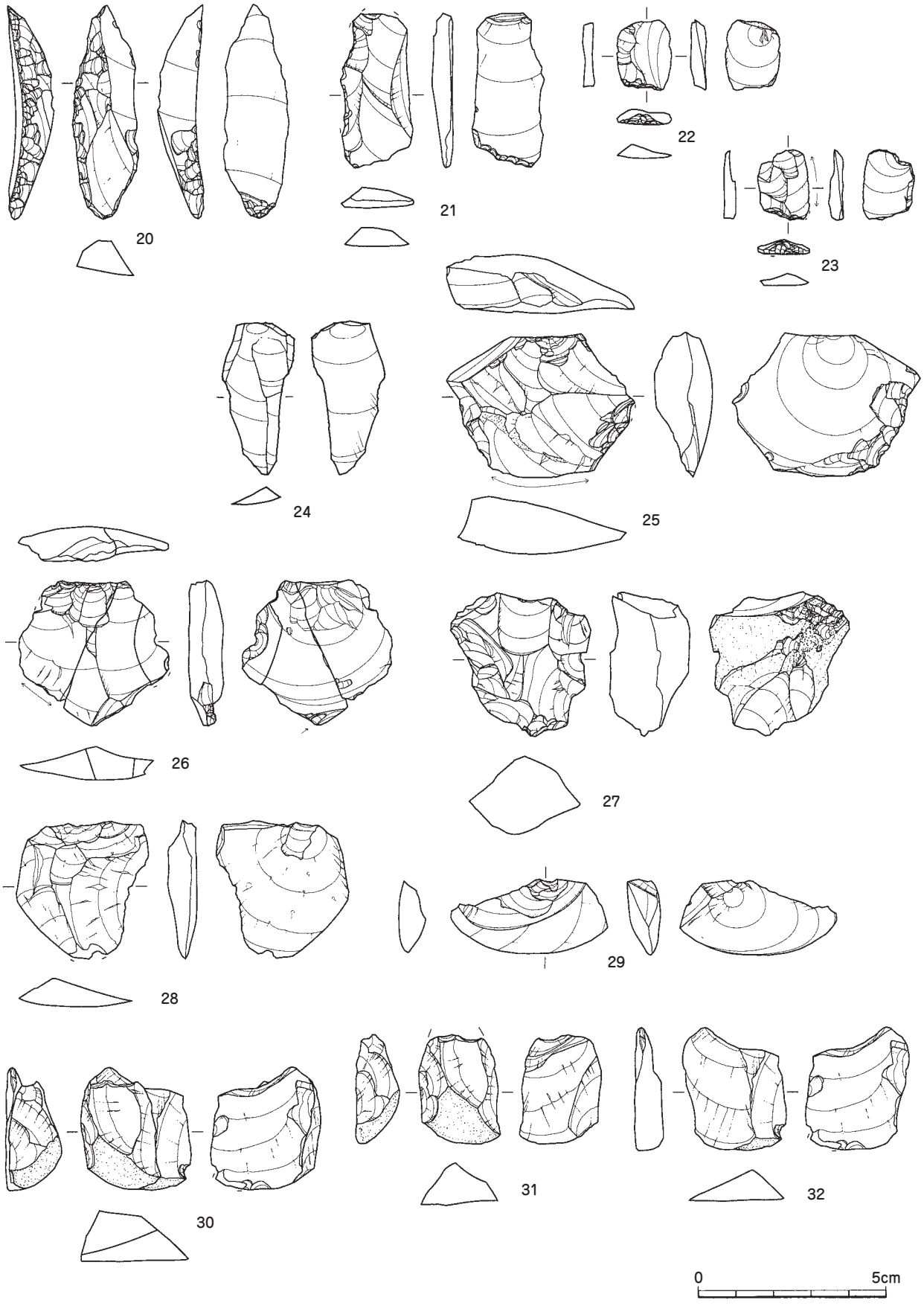
石材　黒曜石11点　珪質頁岩２点　硬質頁岩３点　緑色硬質頁岩１点　珪質岩５点　黒色安山岩３点　メノウ10点

器種　ナイフ形石器１点　掻器２点　彫器１点　ヘラ状石器１点　二次加工剥片５点　剥片22点　砕片２点　石核１点　計35点

第62表　第11－10地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｄ４－75	20	26.335	剥片	メノウ	2.96	2.38	1.3	8.01		石核片？
2	Ｄ４－74	30	26.450	二次加工	メノウ	2.77	2.55	0.74	4.1		11－11地点

第158図　第11－10地点出土石器（1）



第159図　第11－10地点出土石器（2）

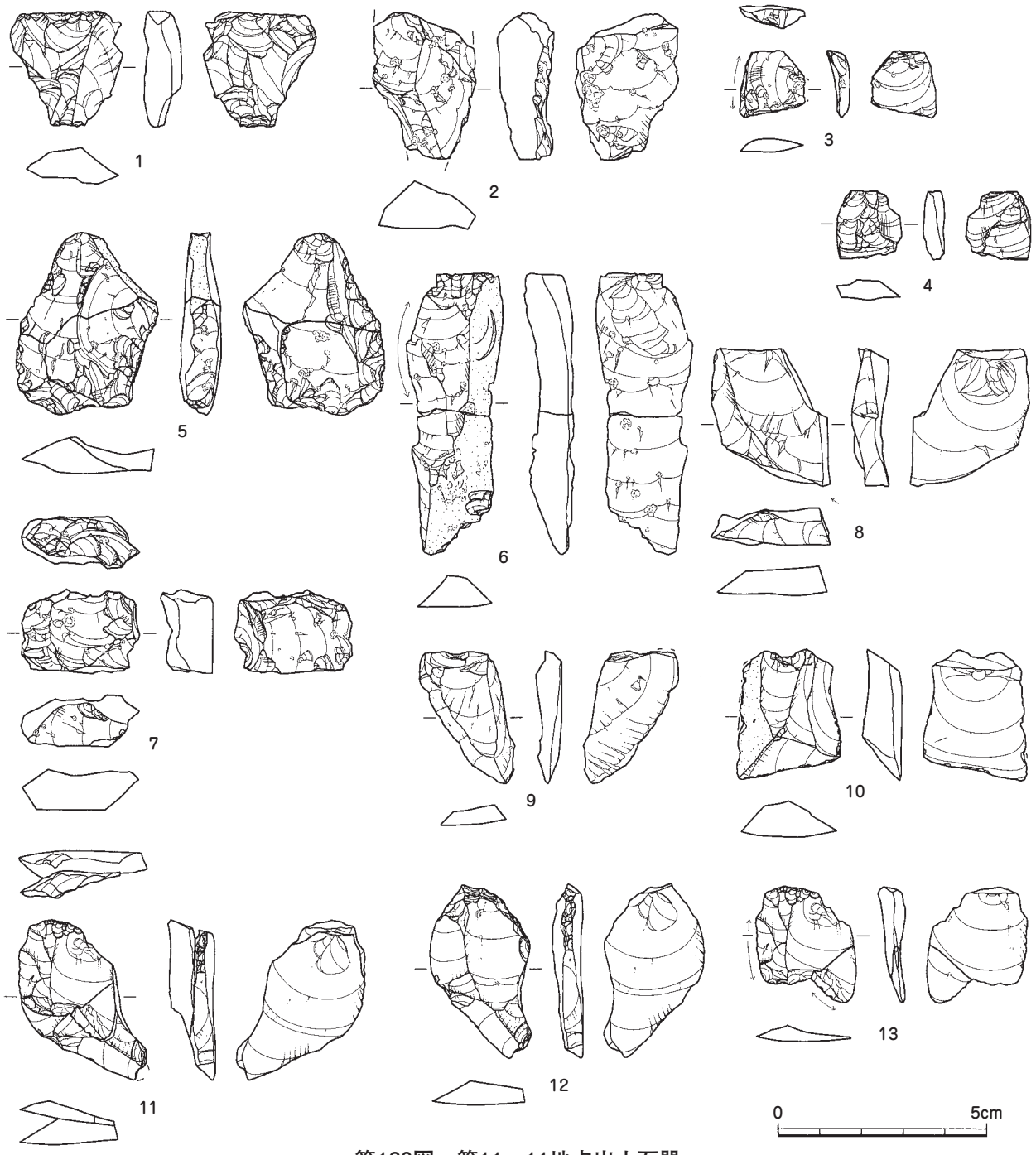
3	D４－75	95	26.370	二次加工	メノウ	2.73	2.35	0.85	5.42		
4	D４－74	1	26.396	二次加工	メノウ	2.5	1.85	0.7	2.35		
5	D４－75	40	26.395	剥片	メノウ	2.16	2.07	0.52	1.24		
6	D４－83	21	26.455	剥片	メノウ	1.91	1.82	0.57	1.59	接17	11－９地点
	D４－83	24	26.480	砕片							
7	D４－75	97	26.176	剥片	メノウ	1.78	2.11	0.49	1.48		下端欠
8					メノウ	3.37	1.84	0.74	3.33	接35	
(９)	D４－76	4	26.275	砕片	メノウ	2.26	1.37	0.67	1.65		
(10)	D４－95	10	26.042	剥片	メノウ	2.37	2.33	0.58	1.68		
11	D４－75	91	26.382	剥片	黒曜石	1.73	1.84	0.53	1.61	接12	
		94	26.370								
12	D４－75	17	26.322	剥片	黒曜石	2.3	2.01	0.54	1.69	接27	
		99	26.010								
13	D４－75	22	26.445	剥片	黒曜石	2.34	1.9	0.58	2.04		下端欠
14	D４－65	11	26.720	剥片	黒曜石	2.79	2.08	0.78	3.57		
15	D４－65	16	26.630	剥片	黒曜石	4.14	1.94	0.94	4.57		
16	D４－85	8	26.848	剥片	黒曜石	2.6	3.61	0.89	5.63		下端欠
17	D４－75	65	26.265	剥片	黒曜石	2.45	1.97	0.98	3.1		下端欠
18	D４－75	37	26.300	剥片	黒曜石	4.03	4.19	1.51	18.04		
19	D４－75	89	26.800	二次加工	黒曜石	4.0	4.62	0.73	8.45		上端欠
20	D４－75	8	26.895	ナイフ形石器	硬質頁岩	5.7	1.76	1.22	9.56		
21	D４－75	54	26.390	ヘラ状石器	緑色硬質頁岩	4.11	1.93	0.57	4.78		
22	D４－75	34	26.445	掻器	珪質頁岩	1.87	1.46	0.43	1.03		
23	D４－75	48	26.350	掻器	珪質頁岩	1.88	1.39	0.4	0.78		
24	D４－75	9	26.800	剥片	硬質頁岩	4.2	1.75	0.28	2.41		
25	D４－75	11	26.945	二次加工	硬質頁岩	4.3	4.19	1.66	25.29		周縁に欠
26	D４－75	28	26.515	彫器	珪質岩	3.87	4.01	0.94	11.3	接10	
	D４－75	67	26.213	剥片							
	D４－97	4	26.025	剥片							
27	D４－75	63	26.415	石核	珪質岩	3.83	3.74	2.13	24.08		
28	D４－75	47	26.415	剥片	黒色安山岩	3.67	3.54	0.78	8.68		
29	D４－75	4	26.450	剥片	珪質岩	2.0	4.19	0.91	5.75		
30					黒色安山岩	3.27	2.95	1.5	14.42	接49	
(31)	D４－75	32	26.230	剥片	黒色安山岩	2.91	2.19	1.17	7.27		
(32)	D４－75	57	26.295	剥片	黒色安山岩	3.26	2.77	0.77	7.15		

(11) 第11－11地点（第136図・第160図、図版59）

概要　本地点は前述した第11－10地点の西隣のグリッドにおいて出土した石器群である。出土総数は50点を数え、第11地点の中では中程度の規模を有するものであった。D４－74グリッドでは黒曜石とメノウを主体とした石器集中地点を形成していた。また石斧材である角閃岩の砕片も３点出土している。接合関係についてみると、第１－11B地点（O11－98グリッド）や第11－１・９地点との接合もみられ興味深い。石材では小石を含有する黒曜石が卓越しており、メノウや黒色安山岩も若干みられる。使用石材という点では基本的に第11－10地点と大きな差は認められない。

出土石器群　成品としては楔形石器のみであるが、石器として利用されている剥片もみられた。このような石器組成は第11－６地点や第11－８地点と共通している。

楔形石器（１・５）　１の形状はほぼ三角形となり上下を加工している。上部の剥離は比較的丁寧で鋭利な刃部を作出するが、下部では裏面からの粗雑な剥離で簡単に仕上げている。５は３点が接合した資料である。右側面は折断されているが、裏面では側縁に沿って粗い剥離で整形している。全体を整形した後に分割し２点の楔に仕上げたものである。また裏面下部に接合（D４－74－34）している楔形石器には微調



第160図　第11－11地点出土石器

整痕もみられるため他の用途も考えられる。

二次加工剥片（12）　３点が接合（11）したうちの１点で、表面右上半部に整形剥離が施されている。左側縁にも整形を目的とした２回の小剥離が認められるため石器として使われていたことは確実である。下端部の破損は調査時のものである。また接合した剥片13も左側縁に数回の剥離による整形が認められる。さらに、接合した下端部の砕片でも使用の痕跡がみられる。

剥片（２～４・６・８～11・13）　２～４は異物を含む黒曜石で本地点以外でも多用されている。３は側縁に使用の痕跡が認められる。４の裏面では縦方向から粗雑な剥離が施されており、楔形石器の製作中に

剥離された剥片のようにも思われる。６は第１－11Ｂ地点から出土した剥片が接合したもので第１地点との関連で捉えることができる資料である。石刃状に剥離された剥片で左側縁に刃こぼれ痕が若干認められる。このことは折断した下半部は本地点に残され、上部は第１地点に持ち込まれ石器として使用されていたものであろう。８は二次的な加工はみられないが、下端では右方向から加撃されており彫器とも考えられる。10は調査時での欠損がみられるものの周囲に刃こぼれ状の使用痕が顕著に観察できる。

石核（７） 打面調整を施しつつ剥片剥離してきたものでいわば残核となろう。異物を含有する石質は本地点出土の黒曜石に共通したものである。

図示した石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石９点　硬質頁岩１点　緑色硬質頁岩１点　珪質岩３点　黒色安山岩１点　メノウ１点

器種　楔形石器３点　二次加工剥片１点　剥片10点　砕片１点　石核１点　計16点

第63表　第11－11地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｄ４－74	2	26.311	楔形石器	メノウ	2.77	2.69	0.92	5.24		
2	Ｄ４－84	36	26.310	剥片	黒曜石	3.52	2.47	1.36	9.43		
3	Ｄ４－67	21	26.210	剥片	黒曜石	1.62	1.58	0.56	1.11		下端欠
4	Ｄ４－67	23	26.590	剥片	黒曜石	1.65	1.57	0.52	1.23		
5	Ｄ４－74	7	26.531	楔形石器	黒曜石	4.37	3.4	1.01	12.6	接21	
	Ｄ４－74	34	26.350	楔形石器							
	Ｄ４－84	29	26.385	剥片							
6	Ｄ４－74	38	26.290	剥片	黒曜石	6.73	2.32	1.2	12.79	接37	
	O11－98	21	26.019								第１－11B地点
7	Ｄ４－74	13	26.365	石核	黒曜石	2.0	2.84	1.25	7.85		
8	Ｄ４－74	22	26.486	剥片	緑色硬質頁岩	3.3	2.85	0.9	7.13		
9	Ｄ４－74	17	26.485	剥片	黒色安山岩	3.17	2.29	0.62	3.3		
10	Ｄ４－74	37	26.425	剥片	硬質頁岩	3.13	2.5	0.94	6.76		
11						3.83	3.07	1.14	8.4	接18	
12	Ｄ４－74	24	26.370	二次加工	珪質岩	4.16	2.43	0.74	6.02		
13	Ｄ４－94	78	26.020	剥片	珪質岩	2.78	2.42	0.66	2.16		
	Ｄ４－74	15	26.356	砕片	珪質岩	1.08	1.27	0.28	0.22		

第64表　第11地点出土石器一覧（未掲載分）

出土地点	黒曜石	メノウ	黒色安山岩	デイサイト	ホルンフェルス	チャート	珪質岩	珪質頁岩	硬質頁岩	角閃岩	その他	合計	備考
Ｄ３－03			1									1	
Ｄ３－04	1		1				1				1	4	
Ｄ３－05	3											3	
Ｄ３－06	2											2	
Ｄ３－24	2											2	
Ｄ４－46	1											1	
Ｄ４－53		3										3	
Ｄ４－54	5	2	1			1						9	
Ｄ４－55	25	4	1			2		1				33	第11－６地点
Ｄ４－56	3					1						4	
Ｄ４－57	3											3	
Ｄ４－62			1								1	2	
Ｄ４－63	12	3	17							1		33	第11－８地点
Ｄ４－64	8	1	1					1		2		13	第11－７地点
Ｄ４－65	13	5									1	19	

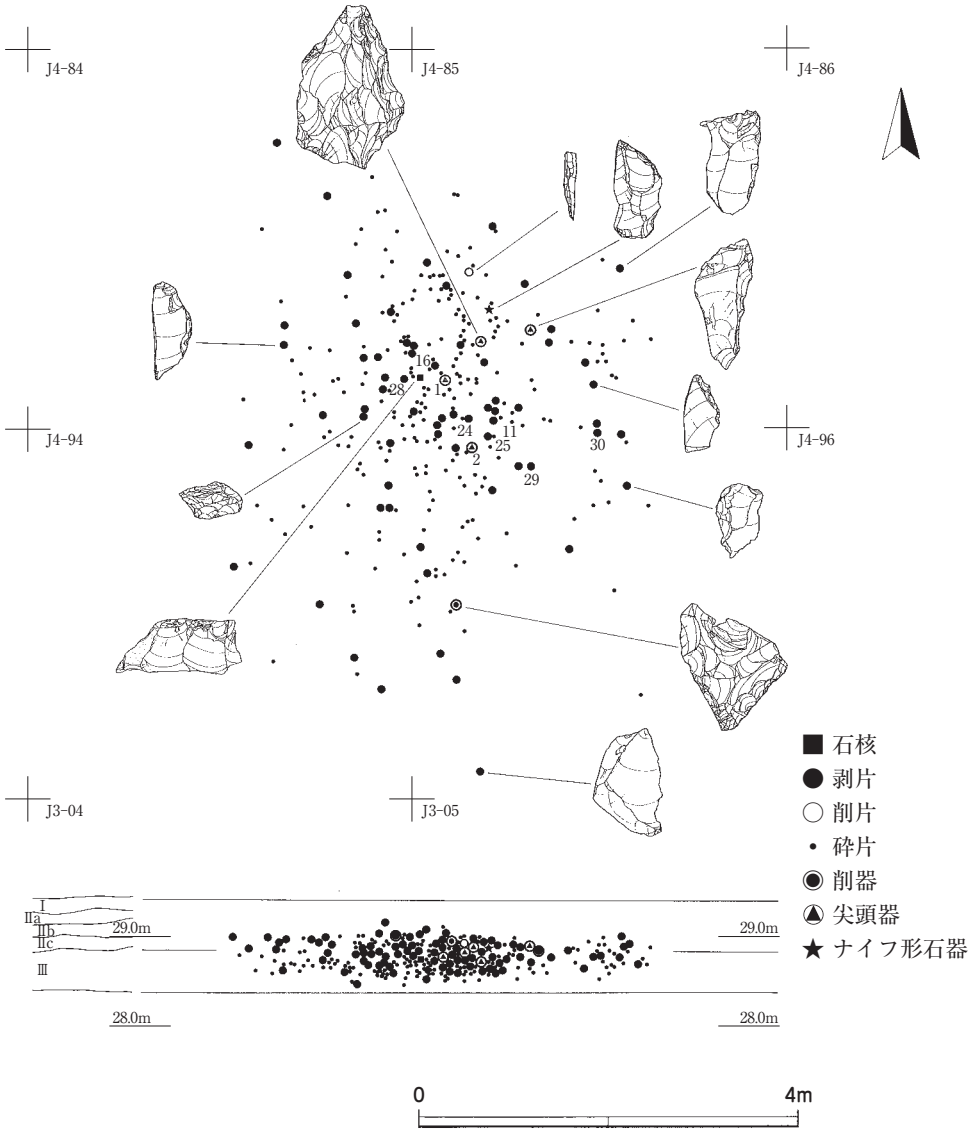
Ｄ４－66	4	6	2					1				13	第11－５地点
Ｄ４－67	10	2	2						1			15	第11－４地点
Ｄ４－73	6	4	1			2		5			1	19	
Ｄ４－74	8	10								3		21	
Ｄ４－75	22	39	4					1	2			68	第11－10地点
Ｄ４－76	1	1					1		1			4	
Ｄ４－77	8	3							2			13	
Ｄ４－78	1									1		2	
Ｄ４－83	21	1	1	1	1	1					1	27	第11－９地点
Ｄ４－84	28	2	3							1		34	第11－11地点
Ｄ４－85	1								2	3		6	
Ｄ４－86	3	1										4	
Ｄ４－87	21	5				1				1		28	第11－３地点
Ｄ４－88	2											2	
Ｄ４－92	1											1	
Ｄ４－93	1											1	
Ｄ４－94	189	1		2		2		20		10		224	第11－１地点
Ｄ４－95	1									1		2	
Ｄ４－96	21	7										28	第11－２地点
Ｄ４－97	4							1				5	
合計	431	100	36	3	1	10	2	30	8	23	5	649	

第13節　第12地点（第161図～第165図、図版７・59）

概要　本地点は第９地点の南東に位置し、石器群はＪ４－84・85・94・95グリッドにかけて長径６ｍ、短径4.5ｍの範囲で集中的に出土した。また、この周辺では石器群とともに木炭の小片が各所で検出されているが焼土等の痕跡は認められなかった。遺物の出土層位は第Ⅱ層下部から第Ⅲ層となり、60cmほどの高低差が認められた。ここで石器に使用されている石材は珪質岩のみで、他の石材は検出されなかった。この種の珪質岩は嶺岡頁岩・白滝頁岩とも呼称されるもので他の地点でも頻繁に出土している。ただ、本遺跡において一種の石材だけで大きな集中地点が構成されることは珍しい例である。それ故、接合資料も多数みられ、その原石は大きく大人の頭部ほどあったものと推測できた。また本地点は剥片・砕片の出土量からみて明らかに石器製作を主目的としていた場所と捉えることができる。図化できなかったが砕片の中には尖頭器等の製作によって剥離されたトゥールチップスが多く含まれていた。

出土石器群　成品は尖頭器を主体としたものであり、他にナイフ形石器や削器などが出土している。成品以外では削片も出土しているところから彫器も製作されていたものと思われる。なお、尖頭器は破損品あるいは剥片との接合といった例が５例中３例に認められた。これらは製作中に破損したり、その形態が意に添わないものとなり完成を待たずに廃棄されたものと考えられた。

尖頭器（１～４・８）　１は、７点が接合（15）したうちの１点で表皮部分の剥片を加工したものである。周囲はきれいに整形され調整も加えられている。裏面は整形を兼ねた簡単な剥離で仕上げている。２は整形途中で打ち損じたものであろう。だが、その後も整形剥離を継続している。整形は基部にまでは至っていないため途中で廃棄されたものと理解できる。また、基部の接合片は黒色化しており被熱したものと考えられる。３の剥離は粗く、調整の痕跡は認められないため製作途中のものであろう。裏面では押圧剥離が数回施されている。尖頭器の未成品といえよう。４は３点が接合した例である。表面では側縁部に調整まで加えられ完成間近の尖頭器と思われる。裏面ではバルブ部分も削除されている。表面での基部加工に失敗した例と考えられる。８は先端部から側縁部の遺存である。尖った先端からは尖頭器の製作を意図したもの考えられる。整形の失敗例と見做されるが、両側縁では微細な調整が加えられているため削器のよ



第161図　第12地点出土石器分布図

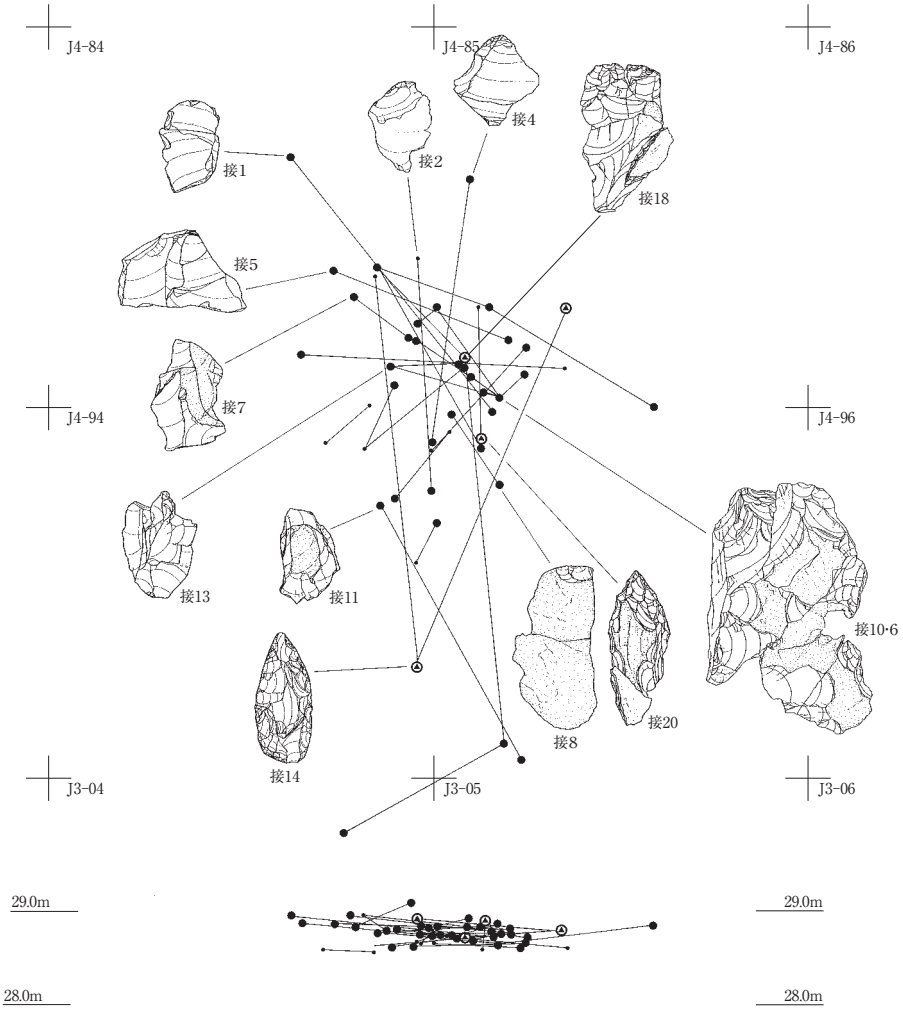
うな用途も考えられる。

ナイフ形石器（６）　薄い石刃状の剥片を素材とし、上半部の加工は入念な調整剥離を施している。一方、基部は左右の側縁を若干整形しただけとなる。一応、その形状からナイフ形石器と分類した。

削器（12）　表皮部分の分厚い剥片を素材とした削器である。刃部となる両側縁はきれいに整形され、特に右側縁では押圧剥離が整然と施されている。この点から尖頭器の製作を意図したものとも思われる。

二次加工剥片（５・７・９・13）　５は折断された剥片で右側縁に加工の一部がみられる。削器のような石器として使用されたものであろう。７は縦方向に折断された剥片で、右側縁の表裏に調整痕が認められる。ナイフ形石器の製作を意図したものと思われる。９は整形が不十分であり、その形状から廃棄されたものであろう。だが加工は下部の両側縁にみられ石器としての機能は十分備えている。13に図示されたものの１点（62）で単独の実測図は省略した。裏面左に明確な二次剥離を認めることができる。

削片（32）　細長く剥離された削片で上部は折れている。左の側面には調整剥離の痕跡が認められるため



第162図　第12地点出土石器接合図

樋状剥離によって剥離された小片である。

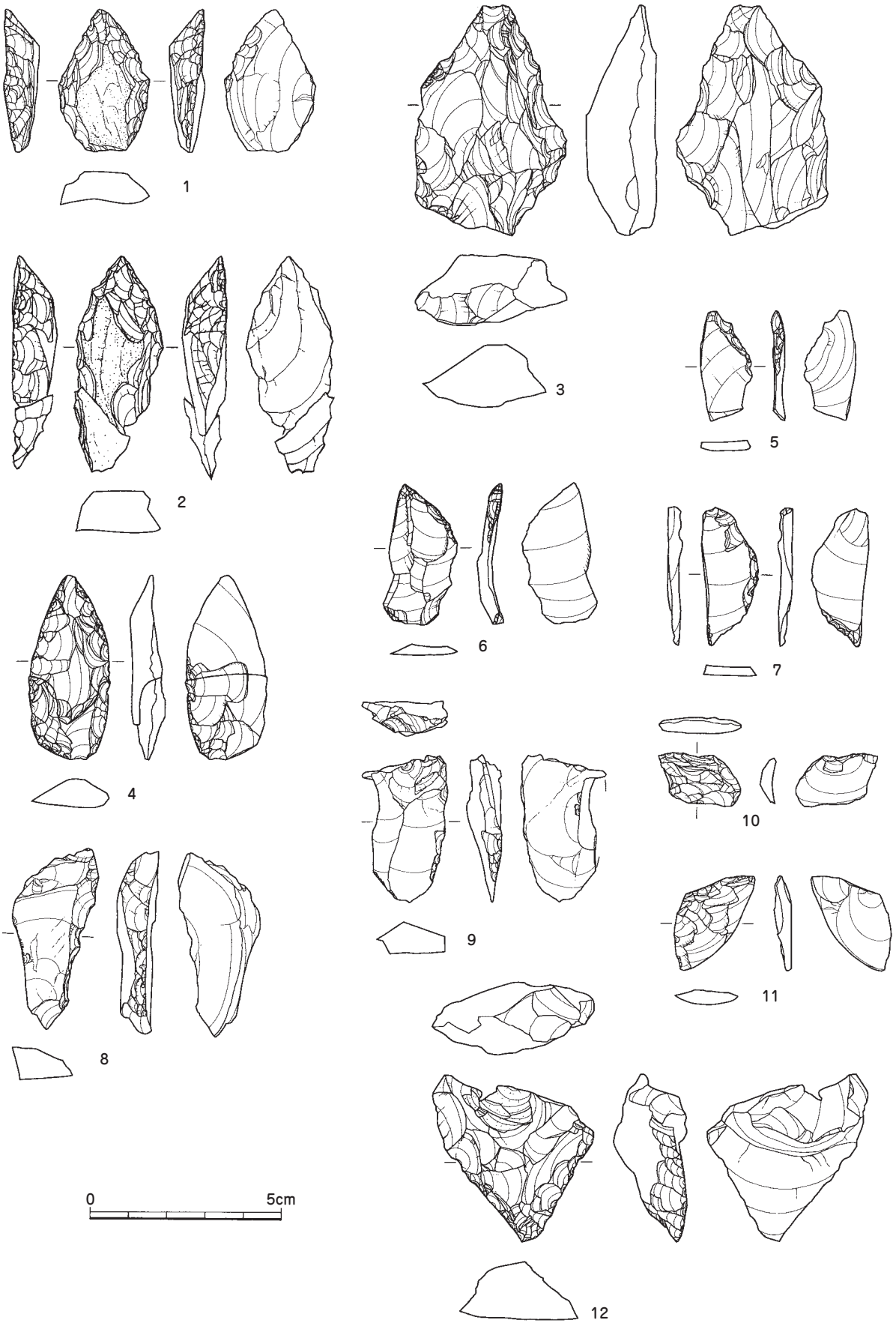
剥片（10・11・13～15・17～31）　10は弯曲した小剥片で裏面でも剥離痕が観察できる。両面加工品の製作で仕上げ段階に剥離された剥片であろう。11の表面にはきれいな押圧剥離がみられる。左側縁では微細な調整痕が認められるため石器としても使用されていたようである。13～15は接合した剥片類で、15は尖頭器の接合例である。一般的に成品は持ち運ばれているため珍しい例といえよう。17～21も接合例で、19は13と接合するが図化での表現が難しいため分離した。下端には細かな調整が施されており、石器製作の意図がみえる。22も左側縁に刃潰し状の痕跡がみられる。23～29は薄く弯曲した剥片が特徴で押圧剥離によって剥離されたものであろう。

石核（16）　厚手の剥片からさらに剥片剥離を試みている。このため、扱いとしては石核とした。

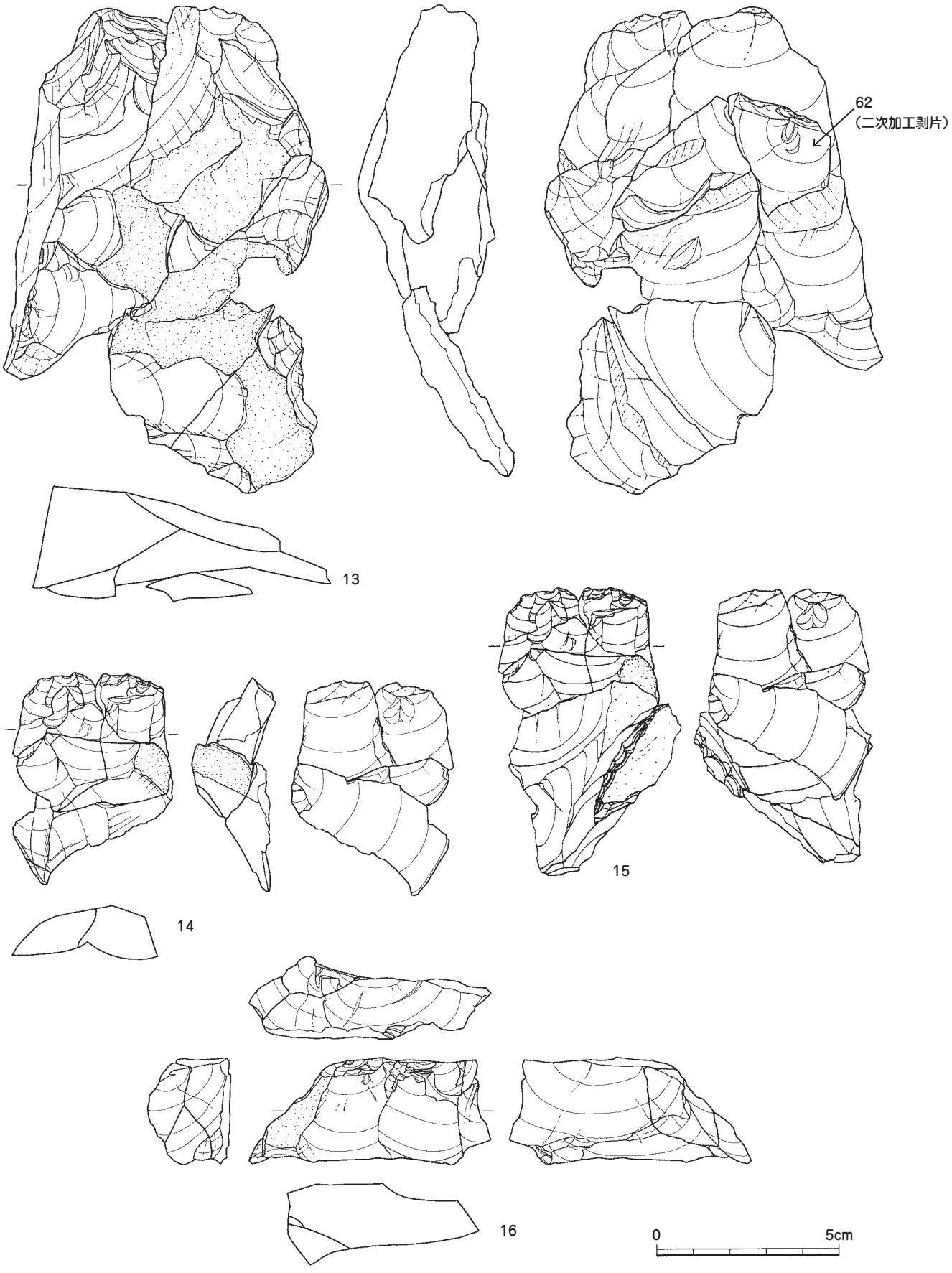
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　珪質岩355点

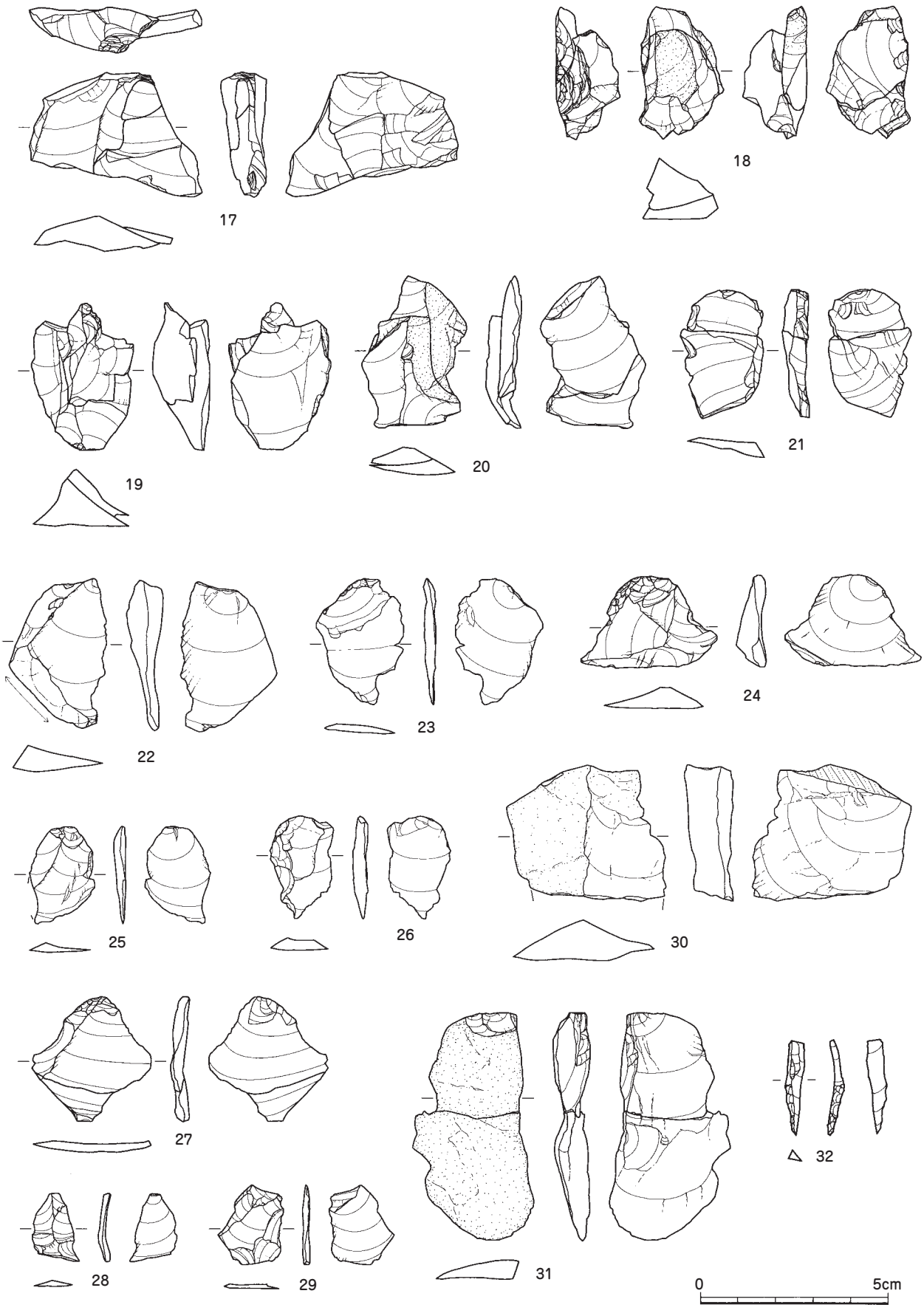
器種　尖頭器５（６）点　ナイフ形石器１点　削器１点　二次加工剥片４点　削片１点　剥片109点　砕片232点　石核１点　計355点



第163図　第12地点出土石器（1）



第164図　第12地点出土石器（2）



第165図　第12地点出土石器（３）

第65表　第12地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	J 4 −85	49	28.819	尖頭器	珪質岩	3.80	2.40	0.80	7.66		
2	J 4 −95	4	28.896	尖頭器	珪質岩	5.70	2.35	1.05	13.67	接20	
	J 4 −85	132	28.671	砕片	珪質岩	2.25	1.40	0.75	1.62		被熱
3	J 4 −85	30	28.785	尖頭器	珪質岩	5.80	4.15	1.80	39.74		未成器
4	J 4 −85	6	28.875	尖頭器	珪質岩	4.90	2.15	0.85	8.71	接14	良質のチャート
	J 4 −94	17	28.859	尖頭器	珪質岩	1.65	1.20	0.10	0.19		
	J 4 −84	61	28.696	砕片	珪質岩	1.65	0.85	0.20	0.24		
5	J 4 −85	103	28.691	二次加工	珪質岩	1.70	2.20	0.30	1.18		上端欠、上端R
6	J 4 −85	33	28.891	ナイフ形石器	珪質岩	3.75	1.70	0.40	2.66		
7	J 4 −84	73	28.659	二次加工	珪質岩	3.70	1.50	0.25	1.82		半欠、下端R
8	J 4 −85	5	28.924	尖頭器	珪質岩	4.90	1.90	1.10	9.35		破損品
9	J 4 −85	70	29.074	二次加工	珪質岩	3.90	2.20	0.90	6.59		側・下端欠
10	J 4 −84	39	28.782	剥片	珪質岩	1.40	1.80	0.35	1.13		
11	J 4 −85	46	28.809	剥片	珪質岩	1.90	2.00	0.40	2.02		
12	J 4 −95	28	28.972	削器	珪質岩	3.65	4.20	1.90	21.15		
13	J 4 −84	13	28.899	剥片	珪質岩	6.60	4.70	1.00	31.17	接10+6	下端欠
	J 4 −84	29	28.811	剥片	珪質岩						
	J 4 −85	14	28.813	剥片	珪質岩						
	J 4 −85	15	28.789	剥片	珪質岩						
	J 4 −85	28	28.814	剥片	珪質岩						
	J 4 −85	44	28.846	剥片	珪質岩	10.80	8.30	3.15	208.58		
	J 4 −85	62	28.768	二次加工	珪質岩						
14	J 4 −84	28	28.837	剥片	珪質岩	1.90	2.05	1.00	4.10	接9+12	
	J 4 −85	78	28.926	剥片	珪質岩	4.02	2.60	1.60	15.75		
	J 4 −85	89	28.725	剥片	珪質岩	4.70	2.25	0.60	6.34		
	J 4 −95	3	28.911	剥片	珪質岩	2.30	2.50	0.80	5.75		下端欠
15	J 3 −04	1	28.988	剥片	珪質岩	3.40	1.30	0.70	3.15	接18	
(1)	J 4 −85	49	28.819	尖頭器	珪質岩	3.80	2.40	0.80	7.66		
	J 4 −95	34	28.833	剥片	珪質岩	6.10	4.70	1.80	28.38		
16	J 4 −85	61	28.761	石核	珪質岩	3.10	6.45	2.00	39.42		厚手剥片素材
17	J 4 −84	26	28.854	剥片	珪質岩	0.80	1.10	0.30	0.20	接5	
	J 4 −85	29	28.799	剥片	珪質岩	2.80	3.10	1.00	13.62		
18	J 4 −94	24	28.709	剥片	珪質岩	2.90	2.00	1.60	7.79	接11	
	J 4 −95	79	28.737	剥片	珪質岩	2.40	2.30	0.60	3.35		
19	J 4 −84	45	28.717	剥片	珪質岩	1.95	2.75	0.70	2.61	接13	
	J 4 −84	48	28.819	剥片	珪質岩	3.70	2.50	1.20	8.19		
20	J 4 −84	14	29.151	剥片	珪質岩	2.90	2.20	0.50	6.77	接7	上端欠
	J 4 −84	27	28.919	剥片	珪質岩	3.20	2.50	0.30	6.77		上端欠
21	J 4 −84	2	29.006	剥片	珪質岩	1.30	1.90	0.45	1.23	接1	下端欠
	J 4 −95	35	28.799	剥片	珪質岩	2.45	2.30	0.45	2.34		
22	J 4 −95	89	28.741	剥片	珪質岩	3.90	2.50	1.00	5.76		
23	J 4 −84	62	28.757	砕片	珪質岩	1.55	2.05	0.20	0.48	接2	
	J 4 −95	23	28.824	剥片	珪質岩	2.10	2.30	0.25	0.95		下端欠
24	J 4 −85	64	28.769	剥片	珪質岩	2.55	3.00	0.70	4.38		
25	J 4 −95	7	28.867	剥片	珪質岩	2.65	1.60	0.30	1.08		
26	J 4 −95	51	28.904	剥片	珪質岩	2.75	1.70	0.35	1.50		
27	J 4 −85	1	29.089	剥片	珪質岩	3.45	3.00	0.35	2.76	接4	
	J 4 −95	22	28.799	剥片	珪質岩	2.20	2.70	0.40	2.97		下端R
28	J 4 −85	43	29.074	剥片	珪質岩	1.85	1.10	0.20	0.37		
29	J 4 −95	9	28.902	剥片	珪質岩	2.15	1.80	0.25	0.64		
30	J 4 −95	54	28.774	剥片	珪質岩	3.90	3.70	1.30	17.80		下端欠
31	J 4 −95	16	28.819	剥片	珪質岩	2.35	2.80	1.20	8.16	接8	下端欠
	J 4 −95	45	28.811	剥片	珪質岩	2.80	2.30	0.90	0.45		下端欠
32	J 4 −85	37	29.019	削片	珪質岩	2.55	0.40	0.26	0.22		

第14節　第13地点

概要　本地点は第12地点の南に位置し、石器群はＪ３－85グリッドから同88グリッドにかけて東西に広がるような形状で分布していた。出土層位は第Ⅶ層から第Ⅸ層上部となっている。ただ整理作業の段階において、図示したようにＪ３－86グリッドでは一部に空白域が存在したため本地点を二分割し、Ｊ３－87グリッドとその周辺から出土した石器群を第13－１地点、Ｊ３－85グリッド周辺から出土した石器群を第13－２地点として報告することとした。出土層位には若干の差異がみられるものの時期的には概ね差はないものと考えられた。

（１）第13－１地点（第166図～第169図、図版８・60）

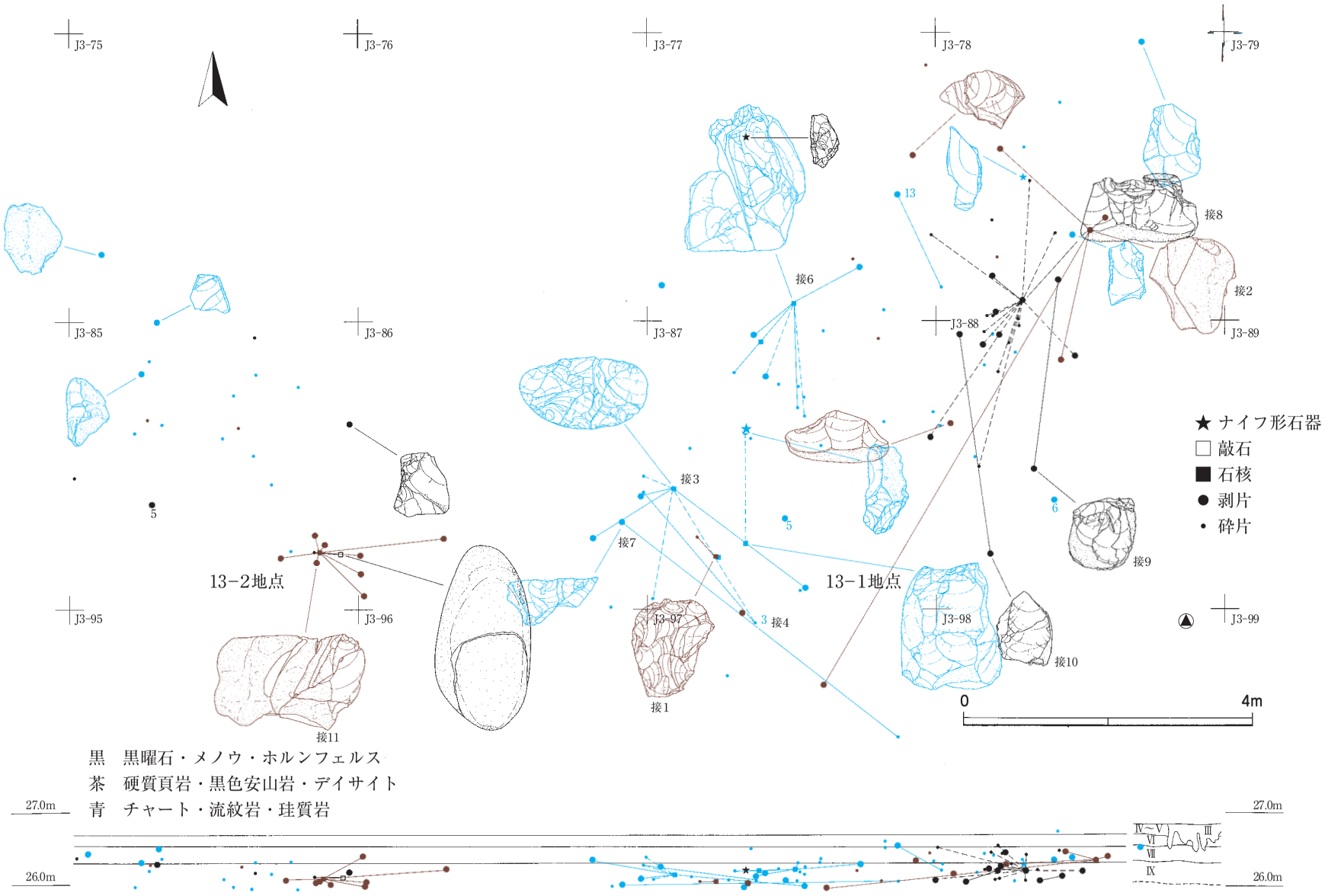
概要　本地点では最多の出土となったチャートの分布をみると、Ｊ３－87グリッドを中心として北東方向に10m、南西方向に６ｍと楕円状に遺物が広範囲に散っており濃密に分布するという状況ではなかった。石材はチャートの他にメノウ・珪質岩・硬質頁岩などで構成され、石核との接合資料も少なからず認められた。

出土石器群　ここではナイフ形石器と分類できるものが３点出土している。しかし、形の整った成品はみられなかった。他に二次加工を施した石器がみられるが器種としては少ない。また石核は４点出土している。とりわけ流紋岩製の石核（11）では多数の剥片剥離痕が認められるが、剥片（12）が僅か１点出土したのみで周辺からの出土も確認されなかった。

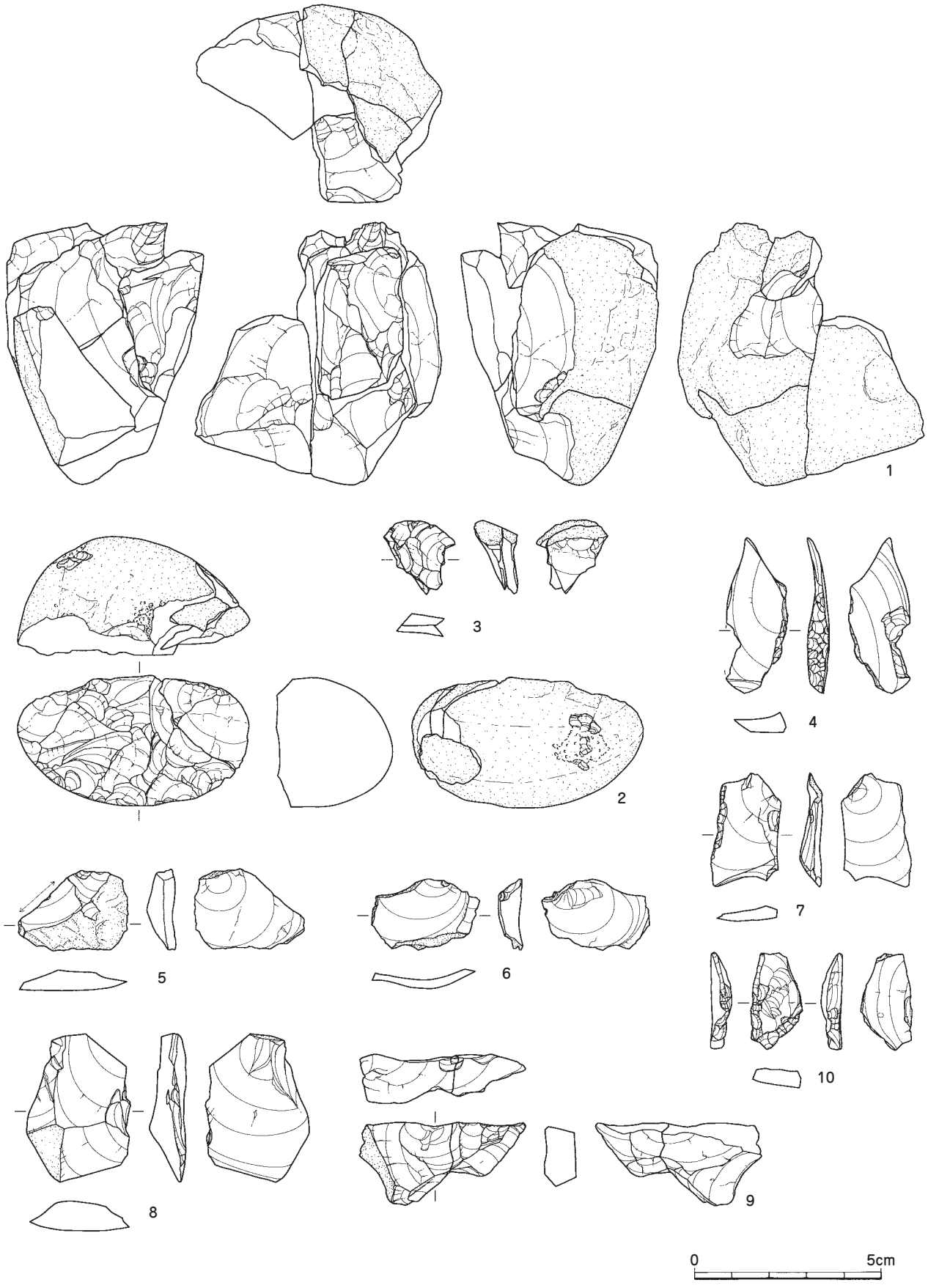
ナイフ形石器（４・10・12）　４は横長の剥片を素材とし打点部を削除しつつ整形し背面にしている。背面の調整は上下方向から施されているが仕上げとしては粗い。なお、左側縁の欠損は調査時のものである。10も横長の剥片を素材としており先端部を欠損する。下部の両側面が整形されているためナイフ形石器としたが、作りとしては稚拙といえよう。また先端の欠損部から一条の剥離痕がみられるため彫器の可能性もある。12は表面に明褐色の自然面を残しており、その色調から明らかに11の石核から剥離されたものである。僅かに先端部が欠損する。縦長の剥片を素材としており、基部の表裏面には粗いながらも整形剥離が施されているためナイフ形石器とした。剥離面は滑らかとはいえず、刺突具として加工するには適さないような石質で珍しい例といえる。使用については疑問の残るところである。いずれにしても本地点で出土したナイフ形石器は粗雑な作りという点で共通している。

二次加工剥片（７）　薄く剥離された剥片で下端部は折断されている。左の側縁には調整剥離が密に施されている。

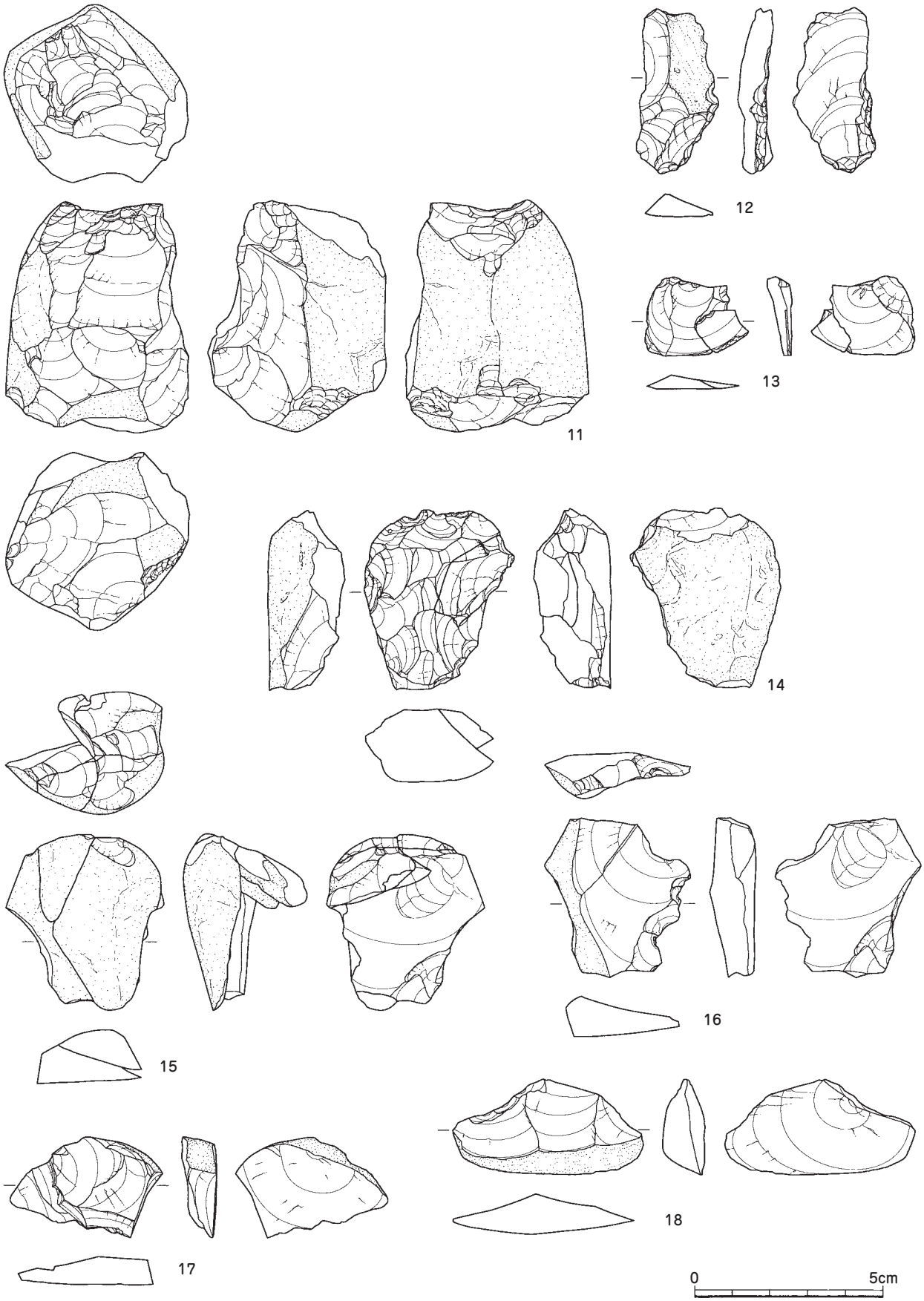
剥片（３・５・６・８・９・13・15～24）　３の接合剥片は、２の石核と自然面の色調と石質が同一であり、この石核が母岩になったと思われるが接点は見出せなかった。５には左側縁に微細な刃こぼれ痕がみられる。６は５と同材で薄くきれいに剥離された剥片である。８は石器素材としては十分な形状を呈しているが加工は認められない。９は表面の剥離痕と平坦な上面から残核の一部となろう。石質的には１に近い。15は５点が接合したもので打面調整を兼ねた２枚の剥片を剥離している。16は厚手の剥片であり、上面には打面調整痕が認められる。下端部は折断した後に右側縁を剥離している。17・18は横長の剥片であるが加工はみられない。19～24はメノウ製で淡い褐色を呈した良質の石材でいずれも表皮部分の剥片である。おそらく同一母岩から剥離されたものであろう。特に19は接合しており上下に自然面が認められる。原石の大きさを推測すると拳大程度の扁平な礫となろう。



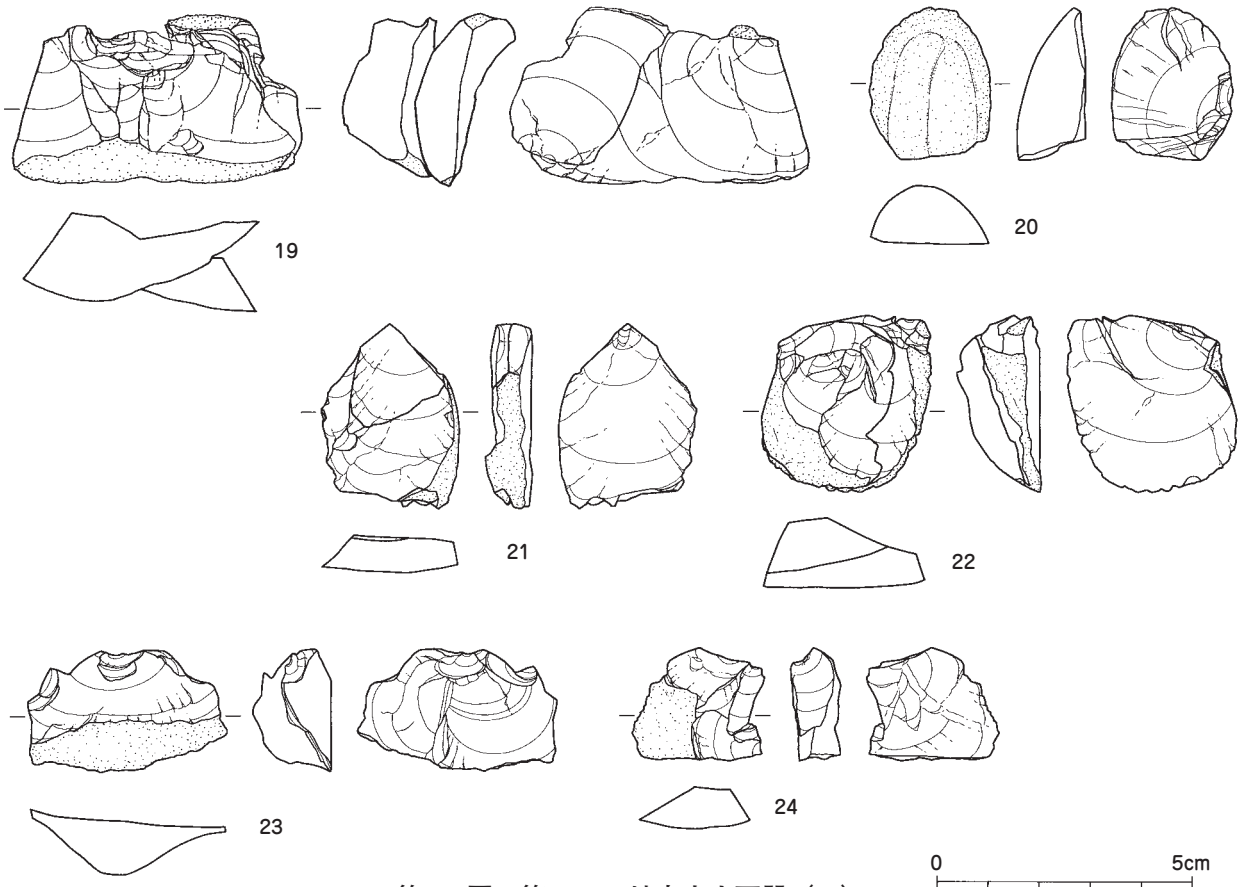
第166図　第13−1・2地点出土石器分布図



第167図　第13－１地点出土石器（１）



第168図　第13－１地点出土石器（２）



第169図　第13－１地点出土石器（３）

石核（１・２・11・14）　１は６点が接合しており、原石の平坦面から順次剥離していったようである。接合片では石器として加工されたものはみられない。本石核から剥離されたと思われる砕片が十数点出土しているため成品が製作されたことは確実である。表皮部分はザラついた石質で褐色を呈しているが、内部は光沢を有する灰色でチャート特有の良質な石材に変化している。２は扁平な円礫の一端を打割し剥片を得たものであろう。剥離は上下左右の各所からおこなわれている。ただ剥離面を観察すると節理が多く石器素材にできるような剥片が多く得られたとは思えない。また表皮の一部には打痕が認められるため当初は敲石として使用されていたようである。11も側面下部に若干の打痕が認められる。剥片は二方向から剥離されており、打面調整も施されている。剥離面では凹凸が著しく、石器製作に適するような良質な石材とはいえない。14の石核には同一グリッドから出土した砕片が１点接合した。剥片は２と同様に多方向から剥取されている。石質と色調についてみると、表皮部分は淡い褐色で内部は黒褐色を呈した緻密な石質となっている。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石１点　硬質頁岩７点　珪質岩17点　チャート27点　流紋岩４点　黒色安山岩６点　デイサイト１点　メノウ23点

器種　ナイフ形石器３点　二次加工剥片１点　剥片30点　砕片47点　石核４（５）点　計86点

第66表　第13－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	J３－77	6	26.294	剥片	チャート	2.05	3.40	2.40	22.14	接６	
	J３－77	8	26.215	石核片	チャート	3.10	3.60	3.40	47.15		円礫素材
	J３－87	2	26.197	石核	チャート	3.90	5.20	3.60	65.19		円礫素材
	J３－87	12	26.200	砕片	チャート	2.80	1.30	0.90	4.01		
	J３－87	24	26.138	剥片	チャート	3.30	4.20	2.30	28.88		
	J３－87	26	26.315	砕片	チャート	1.70	1.90	1.15	3.01		
2	J３－86	4	26.360	剥片	チャート	1.80	2.05	0.60	2.75	接３	
	J３－86	10	26.097	剥片	チャート	2.40	1.90	0.55	1.90		
	J３－87	15	26.161	石核	チャート	3.50	6.30	3.60	85.75		
	J３－87	22	25.990	剥片	チャート	1.60	1.75	0.60	1.71		
3	J３－86	2	26.277	砕片	チャート	2.50	1.60	0.55	1.43	接４	
	J３－97	2	26.087	砕片	チャート	1.80	1.50	0.60	1.51		
4	J３－78	13	26.283	ナイフ形石器	チャート	4.20	1.60	0.60	3.39		横長の剥片
5	J３－87	20	26.070	剥片	珪質岩	2.40	2.75	0.70	3.79		
6	J３－88	15	26.349	剥片	珪質岩	1.90	2.75	0.40	2.00		
7	J３－78	9	26.380	二次加工	流紋岩	2.90	2.40	0.35	2.44		
8	J３－78	17	26.519	剥片	流紋岩	3.85	2.80	1.00	9.21		
9	J３－86	3	26.080	剥片	珪質岩	2.70	2.30	1.10	7.11	接７	
	J３－97	5	26.040	砕片	珪質岩	1.70	1.90	0.85	2.64		
10	J３－77	2	26.233	ナイフ形石器	黒曜石	2.65	1.40	0.40	1.98		先端欠、横長の剥片
11	J３－87	19	26.064	石核	流紋岩	6.10	4.90	4.30	162.05		円礫素材
12	J３－87	27	26.055	ナイフ形石器	流紋岩	4.00	2.25	0.60	6.29		先端欠
13	J３－77	5	26.539	剥片	珪質岩	2.13	2.15	0.37	1.85		
	J３－78	1	26.214	砕片	珪質岩	1.10	1.20	0.25	0.31		
14	J３－87	16	26.078	砕片	硬質頁岩	1.60	2.65	0.40	2.33	接１	
	J３－87	17	26.070	石核	硬質頁岩	3.90	4.60	2.10	35.52		円礫素材
15	J３－78	10	26.350	剥片	硬質頁岩	2.40	1.40	1.10	2.70	接２	
	J３－78	11	26.416	剥片	硬質頁岩	4.60	2.70	1.35	15.68		
	J３－78	15	26.310	剥片	硬質頁岩	3.70	6.05	1.25	16.41		円礫素材
	J３－88	10	26.465	剥片	硬質頁岩	2.10	2.70	0.25	1.63		
	J３－97	4	25.972	剥片	硬質頁岩	2.25	2.53	0.50	2.73		
(16)	J３－78	15	26.310	剥片	硬質頁岩	3.70	6.05	1.25	16.41		
17	J３－77	4	26.345	剥片	黒色安山岩	2.80	3.75	0.80	9.56		
18	J３－88	18	26.148	剥片	黒色安山岩	3.20	3.80	1.20	13.36		
19	J３－78	5	26.213	剥片	メノウ	3.10	5.40	1.65	24.50	接８	
	J３－78	3	26.243	剥片	メノウ	3.40	2.20	1.10	7.59		
20	J３－87	23	26.085	剥片	メノウ	2.45	2.95	1.40	10.96		
21	J３－88	1	26.247	剥片	メノウ	1.75	1.80	0.35	1.08	接10	
	J３－88	16	26.239	剥片	メノウ	3.70	2.75	0.70	8.18		
22	J３－78	6	26.103	剥片	メノウ	2.60	3.40	1.00	8.41	接９	
	J３－88	14	26.070	剥片	メノウ	3.25	3.65	0.90	11.10		
23	J３－78	5	26.213	剥片	メノウ	3.10	5.40	1.65	24.50		
24	J３－88	17	26.205	剥片	メノウ	2.30	2.60	0.90	5.22		

（２）第13－２地点（第166図・第170図、図版60）

概要　本地点の石器群はＪ３－85グリッドとその周辺が分布の中心となっているが、出土総数も30点と少ないため小規模な集中地点といえる。石材は硬質頁岩・珪質岩・チャート・黒曜石など８種で構成されており、種類としては豊富であった。またチャートの砕片は、その色調･と石質から前出の第13－１地点の石核（１）から剥離されたものと思われた。

出土石器群　石器群についてみると、道具としての石器は敲石のみであった。他は剥片・砕片・石核によって構成されていた。

剥片（２～６）　出土量が少なかったため剥片は大きさを考慮して５点を図示した。２・３・４は珪質岩で、その色調から母岩は同一であったものと思われた。５は薄い剥片で側面には表皮部分がみられる。６は断面が三角を呈した剥片で右側縁には使用痕がと刃こぼれ状の痕跡が15mmほどの長さで認められた。石器として使用したものであろう。

石核（１）　原石は柱状を呈したものであり、１点の石核に８点の剥片が接合した資料である。礫の平坦部を打面として剥片を順次剥離していった工程が接合によって示された教材的な資料といえよう。使用の痕跡を有する剥片はみられなかったが、中央部は空白となっているため、この部分の剥片を成品に加工して持ち出したものであろう。

敲石（７）　上下に明確な著しい打痕を認めることのできる敲石である。接合した下端部の破片は敲打した時に破砕したものであろう。同一グリッドからの出土である。

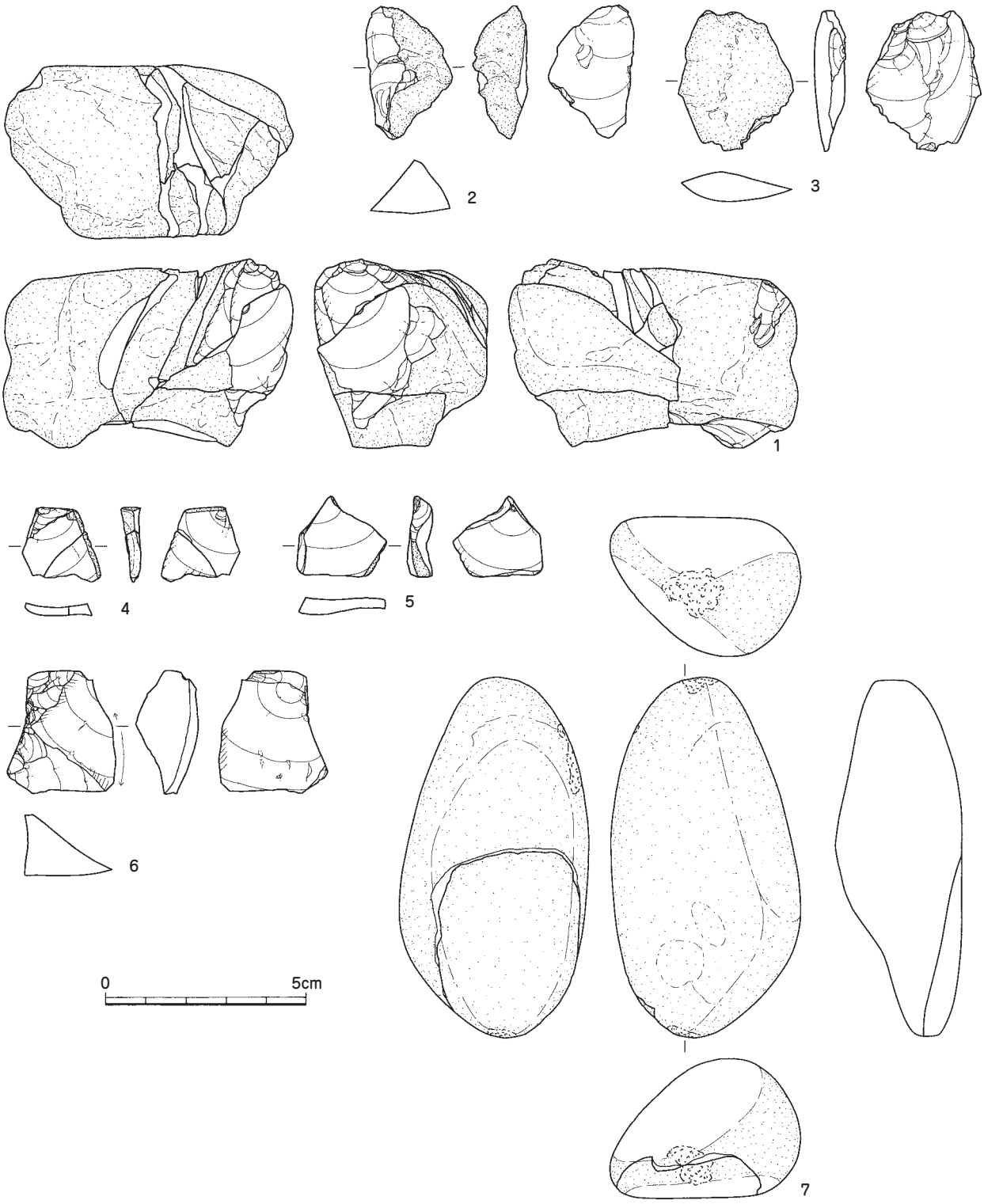
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石３点　硬質頁岩９点　珪質岩７点　チャート６点　黒色安山岩１点　デイサイト１点　ホルンフェルス２点　メノウ１点

器種　剥片13点　砕片14点　石核１点　敲石１（２）点　計30点

第67表　第13－２地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｊ３－85	20	26.110	剥片	硬質頁岩	2.80	3.20	0.95	6.16	接11	
	Ｊ３－85	22	26.104	剥片	硬質頁岩	4.70	3.85	2.30	38.59		
	Ｊ３－85	24	26.139	石核	硬質頁岩	4.60	4.20	3.70	83.47		円礫素材
	Ｊ３－85	25	26.084	剥片	硬質頁岩	3.40	2.50	1.45	13.10		
	Ｊ３－85	29	26.044	剥片	硬質頁岩	4.15	2.90	1.15	13.62		
	Ｊ３－86	6	26.077	剥片	硬質頁岩	1.75	2.66	1.54	4.44		
	Ｊ３－86	7	26.031	剥片	硬質頁岩	3.18	1.76	0.59	3.45		
	Ｊ３－86	8	26.438	剥片	硬質頁岩	2.46	1.90	1.23	2.56		
	Ｊ３－86	9	26.242	剥片	硬質頁岩	1.89	3.21	0.68	3.39		
2	Ｊ３－85	8	26.360	剥片	珪質岩	2.80	2.60	1.20	7.21		
3	Ｊ３－75	1	26.485	剥片	珪質岩	2.85	3.55	0.73	6.75		
4	Ｊ３－85	10	26.557	剥片	珪質岩	1.80	2.00	0.40	1.22		
5	Ｊ３－85	4	26.325	剥片	メノウ	2.20	2.20	0.50	2.65		
6	Ｊ３－85	11	26.130	剥片	黒曜石	3.10	2.70	1.45	9.46		
7	Ｊ３－85	23	26.125	砕片	ホルンフェルス	4.80	3.60	0.75	12.94		
	Ｊ３－85	26	26.118	敲石	ホルンフェルス	8.80	4.80	3.50	170.49		



第170図　第13－２地点出土石器

第15節　第14地点

概要　本地点は台地の南西部隅に位置し、その西に隣接して第16地点が存在する。標高は約28.5mとなり、台地中央部よりも0.5m前後低くなっている。石器群はＯ２区及びＮ２区での試掘により第Ⅶ層から検出された。次にそれぞれを拡張しつつ調査を継続していったところ計４か所で集中的な出土が確認された。そのため整理作業の段階で西方から時計回りに14－１地点、同２地点・・とし、区別して作業を進捗させたが接合関係等からほぼ同時期の所産と見做されるものであった。ただ一部の石器では若干の高低差が認められた。しかし、同レベルで石器群の広がりが認められなかったため、これらの石器についても同時期のものとして取り扱った。また14－２地点と14－４地点では20mほど離れており、層序にも若干の差異がみられた。

（１）第14－１地点（第171図～第173図、図版61）

概要　本地点はＯ２－38・48グリッドを中心に南北方向に径４m、東西方向に径３mほどの範囲で石器が出土している。石材は第14－４地点と近似し黒色頁岩が主体となり、他に頁岩、チャート等で構成される。

出土石器群　出土点数は32点と少ないが、他地点と比較しナイフ形石器が５点と卓越した出土を示している。使用されている石材も黒色頁岩・黒曜石・チャートとなりバラエティーに富む。ただし黒曜石とチャートの砕片は出土していないため、黒曜石製品は14－３地点、チャート製品は他から持ち込まれたものであろう。

ナイフ形石器（４～８）　４は同一グリッドから出土した２点が接合したもので先端部を若干欠損する。縦長剥片を素材としており、背面は裏面方向からのみ調整剥離を施している。基部の整形は粗く打面を残している。５も４と同様な素材を採用したもので、右側面では調整剥離により背面としての形状を整えている。ここでも基部の整形は粗い。６は横長の剥片を素材としており、先端の一部が失われている。左の側面を背面とし裏面方向から丁寧に調整を加えている。７は自然面を有する断面三角の縦長剥片を素材としており、加工は簡素で背面先端部と基部の表裏面に整形を兼ねた調整を施すのみで成品としている。８は横長剥片を素材としたもので、左側面と基部を簡単に整形しただけである。成品とするには刃部の作出が不十分であるが、ここでは一応ナイフ形石器として分類した。

敲石（１）　上下に打痕を有する敲石で、下端は、その接合状態から意識的に剥離したようでもある。３点の剥片・砕片が接合し、同材と思われる砕片（２）が１点出土している。剥片３は裏面に接合する。平坦な裏面は円滑で使用を感じさせる。剥離部分を観察すると、剥離後も敲石として使用されたようで顕著な打痕が認められる。

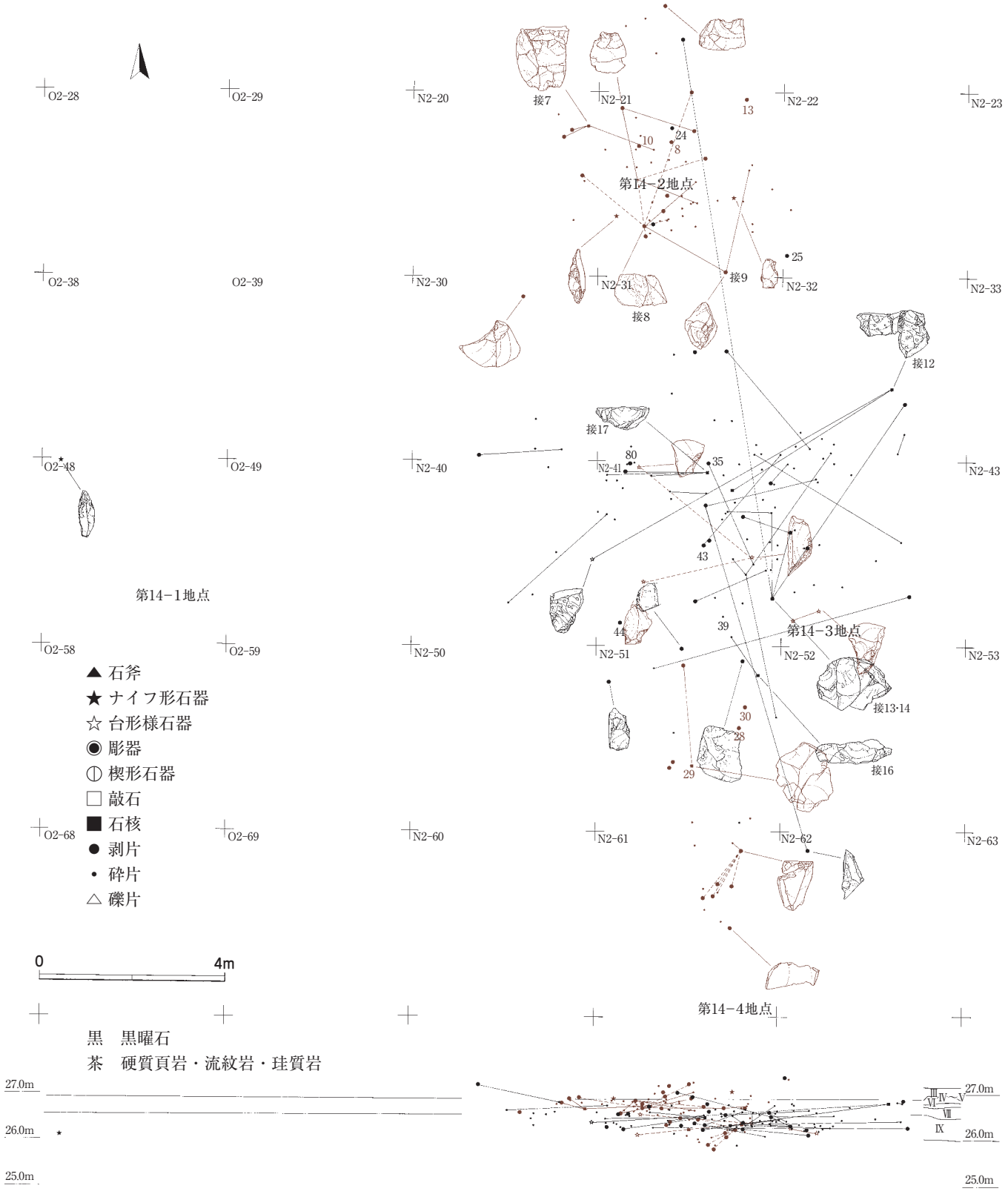
剥片（２・３・11～17）　11～15は石核（９・10）と同材の剥片であり、ここから剥離されたものであろう。11・13は接合資料で、11の接合片の図化は省略した。16や17の剥片は十分石器として加工できる形状が保たれているが使用の痕跡は認められない。

石核（９・10）　９・10はおそらく同一の円礫となろう。これらは打割した円礫の平坦な面を打面として順次剥離している。おそらく本地点で出土している黒色頁岩の類はこの石核から剥離されたものであろう。

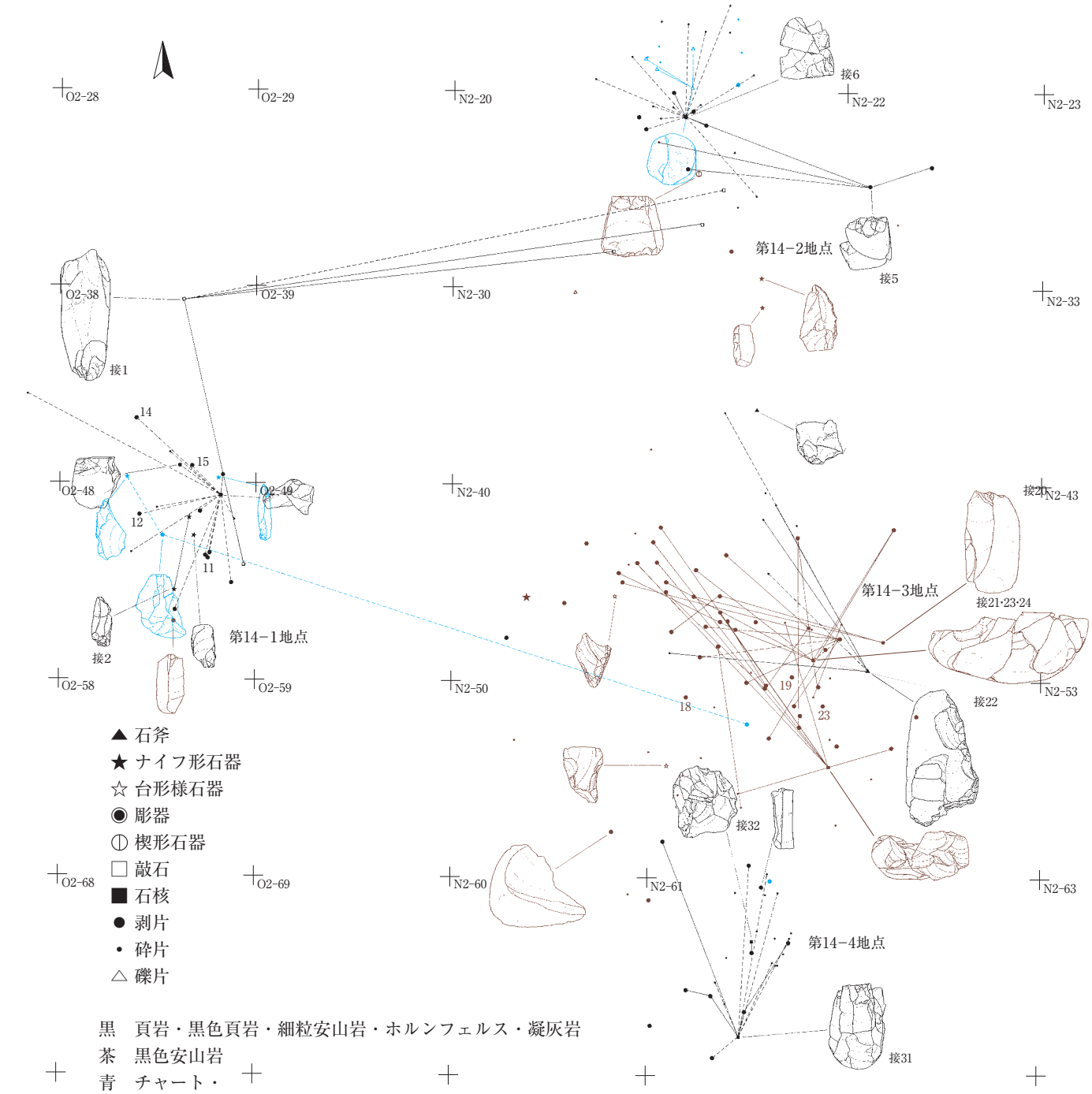
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

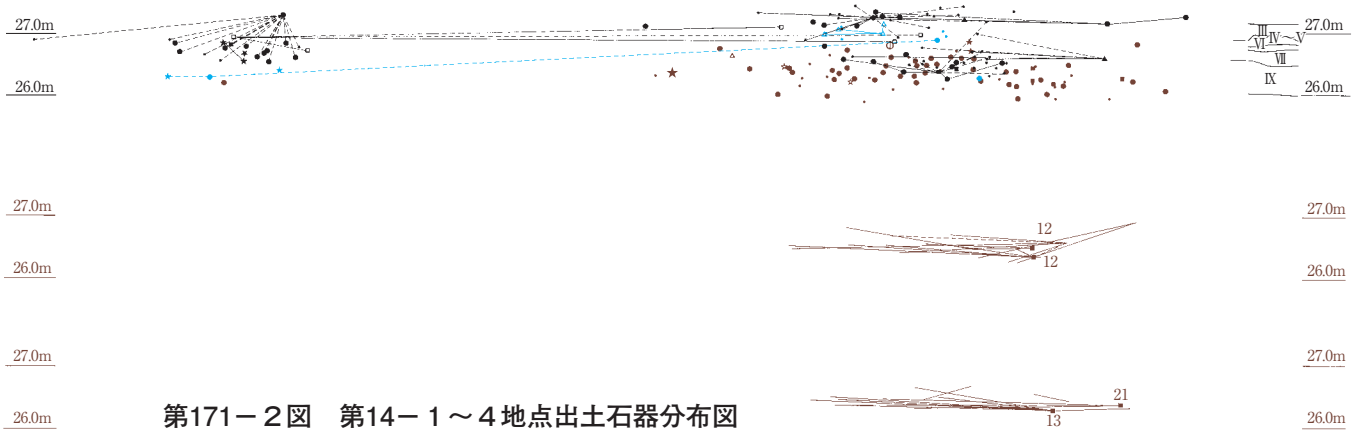
石材　黒曜石１点　黒色頁岩22点　頁岩５点　チャート３点　黒色安山岩１点

器種　ナイフ形石器５（６）点　剥片11点　砕片12点　石核２点　敲石１点　計32点

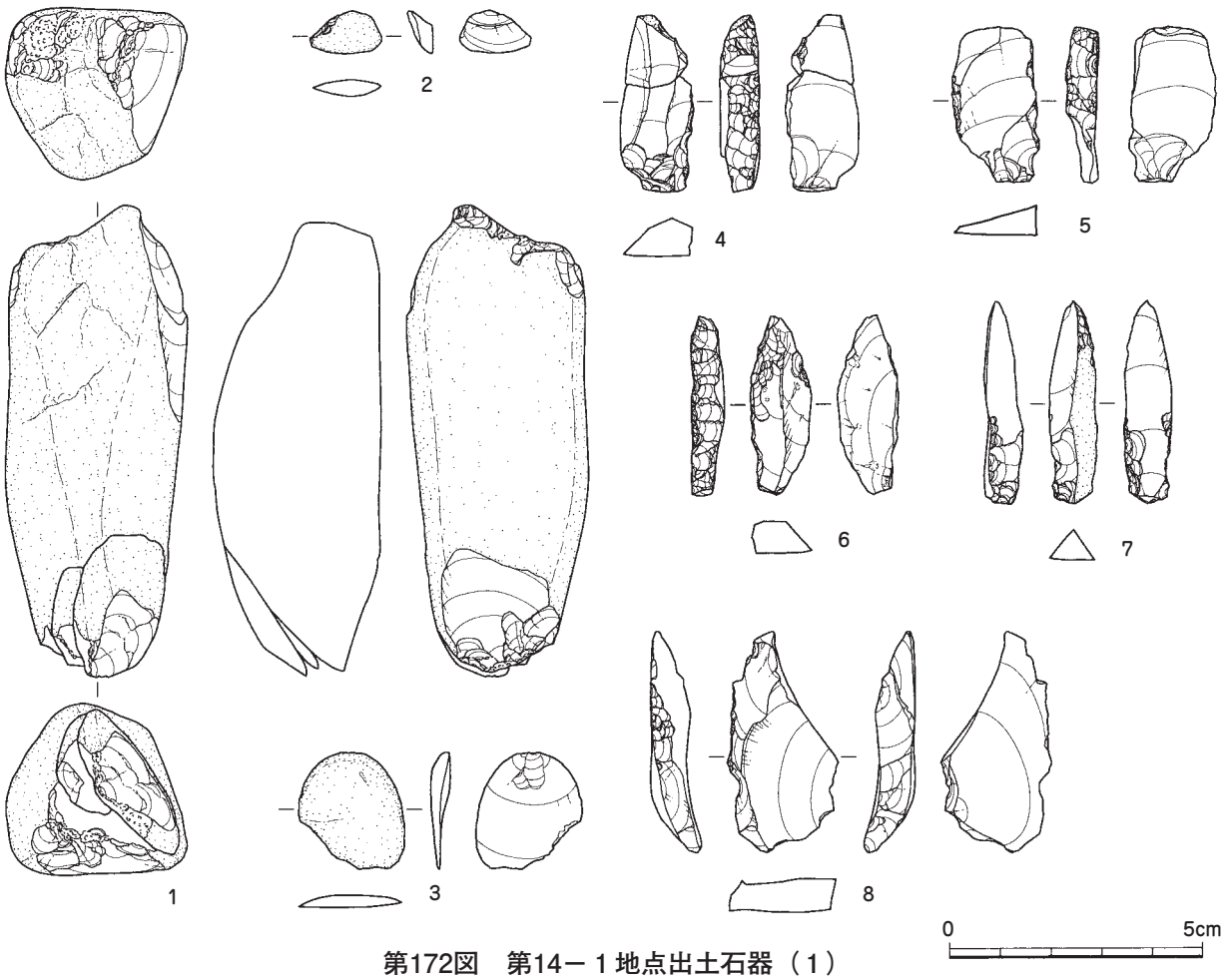


第171－１図　第14－１～４地点出土石器分布図





第171−２図　第14−１～４地点出土石器分布図



第172図　第14－１地点出土石器（１）

第68表　第14－１地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O２－38	1	26.610	敲石	頁岩	9.30	3.60	3.40	156.84	接１	
	O２－48	7	26.556	敲石（砕片）	頁岩	2.80	1.00	0.50	1.28		
	N２－21	23	26.792	敲石（砕片）	頁岩	3.00	3.30	0.60	7.36		
2	N２－21	33	26.817	敲石（砕片）	頁岩	0.90	1.40	0.40	0.45		１と同材
3	N２－20	4	26.812	敲石（砕片）	頁岩	2.35	2.10	0.40	1.60		１と接合
4	O２－48	10	26.261	ナイフ形石器	黒色頁岩	3.52	1.50	0.79	4.70	接２	
	O２－48	15	26.575	ナイフ形石器	黒色頁岩						
5	O２－48	5	26.459	ナイフ形石器	黒色頁岩	3.20	1.70	0.65	3.45		先端欠
6	O２－48	19	26.110	ナイフ形石器	黒曜石	3.60	1.30	0.65	2.98		先端欠
7	O２－38	6	26.332	ナイフ形石器	チャート	4.10	0.90	0.80	2.77		調整痕アリ
8	O２－38	8	26.269	ナイフ形石器	チャート	4.40	2.20	0.75	7.71		未成品
9	O２－38	9	－	石核	黒色頁岩	2.85	4.60	2.70	23.15		
10	O２－38	3	26.512	石核	黒色頁岩	3.80	3.30	2.00	33.46		
11	O２－48	18	26.272	剥片	黒色頁岩	2.80	2.70	0.60	5.11		
	O２－48	17	26.285	剥片	黒色頁岩	1.39	1.72	0.33	1.14		
12	O２－48	2	26.431	剥片	黒色頁岩	4.70	2.80	0.90	9.93		
13	O２－38	5	26.541	剥片	黒色頁岩	2.30	1.90	1.05	2.79	接３	
	O２－48	1	27.005	剥片	黒色頁岩	3.25	1.65	0.80	3.28		
14	O２－38	2	26.547	剥片	黒色頁岩	2.70	1.65	0.47	1.36		
15	O２－38	4	26.500	剥片	黒色頁岩	3.70	1.75	1.00	5.90		
16	O２－48	13	26.275	剥片	チャート	4.70	3.10	0.80	10.76		
17	O２－48	12	26.323	剥片	黒色安山岩	4.25	2.10	0.95	9.34		

第173図　第14－１地点出土石器（２）

（２）第14－２地点（第171図・第174図・第175図、図版61）

概要　本地点は第14地点として調査した４か所のうち北に位置しており、Ｎ２－11・21グリッドを中心に石器群が出土したものである。石器群の分布は南北に６ｍ、東西に５ｍの広がりをもち、石材は硬質頁岩が主体をなし、他に頁岩、黒色安山岩などがみられた。しかし前述した地点で支配的であった黒色頁岩は出土していない。

出土石器群　本地点で出土した石器群についてみると、成品としては前述した地点と同様にナイフ形石器が多くみられた。他では大型の楔形石器が特異な存在といえよう。一方、石核と共に剥片類が多く出土した硬質頁岩ではナイフ形石器以外の成品はみられなかった。

ナイフ形石器（１・22・23）　１は完形品で、断面はほぼ三角形を呈している。背面加工は表裏から丁寧に施されている。22も完形品で、縦長剥片の右側縁部を刃潰し状に加工し成品としている。左側縁基部での加工は認められない。先端部の破損は調査時のものである。23は欠損品で、黒色安山岩製のため風化が著しい。左側面での剥離痕と裏面基部にみられる僅かな剥離からナイフ形石器と判断した。

彫器（２）　左側面の緻密に施された調整痕から推察すると、先端部の破損したナイフ形石器を再生加工したものか、あるいはナイフ形石器の製作を意図しつつも意にかなった整形をなし得なかったために他の彫器に転換したとも考えられる。つまり先端部での横方向からの剥離により彫器、右側縁にみられる抉り加工からスクレイパーとして使用したものであろう。

楔形石器（21）　台形を呈した板状の剥片を素材とし、上下両端の表裏面に刃部形成のための粗い剥離が施されている。刃部の作出は上端部のほうが鋭利となっている。これまでみてきたように、楔形石器は小型品が多く、このような大型の楔形石器は希である。

二次加工剥片（３）　接合資料３に図示した縦長の剥片で、右側縁には小さな調整剥離が顕著に認められる。削器様の石器として使用されたものと思われる。

剥片（４～20・24・25）　４～15は硬質頁岩の剥片で、６・11・14は２点が接合したものである。４～７は表皮部分が残された剥片で、３の接合資料の表皮と極似している。また９・11・12・14も色調が似ているところから３の一部のように思われた。一方、16～20の石材は表面が暗い青灰色を呈した頁岩で、破損部はは黒色を呈している。特に17～20は剥離面の色調が酷似しており、同一の母岩から剥離されたものと思われた。そして17・18は３点が接合したものである。とりわけ17の表面にみられる自然面では一部に研磨されたような滑らかさを観察できた。おそらく石斧材として使用されていたものから剥離されたものであろう。

石核（３）　石核に３点の剥片類が接合したもので打面調整を加えながら上下方向から剥片を剥取している。縦方向に剥離された剥片は二次加工剥片となり、打面部の剥片にも若干の剥離が認められる。

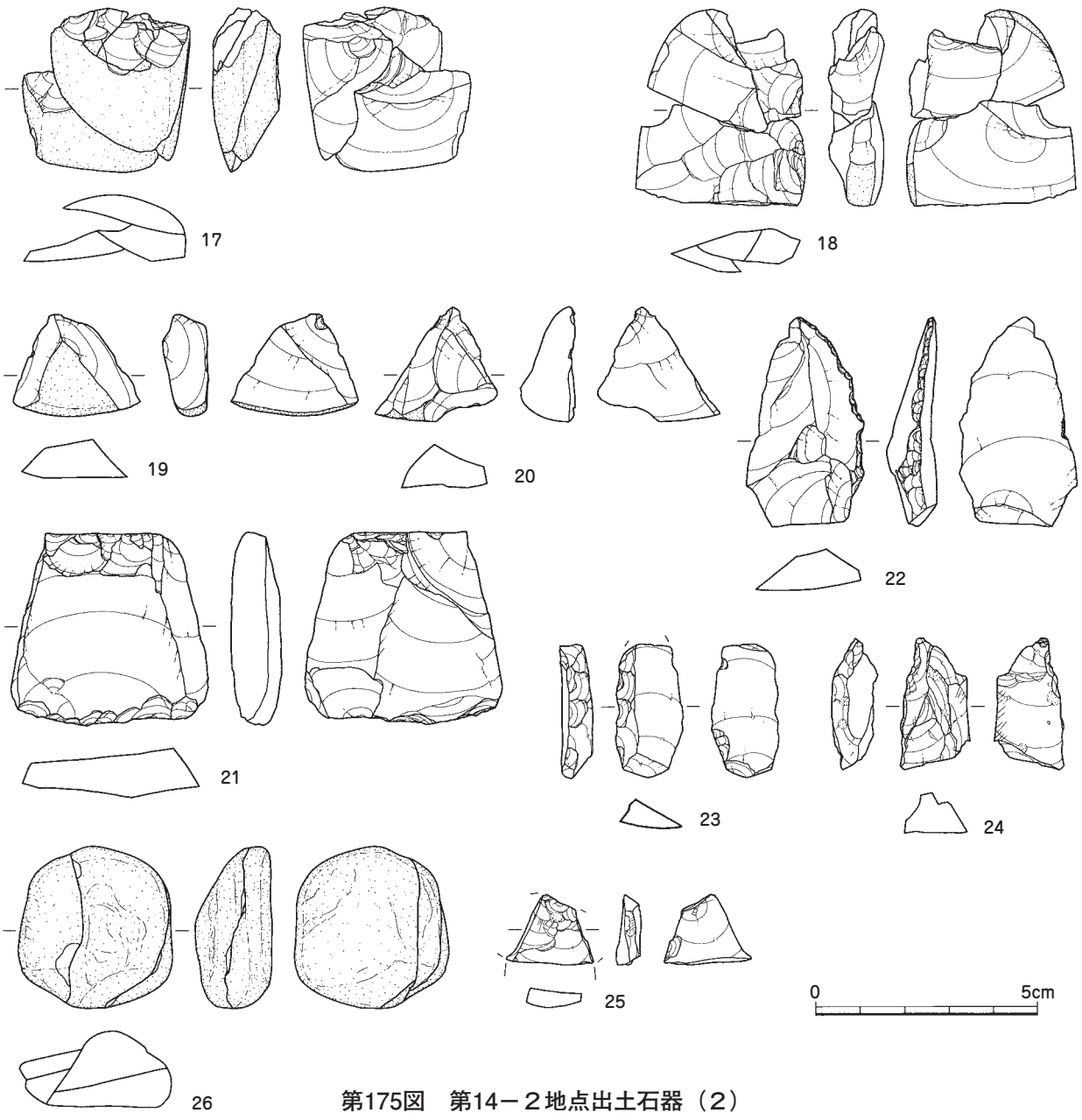
礫（26）　扁平な河床礫を素材としており、４分割されたものが接合した。分割後の剥片には僅かな剥離が認められるのみである。おそらく楔形石器の製作を目的として剥離されたものであろう。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石３点　硬質頁岩62点　珪質頁岩２点　頁岩21点　チャート４点　黒色安山岩６点　流紋岩２点

器種　ナイフ形石器３点　彫器１点　楔形石器１点　二次加工剥片１点　剥片28点　砕片61点　石核１点　礫１（４）点　計100点

第174図　第14－２地点出土石器（１）



第175図　第14－２地点出土石器（２）

第69表　第14－２地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｎ２－21	8	26.987	ナイフ型石器	硬質頁岩	4.25	1.30	0.65	3.37		
2	Ｎ２－21	3	27.084	彫器	硬質頁岩	2.30	1.30	0.50	1.49		先端欠
3	Ｎ２－20	3	26.956	剥片	硬質頁岩	3.20	3.40	1.00	12.48	接７	
	Ｎ２－20	7	26.890	二次加工	硬質頁岩	3.80	2.20	1.00	8.00		使用痕あり
	Ｎ２－20	8	26.748	石核	硬質頁岩	4.00	3.40	2.30	29.72		円礫素材
	Ｎ２－21	44	26.834	砕片	硬質頁岩	1.10	1.35	0.25	0.33		
4	Ｎ２－21	19	26.876	剥片	硬質頁岩	4.20	3.90	1.10	15.41		
5	Ｎ２－21	24	26.780	剥片	硬質頁岩	2.85	1.50	0.65	2.27		
6	Ｎ２－21	47	26.961	剥片	硬質頁岩	2.40	2.80	0.75	5.14	接10	
	Ｎ２－21	68	26.633	剥片	硬質頁岩	2.40	2.20	0.60	2.85		
7	Ｎ２－21	48	26.815	剥片	硬質頁岩	2.50	3.10	0.60	3.20		
8	Ｎ２－21	7	27.248	剥片	硬質頁岩	1.90	2.20	0.60	2.28		
9	Ｎ２－20	2	26.985	剥片	硬質頁岩	2.30	1.70	0.55	2.10		
10	Ｎ２－21	5	27.014	剥片	硬質頁岩	3.05	1.50	0.30	1.58		
11	Ｎ２－21	12	27.083	砕片	硬質頁岩	2.50	1.80	1.00	2.77	接８	
	Ｎ２－21	22	26.797	剥片	硬質頁岩	2.60	2.70	1.00	7.49		
12	Ｎ２－11	10	27.257	剥片	硬質頁岩	1.85	2.85	0.45	2.50		下端欠
13	Ｎ２－21	66	26.755	剥片	珪質頁岩	4.35	1.00	0.50	1.61		
14	Ｎ２－21	25	26.779	剥片	硬質頁岩	3.30	2.50	0.90	4.94	接９	
	Ｎ２－21	67	26.814	砕片	硬質頁岩	1.75	1.80	0.40	1.20		
15	Ｎ２－11	19	27.082	剥片	硬質頁岩	2.40	3.50	0.90	6.88		
16	Ｎ２－20	6	26.865	剥片	頁岩	2.80	1.90	0.65	3.58		
17	Ｎ２－21	38	26.970	剥片	頁岩	3.05	2.10	0.70	4.76	接５	
	Ｎ２－21	41	26.929	砕片	頁岩	1.50	1.70	0.25	0.71		
	Ｎ２－22	3	26.827	剥片	頁岩	2.60	2.70	1.00	7.89		
	Ｎ２－22	5	26.927	剥片	頁岩	3.20	3.20	0.75	8.05		
18	Ｎ２－11	8	26.801	剥片	頁岩	2.10	1.80	1.00	4.40	接６	
	Ｎ２－21	53	26.890	剥片	頁岩	3.15	2.25	0.80	5.18		
	Ｎ２－21	59	26.934	剥片	頁岩	2.40	3.80	1.20	12.01		
19	Ｎ２－21	11	26.957	剥片	頁岩	2.80	2.25	0.80	5.80		
20	Ｎ２－21	57	26.815	剥片	頁岩	3.05	2.10	1.20	5.64		18と接合
21	Ｎ２－21	54	26.890	楔形石器	黒色安山岩	4.40	4.50	1.05	25.59		
22	Ｎ２－21	14	26.964	ナイフ形石器	黒色安山岩	4.80	2.65	1.00	10.67		未成品
23	Ｎ２－21	21	26.818	ナイフ形石器	黒色安山岩	3.05	1.50	0.05	3.53		
24	Ｎ２－21	7	27.248	剥片	黒曜石	1.90	2.20	0.60	2.28		
25	Ｎ２－22	2	27.017	剥片	黒曜石	1.70	1.70	0.35	1.16		下端欠
26	Ｎ２－10	2	26.984	円礫片	チャート	0.90	1.10	0.50	0.40	接４	楔形石器未成品
	Ｎ２－11	1	27.028	円礫片	チャート	2.90	0.90	0.55	1.49		
	Ｎ２－11	6	26.964	円礫片	チャート	3.70	2.50	1.20	10.62		
	Ｎ２－11	9	27.011	円礫片	チャート	3.75	2.80	0.90	12.08		

（３）第14－３地点（第171図・第176図～第180図、図版62）

概要　本地点における遺物の分布はＮ２－41・42グリッドを中心に径８ｍの広範囲に及んでおり、第14地点を構成する４か所の石器集中地点のうち最も規模が大きいものとなった。また、多数の器種と成品を出土しており第14地点の中心的な位置を占めていた場所であったものと思われる。使用されている石材についてみると、黒曜石と黒色安山岩の二種によって主体が構成されており、それを補完するように流紋岩や石斧材としての細粒安山岩・ホルンフェルスが少量みられた。とりわけ黒曜石は砕片が多く石器製作が盛んにおこなわれていたことを示す証左となろうが、成品の出土は皆無であった。黒色安山岩も出土数のわりに台形様石器・ナイフ形石器が３点と少ない。一方、珪質岩や硬質頁岩では成品や二次加工剥片が多く

みられ、廃棄されたような剥片･砕片の類は僅かなものであった。

出土石器群　出土した成品についてみると、破損はしているものの局部磨製石斧と打製石斧が出土している。さらに台形様石器が７点も出土しており特筆できる機種構成といえよう。接合資料も多く、その中には石核と接合した台形様石器も存在した。他にはナイフ形石器・二次加工剥片等の出土を考慮すると器種としてもバラエティーに富む機種構成といえよう。

打製石斧（２）　１は２の打製石斧に３点の砕片が連続的に接合したものである。他に同材の砕片が３点出土している。石斧はN２－42グリッド出土であり、接合片３点と同材の２点は隣接のN２－41グリッドから出土した。接合部位は刃部であり、刃部再生のために剥離されたものと思われる。扁平な礫を素材に用いており、表面として図示した面では左から数回の剥離によって整形されているが、他は滑らかな自然面に覆われている。若干研磨し、整形しているようにも思われる。裏面は左右から全面にわたって整形剥離が施される。

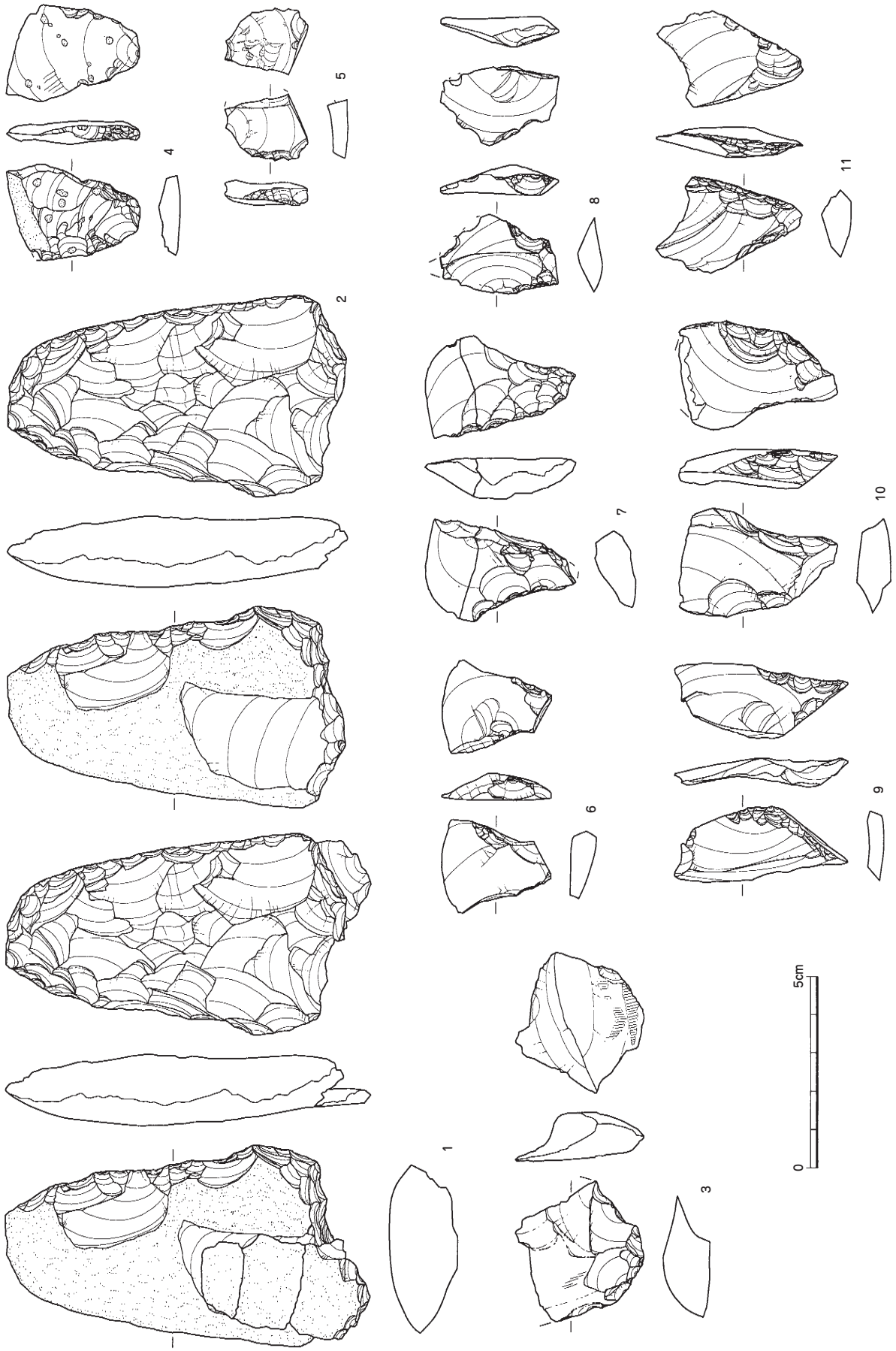
局部磨製石斧（３）　破損した局部磨製石斧の刃部片である。表裏面の一部には研磨部分が明確に確認できる。他に砕片が近接したグリッドから２点出土している。遺存部の観察から推察すると、使用により刃部が破損したため、さらに小さな剥離を加え楔形石器に転用しているようにもみえる。

ナイフ形石器（20）　剥片自体が整った形状を呈しているため表面での加工はほとんどみられない。裏面では打点部を若干剥離することにより成品に仕上げている。粗雑な作りといえようがナイフ形石器としてよいであろう。

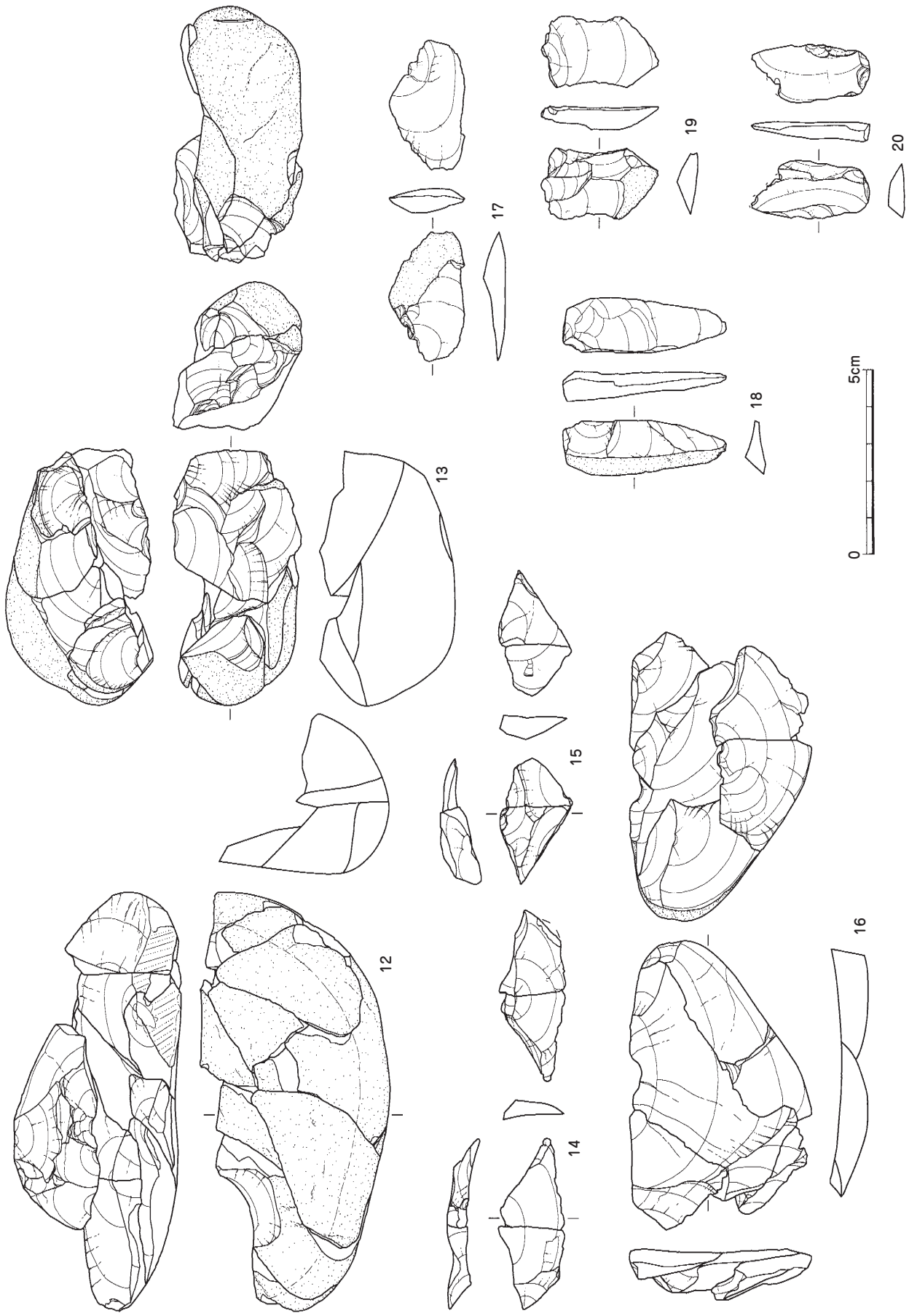
台形様石器（４・６～11）　４は31に図示したように残核と接合したものである。他の台形様石器と比較すると、形状は若干異なるがここでは同一器種として取り扱った。刃部には自然面がみられ左右の側縁は丁寧に調整されている。６～９は同種の石材を用いており、同一の母岩から製作された可能性も否定できない。色調は浅黄色から赤褐色に変化している。しかし、この種の石核・砕片等の出土はみられない。６・７はきれいに刃部を作出しており典型的な台形様石器といえよう。７は同一グリッドから出土した２点が接合したものである。８・９の刃部は明確な作りとはいえないが、基部周辺の加工と横長剥片を素材としている点からここに含めた。10は調査により刃部を損傷している。表面の整形は右側面ではきれいな弯曲に整形されているが、左の側面は分厚い打点部を数回の剥離で整形しただけで成品としている。11は尖頭器の一部とも思われるような形状を呈している。だが表裏面の剥離と基部の加工から台形様石器に分類した。

二次加工剥片（５・28・29・35・36）　５は折断された剥片で、左の側面ではナイフ形石器にみられる背面加工のような剥離を施している。ナイフ形石器あるいは台形様石器の製作を意図したものと考えられる。28・29には側縁の一部を抉るような剥離が施されている。ともに石器として使用したことは間違いなかろう。35は幅広の剥片を折断したもので左側縁には緻密な調整が加えられている。これも削器か錐のような石器として使用されたものであろう。なお、図化は略したが同一グリッドから出土した剥片と接合（図版62最下段）しており、接合剥片にも調整痕がみられた。36は打点部を削除するように整形剥離を施している。この整形から台形様石器の製作を意図したものとも考えられる。

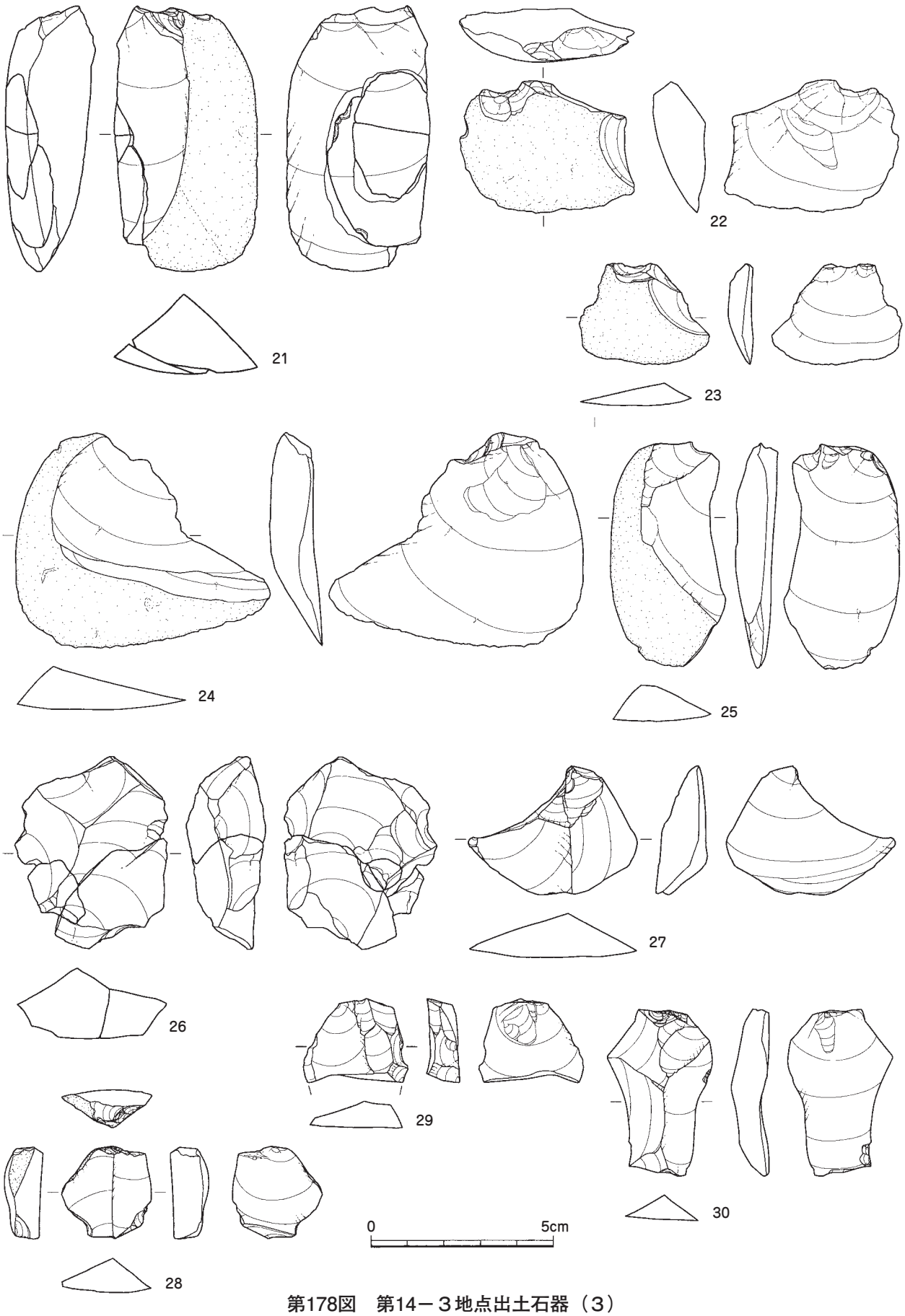
剥片（14～19・22～25・27・29・30･34・37～46）　主な剥片を図示した。これらの剥片の中には使用の痕跡等を有するものも少なくない。30は右側縁中央に微細な剥離が施されており、下端部には小さな２回の剥離と横からファシット状の剥離が認められる。彫器の可能性も否定できない。37は右側縁に微細な調整



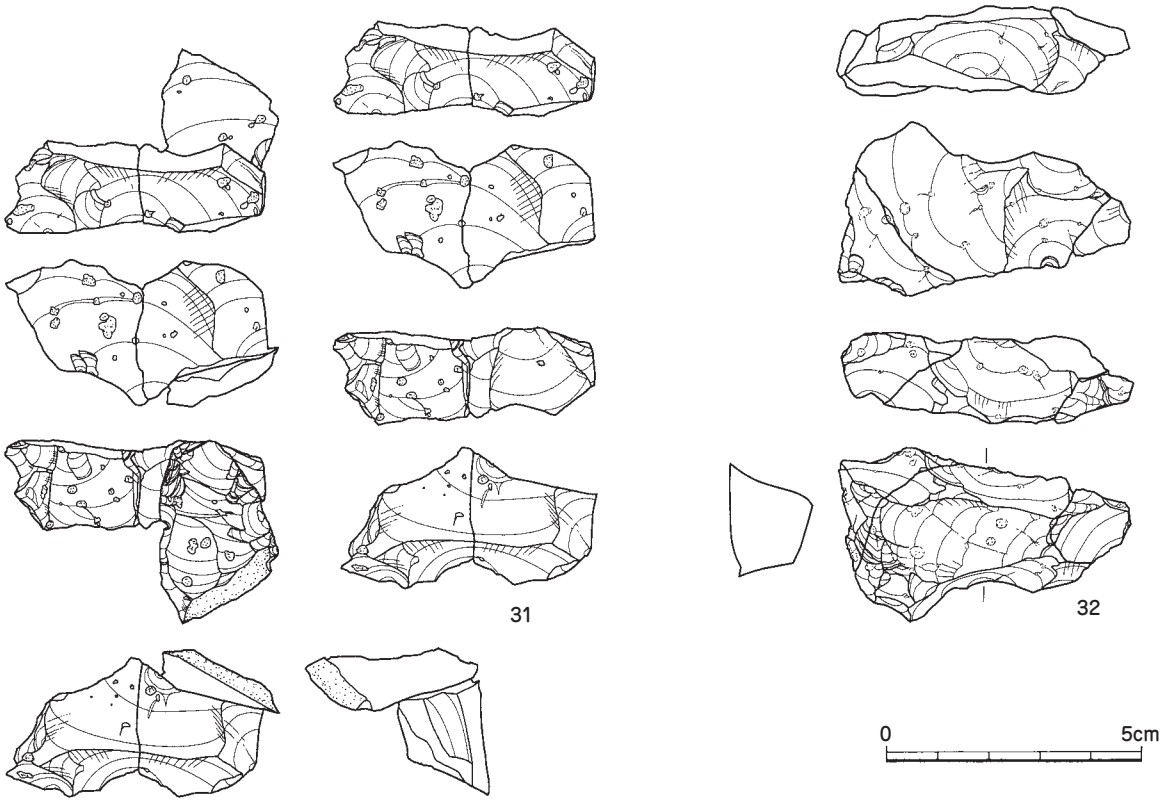
第176図　第14－３地点出土石器（１）



第177図　第14－３地点出土石器（２）



第178図　第14－３地点出土石器（３）



第179図　第14－３地点出土石器（４）

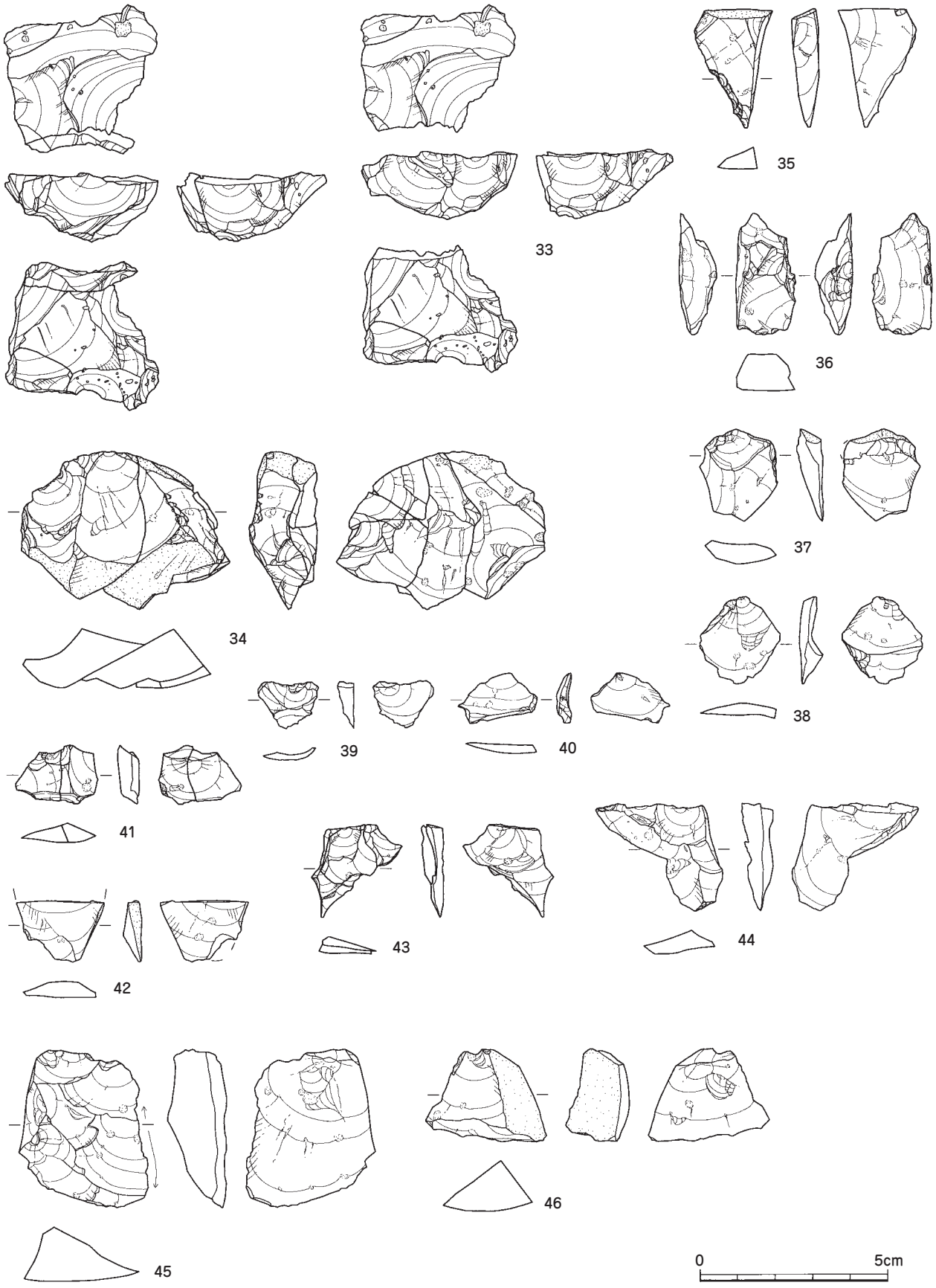
痕が認められる。39のように薄く弯曲した砕片は石器製作の最終段階で剥離されたものであろう。45は形状の整った剥片で下端に微細な剥離と右側縁に刃こぼれ痕が観察できる。石器としては削器のような使用方法が想定できる。その他に単独で図示はしていないが、７点が接合した34のうち１点（Ｎ２－41－74）には刃こぼれ状の使用痕が観察できる。また接合資料21の１点にも小さな剥離が認められる。

石核（12・13・21・26・31～33）　12には15点が接合した。Ｎ２－41グリッドとその周辺から出土したものである。Ｎ２－41グリッドで剥片剥離作業がおこなわれていたことが理解できる。接合により礫全体の1/3程度が復原できた。その結果、残核と考えられる石片は２点が存在した。打面部からみると順序よく剥離していく工程が容易に理解できる。13は10点が接合したもので、これもＮ２－41グリッド中心に出土している。21は大型の厚手剥片からさらに剥片を２枚剥離しており、前述したように１枚には微細な剥離が認められた。26は同一グリッド出土の２点が接合した流紋岩製の石核でありる。被熱して脆弱化している。31は台形様石器が接合した石核で多方向からの剥離が認められ、最終的に二分割されたものである。32は隣接するグリッドから出土した剥片が接合したもので、剥片は多方向から剥離されている。33は同一グリッドから出土した２点が接合したものである。打面では２回の調整剥離痕が観察できる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石100点　硬質頁岩４点　珪質岩５点　チャート１点　黒色安山岩69点　細粒安山岩７点　ホルンフェルス３点　流紋岩５点

器種　局部磨製石斧１点　打製石斧１点　ナイフ形石器１点　台形様石器７点　二次加工剥片５点　剥片72点　砕片98点　石核７（９）点　計194点



第180図　第14－３地点出土石器（５）

第70表　第14－３地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｎ２－41	59	26.307	砕片	細粒安山岩	2.00	2.60	0.50	2.37	接30	
	Ｎ２－41	78	26.377	砕片	細粒安山岩	1.10	1.90	0.25	0.70		
	Ｎ２－41	89	26.255	砕片	細粒安山岩	1.65	2.40	0.25	1.30		
2	Ｎ２－42	11	26.277	打製石斧	細粒安山岩	8.90	5.20	2.00	91.04		
3	Ｎ２－31	1	26.909	局部磨製石斧片	ホルンフェルス	3.50	3.80	1.30	12.50		
4	Ｎ２－40	12	26.340	台形様石器	黒曜石	3.50	2.60	0.55	4.90		
5	Ｎ２－51	11	26.282	二次加工剥片	黒曜石	2.10	1.70	0.55	2.37		加工痕あり 左側Ｒ　下端欠
6	Ｎ２－41	86	26.192	台形様石器	珪質岩	2.40	3.00	0.65	3.99		
7	Ｎ２－42	13	26.316	台形様石器	珪質岩	4.00	2.40	0.95	8.59	接29	被熱
	Ｎ２－42	24	26.204	台形様石器	珪質岩						
8	Ｎ２－41	16	26.641	台形様石器	珪質岩	2.15	3.10	0.80	4.02		
9	Ｎ２－41	45	26.430	台形様石器	珪質岩	2.00	4.20	0.55	4.54		(ナイフ形石器)
10	Ｎ２－51	7	26.295	台形様石器	黒色安山岩	4.10	2.80	1.00	11.65		
11	Ｎ２－40	5	26.557	台形様石器	黒色安山岩	4.00	2.60	0.80	5.63		基部欠
12	Ｎ２－31	15	26.500	剥片	黒色安山岩	3.60	6.80	0.95	22.12	接21、23、24	
	Ｎ２－31	20	－	砕片	黒色安山岩	1.30	0.85	0.40	0.82		
	Ｎ２－32	1	26.936	剥片	黒色安山岩	3.05	2.80	0.70	4.82		
	Ｎ２－40	4	26.540	剥片	黒色安山岩	2.80	2.80	0.90	6.16		
	Ｎ２－41	2	26.828	剥片	黒色安山岩	3.80	2.85	1.40	11.77		
	Ｎ２－41	18	26.580	剥片	黒色安山岩	4.50	2.80	1.40	15.47		
	Ｎ２－41	24	26.552	剥片	黒色安山岩	2.40	2.50	0.70	4.19		
	Ｎ２－41	29	26.576	剥片	黒色安山岩	2.80	3.25	0.80	6.70		
	Ｎ２－41	30	26.500	石核	黒色安山岩	4.10	4.35	1.60	30.11		円礫素材
	Ｎ２－41	34	26.548	剥片	黒色安山岩	3.40	3.70	1.10	15.91		
	Ｎ２－41	37	26.503	剥片	黒色安山岩	2.70	2.40	0.65	4.45		
	Ｎ２－41	48	26.370	剥片	黒色安山岩	2.40	2.80	0.90	4.40		
	Ｎ２－41	54	26.265	剥片	黒色安山岩						
	Ｎ２－41	56	26.340	剥片	黒色安山岩	2.60	2.60	0.65	3.35		
	Ｎ２－41	68	26.367	石核	黒色安山岩	2.60	4.70	2.50	29.29		円礫素材
13	Ｎ２－31	12	26.465	剥片	黒色安山岩	2.60	2.10	0.90	5.94	接22	
	Ｎ２－31	13	26.455	剥片	黒色安山岩	2.57	2.15	0.66	3.26		
	Ｎ２－41	20	26.650	剥片	黒色安山岩	3.90	4.05	1.60	28.65		打面再生剥片
	Ｎ２－41	53	26.435	剥片	黒色安山岩	2.30	2.80	0.70	4.02		
	Ｎ２－41	73	26.347	砕片	黒色安山岩	1.80	1.80	0.25	1.20		
	Ｎ２－41	84	26.357	剥片	黒色安山岩	2.00	1.85	0.35	1.61		
	Ｎ２－42	12	26.309	剥片	黒色安山岩	2.50	2.70	0.80	5.23		
	Ｎ２－51	3	26.477	砕片	黒色安山岩	1.70	2.15	0.40	1.54		
	Ｎ２－52	2	26.277	石核	黒色安山岩	3.30	6.50	2.65	57.28		
	Ｎ２－52	3	26.025	砕片	黒色安山岩	0.65	1.89	0.23	0.26		
14	Ｎ２－41	13	26.674	剥片	黒色安山岩	1.80	2.30	0.45	1.75	接26	
	Ｎ２－41	42	26.459	剥片	黒色安山岩	2.80	3.40	0.60	5.85		
15	Ｎ２－41	32	26.524	砕片	黒色安山岩	1.45	1.80	0.30	0.71	接27	
	Ｎ２－42	15	26.410	砕片	黒色安山岩	1.60	2.50	0.75	3.07		
16	Ｎ２－40	10	26.489	剥片	黒色安山岩	2.35	3.20	0.75	3.92	接25	
	Ｎ２－42	6	26.580	剥片	黒色安山岩	2.90	2.70	0.50	2.88		
	Ｎ２－41	11	26.711	剥片	黒色安山岩	2.80	3.20	0.70	6.46		半欠
	Ｎ２－41	41	26.425	剥片	黒色安山岩	3.80	6.50	0.70	14.33		
	Ｎ２－42	71	26.298	剥片	黒色安山岩	3.20	3.50	0.90	10.25		
17	Ｎ２－41	9	26.674	剥片	黒色安山岩	2.70	2.65	0.70	4.08		
18	Ｎ２－41	58	26.332	剥片	黒色安山岩	4.50	1.55	0.60	4.26		
19	Ｎ２－41	46	26.443	剥片	黒色安山岩	3.25	2.00	0.60	3.66		
20	Ｎ２－40	8	26.496	ナイフ形石器	黒色安山岩	1.60	3.25	0.49	2.73		

21	Ｎ２－41	40	26.445	剥片	黒色安山岩	2.80	3.40	0.90	8.80	接20	
	Ｎ２－41	79	26.300	剥片	黒色安山岩	2.20	3.40	0.55	3.10		
	Ｎ２－41	81	26.365	剥片	黒色安山岩						
	Ｎ２－42	18	26.347	石核	黒色安山岩	3.30	7.30	2.60	61.05		厚手剥片素材
22	Ｎ２－41	19	26.593	剥片	黒色安山岩	3.70	4.60	1.30	25.62		
23	Ｎ２－41	42	26.459	剥片	黒色安山岩	2.80	3.40	0.60	5.85		
24	Ｎ２－50	1	26.135	剥片	黒色安山岩	5.70	7.30	1.30	38.89		
25	Ｎ２－42	10	26.225	剥片	黒色安山岩	6.20	3.00	1.10	23.71		
26	Ｎ２－51	19	26.286	石核	流紋岩	4.00	5.20	2.20	25.92		被熱
27	Ｎ２－30	3	26.694	剥片	硬質頁岩	3.70	4.50	1.30	14.63		
28	Ｎ２－51	14	26.247	二次加工	硬質頁岩	2.55	2.45	1.05	6.06		下端欠
29	Ｎ２－51	17	26.447	二次加工	硬質頁岩	2.30	2.80	1.90	5.61		下端欠
30	Ｎ２－51	13	26.407	二次加工	硬質頁岩	4.60	2.90	0.90	8.93		
31	Ｎ２－32	6	26.790	石核	黒曜石	2.80	5.05	1.60	20.54	接12	
	Ｎ２－41	64	26.330	石核	黒曜石						
（4）	Ｎ２－40	12	26.340	台形様石器	黒曜石	3.50	2.60	0.55	4.90		
32	Ｎ２－41	55	26.213	剥片	黒曜石	1.70	2.70	1.20	3.38	接16	
	Ｎ２－51	15	26.300	石核	黒曜石	3.30	5.40	1.80	22.26		
33	Ｎ２－41	22	26.569	砕片	黒曜石	1.20	1.70	0.65	1.36	接17	
	Ｎ２－41	39	26.437	砕片	黒曜石	1.53	1.50	0.65	0.94		
	Ｎ２－41	44	26.495	石核	黒曜石	4.20	2.90	1.70	18.66		
	Ｎ２－41	88	26.187	剥片	黒曜石	1.70	2.70	0.55	2.45		
34	Ｎ２－41	47	26.500	剥片	黒曜石	2.15	1.70	0.50	1.84	接13･14	
	Ｎ２－41	65	26.317	砕片	黒曜石	1.55	1.15	0.35	0.54		
	Ｎ２－41	74	26.355	剥片	黒曜石	3.20	3.90	1.30	14.74		使用痕
	Ｎ２－41	75	26.400	砕片	黒曜石	1.50	1.55	0.60	1.10		
	Ｎ２－42	16	26.305	剥片	黒曜石	3.80	3.20	1.20	15.31		
	Ｎ２－11	13	27.004	剥片	黒曜石	2.15	2.10	0.75	2.74		
(46)	Ｎ２－32	7	26.840	剥片	黒曜石	2.40	3.20	1.60	8.37		
35	Ｎ２－41	7	26.787	二次加工	黒曜石	2.00	3.20	0.65	3.45		上端欠、下端Ｒ
36	Ｎ２－51	5	26.254	二次加工	黒曜石	1.60	3.20	1.00	4.82		下端Ｒ
37	Ｎ２－41	23	26.549	剥片	黒曜石	2.40	2.10	0.65	2.55		
38	Ｎ２－42	23	26.282	剥片	黒曜石	2.20	2.10	0.55	1.78		
39	Ｎ２－41	33	26.512	砕片	黒曜石	1.25	1.60	0.25	0.37		加工片
40	Ｎ２－41	31	26.522	剥片	黒曜石	1.20	2.15	0.30	0.67		
41	Ｎ２－41	30	26.500	剥片	黒曜石	4.10	4.35	1.60	30.11	接18	円礫素材
	Ｎ２－41	80	26.377	砕片	黒曜石	1.40	1.30	0.50	0.76		
42	Ｎ２－41	77	26.322	剥片	黒曜石	1.70	2.30	0.50	1.43		上端欠、第14－4地点の11と接合
43	Ｎ２－31	16	26.444	砕片	黒曜石	1.40	1.50	0.25	0.55	接19	
	Ｎ２－41	76	26.219	剥片	黒曜石	2.35	2.20	0.30	1.45		下端欠
44	Ｎ２－41	28	26.548	剥片	黒曜石	3.30	2.80	0.75	3.90		
45	Ｎ２－51	16	26.234	剥片	黒曜石	4.20	3.50	1.40	16.57		
46	Ｎ２－32	7	26.840	剥片	黒曜石	2.40	3.20	1.60	8.37		34と接合

（４）第14－４地点（第171図・第181図、図版63）

概要　本地点はＮ２－61グリッドを中心として径約５ｍの範囲で石器群の分布が認められた。出土点数も41点と少なく規模的には小さなものであった。ここで採用されている石材は黒色頁岩を主体とした頁岩系で他を圧倒する。この点では第14－１地点と共通している。他の石材としては黒曜石と凝灰岩の剥片が１点出土しただけであった。この剥片は前述した14－３地点の剥片(42)と接合したため両地点との関連をうかがうことができた。このような接合関係や石材の共通性から第14地点は小規模な環状石器群として捉えることもできよう。

出土石器群　出土した石器群は、黒色頁岩製の石核とそれに接合した剥片類が中心となり、成品としての石器はみられなかった。最後にナイフ形石器を図示したが、これは本地点と15m～16m南の地点（N１－10グリッド）から出土したものである。いわゆる単独出土となるが、硬質頁岩製ということで関連性を有する資料としてここに加えた。惜しむらくは上層一括出土として取り上げたものである。

ナイフ形石器（13）　約15m南から単独出土したもので、石材が共通しているため、ここに含めた。縦長剥片を素材としており先端が僅かに欠損する。刃部を除く周囲は精緻に調整され、基部の整形も丁寧である。裏面での加工はみられない。

剥片（４～12）　４・12は同材であり、同一母岩（１・２）から剥離されたものと考えられる。６～10も色調等から同一の母岩から剥離されたものと思われる。とりわけ９・10の表皮部分は色調が近似し、第14－２地点でみられた石核（３）の表皮部分とも共通する。11は前述した地点の剥片(42)と接合したものである。いずれにも使用痕等は認められなかった。

石核（１～３）　２は１を含め８点が接合した資料で、原石はほぼ拳大以上の大きさとなろう。剥離面を観察するときれいな縦長剥片が得られているようである。１の打面には調整のための剥離が３回施されている。また表面での剥片剥離後に、下端部にも打面を設定し剥離作業をおこなっている。３も１と母岩を共にするようである。剥離面の色調は酷似している。一部に自然面がみられる。大きく剥離された平坦面を打面として、周囲からくまなく剥片を剥離している。

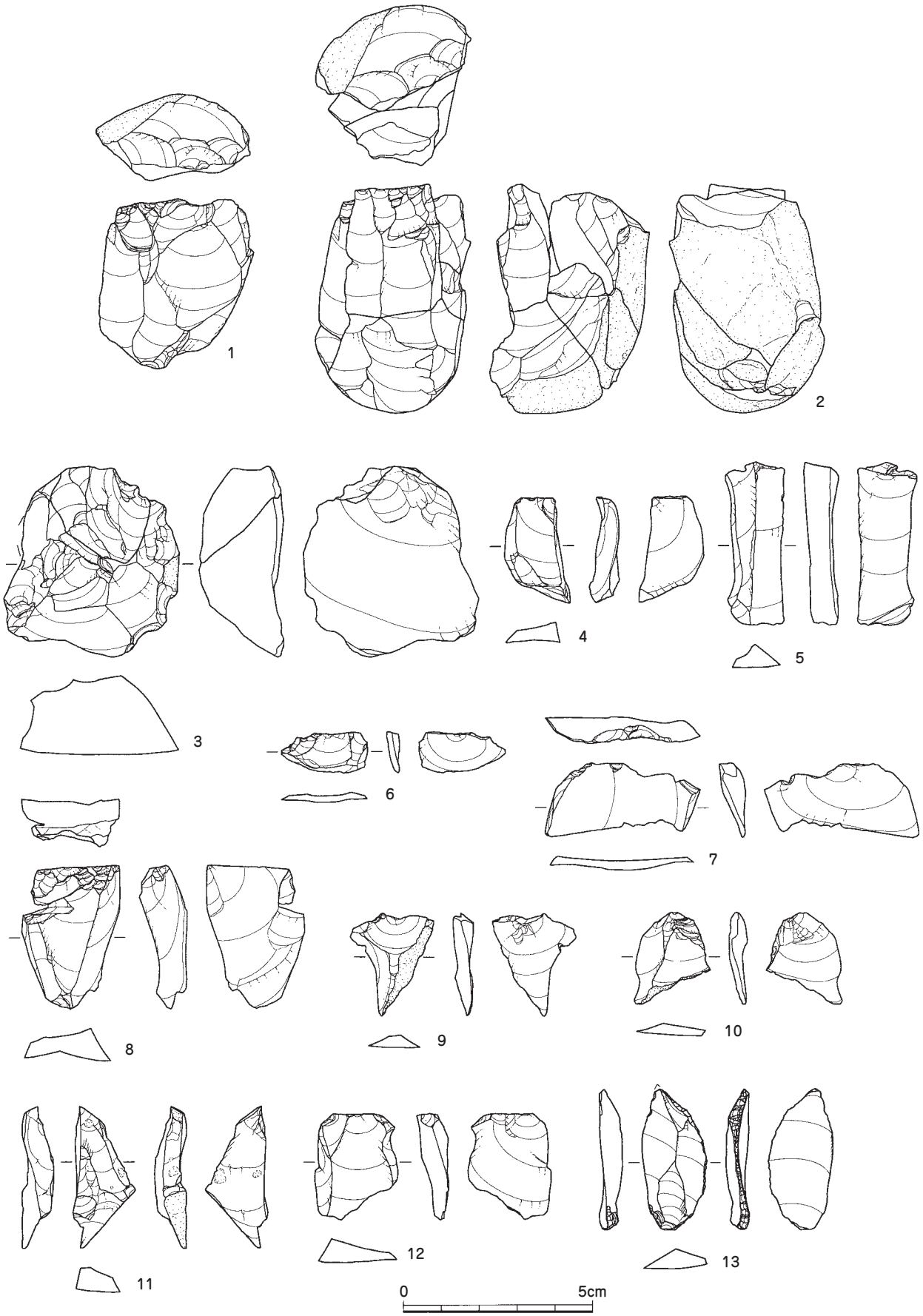
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石１点　硬質頁岩15点　黒色頁岩24点　凝灰岩１点

器種　（ナイフ形石器１点）　剥片15点　砕片23点　石核２点　計41点

第71表　第14－４地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	N２－61	34	26.048	石核	黒色頁岩	5.00	3.70	2.00	41.84	接31	円礫素材
2	N２－51	24	26.261	剥片	黒色頁岩	2.30	2.10	0.45	2.17		
	N２－51	27	26.295	砕片	黒色頁岩	1.30	1.05	0.15	0.28		
	N２－61	19	26.190	剥片	黒色頁岩	2.44	1.15	1.02	2.20		
	N２－61	24	26.205	剥片	黒色頁岩	5.90	3.80	2.30	41.42		
	N２－61	33	26.056	剥片	黒色頁岩						石核の調整片
	N２－61	37	25.946	剥片	黒色頁岩	3.80	2.50	1.10	11.88		
	N２－61	32	26.170	砕片	黒色頁岩	1.15	0.89	0.56	0.50		
3	N２－61	9	26.095	石核	黒色頁岩	4.87	5.43	2.12	47.73	接32	
	N２－61	23	26.211	剥片	黒色頁岩	3.00	2.70	0.90	7.66		
	N２－61	14	26.365	砕片	黒色頁岩	0.89	1.53	0.27	0.36		
	N２－61	20	26.860	砕片	黒色頁岩	1.41	0.66	0.20	0.38		
4	N２－51	26	26.124	剥片	黒色頁岩	2.80	1.50	0.50	2.43		半欠
5	N２－61	4	26.286	剥片	凝灰岩	4.30	1.60	1.90	5.58		
6	N２－61	21	26.065	剥片	硬質頁岩	1.15	2.20	0.20	0.55		加工片
7	N２－61	28	26.185	剥片	硬質頁岩	2.00	3.80	0.40	2.41		
8	N２－61	6	26.252	砕片	硬質頁岩	0.90	1.60	0.25	0.37		加工片
	N２－61	7	26.265	剥片	硬質頁岩	3.95	2.40	0.90	7.44		半欠
9	N２－61	11	26.470	剥片	硬質頁岩	2.70	2.10	0.40	1.63		
10	N２－61	30	25.845	剥片	硬質頁岩	2.50	2.00	0.40	1.49		
11	N２－62	1	26.137	剥片	黒曜石	3.80	1.50	0.65	3.51		半欠　第14－3地点の42と接合
12	N２－61	38	26.336	剥片	黒色頁岩	2.85	2.20	0.80	4.02		
13	N１－10	3	－	ナイフ形石器	硬質頁岩	3.81	1.71	0.52	3.17		



第181図　第14－４地点出土石器

第16節　第15地点（第182図～第184図、図版８・63）

概要　本地点は台地中央の南端部にあたるＧ２区にいおて検出されたものである。石器群はＧ２－10・20・30グリッドを中心として出土し、南北に10m、東西に６ｍほどの範囲で分布していた。出土層位は第Ⅶ層～第Ⅸ層となり、その高低差は斜面部にあたるため約80cmと大きなものであった。石材はほぼ黒色安山岩で占められ、他にチャートとメノウが若干出土している。

出土石器群　ここでは成品と認定できる石器は認められなかった。残核といえるようなものも存在せず、ほぼ剥片によって構成されていた。剥片の中には幅が10cmを超える大型片もみられるところからかなり大きな原石が持ち込まれていたようである。また加工できるような剥片も存在したが、加工剥片は僅かであった。ただ折断された剥片や砕片が多く出土しているため石器製作の場であったことは間違いあるまい。

二次加工剥片（１・10）　１は同一グリッド出土の接合資料である。約40cmの高低差をもって接合した。横長の剥片を素材としており、打点部にあたる右側縁を中心に加工が施される。裏面も打点部を削除するように整形されている。製作の途中で破損したか、意識的に折断したものであろうが、ナイフ形石器の製作を想定できる。右側縁は表裏から剥離されており削器のように使われたものであろう。10は表皮部の剥片で打点部を数回の剥離で整形している。その形状からは楔形石器としての機能も考えられる。

剥片（２～９・11～17）　２は同一グリッド出土の４点が接合したもので折断の見本ともいうべき資料となろう。折断後に左側面ではさらに剥離が施されている。３は横に広がった大型剥片で打点部から折っている。石器素材としては良好な剥片と思われるが加工の痕跡はみられない。７にみられる表面上部の剥離は敲打によるもので整形ではない。７～11には表皮部分が多くみられる。こうした剥片は概して成品に仕上げることは少ないようである。14は幅広の剥片を中央部から折断したものであり、裏面下部には微細な剥離が施されている。石器として使用したものであろう。17は接合したチャート製の小剥片であり、裏面には小さな剥離痕が認められる。だが使用という点では疑問も残る。

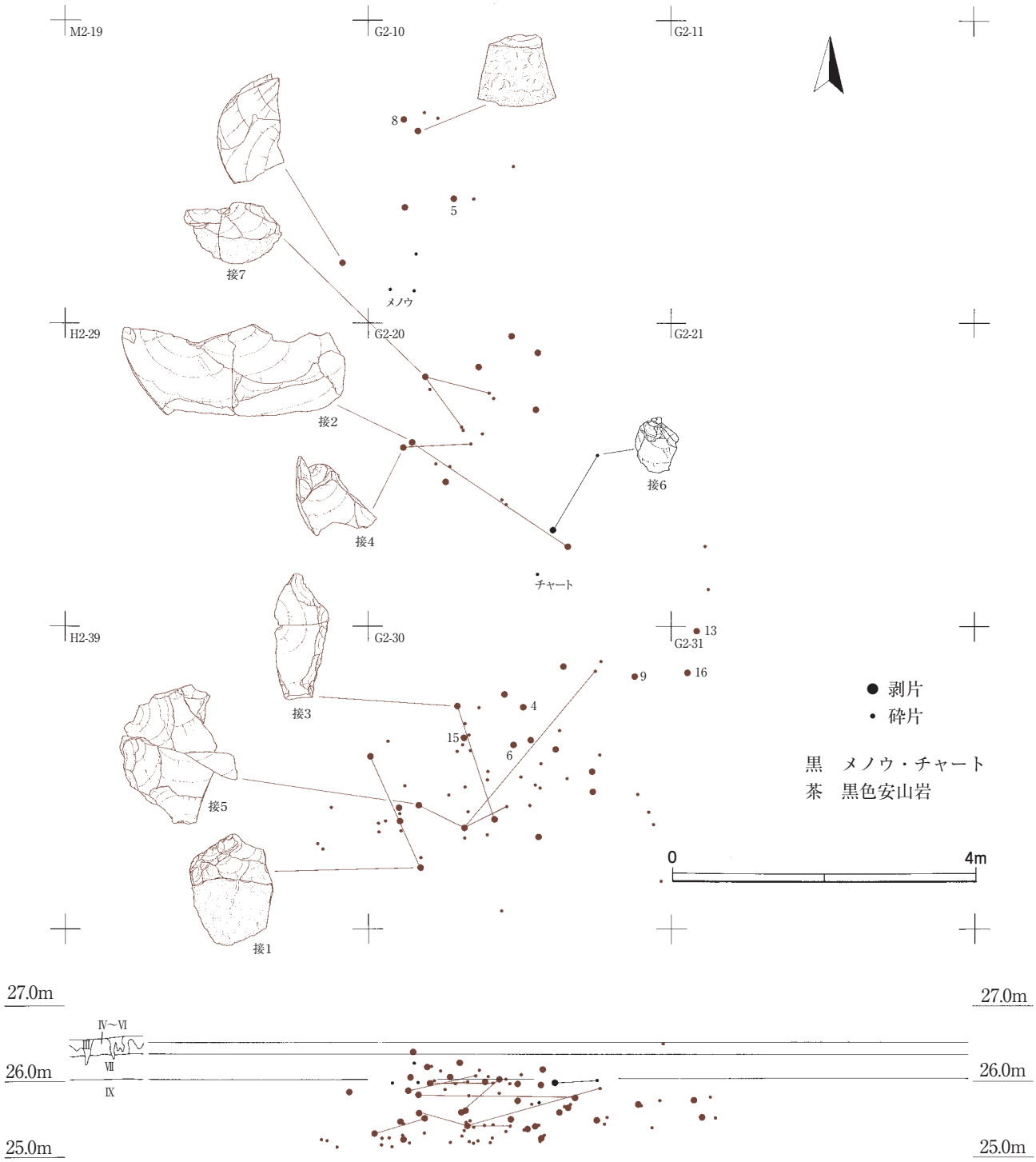
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　チャート３点　黒色安山岩93点　メノウ３点

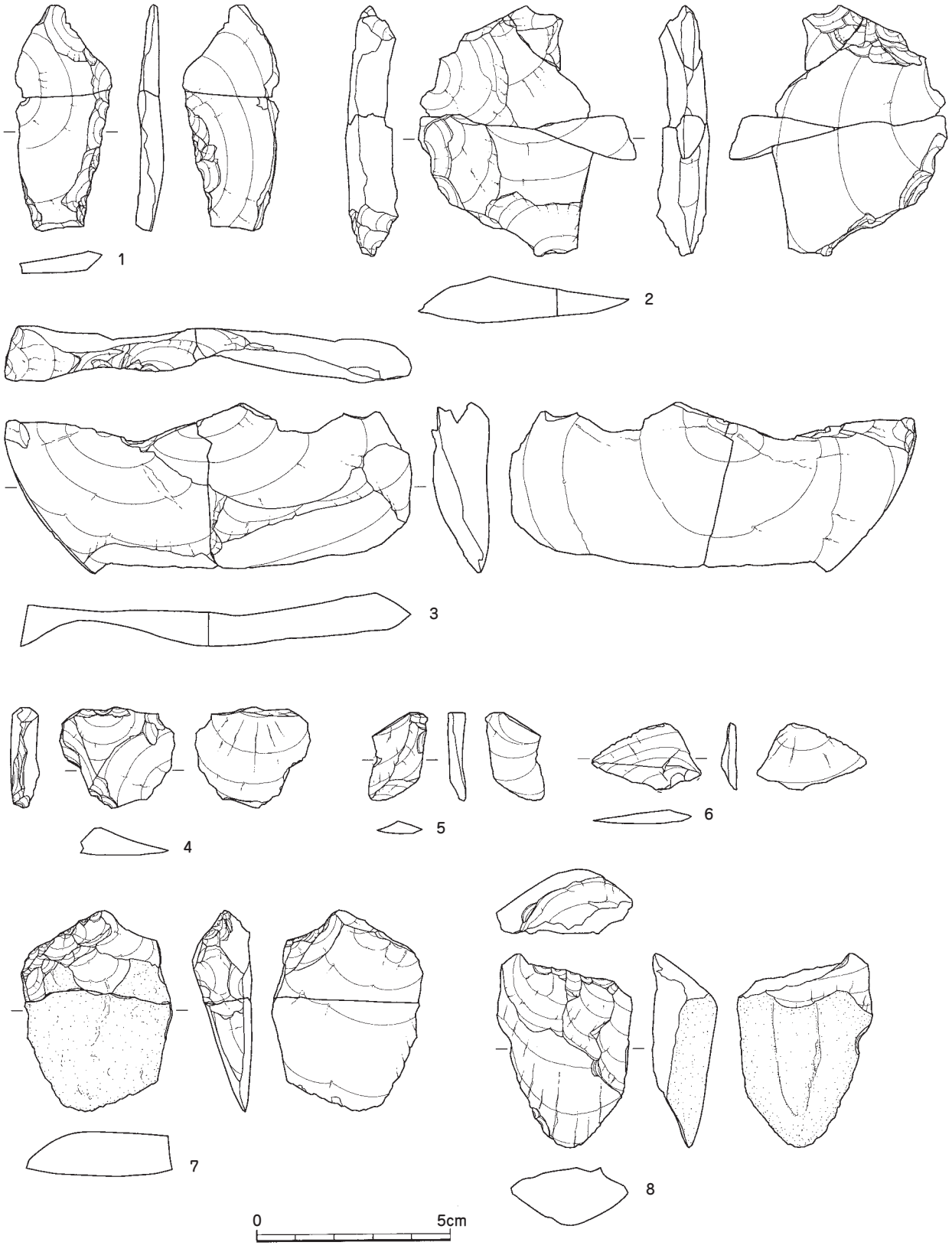
器種　二次加工剥片２（３）点　剥片36点　砕片60点　計99点

第72表　第15地点実測石器属性表

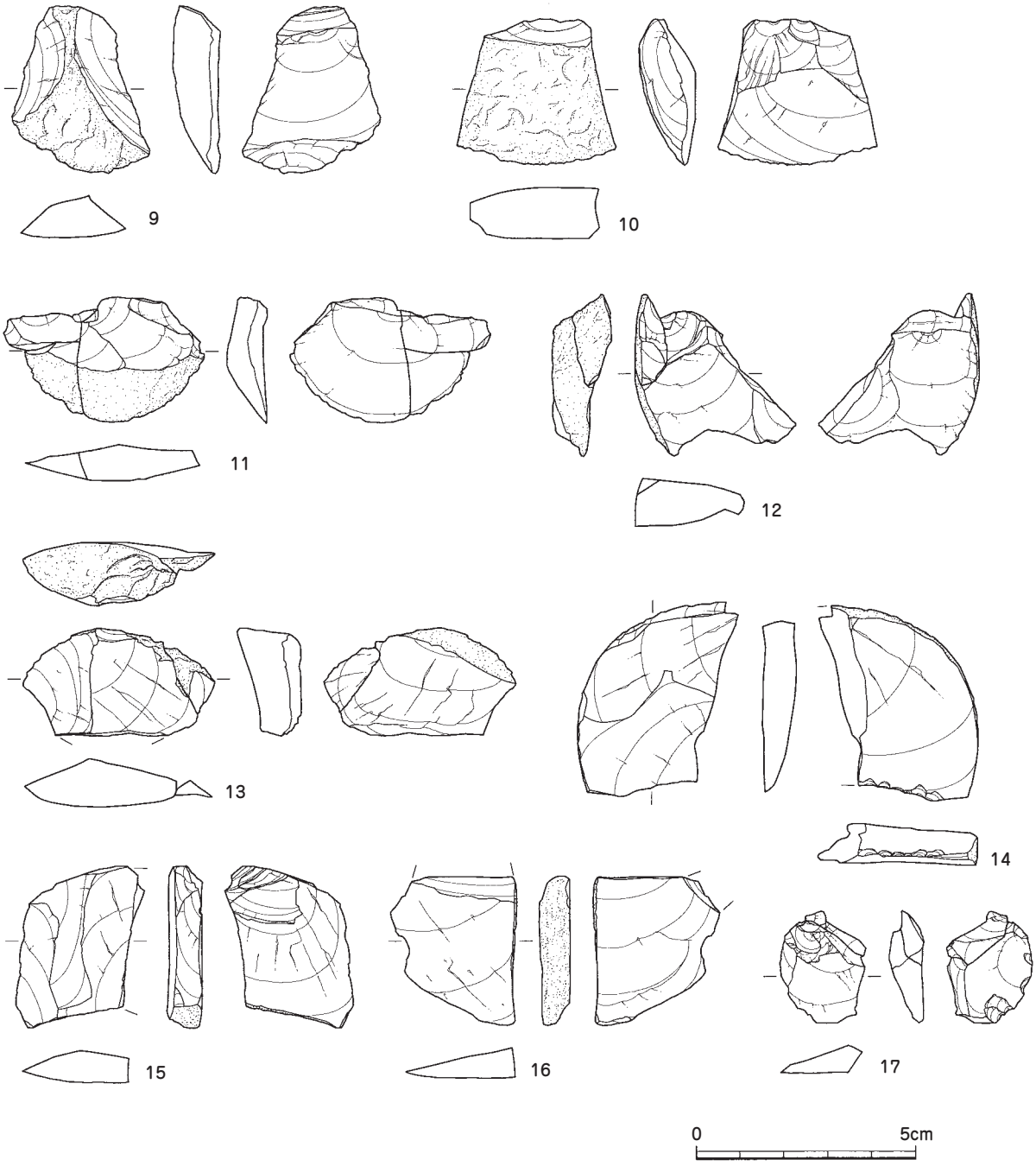
挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｇ２－30	1	25.675	二次加工剥片	黒色安山岩	2.40	3.46	0.57	6.23	接３	下端欠
	Ｇ２－30	23	26.081	二次加工剥片	黒色安山岩	2.52	2.35	0.30	2.01		
2	Ｇ２－30	24	25.459	剥片	黒色安山岩	3.00	4.30	1.10	12.02	接５	下端欠
	Ｇ２－30	29	25.500	剥片	黒色安山岩	1.35	1.50	0.30	0.57		
	Ｇ２－30	33	25.941	砕片	黒色安山岩	1.25	2.40	0.70	1.54		
	Ｇ２－30	39	25.440	砕片	黒色安山岩	1.35	1.65	0.70	1.35		
3	Ｇ２－20	17	25.824	剥片	黒色安山岩	4.50	5.50	1.10	27.89	接２	
	Ｇ２－20	21	25.885	剥片	黒色安山岩	5.30	3.80	0.90	20.09		
4	Ｇ２－30	6	25.470	剥片	黒色安山岩	2.70	2.90	0.75	5.62		
5	Ｇ２－10	6	26.294	剥片（小）	黒色安山岩	1.80	1.55	0.40	1.35		
6	Ｇ２－30	7	25.786	剥片（小）	黒色安山岩	1.70	2.40	0.40	1.32		
7	Ｇ２－30	27	25.579	剥片	黒色安山岩	5.20	3.80	1.30	29.80	接１	
	Ｇ２－30	41	25.354	剥片	黒色安山岩	2.55	1.50	0.45	3.01		
8	Ｇ２－10	12	26.118	剥片	黒色安山岩	5.15	3.35	1.60	25.40		
9	Ｇ２－30	34	25.750	剥片	黒色安山岩	3.70	3.10	1.05	10.59		



第182図　第15地点出土石器分布図



第183図　第15地点出土石器（1）



第184図　第15地点出土石器（2）

10	G 2 −10	11	26.255	二次加工剥片	黒色安山岩	3.40	3.70	1.10	15.72		
11	G 2 −20	6	26.017	砕片	黒色安山岩	1.05	2.05	0.60	1.16	接 7	半欠
	G 2 −20	8	26.015	剥片	黒色安山岩	2.90	2.85	0.80	8.11		
	G 2 −20	9	26.029	砕片	黒色安山岩	1.70	1.50	0.60	1.13		
12	G 2 −20	1	25.901	剥片	黒色安山岩	3.70	2.80	1.00	10.06	接 4	
	G 2 −20	4	26.088	砕片	黒色安山岩	0.80	1.80	0.70	1.14		
13	G 2 −31	2	25.550	剥片	黒色安山岩	3.70	4.00	1.25	14.11		下端欠
14	H 2 −19	1	25.934	剥片	黒色安山岩	4.80	2.90	0.90	16.20		半欠
15	G 2 −30	4	25.696	剥片	黒色安山岩	3.60	2.70	0.70	10.85		側欠
16	G 2 −31	1	25.781	剥片	黒色安山岩	3.40	2.80	0.70	8.25		
17	G 2 −20	14	26.066	砕片	チャート	2.00	2.45	0.85	3.22	接 6	
	G 2 −20	16	25.943	剥片	チャート						

第17節　第16地点（第185図・第186図、図版63）

概要　本地点は遺跡南西部の先端にみられる突出した台地上で検出された石器群である。約40m東には局部磨製石斧の一部や打製石斧をはじめとした豊富な石器群が出土した第14地点が所在する。ここでの石器群はO２－30グリッドで集中的に出土したため、調査区をさらに拡張して調査を続行した。しかし、石器の分布は広がらずO２－30グリッド周辺だけとなり、その分布はほぼ１グリッドに収まる程度のものであった。このため規模としては小さいものといえよう。出土層位は第Ⅴ層から第Ⅶ層となり、一部は第Ⅸ層にも包含されていた。しかし、本地点は斜面部でもあり、その主体は第Ⅴ層から第Ⅶ層の上面あたりとなろう。ここで出土した石器石材はすべて硬質頁岩のみによって構成されていた。単一の石材という点では後述する第18地点出土の石器群と共通する内容であり、出土層位も共通しているため時期的にも接近して営まれた地点と考えられる。

出土石器群　成品と認定できるものは唯一ナイフ形石器だけであった。二次加工の確認できる剥片も１点にとどまった。出土点数も少なかったため主な剥片は図示してみたが、石器素材となり得るような形状の整った剥片は数点しか見出せない。残核の類もみられなかったため、剥片剥離作業の場所ではなかったようである。おそらく良形の剥片を成品へと加工していた場所と考えられる。それを裏付けるかのように、砕片は30点と多く出土している。

ナイフ形石器（１）　完形品のナイフ形石器である。左側面は主剥離面の方向から整形した後に緻密な調整剥離を施している。また、背面となる右側縁では刃潰し加工を施しつつ、先端部付近では非常に微細な剥離をもって仕上げられている。基部の整形までもが丁寧に施され、小さな剥離により突起した部分を削除している。裏面での整形は皆無となっている。

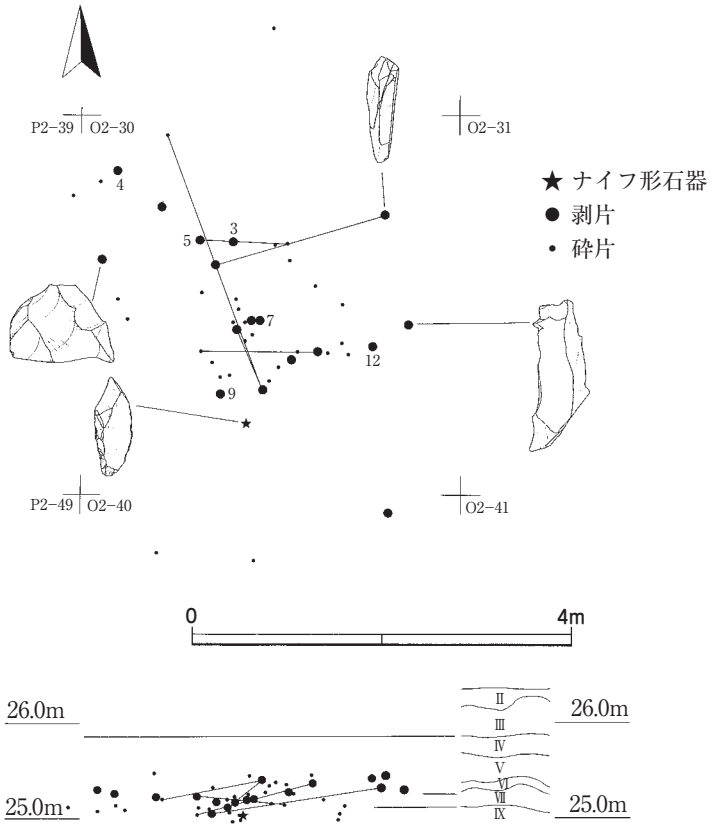
二次加工剥片（４・13）　４はやや厚手の縦長剥片であり、下端では表面方向から抉るような形で２～３回の剥離が加えられている。剥離面の風化も認められるため調査時のものではない。意識的な剥離と考えられる。石器製作には適した大きさと厚みを有した剥片である。13は断面が三角を呈した剥片である。これも同一グリッドから出土した剥片が接合したものであるが、図示では１点（O２－30－８）のみとなる。下端部が折断されており、右側面部では３回ほどの剥離が認められる。石器製作を目的とした剥片と考えて間違いあるまい。

剥片（２・３・５～13）　２は同一グリッドから出土した剥片が接合したものである。接合した裏面から２点の剥片は、石核から剥離された後に、さらに分割剥離されている。使用痕等は認められない。３は形の整った大型剥片で加工の痕跡はみられない。しかし右側縁部には刃こぼれ状の使用痕が下端部から中央部にまで認められる。明らかに石器として使用していたものであろう。５（剥片のみ図示）も同一グリッドから出土した２点の剥片が接合したものである。右側縁には微細な調整痕が認められる。６・８・10にみられる剥離痕は調査時に生じたものである。６の左側縁下端では明確な使用痕が認められる。11は3点の剥片と砕片が接合したものであり、石器製作時の整形剥離により剥離された剥片となろう。打点部には小さな剥離痕が多数観察できる。12は不整形な剥片であるが、側面にみられる大きな剥離痕から打面再生のため剥離された剥片と思われる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　硬質頁岩47点

器種　ナイフ形石器１点　二次加工剥片２点　剥片14点　砕片30点　計47点



第185図　第16地点出土石器分布図

第73表　第16地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	O 2 −30	13	25.056	ナイフ形石器	硬質頁岩	3.70	1.40	0.50	2.26		
2	O 2 −30	6	25.327	剥片	硬質頁岩	3.70	0.85	0.50	2.03	接 1	
	O 2 −30	11	25.066	剥片	硬質頁岩	2.70	0.70	0.40	0.78		
3	O 2 −30	18	25.137	剥片	硬質頁岩	6.40	3.90	1.70	34.26		
4	O 2 −30	15	25.265	二次加工	硬質頁岩	3.70	1.70	0.80	5.33		
5	O 2 −30	17	25.250	剥片	硬質頁岩	2.20	1.30	0.40	0.97	接 4	
	O 2 −30	37	25.154	砕片	硬質頁岩	1.60	1.50	0.30	0.85		
6	O 2 −30	27	25.307	剥片	硬質頁岩	5.60	1.90	0.50	4.78		
7	O 2 −30	3	25.423	剥片	硬質頁岩	1.80	1.70	0.55	1.58		
8	O 2 −30	21	25.313	剥片	硬質頁岩	2.80	3.90	0.65	7.12		
9	O 2 −30	24	25.198	剥片	硬質頁岩	2.90	1.80	0.30	1.18		
10	O 2 −40	3	25.459	剥片	硬質頁岩	2.20	3.90	0.50	3.80		
11	O 2 −30	16	25.413	剥片	硬質頁岩	2.23	3.50	0.53	3.16		
	O 2 −30	14	25.208	砕片	硬質頁岩	1.40	1.81	0.18	0.36		
	O 2 −30	31	25.178	剥片	硬質頁岩	1.60	2.30	0.28	0.78		
12	O 2 −30	7	25.437	剥片	硬質頁岩	2.80	2.50	0.60	4.50		
13	O 2 −30	8	25.366	二次加工	硬質頁岩	3.25	1.90	1.10	6.50		下端欠
	O 2 −30	12	25.055	剥片	硬質頁岩	1.37	2.09	0.31	1.13		

第186図　第16地点出土石器

第18節　第17地点（第187図・第188図、図版８・64）

概要　本地点は、第11地点と隣接するようにＥ３区のほぼ中央において検出された石器群である。確認調査時の試掘においてＥ３－55グリッドの第Ⅲ層下部から石器（８・10）の出土が確認されたため周辺域を拡張して調査を遂行していった。その結果、Ｅ３－44グリッドにおいても小範囲であったが石器群の出土が確認できた。石材についてみると、黒曜石が主体となり、次いで硬質頁岩が用いられていた。黒曜石は異物を含有するものと、半透明品の二種がみられた。後者はＥ３－55グリッドにおいて出土している。また、図示は略したが石英斑岩については被熱した礫片であり、凝灰岩は接合した剥片であった。レベルについては記載もれとなっている。

なお、Ｅ３－44・54グリッドについてのレベルに記載漏れが生じてしまったが、調査中の記録では層序的に同一の出土層となっていた点と両地点で出土した黒曜石の石質（異物含有）が共通していたため同時期の所産と考えられたため合わせて本地点とした。

出土石器群　出土総数は39点と少ないため小規模なものであった。成品としてはナイフ形石器と掻器が出土している。いずれも典型的なものとはいえないが一応の加工は施されていた。また硬質頁岩製の８と９～13は、その石質から前者は第11－７地点の16、後者は同15（ナイフ形石器）と酷似していた。そのため本地点の東に位置する第11地点との関連を示唆する資料とも考えられたが出土層位に高低差が認められるため時期的には異なるようである。

ナイフ形石器（８）　光沢を有しない硬質頁岩製で、小型の縦長剥片を素材としたものである。打点部と裏面での加工はみられない。背面となる右側面では先端部にまで調整で整形されている。右側縁は剥離された状態のまま加工の痕跡は認められない。簡単な作りで刃部らしき部分ははっきりしないがナイフ形石器と分類できるものであろう。

掻器（２）　打面再生により得られた剥片を素材としたものと思われる。そのためか左側面には小さな剥離痕が目立つ。刃部は打点部に設定され、周囲を表裏面から簡単に整形及び調整剥離を加えて作出したもので丁寧な作りとはいえない。その形状から掻器として使われたものと思われる。石材は、他の黒曜石とは異なり半透明のガラス質を呈した良品である。

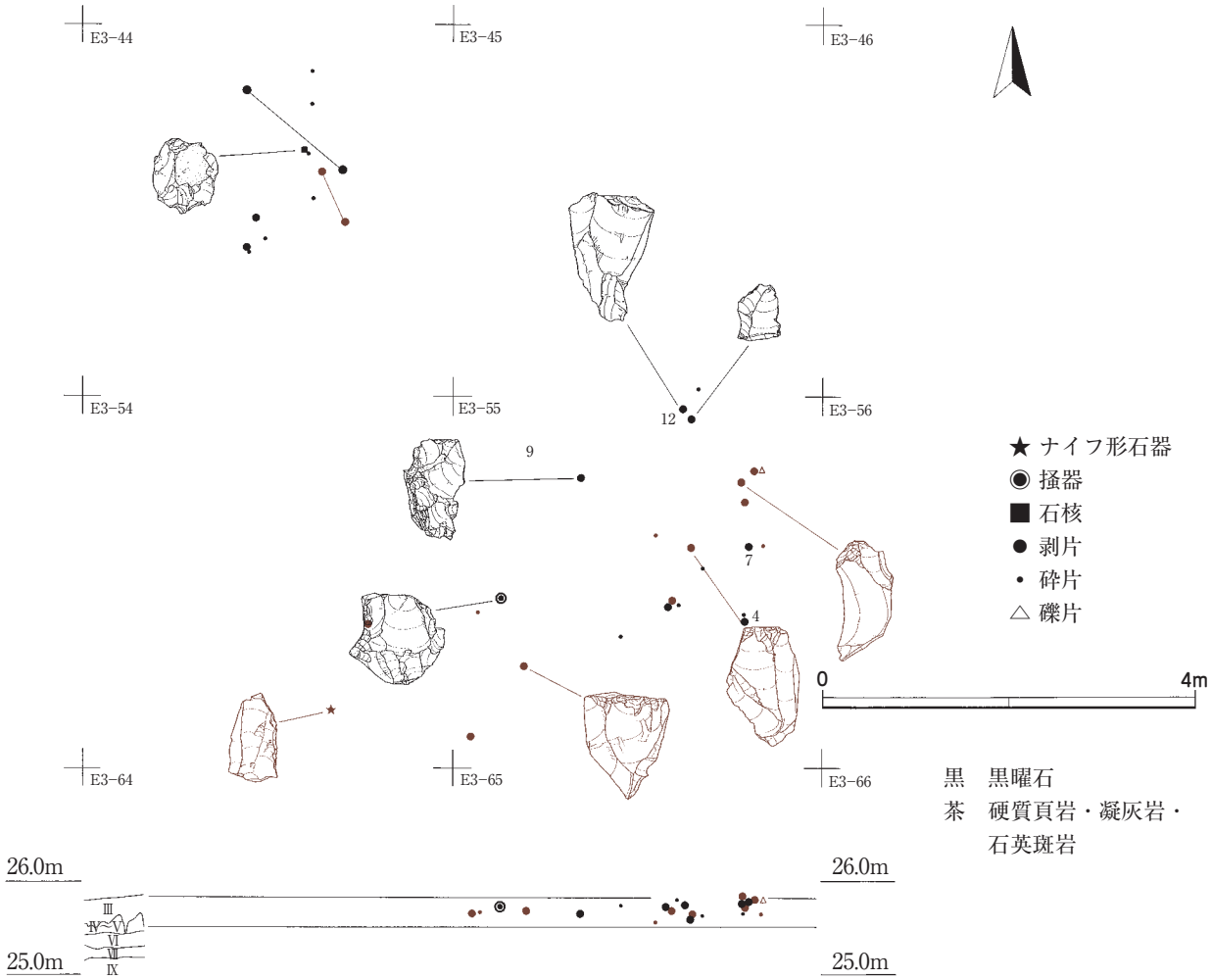
剥片（３～７・９～13）　３・４は２と同質の石材である。３は右側縁に微細な剥離痕が認められ石器としての使用を思わせる。４は下端部が折断された縦長の剥片である。５は右上部に微細な調整痕と使用痕が認められるが、微細な剥離は調査時のものである。６は薄く剥離された縦長の剥片で形状が整っている。左の側縁には石器としての使用を物語る刃こぼれ痕が顕著にみられる。７は幅広な剥片で表面には２mm～４mmほどの小石の付着が認められる。９は三角形を呈した剥片で裏面右には微細な調整痕が認められる。石器として使用するには適当な剥片となろう。11の下端部でも僅かながら同様の痕跡がみられる。13は石器製作に適した剥片といえようが加工の痕跡は認められない。なお９～13の硬質頁岩には斑模様がみられるため同一の母岩から剥取された剥片と考えられた。しかし接合例はみられなかった。

石核（１）　一部に自然面が残された黒曜石で白色の鉱物や小石を含有する。そのためかきれいな剥離面は存在しない。本地点ではこの種の黒曜石が主体を占めていた。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石24点　硬質頁岩12点　凝灰岩２点　石英斑岩１点

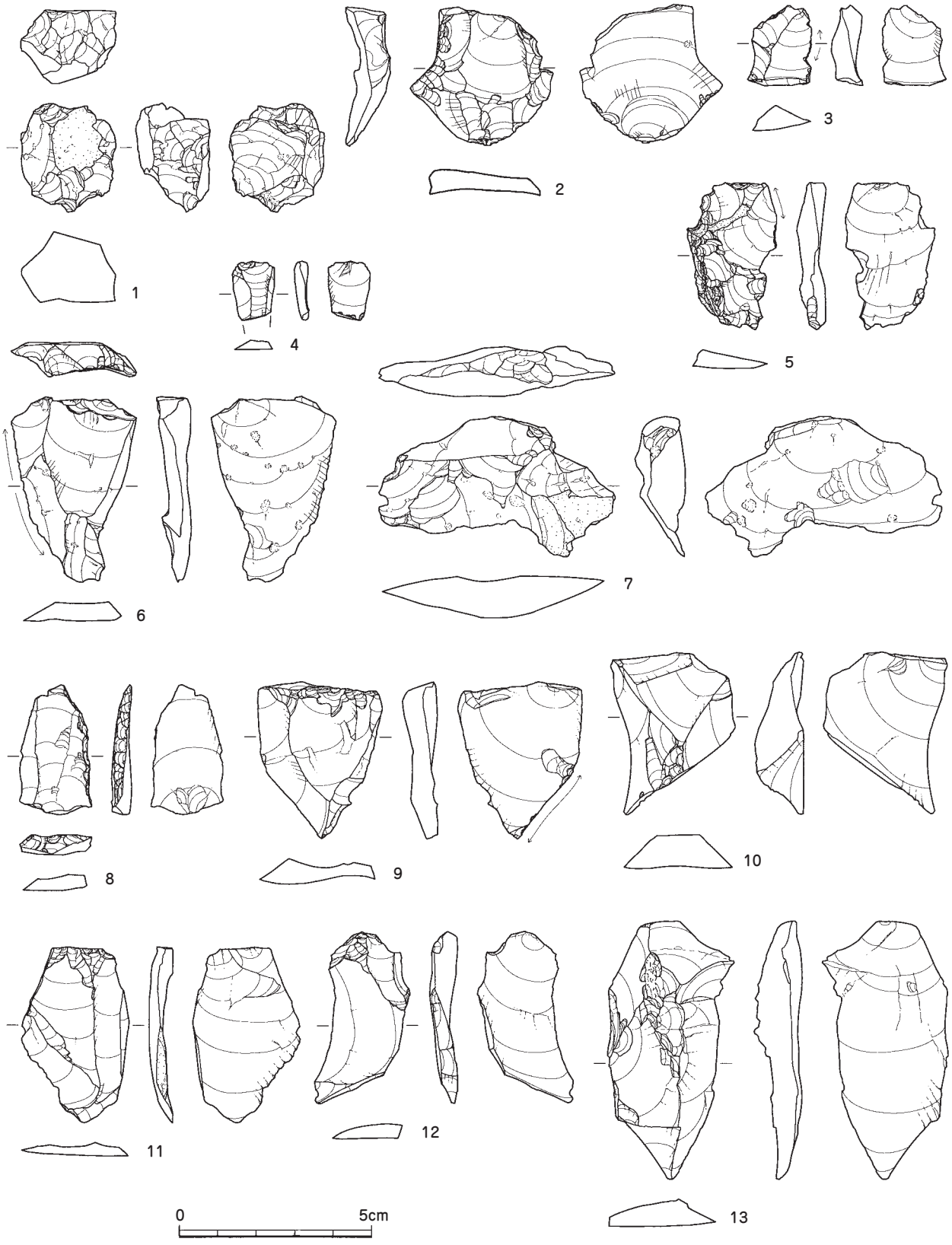
器種　ナイフ形石器１点　掻器１点　剥片20点　砕片15点　石核１点　礫片１点　計39点



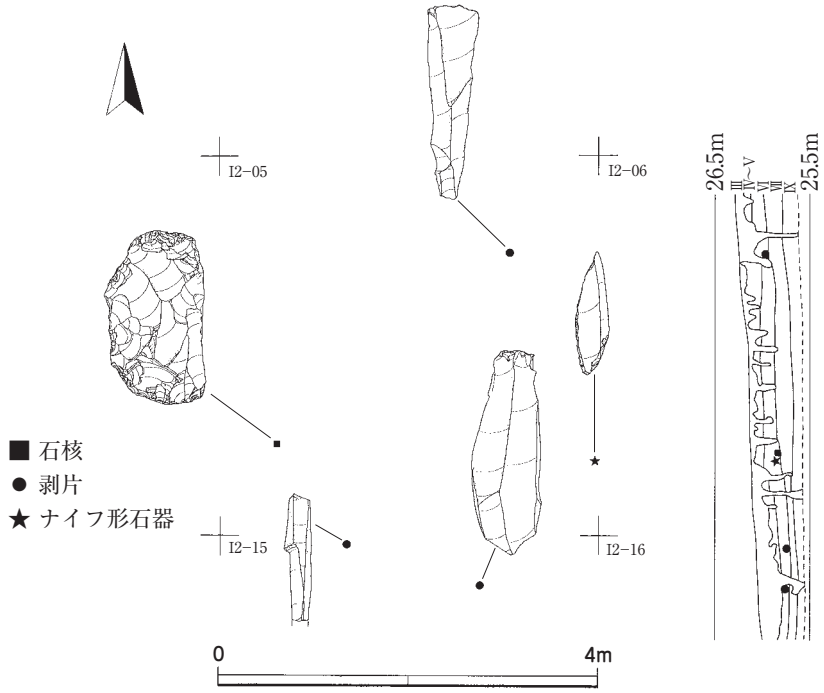
第187図　第17地点出土石器分布図

第74表　第17地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	E３−44	5	−	石核	黒曜石	2.70	2.50	1.90	13.09		
2	E３−55	15	25.723	掻器	黒曜石	3.70	3.50	0.50	8.70		打面再生片
3	E３−55	2	25.583	剥片	黒曜石	2.10	1.60	0.70	1.83		
4	E３−55	12	25.723	剥片	黒曜石	1.50	1.10	0.25	0.58		
5	E３−55	1	25.623	剥片	黒曜石	3.80	2.30	0.60	5.00		
6	E３−55	3	25.733	剥片	黒曜石	4.80	3.10	0.70	9.27		
7	E３−55	7	25.773	剥片	黒曜石	3.60	6.10	1.30	16.89		
8	E３−54	2	−	ナイフ形石器	硬質頁岩	3.40	1.90	0.45	3.31		
9	E３−55	17	25.653	剥片	硬質頁岩	4.10	3.20	0.80	8.24		
10	E３−54	1	−	剥片	硬質頁岩	4.05	3.00	1.10	11.61		
11	E３−55	9	25.601	剥片	硬質頁岩	4.60	2.70	0.40	5.64		
12	E３−55	5	25.811	剥片	硬質頁岩	4.40	2.00	0.40	4.77		
13	E３−55	18	25.606	剥片	硬質頁岩	6.70	2.90	1.10	19.64		



第188図　第17地点出土石器



第189図　第18地点出土石器分布図

第19節　第18地点（第189図・第190図、図版64）

概要　本地点は台地中央部の南に位置し、東西に第15地点と第13地点が存在する。石器出土地点はやや斜面部にかかるＩ２－05・15グリッドから硬質頁岩製の石器と剥片が５点出土した。極めて小規模な地点であったが、その内容は典型的な石刃を素材とした石器群であった。出土層位はほぼ第Ⅵ層となり、石材は硬質頁岩のみで構成されていた。こうした点からも第16地点の石器群と時期的に近いものと考えられる。

出土石器群　成品としては優美なナイフ形石器が出土している。他は剥片であり、石刃技法による縦長の剥片が特徴的である。また小剥片や砕片の出土が皆無であったため本地点周辺では石器製作はおこなわれていないものと思われる。

ナイフ形石器（１）　縦長の剥片を素材とし柳葉形に仕上げられた完形品である。背面では基部から先端部に至るまで丁寧な調整が施されている。その形状から槍先を想起させる優美な成品である。

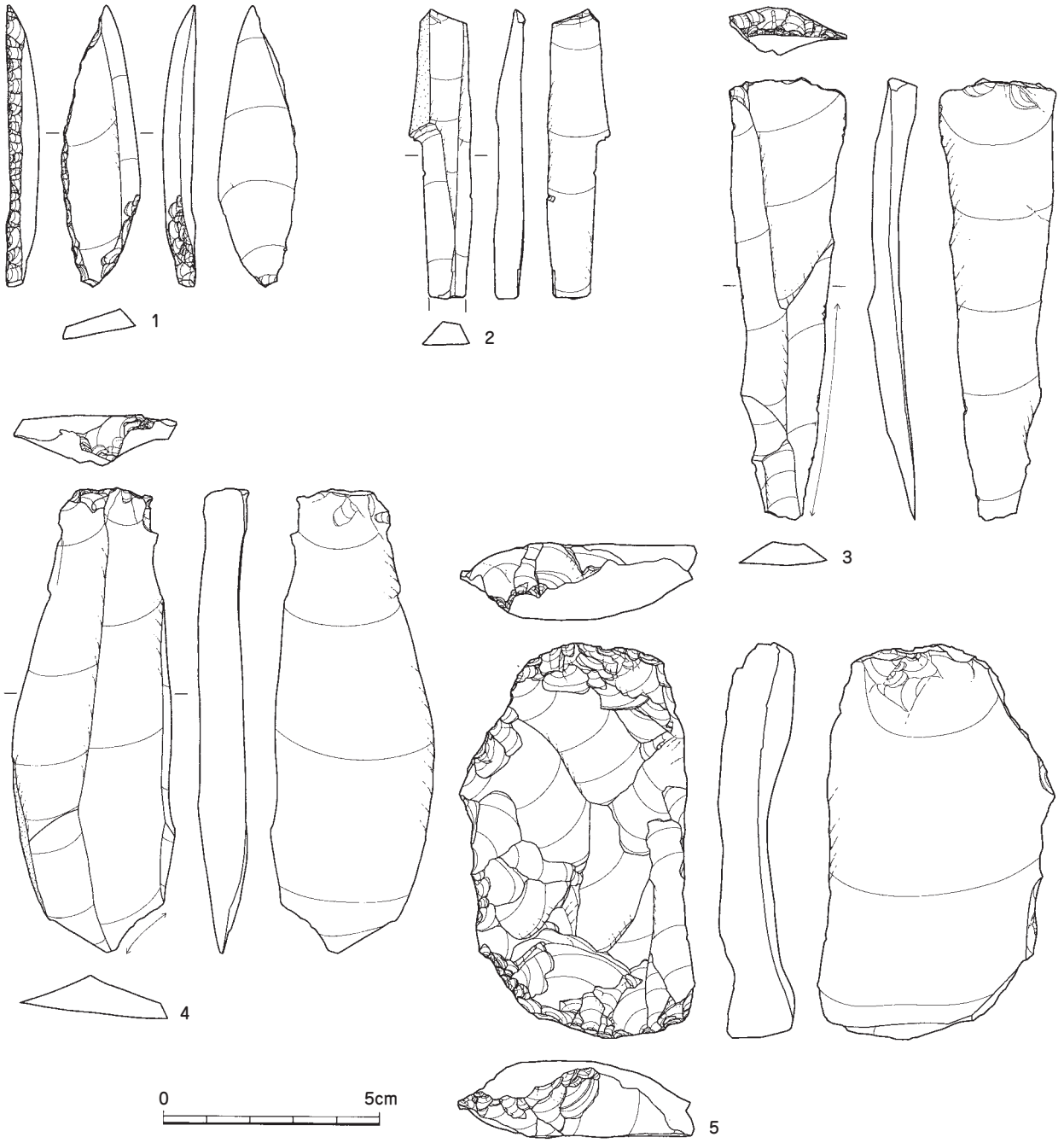
剥片（２～４）　２の左側面に若干自然面が残る。両端を折断されているが使用の痕跡はみられない。３は打面部に顕著な調整痕がみられる。剥離角はほぼ80°を計測する。特に加工された痕跡は認められないが、右側縁部に刃こぼれ痕が観察できる。おそらく石器として使用されたものであろう。４も垂直に近い角度で剥離された石刃状剥片である。下端部には僅かながら刃こぼれ状の痕跡が認められる。

石核片（５）　打面再生のために剥離された大型剥片である。表面は縦横に剥離痕がみられる。打面の調整は頻繁におこなわれていたようである。また表裏面では自然面が認められないことから原石はかなり大きかったものと推測できる。右側縁では僅かながらが使用痕らしき痕跡が残されているため石器としても使用されていたものと思われる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　硬質頁岩５点

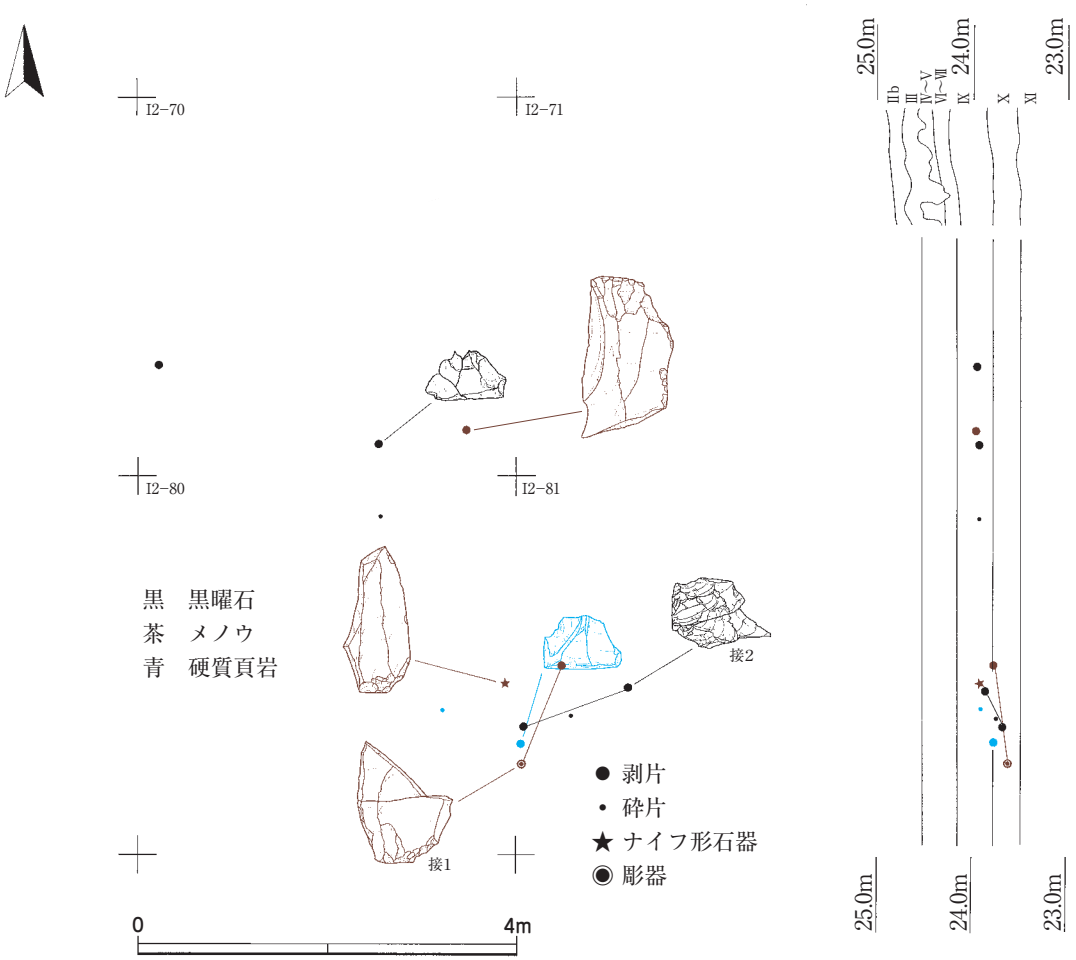
器種　ナイフ形石器１点　剥片３点　石核１点　計５点



第190図　第18地点出土石器

第75表　第18地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ⅰ5－05	2	25.895	ナイフ形石器	硬質頁岩	6.60	1.80	0.50	6.74		
2	Ⅰ2－15	1	25.740	剥片	硬質頁岩	6.70	1.50	0.50	5.76		石刃
3	Ⅰ2－05	3	25.955	剥片	硬質頁岩	10.30	2.70	0.75	17.09		石刃
4	Ⅰ2－15	2	25.770	剥片	硬質頁岩	10.25	3.70	1.10	40.20		石刃
5	Ⅰ2－05	1	25.805	石核片	硬質頁岩	9.10	5.20	1.50	84.00		打面再生



第191図　第19地点出土石器分布図

第20節　第19地点（第191図・第192図、図版64）

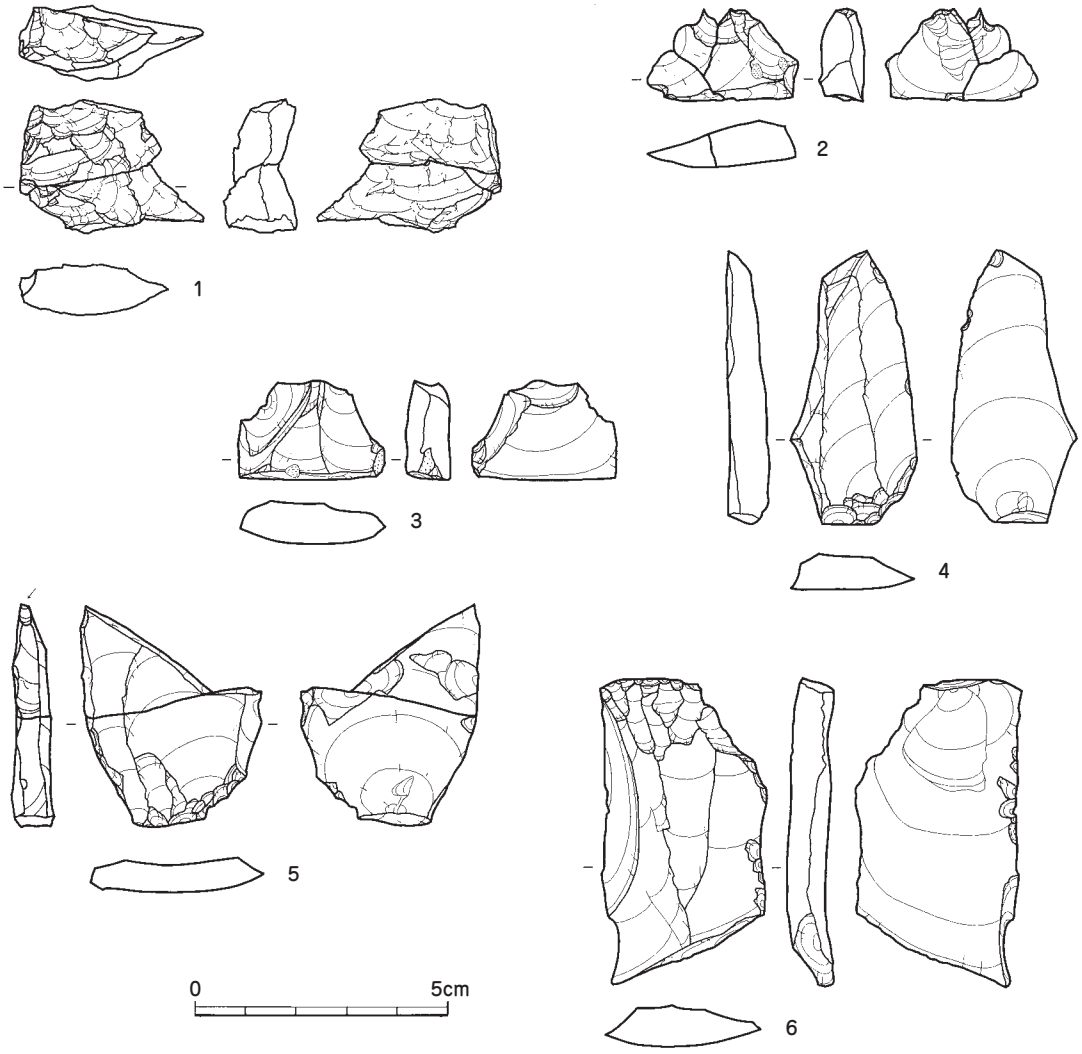
概要　本地点は台地の南端斜面部に所在し、前述した第18地点の南西に位置する。出土層位は斜面部ということもあり第Ⅸ層～第Ⅹ層となっているが、本来の包含層は第Ⅶ層～第Ⅸ層として捉えることができよう。石材は黒曜石・珪質岩・メノウによって構成されており、特にメノウは濁った淡黄色を呈していた。なお、確認調査時に出土した１点はおおよその位置は把握できたものの正確な標高は記録できなかったため出土状況図では削除した。

出土石器群　ナイフ形石器と彫器が出土しており、砕片は僅少であった。ここでも石器の製作という点では顕著なものではなかったようである。

ナイフ形石器（４）　形状の整った縦長剥片を素材としており、右側縁の基部を数回剥離したのみで成品としている。刃部となる右側縁には顕著な刃こぼれ痕が観察できる。一方、背面に該当する左側面では整形の痕跡はまったく認められない。

彫器（５）　折断された剥片２点が接合したもので、側面と裏面に若干の加工が認められる。三角形を呈した上部の剥片では左側縁上方からの加撃痕が認められるため彫器と認定した。

剥片（１～３・６）　１・２は接合した黒曜石の剥片で小石等の異物を多く含有している。３は折断された上部片であり加工等はみられない。６は縦長剥片の下半部が折断されたもので、右側縁には微細な剥離痕が認められる。石器として使用されたものであろう。器面の色調は４のナイフと同様に乳白色を呈して



第192図　第19地点出土石器

おり同一母岩から剥離されたものと考えられた。

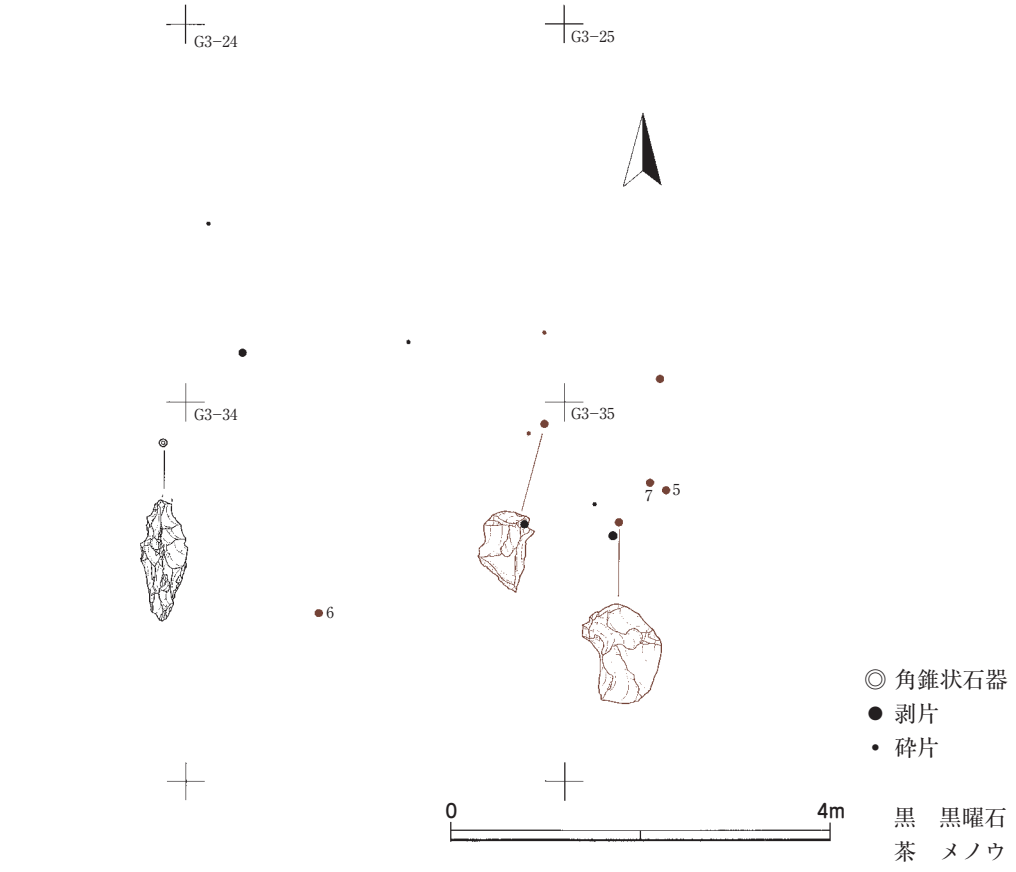
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石７点　硬質頁岩１点　メノウ４点　珪質岩１点

器種　ナイフ形石器１点　彫器１点　剥片８点　砕片３点　計13点

第76表　第19地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ⅰ２－81	2	23.870	剥片	黒曜石	1.80	2.70	0.80	4.41	接２	
	Ⅰ２－81	4	23.683	剥片	黒曜石	1.40	2.50	1.20	4.99		
2	Ⅰ２－70	2	23.943	剥片	黒曜石	1.80	3.00	0.80	4.08		
3	Ⅰ２－81	5	23.778	剥片	硬質頁岩	1.90	2.80	0.80	5.50		
4	Ⅰ２－80	2	23.880	ナイフ形石器	メノウ	5.30	2.40	0.70	9.90		
5	Ⅰ２－81	1	23.780	剥片	メノウ	2.50	3.40	0.50	7.86	接１	下端欠
	Ⅰ２－81	6	23.600	彫器	メノウ	2.25	2.50	0.60	3.54		上下端欠
6	Ⅰ２－70	3	23.962	剥片	メノウ	5.90	3.10	0.80	19.76		下端欠



第193図　第20地点出土石器分布図

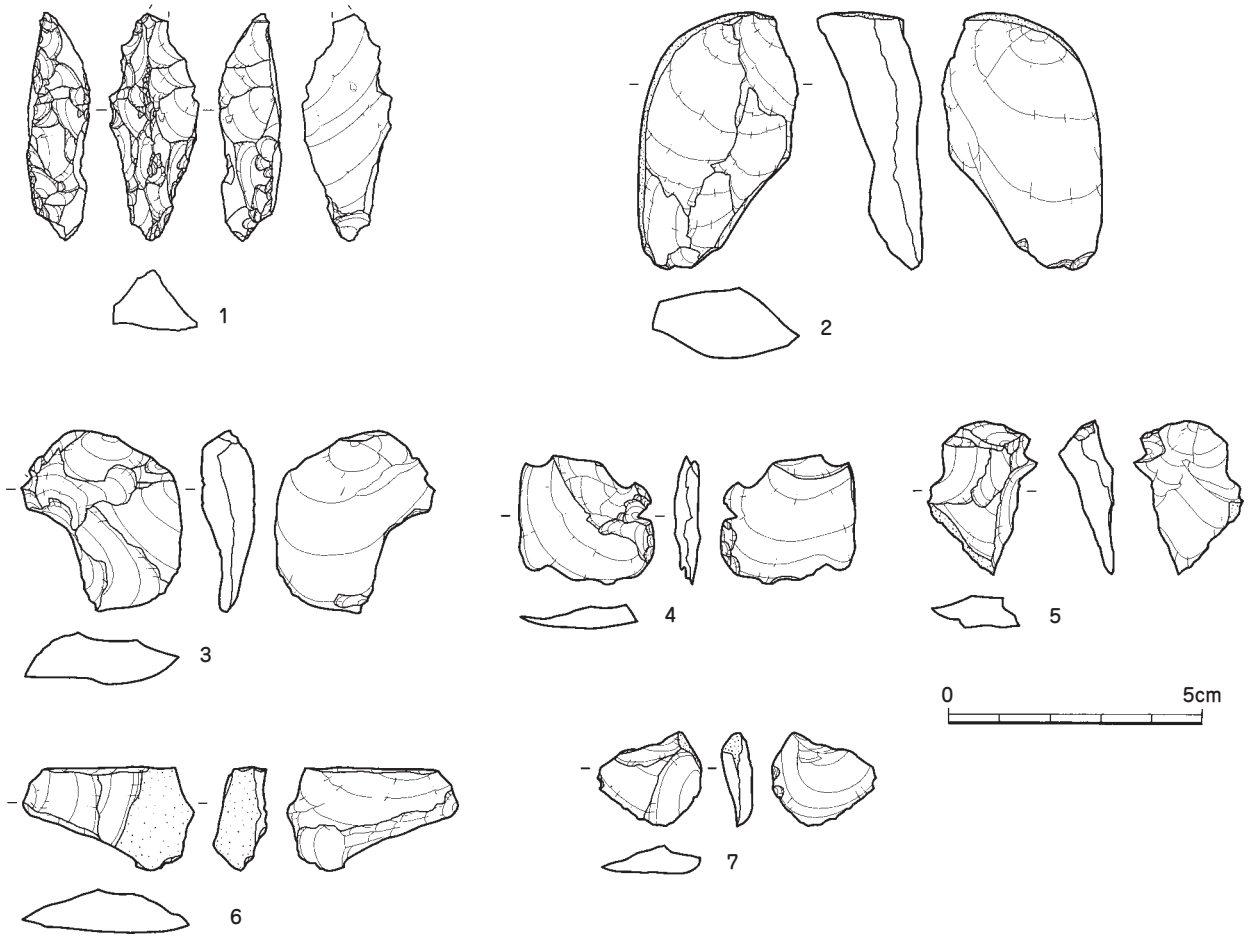
第21節　第20地点（第193図・第194図、図版８・64）

概要　本地点は第15地点の北に位置し、Ｇ３－34・35グリッドとその周辺において疎らに出土した小規模な石器群である。出土層位は第Ⅲ層から第Ⅳ・Ⅴ層となろう。石材はメノウと黒曜石を主体とした構成であった。

出土石器群　成品としては角錐状石器が１点出土しただけで、他は剥片類であった。ただ角錐状石器の出土層位は第Ⅲ層中となり、メノウや黒曜石の剥片類と層序的に必ずしも一致するものではないが同一地点から出土したためにここに含めた。

角錐状石器（１）　先端の一部を欠損するが、側縁を整形することにより背高のある断面三角形に仕上げている。側縁部の整形は概して粗い。

剥片（２～７）　２はグリッド一括品として取り上げられたものである。明らかに旧石器時代に属する剥片のため本地点に含めた。自然面を少し残した縦長の剥片で石器素材としては十分といえよ



第194図　第20地点出土石器

う。加工は認められない。３～７はメノウ製の剥片であり、６は剥片としたが左の側縁が加撃されており楔形石器として使用された可能性もある。若干磨耗痕らしき痕跡を残す。他の剥片では加工等は認められない。

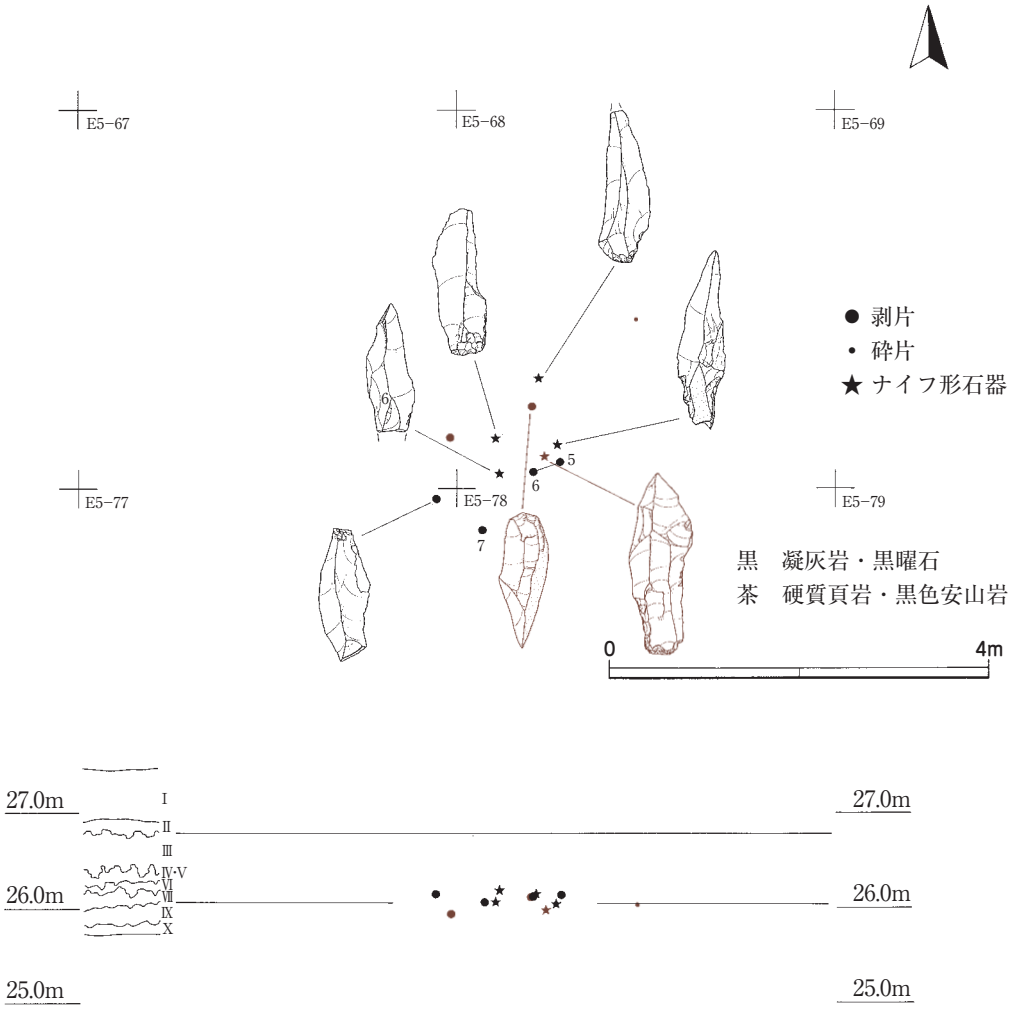
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石７点　黒色安山岩１点　メノウ８点

器種　角錐状石器１点　剥片７点　砕片８点　計16点

第77表　第20地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	G３－33	1	26.810	角錐状石器	黒曜石	4.40	1.70	1.20	7.03		先端欠
2	G３－25	4	－	剥片	黒色安山岩	5.30	3.10	1.40	24.23		
3	G３－35	2	26.368	剥片	メノウ	3.15	3.40	0.90	9.10		
4	G３－34	4	26.395	剥片	メノウ	2.60	2.40	0.50	2.82		
5	G３－35	4	26.405	剥片	メノウ	2.90	1.70	0.75	3.43		
6	G３－34	1	26.425	剥片	メノウ	2.00	3.40	0.90	5.25		下端欠
7	G３－35	3	26.447	剥片	メノウ	1.90	1.70	0.55	1.41		



第195図　第21地点出土石器分布図

第22節　第21地点（第195図・第196図、図版65）

概要　本地点は第11地点の北西に位置し、Ｅ５－68・78グリッドとその周辺において出土した小規模な石器群である。出土層位は概ね第Ⅶ層中～下部となる。石材についてみると、凝灰岩が主体となり、次いで黒曜石や黒色安山岩などで構成されていた。とりわけ凝灰岩は風化面が灰白色で内部は黒色に近い色彩を呈した特異な石質である。

出土石器群　きれいな縦長剥片を素材とした簡素な作りのナイフ形石器が５点出土しており、剥片も石刃状に剥離されている点が特徴的といえよう。石核は出土せず、砕片類は僅少であった。

ナイフ形石器（１～３・８・９）　１は先端部が若干欠損している。加工は基部となっている打点部の両側縁を数回の剥離で整形し成品とする。２も同様に基部付近を整形後に表裏に簡単な調整を施し成品に仕上げている。３は右側縁下部に僅かな調整を加えるのみであるが成品と見做した。８は硬質頁岩製の完形品であり、これも基部周辺に軽く調整剥離を施し成品に仕上げている。９の色調は漆黒を呈した良質の黒曜石を採用した完形品で一部に自然面を残す。打点部を削除すると同時に整形して基部を形作る。基部での整形は両側縁にみられるが比較的簡単にすませている。また先端部両側縁では刃こぼれ痕がみられる。

剥片（４～７・10・11）　４はナイフ形石器とも考えられるが、打点部付近を調査時に損傷しており剥離が確認できないため剥片とした。５・６の接合図は省略したが、５の表面と６の裏面が接合する。ともに

第196図　第21地点出土石器

下部は折断されているが使用の痕跡は認められない。７も加工の痕跡は認められない。10は半透明の黒曜石であり微細な異物を含有する。折られた剥片の下半部であり、右側縁に刃こぼれ痕、裏面下端に若干調整痕が認められる。11は加工の痕跡を認めることができないため剥片とした。右側面には自然面を残しており、形状はナイフ形石器そのものである。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石３点　チャート１点　黒色安山岩３点　凝灰岩７点

器種　ナイフ形石器５点　剥片５点　砕片４点　計14点

第78表　第21地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｅ５－68	3	26.136	ナイフ形石器	凝灰岩	5.70	1.70	0.70	6.15		
2	Ｅ５－68	5	26.061	ナイフ形石器	凝灰岩	5.40	1.80	0.70	5.48		
3	Ｅ５－68	9	26.195	ナイフ形石器	凝灰岩	4.80	1.70	0.70	4.74		
4	Ｅ５－77	1	26.150	剥片	凝灰岩	5.00	1.90	0.70	5.48		
5	Ｅ５－68	7	26.110	剥片	凝灰岩	4.20	1.50	0.60	3.52		
6	Ｅ５－68	8	26.123	剥片	凝灰岩	3.70	1.85	0.52	2.82		
7	Ｅ５－78	1	26.052	剥片	凝灰岩	3.60	0.90	0.40	0.98		
8	Ｅ５－68	10	25.940	ナイフ形石器	硬質頁岩	6.80	2.20	0.70	9.01		
9	Ｅ５－68	6	26.016	ナイフ形石器	黒曜石	6.70	1.80	1.15	8.89		
10	Ｅ５－68	1	26.232	剥片	黒曜石	2.40	1.60	0.50	1.13		
11	Ｅ５－68	4	26.075	剥片	黒色安山岩	5.05	1.70	0.80	7.02		

第23節　第22地点（第198図、図版65）

概要　本地点は第11地点の東に位置しており、Ｃ４－12・20・30・42グリッドから２点ないし３点ずつ出土し、その他はＢ４区の西側にみられた。特に遺物が集中するということはなかった。出土層位は第Ⅱ層の下部から第Ⅲ層上部であったため、遺物は包含層出土の一括品として取り上げた。そのため石器のみの提示とした。またＢ４区では縄文早期の撚糸文・沈線文系の土器群が出土しているため時期的には縄文期の所産となる可能性も捨てきれない。石材についてみると、チャートが主体となり、次いで黒曜石や黒色安山岩で構成されている。後述するように縄文草創期の石器類ではチャート製の成品もみられ、本章で扱ったため旧石器時代の遺物の項に含めて報告することとした。

出土石器群　側縁に簡単な抉りを入れ錐としての機能を有するものが１点みられた。しかし定型的な成品にまで加工された石器は認められず、二次剥離を施した剥片や微細な調整痕を残す剥片が若干存在している程度であり確実に所属時期を決定できるような成品はみられなかった。

錐（１）　下端部に左右から抉りを入れ鋭利な突起部を作出している。また右側縁には刃こぼれ状の使用痕が認められる。

剥片（２～６）　２は打面再生のために剥離された剥片と思われる。表面は自然面となっている。一部に刃こぼれ状の痕跡が認められる。３は下端部を調整剥離により丸く加工している。おそらく掻器様の石器として使用したものであろう。５・６にも微細な剥離が施されている。

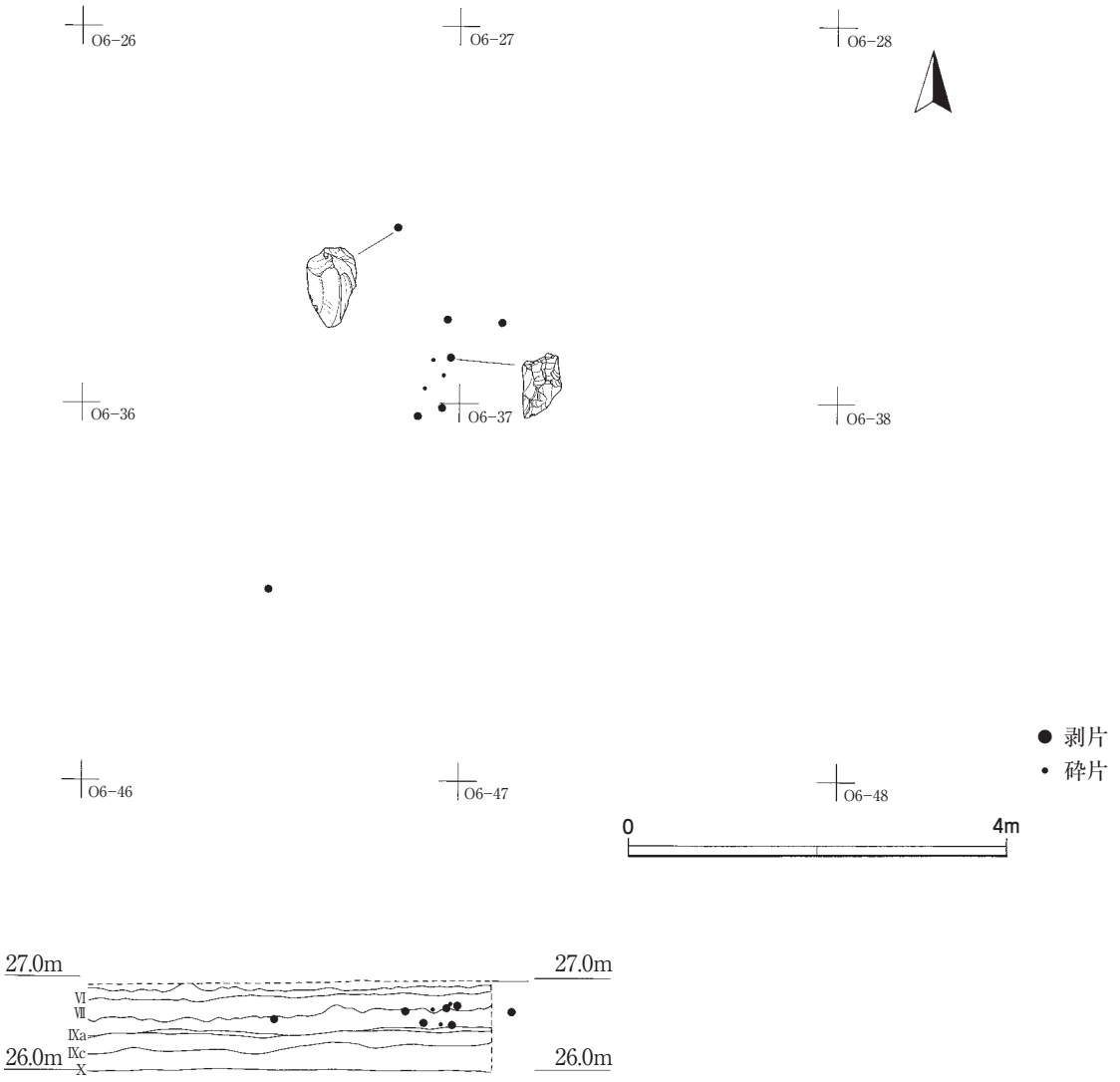
石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石６点　チャート21点　砂岩３点　黒色安山岩１点

器種　錐１点、剥片18点　砕片12点　計31点

第79表　第22地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	Ｂ４－42	2	－	錐	チャート	5.65	3.25	1.76	25.92		
2	Ｂ４－31	1	－	剥片	チャート	5.18	3.43	1.45	18.01		
3	Ｂ４－31	2	27.120	剥片	チャート	2.90	2.75	0.60	3.18		
4	Ｂ４－30	2	27.134	剥片	チャート	2.73	2.68	0.90	6.08		
5	Ｂ４－42	5	27.044	剥片	黒曜石	2.31	1.28	7.60	1.82		
6	Ｂ４－40	2	27.111	剥片	チャート	1.65	3.35	0.69	3.93		



第197図　第23地点出土石器分布図

第24節　第23地点（第197図・第198図、図版65）

概要　本地点は第１地点の南に位置し、Ｏ６－26グリッドの南東隅を中心にＯ６－27・36グリッドで合計10点が出土した。成品は認められず剥片・砕片のみで構成されていた。出土層位は概ね第Ⅶ層となり、一部は第Ⅸ層から出土している。石材は黒曜石のみの構成であり、半透明の良質品であった。おそらく同一母岩から剥離されたものであろう。

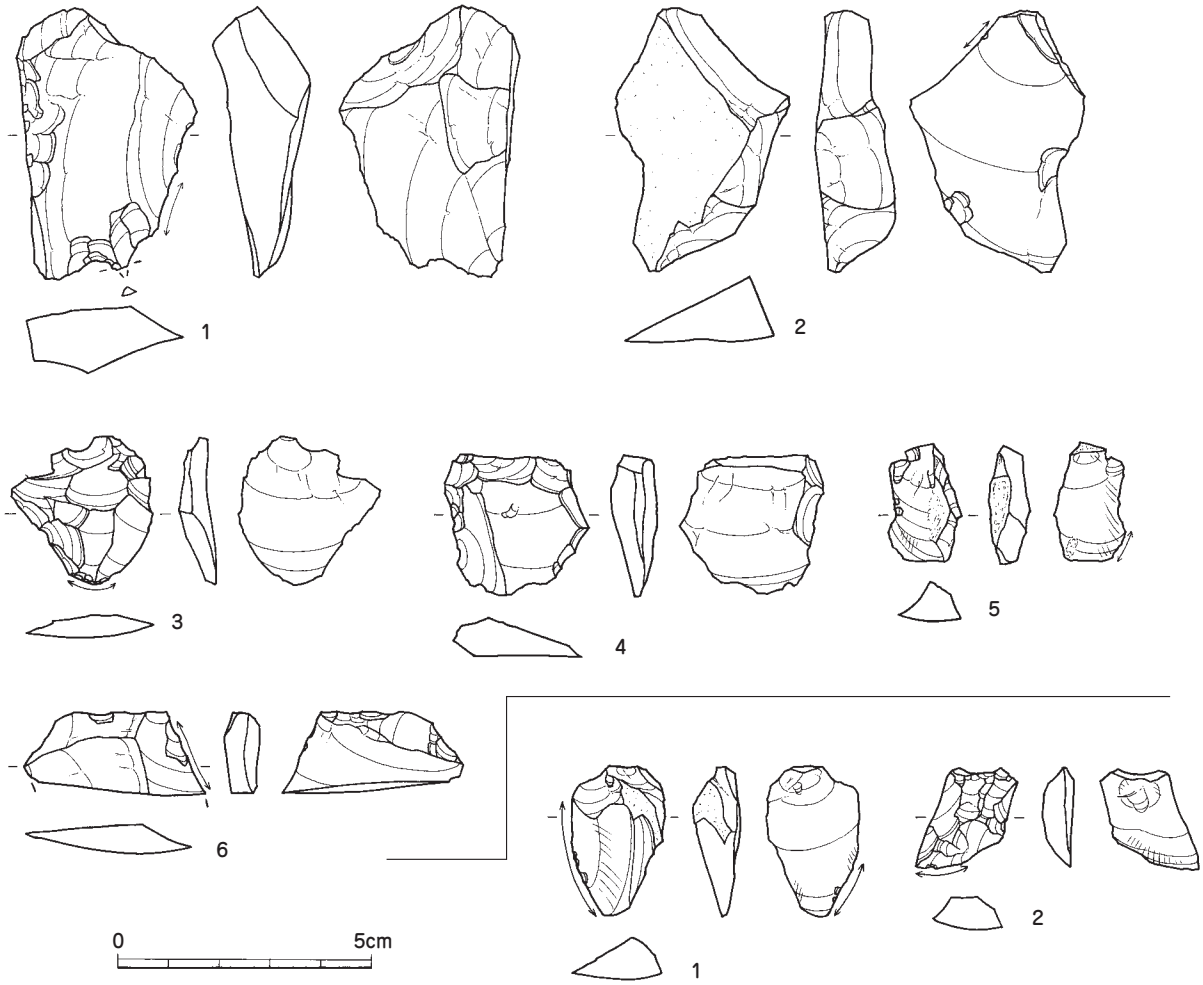
出土石器群　成品が存在しなかったため剥片２点を図示した。

剥片（１・２）　１は縦長の小剥片で表面には自然面を残す。左の側縁では著しい刃こぼれ状の痕跡が認められる。削器のような石器として使用されていたものであろう。２も右側縁下部に微細な刃潰し状の調整剥離痕が認められる。

石材・器種別の構成は以下のとおりである。

石材　黒曜石10点

器種　剥片７点　砕片３点　計10点



第198図　第22・23地点出土石器

第80表　第23地点実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	06－26	5	26.65	剥片	黒曜石	2.93	1.86	0.92	3.36		
2	06－26	3	26.693	剥片	黒曜石	2.02	1.47	0.61	1.72		

第25節　単独出土の石器群（第199図・第200図、図版66）

概要　ここでは単独あるいは２～３点のみの出土で、集中地点を形成していない石器について一括して単独出土とした。また単独15地点から単独25地点については剥片・砕片のみの出土であったため記載は省略する。

単独１地点　１は第13地点の南、Ｊ２－30グリッドから出土した尖頭器である。第Ⅲ層から出土しており、第１地点上層出土の石器群と時期的に一致するものである。

単独２地点　２は第Ⅲ層から出土したナイフ形石器で基部を欠損している。東内野タイプとも思われる。欠損部が若干加工されているところから再利用されたものであろう。

単独３地点　３は第Ⅳ層から出土した完形のナイフ形石器である。背面加工と基部の加工は細かく丁寧に施されている。石材の黒曜石は良質で異物の混入は皆無である。

単独４地点　４は第Ⅳ層下部から第Ⅴ層上部において出土している。石刃状の剥片を素材としたナイフ形石器で先端部を欠損するが、基部の左右に加工が認められる。

単独５　５は第Ⅲ層から出土した石器で、その形はナイフ形石器に近いが周縁の剥離から削器と分類できよう。表面での加工は先端部でも観察できる。裏面での加工は認められない。

単独６地点　６は第Ⅱ層から第Ⅲ層上面で出土した削器である。一部を欠損するが、欠損部の左上方から３回ほど加撃されており彫器を兼用したものである。

単独７地点　７－１はＩ11－97グリッドの第Ⅲ層から６点出土したうちの接合資料である。残された折断面から観察するとかなり大型の剥片であったものと考えられる。３～４分割されたものであろう。下端部の中央では左右から抉るように小さな剥離を施し錐先部を作出している。７－２は一部に表皮部分を残しているが石器素材としては十分な形状を有している。右側縁には僅かな刃こぼれ状の使用痕が認められる。なお、他の３点は小剥片及び砕片であり、石材は硬質頁岩・黒曜石・黒色安山岩であった。

単独８地点　８は第Ⅱ層中から出土した掻器であり、おそらく第１地点の上層出土の石器群と同一時期に属するものと思われる。作りは丁寧で打点部をきれいに整形し刃部としている。

単独９地点　９－１はＧ４－74グリッドの第Ⅳ層～第Ⅴ層中から出土した５点のうちの１点で上半部を欠損した掻器である。他の４点はメノウの剥片であり、図化は省略した。また９－２は隣接したグリッドから出土した大型のメノウ製剥片である。出土層位も同レベルであったため同地点として扱った。

単独10地点　10は陥穴（SK413）の覆土中から出土した削片である。周辺では第Ⅲ層出土の石器群がみられるため同時期のものとなろう。遺構から出土したため本節で取り扱った。

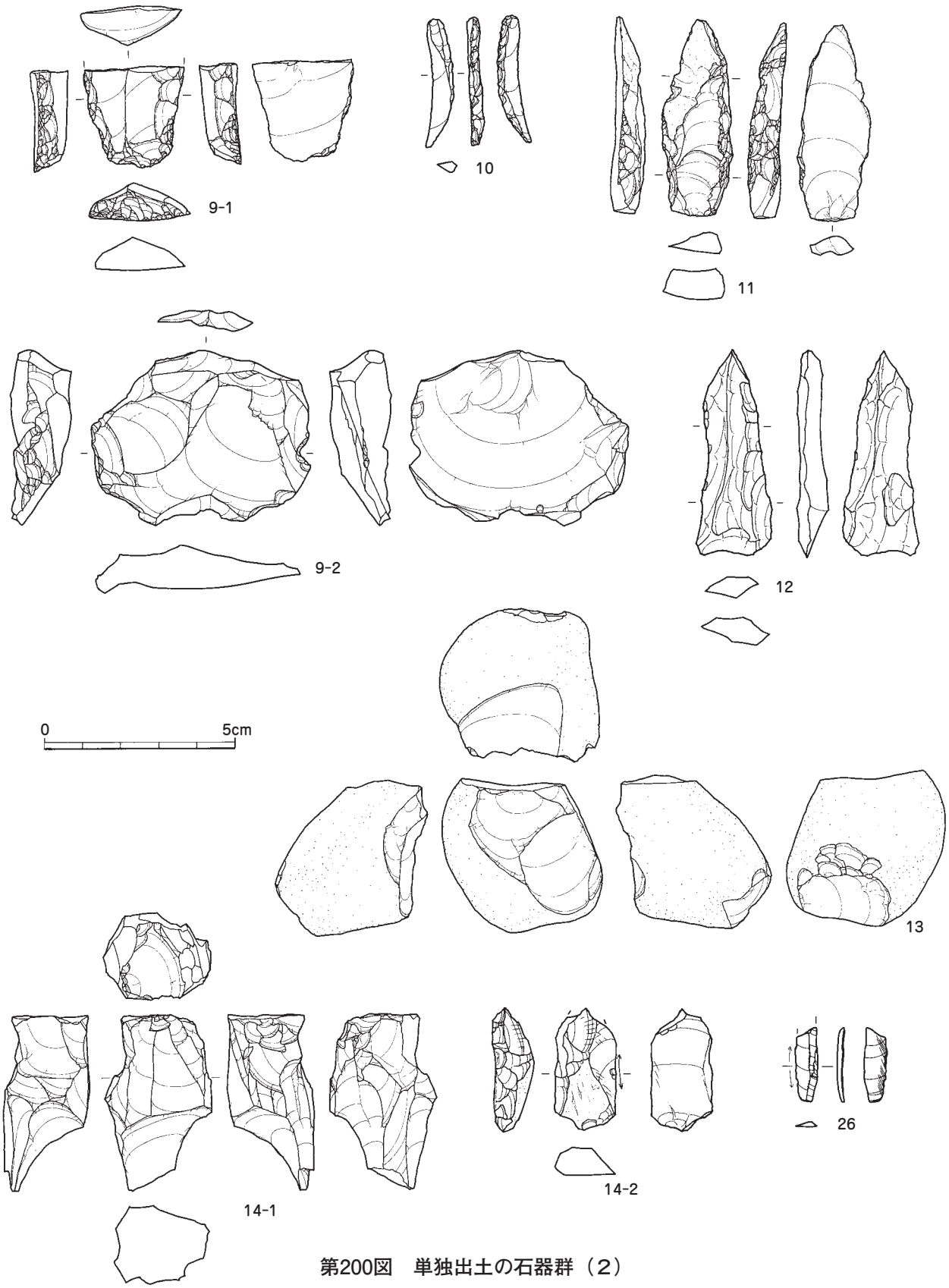
単独11地点　11は土抗（SK224）の覆土中から出土したナイフ形石器である。土抗調査を終了後、その周辺を精査したが他に石器類の出土は確認できなかった。

単独12地点　12は第Ⅶ層から出土したもので右側縁に整形剥離痕が認められるため削器とした。その形状からは刺突具の未成品とも考えられよう。

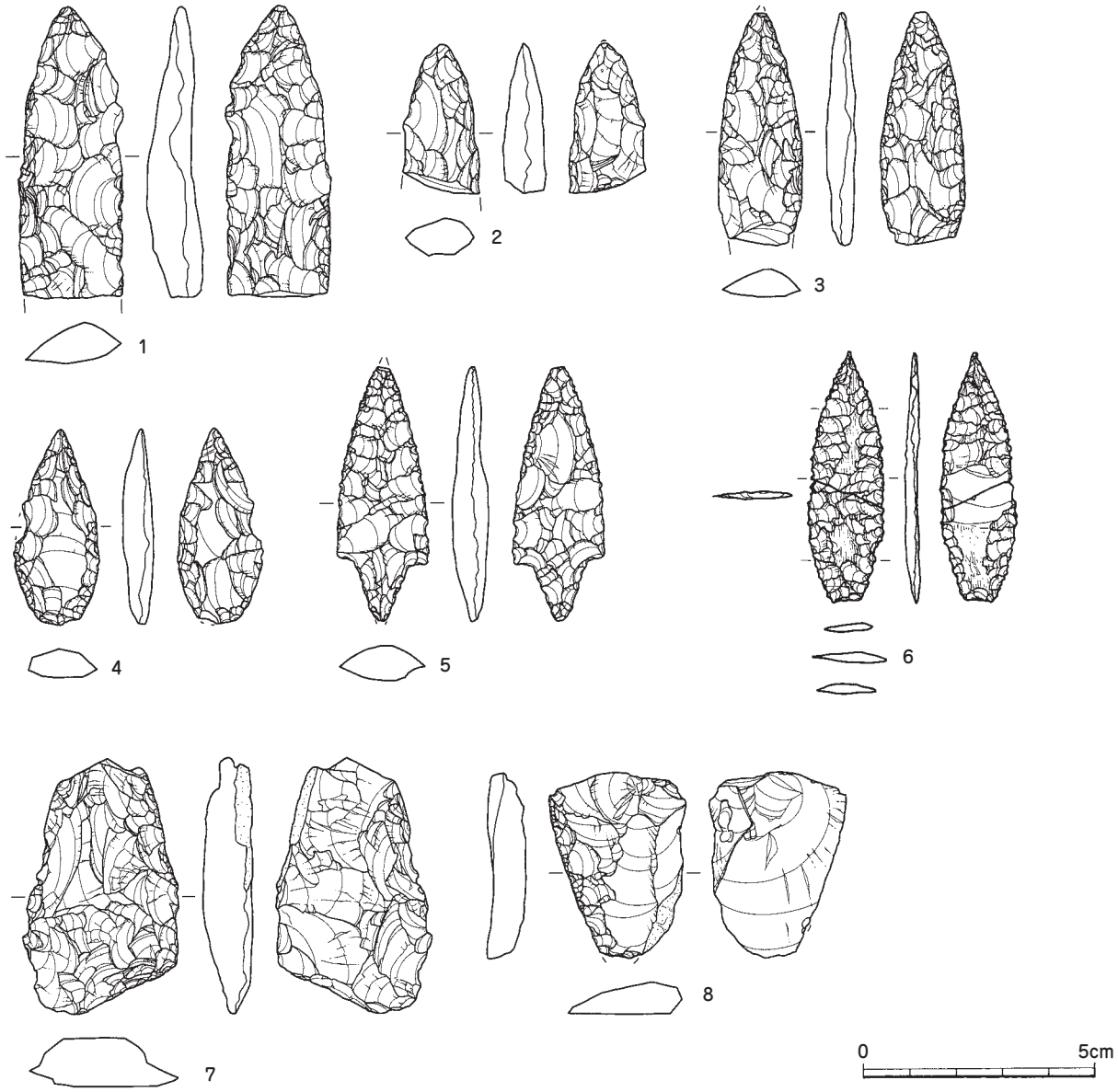
単独13地点　13は原石の一端を剥離し打点部を作出したものであり、２～３回の剥片剥離が試みられている。本遺跡における珪質頁岩の石核は本資料のみである。

単独14地点　本地点は第20地点の西に位置し、Ｇ３－57・58から計５点の石器・石核・剥片が第Ⅳ～Ⅴ層中で出土している。３点は黒曜石の小剥片であったため図化は省略した。なお、第20地点と同レベルの出土層位であるため関連性が窺える。14－１は石刃核状の残核で、平坦な打面には調整の痕跡が認められ

第199図　単独出土の石器群（１）



第200図　単独出土の石器群（２）



第201図　縄文草創期の石器群

る。14－２は先端が欠損しており、左側面では背面加工が施されているためナイフ形石器の未成品か破損品となろう。打点部での調整は認められない。

単独26地点　26は第22地点内から出土したものである。第Ⅲ層上面から出土した縦長の小剥片で小石刃ないしは細石刃となろう。石材には半透明の黒曜石を採用し、左側縁では刃こぼれ状の痕跡が認められる。前述した第１－８地点でも小型の石核や石刃が出土しているため、ここでは第１－８地点出土石器群との関連で捉えたい。

なお、単独15地点から同25地点については剥片や砕片が１、２点出土したのみであったため詳細は省略し、出土地点を図示（第４図）するにとどめた。

第81表　単独出土の石器群実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
1	J 2 −30	1	27.450	尖頭器	珪質頁岩	5.44	3.32	1.40	21.39		上部欠損
2	J 11−51	1	26.405	ナイフ形石器	硬質頁岩	3.00	1.70	0.50	2.29		基部欠損転用
3	O 6 −90	1	26.876	ナイフ形石器	黒曜石	3.00	0.90	0.30	0.92		
4	D 5 −52	2	− −	ナイフ形石器	硬質頁岩	5.15	2.10	0.40	4.89		先端欠損
5	P 5 −37	1	26.962	削器	硬質頁岩	5.90	2.30	0.60	7.45		
6	J 2 −94	1	− −	削器	硬質頁岩	4.80	3.30	0.90	18.02		彫器兼用
7 − 1	I 11−97	1 2	− − − −	剥片 錐	硬質頁岩	3/80 2.45	1.73 2.28	0.84 0.66	3/66 2.19	○	
7 − 2	I 11−97	4	− −	剥片	硬質頁岩	4.39	3.29	0.92	13/07		
8	K 8 −86	2	26.064	掻器	硬質頁岩	4.80	2.70	1.10	14.52		
9 − 1	G 4 −74	5	26.529	掻器	硬質頁岩	2.60	2.60	0.90	7.06		
9 − 2	G 4 −84	1	− −	剥片	メノウ	4.53	5/69	1/55	34.78		
10	413 (09 − 00)	1	− −	削片	硬質頁岩	3.37	0.52	0.38	0.63		陥穴
11	224 (E3 − 97)	1	− −	ナイフ形石器	硬質頁岩	5.15	1.75	0.85	8.34		土抗
12	D 4 −04	1	− −	削器	黒色安山岩	5.42	2.00	0.69	7.78		
13	C 5 −76	1	− −	石核	珪質頁岩	4.82	4.50	3.10	67.22		
14 − 1	G 3 −58	2	25.001	石核	硬質頁岩	4.78	2.76	2.25	25.25		
14 − 2	G 3 −58	1	− −	ナイフ形石器	黒曜石	3.24	1.64	0.89	4.87		先端欠損
26	B 4 −10	4	− −	剥片	黒曜石	1.94	0.61	0.20	0.18		小石刃

第26節　縄文草創期の石器群（第201図、図版66）

概要　ここでは縄文時代草創期を中心とした単独出土の石器を一括して提示することとした。いずれも第Ⅱ層中や一括して取り上げた遺物のなかに含まれていたものであり集中して出土したものではない。

１～３は槍先形の尖頭器で、いずれも一部が欠損している。１は1/3程度が失われているものと思われる。表裏面の剥離は粗雑で凹凸が著しい。２は先端部のみの遺存である。柳葉形を呈したものとなろう。３は基部を欠損するのみで平坦な剥離が全面にみられる。４は両面加工の尖頭器で左右均等のとれた成品に仕上げられている。５は典型的な有舌尖頭器で先端部と基部を僅かに欠損するがほぼ完形品といえよう。石材は、いわゆる赤色チャートでにぶい赤褐色を呈している。６は草創期特有の石鏃で、器厚は2.5mmと薄い。表裏面の一部は軽く研磨されている。７は側縁を簡単に整形したもので下端が刃部となるようである。掻器としたが、小型の打製石斧とも考えられる。８は左側縁を緻密な剥離により刃部を作出している。裏面では打点部を整形したのみで細部の加工は認められない。また下端の一部は欠損している。

第82表　縄文草創期の石器群実測石器属性表

挿図番号	グリッド	遺物番号	レベル	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	接合	備考
第○図１	J 2 −94	2	− −	石槍	硬質頁岩	6.31	2.29	1.08	15.33		片端欠
2	B 4 −60	2	Ⅱ層一括	尖頭器	黒色安山岩	3.27	1.68	0.93	5.11		片端欠
3	M11−76	50	28.239	尖頭器	チャート	5.05	1.84	0.65	6.22		片端欠（足尾産）
4	J 2 −03	1	27.910	尖頭器	珪質頁岩	4.25	1.88	0.67	3.72		被熱
5	M 8 −63	1	− −	有舌尖頭器	赤色チャート	5.52	2.0	0.8	6.77		先端欠
6	D 5 −72 D 5 −53	1 2	Ⅱ層一括	石鏃	硬質頁岩	4.95	1.7	0.25	2.48		表裏面に研磨痕
7	M10−12	26	28.069	掻器	チャート	5.54	3.4	1.1	19.94		
8	E 8 −60	1	Ⅱ層一括	削器	珪質岩	4.02	2.97	0.84	9.37		

第27節　小結（第202図～第207図）

これまで述べてきたように本遺跡では石器群が集中的に出土する地点が数多く確認され、その分布は遺跡全体にわたるといっても過言ではないような状況を呈していた。とりわけ第１地点とした遺跡の北西部では文化層の重複も認められ、少なくとも三時期におよぶ旧石器時代人の活動が認められた。また台地の中央部と東南部では石器集中地点が円形を描くように構成される、いわゆる環状石器群の存在も確認された。これらの石器群は、それぞれ規模に大小はあるものの一定の範囲に石器の集中が認められる場所としては23地点・37か所を数えることができた。これらの石器群を出土層位から時期的に大別すると少なくとも４期（第202図）に分類できるようである。なお、10F・10G区を中心とした部分は既に雨古瀬遺跡として調査（西山1974）されており第Ⅱ層から第Ⅲ層にかけて２か所で石器群が出土している。以下、下層部出土の石器群からその概要を記載する。

第Ⅶ～Ⅸ層　本層に該当する地点は、第１－11・12・14・16地点、第９～11地点、第13～15地点、第19地点、第21地点、第23地点と多い。これらの地点で出土した石器群やその規模を考えると、時間的な差異はあるにせよ環状石器群を形成する第９地点と第11地点を中心として当時の人々の活動が展開されていたものと考えられる。さらに、これらの石器群は接合関係や使用されている石材、出土層位等により３グループに分離できる。

接合関係からみると、前述したように第１－11・12・14・16地点と第11地点間での接合から両地点間の結びつきが想定できる。双方はほぼ同時期に営まれた痕跡と考えてよいであろう。この接合関係のヒントともなった石材には表面と内部の色調が異なった珪質岩（第55図18～22、第150図12－18参照）と緑色硬質頁岩（第42図、第145図25・26参照）をあげることができる。ともに特徴的な色彩を有した石材で第１地点と第11地点において少なからず分布していたものである。

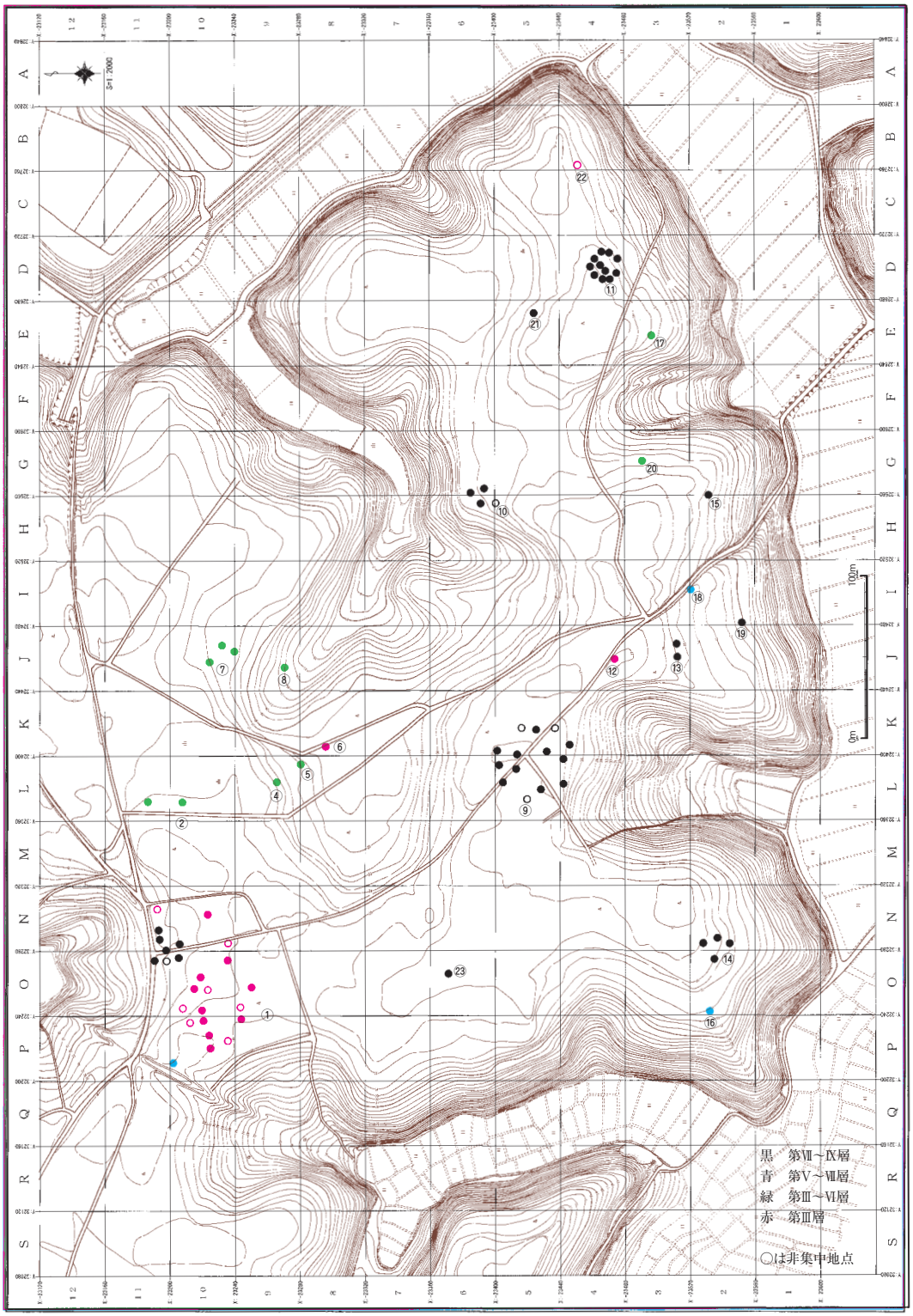
次に使用石材といった点からみると、ここでは積極的に採用されている石材として黒曜石・メノウ・黒色安山岩の三種をあげることができる。黒曜石とメノウは第１地点・第11地点・第19地点で多用され、黒色安山岩は第９地点・第14地点・第15地点で主体的な石材として採用されている。また第10地点では黒色安山岩に近い通称トロトロ石と称されるデイサイトが主要石材として用いられている。

さらに出土層位からみると、第21地点と第23地点は第Ⅶ層中に生活面を有するものと考えられる。とりわけ第21地点では石器製作の痕跡は認められず、石刃状の縦長剥片を素材とした特徴的なナイフ形石器が出土している。石材も凝灰岩を採用しており、前述した石器群とは明確な相違を指摘できる。時期的にも前者より若干新しく位置づけられる石器群となろう。

第Ⅴ～Ⅶ層　本層からの出土地点は３か所と少なく、第１－１地点、第16地点、第18地点が該当する。これら３地点での出土層位は第Ⅵ層を中心として第Ⅴ層下部から第Ⅶ層におよんでいる。おそらく生活面は第Ⅵ層下部あたりにあったものと思われる。

第16地点と第18地点はいずれも低地に面した台地の南端に位置している。使用されている石材は、ほぼ硬質頁岩一色で構成されている。成品はナイフ形石器が各１点出土しているのみで、他の器種は認められなかった。特筆できる点として第18地点で数点出土した剥片をあげることができる。石刃技法により剥離された剥片であり、その長さは10cmを超える。精緻なナイフ形石器とともにこの時期を特徴づける遺物といえよう。

一方、第１－１地点は信州系と思われる半透明な黒曜石によって構成された石器群で、剥片・砕片類が



第202図　石器群変遷図

多量に出土しており、この点は前者と大きく異なるところである。各種の石器を製作していたらしく片面加工の尖頭器や掻器、削器等が出土している。しかし、これらはすべて欠損品であり製作途上で廃棄されたものであろう。

第Ⅲ～Ⅵ層　ここでは第Ⅲ層下部から第Ⅳ・Ⅴ層から出土している石器群を一括した。第２地点、第４地点、第５地点、第７地点、第17地点、第20地点の計６か所が該当する。第７地点を除けば遺物の出土量は概して少なく小規模な石器集中地点によって構成されている。石器包含層は概ねハードローム層の最上層部にあたり、出土層位を重視すれば時期的に二分できるようである。第Ⅲ層下部から第Ⅴ・Ⅵ層の上面（第２・５・17地点）と、第Ⅳ・Ⅴ層（第４・７・20地点）になる。しかし、第７地点では、第７－１地点が第Ⅲ層下部の出土に対し、第７－２・３地点はむしろ第Ⅳ・Ⅴ層に石器群は包含されている。ただ、ここで使用されている石材は黒曜石とチャートであり、黒曜石は比較的良質の半透明品という点で一致しており時期的にも近いと考えられたため一括して取り扱った。出土地点の位置をみると、遺跡の中央北側に営まれており、第17地点と第20地点は小規模で低地に面した南に位置している。ここでの黒曜石には不純物が含有されており産地が異なるようである。

出土した石器群をみると、第２地点や第７地点ではナイフ形石器、尖頭器、彫器、楔形石器等が出土している。さらに尖頭器類についてみると各種のタイプが存在する。第７－３地点の出土例では薄く剥離された石刃状剥片の周囲に調整剥離を加えたのみで成品とした独特の形態を有しているし、近接する第７－１地点では両面加工尖頭器の断片が出土している。一方、第20地点黒曜石製の角錐状石器も出土している。こうした点から本層出土の石器群は、その形態等から時期的にも分離できるかもしれない。

また石器以外の遺物として、第４地点と第５地点では若干ながら焼礫の存在が確認されている。いずれも小規模な集中であった。本遺跡ではこの頃から礫群を伴出するようになったものと思われる。

第Ⅲ層　本層から集中的に石器群が検出された地点をあげると、第１地点とした調査区の西側と台地中央部で確認された小規模な第６地点、第９地点の東南に位置する第12地点が該当する。とりわけ第１地点では濃密かつ広範囲にその活動の痕跡が残されていた。ここで採用されている石材をみると第１－２～10地点では珪質頁岩・硬質頁岩といった頁岩系の石材が主体を占め、黒色安山岩・黒曜石・チャートの類などがこれを補完している。また成品として加工された石器にも樋状剥離を施した尖頭器など様々な器種がみられる。さらに石器群と混在して第１－３A・４・５・６A・７A・８・９A地点の７か所では被熱した礫群が大量に検出されている。このような礫群の分布状況は明らかに一定期間の定住生活を営んでいた痕跡と推定される。

他に第Ⅲ層出土の石器群として、第６地点と第１－15地点・第12地点の３か所をあげることができる。前者は安山岩・硬質頁岩といった石材を採用しており被熱した礫群も若干みられた。後者は珪質岩が主体を占める石材構成で、礫群は認められなかった。石器の出土層位をみると、第１－15地点・第12地点では第Ⅲ層下部でも出土しており、特に第12地点の石器群は尖頭器の製作跡ともいえる内容であり、その形態から時期的には第１地点の石器群よりも若干新しく位置づけられよう。

以上のように出土層位をもとに本遺跡で出土した石器群について大きく４期に分類したが、その中でも注目できる第Ⅶ～Ⅸ層と第Ⅲ層出土の石器群について若干の所見を述べてみたい。

第Ⅶ～Ⅸ層の石器群（第203図）　前述したように本層出土の石器群を主要石材と特徴的な石材をもとに分

類すると、第１地点を含む第11地点（以下、Aグループと記載）と第９・10・14地点（以下、Bグループと記載）にその共通性を見出せる。そこで出土した石器群を集成すると第203図のようになる。これを器種別についてみると、石斧・ナイフ形石器・台形様石器・掻器・削器・彫器・楔形石器・敲石等によって構成されており、各器種の特徴を要約すると以下のようになる。

石斧　この時期を特徴づける器種であり、本遺跡でも磨製石斧と打製石斧の二者が出土している。刃部片を含めて計７点以上の石斧類が出土しているが、形の整ったものは少なくほとんどが使用による破損後に廃棄されたものと考えられる。ここで採用されている石材には角閃岩・緑色凝灰岩・頁岩・ホルンフェルス・砂岩・細粒安山岩などがみられ、多彩な石材で石斧を製作している。とりわけ角閃岩は砕片まで含めるとAグループでは少なからず出土している。一方、Bグループでは様々な石材が用いられており、第９地点では頁岩・緑色凝灰岩（磨製石斧）からの剥片剥取が興味深い事実を提供してくれた。しかし、ここでは形状の整った石斧は検出されていない。こうした石材の選択は縄文時代においても継続（柴田2010）しており、石材の選択という点では大きな変化はみられないようである。ここで注目できる事例として、後述するような石斧片の存在がある。

ナイフ形石器・台形様石器　ナイフ形石器についてみると大小様々なタイプが存在している。これを石材別にみると、メノウ製のナイフ形石器は大型品となり、Aグループの４・５にみられるような縦長の石刃状剥片を素材とし基部に簡単な整形剥離を施し成品とした簡素な作りとなっている。第19地点や第21地点でも同様なタイプが出土している。形態の整った成品では硬質頁岩（６・７）を採用している。Bグループでは総体的に黒色安山岩を多用していることもあり、黒色安山岩製（５・10・11・12・18）が主体となっている。ここでは大型品はみられず、概して小型品が多い。また、横長剥片（６・13）の採用も看過することはできない。なお、黒曜石を素材としたもの（16）は量的には少ないようである。

一方、台形様石器の出土は偏りをみせている。その多くはBグループの第14－３地点から出土している。石材には珪質岩と黒色安山岩が用いられており、ここでも黒曜石は少ない。形態は刃部が扇状に広がるタイプとなるが、25～27などは粗雑な製作で仕上げも簡単である。ここでも横長剥片を素材としたものが多い。

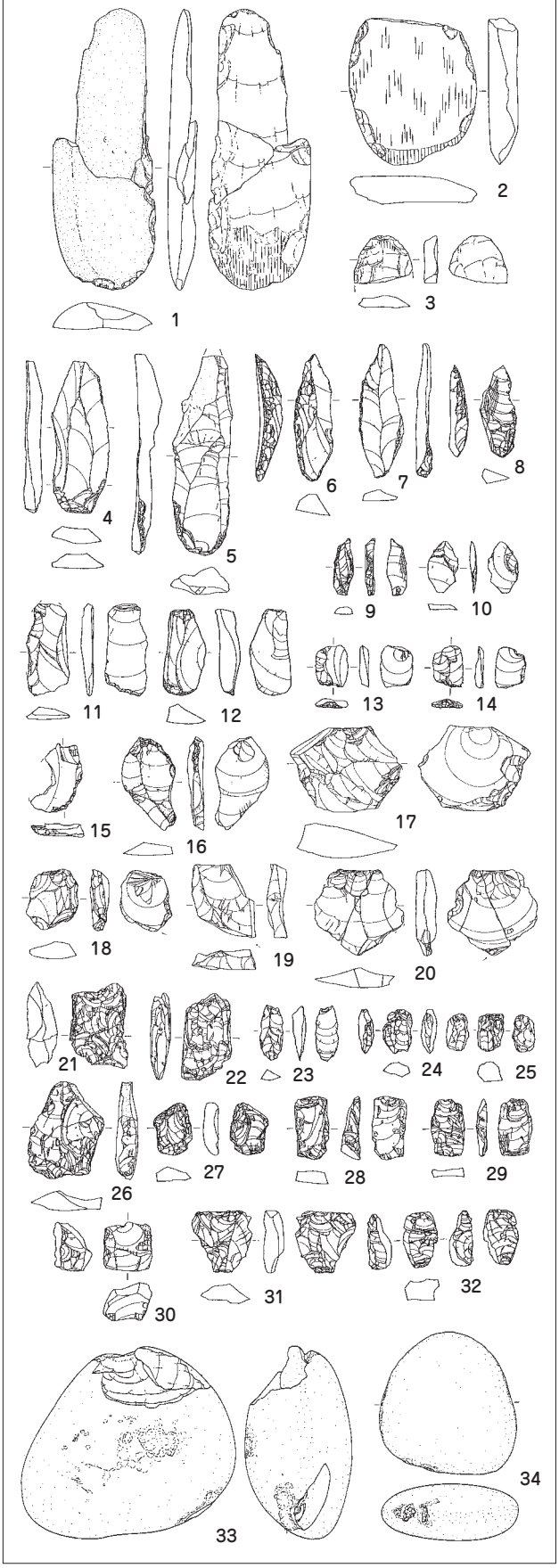
掻器・削器　この種の成品では形態の整った成品はみられない。Aグループで掻器と呼称できる石器は緑色硬質頁岩を用いたもの（12）や珪質頁岩で作られた小型品（13・14）が出土している。Bグループでは黒色安山岩を採用した粗雑な作りのものが１点（32）みられるだけである。削器も同様で側縁に簡単な加工を施しただけで石器（33・35）として使用していたものと思われる。

彫器　彫器と呼べる石器も少なく、Aグループでは３点（18～20）を図示したが、それぞれ石材は異なる。横方向から小さなファシットを加えるだけで彫器として使用したものであろう。Bグループでは硬質頁岩による彫器が１点（31）みられた。これも先端部に小さな剥離を施しただけで彫器としている。

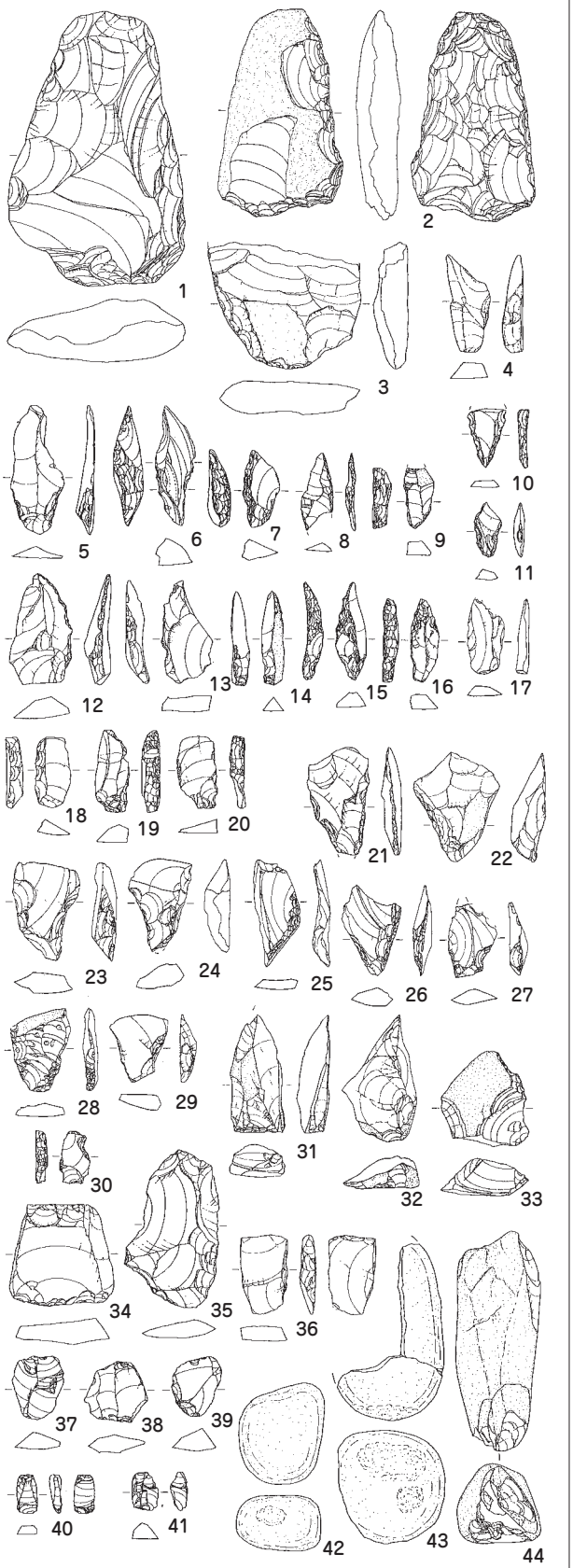
楔形石器　楔形石器と認定できるものは多く、Aグループでは黒曜石（21～29）が主体を占めており、次いでメノウ製（30～32）となる。ここでは第11－１地点で出土した接合例が示すように、成品をみると厚手の剥片から複数の楔を製作していたようである。またBグループでは黒曜石やメノウよりも黒色安山岩（34・36・38）を用いた成品が多く出土している。ここでは様々な形態のものが存在している。

石斧と石斧片（第204図）　次に石斧類について考えてみたい。石斧製作の石材には前述したように数種の岩石が用いられている。その中でも角閃岩や緑色凝灰岩は環状石器群を構成していた第９地点と第11地点

第１地点・第11地点（A）



第９地点・第10地点・第14地点（B）



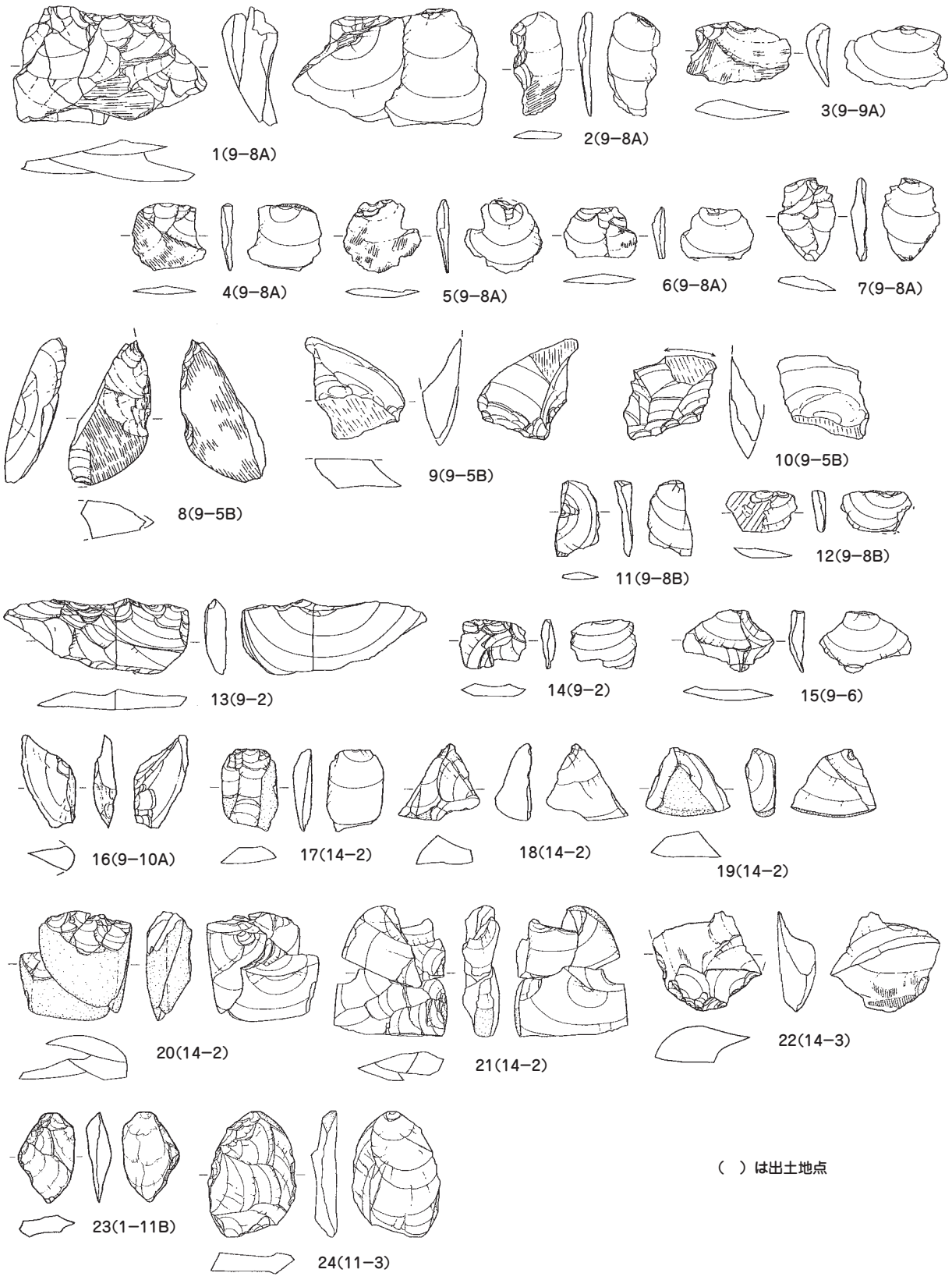
第203図　第Ⅸ層出土石器群

において広くその分布が認められた。その内容についてみると、第９地点では研磨痕のみられる剥片が多数みられ、図示したように剥離された剥片の接合例も確認されている。なお、図示した以外にも緑色凝灰岩が９－８A地点で14点、９－８B地点で５点が出土している。一方、第11地点では第64表に示したようにD４－94グリッドを中心に多数の石器集中地点で長さ１cmに満たない角閃岩の砕片が出土している。この砕片については明らかに石器製作と関連づけられる石材であり、石斧製作が複数の地点にわたっていた事実を提供しているものといえる。

ここで注目できる事例として明確な研磨痕の残された剥片の存在が指摘することできる。これらの剥片の中には表裏両面に研磨痕が認められ、しかも刃部の主要部を構成する部位（８～10・22）が存在している。第14－２地点でも纏まって出土（17～21）しており僅かながら研磨の痕跡が認められる。この事実から推定すれば刃部を含む剥片剥離は意識的なものとしか考えられない。そのことを裏付けるかのように使用痕らしき痕跡を残す剥片（10）も確認されている。第11－３地点から出土した二次剥離痕の観察できる剥片（24）や横長剥片の折断例（13）などもこれに該当するものといえる。こうした事例から本遺跡でみられる石斧材の剥片・砕片類は、廃棄されるべき石斧を石核と見立てて剥片剥離をすることにより他の器種の製作を目的としていたものと考えることが妥当となろう。このような事例は多数の石斧を出土した成田市南三里塚宮原第１遺跡（宇井ほか2004）でも確認されており、ここでは石斧の刃部再生を目的としたものと考えられている。しかし本遺跡例では刃部の主要部を剥離していることから刃部再生を意図したとは考えにくい。特に磨製石斧の場合、刃部再生は研磨が中心となるものであり微細な剥離を施すようなことはなかろう。つまり刃部再生は研磨作業が中心となり、その痕跡は調査者の目に触れることはないものと思われる。とりわけ頁岩やホルンフェルスといった石材は剥片石器に転用することは十分に可能となろう。こうした事例は石材供給の少ない地域にみられる現象として理解したい。

第Ⅲ層の石器群（第205・206図） ここでは第Ⅲ層出土の石器群として樋状剥離の施された尖頭器を伴う一群の石器群について注目してみたい。第200図に示したように、この時期の石器群はP10区・O10区において検出されたものであり、石器集中地点は８か所を数える。このうちの６か所では被熱した礫が大量に各種石器群とともに出土している。しかも周辺域には同時期の石器群が広く散布するような状態で出土した。それに加え接合関係も各所で確認されている。こうした周囲の状況を考慮すると、当時この地で暮らした人びとはP10区・O10区を居住の中心として長期間にわたり一定規模の集落を形成していたものと思われる。そして石器集中地点から出土した主たる成品類を器種別に集成すると第205・206図のようになる。さらに石器製作に使用されている石材についてみると、本遺跡と時期的に近い東内野遺跡（篠原ほか1977・1978・1979）や平賀一ノ台遺跡（道澤ほか1985）でみられるように珪質頁岩・硬質頁岩といった頁岩系の石材が他を圧倒しており、黒曜石やチャート・珪質岩といった石材は頁岩系石材を補完している程度の存在感を示すにすぎない。とりわけ頁岩系の石材は接合例から推測すると20cmを超えるような大きな原石から剥離されたものであることは間違いない。しかし、出土した剥片類の多くには自然面が認められないため、本遺跡に搬入された石器石材は良質な石刃状剥片であったものと推測できる。こうした点を踏まえて第Ⅲ層出土石器群の組成について器種ごとにまとめておきたい。

尖頭器（１～14） 尖頭器は樋状剥離の有無によって二種に分類できる。量的にみれば樋状剥離を有する有樋タイプの尖頭器を多く製作していたようである。このことは形態の整った成品や破損し廃棄された出



第204図　石斧片・石斧材集成図

土例からも理解できる。

出土した有樋尖頭器を観察すると、ほぼ左右を対称に整形して成品としたものであり、北総の地でこれまでに調査された東内野型尖頭器とは形態が若干異なるタイプとなる。４・５・９などは長野県男女倉遺跡（横田ほか1972、森島ほか1975）出土の有樋尖頭器に近似したものといえよう。また図示した資料の欠損品や破損品（２・６）からみると、樋状剥離は基部加工を終了させた後に施されているようである。ただ樋状剥離片が接合した資料（３）の基部加工は簡素なものである。また半円形に整形された先端部は特徴的であり、加撃直前の形状がよく理解できる資料といえよう。つまりこの先端部への整形が有樋尖頭器製作にとって重要な点となることは間違いあるまい。

一方、両面加工の尖頭器についてみると完形品といえるものは図示したように少なく、その形状を窺えるものは頁岩製２点、黒曜石製２点（13・14）のみであった。特に黒曜石製では両面加工を施してはいるものの先端部や基部周辺の加工、側縁部の仕上げには粗雑さが感じられる。ここでは尖頭器として分類したが、機能・用途といった点では疑問の残る石器である。いずれにしても刺突具としての尖頭器類は有樋尖頭器に製作の主体が置かれていたものと考えられる。

ナイフ形石器（15～17） 15・16は背面に数回の剥離が施されただけであり、精緻な作りで盛行を極めた砂川タイプのようなナイフ形石器とはほど遠い作りといえる。もはや刺突具としての機能は失われたものと看取できる。このように簡素化した形態は、元来保有していた機能の一部が残存したもので終末期を様相を示すものと理解できる。ナイフ形石器を出土した第１－４地点では石器群の集中が認められており尖頭器類と同時期の所産となることは確実である。

また17は切出タイプの石器で疎らに石器群が分布していた第１－３B地点出土であるが、前述した印旛郡内の遺跡（注１）でも出土しているところから石器組成の一翼を担っていたものと考えられる。

角錐状石器（18） 本資料も第１－３B地点から出土したもので断面三角の角錐状石器である。この種の石器は、本石器群を前後する時期に存在しており、本資料も石器組成の一部を構成するものと考えられるが、第１－３B地点の石器群は集中地点を形成していないため積極的な断定は避けておきたい。

掻器（19～32） この時期では掻器類の出土が充実している。形状は大小様々となるが、刃部を半円形に整形した典型的な掻器が主体を占めている。他には小型品ながら刃部に変化を加えたもの（27・28）や石刃状剥片の一端を簡単に整形して刃部を形成したもの（29～32）などがみられる。

彫器（33～42） この時期の彫器についてみると、平賀一ノ台遺跡などでは豊富な出土量を示しており、本遺跡でもその出土量は尖頭器類と比較しても少ないものではなかった。しかも出土した彫器は、掻器や削器・錐器といった異種の機能を併せ持つタイプの石器が主体となっている。この点でも平賀一ノ台遺跡と一致しており、有樋尖頭器を伴う時代における石器組成の特質とも考えられる。

とりわけ興味の注がれる特徴的な石器として、主剥離面に共通した独特な剥離を施す彫器（35～37）の存在に注目したい。これら３点は側縁をきれいに整形し十分石器としての機能を保有させた後に上方斜めより加撃したものである。この加撃による僅かな幅（1.5mm）での剥離は芸術的ともいえる流れるような剥離面を創出している。そのため先端部の加工は緻密で、尖頭器の先端を想起させるような整形を施しつつ小さく傾斜する打点部が作出されている。この先端部の加工こそ僅かな幅での正確な剥離を可能とするものであろう。しかも３点の出土という点から考えると、今後の調査においてもこの種の彫器が出土することは十分予測できるものと思われる。さらに特異な形態、高度の石器製作技術という点を考慮すれば、

この時期の基準資料（角田台型彫器）として評価できる石器となろう。

他では33・39・40のように斜方向から加撃し、彫器面を作出しているタイプも出土している。33・39は剥離された剥片が接合したもので、これらも彫器と掻器あるいは削器という二種の機能を有した石器と認定できる。

錐器（43・44） 錐器のみ作出された石器はみられなかったが、彫器等を併せ持つ錐器が２点出土している。いずれも突起部の左右に簡単な抉りを入れて錐部を作出したものである。

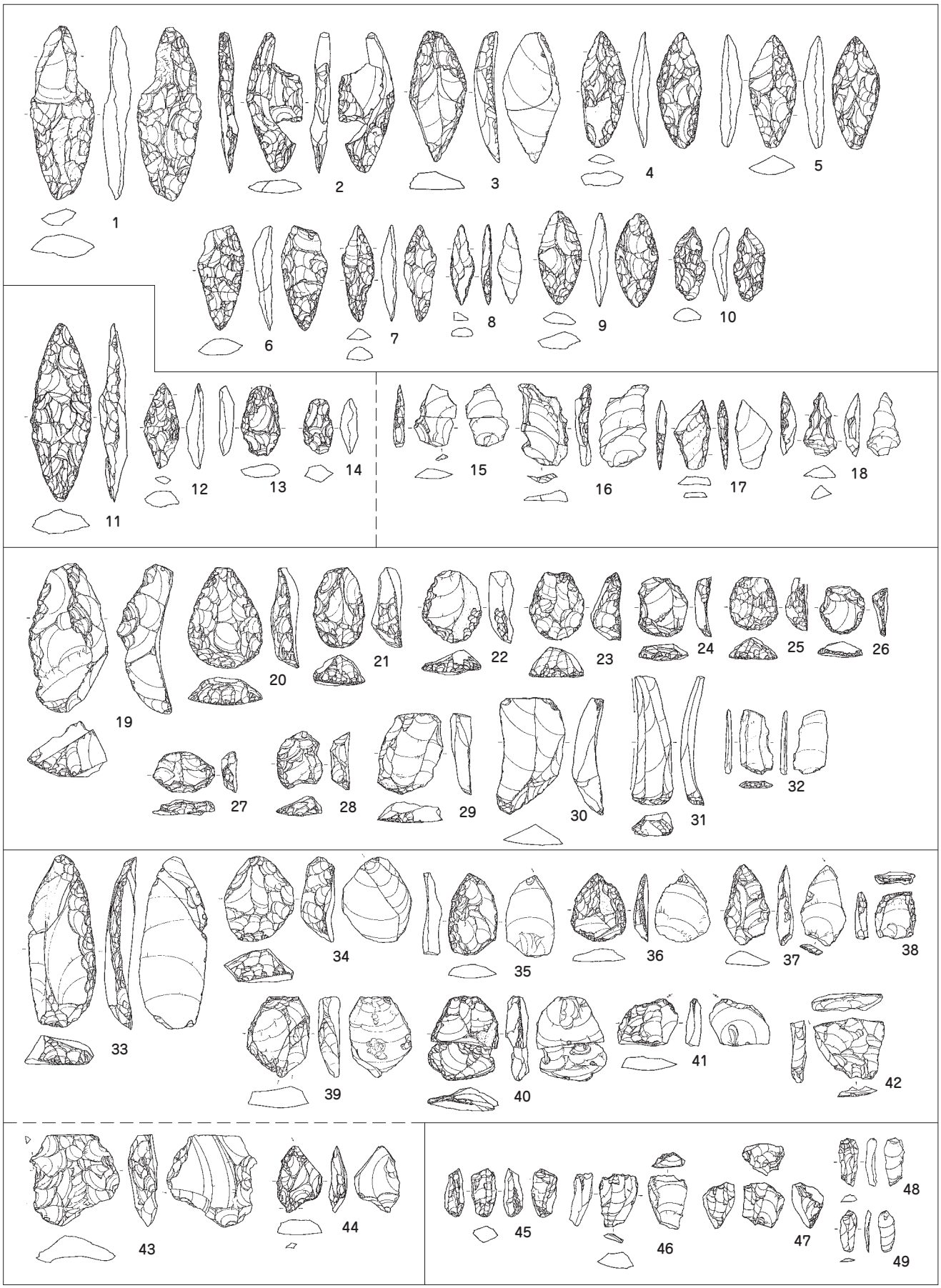
小型石核・小石刃（45～49） 僅少ではあったが、小型の石核とそこから剥離された小石刃が出土している。残核と石刃の大きさを細石器の石核・石刃と比較すると明らかに一回り大きいものである。出土地点は石器群が集中する第１－４地点であるため所属時期についても矛盾するものではなかろう。なお、この種の類似資料（注２）として白井市一本桜南遺跡（落合1998）をあげることができよう。

削器・削器様石器（50～69） 定型的な削器はほとんど認められなかった。きれいに整形された50・51などが該当するが、その他は石刃状剥片や大形削片の側縁を一部整形したり、刃潰し状の調整を施し削器として利用していたようである。他には黒曜石を用いた粗雑な作りの削器様石器（68・69）がみられた。

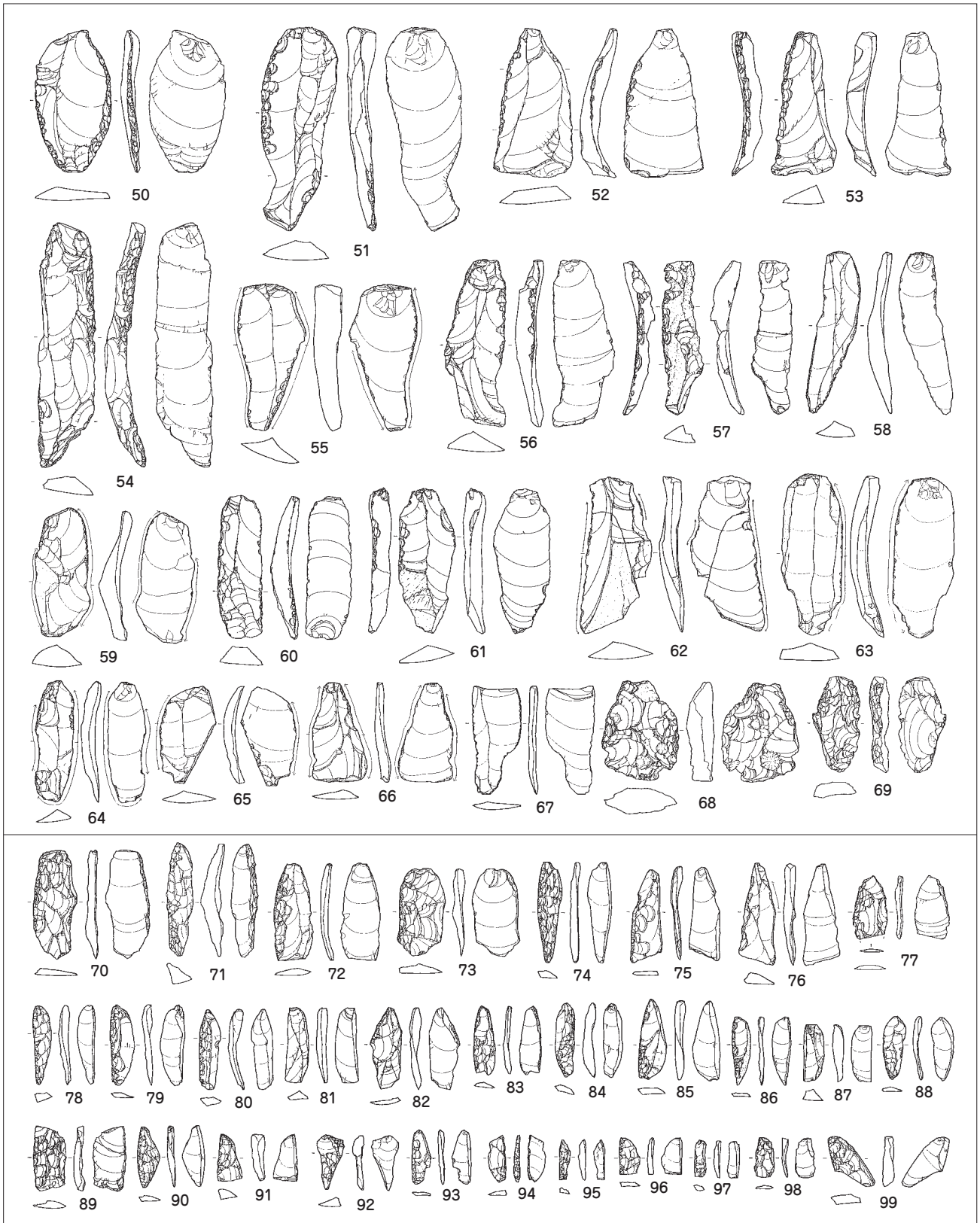
削片（70～99） 主な削片を図示したが、その形状をみると大小様々である。長さは６cm～２cmほどとなり、幅も2.5cm～0.5cmとなる。その大半は有樋尖頭器の製作時に剥離されたものであろう。側面にみられる両面加工の痕跡はそれを物語るものといえる。ただ最初の樋状剥離は破損品３にみられるように、裏面が未加工の段階で剥離されることもあり一概に断定できるものでもない。また34の例にみられるように彫器製作を目的とした剥離にもみることができる。いずれにせよ有樋尖頭器の大きさ、あるいは破損品からの再生といった点でバラエティーに富む削片が排出されていたようである。そうした中でも形状の整った削片（72・73）は、剥離後に周囲を調整し削器のような石器として利用されていたものも散見できる。このような類例は、他の遺跡（注３）でもよく知られているところである。

廃棄尖頭器（第207図） 最後に廃棄された有樋尖頭器について触れておきたい。本遺跡で出土した尖頭器は破損品を含めて計15点を数える。このうち有樋尖頭器は９点となり、有樋尖頭器が主体的な位置を保っていたものと考えられる。出土した９点を観察すると、製作途中で破損したため廃棄されたと思われるものが４点認められた。前述したように、そのうちの１点は、まさに最初の樋状剥離を加えた段階のものである。しかも剥離された剥片と主要部分が期せずして接合した希有の例といえる。第１－９A地点から出土した石器（第37図２）である。当初は、本遺跡で出土している有樋尖頭器はすべて表面左に剥離面が設定されているため加撃部分を掻器の刃部に該当するものとも考えた。しかし、打点部となった半円形に整形された部分の細部を観察すると僅かに左から右に傾斜しており、この点を重視すれば左の側縁部に剥離面設定を意図したことは明白である。つまり本例は樋状剥離時に目的とした部位に剥離面を設定できなかった失敗作と見做される。さらに周囲での整形についてみると、基部では一部にみられるものの十分とはいえず裏面での加工も認められない。いわば有樋尖頭器製作における樋状剥離直前の状態を示した貴重な資料といってよいであろう。

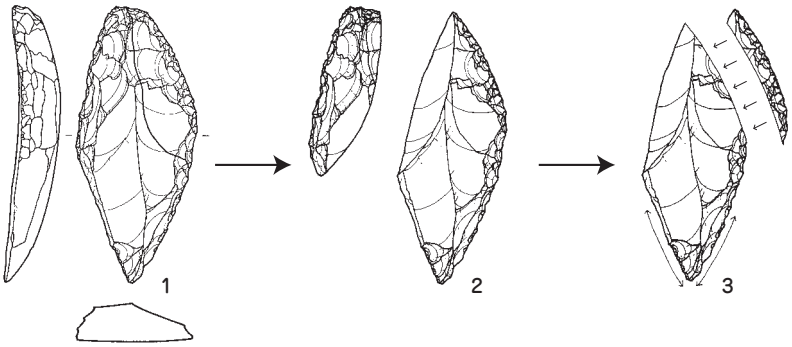
そこで、仮に本例が樋状剥離によって目的とした部位を剥離できたならば、第207図２のごとく左側縁に沿って剥離面が形成されることになる。さらに、ここから同図３のように剥離した先端部から右側縁の上半部にかけて整形加工を施しつつ成品として仕上げたならば、東内野型尖頭器に近似する形態を有する尖頭器を想定することができる。つまり、この種の尖頭器製作にとって重要となる作業は、樋状剥離とと



第205図　第Ⅲ層出土石器群（1）



第206図　第Ⅲ層出土石器群（2）



第207図　有樋尖頭器の製作略図

もに先端打面部の作出と基部の整形という点にあるものと考えられる。

先端部についてみると、敲打し易いように半円ないし僅かな平坦面を作りだすために細部の調整を施すように小さな剥離によって形状を整えている。この整形は明らかに打点部の設定を目的としたものといえよう。他にも先端部の整形が確認できる資料として99（第１－６A地点）や91（第１－７A地点）の削片をあげることができる。だが、破損した有樋尖頭器がしばしばみられるということは、この樋状剥離が意外と難しかったものとも考えられよう。

次に基部についてみると、ここでも特徴的な点を指摘することができる。図示した石器の整形は右側縁下部の一部にしか認められないが、既に「V」字形に形が整っている。おそらく樋状剥離後には、さらに整形を施すものと推測できる。その加工は、尖頭器の先端部に劣らず精緻なものとなろう。このような加工の萌芽を示す成品として、同地点から出土した先端部欠損の有樋尖頭器（６）をあげることができる。そして、成熟した完成度をもった成品が東内野遺跡や平賀一ノ台遺跡などで出土している東内野型尖頭器と呼称される有樋尖頭器へと変遷を遂げるものと考えられる。「東内野型尖頭器」として掲載されている多くの基部は鋭い「V」字形に整形されており、男女倉型尖頭器や木葉形尖頭器などの基部と比較すればその差は一目瞭然である。この基部の形態から推測すれば受け口となるソケット（注４）の存在に疑問を挟む余地はなかろう。

このように先端部の加工と樋状剥離、そして基部の製作といった点を重視して尖頭器類の製作を考えるならば、東内野型尖頭器にみられる左右非対称という造形は主に基部の製作に起因するところが大きいように思えてならない。また、こうした一連の有樋尖頭器の製作工程と遺存した石器群から考えると、本遺跡における石器群の時期は確実な東内野型尖頭器の出土をみないことや小型石槍の変遷（田村2000）という点から推察すると東内野遺跡や平賀一ノ台遺跡よりも僅かながら古い段階に位置づけられるものと考えたい。

以上が有樋尖頭器を主体とする第Ⅲ層出土の石器組成となる。これらの石器群は当時の生活必需品である全器種を網羅しているとは思えないが、概ね本遺跡における主要石器の組成は提示できたものと考えられる。とりわけ有樋尖頭器類についてみると、その多くは製作途中で破損・廃棄されたものであったため、成品の姿については十分に捉えきれなかった。ただ、接合した廃棄品から製作過程の一端が把握できたことは大きな成果といえよう。

注１　平賀一ノ台遺跡をはじめとし、印旛Ⅶ期（酒井・宇井2004）とした文化層でも散見できる。
注２　一本桜南遺跡では第７文化層から小石刃、第８文化層から東内野型尖頭器と小石刃が出土している。
注３　削片を素材とした石器製作では平賀一ノ台遺跡などで、削器様石器等に加工した類例が報告されている。
注４　ソケットには狩猟によって捕獲された獣類等の骨を使用したものであろう。基部の固定をしっかりしたものにするためには骨の内部を深くくり抜くとともに、基部はより長く鋭い整形を施したものが有効となる。東内野型尖頭器の基部にはその特徴がよく現れている。

参考文献

宇井義典ほか2004『南三里塚宮原第１遺跡・第２遺跡』㈶印旛郡市文化財センター
落合章雄1998「白井町一本桜南遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅻ』㈶千葉県文化財センター
酒井弘志・宇井義典2004『印旛の原始・古代』－旧石器時代編－　㈶印旛郡市文化財センター
篠原正ほか1977『東内野遺跡発掘調査概報』東内野遺跡発掘調査団
篠原正ほか1978『東内野遺跡第二次発掘調査概報』富里村教育委員会
篠原正ほか1979『東内野遺跡第三次発掘調査概報』富里村教育委員会
柴田徹2010「石材から見た磨製石斧」『物質文化』88号　物質文化研究会
田村隆2000「木刈峠再訪－房総半島小型石槍の変遷－」千葉県史研究８　千葉県
西山太郎1974「雨古瀬遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』㈶千葉県都市公社
道澤明ほか1985『平賀』平賀遺跡群発掘調査会
森島稔ほか1975『男女倉』長野県和田村教育委員会
横田義章ほか1972『男女倉』信州ローム研究会

第４章　縄文時代

第１節　概要

本遺跡は、多年度にわたる調査によりほぼ台地全体における縄文時代の様相を把握することができた。また近接する遺跡の調査も数か所で実施されており、それらの出土遺物も参考にすることができるため下総台地でも内陸的な遺跡構成の一面を明らかにできたように思われる。調査により検出された遺構では住居跡の他に炉穴・陥穴・土坑・ピット群などが認められた。とりわけ住居跡では縄文時代全期をとおして４軒と少なく、集落構成という点ではその域にまで達していなかったようである。しかも炉跡を有していた住居跡は１軒のみで、他の３軒では確認されなかった。このことは遺跡の性格を考えるうえで示唆的といえよう。

一方、出土遺物についてみると、遺構の存在している時期ではやや多いものの極端な出土量の差異は認められなかった。後述するように時期的には早期から後期まで存在し、土器型式からみると断続的ではあるが二十数型式におよぶ土器群の出土が確認できた。このように集落の形成をみない遺跡の事例では、最近報告された北に隣接して所在する天王台西遺跡（古内2011）をはじめ大森割野遺跡（香取ほか2010）等多数の遺跡でこの傾向が確認されている。本報告ではこうした点を考慮しつつ本遺跡の内容について記述していきたい。

第２節　遺構

１、住居跡

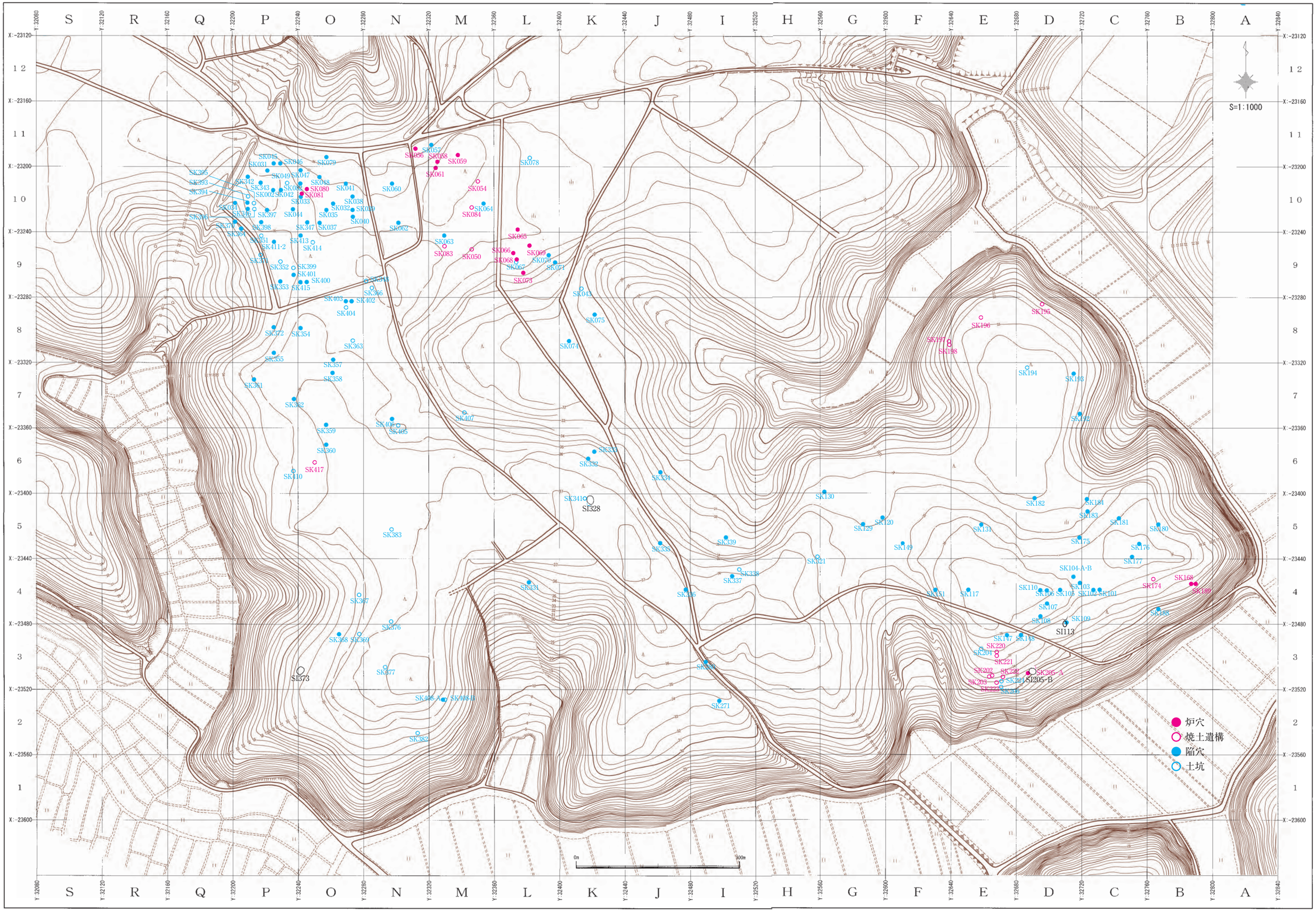
本遺跡で検出できた住居跡は４軒と少なく、調査面積からみれば僅少といえよう。検出地点は台地の南斜面部にあたり、東方向からSI113号・SI205－Ｂ号、次いでSI328号、さらに西に位置してSI373号が検出されている。時期的には後述するように早期・前期・中期となり、各時期とも集落を形成しているような状況ではなかった。

SI113号住居跡（第209図、図版67）

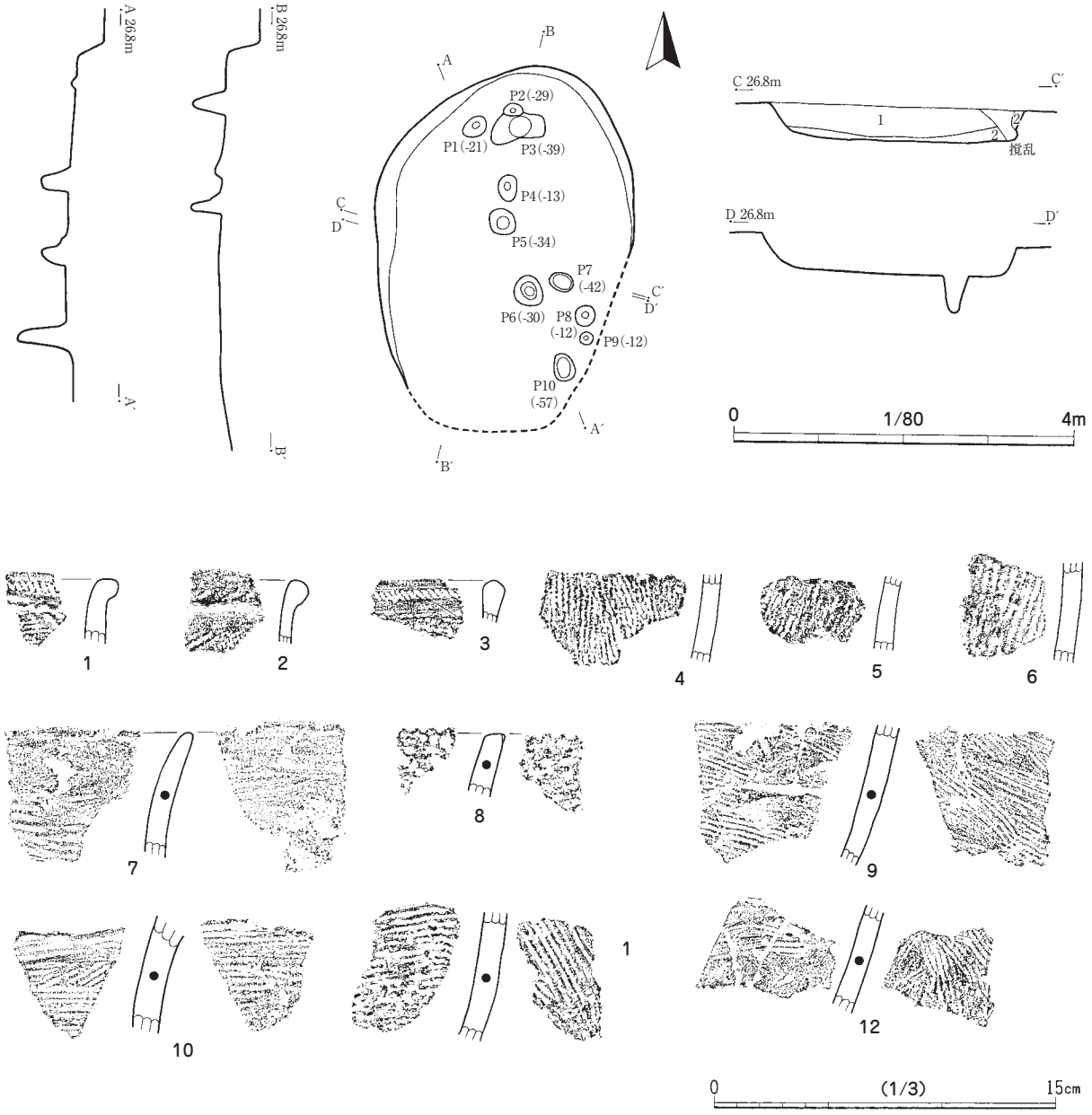
本跡はSI205－Ｂ号住居跡の北東約40ｍに位置し、Ｄ３－07グリッドとＤ４－97グリッドを跨ぐような形で検出された。その形状はほぼ楕円形を呈していたものと思われる。確認できた遺存部は、長径で約４ｍ、短径で３ｍを計測する。壁面や床面はSI373号住居跡と同様に明確に区分できるような状態ではなく、北側壁面はどうにか確認できたが、南側は低地に向かって傾斜しているため明確には捉えきれなかった。ピットは南北方向に穿たれており、Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ10などは不規則な配列となるが柱穴と考えてよいであろう。遺物の出土は覆土中から撚糸文・条痕文系土器が各10点ほど出土しており、それらの中から比較的施文のはっきりしたものを数点ずつ図化した。遺構の時期としては断定はできないものの条痕文系後半期の可能性が強い。

なお、堆積土は２層に分離でき、第１層は暗褐色土、第２層は褐色土によって構成されており、いずれの層もローム粒を多く含んでいた。

遺物　１～６は撚糸文系土器となる。１～３は口唇部に撚りの密な縄文を施文しており、頸部には横方向



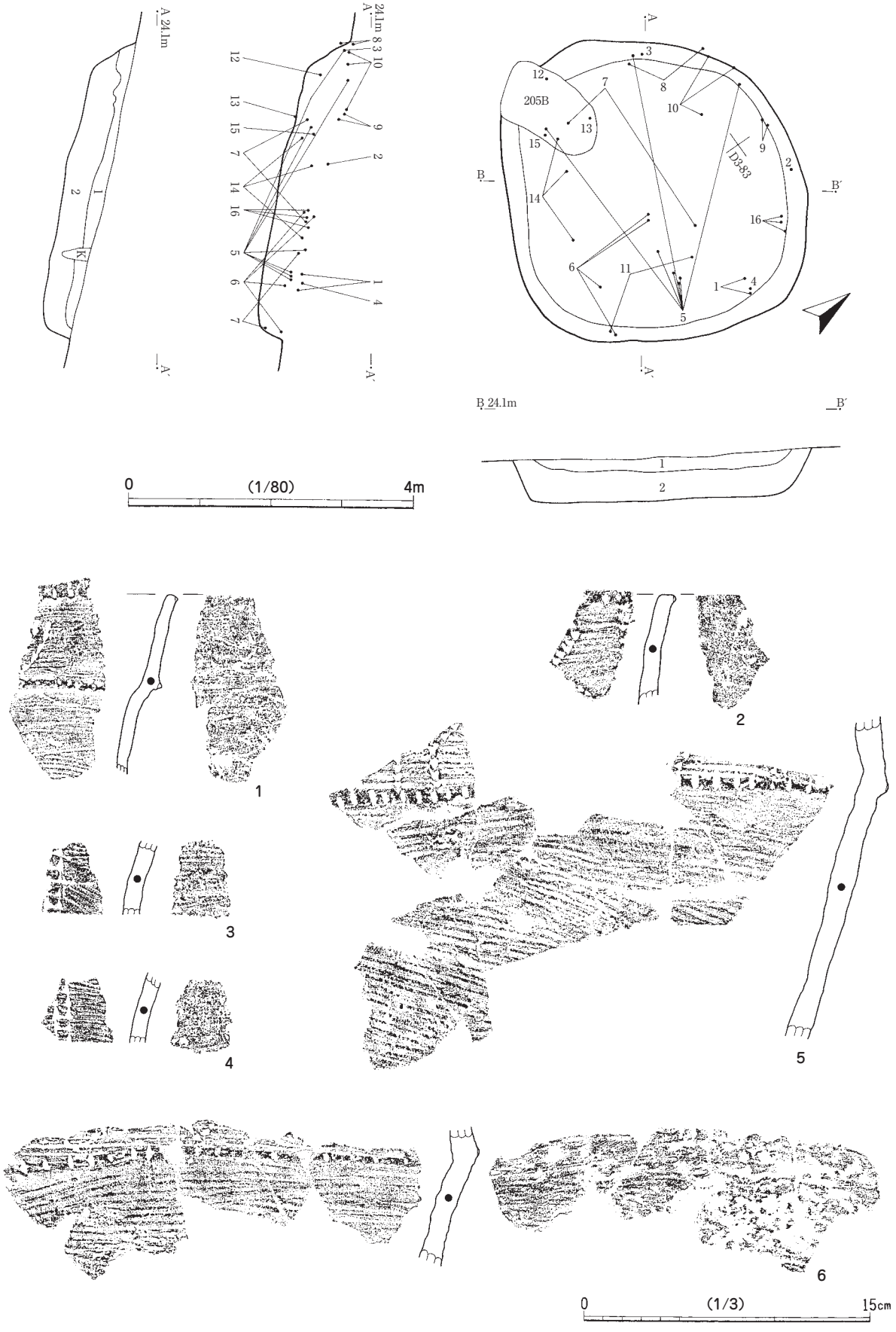
第208図　縄文時代遺構分布図



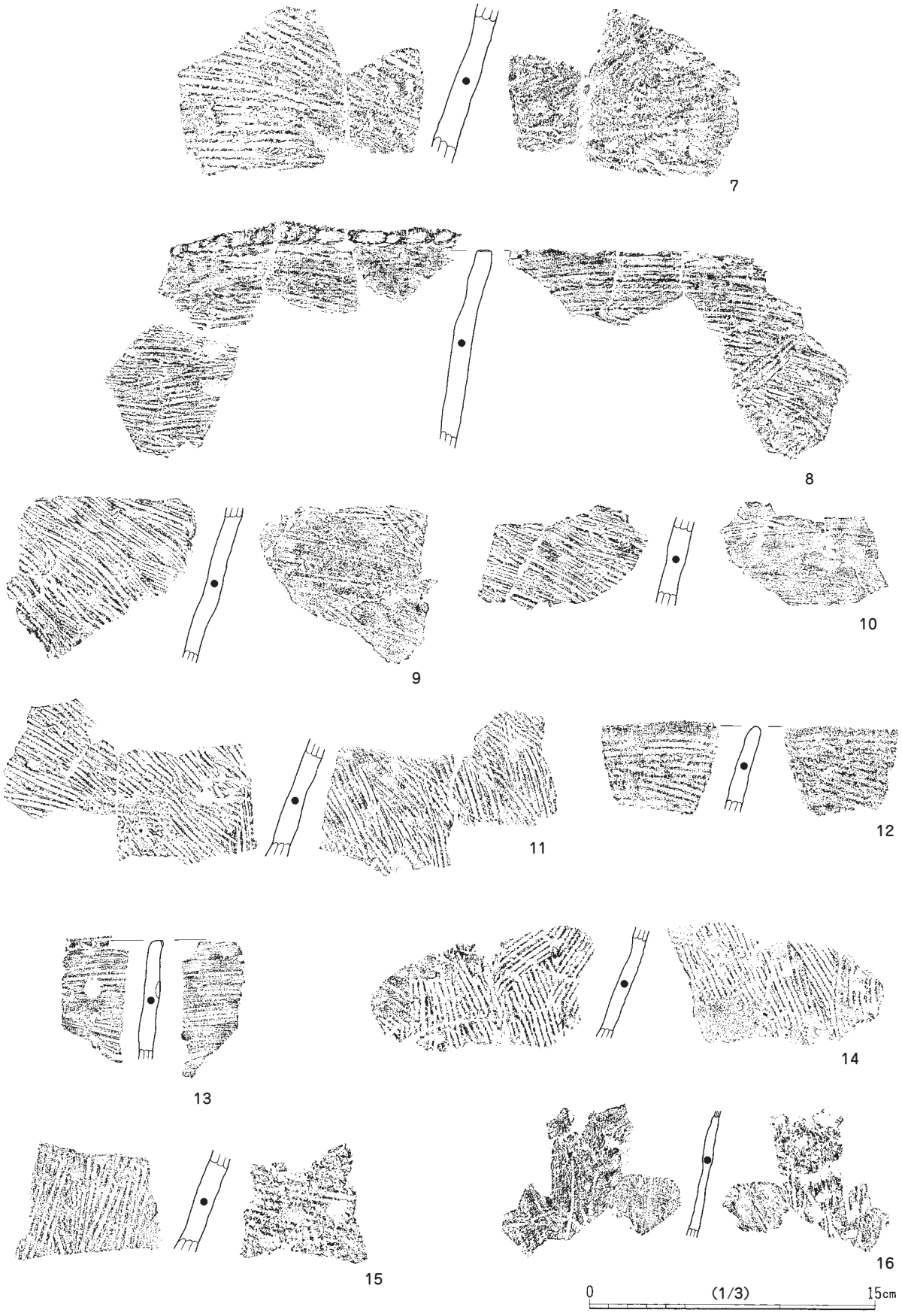
第209図　SI113号住居跡・出土遺物

の施文が一部にみられる。また肥厚した口縁にも縄文が施文されているため、これらは井草Ⅰ式に属するものとなろう。４～６は胴部片で、６の原体は無節のようである。７～12は条痕文系土器でいずれも胎土には繊維が混入される。繊維の混入量は概して少ない。７の胴部には浅く条痕が施され、裏面はヘラにより整形されている。８は口縁部の小片で、口唇に刻み目、口辺には刺突による文様がみられる。茅山下層式となろう。９は小破片３点が接合したもので表裏に条痕がみられるが器面での凹凸が著しい。10は表裏に条痕が施されており深鉢の有段部にあたる。破損部では粘土接合痕が露わとなり、接合部の補強を兼ねた有段の状況が観察できる。11・12は底部に近い破片で、器面は赤褐色であるが、裏面には煤状炭化物の付着がみられる。

SI205－Ｂ号住居跡（第210・211図、図版67・85）



第210図　SI205－B号住居跡・出土遺物（1）



第211図　SI205－B号住居跡出土遺物（2）

本跡はＤ３区において検出された住居跡で台地東南部の縁に位置していた。その形状は円形ないしは隅円方形を呈しており、長径は4.2m、短径は4.1ｍを計測する。遺構確認面からの掘り込みは、第Ⅳ層であるハードロームをも削平しており約60cmの深さで床面となる。床面は低地に向かってやや傾斜しており、柱穴や周溝は確認できなかった。遺構内覆土からは約70点余の条痕文系土器が出土しており、施文された土器を中心に図示した。その文様等から茅山下層式となろう。出土状況をみると、床面に接する位置から出土した土器は少なかったが茅山下層式期の住居跡として相違なかろう。また西側コーナー部分には床面を30cmほど掘り込んで炉穴が検出されており、本跡の壁面に火床部が認められた。このことから本跡に伴う炉跡ではなく、廃棄された後に設けられたものと思われる。

なお、堆積土は２層に分離でき、第１層は暗褐色土（ローム粒を多く含む）、第２層は褐色土（ローム粒を含む）によって構成されていた。

遺物　１～４は同一個体となる。波状口縁を呈した深鉢形土器で口唇部にはほぼ１cm間隔で刻み目を施す。口辺部には縦方向や斜行する半截竹管による押し引きが認められる。また表裏面は被熱により赤褐色に変色している。５～７も同一個体であり、胴部の弯曲から推察するとかなり大きな口径となろう。口辺部の文様構成は前者と同様になる。大型品ゆえか器厚は12mm～13mmと厚い。内面では剥落が著しい。８～11も同一個体で平縁の口縁となる。器面は条痕による整形のみで文様は認められない。焼成は良好で堅緻な仕上がりとなっている。12は繊維の含有量が少なく器面は若干磨耗している。13は器面の穿孔を試みており約３mmほど窪んでいる。口唇部は平坦で僅かな刻み目が付されている。14は胴部片で内外面が条痕によりきれいに整形されており焼成も良好である。15は裏面の剥落が著しい。胎土には繊維がほとんど含まれていない。16は小型品で器厚が５mmと薄く、器面はヘラ状工具で軽く整形しただけで無文に近い。底部はおそらく尖底となろう。

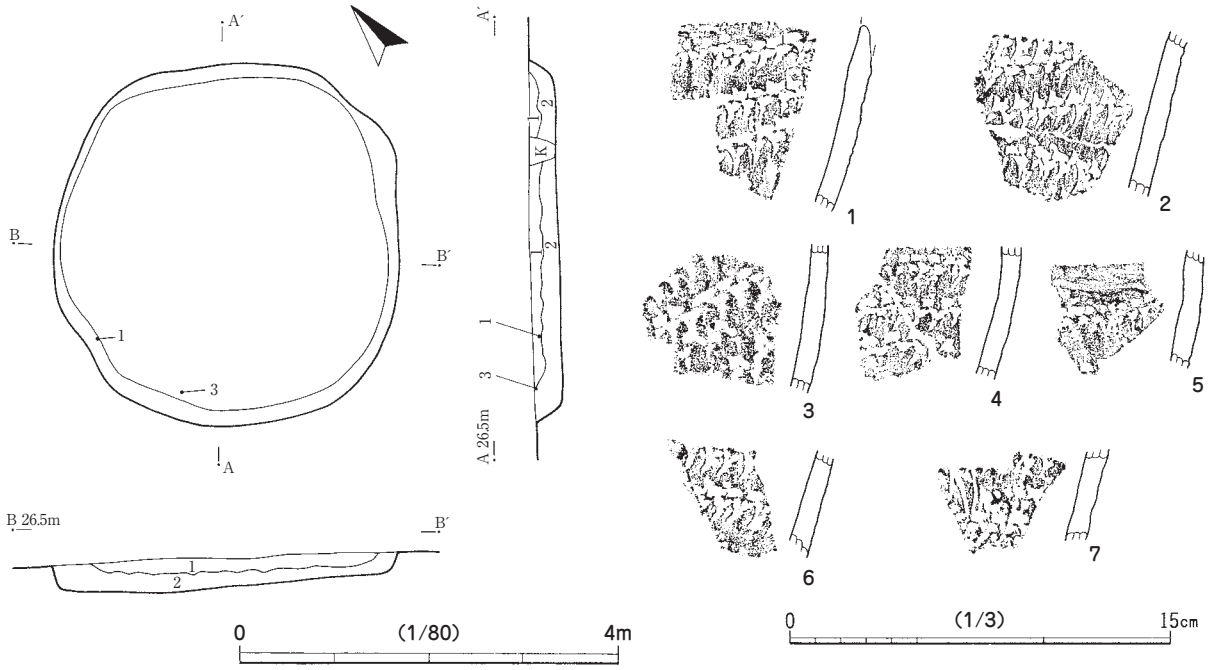
SI373号住居跡（第212図、図版68・86）

本跡はＯ３－70グリッドを中心に検出された遺構で台地の南西部に位置していた。その形状はほぼ円形呈しており、長径は3.85m、短径は3.65ｍを計測する。遺構確認面からの掘り込みは約30cmとなり、床面は明確に捉えきれず炉跡や柱穴・周溝等も認められなかった。このため積極的に住居跡と認定することはできないが、掘り込みは平面的な広がりを有しており、壁面もしっかりしていたため住居跡として取り扱った。出土遺物は土器のみで40点ほど出土しており、比較的大形の破片を図示した。出土層位は概ね覆土第２層の直上となる。堆積土は２層に分離でき、第１層は黒褐色土、第２層は褐色土（暗褐色に近い）によって構成されていた。こうした点を踏まえると、第２層が床面であった可能性も否定できない。いずにせよ炉跡は存在していないが出土土器から浮島Ⅲ式期に営まれた住居跡と考えたい。

遺物　合計７点を採拓した。いずれも胴部片でヘラ状工具により三角文を描出している。１・２・４・６などは同一個体と思われる。７は一部に二枚貝の腹縁らしき施文も認められる。これらの土器群は器面の文様構成から浮島Ⅲ式と見做される。なお、図示した他に同時期の小片が30点ほど出土している。

SI328号住居跡（第213・214図、図版67・86・87）

本跡は昭和52年度の確認調査においてＫ５－14グリッドでその一部が検出され、平成３年度の調査によりその全容が明らかにされた住居跡である。その位置は台地中央部よりやや南となり、住居跡の形状はほぼ円形で、長径は4.8m、短径は4.1ｍを計測する。主軸方向は概ね南北方向を示す。南には柱の痕跡であるＰ８～Ｐ11によって支えられた出入り口が設置されている。遺構確認面からの掘り込みは20cm前後と

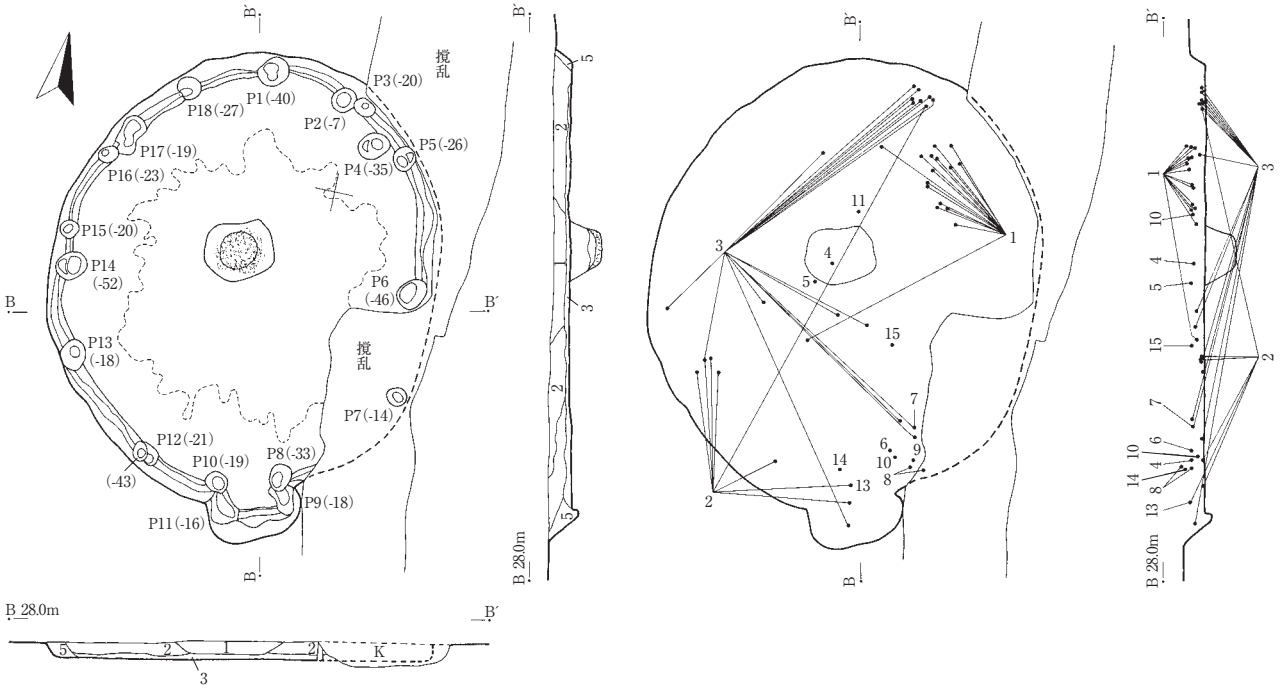


第212図　SI373号住居跡・出土遺物

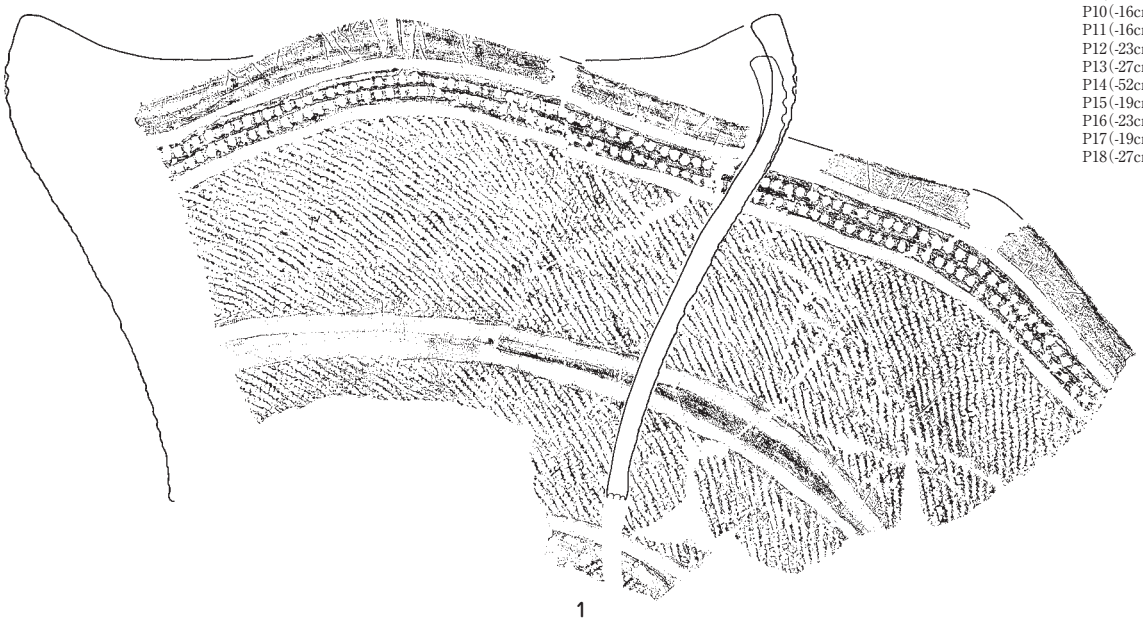
なり全体の平面プランは明確に把握できた。床面は炉跡周辺を中心として広範囲に硬化面（破線部分）が認められた。上屋を支える主柱穴は定位置に存在しておらず、壁に沿って18か所に柱穴痕が検出されている。それぞれの深さは床面から５cm～52cm（挿図参照）とその差は大きいものの大半は壁柱穴と考えられよう。その中でもＰ１・Ｐ５・Ｐ14などは、深さから上屋を支える柱穴痕と思われる。Ｐ７は撹乱下に存在したが床面部の高さから算出した。周溝は南東部分に撹乱が認められるものの全周していたものと推測できる。炉跡は中央よりやや北に設置され円形に掘り窪められていた。中央部では約30cmの深さを計測し、底面では10cmほどの厚さで焼土の堆積が確認できた。また、ハードローム部分まで掘り込まれていたため炉跡面は著しく赤褐色に変色していた。出土遺物は器形の把握できる一括土器及び土器片の他に石器（砂岩製打製石斧）がみられ、一括品は広く散って出土した。時期的には加曽利Ｅ２式から同３式の土器が出土しており、一括品から本跡は加曽利Ｅ３式期に営まれた住居跡となろう。

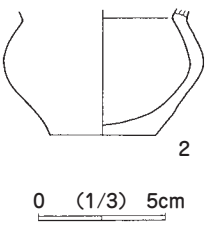
堆積土は５層に分離でき、第１層は黒褐色土（ローム粒・焼土粒を若干含む)、第２層は暗褐色土（ローム・ローム粒を若干含む)、第３層は暗褐色土（堆積は密で、２cm前後のロームブロックを若干含む)、第４層は暗褐色土（ローム粒を若干含む)、第５層は暗褐色土（第３層よりもロームブロックを多く含む）によって構成されていた。

遺物　１は緩やかな波状口縁の深鉢で、器面全体にRLの縄文を回転させている。口辺部には太い沈線を巡らし沈線間を円形の刺突文をもって充填しており、胴部での沈線間は磨り消しにより縄文を消去している。２は破片がかなり分散して出土したものが接合した小型土器で口縁部を欠損する。口縁の欠損部は平坦で、一部に摩耗痕も認められるところから意識的な打ち欠きとも考えられる。器面はよく整形されているが、内面では凹凸が多々みられる。色調は赤褐色から淡褐色を呈する。無文のため確実な時期決定はできないが本跡に伴う土器とみてよいであろう。３は胴部の傾斜から鉢型のタイプとなろう。胴部に施文さ

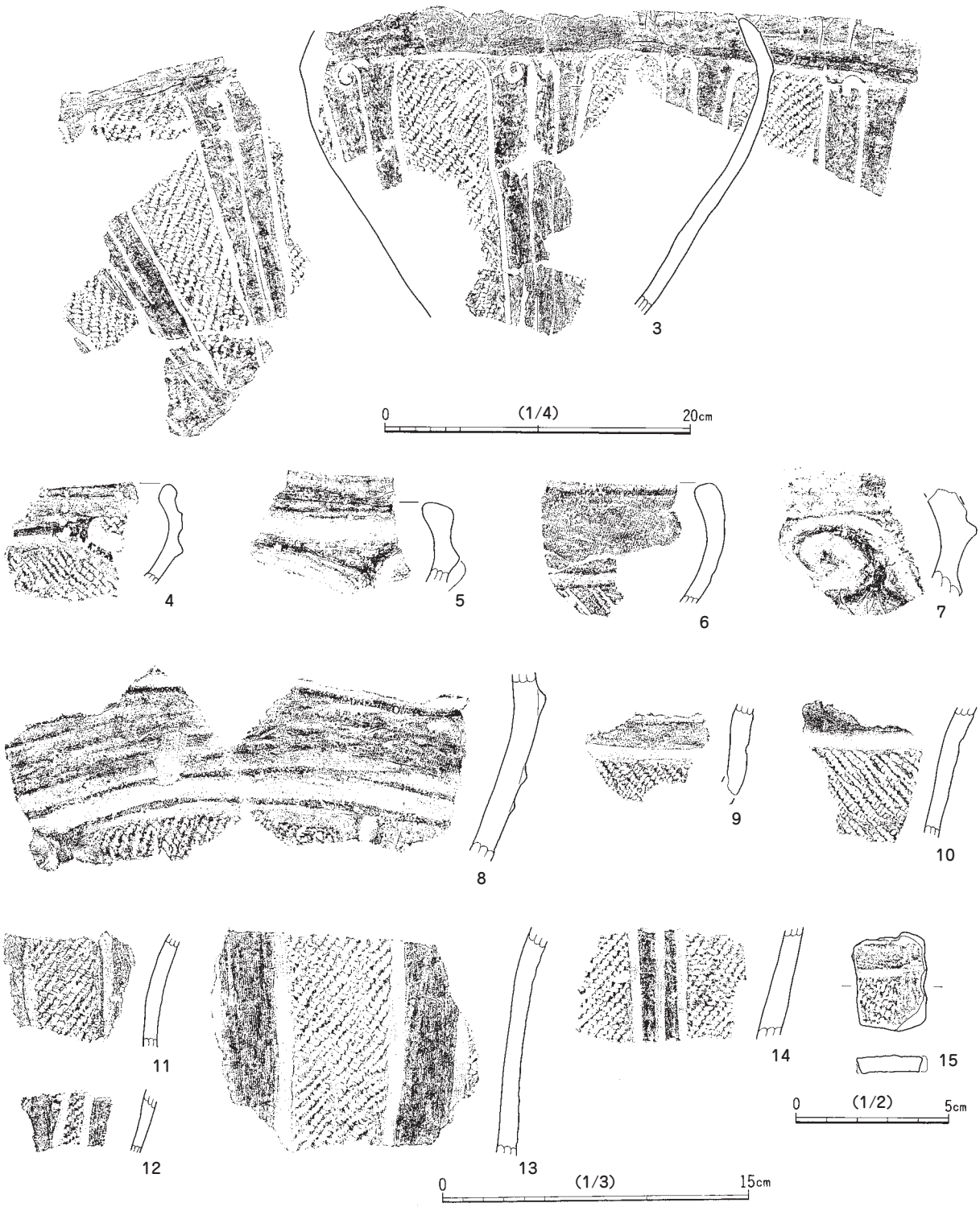


P1(-40cm)
P2(-5cm)
P3(-20cm)
P4(-34cm)
P5(-25cm)
P6(-45cm)
P7(-15cm)
P8(-33cm)
P9(-18cm)
P10(-16cm)
P11(-16cm)
P12(-23cm)
P13(-27cm)
P14(-52cm)
P15(-19cm)
P16(-23cm)
P17(-19cm)
P18(-27cm)





第213図　SI328号住居跡・出土遺物（1）



第214図　SI328号住居跡出土遺物（２）

れた縄文はLRの原体を用いたもので沈線による枠に囲まれ残される。磨り消し部分は蕨手状の沈線で飾られるが、これは口辺部によくみられる渦巻文の簡素化したものと考えられよう。時期的には前者同様加曽利Ｅ３式に属するものであろう。４～７はキャリパータイプの深鉢であり、４の口辺には幅広の沈線が使用され枠内には縄文が残る。５・７は口辺部に渦巻文を配している。６は浅く幅広の沈線下に半截竹管

を斜行させる。これらは１・３よりも古式の様相を呈しており加曽利Ｅ２式となろう。８は口辺部片でかなり大型の深鉢となるようである。器面は隆帯によって飾られ、その間はLRの縄文で充填されている。９・10は同一個体の可能性が強い。磨り消された無文部はよく調整されている。11～14は縦方向に縄文・沈線・磨り消し帯が認められる胴部片で、15は両側面に打ち欠きがみられる。土器片を再利用したものである。他に完形の打製石斧（第264図73）が１点出土している。

２、炉穴・焼土遺構（第215図～第219図、図版68～70・87・88）

本遺跡で検出できた炉穴は合計14基を数えた。その中心はM10区となり、ここでは合計11基が検出され、そのうちの１基（SK189）からは一括品に近い条痕文系土器が出土している。なお、この周辺では炉穴と同時期の土器群も比較的多く出土している。他はＥ８区・Ｂ４区・Ｅ３区の各区で検出されたものである。また炉穴はしばしば複数基が重複して検出されるが、本遺跡の場合には極端な重複例は少なかった。

一方、炉穴のように明確な掘り込みは認められず、皿状の緩やかな掘り込みの中に薄く焼土の堆積が確認できるような遺構が３Ｅ区と８Ｅ区を中心として合計16基が確認されている。住居跡に伴うものではなく単独で存在していたため、これらは「焼土遺構」としてここに含めて掲載することとした。このような焼土遺構では土器等の遺物はほとんど出土していないため所属時期を特定することはできなかったが、炉跡を有しない住居跡も存在しているため関連遺構としても考えられる。

SK050　本跡はＭ９－26・36グリッドにかけて検出された焼土遺構で、縄文期の生活面を掘り窪めた中に焼土（第１層）が堆積していた状況であった。特に中央部と北側には焼土が多く混入されていた。

SK054　本跡はM10－27グリッドで検出された焼土遺構で、前者同様に縄文期の生活面に設けられた焼土堆積層である。掘り込みは浅く、規模としても小さなものといえよう。焼土の混入も少なく（第１層）、遺物の出土は認められなかった。

SK056　本跡はＮ11－77・78グリッドで検出された炉穴で火床部は２か所で認められた。掘り込みは深く一部は第Ⅳ層～第Ⅴ層にあたるハードロームにまで達していた。火床部の中間点にはピットが穿たれており底面から15cmの深さを計測した。堆積土による前後関係は把握できなかったが、ａ号跡の焼土は散乱した状態にあったためｂ号跡からの移動とも考えられる。覆土中に含有された焼土は少なかった。出土遺物としては数点の条痕文系土器がみられた。いずれも覆土上層から出土したものである。

遺物（第218図１～３）　胴部片の３点を図示した。胎土には繊維が混入され、１・３は裏面での条痕ははっきりしない。２は表裏面を条痕によって整形している。器面の色調は２が赤褐色で、他は暗褐色となる。時期的には茅山式期となろう。

SK058　M11－91グリッドで検出された炉穴で火床部は２か所に認められた。火床部までの深さは確認面から40cmほどを計測する。ここでは火床部と対称の位置にピットが検出され、底面からＰ１は38cm、Ｐ２は22cmの深さを有していた。堆積土についてみると、第１層は暗褐色土（ソフトローム混入）、第２層は暗褐色土（焼土粒・ローム粒混入）、第３層は褐色土（焼土粒・ローム粒混入）、第４層は明褐色土（多量の焼土・ロームブロックを混入）となり、ｂ号跡の火床部直上を中心に覆土中から多くの条痕文系土器が出土した。

遺物（第218図４～13）　４～13は接点が見いだせなかったため個別に採拓した。器内外面の観察から大半は同一個体であったものと思われた。口唇部は平坦な作りとなり、胎土には繊維を多く含む。４では焼成

前に穿たれた孔が３か所にみられる。色調は口縁部（４・５）から胴部（６～８）にかけては黒褐色から暗褐色を呈し、同下部（９～11）では赤褐色に変色している。条痕による器面の整形は鮮明であるが、裏面ではやや粗雑となる。なお、器形に変化はみられず条痕のみの施文という点から茅山上層式に属するものと思われる。

SK059　本跡はM11－84グリッドで検出された炉穴で南北方向に火床部が確認できた。火床部の底面は若干掘り込まれていた。堆積土は９層に分離したが、基本的には第２層の黒褐色土、第３層の褐色土、第４層の明褐色土によって構成されていた。遺物は覆土中から条痕文系の小破片が出土した。

遺物（第218図14・15）　14は表面が褐色を呈し、裏面での条痕は認められない。15の器面は赤褐色、裏面は黒褐色となり、胎土には繊維が多く含まれる。

SK061　本跡はM10－00・01にかけて検出された炉穴で、長軸は210cm、短軸は165cmを計測し楕円形を呈していた。火床部は北西壁に沿って設けられており、火床面はよく焼けた状態を観察することができた。焼土は20cmほどの厚さで堆積していた。遺物は覆土上層から小破片が数点出土している。

遺物（第218図16～18）　状態の良好な３点について採拓した。16は口縁部で、口唇には指頭による押捺が加えられている。器形は大きく外反する波状口縁となろう。17・18はともに胴部の小破片で表裏に条痕がみられる。いずれも胎土には繊維を含む。

SK065　本跡はＬ９－04グリッドとＬ10－94グリッドにかけて検出された炉穴で長軸235cm、短軸90cmを計測する。焼土層の分布範囲は広く、その中心部では約10cmの堆積が確認できた。図示した第１層は焼土層で、第２層は底面が焼けた層となる。いずれにせよ長期に亘って使用されたものと考えられる。また南西壁面に接して深さ23cmのピットが穿たれていた。遺物の出土は皆無であった。

SK066　本跡はＬ９－32・33グリッドにおいて検出された炉穴である。平面形はほぼ楕円となり、長軸115cm、短軸65cmを計測する。掘り込みは深くハードロームの上面にまで達していた。火床部の状態は被熱により赤褐色に変色しており、使用の頻度は高かったものと思われた。覆土についてみると、第１層は暗褐色土（焼土粒・ローム粒混入）、第２層は明褐色土（ローム・ロームブロック混入）、第３層は焼土層という堆積であった。ここでも遺物の出土は認められなかった。

SK068　本跡はＬ９－43グリッドにおいてSK067（土坑）と一部が重複するような位置で検出された。平面形は不整な楕円形といえよう。長軸は145cm、短軸は100cmを計測する。確認面からの掘り込みは20cm弱と浅いものの堆積土中には焼土の散布が著しかった。火床部は北壁に面した部分に設けられていたが、覆土除去後の精査で中央部においてさらに若干の掘り込みが認められた。そこにはハードロームが被熱により赤褐色に変色していたため火床部が２か所に存在していたことが判明した。いずれにせよ本跡は長期にわたって使用されていたものとなろう。ここでも遺物の出土は認められなかった。

SK069　本跡はＬ９－25グリッドで検出された炉穴である。形状はほぼ楕円形を呈し、長軸は145cm、短軸は75cmを計測する。掘り込みは深く、ソフトローム面からハードロームを削除し火床部としていた。中心部での堆積土は３層に分離でき、第１層が暗褐色土（約20cm）、第２層が褐色土（５cm前後）、第３層は焼土層で火床部では10cmほどの層厚となっていた。ここでも遺物の出土は認められなかった。

SK073　本跡はＬ９－64グリッドを中心に存在した炉穴で火床部だけの検出となった。南側部分ではソフトロームが削平されていたため足場部分の詳細については不明確である。残された火床部の掘り込みは深く確認面から20cmほどで焼土を多く混入していた。また北壁に接した部分ではハードロームが被熱し赤

褐色に変色していた。ここでも遺物の出土は認められなかった。

SK080　本跡はＯ10－31グリッドで検出された炉穴で、形状はほぼ楕円形を呈していた。長軸は135cm、短軸は75cmを計測する。確認面からの掘り込みは約20cm程度で、火床部ではさらに10cmほど掘り込まれていた。覆土は３層に分層でき、第１層は褐色土（焼土粒・ローム粒混入）、第２層は赤褐色土（焼土層）、第３層は褐色土という構成であった。なお、覆土上層から条痕文系土器の小片２点が出土しているが図化は省略した。

SK081　本跡はＯ10－40グリッドで検出された炉穴で、底面はソフトローム面の下部となる。形状は隅円長方形に近い。長軸は145cm、短軸は70cmを計測する。覆土は３層に分層され、第１層は褐色土（焼土粒・ローム粒混入）、第２層は褐色土（焼土混入）、第３層は明褐色土という構成であった。ただ火床部の底面では焼土は混在するものの被熱の痕跡は確認できなかった。遺物は覆土上層から条痕文系土器の小片が４点出土した。

SK083　本跡はＭ９－22グリッドで検出された焼土遺構である。焼土は７cm～８cmの厚さでレンズ状に堆積していた。底面は基本層序でいうところの第Ⅱ層に該当するため前述したSK050・054と同類で屋外炉としての機能を有したものとも考えられる。遺物の出土はみられなかった。

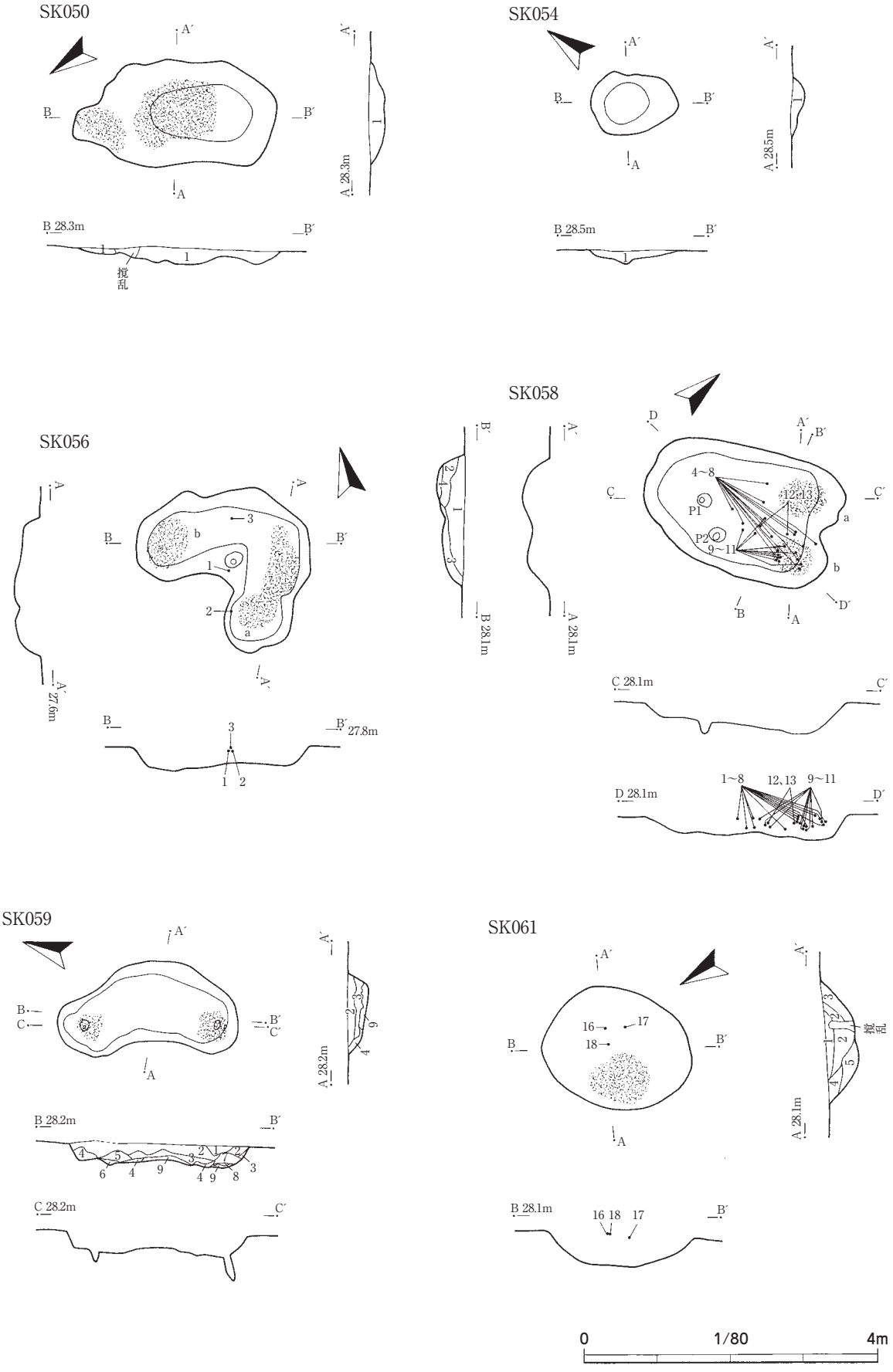
SK084　本跡はM10－66グリッドで検出され、ソフトローム層を10cmほど掘り込んだものであった。このため炉穴というよりは焼土遺構と考えられる。約1/2は確認時に削平しており、長軸約60cmで楕円形を呈していたものと思われる。遺物の出土は認められなかった。

SK168　本跡はＢ４－46グリッドにおいて奈良・平安時代の住居跡（SI157）によって約1/2が削平された状態で検出された炉穴である。本跡の掘り込みは深く、足場部分は住居跡の確認面から70cmほど掘り下げられていた。このため火床部は住居跡床面下に辛うじて残存していたため炉穴と認定できた次第である。遺物は足場部分の上層から１点と住居跡下より２点が出土した。なお覆土は、第１層が暗褐色土、第２層が褐色土、第３層が暗褐色土、第４層が褐色土（ロームブロック混入）となり、いずれの層にも焼土の混入がみられた。

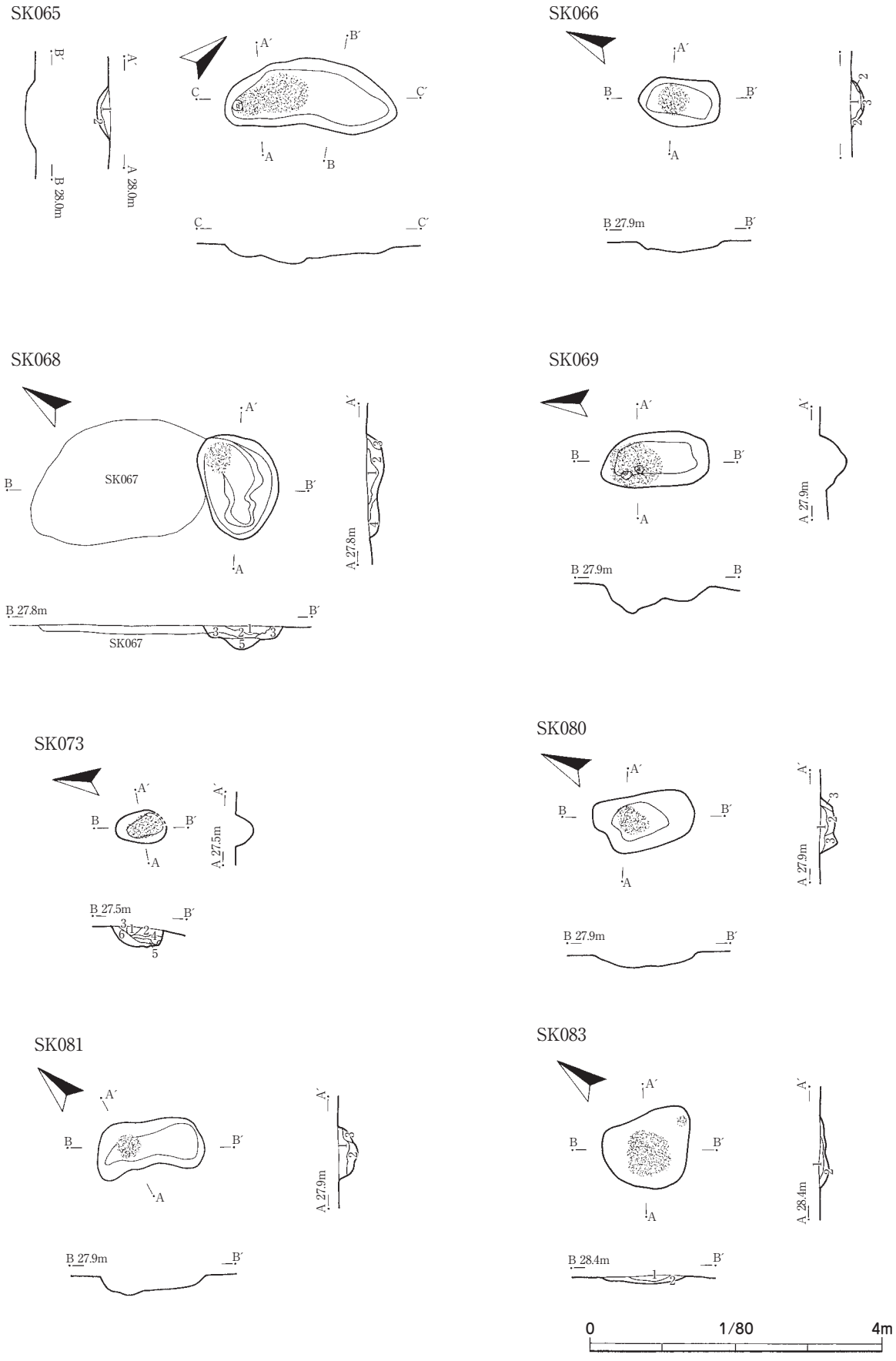
遺物（第218図19～21）　３点は表裏面にみられる条痕・色調、繊維の混入度等から同一個体と見做される。器形は有段の大型深鉢となろう。19は波状口縁で、その頂部には浅い凹みがみられる。口辺部には縦方向に粘土帯を貼付しヘラによる刻み目を加え、さらに粘土帯の左右に浅い沈線を施す。また有段部では粘土帯と同様に下方からの刺突がみられる。20は口辺でヘラによる浅い沈線が縦・斜方向に施される。21は大型の胴部片である。上部の部分の推定径は25cmとなる。時期的には器形や施文から茅山下層式となろう。なお、本跡は奈良・平安期の住居跡（SI157）と重複していたため、19・21は住居跡覆土から出土したものである。

SK174　本跡はＢ４－30グリッドで検出された焼土遺構でソフトローム層直上に焼土が堆積していたものである。形状は50cm～55cmの円形を呈しており、堆積土は第１層～第３層までが赤褐色土となる。下部にむかって焼土の量は減少していた。第４層・第５層は褐色土へと変化し、第５層では焼土は僅かに認められる程度であった。遺物の出土はみられなかった。

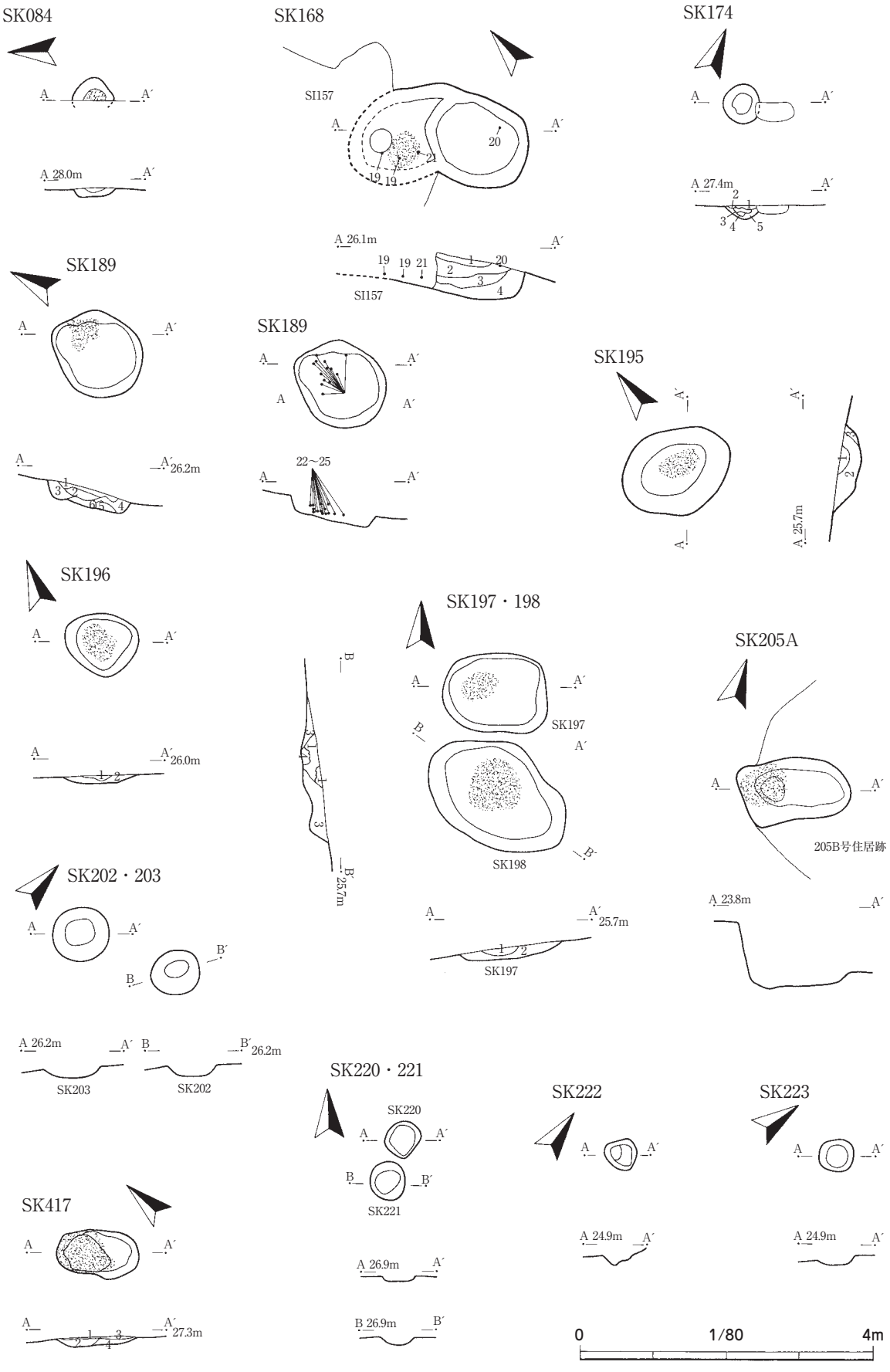
SK189　本跡はＢ４－46グリッドで検出された炉穴で、ほぼ円形を呈し長軸130cm、短軸110cmを計測する。傾斜している断面から推測すると足場の部分は削除されてしまった可能性もある。火床部上には10cmほどの焼土層が堆積し、その上面から一括土器が出土している。覆土は６層に分離したが、基本的


SK050
A´
B
B´
A
A´
1
A 28.3m
B 28.3m
B´
1
1
撹乱
SK054
A´
B
B´
A
A´
1
A 28.5m
B 28.5m
B´
1
SK056
A
A´
B
B´
3
b
1
2
a
A´
A
A´ 27.6m
B
B´ 27.8m
3
1 2
SK058
B´
2
4
1
3
B 28.1m
A´
A 28.1m
D
A´
B´
4~8
C
C´
P1
12、13
a
P2
9~11
b
B
A
D´
C 28.1m
C´
1~8
12、13
9~11
D 28.1m
D´
SK059
A´
B
C
B´
C´
A
A´
2
3
9
4
A 28.2m
B 28.2m
B´
4
5
6
4
9
3
2
1
2
4 9
8
3
C 28.2m
C´
SK061
A´
B
16
17
18
B´
A
A´
3
2
1
2
5
4
撹乱
A 28.1m
B 28.1m
16 18
17
B´
0
1/80
4m

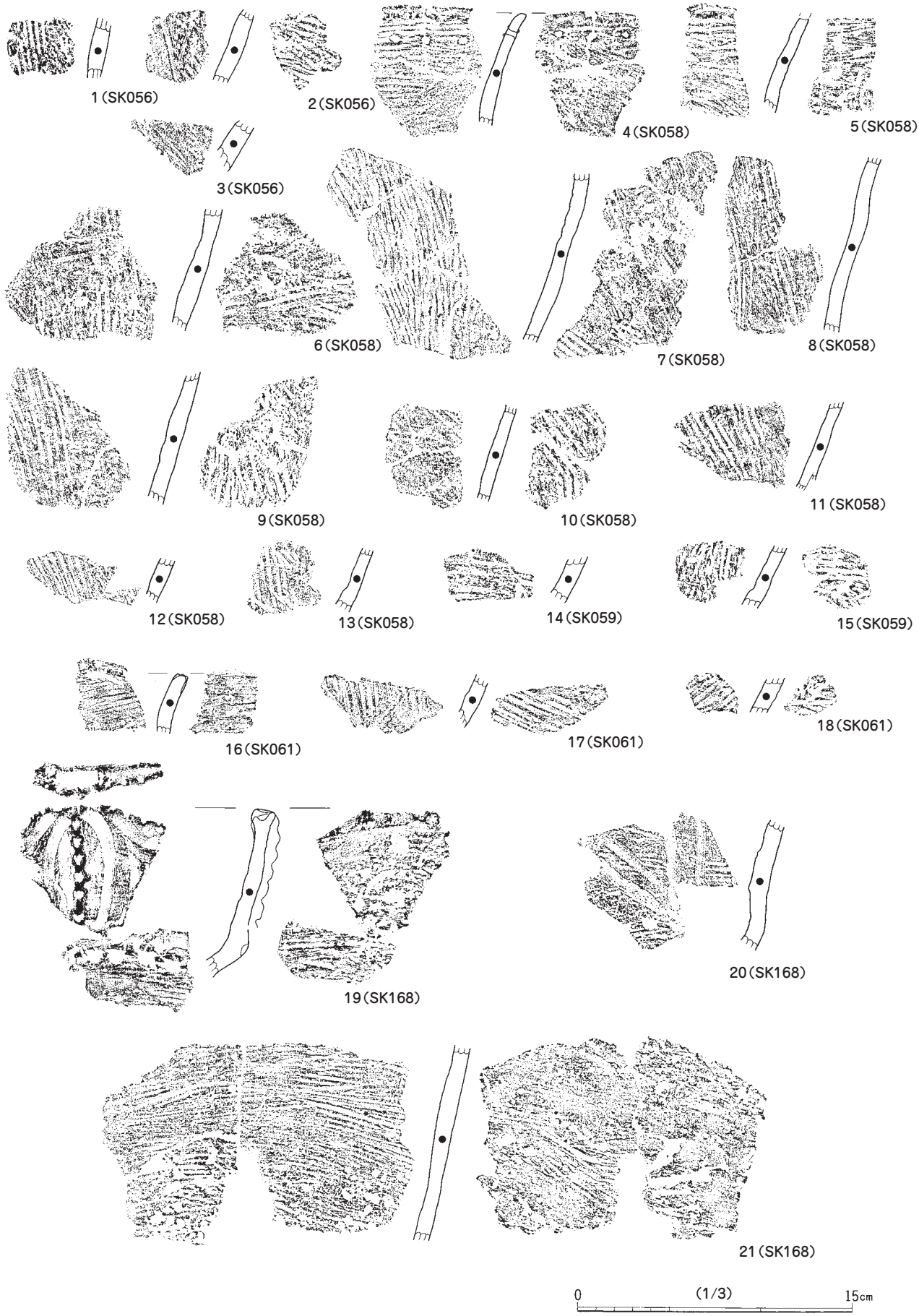
第215図　炉穴（1）


SK065
SK066
SK068
SK069
SK073
SK080
SK081
SK083
SK067
0
1/80
4m

第216図　炉穴（2）


SK084
SK168
SK174
SK189
SK189
SK195
SK196
SK197・198
SK205A
SK202・203
SK220・221
SK222
SK223
SK417
SI157
SK197
SK198
SK203
SK202
SK220
SK221
205B号住居跡
0
1/80
4m

第217図　炉穴（3）



第218図　炉穴出土遺物（１）

第219図　炉穴出土遺物（２）

には暗褐色土で構成されていた。第１層は焼土粒混入、第２層は焼土粒とローム粒を混入、第３層は焼土粒とロームブロックを混入、第４層は前者よりもやや暗く焼土粒混入、第５層はローム粒混入、第６層はローム粒混入の焼土層となっていた。

遺物（第219図22～25）　図示した４点は同一個体であり、22は口縁から胴上半部までが接合し逆「く」の字に屈曲する緩やかな段が２か所にみられる。口縁から下段までに文様が施されており、SK168出土品と

ほぼ同様な施文がみられる。相違点としては段上に施される刻み目が本跡出土品の場合はヘラで刺突するかのごとく施文している。器形は山形を呈した波状口縁の深鉢で２段目の「く」の字直下では推定径30cmを計る。所属時期もSK168と同時期のものとなろう。

SK195　本跡はＤ８－13グリッドで検出された焼土遺構である。この周辺は東に位置する小支谷に向かって傾斜する場所となる。東側の一部は撹乱によって明確に把握できない部分もあったが、形状は楕円形を呈し、長軸は150cm、短軸は115cmを計測する。遺物の出土は認められなかった。覆土は、第１層が焼土層で、第２層が暗褐色土（ローム粒・ロームブロックを若干混入）、第３層は褐色土（ローム粒・ロームブロックを混入）となり、炉穴の堆積土とは異なるため焼土遺構として取り扱った。遺物は出土していない。

SK196　本跡はＥ８－34グリッドで検出された焼土遺構で、基本土層の第Ⅱ層となる暗褐色土を若干掘り込んでいる。覆土についてみると、第１層が暗褐色土を混入する焼土層で、第２層が褐色土（焼土粒・ローム粒混入）となる。遺物は出土していない。

SK197・198　Ｆ８－79グリッドで南北に隣接して検出された焼土遺構である。第Ⅲ層のソフトローム層中に構築されてた。堆積していた覆土についてみると、SK197は第１層が焼土層で、第２層が褐色土（焼土・ローム粒・暗褐色土混入）となる。SK198は４層に分離したが、第１・２・４層が焼土を含む堆積土となり、特に第２層は焼土層として捉えることができた。第３層は褐色土（ローム粒・暗褐色土混入）となる。なお、底面も若干焼けていたため屋外炉とも考えられた。

SK202・203　Ｅ３－85グリッドで互いに接近した位置に存在していた。平面形は径70cm～75cmの円形を呈し皿状に掘り込まれ、深さは共に15cmほどを計測する。覆土は焼土混入の暗褐色土であった。なお、SK202では縄文前期の小破片が出土した。小片のため図化は省略した。

SK205－Ａ　本跡は、SI205－Ｂ号住居跡内に構築された炉穴で、住居跡を約20cmほど切り込んで設置されたものである。形状は楕円形に近いもので、長軸は145cm、短軸は85cmを計測する。

遺物（第210・211図）　住居跡の項で取り扱っており、12・13・15と５・７・14が出土している。後者の３点は住居跡出土の破片と接合しているため積極的にその所属を断定することはできない。覆土については、住居跡の排土を優先したため焼土部分を確認したにとどまった。他には磨石が出土している。

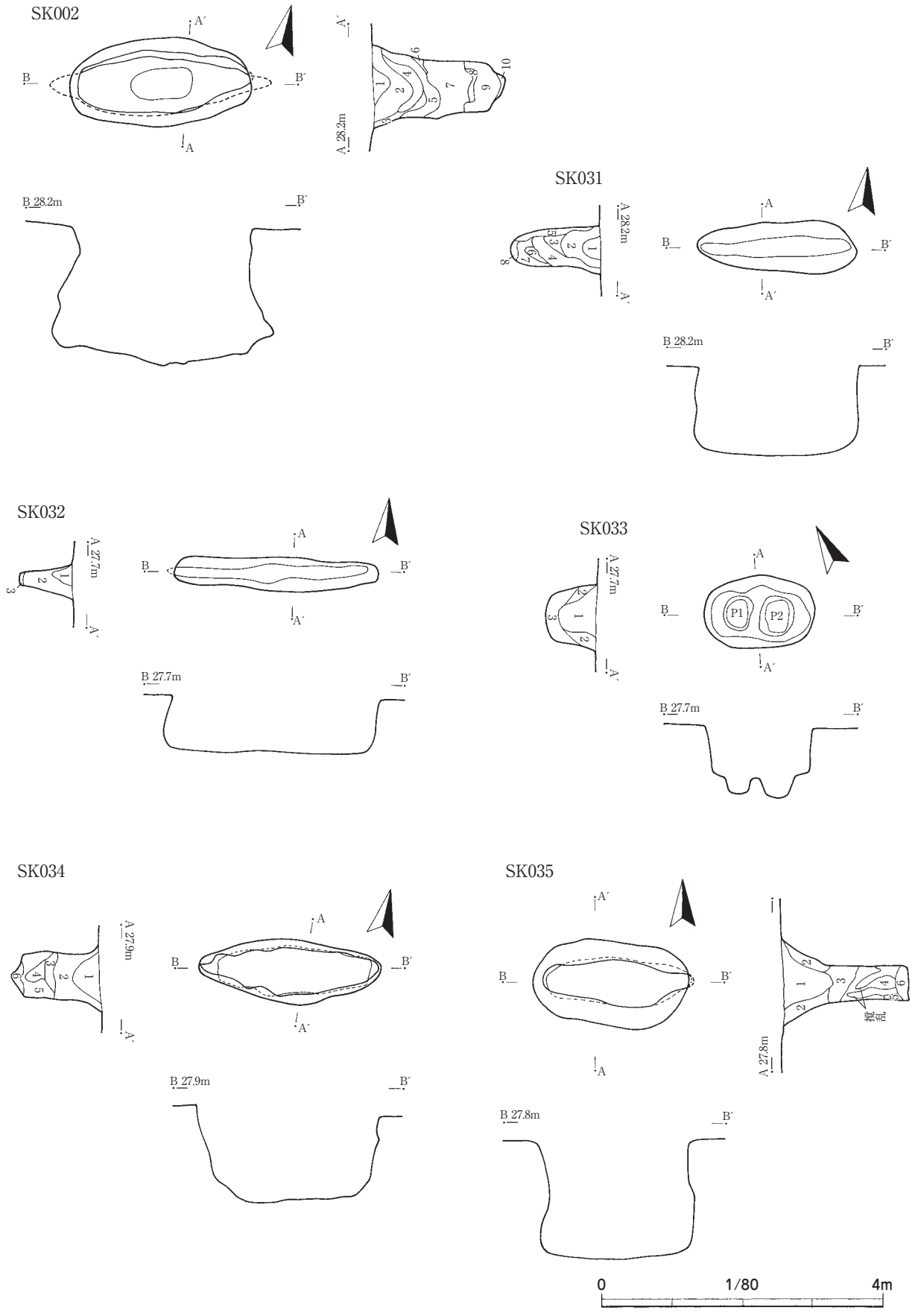
SK220・221　本跡もＥ３－46・56グリッドにおいて近接して検出された焼土遺構である。ソフトローム層の上面を約10cm掘り込んだ浅いピットとなる。遺物の出土は認められなかった。

SK222・223　本跡もＥ３－87、同－96で検出された径50cm程度のピットである。遺構確認面は前者と同様にソフトローム層であった。ここでも遺物の出土は認められなかった。

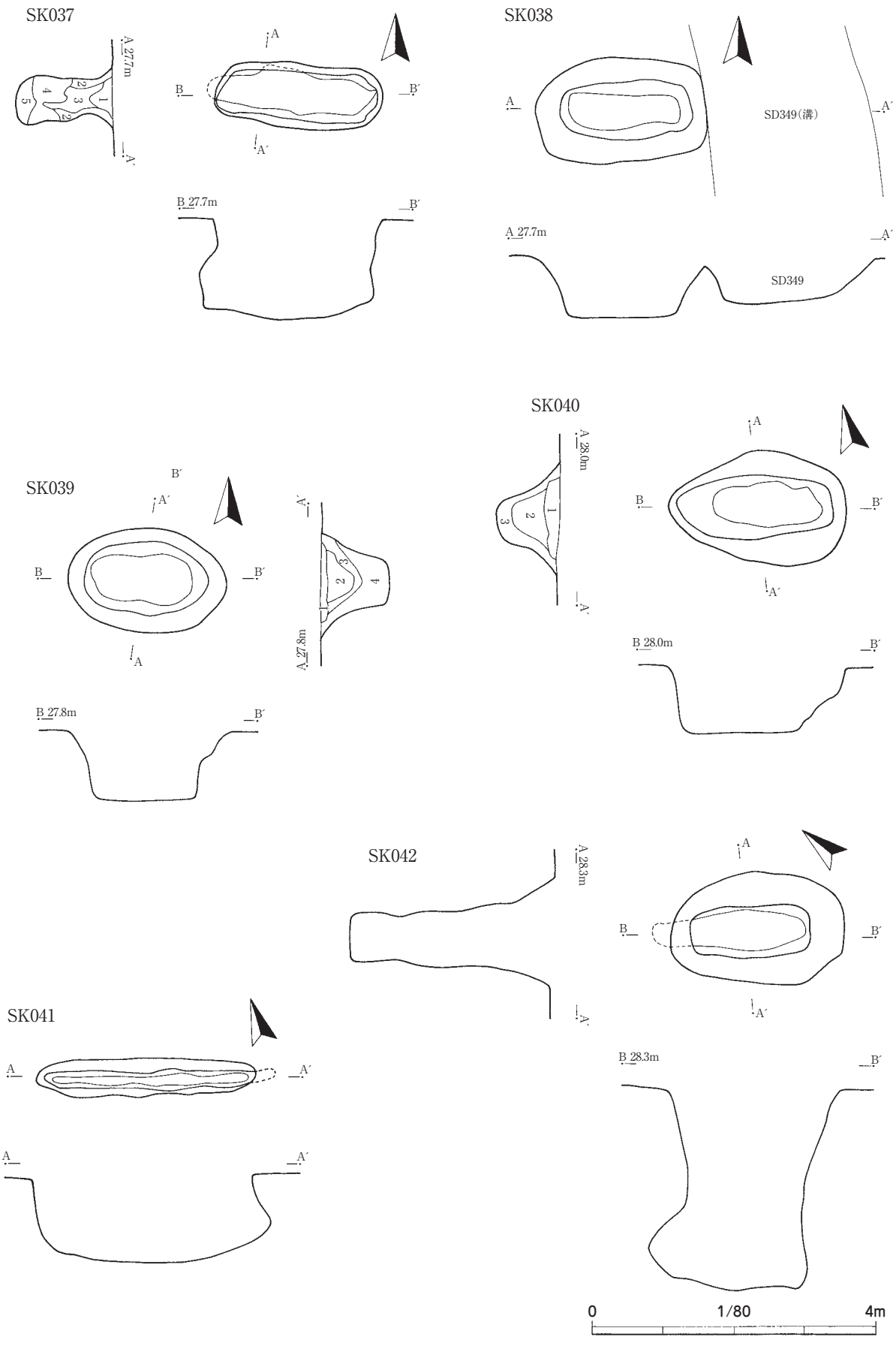
SK417　本跡はＯ６－52グリッドで検出された焼土遺構でソフトローム面を10cmほど掘り込んだものである。形状は楕円形で、長軸が115cm、短軸が60cmを計測する。堆積土は４層に分類できた。第１層は赤褐色土（焼土を多く含む）。第２層は暗褐色土（焼土粒混入）。第３層は褐色土（焼土粒を若干混入）。第４層は暗褐色土という堆積がみられた。

３、陥穴（第220図～第236図、第241図、図版70～82・88・89）

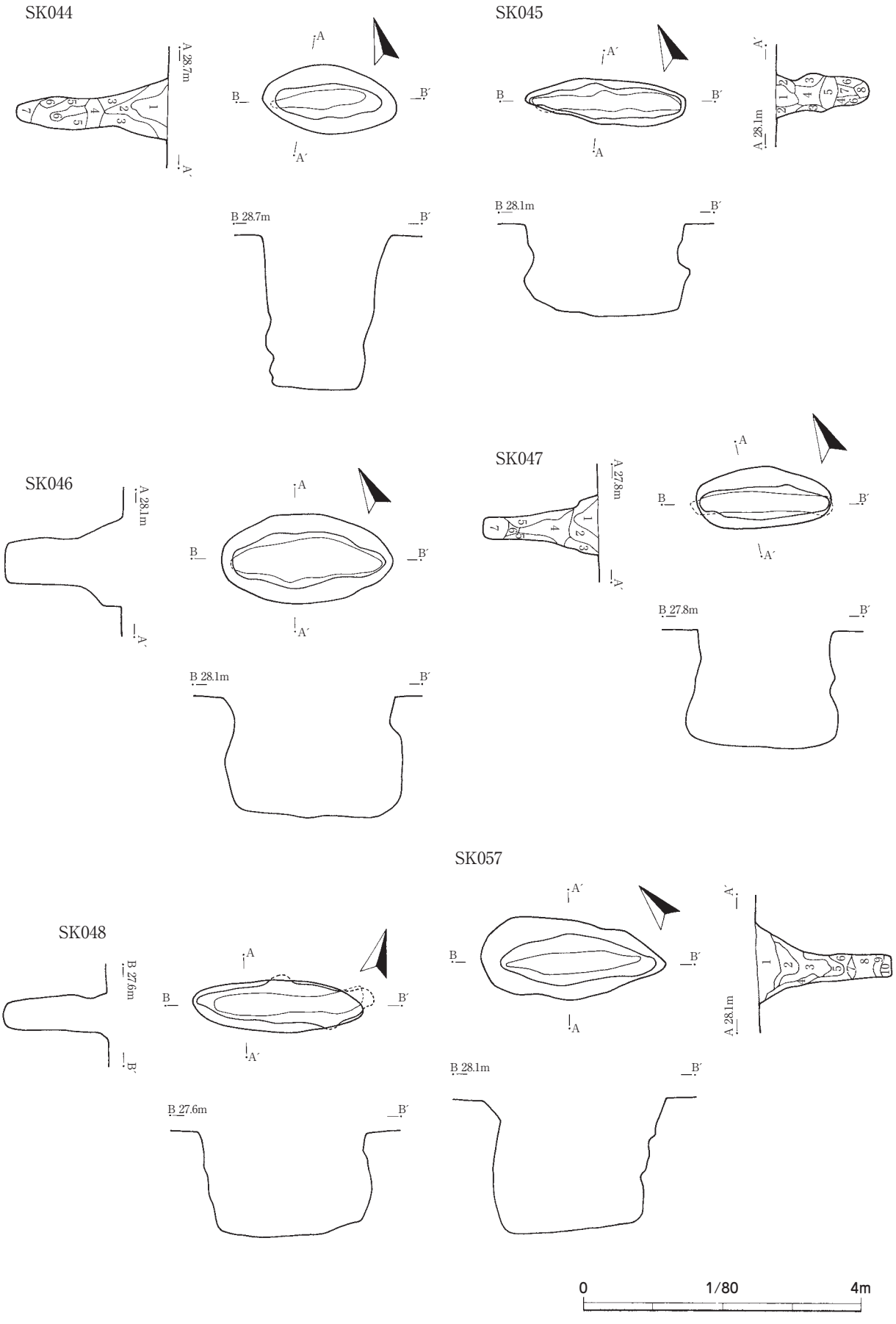
陥穴と考えられる遺構は合計99基を検出できた。それらの分布はＯ10区、Ｐ10区の調査区北西部やＤ４区といった台地の東南縁辺部で集中的に検出されている。遺構内部に堆積した土層は図示したとおりほとんど同様な堆積順序を示していた。遺物も早期に位置づけられる土器群が若干出土しているが、小破片が



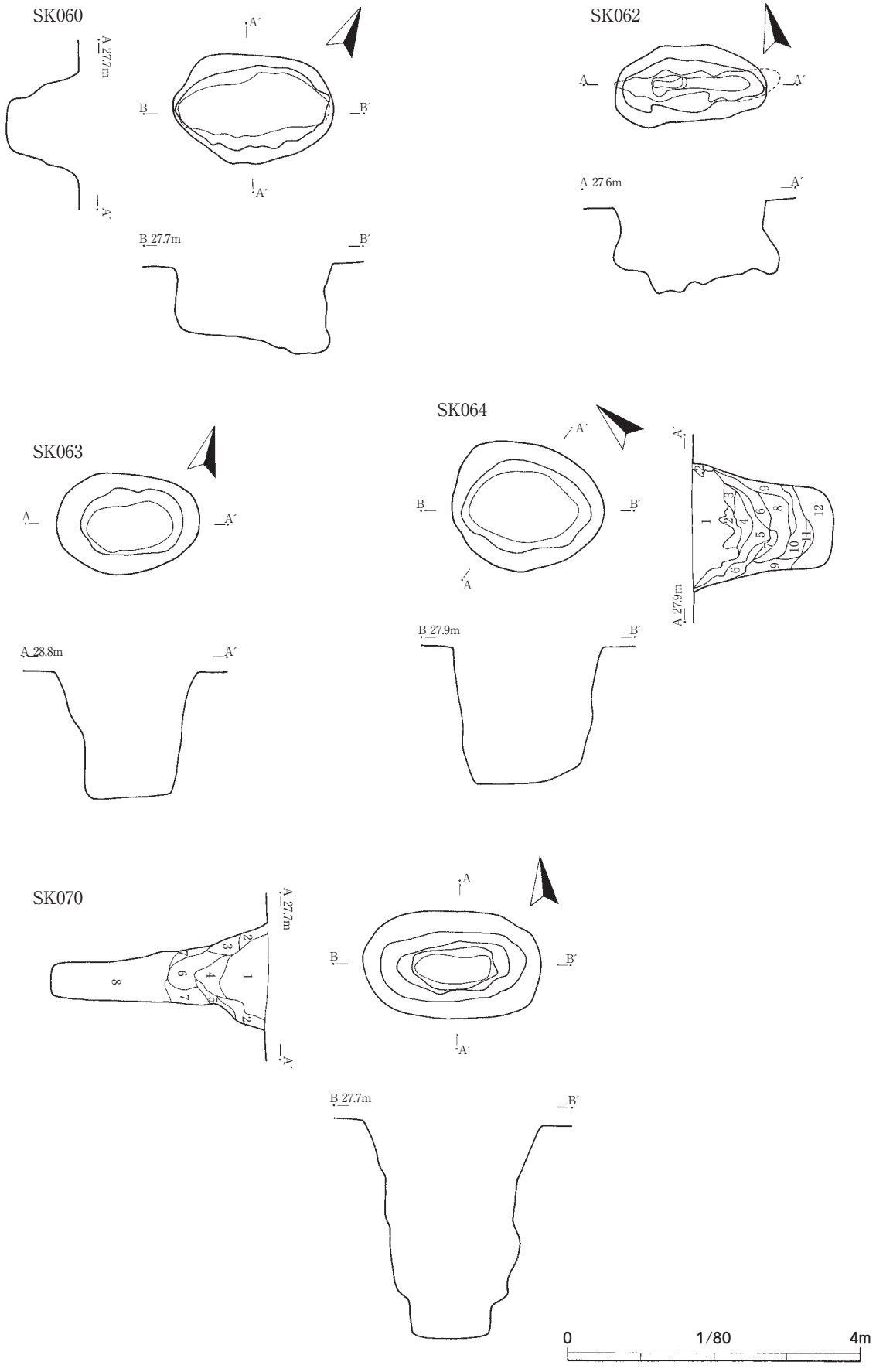
第220図　陥穴・土坑（1）


SK037
A 27.7m
A
A′
B
B′
1
2
3
4
5
B 27.7m
SK038
SD349(溝)
A 27.7m
SD349
SK039
A 27.8m
B 27.8m
SK040
A 28.0m
B 28.0m
SK042
A 28.3m
B 28.3m
SK041
0
1/80
4m

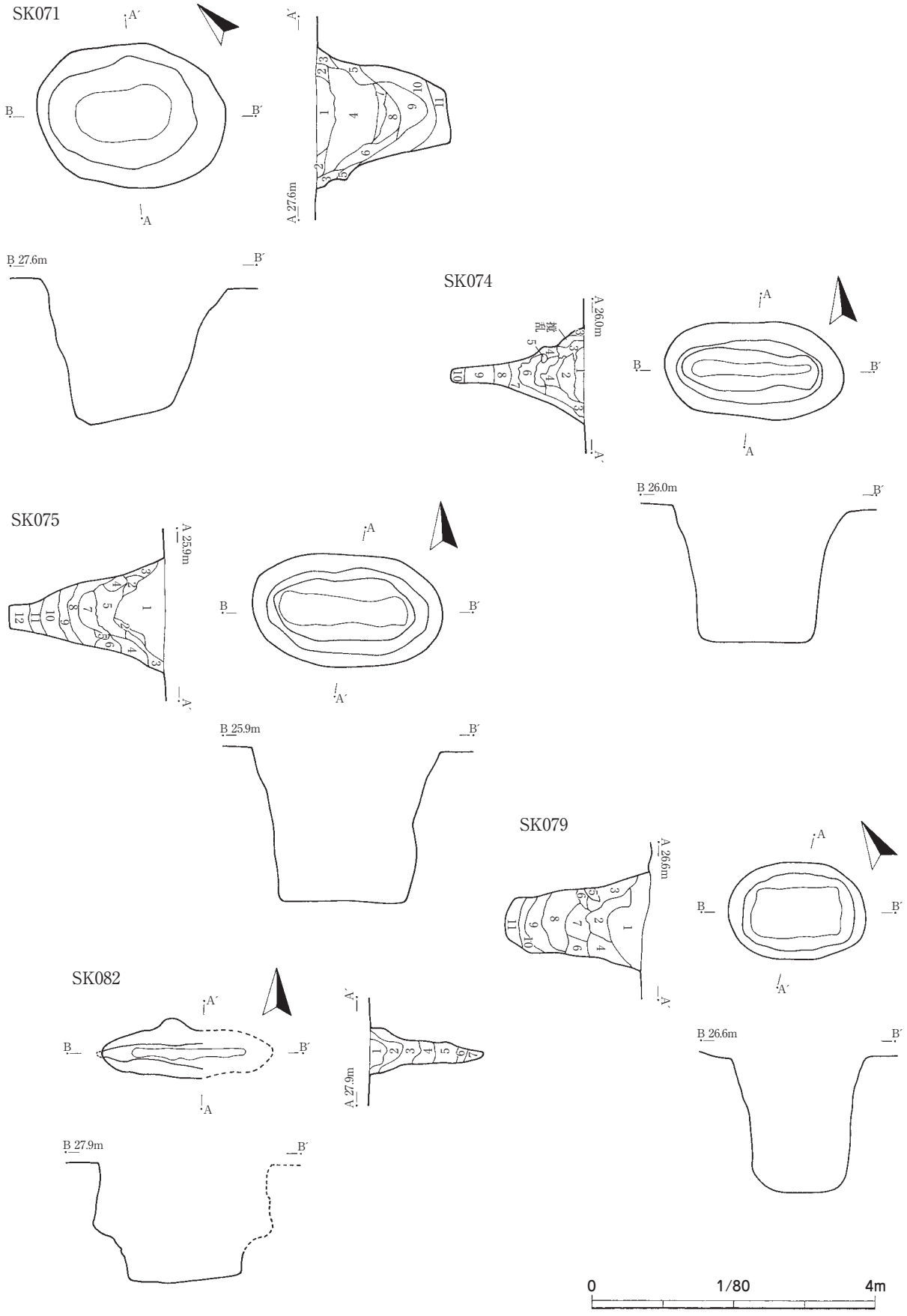
第221図　陥穴・土坑（2）


SK044
SK045
SK046
SK047
SK048
SK057
A 28.7m
A 28.1m
A 27.8m
A 27.6m
B 28.7m
B 28.1m
B 27.8m
B 27.6m
0
1/80
4m

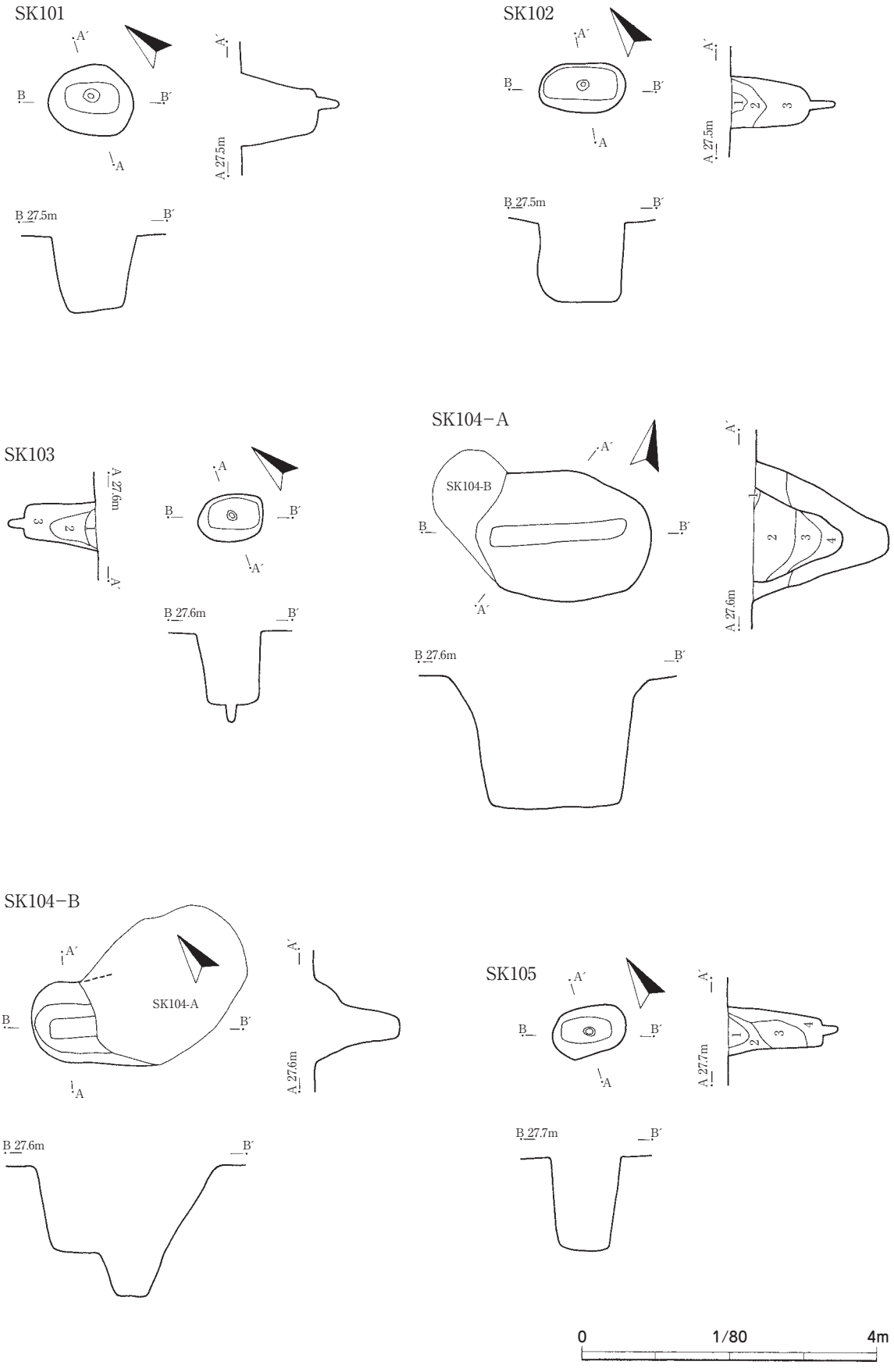
第222図　陥穴・土坑（3）


SK060
A 27.7m
A
A´
B
B´
B 27.7m
SK062
A 27.6m
SK063
A 28.8m
SK064
A 27.9m
B 27.9m
SK070
A 27.7m
B 27.7m
0
1/80
4m

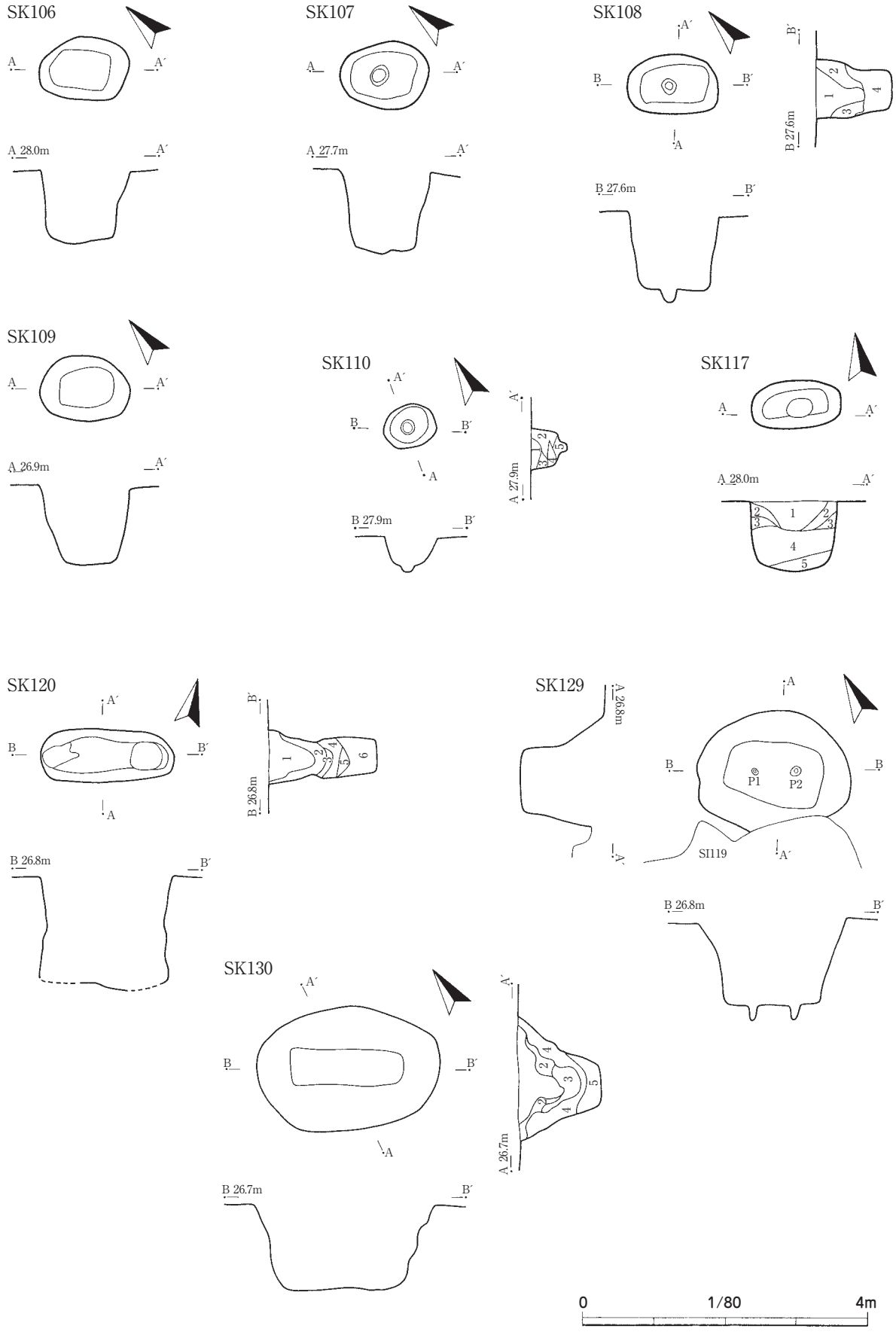
第223図　陥穴・土坑（4）


SK071
A 27.6m
B 27.6m
SK074
A 26.0m
撹乱
B 26.0m
SK075
A 25.9m
B 25.9m
SK079
A 26.6m
B 26.6m
SK082
A 27.9m
B 27.9m
0
1/80
4m

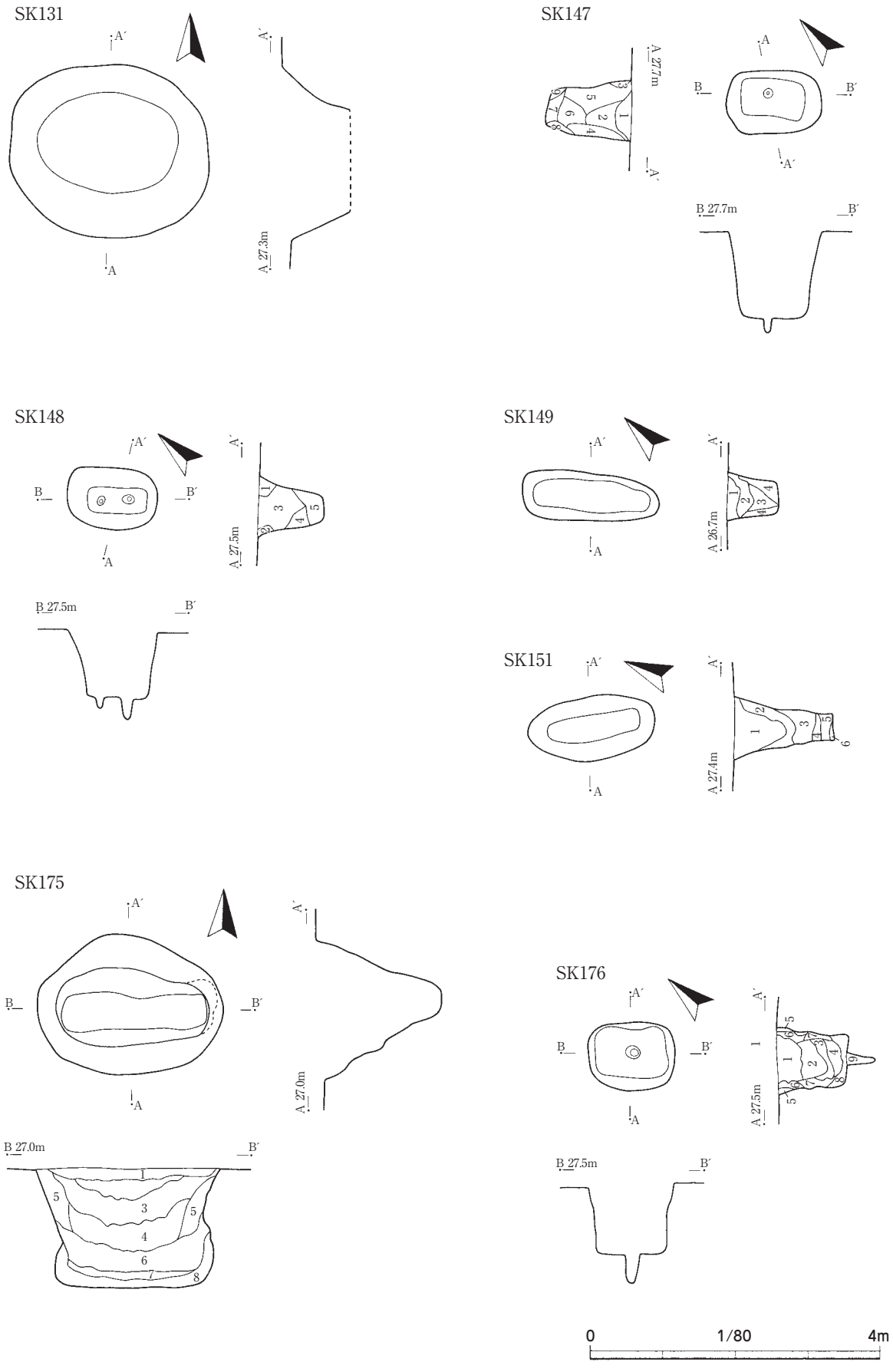
第224図　陥穴・土坑（5）


SK101
SK102
SK103
SK104−A
SK104−B
SK105
SK104-A
SK104-B
A 27.5m
B 27.5m
A 27.6m
B 27.6m
A 27.7m
B 27.7m
0
1/80
4m

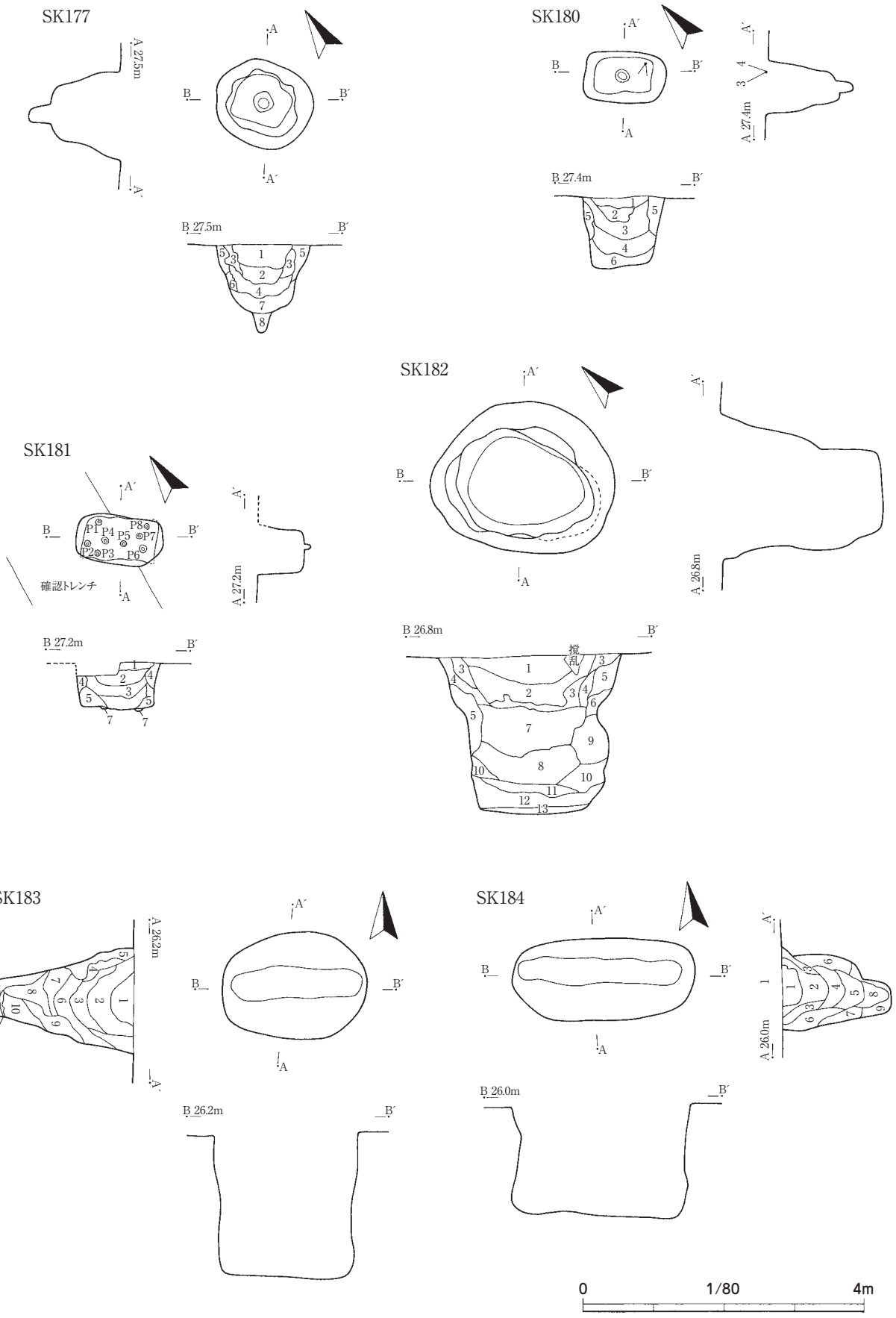
第225図　陥穴・土坑（6）


SK106
SK107
SK108
SK109
SK110
SK117
SK120
SK129
SK130
P1
P2
SI119
0
1/80
4m

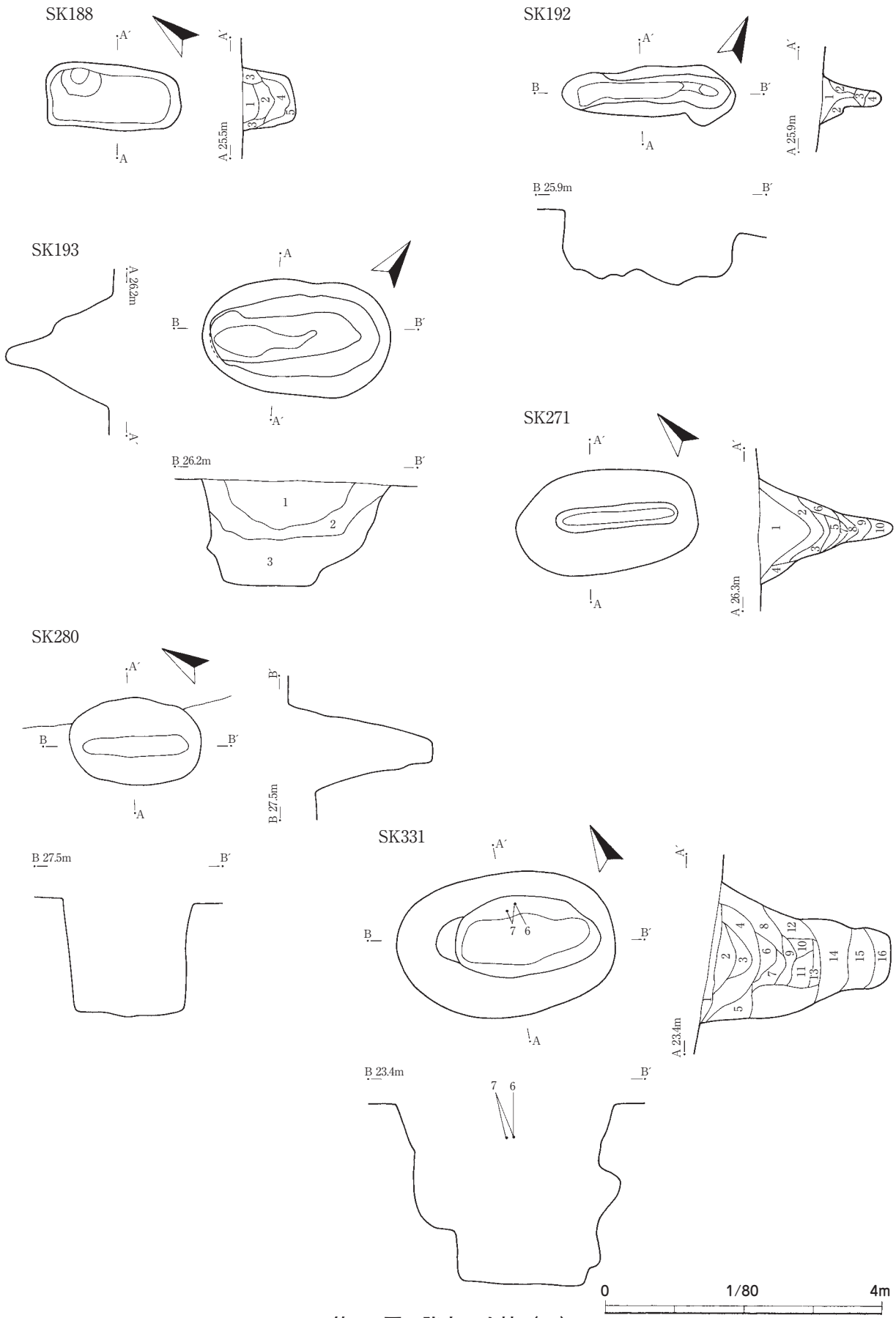
第226図　陥穴・土坑（7）



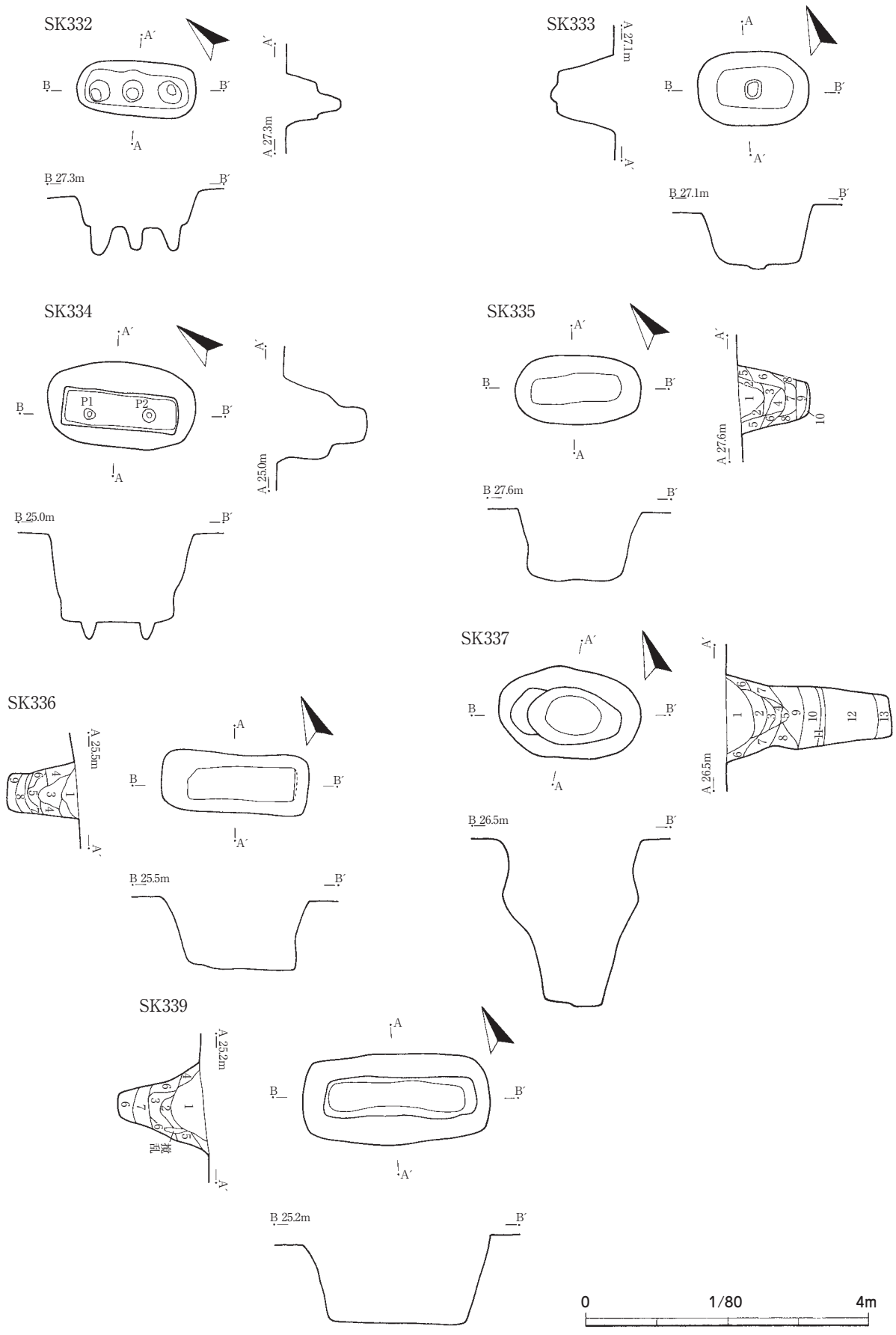
第227図　陥穴・土坑（8）



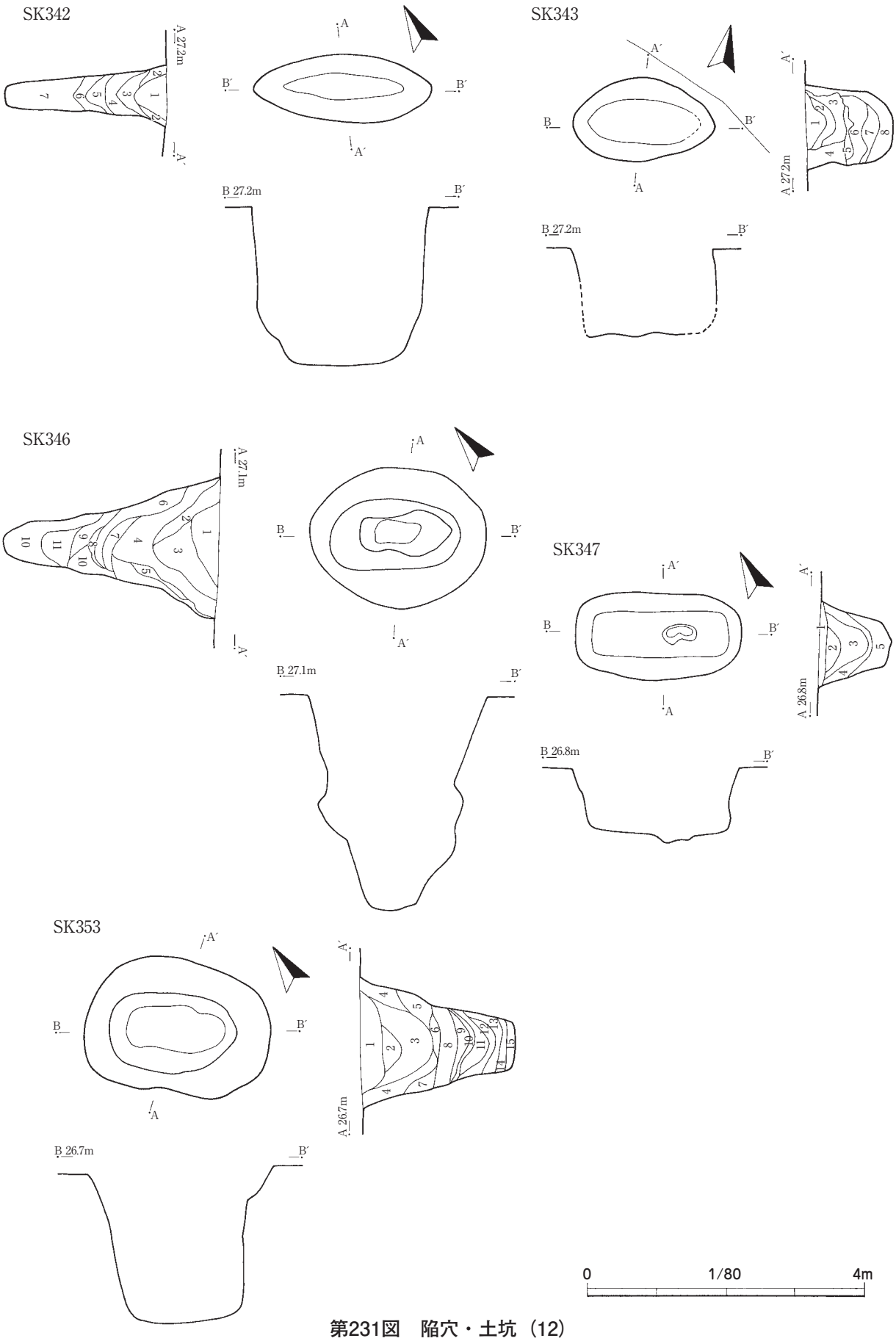
第228図　陥穴・土坑（9）



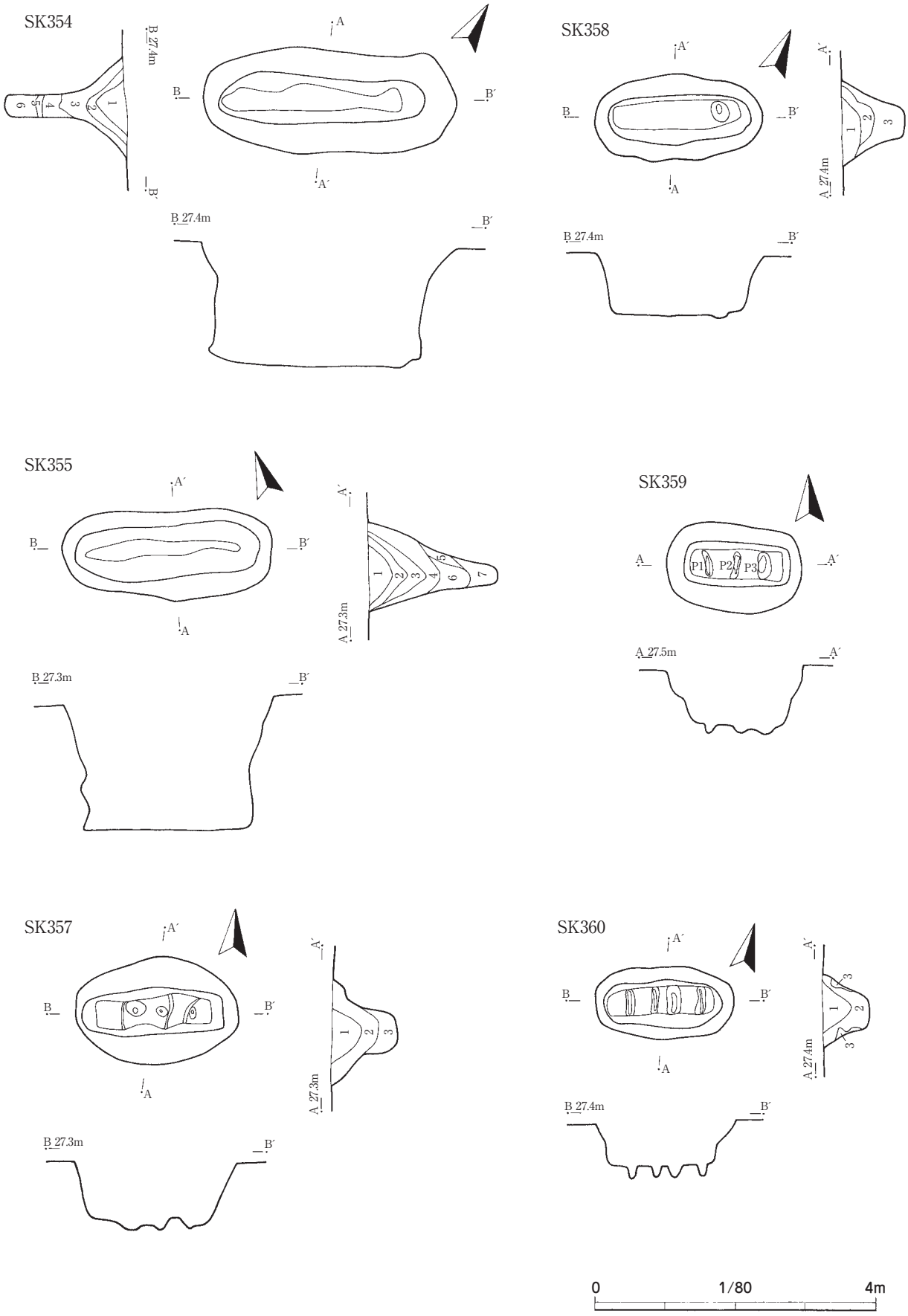
第229図　陥穴・土坑（10）



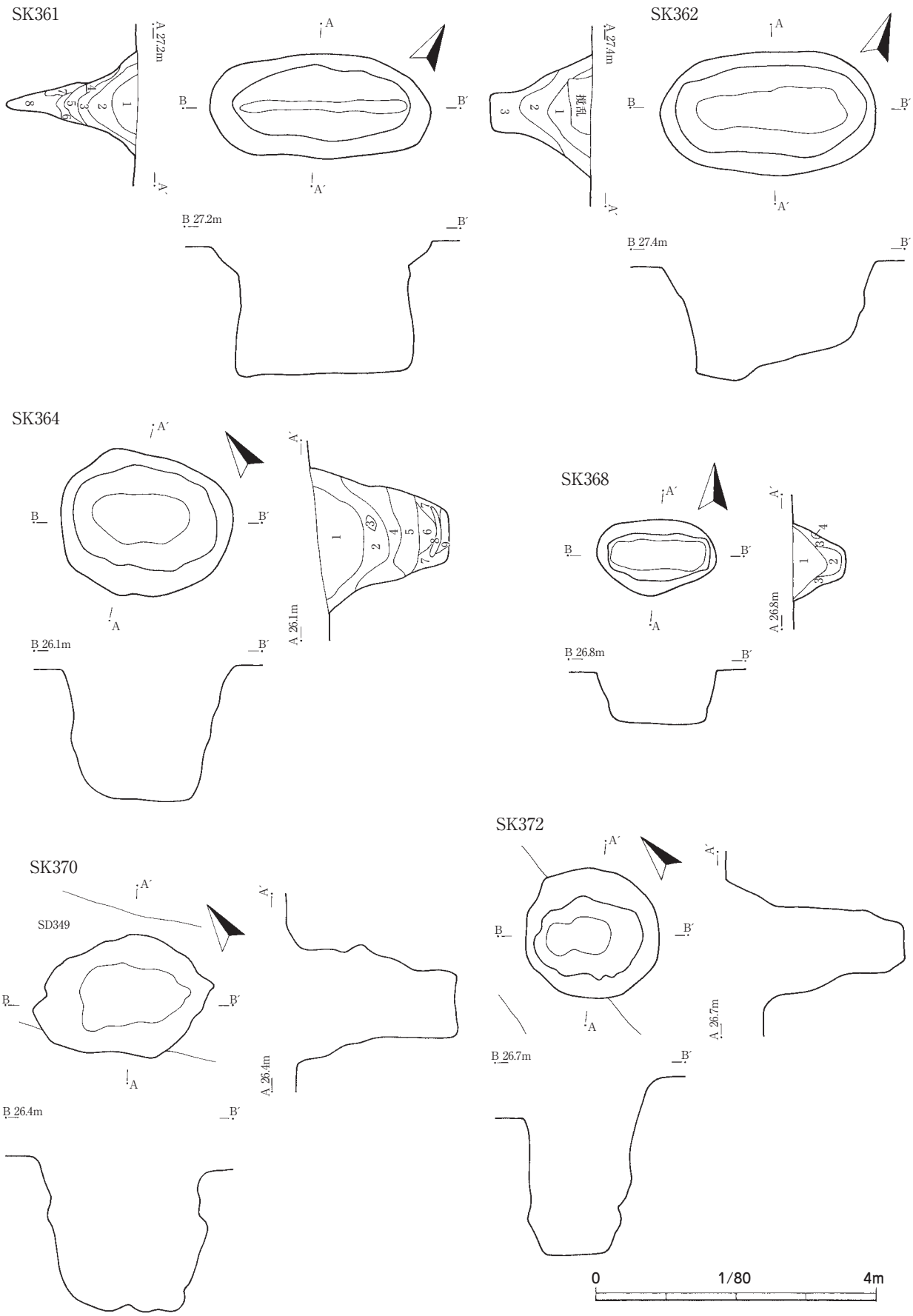
第230図　陥穴・土坑（11）



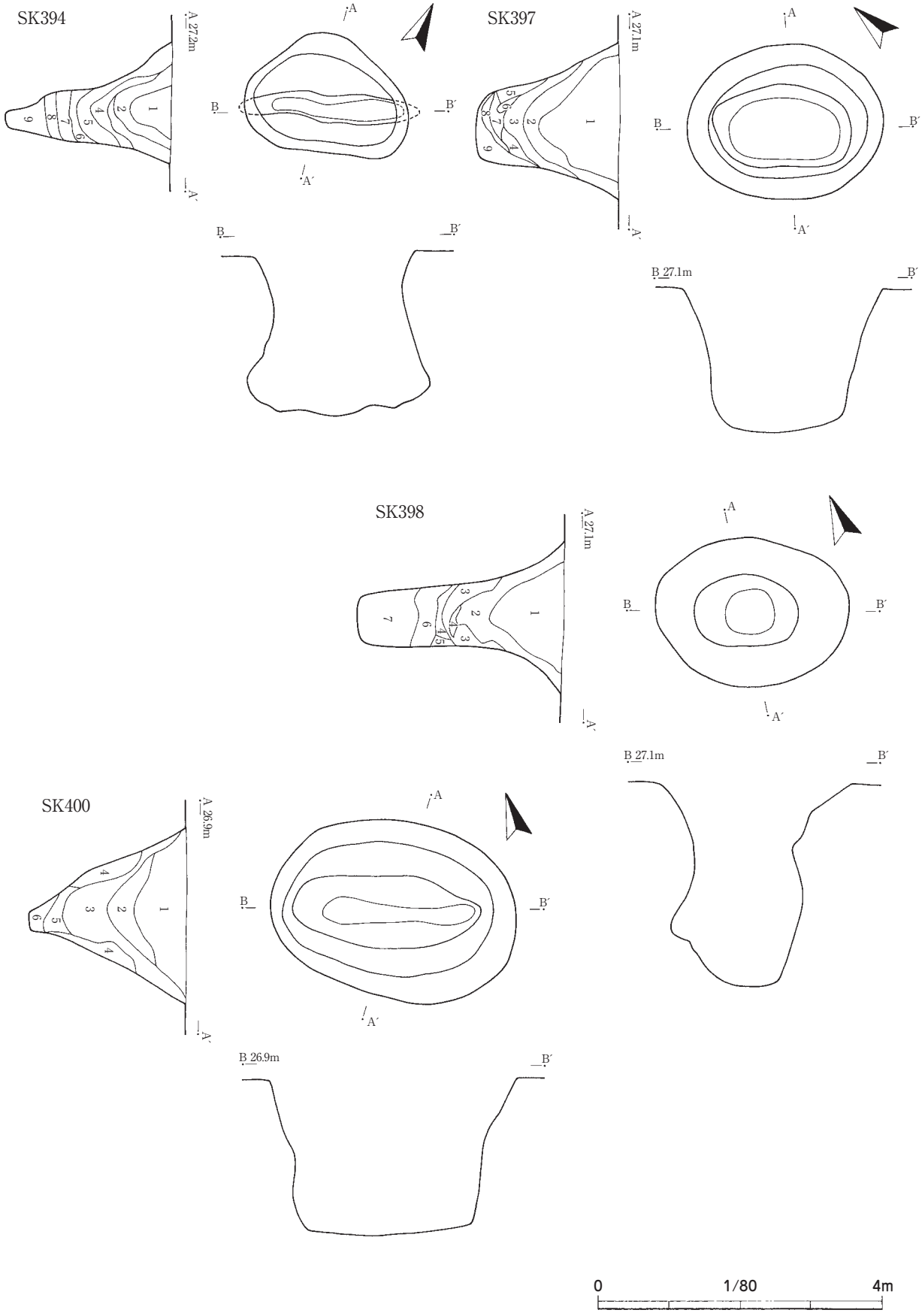
第231図　陥穴・土坑（12）



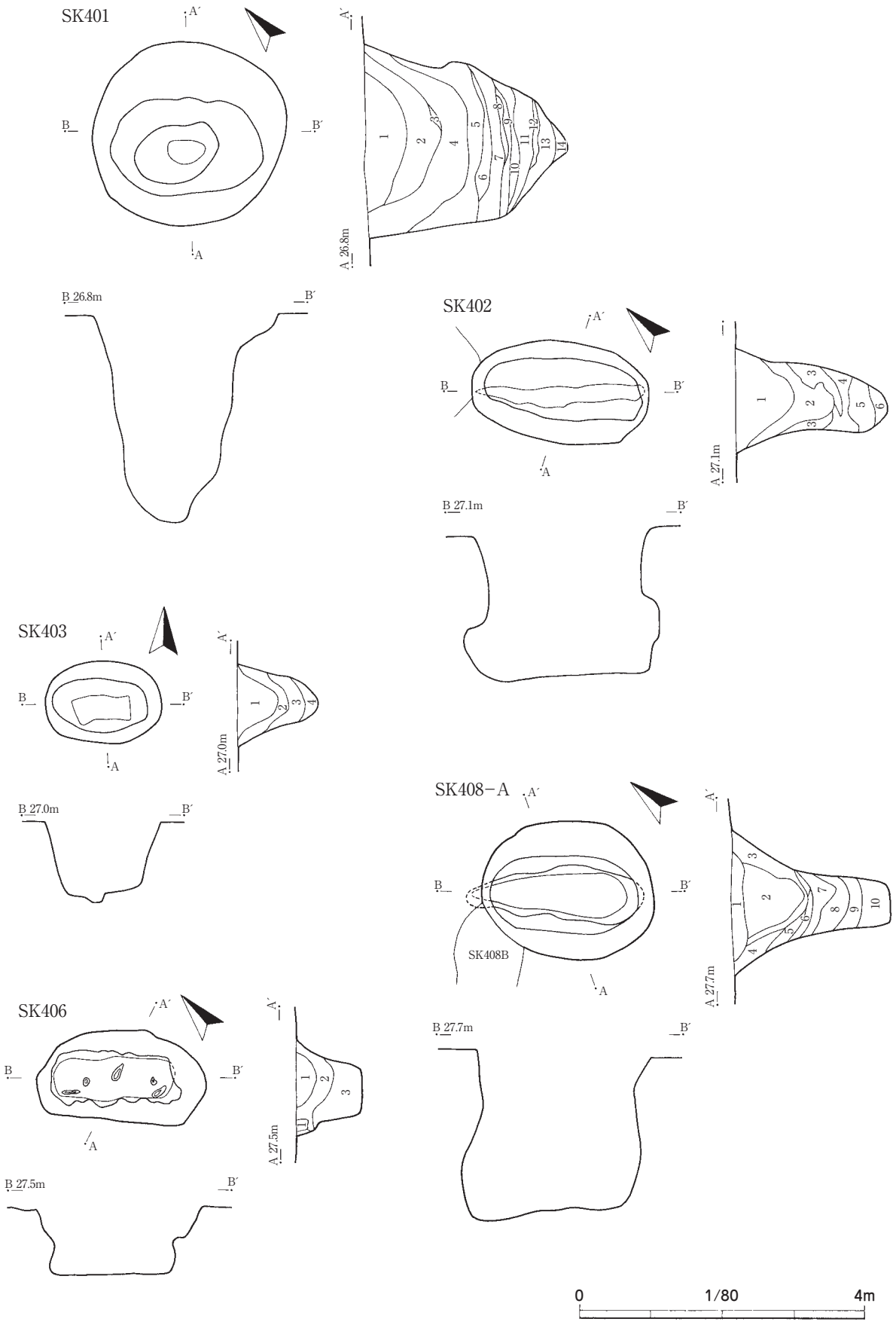
第232図　陥穴・土坑（13）



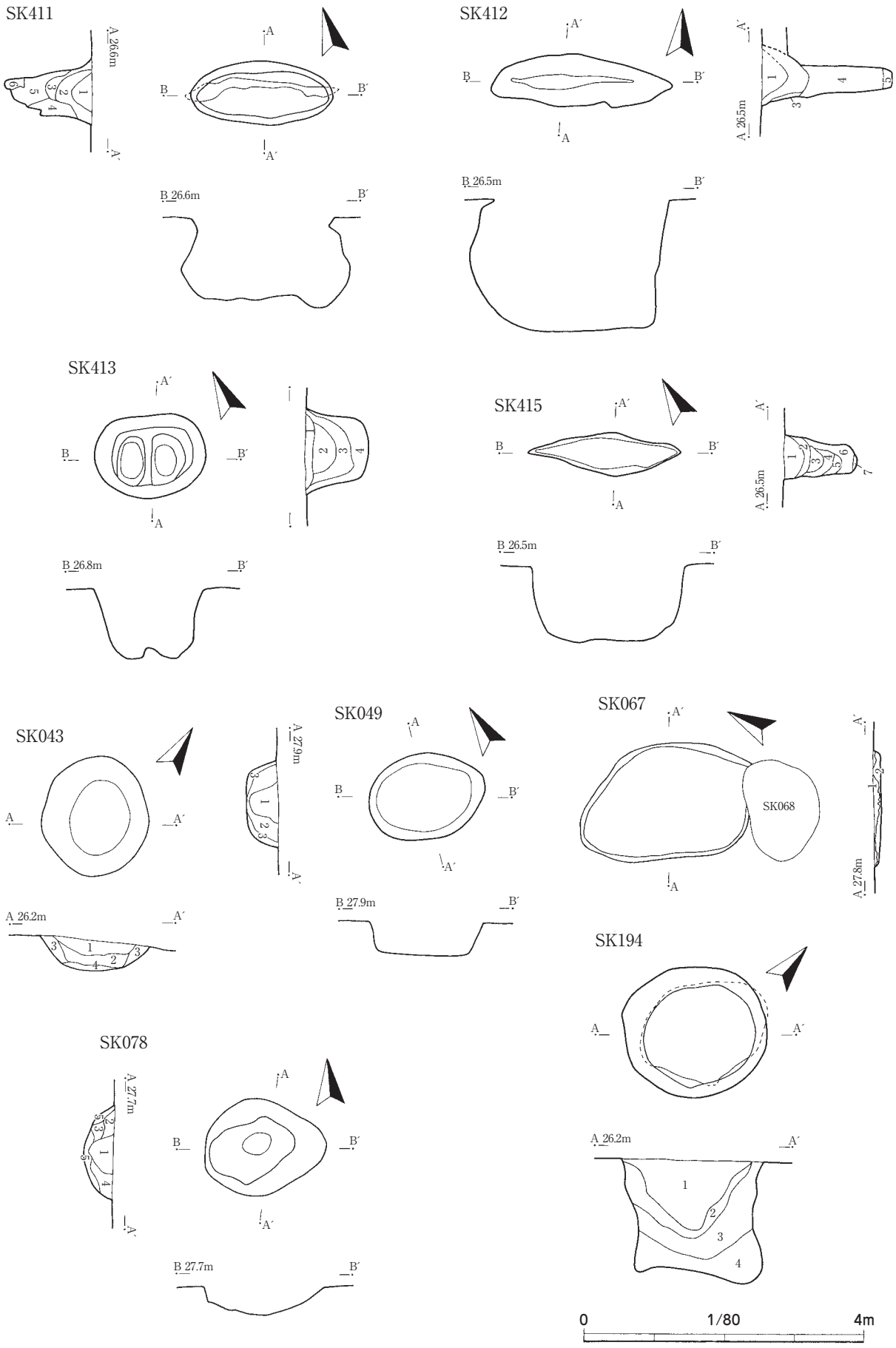
第233図　陥穴・土坑（14）



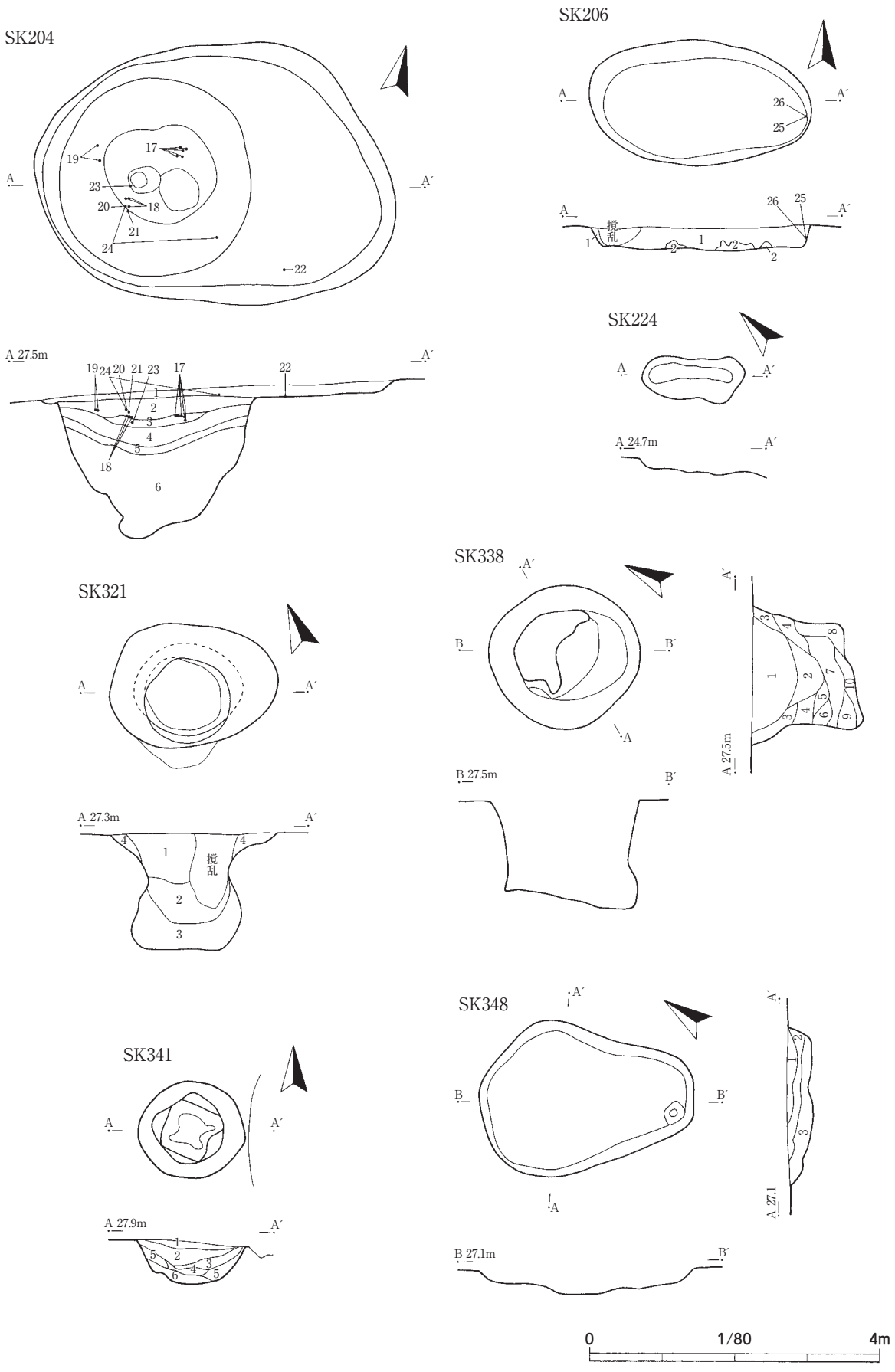
第234図　陥穴・土坑（15）



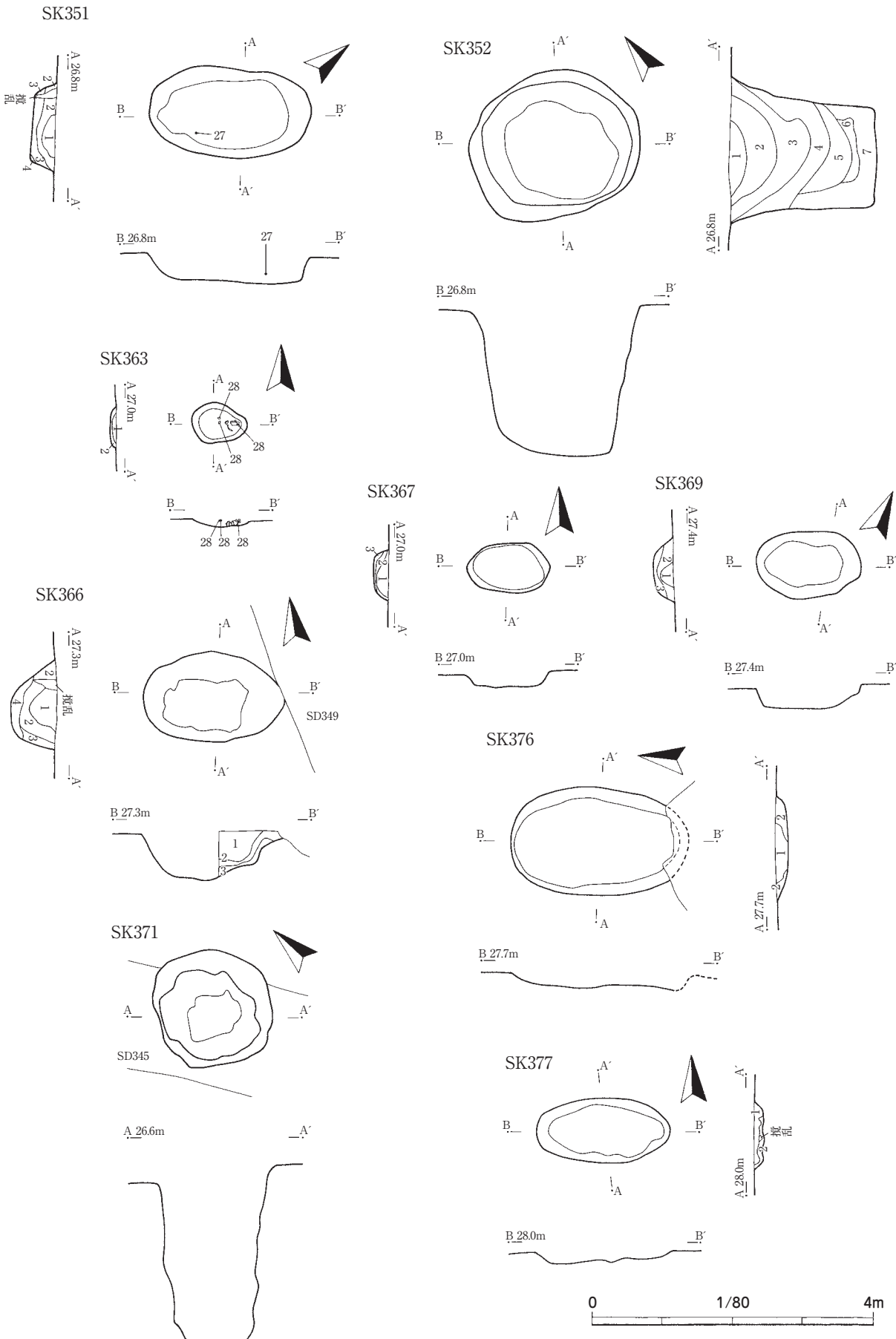
第235図　陥穴・土坑（16）



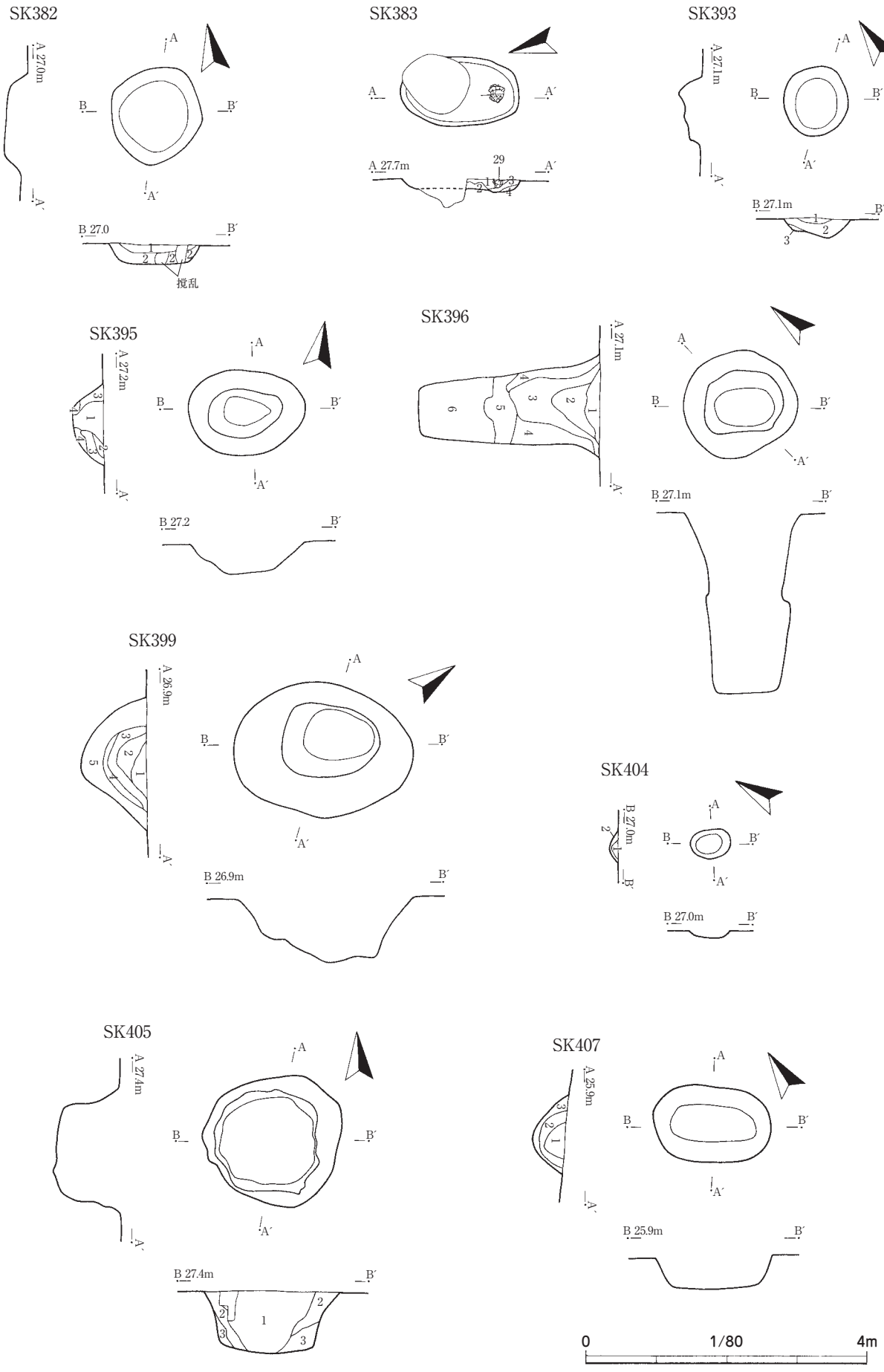
第236図　陥穴・土坑（17）



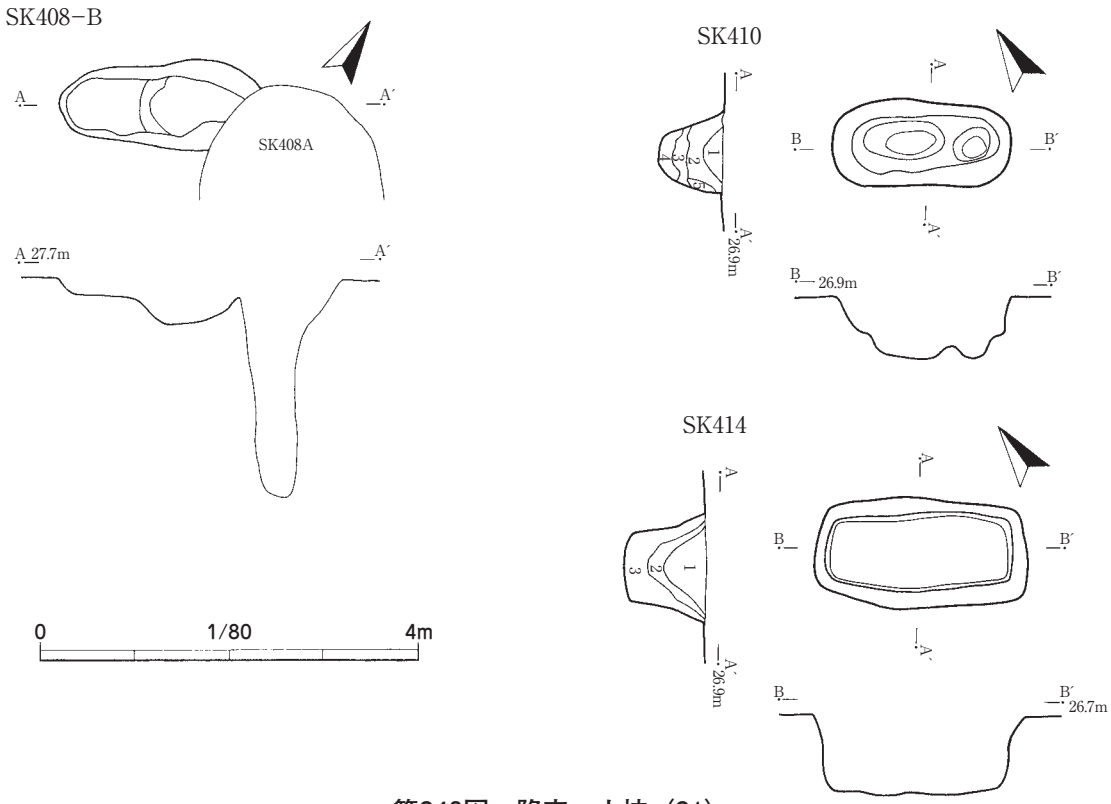
第237図　陥穴・土坑（18）



第238図　陥穴・土坑（19）



第239図　陥穴・土坑（20）



第240図　陥穴・土坑（21）

多く時期を決定できるような一括品等は認められなかった。以下、形状や堆積土などは一覧表にゆずり遺物を出土した陥穴のみ取り上げて簡単に記述することとしたい。

SK063（第223図）　本跡はＭ９－02グリッドで検出されており、開口部はきれいな楕円形を呈している。底面は東に傾斜しており、側壁面では凹凸が著しい。

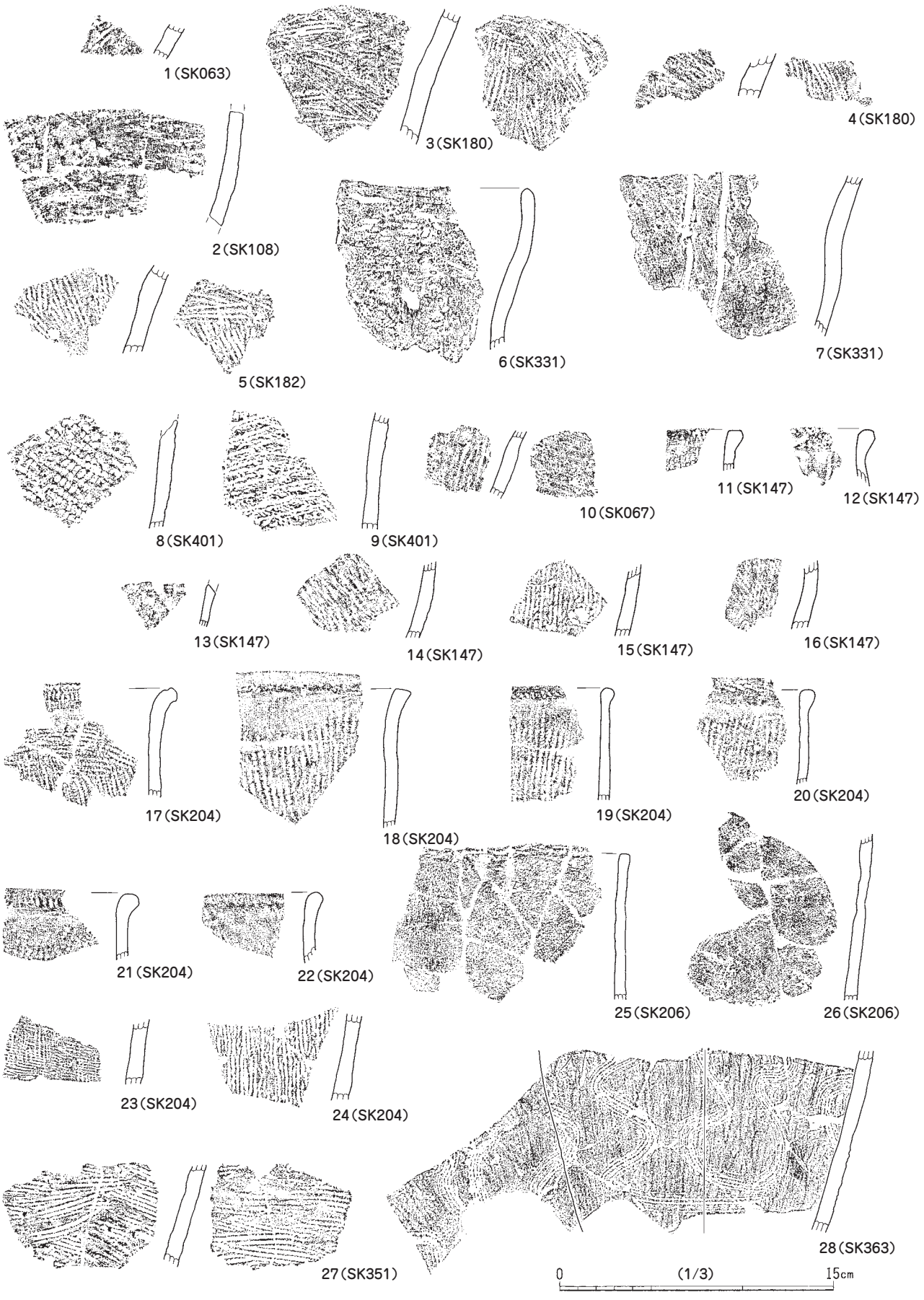
遺物（第241図１）　覆土上層から出土した小片で器面には粗い縄文施文の痕跡を残す。時期的には前期後半の所産となろう。

SK108（第226図）　本跡はＤ４－83グリッドで検出された。底面の中央部には深さ23cmを計測するピットが穿たれていた。

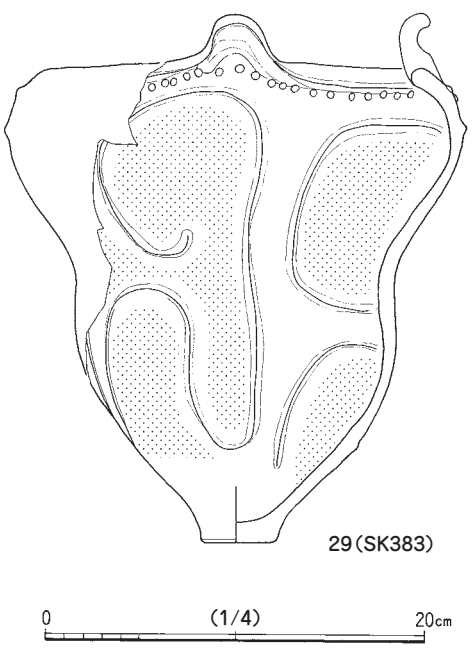
遺物（第241図２）　図示した土器は覆土第１層から出土しており、周辺から６点の小片が出土し接合したものである。底部付近の破片で胎土には小石や石英粒を多く含み堅緻に焼成されている。器面は赤褐色でヘラ状工具による粗い整形痕が観察できる。形式的な特徴点を見いだすことはできないが、グリッドから出土している土器群にも類似するものがみられる。形式的には田戸下層式に属するものであろう。図示した土器の他に撚糸文の口縁部が出土しているが表裏面の摩耗が著しいため採拓は省略した。

SK147（第227図）　本跡はＥ３－18グリッドで検出された陥穴で、開口部は楕円形を呈しており、底面中央部にはピットが穿たれていた。

遺物（第241図11～16）　遺物は覆土上層から出土した６点すべてを採拓した。いずれも撚糸文系に属する土器群である。11・12は口縁部の小片で、12の縄文は口唇にも及ぶ。13の上部には穿孔痕が認められる。器面は剥落しており文様までは確認できない。14～16は胴部片で15の縄文は無節のＲを回転させている。



第241図　陥穴・土坑出土遺物（１）



第242図　陥穴・土坑出土遺物（２）

これらは井草Ⅱ式から夏島式に属するものとなろう。

SK180（第228図）　本跡はＢ５－41グリッドから検出されており、開口部は隅円長方形に近い。本跡でも底面中央部にはピットが穿たれていた。

遺物（第241図３・４）　出土遺物は２点の条痕文系土器である。図示したように遺構確認面あたりで出土しており本跡に伴う遺物とは考えにくい。３・４は色調・胎土・施文等から同一個体と思われる。胎土には繊維を多く含むため茅山上層式に属するものである。

SK182（第228図）　本跡はＤ５－02グリッドにおいて検出されたものである。開口部の平面形は楕円形となるが、側壁では凹凸が多々みられた。

遺物（第241図５、第262図１）　遺物は覆土上層から小型の石鏃が出土し、下層から繊維を多く含む条痕文系土器の胴部片が出土している。表裏にみられる条痕は鮮明で焼成も良好である。

SK331（第229図）　本跡はＬ４－35グリッドにおいて検出されたものである。平面形は楕円形を呈しており、側壁には凹凸がみられた。

遺物（第241図６・７、第262図２）　遺物は図示したように覆土上層から出土したものである。６は口縁部で器面には粗い撚りの無節の縄文が認められる。また左破損部では縦方向に延びる沈線の痕跡がみられる。７は胴部片ではっきりとした２本の沈線が施される。ここでは縄文の施文は認められない。だが器面の色調や付着した煤状炭化物から同一個体と考えられる。沈線と縄文の組み合わせから後期初頭の所産となろう。さらに覆土下層から脚部が大きく抉られ、形の整った石鏃が出土している。

SK401（第235図）　本跡はＰ９－69グリッドで検出された開口部が円形の遺構である。その形状から陥穴

とするには若干疑問も残る。

遺物（第241図８・９、第265図78） 出土遺物としては土器と石器（礫器）があり、いずれも覆土上層から出土している。８の器面には条の異なる原体を用いた縄文が施文され、胎土には小石の他に繊維が多く混入されている。９の器面は２本組の撚糸で覆われており、胎土には繊維が多く含まれている。時期的には前期前半の所産となろう。

第83表　陥穴一覧

遺構番号	検出地点	形状、長軸・短軸・深さ	主軸方位	備　　考
SK002	P10－36	長楕円形、255・125・200cm	N－79°－E	
SK031	P10－05	長楕円形、227・75・127cm	N－86°－E	
SK032	O10－55	長楕円形、290・49・77cm	N－89°－E	
SK033	O10－40	楕円形、156・102・105cm	N－70°－W	条痕文系土器の小片が４点と礫が出土。小片のため採拓は省略した。Ｐ１－24cm、Ｐ２－29cm。
SK034	P10－50	長楕円形、260・93・125cm	N－78°－E	
SK035	O10－64	楕円形、220・120・175cm	N－89°－E	
SK037	O10－83	長楕円形、235・97・140cm	N－88°－E	
SK038	O10－48	楕円形、240・150・90cm	N－88°－E	覆土はSK040と同様な堆積となる。
SK039	O10－68	楕円形、225・145・100cm	N－89°－W	
SK040	O10－78	楕円形、250・160・100cm	N－81°－W	
SK041	O10－27	長楕円形、310・55・125cm	N－77°－W	覆土上層は褐色土（ローム粒混入）、下層は褐色土（ロームブロック混入多）、底面は黒色土となる。
SK042	P10－37	楕円形、245・160・290cm	N－39°－W	覆土上層は黒褐色土（ローム粒混入）、中層は褐色土（ロームブロック混入）、下層は暗褐色土（ロームブロック混入多）。
SK044	P10－69	長楕円形、191・98・220cm	N－80°－W	
SK045	P11－96	長楕円形、230・63・135cm	N－67°－W	
SK046	P11－97	長楕円形、246・127・175cm	N－64°－W	覆土はSK031と同様な堆積となる。
SK047	O10－00	長楕円形、195・87・165cm	N－67°－W	
SK048	O10－13	長楕円形、245・77・150cm	N－77°－E	覆土上層は暗褐色土（ローム粒混入）、中層は褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）、下層は黒褐色土（ロームブロック混入）。
SK057	M11－60	長楕円形、267・115・190cm	N－49°－W	覆土第８層で焼土ブロックが２か所検出された。
SK060	N10－24	長楕円形、220・150・115cm	N－67°－E	覆土上層は暗褐色土（ローム粒混入）、 下層は褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）
SK062	N10－85	長楕円形、205・105・105cm	N－77°－W	覆土上層は黒褐色土（ローム粒混入）、中～下層は暗褐色土（軟弱な堆積で後世の所産か）。
SK063	M９－02	楕円形、196・142・173cm	N－74°－E	覆土上層は暗褐色土（ローム粒混入）、中層は黒褐色土（ローム粒混入）、下層は褐色土（軟弱でローム混入）。
SK064	M10－58	楕円形、208・177・190cm	N－40°－W	
SK070	L９－38	楕円形、242・146・295cm	N－84°－W	
SK071	L９－49	楕円形、268・205・190cm	N－43°－W	
SK074	K８－61	楕円形、253・136・190cm	N－87°－W	
SK075	K８－25	楕円形、270・157・220cm	N－89°－W	
SK079	O11－84	楕円形、153・138・200cm	N－57°－W	
SK082	O10－20	長楕円形、245・85・160cm	N－88°－E	長軸は推定。
SK101	C４－42	楕円形、114・98・103cm	N－28°－W	Ｐ－30cm。撚糸文系土器の小片が４点出土、採拓は省略。覆土上層には若干焼土粒を検出、下層はローム粒を多く混入する褐色土が堆積していた。
SK102	C４－41	楕円形、118・69・110cm	N－48°－W	Ｐ－36cm。撚糸文系土器の小片が１点出土、採拓は省略。
SK103	D４－39	楕円形、90・63・98cm	N－49°－W	Ｐ－23cm。撚糸文系土器の小片が３点出土、採拓は省略。
SK104－A	D４－28	楕円形、－、175・170cm	N－90°－E	
SK104－B	D４－28	－－－、－、110・115cm	N－49°－W	104Aによって削平されている。
SK105	D４－46	楕円形、102・67・126cm	N－53°－W	Ｐ－14cm。後期の土器片が１点出土、採拓は省略。
SK106	D４－44	楕円形、128・91・101cm	N－36°－W	覆土上層は暗褐色土（ローム粒混入多）、下層は暗褐色土（ローム粒混入少）。

SK107	D４－64	楕円形、125・97・110cm	N－45°－W	P－42cm。 覆土は上層が暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積していた。
SK108	D４－83	楕円形、127・84・110cm	N－38°－W	P－23cm。撚糸文系土器２点と剥片が出土。
SK109	D４－97	楕円形、128・93・112cm	N－44°－W	縄文土器小片１点と礫器が出土、採拓は省略。覆土上層は暗褐色土（ローム粒混入多）、下層は暗褐色土（ローム粒混入多）。
SK110	D４－43	楕円形、75・61・42cm	N－79°－W	P－29cm。
SK117	E４－42	楕円形、129・69・100cm	N－87°－E	底面に深さ４cm程の皿状の凹みがみられた。
SK120	G５－39	長楕円形、187・74・150cm	N－88°－E	
SK129	G５－46	楕円形、213・－115cm	N－62°－W	P１－20cm、P２－20cm。 覆土上層は黒褐色土（ローム粒混入少）、中層は褐色土（ローム粒混入）、下層は暗褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）。
SK130	G６－90	楕円形、258・172・115cm	N－61°－W	
SK131	E５－44	楕円形、271・252・－cm	N－89°－W	覆土上層は黒褐色土（ローム粒混入）、中層は褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）、下層は暗褐色土（ロームブロック混入）、底面は凹凸が著しく明確ではない。
SK147	E３－18	楕円形、131・85・120cm	N－51°－W	P－20cm。
SK148	D３－10	楕円形、123・84・95cm	N－39°－W	P１－15cm、P２－30cm。
SK149	F５－72	長楕円形、190・65・70cm	N－42°－W	
SK151	F４－47	長楕円形、175・86・139cm	N－27°－W	
SK175	D５－69	楕円形、257・193・165cm	N－87°－E	
SK176	C５－78	隅円方形、120・93・100cm	N－40°－W	P－40cm。
SK177	C５－97	楕円形、139・119・126cm	N－40°－W	P－30cm。
SK180	B５－41	隅円長方形、115・73・99cm	N－44°－W	P－24cm、条痕文系土器2点が出土。
SK181	C５－35	隅円長方形、123・70・65cm	N－55°－W	P１－19cm、P２－11cm、P３－12cm、P４－13cm、P５－５cm、P６－14cm、P７－14cm、P８－13cm。
SK182	D５－02	楕円形、261・213・227cm	N－38°－W	条痕文系土器と石鏃が出土。
SK183	C５－20	楕円形、205・151・213cm	N－90°－E	
SK184	C５－00	長楕円形、260・114・153cm	N－87°－W	
SK188	B４－71	隅円長方形、192・91・75cm	N－35°－W	
SK192	D７－79	長楕円形、250・85・95cm	N－71°－E	
SK193	D７－18	楕円形、273・166・155cm	N－52°－E	
SK271	I２－14	楕円形、261・150・195cm	N－57°－W	
SK280	I３－52	楕円形、181・127・210cm	N－29°－W	覆土上層は黒褐色土（ローム粒混入）、中層は褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）、明褐色土（ローム粒・ロームブロック混入多）。
SK331	L４－35	楕円形、317・205・273cm	N－68°－W	後期初頭の土器と石鏃が出土。
SK332	K６－44	隅円長方形、169・76・48cm	N－44°－W	P１－42cm、P２－33cm、P３－33cm。 覆土上層は暗褐色土（ローム粒混入少）、下層は褐色土（ローム粒混入）。
SK333	K６－35	楕円形、159・106・83cm	N－69°－W	P－６cm。 覆土上層は黒色土（ローム粒混入少）、下層は暗褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）。
SK334	J６－65	楕円形、210・120・125cm	N－36°－E	P１－24cm、P２－25cm。 覆土上層は黒色土、中層は暗褐色土（ローム粒・ロームブロック混入）、下層は褐色土（ローム粒・ロームブロック混入多）。
SK335	J５－75	長楕円形、177・98・102cm	N－56°－W	
SK336	J４－49	隅円長方形、210・84・100cm	N－69°－W	
SK337	I４－26	楕円形、202・124・237cm	N－63°－W	
SK339	I５－65	隅円長方形、265・127・138cm	N－66°－W	
SK342	P10－12	長楕円形、258・95・233cm	N－59°－W	
SK343	P10－24	楕円形、206・120・125cm	N－87°－E	
SK346	P10－62	楕円形、252・204・302cm	N－56°－W	
SK347	O10－81	隅円長方形、238・126・94cm	N－66°－W	P－９cm。
SK353	P９－77	楕円形、264・186・224cm	N－56°－W	覆土上層から中層にかけて土器片出土。
SK354	O８－40	長楕円形、361・152・170cm	N－62°－E	
SK355	P８－86	長楕円形、300・125・185cm	N－76°－W	
SK357	O８－95	楕円形、232・155・90cm	N－86°－E	P１－21cm、P２－18cm、P３－12cm。

SK358	Ｏ７－15	長楕円形、238・120・88cm	Ｎ－65°－Ｅ	Ｐ－６cm。
SK359	Ｏ７－94	楕円形、195・125・81cm	Ｎ－88°－Ｗ	Ｐ１－25cm、Ｐ２－22cm、Ｐ３－25cm。 覆土上層は黒褐色土、下層は暗褐色土。
SK360	Ｏ６－24	楕円形、200・103・65cm	Ｎ－80°－Ｅ	Ｐ１－19cm、Ｐ２－19cm、Ｐ３－21cm、Ｐ４－17cm。
SK361	Ｐ７－23	長楕円形、316・150・187cm	Ｎ－65°－Ｅ	
SK362	Ｐ７－59	長楕円形、310・176・170cm	Ｎ－75°－Ｅ	
SK364	Ｐ10－91	楕円形、245・204・195cm	Ｎ－55°－Ｗ	覆土上層から土器片数点が出土。
SK368	Ｏ３－16	楕円形、172・110・80cm	Ｎ－90°－Ｅ	
SK370	Ｐ10－80	不整楕円形、270・178・255cm	Ｎ－66°－Ｗ	覆土上層は溝により削平、中層は暗褐色土（ロームブロック混入）、下層は褐色土（ロームブロック混入）。
SK372	Ｐ８－46	円形、200・190・250cm	Ｎ－43°－Ｗ	溝により一部削平。覆土上層は黒色土（ローム粒混入）、中層は黒褐色土、下層は褐色土（黒色土混入）
SK394	Ｐ10－52	不整楕円形、230・167・235cm	Ｎ－68°－Ｅ	
SK397	Ｐ10－65	楕円形、278・218・205cm	Ｎ－46°－Ｗ	
SK398	Ｐ10－84	楕円形、273・210・292cm	Ｎ－60°－Ｗ	
SK400	Ｏ９－71	楕円形、350・246・220cm	Ｎ－70°－Ｗ	石鏃が出土。
SK401	Ｐ９－69	円形、280・260・290cm	Ｎ－67°－Ｗ	前期の土器２点と石鏃・礫器が出土。
SK402	Ｏ８－08	長楕円形、249・143・215cm	Ｎ－41°－Ｗ	
SK403	Ｏ８－07	楕円形、163・115・112cm	Ｎ－87°－Ｅ	
SK406	Ｎ７－84	楕円形、238・129・95cm	Ｎ－43°－Ｗ	
SK408－Ａ	Ｍ２－12	楕円形、243・197・238cm	Ｎ－37°－Ｗ	
SK411	Ｐ９－16	長楕円形、208・93・125cm	Ｎ－77°－Ｗ	
SK412	Ｐ９－16	長楕円形、262・77・190cm	Ｎ－90°－Ｅ	
SK413	Ｏ９－00	長楕円形、157・119・98cm	Ｎ－63°－Ｗ	
SK415	Ｏ９－70	長楕円形、220・62・107cm	Ｎ－60°－Ｗ	

４、土坑（第236図～第242図、図版82～84・87・89）

ここで土抗として取り上げた遺構は合計34基にのぼる。Ｅ３区、Ｐ９・10区などでは複数基が確認されているが、特に偏った分布は示していない。検出された多くの土抗では遺物が伴わず、時期の認定できるものは少なかった。そのため以下の説明では遺物を出土した土抗のみ取り上げて、出土遺物を中心に記述していくこととしたい。

SK067（第236図）　本跡はＬ９－43グリッドで検出されたもので掘り込みも浅い。

遺物（第241図10）　土器片が１点のみの出土であり、覆土の堆積薄いため記録は省略した。器面には浅く条痕の痕跡が確認できる。胎土には繊維を含有するがさほど多くはない。焼成も堅緻なものである。所属時期としては条痕文系でも前半期のものと思われる。

SK204（第237図）　本跡はＥ３－34グリッドで検出された大きな土抗であり、底面にはピット状の掘り込みが認められた。

遺物（第241図17～24）　ここから出土した遺物はすべて土器であり、接合した結果８点となった。いずれも撚糸文系の土器群である。17の口唇部には縄文原体の圧痕が鮮明に残されている。口辺には横方向の施文が施されている。井草式でも古いタイプとなろう。18～22は口唇の一部に縄文が施文されている。23・24は撚糸文による施文で、23では繊細な原体を縦横に回転させている。これらの土器群は図示したように覆土の上層から出土しており、積極的に本跡を撚糸文期の所産と見做すことはできないが、多数の出土土器から撚糸文期の可能性が強い。

SK206（第237図）　本跡はＥ３－87グリッドで検出された遺構で西側の一部には撹乱が認められた。平面は楕円形を呈し掘り込みもしっかりしていた。

遺物（第241図25・26）　東の側壁部分から細片となって出土した土器片を接合したものである。２点は同

一個体で、25は辛うじて口縁部と確認できる。器面に文様は施されておらず、ヘラ状工具により簡単に整形されている。器厚は５～６mmと薄く裏面の一部には剥落も認められる。胎土に繊維の混入は認められず形式的には沈線文系土器に伴う無文土器と考えられる。

SK351（第238図）本跡はＰ９－04グリッドで検出されており、平面形は形の整った楕円形となる。掘り込みも深く、底面は平坦に整形されていた。

遺物（第241図27） 遺物は覆土中層から１点だけ出土している。条痕文系土器で表裏の全面に貝殻条痕が施文されている。胎土に含まれる繊維は比較的少なく、金雲母や小石などが多く含まれている。焼成も良好である点から前半期の条痕文系土器と見做される。出土状況から遺構伴う可能性は少ない。

SK363（第238図） 本跡はＯ８－68グリッドで検出された浅い掘り込みの小さな土抗である。

遺物（第241図28） 遺物は底面に接するような位置で出土したため遺構に伴うことは確実である。遺存は胴部のみで口縁と底部は失われている。おそらく後世の耕作によるものであろう。遺存部の器面には櫛歯状工具により流水文のような曲線が描かれている。器面は赤褐色で、内面は黒褐色ないし暗褐色を呈している。胎土には繊維の混入が認めらず砂粒を多く含む。櫛歯状工具による施文は前期後半にみられるため形式的には浮島系の新しい部分に位置づけられよう。

SK383（第239図） 本跡はＮ５－54グリッドで検出されたものである。平面形は楕円形となる。遺構の約1/2は撹乱により失われていたが、遺物の出土地点までには達しておらず、土器は2/3ほどが遺存していた。出土層位は覆土中層となるが本跡に伴う遺物と考えてよいであろう。

遺物（第242図29） 出土土器は特徴的な微隆起線から加曽利Ｅ式期の終末に位置づけられよう。口縁部には把手が付けられ、その直下には円形の刺突が巡る。文様は微隆起で曲線を描出し、その間を撚りの密なRLの縄文で充填する。また微隆起に沿って施文した縄文は磨り消されている。

第84表　土抗一覧

遺構番号	検出地点	形状、長軸・短軸・深さ	主軸方位	備　　考
SK043	Ｋ９－83	楕円形、170・154・50cm	Ｎ－20°－Ｗ	
SK049	Ｐ10－28	楕円形、170・125・52cm	Ｎ－72°－Ｗ	
SK067	Ｌ９－43	不整楕円形、－・164・11cm	Ｎ－45°－Ｗ	SK068（炉穴）と一部重複
SK078	Ｌ11－85	楕円形、175・140・43cm	Ｎ－85°－Ｗ	覆土上層より条痕文系土器片出土
SK194	Ｄ７－01	円形、203・197・175cm	Ｎ－24°－Ｅ	
SK204	Ｅ３－34	楕円形、505・310・205cm	Ｎ－88°－Ｅ	覆土第２・３層から撚糸文系土器出土。
SK206	Ｅ３－87	楕円形、308・173・28cm	Ｎ－82°－Ｗ	覆土第２・３層から早期の無文土器出土。
SK224	Ｅ３－97	不整楕円形、141・63・22cm	Ｎ－47°－Ｗ	
SK321	Ｈ５－99	楕円形、234・173・160cm	Ｎ－72°－Ｗ	
SK338	Ｉ４－17	円形、202・198・155cm	Ｎ－°－Ｅ	
SK341	Ｋ５－14	円形、148・138・60cm	Ｎ－°－Ｅ	
SK348	Ｎ９－70	不整楕円形、295・225・40cm	Ｎ－36°－Ｗ	Ｐ－25cm
SK351	Ｐ９－04	楕円形、232・130・45cm	Ｎ－33°－Ｅ	
SK352	Ｐ９－47	楕円形、245・205・210cm	Ｎ－51°－Ｗ	
SK363	Ｏ８－68	楕円形、80・57・12cm	Ｎ－86°－Ｗ	覆土下層から浮島系土器出土。
SK366	Ｎ９－81	楕円形、205・137・65cm	Ｎ－82°－Ｗ	
SK367	Ｏ４－59	楕円形、117・71・20cm	Ｎ－87°－Ｅ	
SK369	Ｏ３－19	楕円形、150・95・32cm	Ｎ－71°－Ｅ	
SK371	Ｐ９－34	不整円形、168・160・275cm	Ｎ－°－Ｅ	覆土上層は黒褐色土、中層は褐色土、下層はロームブロック混入の褐色土。
SK376	Ｎ４－94	楕円形、－・153・17cm	Ｎ－６°－Ｗ	
SK377	Ｎ３－63	楕円形、191・92・14cm	Ｎ－90°－Ｅ	

SK382	Ｎ２－68	円形、130・128・28cm	Ｎ－°－Ｅ	
SK383	Ｎ５－54	楕円形、340・201・38cm	Ｎ－16°－Ｅ	加曽利Ｅ４式一括品が出土。
SK393	Ｐ10－42	円形、95・93・35cm	Ｎ－°－Ｅ	
SK395	Ｐ10－53	楕円形、163・120・45cm	Ｎ－79°－Ｅ	
SK396	Ｐ10－63	楕円形、164・145・197cm	Ｎ－39°－Ｗ	
SK399	Ｐ９－59	楕円形、255・190・92cm	Ｎ－36°－Ｅ	
SK404	Ｏ８－17	楕円形、58・41・11cm	Ｎ－34°－Ｗ	
SK405	Ｎ７－95	不整楕円形、200・185・90cm	Ｎ－90°－Ｅ	
SK407	Ｍ７－75	楕円形、170・110・48cm	Ｎ－47°－Ｗ	
SK408－Ｂ	Ｍ２－12	楕円形、－・100・23cm 楕円形、－・100・50cm	Ｎ－65°－Ｅ Ｎ－72°－Ｅ	２基の重複
SK410	Ｐ６－69	長楕円形、188・92・66cm	Ｎ－58°－Ｗ	
SK414	Ｏ９－12	隅円長方形、225・116・85cm	Ｎ－58°－Ｗ	

５、ピット群（第243図～第245図、図版67）

本遺跡の北西部（O・P10区）では上層の調査が進行するにつれ、炉穴・陥穴・土坑といった縄文時代の遺構が濃密に分布していることが判明してきた。しかも、それに加えてO10区と、その周辺域では柱穴跡を思わせるような掘り込み（ピット）が各所で認められた。そこで検出されたピットに堆積した覆土を検討すると、縄文時代の遺構に堆積した覆土と共通した色調の堆積土が認められたため一定の径（概ね直径20ｃｍ以上を基準とした）を有するピットについては、土層断面の観察を試みて記録しつつ調査をすすめることとした。また、P10区やO10区などの周辺では、撚糸文系・沈線文系・条痕文系・前期後半といった各時期の土器群が少なからず出土している。そのため、掘り込みを確認できたピット周辺では堆積層の除去に注意しつつ調査を進行させていくと同時にピット間の間隔や掘り込みの深いピットに注目しながらピット群の調査を実施していった。

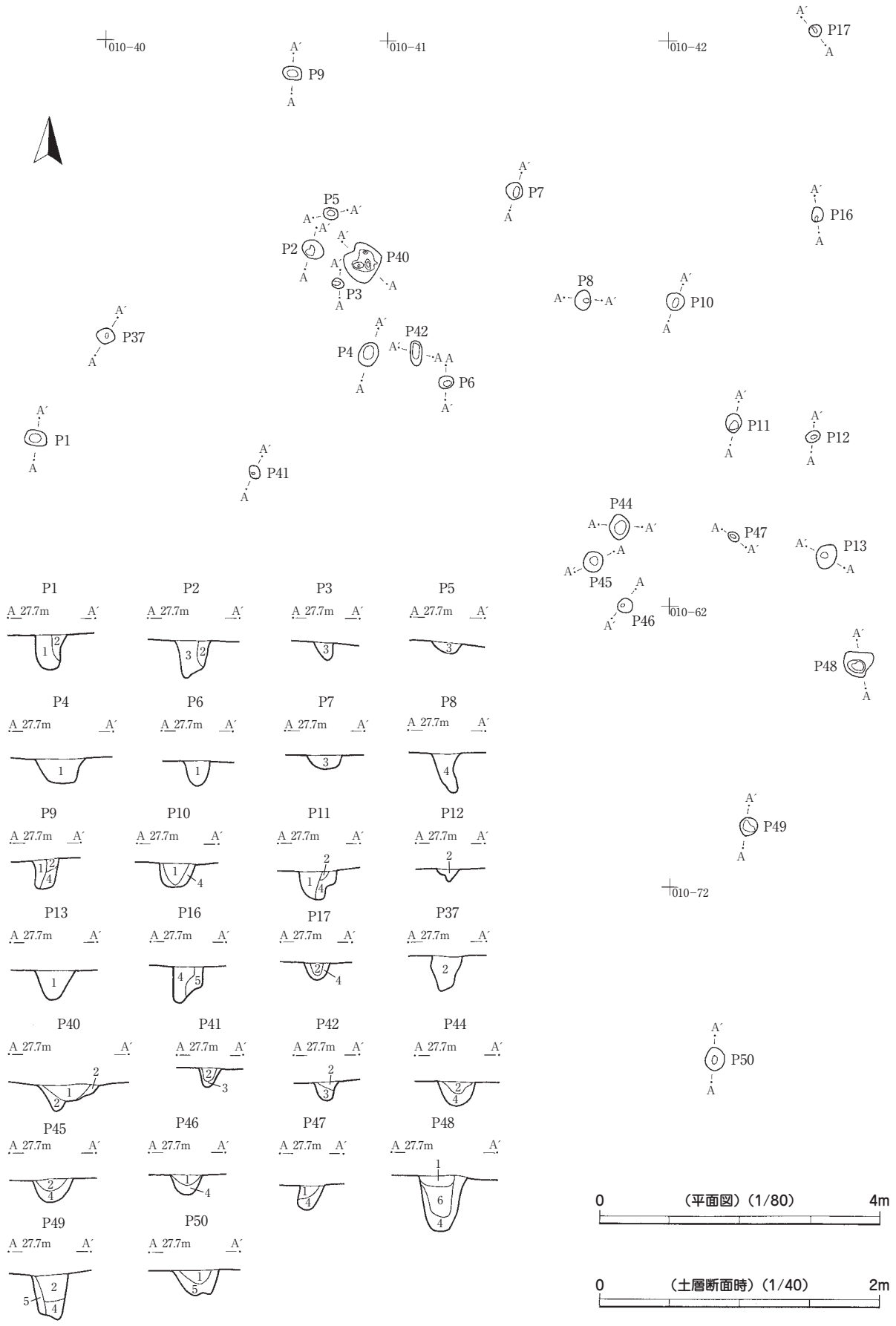
その結果、ピット群はO10区の40・41グリッド、同区43・44グリッド、同区51・52・53グリッド、同区74グリッドなどで集中的に認められるところとなり、その数は65か所以上を数えることとなった。こうしたピットの中には、図示したように明らかな柱穴の痕跡を想定させるピットも検出されているが、ピット内からは時期を特定できるような土器等の遺物が出土することはなく、ピット群が確実に縄文時代の遺構と断定できるまでには至らなかった。つまり、こうした精査にも関わらず縄文時代の遺構（掘立柱跡等）と考えられる痕跡は確認できなかった。ただ、この時期については周辺で遺構が多数みられるため参考までに図化し記録に残すこととした。

ピット群１　O10区の40・41グリッド周辺で検出できたピット群の中心部を図化したものである。このうち、P40の平面は径が50ｃｍ以上を有し、掘り込みも浅い。その規模から炉跡とも考えられたが、焼土の混入は認められなかった。また、O10－62グリッドにみられるP48やP49などは深さが30cm～40cmを計測し柱穴と考えてもよい掘り込みであった。

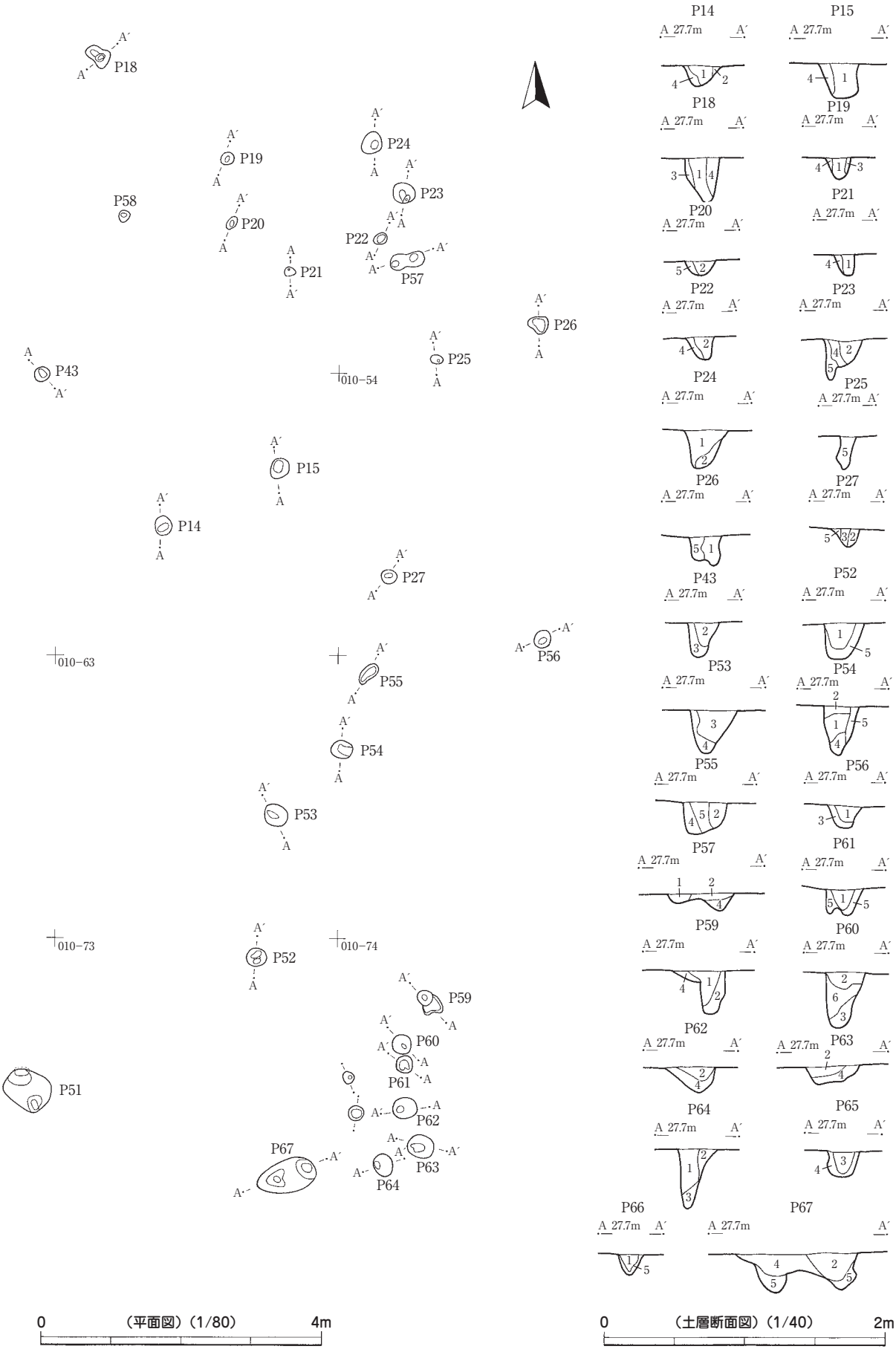
ピット群２　O10－44グリッドとO10－74グリッドを中心に南北に延びるようにピットが検出されている。さらにO10－72・73グリッドでは、平面形が長径が50ｃｍ～60ｃｍとなる落ち込みが確認されているが、ここでも焼土等は検出できなかった。

ピット群３　P10区の68・68グリッドで10基ほどのピットが疎らに分布してたが、ここでは柱穴を想定できるような痕跡は認められなかった。

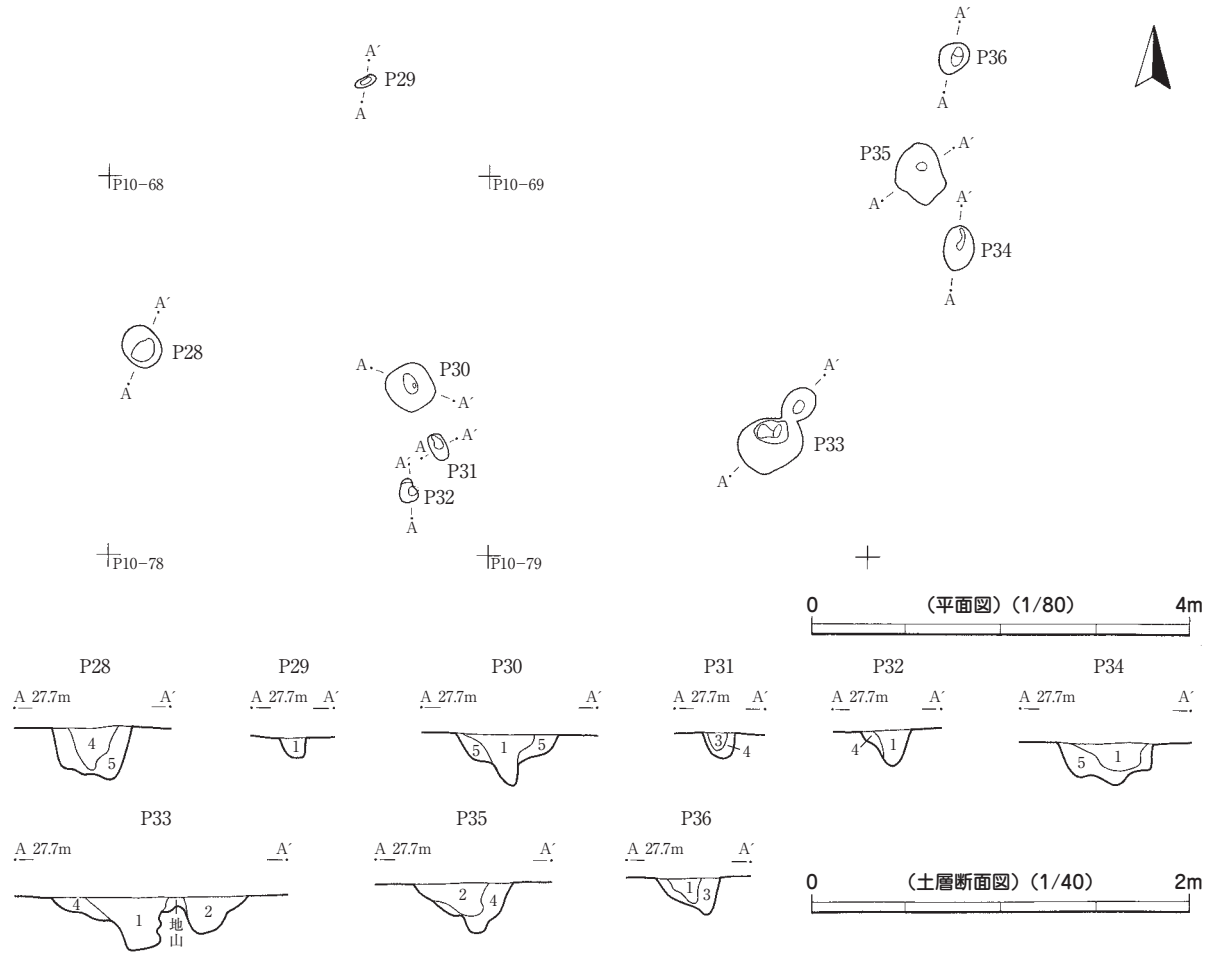
以下、第85表は各ピットの計測表である。


010-40
010-41
010-42
010-62
010-72
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P16
P17
P37
P40
P41
P42
P44
P45
P46
P47
P48
P49
P50
A 27.7m
0 (平面図) (1/80) 4m
0 (土層断面時) (1/40) 2m

第243図　ピット群 1


P18
P19
P24
P23
P58
P20
P22
P21
P57
P26
P43
P25
010-54
P15
P14
P27
010-63
P56
P55
P54
P53
010-73
010-74
P52
P59
P60
P51
P61
P62
P67
P63
P64
P14
P15
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P43
P52
P53
P54
P55
P56
P57
P61
P59
P60
P62
P63
P64
P65
P66
P67
A 27.7m
A´
0 (平面図)(1/80) 4m
0 (土層断面図)(1/40) 2m

第244図　ピット群２



第245図　ピット群３

第85表　ピット群計測表

遺構番号	検出地点	平面図	平面規模(cm)	深さ(cm)
P 1	P10－59	楕円形	30×21	25
P 2	O10－40	楕円形	31×26	27
P 3	O10－40	楕円形	18×15	13
P 4	O10－50	楕円形	34×28	17
P 5	O10－40	楕円形	21×17	8
P 6	O10－51	楕円形	22×18	18
P 7	O10－41	楕円形	26×24	10
P 8	O10－41	楕円形	30×22	28
P 9	O10－40	楕円形	28×19	20
P10	O10－42	楕円形	30×22	17
P11	O10－52	楕円形	27×23	20
P12	O10－52	楕円形	22×16	9
P13	O10－52	楕円形	38×28	21
P14	O10－53	楕円形	26×24	15
P15	O10－53	楕円形	30×26	25
P16	O10－42	楕円形	21×17	26
P17	O10－42	円形	径18	12
P18	O10－33	瓢箪	35×20・26	31
P19	O10－43	円形	径20	16
P20	O10－43	楕円形	22×12	12
P21	O10－43	楕円形	16×14	15

遺構番号	検出地点	平面図	平面規模(cm)	深さ(cm)
P22	O10－44	楕円形	20×16	10
P23	O10－44	楕円形	33×29	19
P24	O10－44	楕円形	33×28	27
P25	O10－44	楕円形	18×12	24
P26	O10－44	楕円形	28×25	21
P27	O10－54	楕円形	23×20	13
P28	P10－68	楕円形	45×36	28
P29	P10－58	楕円形	24×10	11
P30	P10－68	長方形	50×47	27
P31	P10－68	楕円形	30×17	14
P32	P10－68	楕円形	26×21	19
P33	P10－69	北・楕円形 南・楕円形	38×31 65×58	20 28
P34	O10－60	楕円形	48×31	23
P35	O10－50・60	楕円形	68×52	27
P36	O10－50	楕円形	36×30	20
P37	O10－50 P10－59	楕円形	28×23	25
P38	－	－	－	－
P39	－	－	－	－
P40	O10－40	楕円形	58×54	12

遺構番号	検出地点	平面図	平面規模(cm)	深さ(cm)
P41	O10－50	楕円形	21×15	14
P42	O10－51	楕円形	36×16	14
P43	O10－42・52	楕円形	23×20	24
P44	O10－51	楕円形	37×28	17
P45	O10－51	楕円形	30×27	17
P46	O10－51・61	円形	径22	14
P47	O10－52	楕円形	18×13	17
P48	O10－62	楕円形	45×42	40
P49	O10－62	円形	径26	32
P50	O10－72	楕円形	34×27	19
P51	O10－72	楕円形	67×52	26
P52	O10－73	楕円形	28×25	26
P53	O10－63	楕円形	34×30	30
P54	O10－63・64	楕円形	30×25	35

遺構番号	検出地点	平面図	平面規模(cm)	深さ(cm)
P55	O10－64	楕円形	36×18	23
P56	O10－54	円形	径24	16
P57	O10－44	瓢箪	50×21・22	東14西6
P58	－	－	－	－
P59	O10－74	楕円形	43×21	30
P60	O10－74	円形	径29	40
P61	O10－74	円形	径26	19
P62	O10－74	楕円形	34×30	19
P63	O10－74	楕円形	38×23	12
P64	O10－74	楕円形	32×26	42
P65	O10－74	円形	径21	18
P66	O10－74	楕円形	18×16	15
P67	O10－73	楕円形	58×49	11

第３節　遺構外出土の遺物

本節では遺構に伴わない遺物については一括してグリッド出土の遺物として記述することとしたい。とりわけ土器群については早期の撚糸文系土器から後期の安行式まで各時期の土器が台地の縁辺部や遺構周辺から出土している。また石器では石鏃が60点ほど出土したが、石斧類は磨製と打製を合わせて11点と少なかった。

１、土器（第246図～第261図、図版90～106）

早期（１～121）

１～37は撚糸文系土器である。これらの土器群はＢ４・Ｃ４区といった台地の南東縁辺部から比較的多く出土している。１は地文に原体RLの縄文を施した後、口縁に並行するような形で６条以上にわたり原体を丁寧に押捺した珍しい例である。平坦な口唇部にも縄文施文が認められる。器厚は４～５mmと薄く小型の深鉢と思われる。胎土には微細な石が多く含まれ、色調は淡褐色を呈している。井草式でも最古のものとなろう。２～５は口辺部に横方向の縄文が施されるタイプで縄文の原体はいずれもRLとなる。７の縄文は斜行するが、同類のものと考えてよいであろう。また２には口縁直下に指頭による押圧痕が鮮明に残されており、その痕跡は３・４・７にも浅く残っている。６は極細の原体を使用しており、撚糸施文によるもので口縁直下には重複するように横方向の施文が認められる。８・９・11・14は口縁が肥厚するタイプで、器面は縦方向の縄文で覆われる。口唇部にも同一の原体による縄文が施されており、14のみ無節のＲを採用している。10・12・13では口縁の肥厚は薄れ、縄文による施文は口唇部と胴部の縦方向のみとなる。15の撚糸文は14と同様に無節のＲによって施されている。これらは井草式でも新しいタイプとなろう。16・18～23は器面を縦方向に施文した縄文で覆われる。16の縄文は疎で、18の縄文は斜行している。20は器面の乾燥が十分でなく縄文が不鮮明なものである。他は縦方向に縄文がきれいに施文されている。17・24は撚糸文による施文で、17の口縁は肥厚する。25・26は同一個体で器面の一部にしか縄文が施されていない。器厚が５mmと薄く小型品となろう。穿孔は焼成前で約３mmの深さで中断している。30～37は胴部片で器面には、縄文（30・32・33）、撚糸文（31・34～37）がみられる。ただ34では、裏面にもLRの縄文が施文される珍しい例である。これらは概ね夏島式としてよいであろう。なお、36・37は施文の間隔から稲荷台式となろう。27～29は口縁直下に縄文原体が押捺された一群で、その特徴から花輪台式とな

ろう。27は器面の施文が無節Ｒによる撚糸文で、口縁直下には単節LRの原体を口縁と平行に押捺している。28・29は胎土と色調（淡褐色）から同一個体の可能性が高い。口縁直下には原体LRの縄文を押捺し、器面には縄文を異方向に回転させ羽状の効果を描出している。また28の補修孔は焼成後のもので未貫通である。

38～57は沈線文系土器である。これらの土器群はＥ３・４区、Ｂ４区、Ｄ４区といった台地の南東縁辺部やピット群が検出されたＯ10区からも若干出土している。38・39の器面は貝殻腹縁によって施文され、口唇部にも腹縁の押付が認められる。40～42は同一個体で、推定口径が11cmの小型深鉢である。口縁は平縁で、文様は竹管状工具により口唇部に刻目、口辺には平行沈線、胴部では斜行する沈線により器面を飾る。器面の色調は淡褐色で、焼成が十分でないため内部は黒色を呈している。43～45は幅広の浅い沈線により文様を描出している。43・44は同一個体で、口縁は平坦となる。推定口径は13.5cmの小型品である。46は口縁部だけの遺存であるが、平縁の大型深鉢となろう。器面は簡単なナデにより粘土接合痕を消去しているが、内面の整形は丁寧である。47～50は同一個体の大型深鉢となる。出土はＢ４－12・13・20・21・23・33グリッドと広範囲にわたっていた。口縁部は欠失し、器面では粘土紐の接合部が未整形で凹凸が著しい。一方、内面はきれいに整形がゆきとどいているため、器面の凹凸は装飾を意識したものとも考えられる。また胎土には石英や長石の砕片が多く含まれている。51は大型深鉢の底部に近い胴部片で、内外面はきれいに整形されている。器面に施されたヘラ状工具による細線は下部にまでは達していない。以上の土器群は施文具や文様から田戸下層式に位置づけられよう。52・53は同一個体である。器面は細い粘土紐や瘤状に貼付された粘土塊のうえをヘラによる刻目を施すことにより装飾される。胎土にはほとんど繊維の混入は認められない。57は口縁部片で、口唇部には小さな刻目と指頭により凹凸を作出することにより平坦な口縁を飾る。胎土には少量ながら繊維の混入が認められる。54・55は同一個体となる。56は波状口縁の小型品と思われ、器厚は６mmと薄い。いずれも器面での文様は認められず、口唇部のみに棒状工具を押し付けた刻目を施す。これらも前者と同様に胎土には少量ながら繊維の混入が認められる。こうした点から形式的には田戸上層式と見做されよう。

58～71は底部を含めた無文土器を一括した。58の口縁部は緩やかに外反するもので、器面の整形は丁寧なものである。だが繊維を多く含むため裏面では剥落が顕著にみられる。59・64は同一個体でＧ２－25・35グリッドから出土している。器厚についてみると、口縁部では９mm程度であるが胴部では12mm～13mmと厚い。器形は口縁の緩やかな弯曲から大型の深鉢と推定できる。60は口縁部片で繊維は僅かに含まれる程度である。器内外面の整形も丁寧さが窺える。61～63は同一個体の口縁部である。器面にみられる刷毛状の整形痕に共通点が見いだせる。繊維の購入はさほど多くはない。65・66は胎土中に繊維は認められない。65の器面には整形時のヘラ痕が残る。遺存した形状から田戸下層式によく見られるタイプといえよう。67・68は砲弾形を呈した底部で器面の整形はヘラ等でなでるように仕上げられている。繊維の混入は67に著しい。69は多数の胴部片が接合した例でＥ３－55グリッドから全点が出土した。器厚は７mm～９mmと比較的薄い。胎土に繊維を多く含むためか裏面では剥落が多々みられる。70・71は同一個体であり、接点は確認できなかった。Ｄ４－85グリッドで集中的に出土した。底部の径は約15cmを計るためかなり大型品であったものと考えられる。底部には等間隔で直線状の窪みが生じており、簾状のような敷物のうえで制作したものと推測できる。胎土には少量の繊維を含む。大型品ゆえ焼成が甘くなったようで内面では剥落が著しい。これらの土器群のうち繊維を含む一群は田戸上層式から子母口式の中に位置づけ

られよう。

72～114は条痕文系土器である。72・73は細い粘土紐を器面に貼付したもので、いわゆる微隆起線文によって器面を装飾する。72は口縁直下に粘土紐を一巡させ、その下には補修孔が穿たれている。器面は丁寧に整形されヘラによる擦痕が認められる。73は口縁部直下と胴部に斜行するような形で粘土紐が貼付されているが拓影図では鮮明さに欠ける。野島式といえようが胎土に含まれる繊維は２点とも微量である。74・75は竹管により施文されているもので、74は粘土を貼付した上を竹管で押捺する。器厚は厚手で12mmを計測する。繊維の含有は僅少である。75は小型深鉢の胴上半部の破片である。器面全体が半截竹管による押引きで飾られており、繊維の含有は少ない。この２点は、その文様構成から鵜ヶ島台式土器となろう。76～79は補修孔が認められる口縁部であり、胎土には繊維の混入がみられる。４点の孔は焼成前に穿たれた孔であり希有な例といえよう。しかも76・77の孔は貫通していない。このため穿孔は文様としても理解できる。前者の出土地点はM11－81・90グリッド、後者はN11－78グリッドと近接した場所となっている。口唇部の刻目や器面の整形、穿孔の間隔等が類似するため同一個体の可能性もある。78・79の孔も焼成前に穿たれたものである。ともに繊維を含み、裏面の整形はされておらず孔周辺の膨らみが残っている。78は器内外面を軽く条痕で整形されており、口唇下１cmに穿孔がみられ、その痕跡は左右の破損部にも認められる。このことから単なる補修孔とは考えられず意識的な事前の穿孔となろう。79の孔は１か所のみで、口唇部には刻目が施されている。器厚は５mm～６mmと薄く、口縁の弯曲からみて小型品となろう。これら４点の穿孔土器は時期的には茅山式期に属するものと思われる。80は条痕を斜行させることにより整形と文様を表現したものとなろう。口縁は波状のようである。胎土に含まれる繊維の量は少ない。時期的には条痕文系土器群の中でも前半期に位置づけられよう。81～108は茅山式期の土器群を一括した。81は口縁部から胴下半部まで確認できる深鉢でL11－55グリッドから出土したものである。施文は口唇部を貝殻腹縁の押捺、口辺部は条痕、胴部では背圧痕が認められる珍しい例となる。胎土に含まれる繊維は多い。82・84は同一個体であり、出土地点はM10－12グリッドとN11－89グリッドで若干離れていた。特徴は口唇部にあり、平坦に整形した口唇部に貝殻腹縁を密に押捺している。器面に施された施文方向から波状口縁と考えられる。85や89～91・94の口唇部にも貝殻腹縁が認められる。一方、83・93はヘラにより、92・97は指頭を押し付けて口唇部に変化を持たせている。93の穿孔は補修孔となろう。95・96の口縁は平縁のようである。98・99は同一個体でＭ９－39グリッドから出土したものである。98は波頂部を欠失している。口唇部にはヘラによる刻目が施されている。胎土には繊維の混入が著しい。100・101は胴上半部がヘラによる文様を施されたもので量的には僅少であった。100はヘラによる押引きで器面が飾られる。有段の粘土接合部からきれいに破損している。焼成は胎土に繊維の混入が少なく器厚も薄いためきわめて良好である。101はＤ３－74・84グリッドから出土したもので、緩やかな段が形成されている。有段部にはヘラにより刺突文が施され、上部には同一工具による格子目状の文様が描かれている。この点から形式としては茅山下層式となろう。102から104にも有段部が認められるところから時期的には近いものとなろう。105～108は胴下半部の大形片となる。106はM11－55・65・73・76の各グッリド、107はM11－65・74・76・82・84・85の各グリッドから出土し、108はＭ９－29・39・49とＬ９－40の各グリッドから出土している。器面の色調等は近似しているが接点は見いだせなかった。なお、この付近では炉穴等が検出されており関連遺物として捉えることができよう。109～114は条痕文系土器の底部となる。109は砲弾形を呈しており胎土には繊維が多量に含まれている。111～113は尖底で、111の内部には炭化物の付着

が著しい。113では内面にも条痕がみられる。114は茅山式期に属する唯一の平底底部片で、底部の1/3ほどが遺存したものである。基底部の作りに特徴がみられる。底面でも条痕による整形が認められ、底部の径は約６cmを計測する。

115～121は早期終末期に位置づけられる一群の土器である。出土地点はＬ９－22・32・33・43・52グリッドとなり、破片10点が径10mほどの範囲に散ったような状況で出土した。なお、117・119・120はＬ９－52グリッドから出土している。115は緩やかな波状口縁を形作るものであろう。口唇部とその直下の隆帯上には棒状工具による押捺を加えている。器面には繊維痕とともに若干の擦痕が認められる。116も波状口縁となろう。粘土帯の貼付は前者と同様であるが、口辺部に貼付されている。器内外面の整形には条痕を用いている。117～119はいずれも口縁部片と思われる。117と119は同一個体と思われ、垂下する２本の隆帯が共通している。これら３点の特徴は口縁裏面にも隆帯の貼付が認められるところにある。120・121は胴部片であり、緩やかな弯曲から推測すると胴部径は約30cm前後となる。前者は内外面に軽い条痕の痕跡が認められる。一方、後者の裏面では明確な条痕は認められない。こうした文様や.施文の相違からこれら一群の土器は少なくとも３個体が存在したものと推測できる。つまり口唇部直下に隆帯を有するタイプ、口唇から約2.5cm下に隆帯を形成するタイプ、口縁裏面部にも隆帯がみられる３タイプが存在している。器面の色調は淡褐色ないし淡い暗褐色を呈しており、裏面では淡褐色や青灰色（115・119）となり、明らかに茅山式期の色調とは異なる。胎土には繊維の他に石英粒や微細な小石等を含んでおり、この点では茅山式期とそれほどの差異が認められない。

前期（122～219）

122～136は前半に位置づけられる土器群で胎土には繊維が混入される。122・125～127は同一個体と考えられ、底部を欠損するもののほぼ器形を把握できるまで接合できた。出土地点はＣ４－08・09グリッドを中心に一部がＢ４－20とＢ５－90グリッドにみられた。器形は口縁が波状となり大きく外反する深鉢となる。器面は原体RLの縄文を全面に施文する。胎土中にみられる繊維の量は概して少ない。123は山形を呈した口縁が遺存したものである。頂部から逆Ｙ字状に粘土紐の貼付がみられ、その上から直線的に棒状工具による円形の刺突文が施される。124は櫛状工具により数条の条線で文様が描かれる。これらの土器群は黒浜式でも新しいタイプのものとなろう。128～131はすべてＢ４－00グリッドから出土しており同一個体の可能性が高い。器面は原体LRの縄文によって全体が施文されている。132は奈良・平安時代の住居跡（Ｂ５－97グリッド）から出土したもので、口縁部が波状となる深鉢である。胎土には繊維を多く含み器面にもその痕跡がみられる。133～135は同一個体であり、Ｍ９－19・29グリッドから出土している。器面は異条縄文で全体が覆われ、胎土には繊維が多く含まれる。なお133は口縁部と思われるが口唇での摩耗が著しい。これらは概ね黒浜式でも古いタイプのものとなろう。136は底部が遺存したもので、底径は推定約10cmを計る。器厚も５mmと薄く比較的小型の深鉢といえよう。

137～188は後半の土器群で諸磯式及び浮島式を一括した。137～168までは諸磯系土器群と浮島Ⅰ式に属するものとした。137は縦方向に竹管による連続爪形文を配した後、粘土紐を貼付した浮線の上下を同様の連続する爪形文を添え器面を飾る。空白部は爪形と円形の竹管文を充填することにより装飾を完成させている。138は半截竹管により器面に沈線を描き、それに沿って竹管を横方向から刺突し幾何学的な文様を作出する。形式的には諸磯Ａ式に近いものであろう。139～146は地文に撚糸文がみられる土器群である。139はＬ11－59・69グリッドと隣接するＫ11－50グリッドで出土したものである。地文の撚糸文は器

面全体に施されており、口縁付近まで鮮明に認められる。文様は平行する２条１組の爪形文を口縁部と胴上部に配し、その間を半截竹管で鋸歯状に施文している。140～143は同一個体とも考えられるが、出土地点がＮ９－59グリッド、同47、同29と若干離れている。器形は口縁部が大きく外反した波状口縁の深鉢である。口辺部には瘤条の突起がみられ、その間を隆帯が巡る。空白部分には半截竹管による鋸歯状文が配される。141は口縁部が欠失しており、隆帯以下の口辺部となる。144～146も同一個体と考えられる。Ｋ10－40・42・50グリッドから出土しており、器面は赤彩を施したような赤褐色を呈する。地文の撚糸は鮮明で、半截竹管の押引きや刺突によって口辺部の文様を描出している。149～151は波頂部が鋭い山形を呈した作りとなり、地文には間隔の粗い縄文が疎に配置される。このように疎な縄文は円形の竹管文を密に配した155や158にもみられるところから浮島系に属する一群の土器と考えたほうが妥当となろう。

147・148は波状口縁の頂部に特異な瘤条の突起が付されたもので諸磯系の色彩が強いものといえる。なお188も同系統のものとなろう。153はＬ10－25・34グリッドから出土しており、器形は浅鉢となろう。口縁部では小さな波状を形成する。口縁直下には半截竹管を用いた２条の連続した爪形文を施し、以下は曲線で文様を描いている。器形と文様から諸磯Ａ式に該当するものであろう。154は径が５cmほどの波状口縁の小型品である。半截竹管を横方向に押し付けており形式的には浮島系と考えたい。152はＬ９－02・12・13・23グリッドとＬ10－74グリッドから出土している。口縁は平縁で緩やかに外反する深鉢である。口辺には半截竹管による爪形文が３条みられ、胴部の文様は半截された竹管の片側を用いて短い沈線で充填しているようである。この短い沈線はあたかも疎な縄文や撚糸文をイメージさせる。156・157は同一個体で、Ｋ11－50グリッドとＬ11－59グリッドから出土したものである。半截竹管により連続した爪形文や平行線文がみられる。161は僅かな爪形文の痕跡を残すのみである。159・160も同一個体でＦ６－44グリッドから出土している。波状の口縁部が遺存したもので、口唇部にはヘラによる刻目が施されている。器面の文様はヘラによる単線で描かれている。この２点は浮島式でもⅠ式以降の所産と思われる。162は底部で疎な縄文RLで器面が覆われるが、149や150にみられる縄文との共通点をみいだせる。時期的にも一致するものとなろう。163～168は同一個体でＫ10－70・80グリッドとＬ10－79・89グリッドから出土した波状口縁の深鉢である。地文にはRLの縄文を施し、口縁部は３条の連続する竹管文で飾る。胴部にも同一工具による平行線文がみられる。密に施された縄文や連続する竹管文から諸磯Ａ式に属するものである。

169～187は浮島Ⅱ式以降の土器群であり、Ⅲ式が主体となる。169は接合によりほぼ器形を復原できるまでになった。出土地点はM10－28、M11－69・79・87・89、Ｌ11－60・80の各グリッドとなり、とりわけM11－69・79グリッドに集中していた。口縁部にはヘラによる刻目文、胴部では三角文が全面に認められる。器面の色調は淡褐色ないし淡赤褐色を呈している。170は口縁部片が接合したもので、出土地点は前者と近いM11－66・67・76・77グリッドであった。施文についてみると、口辺では粘土紐接合部を補強するかのように指頭により接合痕を消去し、胴部には連続して三角文を施している。171・174・176は出土地点や施文法、砂粒と微細な雲母含む点から同一個体と見做される。いずれもＧ２区に存在した溝から出土している。口唇部では棒状工具による押捺が施され、以下は横方向に貝殻腹縁による連続施文で装飾されている。172・173も外反する口縁部や施文・出土地点から同一個体となろう。出土地点はＢ４－30グリッドとＣ４－49グリッドである。口縁端部は強く外反し、連続する貝殻腹縁文は前者よりも幅が狭く器面を深く抉っている。175は胴部の小片である。器厚は約７mmと薄い。連続する貝殻文は他と比較し鮮明である。177は推定口径が13cmほどの小型深鉢で、口縁部が1/4程度遺存したものである。器面には輪

積み痕が残る。器面の文様は貝殻腹縁により粘土紐の接合部に沿って自在に施文している。178・179は奈良・平安時代の住居跡から出土しており、施文等から同一個体と考えられる。前者はSI162、後者はSI160とSI163となり、住居跡は互いに近接して存在していた。器面の整形は粗く凹凸が著しく、一部には輪積痕がみられる。文様は177と同様にアナダラ属の腹縁を上下に大きく移動させながら施文している。180・181はＥ３－67・77・78グリッドから出土した口縁部と胴部破片である。横方向に連続的に施文される貝殻腹縁と半截竹管の刺突による文様の特徴から同一個体となろう。182は小片で部分的に刺突が施されており、胎土には雲母や小石の混入がみられる。183は口縁部片で円形の刺突文によって器面の装飾が施されており、口唇部には指頭による押捺が加えられる。184は口縁部が接合した大形片である。Ｅ３－67・68グリッドから出土しており、口唇部にはヘラによる刻目が一定間隔で施される。また器面全体にも刺突文がみられる。185～187も同一個体であり、Ｃ４－38・48・49・58の各グリッドから出土した。器面は幅５mm程度のヘラ状工具と無節Ｌの縄文による装飾が認められる。口縁部の作りから浮島系でも終末期に属するものとなろう。縄文が施文された極めて希で貴重な一例といえる。

189～219は前期終末から中期初頭に位置づけられる土器群である。189は鋭い山形を呈した口縁部が遺存したもので器面に文様はみられない。胎土には金・黒雲母が多く含まれる。190も前者同様の口縁を形成し、肥厚させた口縁部をヘラ状工具で印刻する。その直下には半截竹管による複数の沈線が口縁と平行に施されている。191・192は胴部片で器面には半截竹管による渦巻文が描かれ、胎土には黒雲母が混入されている。192は僅かな量である。193・194は同一個体と思われる。表裏面が黒褐色で半截竹管による渦巻文が認められる。195～199はM10－38・49・69・77グリッドから出土した口縁部と胴部片である。いずれも色調は赤褐色を呈し、胎土には破砕された小石を含有する。これらは同一個体と考えられる。器形は大きく外反する山形の口縁を作出し、器面には半截竹管による平行線文を施し、器面全体に極細の粘土紐を貼付する。さらにその上を竹管による押引きで施文効果を強調した入念な仕上げとなる。以上の土器群は施文の特徴から十三菩提式に相当するものである。

200・201・204は口唇部や口辺部に絡条体圧痕が認められる。200は口唇部に、201では口唇とその直下に２条の圧痕が施される。204はM10－48・49・58グリッドから出土した４点が接合したもので縄文原体は無節のＬを使用している。縄文は口唇部、口辺部、胴部と明確に区分され、絡条体圧痕による施文は口辺部に限られている。これらは粟島台式土器と呼称されるものとなろう。203はＧ２区に存在した溝状遺構から出土した破片５点が接合した口縁部である。器面全体は条の太い原体LRで覆われ、口唇部には棒状工具により等間隔に押捺されている。時期的には前者と同一時期となろう。

202・205～211は縄文原体に結び目を付すことによりＳ字状結節文を作出した土器群である。213～216は口縁部に輪積痕を残す深鉢である。210と211の色調は異なるものの結節文が近似しており同一個体と考えられる。上部は接合部から失われているため輪積が不完全であったものと思われる。213は無節の縄文Ｌが器面に施されている。214は口唇部に指頭による凹部がみられる。215は無文で器厚も５mm～６mmと薄いため小型の深鉢となろう。216は200と同様に口唇部を等間隔に細い棒状工具で押捺されている。217は口縁部片で、頂部が山形を呈しヘラによる刻目がみられる。器面及び側面に施された縄文は無節のＬで若干ながら条の太さが異なる。時期的には前期末葉に位置づけられよう。218は粘土接合痕の整形は十分ではなく、器面全体に短く細い撚りの原体LRを回転させている。219はＭ９－07・17・18・19グリッドから10点の破片が散乱しているような状況で出土したものである。器形は口径が12cmほどの筒型を呈

したタイプとなろう。器面にはLRの縄文が施され、口縁の内外面はヘラによって削がれている。胎土には長石や石英の破砕粒の他に若干の雲母が混入されている。これらの土器群は前期終末期の粟島台式から中期初頭の下小野式に該当する土器群となろう。

中期（220～266）

220はＤ８－70グリッドから集中的に出土したものである。口縁部は緩やかに外反する波状口縁を呈し、内面には稜が形成される。器面の装飾は縄文と沈線によって構成され、波頂部の下には円形文を描く。また地文には縦方向に結節文が施される。221・222は、個体は異なるが同様な文様を構成するものである。器形は平縁の深鉢となろう。口縁部内面の稜は鮮明である。器面の施文は、口唇部には密に刻目を施し、口縁直下と口辺部に平行する２列の角押文を配している。胎土には破砕した小石や白色の鉱物が多く混入されている。223は口縁部に近い破片で器内外面は剥落が著しい。器面の施文は半截竹管で浮線を描出するとともに、その間をヘラで三角に陰刻し鋸歯文を作出している。224はM10－09グリッドとM11－68グリッドから出土した口縁部片で、接合はしていない。文様は半截竹管による集合沈線が特徴的である。225・226は胎土に混入される雲母と使用されている太い沈線により同一個体と思われる。前者の出土地点はＢ４－42グリッドであるが後者は表採資料である。225の口縁は特異な作りとなり傾斜する頂部が特徴的といえよう。226の縄文は回転方向を異にしている。227は胴上部に粘土帯を貼付したもので沈線により区画されているようである。以上は概ね五領ヶ台式に属するものであろう。

228～231は同一個体になるものと考えられる。出土地点はN10－07・09・16・17・18・28の各グリッドから１～２点が出土したものである。５点が接合した229は、口縁部で把手部分が失われている。隆帯によって囲われた部分は押引文により充填される。また隆帯部分では一部に刻目が施される。なお230では約１cm幅のヘラ痕が横方向にみられる。胎土には金・黒雲母が多く混入されている。232は波状の口縁部であり太い沈線を採用している。黒雲母の混入が若干認められたためここに含めた。233は平縁口縁の深鉢となろう。器面は幅広で爪形のヘラ痕により文様が描出されている。これらの土器群は阿玉台Ⅱ式に属するものと思われる。

234・235は12点の破片を合わせたもので部分的な接合となる。出土地点はN10－55グリッドを中心に同45・65グリッドとなる。口縁部ではヘラによる陰刻や隆帯により渦巻状の文様を形成する。胴部は無節Ｌの撚糸文によって全面が施文されている。236は把手部分が遺存したもので胎土には僅かに雲母が混入しており阿玉台式に属する可能性も否定できない。237はM11区で検出された溝状遺構から出土しており、器面には竹管による沈線文や押捺・爪形文等により装飾されている。これらの土器群は施文された文様から勝坂式的な色彩を強く感じられる。238・239は同一個体となろう。N10－55・66グリッドから出土した口縁部片である。口唇部は平坦に整形され円形の把手もみられる。地文にはRLの縄文を施しており把手部分にも及ぶ。その後、力強い沈線によって口縁部の文様を仕上げている。このように鮮明な沈線と把手は勝坂式の影響を受けたものと考えられる。

240～242も同一個体である。O11－82グリッドを中心に同83・97グリッドでも若干が出土した。頸部を欠損するが、キャリパータイプの深鉢となろう。把手部は豪華な作りで、前後、左側面、上部の４か所に円形の透かしが入る。口縁部は隆帯により主文様が描かれ、さらにヘラによる陰刻や蕨手文が付されている。胴部はRLの縄文を地文とし、幅広の沈線でクランク状の曲線や懸垂文によって飾られている。なお胎土には微細な雲母が混入されている。243はN10－55グリッドで出土しており胴部のみが遺存したもの

である。器面は前者同様に縄文地の上をしっかりとした太い沈線で施文している。ただ垂下する沈線は縄文施文の範囲で終了している。これらの土器は、その器形や文様から加曽利Ｅ１式でも古式の様相を保持したものといえよう。

244～251は加曽利Ｅ式でも新しい部分に属する土器群を一括した。244は口縁部に円形の刺突文が施されるタイプで縄文は複節を用いている。245は波状を呈した口縁部片で、波頂部から幅広の沈線を施し、その下には円を描き縄文で充填する。246は波状口縁の深鉢で縄文と沈線により文様を描出しており、沈線間の縄文は磨消されている。これらは新しいタイプにみられる文様構成であり加曽利Ｅ３式の特徴をよく表現している。247～250は垂下する沈線間を磨消した胴部片である。251は破片上部に刺突文の一部が認められる。器面の施文は撚糸文を地文とし、その上を沈線による曲線等を描いている。地文の種類から連弧文系に属するものとなろう。264～266は同一個体であり縮尺が一部異なる。出土地点はＣ４－39グリッドに集中し、同48・49、Ｂ４－30・40の各グリッドにも散っていた。器形は大型の深鉢であることには相違ないが、胴部の径は60cmを超える大型品となる。遺存は胴部のみで下部には摩耗痕が認められた。また器面は淡褐色でひび状の筋が顕著にみられるため土器囲いの炉に使用されたものと推測できる。文様は隆帯によって主文様が構成され渦巻文や懸垂文等を組み合わせる。また空白部分はRLの縄文によって充填されている。加曽利Ｅ３式の末に位置づけられよう。

260・261・263は加曽利Ｅ式終末期の土器群となる。260はＥ６－60グリッドから集中して出土したものである。口縁には把手がみられ頂部には空洞が作られる。器面は「∩」状に垂下する隆帯によって主文様が構成され、空白部は撚りの密な縄文LRによって満たされる。さらに隆帯間とその左右には器面調整が加えられた丁寧な仕上げとなっている。261は前者とは逆に隆帯上や口縁頂部にまでLRの縄文を施文している。263は底部が大きく開く深鉢となる。器面は隆帯間に縄文を施文し、垂下する隆帯の左右に沈線が加えられる。

252～259は底部８点について図示したものである。これらの底部は概ね中期に属するものであろう。いずれも破損後、明確に再利用された痕跡が認められるものである。破損部を観察すると、252の1/4程度の遺存品でも平坦な面を作出しようと意識的に小さく打ち欠いたような痕跡を残す。253・256に至っては底部接合痕に沿って整形が施され、一部には摩耗痕が認められる。なお出土地点についてみると、252はＬ10－22、253はM11－62・66・72、254はＥ３－47・77・87・88、255はＢ４区（奈・平住居）、256はＭ９－19、257はM11－67、258はM10－17、259はＭ９－90の各グリッドとなり、Ｍ９・10・11区に偏って出土している点に興味が注がれる。

後期（262・267～299）

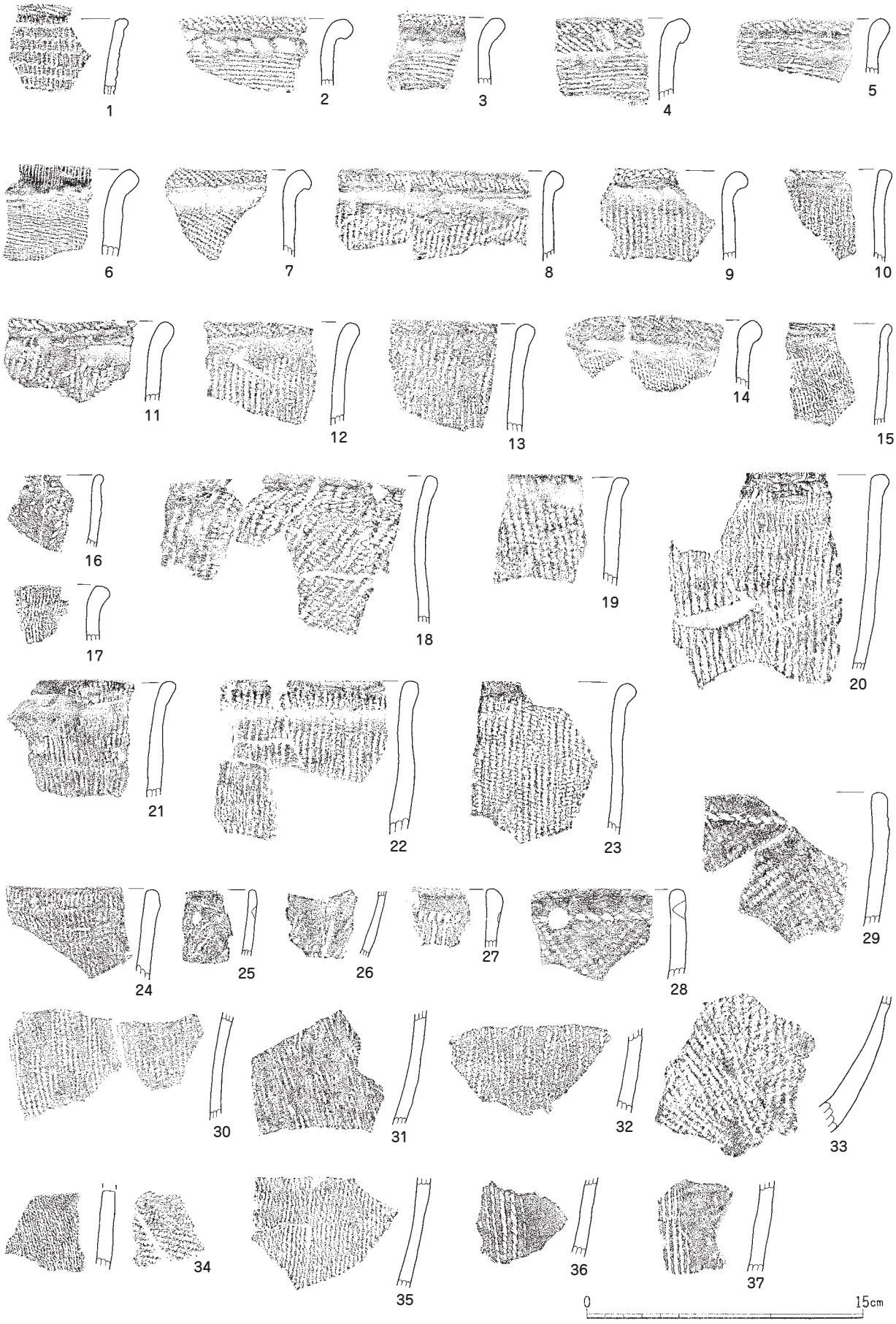
262は珍しい作りとなる。10点余の小破片が接合したものでＤ５－22グリッドから纏まって出土した。把手の付いた口縁部となるが、把手の下部では孔がみられるため注口土器の一種といえよう。口辺部では縄文施文の後に沈線で囲われた部分に刺突文が配される。刺突は把手の上部にもみられるところから時期的には称名寺式から堀之内式に位置づけられよう。

269～274・284・286・287・290～293は加曽利Ｂ２式から曽谷式に位置づけるれる土器群である。269はM10－26グリッドからの出土で底部を欠損する。口縁が大きく外反する鉢形土器で、内面では沈線が巡る。文様は胴上半部にのみ施され、２方向から斜行する沈線を施すことにより鋸歯文を描出する。施文法から加曽利Ｂ２式となろう。270は広範囲から出土しており、Ｅ３－58・67・68・76・77・78・88の各グリッ

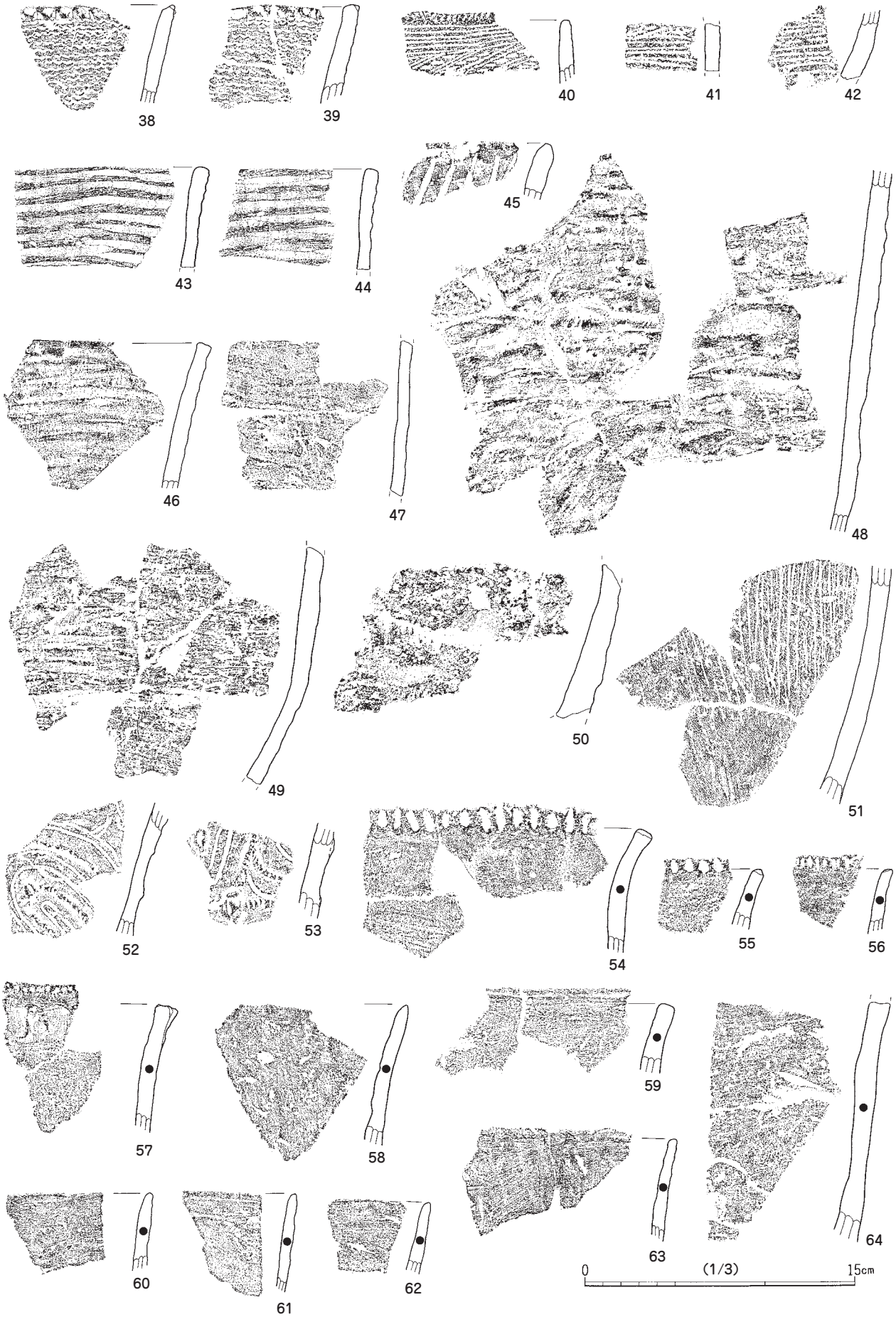
ド出土片が接合したものである。半精製土器で器面は丁寧な調整で無文部を作り出している。口縁は緩やかな波状を呈するが、器形としては前者に近似する。また口縁の内側には沈線を意識したものか大きな凹みが形成される。器面の文様は、口辺と胴上半部は斜行する浅い沈線で飾り、頸部の磨消しによって分離される。271はＥ３－68・69・78・88の４グリッドから出土しており、接合によりほぼ器形の復原ができたものである。内外面の一部には器面調整も施され丁寧に仕上げられている。口縁裏面には明確な沈線が巡る。文様は器面に粗い縄文を施した後に浅い沈線を斜行させ、頸部を磨消している。272はＥ３－46・47・56・57・58・59の各グリッドから出土した。内面全体はきれいに調整されており半精製土器といえよう。口縁は波状を呈し、上部には縄文が施文されている。くびれた頸部には無文帯の下をヘラによる刺突がみられる。273はＥ３－36・46・47グリッドから出土しており胴下半部を欠失する。口辺部内面では器面調整を施している。器面の文様構成は前者に近いが、大きく外反した口辺部には鮮明な沈線を弧状に描いている。胴部の沈線は横方向に施した珍しい例である。274は内外面ともに調整された精製浅鉢で口縁は波状である。底部の一部は欠損するが緩やか丸底を呈したものとなろう。出土地点はＢ４－20・21・23・31・33・42の各グリッドとなり広範囲に散乱した状態で出土した。口辺部の文様構成は269に類似し、底部近くには沈線で区画された縄文帯が存在する。時期的にも269と同時期となろう。284は口縁部片が数点接合した半精製土器で小型の深鉢である。出土地点はＢ４－30・40、Ｃ４－49グリッドとなる。文様構成は271と共通するが、口縁裏面の作りは異なる。286は波状口縁を呈した浅鉢ないしは台付浅鉢となろう。内外面ともによく調整されている。文様は縦方向の繊細な沈線とそれを区画するかのようにやや太い沈線が横方向に配される。287は口縁部の小破片であり、口唇部には刻目が施される。器形は波状の深鉢で頸部に磨消しを有する半精製土器であろう。290～293は同一個体である。出土地点はＫ８－40・41・50・52の各グリッドであった。器形は、口縁部が大きく内弯し胴中央部がややくびれる深鉢である。この時期にはよくみられるタイプである。文様は口縁部に２条の帯縄文を配し、くびれ部の上下に弧線で区画した中を縄文施文で充填している。294～296は紐線文系深鉢の口縁部であり、やや太めの撚りの粗い原体を使用しているところが特徴といえる。

267・268・280～283・297～299は前述した土器群の底部となる。267の内面はきれいに研磨されている。280～282は紐線文系の深鉢となろう。299の底部は若干摩耗しているが浅鉢の底部と思われる。

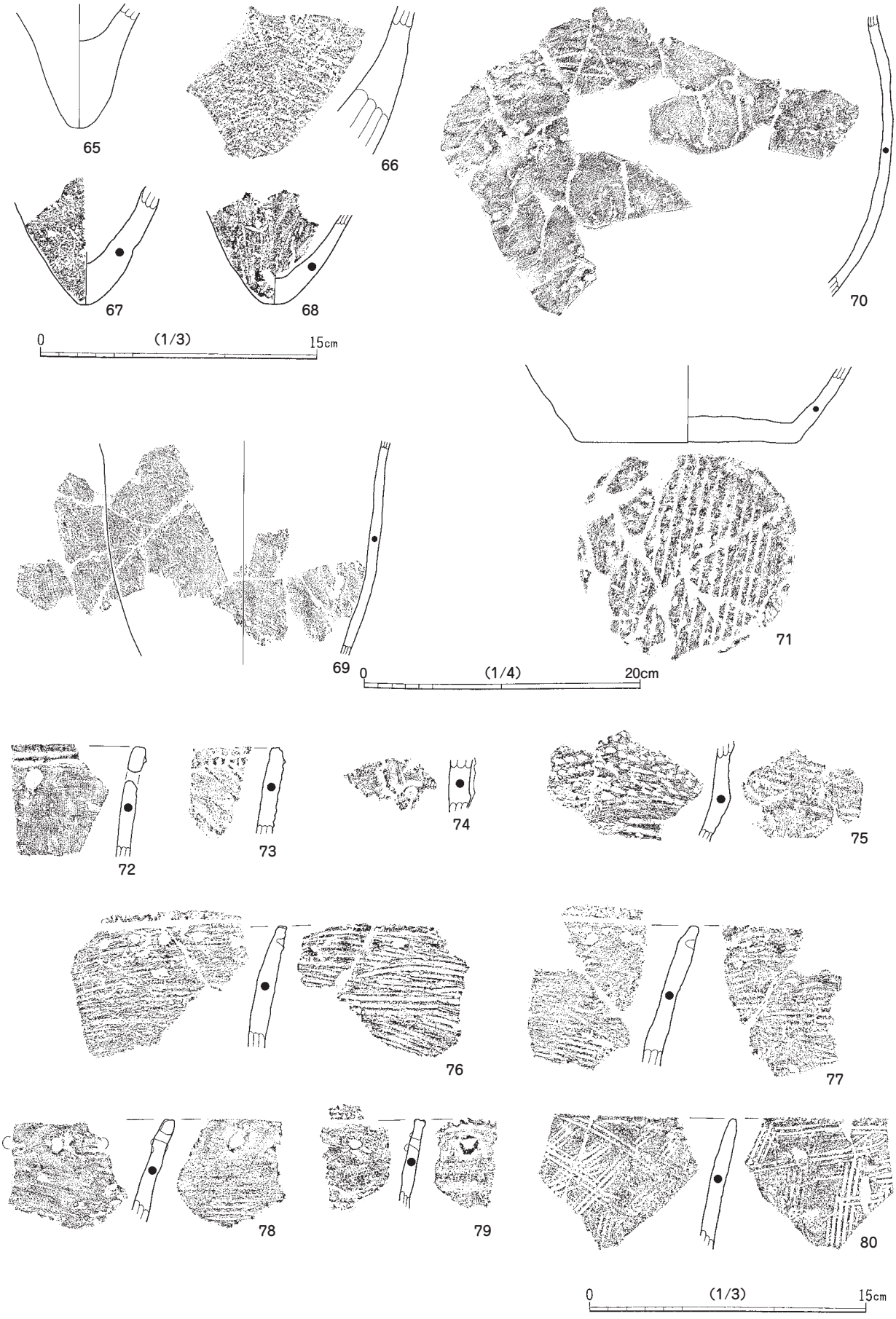
275～278・285・288は安行１式に属する土器群である。275は帯縄文系の平縁の深鉢となる。出土地点はＫ８－41・50・51グリッドであった。文様は口縁部に２条の帯縄文を巡らせ、推定６か所に瘤状突起を貼付している。瘤状突起の下部には縦方向の沈線により縄文部分が区画される。また胴部の器厚は２mmと薄い。裏面では胎土を削ぎ落とした時に使用されたヘラ状工具の痕跡がみられる。276はＤ５－06グリッドから出土した大形片３点で接点は認められなかった。器形は底部付近破損部の観察から台付の可能性がある。文様は口辺部に集中し粘土紐を貼付した上に刻目を施し、その後、さらに瘤状突起を貼り付けている。277は一部に接点が認めらない部分もあるが、ほぼ器形を復原できた。出土地点はＫ８－40・41・50・51・63の各グリッドに散乱するような状況で出土している。粗製土器ながら器内外面丁寧に整形されている。また底部には斜めに組まれた網代痕がみられる。278は８Ｋ－90・91・92グリッドで出土している。前者同様の深鉢となろうが、器厚は７mm～８mmと厚く、胴部が丸みを有する大型品となる。285はM11区で検出された溝状遺構から出土したものである。口縁部が外反するタイプの深鉢で口縁と胴上部にはヘラによる刺突が施されている。288は深鉢の把手部片であり、瘤状突起の左右には縄文を施文した典型的



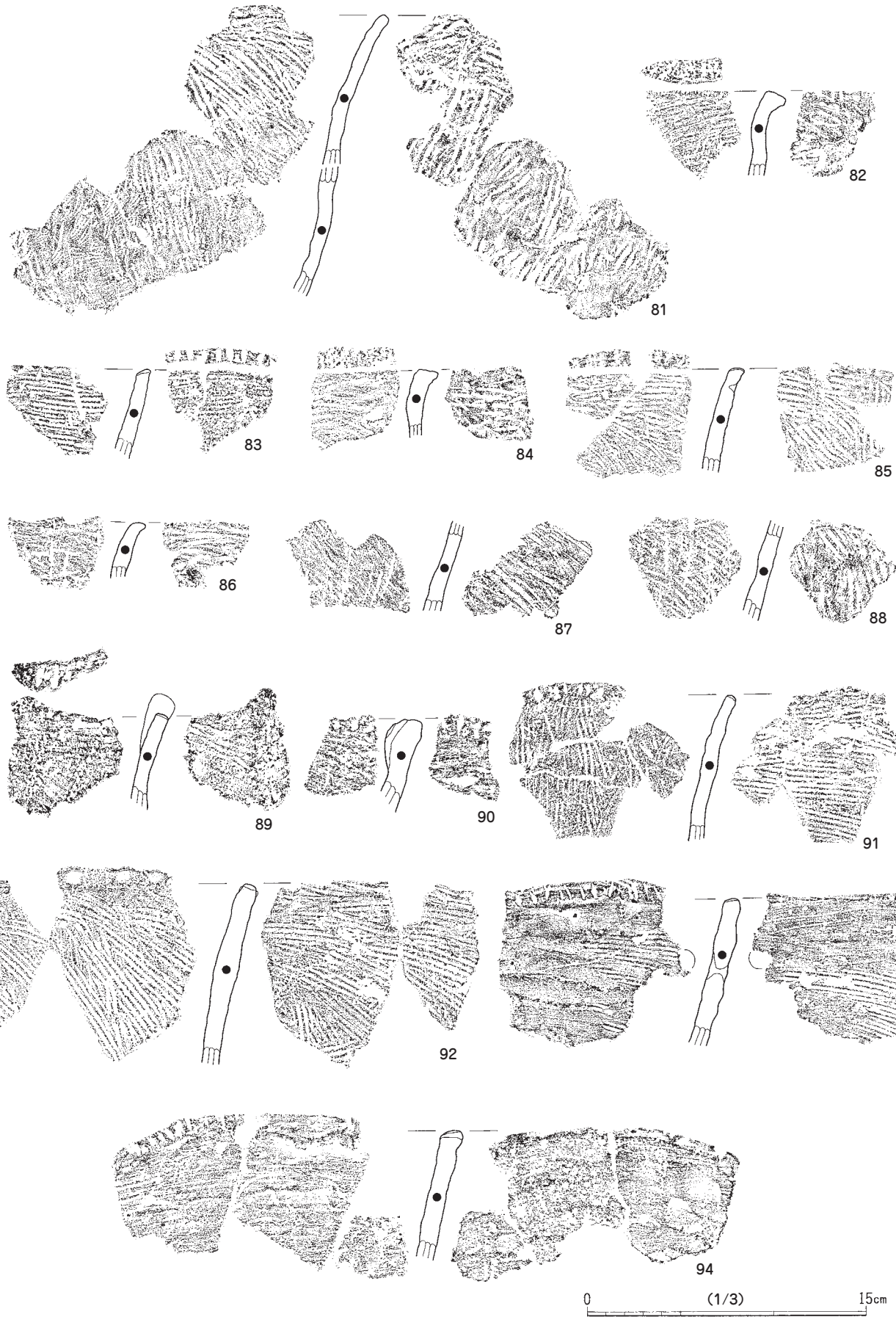
第246図　遺構外出土土器（1）



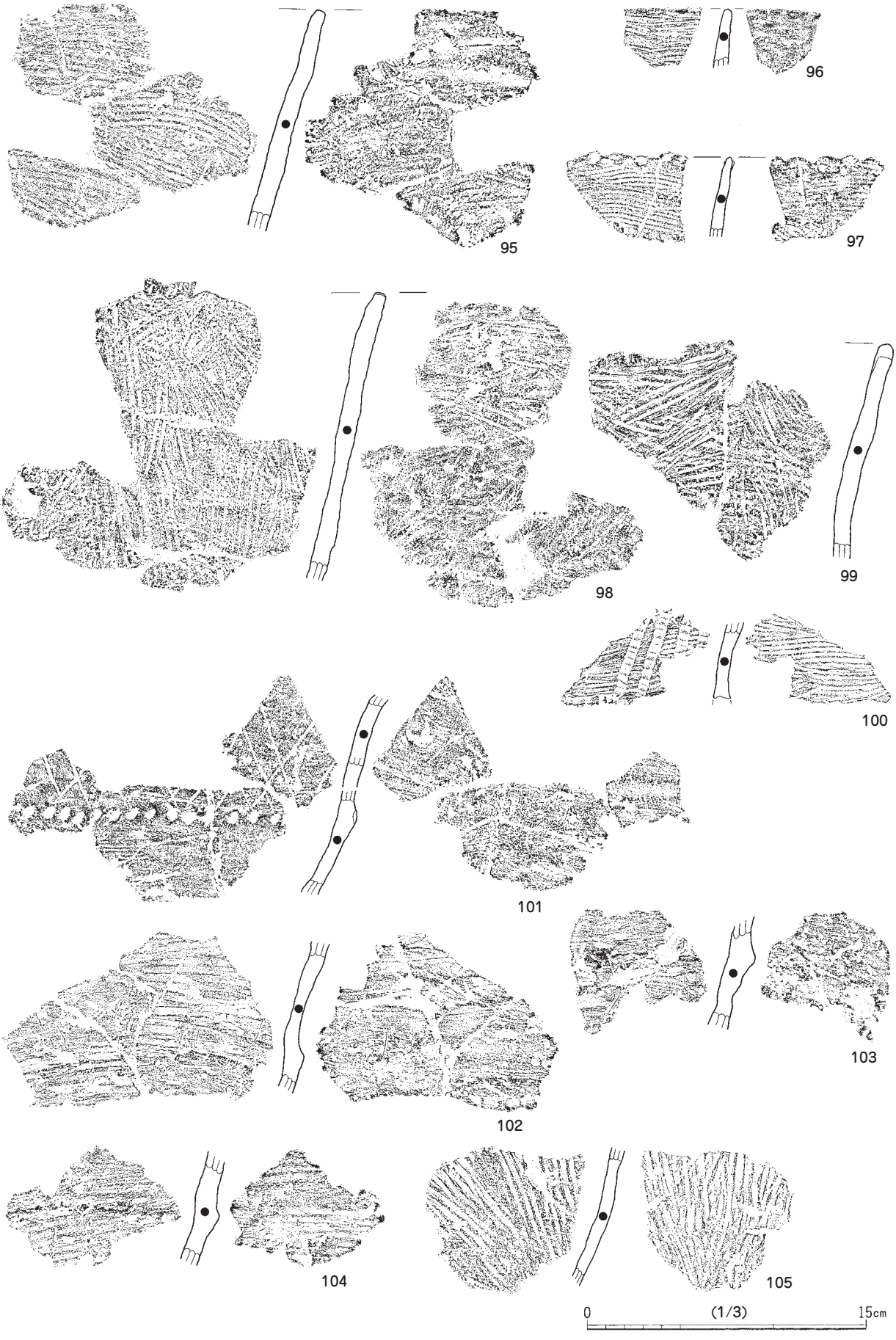
第247図　遺構外出土土器（2）



第248図　遺構外出土土器（3）

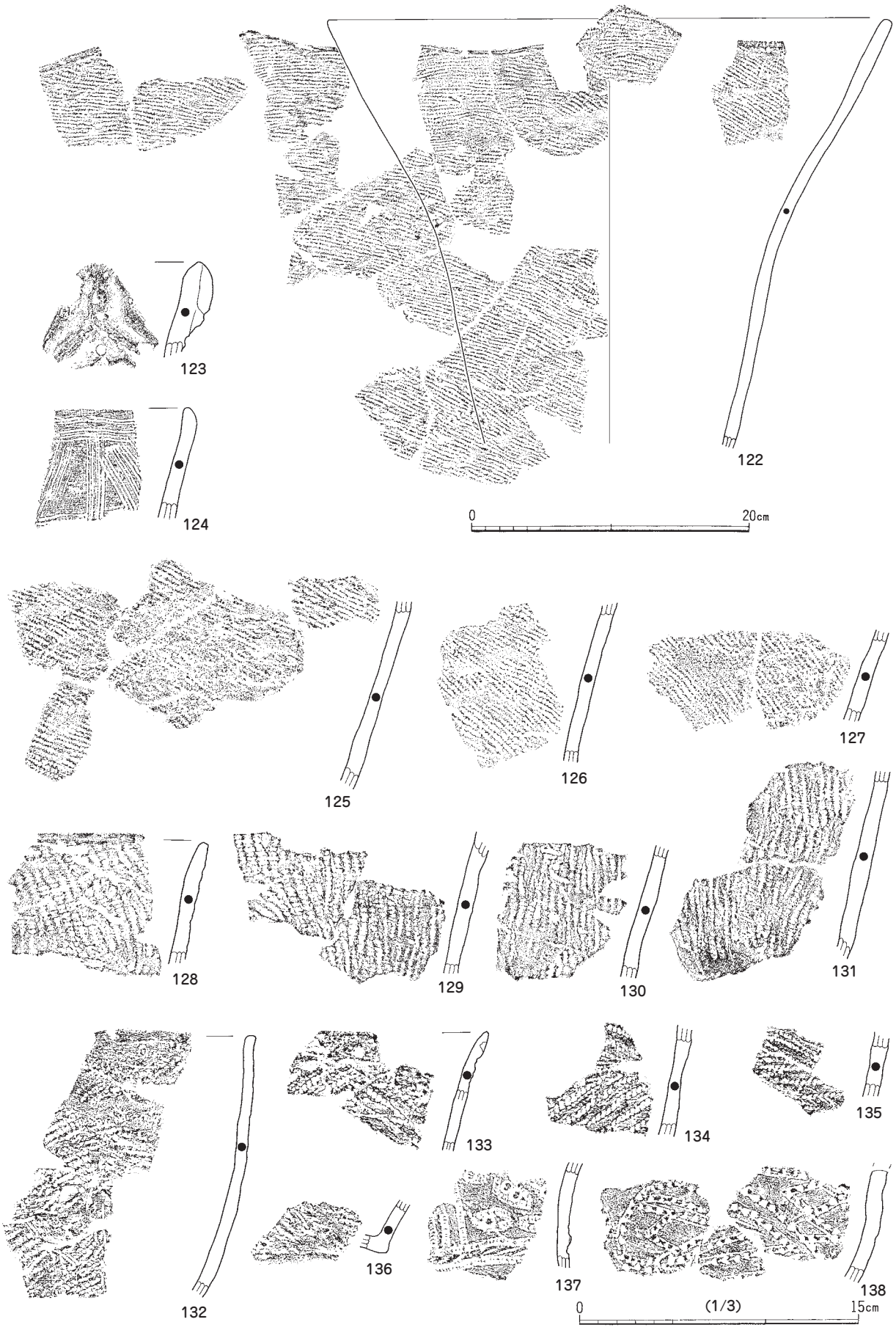


第249図　遺構外出土土器（4）

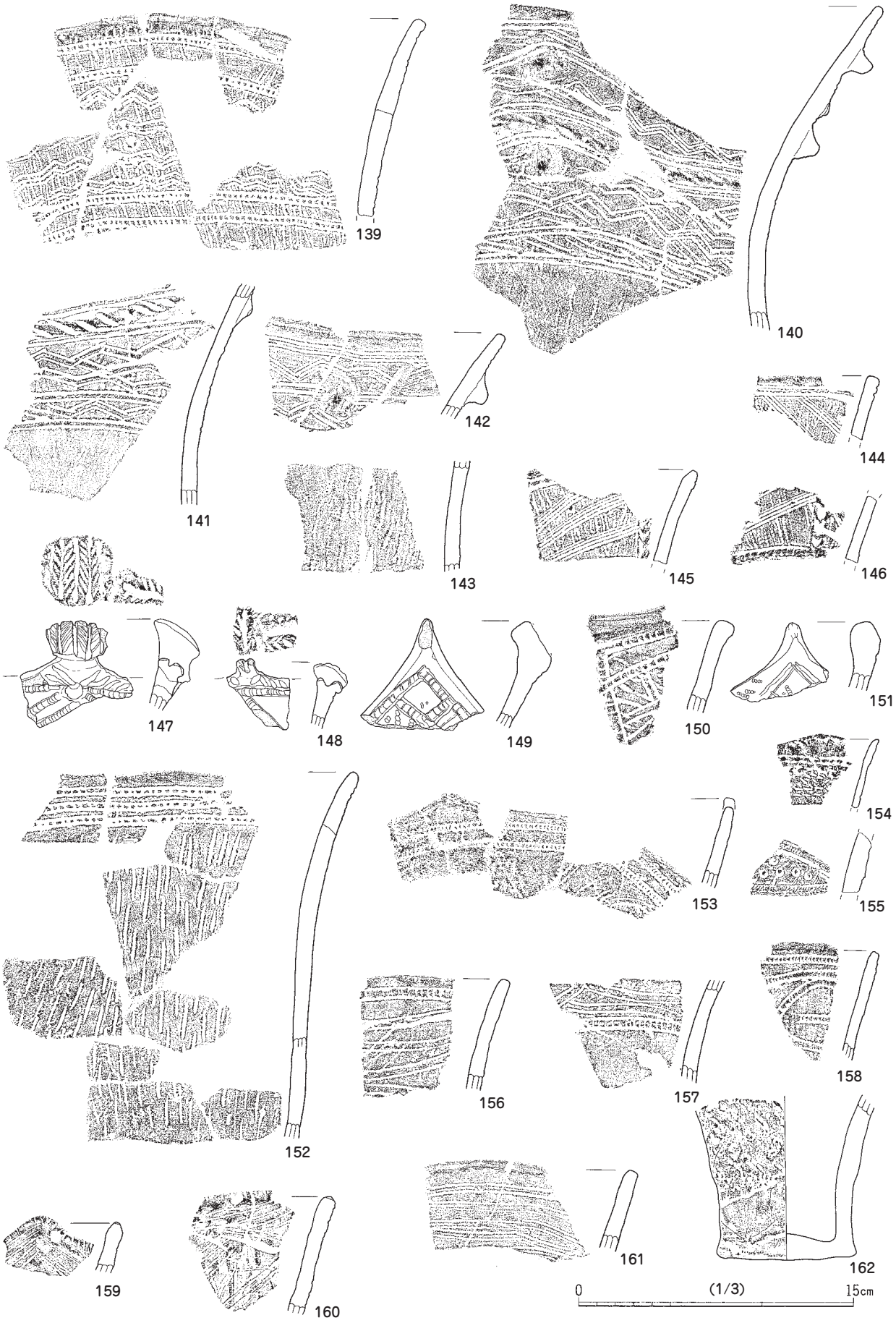


第250図　遺構外出土土器（５）

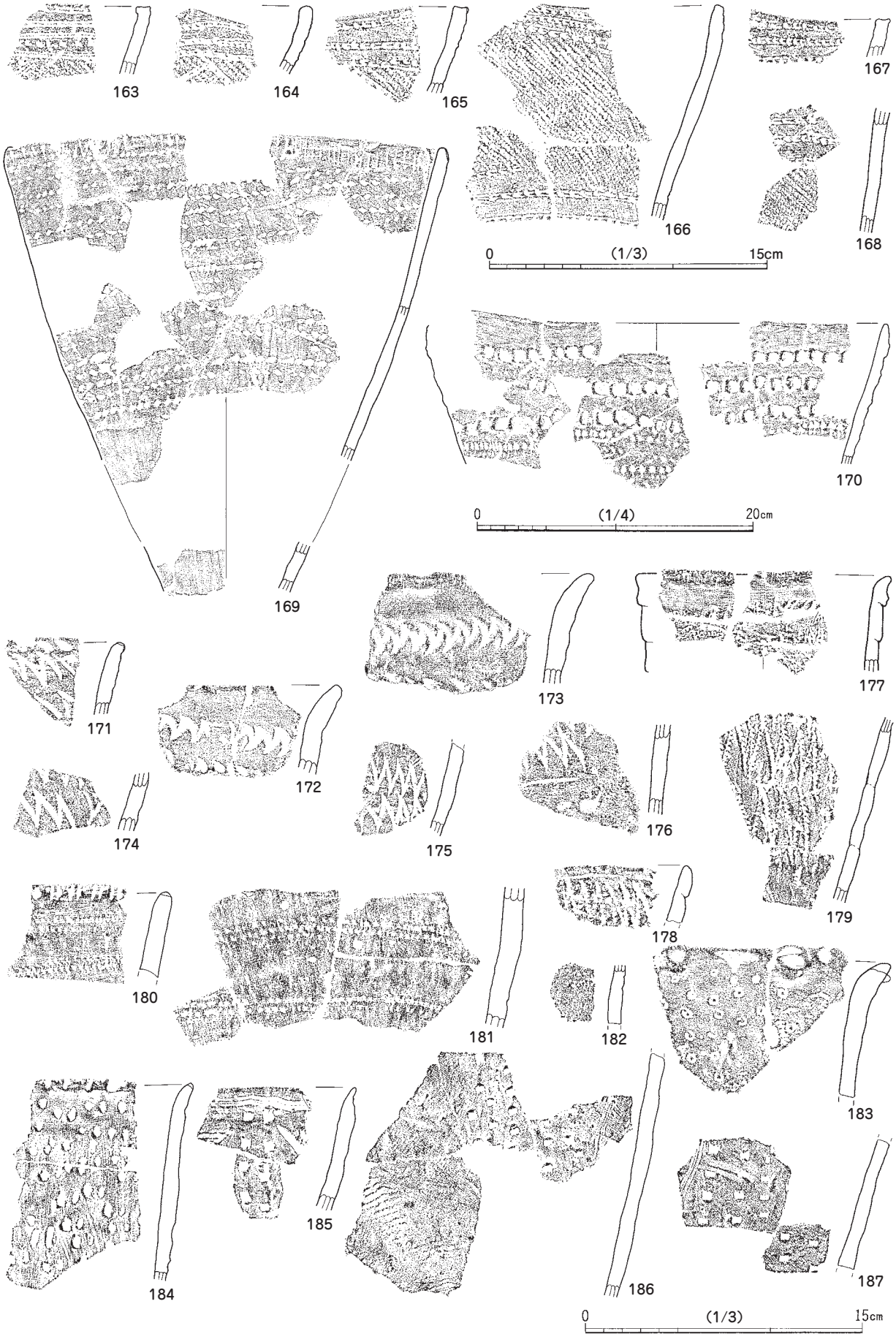
第251図　遺構外出土土器（6）



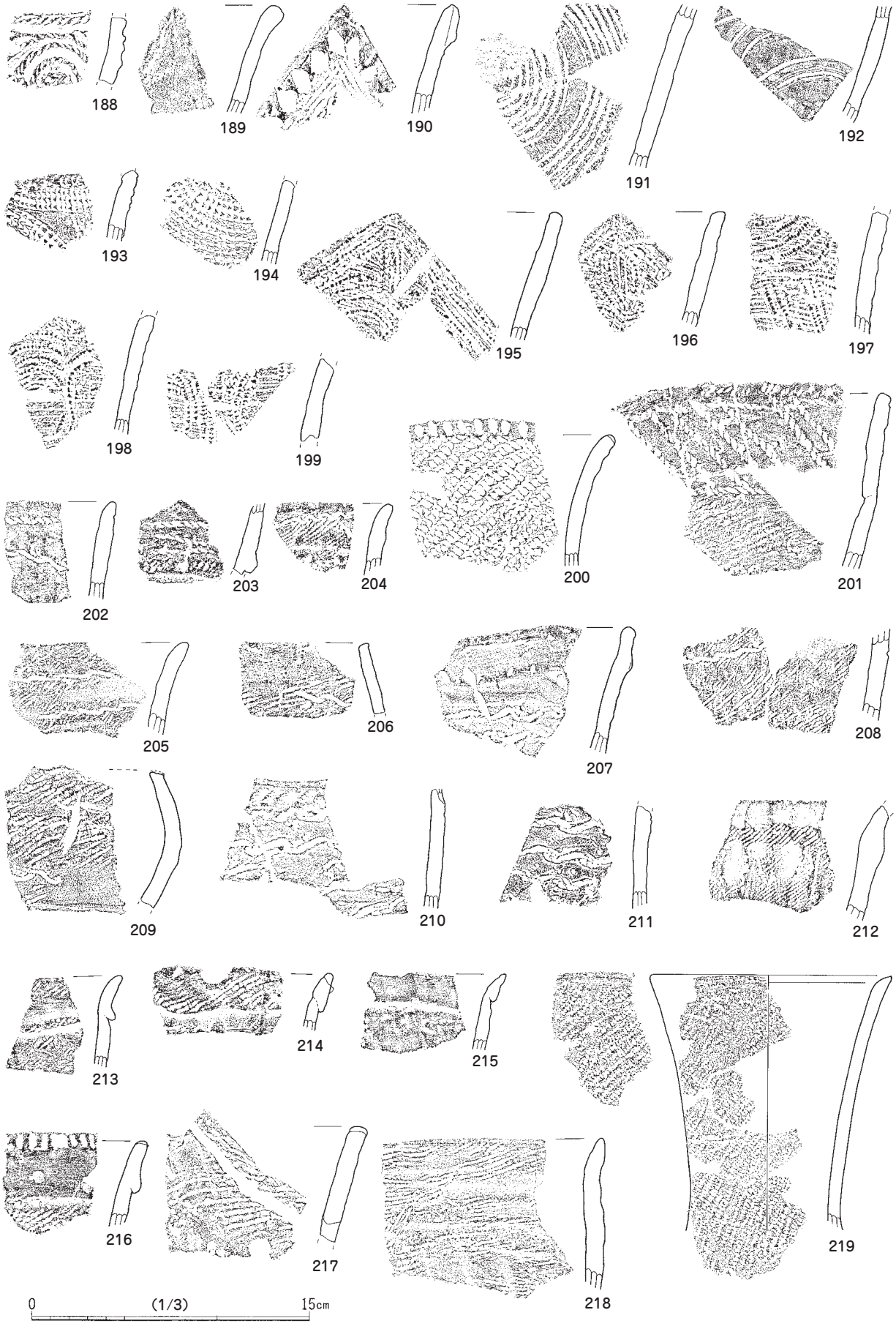
第252図　遺構外出土土器（7）



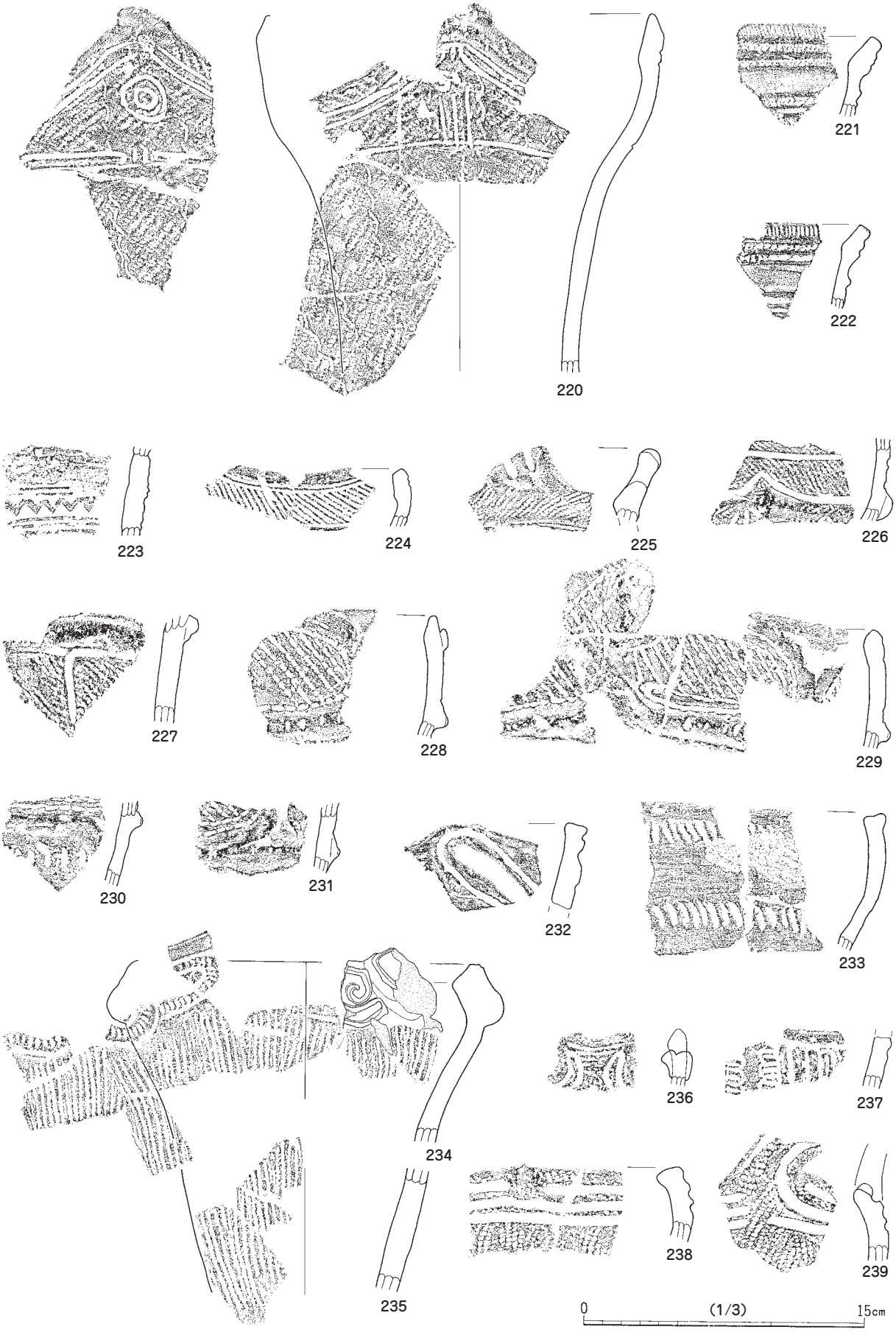
第253図　遺構外出土土器（8）



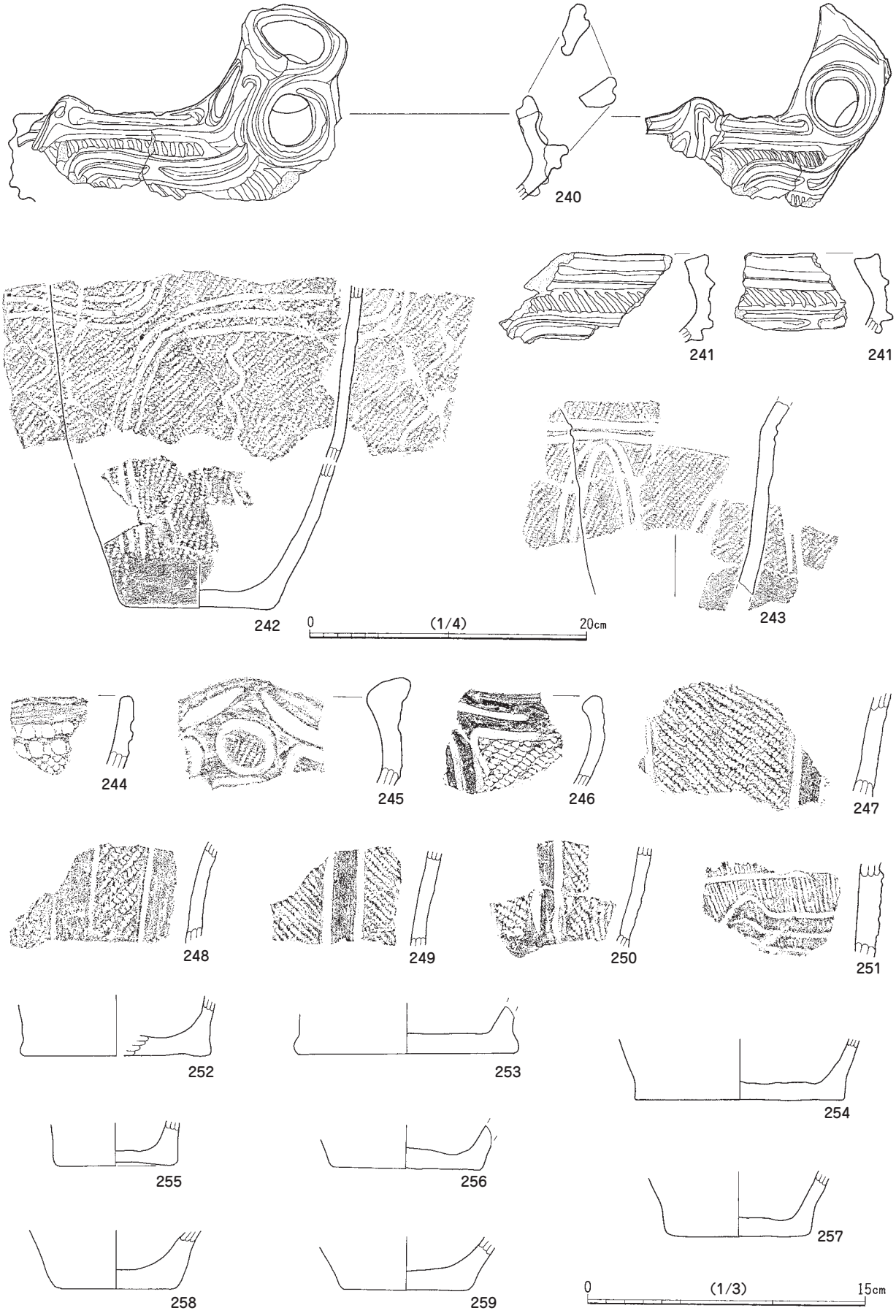
第254図　遺構外出土土器（9）



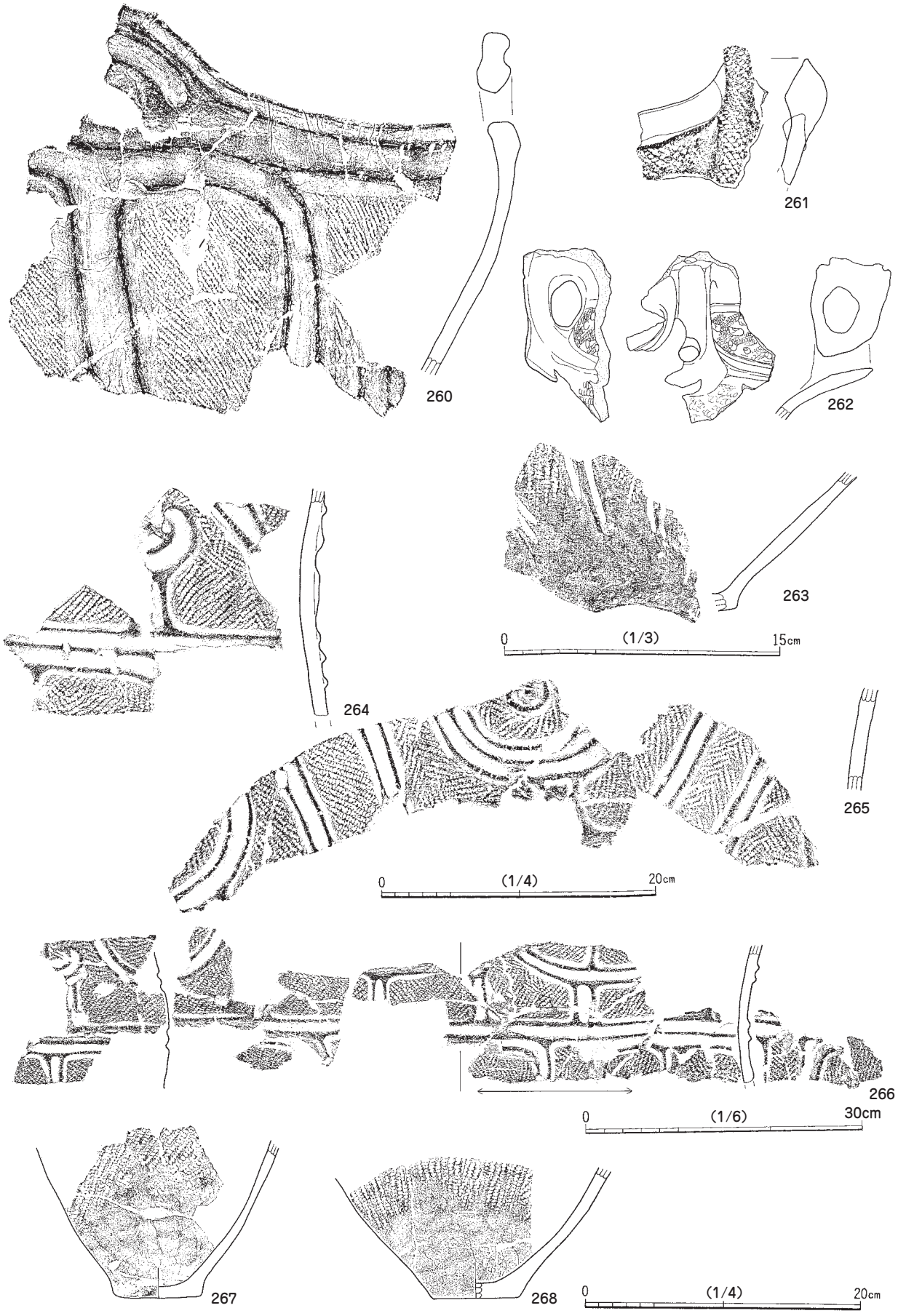
第255図　遺構外出土土器（10）



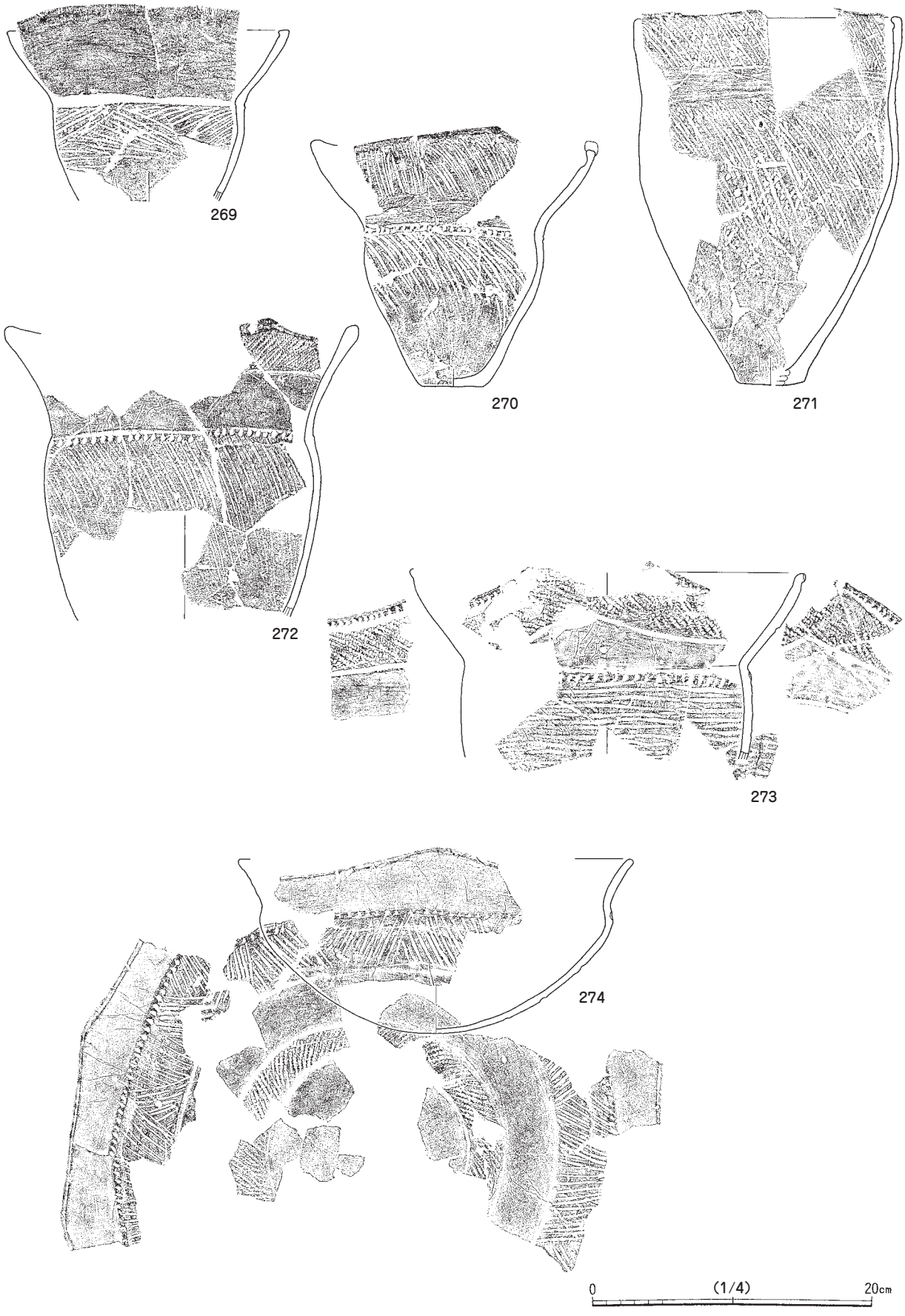
第256図　遺構外出土土器（11）



第257図　遺構外出土土器（12）

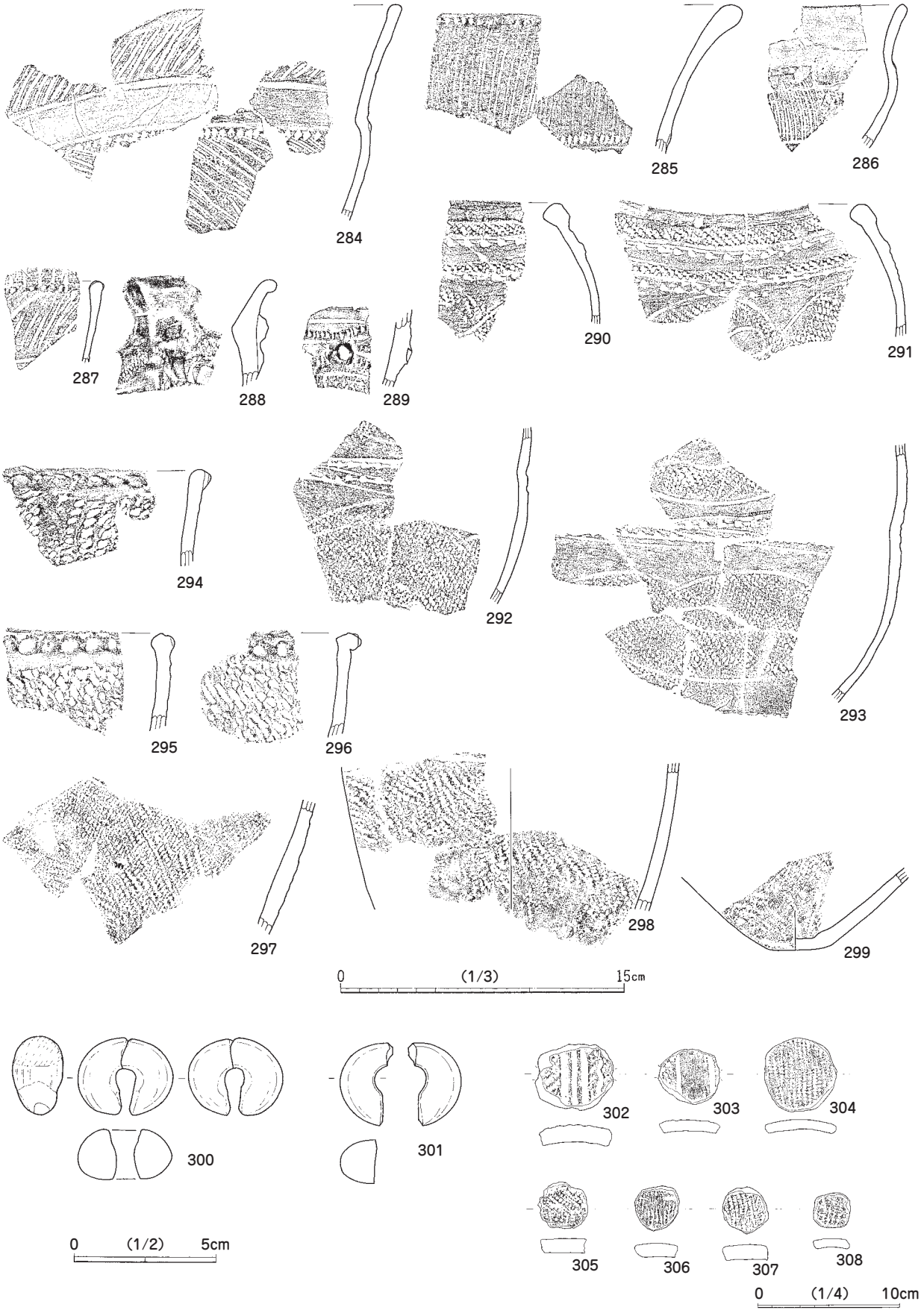


第258図　遺構外出土土器（13）



第259図　遺構外出土土器（14）

第260図　遺構外出土土器（15）



第261図　遺構外出土土器（16）・土製品

な器形である。

279・289は安行２式に属するものである。279は口縁部が緩やかに弯曲する典型的な紐線文系の粗製深鉢である。口縁部の粘土紐の貼付は２回にわたる。口辺部は縦方向に弧状の鮮明な沈線を配している。289は口辺の一部で隆帯上に刻目が施され、小さな瘤状突起には棒状工具による刺突がみられる。

２、土製品（第261図300～308、図版105）

土製耳飾　土製の玦状耳飾が隣接した地点から２点出土している。300はM11－68・79グリッドから出土し接合したものである。また301はM11－69グリッドから出土した。下総台地で出土する土製玦状耳飾は概して断面が平坦なタイプであり、本例のように断面が半円形を呈しているタイプは少ない。このタイプに近いものでは印西市高根北遺跡（注）で出土している。なおM11区では前期後半の土器も多く出土しており、これらの土器群に伴うものであろう。

土錘　縄文中期の土器片を利用した土錘が２点出土している。302はＯ２区において検出された弥生後期の住居跡から出土している。303はＥ５区から確認調査時に出土したものである。

土製円盤　土器片の周囲を円盤状に加工している製品が５点出土している。304・306～308は器面の縄文から撚糸文系土器と思われる。305は土錘と同様に中期となろう。

３、石器（第162図～第271図、図版107～図版111）

縄文時代に属する石器は石鏃をはじめとしてスクレイパー、石斧類、磨石、敲石、台石、砥石等が出土している。なかでも石鏃は59点と多いが、集中することなく広い遺跡の中で疎らな状態で出土している。他に特筆できる石器としてスクレイパーと砥石がある。スクレイパーは槍先状を呈したものと石鏃ほどの大きさでいずれもつまみ部分がみられる珍しい類例といえる。また砥石は装身具等を作る時に使用したものと思われ、形状は長方形で、断面は船底状を呈したものであった。

石鏃（１～59）ここで採用されている石材はチャート28点（47.5％）、黒曜石22点（37.3％）、黒色安山岩３点（５％）、その他６点（10.2％）となり、チャートと黒曜石が主体となる。こうした石材の選択は下総台地では一般的にみられる傾向である。石鏃の製作は素材となる剥片の形状や狩猟対象等により作り分けられるものと考えられるが、その形は千差万別といえよう。脚部についてみても、ほぼ平坦なタイプ（１・４・５・８・23・24・52）、弓なりを呈するタイプ（６・22・25～29・35・46～48・50）、きれいに弯曲するタイプ（２・３・９・12～16・30・36～41・51）、抉りの深いタイプ（17・31・42）などに類別できる。45は基部を欠損するが唯一の有茎鏃である。左右が整っており、表裏の剥離も入念に施されている。一方では44のように辛うじて石鏃の体裁を保っているものや55のような粗い作りで未成品とも考えられるようなタイプもみられる。大きさについてみると16は最大の石鏃で完形品となる。裏面では一部に主剥離面を残すがほぼ左右対称に整形されている。59も原形はかなりの大きさを想定できる。このように本遺跡で出土した石鏃を概観すると丁寧に製作されたものが多い。

石鏃未成品（61～63）61は表裏面に二次剥離が施されており、石鏃製作を意図した剥片と思われる。62は

注　高根北遺跡では三種のタイプが出土しており、そのうちの１点は本遺跡例と同様に円形を呈しており、断面は楕円形に整形されている。表裏面には連続する爪形文がみられる。

残された両側縁に調整痕がみられる。63は表裏面に剥離痕が認められるが、左右の均等を保つことができず放棄されたものと考えられる。なお、石鏃製作に伴うチャートや黒曜石の剥片類はほとんどみられなかったため、石鏃として使用されたものとも考えられる。

スクレイパー（65・66）65はＮ４－01グリッドから出土したもので、基部には固定のための抉りがみられるところからスクレイパーと分類した。また基部付近が弯曲する形態は後世の鉈（やりがんな）を想起させる。整形についてみると、裏面の一部に主剥離面が認められるものの両面とも押圧剥離によって丁寧に仕上げられており、側縁では若干の調整剥離が施されている。なお出土地点の周辺では遺構も存在せず遺物も疎らであったため所属時期については即断できないが、草創期には硬質頁岩を採用した尖頭器などがみられることも参考になるかもしれない。66は小さいながらも裏面からの剥離によりつまみ部分を作出している。下端部に設定された刃部は両面からの剥離により薄く鋭利な仕上げとなっている。最近の報告例では八千代市間見穴遺跡（田中ほか2004）で出土している。時期的には前期の所産と考えられる。

石錐（64）先端部が僅かに欠損している。上半部に加工が集中しており、基部での加工は認められないため錐として使用したものであろう。

剥片（60）その形状から推測すると石鏃の素材として剥離されたものとも考えられる。下部は節理面であり、中央部にも斜め方向に節理痕がみられるため廃棄されたものであろう。

石核（109）角柱状の礫の両端から剥片を剥離している。剥離面を観察すると凹凸が著しいため良好な剥片は得られなかったようである。そのため途中で放棄されたものと考えられる。いずれにしろ剥片石器類に本石核から剥離された剥片を素材として使用しているものは確認できなかった。

磨製石斧（67～70）67は刃部が若干破損するがほぼ完形品といえる。刃部の研磨は裏面に著しく、側面も研磨による面取が認められる。68も前者と同様な形態で刃部はよく研磨されている。側面での加工は見られない。69は両端が欠損しており、表裏面の光沢を帯びるような研磨痕から磨製石斧と見做される。上部では敲打による痕跡がみられるため敲石として再利用されたものである。70も上部に打痕が観察できる。断面が楕円形を呈し、表裏面も研磨されているため磨製石斧として機能していたものと思われる。

打製石斧（71～77）71は上部のみ遺存したもので、薄く扁平な楕円形の礫を素材として製作されたものである。表裏には自然面を残し、両側縁に整形剥離が認められるとこるから打製石斧となろう。72は一部に欠損がみられるもののほぼ原形を保持している。表面の下部では著しく滑らかな面が認められるため、磨製石斧の製作を意図したものとも思われる。73は加曽利Ｅ式期の住居跡から出土しており、中央部には摩耗痕を残す。また刃部では若干の打痕が認められる。74は破損した２点が隣接するグリッドから出土しものである。上部の右側縁に欠損が認められるが分銅形を呈したよくみられる打製石斧である。75はＬ10－19とM11－99グリッドから出土した２点が接合したものである。上部に欠損がみられるものの刃部は鋭利に整形されている。前者とともに周辺では中期の土器が出土しており、中期の所産と考えられる。76は約1/2が遺存するもので74と同様なタイプとなろう。77は残された形状から頭部と見做される。一部に自然面を残し、左の側縁は大きな剥離によって整形されている。

礫器（78～88）ここでは簡単な剥離によって刃部を形成するものや刃部作出の意図を有すると思われる石器を一括した。78は大きな剥離で刃部を作出するが使用の痕跡はほとんどみられない。79は扁平な礫の一端を同方向から剥離し刃部としている。80は礫の一端を折断し、それによって得られた平坦な面を打面として剥離を繰り返している。これを剥片剥離と考えると石核ともいえる。81は側面及び研磨された表面の

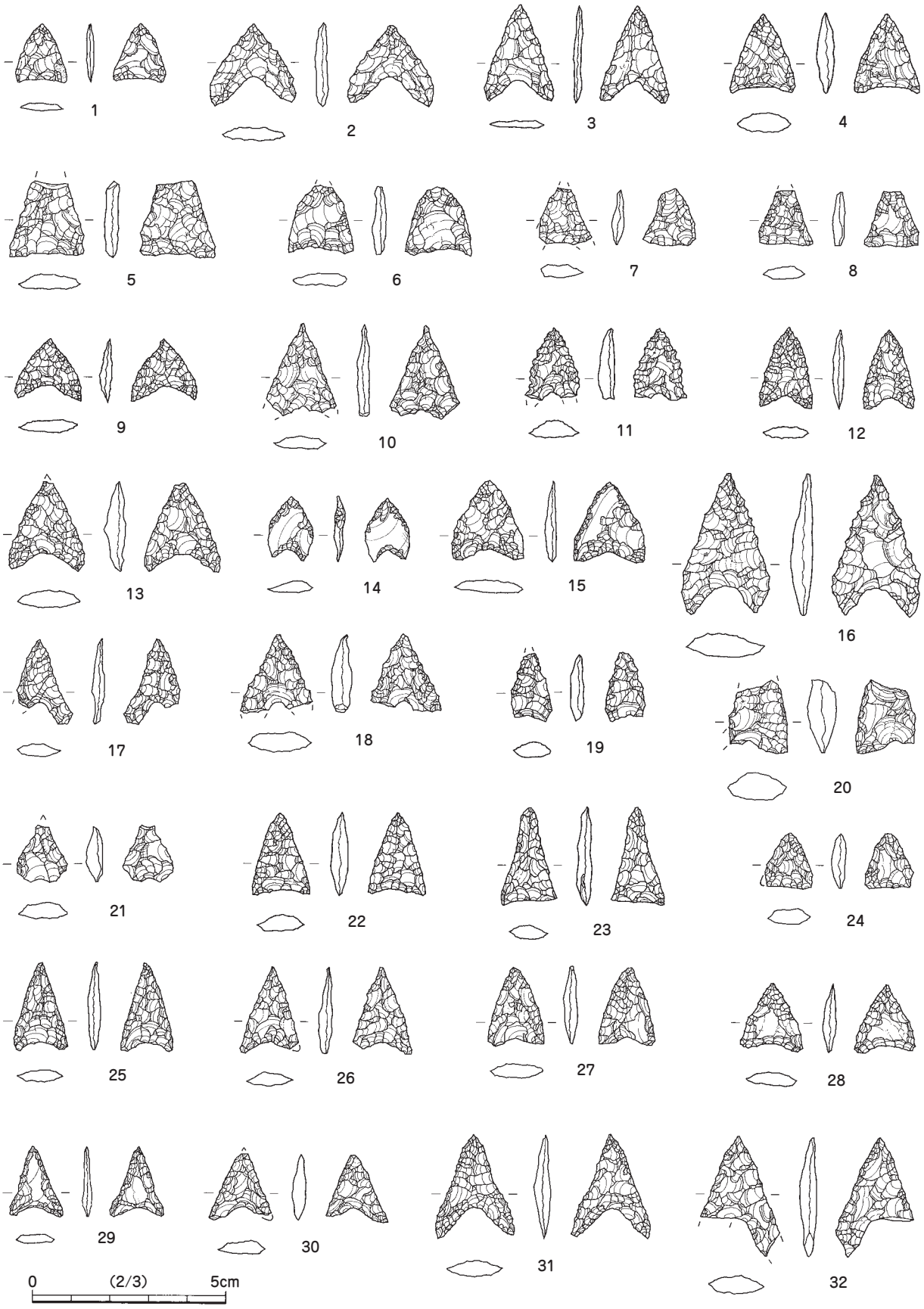
観察から磨製石斧の転用品とも考えられる。両端を裏面から剥離している。また表面中央部と側面には打痕が認められるため最終的には磨石として使用していたものであろう。82は石斧の素材として搬入されたような薄く扁平な礫である。製作途中で破損したものであろう。打痕等は認められない。83は陥穴の覆土中から出土している。２回～３回の剥離で刃部を作り出している。84の表面は被熱により淡い赤褐色に変色している。刃部は両面から剥離されているが被熱によるものか脆弱である。表面中央部と側面には打痕が認められる。85は礫を打割後に、刃部を整形して石器としている。表面では著しい打痕が観察できる。86は断面三角の礫の一端を加撃して刃部としている。87は右の側縁に整形剥離を施し刃部としている。表面には被熱の痕跡が認められる。88は右下部を数回剥離して石器とするが左の側面では打痕を観察できる。なお表皮部分は僅かに赤色に変化しており熱を受けているものと思われる。

磨石・敲石（89～106・108・110～128）ここでは磨石と敲石を一括して記載する。89は断面がきれいな楕円形を呈していることから破損した磨製石斧を再利用したものと考えられる。側面には若干打痕が認められる。むろん磨石としても使用したものであろう。90は破損により失われている部分が大きい。左の側面は摩耗し、表面は平坦で滑らかである。91は113号住居跡から出土した石器で、裏面は節理面となっている。表面には僅かな打痕が認められるためここに含めたが、右側縁では鋭利な刃部が認められるためスクレイパーのような石器として使用されたものと考えられる。92は1/2程度欠損しており、表面は使用により滑らかで右下部には打痕がみられる。赤化しているため被熱したものであろう。93は裏面がよく摩耗しており、表面も磨石として使用された痕跡を残す。95・96は被熱により一部が淡い赤色に変色している。97の表裏面は平滑で周囲と中央部には打痕が認められる。98は長期の使用により表裏面は滑らかとなり上下端と左側面では顕著な打痕を観察できる。99は欠損品で、表面には打痕とともに被熱により著しく赤化している。100の欠損部は、おそらく平らな面を得るために意識的に打割したものであろう。周囲は敲打により摩耗している。101は右側面に打痕がみられる。表裏の平坦な面は磨石となろう。103は同一グリッドから出土しているもので上下部分には著しい打痕が認められる。105は下端部に打痕を観察できるためここに含めたが、石材は黒色安山岩であり剥片石器製作のために搬入されたものであろう。106も同一グリッドから出土したもので表面には若干打痕がみられる。110～117は典型的な磨石で、111・115は表裏面の中央部に顕著な打痕がみられる。破損した114では下部に凹部を残す。なお、110・114・115・117は被熱により表面は赤化している。118～120は扁平な礫を採用したものである。121～124・127は1/2以下の遺存であるが、原形は典型的な磨石とみられる。94・102・104などは主に敲石として使用したもので、その形状から磨石としては不向きと思われる。

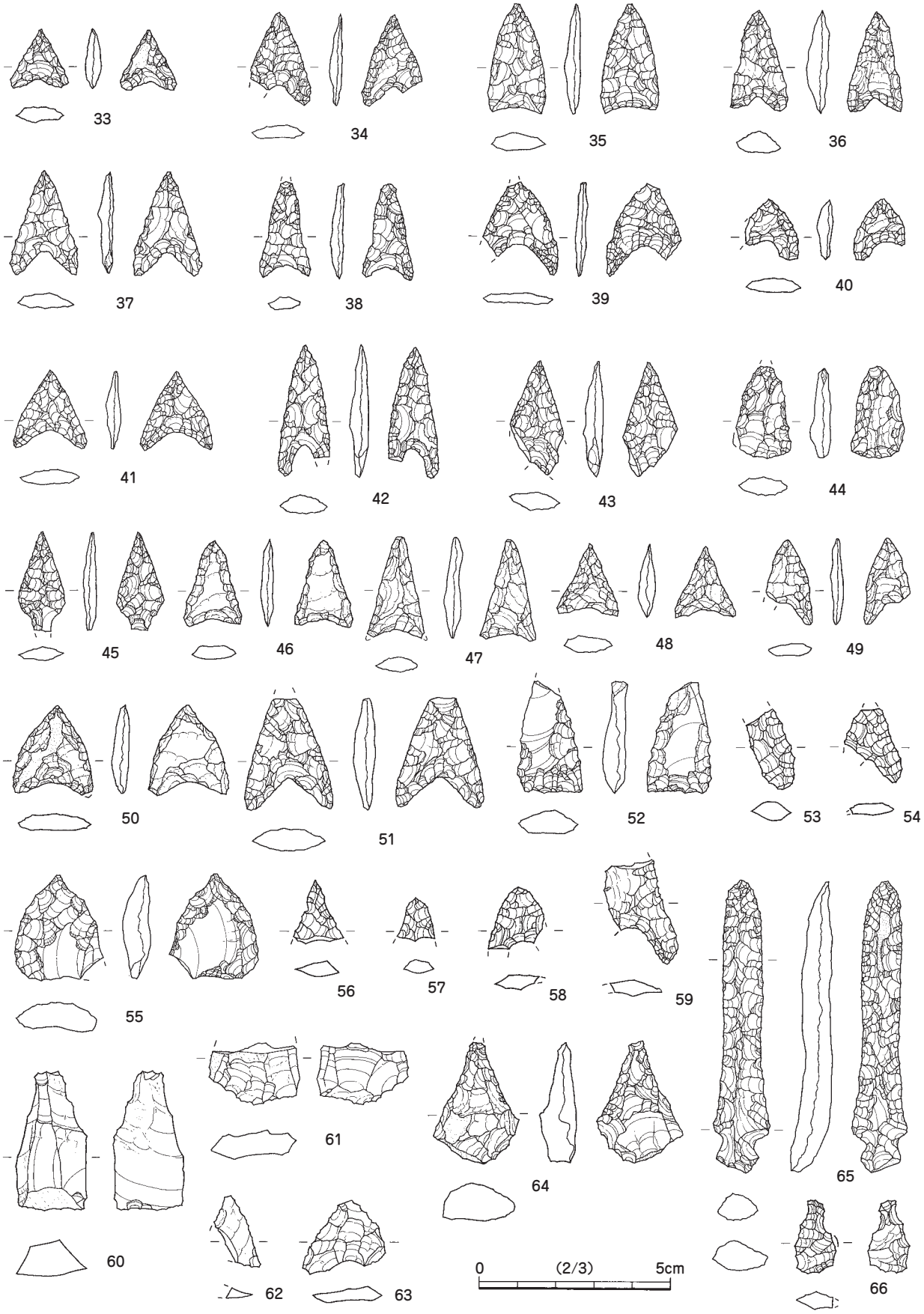
礫（107）石材は石英で石器の素材とも考えられるため図示した。表面の丸味を帯びた部分は滑らかで使用痕等はみられないが道具の一つとして使用された可能性も否定できない。

台石（129・134・136）129は1.90kgと重く大きな礫で上部には若干の打痕が認められる。表面はやや弯曲するように凹んでおり工作用の台に用いられたものと思われる。134は板状に打割した砂岩を利用したもので、平滑な表面の上部には打痕が認められる。台の他に砥石としも使用されたものと思われる。136は原石を板状に剥がした素材の周辺を整形して台石としたものである。表裏面は平坦で部分的に打痕が観察できる。

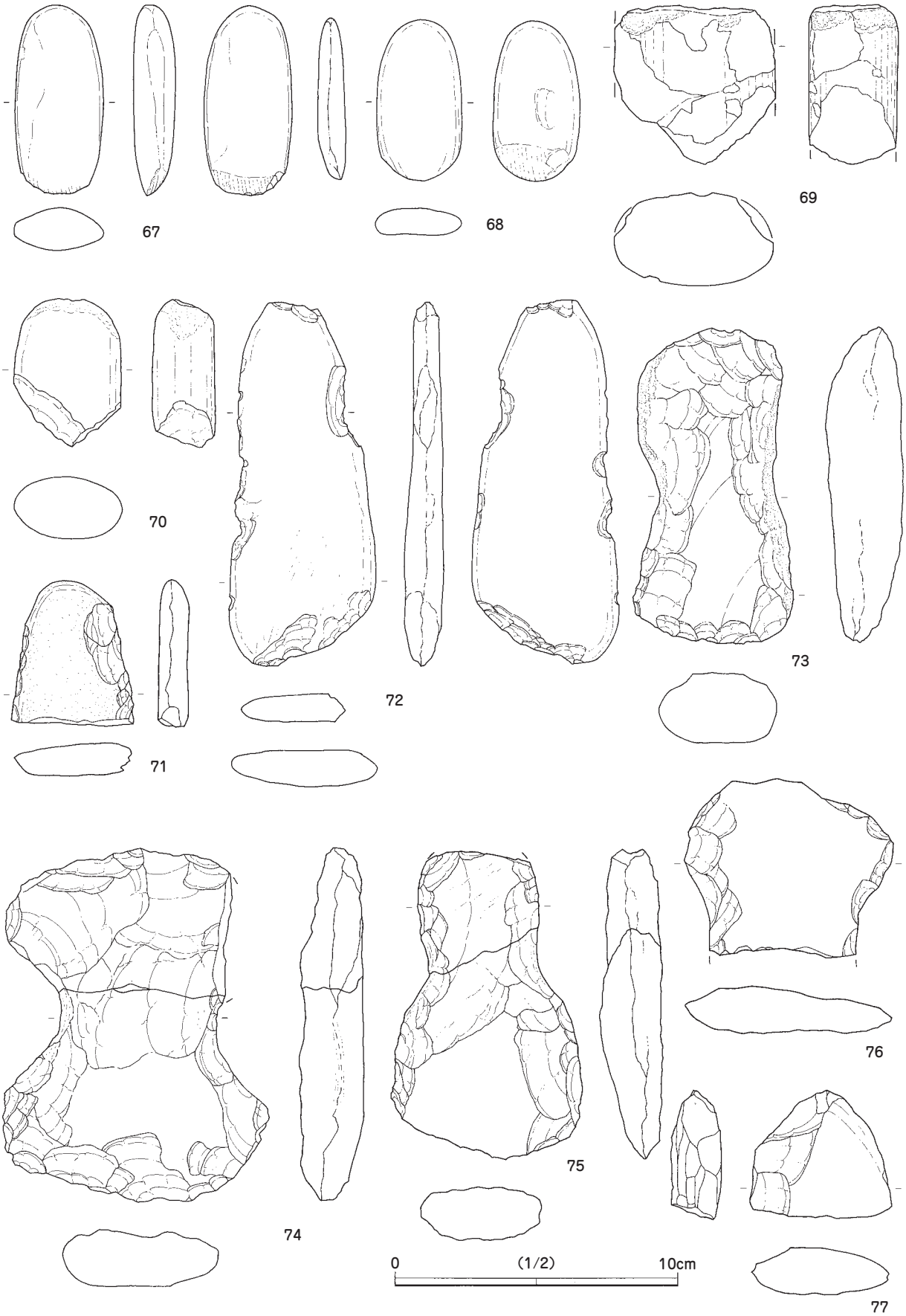
石皿（130～133）130は表面の右下に緩やかな凹みがみられる。おおよそ1/5程度が遺存したものであろう。裏面では凹みが１か所だけ観察できる。131もおそらく石皿の一部となろう。コーナー部分だけが遺



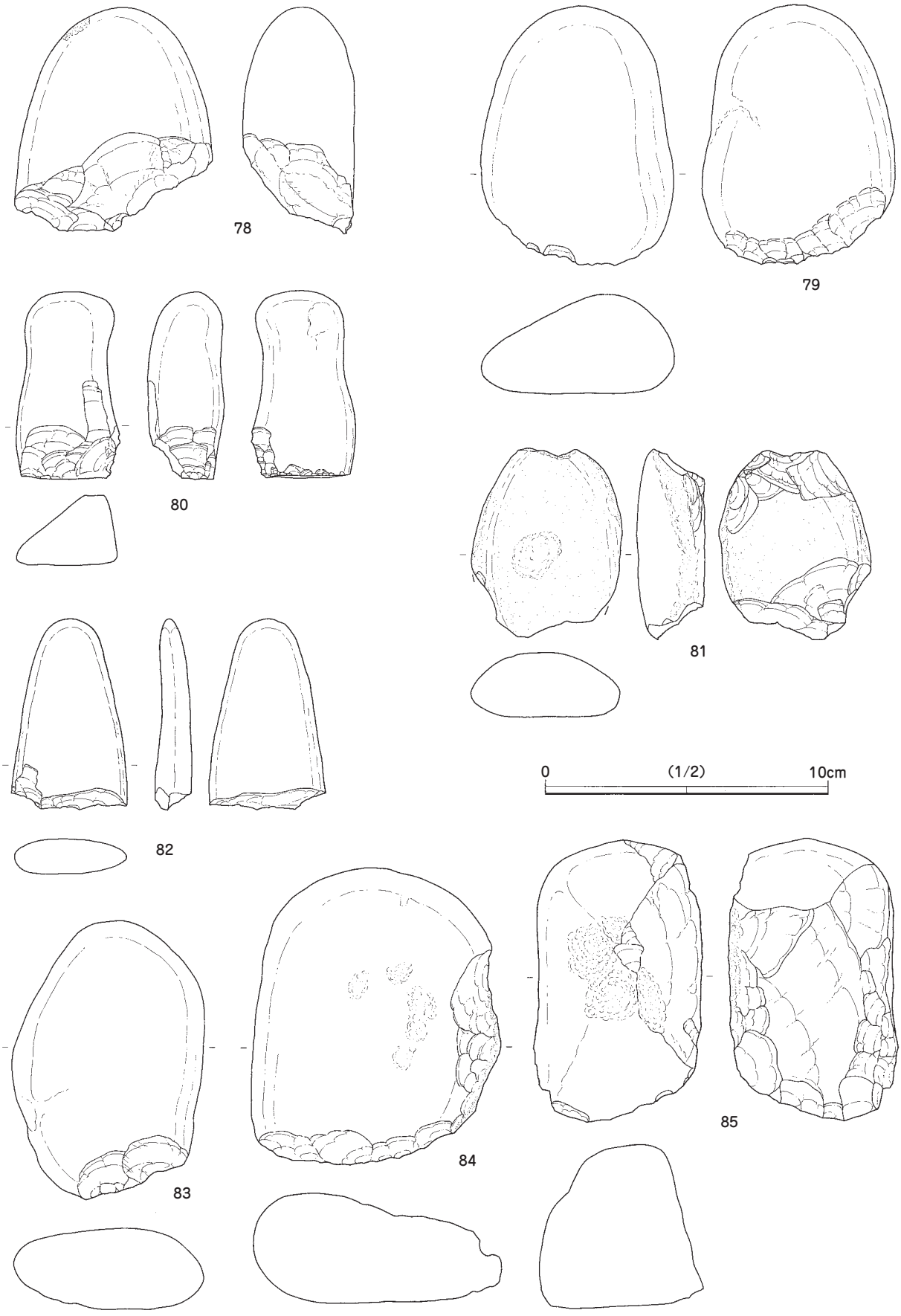
第262図　遺構外出土石器（1）



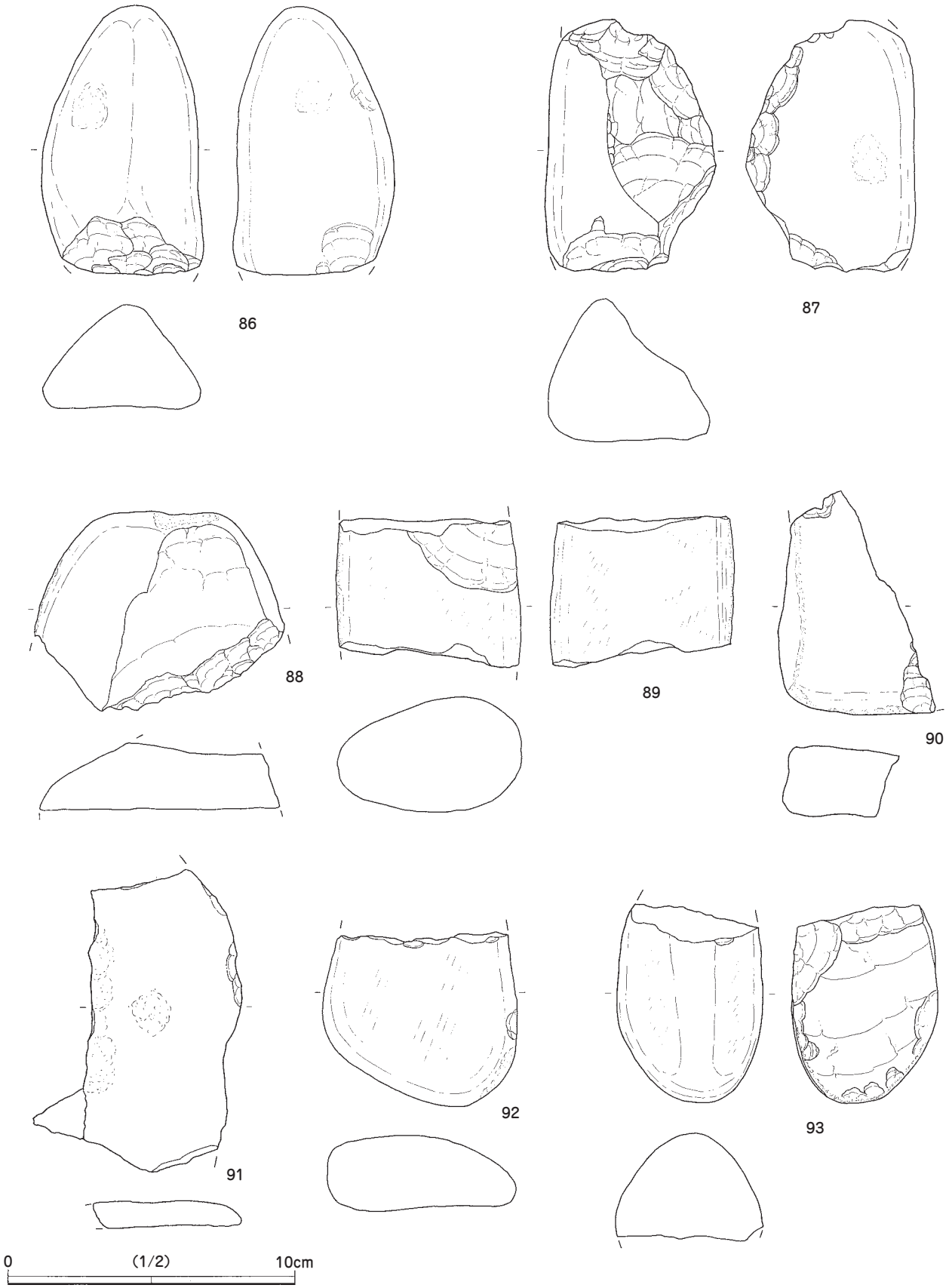
第263図　遺構外出土石器（2）



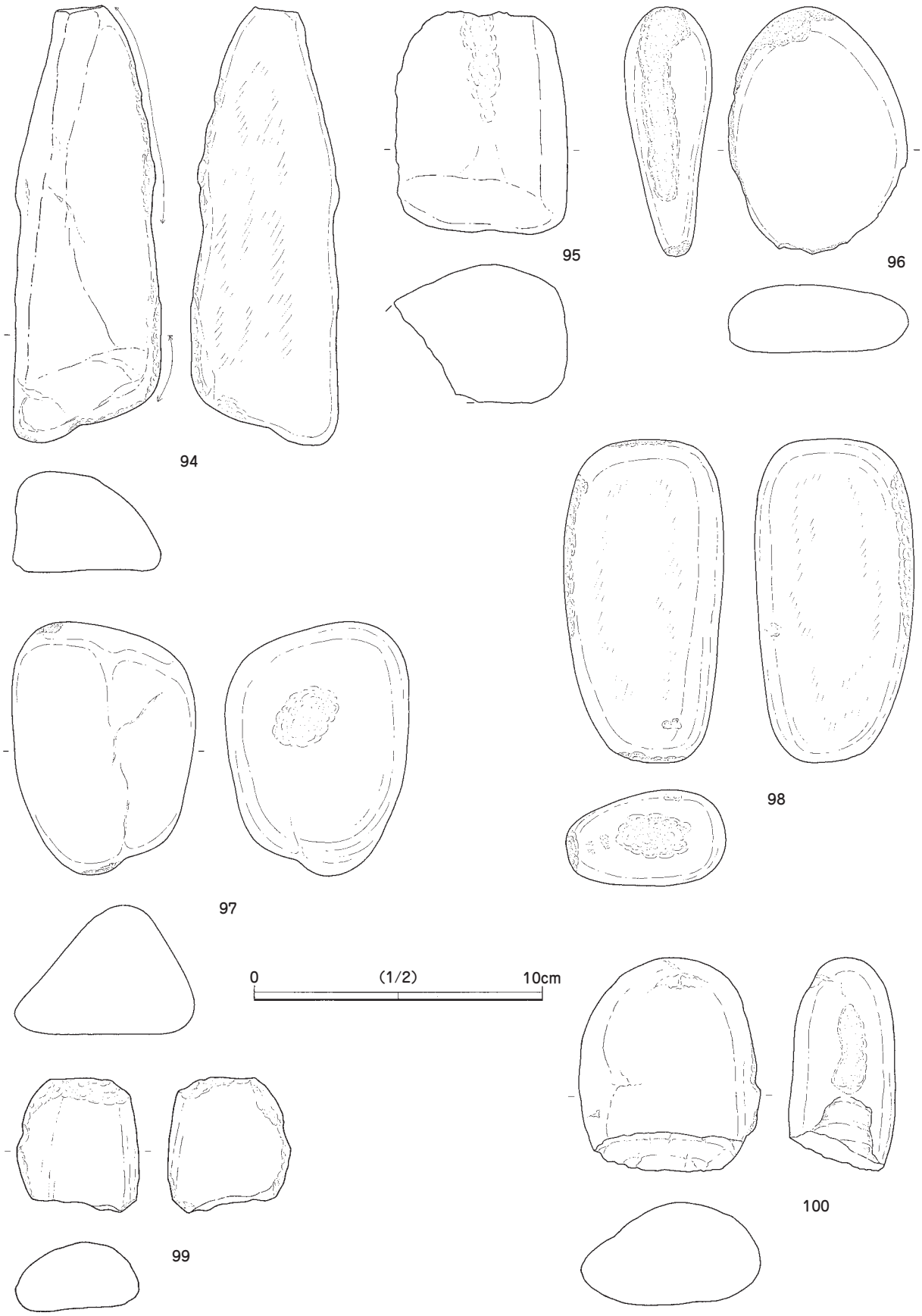
第264図　遺構外出土石器（3）



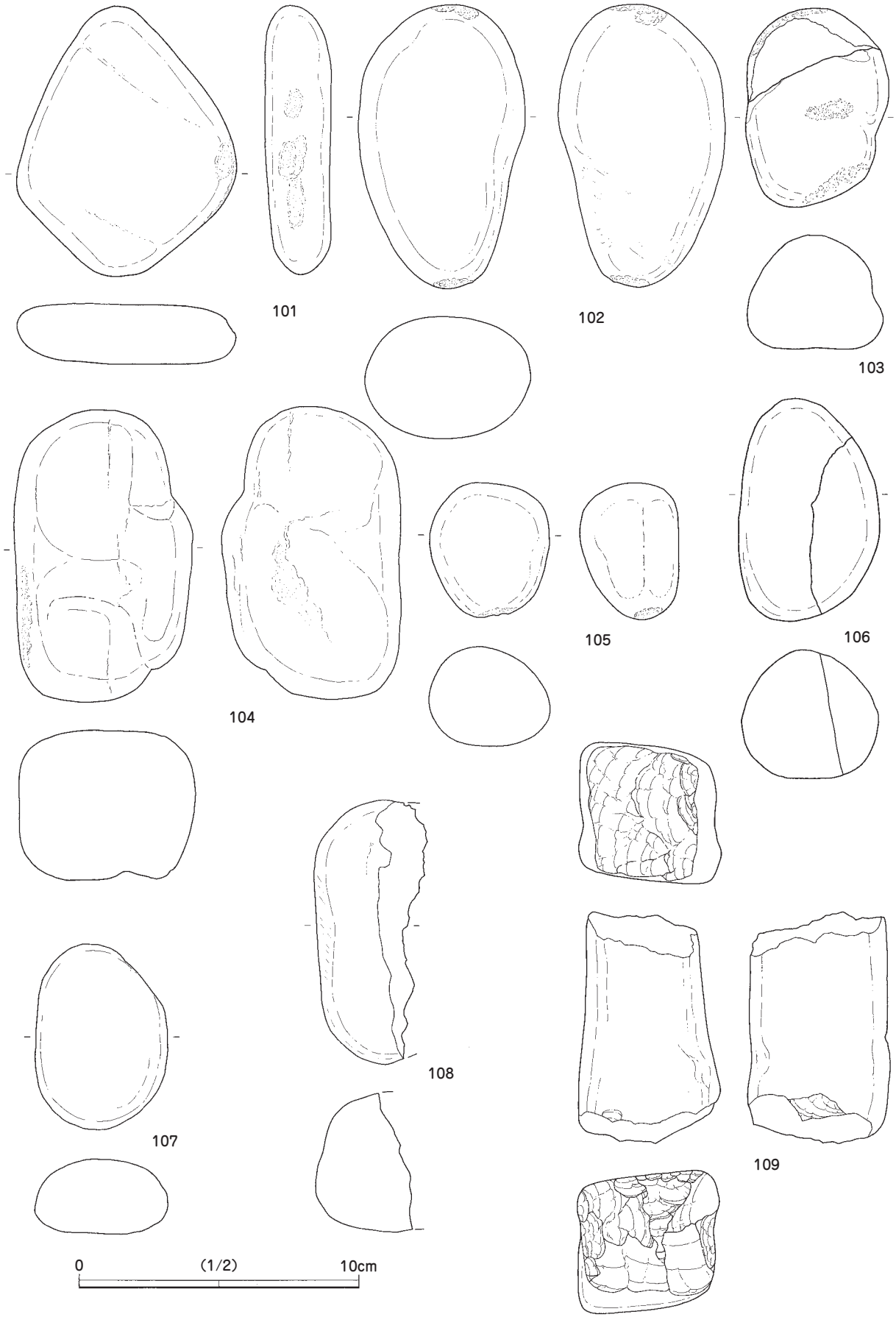
第265図　遺構外出土石器（4）



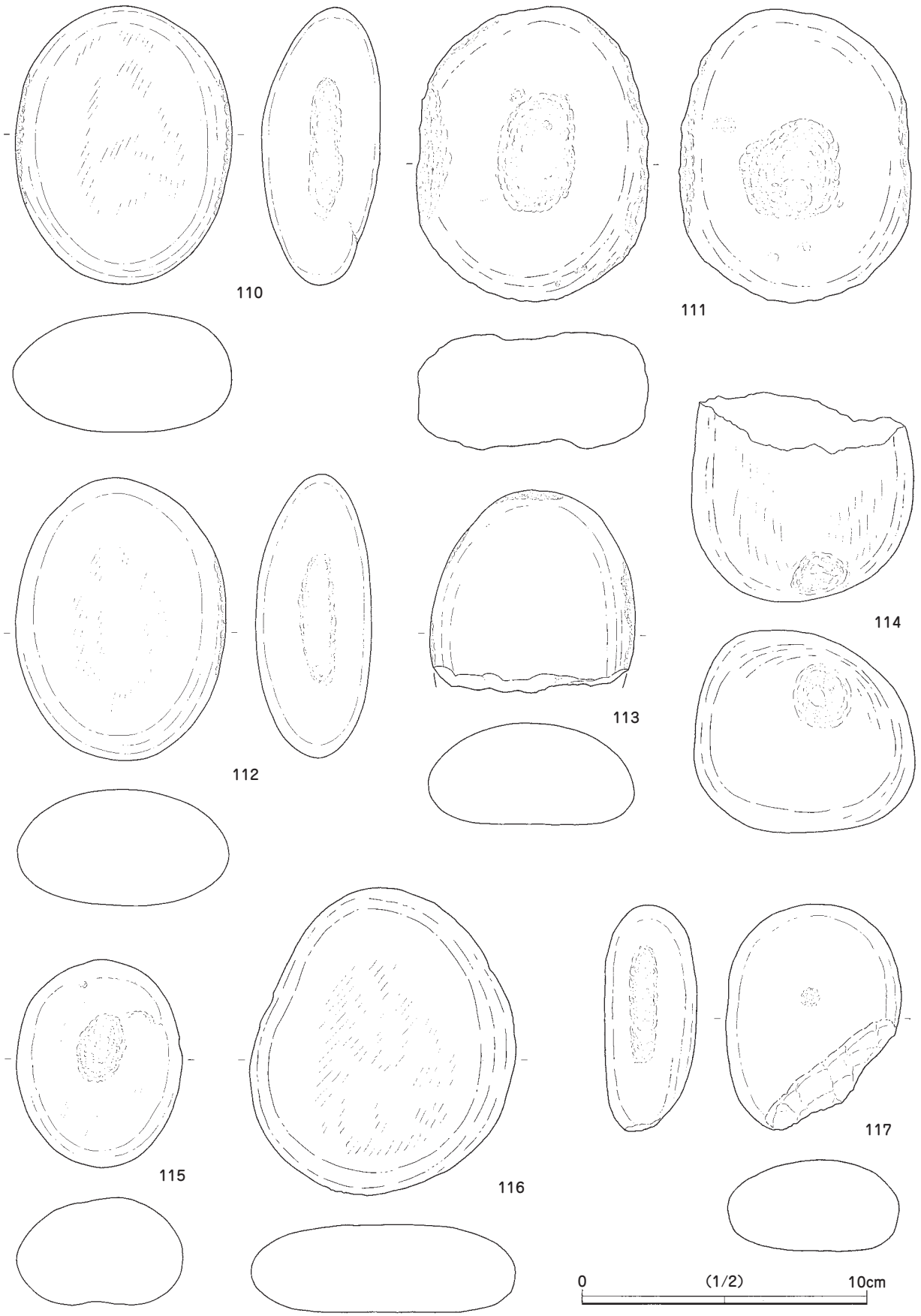
第266図　遺構外出土石器（５）



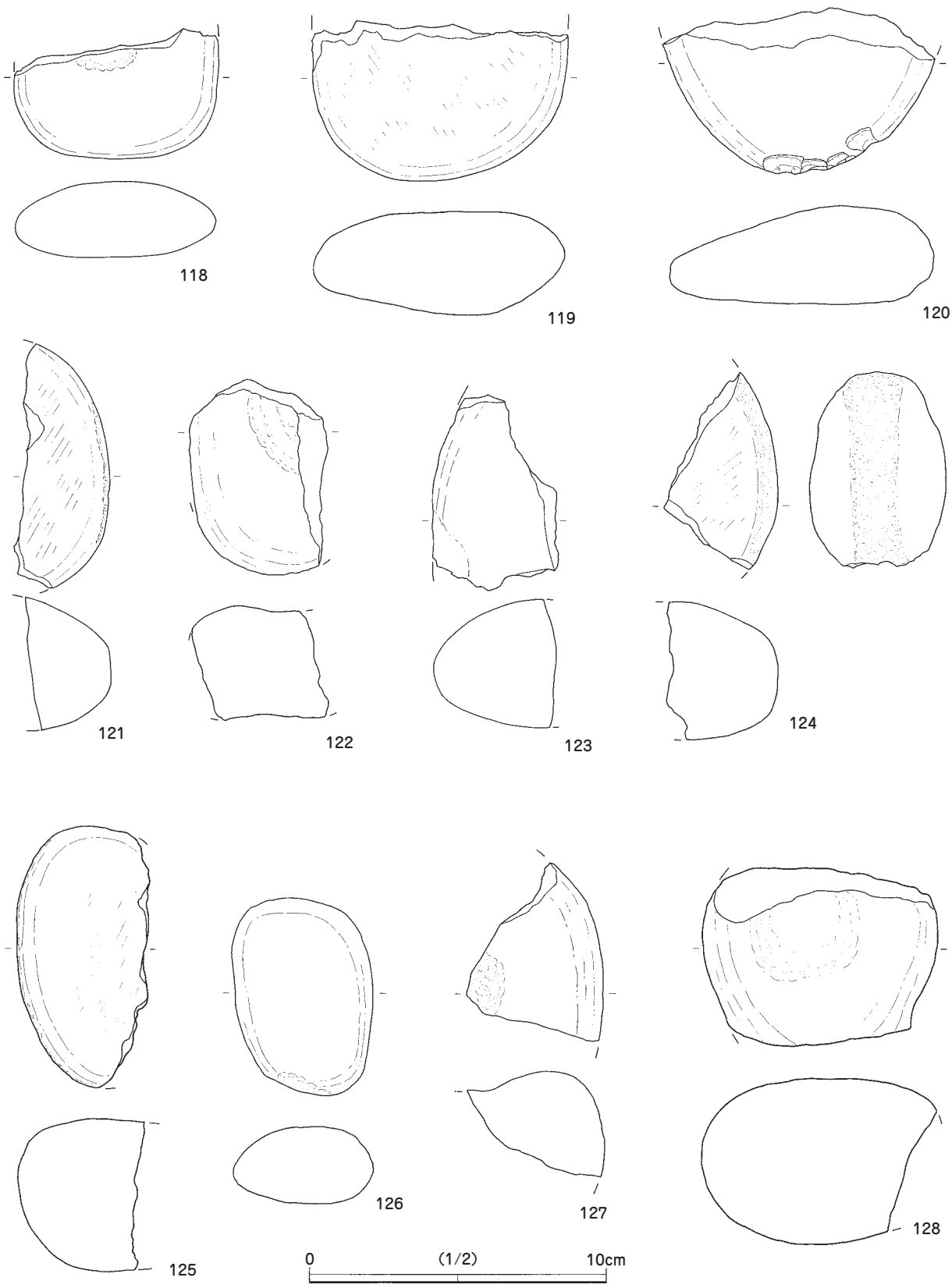
第267図　遺構外出土石器（6）



第268図　遺構外出土石器（7）



第269図　遺構外出土石器（8）



第270図　遺構外出土石器（9）

第271図　遺構外出土石器（10）

存したものである。132は隣接のグリッドから出土したものが接合した。皿状に凹んだ部分から推測すると小型の石皿といえる。破損した側面部の表裏には凹部がみられる。133は石皿の中心部が遺存したもので、傾斜する表面は使用により滑らかな面を呈している。破損部の厚みから推測するとかなりの大型品となろう。裏面には凹部がみられる。

砥石（135・137）135の原形は断面が方形を呈していたものと思われる。剥離されずに残された部分では研磨されたような平滑面を認めることができる。137は表面が船底状に凹み、明らかに球形の装身具等を製作するために用いたものと理解できる。裏面は安定性を得るためか面取りされている。時期的に特定することはできないが縄文期の所産であることは間違いなかろう。出土した３Ｅ区では前期後半の土器群が比較的多くみられた。

第86表　出土石器一覧

挿図番号	器種	出土地点等	石材	重量(欠損品)g	備考
1	石鏃	182-1	チャート	0.39	陥穴
2	〃	331-4	〃	1.11	陥穴
3	〃	400-1	珪質頁岩	0.81	陥穴
4	〃	O10-60-11	黒曜石	1.35	
5	〃	M11-60-1	〃	(1.48)	
6	〃	N3-35-1	〃	(1.03)	信州産
7	〃	N10-22-1	〃	(0.48)	神津島産
8	〃	L11-72-3	〃	(0.54)	
9	〃	O9-11-3	〃	0.49	
10	〃	J10-84-1	〃	(1.06)	
11	〃	－－	〃	(0.80)	表採
12	〃	030-11	〃	0.62	溝状遺構
13	〃	O10-62-16	〃	(1.44)	
14	〃	L10-06-5	〃	0.38	
15	〃	E3-68-7	〃	0.84	
16	〃	J9-75-2	〃	3.06	
17	〃	M10-20-1	〃	(0.47)	
18	〃	L10-08-8	〃	(1.29)	
19	〃	P10-12-1	〃	(0.62)	
20	〃	B4-12-1	〃	(2.12)	
21	〃	M10-13-32	〃	(0.63)	
22	〃	O10-33-4	チャート	1.13	
23	〃	M11-88-10	〃	1.04	
24	〃	J10-55-3	〃	0.69	
25	〃	E3-58-6	〃	0.74	
26	〃	J9-85-1	〃	(0.81)	
27	〃	D3-92-4	〃	0.83	
28	〃	O10-73-5	〃	0.72	
29	〃	D3-62-8	〃	0.46	
30	〃	E8-19-1	〃	(0.62)	
31	〃	M10-57-2	〃	1.19	
32	〃	N11-68-1	〃	(1.61)	
33	〃	－－	〃	0.65	表採
34	〃	J10-88-1	〃	(0.88)	
35	〃	E4-40-1	〃	1.65	
36	〃	O10-41-7	〃	1.68	
37	〃	349-4	〃	1.14	溝状遺構
38	〃	E3-79-14	〃	(0.93)	
39	〃	M11-78-20	〃	(1.09)	

40	〃	O10-72-1	〃	(0.74)	
41	〃	N9-79-1	〃	0.88	
42	〃	349-2	〃	(1.68)	溝状遺構
43	〃	386-7	〃	(1.61)	住居（弥生期）
44	〃	M11-70-21	〃	(1.69)	
45	〃	E3-68-10	〃	(0.90)	
46	〃	O10-73-3	黒色安山岩	1.13	
47	〃	N10-56-2	〃	1.17	
48	〃	E3-58-28	〃	0.94	
49	〃	M11-68-32	デイサイト	(0.60)	
50	〃	O10-23-2	珪質頁岩	1.91	
51	〃	213-3	黒雲母流紋岩	(2.49)	住居（平安期）
52	〃	F6-44-1	赤色碧玉	(3.45)	
53	〃	N9-65-1	黒曜石	(0.19)	
54	〃	M10-11-14	〃	(0.46)	
55	〃	L10-48-1	珪質岩	(4.51)	通称白滝頁岩
56	〃	P10-58-39	黒曜石	(0.34)	
57	〃	349-1	〃	(0.21)	溝状遺構
58	〃	L10-18-23	チャート	(0.54)	
59	〃	E6-60-2	〃	(1.16)	
60	剥片	108-1	〃	5.28	陥穴、石鏃素材
61	石鏃未成品	361-4	〃	(2.08)	〃
62	〃	E3-88-34	黒色安山岩	(0.29)	
63	〃	318	〃	0.73	台地整形部（中・近世）
64	石錐	O4-78-1	チャート	(5.24)	
65	スクレイパー	N4-01-1	硬質頁岩	8.16	
66	〃	－－	黒曜石	0.52	表採
67	磨製石斧	D3-87-37	閃緑斑岩（変質）	51.90	
68	〃	D4-71-3	ホルンフェルス	25.44	
69	〃	030-10	白雲母ヒスイ輝石岩	(190.04)	溝状遺構
70	〃	O5-33-1	砂岩	(54.59)	
71	打製石斧	－－	角閃岩	(42.68)	表採
72	〃	209-8	粘板岩	(115.95)	住居（平安期）
73	〃	328-26	砂岩	216.72	住居（縄文中期）
74	〃	N11-87-39	安山岩	292.63	N11-88-42と接合、被熱
75	〃	L10-19-10	片状砂岩	(193.41)	L10-99-6と接合、秋川産
76	〃	K8-55-1	ホルンフェルス	(105.52)	
77	〃	－－	黒雲母片麻岩	(47.53)	表採
78	礫器	401-1	ホルンフェルス	(273.27)	陥穴
79	〃	B5-90-1	砂岩	315.85	
80	〃	D4-24	珪質頁岩	84.20	石斧未成品
81	〃	M10-17-1	砂岩	115.89	磨製石斧転用
82	〃	M11-46-4	ホルンフェルス	49.62	磨製石斧素材
83	〃	109-13	石英斑岩	299.00	
84	〃	M11-98-3	花崗岩	538.60	被熱
85	〃	E3-15-1	石英斑岩	456.41	
86	〃	K10-08-1	石英斑岩	246.12	
87	〃	228-1	石英斑岩	(309.73)	台地整形部（中･近世）、被熱
88	〃	E3-67-31	石英斑岩	(213.13)	被熱
89	敲石	292-5	閃緑岩	(245.31)	溝状遺構、磨製石斧転用
90	〃	30-3	安山岩（変質）	(111.07)	溝状遺構
91	〃	113-4	砂岩	(84.39)	住居（縄文早期）
92	〃	N3-68-1	石英斑岩	(177.31)	
93	〃	－－	石英斑岩	(177.03)	表採
94	〃	H5-40-2	砂岩	363.92	被熱
95	〃	E3-18-2	〃	(313.29)	〃
96	〃	P10-66-37	〃	189.03	〃
97	〃	L9-24-14	〃	331.70	

98	〃	G2-15-4	石英斑岩	331.49	被熱
99	〃	O10-43-178	砂岩	(74.53)	〃
100	〃	M10-37-1	石英斑岩	238.57	〃
101	〃	D3-74-4	砂岩	247.02	
102	〃	P10-08-5	安山岩（変質）	376.26	
103	〃	K8-10-2・3	砂岩	198.47	
104	〃	L10-89-7	〃	529.13	
105	〃	K7-40-1	黒色安山岩	105.20	被熱
106	〃	K8-10-1・4	砂岩	258.52	〃
107	礫	O10-97-2	石英	128.79	石器素材
108	磨石	C4-01-1	石英斑岩	(236.42)	
109	石核	L9-15-1	石英	(370.43)	
110	磨石	O3-70-75	石英斑岩	424.27	被熱
111	〃	C5-85-6	安山岩（多孔質）	511.01	
112	〃	－－	砂岩	424.02	表採
113	〃	F5-75-1	安山岩	(305.31)	
114	〃	M5-93-1	石英斑岩	(605.52)	被熱
115	〃	O10-66-2	アプライト	228.35	〃
116	〃	L9-15-2	安山岩	441.06	
117	〃	O9-60-1	〃	(230.59)	被熱
118	〃	Q9	ホルンフェルス	(102.19)	表採
119	〃	227-1	礫岩	(228.08)	土坑
120	〃	L10-73-3	砂岩	(211.32)	被熱
121	〃	C4-39-1	石英斑岩	(125.07)	被熱
122	〃	C5-79-1	安山岩	(174.45)	
123	〃	F6-42-2	同上（多孔質）	(110.55)	
124	〃	205-62	黒雲母安山岩	(119.35)	炉穴
125	〃	M11-65-33	安山岩	(268.55)	
126	敲石	O10-30-10	砂岩	129.76	
127	磨石	H6-45-1	安山岩	(93.99)	
128	〃	E3-49-26	砂岩	(377.92)	被熱
129	〃	N2-20-5	〃	1,890	
130	石皿	F4	黒雲母片麻岩	(1,245)	表採、別名筑波石、被熱
131	〃	M4-17-8	安山岩	(954.0)	
132	〃	L11-71-3	砂岩	(412.90)	L11-81-26と接合
133	〃	M10-86-5	安山岩	(522.06)	
134	台石	D3-08-14	砂岩	1,010	被熱
135	砥石	E8-25-5	安山岩	(206.94)	
136	台石	D3	砂岩	(397.66)	表採、被熱
137	砥石	E3-46-45	〃	29.92	玉類製作用、銚子産

追記（第272図） 最後に縄文土器の中に混在していたため未掲載となった資料（銭貨）があったので、ここに掲載しておきたい。銭貨は２点存在し「祥符元寶」と「寛永通寶」でグリッド出土品として一括して取り上げられたものである。後者は鉄製のため1/2程度しか遺存していないため掲載は省略した。

第272図　銭貨拓影図（1/1）

祥符元寶は、いわゆる北宋銭で初鋳年が1009年となる。以下、計測値は、縦銭計24.45mm、横銭計24.68mm、縦内径5.31mm、横内径5.79mm、銭厚1.2mm、重量3.12gを計測する。

なお、銭貨については、既に報告書ⅩⅧ（香取2006）で触れており、計11点が報告されている。これらの中には、景徳元寶・嘉祐通寶（北宋）、嘉定通寶（南宋）が各１点ずつ含まれていた。

第４節　小結

本遺跡は多年度にわたる調査によりほぼ台地全体の様相を把握することができた数少ない遺跡となった。前述したように調査によって発見された遺構・遺物についてみると、住居跡は縄文時代の全時期をとおして４軒と少なく時期的にも異なるため集落構成という観点からはその域にまで達していないことは明らかである。しかも炉跡を有していた住居跡は１軒のみで、他の３軒では検出されることはなかった。こうした点から考えると定住というよりも一時的な居住の地として利用されていたと考えることが妥当といえよう。また、他の遺構としては炉穴・陥穴・土坑・ピット群などが検出されているが、取り立てて注目できるような遺構も認められなかった。

一方、出土土器についてみると、早期初頭の撚糸文系土器に始まり断続的ではあるが後期終末まで確認されている。その分布域は低地に面した台地の先端部あるいは谷に面するような場所であり、台地の中央部ではほとんどみられない。こうした傾向は隣接する天王台西遺跡（古内ほか2011）においても確認されている。ここでは北方に延びる台地の先端部に早期の撚糸文系土器から晩期前半までの土器群が集中的に認められた。このような土器包含層は当時の人びとが何らかの活動の結果として形成された痕跡という点では異論を挟む余地はなかろう。さらに踏み込んで考えれば、土器等の生活用品が廃棄された場所であり、貝殻こそないものの貝塚と共通するような性格を有していた場所であったとの解釈も可能である。

そこで、これまでに千葉ニュータウン関連として調査されてきた遺跡の成果を繙き、遺構として残された住居跡と炉跡、廃棄された土器群（土器集中地点）という二つの点から北総の地に暮らした縄文人の生活について考えてみたい。

住居跡と炉跡　これまでに実施された千葉ニュータウン関連の調査において、住居跡が検出されている遺跡を列挙すると下記（第87表）のようになる。この中で小規模であるにせよ集落を形成していた可能性のある遺跡についてみると、池谷津遺跡（鈴木1973）では後期の安行㈵式期４軒、一ノ作遺跡（佐藤ほか1974）では前期の関山式期９軒、復山谷遺跡（清藤ほか1978・田村ほか1982）では早期の茅山式期２軒と前期の黒浜式期３軒、五本松遺跡（橋本1989）では前期の黒浜式期２軒と浮島式期１軒、泉北側第２遺跡（高橋ほか1991）では前期の関山式期３軒、船尾白幡遺跡（糸川ほか2004・香取ほか2005）では加曽利E式期４軒と加曽利B式期２軒などをあげることができる。こうした中でも池谷津遺跡・一ノ作遺跡・船尾白幡遺跡では一定の期間ではあるが複数の住居が同時に存在していたものと考えらるため小規模ながらも集落として認定できるようである。しかし、その後は集落として拡充・発展することなく終焉を迎えている。他の遺跡でも同型式の土器群を出土する複数の住居跡は認められるものの必ずしも同一時期に存在したとは限らないため集落としての機能を保持していたものとは断定しがたい。

また、本遺跡でみられるように時期的に異なる住居跡が単独で検出されている事例も少なくない。このような検出例では泉北側第２遺跡では関山式期３軒の他に後期の称名寺式期・堀之内式期・晩期の千網式期を検出し、復山谷遺跡では撚糸文期・茅山式期（３軒）・黒浜～諸磯Ａ式期（２軒）、一本桜遺跡（中山1973）の関山～黒浜式期・興津式期などをあげることができる。しかし本遺跡例のように台地全体を調査した例は少ないため未調査地区にも若干の住居跡は存在していたものと推測できるが、同型式の土器による住居跡間での重複関係もほとんど認められないところから、本遺跡を含む北総台地（注１）で営まれた遺跡についてみると、土器型式が継続しつつ集落が存続していたような例はほとんど認められない。こうした傾向は本地域での特質と考えてよいものと思われる。

次に住居跡に付帯する施設として炉跡について考えてみたい。縄文時代の人びとにとって炉は暖をとり、調理をするうえで必要不可欠な施設であるということはいうまでもない。そのため炉跡の検出は遺構を住居跡として認定する根拠ともなっている。しかし本遺跡でみられるように炉跡の存在しない竪穴遺構の報告も少なくない。炉跡の有無は定住生活に大きく関わることであり、とりわけ千葉ニュータウンに関するこれまでの報告では下記の一覧表に示したように炉の設置されていない住居跡がほぼ半数の遺跡で確認されている。そこで、これらの遺跡を個別に検討していくと集落を形成することなく、ある時期に単独で営まれた住居跡にこの傾向が強いようである。このことは、とりもなおさず短期的あるいは季節的な居住を目的とした人びとが残した痕跡と考えることが妥当となろう。つまり単独で存在する住居跡と炉跡を有しない住居跡は、「短期的居住」という点において共通する要素を内包しているものと考えられる。

なお、こうした炉跡の確認できない遺構についての調査報告では、住居跡という呼称を憚るためか竪穴遺構あるいは竪穴状遺構などとして報告されることもある。しかし中期にみられる環状集落を構成する遺跡（注２）でも炉跡をもたない住居跡の存在は広く知られており、特に阿玉台式期に属する住居跡は炉跡を設置していないものが一般的（古内2011）であり、この時期の大型住居跡でも例外ではない。その後、土器形式でいえば中峠式期を経て加曽利E式期になると炉跡は常備され、土器や石で炉を囲むような工夫を凝らした炉跡が出現する。こうした事例を時系列的にみれば、概ね中期中葉以降は住居に炉の設置が一般的となり一定規模の集団による定住生活も安定した方向へと変貌を遂げていった時期といえよう。

さらに、炉跡との関連で早期後半にみられる炉穴についても若干触れておきたい。本遺跡で検出された炉穴は、前述したようにＬ９区を中心として合計14基を数えることができた。その形状はSK058・065・069のように長楕円形を呈しているものが主体となり、若干ではあるが円形・楕円形を呈したものもあった。出土遺物では茅山下層式の深鉢が多くみられるため、当該期の炉穴が主体を占めていたものと思われる。ここでは特に炉穴の重複と火床に注目してみたい。検出された14基のうち足場部分が重複している例は前述した３基のみで、他はすべて単独で存在している。この足場の重複と火床部いう点を考慮しつつ住居跡同様これまでに調査された遺跡についてみると、炉穴が10基以上検出された遺跡として復山谷遺跡27基、天王台西遺跡23基、弐ト込遺跡（香取ほか2008）20基、一本桜遺跡16基、五斗蒔遺跡（高木1974）10基の計５遺跡をあげることができる。そこで、これらの遺跡を個別にみると、復山谷遺跡（27基、重複５基・単独22基）では小規模なものが多く、重複する５基も火床部が２か所のみである。出土土器は茅山式期以降となる。天王台西遺跡（23基、重複４基・単独19基）では、重複４基のうち437号だけに火床部が７か所検出されている。出土遺物は条痕文系前半の一括品が出土している。弐ト込遺跡（20基、重複３基・単独17基）では、重複３基のうちSK019だけに火床部が４か所みられた。出土遺物は条痕文系前半や鵜ヶ島台・茅山下層・茅山上層等の一括品が検出されている。一本桜遺跡（16基、重複６基・単独10基）では、重複６基のうち086号に６か所、076号に４か所、077号に３か所の火床部が認められた。遺物は条痕文系前半の無文土器や茅山上層式と思われる土器群が出土している。五斗蒔遺跡（10基、重複２基・単独８基）では、重複２基のうち002号は10か所の火床部を有する大規模な炉穴である。遺物は茅山下層から茅山上層式期の尖底を含めた土器群が出土している。このような複雑な炉穴は高根北遺跡（中山ほか1974）においても確認されている。ここでは住居跡を思わせるような大きく広がった炉穴が検出されている。形状はほぼ楕円形となり、長径5.3m・短径4.1mを計測する。焼土の堆積は６か所でみられ、堆積土の中には「こぶし大の焼土塊もかなり出土した」と記載されているため長期間の使用が想定できる。出土土器には茅山

下層式等がみられた。しかし、こうした多数の火床部を有する炉穴は僅少で、総体的にみれば炉穴は単独で存在している場合が多く、次いで足場を共有する２基の重複が若干存在する程度といえよう。３か所以上の火床部を共有する炉穴は少数である。

そこで、これらの事例から当時の人びとと炉穴との関わりを推測すると、一定期間の使用により破損した場合、使用者は離れた場所に再構築することもあろうが、その多くは近接した場所に炉穴を設置するものと思われる。これは住居の拡張時に、従来あった柱穴の一部を利用して住居を新設するといった行為と共通するものと考えられる。つまり足場部分が重複した炉穴は同一人あるいは同一家族によって継続して使用されていたものと推測することができる。この仮説を前提として、これまでの調査例を振り返ると多くの火床部が重複する場合は長期の居住、火床部が２基程度のものや単独の場合は短期の滞在か季節的な移動を伴うものと理解することが可能といえよう。こうした解釈が可能であれば、早期後半にこの地で暮らした人びとも単独で存在する住居跡に居住した人びとと同様な生活環境のもとにあったものと思われる。ただ、五斗蒔遺跡や高根北遺跡で検出された大型重複炉穴は、同一の場所で複数家族によって使用された可能性も否定できない。

一方、本遺跡で炉穴とともに図示した焼土遺構は、焼土の分布が認められても層としての堆積は薄かったり、底面に接していないこともあり明らかに炉穴との判別が可能であった。しかも一括土器等の出土が認められず明確な時期決定が困難となっている。このため強いて性格づけをするとすれば縄文時代にこの地を訪れた人びとが残した屋外炉の痕跡として理解することが妥当と思われる。こうした例は高根北遺跡などでもみられるため炉跡を有しない住居跡との関連で捉えることができよう。

第87表　既調査分住居跡一覧

遺跡名	遺構番号	時　期	平面形・長短径（m）	炉跡	ピット	備考（遺物等）
池谷津遺跡	第1号	安行Ⅰ式	隅円方形　8.0×7.4	有	(21)	出入口有、壁柱穴が巡る。一部未調査。
	第2号	安行Ⅰ式	- - -　- - -	-	(7)	壁柱穴が巡る。約1/2は調査区外。
	第3号	安行Ⅰ式	- - -　- - -	-	(25)	壁柱穴が巡る。掘込み浅く形状は確認できない。
	第4号	- - -	- - -　- - -	-	(25)	掘込みが浅く時期と形状は確認できない。
	第1号土抗	- - -	円形　3.3×3.0	無	(25)	掘込みが浅く、環状に壁柱穴が巡る。
一本桜遺跡	第1号	関山～黒浜式	台形　2.8×1.5×3.1	有	1	401地点、ピットは屋外に３か所確認
	第1号	興津式	不整隅円方形　5.3×4.2	無	17	403地点
北の台遺跡	第6号	加曽利ＥⅢ式	不整円形　4.0×3.6	有	5	
高根北遺跡	008号	浮島Ⅲ式	円形　3.5×3.4	有	36	床面み焼土が３か所。柱穴は壁柱穴を含む。 他に井草式期の焼土遺構を３基と5.4m×4.5mの大型炉穴（茅山下層式）を検出。
一ノ作遺跡	001号	関山式	不整長方形　5.5×3.8	有・2	46	ピットは壁柱穴（27か所）を含む。
	004号	関山式	不整楕円形　4.3×3.6	有	30	
	005号	関山式	不整長方形　6.6×4.0	有	19	ピットは壁柱穴（10か所）を含む。
	006号	関山式	隅円方形　2.6×2.2	?	29	同上（20か所）を含む。床面から浮いて焼土ブロックあり。
	007号	関山式	隅円方形　3.3×3.1	有	22	同上（20か所）を含む。
	009号	関山式	不整隅円方形　4.0×3.6	有	30	同上（27か所）を含む。
	010号	関山式	円形　3.3×3.1	有	21	同上（14か所）を含む。
	013号	関山式	不整長方形　5.3×3.9	有	31	同上（11か所）を含む。
	016号	関山式	隅円長方形　3.6×2.9	有	19	同上（17か所）を含む。
復山谷遺跡	003号	黒浜式	隅円方形　4.8×4.7	有・2	5	
	039号	黒浜～諸磯Ａ式	隅円方形　3.7×(3.7)	有	6	貝ブロック５か所（大２か所・小３か所）
	150号	茅山式	円形　4.2×(4.2)	有・2	24	151号と重複
	151号	茅山式	円形　(3.5)×(3.5)	有	26	
	109号	撚糸文期	不整楕円形　3.0×2.4	無	1	住居跡の可能性有り
	177号	茅山式	不整円形　2.8×2.4	無	9	同上
谷田木曽地遺跡	021号	加曽利ＥⅢ式	円形　3.2×3.2	有	8	
五本松遺跡	第1号	黒浜式	円形　3.3×3.0	有	9	
	第2号	黒浜式	不整隅円方形　3.5×3.0	有	8	
	第3号	浮島Ⅲ式	隅円方形　4.4×3.7	無	25	ピットは壁柱穴（６か所）を含む。周溝有り。

船尾白幡遺跡	SI095	- - -	隅円長方形	3.6×2.5	無	0	覆土中から土器片（黒浜式）３点出土。
	SI105	中期	不整円形	3.4×3.0	無	3	出土土器から阿玉台式期と思われる。
	SI111	- - -	円形	2.6×2.6	有	0	覆土中から土器片（浮島系）が出土。
	SI112	加曽利ＥⅣ～称名寺式	円形	2.6×2.5	?	0	中央部に埋設土器、焼土は認められない。
	SIⅡ025	加曽利ＥⅡ式	不整円形	4.7×4.2	無	8	
	SIⅡ026	加曽利ＥⅡ式	楕円形	3.7×2.7	無	2	約1/4が撹乱。027と重複。
	SIⅡ027	加曽利ＥⅡ式	不整円形	3.5×- -	無	4	約1/4が調査区外。
	SIⅡ028	加曽利ＥⅡ式	隅円長方形	3.9×(2.8)	有	3	約1/3が調査区外。
	SIⅡ049	加曽利Ｂ１式	(円形)	(3.2)×(-)	-	-	約1/2が溝等により削平。
	SIⅡ055	加曽利Ｂ１式	隅円長方形	3.8×3.0	有	3	約1/4が溝により削平。
泉北側第２遺跡	075号	千網式	不整円形	2.7× -	有	0	掘込みは非常に浅い。
	078号	- - -	不整円形	3.0× -	有	0	西壁に接して炉跡を検出。
	079号	- - -	不整円形	3.0× -	有	0	
	080号	関山式	隅円長方形	4.5×2.5	有	33	ピットは壁柱穴（21か所）を含む。 貝ブロック（ハマグリ・シオフキ・マガキ）数か所検出。
	084号	称名寺式	- - -		有	15	ピットは炉跡から半径3.5m内とした。
	085号	関山式	隅円長方形	4.5×2.5	有・2	6	
	085号	称名寺～堀之内式	隅円長方形	4.4×3.7	有	60余	壁柱穴が二重に巡り、建て替えを想定。南壁に面して楕円形（4.0m・2.3m）の出入口施設を検出。
	098号	- - -	- - -		有	-	炉跡のみ確認。
	Ｐ－26号	関山式	円形	(2.8)× -	有	0	古墳時代住居跡により削平。
一本桜南遺跡	099号	撚糸文期	円形	3.3×3.3	無	6	
	125A号	早期	円形	3.3× -	無	8	125Ｂ号と重複。覆土中から田戸上層式と条痕文土器が出土。
	125Ｂ号	早期	円形	3.5× -	無	6	覆土中から撚糸文・田戸上層式が出土。
向辺田遺跡	SI066	茅山下層式	隅円方形	4.3×3.9	有	10	覆土中から撚糸文・沈線文・条痕文が出土。
角田台遺跡	205－Ｂ号	茅山下層式	隅円方形	4.2×4.1	無	0	
	113号	条痕文系	楕円形	4.0×3.0	無	10	
	328号	加曽利ＥⅢ式	楕円形	4.8×4.1	有	18	ピットは壁柱穴（16か所）を含む。
	373号	浮島Ⅲ式	円形	3.9×3.7	無	0	

（ ）は損壊遺構等

土器集中地点　次に遺構を伴うことなく集中的に土器を出土する場所に焦点をあててみたい。このような場所は「土器集中地点」、あるいは土器を含む土層を「土器包含層」と呼称され、遺構の存在を想定しつつ調査がなされてきた。前述したように本遺跡でも台地の縁にあたるＣ４区周辺、北に谷津を望むN10区周辺では土器等が集中して出土している。このような土器等の出土状況が確認できた周辺の遺跡として、隣接する天王台西遺跡や向辺田遺跡（田形ほか2009）をあげることができる。これらの遺跡では撚糸文系土器群から断続的ではあるが晩期に至るまでの土器群が一定の場所で集中的に出土している。こうした類例を既調査分の報告から拾い上げると、撚糸文期から晩期に至るまでの土器群を出土した遺跡には石道谷津遺跡（西山ほか1974）、南西ヶ作遺跡（高木1974）、五斗蒔遺跡（落合1993）、大森割野遺跡（香取ほか2010）などをあげることができる。また後期まで確認できる遺跡では船尾白幡遺跡や復山谷遺跡、五本松遺跡、古新田南遺跡（大内ほか2007）などが報告されている。前述したように、これらの遺跡の中には一時的に小集落が営まれたものと考えられる遺跡もみられるが、複数型式にわたり継続的に集落が営まれたような遺跡は認められない。つまり集落として発展することなく、土器群のみが断続的にみられるという現象も本地域の特色ともいえるようである。この点が東京湾岸にみられる貝塚を伴う遺跡との大きな相違点となろう。なお周辺域に所在する貝塚を伴う遺跡には、備中崎貝塚・天神台貝塚（金子1961）・松山貝塚（千葉県教育委員会1997）や一本松貝塚（千葉県教育委員会1997）等が確認されている。こうした遺跡の立地についてみると、前者は手賀沼の南に所在し、後者は印旛沼に面している。

そこで、これまでに調査された遺跡群の立地を地理的な視点から観察すると、千葉ニュータウンとしての開発地域は北に利根川・手賀沼、南に印旛沼が位置している。そのため遺跡は平坦な台地上に存在しているものの水系からみると、その位置はほぼ分水界ともいえる一帯に営まれている。このため豊富な水源に恵まれるという地域とはいいがたい。そこから想定できることは、狩猟・採集を目的とした「食糧獲得

の地」として当時の人びとに利用されてきた土地であったものと思われる。そうした中にあって土器集中地点を当時の人びとの活動の結果として捉えるならば、破損した土器や石器の廃棄場所と考えることが妥当となろう。いわば 短期的な滞在を繰り返す中で形成されていったゴミ捨て場的な場所であったと考えられる。本遺跡でもみられるように台地の縁辺部や谷頭に面した日常活動の障害にならないような場所を選定していたものであろう。このような廃棄場所の選定は貝塚形成期（注３）にもみられるところである。

以上、住居跡等の遺構のあり方と遺跡の片隅に土器群が集中する事例について千葉ニュータウン内において調査されてきた遺跡を中心にして述べてきた。この二つの事例は、結果的には深く結びつくものであることが理解できる。そこには当時の人びとが暮らした一側面が垣間みられ、主に食糧を入手するために季節的な移動の一環として短期的な居住を目的に訪れる場所であったと推測できる。そのため住居跡は、一般的な炉跡と柱穴を有するような長期居住型住居とは異なり掘込みの浅い簡素な作りとなっていたため容易に確認できないものとも思われる。とりわけ前期以前の住居跡では、内部施設としての炉跡が設けられていないことが多々みられる。このような事例は、広域に調査された空港敷地内の遺跡（注４）でも知られているところである。

一方、土器集中地点とは、土器等の破損品やその他の不要品が廃棄され場所であり、貝塚同様にいわゆるゴミ捨て場的な見方が可能となろう。また、このような遺跡構成は水辺から離れた内陸的な地形の中で狩猟や堅果類の採集といった食糧獲得のために訪れることによって形成されてきたものと推察できる。さらに狩猟具としての石鏃は約60点と多く、反面、石斧類は磨製５点、打製６点と少ないことも「狩猟・採集」といった点を補完するものといえよう。こうした傾向は北総一帯でも分水界周辺に形成された遺跡でしばしば認められるところであり、内陸的な遺跡構成の一面を表現した遺跡として捉えられることができるものと考えられる。

注１　ここでは印旛沼から利根川に至る間にみられる平坦な台地部分を対象としたものである。
注２　高根木戸遺跡（八幡ほか1971）・子和清水貝塚（八幡ほか1976・1978）・蕨立貝塚（岡崎ほか1982）等の遺跡で多数確認されている。特に高根木戸遺跡では阿玉台式期の住居跡５軒すべてに炉跡がみられない。
注３　千葉市木戸作貝塚（小宮ほか1979）は後期前半期（堀之内式期）に形成された貝塚で、貝類等の廃棄場所は当時の人びとの活動に差し障りのない谷頭部分に集中して廃棄されている。
注４　空港敷地内調査では縄文時代早期に属する住居跡が多数検出されているが、十余三稲荷峰遺跡（黒沢ほか2006）では沈線文期を主体とした住居跡41軒すべてに炉跡が存在していない。

参考文献

雨宮龍太郎ほか1998「一本桜南遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅡ』 ㈶千葉県文化財センター
糸川道行ほか2004「印西市船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ』 ㈶千葉県文化財センター
大内千年ほか2007「印西市古新田南遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ』 ㈶千葉県教育振興財団
岡崎文喜ほか1982「蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落址の研究」『遺跡研究論集Ⅱ』 遺跡研究会
落合章雄1993「本埜村五斗蒔遺跡」『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 ㈶千葉県文化財センター
香取正彦ほか2005「印西市船尾白幡遺跡Ⅱ」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ』 ㈶千葉県文化財センター
香取正彦ほか2006「本埜村角田台遺跡（弥生時代以降）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅧ』 ㈶千葉県文化財センター
香取正彦ほか2008「弐ト込遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅩ』 ㈶千葉県教育振興財団

香取正彦ほか2010「大森割野遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅡ』 ㈶千葉県教育振興財団
金子浩昌1961「印旛・手賀沼地域の貝塚」『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』（本編） 千葉県教育委員会
黒沢崇ほか2006「十余三稲荷峰遺跡」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅡ』 ㈶千葉県教育振興財団
小宮孟ほか1979『千葉東南部ニュータウン７－木戸作遺跡(第二次)－』 ㈶千葉県文化財センター
佐藤克巳ほか1974「一ノ作遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 ㈶千葉県都市公社
鈴木道之助1973「池谷津津遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 ㈶千葉県都市公社
清藤一順ほか1978「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』 ㈶千葉県文化財センター
清藤一順ほか1984「谷田木曽地遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』 ㈶千葉県文化財センター
高木博彦1974「南西ヶ作遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 ㈶千葉県都市公社
高木博彦1974「五斗蒔遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 ㈶千葉県都市公社
田形孝一ほか2009「印旛村向辺田遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅠ』 ㈶千葉県文化財センター
高橋博文ほか1991「泉北側第２遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』 ㈶千葉県文化財センター
田中裕ほか2004「八千代市間見穴遺跡」『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書３』 ㈶千葉県文化財センター
田村隆ほか1982「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』 ㈶千葉県文化財センター
千葉県教育委員会1997『千葉県埋蔵文化財分布地図』（１）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－ 千葉県教育委員会
中山吉秀1973「一本桜遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 ㈶千葉県都市公社
中山吉秀ほか1974「北の台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 ㈶千葉県都市公社
中山吉秀ほか1974「高根北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 ㈶千葉県都市公社
西山太郎ほか1974「石道谷津遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 ㈶千葉県都市公社
橋本勝雄1989「五本松遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』 ㈶千葉県文化財センター
古内茂ほか2011「印西市天王台西遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅣ』 ㈶千葉県教育振興財団
古内茂2011「阿玉台式住居址考」『縄文時代』第22号 縄文時代文化研究会
八幡一郎ほか1971『高根木戸』 船橋市教育委員会
八幡一郎ほか1976『子和清水貝塚－遺構図版編－』 松戸市教育委員会
八幡一郎ほか1978『子和清水貝塚－遺物図版編１－』 松戸市教育委員会

第５章　結　語

本遺跡は、昭和52年度に実施された確認調査から33年を経過し漸く調査報告書が刊行される運びとなった。前述したように弥生時代以降については、既に平成17年度に刊行されたところである。

旧石器時代の整理作業では、出土層位を把握しつつ特徴的な石材を抽出し接合関係を追求していくことに努めるとともに石器集中地点の広がりについて注目してきた。この結果、第１地点の下層で出土した石器群と第11地点出土の石器群との有機的な結びつきを見出すことができた。第１地点にみられる６か所の石器集中地点（11－Ａ・12・14－Ａ・14－Ｂ・14－Ｃ・16）のうち、14－Ａ・Ｃ地点を除き、第11地点出土石器との接合関係が複数で確認できたことは大きな成果といえよう。また第11地点は、いわゆる環状石器群を構成しており一定の活動範囲を示す居住空間が形成されていたものであろう。このことから第１地点と第11地点の両者は同時期に存在して集落を形成していたものと考えてよいであろう。なお、こうした環状石器群は各地で発見されており、その数は100遺跡を超える（橋本2001）とされる。近隣では印西市瀧水寺裏遺跡（酒井ほか2004）や同泉北側第３遺跡（山岡2011）においても確認され、環状石器群の出土例は増加の一途を辿っている。さらに第１地点では第Ⅲ層出土の石器群も豊富な出土量を示し、石器集中地点は７地点を数えた。しかも多量の焼けた礫群を伴っており、この地での長期にわたる生活を想起させるものであった。ここでも地点間での接合関係が多々認められたことと、焼礫の存在は食に結びつくものであり小規模ながらも集落を形成していたものと推測できる。出土石器についてみると、製作途中に廃棄された石器片の接合により有樋尖頭器の製作過程を知ることができた。成品の器種も豊富で独特な彫器や二種類の機能を有した石器は、この時代の特色として捉えることができるようである。

縄文時代についてみると、広大な面積を調査したにもかかわらず住居跡の検出数は僅かなものであった。この傾向は、これまでに調査された一連の遺跡に共通してみられるものである。第４章でも触れたように、一時的に小規模な集落は形成されるものの継続して存続するような事例を認めることはできなかった。このような点を考慮すると、狩猟・採集の生活を基本とした縄文時代にあって長期にわたるような定住生活を維持できるような土地柄ではなかったものと考えられる。炉跡を有しない住居跡や火を焚いた痕跡の存在などは当時の人びとが短期間あるいは季節的に訪れていたものと理解できる。この点、本遺跡でも多数検出された早期の炉穴に関しても同様な見方ができる。これまでに調査された炉穴を観察すると、しばしば足場部分の重複や複雑に火床部が配置されているものがみられる。この複雑な火床部の重複は継続的に使用されたものと考えられるし、反面、単独で存在する炉穴は一時的な使用でその使命を終えたものと理解できる。この点を重視して炉穴の検出された遺跡をみると、本遺跡をはじめとして千葉ニュータウン関連での調査では複雑に重複する例は少なく単独あるいは足場を共有する２基のみの検出例が支配的で、これも縄文時代の特色の一端を示したものといえよう。

最後に本報告作成にあたり、大竹憲昭・山科哲・森嶋秀一・柴田徹の各氏には石器について貴重なご意見を賜った。また田坂美代子氏には基礎整理から図面作成までたいへんなご苦労をおかけしました。文末ながら記して感謝する次第である。

橋本勝雄2010「ナイフ形石器文化前半期の居住様式」『講座日本の考古学第二巻旧石器時代〈下〉』 青木書店
酒井弘志ほか2004『瀧水寺裏遺跡』 ㈶印旛郡市文化センター
山岡磨由子2011「印西市泉北側第３遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅢ』 ㈶千葉県教育振興財団

写　真　図　版

角田台遺跡周辺航空写真

図版 2

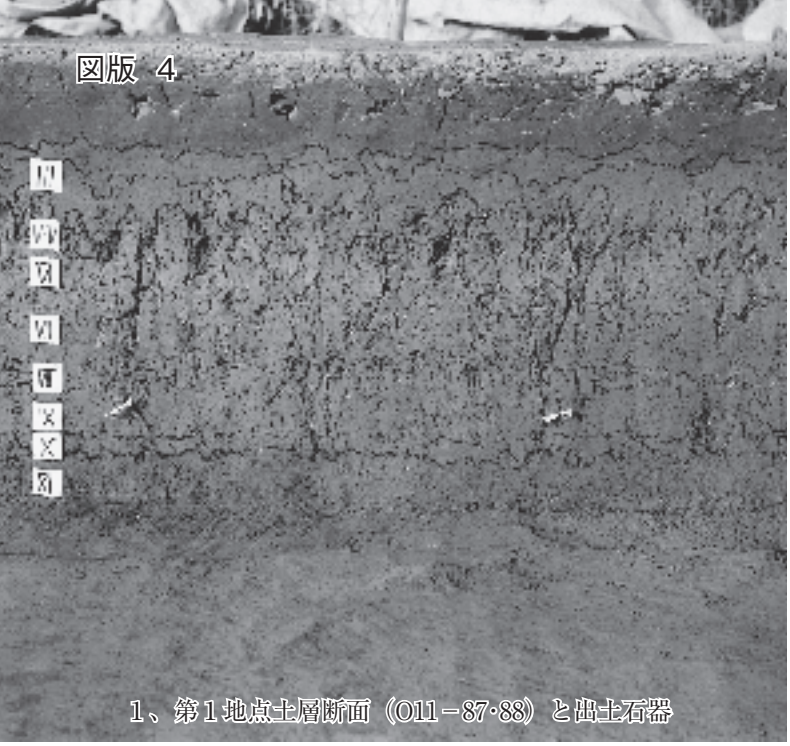
航空写真１（遺跡北東より）

航空写真２（遺跡南より）

航空写真３（Ｎ２区周辺）

調査風景（遺跡南西より）

図版 4

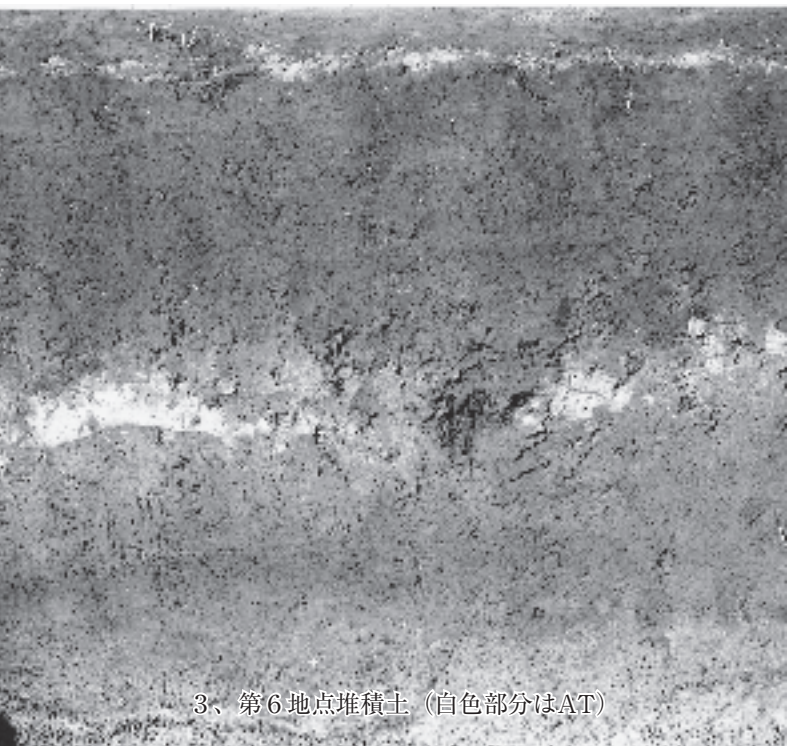


1、第１地点土層断面（O11－87･88）と出土石器

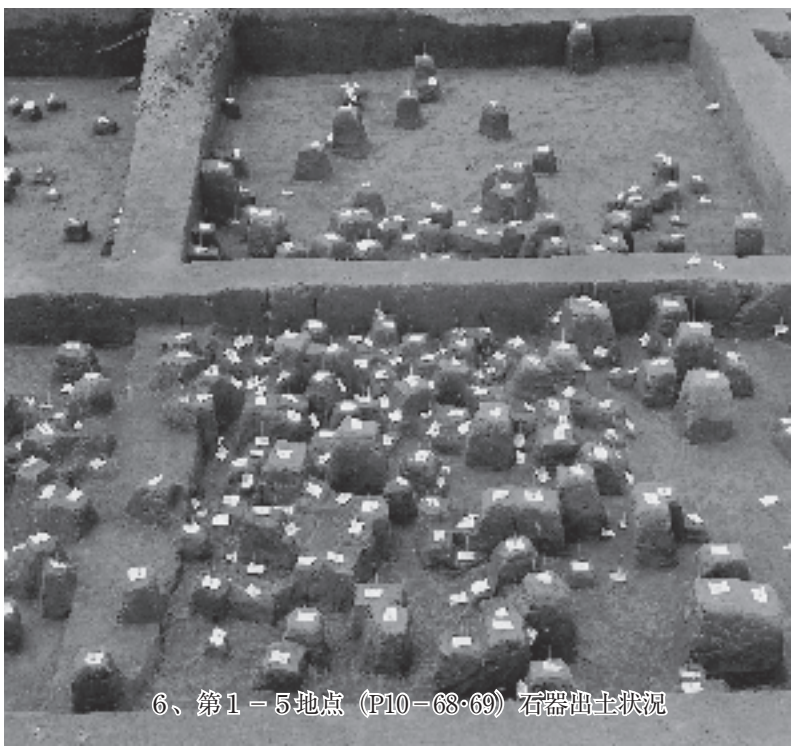
4、第１－１地点（P10－22･23）石器出土状況

2、第１－８地点土層断面（O10－46）と出土石器

5、第１－４地点（P10－66）石器出土状況



3、第６地点堆積土（白色部分はAT）



6、第１－５地点（P10－68･69）石器出土状況

1、第１－６A地点（O10－41･51）礫群出土状況

4、第１－11B地点（O10－07）石器出土状況

2、第１－８地点（O10－44～46）石器出土状況

5、第１－12地点（O11－88）石器出土状況

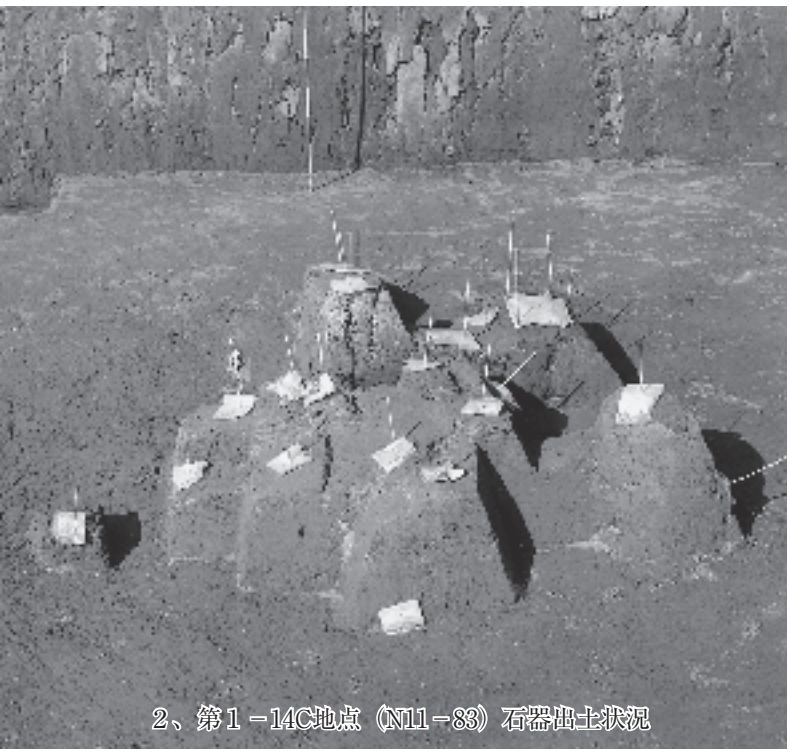
3、第１－10地点（O９－24･34）石器出土状況

6、第１－14B地点（N11－81）石器出土状況

図版 6

1、第１－14C地点（N11－82･83）石器出土状況

4、第４地点（L９－65･75）石器出土状況



2、第１－14C地点（N11－83）石器出土状況

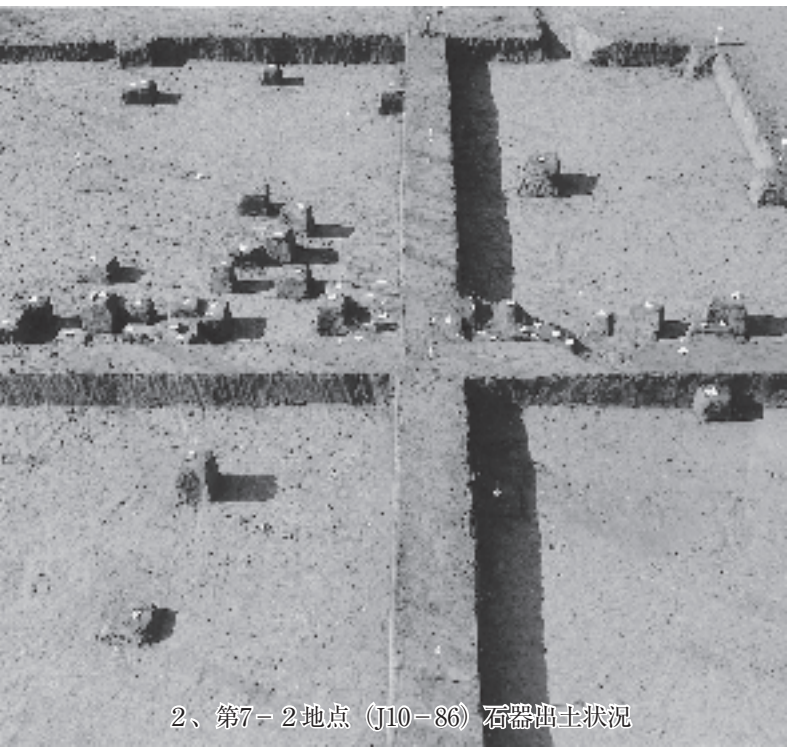
5、第５地点（L８－08）石器出土状況

3、第１－15地点（N10－55･65）石器出土状況

6、第５地点（L８－08･L９－98）石器・炭化物出土状況

1、第7－1地点（J10－54･55）石器出土状況

4、第9－７地点（K５－40）石器出土状況



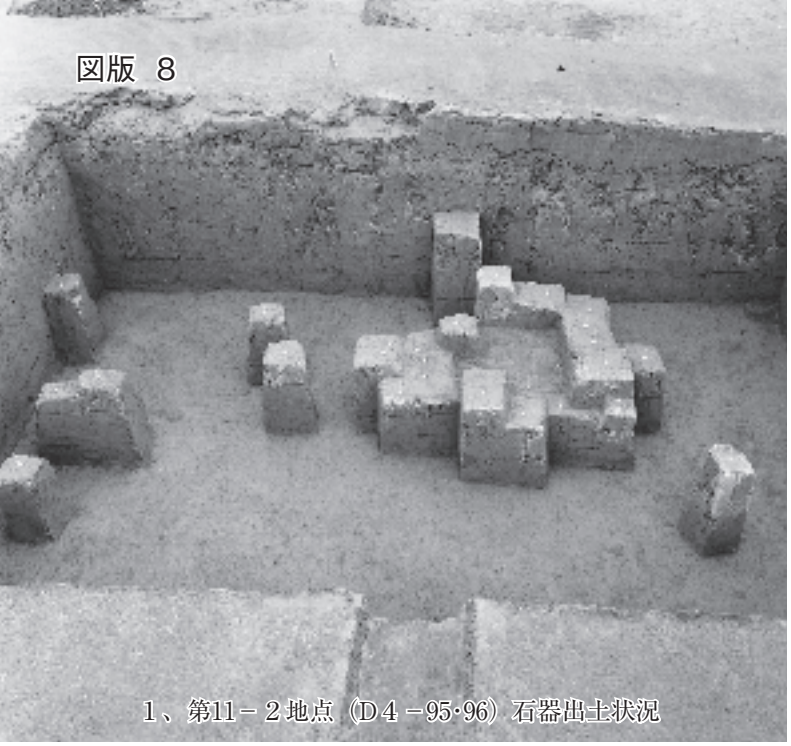
2、第7－２地点（J10－86）石器出土状況

5、第9－10A地点（K４－21･31）石器出土状況

3、第9－４B地点（L５－43･53）石器出土状況

6、第12地点（J４－84･85）石器出土状況

図版 8



1、第11－２地点（Ｄ４－95･96）石器出土状況

2、第11－３・４・５地点（Ｄ４－56～58･76～78）石器出土状況

3、第11－６・７・10･11地点（Ｄ４－53～55）石器出土状況

4、第13－1地点（Ｊ３－87）石器出土状況

5、第15地点（Ｇ２－20）石器出土状況

6、第17地点（Ｅ３－55）石器出土状況

7、第20地点（Ｇ３－35）石器出土状況

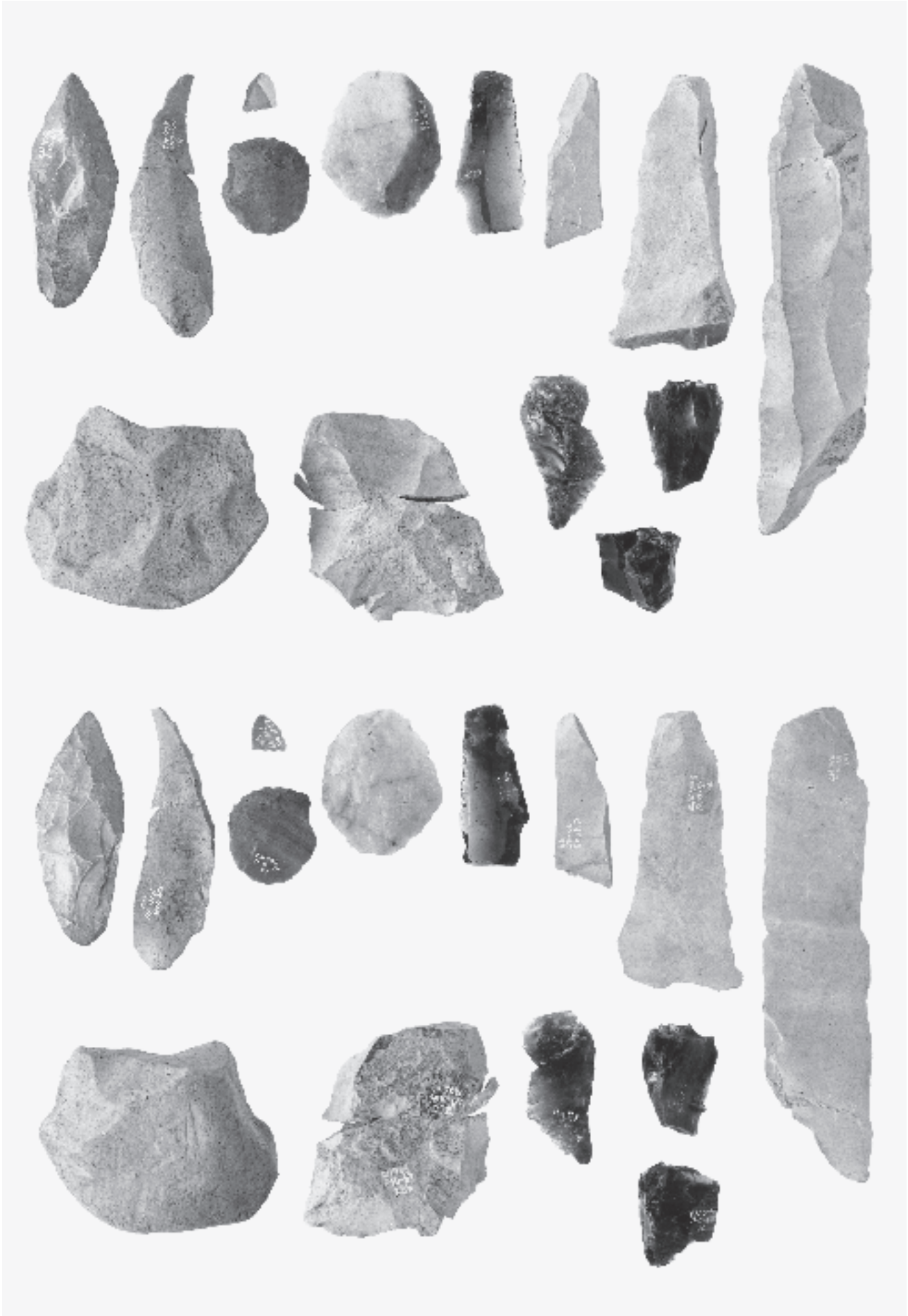
第１－１地点出土石器

第１－３A地点出土石器（１）

第１－３A地点出土石器（２）

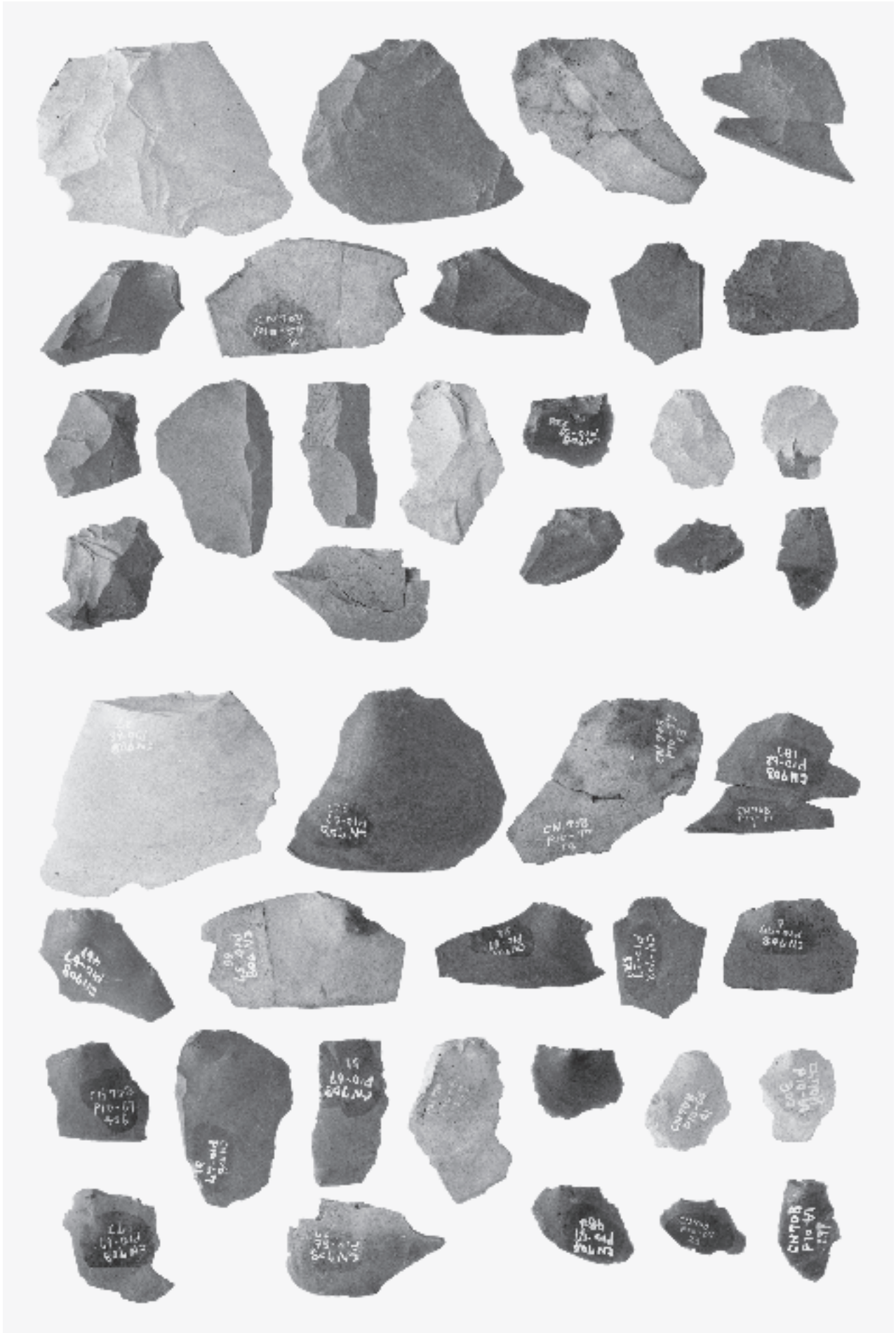
図版 12

第１－３B地点出土石器



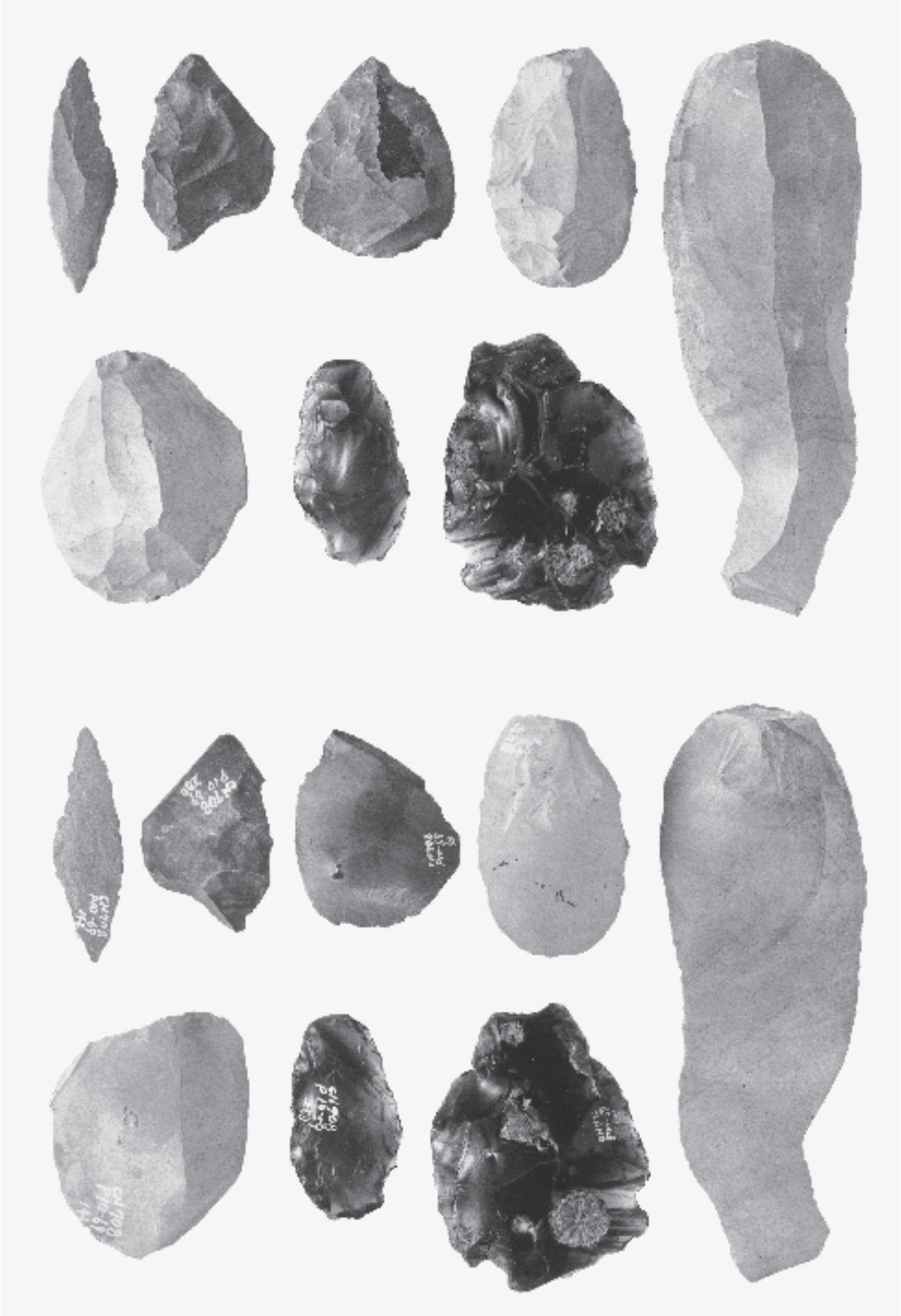
第１－４地点出土石器（１）

図版 14



第１－４地点出土石器（２）

第１－４地点出土石器（３）



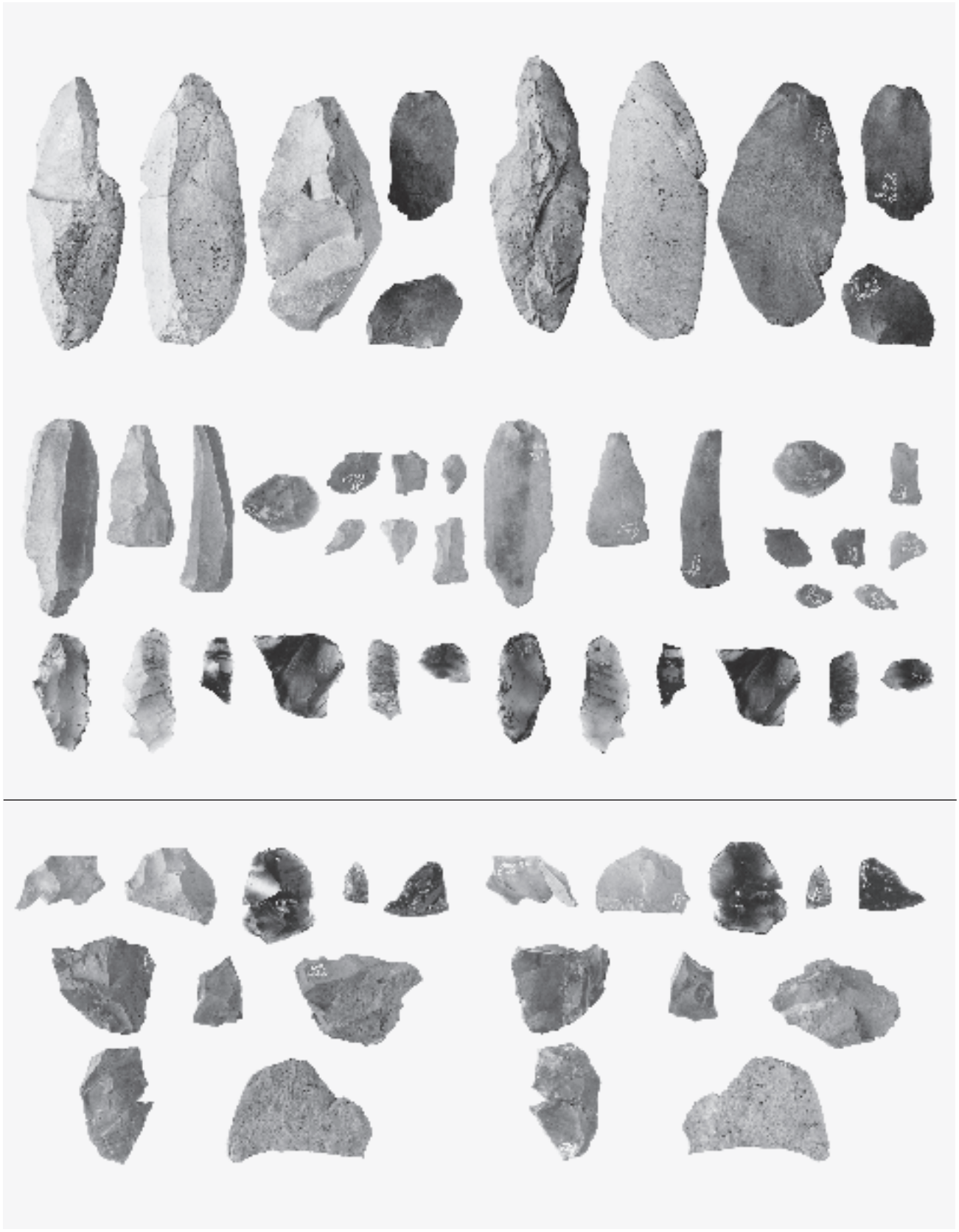
第１－５地点出土石器（１）

第１－５地点出土石器（２）

第１－５地点出土石器（３）

第１－６Ａ地点出土石器（１）

第１－６A地点出土石器（２）

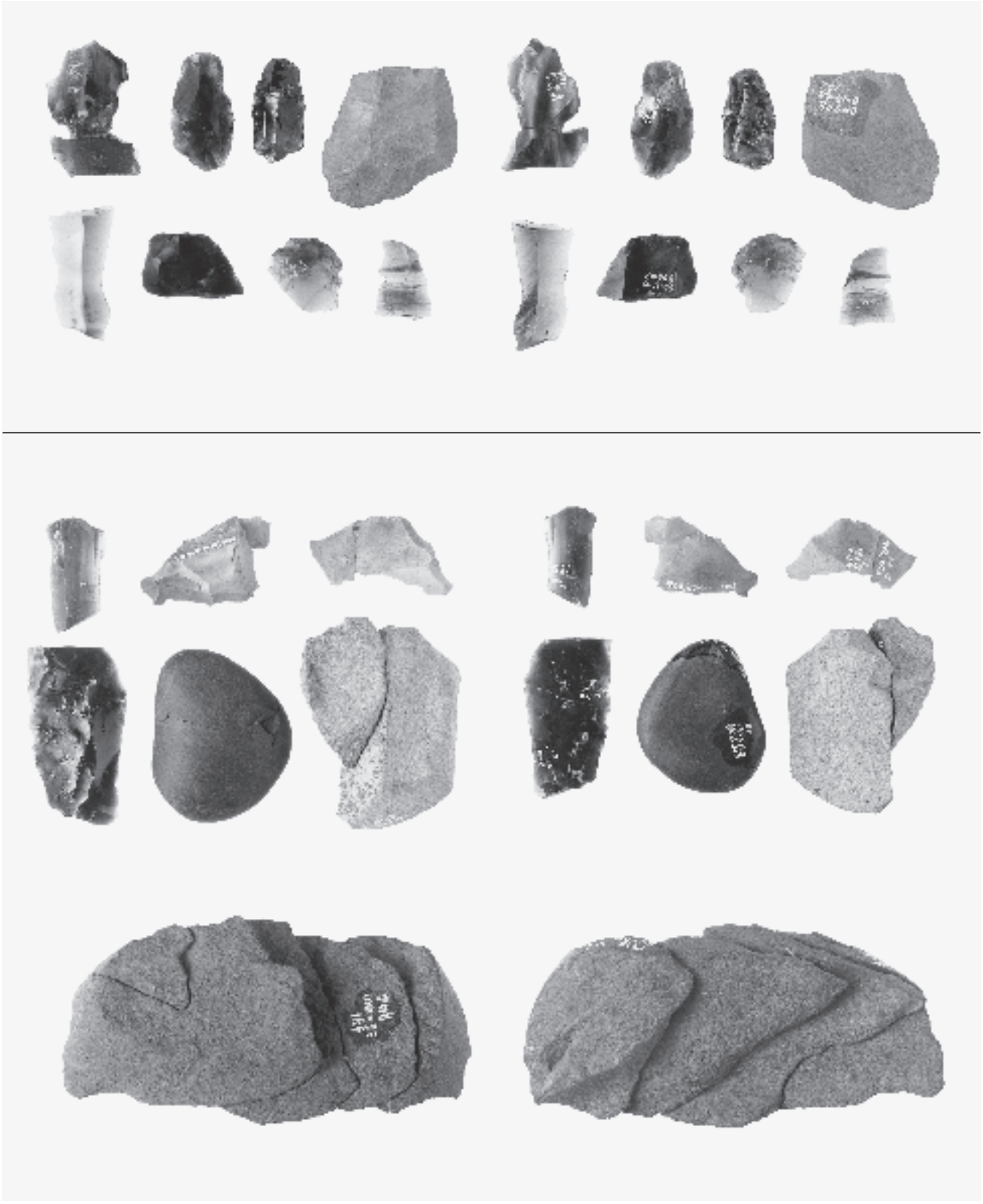


第１－６B地点（上）、第１－７B地点（下）出土石器

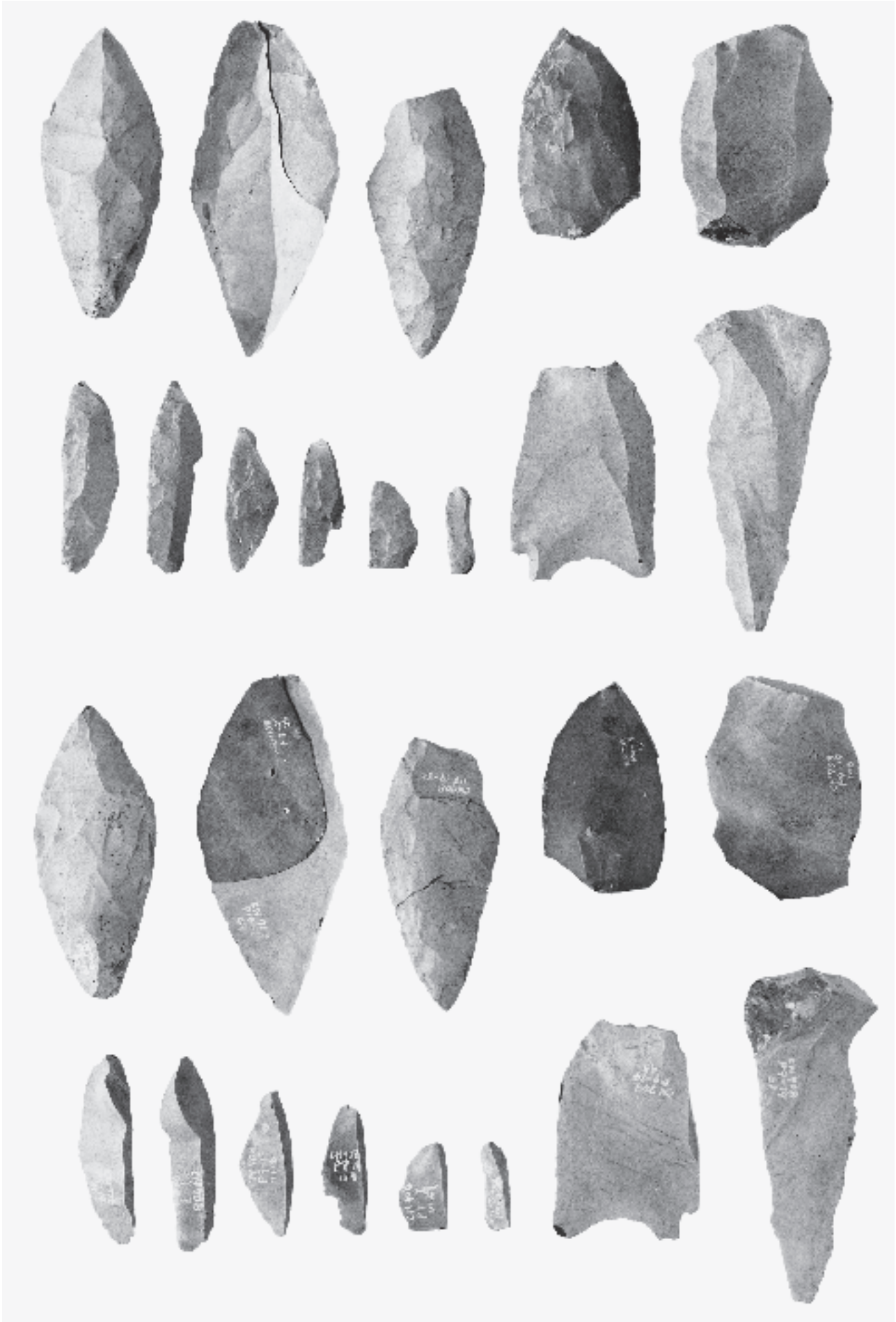
第１－７Ａ地点出土石器（１）

第１－８地点出土石器（１）

図版 24



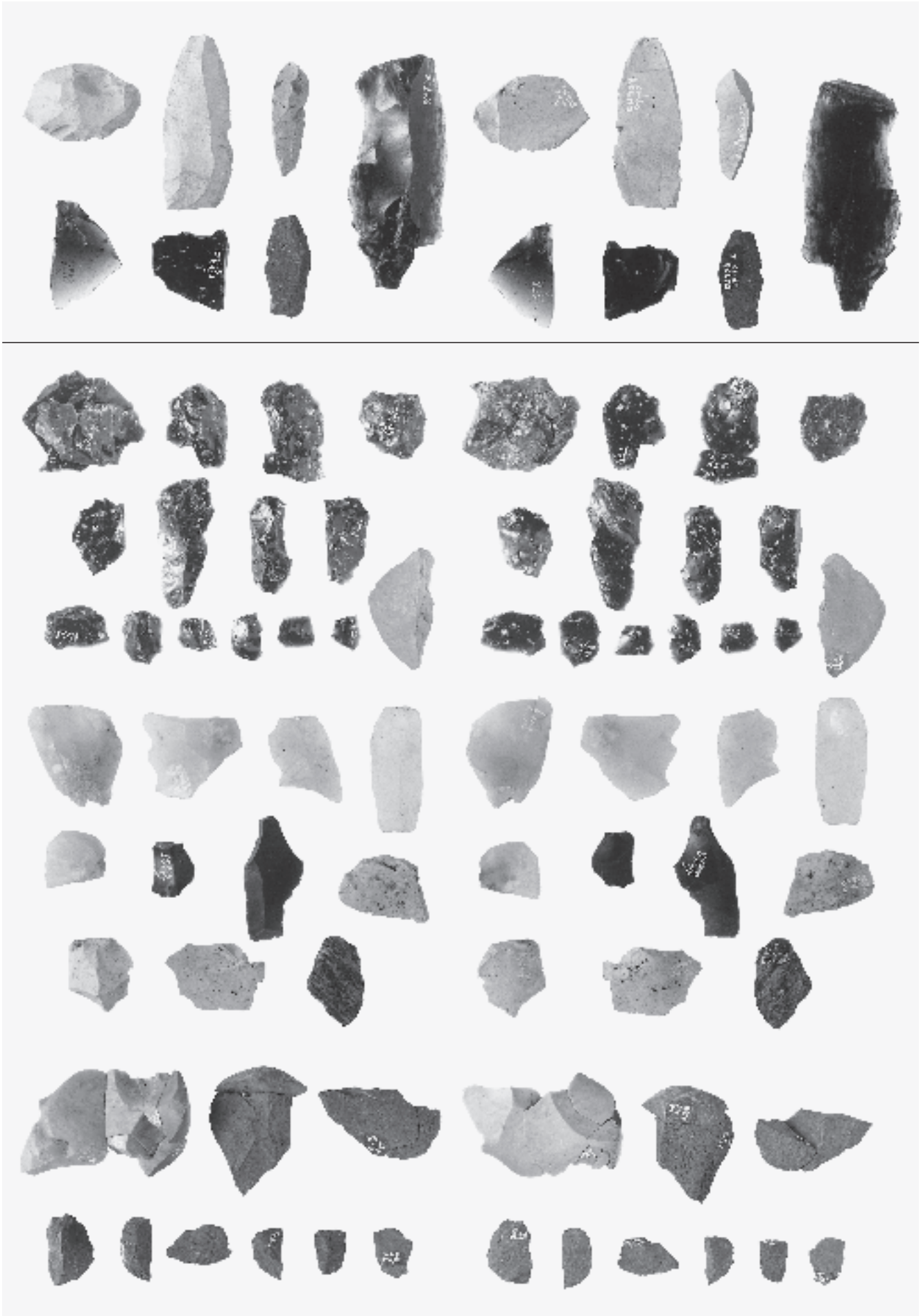
第１－７Ａ地点（２）（上）、第１－８地点（２）（下）出土石器



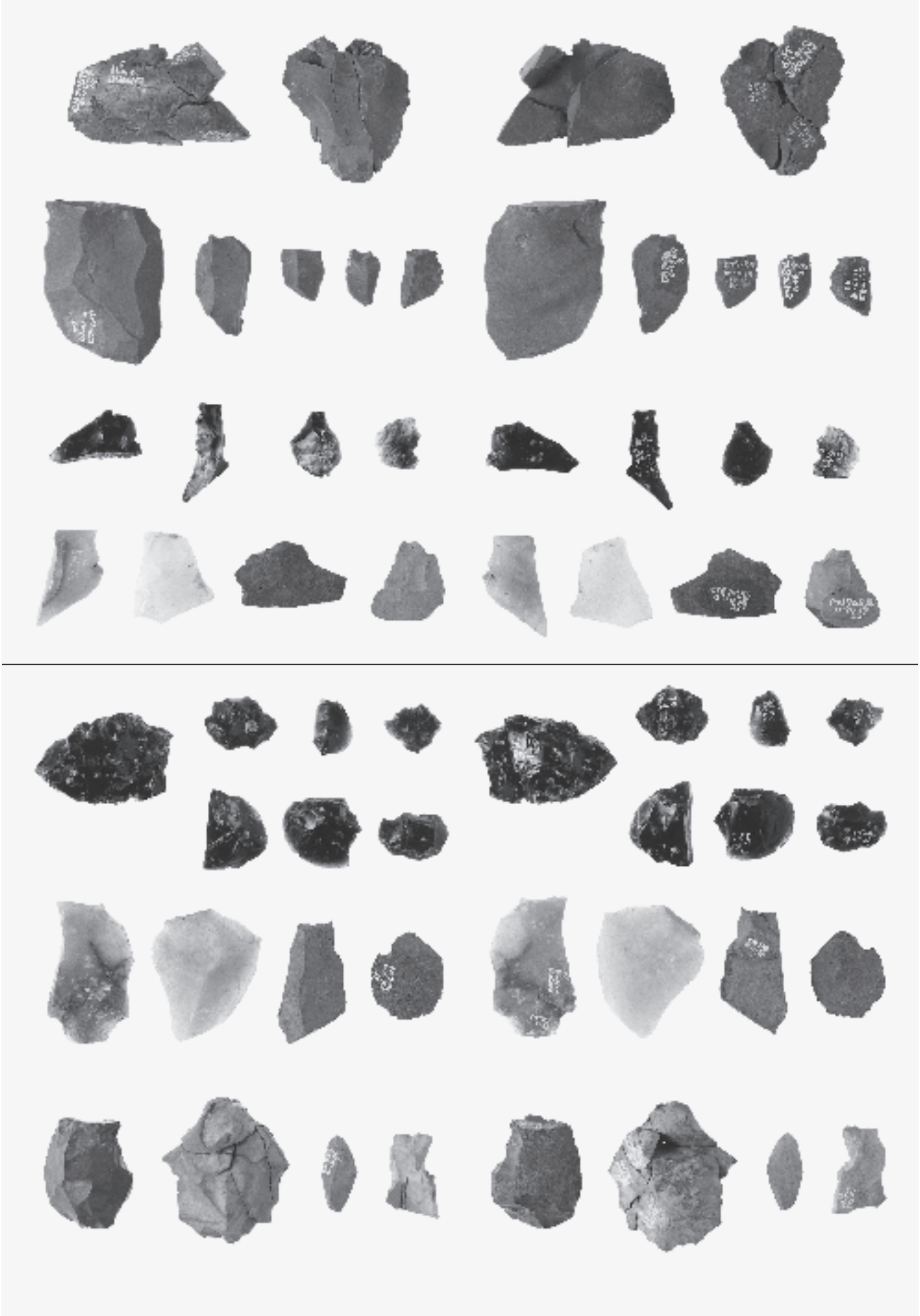
第１－９Ａ地点出土石器（１）

第１－９A地点出土石器（２）

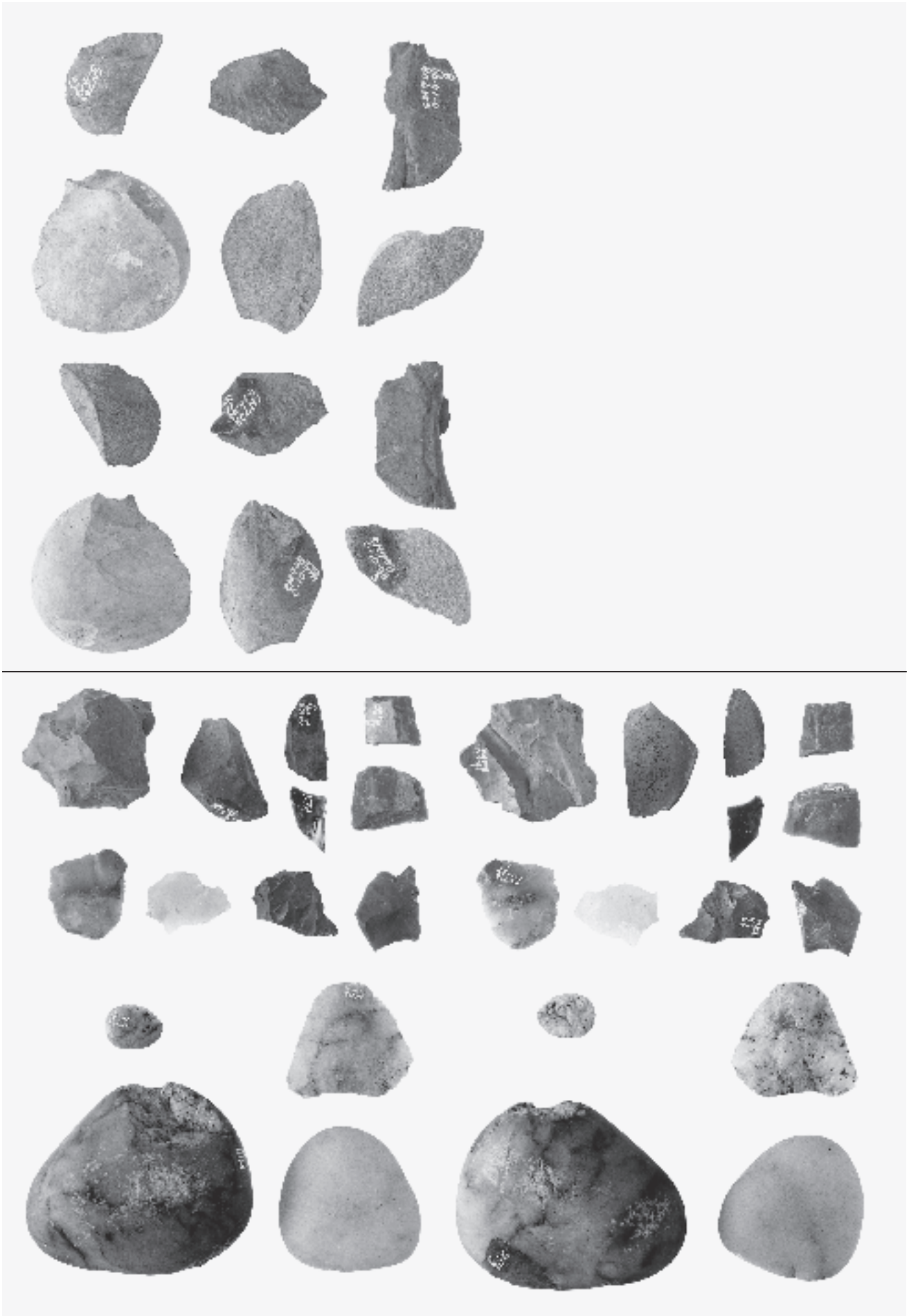
第１－10地点出土石器



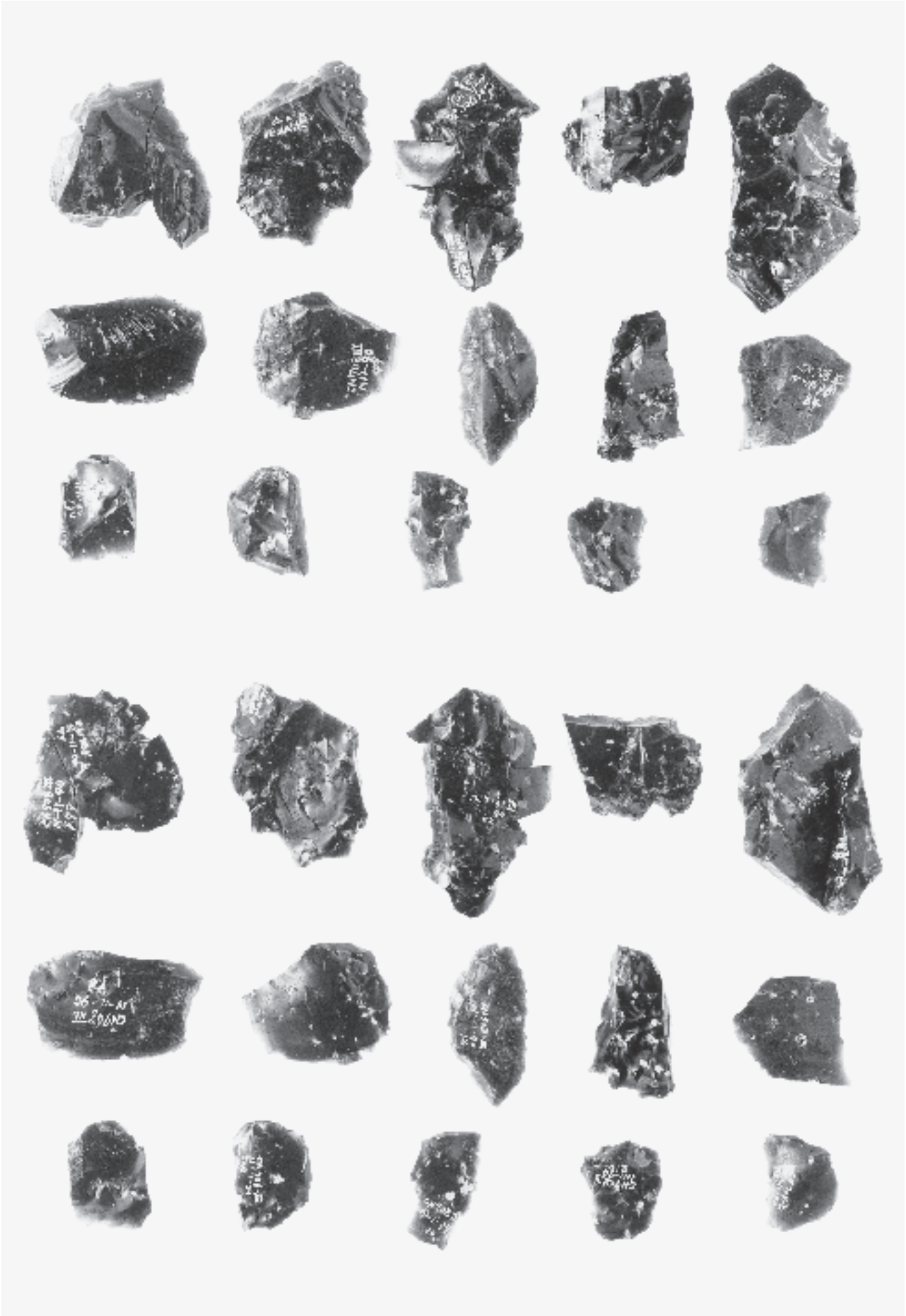
第１－９B地点（上）、第１－11B地点（下）出土石器



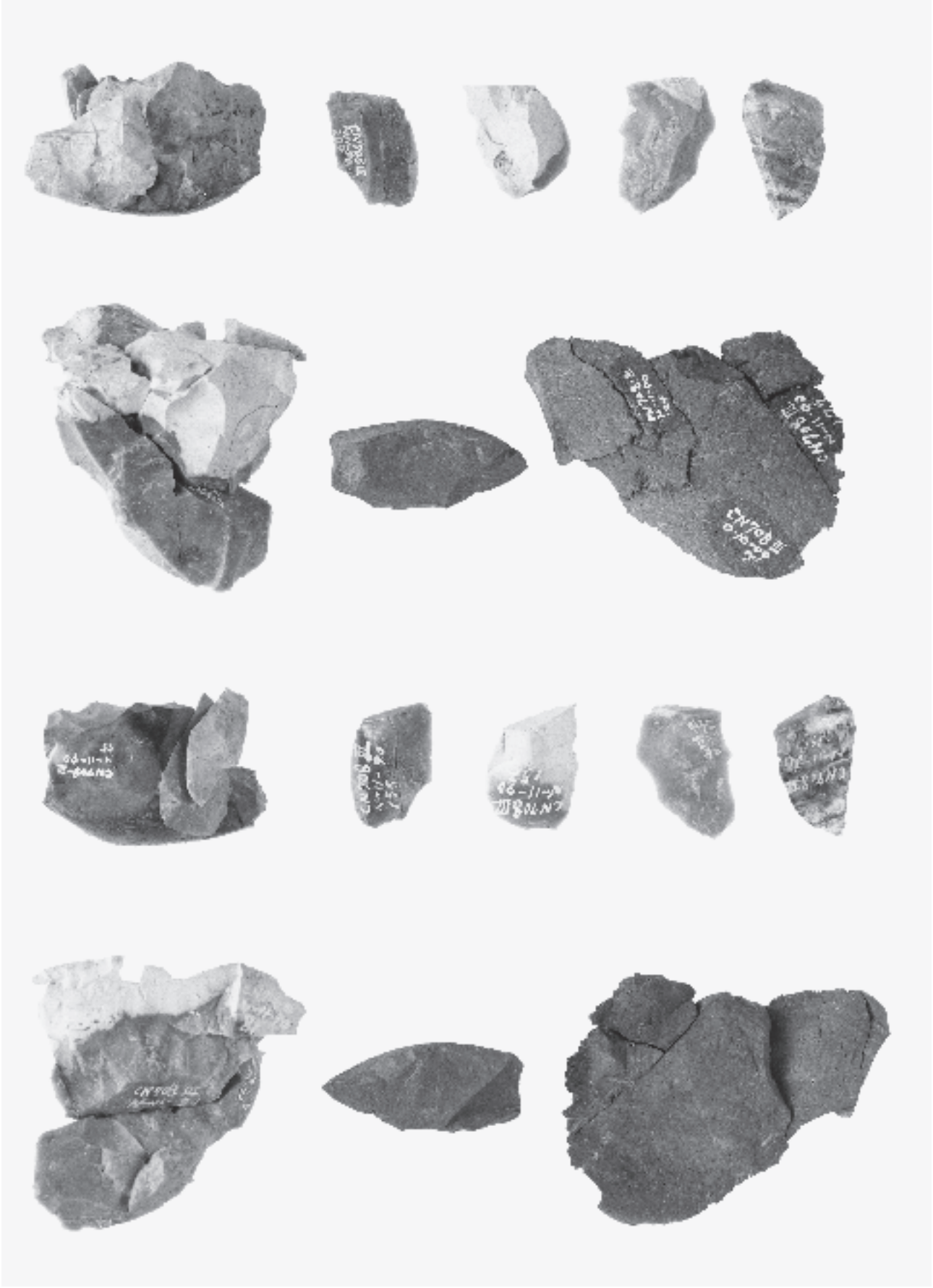
第１－11A地点（上）、第1－12地点（下）出土石器



第１－13地点（上）、第１－14D地点（下）出土石器



第１－14A地点出土石器（１）

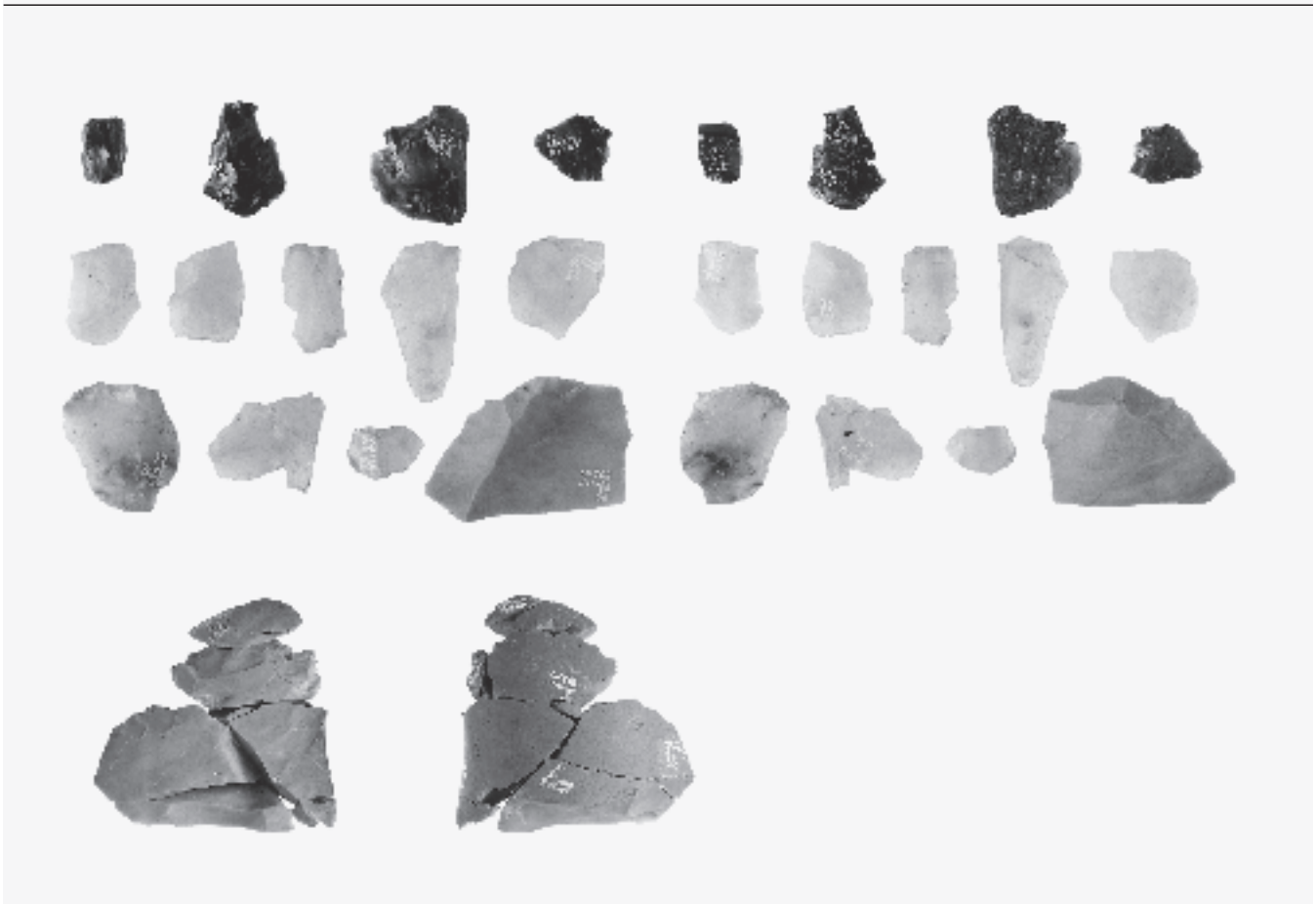


第１－14A地点出土石器（２）

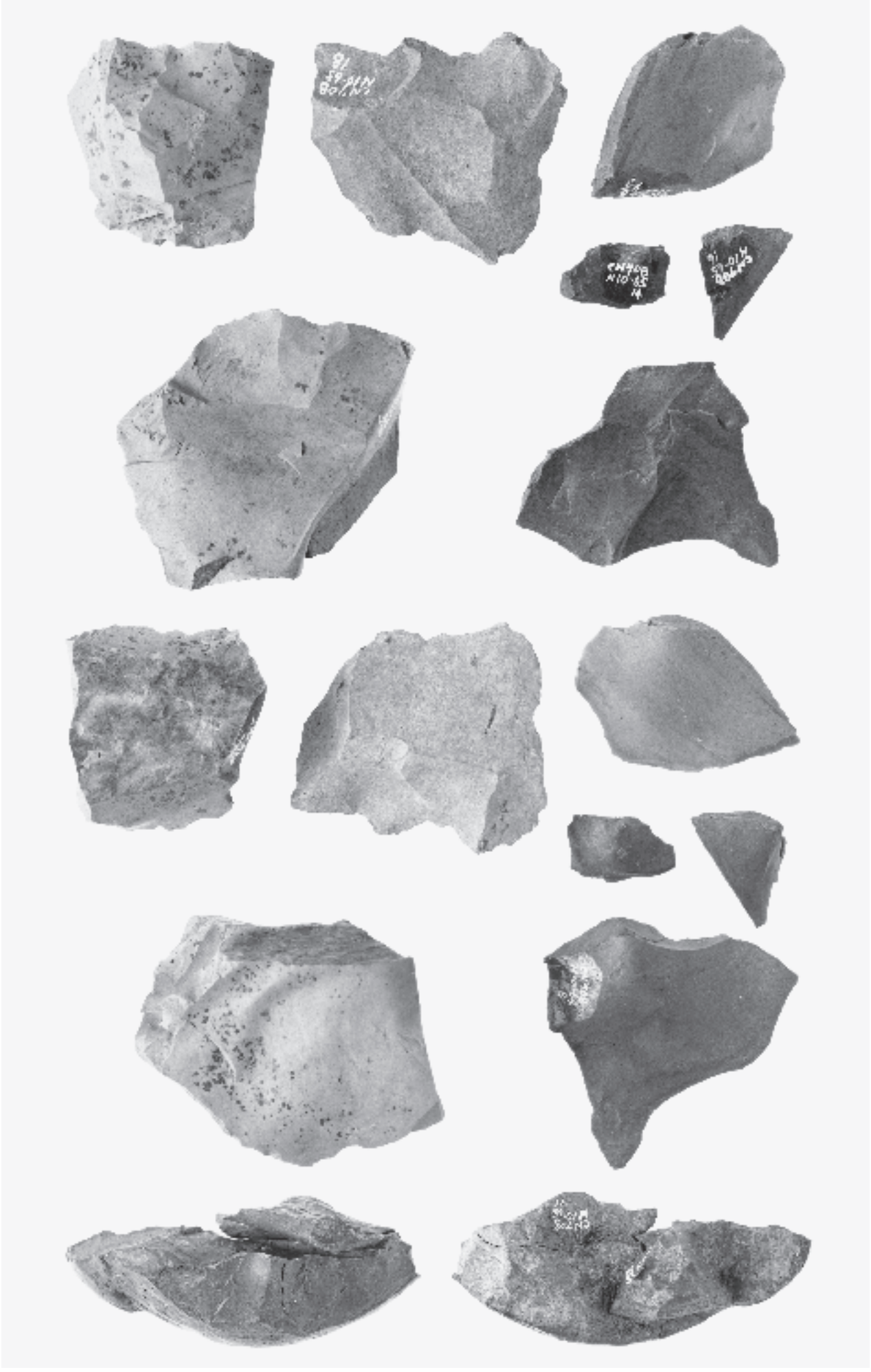
第１－14A地点出土石器（３）

第１－14B地点出土石器（１）

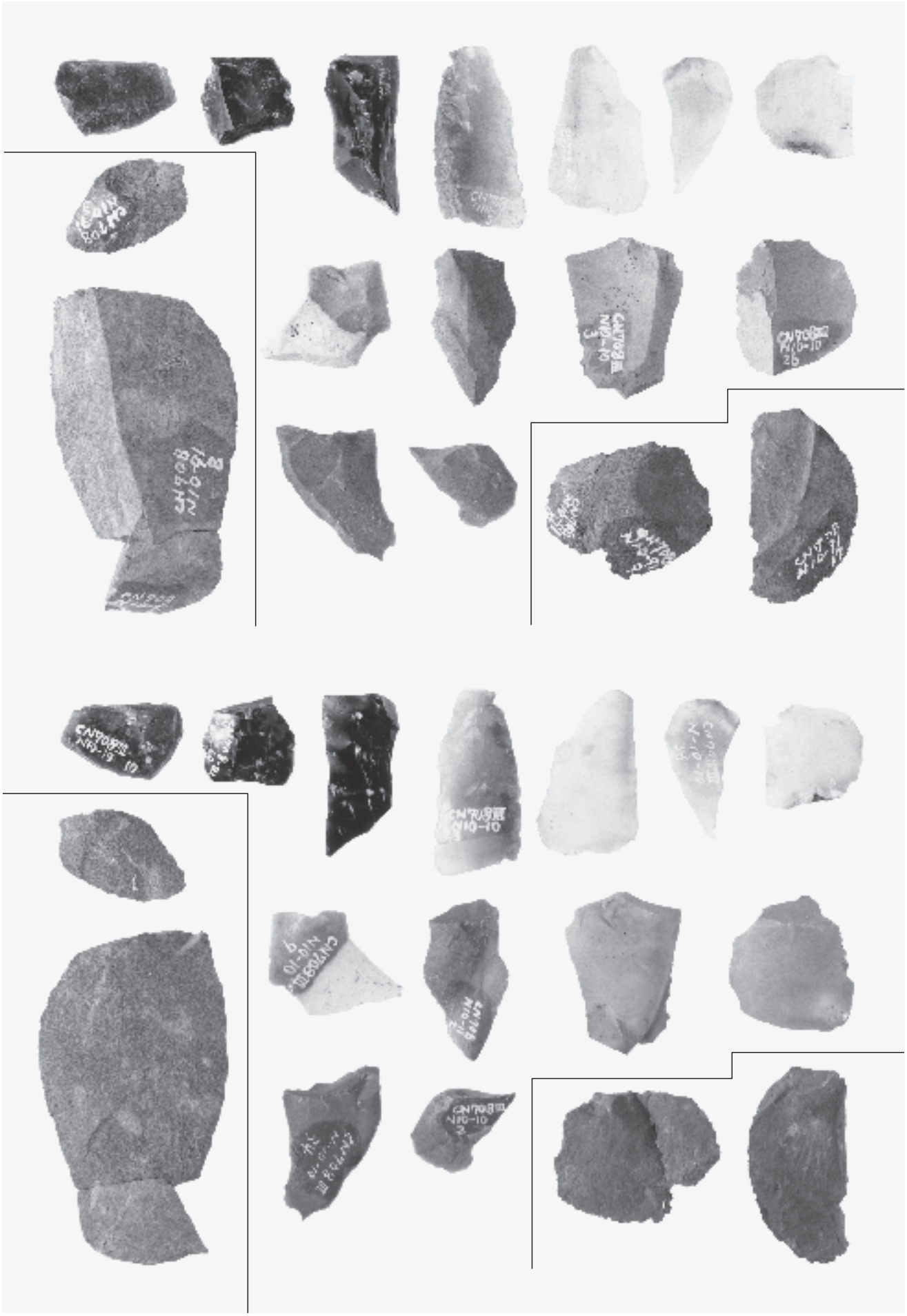
第１－14B地点出土石器（２）



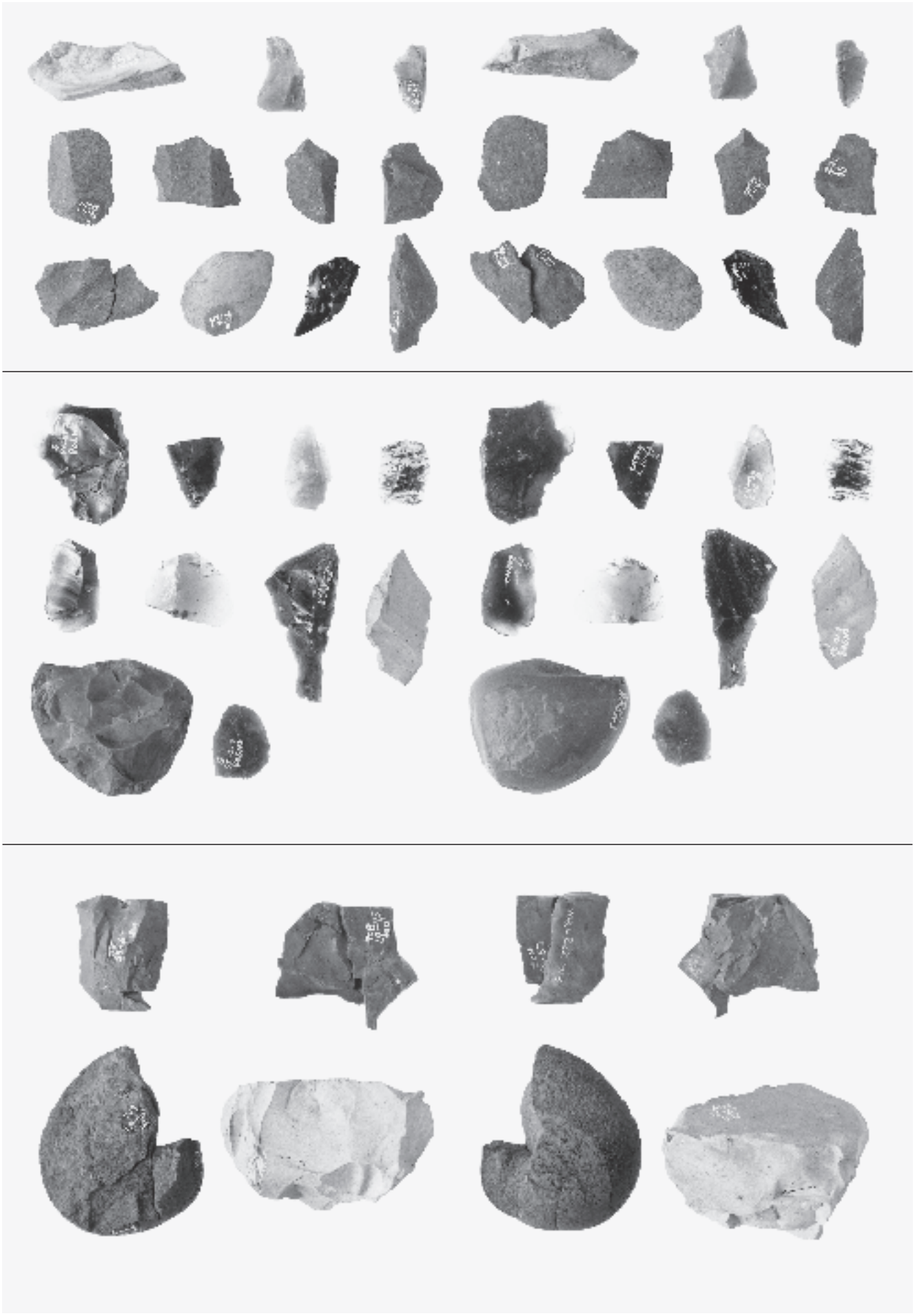
第１－14B地点（３）（上）、第１－14C地点（下）出土石器



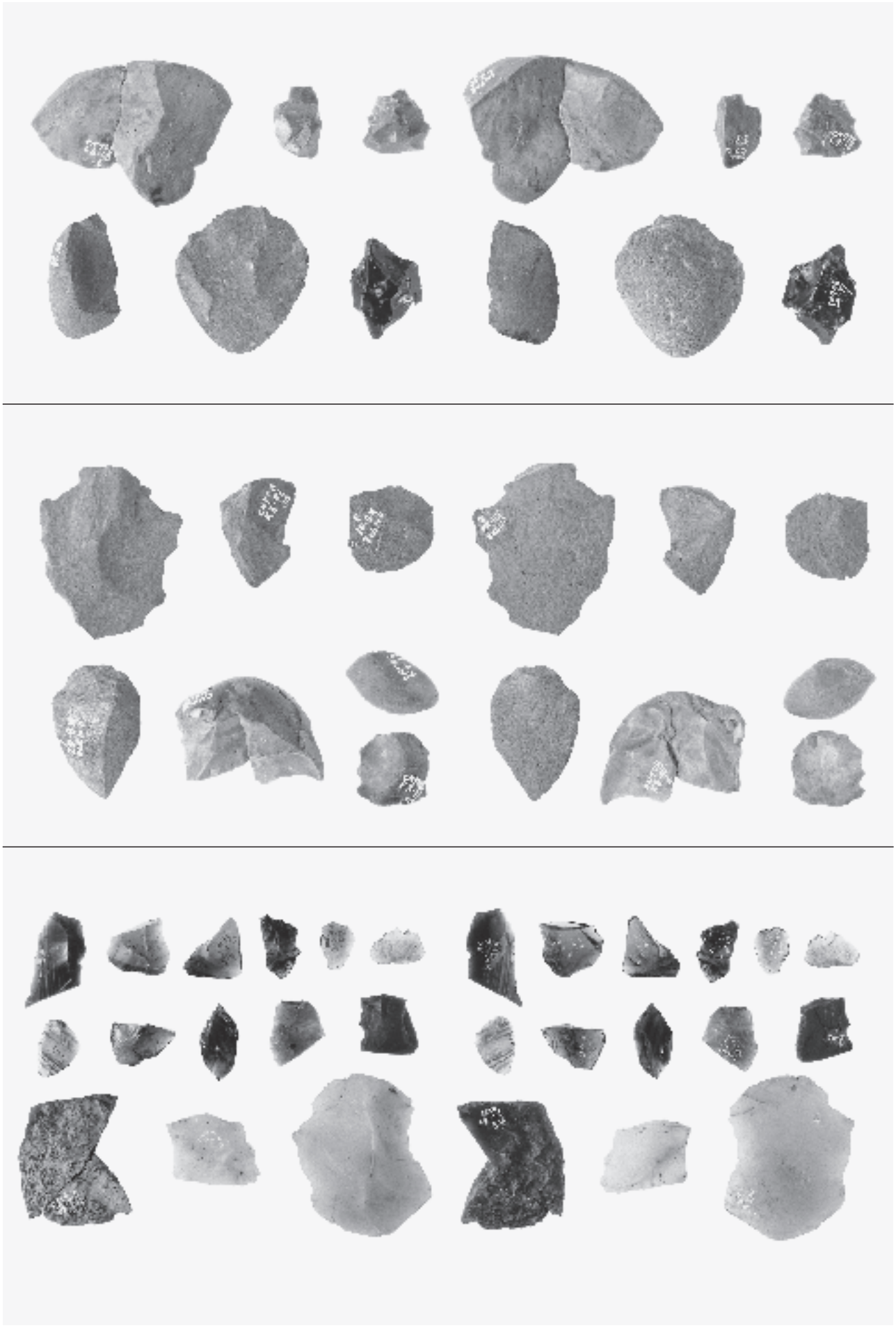
第１－15地点出土石器



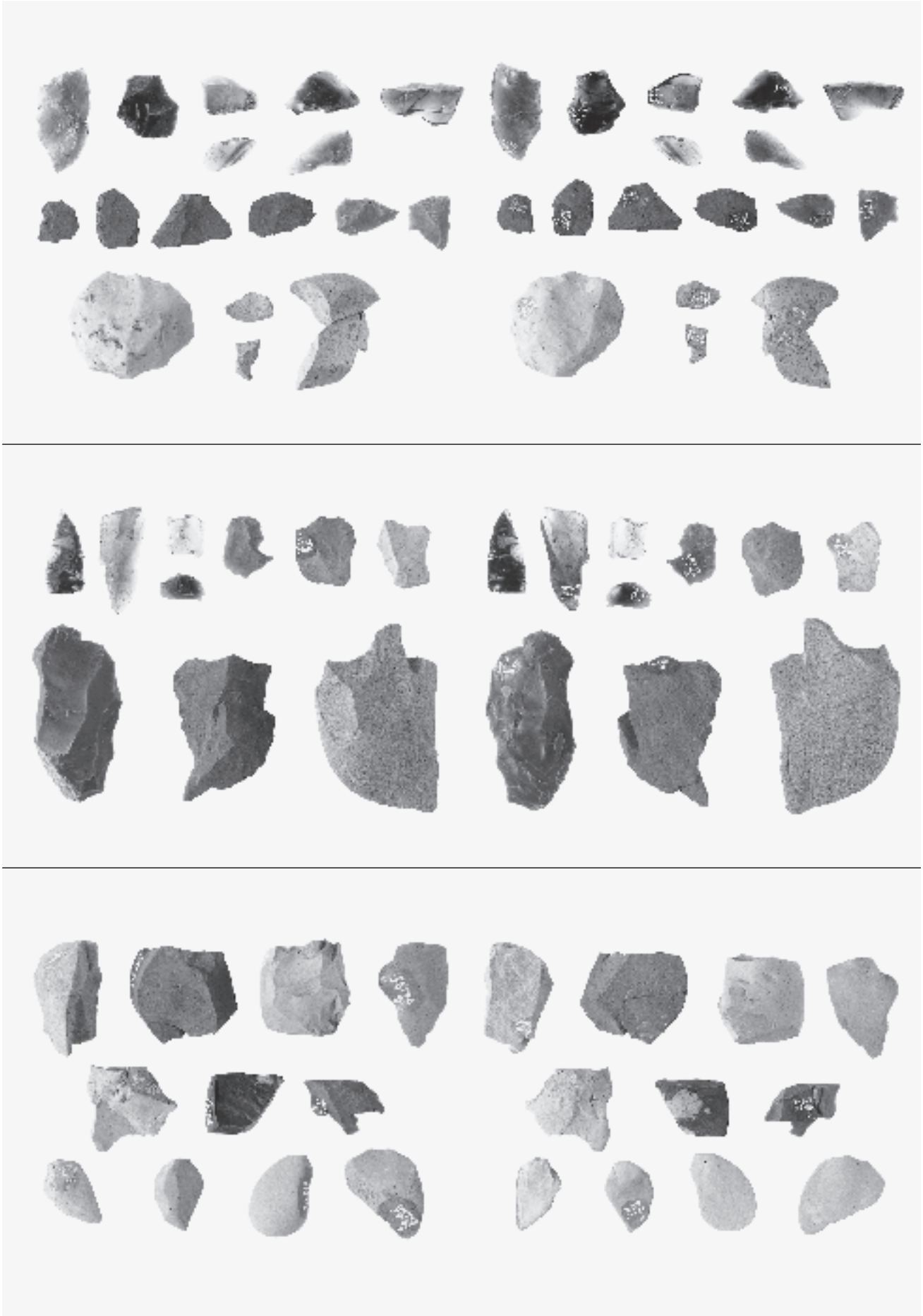
第１－16地点（上）、第１－17地点（下）出土石器



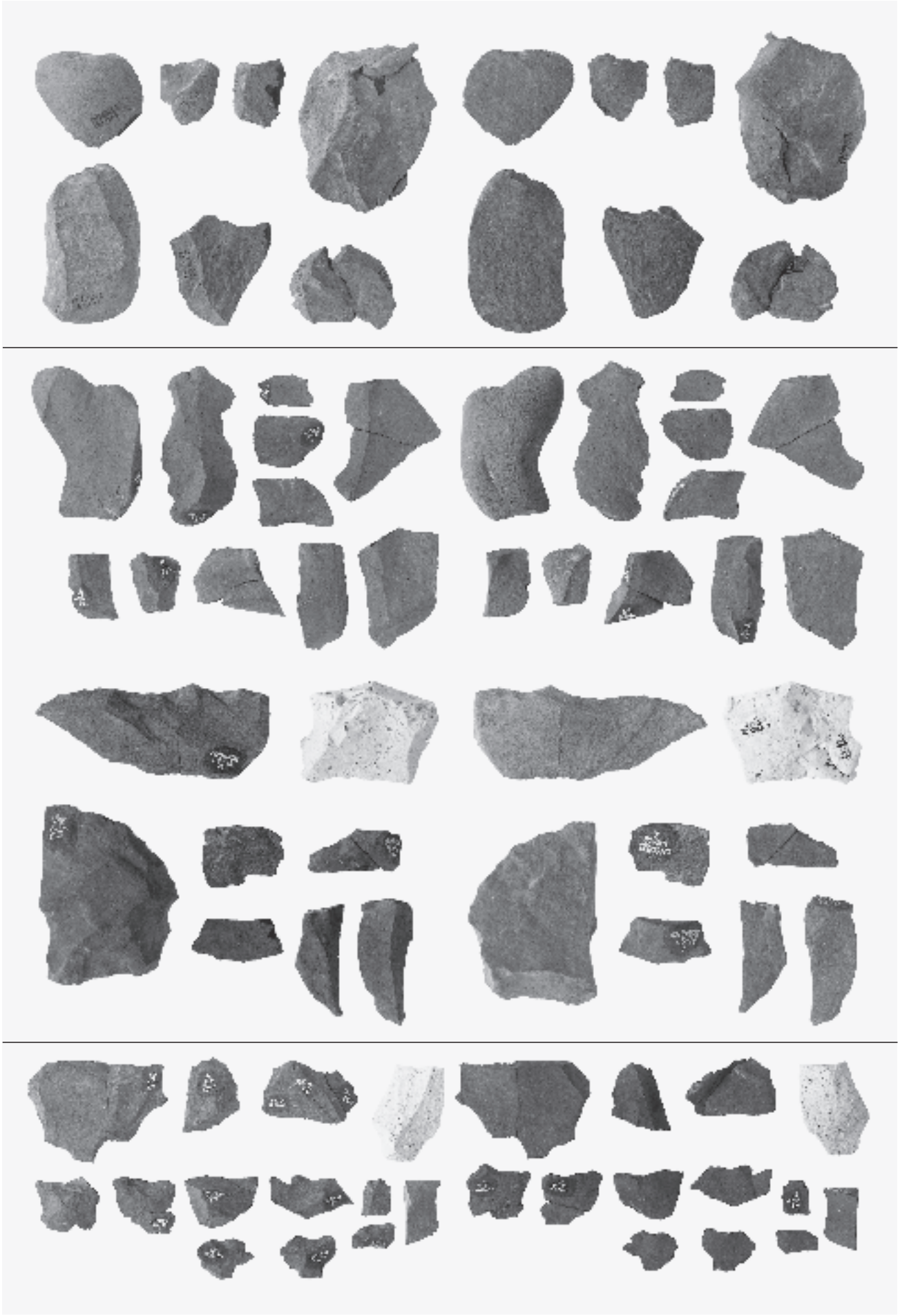
第２－１地点（上）、第２－２地点（中）、第４地点（下）出土石器



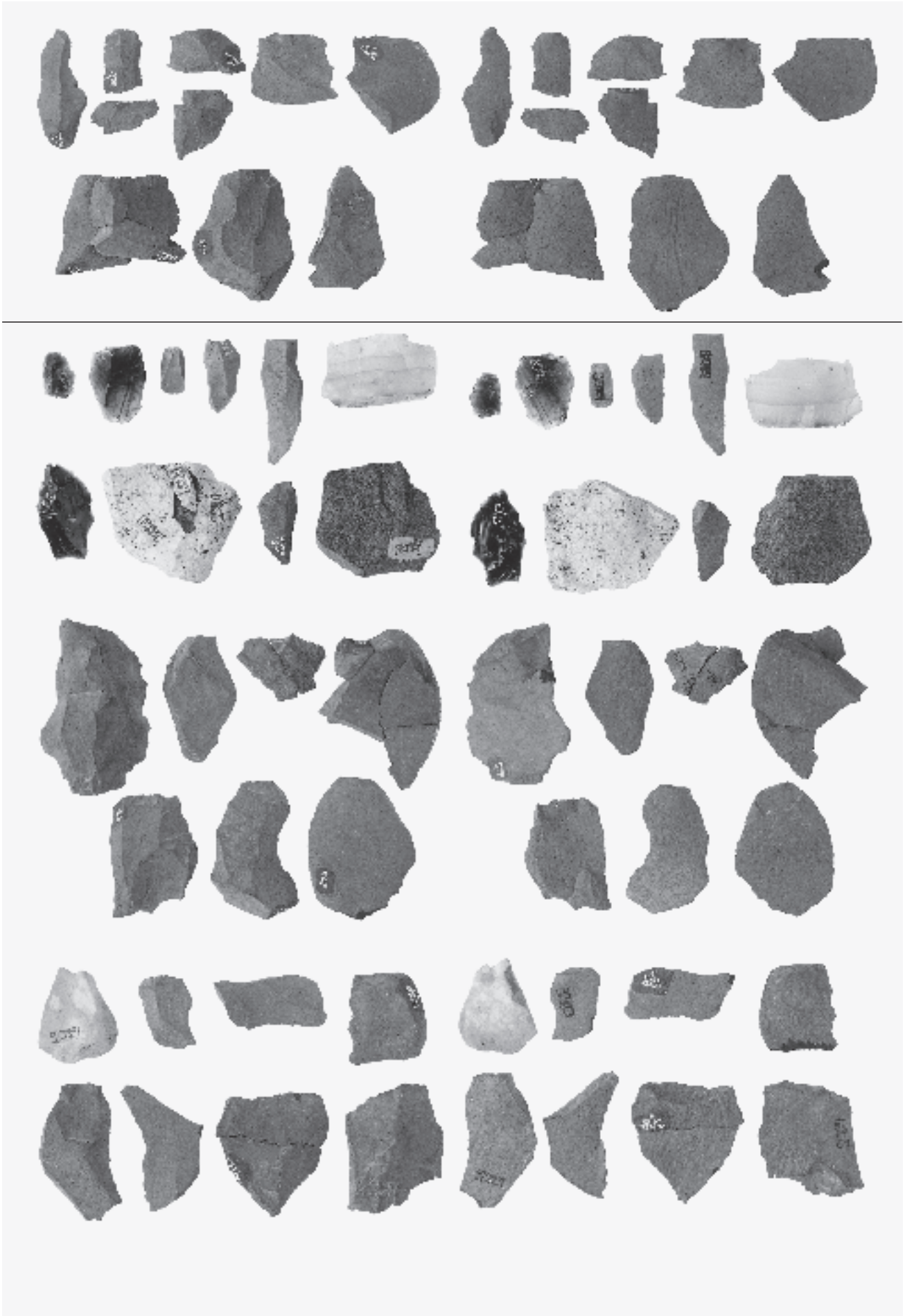
第５地点（上）、第６地点（中）、７－１地点（下）出土石器



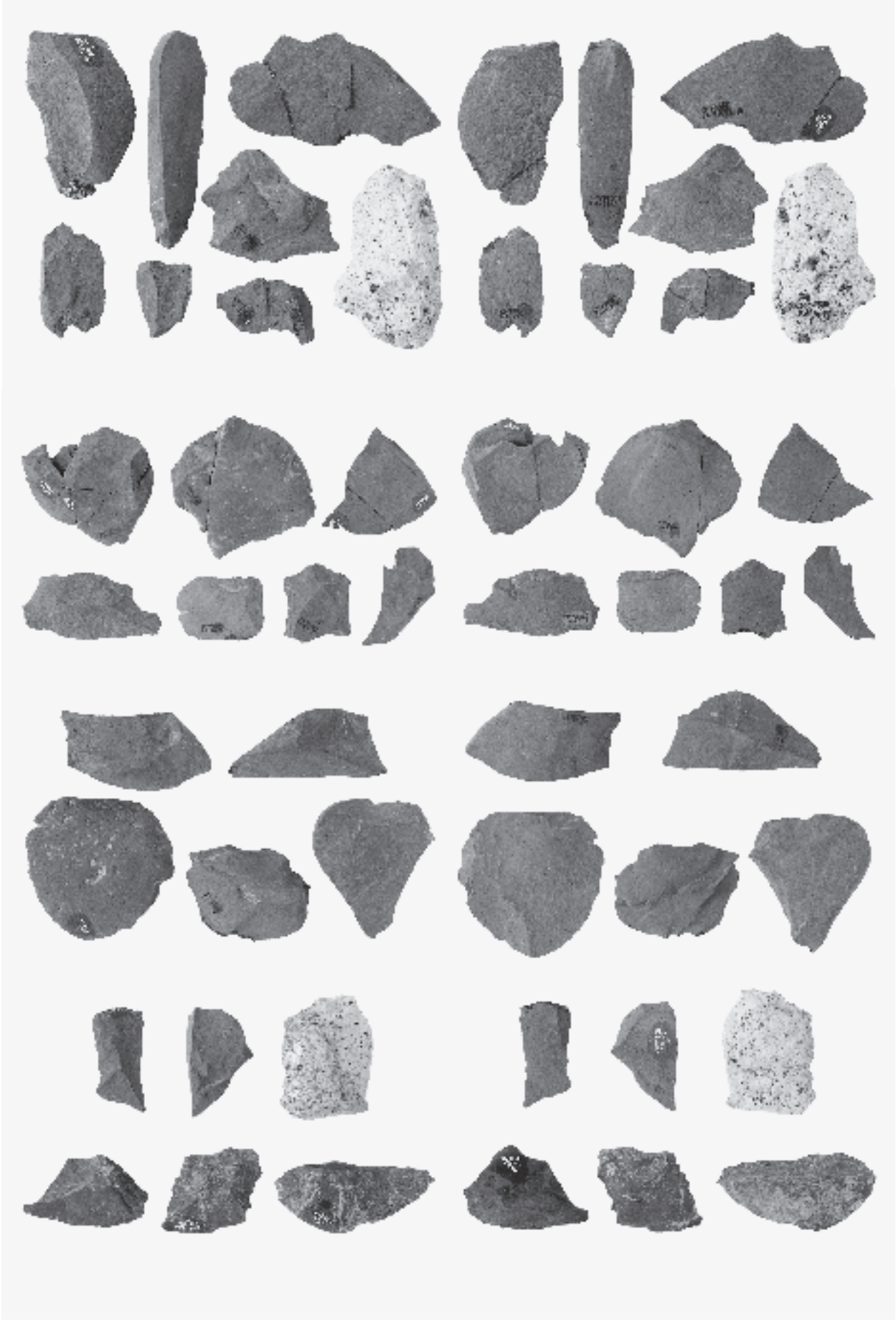
第７－２地点（上）、第７－３地点（中）、第８地点（下）出土石器



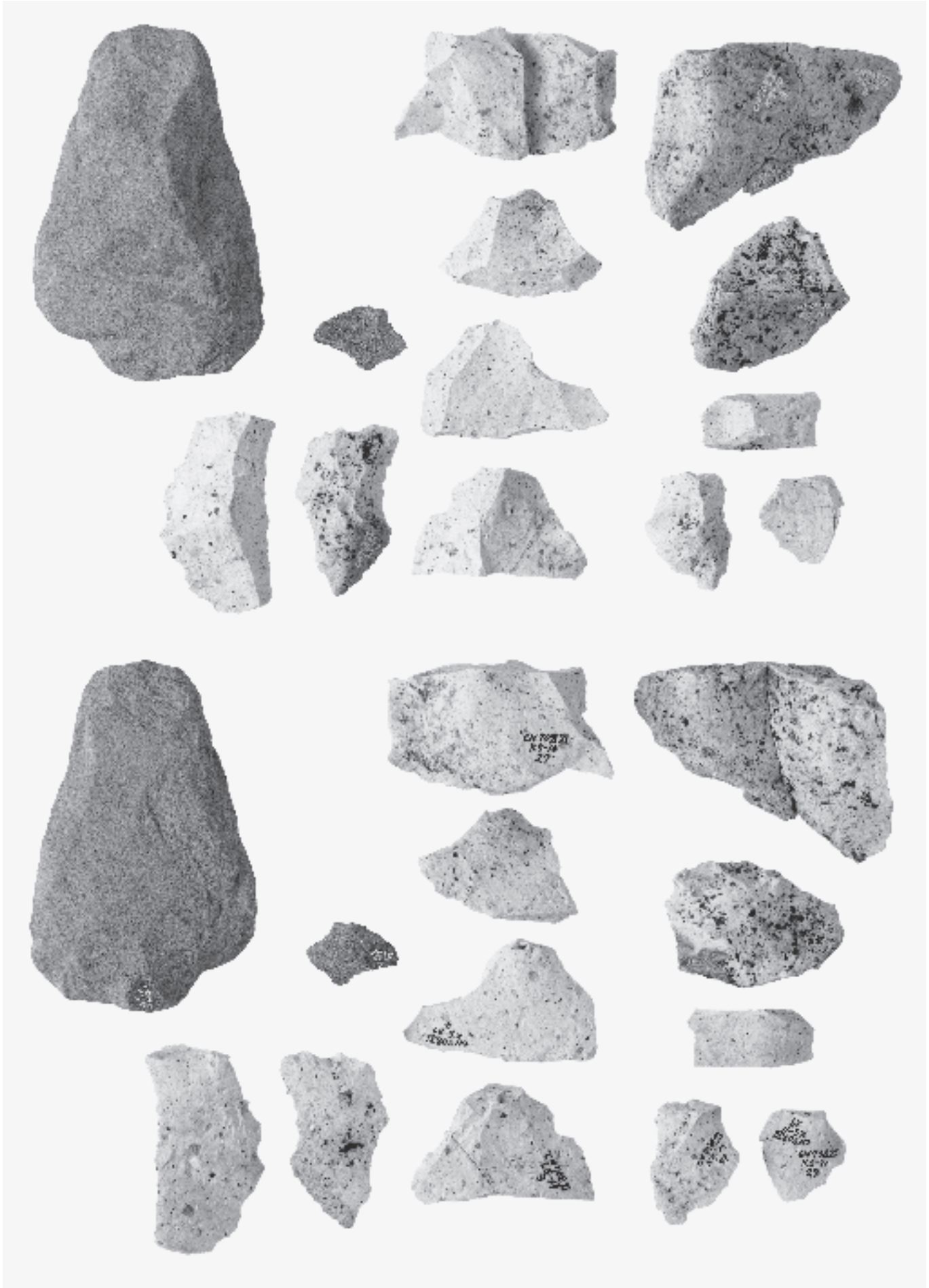
第９－１地点（上）、第９－２地点（中）、第９－３地点（下）出土石器



第９－４A地点（上）、第９－４B地点（下）出土石器

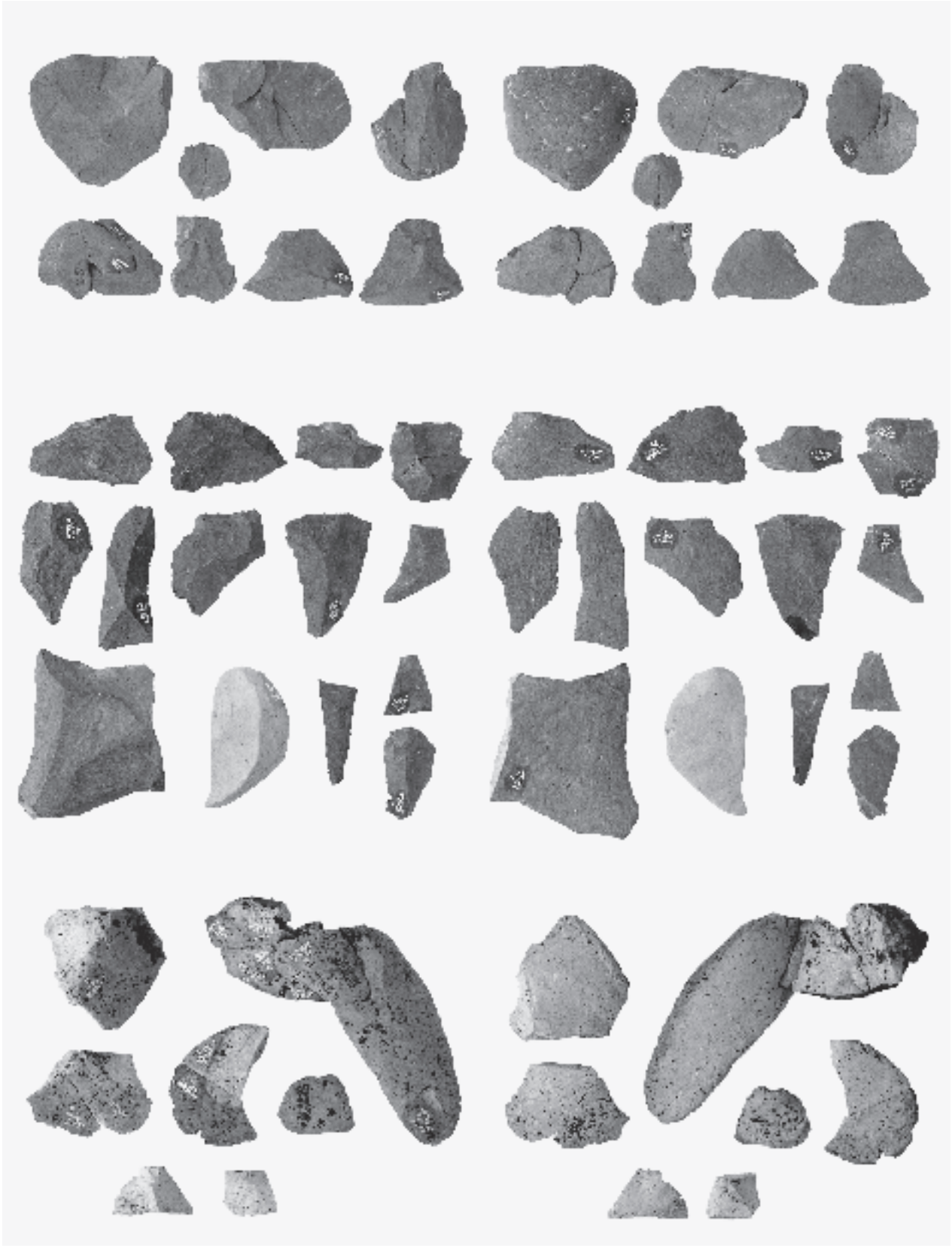


第９－５A地点（上）、第９－５B地点（下）出土石器

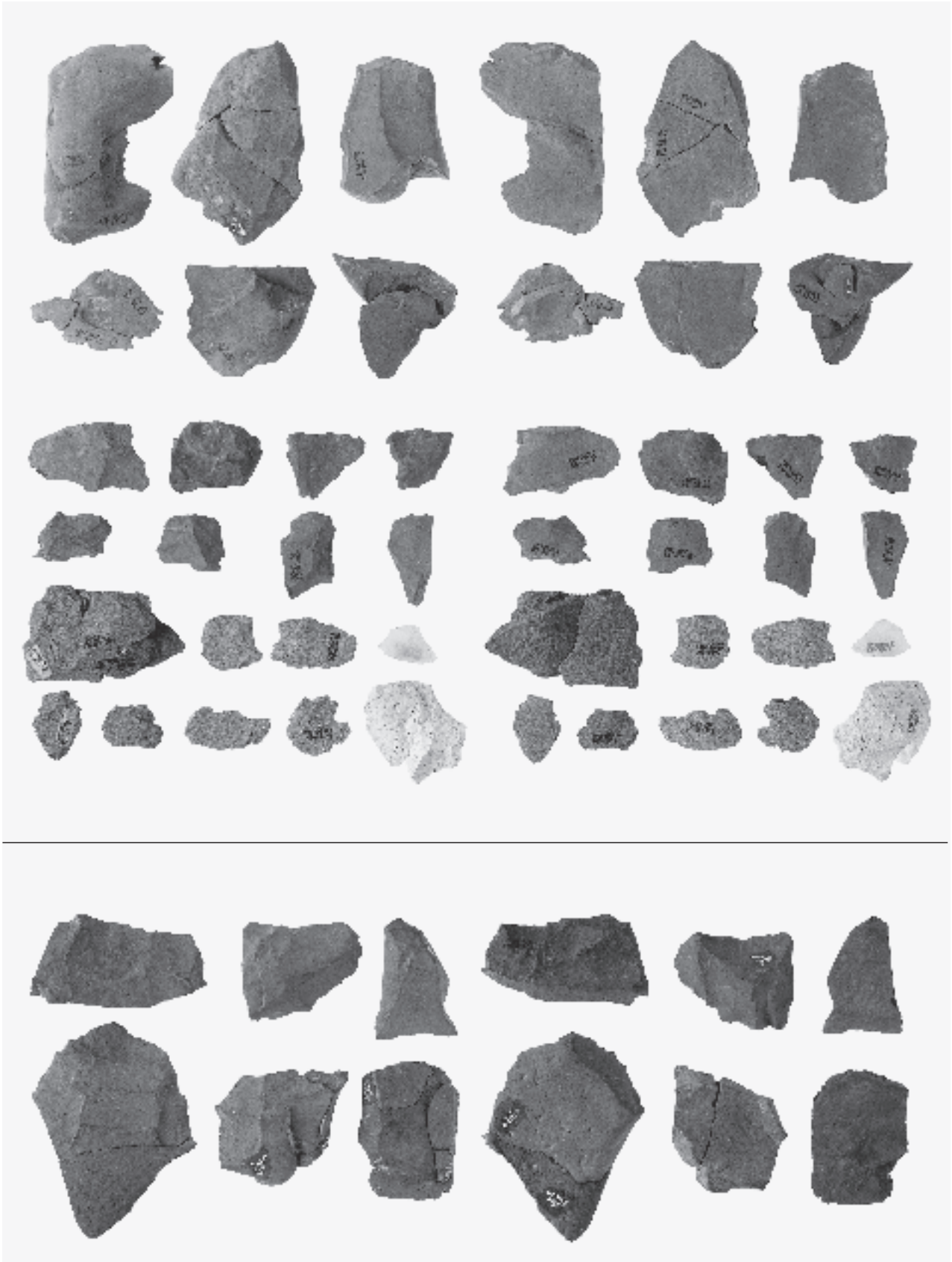


第９－６地点出土石器（１）

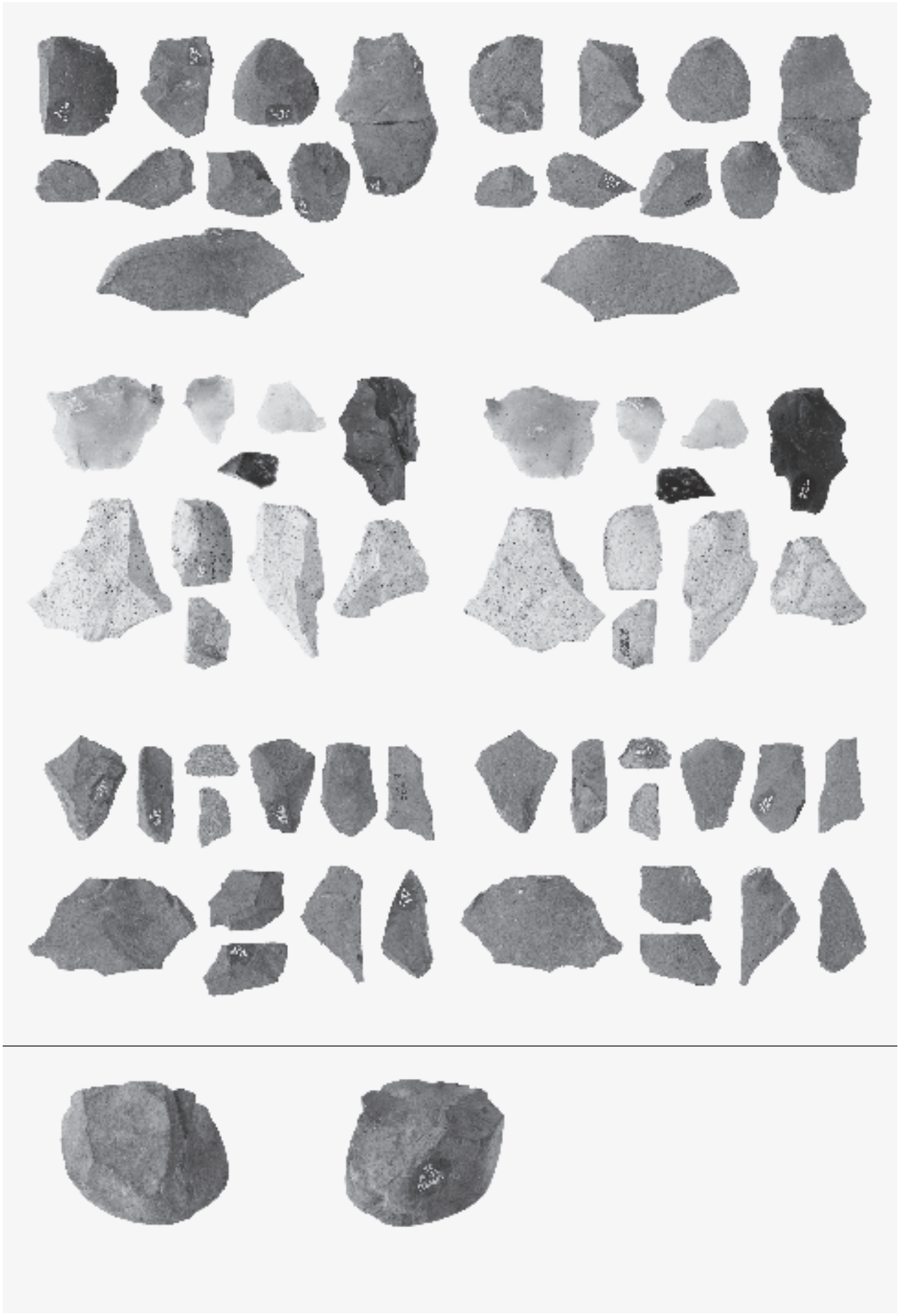
第９－６地点出土石器（２）



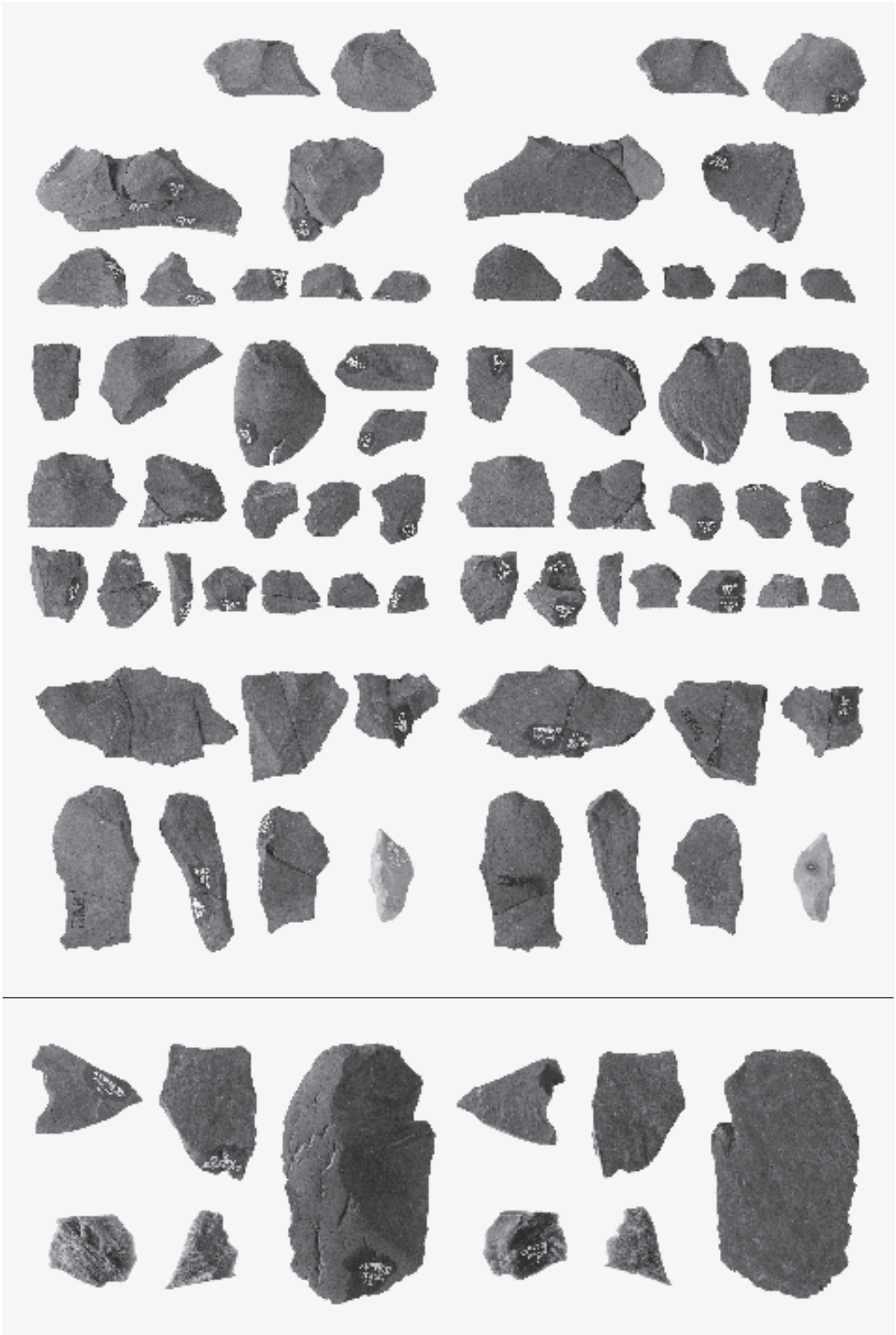
第９－７地点出土石器



第９－８A地点（上）、第９－８B地点（１）（下）出土石器

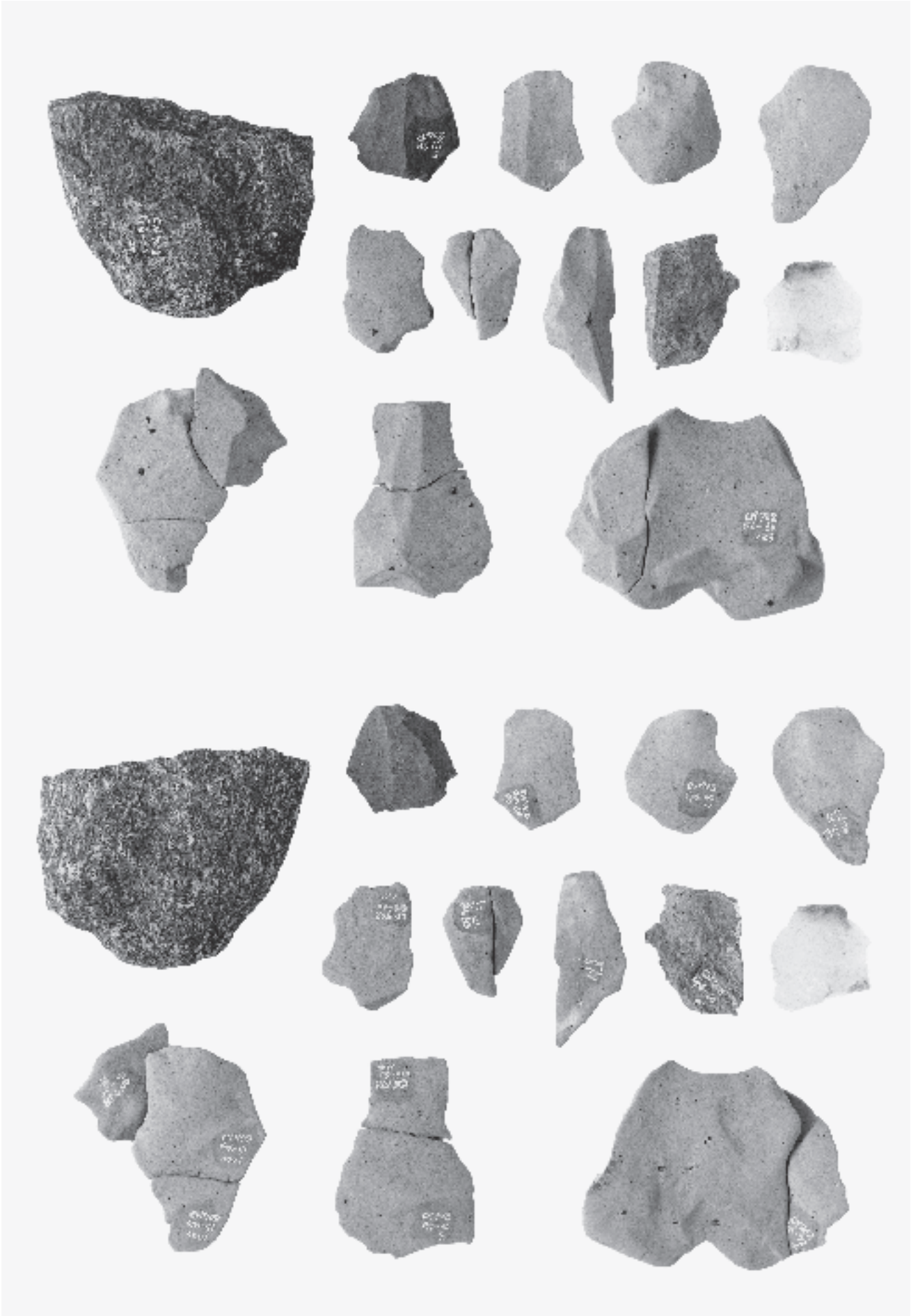


第９－８B地点（２）（上）、第９－９地点（１）（下）出土石器

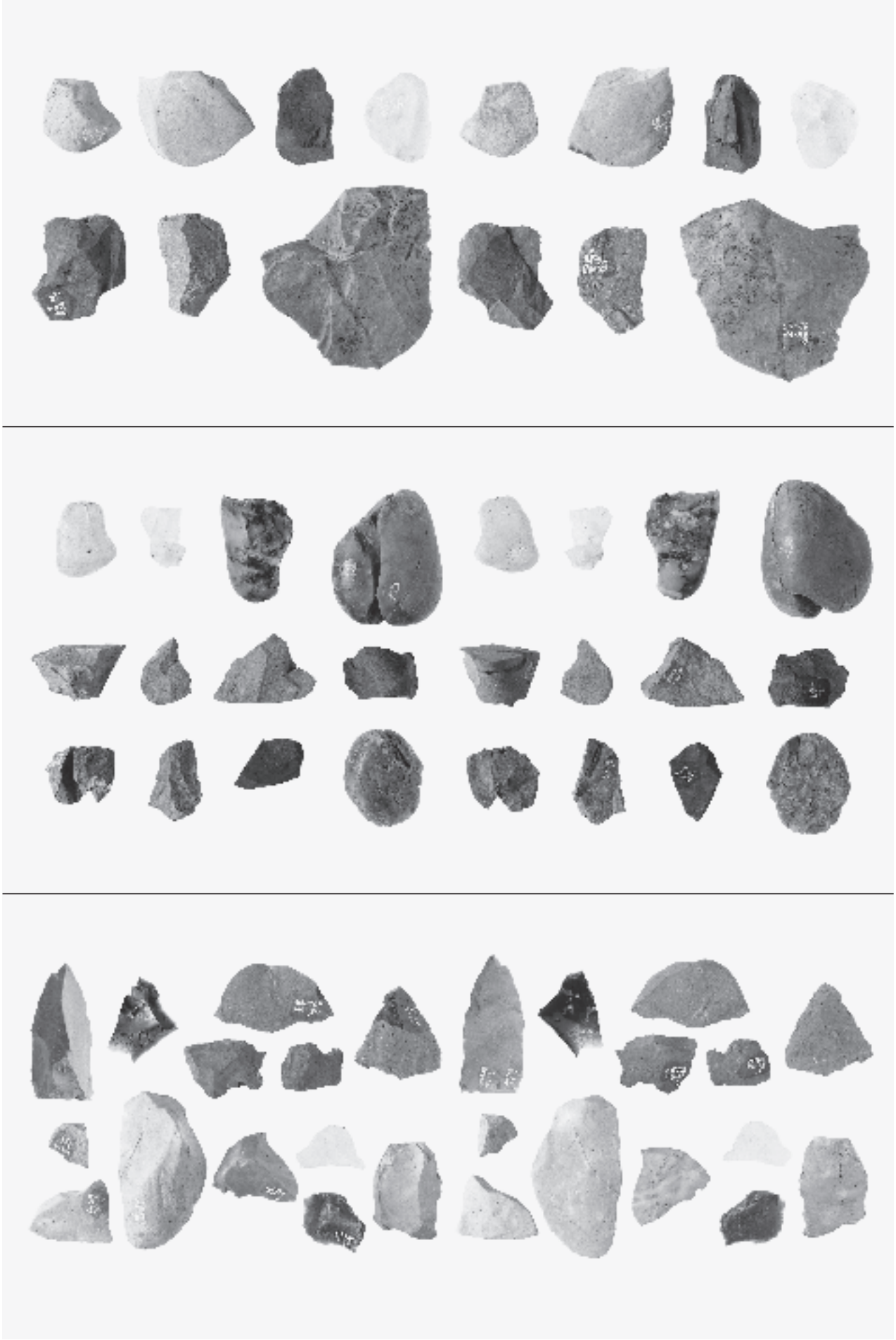


第９－９地点（２）（上）、第９－10A地点（下）出土石器

第９－10B地点出土石器

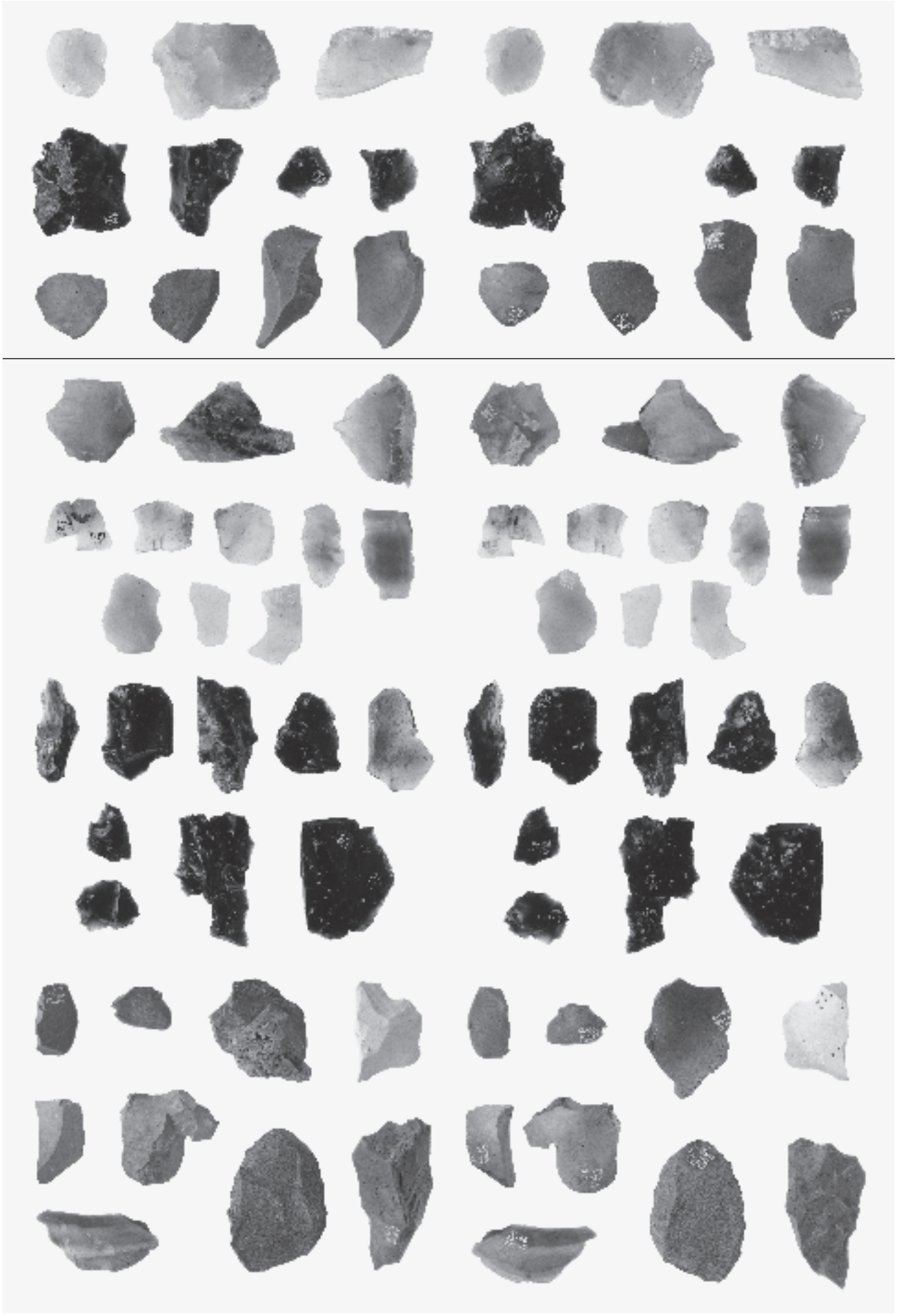


第10－１地点出土石器

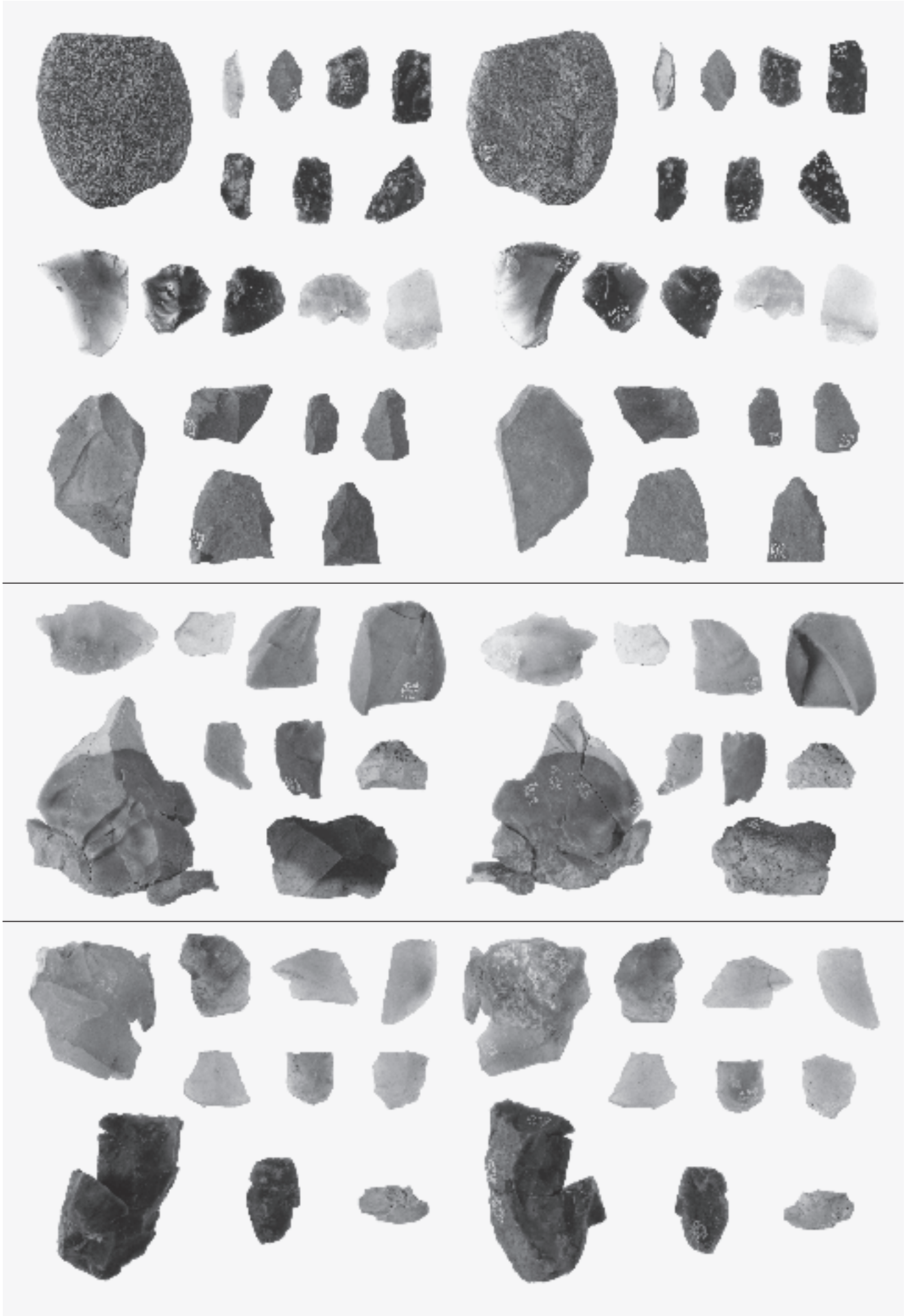


第10－２地点（上）、第10－３地点（中）、第10－４地点（下）出土石器

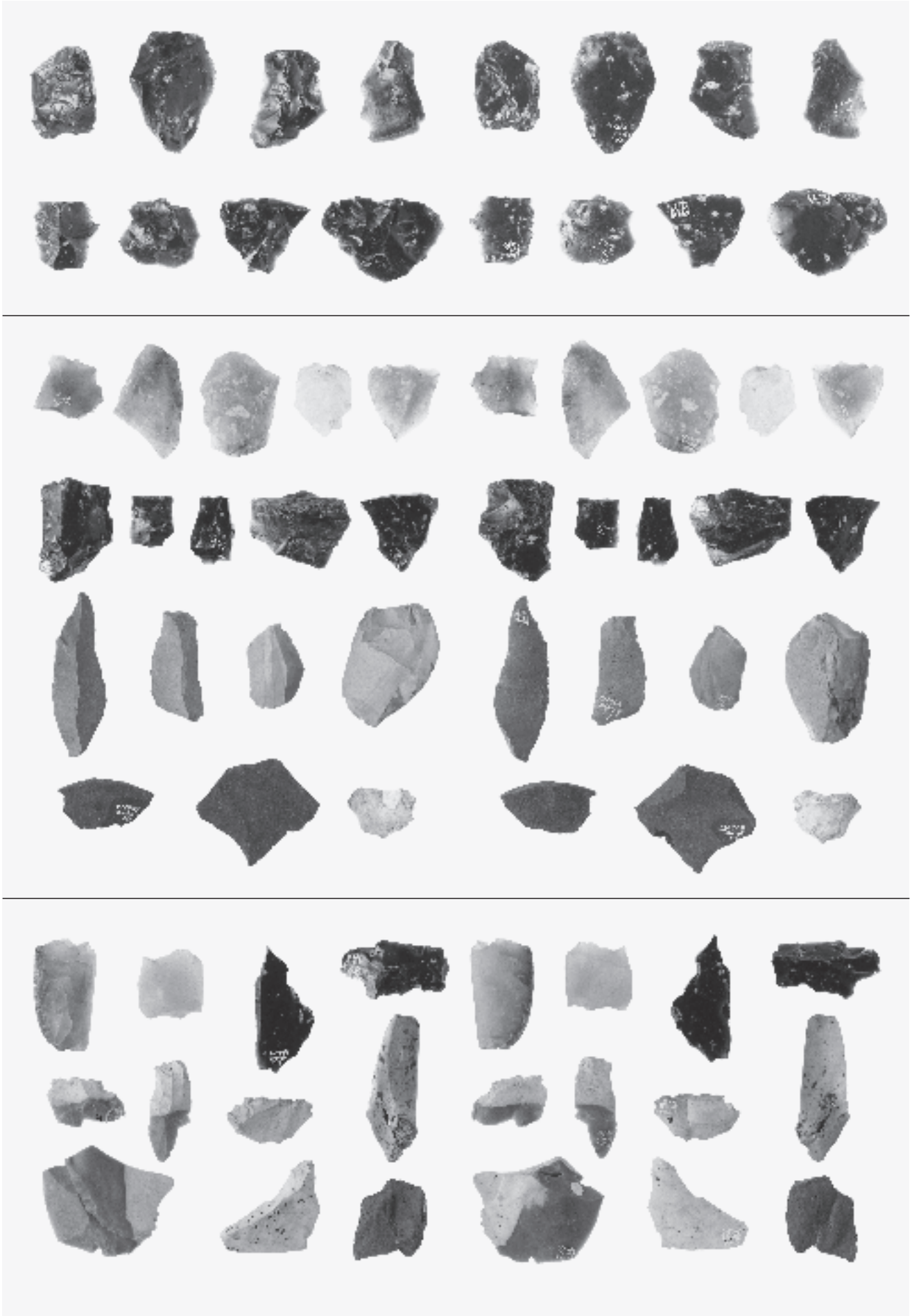
第11－１地点出土石器



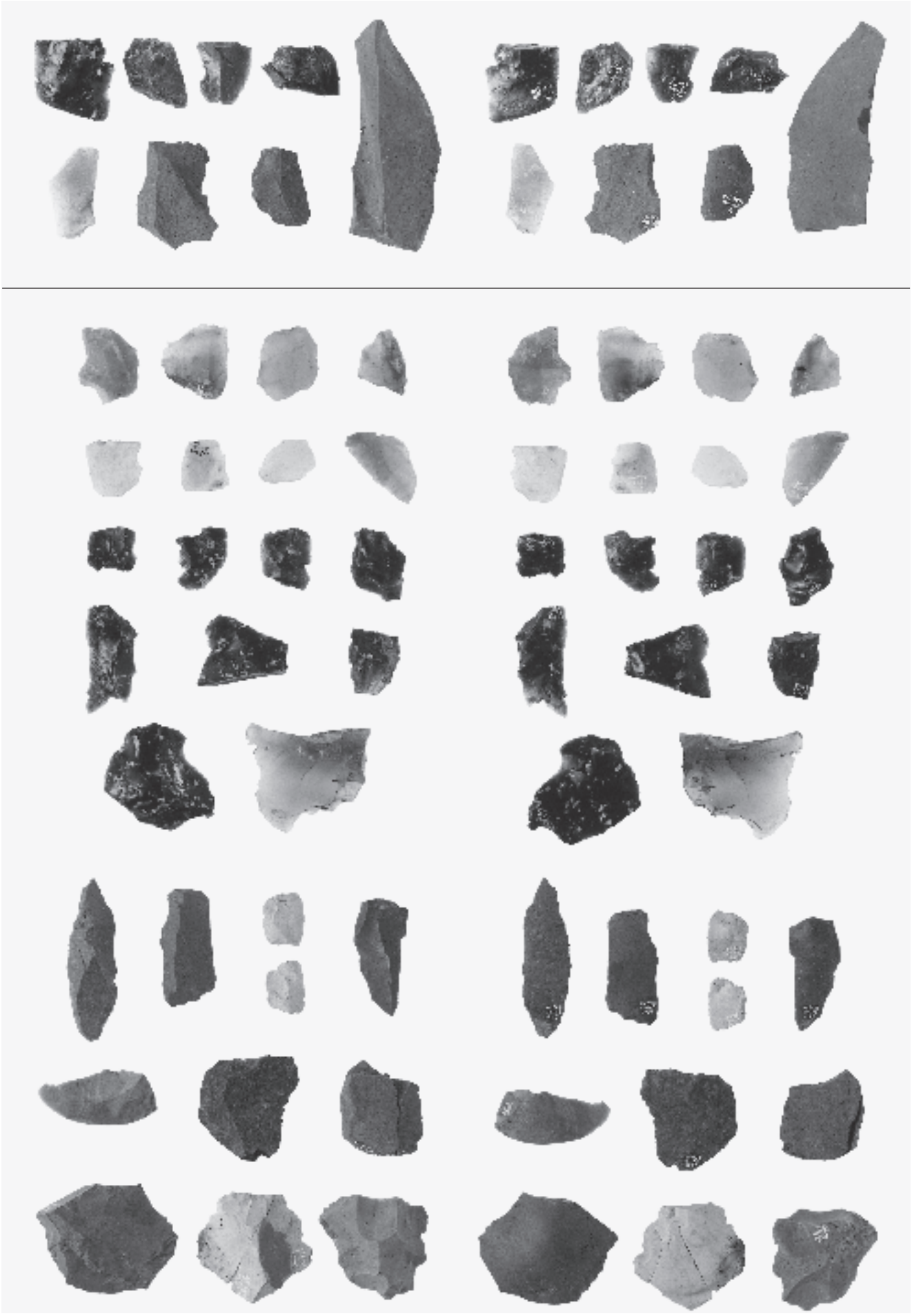
第11－２地点（上）、第11－３地点（下）出土石器



第11－4地点（上）、第11－5地点（中）、第11－6地点（1）（下）出土石器

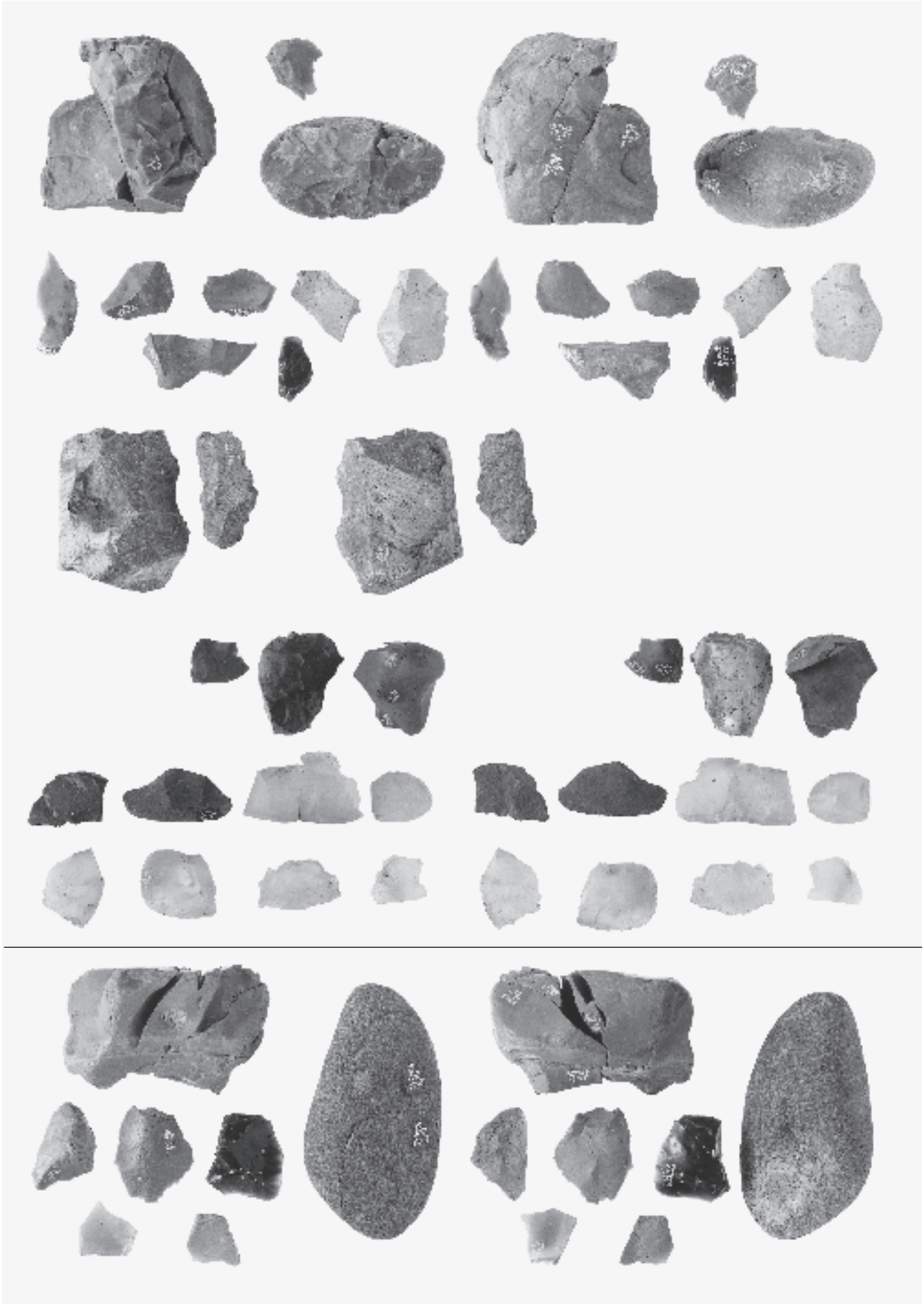


第11－6地点（2）（上）、第11－7地点（中）、第11－8地点（下）出土石器

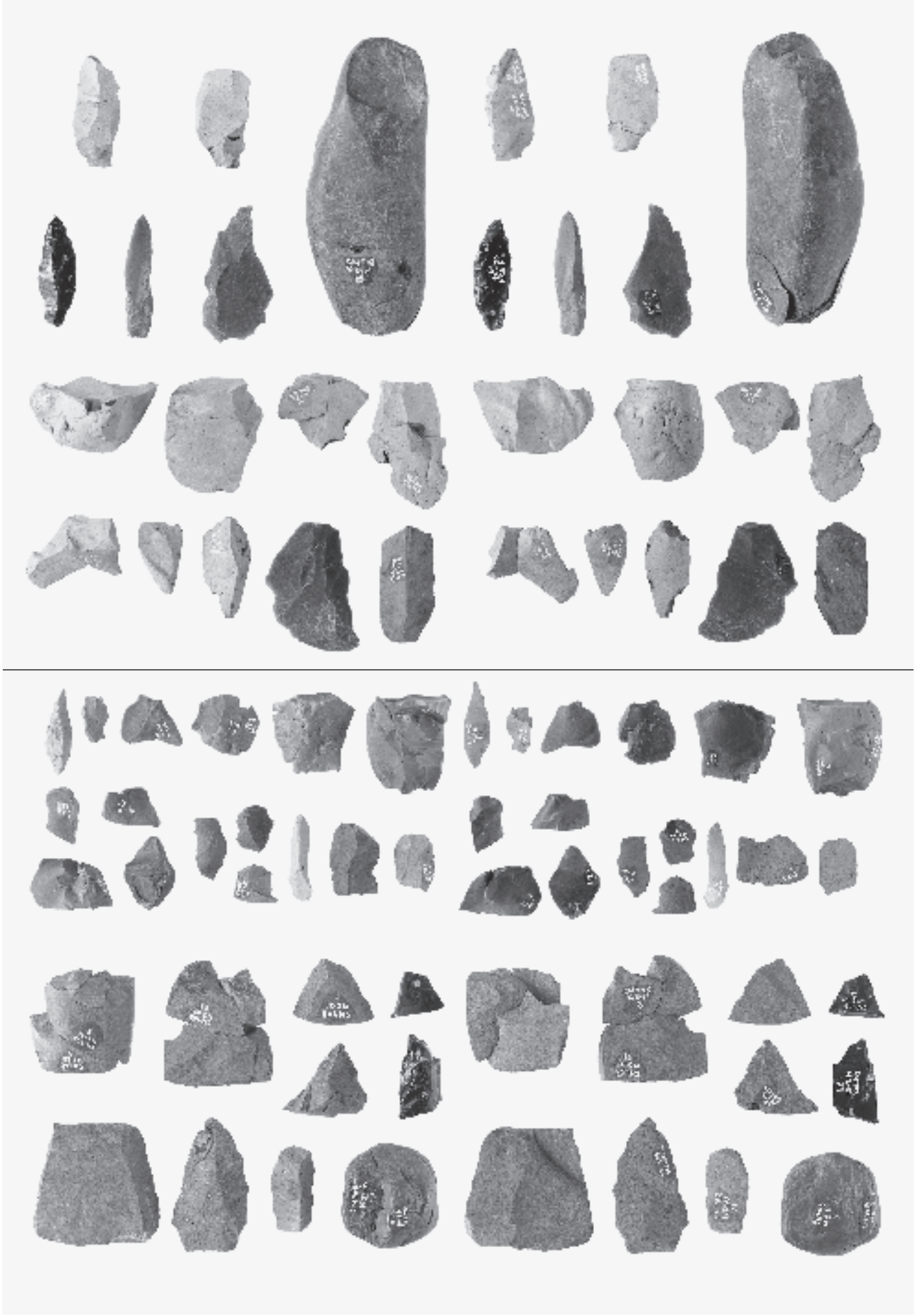


第11－9地点（上）、第11－10地点（下）出土石器

第11－11地点（上）、第12地点（下）出土石器

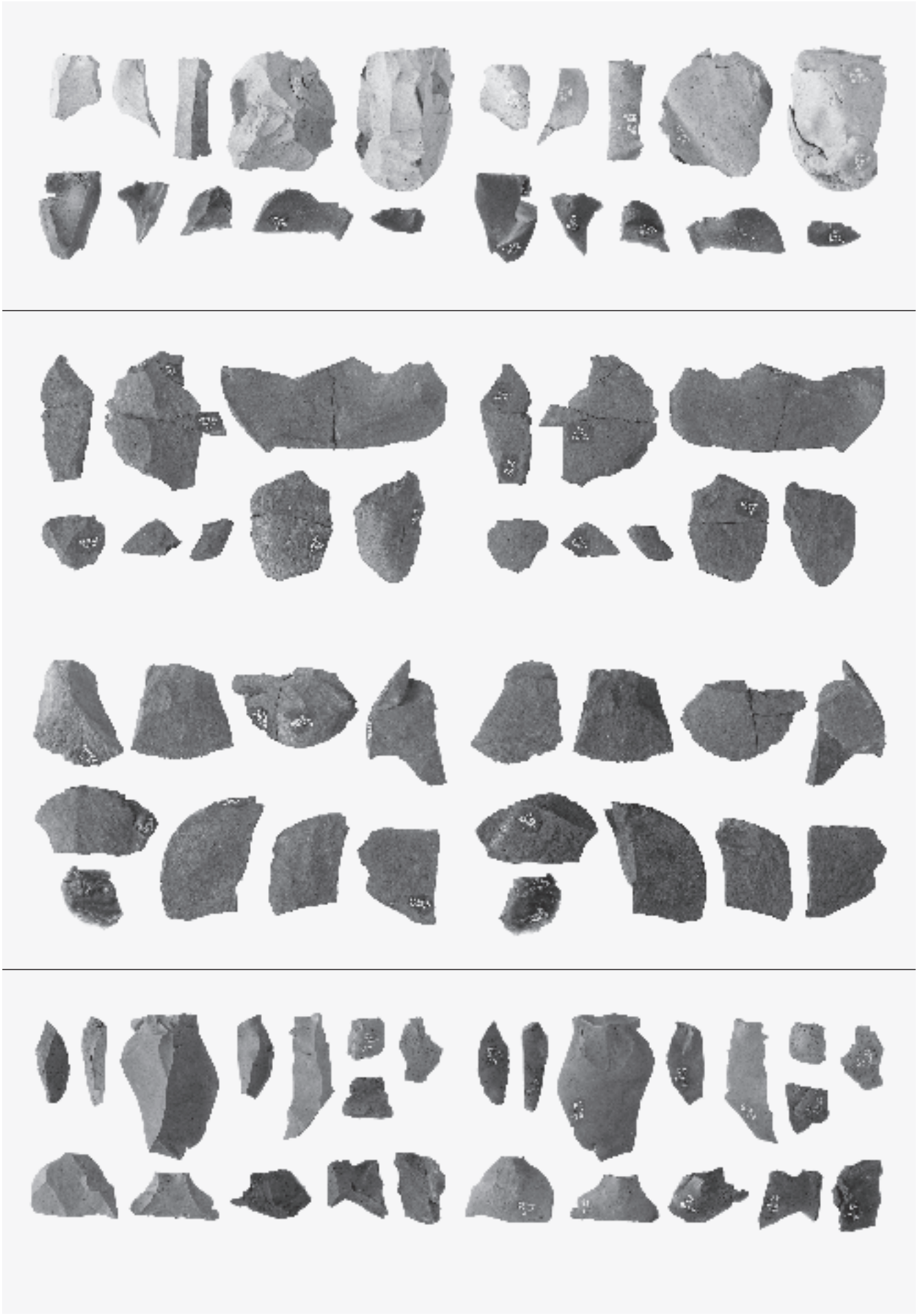


第13－１地点（上）、第13－２地点（下）出土石器

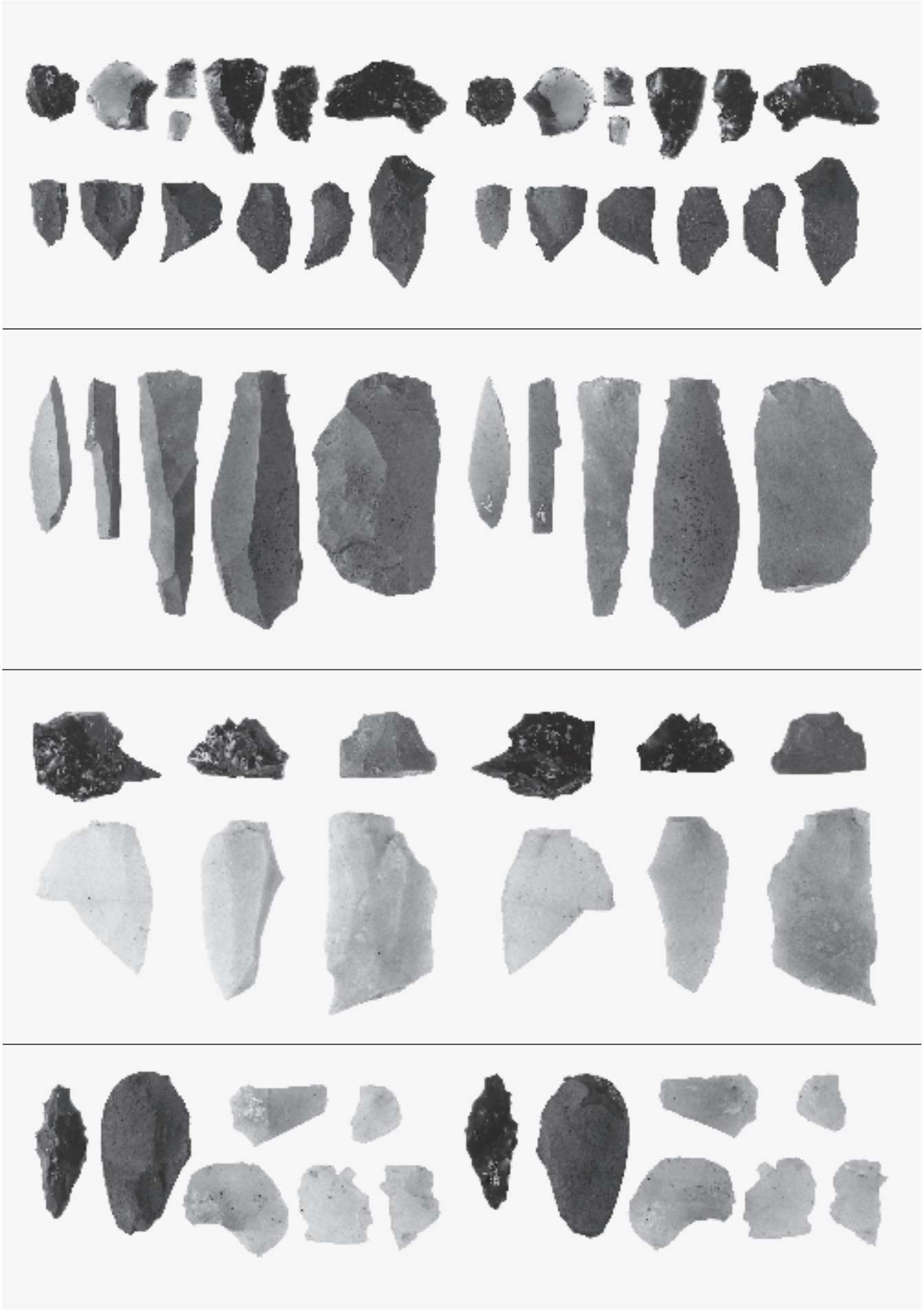


第14－１地点（上）、第14－２地点（下）出土石器

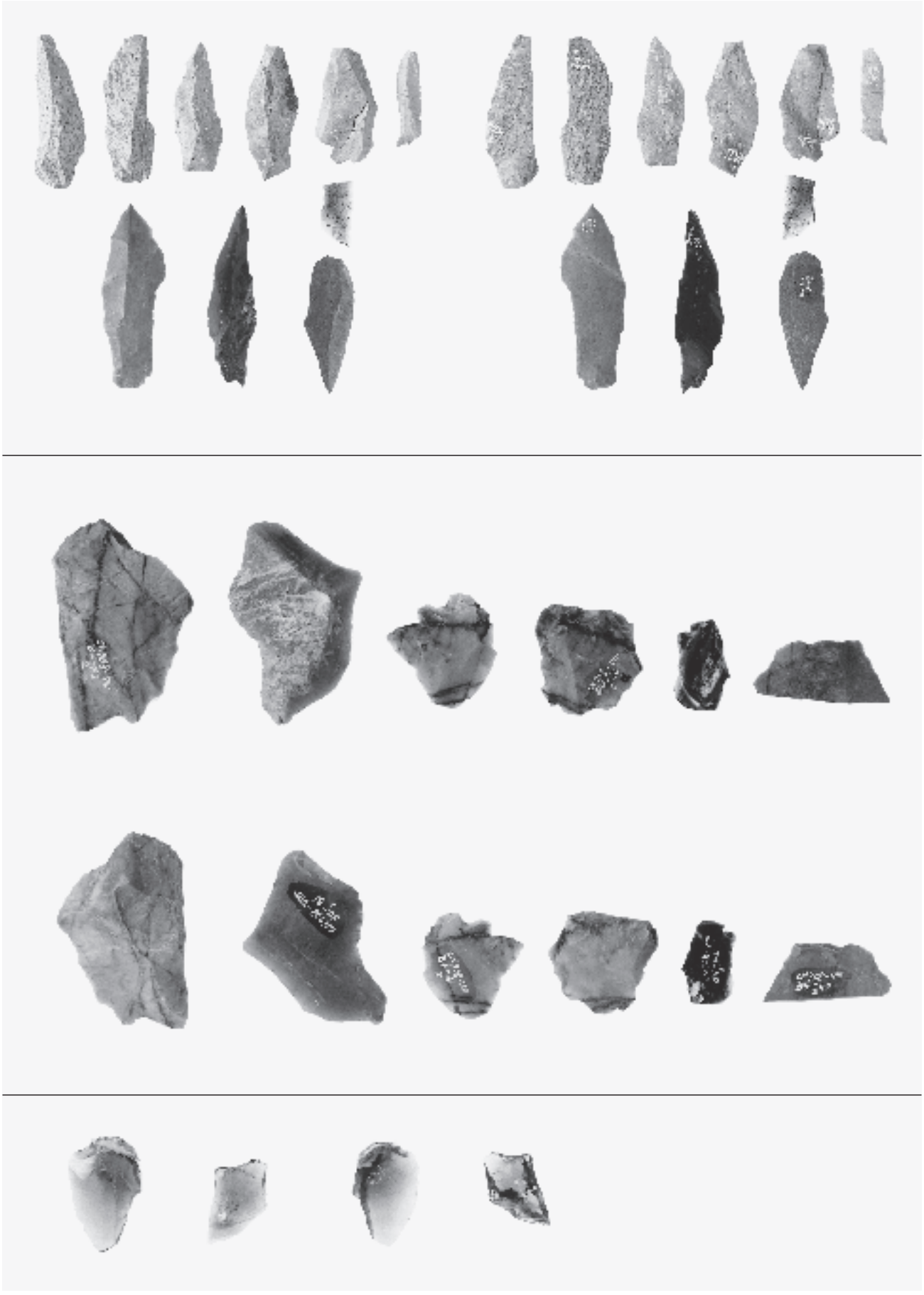
第14－３地点出土石器



第14－4地点（上）、第15地点（中）、第16地点（下）出土石器

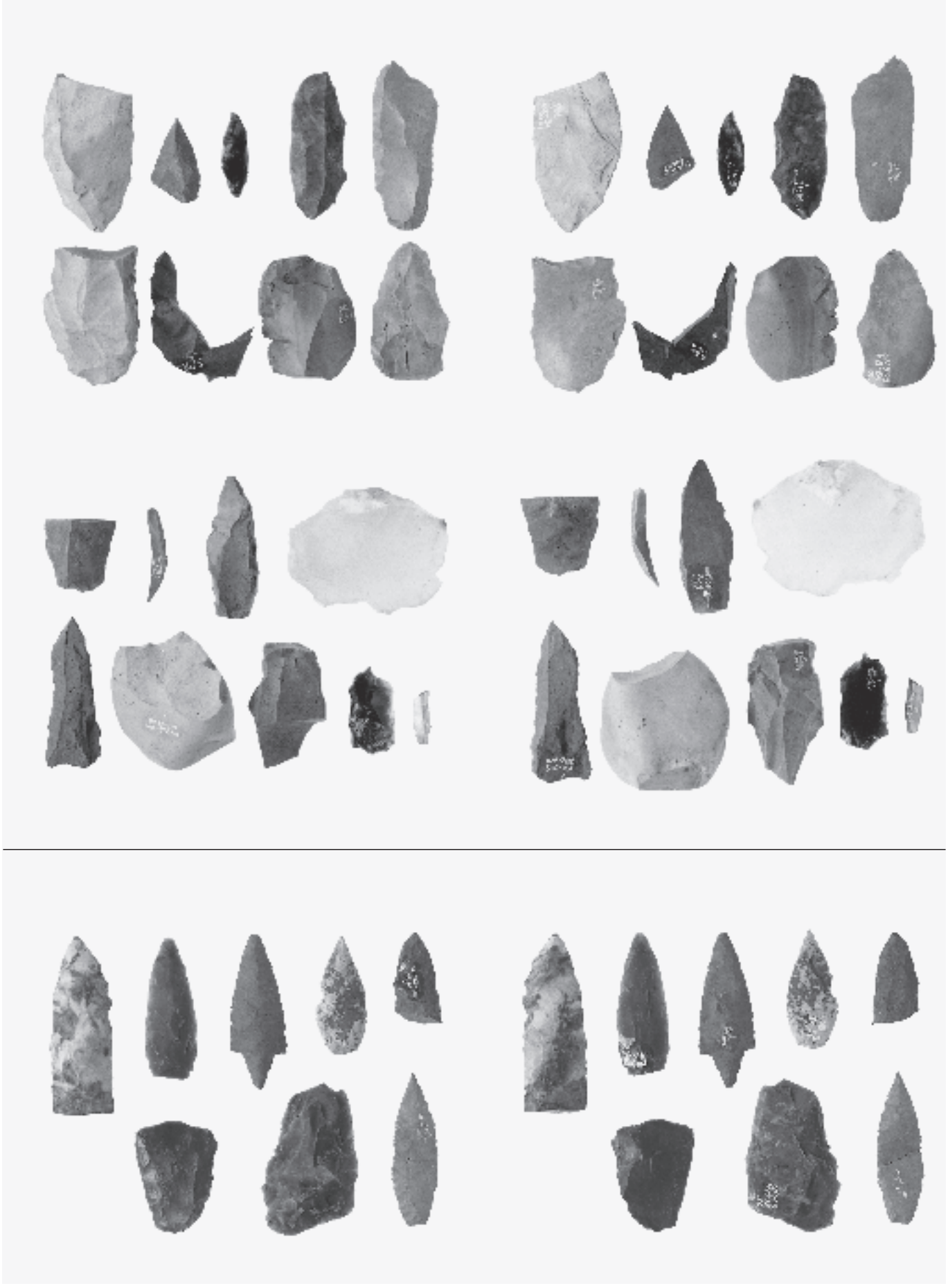


第17地点（上）、第18地点（中）、第19地点（下）、第20地点（最下）出土石器



第21地点（上）、第22地点（中）、第23地点（下）出土石器

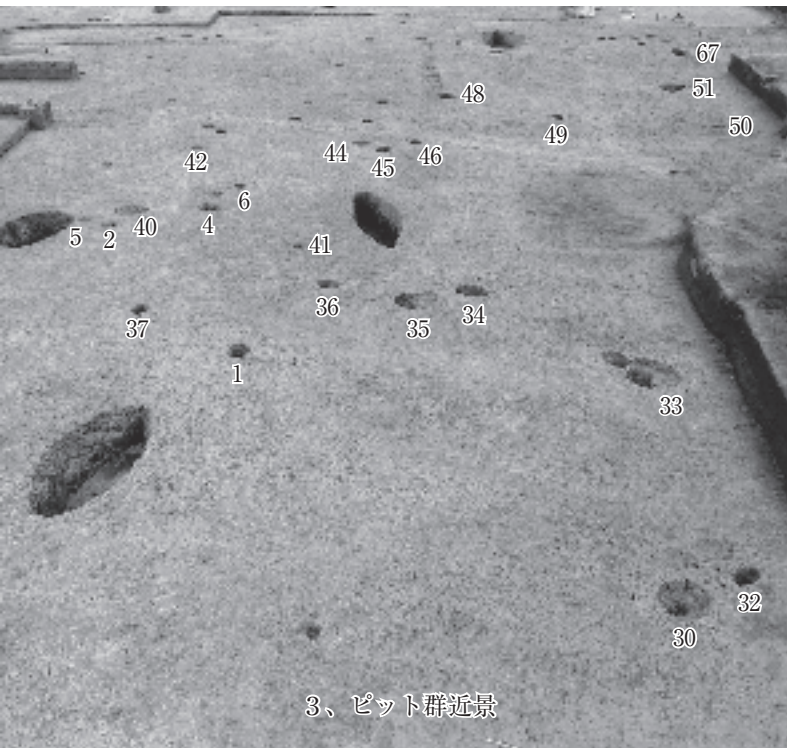
図版 66



単独出土の石器群（上）、縄文草創期の石器群（下）

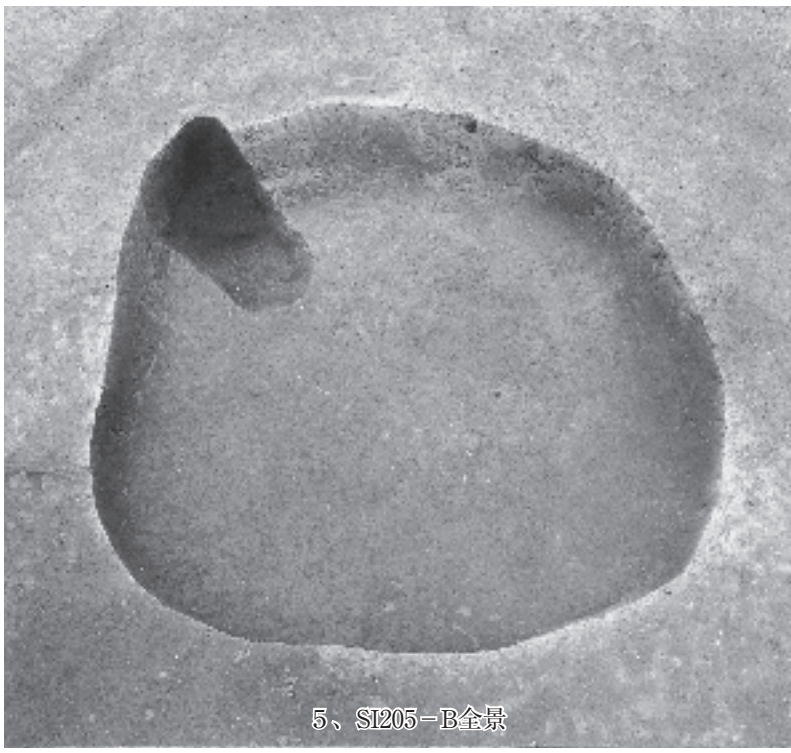
1、縄文土器包含層（M10区周辺）

2、縄文土器包含層（E３区周辺）



3、ピット群近景

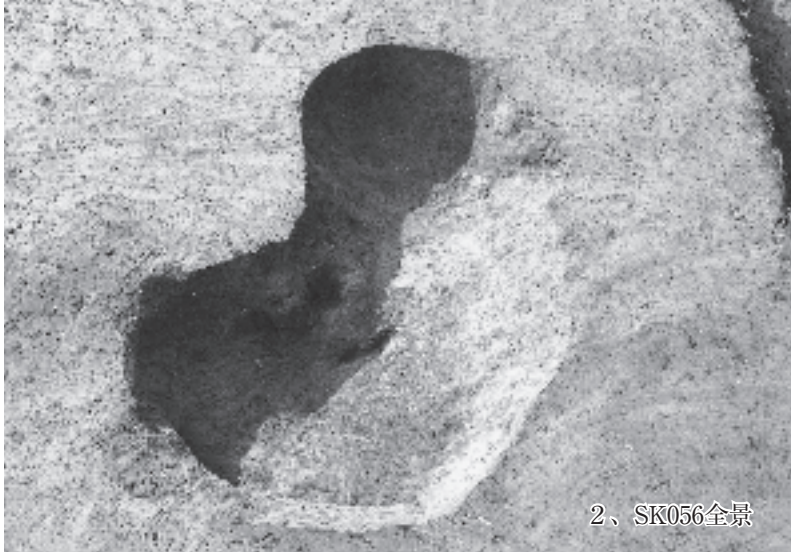
4、SI113全景



5、SI205－B全景

6、SI328全景

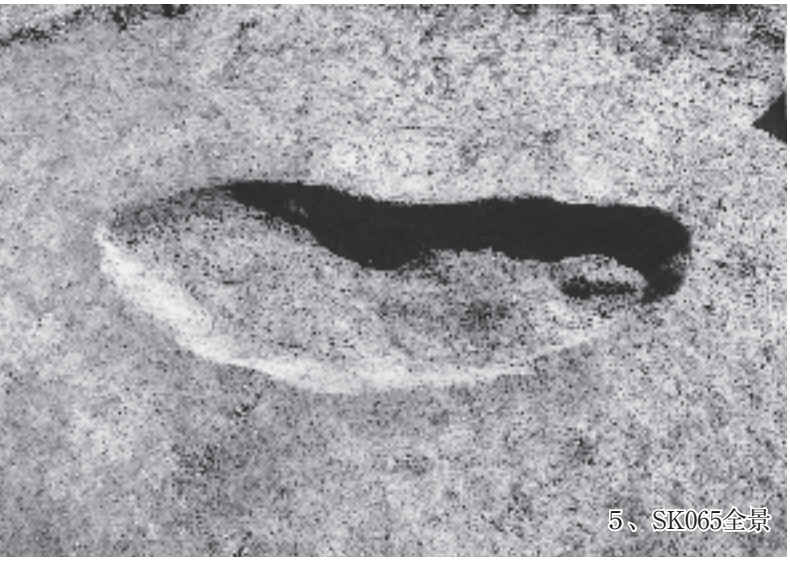
1、SI373全景



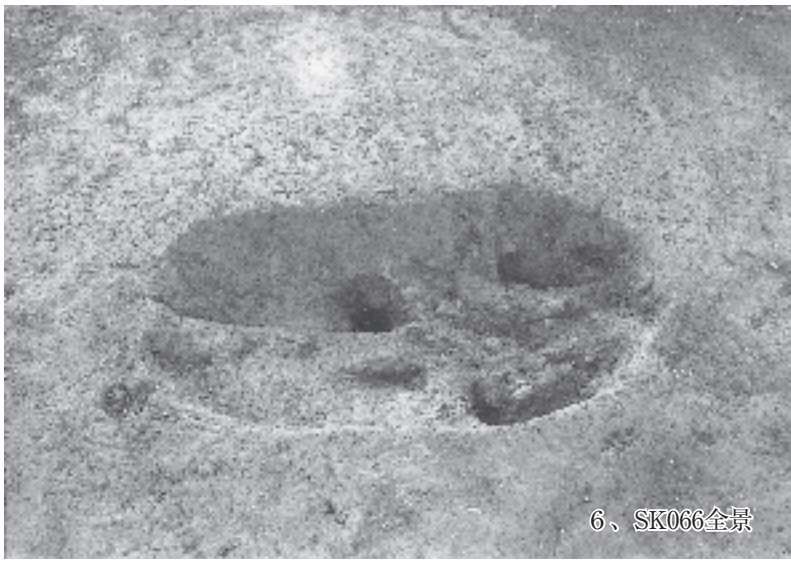
2、SK056全景

3、SK058全景

4、SK059全景



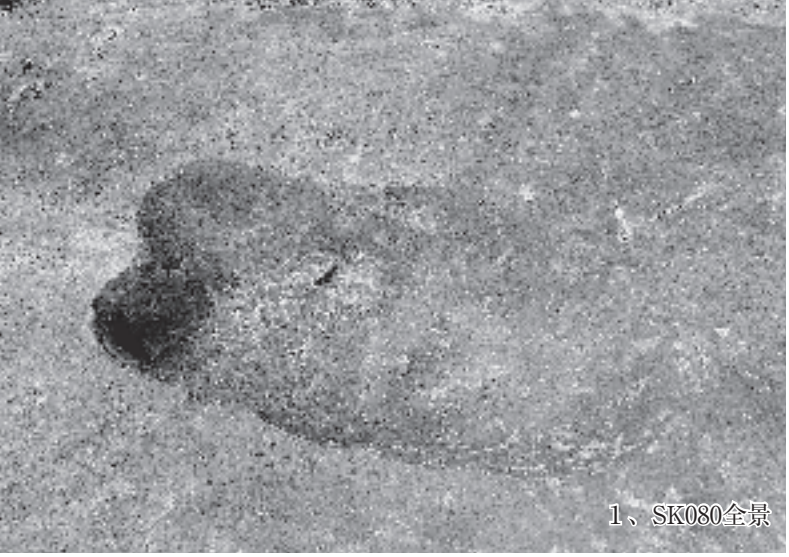
5、SK065全景

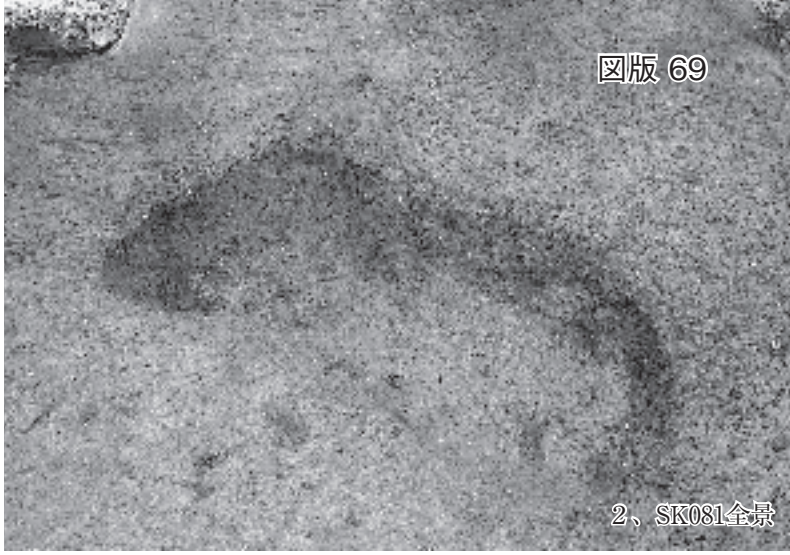


6、SK066全景

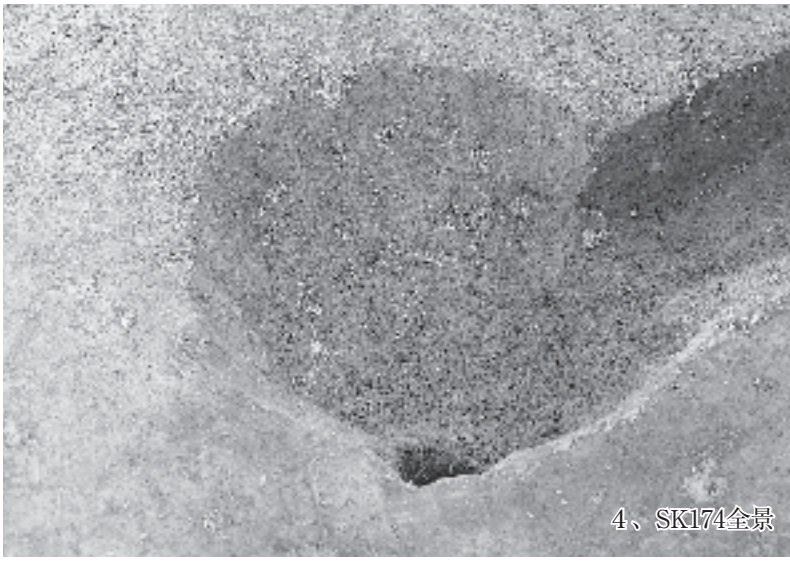
7、SK067·068全景

8、SK069全景

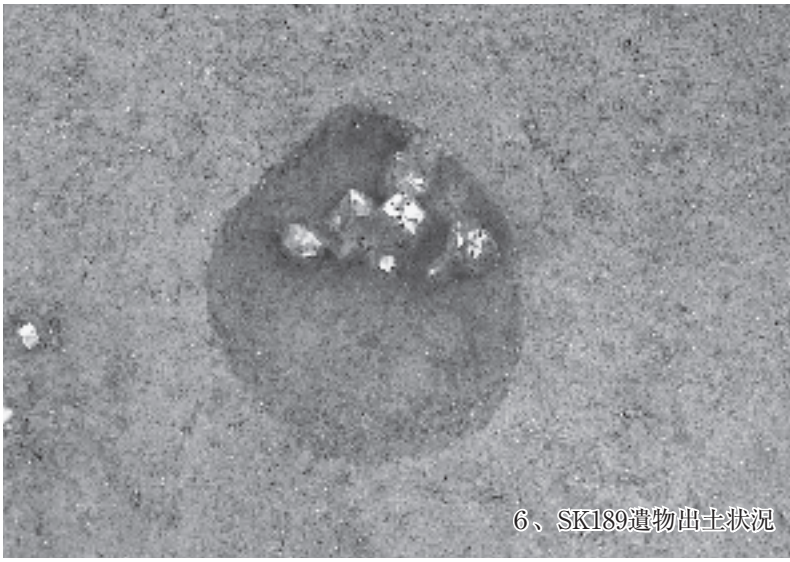

1、SK080全景


2、SK081全景

3、SK168全景

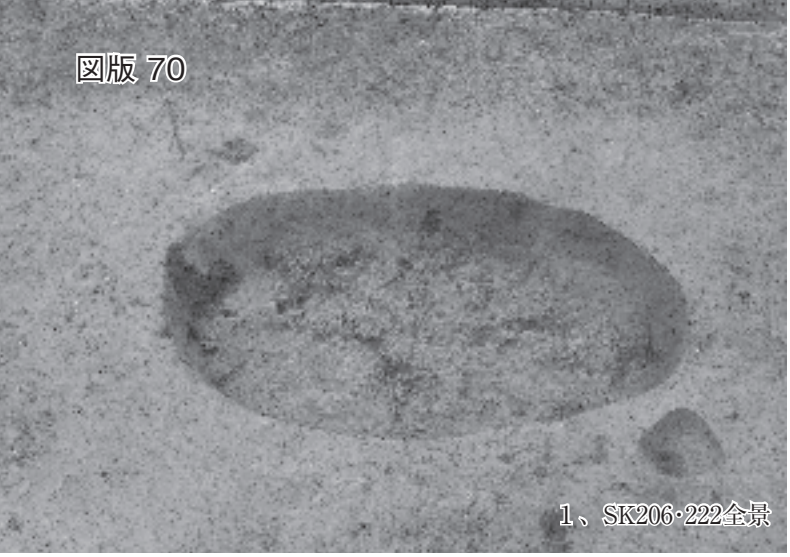

4、SK174全景

5、SK189全景

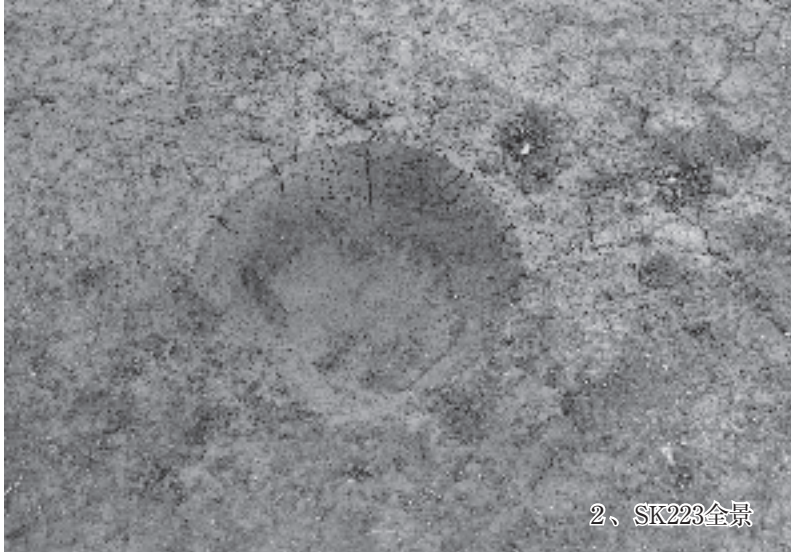

6、SK189遺物出土状況

7、SK195全景

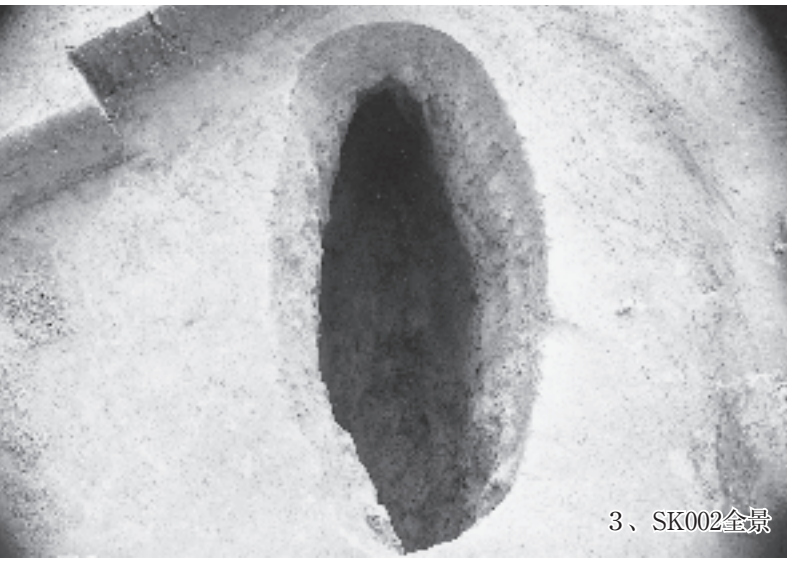
8、SK197·198全景



1、SK206·222全景

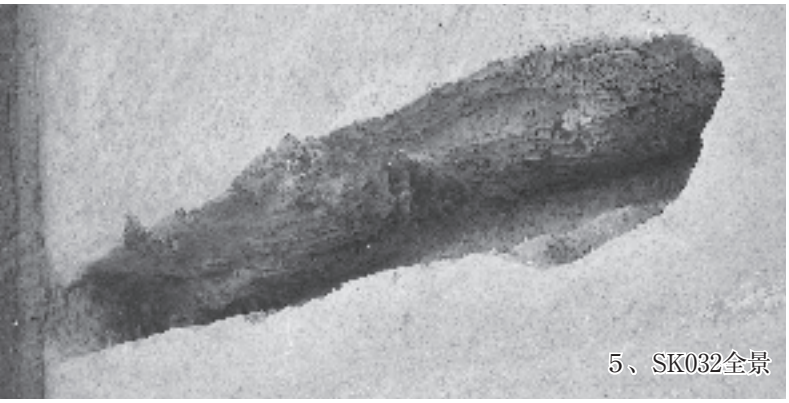


2、SK223全景

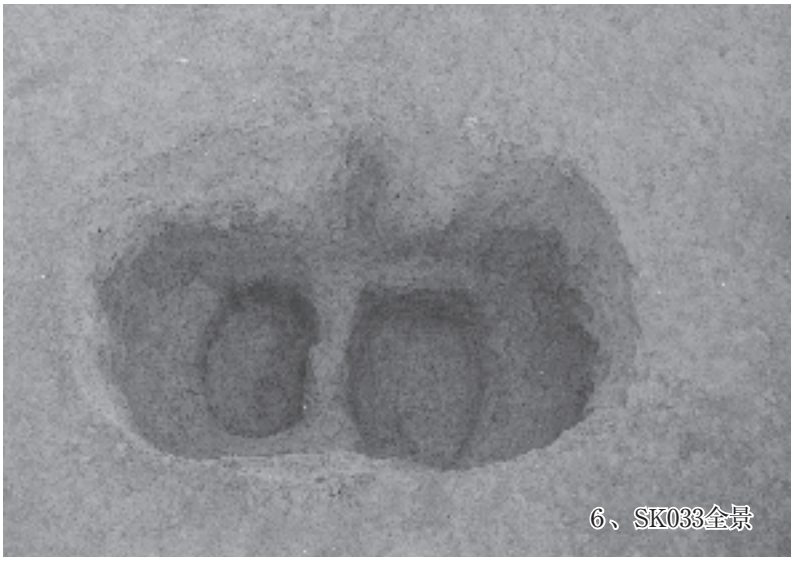


3、SK002全景

4、SK031全景



5、SK032全景



6、SK033全景

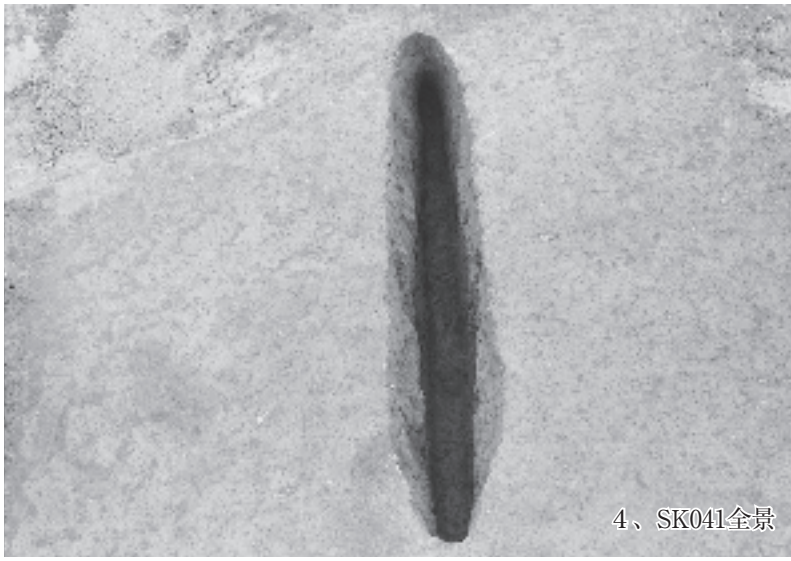
7、SK034全景

8、SK035全景

1、SK038全景

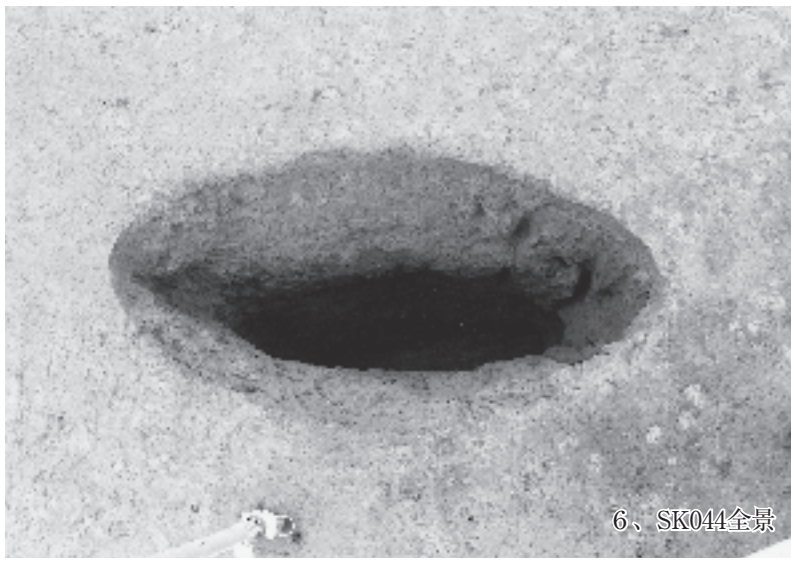
2、SK039全景

3、SK040全景

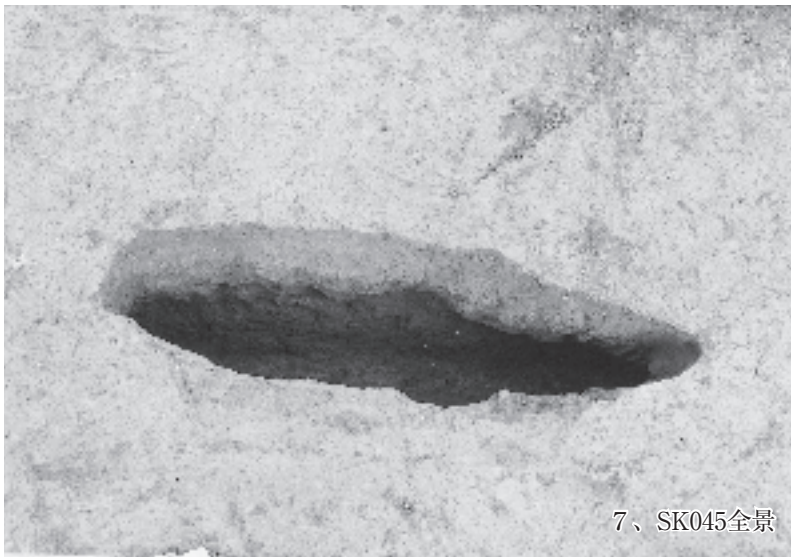


4、SK041全景

5、SK042全景

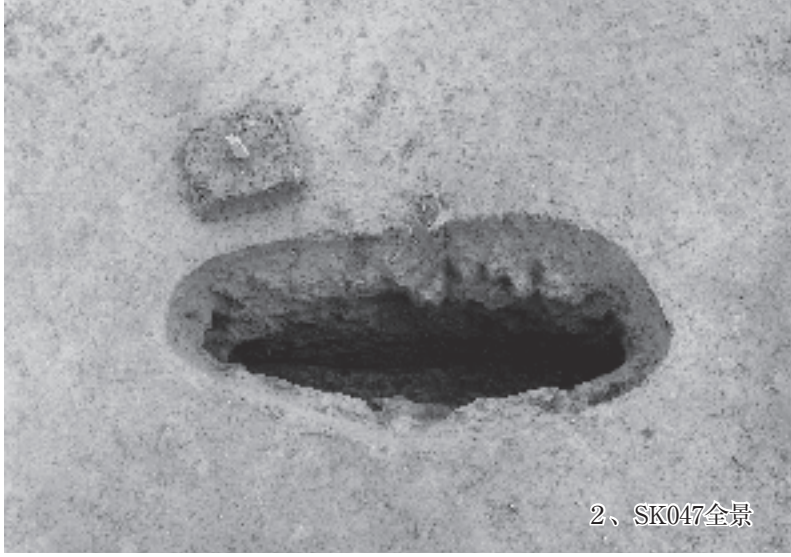


6、SK044全景



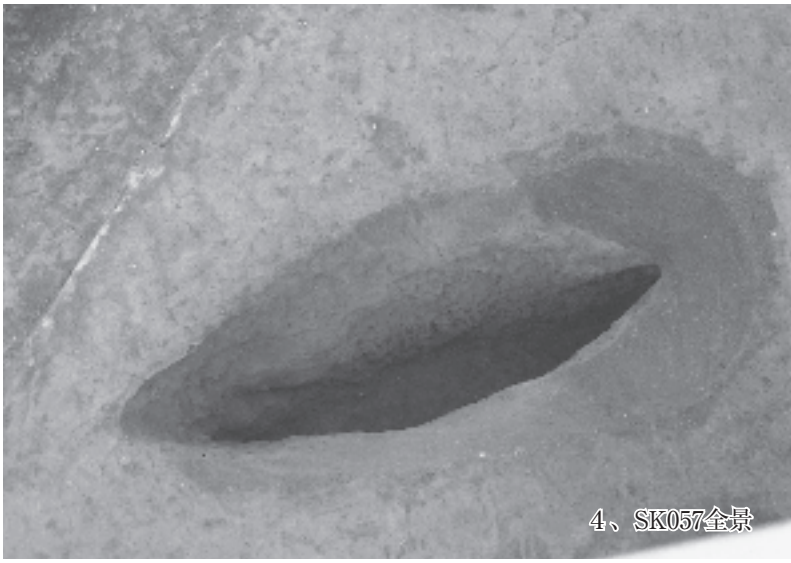
7、SK045全景

1、SK046全景

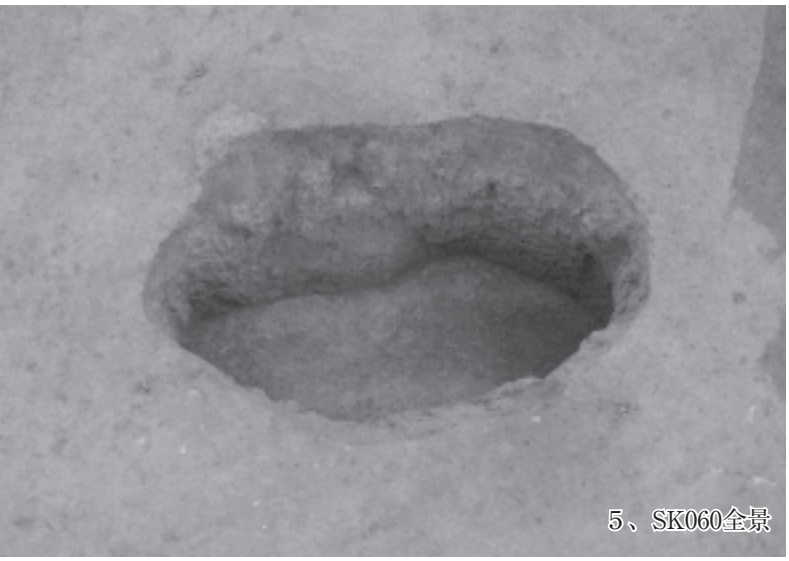


2、SK047全景

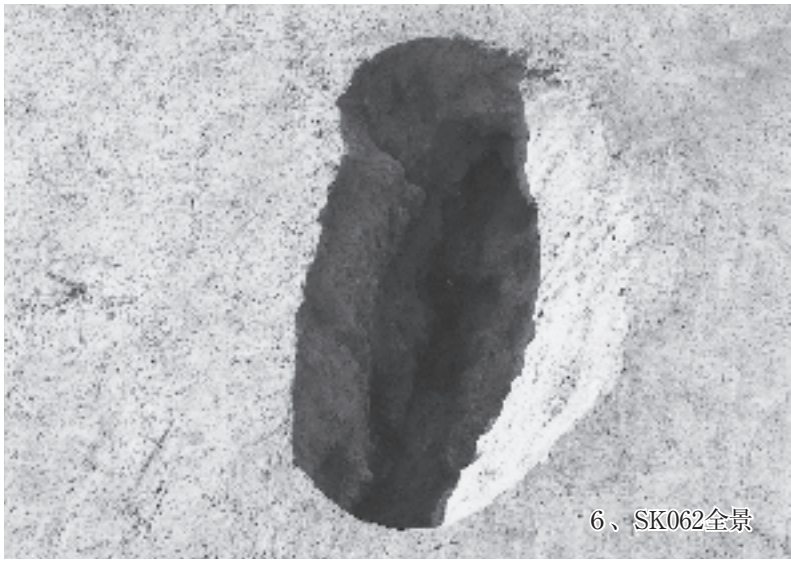
3、SK048全景



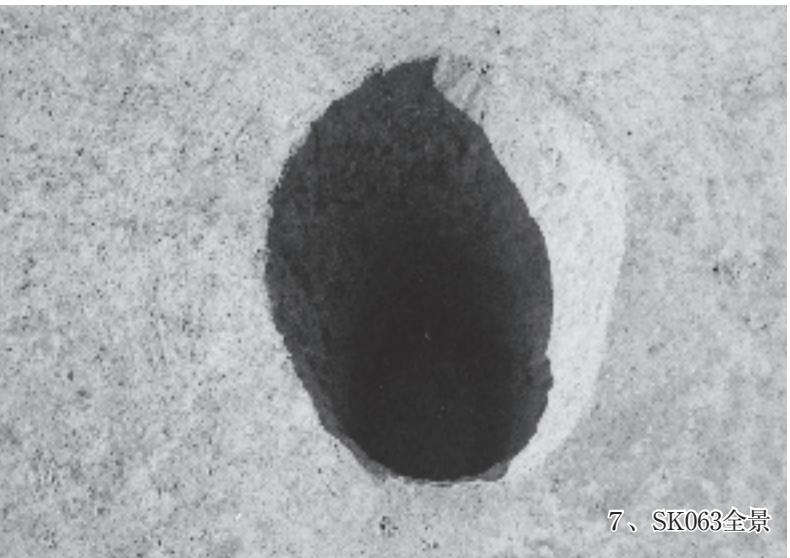
4、SK057全景



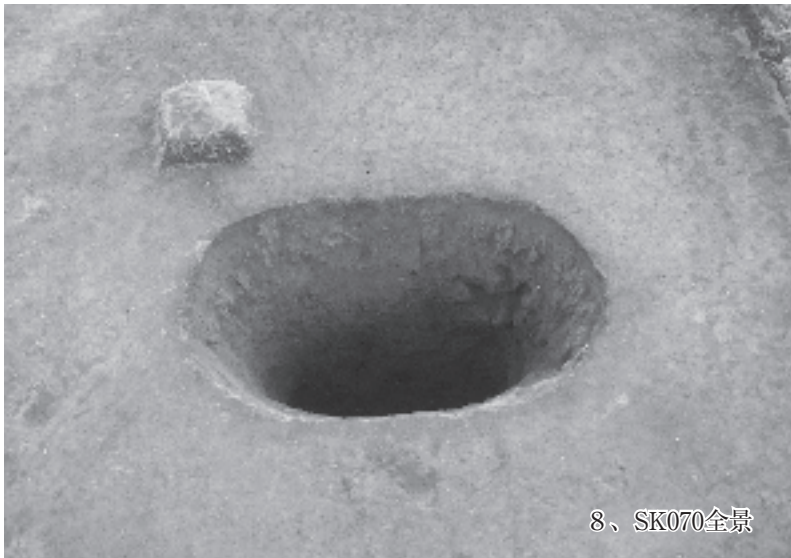
5、SK060全景



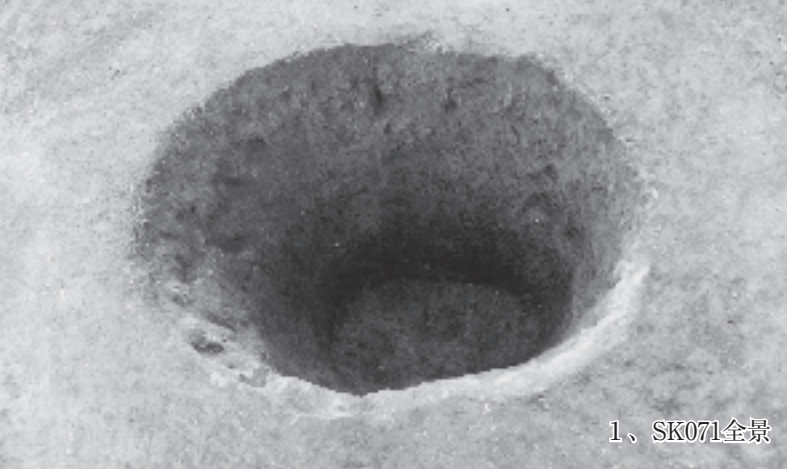
6、SK062全景



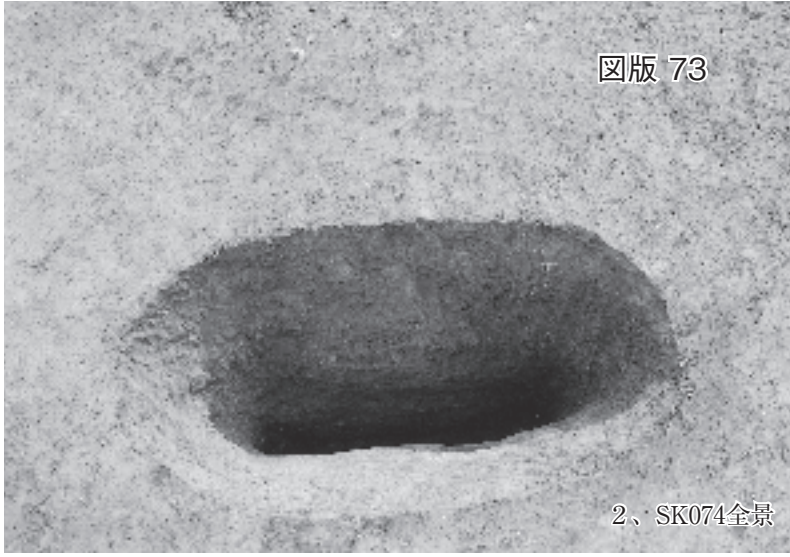
7、SK063全景



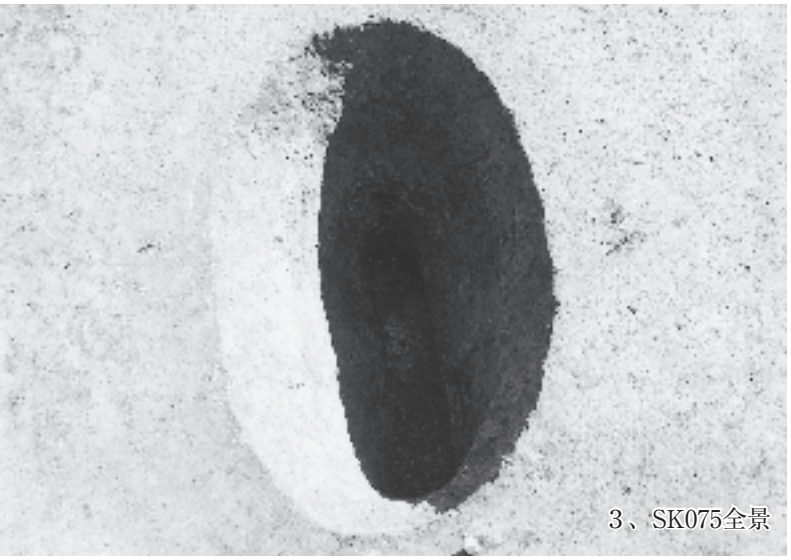
8、SK070全景



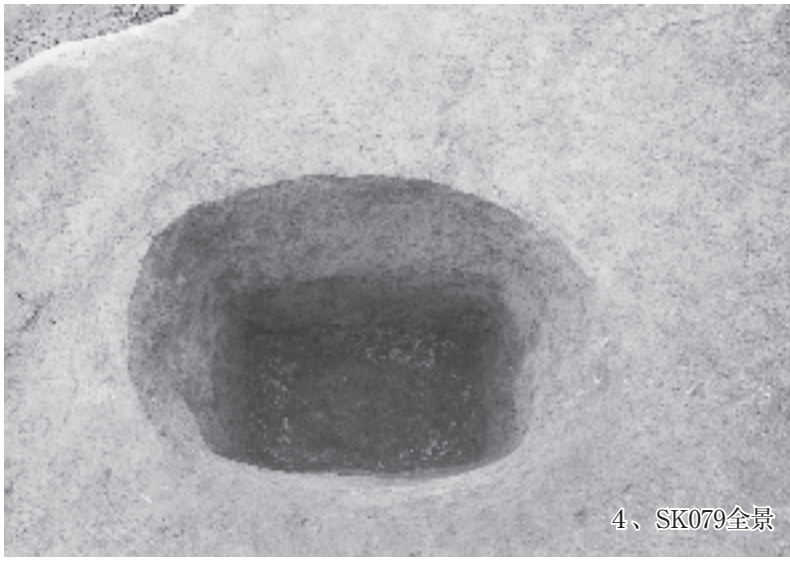
1、SK071全景



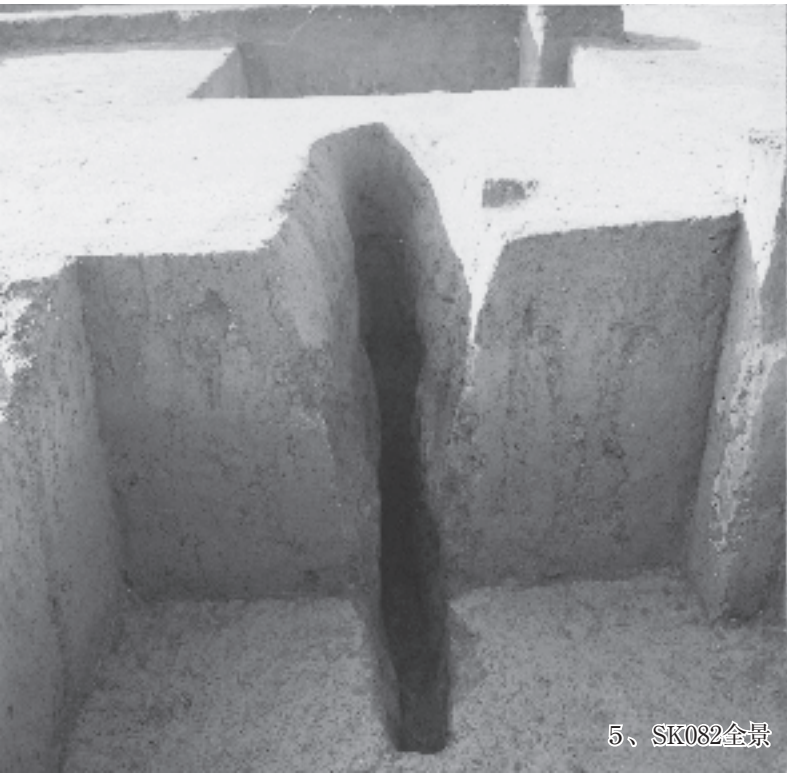
2、SK074全景



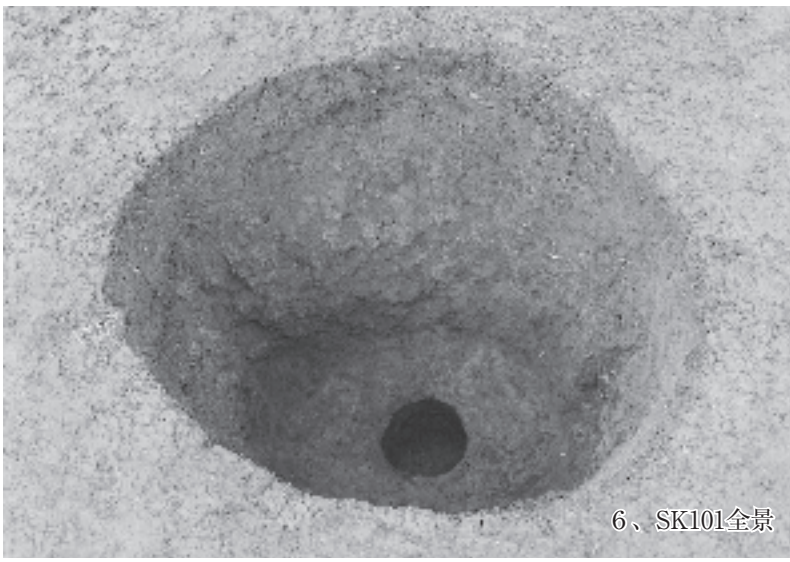
3、SK075全景



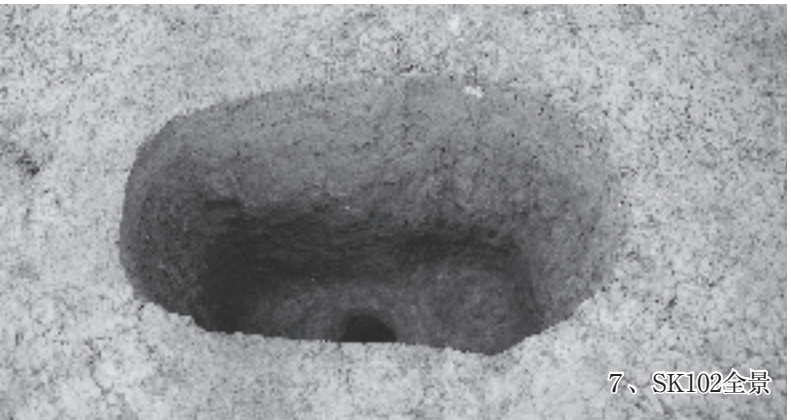
4、SK079全景



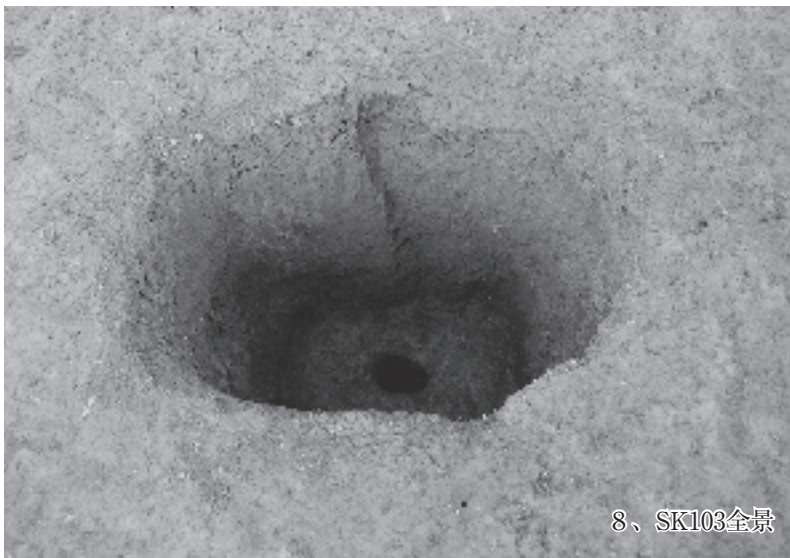
5、SK082全景



6、SK101全景

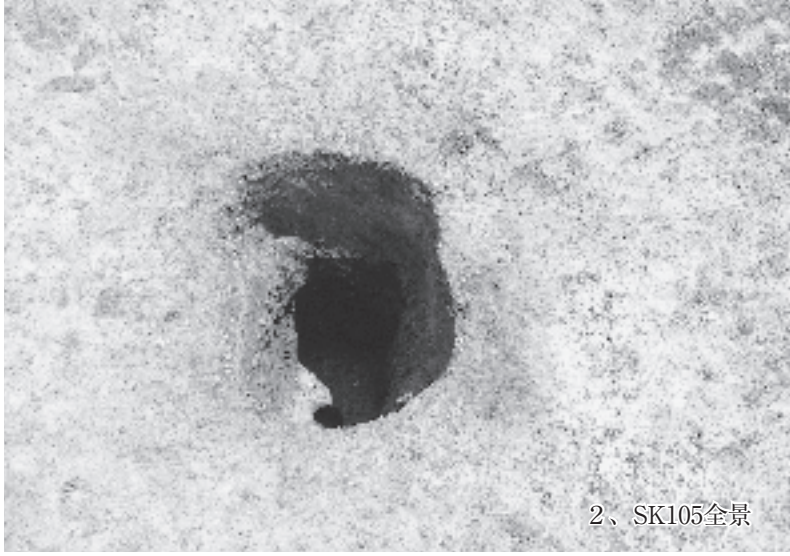


7、SK102全景

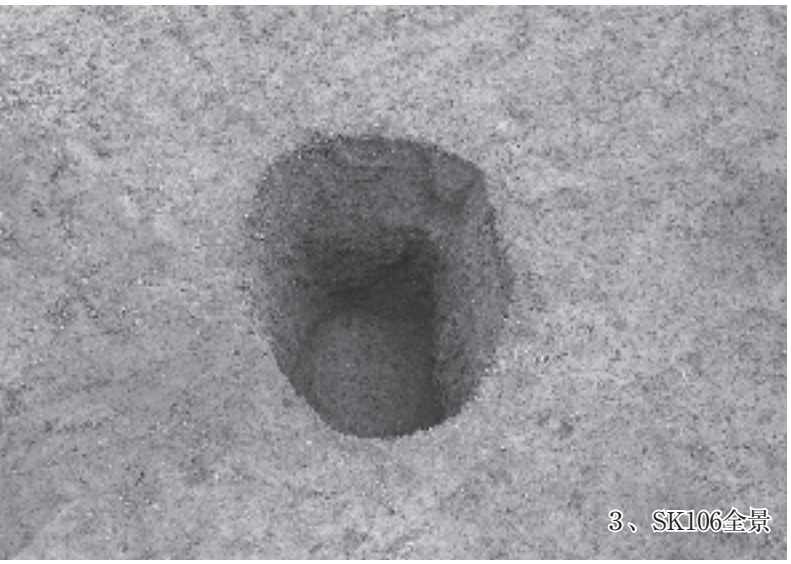


8、SK103全景

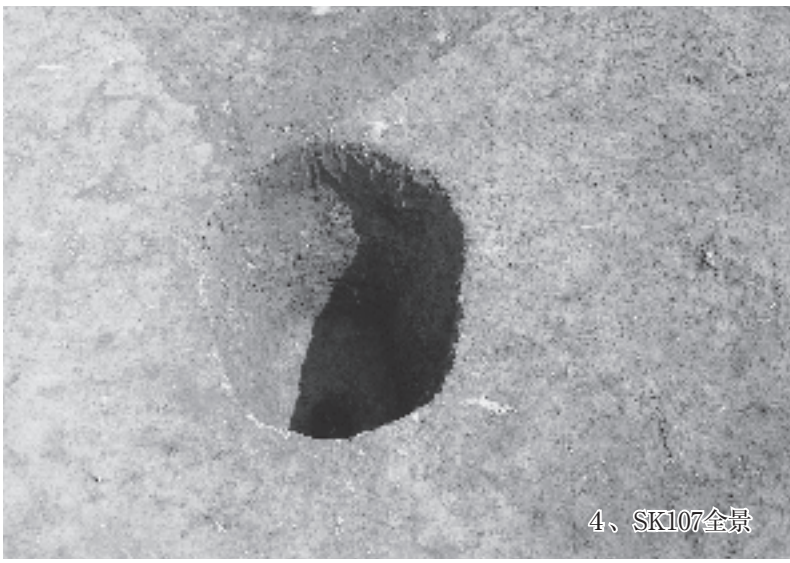
1、SK104全景



2、SK105全景

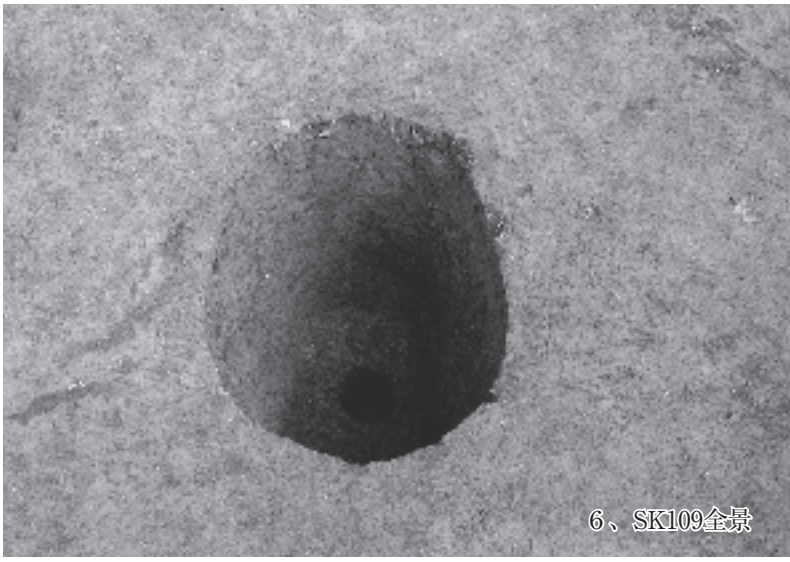


3、SK106全景

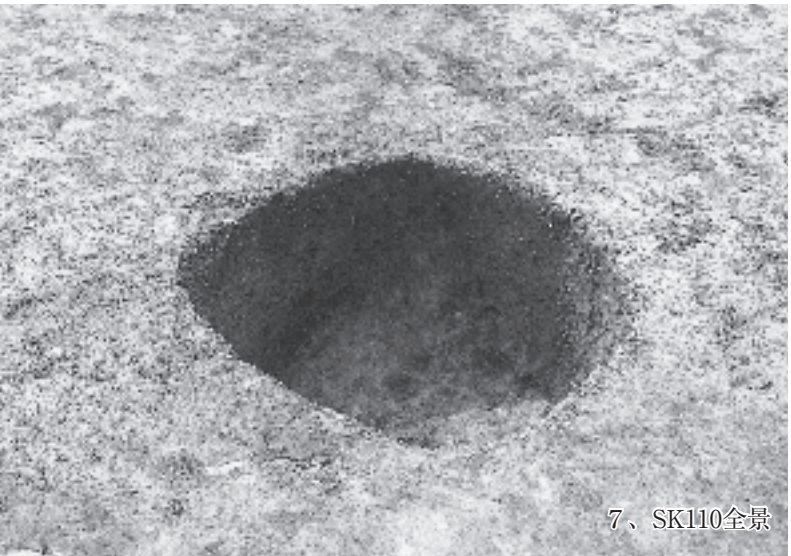


4、SK107全景

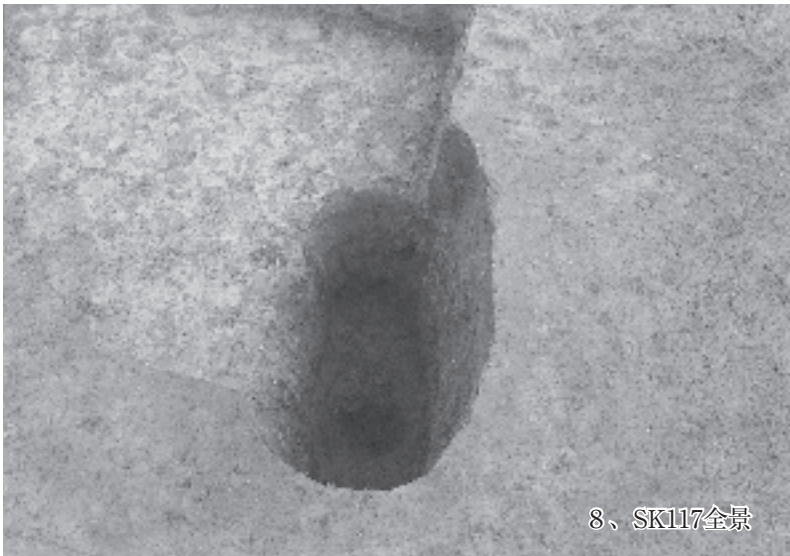
5、SK108全景



6、SK109全景

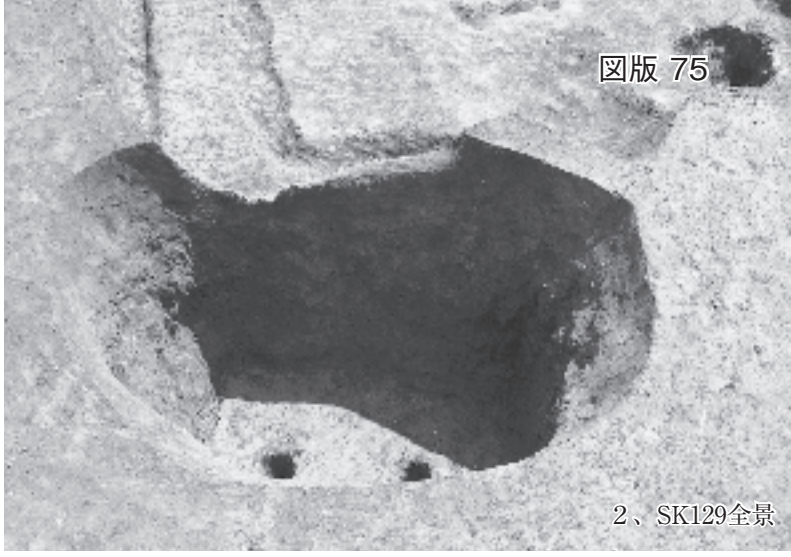


7、SK110全景



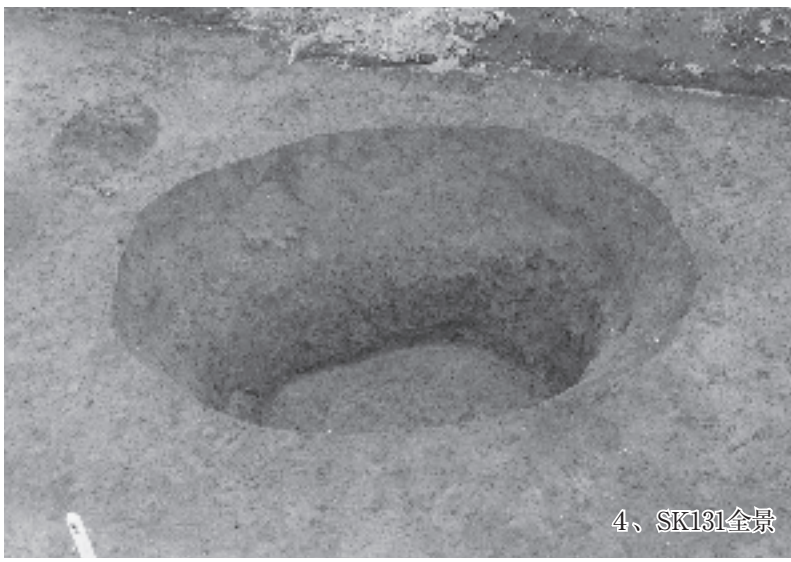
8、SK117全景

1、SK120全景

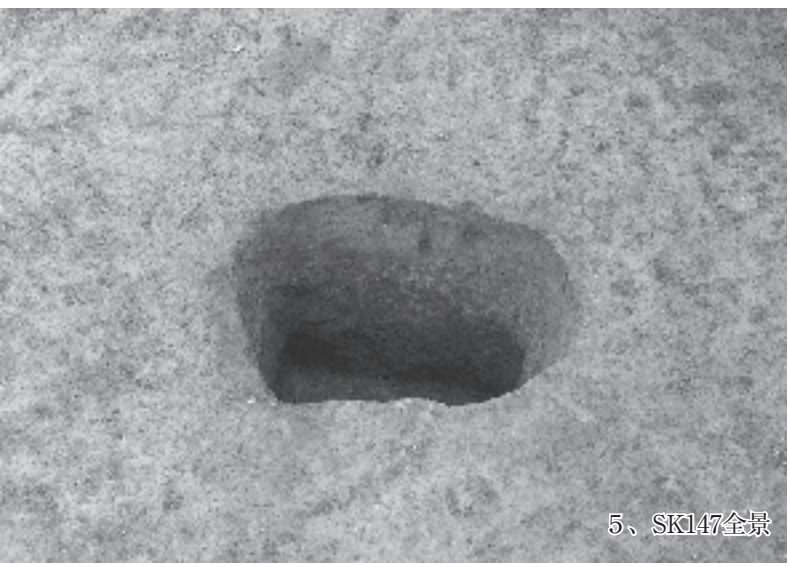


2、SK129全景

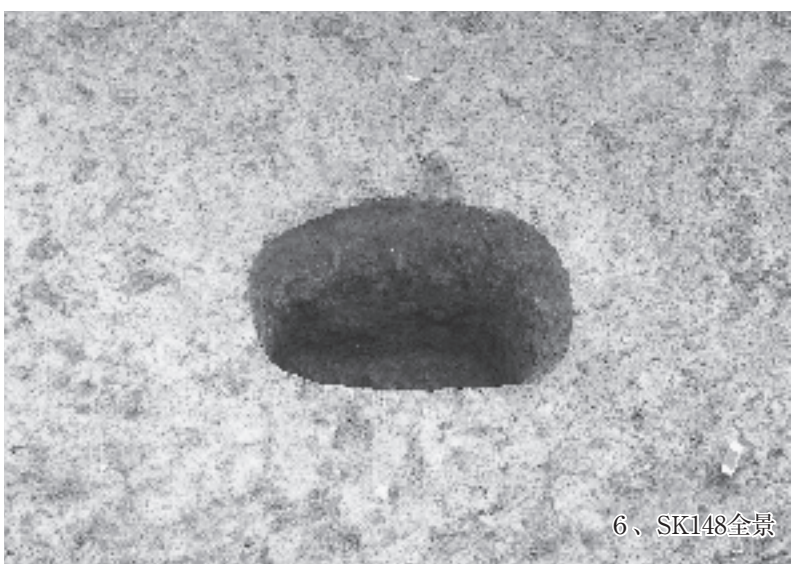
3、SK130全景



4、SK131全景

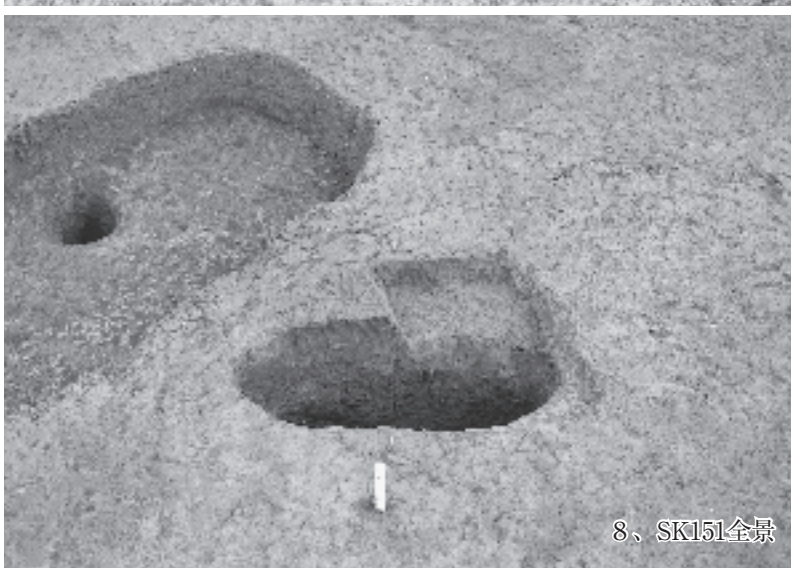


5、SK147全景

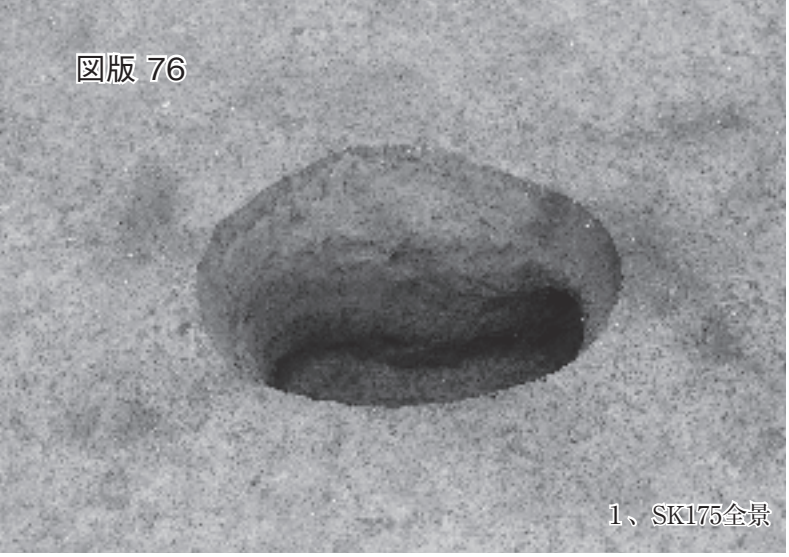


6、SK148全景

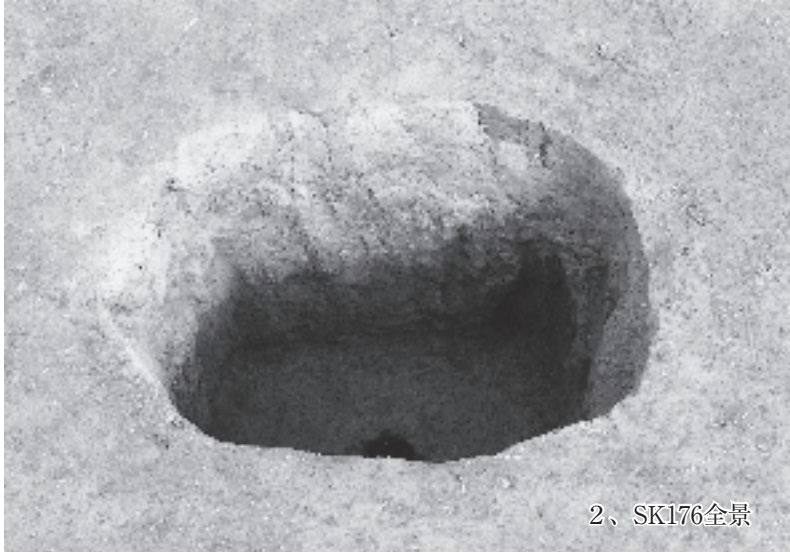
7、SK149全景



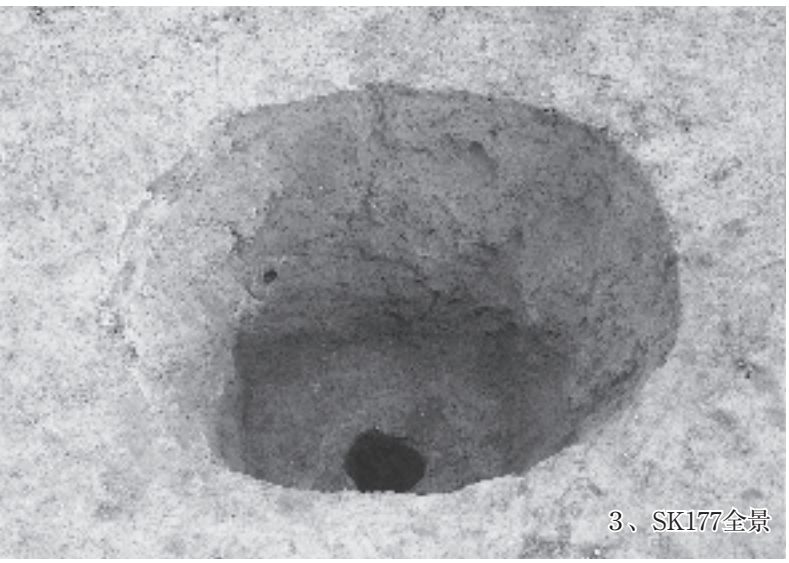
8、SK151全景



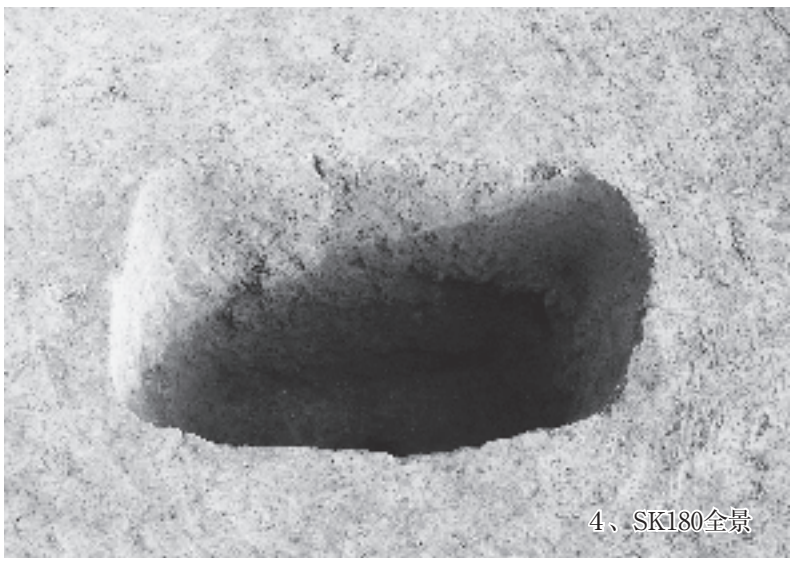
1、SK175全景



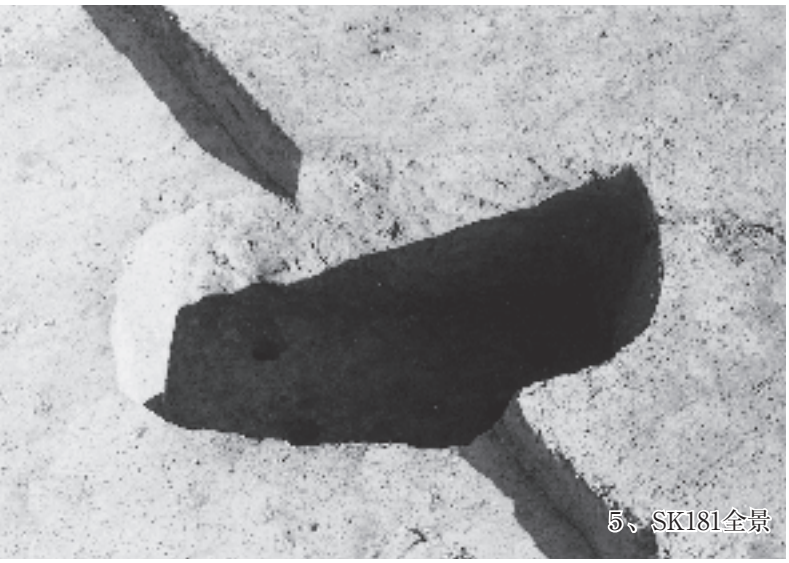
2、SK176全景



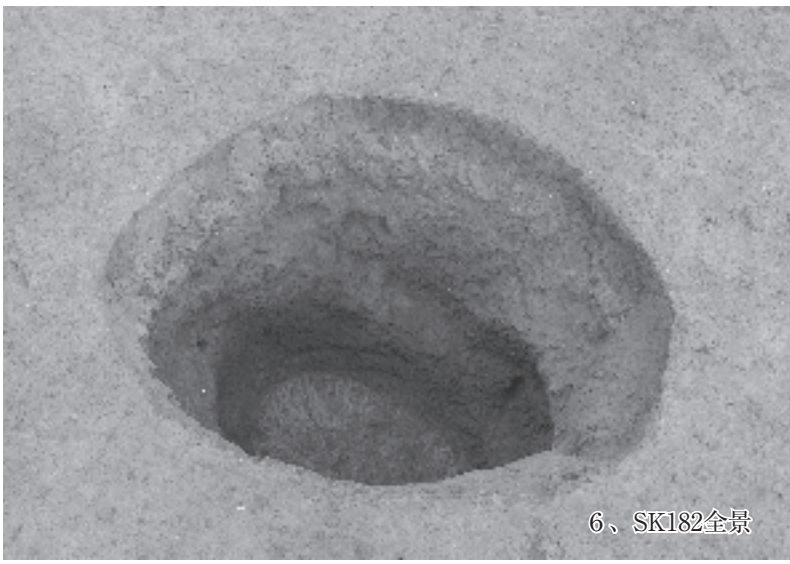
3、SK177全景



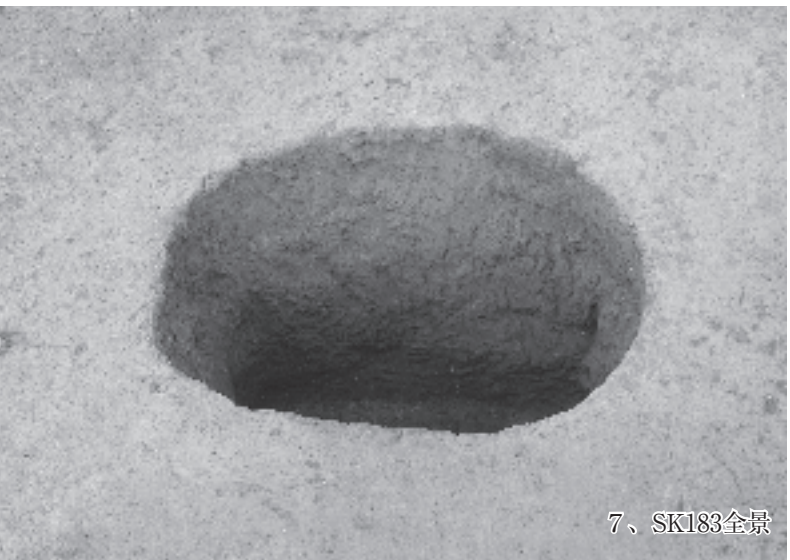
4、SK180全景



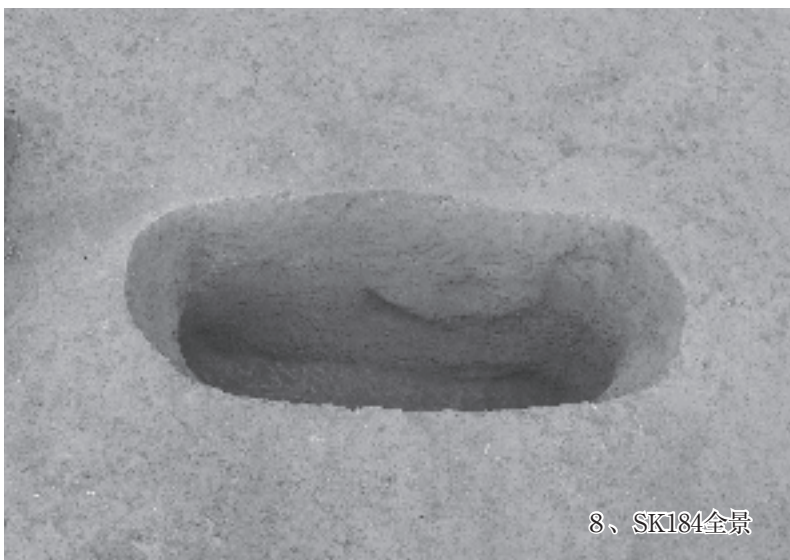
5、SK181全景



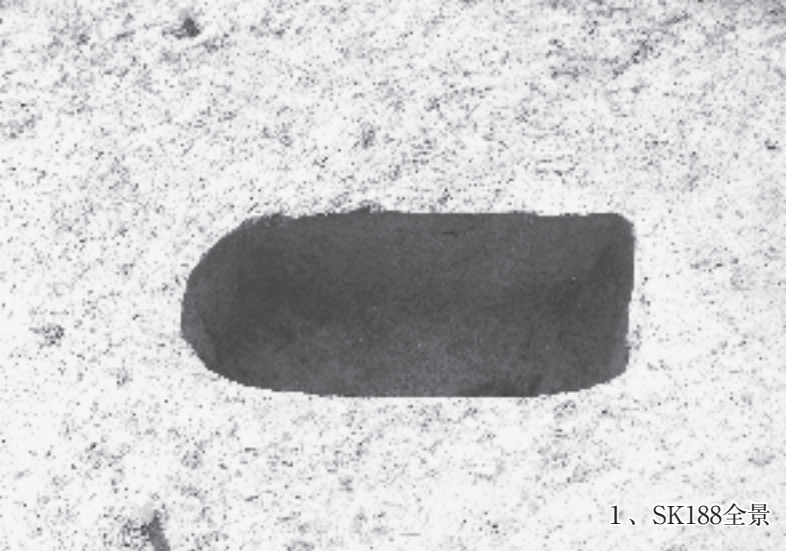
6、SK182全景



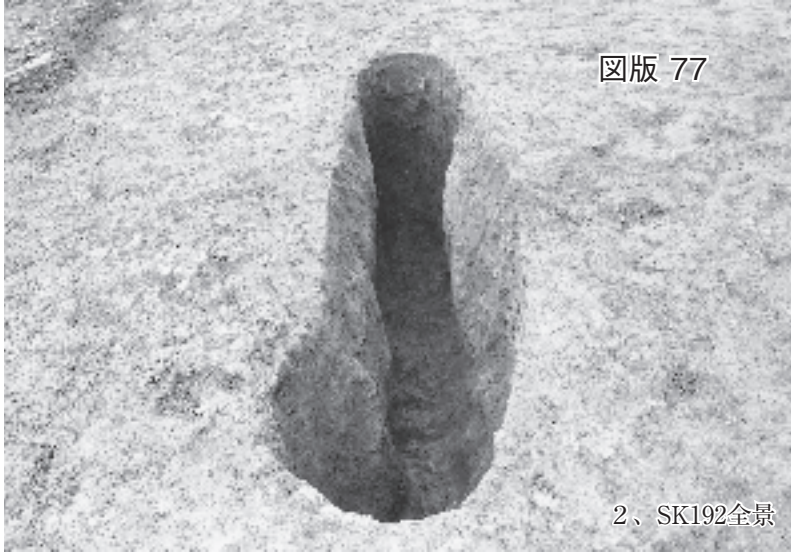
7、SK183全景



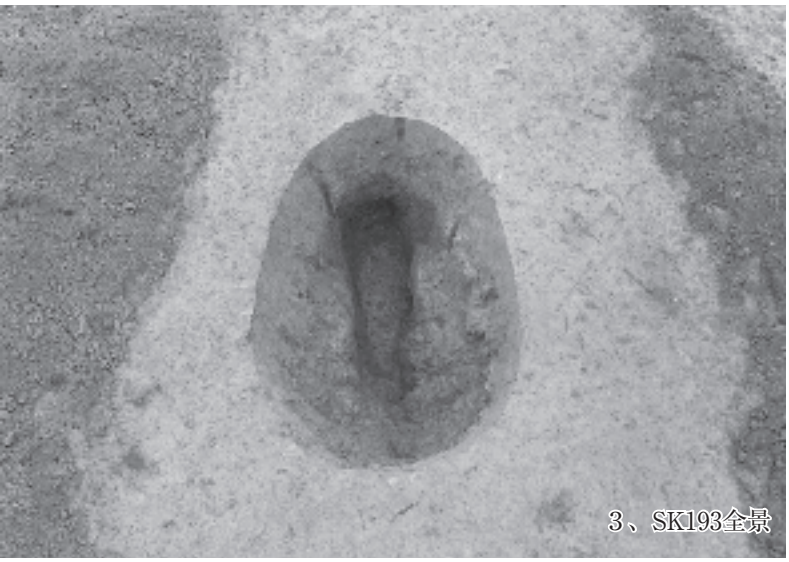
8、SK184全景



1、SK188全景

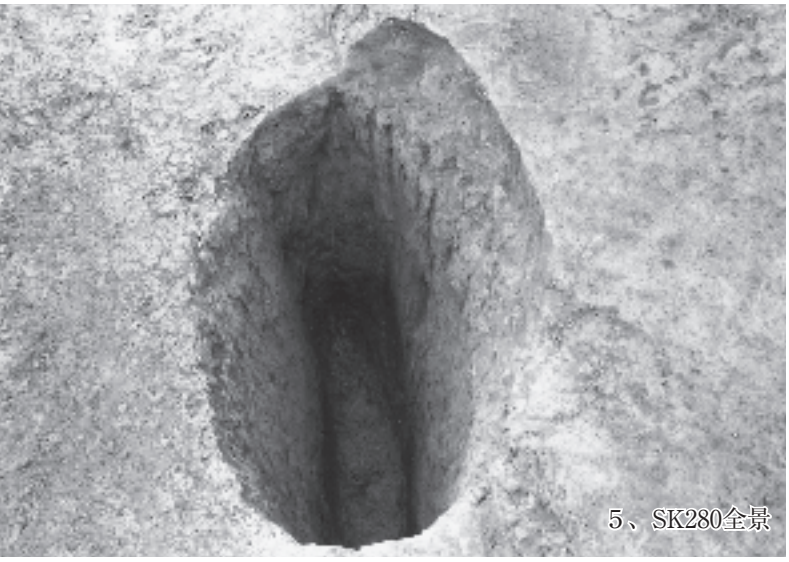


2、SK192全景

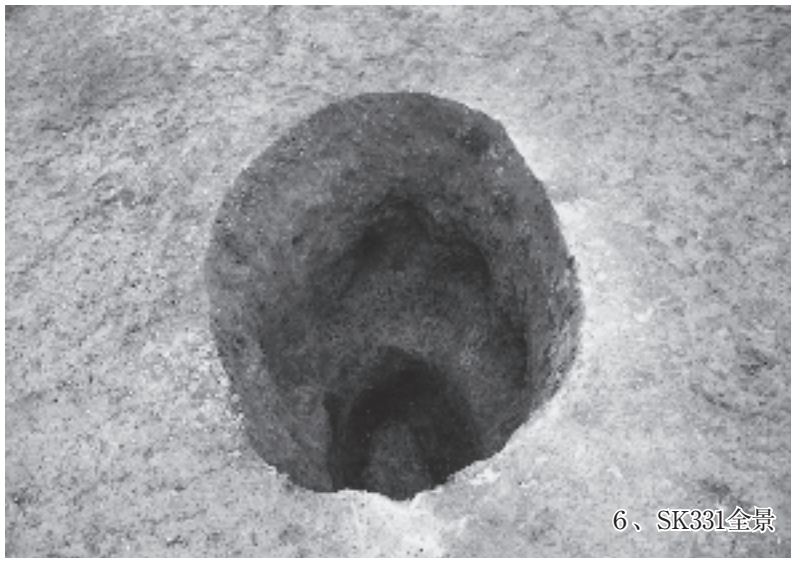


3、SK193全景

4、SK271全景

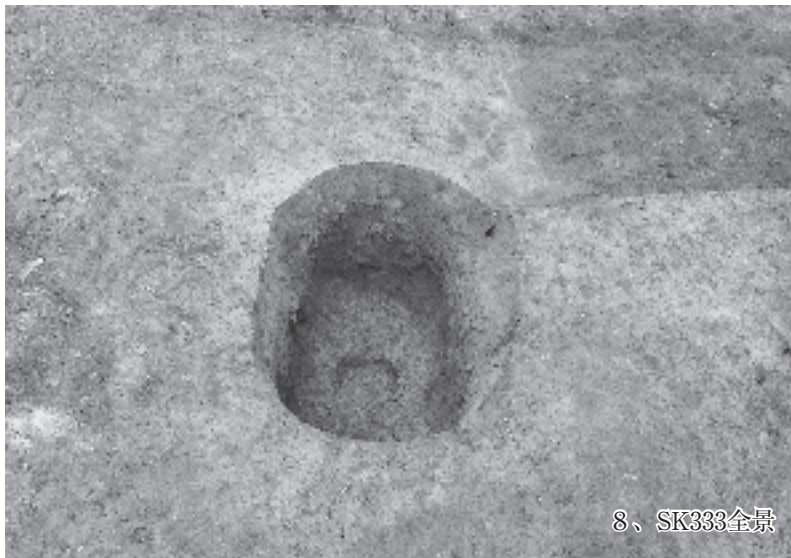


5、SK280全景



6、SK331全景

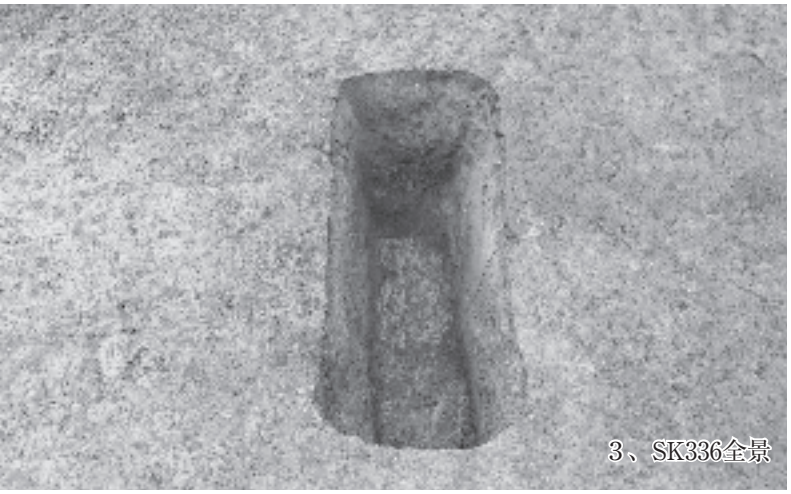
7、SK332全景



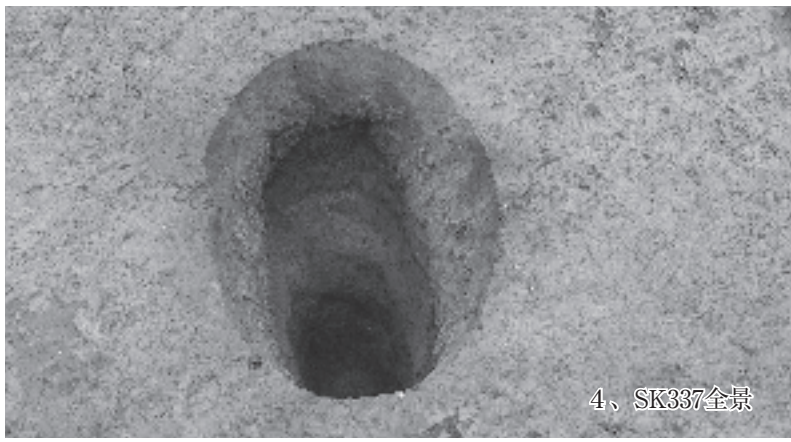
8、SK333全景

1、SK334全景

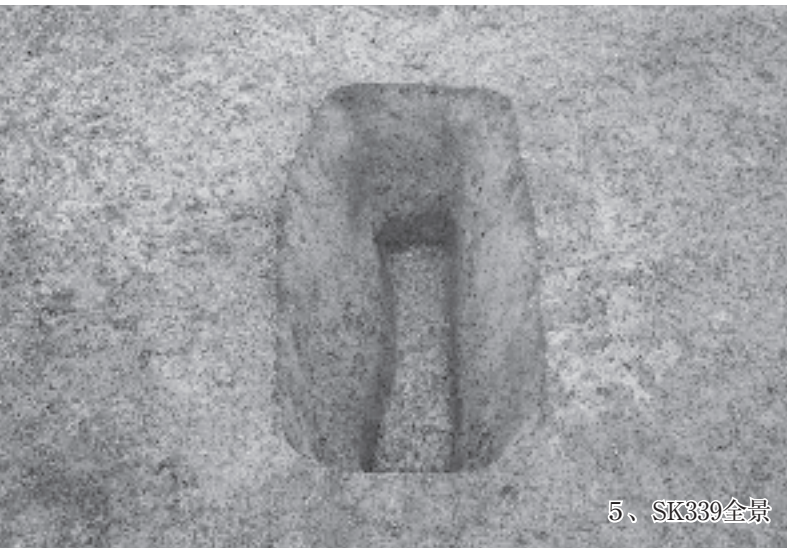
2、SK335全景



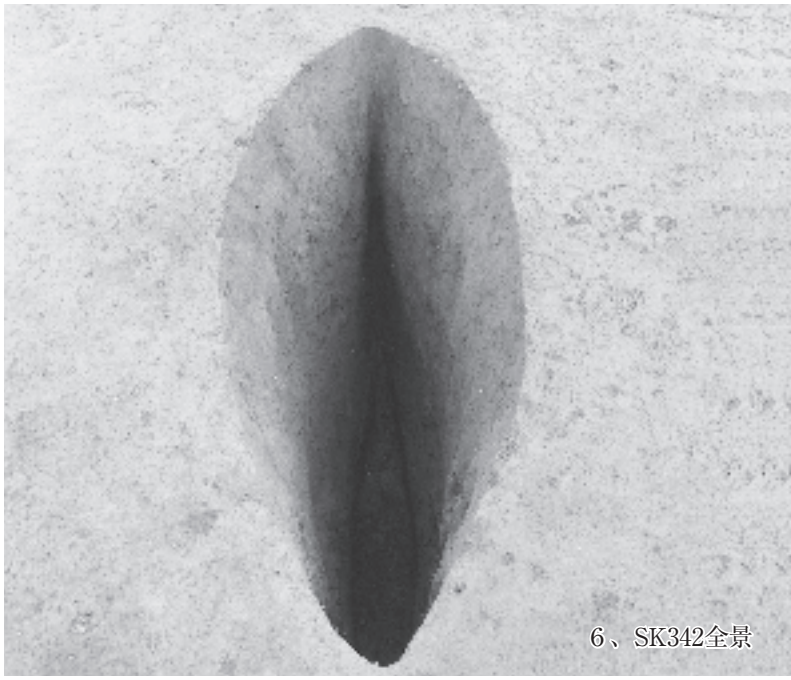
3、SK336全景



4、SK337全景



5、SK339全景

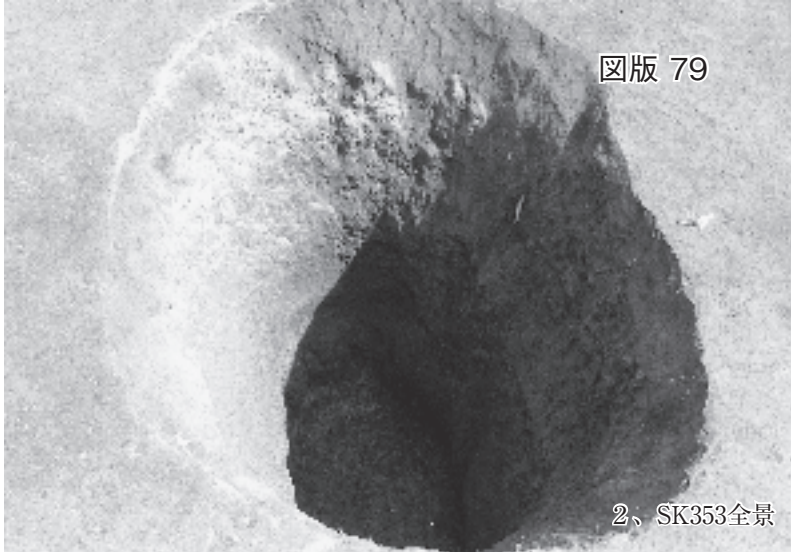


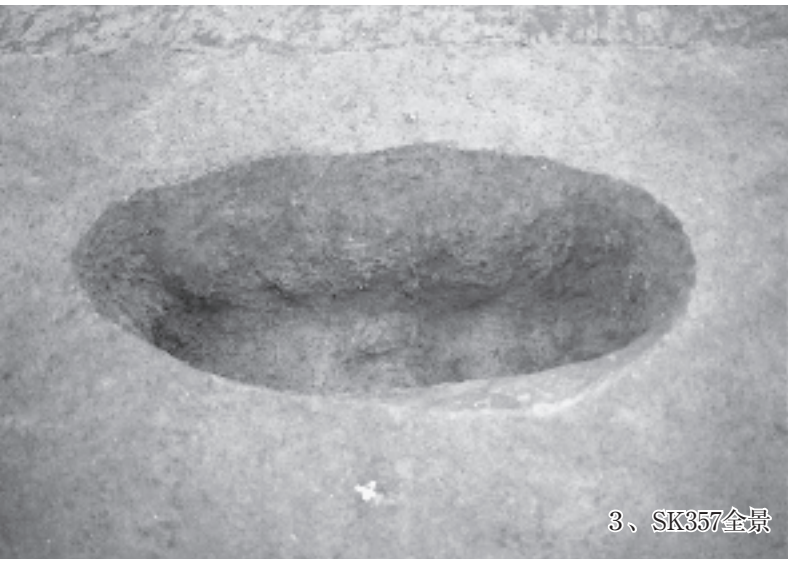
6、SK342全景

7、SK343全景

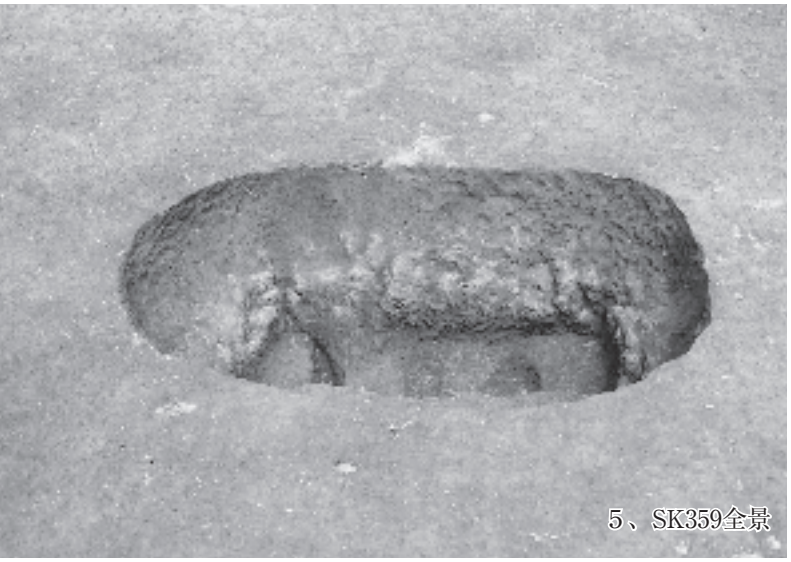
8、SK346全景

1、SK347全景


2、SK353全景


3、SK357全景

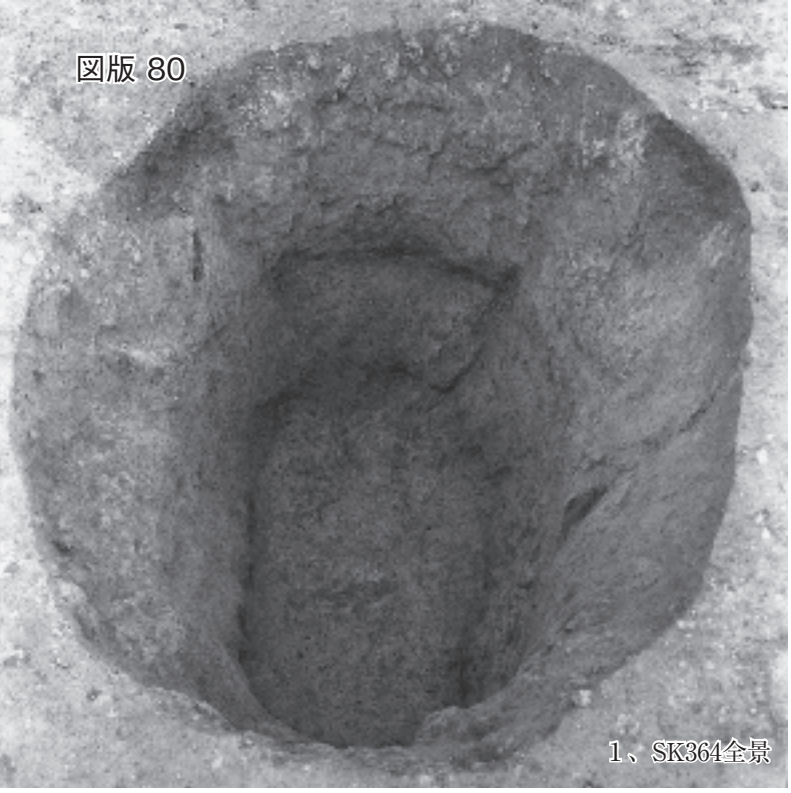
4、SK358全景


5、SK359全景

6、SK360全景

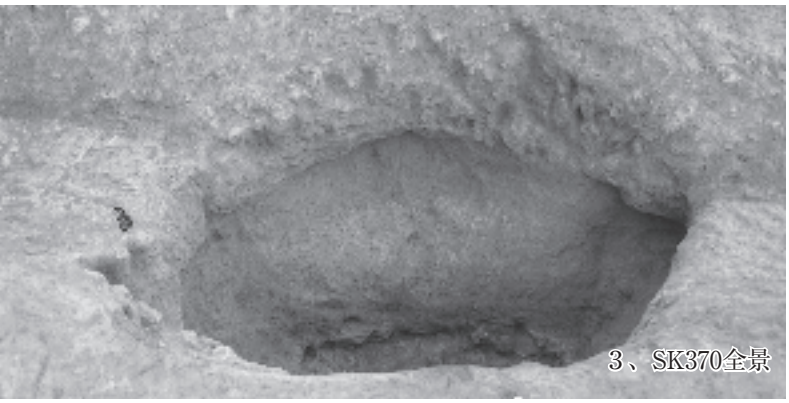
7、SK361全景

8、SK362全景

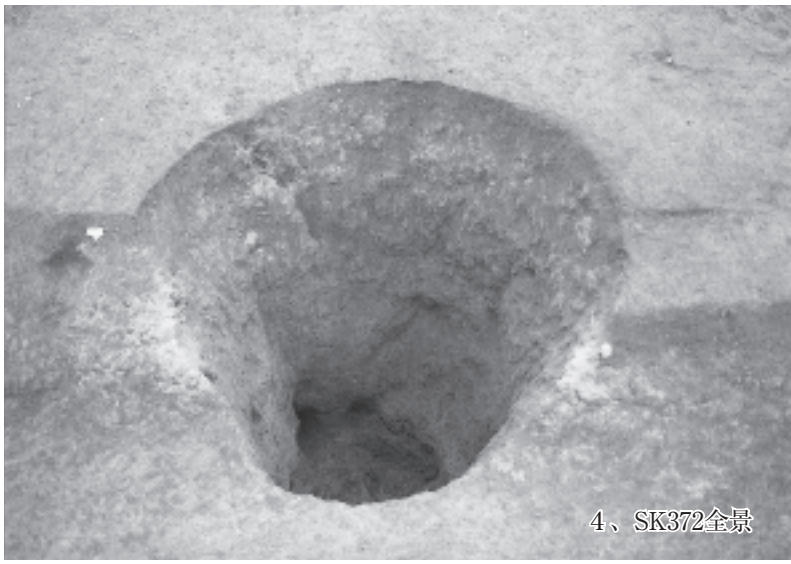


1、SK364全景

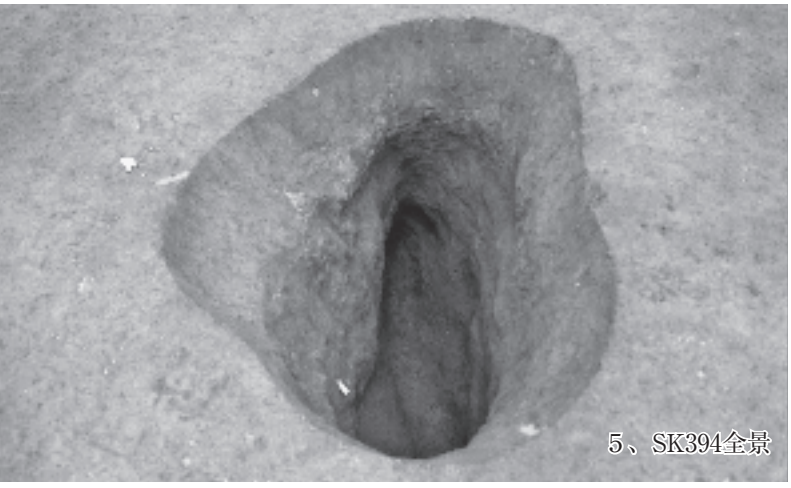
2、SK368全景



3、SK370全景

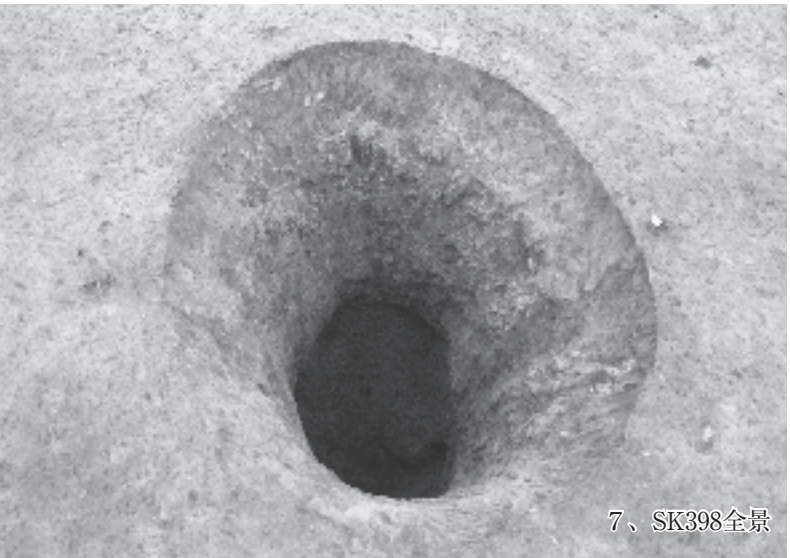


4、SK372全景



5、SK394全景

6、SK397全景

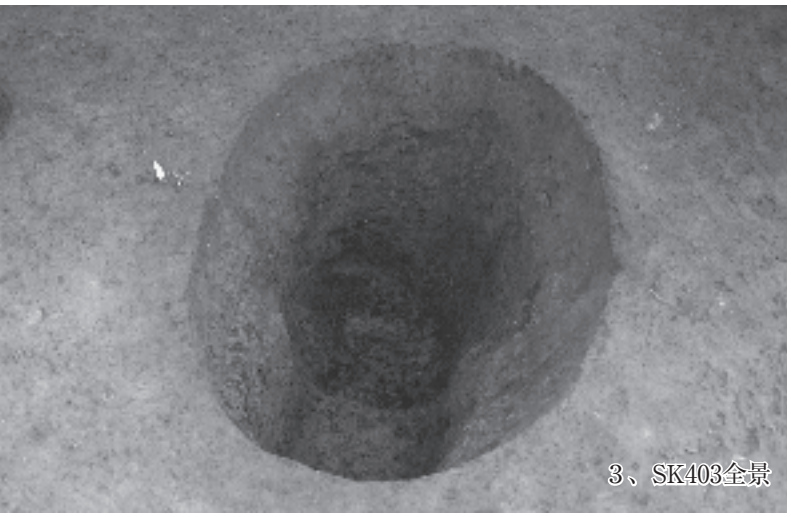


7、SK398全景

8、SK400全景

1、SK401全景

2、SK402全景

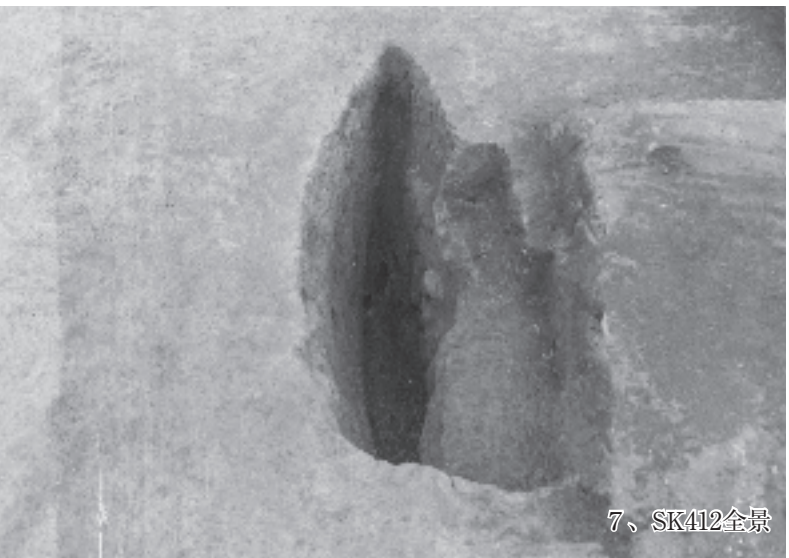


3、SK403全景

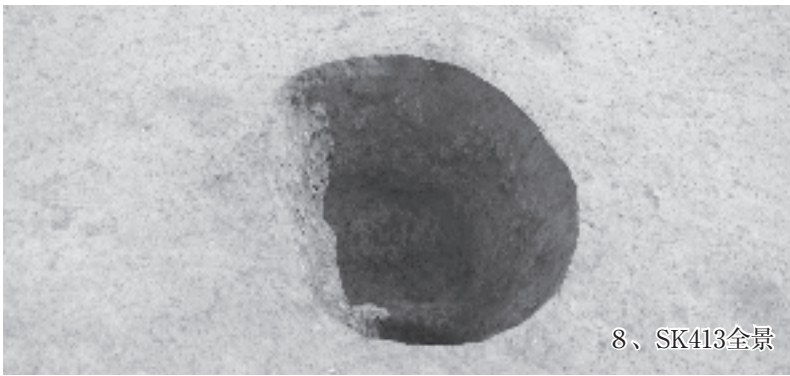
4、SK406全景

5、SK408A全景

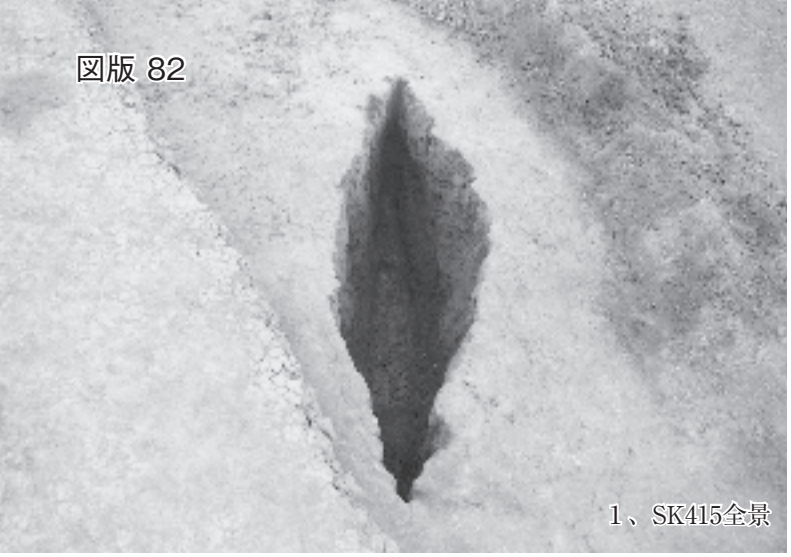
6、SK411全景



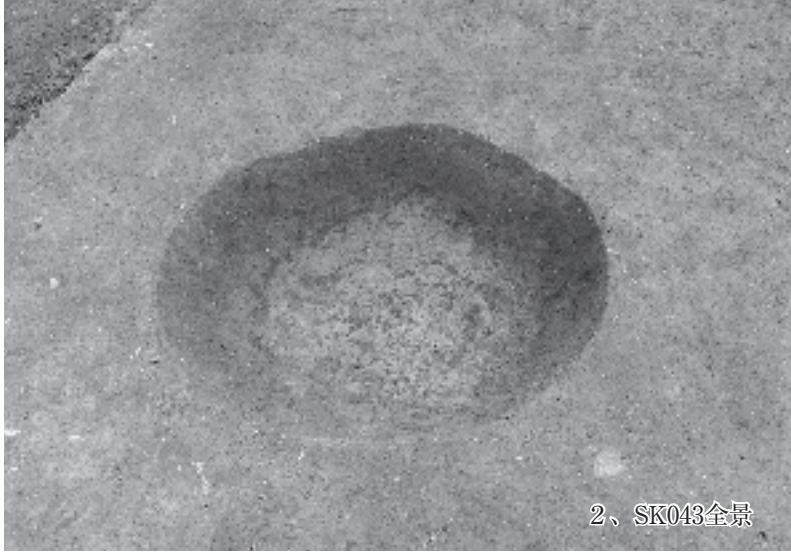
7、SK412全景



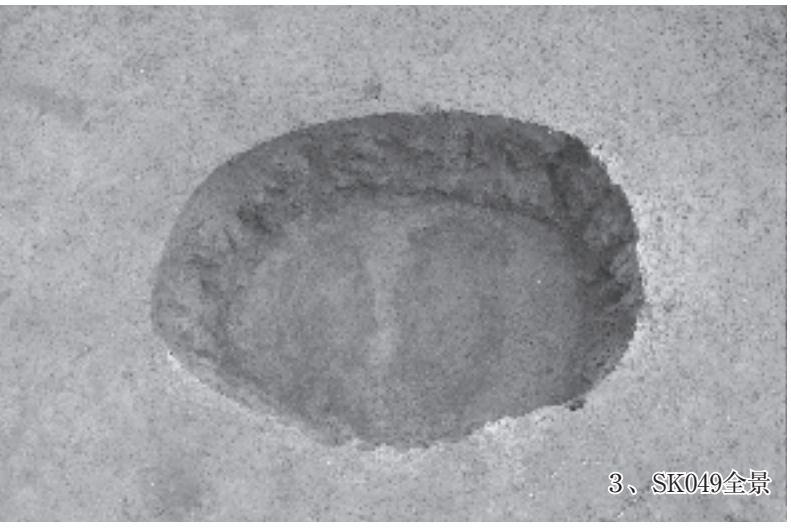
8、SK413全景



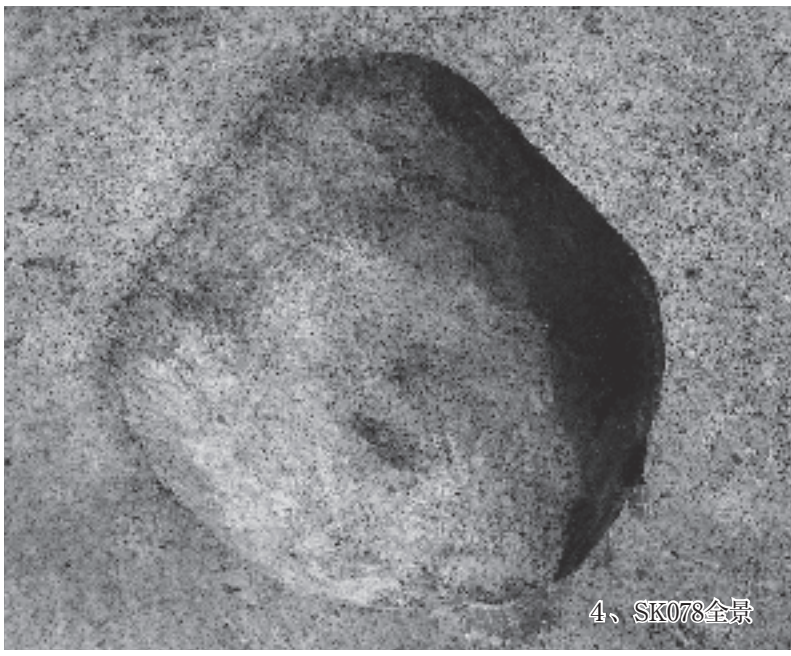
1、SK415全景



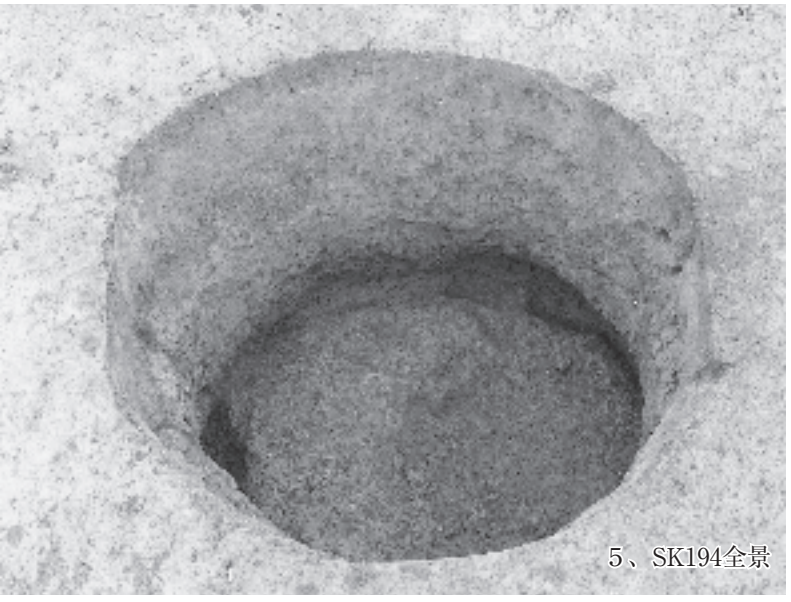
2、SK043全景



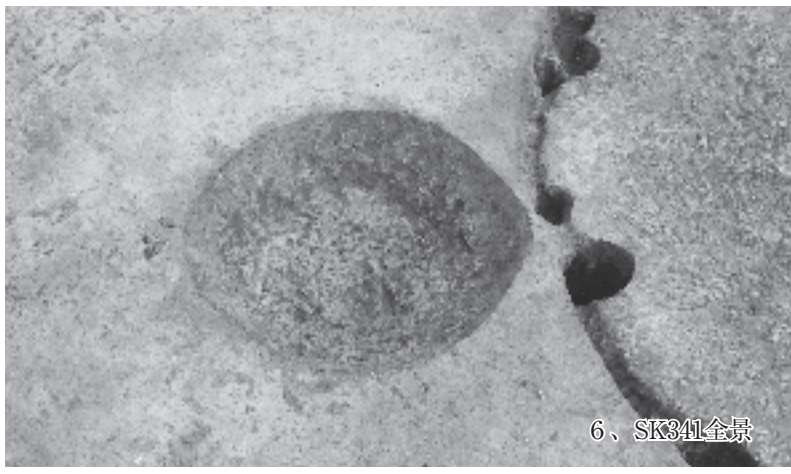
3、SK049全景



4、SK078全景



5、SK194全景

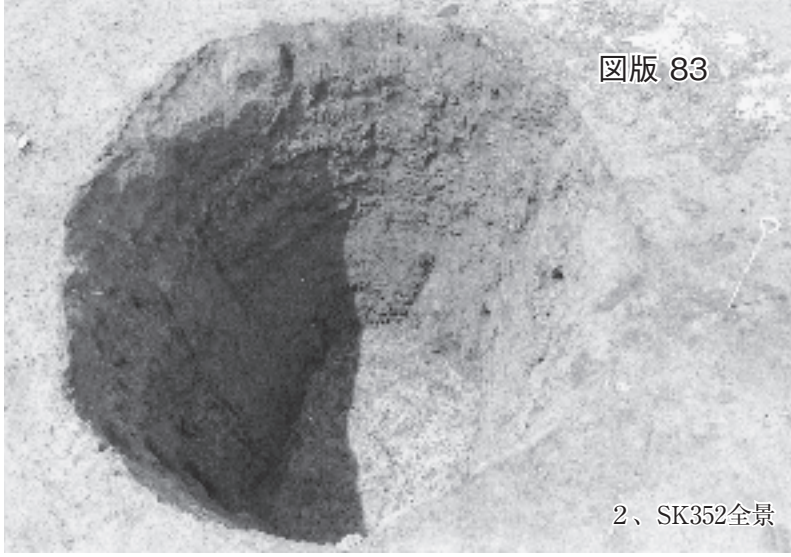


6、SK341全景

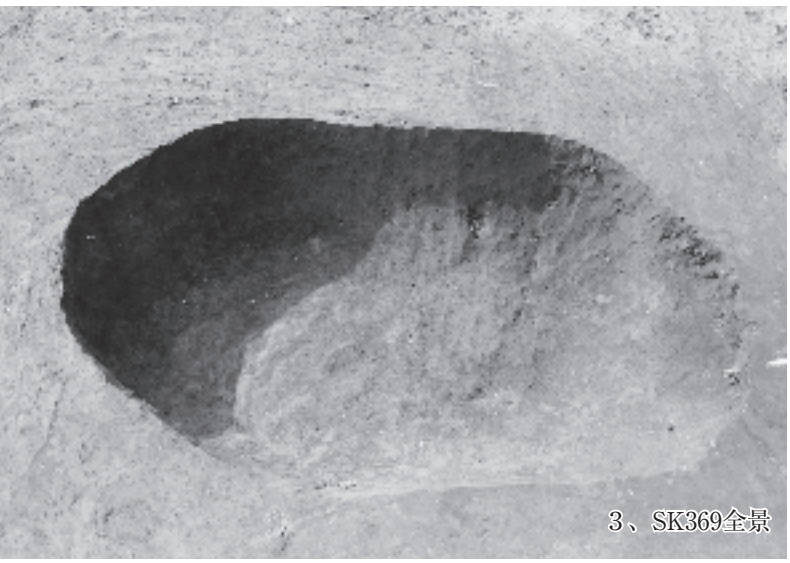
7、SK338全景

8、SK348全景

1、SK351全景



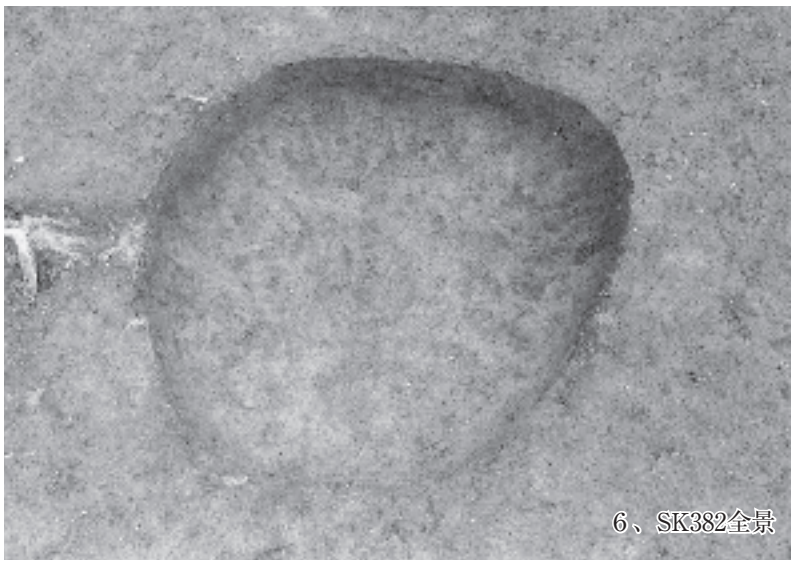
2、SK352全景



3、SK369全景

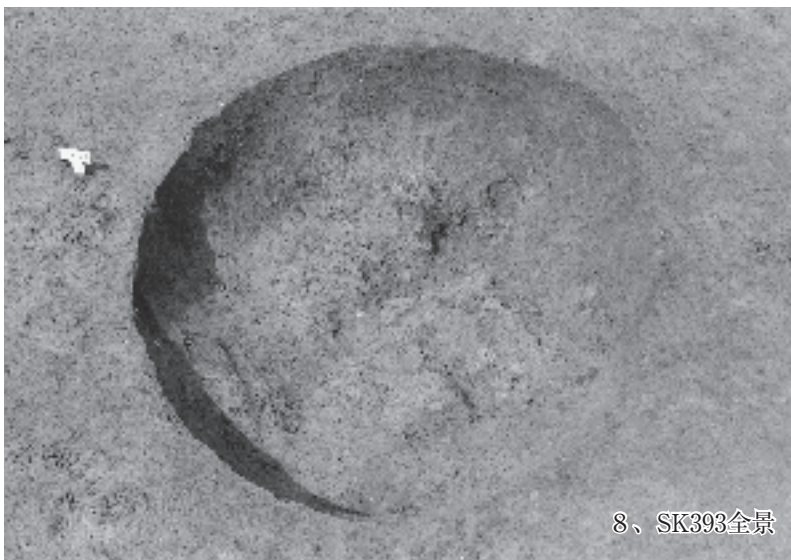
4、SK363全景

5、SK371全景



6、SK382全景

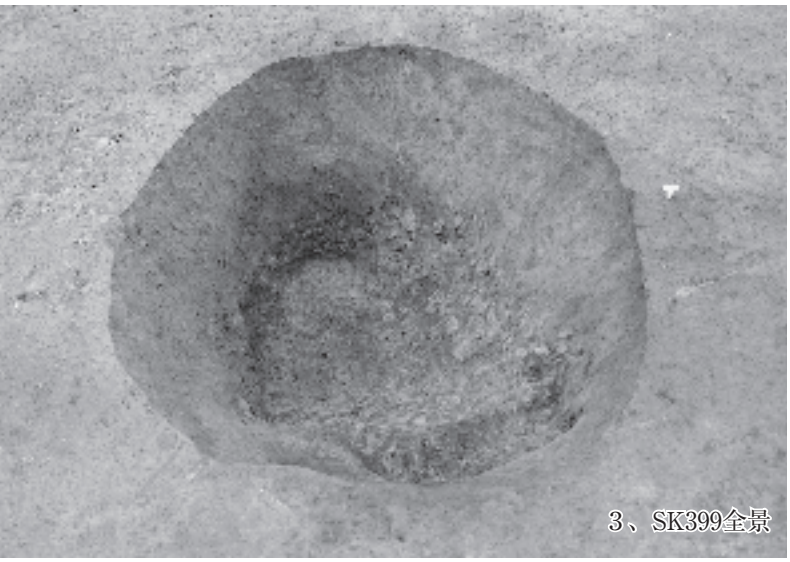
7、SK383全景



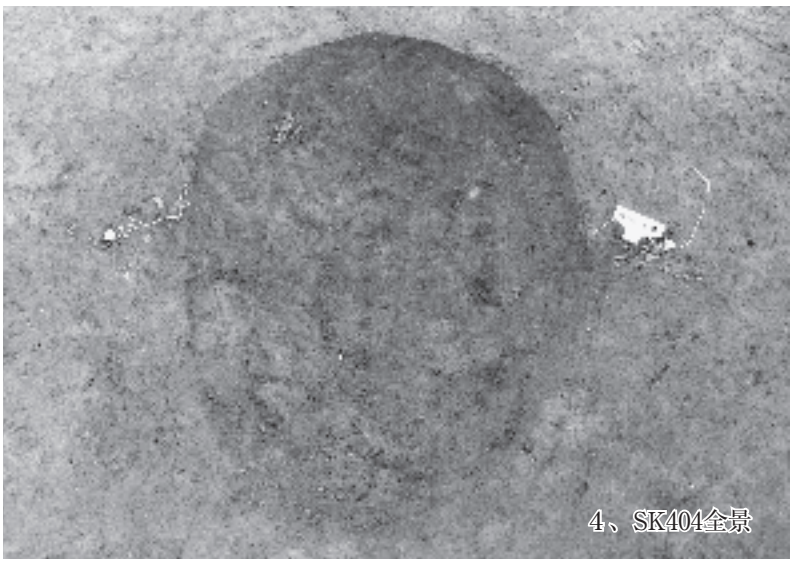
8、SK393全景

1、SK395全景

2、SK396全景



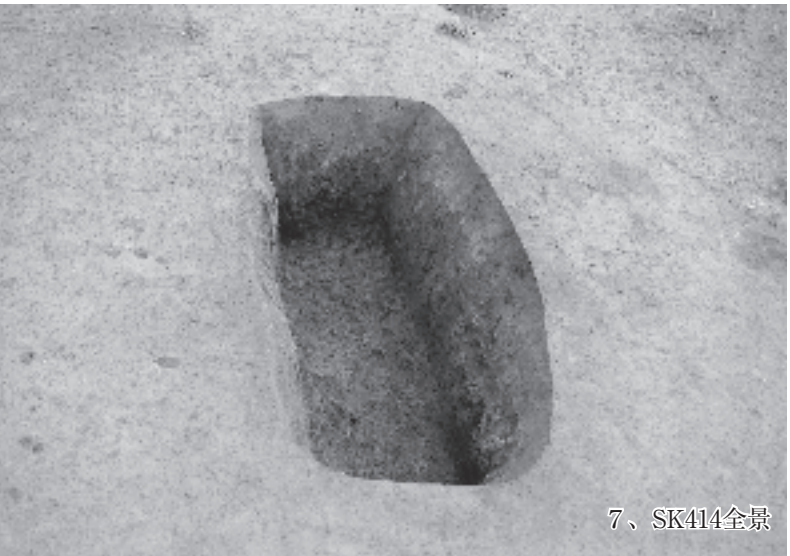
3、SK399全景



4、SK404全景

5、SK405全景

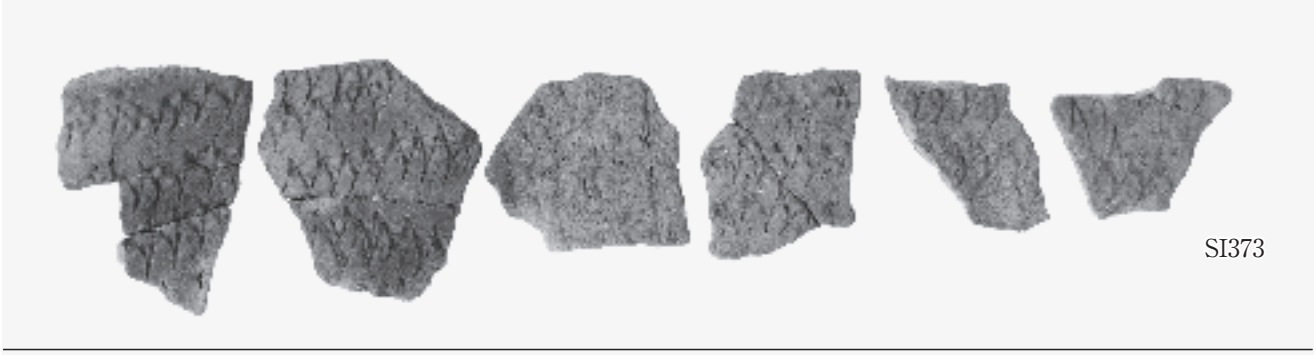
6、SK410全景



7、SK414全景

SI205－B

遺構出土土器（1）



遺構出土土器（2）

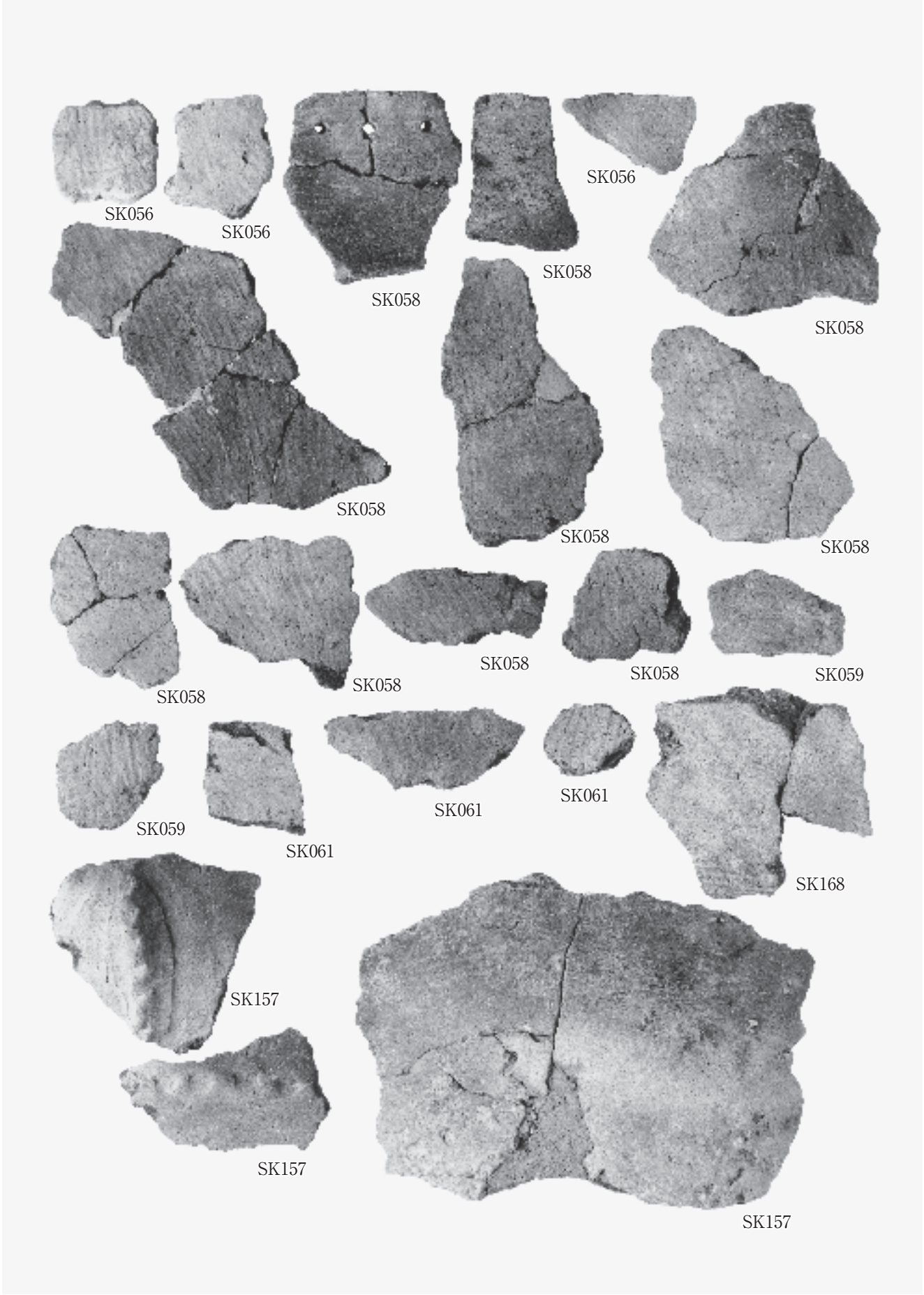
SI328

SK383

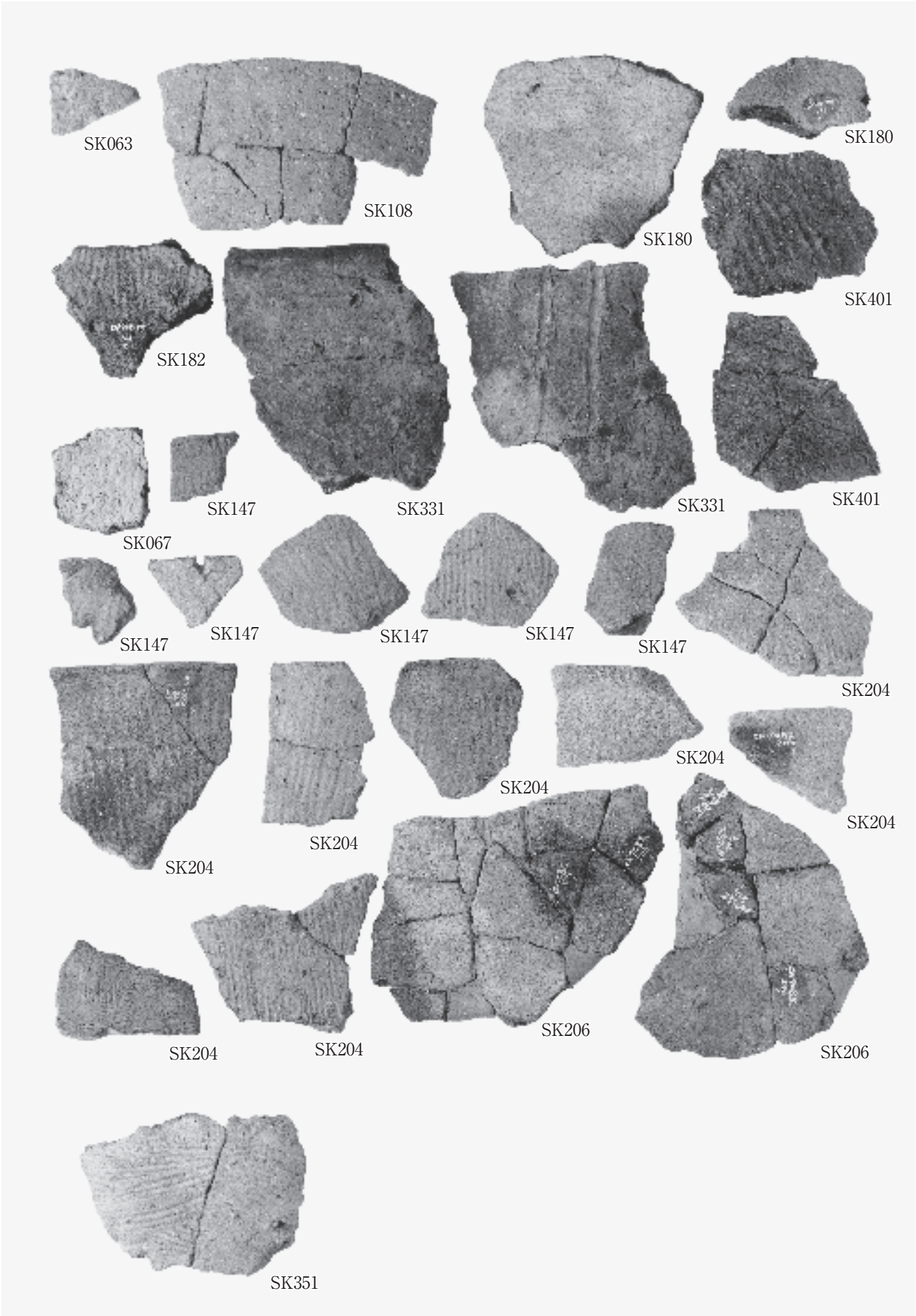
SK363

SK189

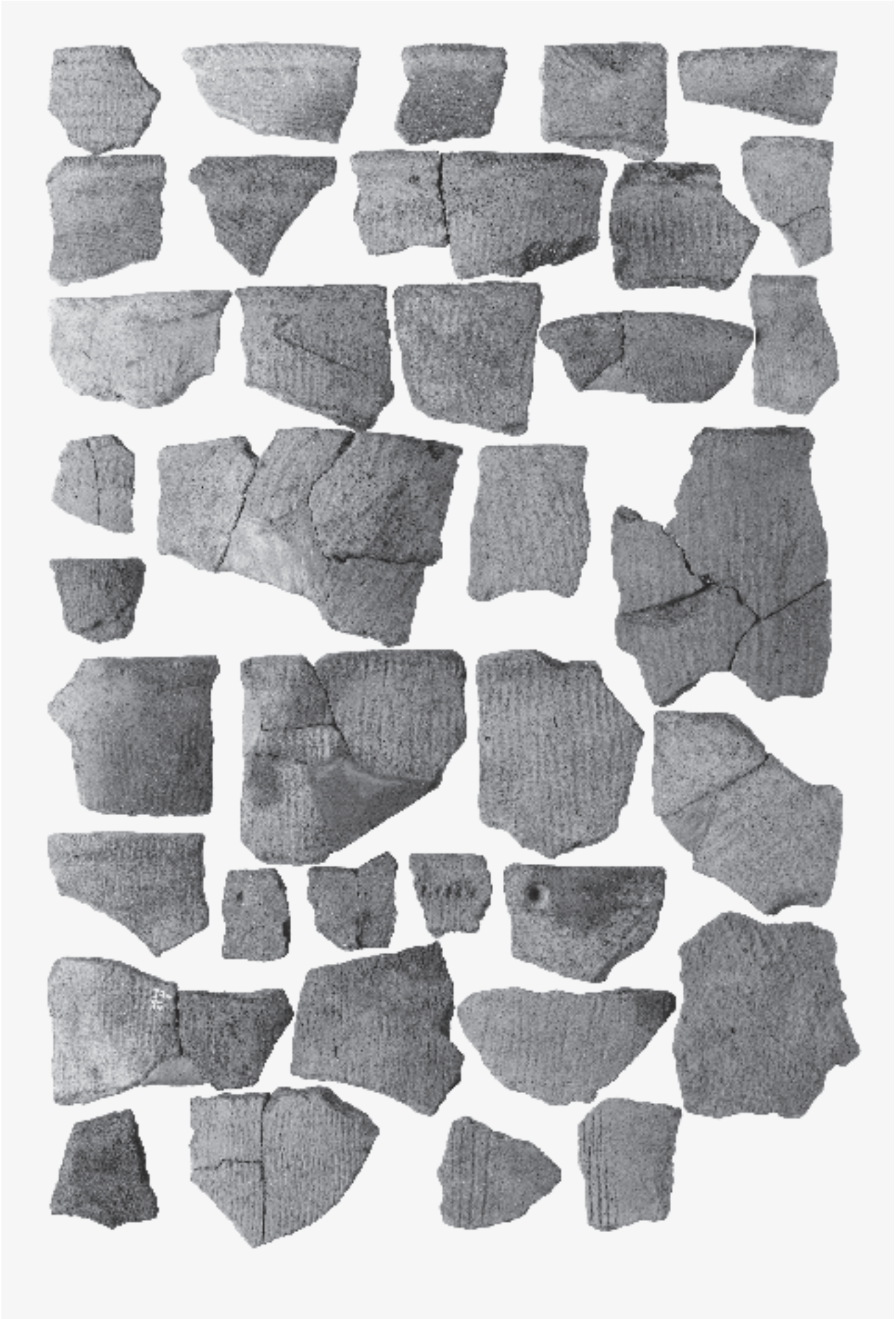
遺構出土土器（3）


SK056
SK056
SK058
SK056
SK058
SK058
SK058
SK058
SK058
SK058
SK058
SK058
SK058
SK059
SK059
SK061
SK061
SK061
SK168
SK157
SK157
SK157

遺構出土土器（4）


SK063
SK108
SK180
SK180
SK401
SK182
SK331
SK331
SK401
SK147
SK067
SK147
SK147
SK147
SK147
SK147
SK204
SK204
SK204
SK204
SK204
SK204
SK204
SK206
SK206
SK351

遺構出土土器（５）



遺構外出土土器（1）

遺構外出土土器（２）

遺構外出土土器（3）

遺構外出土土器（4）

遺構外出土土器（５）

遺構外出土土器（6）

遺構外出土土器（7）

遺構外出土土器（8）

遺構外出土土器（9）

遺構外出土土器（10）

遺構外出土土器（11）

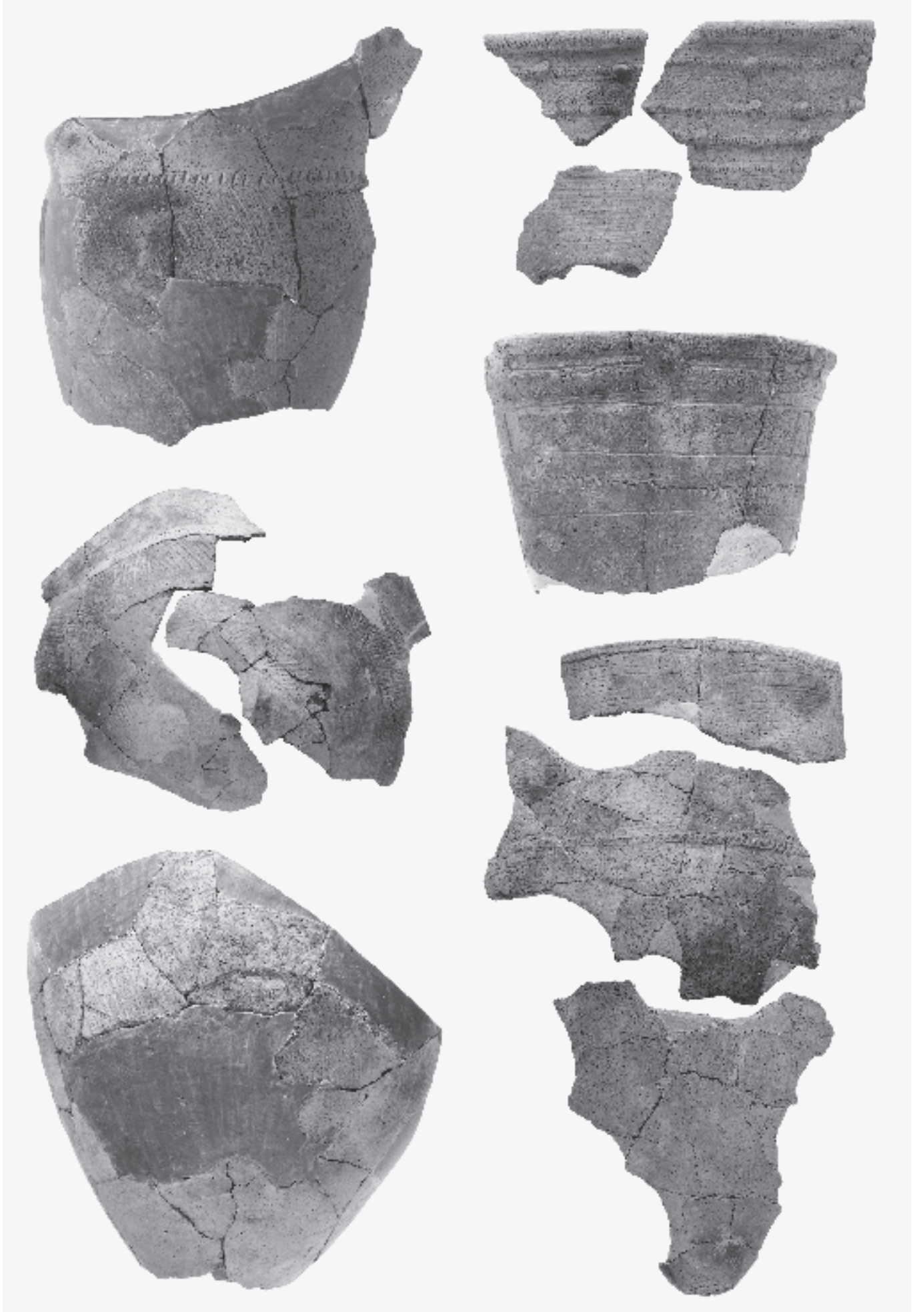
遺構外出土土器（12）

図版102

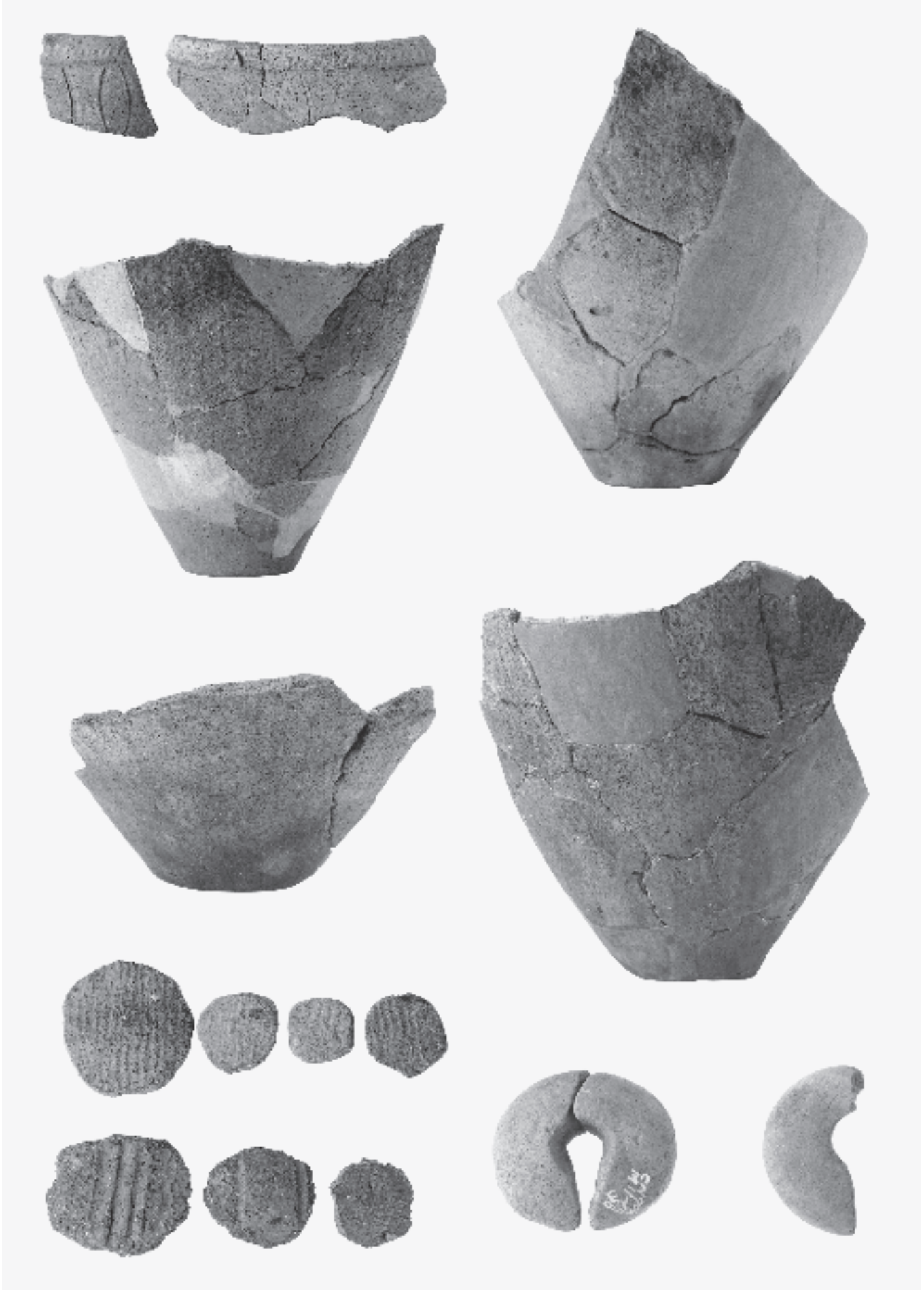
遺構外出土土器（13）

遺構外出土土器（14）

図版104

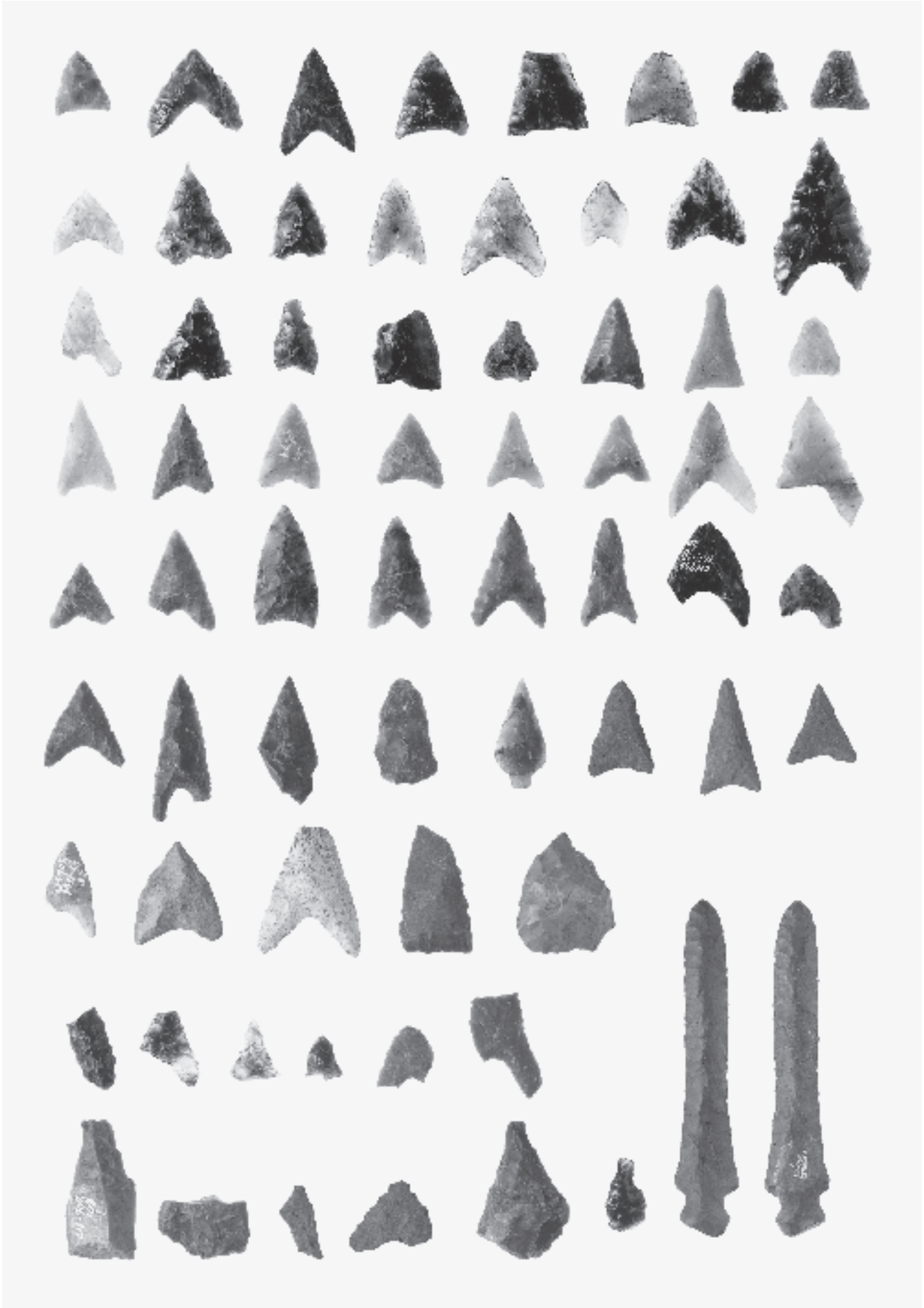


遺構外出土土器（15）



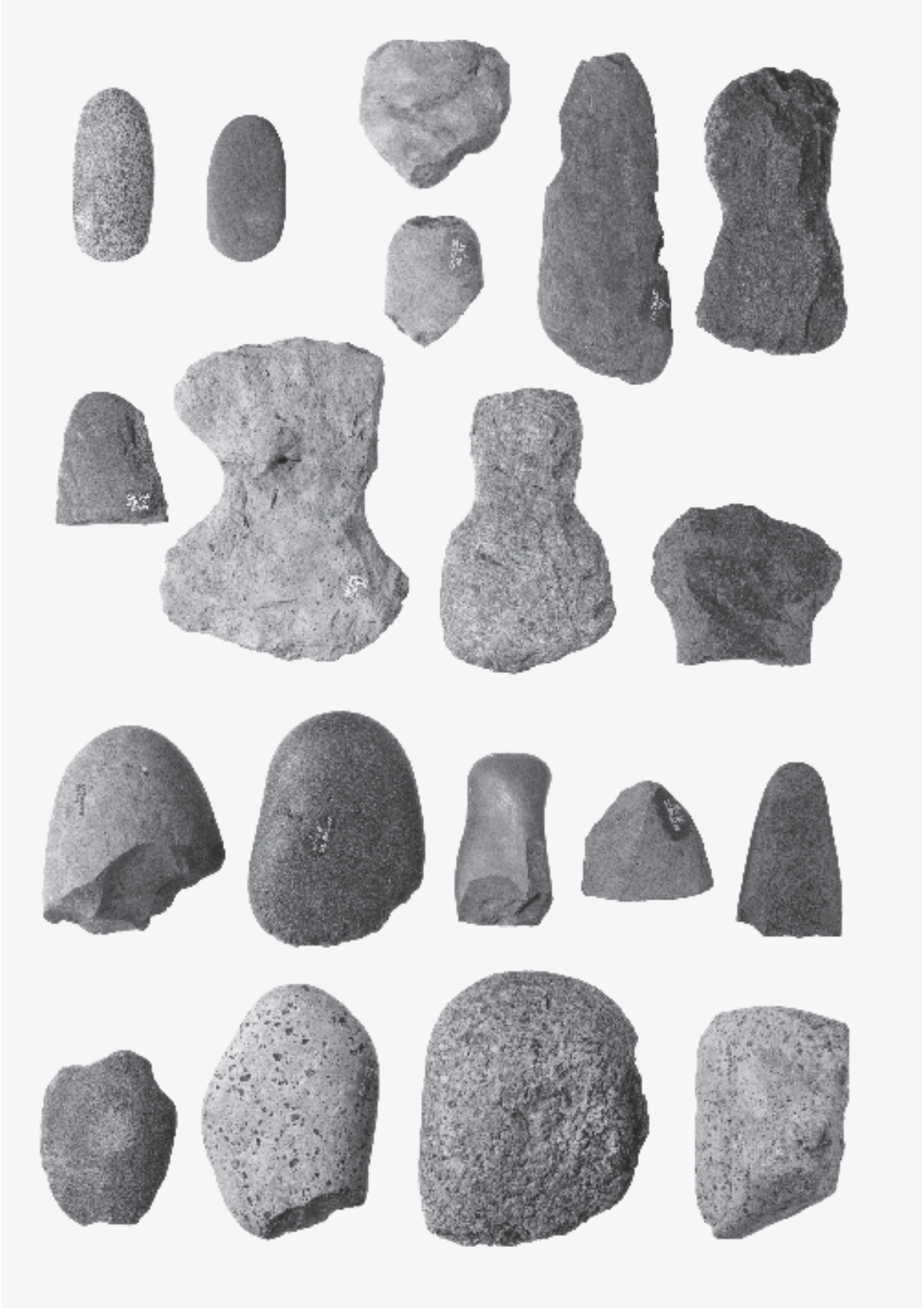
遺構外出土土器（16）・土製品

遺構外出土土器（17）



遺構外出土石器（1）

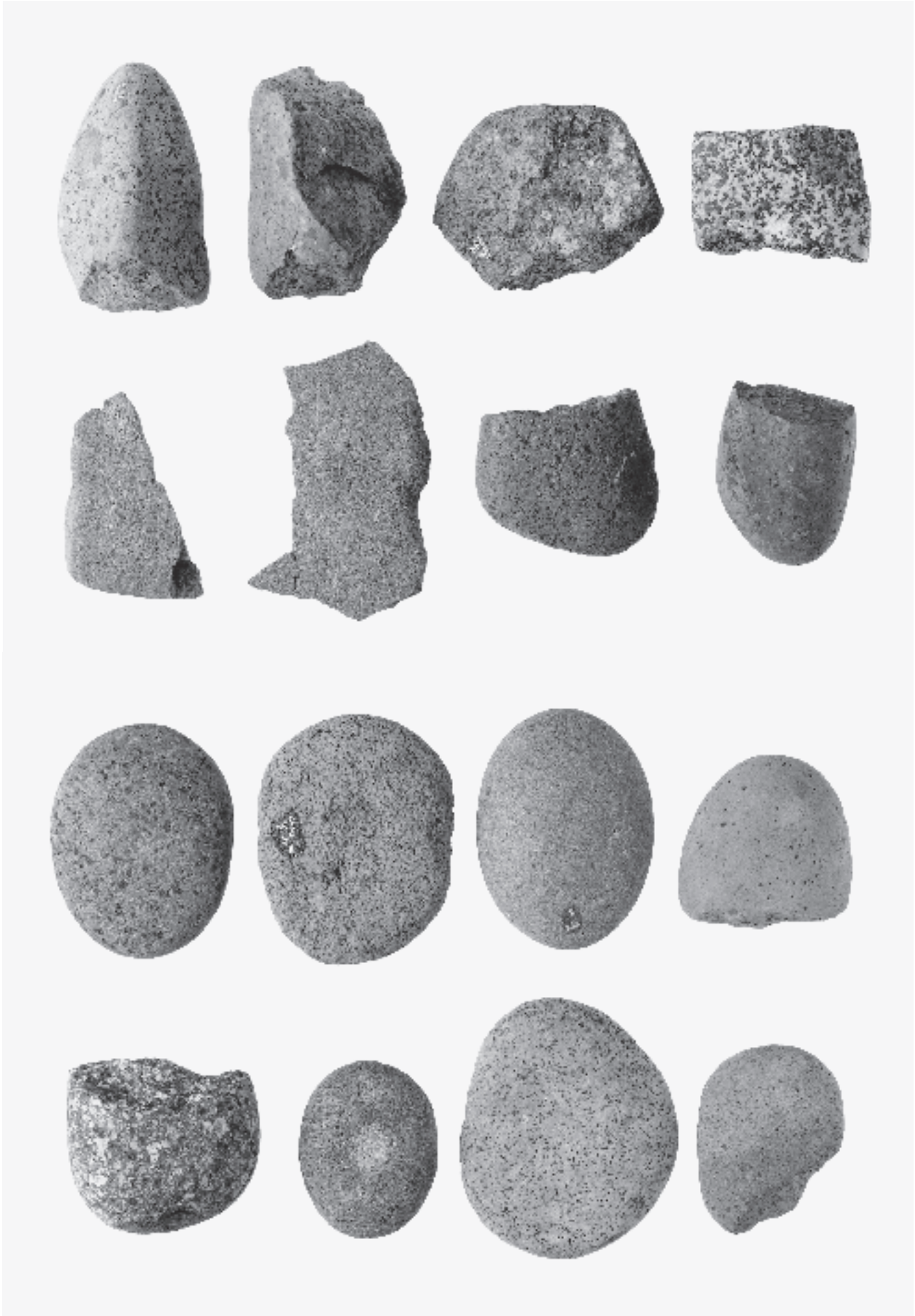
図版108



遺構外出土石器（２）

遺構外出土石器（３）

図版110



遺構外出土石器（4）

遺構外出土石器（５）

報告書抄録

ふりがな	ちばにゅーたうんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書
副書名	印西市角田台遺跡（旧石器・縄文時代編）
巻次	26
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第685集
編著者名	古内　茂
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　℡ 043-424-4848
発行年月日	西暦2012年12月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 世界系	東経 世界系	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
つのだだいいせき 角田台遺跡	いんざいししんつつみだい 印西市新堤台 470ほか	12328	CN708	35度 47分 30秒	140度 11分 20秒	19770716～ 19771215	（確認） 140,000	宅地造成関連（道路、鉄道他）
						19800401～ 19810331	21,300	
						19830701～ 19830731	1,200	
						19841015～ 19850330	9,350	
						19850401～ 19860331	9,040	
						19860401～ 19860630	9,204	
						19870701～ 19871211	4,240	
						198880901～ 19890131	5,456	
						19900108～ 19900320	3,640	
						19900405～ 19900509	200	
						19900510～ 19910131	19,100	
						19910404～ 19920330	14,308	
						19940201～ 19940324	5,060	
						19950301～ 19950324	6,600	
						19950405～ 19951226	26,987	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
角田台遺跡	集落跡 包蔵地	旧石器時代	石器集中地点・ 礫群	磨製石斧・打製石斧・有樋尖頭器・尖頭器・彫器・掻器・削器	23地点で石器群が検出され、そのうち第Ⅶ～Ⅸ層で検出された２地点では環状石器群を構成していた。また第Ⅲ層出土の石器群では有樋尖頭器の他に特異な彫器が出土している。
	集落跡 包蔵地	縄文時代	住居跡・炉穴・ 陥穴・土坑・ ピット群	土器群（早期～後期） 石器群（磨製石斧・打製・石斧･石鏃･スクレイパー･磨石・敲石） 土製品（玦状耳飾・土錘）	住居跡は４軒（早期２･前期１・中期１）と少ないが、早期と前期では炉跡が設置されていない。

要約	大規模区画整理事業に伴う調査で台地全体の調査が実施された遺跡である。調査の結果、旧石器時代では環状石器群（第11地点）と約500m離れた石器群（第１－11・12・14地点）との接合関係が確認された。また第Ⅲ層出土の石器群は、富里市東内野遺跡と近い時期に営まれたもので各種の石器が出土している。特に有樋尖頭器は、その製作過程の一端を知ることができた。さらに被熱した礫が多量に出土していたため一定期間ではあるが、この地で集落が営まれていたようである。縄文時代は、検出された住居跡が４軒と少なかった。だがこの時期の土器は早期から後期に至るまでその痕跡が確認できた。このことは断続的とはいえ、各時期にわたって本遺跡を狩猟・採集の地として当時の人びとが利用してきたものと考えられる。

千葉県教育振興財団調査報告第685集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXVI

－印西市角田台遺跡（旧石器・縄文時代編）－

平成24年12月28日発行

編　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　独立行政法人　都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿６－５－１

公益財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の２

印　刷　株式会社　弘文社
千葉県市川市市川南２丁目７番２号